

西原大塚遺跡 I

西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合

埼玉県志木市遺跡調査会

西原大塚遺跡Ⅰ

西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合

埼玉県志木市遺跡調査会



19号住居跡出土遺物



50号住居跡出土遺物



19号住居跡出土遺物



51号住居跡出土遺物



67号住居跡出土遺物



10号方形周溝墓出土遺物



363号住居跡出土遺物



122号住居跡出土遺物



はじめに

志木市遺跡調査会
会長 白砂 正明

志木市は埼玉県の南東部に位置し、都心まで25kmという地理的条件もあり、住宅建設などの開発行為が非常に多い地になっています。

東武東上線志木駅まで1km以内という距離にある幸町地区にもこの波が押し寄せ、畑地が多い田園地帯が徐々に宅地化されていく傾向が窺えるようになってきました。

このような状況を踏まえて、この地区の土地利用の効率化を計るため、都市整備の方法として土地区画整理事業が選択され、昭和59年3月、西原特定土地区画整理組合が設立されました。

ところで、本地区には市域最大規模の西原大塚遺跡が存在していて、これまでの発掘調査により、縄文時代中期及び弥生時代後期・古墳時代前期の大集落であることが判明しています。

区画整理事業の実施は遺跡の破壊につながるため、その保存方法について教育委員会では区画整理組合と協議を重ねましたが、記録保存のための発掘調査を行うことで対処することにしました。

発掘調査は志木市遺跡調査会が主体として、平成元年度に最初の本調査を行い、その後、平成5年度から平成16年度、平成18年度に実施し、多大な成果を上げました。

本書は、14年間に及ぶ発掘調査の記録を掲載したもので、学術的にも、文化財保護思想の普及と郷土の歴史を学ぶ上でも貴重な資料になるものと思われ、少しでも活用されることを願っています。

最後になりますが、発掘調査から報告書刊行までの長期間、志木市教育委員会、西原特定土地区画整理組合理事長大野伊平次氏をはじめとした理事ならびに組合員の皆様、市関係各課、調査関係者の多くの方からご指導やご協力をいただきましたことに対しまして、誌上をもって厚くお礼と感謝を申し上げます。

発刊によせて

志木市西原特定土地区画整理組合
理事長 大野 伊平次

志木市西原特定土地区画整理は、都市計画事業として施行するため、昭和44年4月30日に都市計画決定をし、事業を具体化するための事業計画（組合成立）を昭和59年3月6日に決定して、現在平成22年3月の事業完成に向けて事業進捗を図っております。

志木市の南西部に位置し、東武東上線志木駅、柳瀬川駅より約800mの至近距離にありながら都市基盤整備が遅れていて、このまま放置するとスプロール化は避けられない地域であり、都市の発展及び土地利用の健全化を図るために市街地整備手法の一つである土地区画整理事業を選択しております。

特に当地区37.9haの大半が市域最大規模の遺跡であり、この遺跡は縄文、弥生末葉、古墳時代が中心で、奈良、平安時代も含めた複合遺跡となっております。

この西原大塚遺跡の発掘調査は平成元年度から順次行い、主要な遺構は住居跡、土坑であり、集落が形成されていることが判明され、発掘調査の成果が表れております。

この貴重な資料や出土品及びこの調査報告書が後世に活用され、今後の志木市の歴史をひもとき、文化財行政の一助となれば幸甚であります。

結びに遺跡発掘調査関係各位に対し、衷心より感謝申し上げまして発刊に寄せての言葉とさせていただきます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市幸町2・3・4丁目に所在する西原大塚遺跡（県No.09—007）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、志木市教育委員会の幹旋により、志木市西原特定土地地区画整理組合から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。
3. 発掘作業は、平成元年度に第1次調査を行い、その後、平成5年度から平成16年度及び平成18年度に継続して行った。
4. 遺物及び図面等の基礎的整理作業は年度毎に行った。また、発掘調査報告書作成は、平成16年度から平成20年度に実施した。
5. 本書の作成は志木市遺跡調査会が行い、編集は佐々木保俊が当たった。執筆は下記のとおりである。
第1・2章 佐々木保俊
第3章 遺構 内野美津江 遺物 佐々木
第4章 遺構 内野 遺物 宮川幸佳
第5章 遺構 内野 遺物 宮川
第6章 遺構 内野 遺物 宮川
第7章 佐々木
6. 本書の挿図版の作成は、執筆者の他に岸田純一・近春奈・高杉朝子・土屋富子・永井真理・成田しのぶ・二階堂美知子・矢野恵子が加わった。
7. 旧石器時代石器、縄文時代土器・石器、弥生時代土器の実測・トレースの一部は有限会社吾妻考古学研究所に委託した。また、427号土坑出土土器の実測・トレースは金子直行氏の手を煩わせた。
8. 出土石器の石材同定の一部については、大滝孝久氏にご教示を得た。
9. 中近世の遺物については、野沢均氏からご教示を賜った。
10. 遺構出土の樹種同定、出土土器の胎土分析等の理化学的分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
11. 出土した遺物および記録類は、志木市教育委員会で保管している。
12. 掘調査および出土品整理作業・発掘調査報告書作成にあたっては、以下の諸機関・諸氏にご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・埼玉県立歴史と民俗の博物館・埼玉県立さきたま史跡の博物館・埼玉県立嵐山史跡の博物館・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団・

志木市教育委員会・志木市文化財保護審議会・志木市立郷土資料館・志木市志木第四小学校

会田 明・浅野 信英・浅野 春樹・故 麻生 優・荒井 幹夫・飯田 充晴・市毛 勲・稲村 繁
井上 尚明・井上 肇・今井 堯・上村 安生・碓井 三子・梅沢太久夫・江原 順・大滝 孝久
岡本 東三・大谷 徹・大坪 宣雄・織笠 明子・故 織笠 昭・書上 元博・柿沼 幹夫・片平 雅俊
加藤 秀之・加藤 緑・金子 直行・川崎 志乃・隈本 健介・栗島 義明・栗原 和彦・栗原 文蔵
黒須 和彦・小出 輝雄・肥沼 正和・小久保 徹・小宮 恒雄・齋藤 欣延・笹森 健一・佐藤 康二
塩野 博・斯波 治・白石 浩之・新名 強・實川 順一・杉本 靖子・鈴木 一郎・鈴木加津子
鈴木 敏弘・鈴木 正博・田代 隆・田中 英司・谷井 彪・坪田 幹男・照林 敏郎・中島岐視生
中島 宏・長縄 賢・中村 倉司・中山 清隆・並木 隆・根本 靖・野沢 均・早川 泉
早坂 廣人・原 雅信・福田 聖・堀 善之・松本 富雄・松本 完・三田 光明・矢口 孝悦
柳井 彰宏・柳田 敏司・山村 貴輝・領塚 正浩・吉本 洋子・若井千佳子・和田 晋治・渡辺 誠

凡 例

1. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

J = 縄文時代の住居跡 Y = 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 H = 古墳時代後期～平安時代の住居跡

D = 土坑 F P = 炉穴 S = 集石 M = 溝跡 方 = 方形周溝墓 W = 井戸跡 T = 掘立柱建築遺構


○遺構・遺物の挿図版の縮尺は、それぞれに記した。

○遺物写真図版の縮尺は任意とした。

○遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。また、ピット・掘り込み内の数値は床面もしくは確認面からの深さを、凸堤上の数値は床面からの高さを示し、単位はcmである。


○遺構挿図版中の出土遺物番号は、遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○挿図版中のスクリーントーンの指示は、以下のとおりである。

 住居跡内暗赤褐色土堆積位置

 粘土火皿及び粘土堆積位置

 カマド

 土器赤彩範囲

2. 本書の住居跡の説明文中に使用した主軸とは、縄文時代及び弥生時代後期～古墳時代前期においては炉跡と入口（推定）を結んだ線、古墳時代後期～平安時代においてはカマドが設置された壁と直交する線とした。

3. 遺構の土層説明や土器の記述の中で用いた色の表示方法は、『新版 標準土色帖 1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修によった。

志木市遺跡調査会調査組織

〈役員〉

会	長	秋山 太藏 (志木市教育委員会教育長) (～平成12年 6 月)
		細田 信良 (“) (平成12年 7 月～平成17年 6 月)
		柚木 博 (“) (平成17年10月～平成20年 3 月)
		白砂 正明 (“) (平成20年 4 月～)
会長職務代理者	新井 茂 (志木市教育委員会教育政策部長) (平成17年 7 月～ 9 月)	
副 会 長	大西 弘 (志木市教育委員会事務局次長) (～平成 2 年 3 月)	
	星野昭次郎 (志木市教育委員会教育総務部長) (平成 2 年 4 月～平成 7 年 3 月)	
	川目 憲夫 (“) (平成 7 年 4 月～平成12年 3 月)	
	谷合 弘行 (志木市教育委員会教育政策部長) (平成12年 4 月～平成15年 3 月)	
	白砂 正明 (“) (平成15年 4 月～平成16年 3 月)	
	杉山 勇 (“) (平成16年4月～平成17年 3 月)	
	新井 茂 (“) (平成17年10月～)	
理 事	神山 健吉 (志木市文化財保護審議会会長)	
	井上 國夫 (志木市文化財保護審議会委員)	
	宮野 和明 (志木市文化財保護委員)	
	尾崎 征男 (“)	
	高橋 長次 (志木市文化財保護審議会委員)	
	高橋 正 (“)	
	高橋 豊 (“)	
	内田 正子 (“)	
理事兼事務局長	白砂 正明 (社会教育課長) (～平成 3 年 3 月)	
	並木 勝司 (参事兼生涯学習課長) (平成 3 年 4 月～平成 8 年 3 月)	
	鈴木 重光 (生涯学習課長) (平成 8 年 4 月～平成12年 3 月)	
	土橋 春樹 (参事兼生涯学習課長) (平成12年 4 月～平成16年 3 月)	
	大熊 章只 (生涯学習課長) (平成16年 4 月～平成18年 3 月)	
	宮川 英夫 (参事兼生涯学習課長) (平成18年 4 月～平成19年 3 月)	
	吉田 洋 (生涯学習課長) (平成19年 4 月～)	

〈監 査〉

監 事	根岸 正文 (志木市立郷土資料館長) (～平成 5 年 3 月)
	武川 洋子 (“) (平成 5 年 4 月～平成 8 年 3 月)
	萩原 洋子 (志木市郷土資料館館長) (平成 8 年 4 月～平成14年 3 月)
	根岸 清躬 (社会教育指導員) (～平成 5 年 3 月)
	野口 泰 (“) (平成 5 年 4 月～平成 6 年 3 月)
	鈴木 憲三 (“) (平成 5 年 4 月～平成 9 年 3 月)
	佐藤 茂 (“) (平成 6 年 4 月～平成10年 3 月)

永田 伸夫（ ” ）（平成10年4月～平成14年3月）
三ツ矢美代子（ ” ）（平成13年4月～平成14年3月）
福田 鮎子（ ” ）（平成14年4月～平成16年3月）
金子 雅佳（生涯学習課主幹）（平成14年4～8月、平成15年8月～平成16年3月）
荒井 正夫（生涯学習課主査）（平成14年8月～平成15年7月）
樺嶋 秀俊（生涯学習課主任）（平成16年4月～平成18年3月）
並木 貴子（ ” ）（平成16年4月～平成17年3月）
古屋 大輔（ ” ）（平成17年4月～平成18年3月）
原田 隆一（教育総務課長）（平成18年4月～平成20年3月）
菊原 龍治（ ” ）（平成20年4月～）
鈴木幸治郎（出納室長）（平成18年4月～）

〈事務局〉

山中 満（生涯学習課課長補佐）（平成6年4月～平成7年3月）
尾崎 健一（ ” ）（平成7年4月～平成10年3月）
金子 雅佳（生涯学習課主幹）（平成12年4月～平成16年3月）
下河辺信行（ ” ）（平成16年4月～8月）
内田 誠（ ” ）（平成18年4月～8月）
今野 美香（ ” ）（平成15年8月～平成19年11月）
大熊 克之（ ” ）（平成19年12月～）
山中 政市（社会教育係長）（～平成3年3月）
岡本 孝（文化財保護係長）（平成3年4月～平成9年3月）
下河辺信行（社会教育主査）（～平成3年3月）
関根 正明（生涯学習課主査）（平成9年4月～平成15年7月）
佐々木保俊（ ” ）（平成1年4月～）
清水 隆（ ” ）（平成19年5月～7月）
佐藤 浩之（社会教育課主任）（～平成3年3月）
尾形 則敏（文化財保護担当主任）（平成1年4月～）
清水あや子（ ” ）（平成8年4月～平成12年3月）
新井由紀子（ ” ）（平成12年4月～平成15年3月）
倉部 恵子（ ” ）（平成15年4月～平成18年3月）
高野 雅也（ ” ）（平成17年4月～平成18年3月、平成20年4月～）
松永真知子（ ” ）（平成18年4月～）
今野 美香（社会教育課主事）（～平成8年3月）
藤澤 晶子（文化財保護係主事補）（平成7年4月～平成8年3月）

〈発掘調査〉

調査担当者

佐々木保俊

調 査 員

内野美津江・深井 恵子

調査補助員

東浦久美子・吉谷 顕子

調査協力員

足立 裕子・阿部 公子・阿部 ふみ子・朝香 輝朗・飯田 久子・石田 ヤス子・出雲 佐智子・
市来 昌枝・井上 麻美子・伊野部三千子・岩森 都・上田 寛・海野 ひとみ・遠藤 美智子・
大井 文・太田 敦子・大野 涼子・大平 祐子・神山 久子・神山 博・岸田 純一・
故 木村千枝子・木村 千恵子・熊谷 春希・熊谷 秀子・栗原 裕子・黒田 千恵子・桑原 美保子・
高麗 篤子・近 春奈・金野 照子・佐々木 志野・佐藤 小夜子・故 清水 七枝・白砂 正・
白石 真里子・鈴木 美佐江・鈴木 百合香・須藤 京子・砂川 春子・曾我 香澄・高杉 朝子・
高田 みち子・高橋 恭子・高倉 光代・竹内 美代子・田代 雄介・塚田 和枝・土屋 富子・
渡嘉敷千代子・富田 静江・永井 真理・中田 優子・中村 マキ子・名久井よし江・成田 しのぶ・
二階堂美知子・野村 貴子・萩尾 みどり・長谷川 公子・服部 達之助・原島 千香子・久留 浪子・
広沢 奈津子・弘中 謡枝・藤森 栄・二川 智子・古市 美貴子・古田 トシ子・松浦 佐代子・
松川 光一・松崎 陽子・水野 良美・宮川 幸佳・森 文子・八代 恵子・柳沢 美子・
矢野 恵子・山科 美智・油橋 由美・吉川 泰央・吉田 信江・渡辺 日出男

整理協力員

朝香 輝朗・足立 裕子・阿部 公子・阿部 ふみ子・伊野部三千子・岩森 都・海野 ひとみ・
大井 文・大野 涼子・大平 祐子・岸田 純一・故 木村千枝子・熊谷 秀子・栗原 裕子・
桑原 美保子・高麗 篤子・近 春奈・佐々木 志野・白砂 正・鈴木 美佐江・須藤 京子・
砂川 春子・高倉 光代・高杉 朝子・高橋 恭子・竹内 美代子・田代 雄介・塚田 和枝・
土屋 富子・渡嘉敷千代子・富田 静江・永井 真理・中村 マキ子・成田 しのぶ・二階堂美知子・
野村 貴子・萩尾 みどり・長谷川 公子・原島 千香子・久留 浪子・広沢 奈津子・弘中 謡枝・
久留 浪子・藤森 栄・古田 トシ子・斑目 ちひろ・松浦 佐代子・松川 光一・松崎 陽子・
水野 良美・宮川 幸佳・森 文子・柳沢 美子・矢野 恵子・油橋 由美・渡辺 ゆかり

目 次 (1)

巻頭図版

はじめに

発刊によせて

例 言	i
凡 例	ii
調査組織	iii
目 次	vi
挿図目次	viii
表 目 次	xix
第 1 章 発掘調査の概要	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 遺跡の位置と環境	1
第 3 節 発掘調査の経過	5
第 2 章 旧石器時代の遺構と遺物	48
第 1 節 石器集中地点	48
第 3 章 縄文時代の遺構と遺物	102
第 1 節 住居跡	102
第 2 節 土坑	435
第 3 節 埋甕	601
第 4 節 集石	601
第 5 節 炉穴	612
第 6 節 遺構外出土の遺物	622

(第2分冊)

第4章 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

- 第1節 住居跡
- 第2節 掘立柱建築遺構
- 第3節 方形周溝墓
- 第4節 溝跡

(第3分冊)

第5章 古墳時代後期、奈良・平安時代の遺構と遺物

- 第1節 住居跡

第6章 中世以降の遺構と遺物

- 第1節 土坑
- 第2節 溝跡
- 第3節 井戸跡
- 第4節 配石遺構

第7章 発掘調査をおえて

附編 自然科学分析

- I 胎土分析
- II 土壌分析
- III 樹種分析
- IV 顔料分析

参考文献

報告書抄録

図版

挿図目次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20000)	xx
第2図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	2
第3図	年度別発掘調査地点	6
第4図	調査地点名称図	7
第5図	遺構分布図1 (1/300)	9
第6図	遺構分布図2 (1/300)	10
第7図	遺構分布図3 (1/300)	13
第8図	遺構分布図4 (1/300)	15
第9図	遺構分布図5 (1/300)	17
第10図	遺構分布図6 (1/300)	18
第11図	遺構分布図7 (1/300)	20
第12図	遺構分布図8 (1/300)	21
第13図	遺構分布図9 (1/300)	23
第14図	遺構分布図10 (1/300)	24
第15図	遺構分布図11 (1/300)	26
第16図	遺構分布図12 (1/300)	27
第17図	遺構分布図13 (1/300)	29
第18図	遺構分布図14 (1/300)	30
第19図	遺構分布図15 (1/300)	32
第20図	遺構分布図16 (1/300)	33
第21図	遺構分布図17 (1/300)	36
第22図	遺構分布図18 (1/300)	37
第23図	遺構分布図19 (1/300)	39
第24図	遺構分布図20 (1/300)	41
第25図	遺構分布図21 (1/300)	43
第26図	遺構分布図22 (1/300)	45
第27図	3号石器集中地点 (1/60)	49
第28図	3号石器集中地点炭化物分布 (1/60)	50
第29図	3号石器集中地点出土遺物1 (1/1)	51
第30図	3号石器集中地点出土遺物2 (1/1)	53
第31図	4号石器集中地点 (1/60)	56
第32図	4号石器集中地点出土遺物 (1/1)	57
第33図	5号石器集中地点 (1/60)	60
第34図	5号石器集中地点出土遺物 (1/1)	60
第35図	6号石器集中地点 (1/60)	61
第36図	6号石器集中地点出土遺物1 (1/1)	62
第37図	6号石器集中地点出土遺物2 (1/1)	63
第38図	7号石器集中地点 (1/60)	66

第39图	7号石器集中地点出土遗物(1/1)	66
第40图	8号石器集中地点(1/60)	67
第41图	8号石器集中地点出土遗物1(1/1)	68
第42图	8号石器集中地点出土遗物2(1/1)	69
第43图	9号石器集中地点(1/60)	74
第44图	9号石器集中地点出土遗物1(1/1)	75
第45图	9号石器集中地点出土遗物2(1/1)	76
第46图	10号石器集中地点(1/60)	80
第47图	10号石器集中地点出土遗物1(1/1)	81
第48图	10号石器集中地点出土遗物2(1/1)	83
第49图	10号石器集中地点出土遗物3(1/1)	85
第50图	11号石器集中地点(1/60)	89
第51图	11A号石器集中地点出土遗物1(1/1)	90
第52图	11A号石器集中地点出土遗物2(1/1)	91
第53图	11A号石器集中地点出土遗物3(1/1)	92
第54图	11B号石器集中地点出土遗物(1/1)	96
第55图	11C号石器集中地点出土遗物(1/1)	97
第56图	12号石器集中地点(1/60)	99
第57图	12号石器集中地点出土遗物(1/1)	100
第58图	12号住居迹(1/60)、炉迹(1/30)	103
第59图	12号住居迹出土遗物1(1/4)	104
第60图	12号住居迹出土遗物2(1/3)	104
第61图	13号住居迹(1/60)、炉迹(1/30)	105
第62图	13号住居迹出土遗物1(1/4)	105
第63图	13号住居迹出土遗物2(1/3)	106
第64图	14号住居迹(1/60)	107
第65图	14号住居迹出土遗物(1/3)	107
第66图	15号住居迹(1/60)	109
第67图	15号住居迹出土遗物状态(1/60)	110
第68图	15号住居迹炉迹、集石(1/3)	110
第69图	15号住居迹出土遗物1(1/4)	111
第70图	15号住居迹出土遗物2(1/3)	112
第71图	15号住居迹出土遗物3(1/3)	113
第72图	18·78号住居迹(1/60)、18号住居迹炉迹(1/30)	117
第73图	18号住居迹出土遗物(1/3)	119
第74图	19号住居迹(1/60)、炉迹(1/30)	121
第75图	19号住居迹出土遗物1(1/4)	123
第76图	19号住居迹出土遗物2(1/4)	125
第77图	19号住居迹出土遗物3(1/4)	127
第78图	19号住居迹出土遗物4(1/4)	129

第79图	19号住居跡出土遺物 5 (1/3)	130
第80图	20号住居跡 (1/60)	132
第81图	21号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	133
第82图	21号住居跡出土遺物 1 (1/4)	134
第83图	21号住居跡出土遺物 2 (1/3)	136
第84图	22号住居跡 (1/60)、埋甕 (1/30)	137
第85图	22号住居跡出土遺物 1 (1/4)	138
第86图	22号住居跡出土遺物 2 (1/3)	139
第87图	23・25号住居跡 (1/60)、23号住居跡炉跡 (1/30)、146号土坑 (1/60)	143
第88图	23号住居跡出土遺物 1 (1/4)	145
第89图	23号住居跡出土遺物 2 (1/3)	146
第90图	24号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	147
第91图	24号住居跡出土遺物 1 (1/4)	148
第92图	24号住居跡出土遺物 2 (1/3)	149
第93图	25号住居跡出土遺物 1 (1/4)	150
第94图	25号住居跡出土遺物 2 (1/3)	150
第95图	26号住居跡 (1/60)	151
第96图	26号住居跡出土遺物 (1/3)	152
第97图	27号住居跡 (1/60)	153
第98图	27号住居跡出土遺物 1 (1/4)	154
第99图	27号住居跡出土遺物 2 (1/3)	155
第100图	30号住居跡 (1/60)	157
第101图	30号住居跡出土遺物 1 (1/4)	158
第102图	30号住居跡出土遺物 2 (1/3)	159
第103图	31号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	161
第104图	31号住居跡出土遺物 1 (1/4)	163
第105图	31号住居跡出土遺物 2 (1/4)	165
第106图	31号住居跡出土遺物 3 (1/3)	166
第107图	32号住居跡、173・177・178号土坑 (1/60)	168
第108图	34号住居跡 (1/60)、炉跡、埋甕 (1/30)	169
第109图	34号住居跡出土遺物 1 (1/4)	170
第110图	34号住居跡出土遺物 2 (1/3)	170
第111图	35号住居跡 (1/60)	173
第112图	35号住居跡出土遺物 (1/3)	173
第113图	36号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	175
第114图	36号住居跡出土遺物 1 (1/4)	176
第115图	36号住居跡出土遺物 2 (1/4)	177
第116图	36号住居跡出土遺物 3 (1/4)	179
第117图	36号住居跡出土遺物 4 (1/3)	180
第118图	37号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	182

第119图	37号住居跡出土遺物 1 (1/4)	183
第120图	37号住居跡出土遺物 2 (1/3)	184
第121图	38・40号住居跡 (1/60)	185
第122图	38号住居跡出土遺物 (1/3)	186
第123图	39号住居跡 (1/60)	187
第124图	39号住居跡出土遺物 1 (1/4)	188
第125图	39号住居跡出土遺物 2 (1/3)	189
第126图	40号住居跡出土遺物 (1/3)	190
第127图	41・42号住居跡 (1/60)	191
第128图	42号住居跡出土遺物 (1/3)	192
第129图	43号住居跡 (1/60)	193
第130图	43号住居跡出土遺物 (1/3)	194
第131图	44号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	195
第132图	44号住居跡出土遺物 1 (1/4)	195
第133图	44号住居跡出土遺物 2 (1/3)	196
第134图	46号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	197
第135图	46号住居跡出土遺物 (1/3)	197
第136图	48・49号住居跡、276・277号土坑 (1/60)	198
第137图	48号住居跡出土遺物 1 (1/4)	198
第138图	48号住居跡出土遺物 2 (1/3)	198
第139图	49号住居跡出土遺物 1 (1/4)	200
第140图	49号住居跡出土遺物 2 (1/3)	200
第141图	50号住居跡 (1/60)	202
第142图	50号住居跡出土遺物 1 (1/4)	203
第143图	50号住居跡出土遺物 2 (1/4)	204
第144图	50号住居跡出土遺物 3 (1/4)	206
第145图	50号住居跡出土遺物 4 (1/3)	208
第146图	51号住居跡 (1/60)	209
第147图	51号住居跡出土遺物 (1/3)	209
第148图	52号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)、311号土坑 (1/60)	210
第149图	52号住居跡出土遺物 1 (1/4)	211
第150图	52号住居跡出土遺物 2 (1/3)	211
第151图	53号住居跡 (1/60)、埋甕 (1/30)	213
第152图	53号住居跡出土遺物 1 (1/4)	214
第153图	53号住居跡出土遺物 2 (1/3)	214
第154图	54・55号住居跡 (1/60)、55号住居跡炉跡、埋甕 (1/30)	215
第155图	54号住居跡埋甕 (1/30)	216
第156图	54号住居跡出土遺物 1 (1/4)	217
第157图	54号住居跡出土遺物 2 (1/3)	218
第158图	55号住居跡出土遺物 1 (1/4)	219

第159図	55号住居跡出土遺物 (1/3)	220
第160図	56号住居跡 (1/60)、埋甕 (1/30)	222
第161図	56号住居跡出土遺物 (1/4)	223
第162図	57号住居跡 (1/60)	224
第163図	57号住居跡出土遺物 1 (1/4)	224
第164図	57号住居跡出土遺物 2 (1/3)	224
第165図	58号住居跡 (1/60)	225
第166図	58号住居跡出土遺物 (1/3)	225
第167図	59・64号住居跡、342号土坑 (1/60)	226
第168図	59号住居跡出土遺物 1 (1/4)	227
第169図	59号住居跡出土遺物 2 (1/3)	228
第170図	60号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	229
第171図	60号住居跡出土遺物 1 (1/4)	230
第172図	60号住居跡出土遺物 2 (1/3)	231
第173図	66号住居跡 (1/60)	232
第174図	67号住居跡 (1/60)	234
第175図	67号住居跡出土遺物 1 (1/4)	235
第176図	67号住居跡出土遺物 2 (1/3)	236
第177図	67号住居跡出土遺物 3 (1/3)	237
第178図	75号住居跡 (1/60)	239
第179図	76号住居跡出土遺物 (1/3)	239
第180図	76号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	241
第181図	76号住居跡出土遺物 1 (1/4)	241
第182図	76号住居跡出土遺物 2 (1/3)	243
第183図	77号住居跡 (1/60)	244
第184図	77号住居跡出土遺物 (1/3)	244
第185図	79号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	245
第186図	79号住居跡出土遺物 1 (1/4)	246
第187図	79号住居跡出土遺物 2 (1/3)	246
第188図	80号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	247
第189図	80号住居跡出土遺物 1 (1/4)	248
第190図	80号住居跡出土遺物 2 (1/3)	248
第191図	縄文時代81号・弥生時代284号住居跡 (1/60)	251
第192図	81号住居跡出土遺物 1 (1/4)	252
第193図	81号住居跡出土遺物 2 (1/3)	253
第194図	82号住居跡 (1/60)	254
第195図	82号住居跡出土遺物 1 (1/4)	254
第196図	82号住居跡出土遺物 2 (1/3)	255
第197図	83号住居跡 (1/60)	257
第198図	83号住居跡出土遺物 (1/3)	257

第199图	84号住居跡 (1/60)	258
第200图	84号住居跡出土遺物 (1/3)	258
第201图	85号住居跡 (1/60)、炉跡、埋甕 (1/30)	260
第202图	85号住居跡出土遺物 1 (1/4)	261
第203图	85号住居跡出土遺物 2 (1/3)	261
第204图	86号住居跡 (1/60)	263
第205图	86号住居跡出土遺物 1 (1/4)	264
第206图	86号住居跡出土遺物 2 (1/3)	266
第207图	87号住居跡 (1/60)	268
第208图	87号住居跡出土遺物 (1/3)	268
第209图	88号住居跡、404号土坑 (1/60)	269
第210图	89号住居跡 (1/60)	270
第211图	89号住居跡出土遺物 1 (1/4)	270
第212图	89号住居跡出土遺物 2 (1/3)	270
第213图	90号住居跡 (1/60)	272
第214图	90号住居跡出土遺物 (1/3)	273
第215图	91号住居跡 (1/60)	274
第216图	91号住居跡出土遺物 (1/3)	274
第217图	92号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	276
第218图	92号住居跡出土遺物 1 (1/4)	277
第219图	92号住居跡出土遺物 2 (1/3)	277
第220图	93・94号住居跡 (1/60)、93号住居跡炉跡 (1/30)	279
第221图	93号住居跡出土遺物 1 (1/4)	280
第222图	93号住居跡出土遺物 2 (1/3)	281
第223图	95号住居跡 (1/60)	282
第224图	95号住居跡出土遺物 (1/3)	283
第225图	96号住居跡 (1/60)	284
第226图	96号住居跡出土遺物 (1/3)	284
第227图	97号住居跡 (1/60)	285
第228图	97号住居跡出土遺物 (1/3)	286
第229图	98号住居跡 (1/60)	287
第230图	98号住居跡出土遺物 (1/3)	287
第231图	99号住居跡 (1/60)	288
第232图	99号住居跡遺物出土状態 (1/60)	289
第233图	99号住居跡出土遺物 1 (1/4)	293
第234图	99号住居跡出土遺物 2 (1/4)	294
第235图	99号住居跡出土遺物 3 (1/4)	295
第236图	99号住居跡出土遺物 4 (1/3)	296
第237图	99号住居跡出土遺物 5 (1/3)	297
第238图	99号住居跡出土遺物 (1/3)	298

第239图	122号住居跡 (1/60)	299
第240图	122号住居跡出土遺物 1 (1/4)	299
第241图	122号住居跡出土遺物 2 (1/3)	302
第242图	123号住居跡 (1/60)	303
第243图	123号住居跡出土遺物 (1/3)	303
第244图	124・126号住居跡、467号土坑 (1/60)	305
第245图	124号住居跡出土遺物 (1/3)	307
第246图	125号住居跡 (1/60)	308
第247图	125号住居跡出土遺物 1 (1/4)	309
第248图	125号住居跡出土遺物 2 (1/3)	310
第249图	126号住居跡出土遺物 1 (1/4)	310
第250图	126号住居跡出土遺物 2 (1/3)	310
第251图	127号住居跡 (1/60)	312
第252图	127号住居跡出土遺物 (1/3)	312
第253图	128号住居跡 (1/60)	313
第254图	128号住居跡出土遺物 (1/3)	313
第255图	129号住居跡 (1/60)	314
第256图	129号住居跡出土遺物 1 (1/4)	315
第257图	129号住居跡出土遺物 2 (1/3)	315
第258图	130号住居跡 (1/60)	317
第259图	130号住居跡出土遺物 (1/3)	317
第260图	137号住居跡 (1/60)	318
第261图	137号住居跡出土遺物 1 (1/4)	319
第262图	137号住居跡出土遺物 2 (1/3)	320
第263图	138号住居跡 (1/60)	321
第264图	138号住居跡出土遺物 1 (1/4)	322
第265图	138号住居跡出土遺物 2 (1/3)	323
第266图	139号住居跡 (1/60)	324
第267图	139号住居跡出土遺物 (1/3)	324
第268图	141号住居跡 (1/60)	325
第269图	141号住居跡出土遺物 1 (1/4)	326
第270图	141号住居跡出土遺物 2 (1/3)	327
第271图	142・146号住居跡 (1/60)	328
第272图	142号住居跡出土遺物 1 (1/4)	329
第273图	142号住居跡出土遺物 2 (1/3)	330
第274图	143号住居跡 (1/60)	331
第275图	143号住居跡出土遺物 (1/3)	332
第276图	144・145号住居跡 (1/60)、144号住居跡埋甕 (1/30)	333
第277图	144号住居跡出土遺物 1 (1/4)	334
第278图	144号住居跡出土遺物 2 (1/3)	334

第279图	145号住居跡出土遺物 (1/3)	335
第280图	146号住居跡出土遺物 (1/3)	335
第281图	147号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	337
第282图	147号住居跡出土遺物 1 (1/4)	339
第283图	147号住居跡出土遺物 2 (1/3)	341
第284图	148号住居跡 (1/60)	351
第285图	148号住居跡出土遺物 1 (1/4)	352
第286图	148号住居跡出土遺物 2 (1/3)	353
第287图	149号住居跡 (1/60)、炉跡、埋甕 (1/30)	357
第288图	149号住居跡出土遺物 1 (1/4)	359
第289图	149号住居跡出土遺物 2 (1/3)	362
第290图	150号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	364
第291图	150号住居跡出土遺物 1 (1/4)	365
第292图	150号住居跡出土遺物 2 (1/3)	366
第293图	151号住居跡 (1/60)、炉跡、埋甕 (1/30)	367
第294图	151号住居跡出土遺物 1 (1/4)	369
第295图	151号住居跡出土遺物 2 (1/4)	370
第296图	151号住居跡出土遺物 2 (1/3)	371
第297图	152号住居跡 (1/60)	372
第298图	152号住居跡出土遺物 1 (1/4)	372
第299图	152号住居跡出土遺物 2 (1/3)	373
第300图	153号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)	379
第301图	153号住居跡出土遺物 1 (1/4)	380
第302图	153号住居跡出土遺物 2 (1/3)	381
第303图	154号住居跡 (1/60)	383
第304图	154号住居跡出土遺物 1 (1/4)	384
第305图	154号住居跡出土遺物 2 (1/3)	385
第306图	155号住居跡 (1/60)	387
第307图	155号住居跡出土遺物 1 (1/4)	388
第308图	155号住居跡出土遺物 2 (1/3)	389
第309图	156号住居跡 (1/60)	390
第310图	156号住居跡出土遺物 1 (1/4)	391
第311图	156号住居跡出土遺物 2 (1/3)	392
第312图	住居跡出土石器 1 (1/3)	394
第313图	住居跡出土石器 2 (1/3)	395
第314图	住居跡出土石器 3 (1/3)	396
第315图	住居跡出土石器 4 (1/3)	397
第316图	住居跡出土石器 5 (1/3)	398
第317图	住居跡出土石器 6 (1/3)	399
第318图	住居跡出土石器 7 (1/3)	400

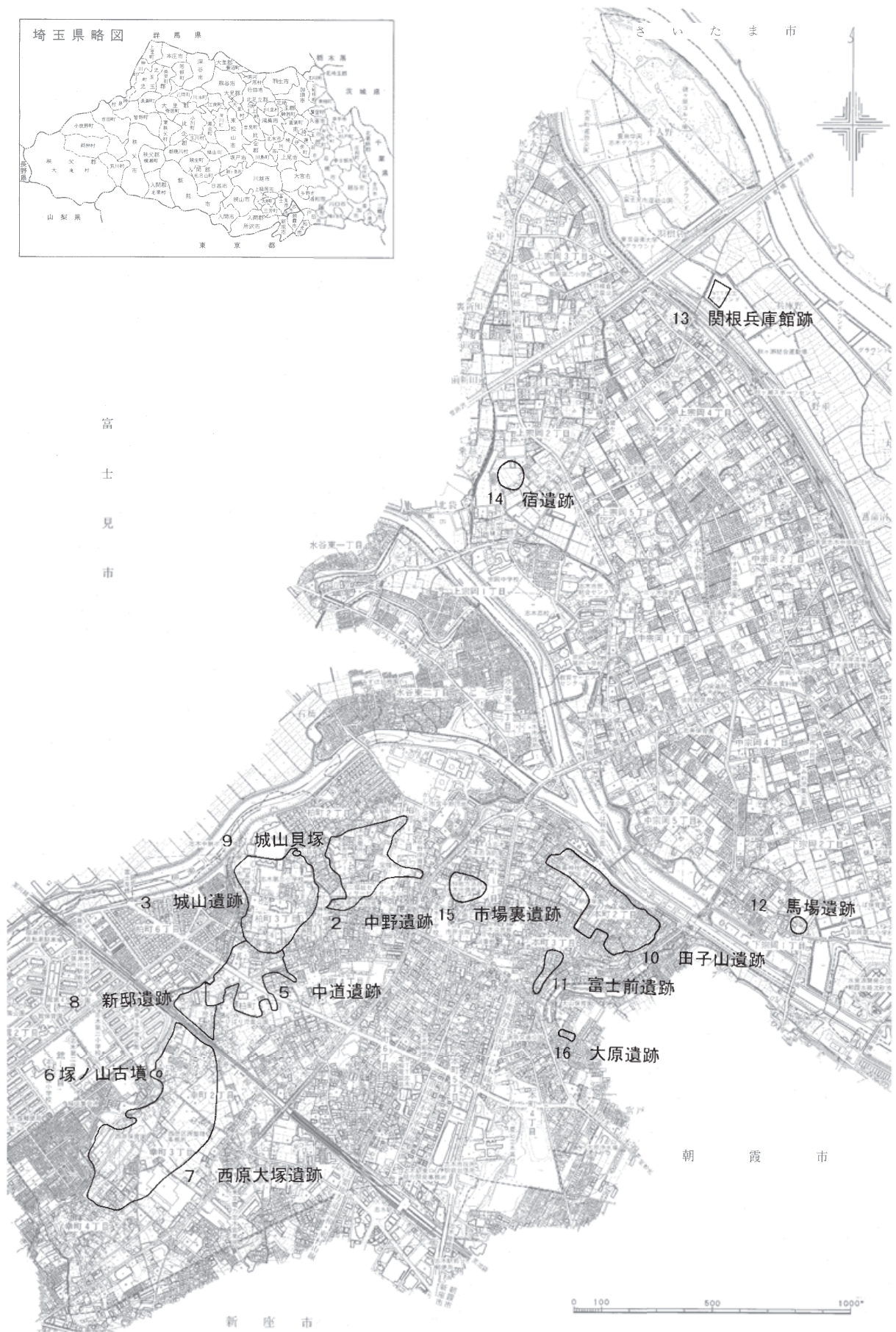
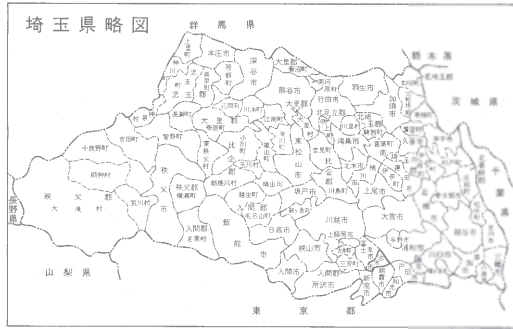
第319图	住居跡出土石器 8 (1/3)	401
第320图	住居跡出土石器 9 (1/3)	402
第321图	住居跡出土石器10 (1/3)	403
第322图	住居跡出土石器11 (1/3)	404
第323图	住居跡出土石器12 (1/3)	405
第324图	住居跡出土石器13 (1/3)	406
第325图	住居跡出土石器14 (1/3)	407
第326图	住居跡出土石器15 (1/3)	408
第327图	住居跡出土石器16 (1/3)	409
第328图	住居跡出土石器17 (1/3)	410
第329图	住居跡出土石器18 (1/3)	411
第330图	住居跡出土石器19 (1/3)	412
第331图	住居跡出土石器20 (1/3)	413
第332图	住居跡出土石器21 (1/3)	414
第333图	住居跡出土石器22 (1/3)	415
第334图	住居跡出土石器23 (1/3)	416
第335图	住居跡出土石器24 (1/3)	417
第336图	住居跡出土石器25 (1/6)	418
第337图	住居跡出土石器26 (1/6)	419
第338图	住居跡出土石器27 (2/3)	420
第339图	住居跡出土石器28 (2/3)	421
第340图	住居跡出土石器29 (2/3)	422
第341图	住居跡出土石器30 (2/3)	423
第342图	住居跡出土石器31 (2/3)	424
第343图	住居跡出土石器32 (2/3)	425
第344图	住居跡出土石器33 (2/3)	426
第345图	住居跡出土土製品 1 (12・13・15・18・19・21・23号住居跡) (1/3)	427
第346图	住居跡出土土製品 2 (24・25・27・30・31・34・36号住居跡) (1/3)	428
第347图	住居跡出土土製品 3 (36・37・39・42・46・49・50・51・54・59・60・66号住居跡) (1/3)	429
第348图	住居跡出土土製品 4 (76・79~82・85・86・89・92・93・98・122・129号住居跡) (1/3)	430
第349图	住居跡出土土製品 5 (141~144・146~155号住居跡) (1/3)	431
第350图	土・石製品 1 (1=75 J、2~4=99 J、5=142 J、6=147 J、 7=25-II 地点、8=149 J、9=156 J、10=232D) (2/3)	432
第351图	土・石製品 2 (1=19 J、2=67 J、3=51 J、4=24M) (2/3)	433
第352图	土・石製品 3 (1=33地点、2=67 J、3・4=24M) (2/3)	434
第353图	91・97・100・142~145・148~154号土坑 (1/60)	443
第354图	155・157・158・160・163~167号土坑 (1/60)	448
第355图	168~172・147・175・179・181号土坑 (1/60)	455
第356图	176・180・182・183~186・188~190号土坑 (1/60)	459
第357图	191~197・200・244・245・247~249号土坑 (1/60)	470

第358图	250~253·255~261·263·264号土坑 (1/60)	478
第359图	265~273·278·280号土坑 (1/60)	487
第360图	286·287·289~293·295~298·302号土坑 (1/60)	493
第361图	294·299~301·303~310·312号土坑 (1/60)	496
第362图	313·315·316·318·320·321·325·326·330·332~336号土坑 (1/60)	505
第363图	337·339~341·343·344·379·381·382·384~386·390·391号土坑 (1/60)	511
第364图	392~397·400~403·412~416号土坑 (1/60)	519
第365图	418·419·427·430~432·437~439号土坑 (1/60)	525
第366图	440·442·444~446·448~450·465号土坑 (1/60)	531
第367图	446·468·470·471·477~479·558·560·561号土坑 (1/60)	537
第368图	562~573号土坑 (1/60)	545
第369图	574~585号土坑 (1/60)	551
第370图	586~597号土坑 (1/60)	555
第371图	598~603号土坑 (1/60)	561
第372图	土坑出土遗物 1 (1 = 143·144D、2 = 154D、3 = 155D、 4·5 = 167D、6 = 168D、7 = 172D、8 = 178D) (1/4)	562
第373图	土坑出土遗物 2 (9 = 180D、10 = 182D、11 = 258D、 12 = 259D、13~15 = 265D、16·17 = 269D) (1/4)	563
第374图	土坑出土遗物 3 (18 = 278D、19 = 326D、20 = 334D) (1/4)	564
第375图	土坑出土遗物 4 (21 = 427D、22 = 560D、23 = 572D) (1/4)	565
第376图	土坑出土遗物 5 (24·25 = 578D、26 = 583D) (1/4)	566
第377图	土坑出土遗物 1 (1/3)	568
第378图	土坑出土遗物 2 (1/3)	569
第379图	土坑出土遗物 3 (1/3)	570
第380图	土坑出土遗物 4 (1/3)	571
第381图	土坑出土遗物 5 (1/3)	572
第382图	土坑出土遗物 6 (1/3)	573
第383图	土坑出土遗物 7 (1/3)	574
第384图	土坑出土遗物 8 (1/3)	575
第385图	土坑出土遗物 9 (1/3)	576
第386图	土坑出土遗物10 (1/3)	577
第387图	土坑出土遗物11 (1/3)	578
第388图	土坑出土遗物12 (1/3)	579
第389图	土坑出土遗物13 (1/3)	580
第390图	土坑出土遗物14 (1/3)	581
第391图	土坑出土遗物15 (1/3)	582
第392图	土坑出土遗物16 (1/3)	583
第393图	土坑出土遗物17 (1/3)	584
第394图	土坑出土遗物18 (1/3)	585
第395图	土坑出土遗物19 (1/3)	586

第396图	土坑出土遺物20 (1/3)	587
第397图	土坑出土遺物21 (1/3)	588
第398图	土坑出土遺物22 (1/3)	589
第399图	土坑出土遺物23 (1/3)	590
第400图	土坑出土遺物24 (1/3)	591
第401图	土坑出土遺物25 (1/3)	592
第402图	土坑出土遺物26 (1/3)	593
第403图	土坑出土石器 1 (1/3)	594
第404图	土坑出土石器 2 (1/3)	595
第405图	土坑出土石器 3 (1/3)	596
第406图	土坑出土石器 4 (1/3)	597
第407图	土製品 (97・142・168・269・270・286・307・ 320・322・339・344・400・570・573号土坑) (1/3)	598
第408图	1号埋甕 (1/30)	600
第409图	1号埋甕出土遺物 (1/4)	600
第410图	4・13~15・17・18号集石 (1/30)	603
第411图	19~21号集石 (1/30)	604
第412图	集石出土遺物 1 (1/3)	605
第413图	集石出土遺物 2 (1/3)	607
第414图	集石出土遺物 3 (1/3)	608
第415图	集石出土石器 1 (1/3)	609
第416图	集石出土石器 2 (2/3)	610
第417图	5~10号炉穴 (1/60)	613
第418图	11~14号炉穴 (1/60)	614
第419图	5~8・10・11号炉穴出土遺物 (1/3)	616
第420图	9号炉穴出土遺物 (1/3)	618
第421图	12・13号炉穴出土遺物 (1/3)	621
第422图	遺構外出土遺物 (1/3)	623

表 目 次

表 1	志木市の遺跡の概要（◎は主体となる時期）	3
表 2	3号石器集中地点石器計測表	55
表 3	3号石器集中地点礫計測表	55
表 4	4号石器集中地点石器・礫計測表	58
表 5	5号石器集中地点石器計測表	64
表 6	6号石器集中地点石器・礫計測表	64
表 7	7号石器集中地点石器・礫計測表	66
表 8	8号石器集中地点石器計測表	79
表 9	8号石器集中地点礫計測表	70
表10	9号石器集中地点石器計測表	87
表11	10号石器集中地点石器計測表	87
表12	10号石器集中地点礫計測表	88
表13	11A号石器集中地点石器計測表	93
表14	11A号石器集中地点礫計測表	94
表15	11B号石器集中地点石器・礫計測表	98
表16	11C号石器集中地点石器・礫計測H表	98
表17	12号石器集中地点石器計測表	101
表18	12号石器集中地点礫計測表	101
表19	縄文時代住居跡一覧表	625
表20	縄文時代土坑一覧表	627



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

西原大塚遺跡は市域最大規模の遺跡であり、これまでの発掘調査の結果から縄文時代中期および弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡であることが判明していた。

本遺跡を含む幸町地区では、かねてから土地区画整理事業が計画されていたが、昭和59年3月に志木市西原特定土地区画整理組合（以下、土地区画整理組合）として埼玉県知事の許可を得て発足したことにより、当該事業が本格的に動きだし、これに伴い埋蔵文化財の取り扱いに関して、土地区画整理組合から志木市教育委員会（以下、教育委員会）に照会があった。

教育委員会では、土地区画整理組合から提出された道路・公園用地等の計画図を検討した結果、当該事業が埋蔵文化財に影響を及ぼすため、何らかの保存措置が必要である旨の回答を行った。

教育委員会と土地区画整理組合は、埋蔵文化財の保存について協議を行ったが、現状で保存することが不可能なため、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。調査対象面積は約28,000㎡であった。

教育委員会では、調査にあたる組織として志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を幹旋し、遺跡調査会ではこれを受け、平成元年12月20日から第1年次の発掘調査を開始した。

なお、発掘調査実施中に土地区画整理事業の計画変更等があり、平成13年4月に基本協定書を土地区画整理組合と遺跡調査会との間で締結している。

第2節 遺跡の位置と環境

（1）市域の地形の概要

志木市は埼玉県の南西部に位置し、市の南西は朝霞市・新座市と接し、北東は荒川によりさいたま市と、北西は柳瀬川によって富士見市と画される。市の規模は東西4.73km・南北4.71km・面積9.06km²の小規模な市である。

市域の地形は市中央部を南東流する新河岸川によって大略二分され、南西部は武蔵野台地の野火止台にあたり、北東部は荒川（旧入間川水系）によって形成された低地になる。また、市の北西部には北東流する柳瀬川があり、流末で90度近く東方に流れを変え、新河岸川と合流する。

武蔵野台地は古多摩川の扇状地といわれ、標高100mを測る東京都青梅市付近を扇頂にして西から東に向けて大きく広がる。志木市の台地部分は、武蔵野台地の北東端部にあたり、北東に向けて緩やかに傾斜し、南西奥部の新座市との境付近で標高約19m、先端部で9mを測る。また、東部の朝霞市との境には南西方向に小さな谷が入り込んでいるため、市域の台地部分は大きな舌状を呈している。

荒川の形成した低地は、市域では上流部で標高約6m、下流部で約5mとあまり比高差はないが、部分的に自然堤防があり、僅かな起伏が認められる。

（2）市域の遺跡の概要

市域の埋蔵文化財包蔵地は、主に柳瀬川と新河岸川を望む台地上の縁辺部に分布する。

柳瀬川流域には、上流から西原大塚遺跡・新邸遺跡・中道遺跡・城山遺跡・中野遺跡、柳瀬川と新河岸川の合流する付近に市場裏遺跡、新河岸川流域には田子山遺跡・富士前遺跡、また、朝霞市との境にある谷の奥部には大原

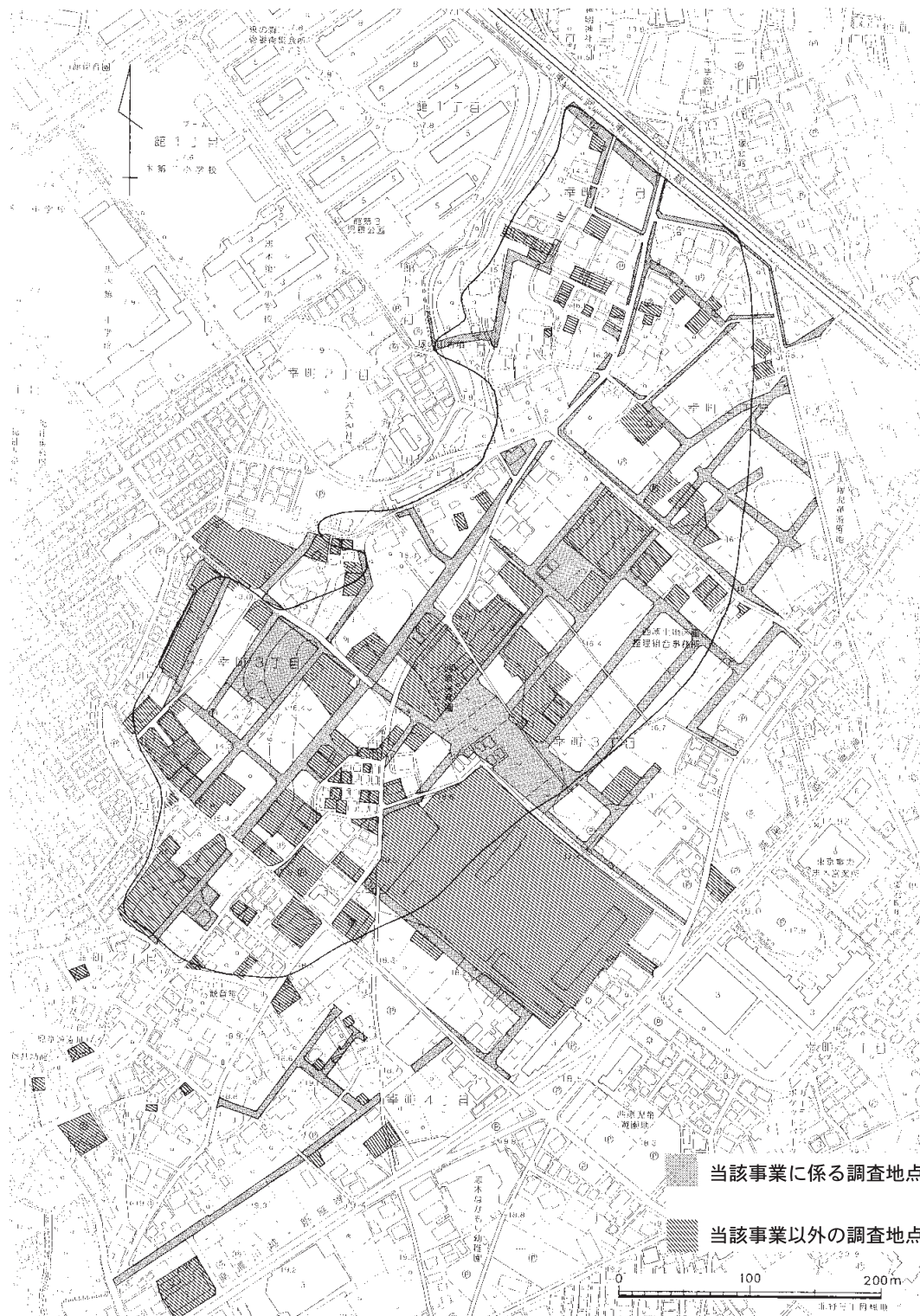
第1章 発掘調査の概要

遺跡がある。

荒川低地には現在、宿遺跡・馬場遺跡・関根兵庫館跡が知られているが、自然堤防上には未発見の遺跡がある可能性も残されている。

上記の遺跡の多くは、発掘調査などにより徐々にその内容が明らかになりつつある。

旧石器時代では西原大塚・中道・城山・中野の各遺跡で調査されていて、石器集中地点の他に礫群などが検出されている。これらの多くは武蔵野台地IV層から出土のものである。



第2図 周辺の地形と調査地点 (1/5,000)

縄文時代では草創期の資料は希少で、城山遺跡で爪形文土器、田子山遺跡で有舌尖頭器が各1点出土しているのみである。早期では撚糸文系土器が城山・田子山・富士前遺跡から、沈線文系土器が田子山遺跡から出土しているが断片的なものである。条痕文系土器は西原大塚遺跡で炉穴に伴って発掘されている。前期では黒浜式期の住居跡が西原大塚・新邸遺跡で調査されていて、後者の住居跡からは貝層が検出されている。また、城山遺跡の斜面貝塚もこの時期のものである。前期後半では、城山遺跡で諸磯a式期の住居跡が、西原大塚遺跡で諸磯c式期の土坑が調査されている。中期では勝坂式期から加曾利E式期にかけて遺跡の数も増加し規模も拡大する。西原大塚・中道・城山・中野・田子山の各遺跡で住居跡や土坑などが調査されていて、特に西原大塚遺跡は住居跡が100軒を越す環状集落であることが判明している。後期以降では遺跡数が減少し、称名寺式期の土坑が田子山遺跡で、堀之内式期・加曾利B式期の住居跡が西原大塚遺跡で検出されている。晩期では西原大塚遺跡から安行3c・3d式土器、中野・田子山遺跡から安行3c式・千網式土器が出土しているが僅かである。

弥生時代の遺跡ではこれまで前・中期のものは発見されていない。本市でこの時代の遺跡が出現するのは後期後半からで、末葉から古墳時代前期前半にかけては遺跡数が増大し規模も拡大する。この時期の遺跡は、西原大塚・新邸・城山・中野・市場裏・田子山・富士前の各遺跡があり、低地では馬場遺跡がある。これらの中で西原大塚遺跡では該期の住居跡が500軒以上調査されていて、この地域の代表的な集落跡といえる。また、西原大塚・市場裏・田子山遺跡からは方形周溝墓の存在が確認されている。

古墳時代には、前期後半から中期にかけて一時遺跡数が激減する。中期の遺跡としては中道・城山・中野遺跡があるが、小規模な集落跡である。後期になると遺跡数が増大し大規模集落も出現する。この時期の遺跡としては、西原大塚・中道・城山・中野・田子山の各遺跡があるが、特に城山遺跡では130軒を越す住居跡が調査されている。

奈良・平安時代の遺跡の分布は、ほぼ古墳時代後期のそれと重なるが、集落の規模としては縮小する傾向が見て取れる。しかし、田子山遺跡では銅製の丸靱が、城山遺跡では銅製の印章が出土していて注目される。

中・近世の遺構は、西原大塚・新邸・中道・城山・中野・田子山・大原の各遺跡で検出されていて、掘立柱建築遺構・地下式坑・土坑・溝跡などがあるが、多くは断片的な資料である。中世では、城山遺跡内の柏の城跡が後北条氏関係の城郭であったという伝承があり、発掘調査により大規模な堀跡や多くの土坑などが検出されている。近世では、関根兵庫館跡があるが詳細は不明である。また、城山遺跡からは溶解炉などの鑄造関連遺構が調査されている。

(3) 遺跡の立地と環境

	所在	遺跡の規模	旧石器	縄文						弥生			古墳		奈良・平安	中世	近世	
				草創	早	前	中	後	晩	前	中	後	前	後				
2	中野遺跡 柏町1丁目	60,990㎡	○		○	○	○	○	○				○	○	◎	○	○	○
3	城山遺跡 柏町3丁目	78,700㎡	○	○	○	○	○	○	○				○	○	◎	○	◎	○
5	中道遺跡 柏町3・5丁目	45,100㎡	○			○	○	○					○	○	○	○	○	○
6	塚ノ山古墳 幸町2丁目	800㎡													○			
7	西原大塚遺跡 幸町2～4丁目	163,100㎡	○		○	○	◎	○	○				◎	◎	○	○	○	○
8	新邸遺跡 柏町5丁目	16,400㎡			○	○	○							○			○	○
9	城山貝塚 柏町3丁目	900㎡					◎											
10	田子山遺跡 本町2・3丁目	62,200㎡		○	○	○	○	○	○				◎	○	○	◎	○	○
11	富士前遺跡 本町3丁目	7,100㎡											◎	◎				
12	馬場遺跡 下宗岡1丁目	2,800㎡											○					
13	関根兵庫館跡 宗岡	4,900㎡																○
14	宿遺跡 上宗岡2丁目	7,700㎡																○
15	市場裏遺跡 本町1丁目	10,700㎡											○	○				
16	大原遺跡 本町4丁目	1,700㎡																○

表1 志木市の遺跡の概要 (◎は主体となる時期)

第1章 発掘調査の概要

西原大塚遺跡は、市の南端に位置する面積約160,000㎡の市域最大規模の集落跡である。

遺跡は柳瀬川を北西に臨む台地縁辺部にあり、標高は13～18mで北西方向にゆるやかに傾斜しているものの、台地上の起伏は僅かである。台地下の柳瀬川に開析された低地は標高約8mを測る。崖下には湧水地が認められ、そのうちの1ヵ所は大きく抉られ、縄文時代中期の集落形成との関連性を窺わせる。

遺跡を載せる台地上には畑地を多く残しているが、本発掘調査の原因ともなった土地区画整理事業の進展と相俟って、住宅建設を主とする開発が急激に増加している。

本遺跡の最初の発掘調査は昭和48年に実施され(谷井 1975)、それ以降、志木市教育委員会・志木市史編さん室・志木市遺跡調査会で発掘調査が行われていて(志木市史編さん室 1984、佐々木 1985・1989・1991・1996・1997・1998・2002、佐々木・尾形 1987・1990、尾形 1990、尾形・深井 1999・2000・2003、佐々木・内野・上田・宮川 2000、佐々木・内野・宮川 2001、尾形・深井・青木 2004、佐々木・内野・宮川 2005a・b、尾形・深井 2007)、遺跡の性格が徐々にではあるが明らかにされつつある。

- 谷井 彪 1975 『西原・大塚遺跡発掘調査報告書』志木市の文化財第4集 志木市教育委員会
- 志木市史編さん室 1984 『志木市史』原始・古代資料編 志木市史編さん室
- 佐々木保俊 1985 「第1章 西原大塚遺跡第3地点の調査」『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集 志木市遺跡調査会
- 佐々木・尾形則敏 1987 「第2章 西原大塚遺跡第4地点の調査」『新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第3集 志木市遺跡調査会
- 佐々木 1989 「第5章 西原大塚遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集 志木市教育委員会
- 佐々木・尾形 1990 「第2章 西原大塚遺跡第8地点の調査」「第5章 西原大塚遺跡第10地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集 志木市教育委員会
- 尾形 1990 「第4章 西原大塚遺跡第9地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集 志木市教育委員会
- 佐々木 1991 「第2章 西原大塚遺跡第11地点の調査」『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第16集 志木市教育委員会
- 佐々木 1996 「第2章 西原大塚遺跡第32地点の調査」『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集 志木市教育委員会
- 1996 「第4章 西原大塚遺跡第14地点の調査」「第11章 西原大塚遺跡第21地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 1997 「第8章 西原大塚遺跡第34地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集 志木市教育委員会
- 1998 『西原大塚の遺跡』西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査が概報 志木市遺跡調査会
- 尾形・深井恵子 1999 「第10章 西原大塚遺跡第36地点の調査」『志木市遺跡群Ⅸ』志木市の文化財第27集 志木市教育委員会
- 尾形・深井 2000 「西原大塚遺跡第37地点の調査」「西原大塚遺跡第39地点の調査」『志木市遺跡群Ⅹ』志木市の文化財第28集 志木市教育委員会

- 佐々木・内野美津江・上田寛・宮川幸佳 2000 『西原大塚遺跡第45地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第6集 志木市遺跡調査会
- 佐々木・内野・宮川 2001 「西原大塚遺跡第43地点の調査」『志木市遺跡群11』志木市の文化財第30集 志木市教育委員会
- 佐々木 2002 「西原大塚遺跡第47地点の調査」『志木市遺跡群12』志木市の文化財第32集 志木市教育委員会
- 尾形・深井 2003 「西原大塚遺跡第54地点の調査」『志木市遺跡群13』志木市の文化財第35集 志木市教育委員会
- 尾形・深井・青木修 2004 「西原大塚遺跡第65地点」『志木市遺跡群 14』志木市の文化財第36集 志木市教育委員会
- 佐々木・内野・宮川 2005a『西原大塚遺跡第111地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第8集 志木市遺跡調査会
- 2005b『西原大塚遺跡第110地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第9集 志木市遺跡調査会
- 尾形・深井 2007 「西原大塚遺跡第67地点」『志木市遺跡群15』志木市の文化財第37集 志木市教育委員会

第3節 発掘調査の経過

西原地区の土地区画整理事業に伴う記録保存を目的とする発掘調査の第1回目は平成1年度に行われ、平成18年度に終了した。

各年度の調査地点・調査面積・調査期間・検出遺構及び遺構数は、以下のとおりである。年度別調査地点の位置については、年度別発掘調査地点（第3図）及び調査地点名称図（第4図）を参照されたい。

平成1年度

第1地点

発掘調査期間	平成1年12月20日～平成2年1月12日
調査対象地	志木市幸町4丁目3382番地他 道路予定地 面積 570㎡
検出された主な遺構	弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡8軒

平成4年度

第2地点

発掘調査期間	平成5年1月27・28日
調査対象地	志木市幸町4丁目3395番地他 道路予定地 面積 3,529㎡
検出された主な遺構	なし

平成5年度

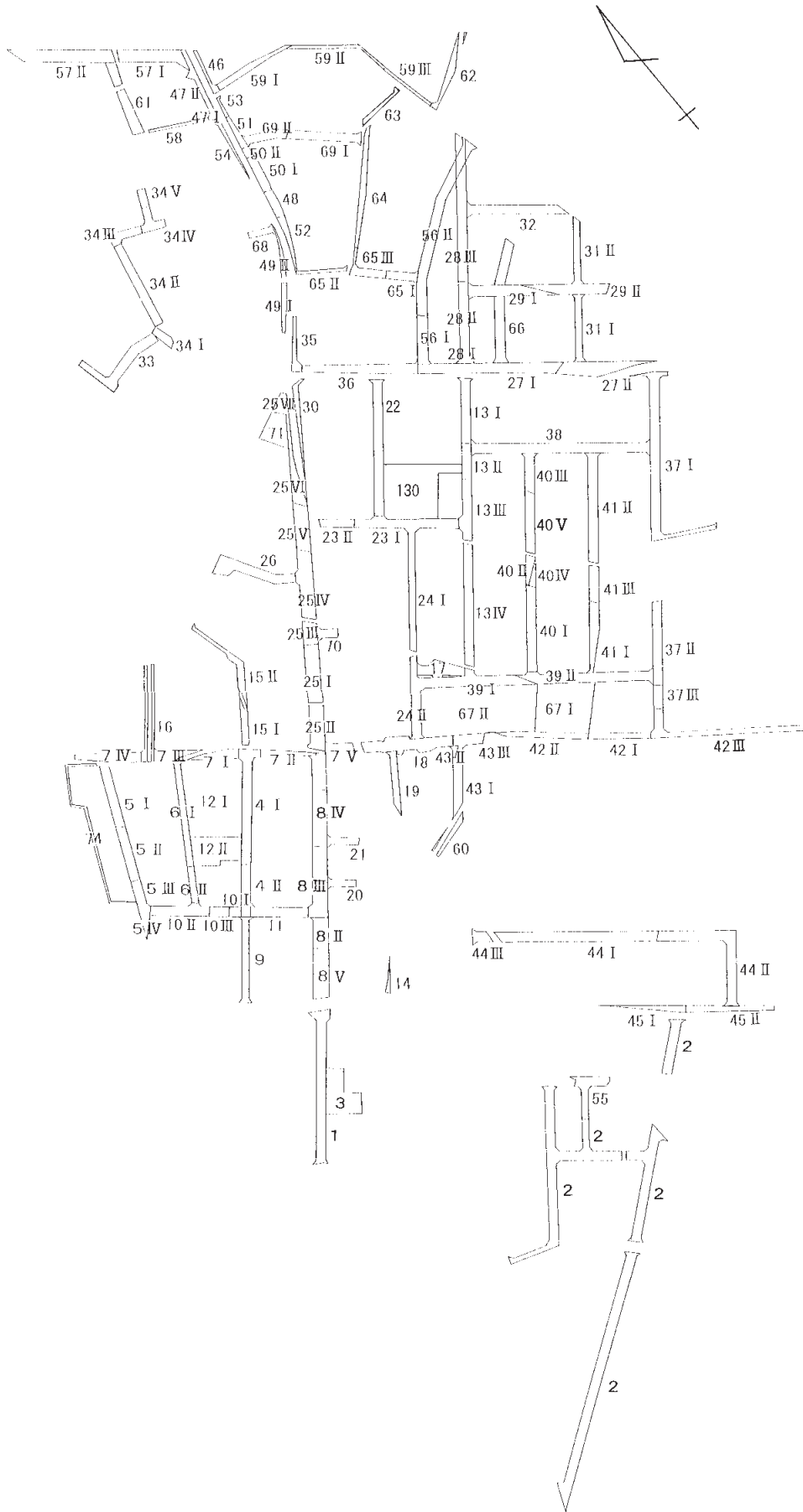
第3地点

発掘調査期間	平成5年
調査対象地	志木市幸町4丁目3389番地他 保留地 面積 460㎡
検出された主な遺構	弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡3軒

第4 I 地点



第3図 年度別発掘調査地点



第4図 調査地点名称図

第1章 発掘調査の概要

発掘調査期間 平成6年2月17日～3月31日
調査対象地 志木市幸町3丁目3122番地 道路予定地 面積152㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡1軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒

第5 I 地点

発掘調査期間 平成6年2月22日～3月31日
調査対象地 志木市幸町3丁目3098 道路予定地 面積 163㎡
検出された主な遺構 中世末葉 地下式坑1基

第7 I 地点

発掘調査期間 平成6年2月17日～3月11日
調査対象地 志木市幸町3丁目3122番地 道路予定地 面積48㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒

平成6年度

第4 II 地点

発掘調査期間 平成6年4月1日～4月19日
調査対象地 志木市幸町3丁目3122番地他 道路予定地 面積583㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡6軒
平安時代 住居跡1軒

第5 I 地点

発掘調査期間 平成6年4月1日～4月14日
調査対象地 志木市幸町3丁目3099番地 道路予定地 面積 65㎡
検出された主な遺構 近世 段切り遺構1基

第6 I 地点

発掘調査期間 平成6年4月14日～6月15日
調査対象地 志木市幸町3丁目3110—1番地 道路予定地 面積 280㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡8軒

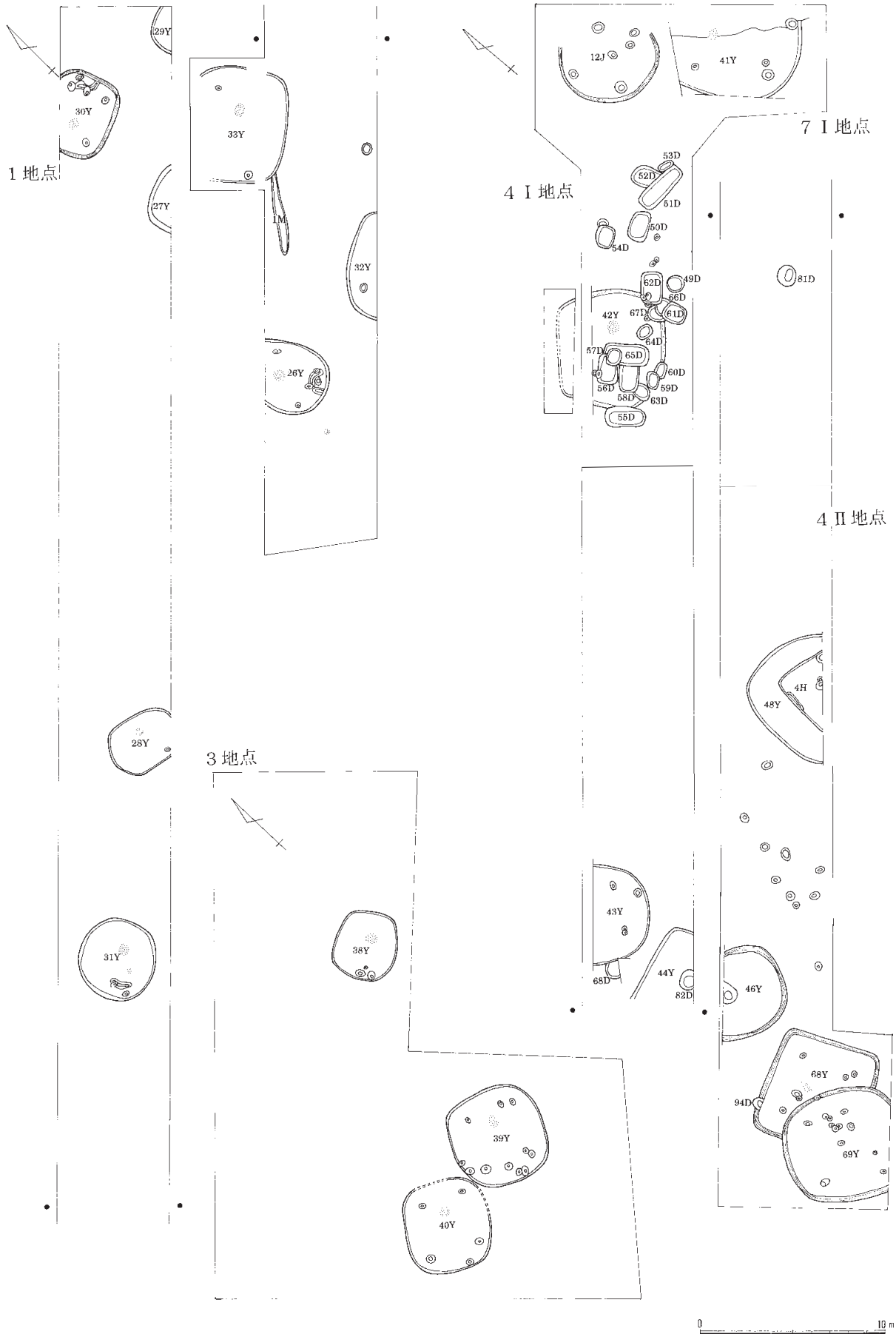
第8 I 地点

発掘調査期間 平成6年5月9日～6月17日
調査対象地 志木市幸町3丁目3132番地他 道路予定地 面積 228㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡1軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒
方形周溝墓1基

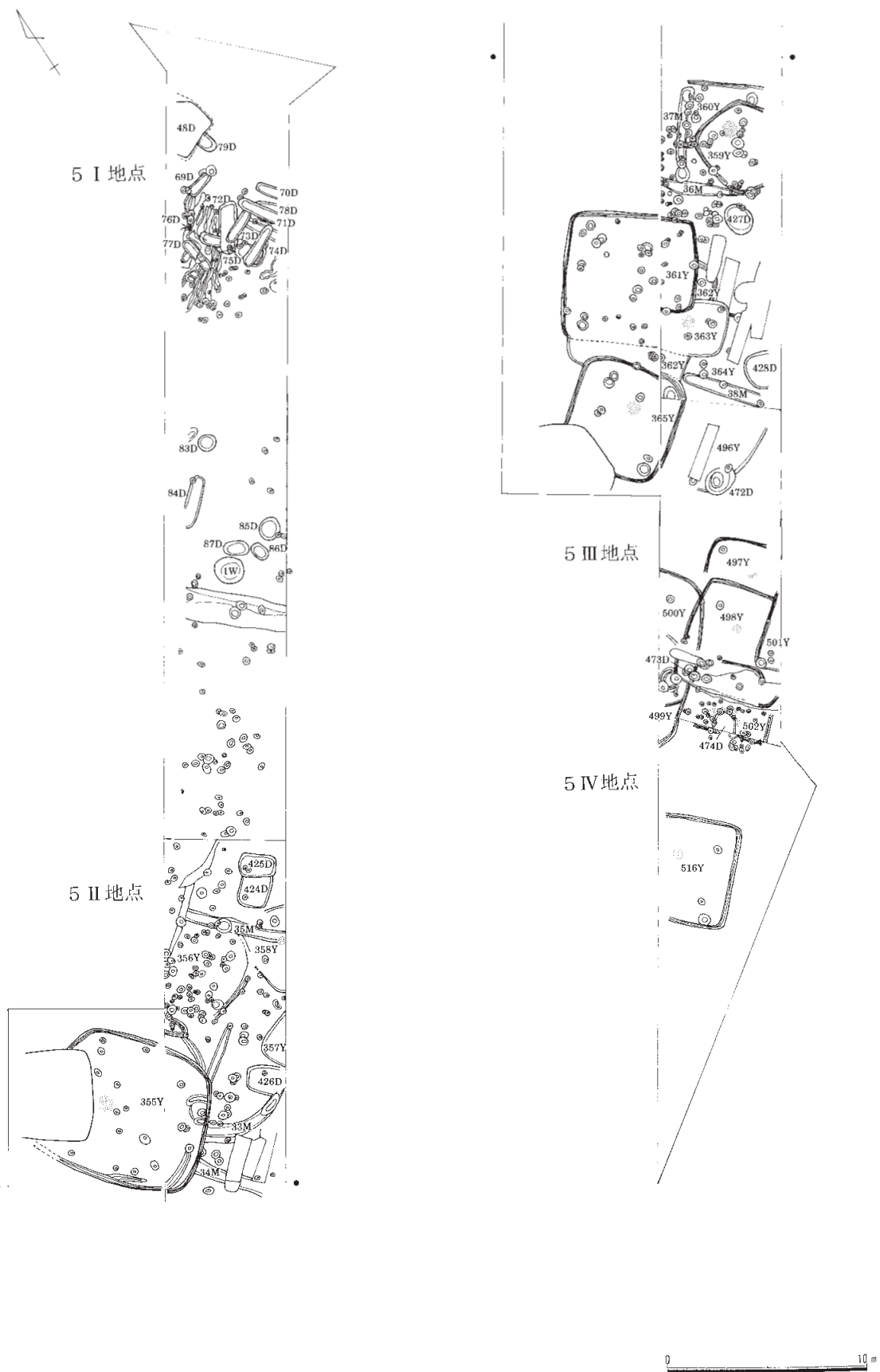
第9 地点

発掘調査期間 平成6年7月26日～12月9日
調査対象地 志木市幸町3丁目3113—1番地他 道路予定地 面積 181㎡
検出された主な遺構 旧石器時代 石器集中地点1ヵ所
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡8軒
方形周溝墓1基

第10 I 地点



第5図 遺構分布図1 (1/300)



第6図 遺構分布図2 (1/300)

発掘調査期間 平成6年8月15日～9月5日
 調査対象地 志木市幸町3丁目3112番地 道路予定地 面積 59㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒

第8Ⅱ地点

発掘調査期間 平成6年12月6日～平成7年1月9日
 調査対象地 志木市幸町3丁目3117番地 道路予定地 面積 180㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡3軒

第8Ⅲ地点

発掘調査期間 平成7年1月9日～1月25日
 調査対象地 志木市幸町3丁目3118番地他 道路予定地 面積 374㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡3軒

第11地点

発掘調査期間 平成6年12月16日～平成7年2月24日
 調査対象地 志木市幸町3丁目3118番地 道路予定地 面積 266㎡
 検出された主な遺構 旧石器時代 石器集中地点1ヵ所
 縄文時代前期 住居跡1軒
 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡8軒

第12Ⅰ地点

発掘調査期間 平成7年2月10日～3月29日
 調査対象地 志木市幸町3丁目3121番地他 公園予定地 面積 500㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡7軒

第8Ⅳ地点

発掘調査期間 平成7年3月2日～3月27日
 調査対象地 志木市幸町3丁目3120番地他 道路予定地 面積 285㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡5軒
 平安時代 住居跡1軒

第7Ⅱ地点

発掘調査期間 平成7年3月14日～3月28日
 調査対象地 志木市幸町3丁目3130番地 道路予定地 面積 100㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 方形周溝墓1基

平成7年度

第12Ⅱ地点

発掘調査期間 平成7年4月3日～8月3日
 調査対象地 志木市幸町3丁目3122番地他 公園予定地 面積 1,229㎡
 検出された主な遺構 旧石器時代 石器集中地点1ヵ所
 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡14軒
 近世・近代 土坑21基

第13Ⅰ地点

発掘調査期間 平成7年5月23日～8月2日

第1章 発掘調査の概要

調査対象地 志木市幸町3丁目3234-1番地他 道路予定地 面積 240㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡1軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒

第14地点

発掘調査期間 平成7年5月31日～6月2日
調査対象地 志木市幸町3丁目3135-1番地 道路予定地 面積 35㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 方形周溝墓1基

第15 I 地点

発掘調査期間 平成7年7月19日～8月1日
調査対象地 志木市幸町3丁目3123-1番地他 道路予定地 面積 58㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒
中世 土坑1基

第7 III 地点

発掘調査期間 平成7年9月4日～9月14日
調査対象地 志木市幸町3丁目3108番地他 道路予定地 面積 125㎡
検出された主な遺構 近世 溝跡1条

第7 IV 地点

発掘調査期間 平成7年9月11日～9月22日
調査対象地 志木市幸町3丁目3096-2番地他 道路予定地 面積 256㎡
検出された主な遺構 近世 土坑1基
井戸跡1基

第16地点

発掘調査期間 平成7年9月19日～9月25日
調査対象地 志木市幸町3丁目3096-2番地 道路予定地 面積 173㎡
検出された主な遺構 なし

第17地点

発掘調査期間 平成7年10月5日～12月6日
調査対象地 志木市幸町3丁目3163番地他 道路予定地 面積 280㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡7軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡4軒
古墳時代後期 住居跡1軒

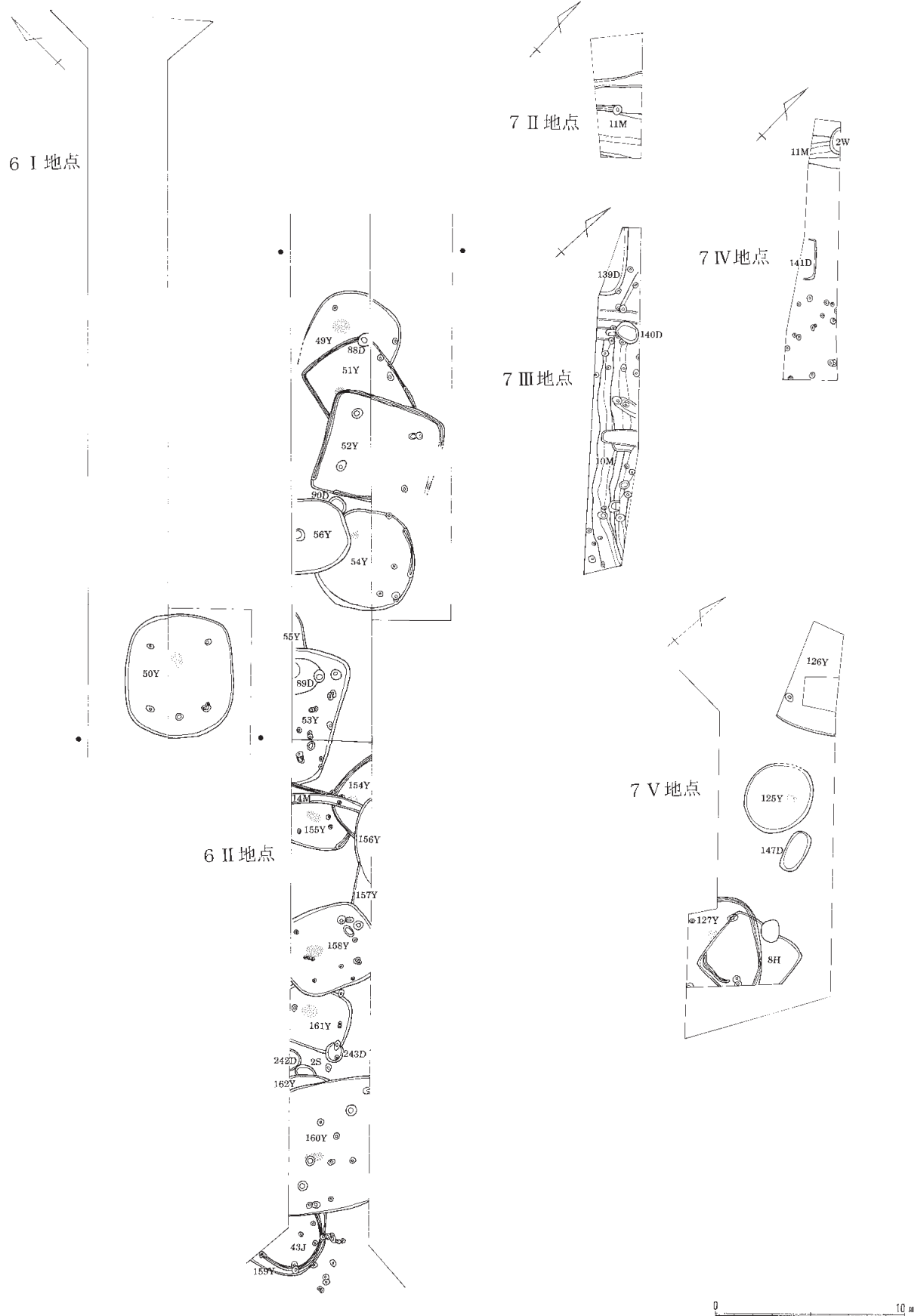
第18地点

発掘調査期間 平成7年11月24日～平成8年1月12日
調査対象地 志木市幸町3丁目3148番地他 道路予定地 面積 254㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡9軒

第19地点

発掘調査期間 平成7年11月21日～12月5日
調査対象地 志木市幸町3丁目3147番地他 道路予定地 面積 101㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒

第8 V 地点



第7図 遺構分布図3 (1/300)

第1章 発掘調査の概要

発掘調査期間 平成8年1月10日～1月22日
調査対象地 志木市幸町3丁目3115—1番地 道路予定地 面積 58㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒

第20地点

発掘調査期間 平成8年1月18日
調査対象地 志木市幸町3丁目3119番地 道路予定地 面積 112㎡
検出された主な遺構 なし

第21地点

発掘調査期間 平成8年1月18日～2月5日
調査対象地 志木市幸町3丁目3120番地 道路予定地 面積 78㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒

第7V地点

発掘調査期間 平成8年3月5日～3月28日
調査対象地 志木市幸町3丁目3129—1番地 道路予定地 面積 114㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡3軒
平安時代 住居跡1軒

平成8年度

第22地点

発掘調査期間 平成8年6月13日～10月3日
調査対象地 志木市幸町3丁目3231—1番地他 道路予定地 面積 515㎡
検出された主な遺構 旧石器時代 石器集中地点1ヵ所
縄文時代中期 住居跡5軒
土坑37基
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒
方形周溝墓1基

第24I地点

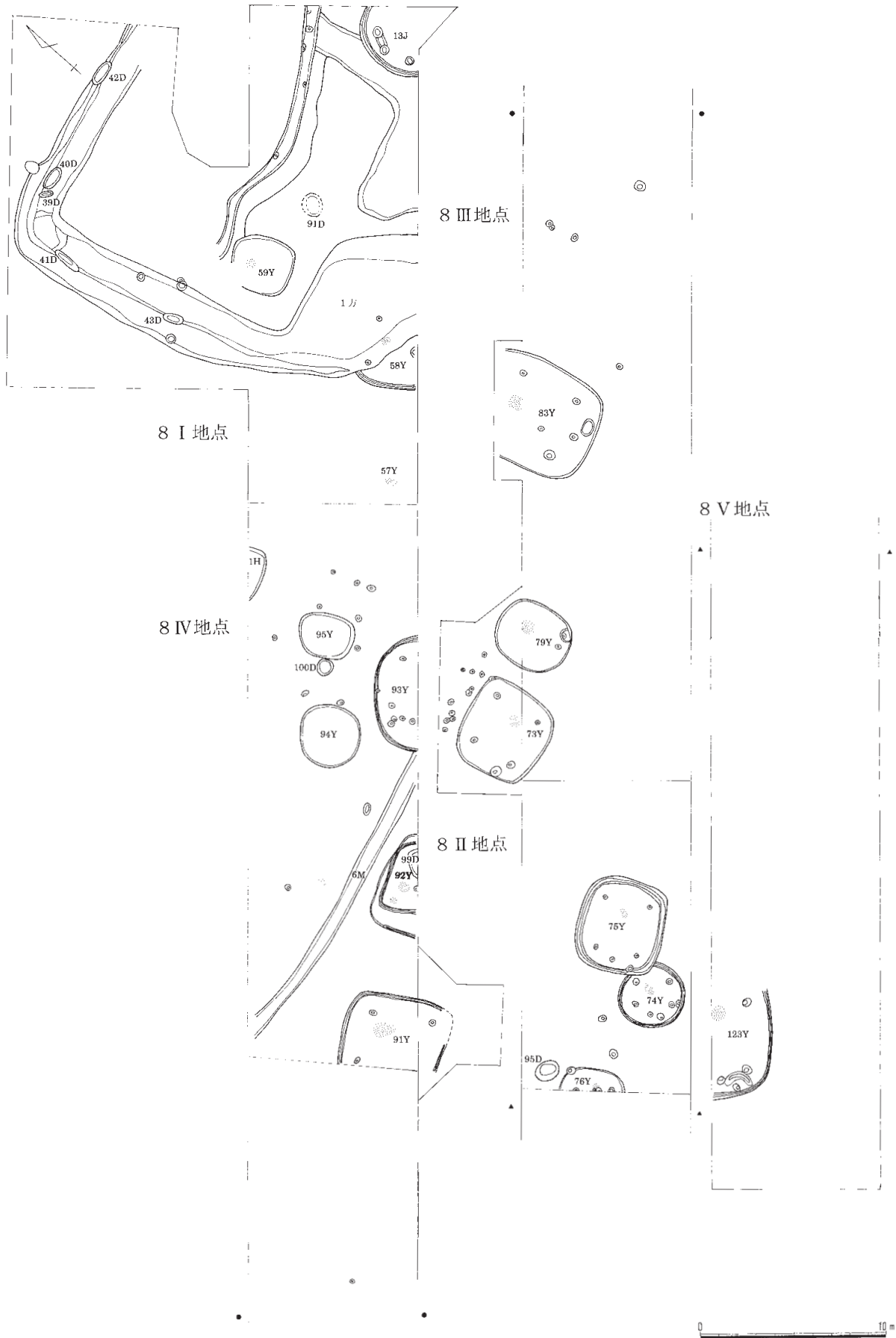
発掘調査期間 平成8年8月28日～9月27日
調査対象地 志木市幸町3丁目3160番地他 道路予定地 面積 306㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡3軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡5軒
方形周溝墓1基

第23I地点

発掘調査期間 平成8年10月2日～12月12日
調査対象地 志木市幸町3丁目3228番地他 道路予定地 面積 330㎡
検出された主な遺 縄文時代中期 住居跡9軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡5軒

第10II地点

発掘調査期間 平成9年1月10日～2月14日
調査対象地 志木市幸町3丁目3107番地他 道路予定地 面積 212.7㎡



第8図 遺構分布図4 (1/300)

第1章 発掘調査の概要

検出された主な遺構 縄文時代前期 住居跡1軒
弥生時代後期～古墳時代初頭 住居跡8軒

第6Ⅱ地点

発掘調査期間 平成9年2月3日～2月19日
調査対象地 志木市幸町3丁目3110—2番地 道路予定地 面積 101㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡9軒

第25Ⅰ地点

発掘調査期間 平成9年2月13日～3月17日
調査対象地 志木市幸町3丁目3126—Ⅰ番地 道路予定地 面積 394㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡4軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒
方形周溝墓2基

平成9年度

第25Ⅱ地点

発掘調査期間 平成9年5月1日～6月27日
調査対象地 志木市幸町3丁目3129—1番地他 道路予定地 面積 250㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡

第25Ⅲ地点

発掘調査期間 平成9年5月28日～6月17日
調査対象地 志木市幸町三丁目3126—1番地 道路予定地 面積 144㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 方形周溝墓2基

第25Ⅳ地点

発掘調査期間 平成9年6月17日～7月28日
調査対象地 志木市幸町三丁目3151—1番地他 道路予定地 面積 372㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 方形周溝墓1基

第25Ⅴ地点

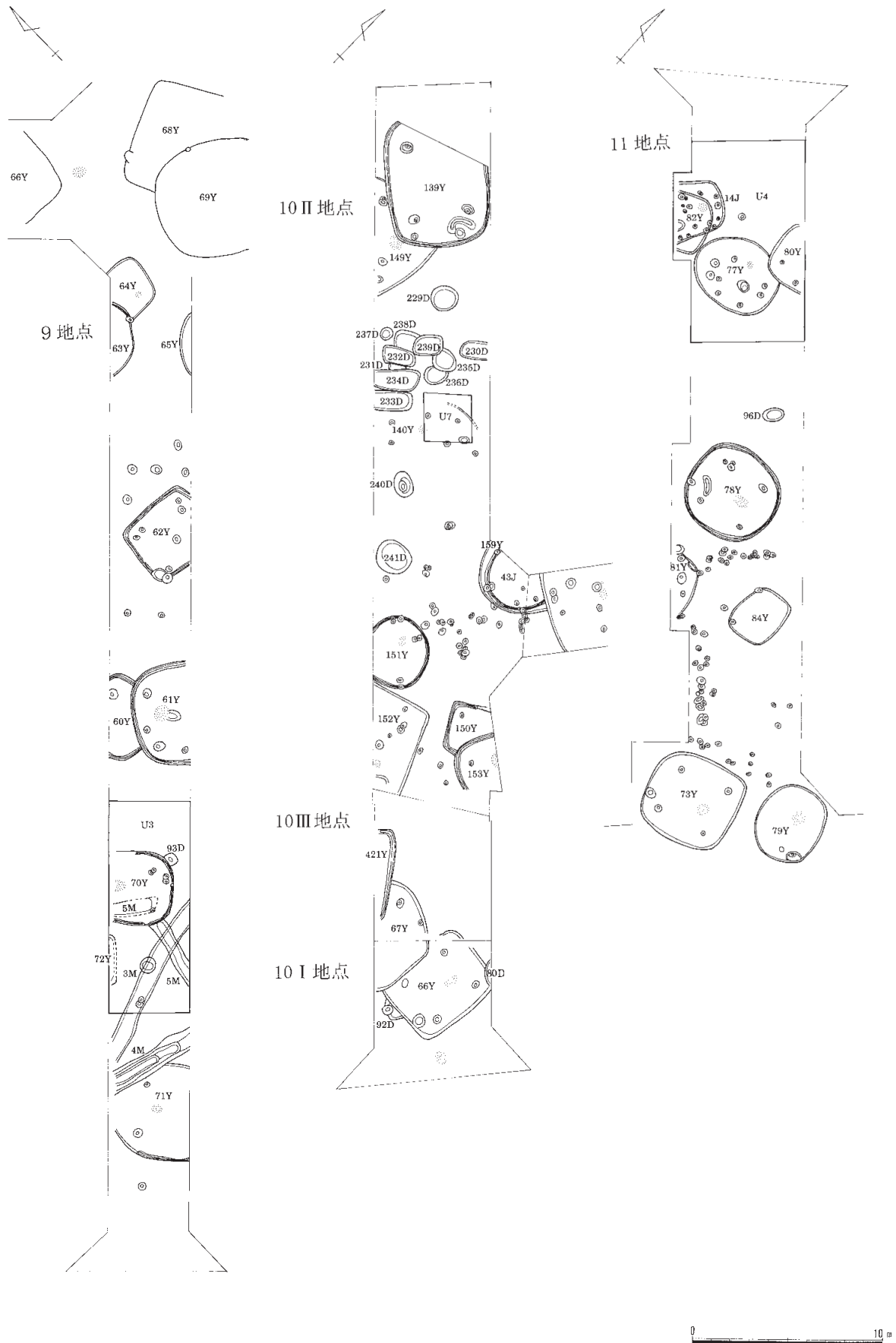
発掘調査期間 平成9年6月30日～7月24日
調査対象地 志木市幸町三丁目3152番地 道路予定地 面積 280㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡1軒

第26地点

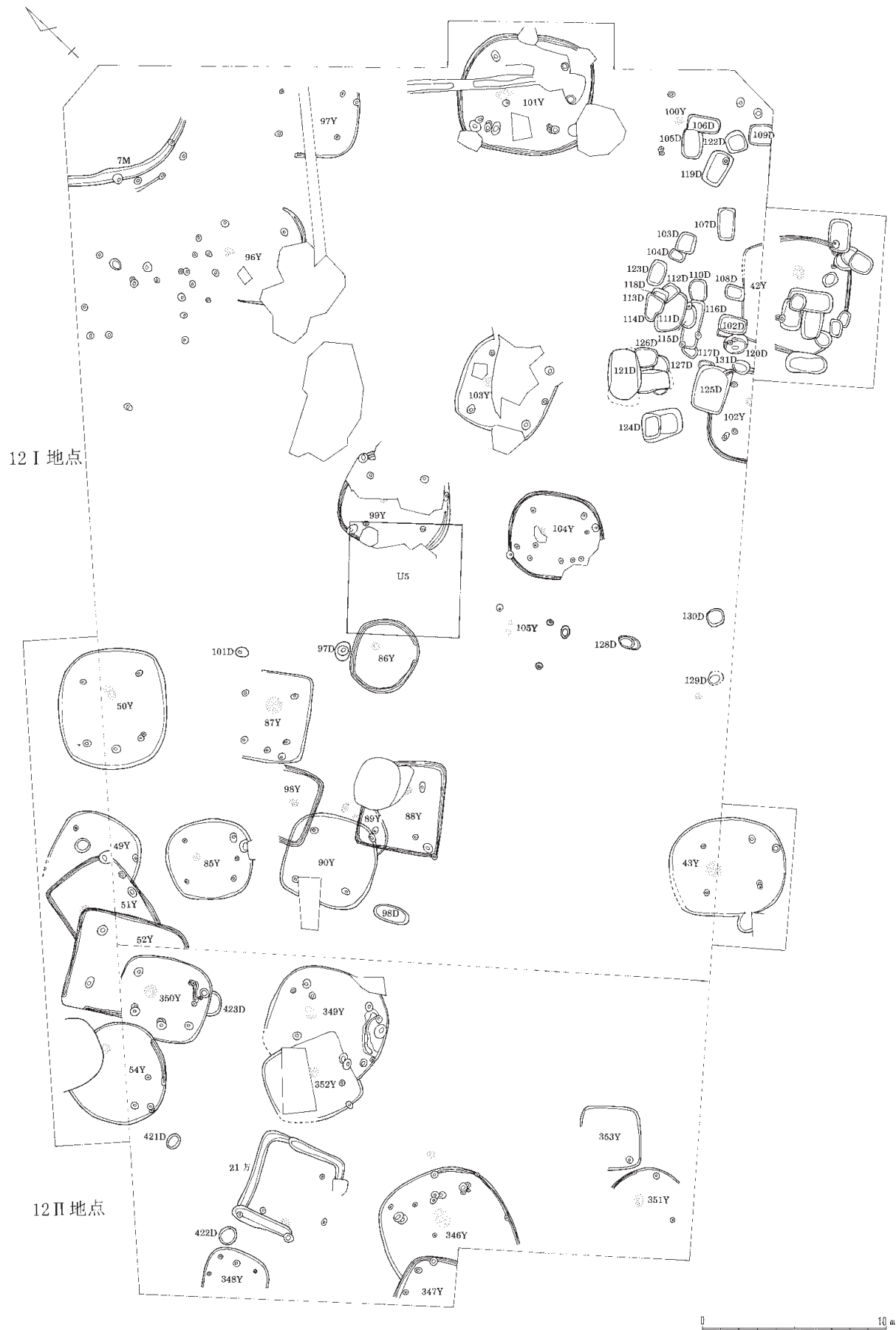
発掘調査期間 平成9年7月16日～9月12日
調査対象地 志木市幸町三丁目3153—1番地他 道路予定地 面積 394㎡
検出された主な遺構 旧石器時代 石器集中地点1ヵ所
縄文時代中期 住居跡3軒
弥生時代後期～古墳時代前期 方形周溝墓3基

第15Ⅱ地点

発掘調査期間 平成9年8月12日～21日
調査対象地 志木市幸町三丁目3126—1番地他 道路予定地 面積 196㎡
検出された主な遺構 平安時代 住居跡1軒



第9図 遺構分布図5 (1/300)



第10図 遺構分布図6 (1/300)

第27Ⅰ地点

発掘調査期間 平成9年10月20日～22日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3066番地他 道路予定地 面積 588㎡
 検出された主な遺構 なし

第28Ⅰ地点

発掘調査期間 平成9年10月21日～22日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3065番地 道路予定地 面積 125㎡
 検出された主な遺構 なし

第28Ⅱ地点

発掘調査期間 平成9年10月22日～12月11日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3064番地 道路予定地 面積 196㎡
 検出された主な遺構 時代不明 道路状遺構1条

第29Ⅰ地点

発掘調査期間 平成9年10月24日～12月11日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3063番地他 道路予定地 面積 186㎡
 検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡1軒
 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒

平成10年度

第27Ⅱ地点

発掘調査期間 平成10年5月25日～27日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3061番地他 道路予定地 面積 326.7㎡
 検出された主な遺構 なし

第30地点

発掘調査期間 平成10年5月27日～6月30日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3156—1番地他 道路予定地 面積 145.3㎡
 検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡4軒
 弥生時代後期～古墳時代前期 方形周溝墓1基

第28Ⅲ地点

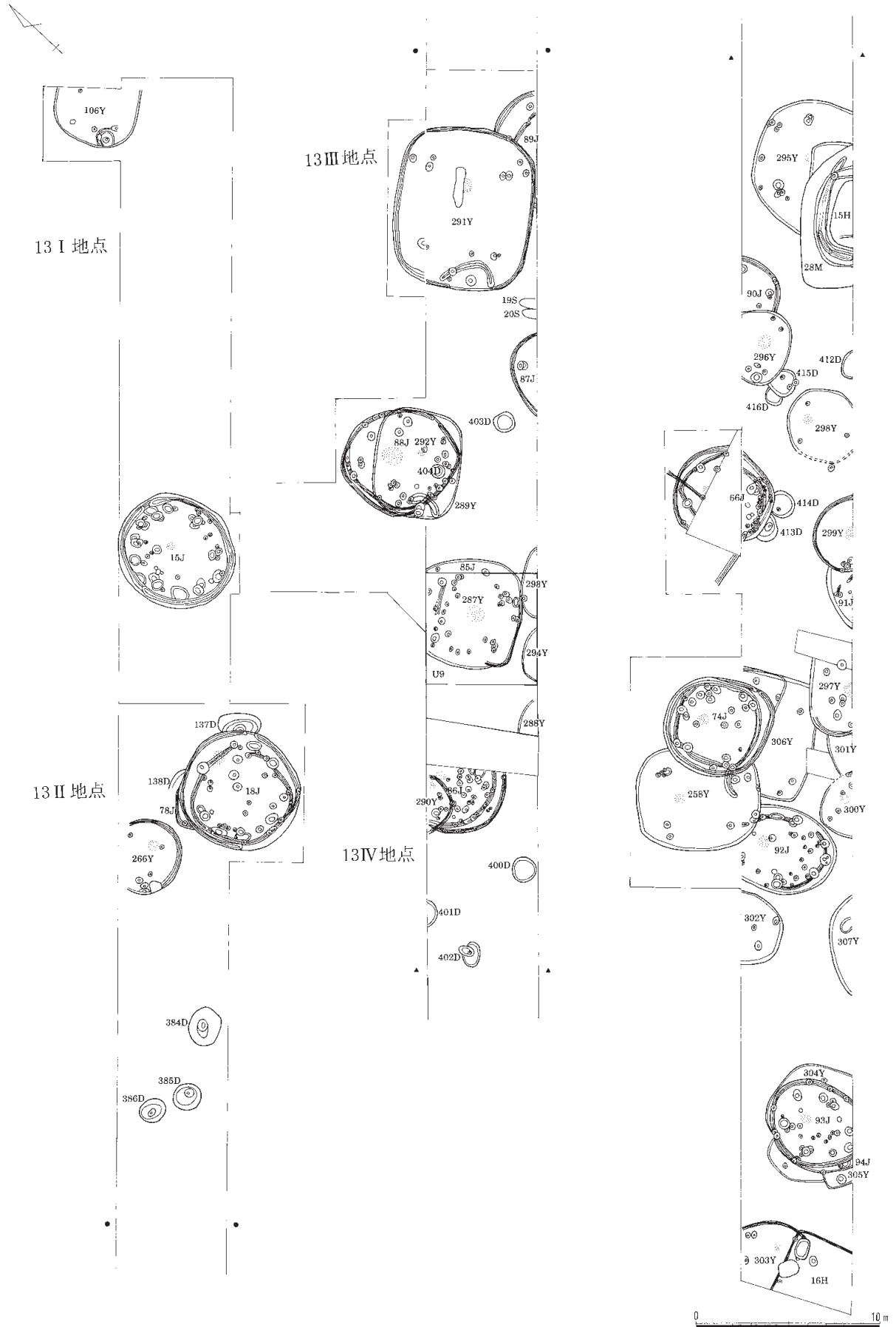
発掘調査期間 平成10年10月20日～23日、平成11年2月1日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3050番地他 道路予定地 面積 505㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒

第29Ⅱ地点

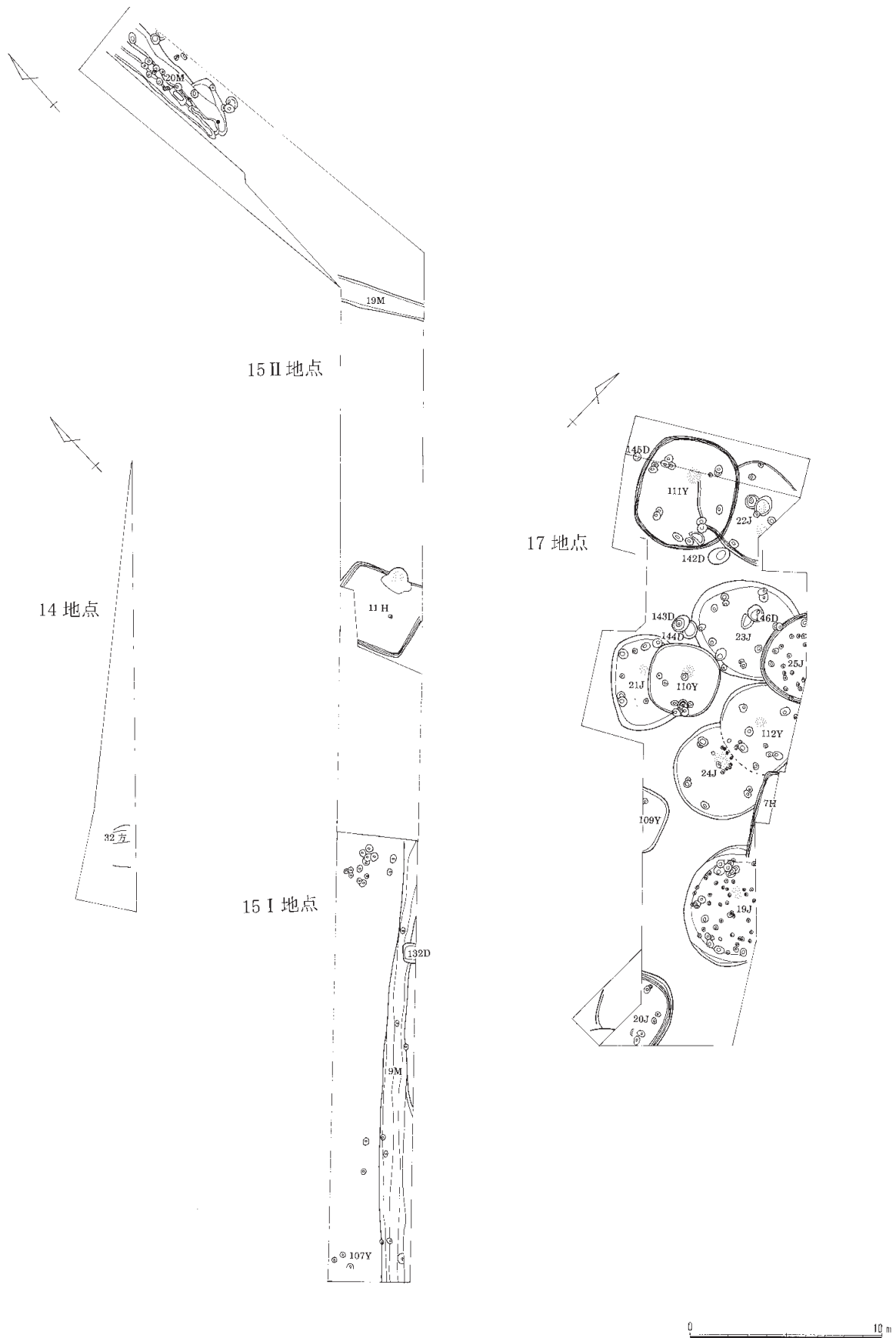
発掘調査期間 平成10年10月20・21日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3053番地他 道路予定地 面積 237㎡
 検出された主な遺構 なし

第31Ⅰ地点

発掘調査期間 平成10年10月20・21日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3054番地 道路予定地 面積 100㎡
 検出された主な遺構 なし



第11図 遺構分布図7 (1/300)



第12図 遺構分布図8 (1/300)

第1章 発掘調査の概要

平成11年度

第31Ⅱ地点

発掘調査期間 平成11年10月26・28日
調査対象地 志木市幸町二丁目3053番地他 道路予定地 面積 223.9㎡
検出された主な遺構 なし

第32地点

発掘調査期間 平成11年26・28日、12月21日
調査対象地 志木市幸町二丁目3050番地他 道路予定地 面積 294.9㎡
検出された主な遺構 なし

第33地点

発掘調査期間 平成12年1月18日～3月15日
調査対象地 志木市幸町二丁目3081番地他 道路予定地 面積 397.95㎡
検出された主な遺構 縄文時代後期 住居跡1軒

第34Ⅰ地点

発掘調査期間 平成12年1月25日～2月8日
調査対象地 志木市幸町二丁目3080—1番地 道路予定地 面積 231.77㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 溝跡1条

平成12年度

第35地点

発掘調査期間 平成12年10月30日～11月27日
調査対象地 志木市幸町二丁目3069—1番地 道路予定地 面積 106㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡4軒

第36地点

発掘調査期間 平成12年11月14日～平成13年2月1日
調査対象地 志木市幸町二丁目3067番地他 道路予定地 面積 404㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡3軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡3軒
方形周溝墓1基
溝跡1条

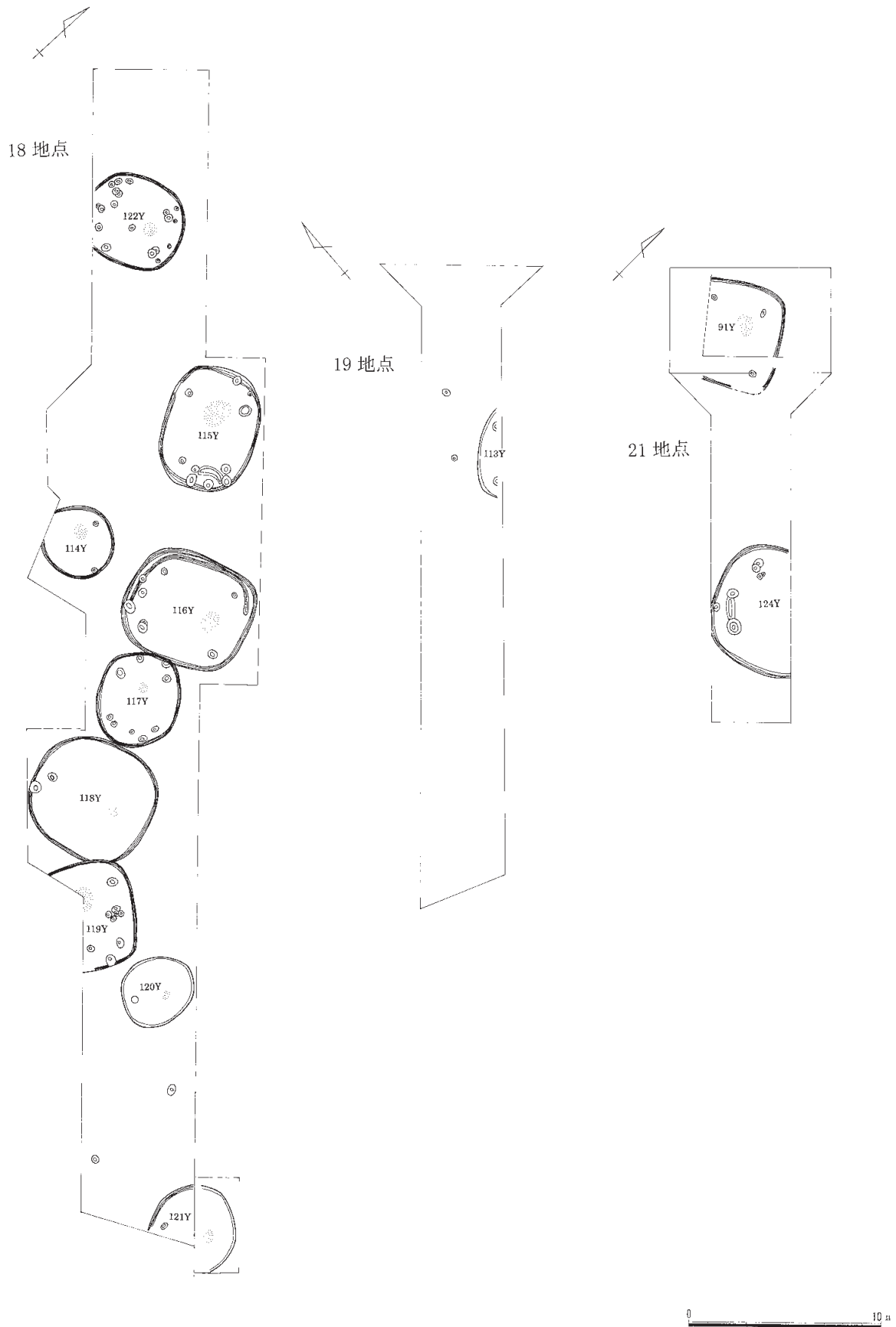
平成13年度

第37Ⅰ地点

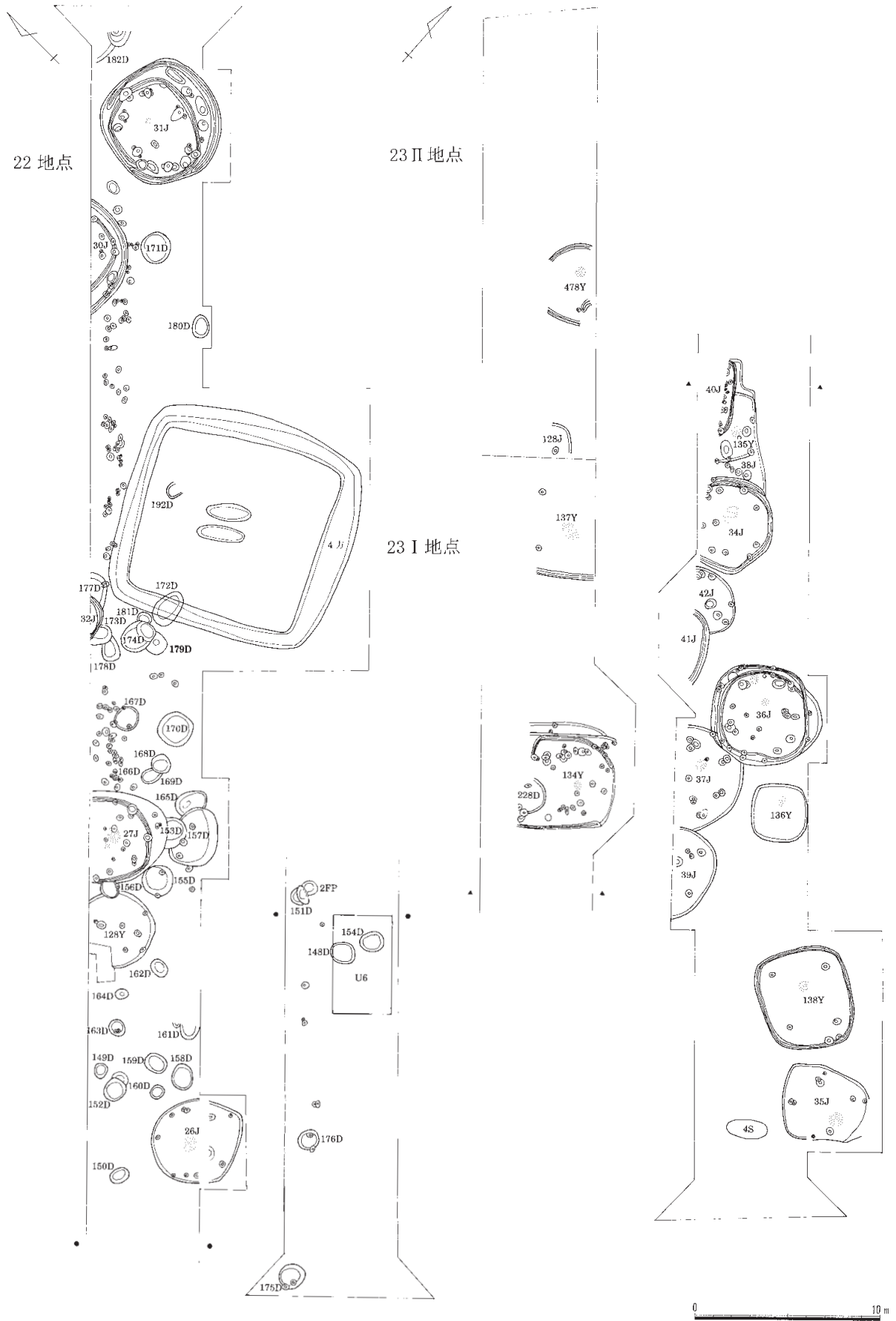
発掘調査期間 平成13年5月18・21日
調査対象地 志木市幸町三丁目3243—1番地他 道路予定地 面積 859.12㎡
検出された主な遺構 なし

第38地点

発掘調査期間 平成13年5月21日～6月19日
調査対象地 志木市幸町三丁目3237番地他 道路予定地 面積 709.09㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡6軒



第13図 遺構分布図9 (1/300)



第14図 遺構分布図10 (1/300)

第13Ⅱ地点

発掘調査期間 平成13年 5月24日～6月29日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3233番地 道路予定地 面積 165㎡
 検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡 2軒
 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 1軒

第24Ⅱ地点

発掘調査期間 平成13年 6月20日～8月4日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3163番地他 道路予定地 面積 303.67㎡
 検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡 7軒
 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 7軒
 古墳時代後期 住居跡 1軒

第39Ⅰ地点

発掘調査期間 平成13年 6月20日～8月4日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3164番地他 道路予定地 面積 434.18㎡
 検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡 1軒
 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 8軒

第13Ⅲ地点

発掘調査期間 平成13年 7月11日～9月28日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3227番地他 道路予定地 面積 204.47㎡
 検出された主な遺構 旧石器時代 石器集中地点 1ヵ所
 縄文時代中期 住居跡 4軒
 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 7軒

第13Ⅳ地点

発掘調査期間 平成13年 7月26日～10月25日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3215番地他 道路予定地 面積 458.77㎡
 検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡 6軒
 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡16軒
 古墳時代後期 住居跡 1軒
 平安時代 住居跡 1軒

第37Ⅱ地点

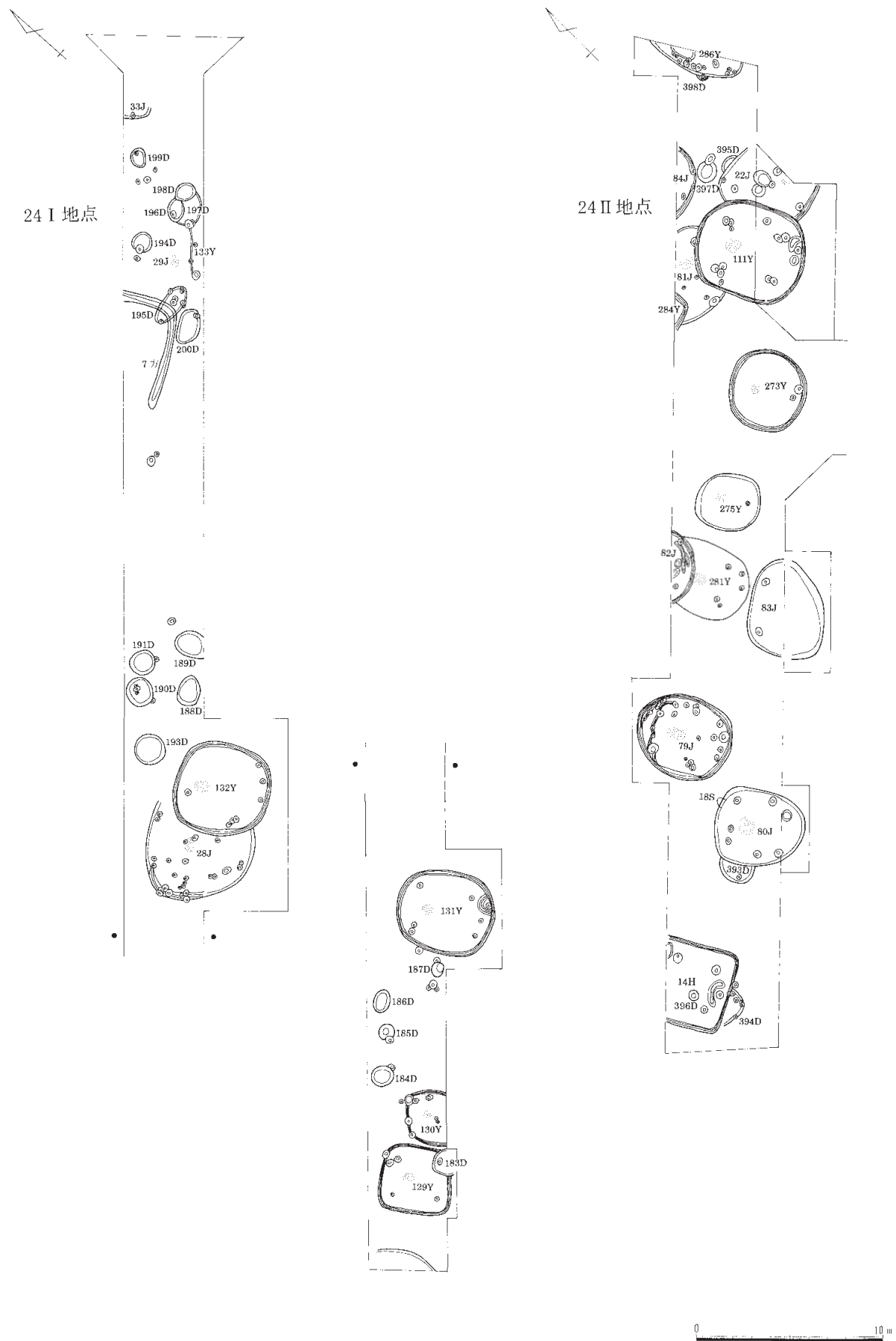
発掘調査期間 平成13年10月3・4日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3217—1番地他 道路予定地 面積 310.08㎡
 検出された主な遺構 なし

第39Ⅱ地点

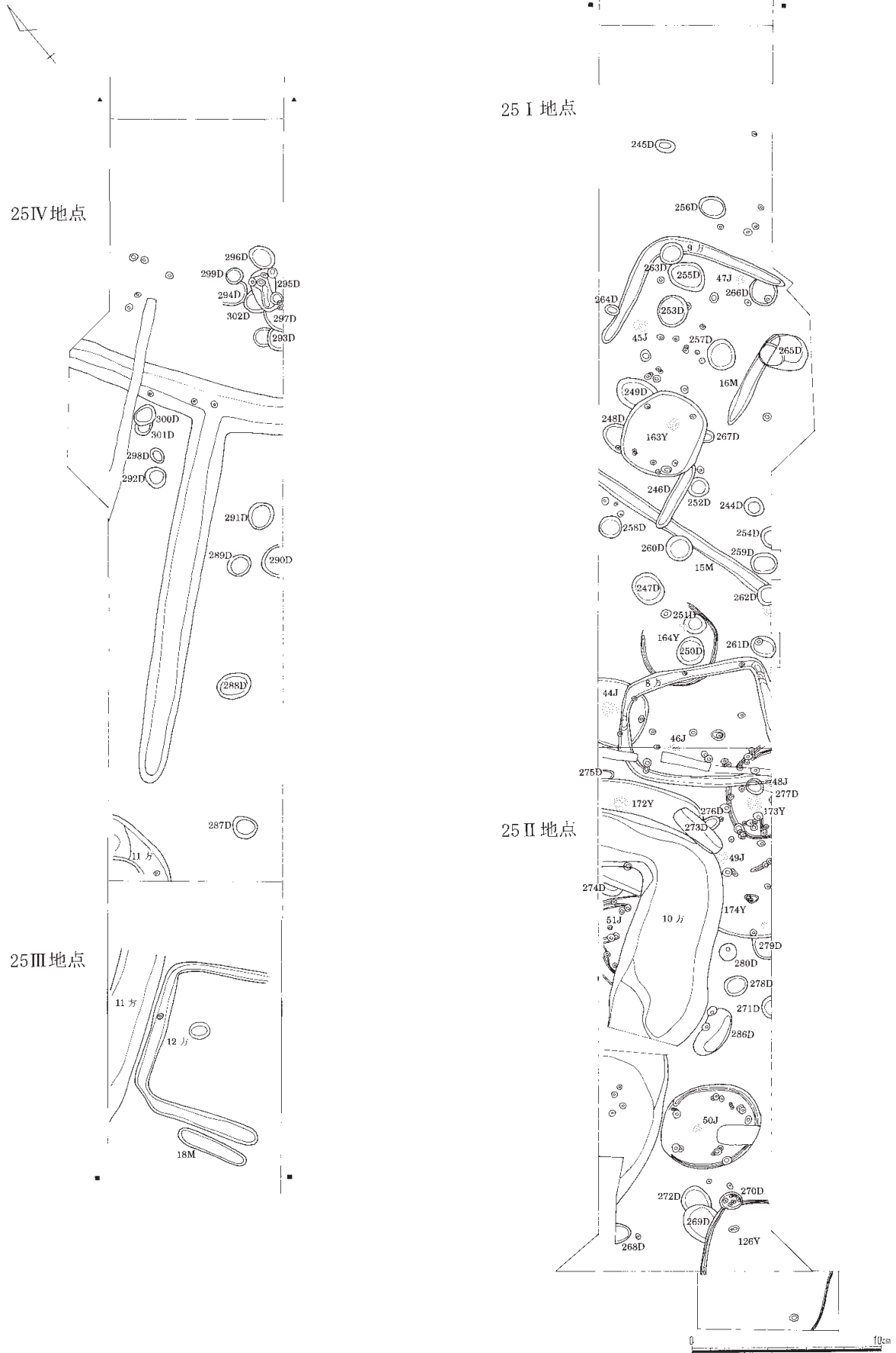
発掘調査期間 平成13年10月3日～22日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3214番地 道路予定地 面積 240.9㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 5軒

第39Ⅲ地点

発掘調査期間 平成13年10月4日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3205番地 道路予定地 面積 222.05㎡



第15図 遺構分布図11 (1/300)



第16図 遺構分布図12 (1/300)

第1章 発掘調査の概要

検出された主な遺構 なし

第40 I 地点

発掘調査期間 平成13年10月4日～11月5日

調査対象地 志木市幸町三丁目3214番地他 道路予定地 面積 317.76㎡

検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡7軒

第45 I 地点

発掘調査期間 平成13年10月19日

調査対象地 志木市幸町三丁目3171-1番地 道路予定地 面積 119.24㎡

検出された主な遺構 なし

第40 II 地点

発掘調査期間 平成13年10月23日～11月5日

調査対象地 志木市幸町三丁目3225番地 道路予定地 面積 75.33㎡

検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒

第43 I 地点

発掘調査期間 平成13年10月26日～12月1日

調査対象地 志木市幸町三丁目3165-1番地 道路予定地 面積 188.86㎡

検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡5軒

第41 I 地点

発掘調査期間 平成13年11月5日

調査対象地 志木市幸町三丁目3216番地 道路予定地 面積 204.75㎡

検出された主な遺構 なし

第46地点

発掘調査期間 平成13年11月26・27日、12月10～12日

調査対象地 志木市幸町二丁目3022-1番地他 道路予定地 面積 65.01㎡

検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 方形周溝墓1基

第47 I 地点

発掘調査期間 平成13年11月26・27日

調査対象地 志木市幸町二丁目3027番地 道路予定地 面積 22.5㎡

検出された主な遺構 なし

第48地点

発掘調査期間 平成13年11月27日～12月10日

調査対象地 志木市幸町二丁目3041-2番地他 道路予定地 面積 96.97㎡

検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒

第49 I 地点

発掘調査期間 平成13年11月27日～12月20日

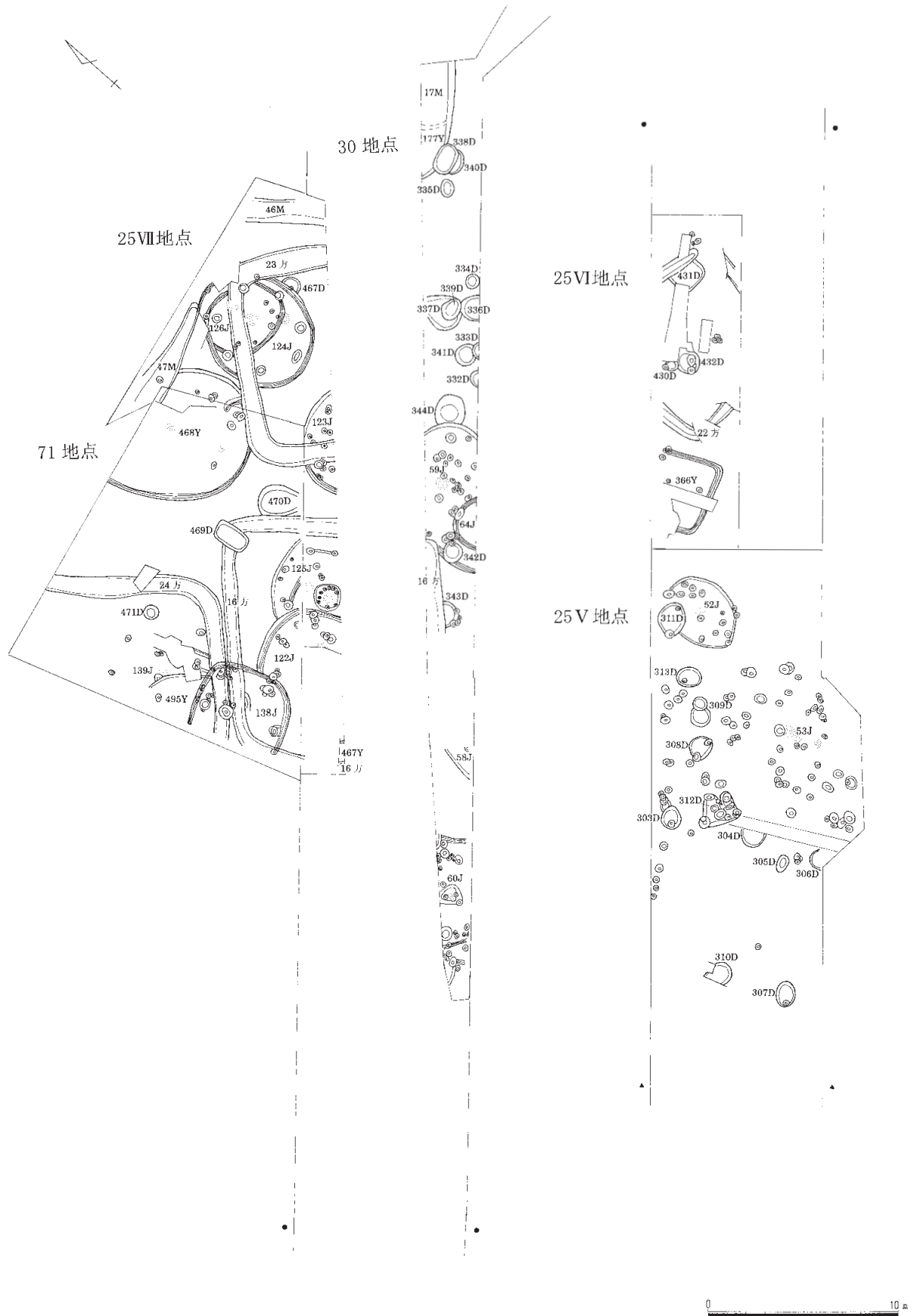
調査対象地 志木市幸町二丁目3077番地 道路予定地 面積 109.3㎡

検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒

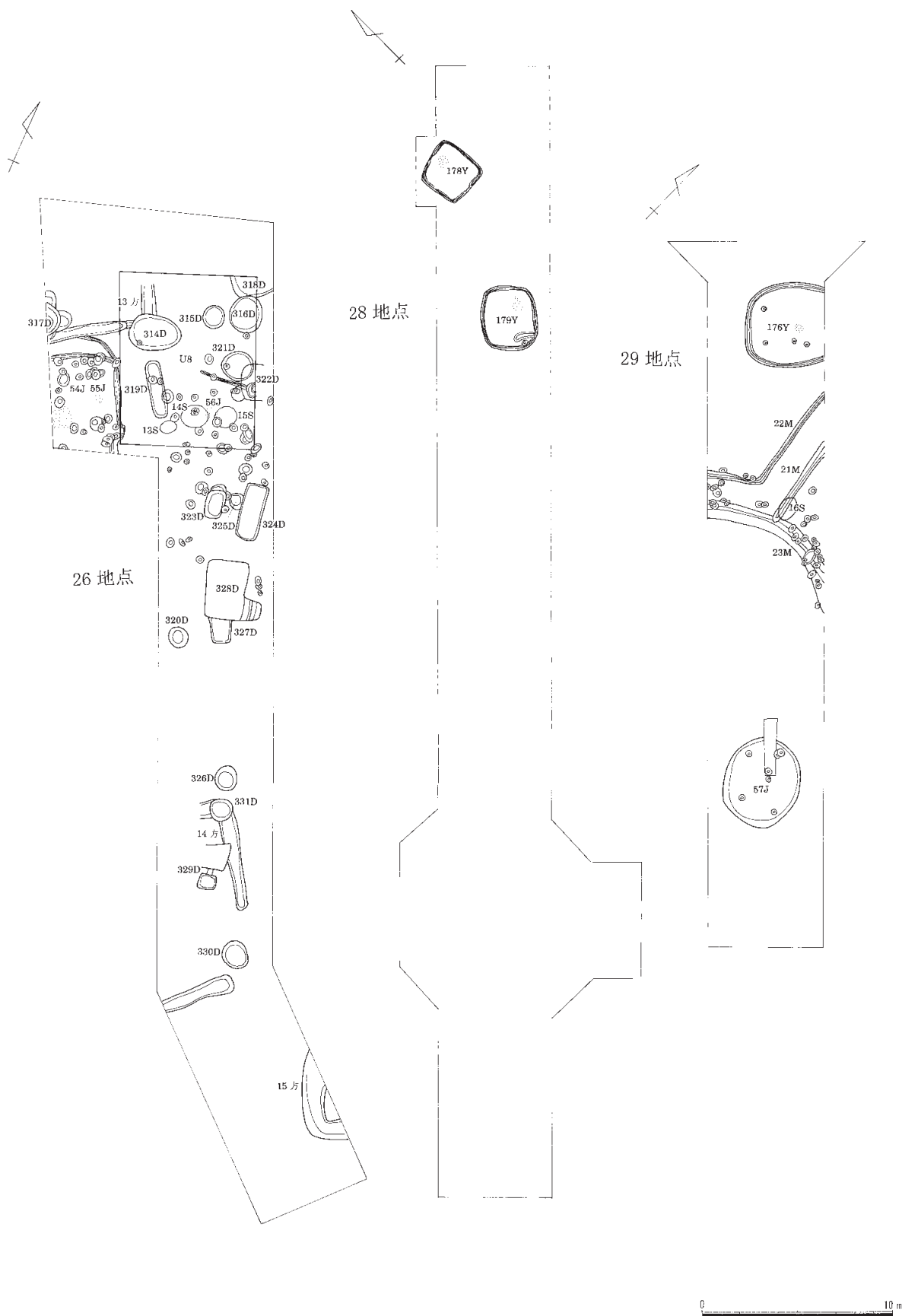
第50 I 地点

発掘調査期間 平成13年11月28日～12月19日

調査対象地 志木市幸町二丁目3041-1番地 道路予定地 面積 113.44㎡



第17図 遺構分布図13 (1/300)



第18図 遺構分布図14 (1/300)

検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒
近世 井戸跡1基

第49Ⅱ地点

発掘調査期間 平成13年11月30日～12月12日
調査対象地 志木市幸町二丁目3075番地 道路予定地 面積 84.92㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 土坑 1基

第37Ⅲ地点

発掘調査期間 平成13年12月5日
調査対象地 志木市幸町三丁目3204-1番地 道路予定地 面積 80.16㎡
検出された主な遺構 なし

第51地点

発掘調査期間 平成13年12月12～18日
調査対象地 志木市幸町二丁目3026-1番地 道路予定地 面積 81.56㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒

第42Ⅰ地点

発掘調査期間 平成13年12月17・18日
調査対象地 志木市幸町三丁目3206-1番地他 道路予定地 面積 92.78㎡
検出された主な遺構 なし

第50Ⅱ地点

発掘調査期間 平成14年1月15～22日
調査対象地 志木市幸町二丁目3041-4番地 道路予定地 面積 28.61㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒

第52地点

発掘調査期間 平成14年1月15・16日
調査対象地 志木市幸町二丁目3074-1番地 道路予定地 面積 107.22㎡
検出された主な遺構 なし

第40Ⅲ地点

発掘調査期間 平成14年1月16～31日
調査対象地 志木市幸町三丁目3237番 道路予定地 面積 131.89㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡2軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡4軒

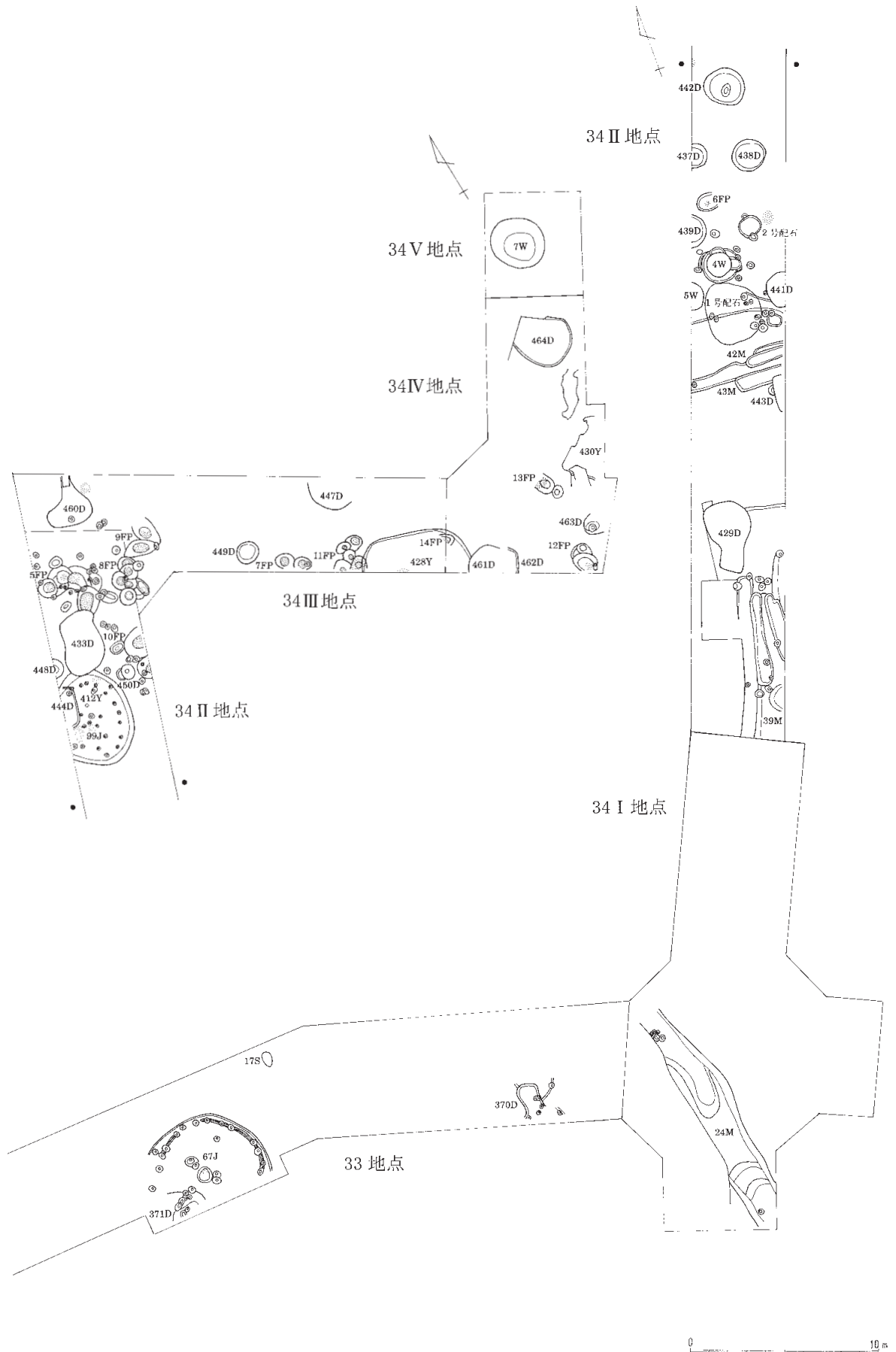
第53地点

発掘調査期間 平成14年1月18日
調査対象地 志木市幸町二丁目3026-2番地 道路予定地 面積 25.3㎡
検出された主な遺構 なし

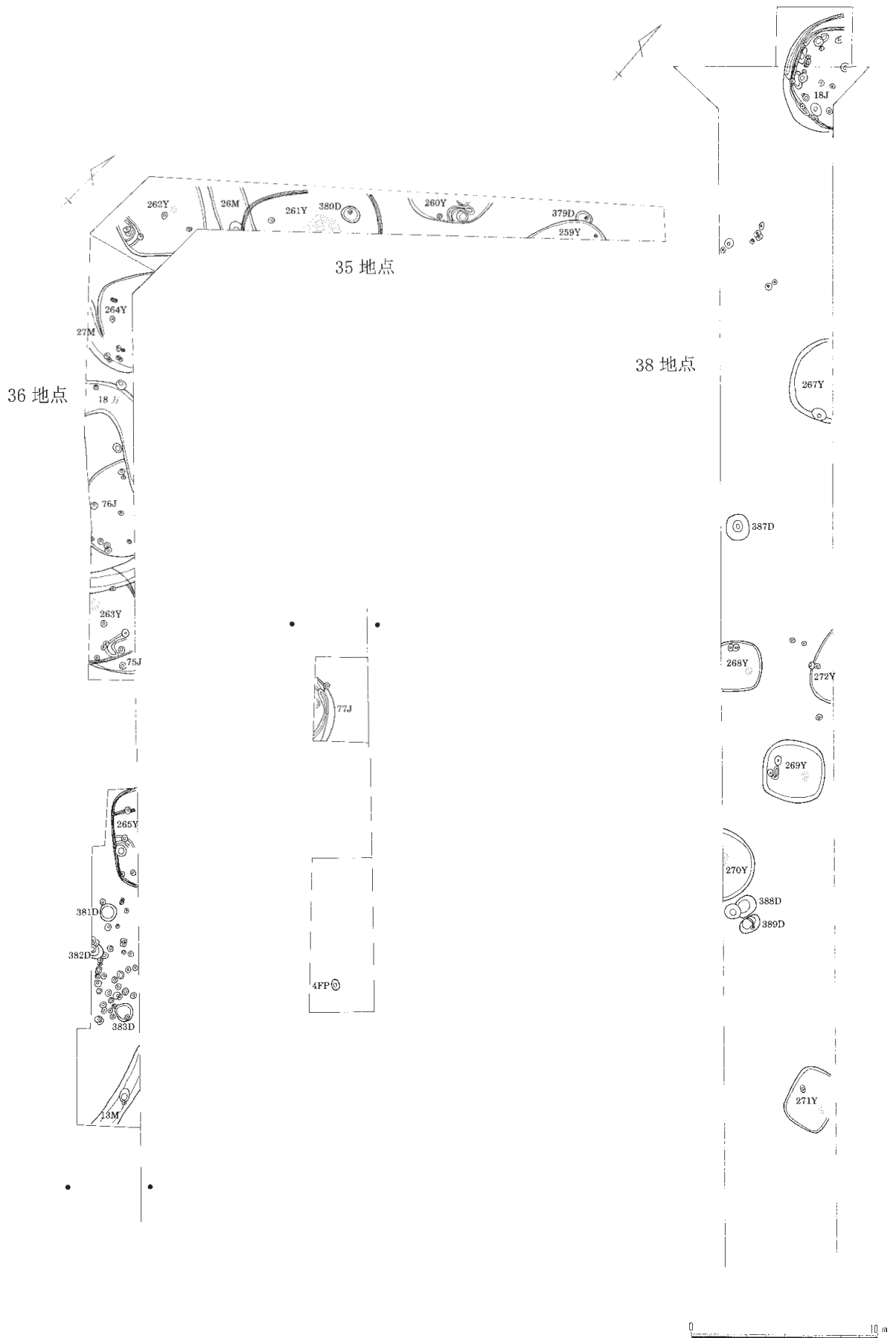
第54地点

発掘調査期間 平成14年1月18日
調査対象地 志木市幸町二丁目3027番地他 道路予定地 面積 47.71㎡
検出された主な遺構 なし

第42Ⅱ地点



第19図 遺構分布図15 (1/300)



第20図 遺構分布図16 (1/300)

第1章 発掘調査の概要

発掘調査期間 平成14年1月28日～2月7日
調査対象地 志木市幸町三丁目3212—1番地他 道路予定地 面積 165.93㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡4軒

第44Ⅰ地点

発掘調査期間 平成14年2月15日
調査対象地 志木市幸町三丁目3139—1番地他 道路予定地 面積 595.08㎡
検出された主な遺構 なし

第47Ⅱ地点

発掘調査期間 平成14年3月7～12日
調査対象地 志木市幸町二丁目3018—7番地他 道路予定地 面積 139.4㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒
方形周溝墓1基

第12Ⅱ地点

発掘調査期間 平成14年3月14～30日
調査対象地 志木市幸町三丁目3110—1番地他 保留地 面積 487㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡10軒
方形周溝墓1基

平成14年度

第55地点

発掘調査期間 平成14年6月4・5日
調査対象地 志木市幸町四丁目3401—6番地他 道路予定地 面積 193.79㎡
検出された主な遺構 なし

第5Ⅱ地点

発掘調査期間 平成14年6月5日～7月25日
調査対象地 志木市幸町三丁目3100—1番地他 道路予定地 面積 204.82㎡
検出された主な遺構 旧石器時代 石器集中地点2ヵ所
縄文時代前期 土坑1基
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡12軒

第44Ⅱ地点

発掘調査期間 平成14年6月19日
調査対象地 志木市幸町三丁目3173—2番地他 道路予定地 面積 550.48㎡
検出された主な遺構 なし

第45Ⅱ地点

発掘調査期間 平成14年6月19日
調査対象地 志木市幸町三丁目3176—1番地他 道路予定地 面積 168.95㎡
検出された主な遺構 なし

第34Ⅱ地点

発掘調査期間 平成14年7月9日～8月26日、9月18日～平成15年1月24日
調査対象地 志木市幸町三丁目3037番地他 道路予定地 面積 271.41㎡

検出された主な遺構 縄文時代早期 炉穴 3 基
 後期 住居跡 1 軒
 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 1 軒
 近世 井戸跡 2 基
 地下式坑 4 基

第25VI地点

発掘調査期間 平成14年 7月30日～8月8日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3152-2番地他 道路予定地 面積 213.7㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 1 軒
 方形周溝墓 1 基

第56 I 地点

発掘調査期間 平成14年 8月5～13日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3066番地 道路予定地 面積 187.01㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 1 軒
 溝跡 1 条

第57地点

発掘調査期間 平成14年 8月20日～9月5日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3018-1番地他 道路予定地 面積 312.55㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 5 軒
 溝跡 1 条

第40IV地点

発掘調査期間 平成14年 9月2～5日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3224番地 道路予定地 面積 41.3㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 2 軒

第41 II 地点

発掘調査期間 平成14年 9月3～18日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3238番地他 道路予定地 面積 395.27㎡
 検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡 1 軒

第58地点

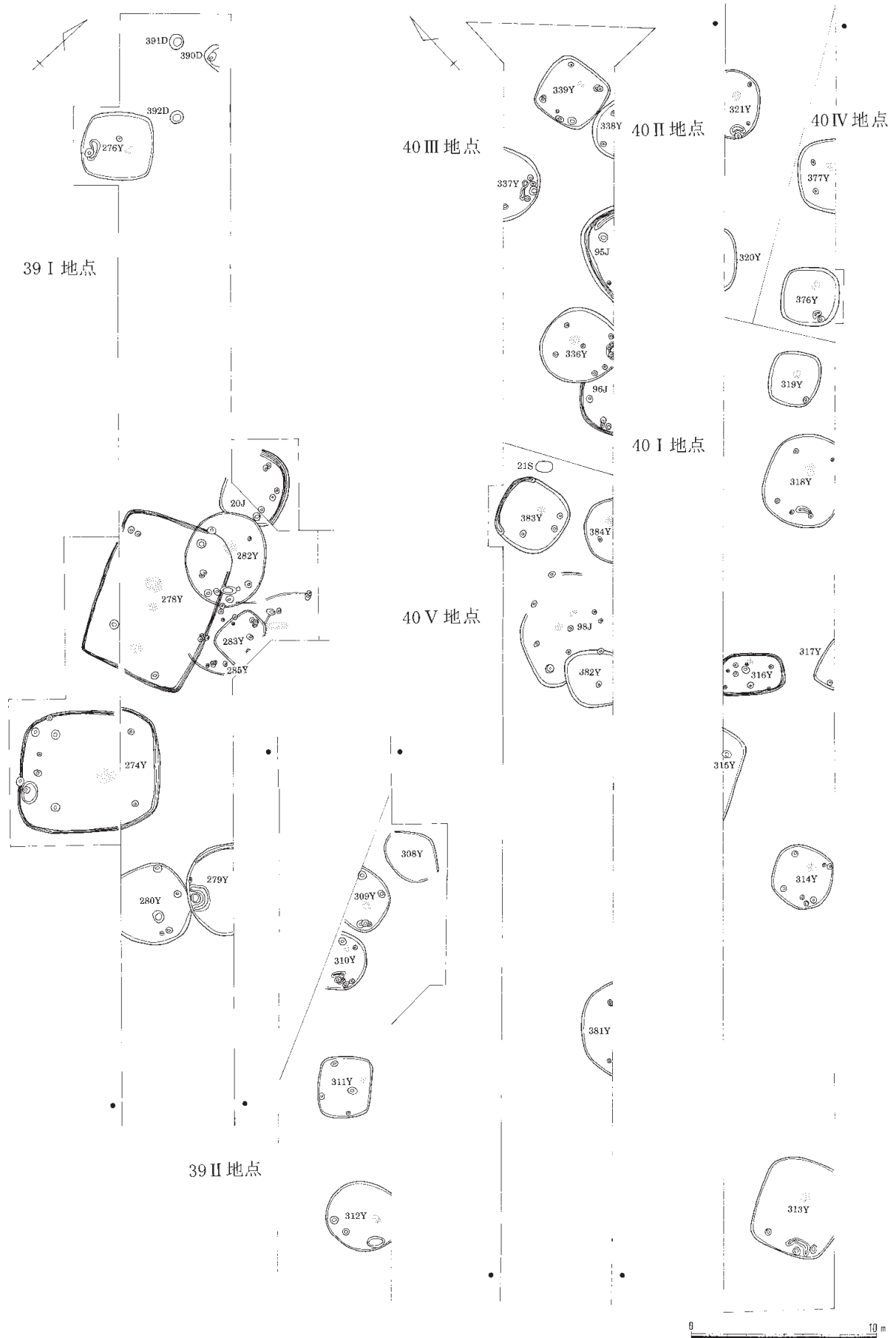
発掘調査期間 平成14年 9月4・5日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3018-1番地他 道路予定地 面積 90.54㎡
 検出された主な遺構 なし

第59 I 地点

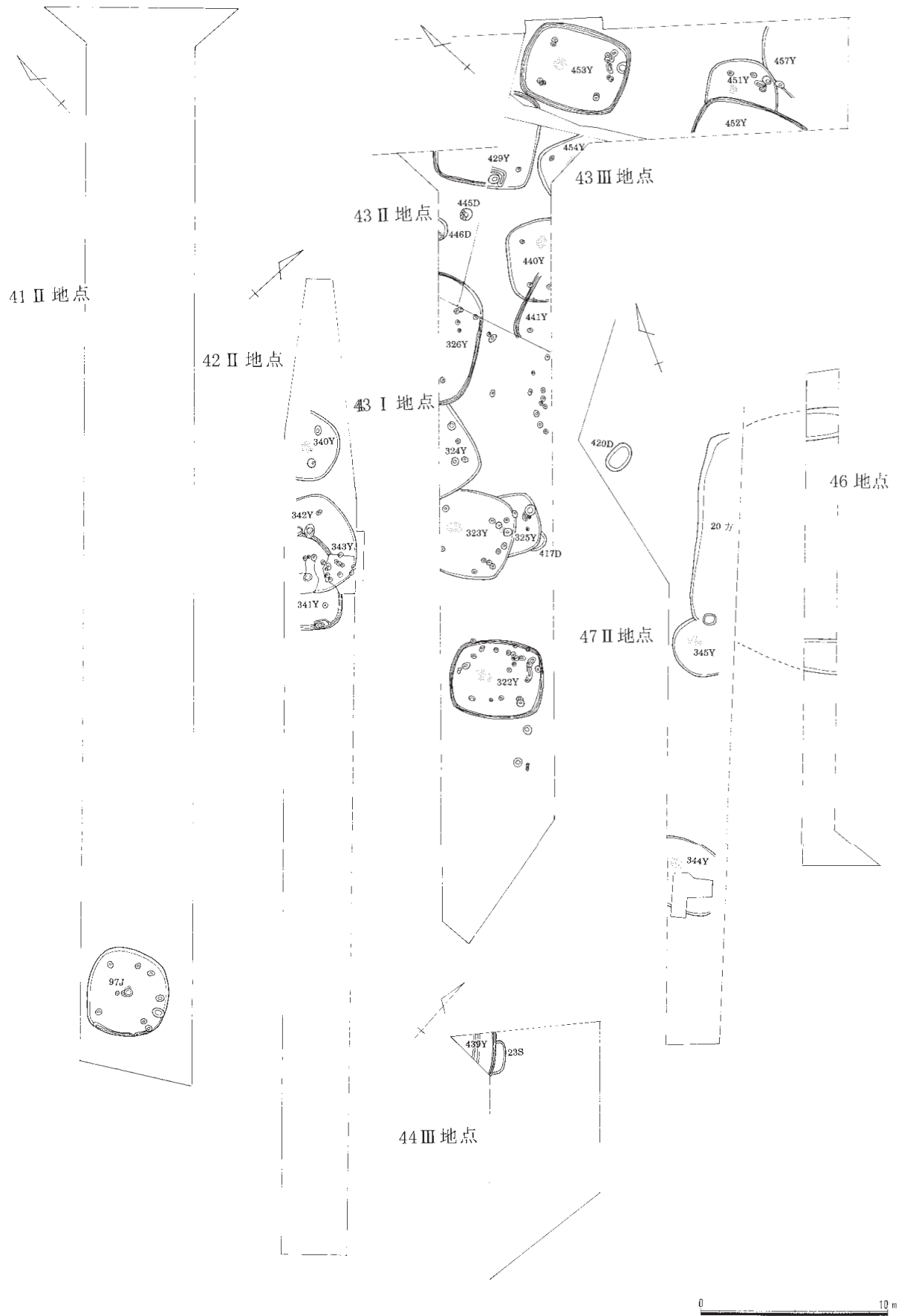
発掘調査期間 平成14年 9月5～12日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3022-1番地他 道路予定地 面積 139.91㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 3 軒

第59 II 地点

発掘調査期間 平成14年 9月10・11日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3024-7番地他 道路予定地 面積 82.69㎡
 検出された主な遺構 なし



第21図 遺構分布図17 (1/300)



第22図 遺構分布図18 (1/300)

第1章 発掘調査の概要

第40Ⅴ地点

発掘調査期間	平成14年9月12～20日
調査対象地	志木市幸町三丁目3226番地 道路予定地 面積 226.82㎡
検出された主な遺構	縄文時代中期 住居跡1軒 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡3軒

第59Ⅲ地点

発掘調査期間	平成14年9月27日
調査対象地	志木市幸町二丁目2901—6番地他 道路予定地 面積 91.97㎡
検出された主な遺構	なし

第41Ⅲ地点

発掘調査期間	平成14年9月18日
調査対象地	志木市幸町三丁目3222番地他 道路予定地 面積 137.85㎡
検出された主な遺構	なし

第60地点

発掘調査期間	平成14年10月7～10日
調査対象地	志木市幸町三丁目3140—1番地他 道路予定地 面積 95.18㎡
検出された主な遺構	弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒

第74地点

発掘調査期間	平成14年11月5日～12月27日
調査対象地	志木市幸町三丁目3098番地他 擁壁 面積 181.8㎡
検出された主な遺構	弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡4軒 古墳時代後期 住居跡2軒

第61地点

発掘調査期間	平成14年11月15～19日
調査対象地	志木市幸町二丁目3017—1番地他 道路予定地 面積 268.93㎡
検出された主な遺構	なし

第42Ⅲ地点

発掘調査期間	平成14年11月18日
調査対象地	志木市幸町三丁目3202—3番地他 道路予定地 面積 414.48㎡
検出された主な遺構	なし

第10Ⅲ地点

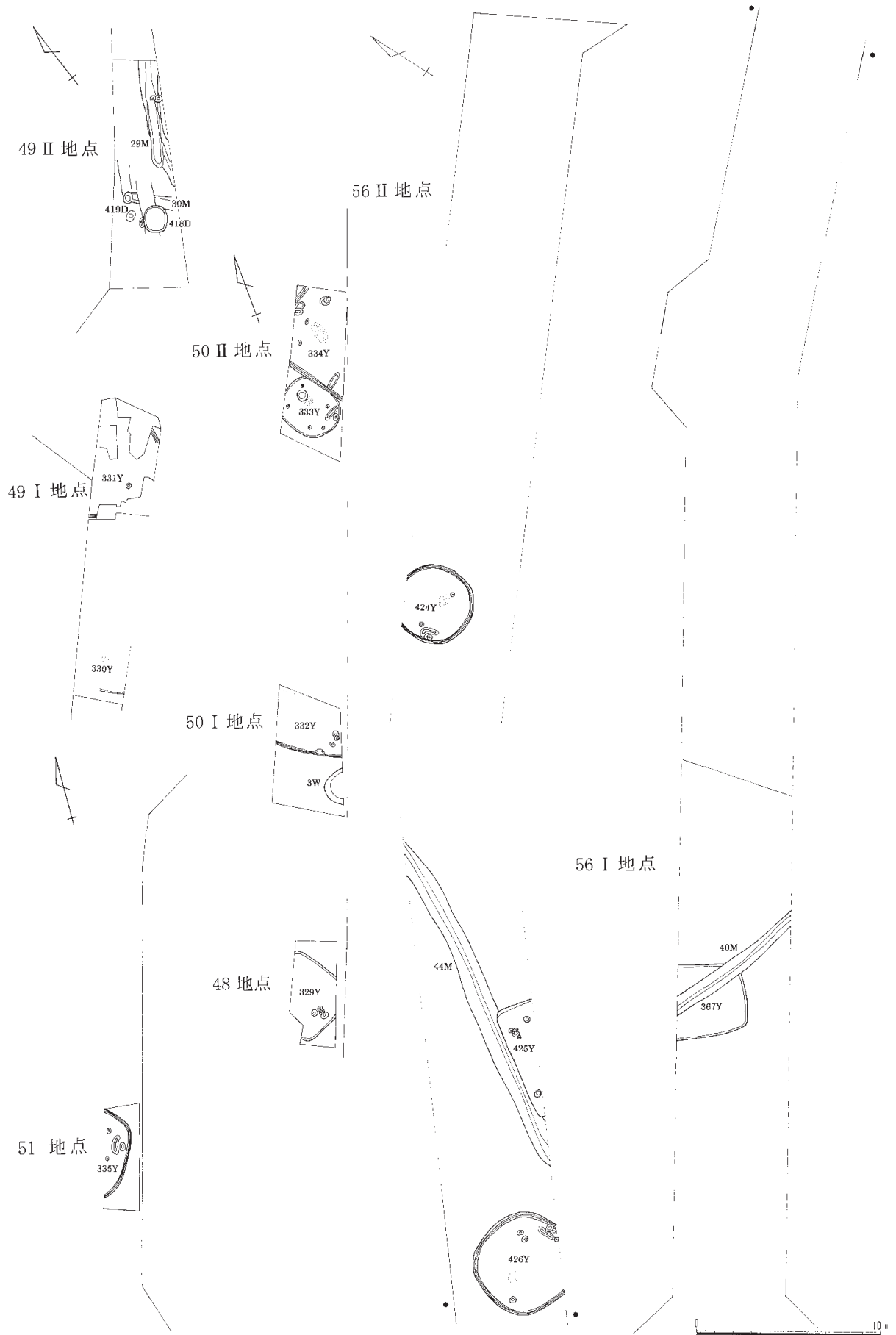
発掘調査期間	平成14年12月10～12日
調査対象地	志木市幸町三丁目3111番地 道路予定地 面積 73.26㎡
検出された主な遺構	弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡3軒

第62地点

発掘調査期間	平成14年12月18日
調査対象地	志木市幸町二丁目2899—5番地他 道路予定地 面積 123.48㎡
検出された主な遺構	なし

第63地点

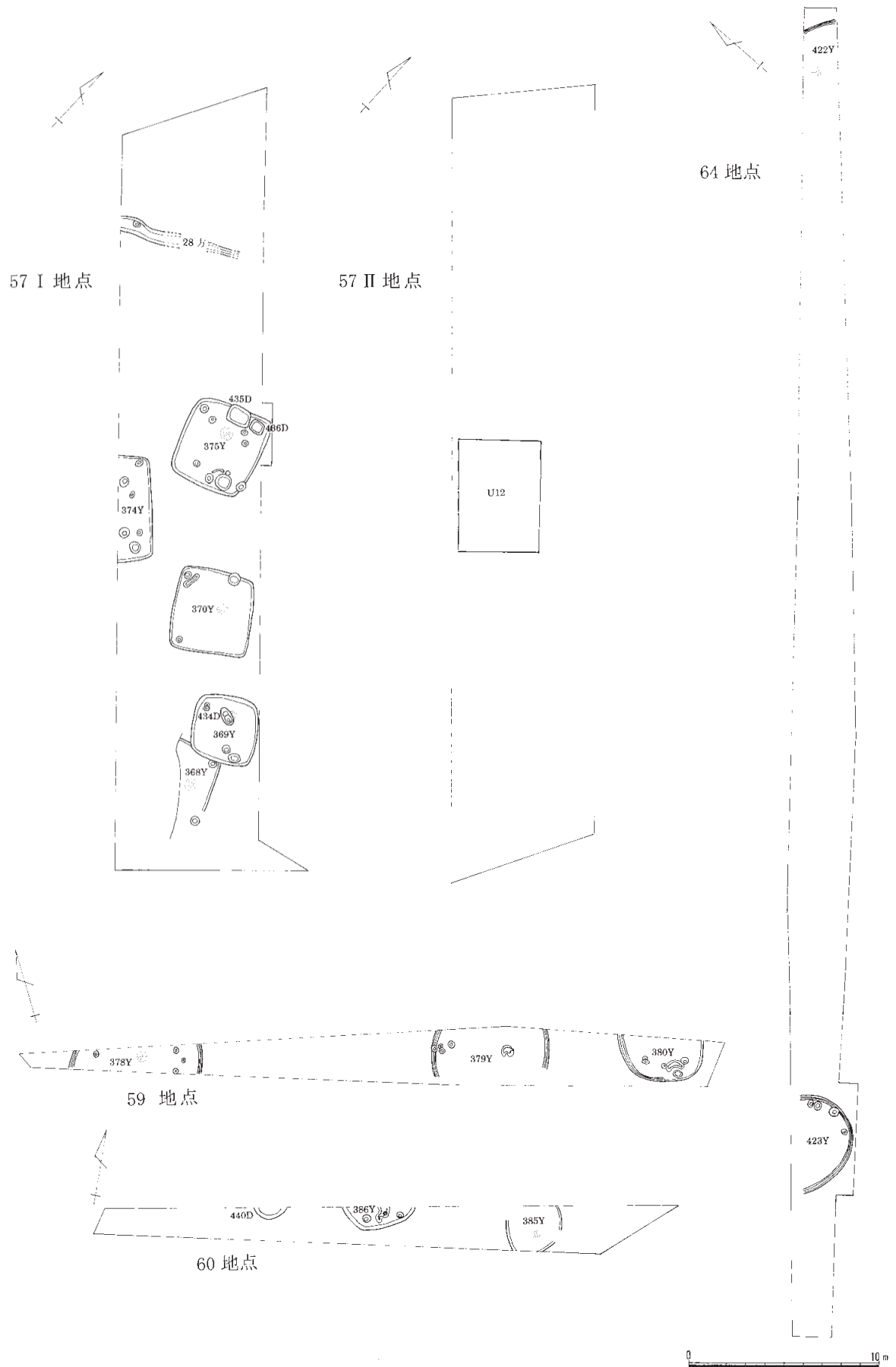
発掘調査期間	平成14年12月18日
--------	-------------



第23図 遺構分布図19 (1/300)

第1章 発掘調査の概要

調査対象地	志木市幸町二丁目3046—1番地他 道路予定地 面積 77.62㎡
検出された主な遺構	なし
第64地点	
発掘調査期間	平成14年12月18日～平成15年1月17日
調査対象地	志木市幸町二丁目3073—1番地他 道路予定地 面積 205.58㎡
検出された主な遺構	弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒
第56Ⅱ地点	
発掘調査期間	平成15年1月10日～2月10日
調査対象地	志木市幸町二丁目3048番地他 道路予定地 面積 607.1㎡
検出された主な遺構	弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡3軒 溝跡1条
第65Ⅰ地点	
発掘調査期間	平成15年1月14日～2月10日
調査対象地	志木市幸町二丁目3071番地 道路予定地 面積 102.62㎡
検出された主な遺構	弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒
第43Ⅱ地点	
発掘調査期間	平成15年2月3～7日
調査対象地	志木市幸町三丁目3164番地 道路予定地 面積 65.05㎡
検出された主な遺構	弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒
第37Ⅲ地点	
発掘調査期間	平成15年2月6・7日
調査対象地	志木市幸町三丁目3204—2番地 道路予定地 面積 74.57㎡
検出された主な遺構	なし
第34Ⅲ地点	
発掘調査期間	平成15年2月21日～3月13日
調査対象地	志木市幸町二丁目3037番地他 道路予定地 面積 89.05㎡
検出された主な遺構	縄文時代早期 炉穴4基 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡1軒 近世 地下式坑3基
第34Ⅳ地点	
発掘調査期間	平成15年2月24日～3月19日
調査対象地	志木市幸町二丁目3038—1番地 道路予定地 面積 103.41㎡
検出された主な遺構	近世 地下式坑2基
第66地点	
発掘調査期間	平成15年2月26日
調査対象地	志木市幸町二丁目3052番地他 道路予定地 面積 465.1㎡
検出された主な遺構	なし
第67Ⅰ地点	
発掘調査期間	平成15年3月11～31日
調査対象地	志木市幸町三丁目3213—1番地他 保留地 面積 922㎡



第24図 遺構分布図20 (1/300)

第1章 発掘調査の概要

検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 8 軒

平成15年度

第43Ⅲ地点

発掘調査期間 平成15年 5月22日～6月27日
調査対象地 志木市幸町三丁目3211—1番地他 道路予定地 面積 126.4㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 8 軒

第44Ⅲ地点

発掘調査期間 平成15年 5月22～28日
調査対象地 志木市幸町三丁目3137—4番地他 道路予定地 面積 57.1㎡
検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 1 軒

第67Ⅱ地点

発掘調査期間 平成15年 5月22日～8月25日
調査対象地 志木市幸町三丁目3163番地他 保留地 面積 2,057㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡 5 軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡48軒
平安時代 住居跡 1 軒

第25Ⅶ地点

発掘調査期間 平成15年 6月24日～7月26日
調査対象地 志木市幸町三丁目3155—1番地 道路予定地 面積 135㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡 5 軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 1 軒

第23Ⅱ地点

発掘調査期間 平成15年 7月29日～8月11日
調査対象地 志木市幸町三丁目3158—1番地 道路予定地 面積 52.7㎡
検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡 1 軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 1 軒

第57Ⅱ地点

発掘調査期間 平成15年 9月1～16日
調査対象地 志木市幸町二丁目3016—2番地他 道路予定地 面積 322.8㎡
検出された主な遺構 旧石器時代 石器集中地点 1 ヶ所

第34Ⅳ地点

発掘調査期間 平成15年12月2～8日
調査対象地 志木市幸町二丁目3030—4番地他 道路予定地 面積 38.7㎡
検出された主な遺構 近世 井戸跡 1 基

第68地点

発掘調査期間 平成15年12月3・4日
調査対象地 志木市幸町二丁目3075番地 道路予定地 面積 54.9㎡
検出された主な遺構 なし

第5Ⅲ地点

発掘調査期間 平成15年12月4・5、18～25日、平成16年1月7～27日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3100—3番地他 道路予定地 面積 99.7㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡8軒

第71地点

発掘調査期間 平成15年12月6～25日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3156—1番地 保留地 面積 208.83㎡
 検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡軒4軒
 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒
 方形周溝墓2基

第69Ⅰ地点

発掘調査期間 平成16年1月22日～2月6日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3025—12番地他 道路予定地 面積 238.2㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡5軒

第70地点

発掘調査期間 平成16年1月14～23日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3126—1番地 道路予定地 面積 52.8㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 方形周溝墓2基

第65Ⅱ地点

発掘調査期間 平成16年1月29日～2月9日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3070—1番地他 道路予定地 面積 110.7㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒

第69Ⅱ地点

発掘調査期間 平成16年3月22～31日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3026—1番地他 道路予定地 面積120㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡2軒

平成16年度

第65Ⅲ地点

発掘調査期間 平成16年5月27日～6月9日
 調査対象地 志木市幸町二丁目3070—1番地他 道路予定地 面積 114㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡3軒

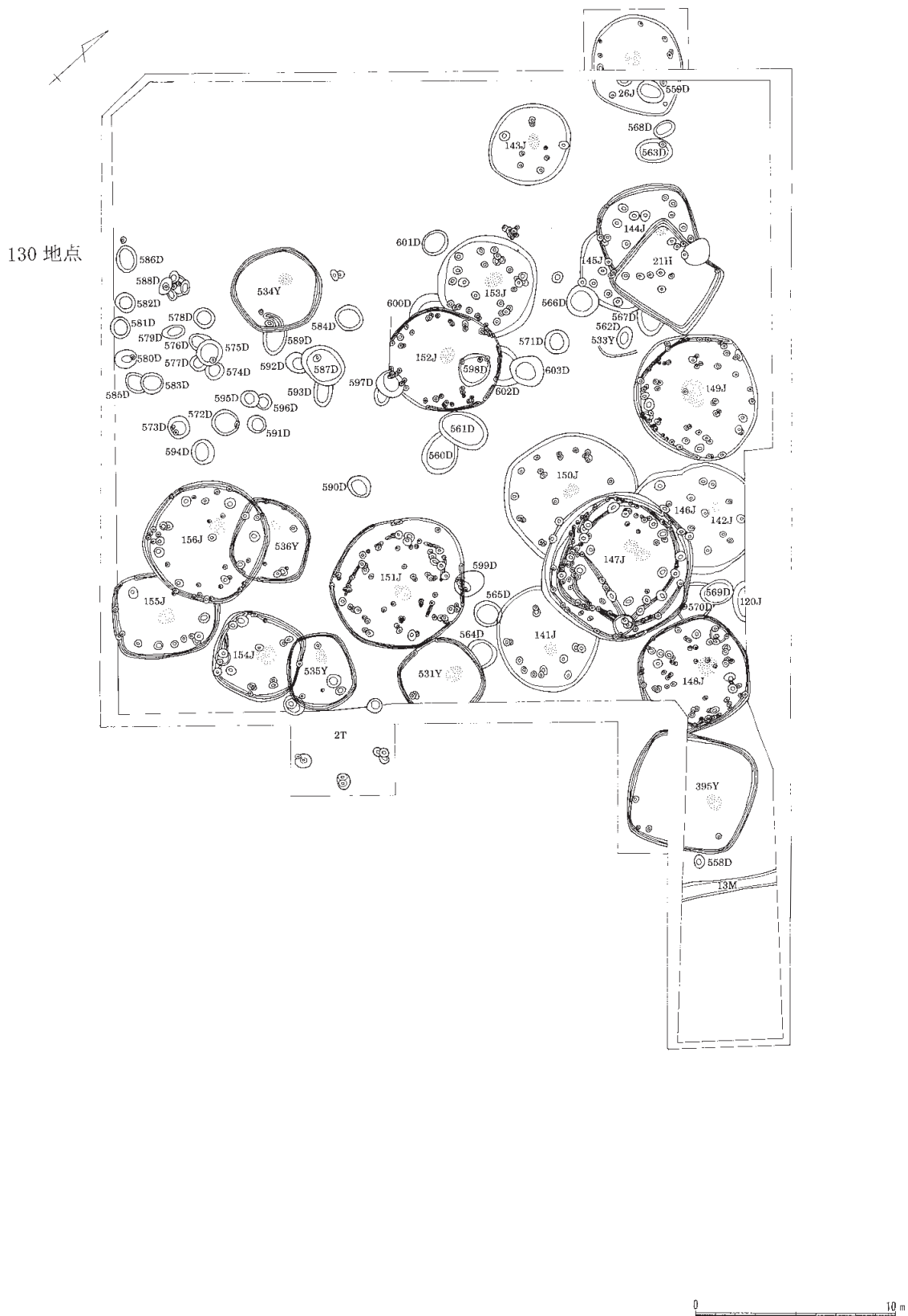
第5Ⅳ地点

発掘調査期間 平成17年2月14～18日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3102—1番地 道路予定地 面積 86㎡
 検出された主な遺構 弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡3軒

平成18年度

第130地点

発掘調査期間 平成18年10月2日～平成19年1月12日
 調査対象地 志木市幸町三丁目3222番地他 公園予定地 面積 1,203㎡



第26図 遺構分布図22 (1/300)

検出された主な遺構 縄文時代中期 住居跡18軒
弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡 6 軒
奈良時代 住居跡 1 軒

第2章 旧石器時代の遺構と遺物

第1節 石器集中地点

西原大塚遺跡は、標高13～18mの台地上に位置する。台地は北西方向に傾斜しているが、大きな起伏は認められない。

本遺跡の基本的な層序は、武蔵野台地のそれと概ね一致するが、ロームのソフト化が著しく、第1黒色帯が検出できない地点もみられる。以下、層序を述べると、

I層 表土。耕作土が大部分である。標高の高い部分では30～40cmと浅い。

II層 褐色土層。

III層 黄褐色軟質ローム層。ソフト化が著しく、第2黒色帯に達する地点もある。

IV層 黄褐色硬質ローム層。

V層 暗褐色硬質ローム層。第1黒色帯。ソフト化により、検出できない地点もある。

VI層 黄褐色硬質ローム層。3号石器集中地点におけるテフラの分析では、この層中にバブル型平板状の火山ガラスのピークがみられる。

VII層 暗褐色硬質ローム層。第2黒色帯上部。VIII層より明るい。

VIII層 暗褐色硬質ローム層。第2黒色帯下部。

IX層 黄褐色硬質ローム層。

である。

3号石器集中地点（第27・28図）

〔位置〕 9地点。

〔構造〕 石器は東西300cm・南北400cmの範囲に散漫に分布する。垂直分布は60cm前後の幅をもちIV層からVII層に及ぶが、VI層下位に集中する。

石器集中部分の北側に、10cm前後の礫が2ヵ所にまとまって検出された。垂直分布では全てVII層上位に限定され、配置されたような状態である。礫の多くは被熱のため、多くは赤化していて破碎された状態である。

IX層上面には炭化物粒子が顕著に認められ、石器集中部分の北側及び南側に集中し、特に南側では密集する部分がある。炭化物粒子密集部分の中心部には、65×50cm・深さ20cmの土坑状の掘り込みが検出された。覆土は暗褐色ロームであり、この土坑状の掘り込みが第2黒色帯からなされていたことが想定される。

石器集中部分・礫集中部分・炭化物粒子集中部分・土坑状の掘り込みは層位的に相違がみられ、それぞれの関係については不明である。

3号石器集中地点出土遺物（第29・30図）

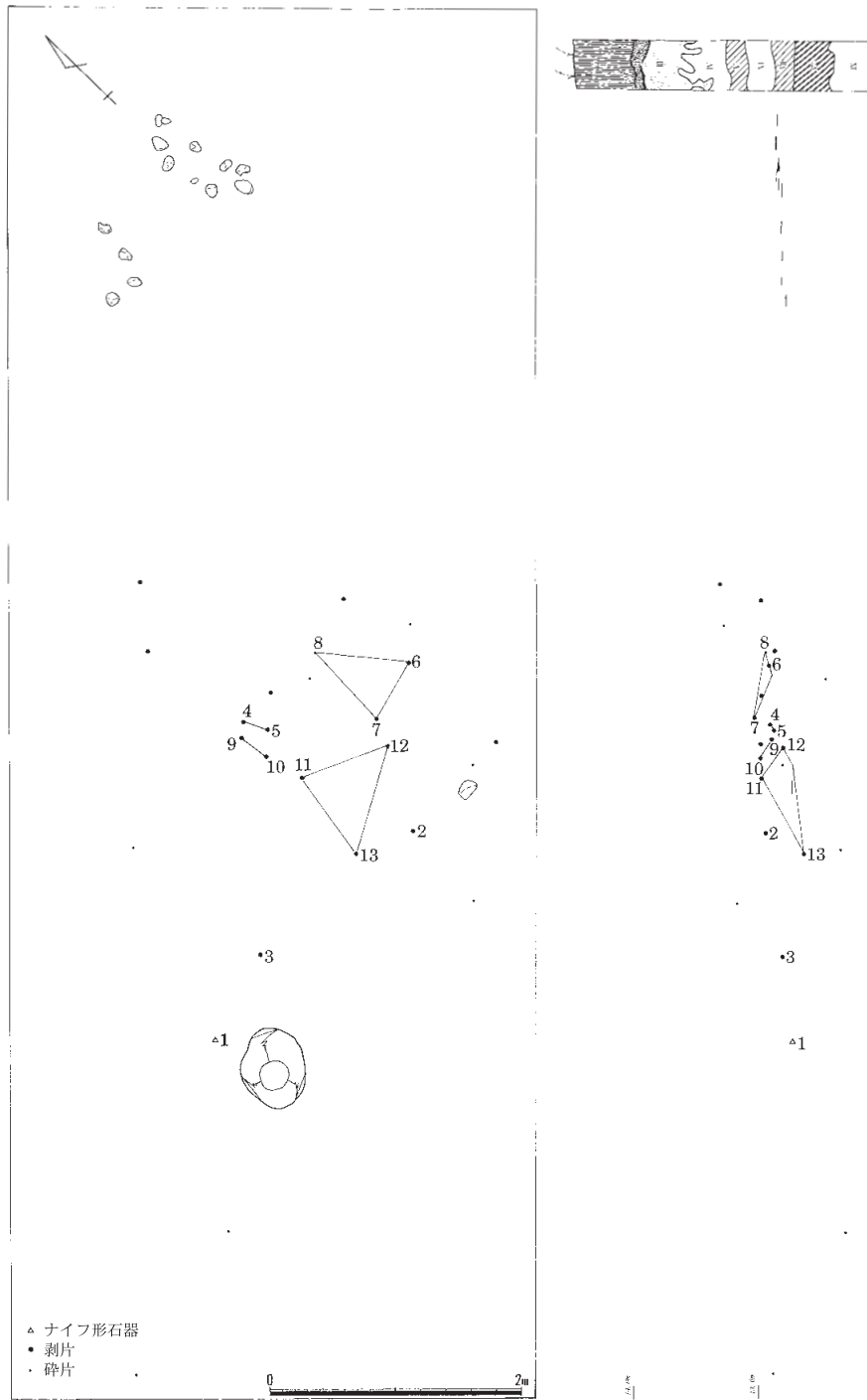
ナイフ形石器1点・剥片17点・碎片5点・礫14点が出土した。石器の石材は、珪岩6点・粘板岩16点・黒曜石1点からなり、粘板岩に関しては同母岩の可能性が大きい。

ナイフ形石器（1）

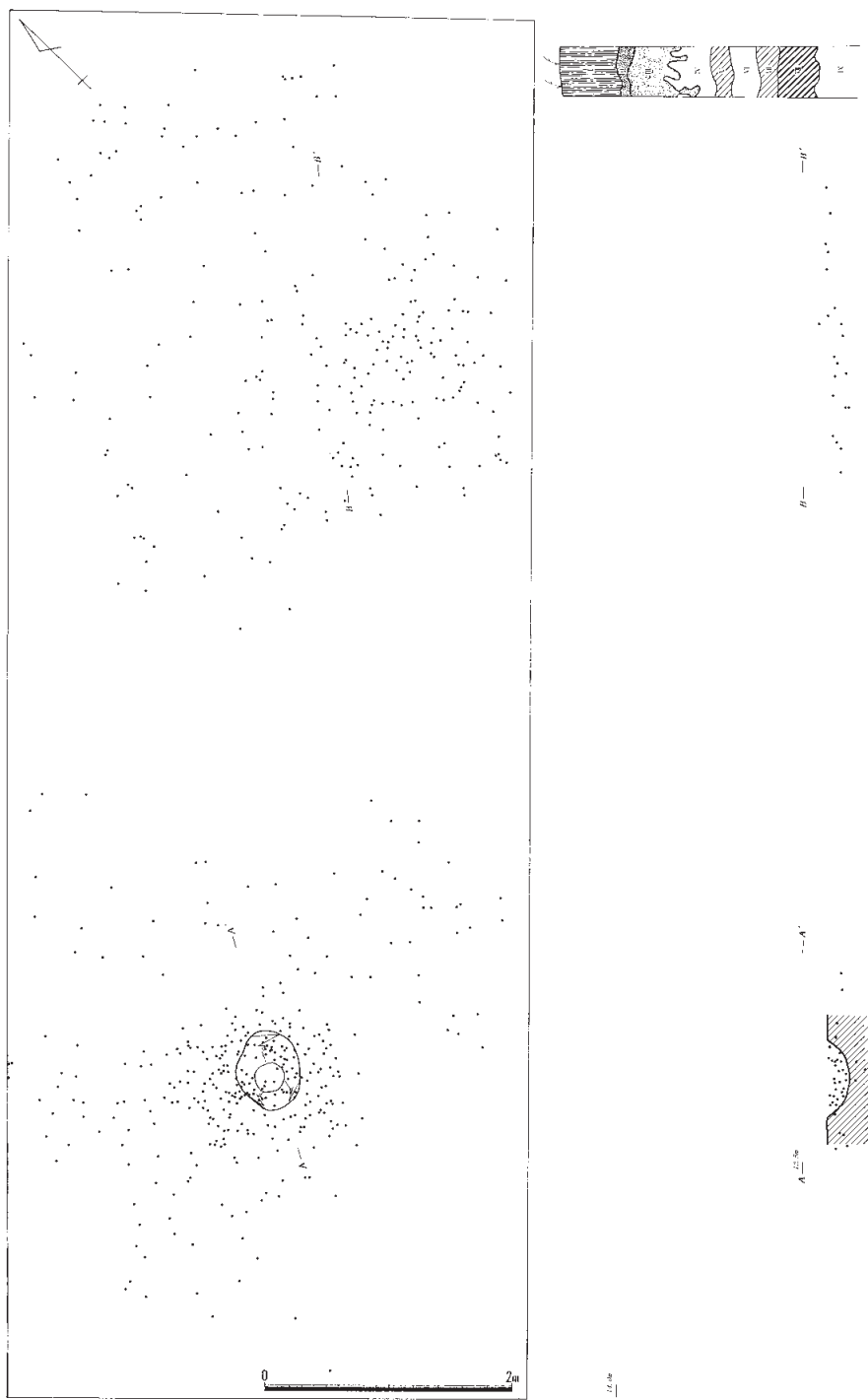
縦長剥片の打面側を石器の基部とする。左側縁に刃潰し加工が加えられる。右側縁には微細な刃こぼれが認められる。珪岩製。

剥片（2～13）

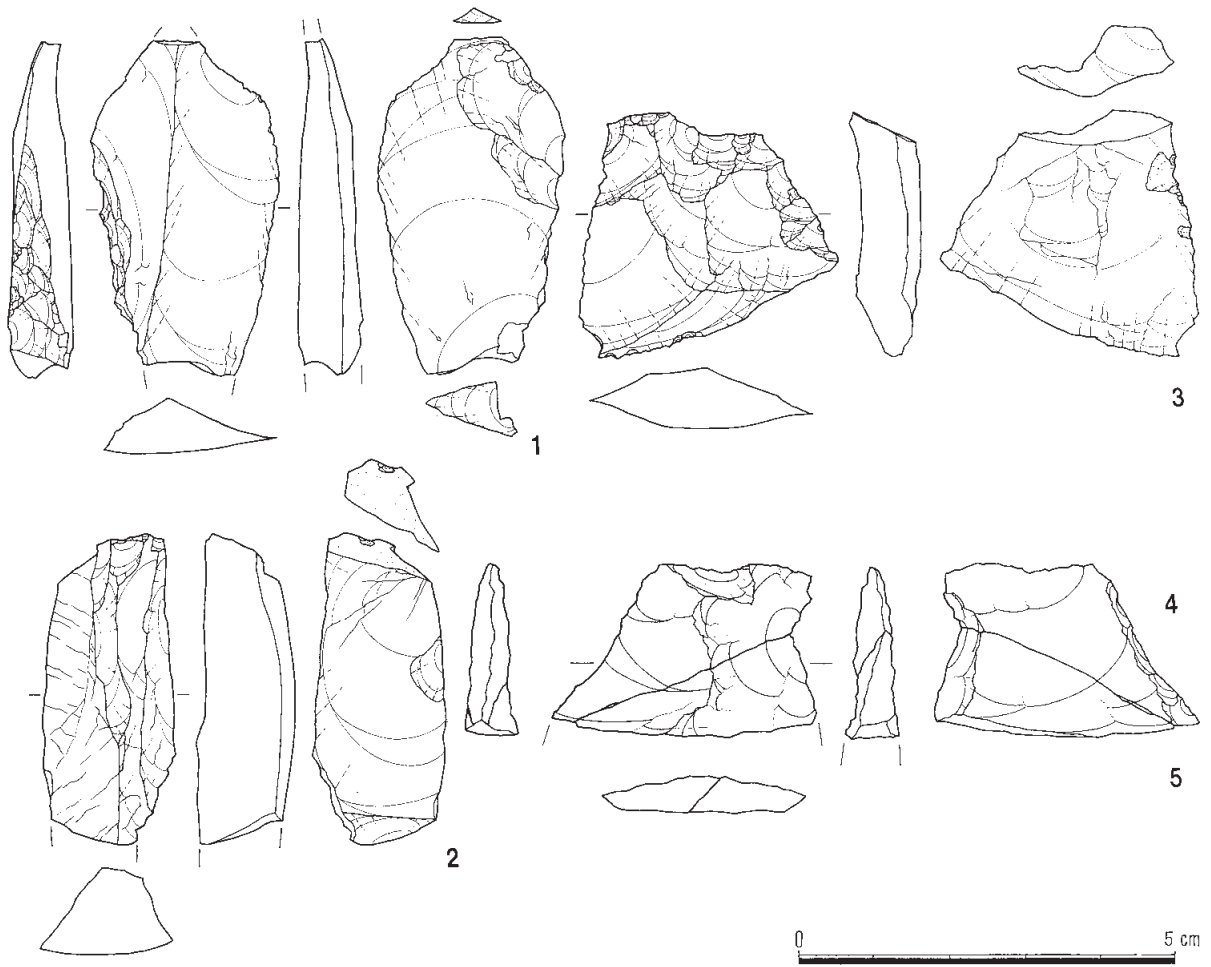
大部分が幅広ないし寸づまりで不定形なものが多い。2・3が珪岩、4～13は粘板岩製で同母岩と思われる。



第27図 3号石器集中地点 (1/60)



第28図 3号石器集中地点炭化物分布 (1/60)



第29图 3号石器集中地点出土遺物1 (1/1)

4号石器集中地点（第31図）

〔位置〕 11地点。

〔構造〕 石器は東西600cm・南北540cmの範囲に散漫に分布するが、西方向に伸びる可能性がある。垂直分布は40cm前後の幅をもちⅢ層からⅤ層に及ぶが、Ⅳ層下位に集中する。

4号石器集中地点出土遺物（第32図）

ナイフ形石器3点・尖頭器1点・錐1点・剥片8点・碎片49点・礫4点が出土した。礫は被熱のためか赤化していて、破碎された状態である。使用された石材は、黒曜石49点・安山岩12点・硬砂岩1点からなる。

ナイフ形石器（1～3）

1は縦長剥片の打面を石器の基部とした一側縁加工のナイフ形石器。左側縁に刃潰し加工が加えられる。安山岩製。

2は石器の先端1/3程を欠こうか。縦長剥片の打面側を石器の基部とする。両側縁に刃潰し加工が加えられる。黒曜石製。

3は石器の先端を欠く。幅広の剥片を縦位に用い、両側縁に刃潰し加工が加えられる。黒曜石製。

尖頭器（4）

分厚な横長剥片を素材とする。打面側を大きく削除してほぼ左右対称に仕上げる。表面は全面調整加工されるが、裏面は石器基部に僅かな加工が加えられるのみである。黒曜石製。

錐状石器（5）

分厚な縦長剥片を使用。剥片の先端に加工を加え鋭い尖頭部を作出する。基部は階段状の剥離で打面を取り去り薄く仕上げている。安山岩製。

剥片（6～8）

いずれも黒曜石製の縦長剥片。ナイフ形石器2点を含めて同母岩の可能性はある。

5号石器集中地点（第33図）

〔位置〕 12地点。

〔構造〕 Ⅸ層上位からの石器1点のみの出土である。

5号石器集中地点出土遺物（第34図）

ナイフ形石器（1）

縦長剥片の打面を石器の基部とする。左側縁基部と右側縁の一部に刃潰し加工が加えられる。左側縁には微細な刃こぼれが認められる。安山岩製。

6号石器集中地点（35図）

〔位置〕 22地点。

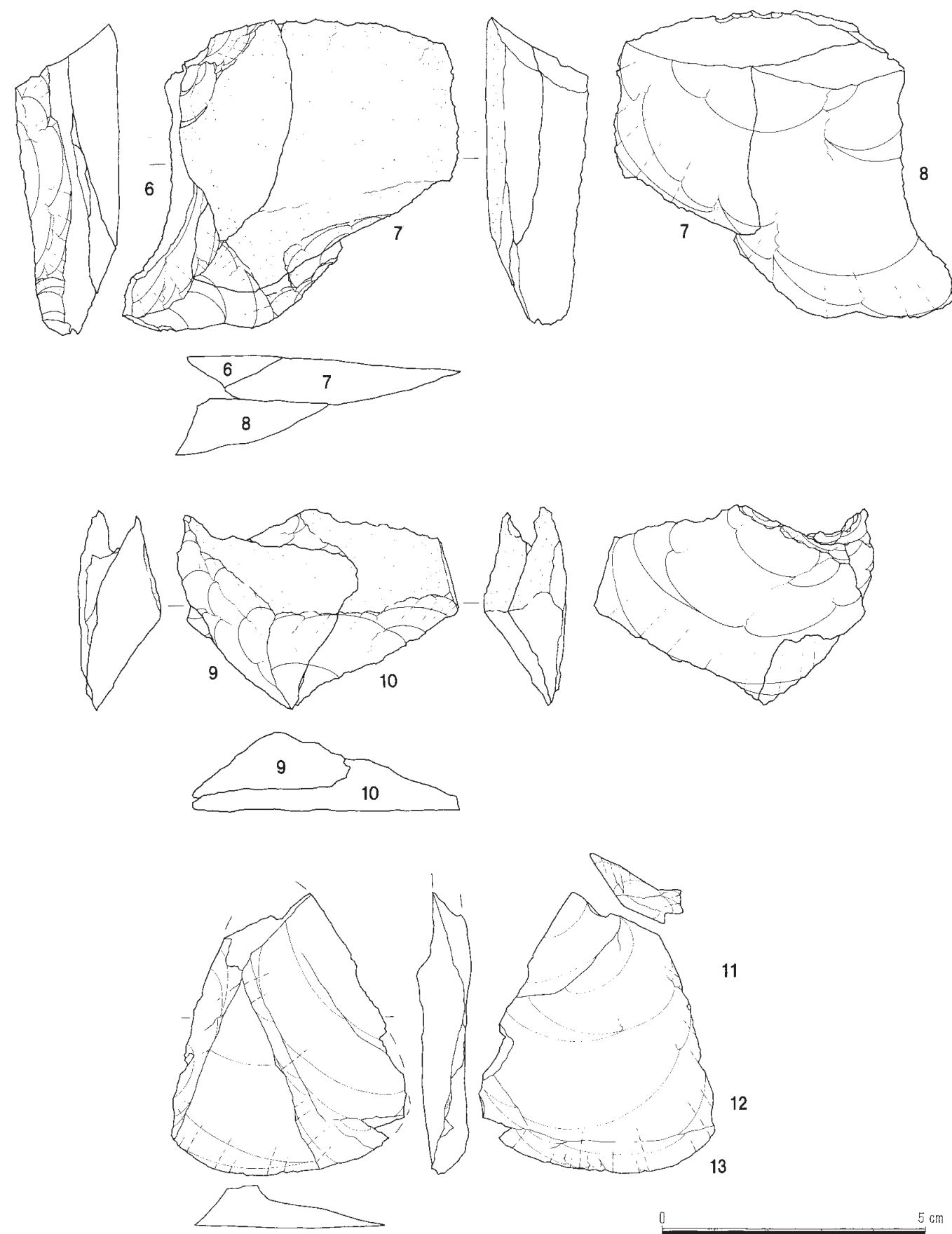
〔構造〕 石器は東西350cm・南北300cmの範囲に分布するが、調査区が狭小なため部分的な調査である。垂直分布は50cm前後の幅をもちⅣ層からⅥ層に及ぶがⅤ層中に集中する。

6号石器集中地点出土遺物（第36・37図）

ナイフ形石器1点・尖頭器2点・石核1点・剥片16点・碎片20点・礫8点が出土した。石器に使用された石材は、硅岩20点・頁岩12点・黒曜石8点からなる。

ナイフ形石器（1）

縦長剥片の基部を石器の先端とする。右側縁は斜断するように刃潰し加工を加えて、大きく打面を取り去る。左側縁は下端に刃潰し加工が加えられる。刃部には微細な刃こぼれがみられる。黒曜石製。



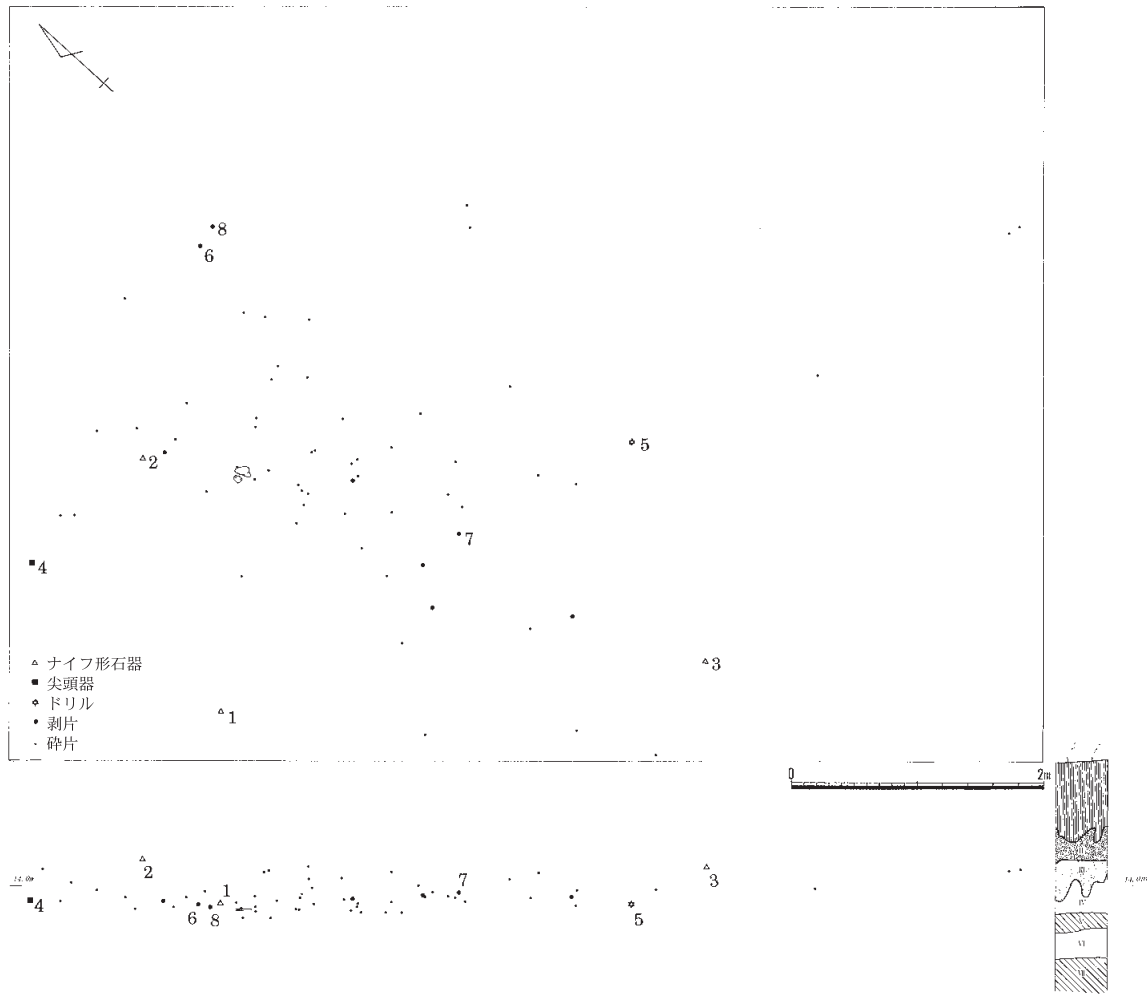
第30图 3号石器集中地点出土遗物2 (1/1)

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
1	欠								
2	ナイフ形石器	硅岩	4.45	2.5	0.85	8.45		VII層下部	1
3	剥片	硅岩	3.25	3.4	0.95	8.4	硅A	VII層上部	3
4	欠								
5	剥片	粘板岩	3.1	3.5	1.1	9.75	6 粘A	VII層上部	9
6	剥片	粘板岩	3.2	4.4	1.1	11.15	5 粘A	VI層上部	10
7	剥片	粘板岩	2.25	3.5	0.7	2.35	8 粘A	VI層下部	4
8	剥片	粘板岩					7 粘A	VII層上部	5
9	剥片	粘板岩	3.15	1.8	0.6	3.15	粘A	VI層上部	
10	剥片	粘板岩	4.2	4.1	1.5	11.1	16・24	VI層上部	11
11	剥片	硅岩	4.15	1.75	1.3	9.6	硅A	VI層上部	2
12	碎片	硅岩				0.45		V層下部	
13	剥片	粘板岩	2.9	1.8	0.5	3.35	粘A	VI層上部	
14	碎片	粘板岩				1.65	粘A	VII層上部	
15	欠								
16	剥片	粘板岩	1.6	3.9	0.35		10・24	VII層上部	12
17	剥片	粘板岩	4.9	4.7	0.85	23.6	18・20 粘A	VI層上部	7
18	剥片	粘板岩	2.8	1.8	0.8	5.1	17・20 粘A	VI層上部	6
19	碎片	硅岩				1.25		V層上部	
20	剥片	粘板岩	5.1	2.9	0.9	20.1	17・18 粘A	VI層下部	8
21	剥片	粘板岩	3.3	1.5	0.3	2.15	粘A	VI層上部	
22	剥片	粘板岩	2.1	2.2	0.45	2.3	粘A	VII層上部	
23	剥片	粘板岩	2.4	2.2	0.35	2.3	粘A	IV層下部	
24	剥片	粘板岩	2.5	3.7	0.35	7.3	10・16	VIII層上部	13
25	欠								
26	碎片	黒曜石				0.55		VIII層下部	
27	欠								
28	欠								
29	碎片	硅岩				0.75		VIII層下部	

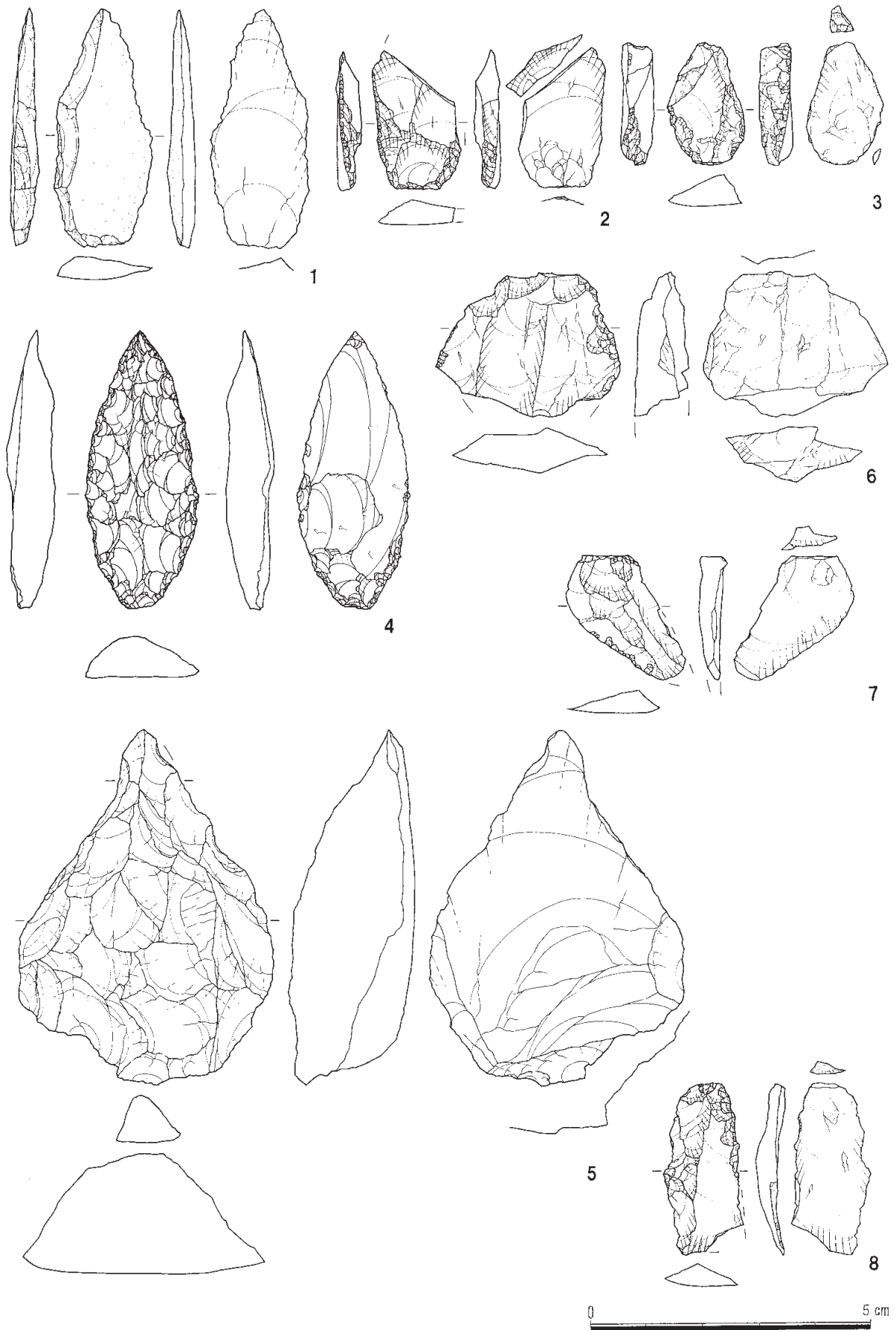
表2 3号石器集中地点石器計測表

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
A-1	礫	砂岩				750		VII層中部	
A-2	礫	砂岩				670		VII層上部	
A-3	礫	砂岩				630		VII層上部	
A-4	礫	砂岩				400		VII層上部	
B-1	礫	砂岩				1090		VII層上部	
B-2	礫	砂岩				680		VII層上部	
B-3	礫	砂岩				330		VII層上部	
B-4	礫	砂岩				550		VII層上部	
B-5	礫	砂岩				820		VII層上部	
B-6	礫	砂岩				420	B-7	VII層上部	
B-7	礫	砂岩				420	B-6	VII層上部	
B-8	礫	砂岩				380		VII層上部	
B-9	礫	砂岩				360		VII層上部	
B-10	礫	硅岩				860		VII層上部	
27	礫	砂岩				2890		VII層下部	

表3 3号石器集中地点礫計測表



第31図 4号石器集中地点 (1/60)



第32图 4号石器集中地点出土遺物 (1/1)

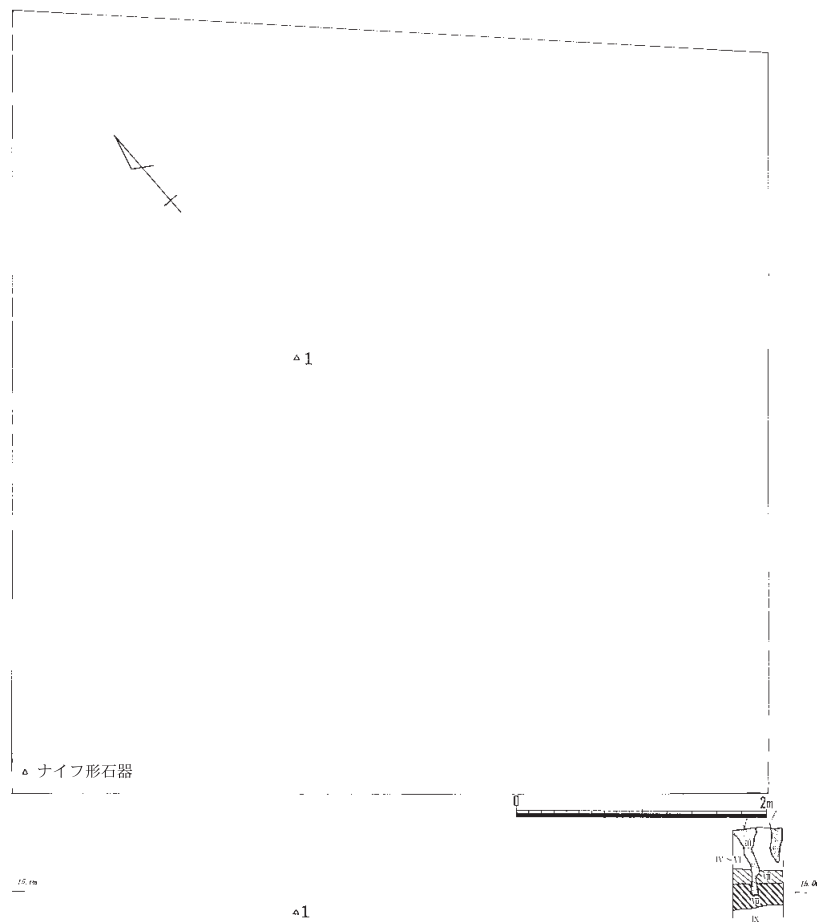
第2章 旧石器時代の遺構と遺物

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
1	ナイフ形石器	黒曜石	2.15	1.35	0.6	1.55		Ⅲ層上部	3
2	碎片	黒曜石				0.2		Ⅲ層下部	
3	碎片	黒曜石				0.8		Ⅳ層上部	
4	碎片	安山岩				1.9	安A	Ⅳ層下部	
5	剥片	安山岩	3.8	2.1	0.65	9.7	安A	Ⅳ層上部	
6	碎片	黒曜石				0.1		Ⅳ層上部	
7	碎片	黒曜石				0.1		Ⅴ層上部	
8	剥片	安山岩	1.6	3.1	0.55	2.5	安A	Ⅳ層上部	
9	碎片	黒曜石				0.3		Ⅴ層上部	
10	碎片	黒曜石				0.1		Ⅴ層上部	
11	礫	砂岩				8.2		Ⅳ層下部	
12	剥片	黒曜石	2.2	2.15	0.55	1.4		Ⅳ層上部	7
13	碎片	安山岩				0.9	安A	Ⅲ層下部	
14	碎片	黒曜石				0.3		Ⅲ層上部	
15	碎片	黒曜石				0.4		Ⅳ層上部	
16	剥片	黒曜石	2.3	1.7	1.2	3.6	黒A	Ⅲ層下部	
17	剥片	黒曜石	2.2	0.9	0.3	0.9		Ⅳ層上部	
18	碎片	安山岩				1	安A	Ⅳ層上部	
19	碎片	黒曜石				0.1		Ⅳ層上部	
20	碎片	黒曜石				0.5		Ⅳ層上部	
21	碎片	黒曜石				0.7		Ⅳ層下部	
22	碎片	黒曜石				0.2		Ⅳ層上部	
23	碎片	黒曜石				0.1		Ⅲ層下部	
24	剥片	安山岩	2.5	2.7	0.5	4.1	安A	Ⅳ層上部	
25	碎片	黒曜石				0.9	黒B	Ⅳ層下部	
26	碎片	黒曜石				0.1		Ⅲ層上部	
27	欠								
28	碎片	安山岩				2.2	安A	Ⅲ層下部	
29	碎片	黒曜石				0.8	黒B	Ⅳ層上部	
30	碎片	黒曜石				0.1		Ⅳ層上部	
31	碎片	黒曜石				0.1		Ⅲ層上部	
32	碎片	安山岩				1.3		Ⅳ層下部	
33	碎片	黒曜石				0.2		Ⅳ層下部	
34	碎片	黒曜石				1		Ⅳ層上部	
35	礫	砂岩				1		Ⅳ層上部	
36	碎片	黒曜石				0.6		Ⅳ層上部	
37	碎片	安山岩				1.1	安A	Ⅴ層上部	
38	碎片	黒曜石				0.4		Ⅲ層上部	
39	碎片	黒曜石				0.2		Ⅲ層上部	
40	碎片	黒曜石				0.1		Ⅴ層上部	
41	碎片	黒曜石				0.8		Ⅳ層上部	
42	碎片	黒曜石				0.1		Ⅳ層下部	
43	剥片	黒曜石	3.05	1.4	0.55	1.35		Ⅳ層下部	8
44	剥片	黒曜石	2.6	3.3	0.95	6.1	黒A	Ⅳ層下部	6
45	碎片	黒曜石				0.1		Ⅳ層上部	
46	碎片	黒曜石				0.1		Ⅳ層上部	
47	碎片	黒曜石				0.3		Ⅳ層下部	
48	碎片	黒曜石				1.9		Ⅳ層上部	
49	ナイフ形石器	黒曜石	2.5	1.55	0.5	1.65		Ⅱ層下部	2
50	碎片	安山岩				0.2	安A	Ⅳ層上部	
51	碎片	安山岩				1.7	安A	Ⅳ層下部	
52	ナイフ形石器	安山岩	4.25	1.75	0.5	3.7		Ⅳ層上部	1
53	碎片	黒曜石				0.5		Ⅲ層上部	

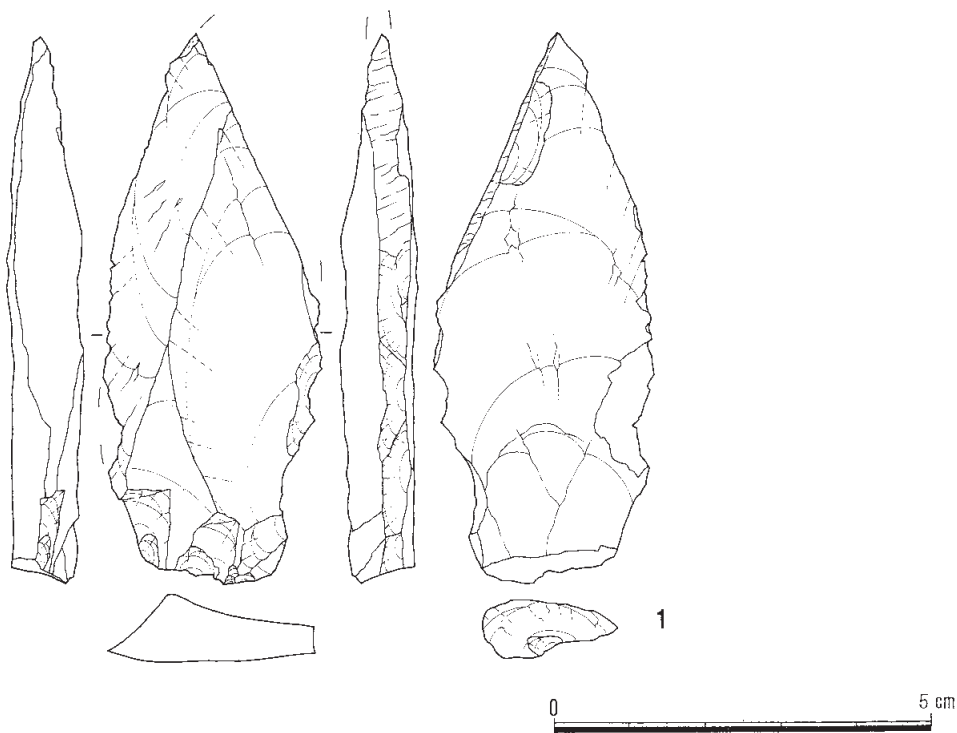
表4 4号石器集中地点石器・礫計測表1

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
54	尖頭器	黒曜石				6.5		IV層上部	4
55	碎片	黒曜石				0.2		III層下部	
56	碎片	黒曜石				0.2		IV層上部	
57	碎片	黒曜石				0.2		IV層上部	
58	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
59	欠								
60	欠								
61	欠								
62	碎片	黒曜石				0.5		II層下部	
63	錐	硬砂岩	6.35	4.05	2.25	54.75		IV層上部	5
64	礫	砂岩				420	赤化	IV層下部	
65	礫	砂岩				470	赤化	IV層下部	
66	碎片	黒曜石				0.5		IV層上部	
67	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
68	碎片	黒曜石				0.1		V層下部	
69	碎片	黒曜石				0.1		IV層上部	
70	碎片	黒曜石				0.6		IV層下部	

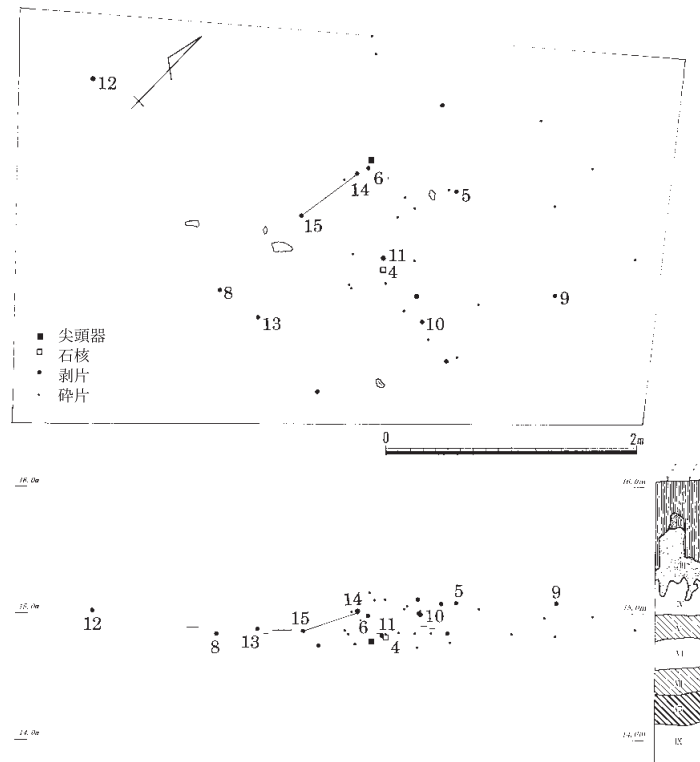
表4 4号石器集中地点石器・礫計測表2



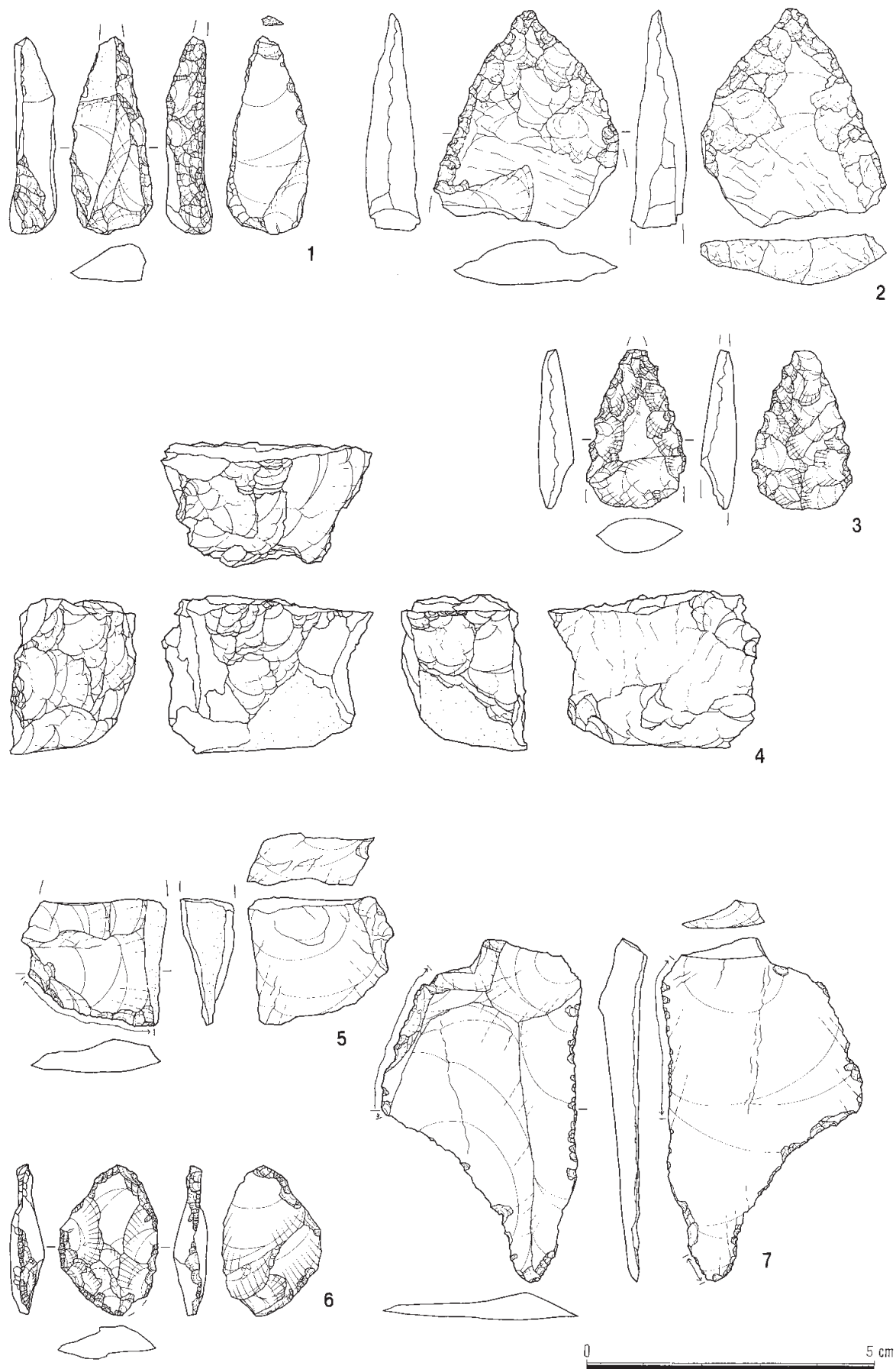
第33図 5号石器集中地点 (1/60)



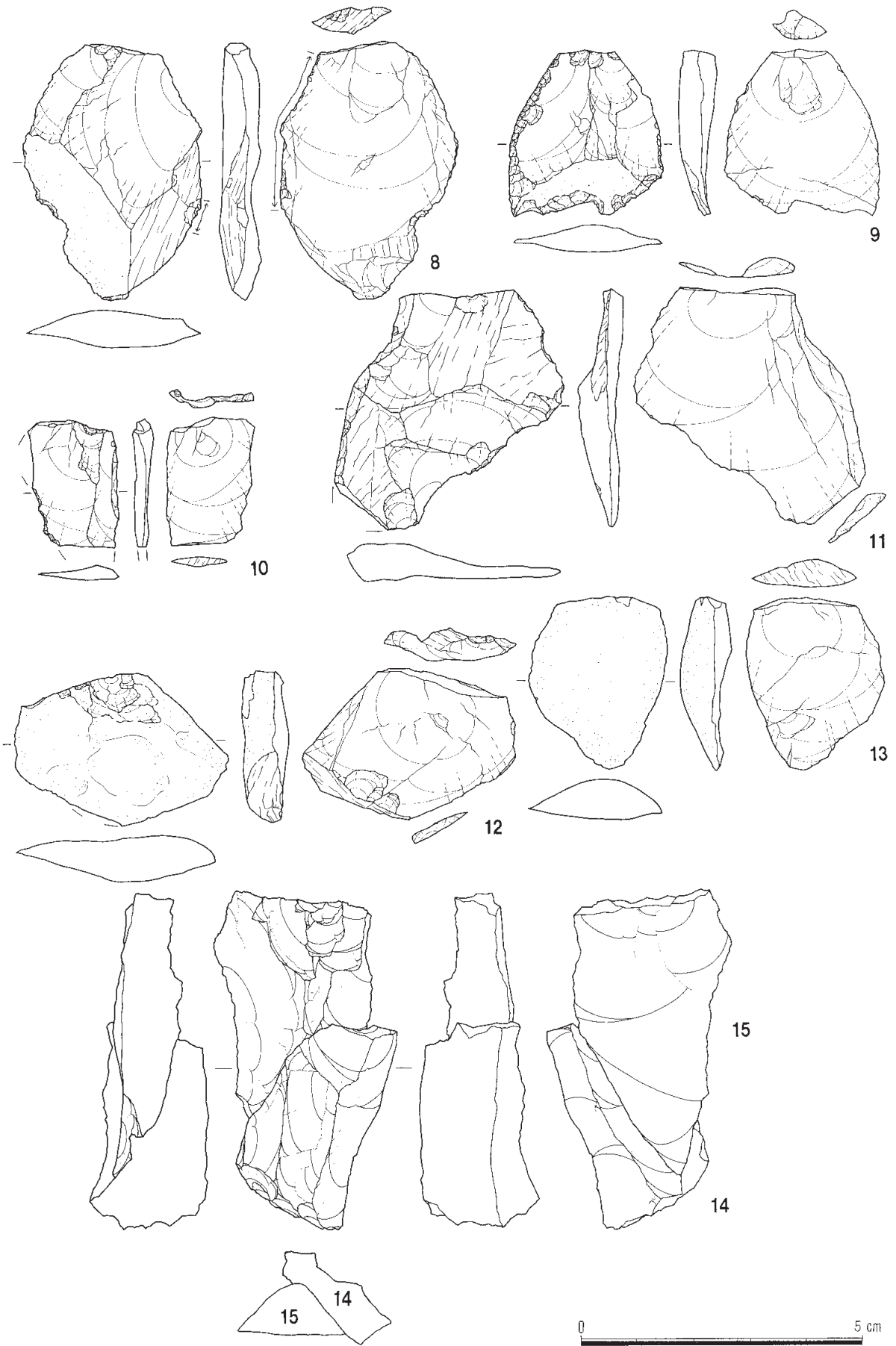
第34図 5号石器集中地点出土遺物 (1/1)



第35図 6号石器集中地点 (1/60)



第36図 6号石器集中地点出土遺物1 (1/1)



第37图 6号石器集中地点出土遺物2 (1/1)

第2章 旧石器時代の遺構と遺物

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
1	ナイフ形石器	安山岩	7.35	2.9	1	19.8		VIII層上部	1

表5 5号石器集中地点石器計測表

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
1	剥片	硅岩	2.7	3.8	0.85	8.95	硅B	IV層下部	12
2	剥片	頁岩	4.95	2.7	1.2	12.7	4 頁A	V層下部	15
3	碎片	黒曜石				1.25		V層下部	
4	剥片	頁岩	3.8	2.1	1.6	15.95	2 頁A	IV層下部	14
5	剥片	黒曜石	2.6	1.7	0.6	1.85		V層上部	6
6	剥片	頁岩	2.7	1.2	0.7	4.45	頁A	VI層上部	
7	碎片	硅岩				1.95		VI層上部	
8	礫	硅岩				20	38・41・42	IV層下部	
9	碎片	黒曜石				0.7		IV層上部	
10	石核	硅岩	2.7	3.65	2.15	25.15	硅B	V層下部	1
11	剥片	頁岩	4.25	4.1	0.85	8.3	頁A	V層下部	11
12	剥片	硅岩	4.55	3.15	0.75	10.7	硅A	V層下部	8
13	剥片	頁岩	3.05	2.45	0.9	6.05	頁A	V層下部	13
14	剥片	硅岩				2.8		VI層上部	
15	碎片	頁岩				0.35	頁B	V層下部	
16	碎片	硅岩				1.7		IV層下部	
17	碎片	頁岩				0.25	頁B	VI層下部	
18	剥片	硅岩	2.25	2.5	0.9	5.25	硅B	IV層上部	5
19	碎片	硅岩				0.15		V層下部	
20	剥片	頁岩	2.3	1.3	0.5	1.95	頁A	V層上部	
21	碎片	硅岩				1.3		IV層下部	
22	剥片	硅岩	2.3	1.6	0.35	0.95	硅A	IV層上部	10
23	碎片	黒曜石				0.3		IV層下部	
24	碎片	硅岩				0.15		V層下部	
25	碎片	硅岩				0.75		V層上部	
26	剥片	硅岩	2.4	1.2	0.8	2.5		V層下部	
27	碎片	硅岩				0.3		V層下部	
28	剥片	硅岩	2.95	2.7	0.7	4.65	硅A	IV層下部	9
29	碎片	黒曜石				0.05		V層下部	
30	碎片	頁岩				0.25	頁B	V層下部	
31	碎片	頁岩				0.15	頁B	V層上部	
32	礫	硅岩				0.45		V層上部	
33	剥片	硅岩	2.1	1.4	0.4	1.2		IV層下部	
34	碎片	頁岩				0.15	頁B	IV層下部	
35	碎片	硅岩				0.55		IV層上部	
36	碎片	黒曜石				0.65		IV層下部	
37	碎片	頁岩				0.25	頁A	V層下部	
38	礫	硅岩				40	8・41・42	V層上部	
39	礫	硅岩				340		V層下部	
40	礫	砂岩				270		V層下部	
41	礫	硅岩				130	8・38・42	V層下部	
42	礫	硅岩				90	8・38・41	V層下部	
43	礫	硅岩				1004		V層下部	
44	碎片	硅岩				0.2		VI層上部	
	ナイフ形石器	黒曜石	3.45	1.45	0.8	3.55		II層	1
	尖頭器	硅岩	3.75	3.2	0.95	10.15		II層	2
	尖頭器	黒曜石	2.25	1.7	0.6	2.55		II層	3
	剥片	硅岩	5.95	3.5	0.85	9.4	硅B	II層	7

表6 6号石器集中地点石器・礫計測表

尖頭器（2・3）

2は石器の基部側の過半を欠く。縦長剥片が素材であろうか。両面に平坦な加工が加えられる。硅岩製。

3は先端部が遺存する。正面図中央の剥離痕が素材となった剥片の主薄利面とすると、縦長剥片を用いたことになる。両面に加工が加えられ、側縁は鋸歯状を呈する。黒曜石製。

石核（4）

複節打面の石核で、寸づまりの剥片を剥取している。硅岩製。

二次加工のある剥片（5・6）

5は幅広の剥片の先端部に加工が加えられる。硅岩製

6は縦長剥片の周縁に加工が加えられる。黒曜石製。

剥片（7～15）

縦長・寸づまりのもの、横長・幅広のもの両者があるが、概して縦長の剥片が多い。5・7・8は使用痕のある剥片で、微細な刃こぼれが認められる。

2・3・7はⅡ層中の出土であるが、本石器集中地点の周囲から検出されたため、ここに掲載した。

7号石器集中地点（第38図）

〔位置〕10Ⅱ地点。

〔構造〕石器1点と礫3点の出土である。石器はⅣ層上位から出土した。

7号石器集中地点出土遺物（第39図）**石核（1）**

楔状の残核形態をとる。正面図にみられるように、最終段階で礫面を打面として幅広の剥片を剥取している。黒曜石製。

8号石器集中地点（第40図）

〔位置〕26地点。

〔構造〕石器は礫集中部分の西側に多く出土するが、散漫な分布状態である。礫はⅢ層中に東西200cm・南北250cmの範囲に分布し、多くは被熱のため赤化し破碎された状態である。石器はⅢ層からⅥ層にかけて出土するが、この調査地点では軟質ロームの発達著しく、第1黒色帯の検出ができなかったため、出土層位を特定することができなかった。

8号石器集中地点出土遺物（第41・42図）

石核1点・剥片10点・碎片5点・礫158点の出土である。石器に使用された石材は、黒曜石10点・硅岩4点・凝灰岩2点からなる。

石核（1）

四角錐状の残核形態をとる。打面を頻繁に転移して剥片剥離を行っているようである。黒曜石製。

二次加工のある剥片（2～4）

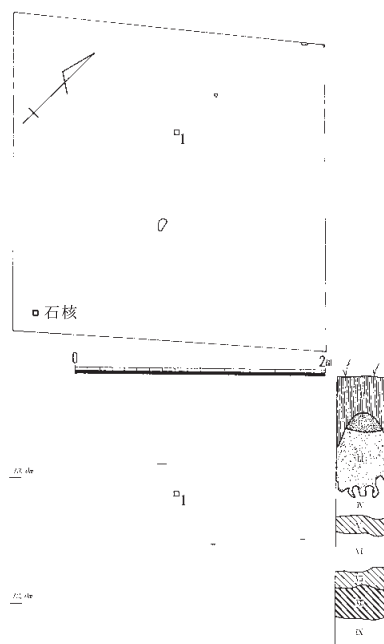
2は縦長剥片の左側縁下端に加工が加えられる。側縁には微細な刃こぼれが認められる。黒曜石製。

3は分厚な縦長剥片の右側縁上端に表面側から加工が加えられる。右側縁及び先端部に微細な刃こぼれが認められる。黒曜石製。

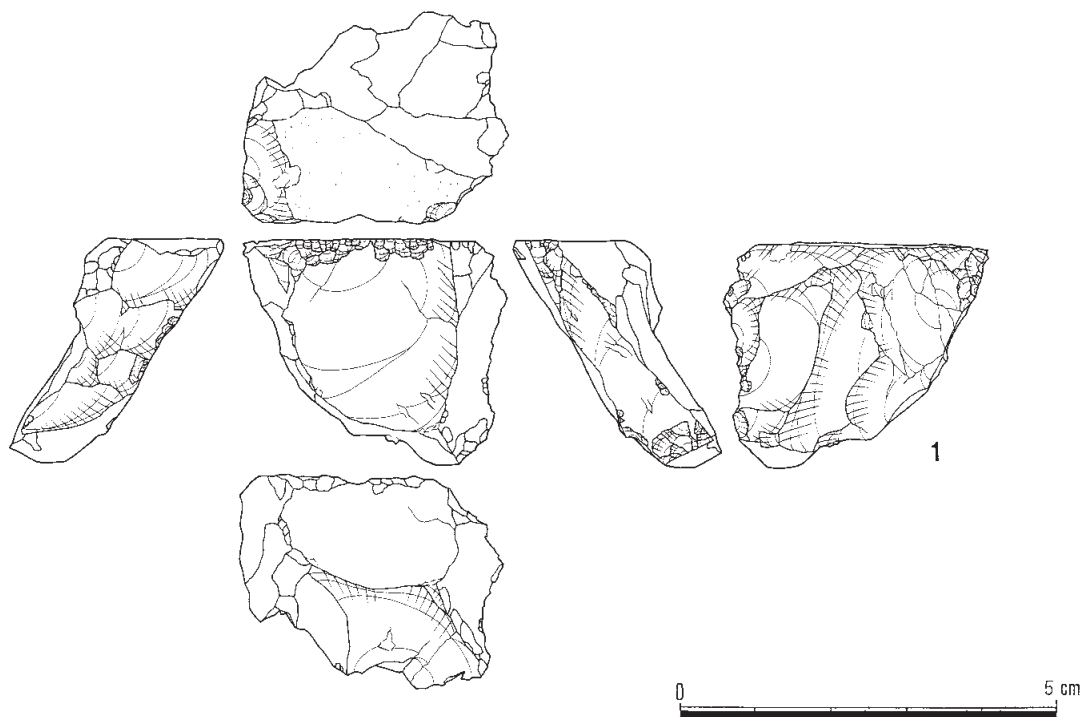
4は両端を欠く縦長剥片である。裏面、左上端に加工が加えられている。硅岩製。

剥片（5～10）

縦長剥片が優位を占める。5は幅広の剥片の先端に使用痕と思われる微細な刃こぼれが認められる。



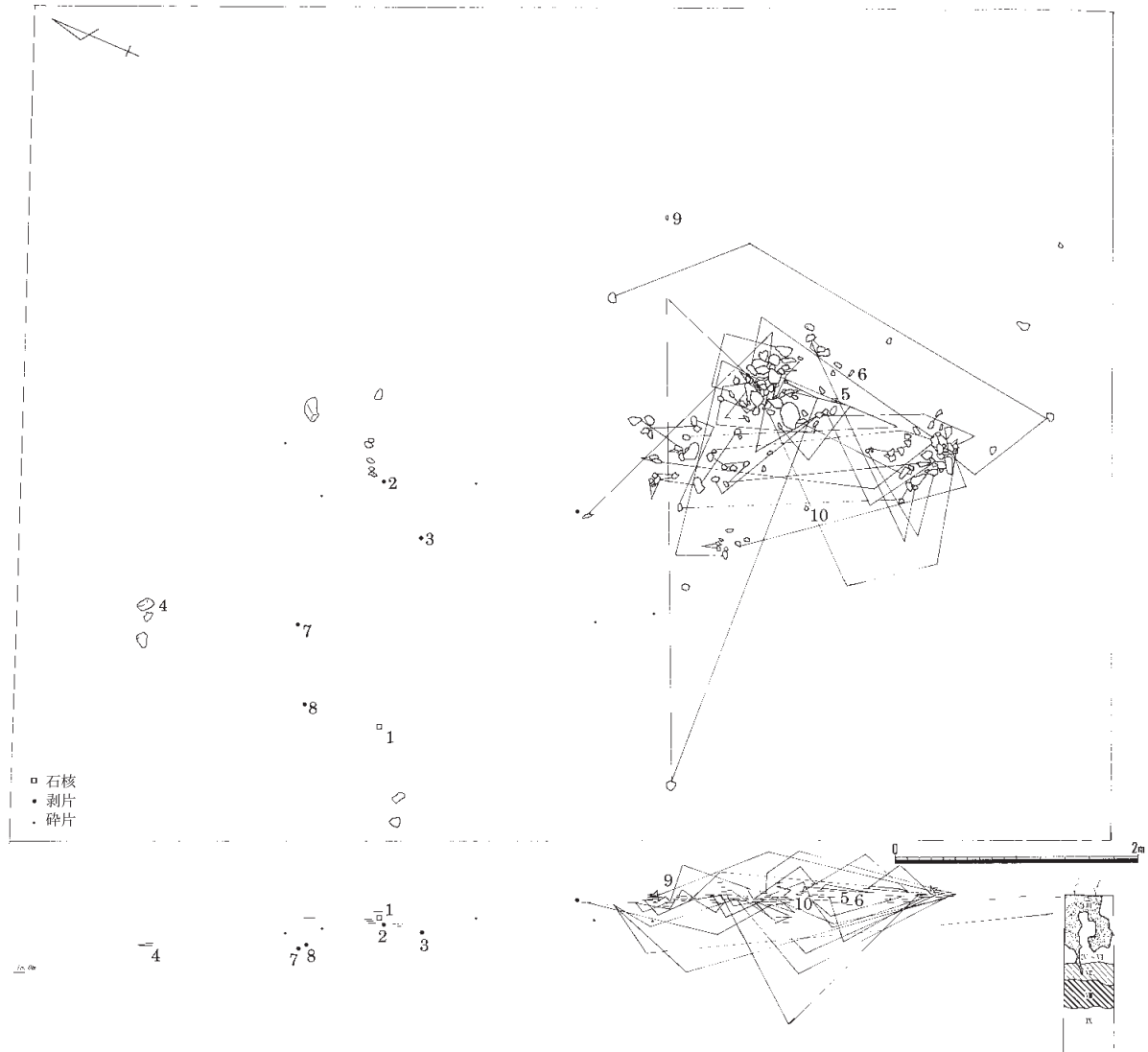
第38図 7号石器集中地点 (1/60)



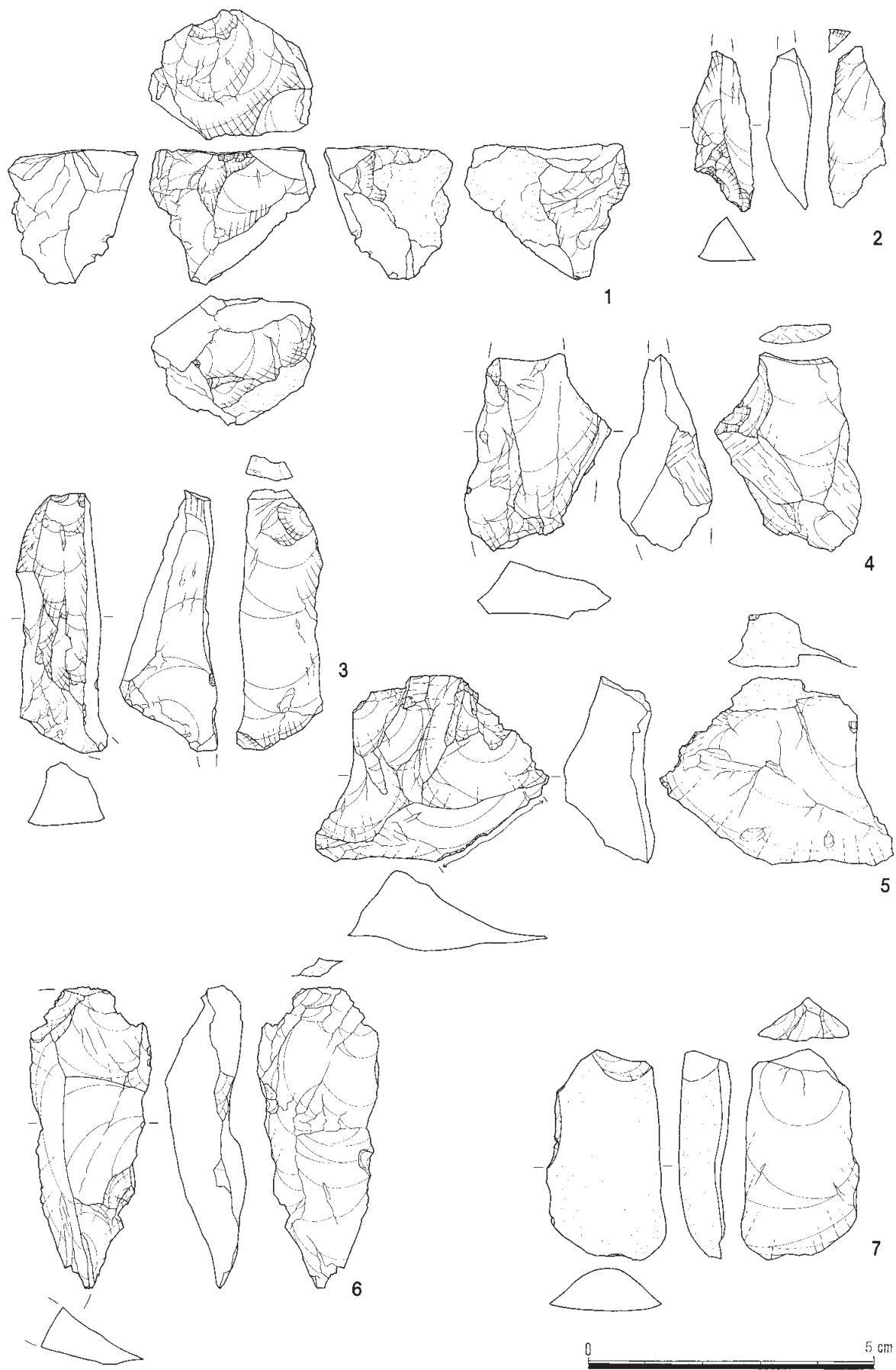
第39図 7号石器集中地点出土遺物 (1/1)

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
1	礫	砂岩				330		Ⅲ層下部	
2	石核	黒曜石	3	3.5	2.8	15.95		Ⅳ層上部	1
3	礫	砂岩				3.5		Ⅵ層上部	
4	礫	砂岩				0.3		Ⅵ層上部	

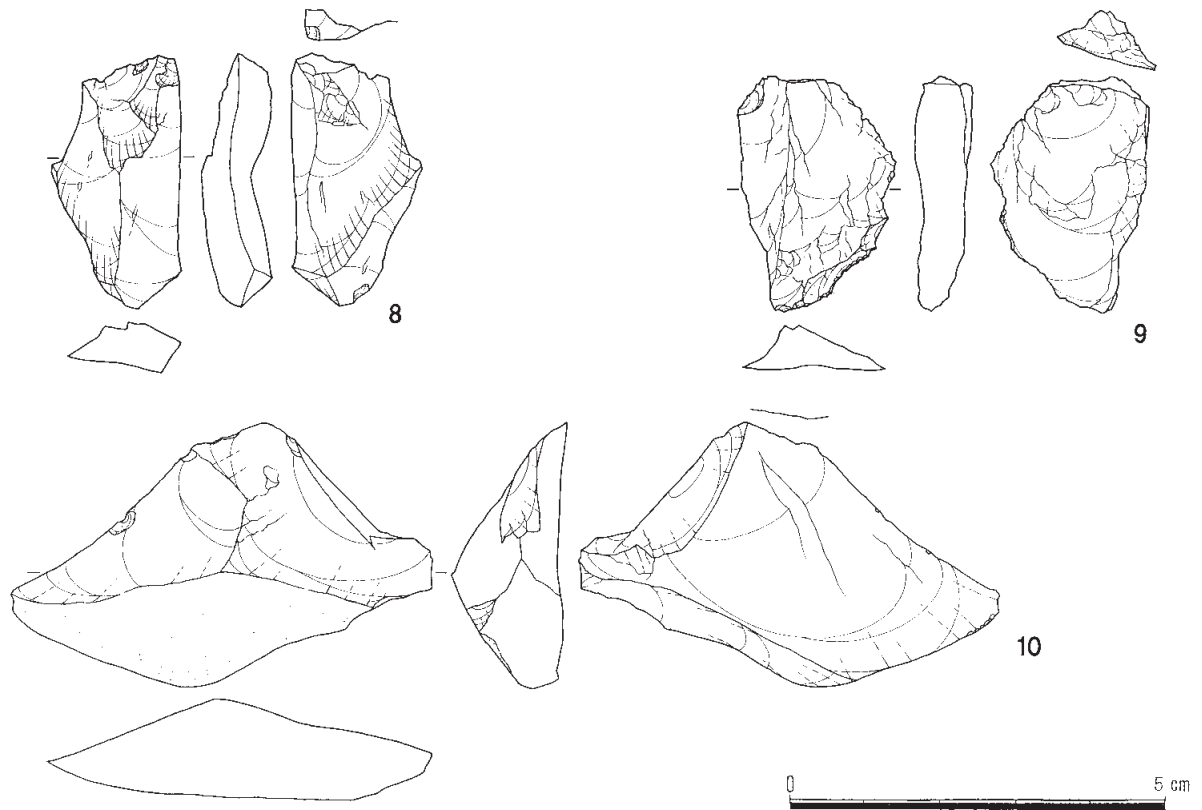
表7 7号石器集中地点石器・礫計測表



第40图 8号石器集中地点 (1/60)



第41図 8号石器集中地点出土遺物1 (1/1)



第42図 8号石器集中地点出土遺物2 (1/1)

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
1	剥片	黒曜石	4.5	1.55	1.65	9.1	黒A	Ⅲ層下部	3
2	剥片	黒曜石	2.8	1	0.8	1.55	黒B	Ⅲ層下部	2
3	剥片	凝灰岩	3.65	2.05	0.9	7.95		Ⅲ層下部	7
4	剥片	黒曜石	3.35	1.75	0.95	3.5	黒A	Ⅲ層下部	8
5	石核	黒曜石	2.35	2.85	2.25	11.1	黒B	Ⅲ層下部	1
6	碎片	黒曜石				0.2		Ⅲ層下部	
7	碎片	黒曜石				0.4		Ⅲ層下部	
8	碎片	黒曜石				0.7		Ⅲ層下部	
9	碎片	黒曜石				0.5		Ⅲ層下部	
10	碎片	黒曜石				0.4		Ⅲ層下部	
11	剥片	黒曜石				0.4		Ⅲ層上部	
31	剥片	硅岩	3.15	2.1	0.75	3.85		Ⅲ層上部	9
60	剥片	凝灰岩	3.55	5.6	1.55	20.15		Ⅲ層上部	10
109	剥片	硅岩	3.25	4.05	1.6	13.95	硅A	Ⅲ層上部	5
110	剥片	硅岩	5.3	2.15	1.35	9.7	硅A	Ⅲ層上部	6
148	剥片	硅岩	3.4	2.55	1.65	9.1		Ⅲ層上部	4

表8 8号石器集中地点石器計測表

第2章 旧石器時代の遺構と遺物

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
12	礫	砂岩				590		Ⅲ層下部	
13	礫	砂岩				370		Ⅲ層下部	
14	礫	砂岩				756		Ⅲ層下部	
15	礫	砂岩				310		Ⅲ層下部	
16	礫	砂岩				193		Ⅲ層下部	
17	礫	砂岩				2220		Ⅲ層下部	
18	礫	珪岩				110		Ⅲ層下部	
19	礫	珪岩				80		Ⅲ層下部	
20	礫	珪岩				115		Ⅲ層下部	
21	礫	礫岩				145		Ⅲ層下部	
22	礫	珪岩				115		Ⅲ層下部	
23	礫	砂岩				170		Ⅲ層上部	
24	礫	珪岩				130	72・114・169	Ⅲ層上部	
25	礫	珪岩				445	45・47	Ⅲ層上部	
26	礫	珪岩				175		Ⅲ層上部	
27	礫	珪岩				28		Ⅲ層上部	
28	礫	珪岩				90	135	Ⅲ層上部	
29	礫	砂岩				60		Ⅲ層上部	
30	礫	砂岩				200	78・172	Ⅲ層上部	
32	礫	珪岩				170	96	Ⅲ層上部	
33	礫	珪岩				70	34・173	Ⅲ層上部	
34	礫	珪岩				105	33・169	Ⅲ層上部	
35	礫	砂岩				30	36・39・40	Ⅲ層上部	
36	礫	砂岩				70	37・39・40・42	Ⅲ層上部	
37	礫	砂岩				35	36・38・40	Ⅲ層上部	
38	礫	砂岩				7.3	37・39	Ⅲ層上部	
39	礫	砂岩				65	35・36・38	Ⅲ層上部	
40	礫	砂岩				50	35・36・37	Ⅲ層上部	
41	礫	珪岩				60	123・124	Ⅲ層上部	
42	礫	珪岩				455	36・66	Ⅲ層上部	
43	礫	砂岩				1455		Ⅲ層上部	
44	礫	珪岩				65		Ⅲ層上部	
45	礫	珪岩				60	25・47	Ⅲ層上部	
46	礫	砂岩				55		Ⅲ層上部	
47	礫	珪岩				120	25・45	Ⅲ層上部	
48	礫	砂岩				150	51・53・54・138	Ⅲ層上部	
49	礫	砂岩				11		Ⅲ層上部	
50	礫	珪岩				61.9	86・118	Ⅲ層上部	
51	礫	砂岩				35	48・54	Ⅲ層上部	
52	礫	砂岩				46.7	53	Ⅲ層上部	
53	礫	砂岩				44.6	48・52・54・138	Ⅲ層上部	
54	礫	砂岩				49.1	48・51・53・138	Ⅲ層上部	
55	礫	砂岩				33.2	90	Ⅲ層上部	
56	礫	砂岩				25		Ⅲ層上部	
57	礫	砂岩				9.3	58	Ⅲ層上部	
58	礫	砂岩				12.1	57	Ⅲ層上部	
59	礫	珪岩				38.7		Ⅲ層上部	
61	礫	珪岩				33	146・147	Ⅲ層上部	
62	礫	砂岩				20		Ⅲ層上部	
63	礫	珪岩				10.3		Ⅲ層上部	
64	礫	砂岩				4.2		Ⅲ層上部	
65	礫	砂岩				14.8		Ⅲ層上部	
66	礫	珪岩				90	42	Ⅲ層上部	

表9 8号石器集中地点礫計測表1

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
67	礫	砂岩				7.4		Ⅲ層上部	
68	礫	砂岩				11.1	76	Ⅲ層上部	
69	礫	砂岩				35	78・119	Ⅲ層上部	
70	礫	砂岩				60		Ⅲ層上部	
71	礫	砂岩				22.6	75・130	Ⅲ層上部	
72	礫	硅岩				60	24	Ⅲ層上部	
73	礫	砂岩				27.5		Ⅲ層上部	
74	礫	砂岩				70	119	Ⅲ層上部	
75	礫	砂岩				1250	71・81・130	Ⅲ層上部	
76	礫	砂岩				780	68	Ⅲ層上部	
77	礫	砂岩				60	78・155	Ⅲ層上部	
78	礫	砂岩				110	30・69・77・155	Ⅲ層上部	
79	礫	硅岩				33.5	132	Ⅲ層上部	
80	礫	砂岩				300	98	Ⅲ層上部	
81	礫	砂岩				140	75	Ⅲ層上部	
82	礫	砂岩				90	170	Ⅲ層上部	
83	礫	砂岩				135		Ⅲ層上部	
84	礫	砂岩				70	85	Ⅲ層上部	
85	礫	砂岩				145	84・125	Ⅲ層上部	
86	礫	硅岩				140	50・118・147	Ⅲ層上部	
87	礫	砂岩				34.5	99	Ⅲ層上部	
88	礫	砂岩				60	154	Ⅲ層上部	
89	礫	砂岩				360	94・152	Ⅲ層上部	
90	礫	砂岩				270	55	Ⅲ層上部	
91	礫	硅岩				590		Ⅲ層上部	
92	礫	砂岩				345	171	Ⅲ層上部	
93	礫	砂岩				380		Ⅲ層上部	
94	礫	砂岩				90	89・152	Ⅲ層上部	
95	礫	硅岩				170	123・124	Ⅲ層上部	
96	礫	硅岩				90	32	Ⅲ層上部	
97	礫	砂岩				350		Ⅲ層上部	
98	礫	砂岩				1140	80	Ⅲ層上部	
99	礫	砂岩				110	87・100	Ⅲ層上部	
100	礫	砂岩				60	99	Ⅲ層上部	
101	礫	砂岩				840		Ⅲ層上部	
102	礫	砂岩				80		Ⅲ層上部	
103	礫	砂岩				145	104・105・122	Ⅲ層上部	
104	礫	砂岩				60	103・105	Ⅲ層上部	
105	礫	砂岩				120	103・104	Ⅲ層上部	
106	礫	砂岩				165		Ⅲ層上部	
107	礫	砂岩				32.6		Ⅲ層上部	
108	礫	硅岩				39.4		Ⅲ層上部	
111	礫	砂岩				60		Ⅲ層上部	
112	礫	礫岩				42		Ⅲ層上部	
113	礫	砂岩				255		Ⅲ層上部	
114	礫	硅岩				190	24・169	Ⅲ層上部	
115	礫	硅岩				70		Ⅲ層上部	
116	礫	砂岩				150		Ⅲ層上部	
117	礫	砂岩				27.1	141・142	Ⅲ層上部	
118	礫	硅岩				105	50・86・147	Ⅲ層上部	
119	礫	砂岩				55	69・74	Ⅲ層上部	
120	礫	砂岩				3545		Ⅲ層上部	
121	礫	砂岩				770		Ⅲ層上部	

表9 8号石器集中地点礫計測表2

第2章 旧石器時代の遺構と遺物

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
122	礫	砂岩				22	103	Ⅲ層上部	
123	礫	硅岩				105	41・95・124	Ⅲ層上部	
124	礫	硅岩				33.3	41・95・123	Ⅲ層上部	
125	礫	砂岩				12.3	85	Ⅲ層上部	
126	礫	砂岩				120	136	Ⅲ層上部	
127	礫	凝灰岩				52.5		Ⅲ層上部	
128	礫	凝灰岩				29.5		Ⅲ層上部	
129	礫	硅岩				665		Ⅲ層上部	
130	礫	砂岩				30	71・75	Ⅲ層上部	
131	礫	砂岩				506		Ⅲ層上部	
132	礫	硅岩				31.9	79	Ⅲ層上部	
133	礫	砂岩				140	134・153	Ⅲ層上部	
134	礫	砂岩				90	133・153	Ⅲ層上部	
135	礫	硅岩				220	28	Ⅲ層上部	
136	礫	砂岩				260	126・137	Ⅲ層上部	
137	礫	砂岩				33.7	136	Ⅲ層上部	
138	礫	砂岩				250	48・53・54	Ⅲ層上部	
139	礫	砂岩				145	156	Ⅲ層上部	
140	礫	礫岩				505		Ⅲ層上部	
141	礫	砂岩				110	117・142	Ⅲ層上部	
142	礫	砂岩				210	117・141	Ⅲ層上部	
143	礫	砂岩				600		Ⅲ層上部	
144	礫	砂岩				170	171	Ⅲ層上部	
145	礫	硅岩				115	146・147	Ⅲ層上部	
146	礫	硅岩				130	61・145・147	Ⅲ層上部	
147	礫	硅岩				84.8	61・86・118・145・146	Ⅲ層上部	
149	礫	砂岩				40.3	171	Ⅲ層上部	
150	礫	砂岩				64.4		Ⅲ層上部	
151	礫	砂岩				52.7		Ⅲ層上部	
152	礫	砂岩				47.3	89・94	Ⅲ層上部	
153	礫	砂岩				31.4	133・134	Ⅲ層上部	
154	礫	砂岩				52.9	88	Ⅲ層上部	
155	礫	砂岩				37.1	77・78	Ⅲ層上部	
156	礫	砂岩				20.5	139	Ⅲ層上部	
157	礫	砂岩				5.3	158・159・160・162	Ⅲ層上部	
158	礫	砂岩				101.3	157・160・162	Ⅲ層上部	
159	礫	砂岩				140	157・160・161	Ⅲ層上部	
160	礫	砂岩				85	157・158・159	Ⅲ層上部	
161	礫	砂岩				145	159・162	Ⅲ層上部	
162	礫	砂岩				100	157・158・161	Ⅲ層上部	
163	礫	砂岩				140		Ⅲ層上部	
164	欠								
165	礫	砂岩				120	168	Ⅲ層上部	
166	礫	砂岩				120		Ⅲ層上部	
167	礫	砂岩				405		Ⅲ層上部	
168	礫	砂岩				65.1	165	Ⅲ層上部	
169	礫	硅岩				105	24・34・114	Ⅲ層上部	
170	礫	砂岩				65.4	82	Ⅲ層上部	
171	礫	砂岩				415	33・34・92・114・144・149・169	Ⅲ層上部	
172	礫	砂岩				17	30	Ⅲ層下部	
173	礫	硅岩				31	33	Ⅲ層上部	

表9 8号石器集中地点礫計測表3

9号石器集中地点（第43図）

〔位置〕 13Ⅱ地点。

〔構造〕 石器・礫は東西250cm・南北220cmの範囲に分布するが、調査区外の南側に広がる。垂直分布は80cm前後の幅をもちⅢ層からⅣ層中位に及ぶが、Ⅲ層下位に集中する。

9号石器集中地点出土遺物（第44・45図）

剥片22点・碎片120点の出土である。石器に使用された石材は、硅岩128点・黒曜石14点からなり、黒曜石は全て微細な碎片である。

二次加工のある剥片（1）

横長剥片の先端の一部に加工が加えられる。硅岩製。

剥片（2～9）

2・3は先端を欠損する縦長剥片。5・7は寸づまりの、他は不定形の剥片である。全て硅岩製。

本石器集中地点は出土遺物の約85%が碎片であり、石器製作跡の可能性をうかがわせる。

10号石器集中地点（第46図）

〔位置〕 5Ⅱ地点。

〔構造〕 石器は礫の集中部分の東側に分布密度が高く、東西230cm・南北200cmの範囲に分布するが、調査区外の西側に広がる模様である。石器・礫の垂直分布は30cm前後の幅をもちⅢ層からⅣ層上位に及ぶが、Ⅲ層中に集中する。

10号石器集中地点出土遺物（第47～49図）

石核1点・剥片10点・碎片21点・礫26点（接合後の点数）の出土である。礫は被熱のため、赤化し破碎されたものが多い。石器に使用された石材は、全て凝灰岩である。

二次加工のある剥片（1）

縦長剥片の先端に加工が加えられる。

剥片（2～6）

2・3・5・6は縦長ないしそれに近い剥片。4は上半を欠損するが幅広の剥片になろうか。

接合資料（8～11）

残核（8）と剥片（9～11）からなるが、7も同母岩。節理面や先行する剥離面を打面として、縦長・横長の剥片を剥取する。最終的には、大きく11が分割されている。

11A号石器集中地点（第50図）

〔位置〕 5Ⅱ地点。

〔構造〕 石器は東西400cm・南北350cmの範囲に礫を混在して散漫に分布する。垂直分布は40cm前後の幅でⅢ層からⅤ層上位に及ぶがⅣ層下位に集中する。

11A号石器集中地点出土遺物（第51～53図）

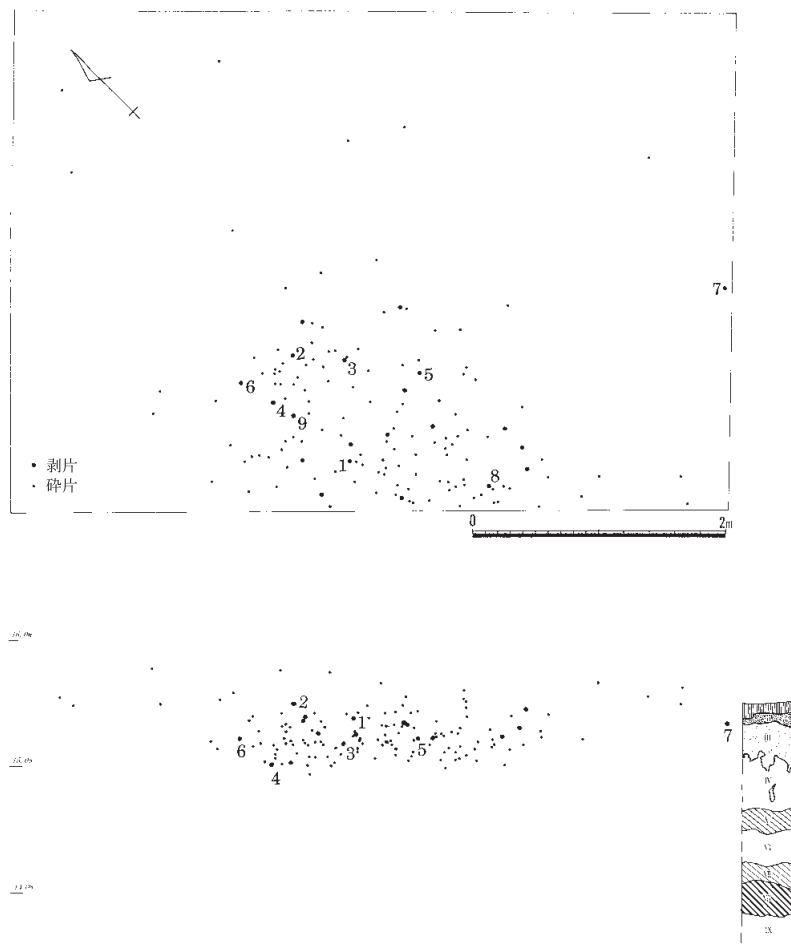
石核1点・剥片19点・碎片39点・礫42点（接合後の点数）の出土である。礫の多くは被熱のため赤化し破碎されている。石器に使用された石材は黒曜石45点・安山岩12点・硅岩2点からなるが、黒曜石の多くは碎片である。

二次加工のある剥片（第51図1・2）

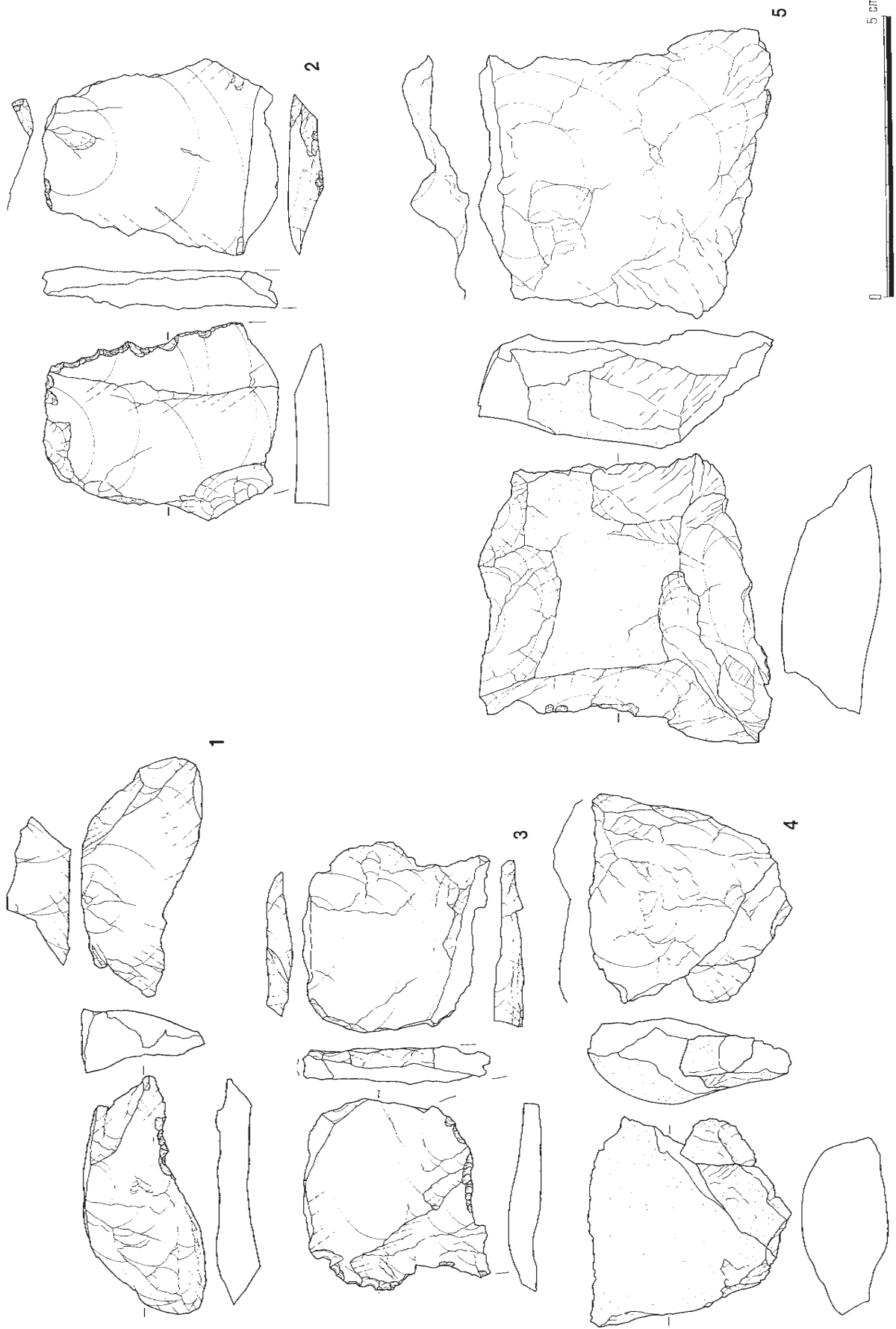
1は分厚な剥片の左側縁に加工が加えられる。2は縦長剥片の右側縁に加工が加えられている。共に黒曜石製。

石核（第51図3）

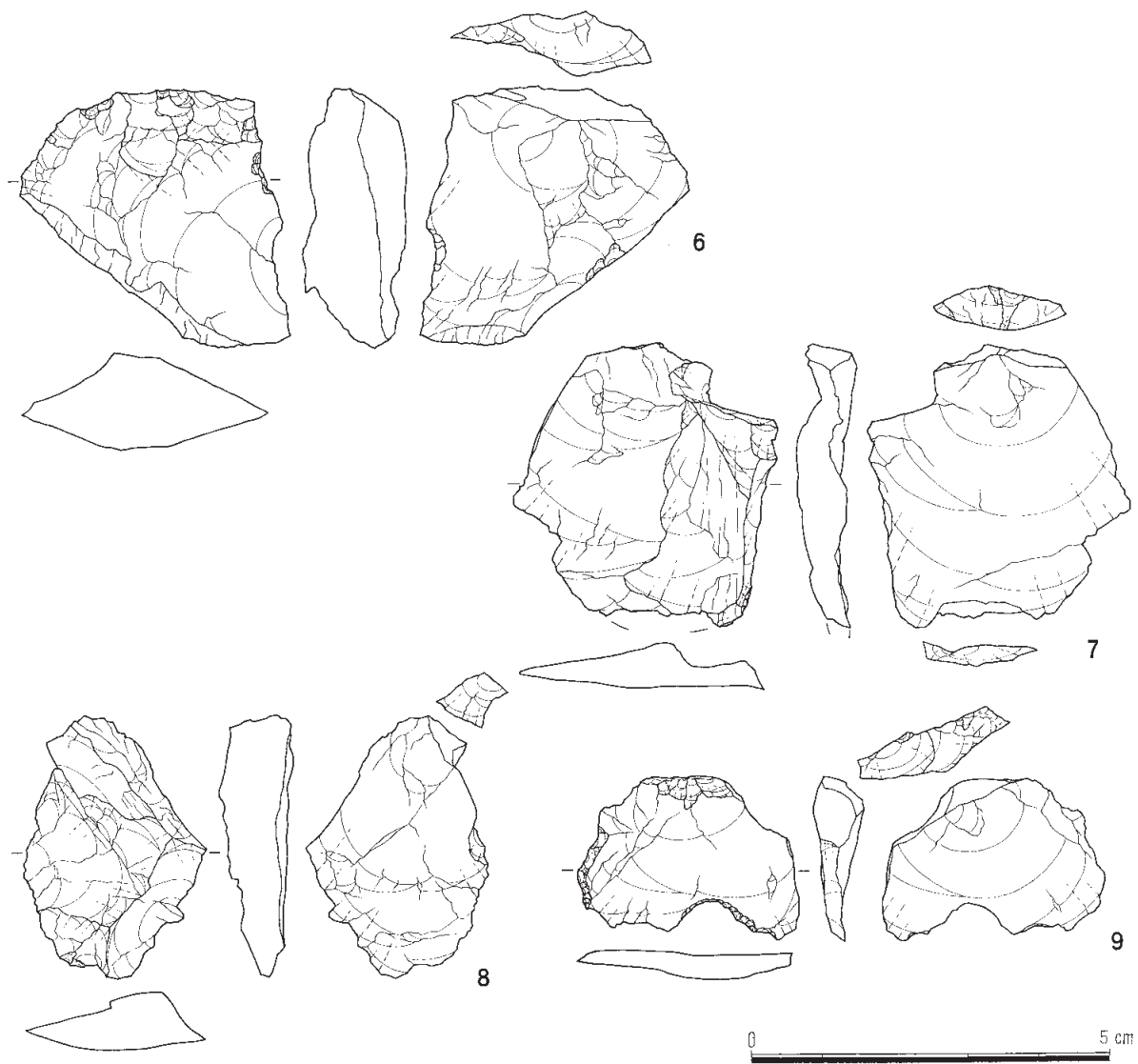
縦長剥片を剥取した石核。図上端に打面を設定し数枚の剥片を剥取した後に、180°打面を転位して再度剥片剥離を行っている。硅岩製。



第43図 9号石器集中地点 (1/60)



第44図 9号石器集中地点出土遺物1 (1/1)



第45図 9号石器集中地点出土遺物2 (1/1)

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
1	碎片	硅岩				0.8		Ⅱ層下部	
2	碎片	硅岩				1.2		Ⅱ層上部	
3	碎片	黒曜石				0.1		Ⅱ層上部	
4	碎片	硅岩				0.6		Ⅱ層下部	
5	碎片	硅岩				0.8		Ⅱ層下部	
6	剥片	硅岩	4.2	3.5	0.75	11.1	硅A	Ⅱ層下部	2
7	碎片	黒曜石				0.3		Ⅱ層上部	
8	碎片	硅岩				0.3		Ⅱ層上部	
9	剥片	硅岩	2.9	1.4	0.85	3.8		Ⅱ層下部	
10	碎片	硅岩				0.5		Ⅱ層下部	
11	碎片	硅岩				0.2		Ⅱ層下部	
12	碎片	硅岩				0.2		Ⅱ層下部	
13	碎片	硅岩				1.6		Ⅱ層下部	
14	欠								
15	剥片	黒曜石	2.3	0.9	0.6	1.1		Ⅱ層上部	
16	碎片	硅岩				0.1		Ⅱ層下部	
17	碎片	硅岩				0.1		Ⅱ層下部	
18	碎片	硅岩				0.1		Ⅱ層下部	
19	碎片	硅岩				0.1		Ⅱ層下部	
20	碎片	硅岩				0.4		Ⅱ層上部	
21	碎片	硅岩				0.1		Ⅱ層下部	
22	碎片	硅岩				0.2		Ⅲ層上部	
23	剥片	硅岩	2.3	1.6	1.45	7.3		Ⅲ層下部	
24	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層上部	
25	剥片	硅岩	3.3	1.3	0.55	2.3		Ⅲ層上部	
26	碎片	黒曜石				0.1		Ⅲ層上部	
27	碎片	硅岩				2.8		Ⅲ層下部	
28	碎片	硅岩				0.3		Ⅲ層上部	
29	碎片	硅岩				0.2		Ⅱ層下部	
30	欠								
31	碎片	硅岩				0.2		Ⅲ層上部	
32	剥片	硅岩	2.4	2.5	0.95	7.7		Ⅲ層上部	
33	欠								
34	剥片	硅岩	1.9	3.1	0.55	3.9		Ⅲ層上部	
35	碎片	黒曜石				0.3		Ⅱ層上部	
36	碎片	黒曜石				1		Ⅱ層下部	
37	碎片	硅岩				0.1		Ⅱ層上部	
38	欠								
39	剥片	硅岩	3.1	1.9	0.95	4.2		Ⅲ層上部	
40	碎片	硅岩				0.5		Ⅱ層下部	
41	碎片	硅岩				0.2		Ⅲ層下部	
42	剥片	硅岩	1.4	3.1	1.5	8.6		Ⅲ層上部	
43	碎片	硅岩				0.2		Ⅲ層上部	
44	碎片	硅岩				0.7		Ⅲ層下部	
45	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
46	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
47	碎片	硅岩				0.2		Ⅲ層上部	
48	碎片	硅岩				0.2		Ⅲ層下部	
49	剥片	硅岩	1.5	2.1	0.75	2.7		Ⅲ層下部	
50	碎片	硅岩				0.2		Ⅲ層下部	
51	碎片	硅岩				0.2		Ⅲ層下部	
52	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
53	碎片	硅岩				2.2		Ⅲ層下部	

表10 9号石器集中地点石器計測表1

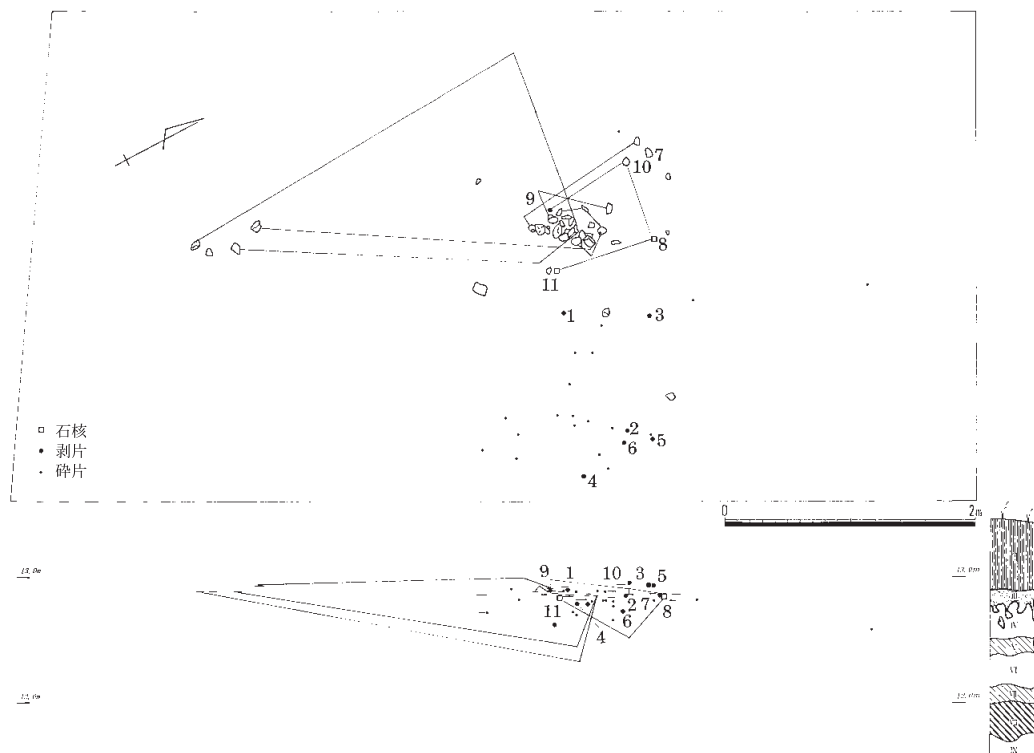
第2章 旧石器時代の遺構と遺物

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
54	碎片	硅岩				0.7		Ⅱ層上部	
55	剥片	硅岩	3.95	3.7	0.85	7.4	硅B	Ⅲ層上部	7
56	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
57	碎片	硅岩				0.5		Ⅲ層下部	
58	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
59	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
60	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
61	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
62	碎片	硅岩				1.1		Ⅲ層下部	
63	剥片	硅岩	2.3	1.1	0.7	2.5		Ⅲ層下部	
64	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
65	剥片	硅岩	2.1	1.5	0.7	1.7		Ⅲ層下部	
66	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
67	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
68	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
69	R F	硅岩	2.2	4.25	1.15	7.05	硅B	Ⅲ層下部	1
70	碎片	硅岩				0.2		Ⅲ層下部	
71	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
72	剥片	硅岩	2.5	1.2	1.3	7.4		Ⅲ層下部	
73	碎片	硅岩				0.2		Ⅲ層下部	
74	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
75	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
76	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
77	碎片	硅岩				0.8		Ⅲ層下部	
78	碎片	硅岩				0.5		Ⅲ層下部	
79	碎片	硅岩				0.6		Ⅲ層下部	
80	碎片	硅岩				0.1		Ⅲ層下部	
81	碎片	硅岩				0.2		Ⅲ層下部	
82	剥片	硅岩	5.25	5.15	2.1	52.4	硅B	Ⅲ層下部	5
83	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
84	剥片	硅岩	3.65	2.55	1.05	6.95	硅B	Ⅳ層上部	8
85	碎片	硅岩				0.2		Ⅳ層上部	
86	碎片	硅岩				0.5		Ⅳ層上部	
87	碎片	硅岩				0.3		Ⅳ層上部	
88	碎片	硅岩				0.4		Ⅳ層上部	
89	碎片	硅岩				0.3		Ⅳ層上部	
90	碎片	硅岩				0.2		Ⅳ層上部	
91	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
92	剥片	硅岩	4.1	2.1	1.2	13.7		Ⅳ層上部	
93	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
94	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
95	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
96	剥片	硅岩	3.35	3.4	0.65	8.5	硅A	Ⅳ層上部	3
97	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
98	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
99	碎片	硅岩				0.5		Ⅲ層下部	
100	碎片	硅岩				0.2		Ⅳ層上部	
101	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
102	碎片	硅岩				0.4		Ⅳ層上部	
103	碎片	黒曜石				1.1		Ⅳ層上部	
104	碎片	黒曜石				0.1		Ⅳ層上部	
105	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
106	碎片	硅岩				0.2		Ⅳ層上部	

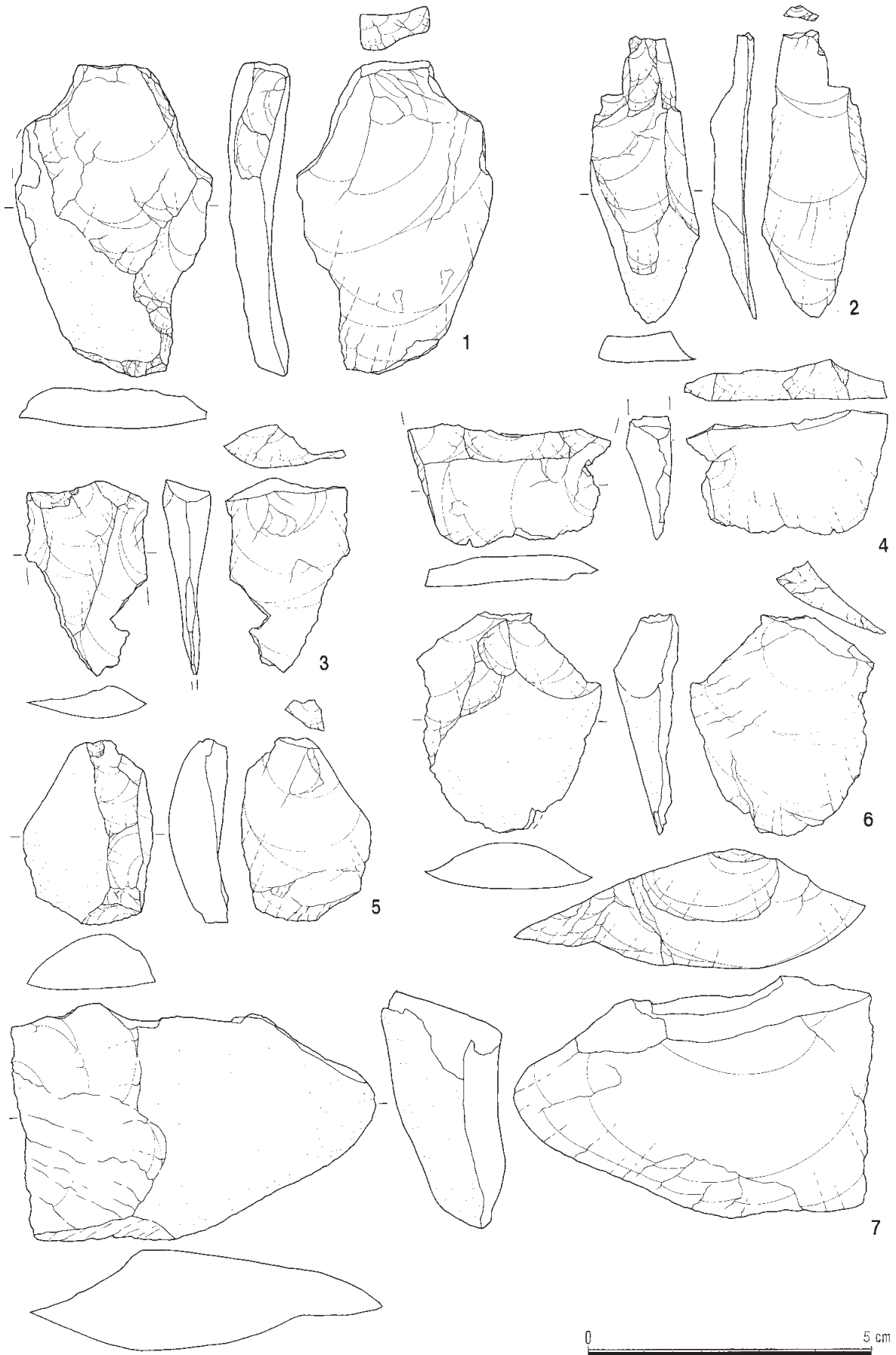
表10 9号石器集中地点石器計測表2

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
107	欠								
108	剥片	硅岩	3.6	3.75	1.5	15.5	硅B	Ⅲ層下部	6
109	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
110	碎片	硅岩				0.3		Ⅳ層上部	
111	碎片	硅岩				0.3		Ⅳ層上部	
112	碎片	硅岩				1.7		Ⅳ層上部	
113	碎片	硅岩				0.2		Ⅳ層上部	
114	碎片	硅岩				0.6		Ⅳ層上部	
115	碎片	硅岩				0.3		Ⅳ層上部	
116	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
117	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
118	碎片	硅岩				0.2		Ⅳ層上部	
119	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
120	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
121	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
122	碎片	黒曜石				0.1		Ⅳ層上部	
123	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
124	碎片	硅岩				0.2		Ⅳ層上部	
125	碎片	硅岩				0.2		Ⅳ層上部	
126	碎片	黒曜石				0.2		Ⅳ層上部	
127	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
128	碎片	黒曜石				0.1		Ⅳ層上部	
129	碎片	硅岩				0.6		Ⅳ層上部	
130	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
131	碎片	硅岩				0.4		Ⅳ層上部	
132	碎片	硅岩				1.1		Ⅳ層上部	
133	碎片	硅岩				0.2		Ⅳ層上部	
134	碎片	黒曜石				0.1		Ⅳ層上部	
135	碎片	硅岩				0.3		Ⅳ層上部	
136	碎片	硅岩				2.9		Ⅳ層上部	
137	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
138	碎片	硅岩				0.6		Ⅳ層上部	
139	碎片	黒曜石				0.2		Ⅳ層上部	
140	碎片	硅岩				0.2		Ⅳ層上部	
141	剥片	硅岩	2.25	3.1	0.75	3.3		Ⅳ層上部	9
142	剥片	硅岩	3.6	3.7	1.55	19.85	硅B	Ⅳ層上部	4
143	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
144	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	
145	碎片	硅岩				0.5		Ⅳ層上部	
146	碎片	硅岩				0.2		Ⅳ層上部	
147	碎片	硅岩				0.1		Ⅳ層上部	

表10 9号石器集中地点石器計測表3



第46図 10号石器集中地点 (1/60)



第47图 10号石器集中地点出土遺物1 (1/1)

剥片（第51図4、52・53図）

4・5・7・8・11・13・15は安山岩製で、同母岩の可能性が大きい。全ての剥片が礫面を残す。縦長ないしそれに近い剥片が多いが、定型的なものはない。

6は硅岩製の縦長剥片。

9・10・12・14は黒曜石製の剥片。9は不定形の、10は両端を欠くが縦長の、12・14は横長・幅広の剥片である。9・10・12は同母岩の可能性がある。

11B号石器集中地点（第50図）

〔位置〕 5Ⅱ地点。

〔構造〕 東側の大部分が調査区外にある。石器・礫の垂直分布は40cmの幅をもちⅢ層からⅤ層に及ぶがⅢ層下位に集中する。

11B号石器集中地点出土遺物（第54図）

搔器1点・剥片7点・碎片6点・礫8点の出土である。石器に使用された石材は、黒曜石1点・硅岩2点・安山岩3点・凝灰岩4点・頁岩4点である。

搔器（16）

裏面の左右からの剥離は、素材となる礫を扁平にする意図があったのであろうか。方形に近い形状の剥片の三辺に急斜な加工を加えスクレイパーエッジを作出する。頁岩製。

剥片（17～20）

17～19は、縦長ないしそれに近い形状の剥片。17・19は凝灰岩製。18は安山岩製。

20は先端を欠くが、幅広の剥片になろうか。頁岩製。

11C号石器集中地点（第50図）

〔位置〕 5Ⅱ地点。

〔構造〕 西側の大部分が調査区外にある。石器・礫の垂直分布は10cm前後の幅をもち、Ⅳ層上位に集中する。

11C号石器集中地点出土遺物（第55図）

ナイフ形石器1点・剥片2点・碎片1点・礫3点が出土した。石器に使用された石材は、黒曜石1点・安山岩3点からなる。

ナイフ形石器（21）

分厚な縦長剥片を素材とする。剥片の基部を石器の先端とする。右側縁と左側縁下半に刃潰し加工が加えられる。裏面基部の平坦な剥離は、剥片の形を整えるためのものか。

剥片（22・23）

幅広の剥片である。共に安山岩製。

11A～11C号石器集中地点は、近接して存在している。そのため、出土石器の一部には所属に問題がある部分もある。

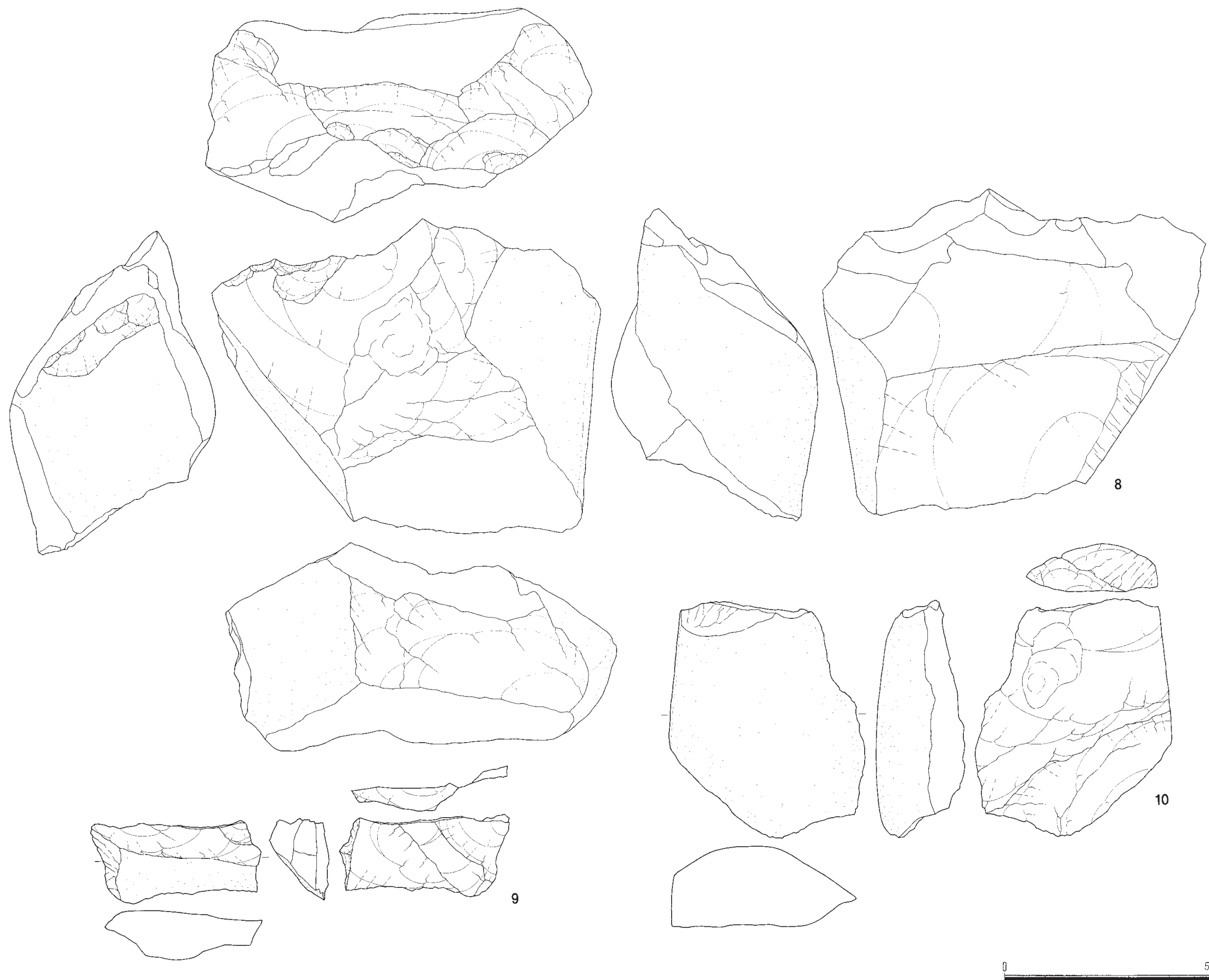
12号石器集中地点（第56図）

〔位置〕 57Ⅱ地点。

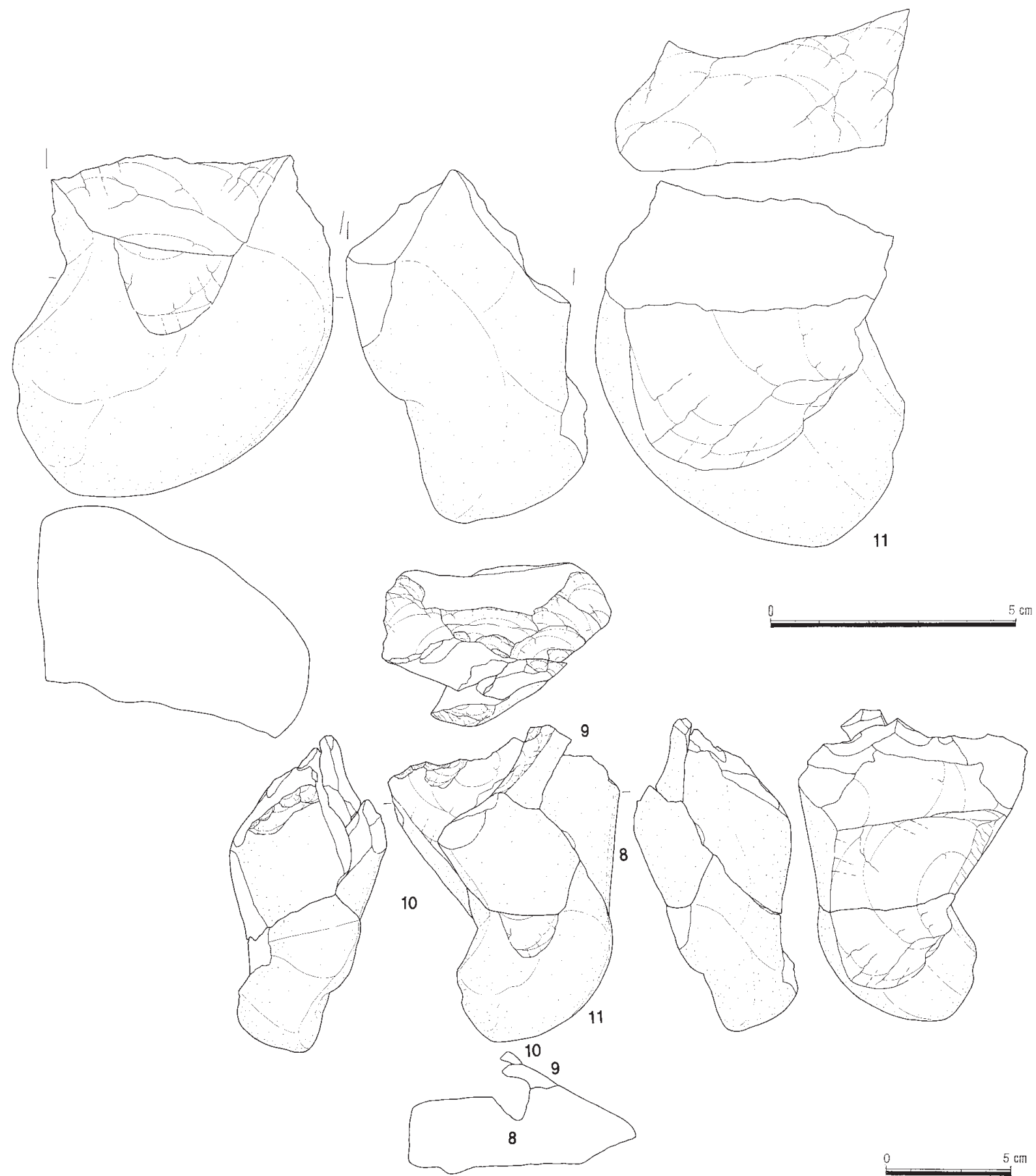
〔構造〕 西側の大部分が調査区外にある。石器・礫の垂直分布は20cm前後の幅をもち、Ⅴ層上位に集中する。

12号石器集中地点出土遺物（第57図）

ナイフ形石器2点・剥片3点・碎片4点・礫14点（接合後の点数）が出土した。礫の多くは被熱のため、赤化し



第48図 10号石器集中地点出土遺物 2 (1/1)



第49図 10号石器集中地点出土遺物 3 (1/1)

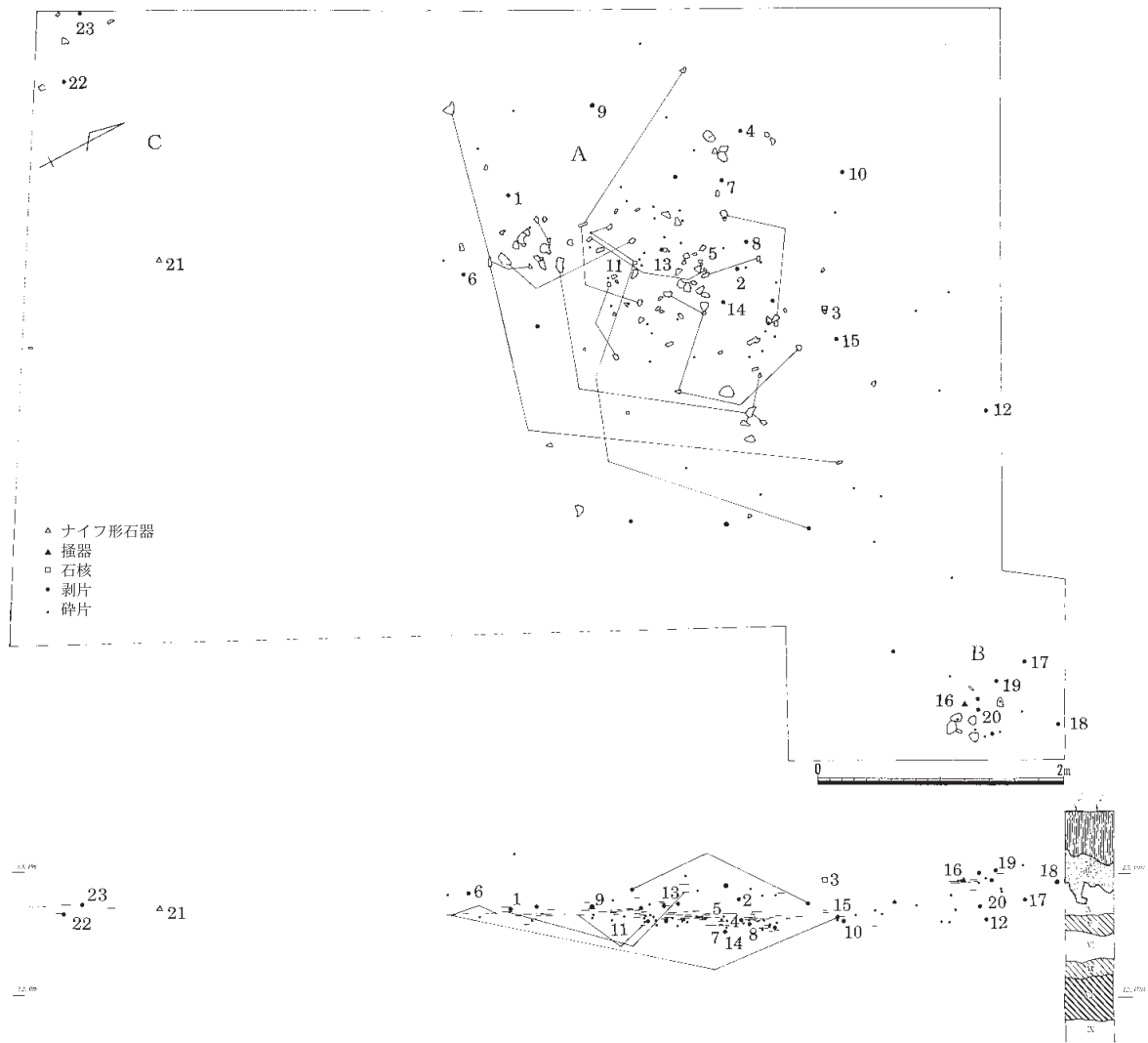
注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
1	碎片	凝灰岩				0.5		Ⅲ層下部	
2	碎片	凝灰岩				1.9		Ⅲ層下部	
3	碎片	凝灰岩				1.05		Ⅲ層上部	
4	碎片	凝灰岩				0.2		Ⅲ層上部	
5	碎片	凝灰岩				0.8		Ⅳ層上部	
6	碎片	凝灰岩				0.2		Ⅲ層下部	
7	碎片	凝灰岩				0.4		Ⅲ層下部	
8	欠								
9	碎片	凝灰岩				0.3		Ⅲ層上部	
10	碎片	凝灰岩				0.1		Ⅲ層下部	
11	剥片	凝灰岩	3.9	3.25	1.15	9.35	凝A	Ⅲ層上部	6
12	剥片	凝灰岩	5.05	1.35	0.8	5	凝A	Ⅲ層上部	2
13	剥片	凝灰岩	3.25	2.25	1.05	7.55	凝A	Ⅲ層上部	5
14	碎片	凝灰岩				0.3		Ⅲ層下部	
15	碎片	凝灰岩				1.3		Ⅲ層上部	
16	碎片	凝灰岩				0.3		Ⅲ層下部	
17	碎片	凝灰岩				0.5		Ⅲ層下部	
18	碎片	凝灰岩				0.1		Ⅲ層上部	
19	剥片	凝灰岩	5.5	3.45	1.1	18.5		Ⅲ層上部	1
20	碎片	凝灰岩				0.7		Ⅲ層上部	
21	剥片	凝灰岩	3.4	2.2	0.85	3.6	凝B	Ⅲ層下部	3
22	欠								
23	碎片	凝灰岩				0.5		Ⅲ層上部	
24	欠								
25	碎片	凝灰岩				1.3		Ⅲ層下部	
26	碎片	凝灰岩				0.1		Ⅳ層上部	
27	剥片	凝灰岩	2.15	3.6	0.75	5.8	凝B	Ⅲ層下部	4
34	剥片	凝灰岩	5.75	4.75	2.15	62.7	38・61・67 凝B	Ⅲ層上部	10
36	剥片	凝灰岩	4.2	6.35	2.1	50.9	38・39 凝B	Ⅲ層上部	7
38	剥片	凝灰岩	1.95	4.1	1.4	8.9	34・61 凝B	Ⅲ層上部	
61	石核	凝灰岩	7.75	9.35	4.95	307.4	34・67 凝B	Ⅲ層下部	8
65	碎片	凝灰岩				0.8		Ⅲ層下部	
67	剥片	凝灰岩	7.2	6.4	5.2	307.4	34・61 凝B	Ⅲ層上部	11
70	碎片	凝灰岩				0.9		Ⅲ層上部	
72	碎片	凝灰岩				0.1		Ⅲ層下部	

表11 10号石器集中地点石器計測表

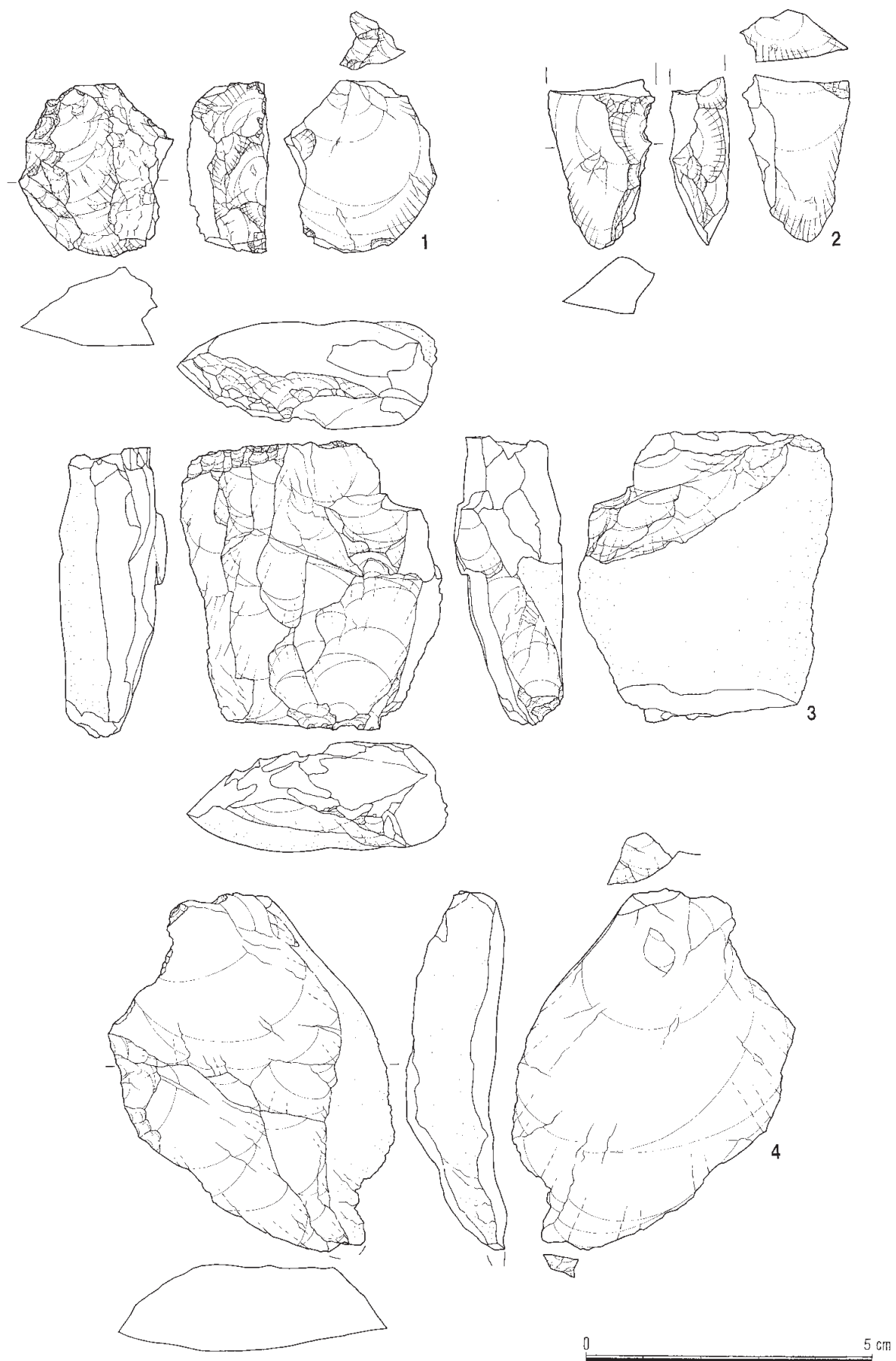
第2章 旧石器時代の遺構と遺物

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
28	礫	砂岩				340	35・39・52	Ⅲ層上部	
29	礫	砂岩				94.7		Ⅲ層上部	
30	礫	砂岩				200	40	Ⅲ層上部	
31	礫	砂岩				360	55・56・57	Ⅲ層上部	
33	礫	砂岩				710	60	Ⅲ層上部	
35	礫	砂岩				340	28・39・52	Ⅲ層上部	
37	礫	砂岩				17.7		Ⅲ層下部	
39	礫	砂岩				340	28・35・52	Ⅲ層上部	
40	礫	砂岩				200	30	Ⅲ層上部	
41	礫	砂岩				405		Ⅲ層上部	
42	礫	珪岩				155		Ⅲ層上部	
43	礫	珪岩				155		Ⅲ層上部	
44	礫	砂岩				8.3		Ⅲ層下部	
45	礫	砂岩				12.4		Ⅲ層下部	
46	礫	砂岩				160	51・54・58	Ⅲ層上部	
47	礫	砂岩				250	73	Ⅲ層上部	
48	礫	砂岩				315	69	Ⅲ層上部	
49	礫	砂岩				430		Ⅲ層上部	
50	礫	砂岩				155		Ⅲ層下部	
51	礫	砂岩				160	46・54・58	Ⅲ層下部	
52	礫	砂岩				340	28・35	Ⅲ層上部	
53	礫	砂岩				180		Ⅲ層上部	
54	礫	砂岩				160	46・51・58	Ⅲ層下部	
55	礫	砂岩				360	31・56・57	Ⅲ層上部	
56	礫	砂岩				360	31・55・57	Ⅲ層上部	
57	礫	砂岩				360	31・55・56	Ⅲ層下部	
58	礫	砂岩				160		Ⅲ層下部	
59	礫	砂岩				24.3	28・35・39	Ⅲ層上部	
60	礫	砂岩				710		Ⅲ層上部	
62	礫	砂岩				19.4		Ⅲ層下部	
63	礫	砂岩				155		Ⅲ層下部	
64	礫	砂岩				105		Ⅲ層上部	
66	礫	砂岩				315		Ⅲ層上部	
68	礫	珪岩				15.7		Ⅲ層下部	
69	礫	砂岩				315	48	Ⅲ層下部	
71	礫	珪岩				96		Ⅳ層上部	
73	礫	砂岩				250	47	Ⅲ層下部	
74	礫	珪岩				2.8		Ⅳ層上部	

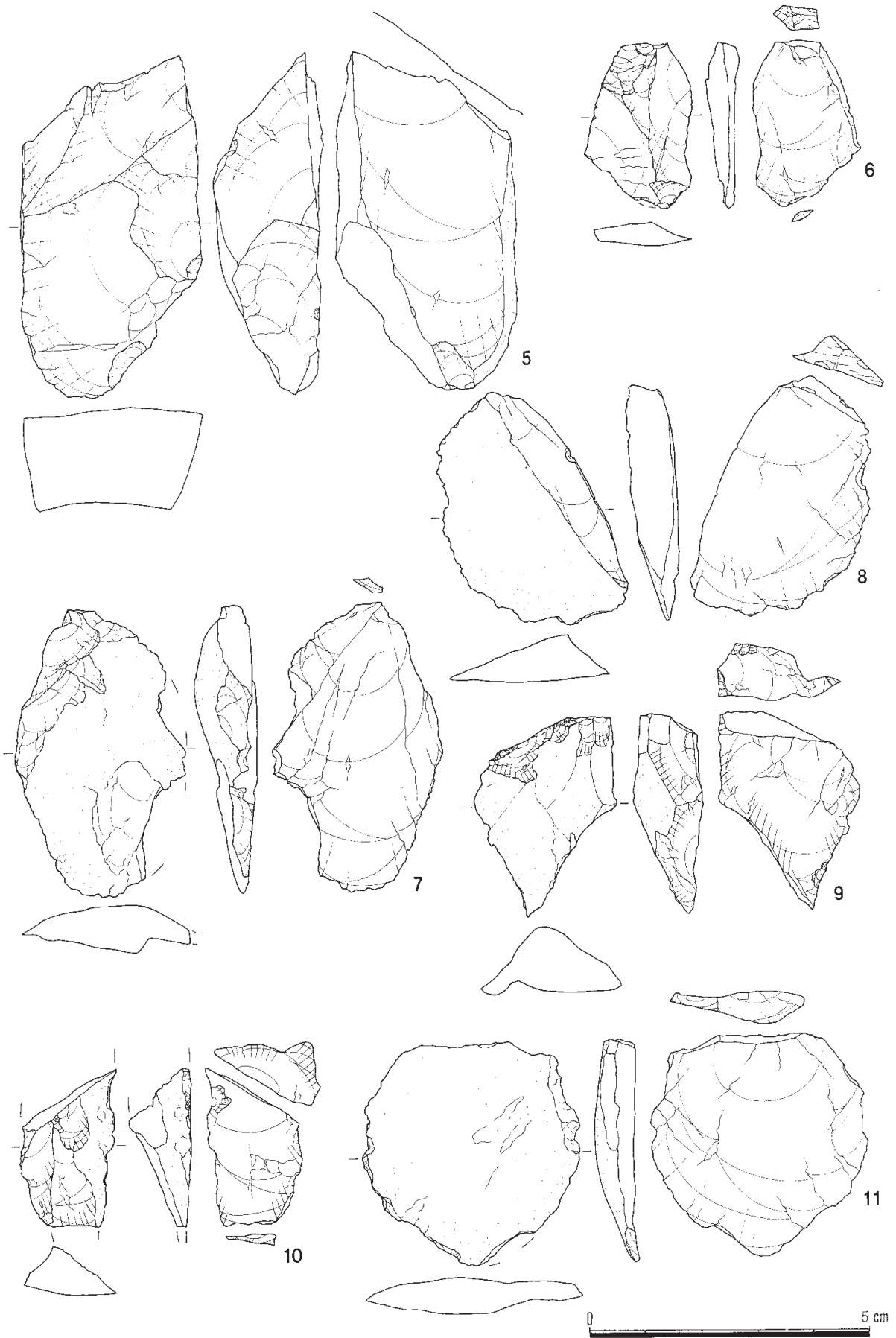
表12 10号石器集中地点礫計測表



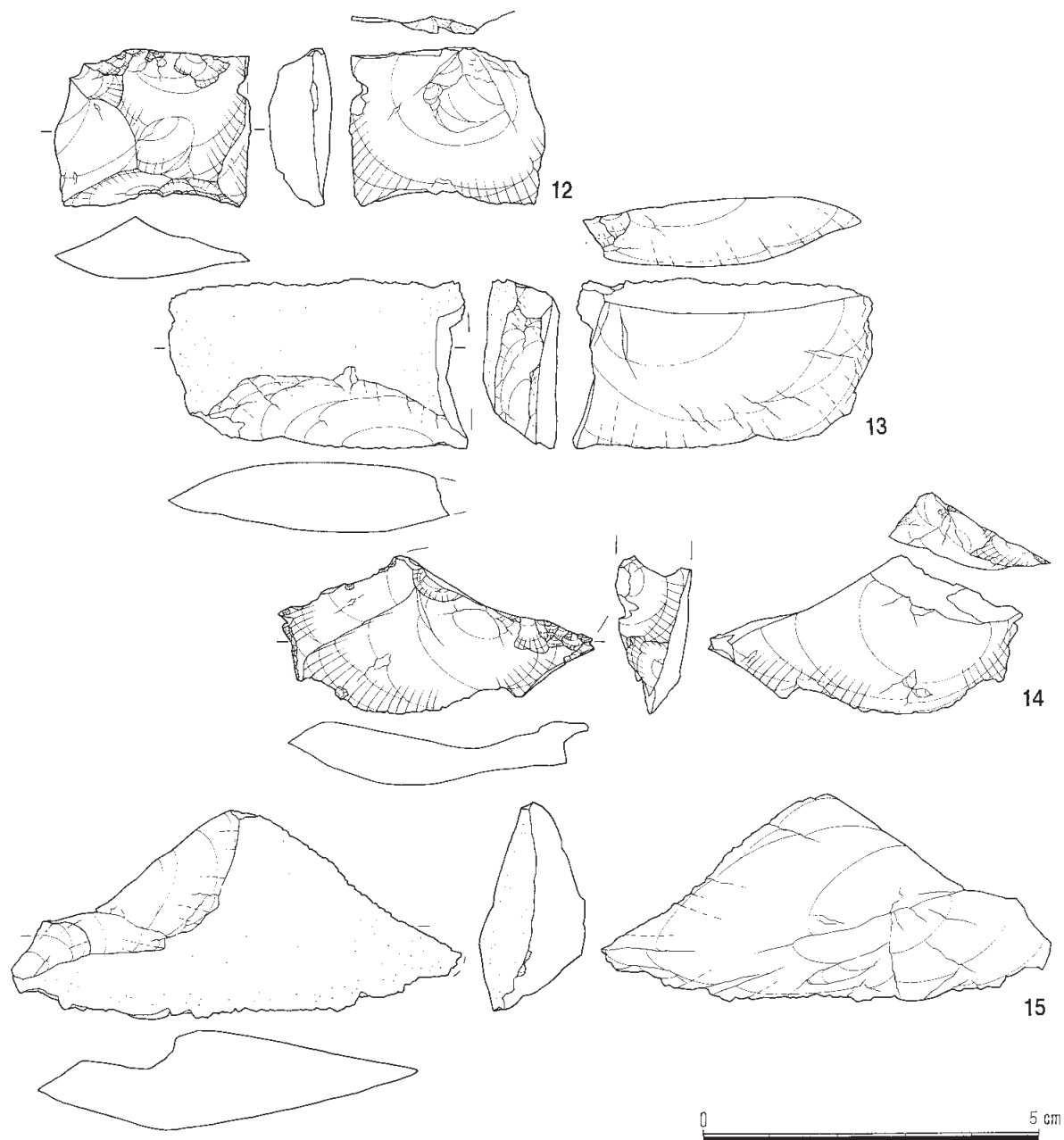
第50図 11A・B・C石器集中地点 (1/60)



第51図 11A号石器集中地点出土遺物1 (1/1)



第52图 11A号石器集中地点出土遺物2 (1/1)



第53図 11A号石器集中地点出土遺物3 (1/1)

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
1	欠								
2	剥片	黒曜石				1.55		IV層上部	
3	碎片	黒曜石				0.5		IV層上部	
4	欠								
5	剥片	黒曜石				1.1		III層下部	
6	碎片	安山岩				1		III層下部	
7	剥片	黒曜石	2.95	1.9	1.05	4.35	黒A	III層下部	2
8	碎片	黒曜石				3.7		IV層上部	
9	碎片	黒曜石				0.1		IV層上部	
10	欠								
11	碎片	黒曜石						III層下部	
12	剥片	安山岩				2.4		IV層上部	
13	碎片	黒曜石				0.9		IV層下部	
14	欠								
15	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
16	欠								
21	剥片	黒曜石	3.05	2.7	1.45	10.4		IV層上部	1
22	剥片	黒曜石	3.55	2.55	1.25	7.45	黒A	IV層上部	9
23	剥片	安山岩				2.4		III層下部	
24	碎片	安山岩				10.4		III層下部	
32	剥片	硅岩	2.95	1.95	0.6	2.85	硅A	III層下部	6
54	剥片	安山岩	4	3.85	0.75	12	安A	IV層下部	11
65	剥片	安山岩	2.55	4.45	1.15	14.85	安A	IV層上部	13
66	剥片	安山岩	6.05	3.25	1.95	39.2	安A	IV層下部	5
104	剥片	安山岩	3.1	6.7	1.55	19.9	安A	IV層下部	15
105	石核	硅岩	5.05	4.55	1.9	44.9	硅A	III層上部	3
123	剥片	黒曜石				0.7		IV層上部	
124	剥片	黒曜石				2.2		IV層下部	
127	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
128	碎片	黒曜石				0.4		IV層下部	
130	碎片	安山岩						III層上部	
131	欠								
132	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
133	欠								
134	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
135	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	
136	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	
137	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
138	碎片	黒曜石				0.4		IV層下部	
139	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
140	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
141	剥片	安山岩	6.35	5	1.75	44.95	安A	IV層下部	4
142	碎片	黒曜石				0.3		IV層下部	
143	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
144	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
145	欠								
146	欠								
147	欠								
148	欠								
149	欠								
150	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
151	欠								
152	剥片	安山岩	4.25	3.3	0.85	9.3	安A	V層上部	8
153	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	
154	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	

表13 11A号石器集中地点石器計測表1

第2章 旧石器時代の遺構と遺物

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
155	碎片	黒曜石				0.1			
156	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	
157	剥片	黒曜石	2.35	4.7	1.05	6.65		IV層下部	14
158	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	
159	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	
160	剥片	黒曜石				1.2		V層上部	
161	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	
162	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	
163	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
164	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
179	碎片	黒曜石				0.6		V層上部	
181	剥片	安山岩	5.15	3.05	1.1	13.2	安A	V層上部	7
183	欠								
184	剥片	黒曜石	2.8	1.7	1.1	3.3	黒A	IV層下部	10
185	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	
193	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	
194	碎片	黒曜石				0.3		IV層下部	
195	剥片	黒曜石	2.35	2.9	0.95	5.15	黒A	IV層下部	12

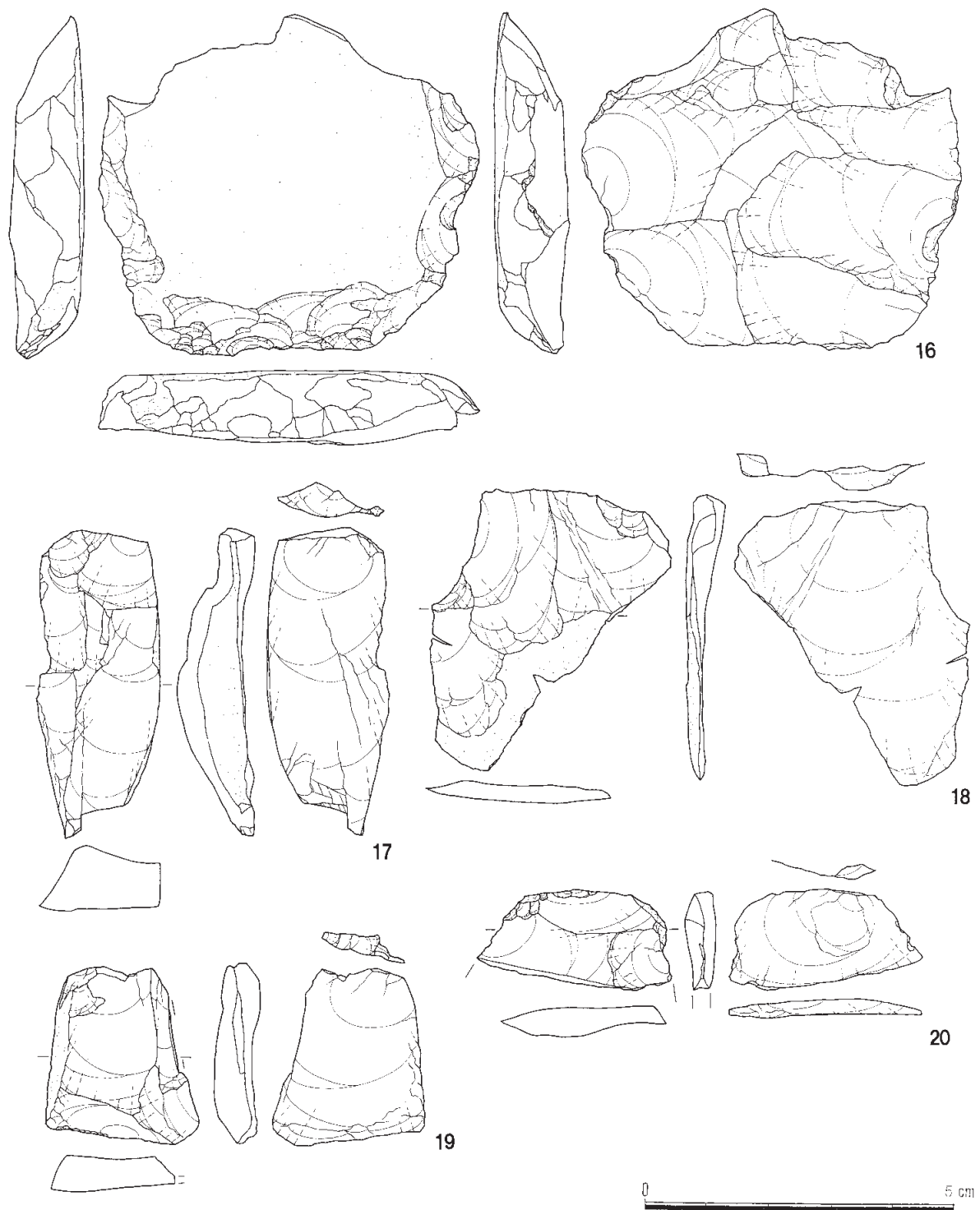
表13 11A号石器集中地点石器計測表2

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
35	礫	砂岩				90		IV層上部	
37	礫	砂岩				1060	40・45・47・48・111・167	IV層下部	
40	礫	砂岩				1060	37・45・47・48・111・167	IV層下部	
41	礫	砂岩				380	59・80	IV層下部	
42	礫	砂岩				180		IV層下部	
43	礫	砂岩				600		IV層下部	
44	礫	砂岩				280	49・57	IV層上部	
45	礫	砂岩				1060	37・40・47・48・111・167	IV層下部	
46	礫	砂岩				15		IV層上部	
47	礫	砂岩				1060	37・40・45・48・111・167	IV層下部	
48	礫	砂岩				1060	37・40・45・47・111・167	IV層下部	
49	礫	砂岩				280	44・57	IV層下部	
50	礫	砂岩				970	93・94・95・96・166・168	IV層下部	
52	礫	砂岩				120	85・177	IV層上部	
53	礫	砂岩				69.1		IV層下部	
55	礫	硅岩				110	82・169	IV層下部	
56	礫	砂岩				59.7	171	IV層上部	
57	礫	砂岩				280	44・49	IV層下部	
58	礫	砂岩				120	12・122・172	III層下部	
59	礫	砂岩				380	41・80	IV層上部	
60	礫	砂岩				3.8		IV層上部	
61	礫	砂岩				120		IV層上部	
63	礫	砂岩				110		IV層下部	
64	礫	硅岩				76.2		IV層下部	
67	礫	砂岩				340	68・69・71・72・73・173・186	IV層下部	
68	礫	砂岩				340	67・69・71・72・73・173・186	IV層下部	
69	礫	砂岩				340	67・68・71・72・73・173・186	IV層下部	
70	礫	礫岩				160		IV層下部	
71	礫	砂岩				340	67・68・69・72・73・173・186	IV層下部	
72	礫	砂岩				340	67・68・69・71・73・173・186	IV層下部	
73	礫	砂岩				340	67・68・69・71・72・173・186	IV層下部	
74	礫	砂岩				230	81・90・103	IV層下部	
75	礫	砂岩				130		IV層下部	

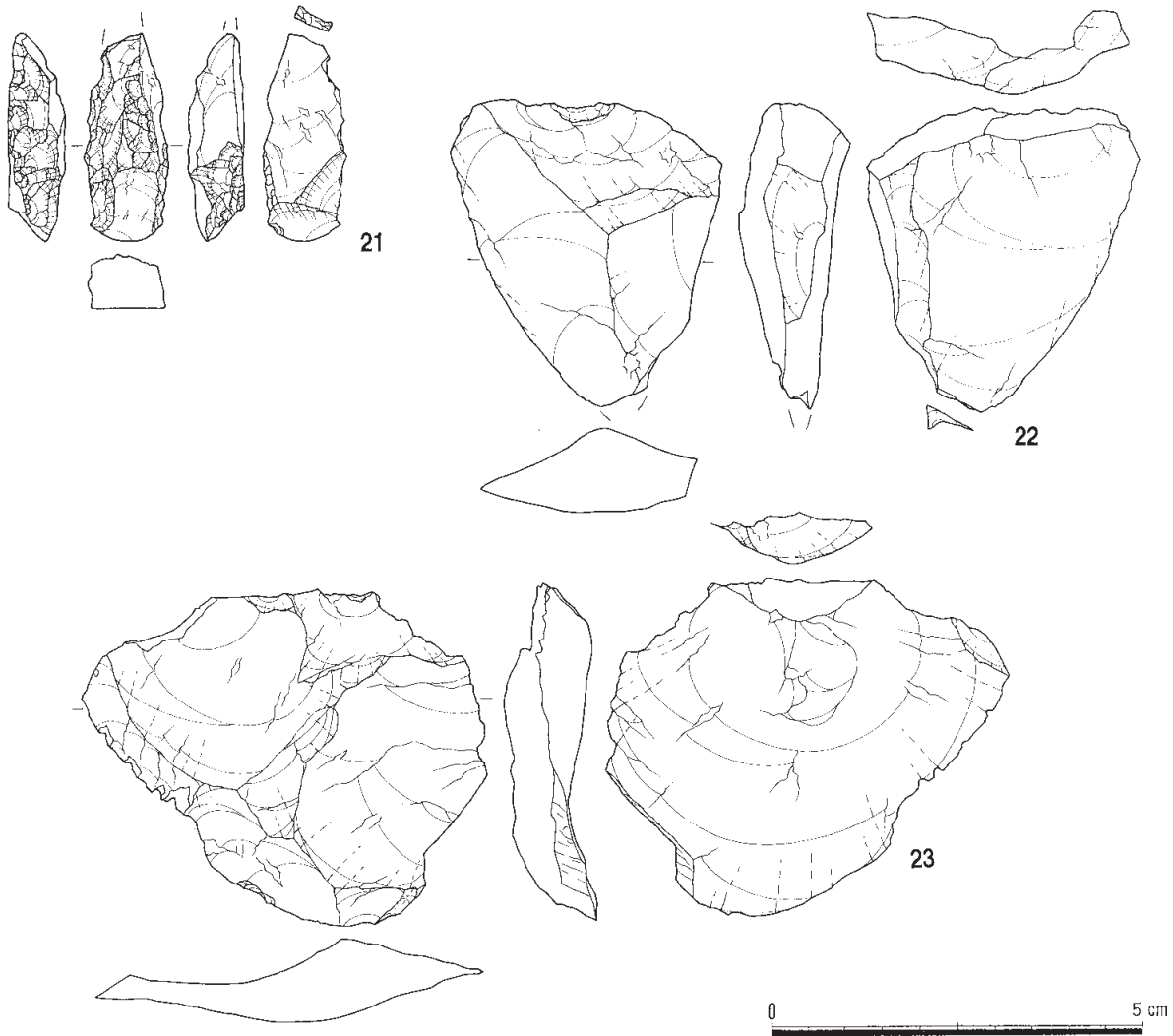
表14 11A号石器集中地点礫計測表1

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
76	礫	砂岩				130	182	IV層下部	
77	礫	砂岩				82.7		IV層下部	
78	礫	砂岩				490	79	IV層下部	
79	礫	砂岩				490	78	IV層下部	
80	礫	砂岩				380	41・59	III層下部	
81	礫	砂岩				230	74・90・103	IV層下部	
82	礫	硅岩				110	55・169	IV層上部	
83	礫	砂岩				260	99・100・101・178	IV層上部	
84	礫	砂岩				12.6		IV層下部	
85	礫	砂岩				120	52・177	IV層下部	
86	礫	砂岩				48.8	92・109・125	IV層上部	
87	礫	砂岩				15.9		IV層下部	
88	礫	砂岩				3.9		IV層上部	
89	礫	砂岩				67.3		IV層下部	
90	礫	砂岩				230	74・81・103	IV層下部	
91	礫	砂岩				620	192・196	IV層下部	
92	礫	砂岩				48.8	86・109・125	IV層下部	
93	礫	砂岩				970	50・94・95・96・166・168	IV層下部	
94	礫	砂岩				970	50・93・95・96・166・168	IV層下部	
95	礫	砂岩				970	50・93・94・96・166・168	IV層下部	
96	礫	砂岩				970	50・93・94・95・166・168	IV層下部	
97	礫	砂岩				210	52・98・102・186	IV層下部	
98	礫	砂岩				210	52・97・102・186	IV層下部	
99	礫	砂岩				260	83・100・101・178	III層下部	
100	礫	砂岩				260	83・99・101・178	IV層下部	
101	礫	砂岩				260	83・99・100・178	IV層下部	
102	礫	砂岩				210	52・97・98・186	IV層下部	
103	礫	砂岩				230	74・81・90	IV層下部	
107	礫	砂岩				450		IV層下部	
108	礫	砂岩				13.6		IV層上部	
109	礫	砂岩				48.8	92	IV層上部	
110	礫	砂岩					175	IV層下部	
111	礫	砂岩				1060	37・40・45・47・48・167	IV層下部	
122	礫	砂岩				120	12・58・172	IV層下部	
125	礫	砂岩				48.8	86・92・109	IV層下部	
165	礫	砂岩				11.7		III層下部	
166	礫	砂岩				970	50・93・94・95・96・168	IV層下部	
167	礫	砂岩				1060	37・40・45・47・48・111	IV層下部	
168	礫	砂岩				970	50・93・94・95・96・166	IV層下部	
169	礫	硅岩				110	55・82	IV層下部	
170	欠								
171	礫	砂岩				59.7	56	IV層下部	
172	礫	砂岩				120	12・58・122	V層上部	
173	礫	砂岩				340	67・68・69・71・72・73・186	IV層下部	
174	礫	砂岩				280		V層上部	
175	礫	砂岩					110	V層上部	
176	礫	硅岩				91.3		V層上部	
177	礫	砂岩				120	52・85	IV層下部	
178	礫	砂岩				260	83・99・100・101	V層上部	
180	礫	硅岩				12.4		V層上部	
182	礫	砂岩				130	76	V層上部	
186	礫	砂岩				340	67・68・69・71・72・73・173	IV層下部	
187	礫	砂岩				1.6		IV層上部	
192	礫	砂岩				620	91・196	IV層下部	
196	礫	砂岩				620	91・192	V層上部	

表14 11A号石器集中地点礫計測表2



第54図 11B号石器集中地点出土遺物 (1/1)



第55图 11C号石器集中地点出土遺物 (1/1)

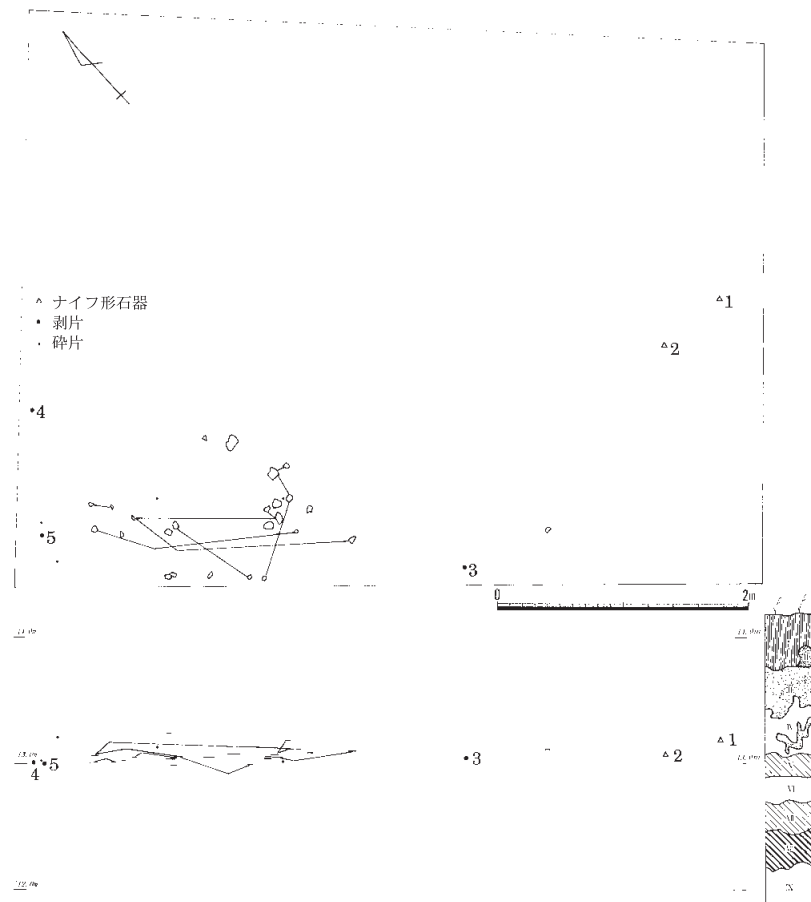
第2章 旧石器時代の遺構と遺物

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
17	碎片	黒曜石				0.2		Ⅲ層下部	
18	碎片	安山岩				0.4		Ⅲ層下部	
19	碎片	凝灰岩				0.3		Ⅲ層下部	
25	剥片	頁岩				1.3		Ⅲ層下部	
26	剥片	凝灰岩	4.95	1.95	1.3	10.95		Ⅳ層上部	17
27	剥片	凝灰岩	2.85	2.45	0.7	5.8		Ⅲ層下部	19
28	剥片	頁岩	1.65	3.1	0.5	2.35	頁A	Ⅲ層下部	20
29	剥片	珪岩				3.6		Ⅲ層下部	
30	碎片	安山岩				1.7		Ⅲ層下部	
31	剥片	安山岩	4.55	3.85	0.6	5.7		Ⅲ層下部	18
112	礫	砂岩				30.1		Ⅲ層下部	
113	搔器	頁岩	5.5	6.1	1.2	50.1	頁A	Ⅲ層上部	16
114	礫	砂岩				150		Ⅲ層上部	
115	礫	砂岩				180		Ⅲ層上部	
116	礫	砂岩				270		Ⅲ層上部	
117	礫	砂岩				190		Ⅲ層上部	
118	礫	砂岩				31.8		Ⅲ層上部	
129	碎片	珪岩				1.4		Ⅲ層上部	
165	礫	砂岩				11.7		Ⅲ層下部	
188	剥片	頁岩				2.8		Ⅳ層下部	
189	碎片	凝灰岩				0.5		Ⅲ層下部	
191	礫	砂岩				200		Ⅲ層下部	

表15 11B号石器集中地点石器・礫計測表

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
20	ナイフ形石器	黒曜石	2.9	1.15	0.75	2.55		Ⅳ層上部	21
33	礫	砂岩				110		Ⅳ層上部	
34	礫	珪岩				60		Ⅳ層上部	
36	碎片	安山岩				0.6		Ⅳ層上部	
119	礫	砂岩				51.5		Ⅳ層下部	
120	剥片	安山岩	4.6	5.4	1.2	20.3	安A	Ⅳ層上部	23
121	剥片	安山岩	4.1	3.7	1.5	18.95	安A	Ⅳ層下部	22

表16 11C号石器集中地点石器・礫計測表



第56図 12号石器集中地点 (1/60)

破碎されている。石器に使用された石材は、黒曜石3点・硅岩3点・頁岩2点・硬砂岩1点からなる。

ナイフ形石器 (1・2)

1は縦長剥片の基部を石器の先端とする二側縁加工のナイフ形石器である。右側縁は斜断するように刃潰し加工を加えて打面を取り去る。左側縁にも刃潰し加工が加えられる。頁岩製。

2は上下端を欠損する。横長剥片を素材とし、左側縁と右側縁下半に刃潰し加工が加えられる。頁岩製。

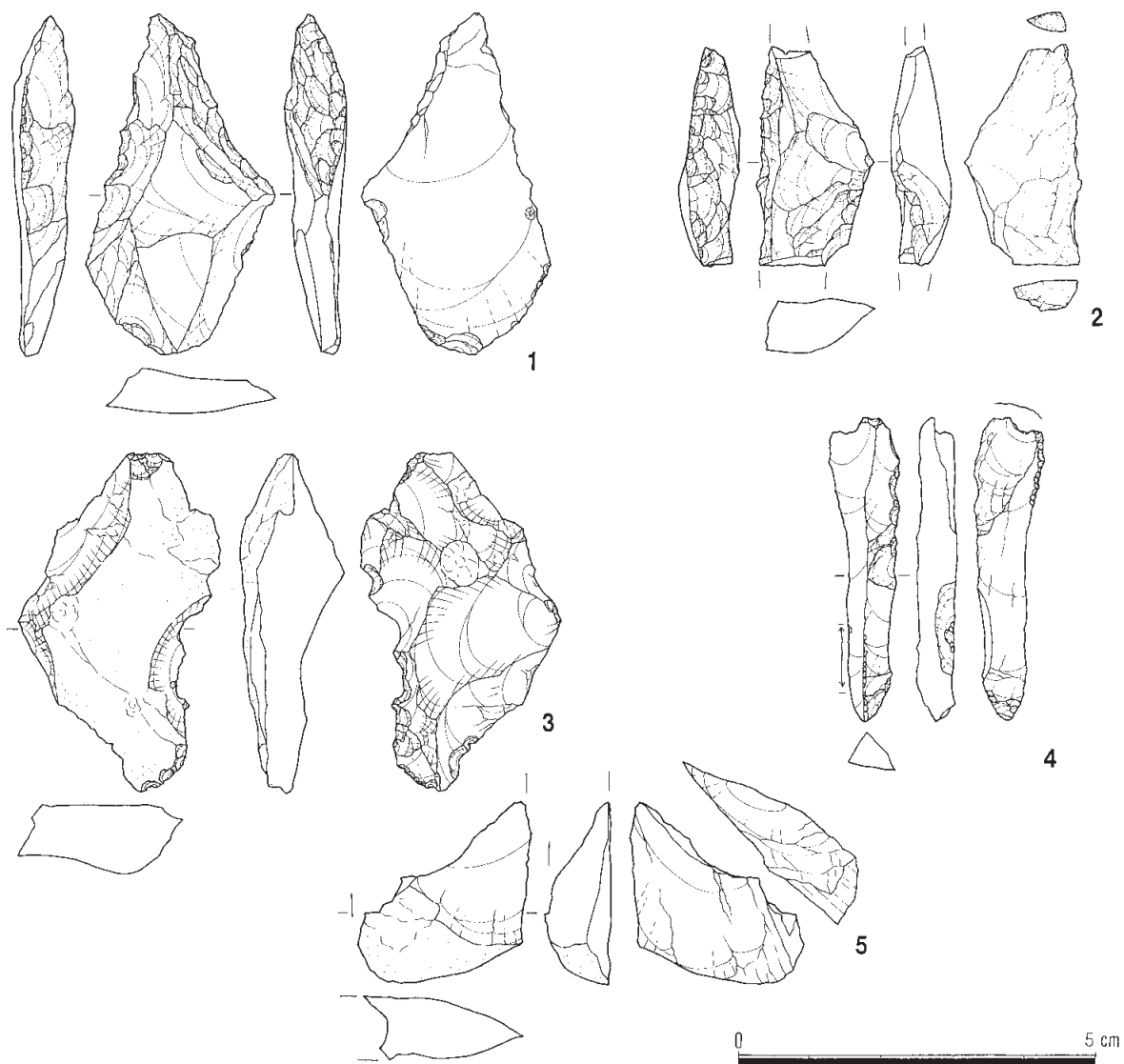
二次加工のある剥片 (3・4)

3は鋸歯状の加工により抉り入り部を作出する。黒曜石製。

4は石刃状の剥片の右側縁上部に加工が加えられる。硅岩製。

剥片 (5)

剥片の上部過半を欠く。縦長剥片か。硅岩製。



第57図 12号石器集中地点出土遺物 (1/1)

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
1	ナイフ形石器	頁岩	4.75	2.65	0.85	7.55		IV層下部	1
2	ナイフ形石器	頁岩	3.05	1.6	0.85	3.95		V層上部	2
3	抉入石器	黒曜石	4.75	2.8	1.45	10.35		IV層下部	3
4	欠								
5	碎片	珪岩				0.2		IV層下部	
6	碎片	黒曜石				0.1		IV層下部	
7	剥片	珪岩	4.25	0.95	0.55	1.8		V層上部	4
8	剥片	珪岩	2.55	2.4	0.8	4.4		V層上部	5
9	碎片	硬砂岩				0.5		V層上部	
10	碎片	黒曜石				0.1		V層上部	

表17 12号石器集中地点石器計測表

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
11	礫	砂岩				610	26・27・28	V層上部	
12	礫	珪岩				170	18・19・29・36	IV層下部	
13	礫	砂岩				26.6	15	V層上部	
14	礫	珪岩				28.3		V層上部	
15	礫	砂岩				26.6	13	V層上部	
16	礫	珪岩				275	23・24・31・35	IV層下部	
17	礫	砂岩				3.7		IV層下部	
18	礫	珪岩				170	12・19・29・36	IV層下部	
19	礫	珪岩				170	12・18・29・36	IV層下部	
20	礫	砂岩				5.3		IV層下部	
21	礫	砂岩				550		IV層下部	
22	礫	砂岩				180		V層上部	
23	礫	珪岩				275	16・24・31・35	V層上部	
24	礫	珪岩				275	16・23・31・35	V層上部	
25	礫	砂岩				9.5		V層上部	
26	礫	砂岩				610	11・27・28	V層上部	
27	礫	砂岩				610	11・26・28	V層上部	
28	礫	砂岩				610	11・26・27	V層上部	
29	礫	珪岩				170	12・18・19・36	V層上部	
30	礫	砂岩				33.6		V層上部	
31	礫	珪岩				275	16・23・24	V層上部	
32	礫	砂岩				11.9		V層上部	
33	礫	砂岩				15		V層上部	
34	礫	砂岩				87.8		V層上部	
35	礫	珪岩				275	16・23・24・31	IV層下部	
36	礫	砂岩				170	12・18・19・27	V層上部	

表18 12号石器集中地点礫計測表

第3章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 住居跡

12号住居跡（第58図）

〔位置〕 4 I 地点。

〔構造〕 東側調査区外。（平面形）不整円形。（規模）不明×562cm。（主軸方位）N-38°-W。（壁高）6～20cmを測り、20°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13～20cm・下幅4～9cm・深さ7～22cmを測る。（床面）壁際を除いて硬化面が認められる。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。石囲炉で、94×87cm・深さ30cm前後の楕円形の掘り込みをもつ。（柱穴）ピットは7本されたが、比較的深度のある4本が支柱穴となろうか。

〔覆土〕 ローム粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 覆土中からの出土が大部分である。炉から石棒が検出された。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

12号住居跡出土遺物（第59・60図、第312図1・2、第336図2、第337図4、第345図1）

第59図1は炉跡上から出土したキャリパー形土器の口頸部。1/5程の破片からの推定復元のため、径は正確さに欠ける可能性がある。Lの撚糸文を横位に施文して地文とし、2本一対の隆帯を「ㄩ」字状に貼付する。頸部は無文帯になる。表面の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫を含む。

第60図2は口唇部に沿って竹管状の施文具によるの押引文が2条巡る。口縁部下位にも押引文が波状に巡らされる。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。

3は押し引きによる連続刺突文が上位に2条、下位には波状及び斜位に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。

4は口縁部破片。Lの撚糸文を横位に施し地文とし、2本一対の隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

5は隆帯により頸部を区画する。RLの単節斜縄文が施される。頸部は無文帯になる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には輝石を多く含む。

6は条線を地文とする。貼付されている隆帯は蛇行する懸垂文になろうか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

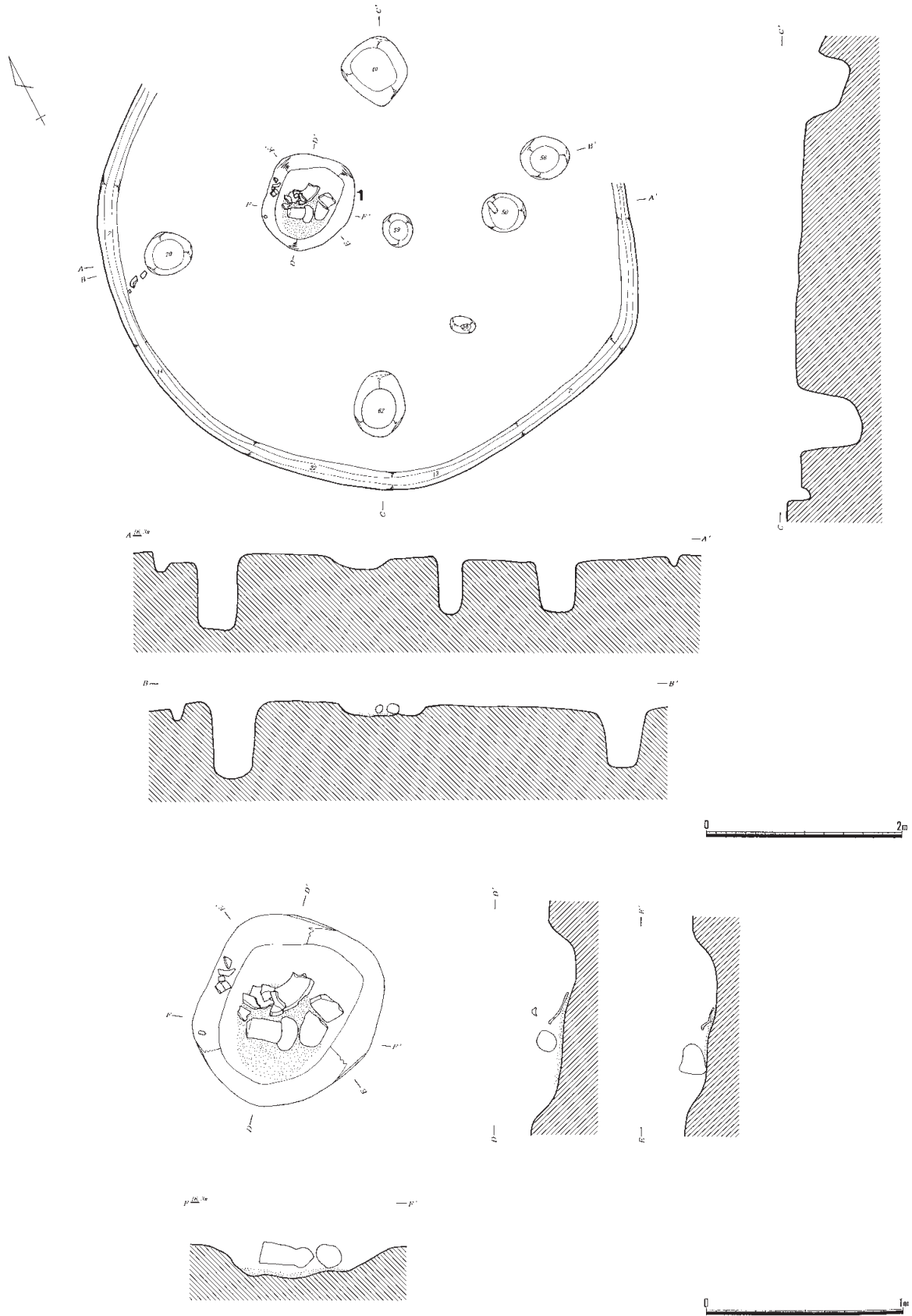
第312図1・2は打製石斧。1は頭部を欠く。横長剥片を使用か。表面には礫面を残す。刃部は円刃状を呈する。先端には線条痕らしき痕跡が認められる。137.7g。2は1/2程の遺存度。横長剥片を素材とする。刃部は円刃状を呈する。78.6g。共に硬砂岩製。

第336図2は石皿。図示した面が使用により平滑になっている。炉の囲い石として使用されていた。7,340g。砂岩製。

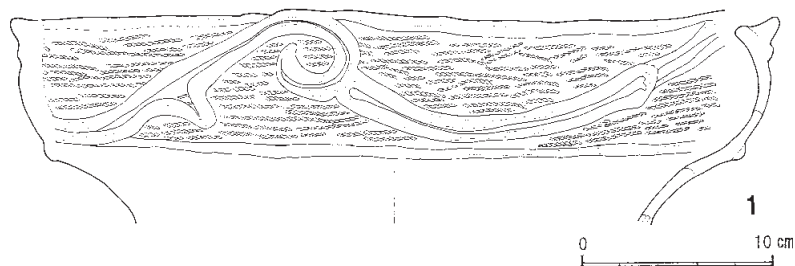
第337図4は石棒。基部側を欠く。頭部断面は楕円形で側縁が尖る。体部断面は楕円形を呈し、基部に向けて厚みを増す。全体の成形は叩打によってなされる。炉の囲い石として使用されていた。被熱の影響で表面に剥離・亀裂が顕著である。5,240g。花崗岩製。

第345図1は土器片錘。ほぼ円形に仕上げられる。22.1g。

第59図1・第336図2・第337図4を除き、覆土中の出土。



第58图 12号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)



第59図 12号住居跡出土遺物 1 (1/4)

13号住居跡 (第61図)

〔位置〕 8 I 地点。

〔構造〕 住居の西側1/4弱の調査に終わった。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 33~37cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅23~32cm・下幅6~10cm・深さ8~19cmを測る。(床面) 平坦で炉の周辺が硬化している。遺存状態は良好である。(炉) 浅鉢形土器を埋設している埋甕炉で、北側は土器の破損部分を礫で補充している様子が見られる。径約55cm・深さ30cmの略円形の掘り込みをもつ。(柱穴) 深度のある3本が主柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 4層 にぶい褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中からの出土が大部分である。

〔時期〕 加曾利 E I 式期。

13号住居跡出土遺物 (第62・63図、第333図1・2、第338図1~3、第345図2~5)

第62図1は浅鉢形土器。底部から直線的に大きく開き、肩部で強く内屈し、口縁部は内傾ぎみに立つ。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) ~ 明赤褐色 (5YR5/6) を呈する。胎土には細礫・軽石を含む。炉の埋設土器。

第63図2は隆帯に沿って櫛歯状施文具による条線を施す。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

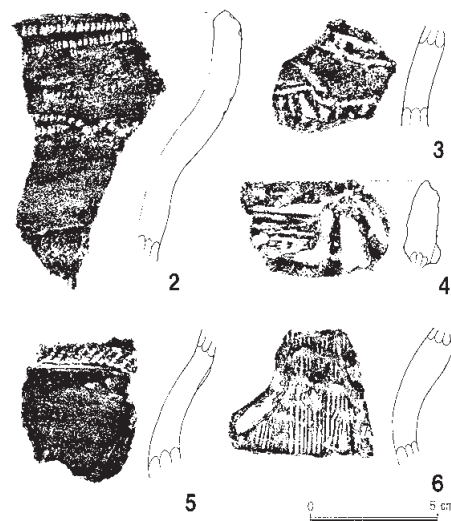
3は口唇部直下に押し引きによる連続刺突文を巡らせ、口縁部には2状一對の連続刺突文を斜位に施す。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には雲母を多く含む。

4は細い隆帯を貼付した土器。上位は楕円形に区画されようか。区画内は隆帯に沿って連続刺突文が施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には雲母を含む。

5は断面三角形の隆帯で区画を設ける。ヘラ状施文具による刺切文を縦位に連続して施す。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には雲母を多く含む。

6は平行する波状沈線文を横位に施す。下段には垂下する沈線がみられる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には雲母を多く含む。

7は平行する沈線を巡らせ、刺突文が加えられる。下位は楕円形の区画になろうか。色調はにぶい赤褐色 (5



第60図 12号住居跡出土遺物 2 (1/3)

YR5/4) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

8はキャリパー形の土器になろうか。隆帯による区画文と充填文からなる。隆帯上には押捺が加えられる。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。

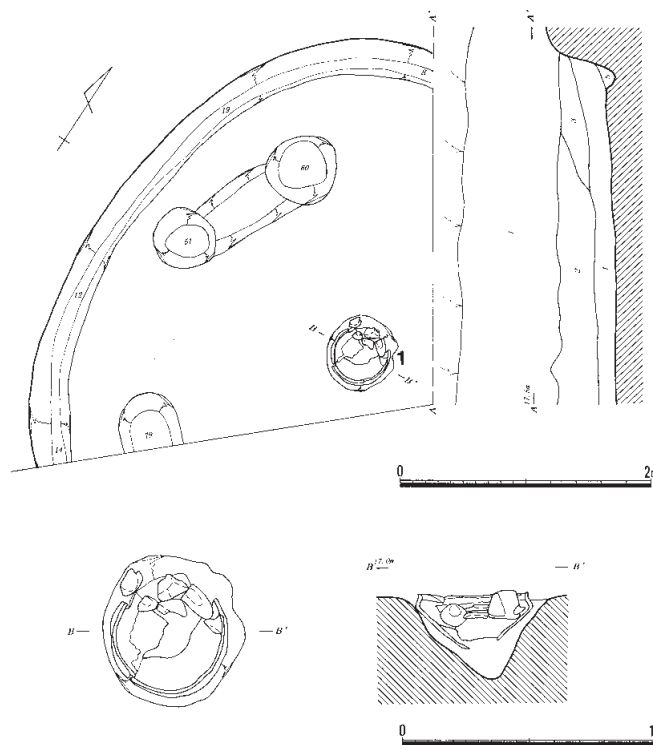
9は隆帯を挟んで押し引きによる幅広の連続刺突文が施され、幅狭の連続刺突文が付加される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には雲母を多く含む。

10は刻みで加飾された隆帯で区画し、三叉文や集合する沈線が充填される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

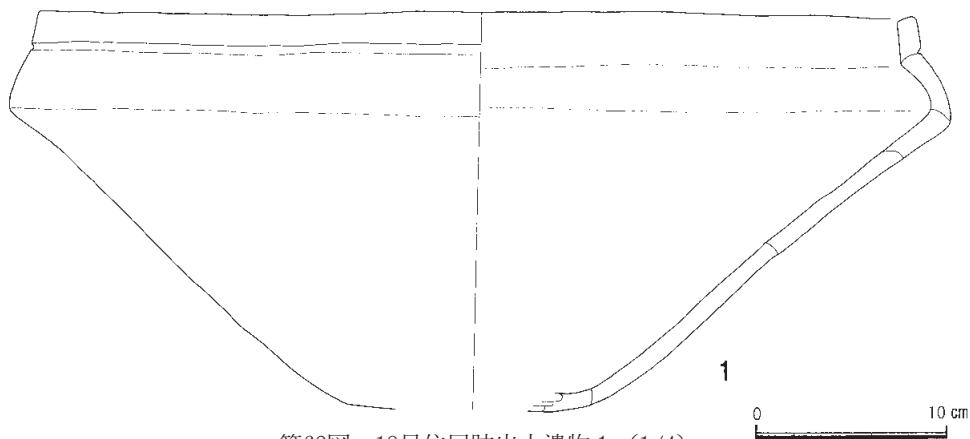
11は刻みのある隆帯で区画を作り、集合した連続刺突文が充填される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・チャートを僅かに含む。

12はRの撚糸文が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には輝石を含む。

13はLの撚糸文を縦位に施し地文とし、2本一對の隆帯を貼付する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、



第61図 13号住居跡(1/60)、炉跡(1/30)



第62図 13号住居跡出土遺物1(1/4)

胎土には輝石を僅かに含む。

14はLRの単節斜縄文を地文とし、隆帯による渦巻文や長楕円形の区画が作られる。頸部は無文帯になる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。

15は波状口縁の土器。RLの単節斜縄文を地文とし、隆帯により区画が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

16はLRの単節斜縄文を地文とする。2本の隆帯が巡り、蛇行すると思われる隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には輝石を多く含む。

17はLRの単節斜縄文を地文とする。隆帯が巡り、懸垂文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

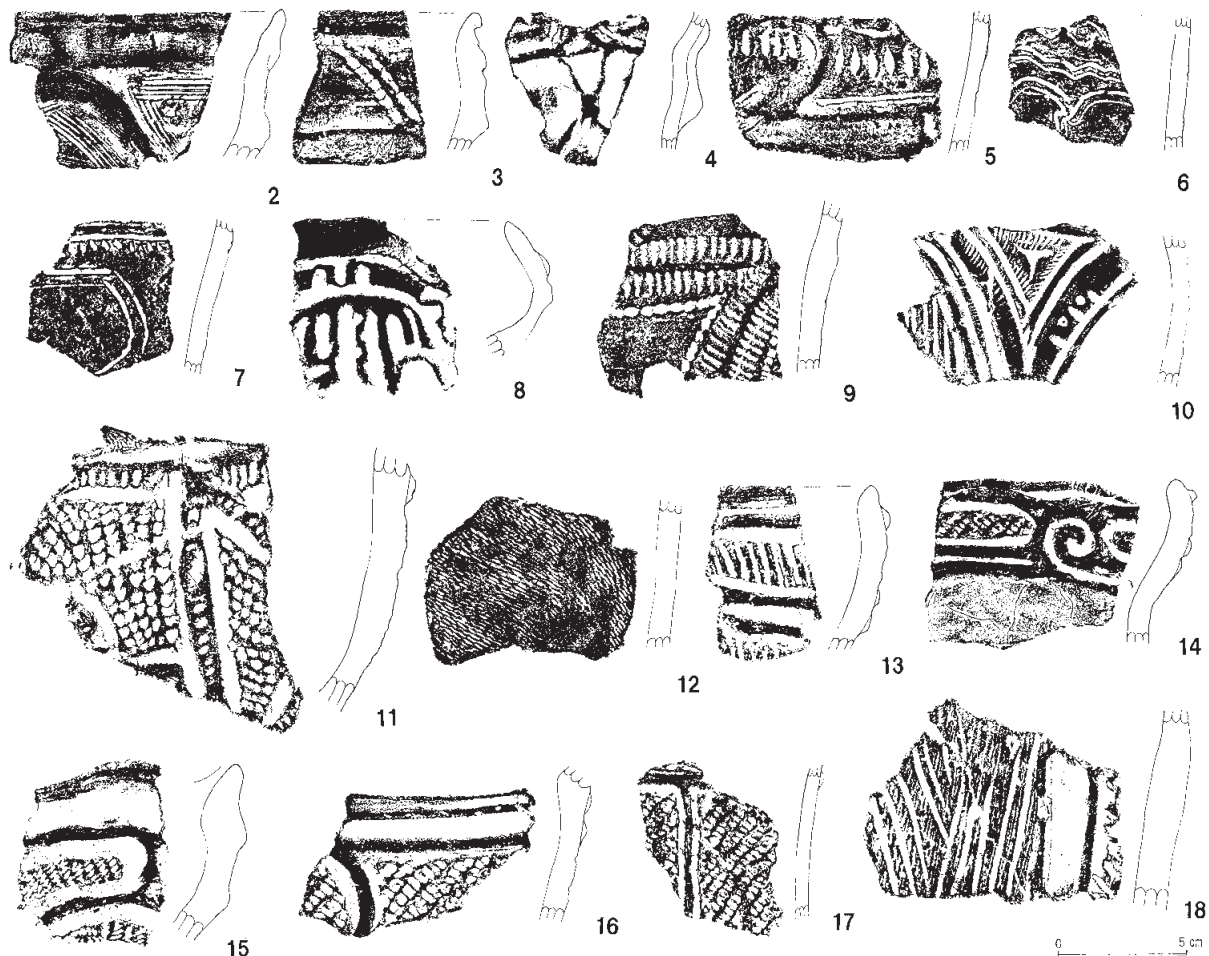
18は条線を地文とする。2本一対の隆帯を垂下させ、縦位・斜位の集合する沈線文を施す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には輝石・石英を含む。

第333図1・2は石皿。1は凹石を兼ねる。片面に3孔がある。2,180g。石英閃緑岩製。2は両面に皿状のくぼみがみられる。495g。緑泥片岩製。

第338図1・2は二次加工を有する剥片。1は礫面を残す横長の剥片の上辺に加工が加えられる。15.1g。安山岩製。2は剥片の下端に加工が加えられる。28g。黒曜石製。3は幅広の剥片。7.2g。凝灰岩製。

第345図2～5は土器片錘。いずれも長軸側に刻みが増えられている。重量はそれぞれ13.6・21.5・13.9・56.2gである。

第62図1を除き、覆土中の出土。



第63図 13号住居跡出土遺物2 (1/3)

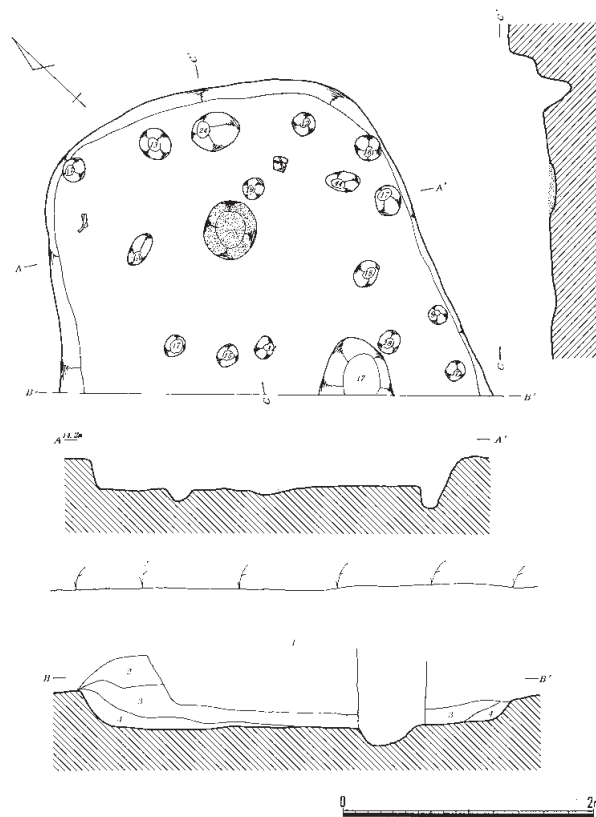
14号住居跡（第64図）

〔位置〕 11地点。

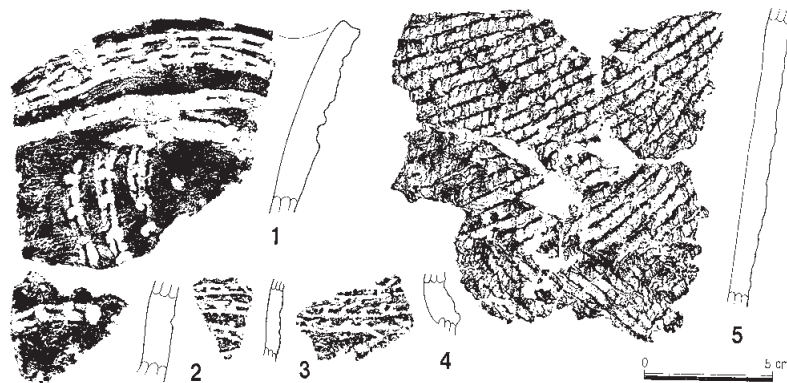
〔構造〕 南側調査区外。82Yに切られる。（平面形）不整長方形。（規模）不明×310cm。（主軸方位）N-39°-E。（壁高）18~32cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）特に硬化している部分は認められなかったが、全体に遺存状態は良好である。（炉）住居中央からやや北東に偏って位置する。46×43cmの楕円形を呈する地床炉で深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）比較的多く検出されているが、不規則な配置であるため主柱穴は特定できなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土及び82Y覆土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。



第64図 14号住居跡 (1/60)



第65図 14号住居跡出土遺物 (1/3)

4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 黒浜式期。

14号住居跡出土遺物（第65図）

1～4は半截竹管の押し引きによる側線付連続爪形文が施される。1は波状口縁の土器で、口唇に沿って2条一對、間隔を開けて1条の連続爪形文が巡る。以下、縦位に3条、横位に1条の連続爪形文がみられるが、これは連結して一連の曲線的なモチーフになるものと思われる。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。2は1と同一個体の可能性がある。連続爪形文で曲線を描く。色調は褐灰色（10YR4/1）を呈する。3・4は連続爪形文を横位・斜位に施す。3の色調は灰黄褐色（10YR4/2）、4の色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。

5はLRの単節斜縄文を羽状に施す。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。

以上は、胎土に繊維を多く含む。覆土中の出土。

すべて覆土中からの出土である。

15号住居跡（第66～68図）

〔位置〕 13 I 地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）630×580cm。（主軸方位）N—S。（壁高）60～71cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅30～55cm・下幅8～15cm・深さ15～28cmを測り、全周する。（床面）壁際周辺と炉の周囲を除き硬化面が認められる。全体に平坦で、遺存状態は良好である。（炉）住居中央からやや北に偏って位置する。径80cmの不整円形を呈する地床炉で、深さ45cmを測る。炉跡内に残された大型の礫は、石囲いに使用されたものであろうか。また、掘り方の形状からみて、炉体土器が抜き取られた可能性がある。（柱穴）深度のある6本が主柱穴と思われるが、いずれも重複した状態のため住居の建替えがあった可能性がある。（集石）炉の東側に位置する。覆土最下層に床面と一部接して径50cmの範囲で拳大の礫が集中する。土層観察の結果、住居廃絶後に構築された可能性が大きい。礫は熱をうけていて、掘り込み内の覆土中には炭化材小片・粒子、焼土粒子を多く含む。

〔覆土〕

1層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。中央下部にいくにつれて焼土小ブロック・炭化材小片がめだつ。遺物を多く含む。

2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

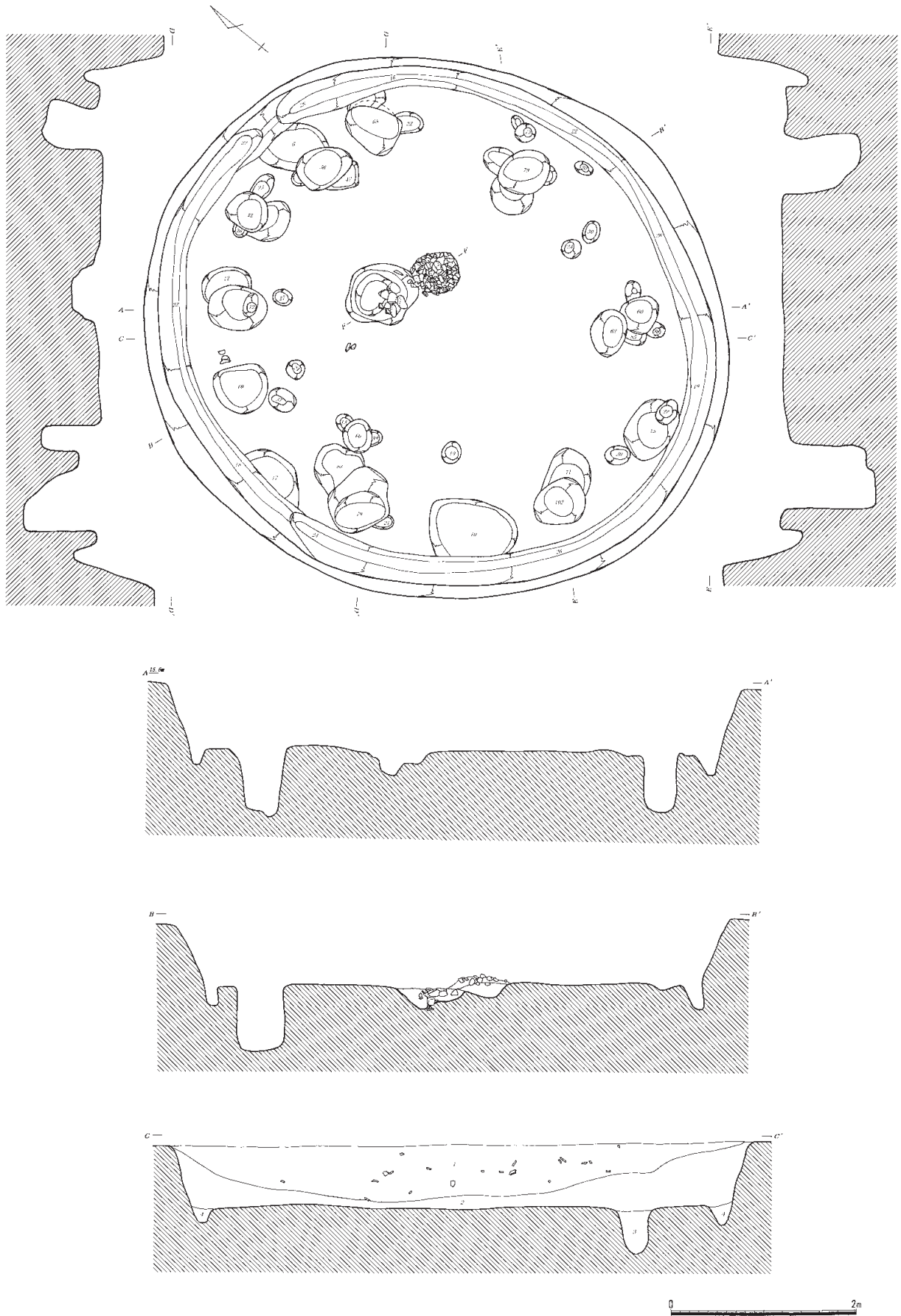
〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多くの土器が出土するが、大部分が破片の状態である。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

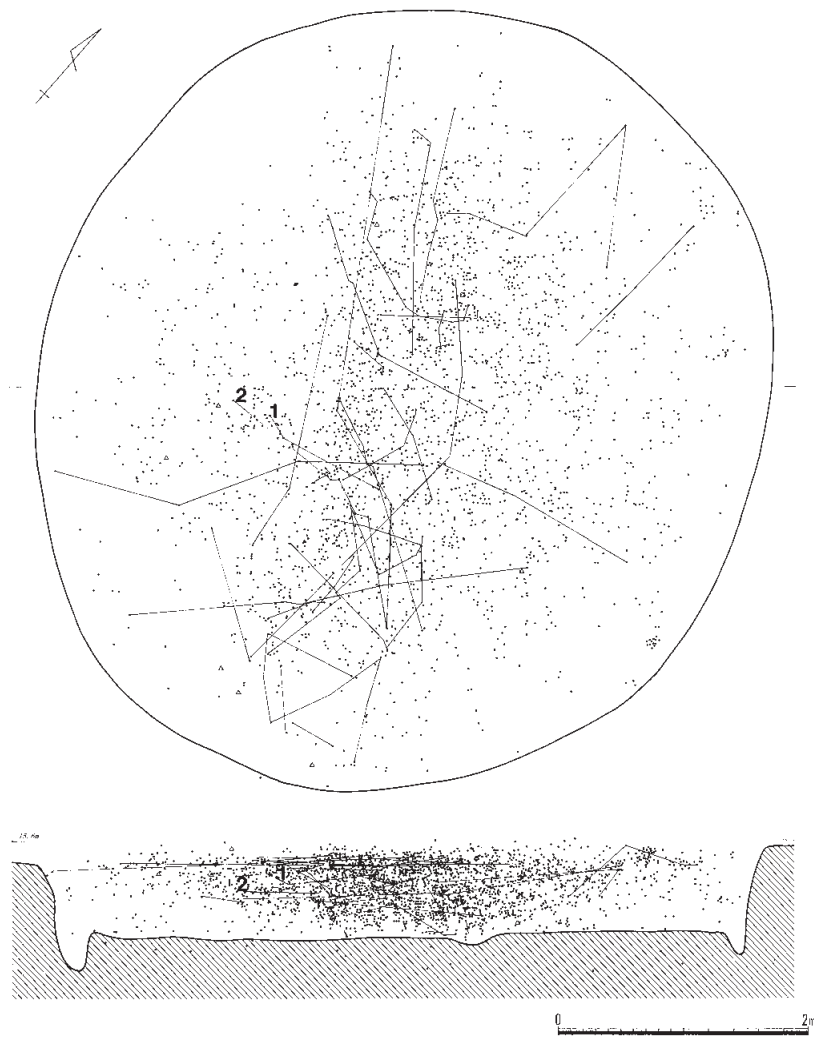
15号住居跡出土遺物（第69～71図、第312図3～11、第331図1、第338図4～10、第345図6～13）

第69図1は4単位の突起をもつ小型のキャリパー形土器。図正面に位置した突起は他より大型で、橋状に付される。表裏・両側面及び上面に孔が穿たれる。表面は孔の周囲に沈線を巡らせ左右に渦巻文を配する。両側面及び上面の孔の周囲にも沈線が巡る。反対側の突起は破損していて詳細は不明であるが、残存部からみると正面のものに相似たものになるものと思われる。左右の突起は側面に孔がある小ぶりの橋状のものである。口縁部には8単位の楕円形の区画が設けられ、縦位の沈線が充填される。頸部は2本一對の隆帯で区画され無文帯になる。図示されていないが、胴部にはLRの単節斜縄文が施され、2本一對の隆帯による懸垂文が貼付される。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。

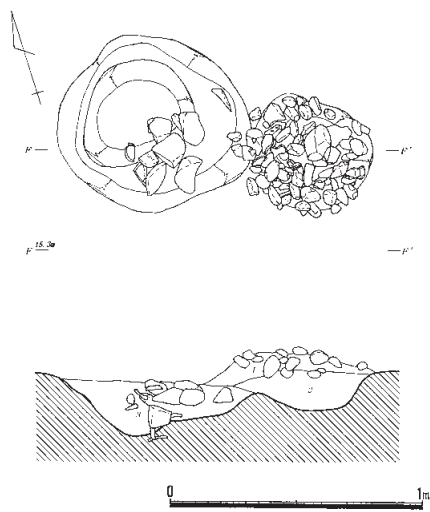
2は鉢形土器。胴部は上位で強く内屈し算盤玉状を呈し、口縁部はほぼ直立する。屈曲部には刻みが加えられた



第66図 15号住居跡 (1/60)



第67図 15号住居跡出土遺物状態 (1/60)



第68図 15号住居跡炉跡、集石 (1/3)

隆帯が巡り、肩部は隆帯による長楕円形の区画が4単位作られる。区画内は1ヵ所が横位、他は縦位の沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。

第70図3は貫通した眼鏡状の突起が付される。Lの捺糸文を地文とし、刻みが付加された隆帯により区画がなされ、縦位の集合する沈線・三叉文などが充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には輝石を多く含む。

4は口唇部上の小突起から刻みがある隆帯が垂下し、そこから隆帯による区画が作られる。区画内には三叉文などが充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には輝石・白色粒子を僅かに含む。

5は刻みがある隆帯により区画がなされ、横位・縦位の沈線が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には白色粒子を多く含む。

6は刻みがある隆帯の区画内に、縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には雲母を僅かに含む。

7は刺突文が密集して施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

8は小波状口縁の土器。口唇部に沿って刻みがある隆帯を貼付し、波頂部下で渦巻文になる。下位には円文がみられ、それを基点にして連続爪形文が横位に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

9は沈線により三角形の区画が作られ、区画内には半截竹管による集合沈線とそれを切る鋸歯状の沈線文、幅広の連続爪形文を密集させ「コ」・「ㄩ」字状の沈線を交互に加えた文様を充填する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

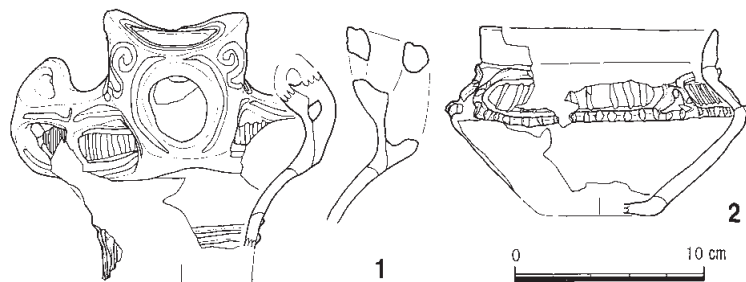
10～17はキャリパー形土器の口縁部破片。

10～12は横位の捺糸文を地文とし、2本一対の隆帯を貼付し文様が作られる。10は口唇部上に小突起が付き区画文が作られる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を含む。11は蛇行・平行する沈線が垂下する。色調は褐灰色（5YR5/4）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。12は口唇部上に小突起が付き渦巻文がみられる。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。捺糸文は10・11がL、12がRである。

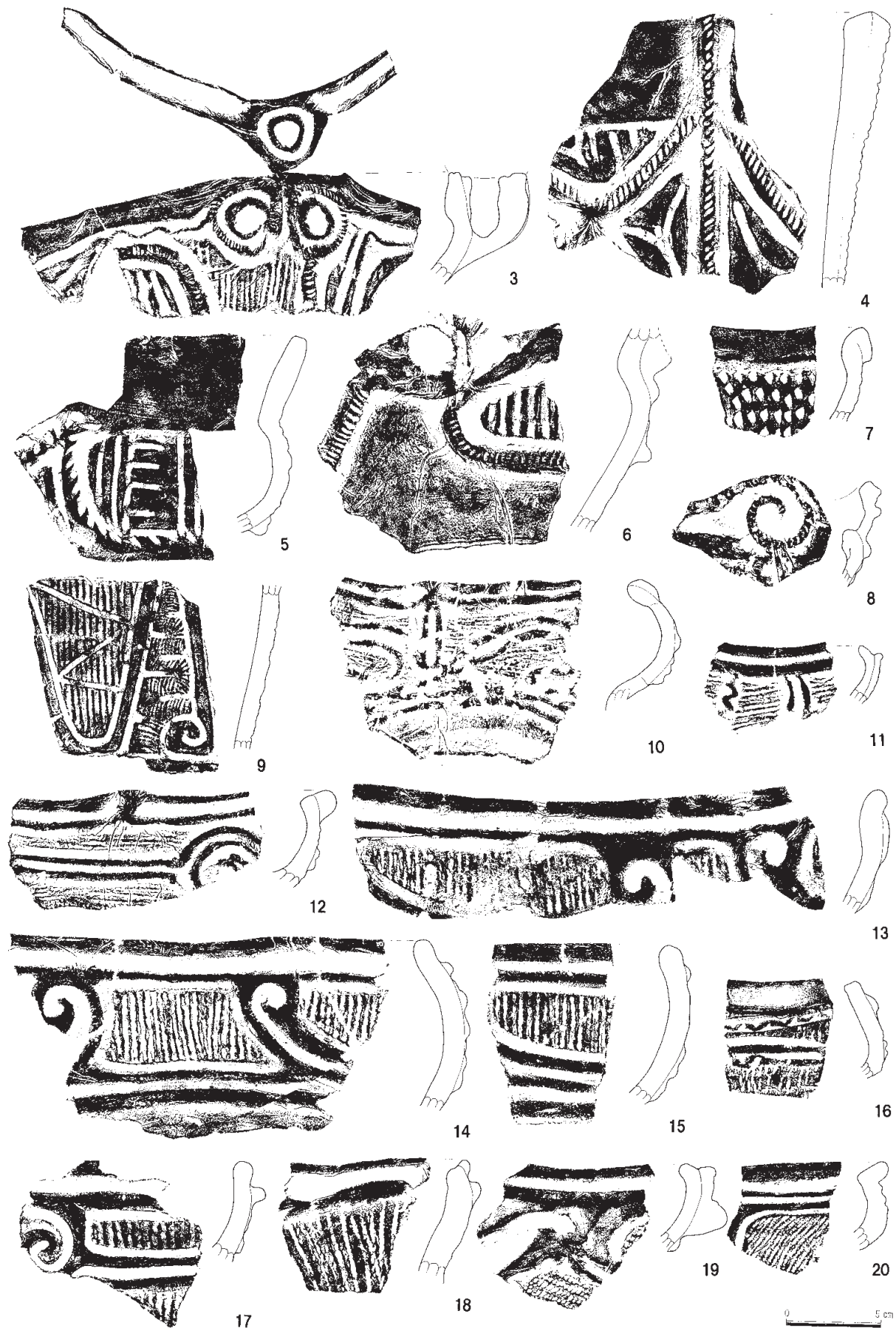
13～17は縦位の捺糸文を地文とし、2本一対の隆帯で区画文や渦巻文が作られる。16は交互刺突による文様が見られる。13の色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には白色粒子を僅かに含む。14の色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。15の色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。16の色調は灰黄褐色（10YR5/2）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。17の色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、白色粒子を多く含む。捺糸文は13～16がL、17がRである。

18は口縁部を巡る隆帯下にLの捺糸文が縦位に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

19はLRの単節斜縄文を地文とし、隆帯による区画文・渦巻文が作られる。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。



第69図 15号住居跡出土遺物1 (1/4)

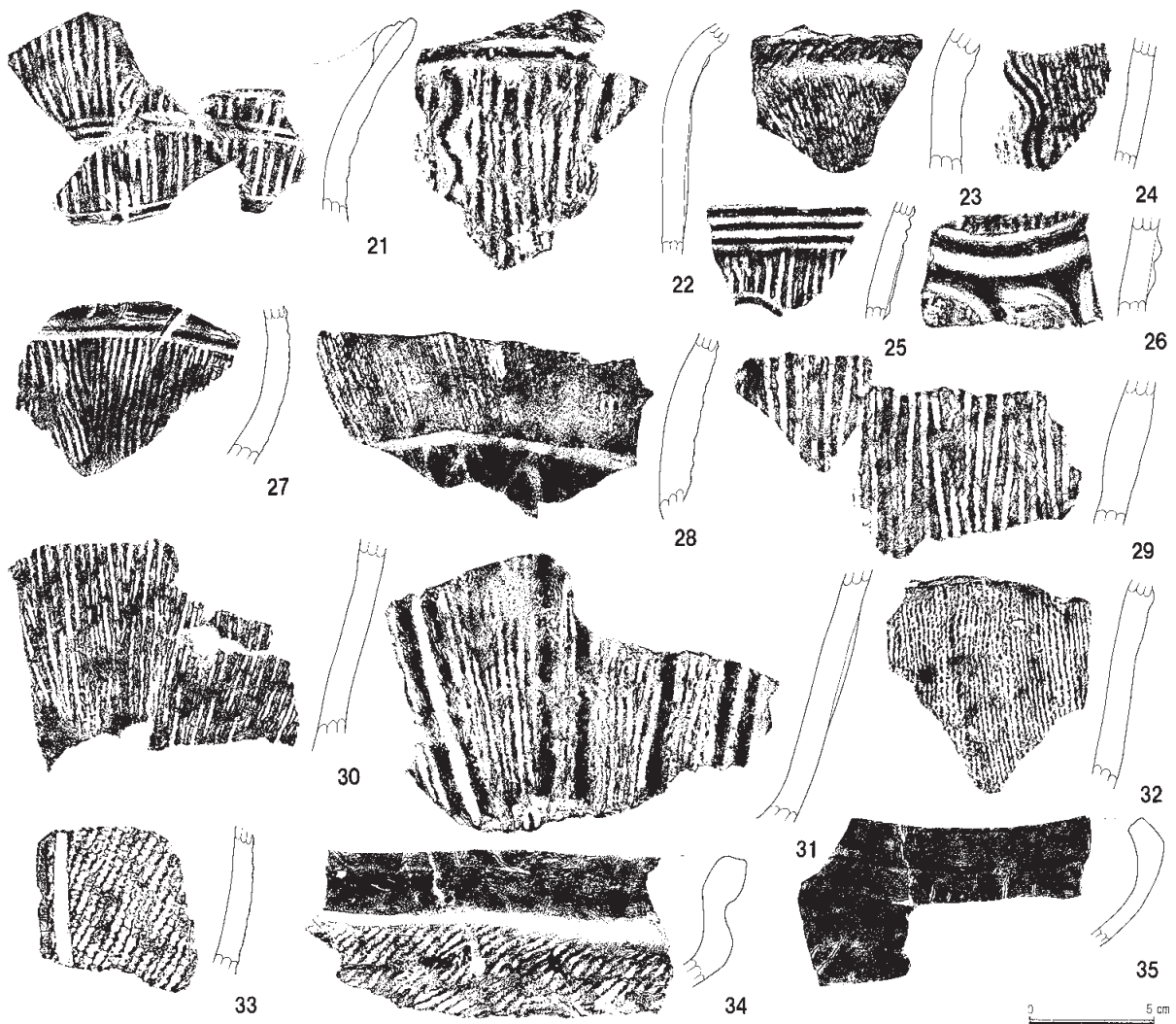


第70図 15号住居跡出土遺物 2 (1/3)

20はRLの単節斜縄文を地文とし、2条一對の沈線により区画が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。

第71図21は波状口縁の土器。Lの撚糸文を地文とし、2条一對の沈線を2段巡らせ半円文が付加される。口縁部内面にも2条の沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には白色粒子を多く含む。

22～32はLの撚糸文を地文とする。22は2本一對の隆帯が巡り蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。23は刻みが付加された隆帯が巡る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には白色粒子を含む。24は半截竹管による蛇行する懸垂文が施される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。25は半截竹管により横線文・波状文が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。26は2本一對の隆帯が貼付される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。27は半截竹管による横線文が巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。28は沈線を巡らせ、以下は鋸歯状の沈線文になる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には白色粒子を僅かに含む。29の色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。30の色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。31は2本一對の隆帯が垂下する。色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈し、胎土には細礫を含む。32は沈線が巡るようである。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には白色粒子を含む。



第71図 15号住居跡出土遺物3 (1/3)

33はRLの単節斜縄文を地文とし沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

34・35は浅鉢形土器。34は口縁部に沈線が巡り、LRの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。35は口縁部が内屈する土器。内外面共に赤彩される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には白色粒子を多く含む。

第312図3～11は打製石斧。3・4は分銅形のもの。3は刃部が尖頭状を呈する。119.1g。安山岩製。4は頭部側1/2程を欠損する。表面に礫面を残す。刃部は尖刃状を呈する。68.5g。粘板岩製。5～11は短冊形のもの。5は頭部側を大きく欠損する。刃部は円刃状を呈する。136.3g。粘板岩製。6は細身の石器。片面に大きく礫面を残す。43.4g。硬砂岩製。7は礫の形状をほとんど変えることなく、部分的な加工で刃部を作出する。298g。ホルンフェルス製。8は刃部側を欠損する。横長の剥片を使用か。181g。安山岩製。9は片面に大きく礫面を残す。縦長剥片を使用。刃部は円刃状を呈する。58.1g。凝灰岩製。10は刃部側を欠損する。礫の形状を変えず部分的な加工が加えられている。86.5g。緑色岩製。11は片面に礫面を残す。横長の剥片を使用し、刃部・頭部ともに尖頭状を呈する。27.6g。凝灰岩製。

第331図1は磨石。側縁には敲打痕を残す。凹石としても使用され、両面にはそれぞれ2孔を有する。550g。石英閃緑岩製。

第338図4～7は凹基状の打製石鏃。4の刃部は鋸歯状を呈する。重量はそれぞれ1.45・1.8・0.3・0.5g。2・3は硅岩製、4・5は黒曜石製である。

8は二次加工を有する剥片。分厚な縦長剥片の先端に加工が加えられる。66.4g。頁岩製。9は石刃状の縦長剥片で、ヒンヂフラクチャーによる。両側縁に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。1.9g。黒曜石製。10は硅岩製の縦長剥片。9.1g。

第345図6～13は土器片錘。いずれも長軸側に刻みが加えられている。重量はそれぞれ12.1・20.8・13.8・20・18.3・42.5・59.4g。

いずれも覆土中の出土。

18号住居跡（第72図）

〔位置〕13Ⅱ地点。

〔構造〕78J・138Dを切る。137Dに切られる。壁溝が二重に巡り、拡張された可能性が大きい。（平面形）楕円形。拡張前は不整楕円形。（規模）680×590cm。拡張前は525×470cm。（主軸方位）N—S。拡張前はN—20°—E。（壁高）70～88cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～20cm・下幅5～10cm・深さ15～30cm、拡張前の壁溝は上幅15～30cm・下幅5～15cm・深さ9～27cmを測りほぼ全周する。（床面）硬質ローム層まで掘り込まれているため良好であるが、特に硬化面は認められなかった。北側壁寄りには被熱のため赤化している部分があり、これは拡張前の壁溝の埋没土上にも及んでいた。（炉）住居北側に偏って、2ヶ所の炉跡を確認する。北側の炉跡は、キャリパー形土器の口頸部を埋設している埋甕炉で、63×43cm・深さ20cmの楕円形の掘り込みをもつ。南側は拡張前の炉跡であった可能性があり、径37cmの円形を呈し深さ20cmの掘り込みをもつ。周囲には礫を配置している。（柱穴）深度のあるピットが支柱穴と思われる。拡張前の支柱穴は壁溝内側の6本と思われる。拡張後の支柱穴は壁溝と切り合う6本が該当しよう。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。遺物を多く含む。

3層 褐色土。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

6層 黒褐色土。ローム小ブロックを含む。

7層 黒褐色土。ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多量に出土した。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

18号住居跡出土遺物（第73図、第312図12～15、第329図1、第331図2、第338図11～13、第345図14～21）

第73図1は断面三角形の隆帯で区画を作り、隆帯に沿って半截竹管による連続爪形文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には雲母を多く含む。

2は矢羽根状の刺突が加えられた隆帯により区画が作られる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫を含む。

3は刻みが加えられた隆帯で区画がなされ、沈線が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には輝石・白色粒子を含む。

4は沈線による振幅の小さい鋸歯文が二段巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には雲母を多く含む。

5は隆帯及び連続爪形文が付加された隆帯が巡り、それに沿って半截竹管の連続刺突による列点文が施される。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には輝石・白色粒子を僅かに含む。

6は沈線により文様が描かれ、沈線間には連続刺突文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

7は押捺を有する隆帯及び沈線により三角形の区画が作られる。区画内にはペン先状の施文具による連続刺突文が縦位に密に充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には雲母を僅かに含む。

8は押捺が加えられた隆帯及び沈線による鋸歯文が巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には雲母を僅かに含む。

9は胴部下半が内屈し膨らむ土器。屈曲部には刻みが加えられた隆帯が巡る。丸棒状の施文具の刺突が付加された隆帯が渦巻状に貼付され、残された面には三叉文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

10は口縁端部が外屈する土器。Lの捺糸文を縦位に施し地文とし、隆帯による区画を作る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

11・12はLの捺糸文を横位に施し地文とする。2本一対の隆帯の貼付により区画や渦巻文が作られる。色調はにぶい赤褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には輝石を多く含む。12の頸部は縦位の捺糸文になる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には白色粒子を多く含む。

13は隆帯による渦巻文が付され、以下は縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には白色粒子を多く含む。

14～16は隆帯により文様が作られる。14は波状口縁の土器で、口唇部に沿って2条の凹線を巡らせ、縦位・渦巻状に隆帯を貼付する。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を含む。15も波状口縁になろうか。隆帯を重弧状に貼付する。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。16は隆帯を渦巻状・肋骨文状に貼付する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

17は口縁部横位・頸部以下縦位にLの捺糸文を施し地文とする。頸部には隆帯が巡り、口縁部にも隆帯の貼付がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には白色チャートが目立つ。

18・19はRの捺糸文を地文とし、隆帯を波状に貼付する。色調は18がにぶい褐色（7.5YR5/3）、19が褐灰色（7.5

YR4/1) を呈する。胎土には共に輝石を多く含む。

20・21はLの撚糸文を地文とする。20は蛇行・平行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。21は半截竹管による浮彫状の効果をもつ平行沈線で長楕円形の区画が作られる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

22はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には白色粒子を多く含む。

23は半截竹管による浮彫状の渦巻文が作られる。胎土には細砂が含まれる。24は底部破片。Lの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯が垂下している。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には白色粒子を含む。

24は胴部下位の破片。Lの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯が垂下する。色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には白色粒子を含む。

25は浅鉢形土器。隆帯が渦巻状に貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第312図12~15は短冊形の打製石斧。12~14は片面に礫面を残す。12は表面に大きく礫面を残す。刃部は鈍い平刃状。両側縁に敲打痕を残す。174.2g。13は縦長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃部は平刃状。38.5g。14は刃部を欠く。横長の剥片を使用。69.6g。15は刃部が斜刃状を呈する。51.3g。全て硬砂岩製。

第329図1は磨製石斧で先端を欠く。320g。硬砂岩製。

第331図2は磨石。側縁には敲打痕を残す。510g。石英閃緑岩製。

第338図11は凹基の打製石鏃。1.2g。安山岩製。

12・13は縦長剥片。12は黒曜石製で7.5g、13は硅岩製で4.6gを測る。

第345図14~21は土器片錘。いずれも長軸側に刻み加えられる。重量はそれぞれ21.1・7.3・19.3・15.1・14.6・16.7gを測る。

いずれも覆土中の出土。

なお、土器実測図等出土遺物の一部は『志木市遺跡群Ⅷ』に所収。

19号住居跡(第74図)

〔位置〕17地点。

〔構造〕東側調査区外。7Hに切られる。(平面形)不明。(規模)不明×610cm。(主軸方位)N-26°-W。(壁高)66~78cmを測り、50°~60°の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)壁際を除き硬化面が認められる。(炉)住居中央から北西に偏って位置する。深鉢形土器の上半部を埋設した埋甕炉で、70×55cmの不整楕円形で深さ40cmの掘り込みをもつ。(柱穴)検出されたピットは多いが、深度のある4本が支柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗赤褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。

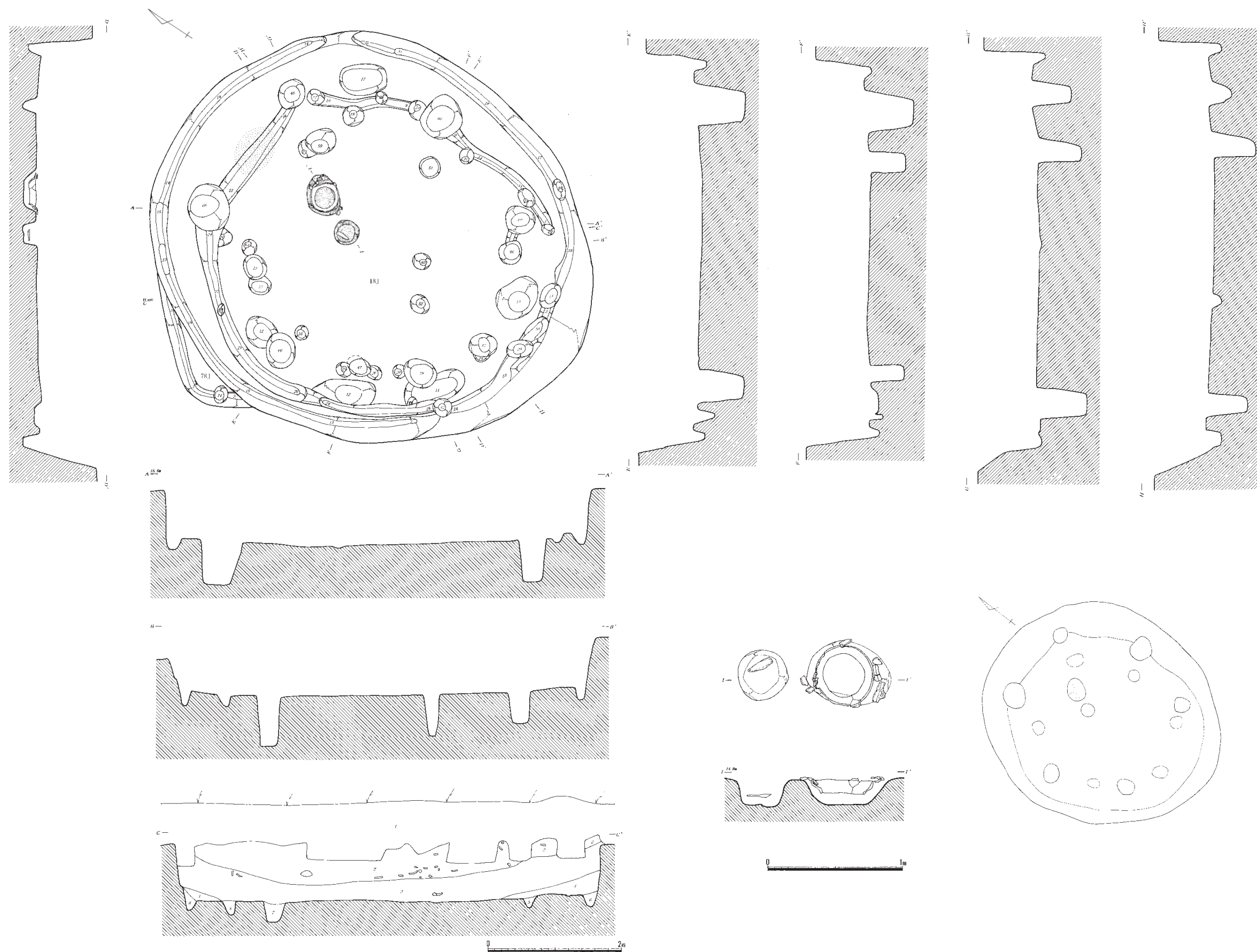
4層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

6層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。

〔遺物〕いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多く出土する。完形に近い土器の出土が目立つ。

〔時期〕勝坂式期。



第72図 18・78号住居跡 (1/60)、18号住居跡炉跡 (1/30)



第73图 18号住居跡出土遺物 (1/3)

19号住居跡出土遺物（第75～79図、第313図1～12、第331図3、第335図5、第336図3、第338図14～18、第345図22～38、第351図1）

第75図1・2、第76図3・4、第77図5～8、第78図10は円筒形を呈する土器。

1は外反する口縁部が無文帯になる。口唇部の「C」字状の突起から刻みが加えられた隆帯が垂下し、下端で曲線を描き「し」字状になる。対面にも同様の隆帯の貼付があり、その間に隆帯による「十」字状あるいは「人」形文や「X」字状文が施され、空白部には沈線による「U」字状文と短沈線の組み合わせや渦巻文が充填される。胴部はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細礫を含む。

2は4単位の波状口縁の土器。3条一組の沈線により口縁部と胴部を区画する。沈線には部分的に交互刺突が加えられ鋸歯状になる。口縁部文様帯は各波頂部から垂下する3条一組の沈線により区画される。沈線間には矢羽根状の刻み、交互刺突が施される。区画内の充填文は対向する区画で相似た構成をとる。一つは沈線による半円形の区画が上下に対向して作られ、上位の区画内には縦位の集合する沈線が、下位には押し引きによる結節沈線文が充填される。半円形の区画外には三叉文が配される。他の一つは沈線による渦巻文・三叉文等が充填される。胴部はLの撚糸文が施される。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には細礫を多く含む。

3は口縁部と胴部が刻みを加えた隆帯によって区画される。口縁部の文様は口唇下部の無文帯から垂下された刻みが付加された隆帯で2分割され、同様な隆帯による渦巻文や「十」字状文等が配される。区画内には沈線により三叉文・渦巻文などが描かれ、沈線に沿って幅広の刺突文を密集して施し文様を強調する。胴部にはRLの単節斜縄文が施される。色調は上半が暗褐色（7.5YR3/3）、下半がにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫を多く含む。

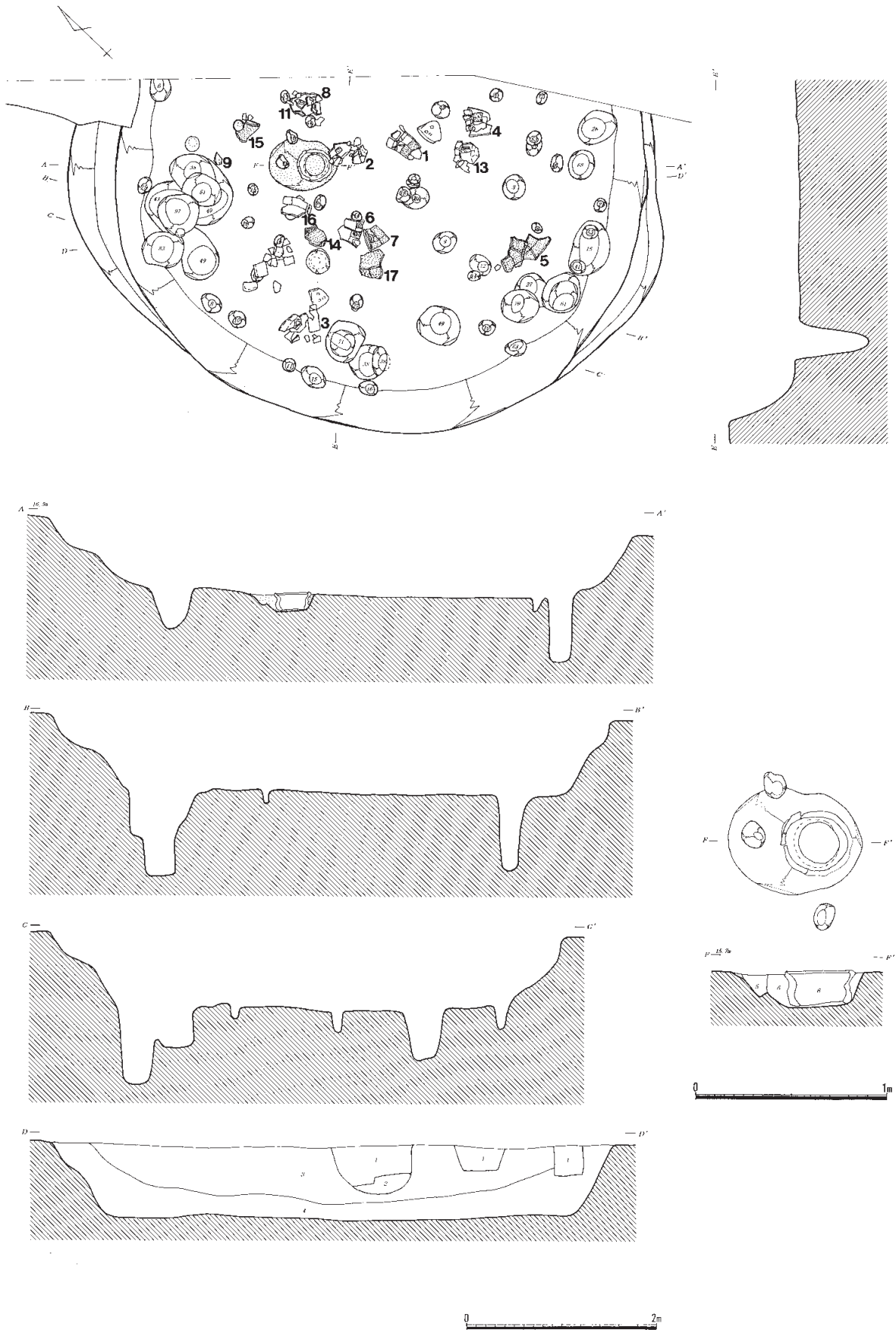
4は刻みが加えられた隆帯により口縁部と胴部を区画する。口唇部直下は無文帯になる。口縁部の文様は、口唇部上の「C」字状の突起から垂下する隆帯及び対面にある半円形の突起から垂下する刻みが加えられた隆帯によって2分割される。区画内は刻みのある隆帯で円・直線・曲線を組み合わせた抽象文が描かれ、空白部には沈線による三叉文・渦巻文等が充填される。色調はにぶい赤褐色を呈する。胎土には細礫・白色粒子を含む。

5は刻みが加えられた隆帯や沈線によって口縁部と胴部を区画する。口唇部直下は広い無文帯になる。口唇部上に煙突状と渦巻状の突起を対向して付し、そこから押捺によって蛇行状になった隆帯を垂下させ2分割する。各分割内は2本の隆帯によって3単位、鎖状の隆帯によって2単位に区画され、それぞれの区画内には隆帯を渦巻状・曲線状に貼付し、その空白部には沈線による渦巻文や三叉文などが充填される。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には細礫・輝石を僅かに含む。

6は胴部に間隔を開けて2本の隆帯が巡る。口縁部の文様は刻みが加えられた隆帯が渦巻状に貼付される。各隆帯の間には沈線による三叉文などが施され、それを強調するように短沈線を密に充填する。胴部は無文でよく磨かれている。色調は黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

7は胴部下位に沈線を巡らせて区画し、土器上部は幅広い文様帯を形成し下部は無文となる。口唇端部は平坦で肥厚する。口唇部上の三角形の突起には刻みが渦巻状に施され、そのまま口縁部を一周し突起から垂下する隆帯上にまでおよぶ。この隆帯には更に押捺が加えられる。口唇部上の突起は小振りのものが対向する位置からずれた部分にも付されていて、ここから垂下する隆帯にも刻みと押捺がみえる。土器上部の文様帯は刻みが付加された隆帯を巡らせて上下に区画する。上部は沈線による渦巻文などが施される。下部は垂下された2本の隆帯間にそれぞれ隆帯の貼付による楕円文が作られる。隆帯上の加飾の一つは刻み、他の一つは三角形の押引文である。楕円形内は三角形の押引文が充填される。空白部分には三叉文や三角形の押引文がみられる。隆帯の下位には縦位の沈線が集合して施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・輝石を僅かに含む。

8は胴部上位から口縁部に向けて外湾する土器。口縁部に隆帯を巡らせ、口唇部下は狭い無文帯になる。以下はRLの単節斜縄文を地文とし、胴部下位に隆帯を巡らせ文様帯を形成する。縦位の隆帯により区画を作り、区画内



第74図 19号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)

には蛇行する隆帯や渦巻状の隆帯を貼付する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・輝石を僅かに含む。

10は刻みが加えられた隆帯により上下に分割される。上位は縦位の刻みのある隆帯により区画され、区画内には縦位の平行する沈線が施され、刺突や交互刺突が加えられる。下位は無文になる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第77図9は炉の埋設土器として使用されたもの。口縁部は外反し、口唇部は内屈する。頸部でくびれ、胴部上半は内湾する。口唇部には鎖状の隆帯が巡り、口縁部は無文になる。頸部には交互刺突が加えられた隆帯、内湾する胴部の下位には刻みが付けられた隆帯を巡らせ区画する。区画内は渦巻文・円文を連結させた鋸歯文が、刻みを加えた隆帯によって作られる。空白部は三叉文・渦巻文等の沈線文や三角形の押引文が充填される。破損している胴部下位にも文様がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

第78図11・12・14は相似た器形をもつ土器。口縁部が外反し、頸部でくびれ胴部が膨らむ。

11は4単位の波状口縁の土器。波頂部には円文が配され、口唇部に沿って隆帯が巡る。単節RLの縄文を縦位に施し地文とする。各波頂部からはそれぞれ2本の隆帯が垂下する。隆帯の末端の処理は対向するものが類似していて、一つは「十」字状に、他の一つは破損しているが渦巻状になるようである。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

12は口唇部上に粘土紐を積上げ「ㄩ」字状の突起が付される。口縁部には隆帯が巡らされ、3ヵ所に耳状の小突起が付られる。これらの小突起は、先の口唇上の突起と合わせ4単位の長楕円形の区画を作る。区画内は交互刺突により鋸歯状になる。胴部には単節RLの縄文が縦位に施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

14は4単位の波状口縁になるものと思われる。口唇端部には凹線が施され、口縁部は無文である。頸部には2条の沈線が巡らされ、部分的に交互刺突が加えられる。胴部はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が渦巻状などに貼付される。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。

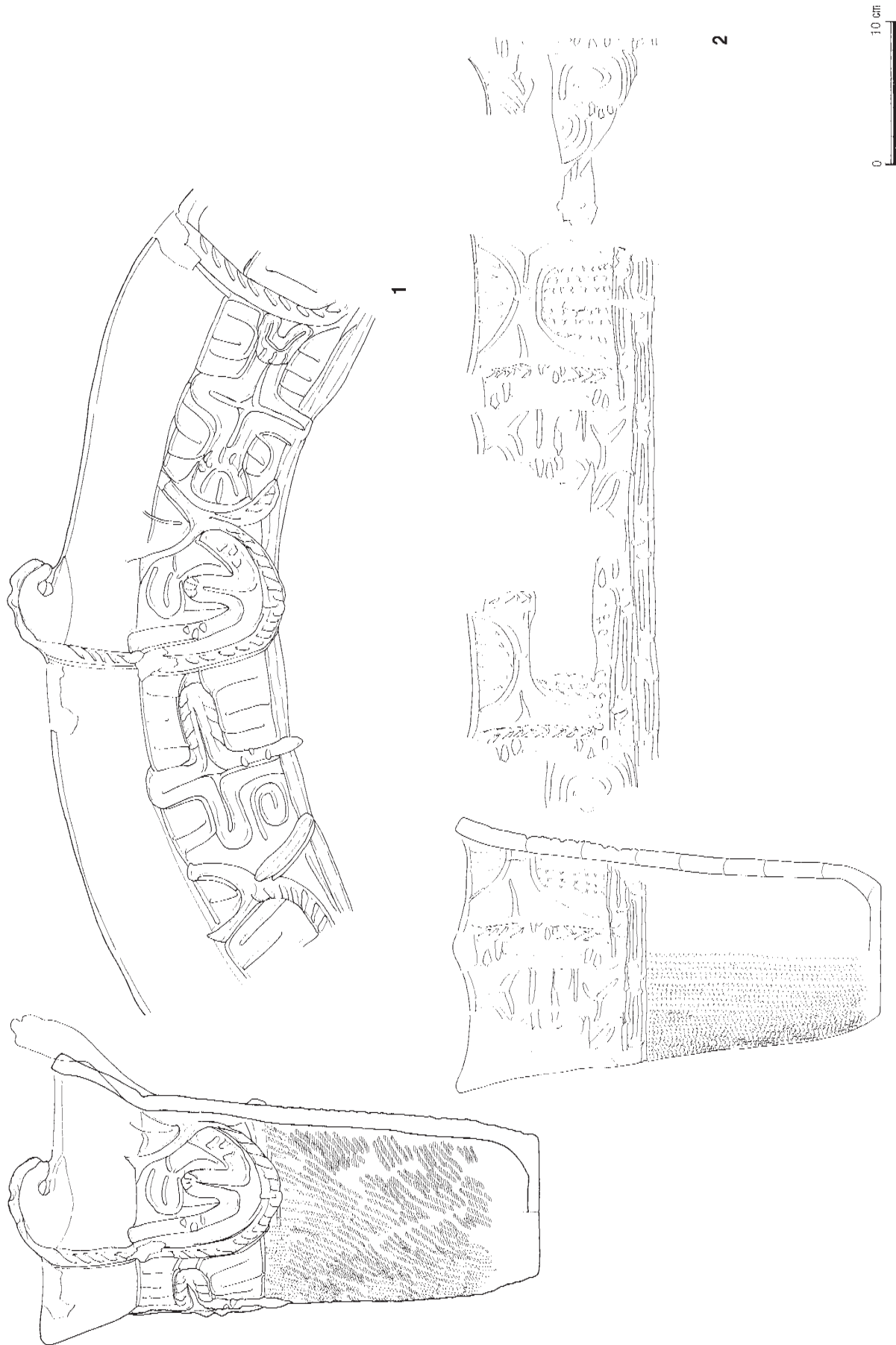
第78図13は口縁部が内湾しながら開き、頸部でくびれ、胴部下位が屈曲して膨らみ算盤玉状を呈する。口唇部上には板状の突起が付される。矢羽根状の刻みが付加された隆帯が突起上端から鉤状に曲がって垂下する。口縁部の文様は突起の下位に集中し、沈線による円文と三叉文が描かれ、沈線間に刻みを加える。以上の文様の横にも渦巻文・三叉文・矢羽根状の刻みの組み合わせがみられる。板状突起の反対側には矢羽根状の刻みが加えられた隆帯が縦位に貼付されていて、口唇上まで伸びて小突起となるようである。胴部上半は頸部の矢羽根状の刻みが加えられた隆帯と、胴部下位の屈曲部には巡らされた刻みにより区画される。区画内は、更に矢羽根状の刻みで加飾された隆帯により概ね平行四辺形に区画され、空白部には沈線による三叉文や渦巻文が充填される。胴部下半は無文になる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

15は胴部下位に僅かな膨らみをもち、口縁部に向かって徐々に広がる土器。口縁部は複合口縁状に直立する。口縁部には2条の沈線を巡らせ、交互刺突を4ヵ所に施して4単位の区画する。区画中央の口唇部はそれぞれ外側に僅かに突出していて、口縁部の上面観は方形に近い。胴部にはLの細い撚糸文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には輝石を多く含む。

16は胴部下位が僅かな稜をもって膨らみ、以上はほぼ円筒形の形状をなす。単節RLの縄文を斜位・縦位に施し地文とする。文様は対向した2ヵ所に設けられる。下端が渦巻状になる隆帯を垂下させ、渦巻文が付加された蛇行・鋸歯状の隆帯が貼付される。色調は暗褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

17はRLの単節斜縄文を地文とする。押捺が加えられた帯状の隆帯が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

第79図18は波状口縁の土器で、波頂部は双頂になる可能性がある。RLの単節斜縄文を地文とする。波頂部下に



第75図 19号住居跡出土遺物1 (1/4)

は刻みが付けられた隆帯状の縁取りがある円孔を有する。口唇部には刻みが加えられる。口唇部に沿って2条の沈線が引かれる。円孔の横には貼付けによる渦巻文がある。頸部には3条の沈線が巡り、渦巻文がみられる。内面は沈線で重三角形の枠が作られ、刻みが付加される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には輝石・白色粒子を含む。

19は口縁部が外反し、胴部上位が膨らむ。頸部には3条の沈線が巡り、縦位の沈線を加えた貼付文が施される。沈線間には部分的に交互刺突がみられる。胴部はRLの単節斜縄文になる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

20は隆帯により長楕円形の区画が作られる。隆帯に沿って2条の結節沈線文が施され、波状の結節沈線文が充填される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

21は刻みが加えられた隆帯により長楕円形の区画が作られる。区画内は縦位の沈線が集合して充填される。胴部にはRLの単節縄文が斜位・縦位に施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。

22は口唇部に三角形の突起が付される。半截竹管による半隆帯状の平行沈線により三角形に近い区画を作る。区画の枠に沿って波状沈線を巡らせ、三叉文を充填する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

23は口唇部に渦巻状になる突起が付けられる。口唇部及び突起には刻みが加えられる。刻みのある隆帯により区画が作られ、縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

24は口縁部が外反し、胴部上位が膨らむ土器。口縁部は狭い無文帯になる。頸部のくびれと胴部上位の刻みが加えられた隆帯により区画がなされ、両端が渦巻状になる「∞」字状の貼付文が施される。空白部には沈線による渦巻文や「U」字状文・刺突文が充填される。胴部はRLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・輝石を僅かに含む。

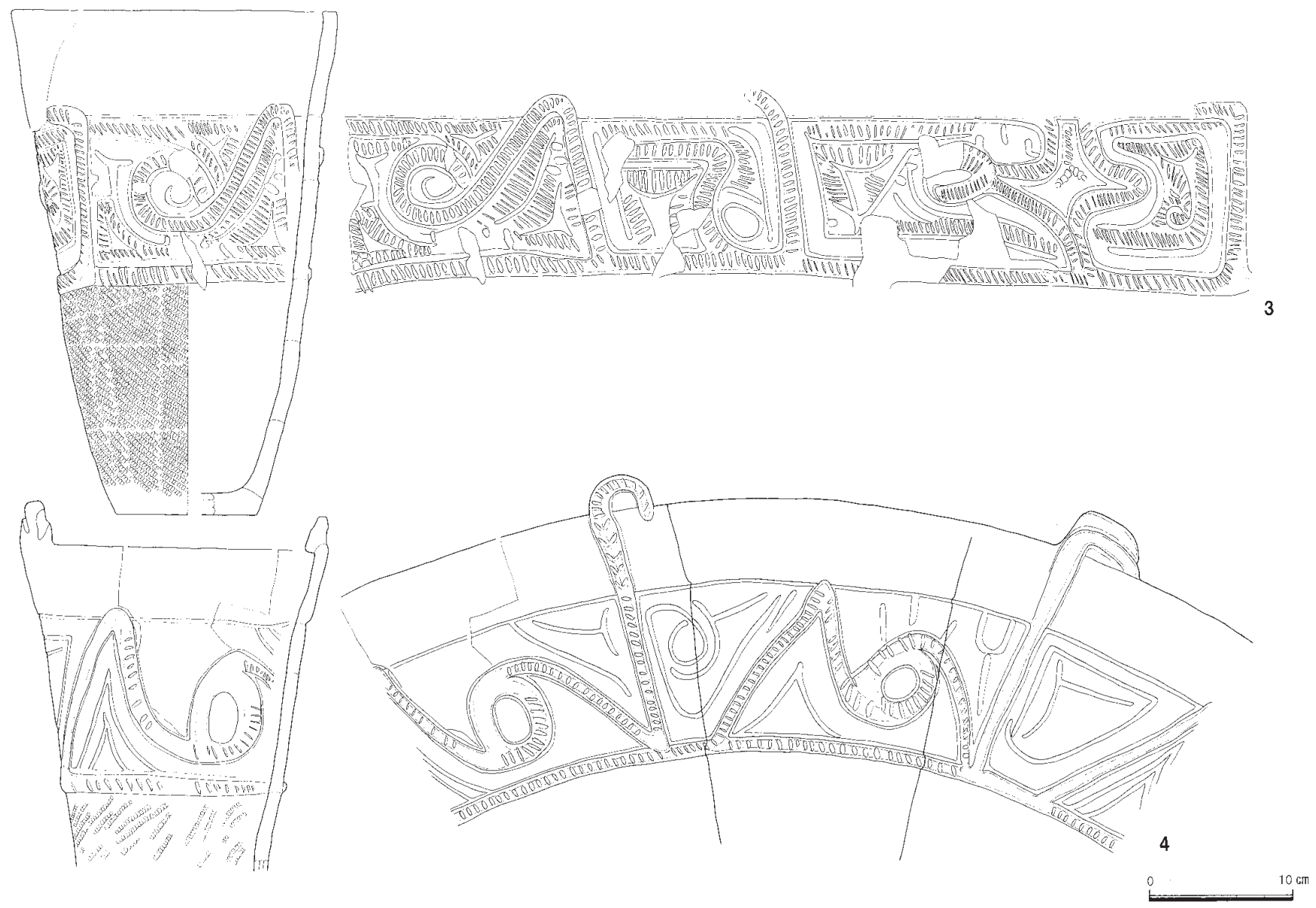
25～28・31は円筒形の器形をもつ土器。25は口唇部に幅の狭い板状の突起が付く。突起からは口縁部にかけて隆帯が垂下され刻みが加えられる。口縁部は無文帯になる。胴部上位には刻みがある隆帯が曲線的に貼付され、空白部には三叉文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には輝石・白色粒子を含む。26は口縁部が肥厚する。口縁部には鋸歯状に隆帯が貼付される。胴部上位には隆帯が巡る。口唇部の肥厚下及び隆帯の両側には外側竹管の押し引きによる連続爪形文が施される。三角形の区画内には2条の連続爪形文が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫・輝石を僅かに含む。27は平行する沈線により三角形の区画が作られる。区画内には斜位の平行する沈線が充填される。沈線間や空白部には横位・縦位・斜位に集合する沈線が施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。28は口縁部が無文帯になる。胴部上半には隆帯を曲線的に貼付し、空白部には沈線による渦巻文などが充填される。胴部下半は隆帯によって区画され、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・輝石を含む。31は刻みがある隆帯が曲線的に貼付され、空白部には沈線文や外側竹管を交互に刺突し鋸歯状にした文様が充填される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には輝石を多く含む。

29はRLの単節縄文を地文とする。眼鏡状の貼付文から2本の隆帯が垂下する。2本一対の隆帯により区画が作られるようである。色調はにぶい黄褐色(10YR7/4)を呈し、胎土には粗砂・輝石を含む。

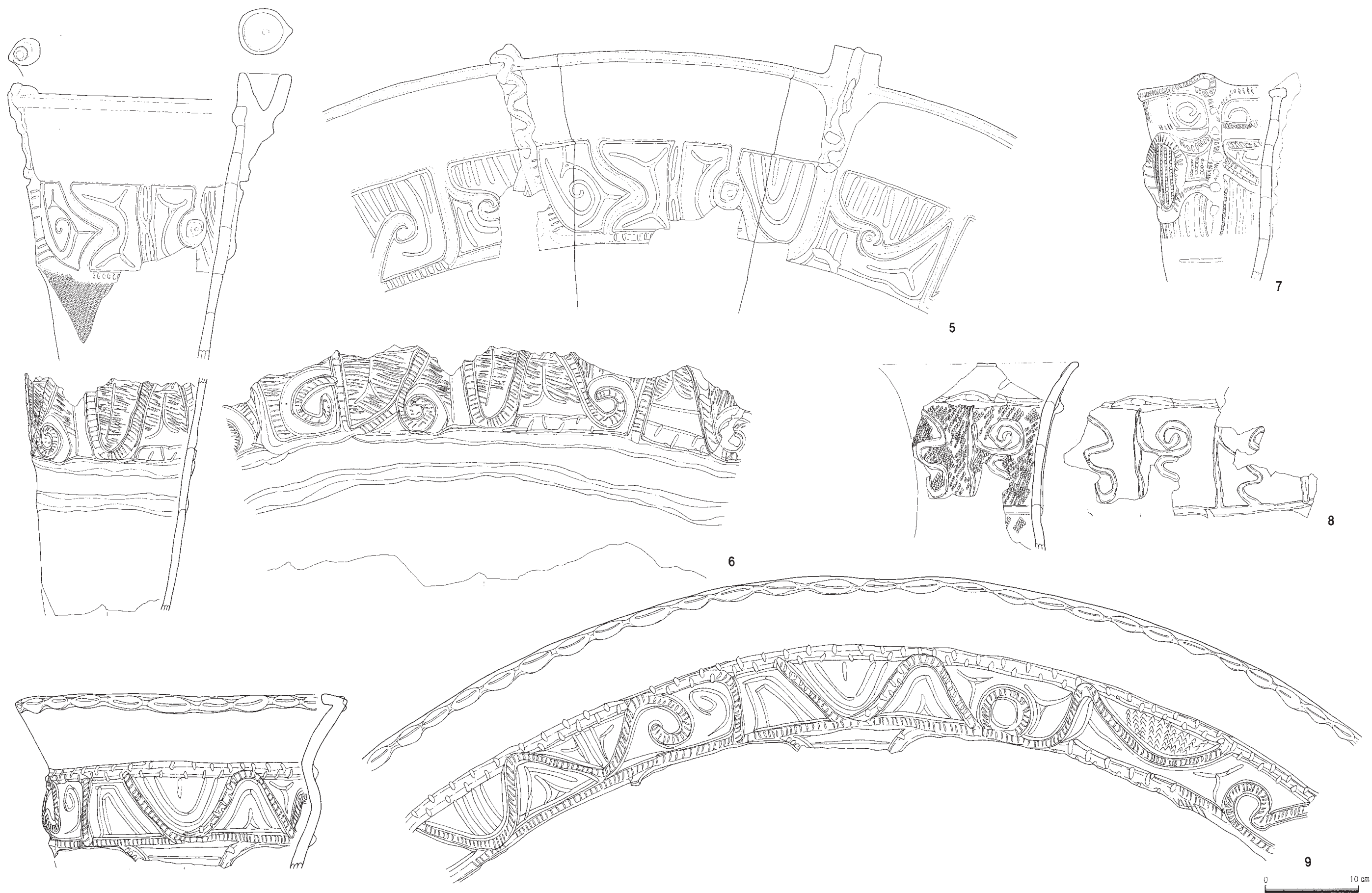
30は刻みが加えられた隆帯により楕円形の区画が作られようか。横位の集合する沈線が充填される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

32は浅鉢形土器で口縁部が内湾する。隆帯による渦巻文がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を含む。

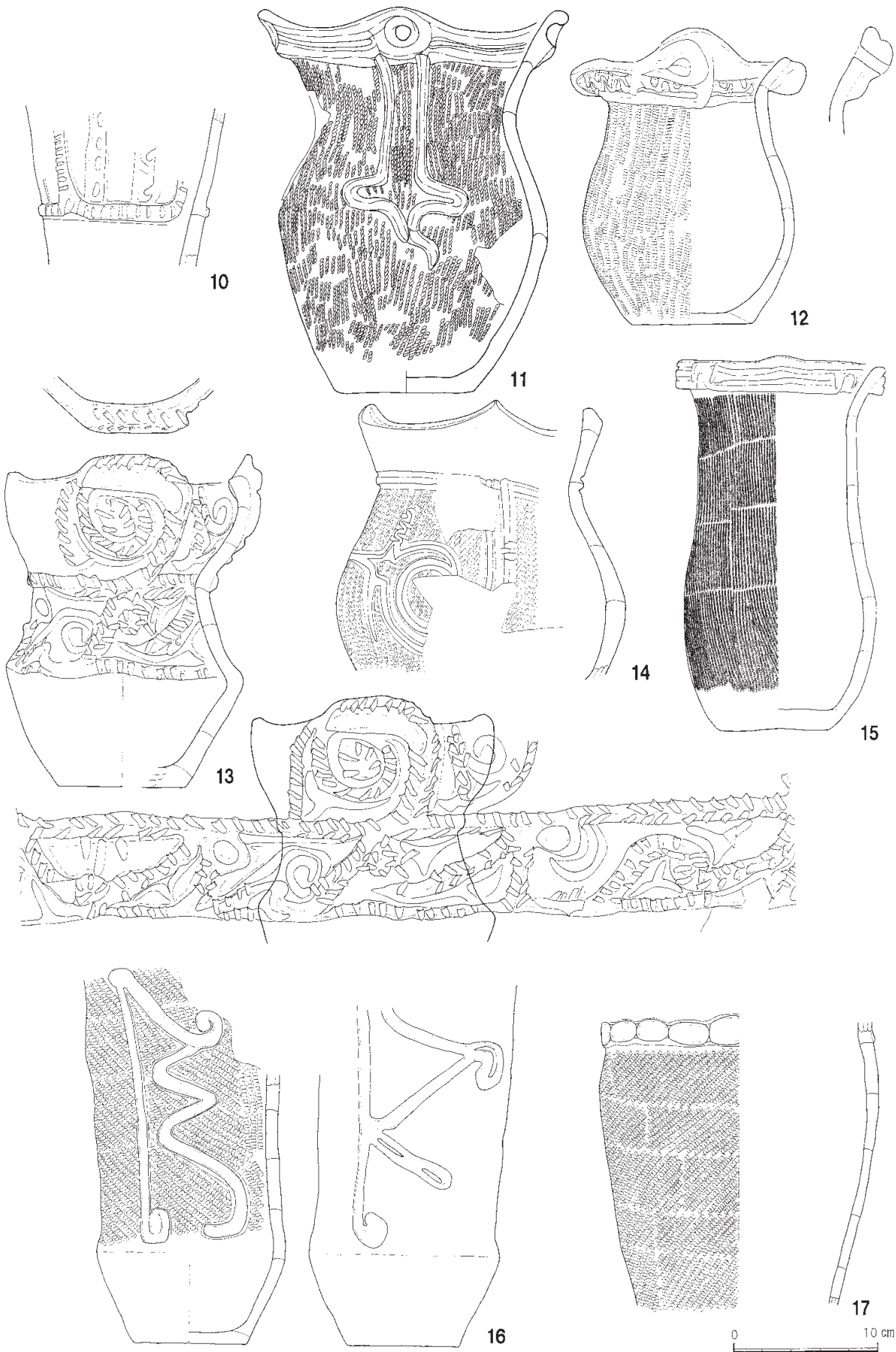
第313図1～12は打製石斧。1～4・11は撥形に近い形状になろうか。1は礫面を残す。刃部は円刃状を呈する。刃部表裏には線条痕が認められる。109.8g。硅岩製。2は礫面を大きく残す横長の剥片を使用。斜刃状を呈する



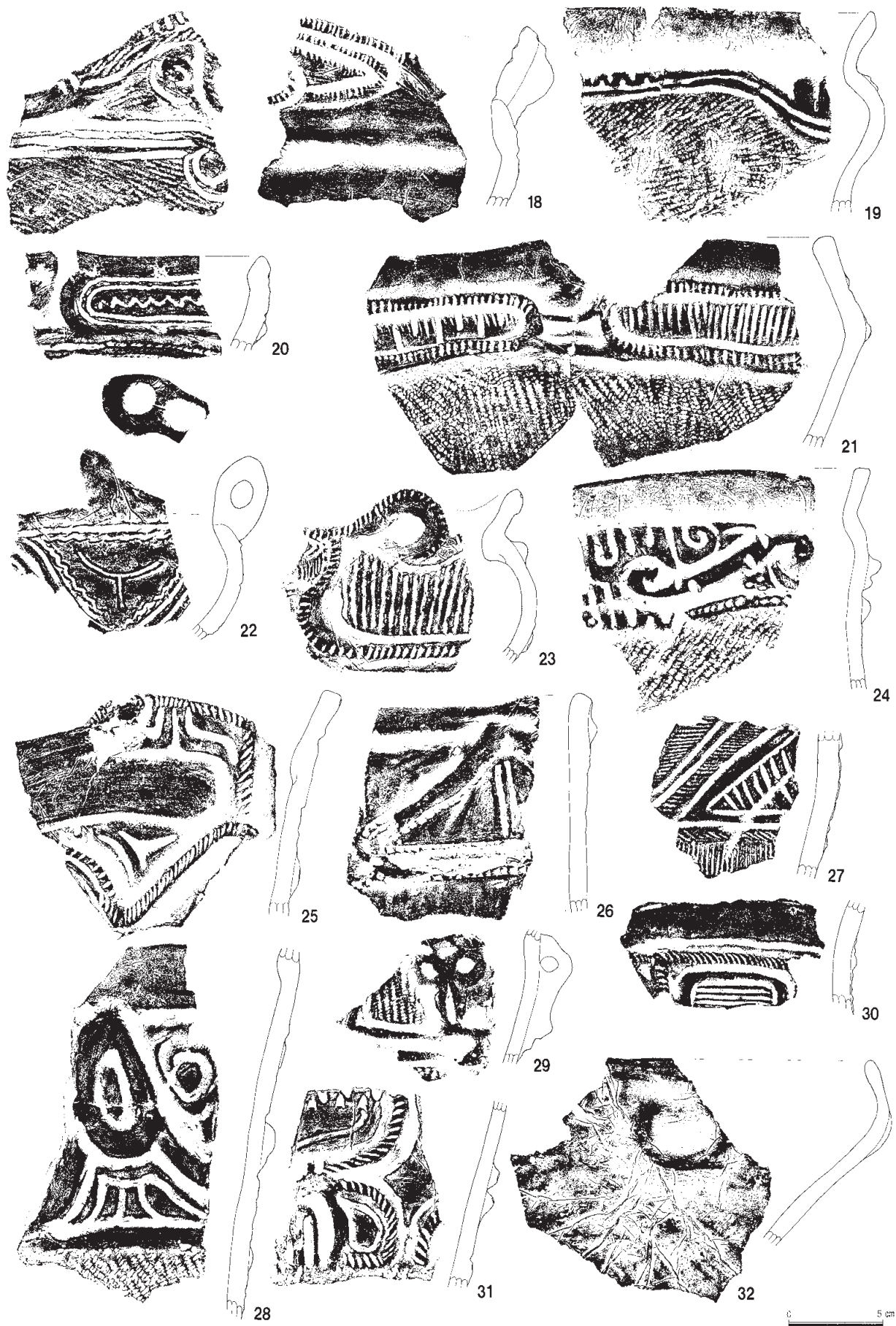
第76図 19号住居跡出土遺物2 (1/4)



第77図 19号住居跡出土遺物3 (1/4)



第78图 19号住居跡出土遺物 4 (1/4)



第79図 19号住居跡出土遺物 5 (1/3)

のは刃部再生のためか。67.5g。結晶片岩製。3は横長の剥片を使用。刃部は円刃状を呈し刃角は鈍い。123.1g。硅質砂岩製。4は刃部と頭部を欠く。礫面を大きく残す横長剥片を使用。111g。硬砂岩製。11は頭部側1/2が遺存。51.3g。安山岩製。5は分銅形になろうか。平刃状の刃部のみ遺存する。83.2g。粘板岩製。6～10・12は短冊形に近い形状。6は礫面を大きく残す縦長剥片を使用。刃部は尖刃状を呈する。54.8g。結晶片岩製。7・8は刃部側1/2程が遺存。7は一部に礫面を残す。刃部は平刃尖。側縁は敲打痕が顕著である。141.7g。硬砂岩製。8の刃部は平刃状。側縁に敲打痕を残す。137.2g。硬砂岩製。9は一部礫面を残す。平刃状の刃部の角度は鈍い。90.3g。硅質砂岩製。10は頭部を欠く。横長の剥片を使用。刃部は尖刃状を呈する。96.2g。硬砂岩製。12は表裏に礫面を残す。187.4g。結晶片岩製。

第331図3は磨石。過半を欠損する。俵状の形になろうか。125g。石英閃緑岩製。

第335図5は軽石製品。195g。

第338図14は凹基の打製石鏃。両脚を欠く。0.4g。黒曜石製。

15は二次加工のある剥片。縦長剥片の右側縁に加工が加えられる。19.6g。凝灰岩製。16～18は剥片。いずれも寸づまりのものである。16は2.7g・17は4.9gで共に黒曜石製。18は4.1gで凝灰岩製。

第345図22～38は土器片錘。22のように長軸に刻みを加えるもの、37のように短軸に刻みを加えるものの二者がある。重量は順に、20.3・23・11.1・11.4・21.3・17.6・17・21.6・24・18.4・28.4・29.5・22.6・21.5・41.2・59.5・69.3gである。

第351図1は土偶。高さ7.6cm・最大幅（腰部）3.7cm・最大厚（頭部）1.6cm、重さ29gを測る。頭部は扁球状を呈し、目・鼻梁・鼻孔・口が明瞭に表現されている。体部は板状で腕・脚部は省略されている。肩部はなで肩で、胴部はくびれ、腰部が強く張り出し、全体としては分銅形を呈する。胸部に2ヵ所えぐられたような痕跡があるが、乳房が剥離した結果であろうか。体部表裏面には線刻が認められ、衣類を表したものとも考えられるが、腰部の線刻に関しては肉体の表現ともとれる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細礫が僅かに含まれる。

第77図9を除き、覆土中からの出土である。

20号住居跡（第80図）

〔位置〕17・39I地点。

〔構造〕282Yに切られ、一部調査区外にある。（平面形）楕円形。（規模）不明×355cm。（主軸方位）N-10°-W。（壁高）21～28cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）北から東壁に認められ、上幅25～45cm・下幅10～15cm・深さ19～26cmを測る。（床面）ほぼ平坦で遺存状態は良好である。（炉）検出されなかった。（柱穴）6本検出されるが南側の1本は後世のものである。

〔覆土〕ローム粒子を多く含むにぶい黄褐色土を基調とするが、耕作による攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕覆土中から僅かに遺物が出土した。

〔時期〕中期。

20号住居跡出土遺物（第313図13～15、第339図1・2）

第313図13～15は打製石斧。13は頭部を欠く。横長の板状の剥片を使用し、周縁に加工を加える。刃部は尖刃状を呈する。79.4g。緑泥片岩製。14は頭部を欠く。礫面を大きく残す縦長の剥片を使用。刃部は円刃状を呈する。119.5g。硬砂岩製。15は細身の石斧。37g。粘板岩製。

第339図1は大型の削器。幅広の縦長剥片の左側縁にスクレイパーエッジを作出する。136.1g。粘板岩製。

2は石核。13.3g。黒曜石製。

いずれも覆土中からの出土。

21号住居跡（第81図）

〔位置〕 17地点。

〔構造〕 110Yに切られる。（平面形）不整形。（規模）不明×500cm。（主軸方位）N-45°-W。（壁高）20～26cmを測り、50°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱である。（炉）住居中央から西に偏って位置する。浅鉢形土器を埋設した埋甕炉で、径約55cm・深さ30cm前後の円形の掘り込みをもつ。（柱穴）深度のある5本が支柱穴と思われる。

〔覆土〕 上層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土で遺物を多く含む。下層はローム粒子を多く含み、焼土粒子・炭化物粒子を含む明褐色土である。

〔遺物〕 炉の西側、床面から僅かに浮いた状態で多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

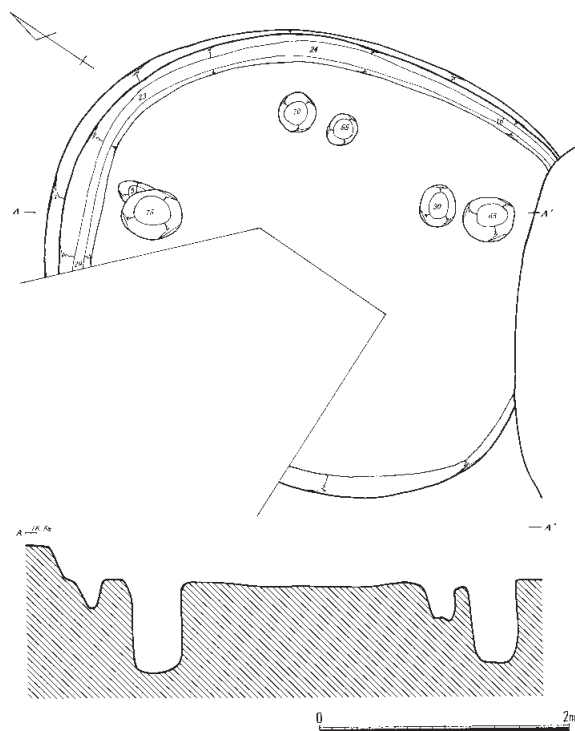
21号住居跡出土遺物（第82・83図、第314図1、第331図4、第333図3、第345図39）

第82図1は円筒形を呈する土器。胴部上位には刻みが加えられた隆帯が巡り口縁部の区画とする。口唇部上には尖頭状の突起が付き、隆帯の縁取りがある円孔が穿たれる。刻みがある隆帯による「ω」字状・「U」字状や楕円形の区画を作り、縦位の沈線などが充填される。胴部はRLの単節斜縄文が施される。図示できなかったが、施文方向を変えて羽状になる部分がある。色調は上部が灰褐色（5YR4/2）、下部がにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫を含む。

2は口縁部が膨らみ、口唇部が僅かに外反する。口縁部は無文で、胴部はLRの単節斜縄文が施される。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

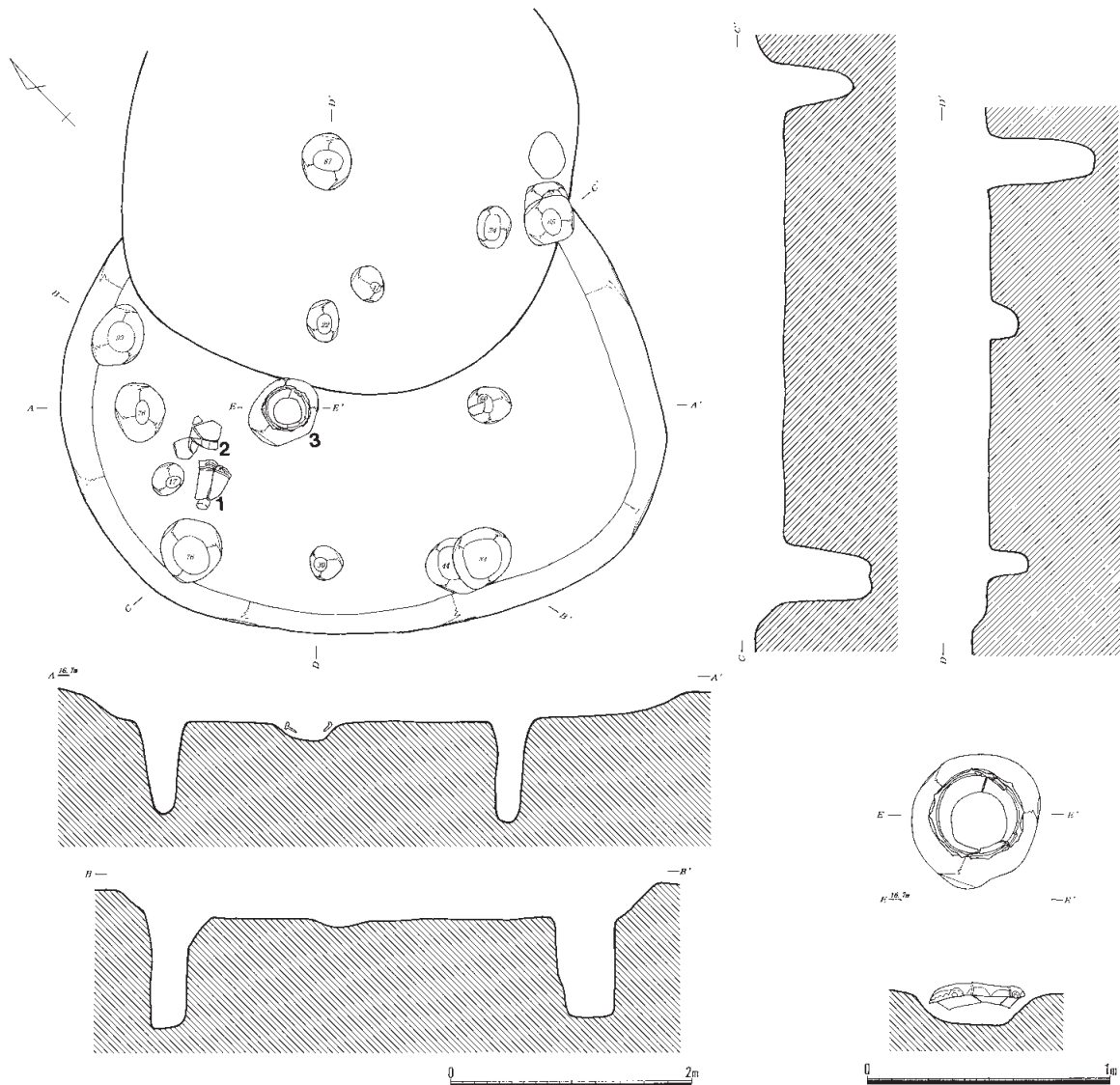
3は口縁部が内屈する浅鉢形土器で、炉に埋設されていた。口縁部には瘤状の貼付けがなされ、削り出しによると思われる浮彫状の隆帯が、波状・楕円状に作出される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

第83図4は細沈線が巡り、外側竹管による連続爪方文が横位に施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には雲母を多く含む。



第80図 20号住居跡（1/60）

- 5は断面三角形の隆帯が縦位に貼付される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には雲母を多く含む。
- 6は断面三角形の隆帯の両脇に幅広の角押文が付加される。空白部には沈線文がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。
- 7は貼付された隆帯の両脇に外側竹管の押引文が施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。
- 8は口縁部が脹らむ土器。口唇部下に刻みがある隆帯がみられる。頸部には刻みが加えられた隆帯が巡る。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。
- 9は隆帯で楕円形の区画を作る。区画内は幅広の角押文が施文され、空白部に波状沈線文が充填される。区画下はLRの単節斜縄文を地文とし、角押文と波状沈線文が「 \cap 」状に施されようか。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には雲母を含む。
- 10は縦位・横位に平行する沈線が施され、いわゆる蓮華文が連続して長方形に配される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂・輝石を含む。
- 11は隆帯により楕円形の区画がなされ、区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・輝石を含む。



第81図 21号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)

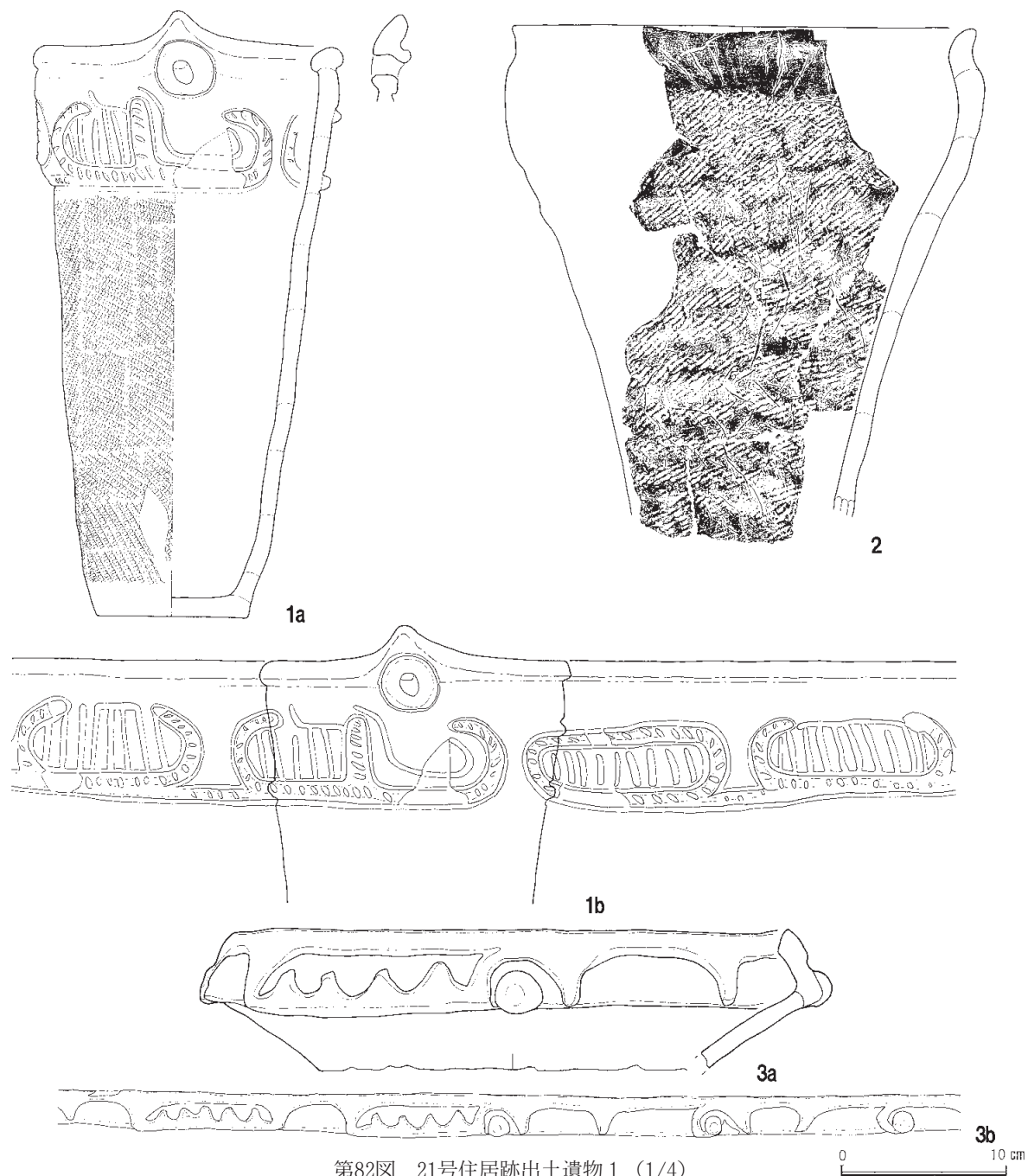
12は刻みが加えられた隆帯により区画がなされる。隆帯上は一部三角押文で加飾される。区画内は沈線による蕨手状のモチーフが描かれ、押引文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

13は隆帯による楕円形の区画がなされる。区画内には沈線や交互刺突による鋸歯文が充填される。下位はRLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には輝石・白色粒子を僅かに含む。

14は半截竹管による平行沈線で区画され、区画内には集合する沈線が充填される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

15は半截竹管による平行沈線で区画される。平行沈線に沿って蓮華文が施される。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には輝石を僅かに含む。

16は浅鉢形土器。口縁部は内湾し、口唇下には沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には



第82図 21号住居跡出土遺物 1 (1/4)

粗砂を含む。

第314図1は打製石斧。頭部を欠く。刃部は平刃状を呈する。側縁には敲打痕を残す。32.3g。結晶片岩製。

第331図4は磨石。凹石との併用である。周縁には敲打痕がみられる。710g。玄武岩製。

第333図3は石皿片。両面とも磨耗している。410g。石英閃緑岩製。

第345図39は土器片錘。長・短軸に刻み加えられる。36.6g。

第82図3を除き、覆土中からの出土である。

22号住居跡（第84図）

〔位置〕 17・24Ⅱ地点。

〔構造〕 東側調査区外。111Yに切られる。（平面形）台形か。（規模）不明×480cm。（主軸方位）N—S。（壁高）50cm前後を測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）南壁に認められた。上幅25cm前後・下幅10cm前後・深さ2～5cm前後を測る。（床面）ほぼ平坦で、全体に軟弱である。（炉）住居ほぼ中央に位置する。100×85cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ20cmの掘り込みをもつ。他に被熱の痕跡がある掘り込みが2ヵ所検出されたが、炉であったかどうかは疑問。（柱穴）深度のある西側の2本が支柱穴の一部になろうか。（埋甕）南壁下に位置し、深鉢形土器の上半部を埋設する。径45cm前後・深さ30cmの不整円形の掘り込みをもつ。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

3層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。遺物を多く含む。

4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土上層からの出土が多い。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

22号住居跡出土遺物（第85・86図、第314図2～6、第331図5）

第85図1は口唇部に小振りの橋状の突起が4ヵ所に付けられ、胴部上位にくびれをもち、口縁部に向かって開く土器。図示できなかった部分があるが、口縁部は突起を基点として2本一對の隆帯を弧状に貼付して幅狭の区画を設ける。区画内の充填文は隣り合う2ヵ所が共通し、一つは中央に渦巻文を配し両脇に縦位の集合する沈線を施す。他は縦位の集合する沈線のみである。胴部はRLの単節斜縄文を地文とする。突起下には渦巻文がみられ、そこから平行沈線の懸垂文が施される。懸垂文間には2条一對の蛇行する沈線が垂下する。4ヵ所の蛇行沈線の中の2ヵ所の上位には隆帯による渦巻文が付くが、この位置は集合する沈線を充填した口縁部の区画に対応する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には輝石・白色粒子を僅かに含む。

2は連弧文系の土器。胴部がくびれ口縁部は僅かに内湾しながら開く。口唇部下には2条の沈線が巡る。条線を地文とし、2条一對の沈線により6単位の連弧文が描かれるが、2単位は弧線文、4単位は波状文になる。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

3は埋甕として埋設された土器。胴部が僅かにくびれ無文の口縁部は外反する。胴部は条線を地文とし、2本一對の隆帯による懸垂文が6単位施され、その間に蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

4は曾利系の土器。頸部がくびれ、口縁部は大きく外反する。口縁部は重弧文が施され、刻みが付けられた2本の隆帯、外側竹管の刺突が加えられた蛇行する隆帯が垂下する。口縁部内面は隆帯が巡らされ、縦位の集合する沈線が施される。刻みが加えられた2本の隆帯が貼付される。以下、条線を地文とし、頸部には4条の沈線が巡り、胴部には部分的に短い波状の隆帯が貼付される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には雲母をごく僅か

に含む。

5はLRの単節斜縄文を地文とする。図示できなかった部分もあるが、3条一組の沈線よる波状文・平行線文が巡り、連続する「〇」字状文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

6は小型の土器。沈線による波状文が巡るようである。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

7は台付土器の脚台部。「〇」字状に沈線を施し、その内側を削り出すように成形し浮彫状に作出する。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第86図8はRLの単節斜縄文を地文とする。口縁部に隆帯による長楕円形の区画がなされる。隆帯の頂部には沈線による渦巻文が加えられる。胴部には3条一組の沈線が垂下する。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

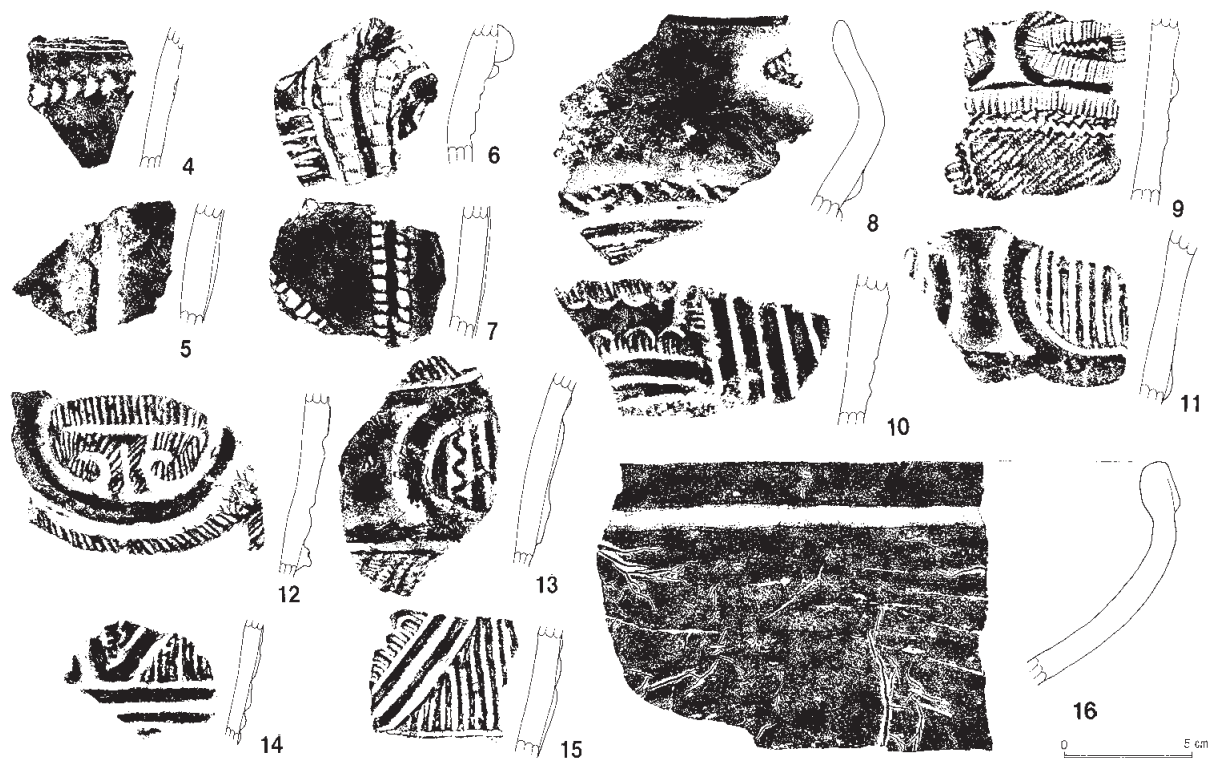
9はLRの単節斜縄文を地文とし、2本一対の隆帯で区画を作る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を含む。

10は渦巻文が付加された2本一対の隆帯により区画がなされる。渦巻文の上位には刺突文がみられる。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には細礫を含む。

11・12・17は連弧文系の土器。11は口唇部下に刺突文と沈線が巡る。Lの撚糸文を地文とし、4条一組の沈線により連弧文が描かれる。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。12は条線を地文とする。口唇部下に2条の沈線が巡り、連弧文が施される。下位には連弧文の連結部を頂点とする三角形文が1本の沈線によって描かれる。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細礫を含む。17はLの撚糸文を地文とし、3条一組の沈線による連弧文・平行線文が巡る。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細礫を含む。

13は内面、口唇部下が凹線状になる。Lの撚糸文を地文とし、3条の沈線が巡る。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈し、胎土には輝石を多く含む。

14はRLの単節斜縄文を地文とする。半截竹管を用い円文や曲線的な文様を描く。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)



第83図 21号住居跡出土遺物2 (1/3)

を呈し、胎土には細礫を多く含む。

15・16は曾利系の土器。共に口縁部に重弧文が施される。15は口唇部が「く」字状に内屈し口唇端部には集合する沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。16は口唇部上に小突起が付けられ、そこから円形の刺突文が加えられた隆帯が蛇行して垂下する。折返し状になった口縁部内面には集合する沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

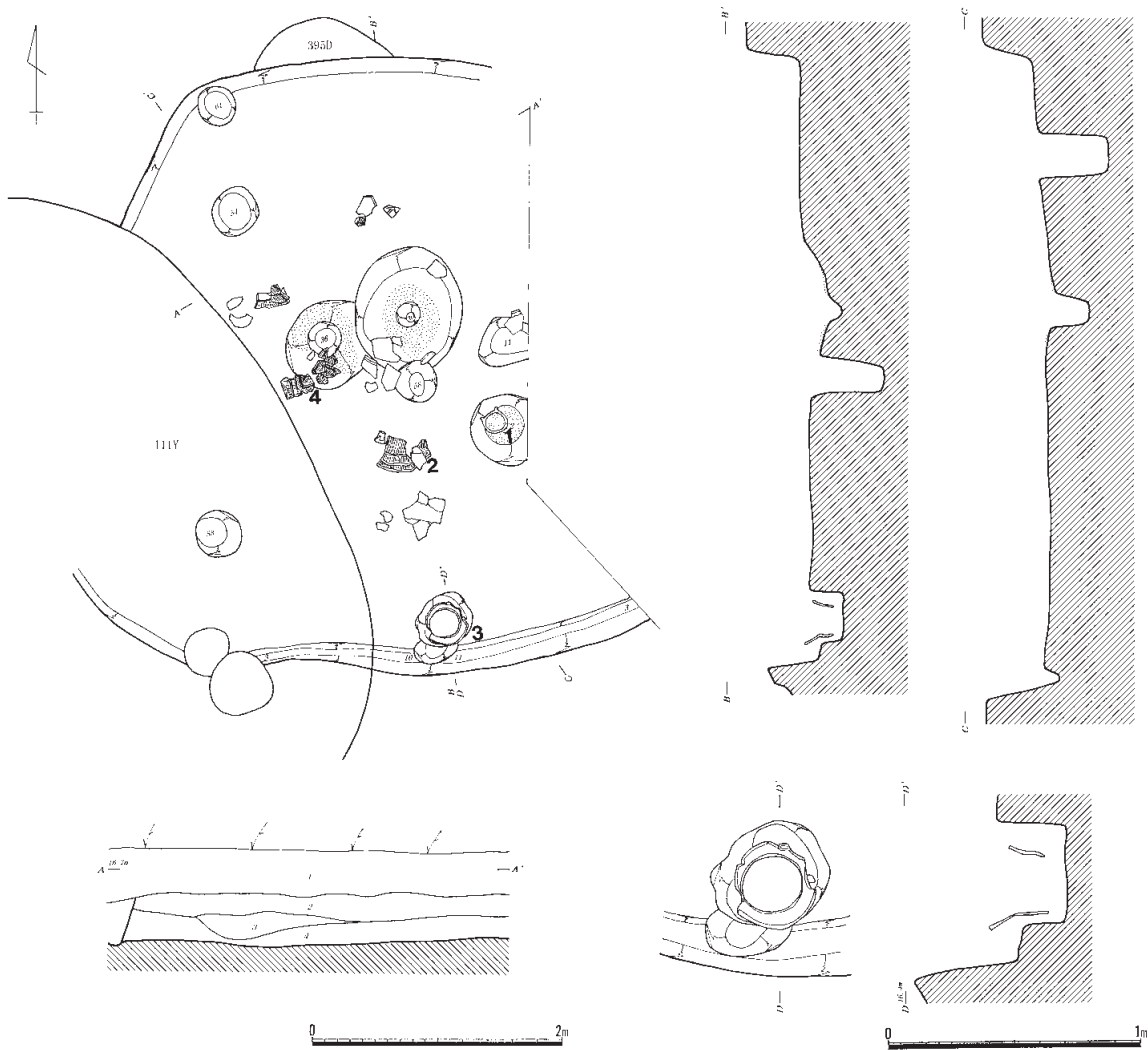
18はLRの単節斜縄文を地文とし、2条ないし3条の沈線を一単位として円文や波状文を描く。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

19は隆帯が巡り、短い沈線が斜位に集合して施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

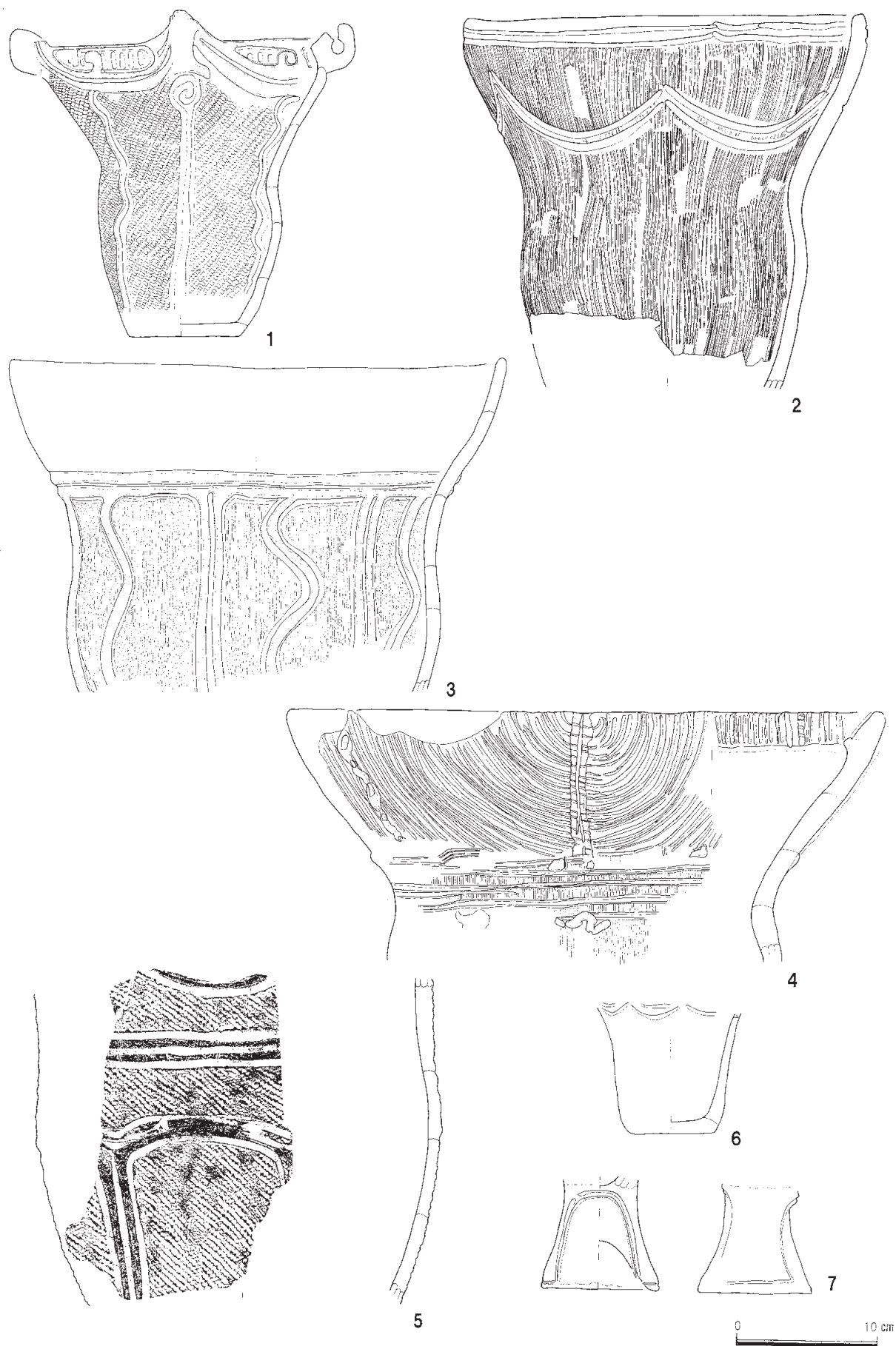
20は条線を地文とし、直行・蛇行する懸垂文が施される。色調はにぶい黄褐色（10YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

21は条線を地文とする。太沈線により曲線的なモチーフが描かれる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第314図2～6は打製石斧で、短冊形のもの。2は頭部を欠損する。一部礫面を残し、表裏両側縁に磨耗痕が認められる。刃部は平刃状。100.8g。硬砂岩製。3は礫面を大きく残す横長の剥片を使用。刃部は尖刃状。99.7g。ホルンフェルス製。4は頭部を欠損する。礫面を大きく残す横長の剥片を使用。刃部は円刃状。刃部表裏面には線



第84図 22号住居跡 (1/60)、埋甕 (1/30)



第85図 22号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第86图 22号住居跡出土遺物 2 (1/3)

状痕と磨耗痕が認められる。127.1g。粘板岩製。5は右側縁に敲打痕を残す。刃部は平刃状。刃部は85.9g。硬砂岩製。6は礫面を残す。刃部は尖刃状を呈する。88.5g。石灰岩製。

第331図6は磨石。凹石との併用である。周縁には敲打痕を残す。315g。石英閃緑岩製。

第85図3を除き、覆土中の出土。

23号住居跡（第87図）

〔位置〕17地点。

〔構造〕25J・110Y・146Dに切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×510cm。（主軸方位）N—S。（壁高）19～40cmを測り、40°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際を除き硬化面が認められる。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北に偏って位置する。深鉢形土器の上半部を埋設している埋甕炉で、不明×60cmの不整楕円形で深さ30cmの掘り込みをもつ。（柱穴）深度のある5本が主柱穴と思われる。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。遺物を多く含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

5層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

6層 黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多く出土する。土器は破片の状態である。

〔時期〕勝坂式期。

〔所見〕出土土器2・3のように時期の異なると思われる遺物が出土する。確認できなかったが、土坑などの遺構が重複していた可能性がある。

23号住居跡出土遺物（第88・89図、第314図7～10、329図2～4、第336図4、第337図2、第345図40～43）

第88図1は炉に埋設されていた土器。キャリパー形で、口縁部は小波状を呈すると思われる。文様帯は頸部の無文帯を挟んで口縁部と胴部に設けられる。口縁部の文様は二段設けられる。上段の文様は、刻みが加えられた隆帯により長楕円形の区画が連続して作られる。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。下段の文様は、楕円形区画の連結部を頂点とする三角形の区画が作られ、区画内には集合する沈線文や結節沈線文・三叉文が充填される。胴部の文様は、刻みが加えられた隆帯による楕円形・矩形・三角形の縦長の区画が作られ、区画内には縦・横の沈線文や結節沈線文が充填される。色調は褐色（7.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

2は曾利系の土器。1/4程の破片からの推定復元。ゆるいキャリパー形の器形になろうか。口縁部は連結部に渦巻文がある隆帯による楕円形の区画が作られ、区画内は斜位の集合する沈線が充填される。胴部は3条一組の沈線による懸垂文が施され、懸垂文間には沈線が矢羽根状に充填される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を含む。

3は底部から単純に開く器形。地文はLの捺糸文になろうか。口唇部下に2条の沈線を巡らせ、2条一対の沈線を垂下させて8分割し、半截竹管で弧線を多段に施して肋骨文状に仕上げる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。

第89図4はキャリパー状を呈すると思われる口縁部破片。横位の隆帯と押捺が加えられた縦位の隆帯により区画が作られようか。区画内には斜位の結節沈線文が充填される。口唇端部には刻みが加えられる。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には雲母を多く含む。

5は沈線による横位の波状文が施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には雲母を多く含む。

6は縦位の刺切文が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）胎土には雲母を多く含む。

7は波状沈線文・幅広の角押文・断面三角形の隆帯による長楕円形区画・外側竹管による2条の押引文・幅広の角押文という多段の文様帯構成をもつ。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には雲母を多く含む。

8は渦巻状の貼付文と押捺が加えられた隆帯が施され、5条一単位と思われる条線によって文様が描かれる。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

9は横長の板状突起上に更に鱗状の突起が付く。鱗状突起の表裏面には丸棒状の施文具による刺突が加えられた「コ」字状文が連続して施される。板状突起の表面には刻みがある隆帯で加飾された円孔があり、両脇には刻みがある隆帯による三角文が配される。内面は刻みのある隆帯に縁取りされた円孔が2個穿たれている。突起下の口縁部は縦位の沈線が集合して施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10は馬蹄形に隆帯が貼付され、三角形の押引文が鋸歯状に施される。口唇部下・貼付文上・胴部にはLの無節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には雲母を僅かに含む。

11は鋸歯状に貼付された隆帯の脇に、外側竹管による押引文がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

12は口唇部下に沈線・交互刺突による鋸歯文が巡り、沈線による渦巻文が施される。渦巻文の沈線間には刻みが連続して加えられる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を含む。

13はLRの単節斜縄文を地文とし、円形竹管文を沈線・波状沈線で円形に囲う。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には輝石・白色粒子を含む。

14は半截竹管による平行沈線を斜位に施し、沈線間に刻みを加える。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を含む。

15は隆帯により楕円形の区画が作られ、区画内には隆帯に沿って蓮華文が連続して施される。区画下はキャタピラ文になろうか。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

16は刻みが加えられた隆帯による楕円形の区画が作られ、区画内には縦位の沈線が集合して充填される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

17は刻みが加えられた隆帯により、直線・曲線が描かれ、空白部には沈線による三叉文・渦巻文が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には輝石を含む。

18は平行する沈線により三角形の区画がなされ、区画に沿って蓮華文が連続して施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

19は3条の沈線を巡らせ、沈線間に刻みを加える。横走する沈線の上位には沈線を縦位・斜位に施し、沈線間は刻みや交互刺突で加飾される。色調は灰褐色（5YR4/1）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

20は沈線により二重の円文が描かれ、連続爪形文や三角形の押引文が施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には細礫を含む。

21は刻みが加えられた隆帯による三角形の区画内に、縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

22は底部破片。胴部下位が内屈する。刻みが加えられた隆帯による渦巻文などが貼付される。空白部には半截竹管による半隆帯状の平行沈線により楕円文や渦巻文・流水文状の文様が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を含む。

23は上下に連続爪形文が付加された隆帯と、波状に施された三角形の押引文が横走する。色調は灰褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

24はRLの単節斜縄文を地文とし、両脇を幅広の角押文により加飾された隆帯や波状沈線文が施される。色調は灰褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

25は浅鉢形土器か。押捺が加えられた太い隆帯により、口縁部と胴部を画する。口縁部は隆帯による長楕円形の区画がなされ、区画の隆帯に沿って連続爪形文が施され、波状沈線文が横走する。色調はにぶい黄橙色（10YR 7/4）を呈し、胎土には細礫を含む。

第314図7～10は打製石斧。7～9は縦長剥片、10は横長剥片を使用。7は分銅形になろうか。刃部側の両側縁が節理面になっていて、この部分が欠損している可能性がある。刃部は尖刃状。79.8g。硅質砂岩製。8は短冊形の石斧。礫面を大きく残す。刃部は尖刃状。刃部には表裏面とも磨耗痕が認められる。61.2g。粘板岩製。9は両端を欠く。横長の剥片を使用。61.8g。安山岩製。10は短冊形で、刃部を欠く。縦長の剥片を使用。右側縁に敲打痕を残す。185.5g。硬砂岩製。

第329図2～4は磨製石斧。2・3は頭部のみ遺存。よく研磨されている。共に90gを測り、硬砂岩製。4は断面形が長方形の扁平な石斧。刃部が片刃状になる。非常にていねいに磨かれているが、両側縁に敲打痕を残す。30.4g。凝灰岩製。

第336図4は小型で扁平な石皿。凹石を兼ね、表裏面にくぼみがみられる。2920g。石英閃緑岩製。

第337図2は大きく破損しているが、石棒と思われる。残存部分は弧状をなす。4300g。緑泥片岩製。

第345図40～43は土器片錘。40は長軸に、41・42は短軸に、43は長・短軸に刻み加えられる。重量は順に、32.3・80・20・18.5g。

第88図1を除き、いずれも覆土中の出土。

24号住居跡（第90図）

〔位置〕17地点。

〔構造〕112Y・7Hに切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×490cm。（主軸方位）N—55°—W。（壁高）15～30cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から僅かに北西に偏って位置する。深鉢形土器の上半部を埋設している埋甕炉。90×80cmの楕円形で、深さ20cm前後の掘り込みをもつ。炉の掘り込み外に径10～15cm・深さ50cm前後の小ピットが南側を除いて巡っている。（柱穴）5本が支柱穴と思われる。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒褐色土。焼土小ブロック・炭化物粒子を多く含む。
- 6層 暗褐色土。ローム小ブロックを含む。焼土小ブロックを多く含む。
- 7層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 8層 黒褐色土。ローム小ブロック・焼土小ブロックを含む。

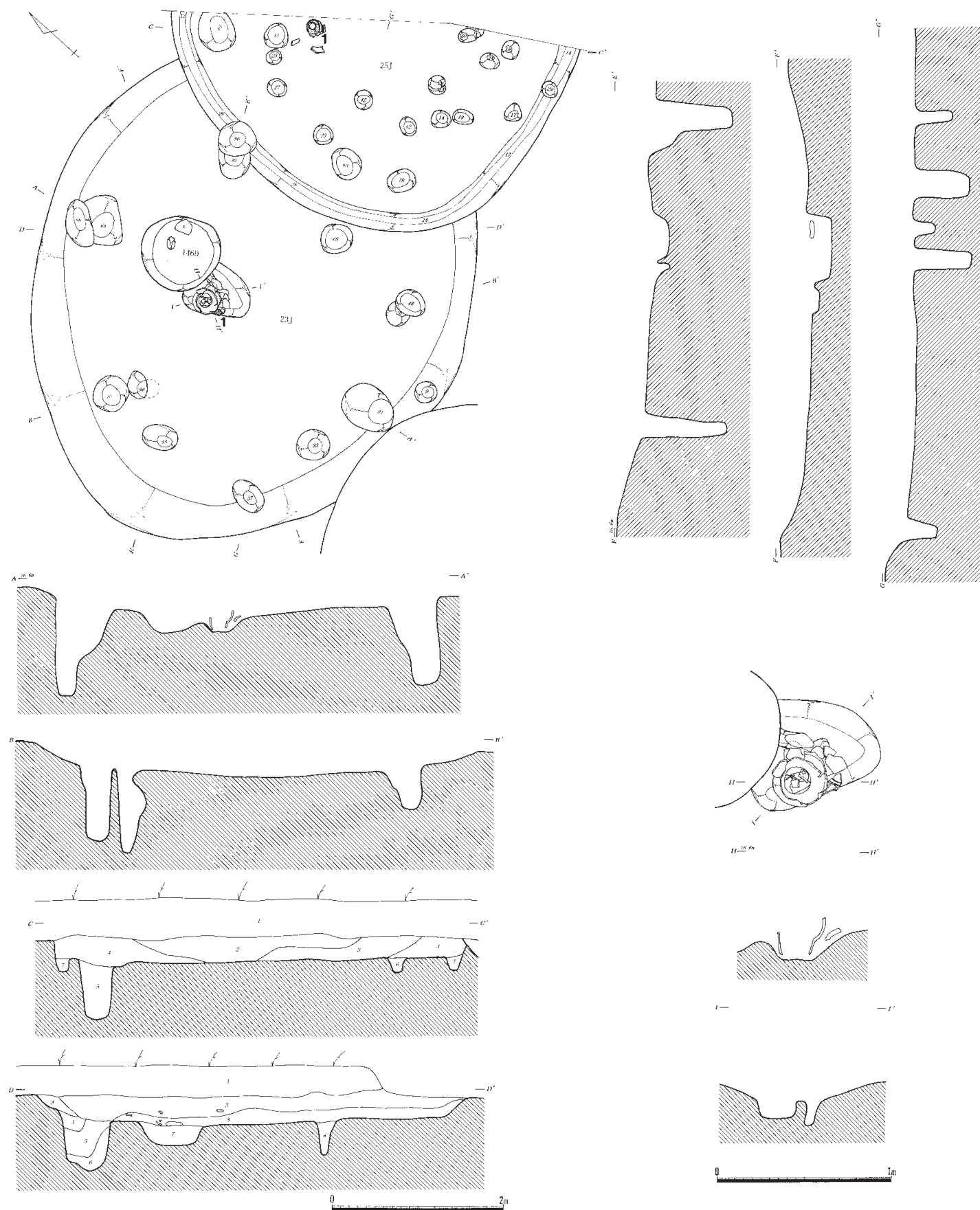
〔遺物〕いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から土器が多く出土した。

〔時期〕加曾利E I式期。

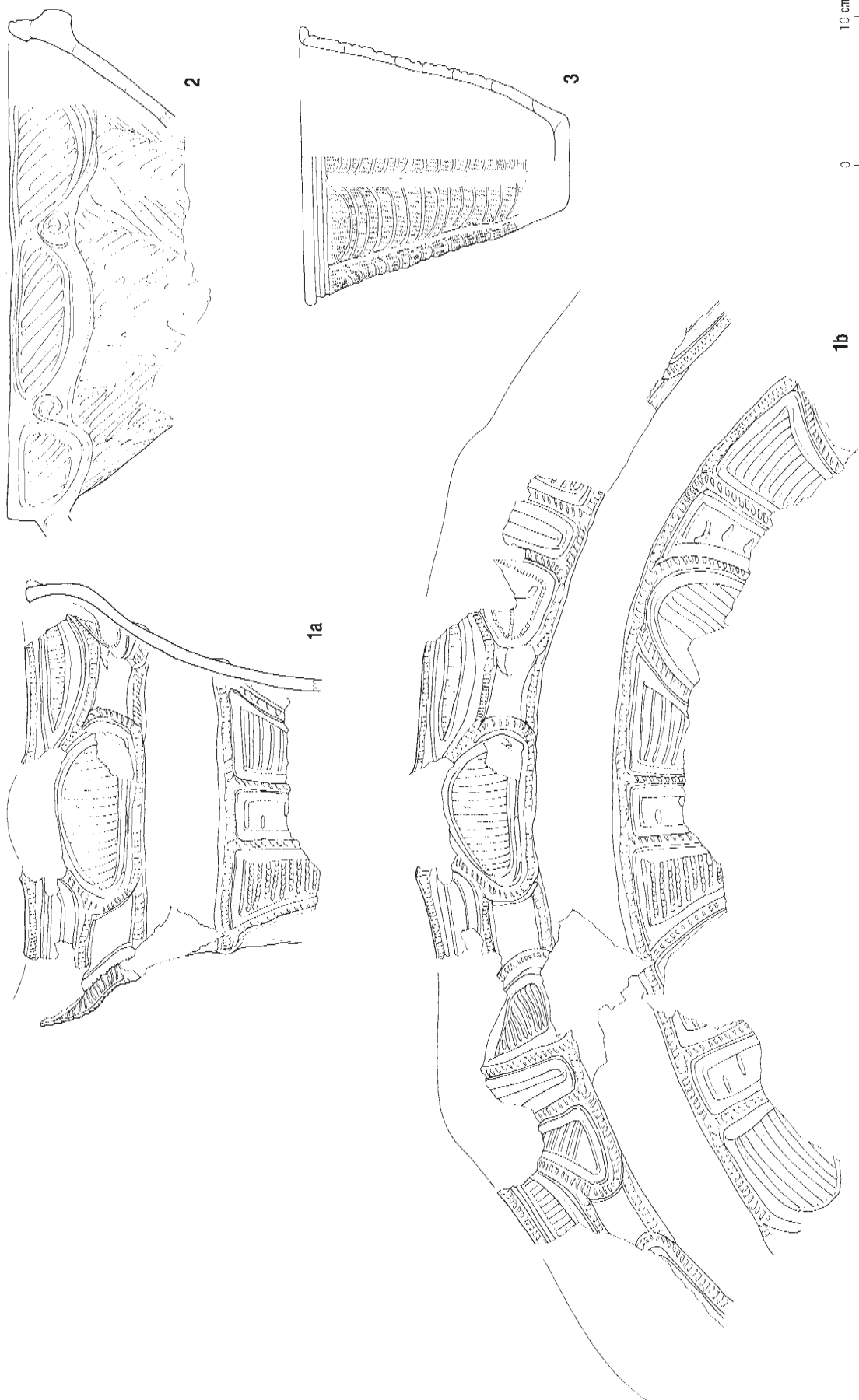
24号住居跡出土遺物（第91・92図、第314図11～13、第346図1～3）

第91図1はキャリパー形の土器で、口唇部は外反する。頸部に2本の隆帯を巡らせ、口縁部と胴部を画する。口縁部は斜位のLの捺糸文を地文とし、2本一対の隆帯による「∞」字状文が4単位施される。胴部はLの縦位の捺糸文となる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には片岩が目立つ。

2は頸部でくびれ口縁部は外反する。肩部には2条の結節沈線文が巡る。刻みが加えられた隆帯による両端が渦



第87図 23・25号住居跡 (1/60)、23号住居跡炉跡 (1/30)、146号土坑 (1/60)



第88図 23号住居跡出土遺物1 (1/4)



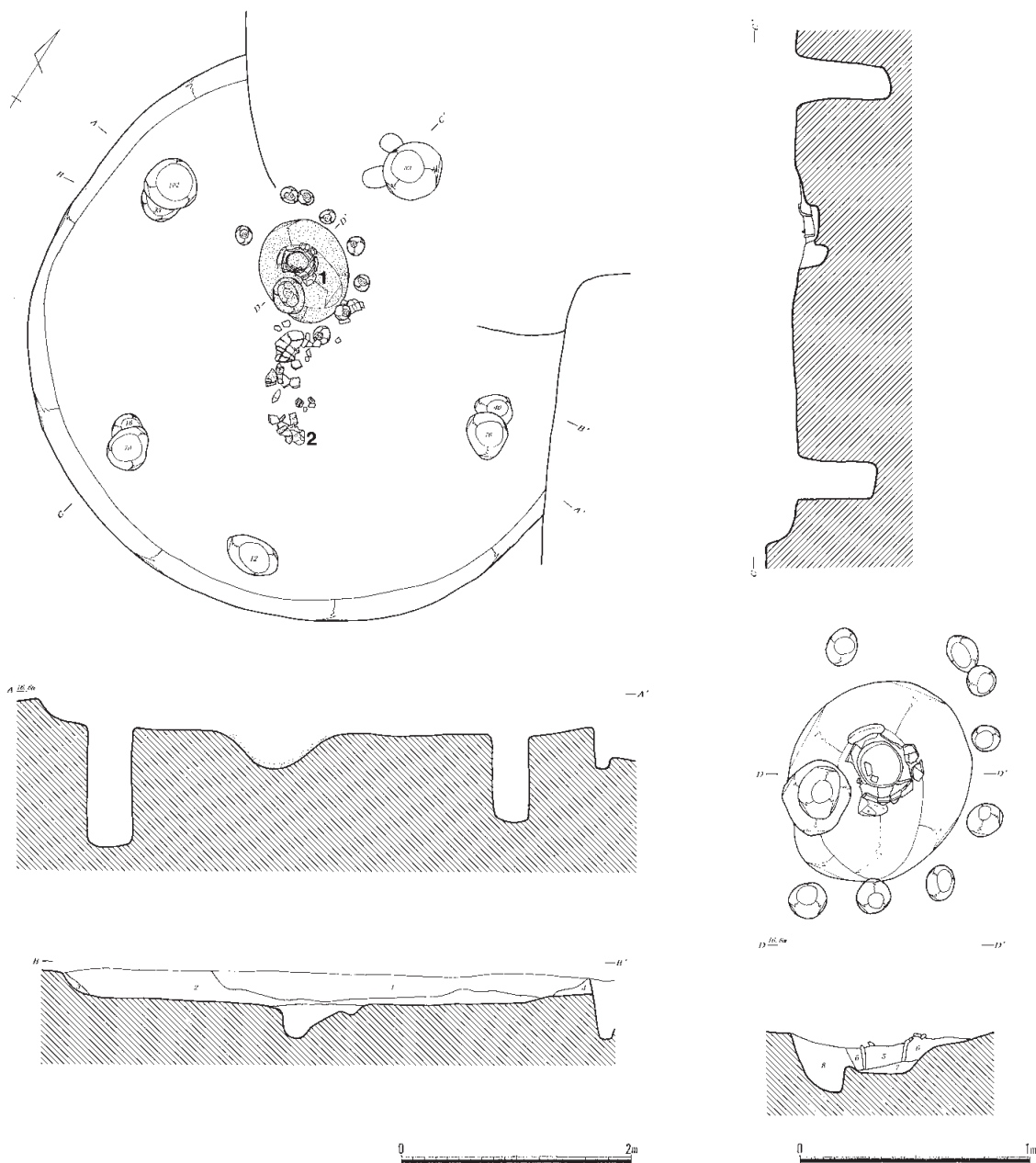
第89図 23号住居跡出土遺物 2 (1/3)

巻状になる「∩」字状文が貼付され、上端は口唇部にまで伸び突起になる。胴部にはRの撚糸文が縦位・斜位に乱雑に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第92図3は円筒形の土器。へら状施文具や半截竹管の刺突により区画や渦巻文が作られる。区画内には沈線による三角形文や蓮華文などが充填される。胴部過半にはLRの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

4は口縁部が強く外屈する土器。口縁部には幅広の爪形文が連続して施される。胴部上半には爪形文が付加された隆帯が貼付され、沈線文と爪形文の組み合わせによる文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は口縁部が外反する。口縁部は無文帯となり、屈曲部には部分的に平行沈線が横走する。刻みが加えられた隆帯が渦巻状に貼付され、空白部は沈線による重弧文、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。



第90図 24号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)

6・7・9・10はキャリパー形土器。6はRの撚糸文を横位に施して地文とする。口縁部から3本の短隆帯を垂下させ、2本一對の隆帯を弧状に貼付する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。7はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯による渦巻文が貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。9・10はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯が弧状に貼付される。9の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。10の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8は口唇部下の隆帯が突起状になる。以下、沈線が横走しLRの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

11は口唇部上に山形の突起が付く。口縁部にはヘラ状施文具による幅広の押引文が施される。以下、Lの撚糸文が全面に施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

12はL、13はRの撚糸文を地文とする。12は刻みが付加された隆帯が2本垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。13は隆帯が横走し、2本一對の隆帯が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

14はLR、15はRLの単節斜縄文を地文とする。14は2本の隆帯が巡り、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。15は上下を沈線でなぞられた隆帯が巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

16は底部破片。Lの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯が垂下する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

17は浅鉢形土器。口縁部は強く内屈する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

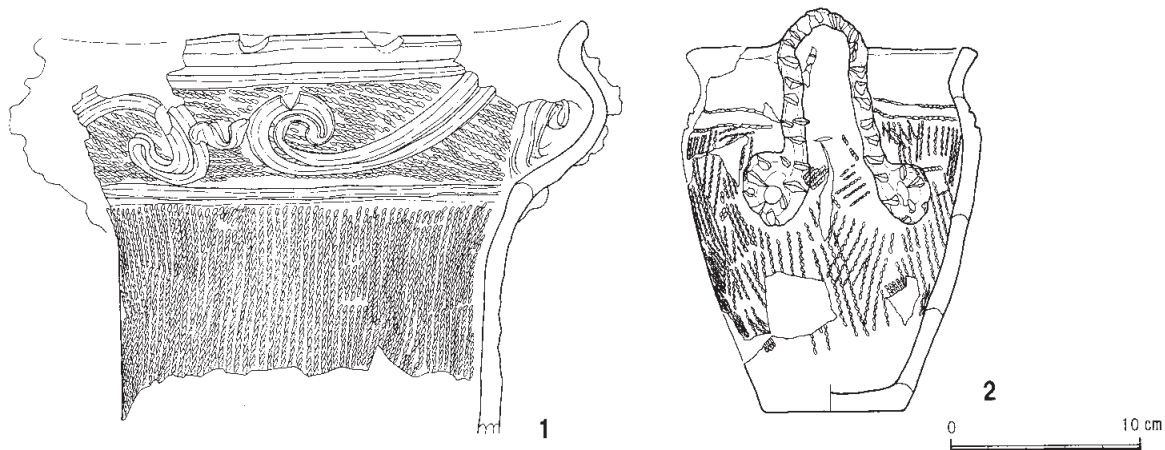
第314図11～13は打製石斧。11は短冊形。横長の剥片を使用。表面には礫面を残す。刃部は円刃状を呈する。188.2g。礫岩製。12は短冊形。横長の剥片を使用。刃部はゆるい円刃状を呈する。表面中央部には磨耗痕が認められる。104.8g。粘板岩製。13は頭部を欠く。刃部は尖刃状を呈する。表裏面先端部には磨耗痕が認められる。45.1g。硬砂岩。

第341図1～3は土器片錘。1・2は長軸に、3は短軸に刻みが加えられる。重量は1が32.1g、2が27.4g、3が16.3gを測る。

いずれも覆土中の出土。

25号住居跡（第87図）

〔位置〕17地点。



第91図 24号住居跡出土遺物1（1/4）

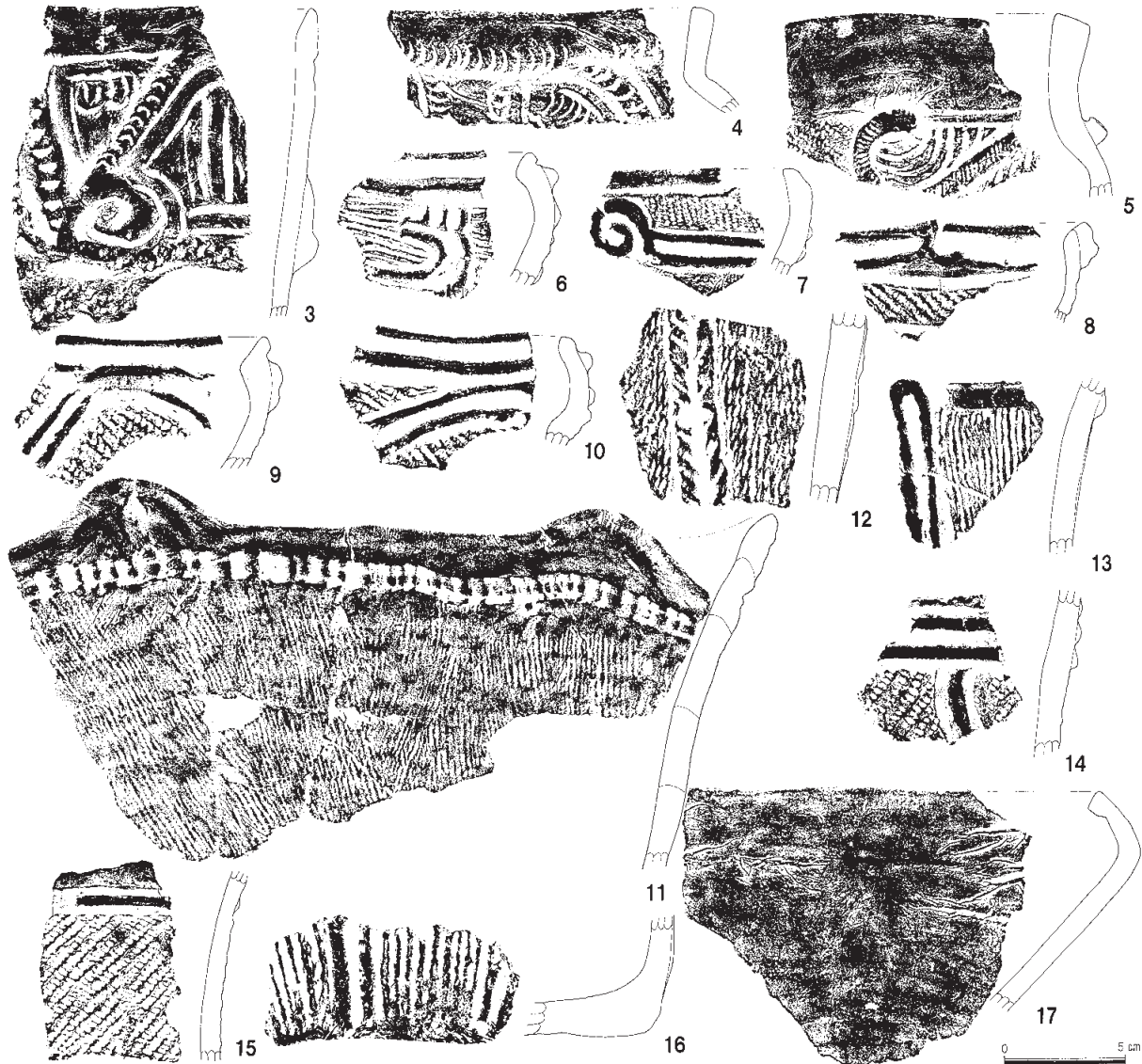
〔構造〕 東側調査区外。23 Jを切り、112 Yに切られる。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×480cm。(主軸方位) N-80°-E。(壁高) 20cm前後を測り、70° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅20~30cm・下幅7~10cm・深さ13~24cmを測る。(床面) 住居壁際を除き硬化面が認められる。(炉) 調査区外にあるものと思われる。(柱穴) 深度のあるピットはあるが、不規則な配列のため支柱穴を特定することができなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。遺物を多く含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 7層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、出土量は多い。

〔時期〕 加曾利E I 式期。



第92図 24号住居跡出土遺物 2 (1/3)

25号住居跡出土遺物（第93・94図、第315図1～4、第339図3～5、第346図4）

第93図1は無文の口縁部が内湾する。口唇部上には円孔が穿たれた山形の突起が付き、そこから2本の隆帯が縦位に貼付される。頸部には隆帯が巡り、7本の隆帯を垂下させて画する。区画内には縦位の沈線が直線・鎖線状に充填する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）呈し、胎土には輝石を多く含む。

2は2条の横走る沈線により胴部以下を画する。2条一對の沈線により「U」字状の区画を3単位作り、区画内外に渦巻文が配される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

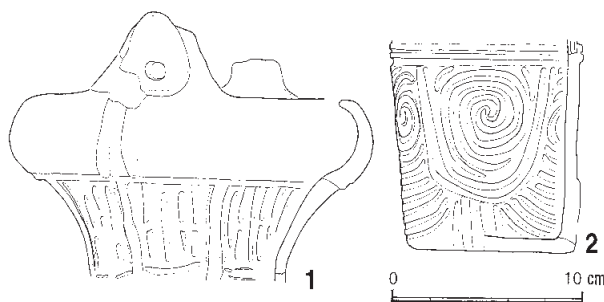
第94図3は隆帯が鋸歯状に貼付され、それに沿って押引文が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫を含む。

4は肥厚する口唇部に刻みが加えられる。幅広の角押文と三角押文により文様が構成される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

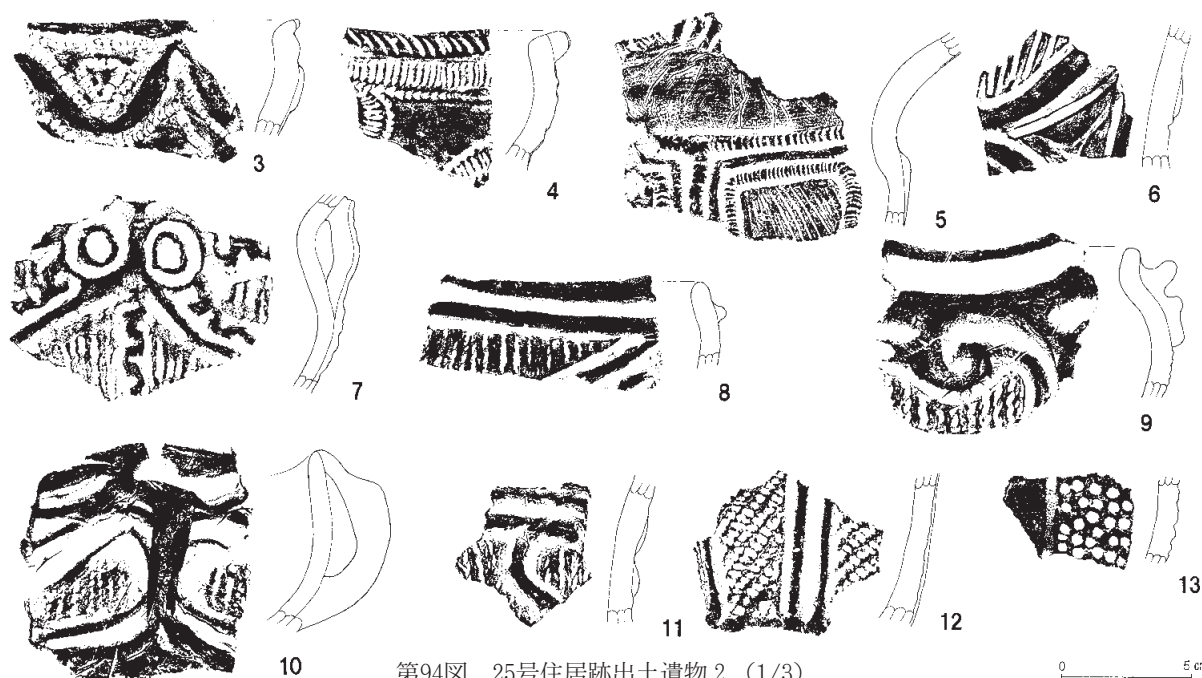
5は大きく外湾する土器。無文帯を挟んで上位には隆帯が貼付される。下位には連続爪形文が付加された隆帯により矩形の区画が作られ、縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6は隆帯が弧状に貼付され、空白部には三叉文や集合する沈線が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

7は眼鏡状の突起が付く。突起を基点にして隆帯を弧状に貼付して口縁部文様帯を形成して区画を作る。区画内



第93図 25号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第94図 25号住居跡出土遺物 2 (1/3)

には交互刺突による鋸歯文や押引文などが充填される。胴部の文様はLの撚糸文を地文とし、突起から交互刺突が加えられた鋸歯状の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

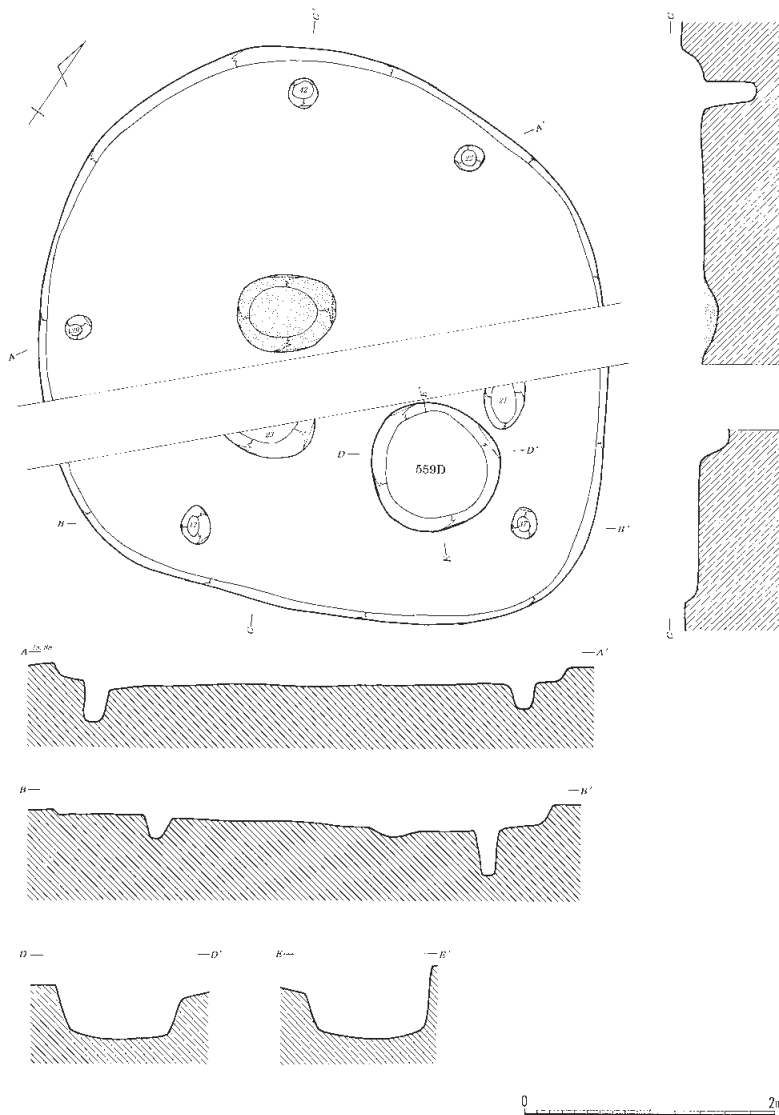
8～10はキャリパー形土器の口縁部破片。Lの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯により文様が作られる。8は半円状の区画が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。9は渦巻文が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。10は橋状の突起が付けられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11はLの撚糸文を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

12はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

13は沈線が垂下し、円形の刺突文が密集して施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

第315図1～4は打製石斧。1は側縁上部に段をもつ。横長の剥片を使用。刃部は平刃状を呈する、表裏面右側縁部には磨耗痕を認める。81.4g。硬砂岩製。2は撥形に近い。横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃



第95図 26号住居跡 (1/60)

部は平刃状を呈する。45.7g。硬砂岩製。3は刃部・頭部共に尖頭状を呈する。94.5g。硬砂岩製。4は短冊形であろう。横長の剥片を使用。50.5g。硬砂岩製。

第399図3～5は縦長の剥片。3は4.8g。珪岩製。4は2.1g。黒曜石製。5は使用痕のある剥片。両側縁に刃こぼれが認められる。4.4g。黒曜石製。

第345図4は土器片錘。長軸に刻みを加えられようか。113.5g。

いずれも、覆土中の出土。

26号住居跡（第95図）

〔位置〕 22・130地点。

〔構造〕 559Dに切られる。（平面形）不整楕円形。（規模）

470×450cm。（主軸方位）N-45°-W。（壁高）10～18cmを

測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）掘込みが浅く軟弱である。（炉）80×65cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ15cmの掘り込みをもつ。（柱穴）5本検出されたが、支柱穴は判然としない。

〔覆土〕 耕作による攪乱が著しいため詳細は不明であるが、上層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土、下層はローム粒子を多く含む暗褐色土である。

〔遺物〕 覆土中から出土するが多くない。

〔時期〕 加曾利E式期。

26号住居跡出土遺物（第96図）

1は口縁部に縦位に太い沈線を垂下させ、隆帯の貼付がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

2はRLRの複節斜縄文を地文として隆帯による区画が作られる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

3は口唇部下に沈線が巡る。RLの単節斜縄文を地文とし、沈線による「∩」字状の区画が作られようか。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

4は口唇部下に2条の沈線が巡り、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

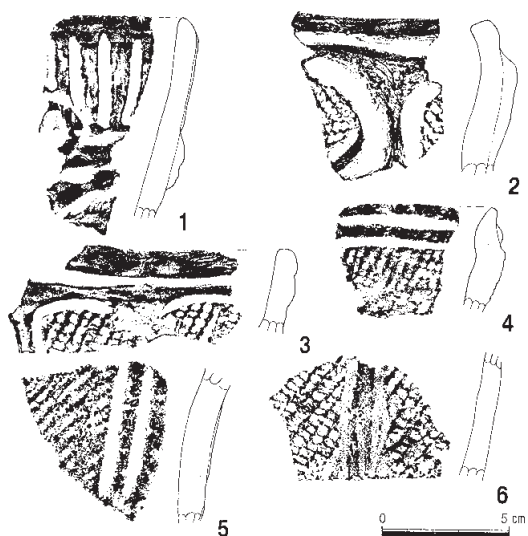
5・6はRLの単節斜縄文を地文とする。5は2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。6は平行沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

いずれも、覆土中の出土。

27号住居跡（第97図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 北西側調査区外。153・155Dを切り、156Dに切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×450cm。（主軸方位）N-40°-E。（壁高）27～33cmを測り、45～60°の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅10～20cm・下幅3～10cm・深さ5～17cmを測る。（床面）住居北側に硬化面が認められる。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。深鉢形土器の胴部を埋設している埋甕炉で、90×70cm・深さ20cmの楕円形の掘り込みをもつ。



第96図 26号住居跡出土遺物（1/3）

(柱穴) 壁際の4本が支柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

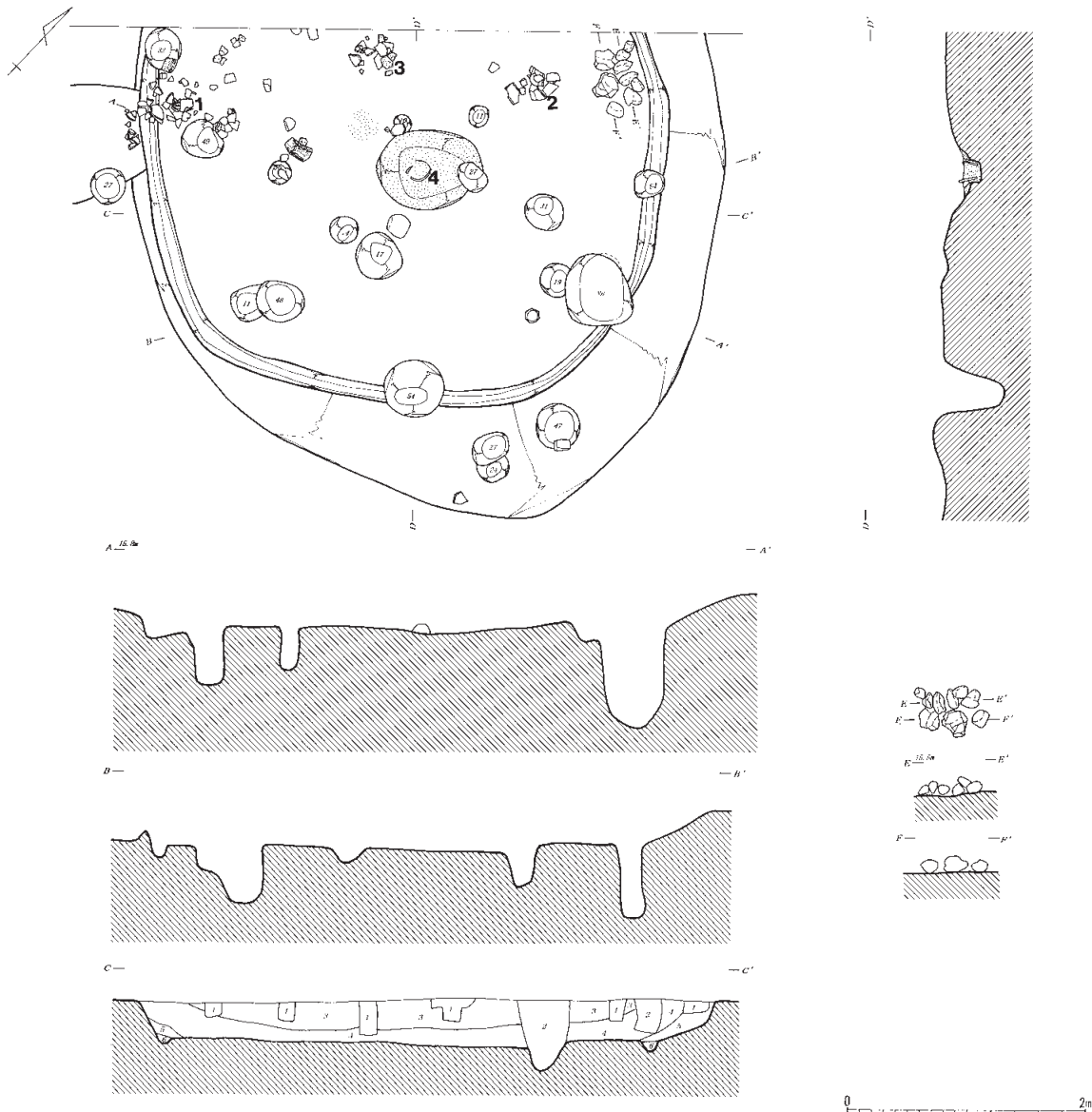
- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。後世のピット。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 明褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 5層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 住居北側に床面から浮いた状態で土器片が多量に出土した。北東壁際の床面上には礫の集中が認められた。

〔時期〕 加曾利EⅡ時期。

27号住居跡出土遺物(第98・99図、第315図5～8、第329図5、第336図5、第339図6～12、第346図5)

第98図1は1/4程の破片からの推定復元。頸部がくびれ無文の口縁部は内湾ぎみに開く。頸部には蛇行する隆帯が巡る。胴部はRLの単節斜縄文を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調は褐色(7.5YR4/4)を呈し、胎土に



第97図 27号住居跡 (1/60)

は細礫を僅かに含む。

2は曾利系の土器。頸部がくびれ口縁部は内湾ぎみに開く。頸部には蛇行する隆帯を巡らせて、口縁部と胴部を画する。口唇部上には小突起が4単位設けられ、そこから蛇行する隆帯が垂下して区画を作る。区画内には沈線による重弧文が充填される。肥厚する口縁部内面には、集合する沈線がみられる。胴部は縦位の沈線が乱雑に施される。色調は褐色（7.5YR4/4）を呈し、胎土には片岩を多く含む。

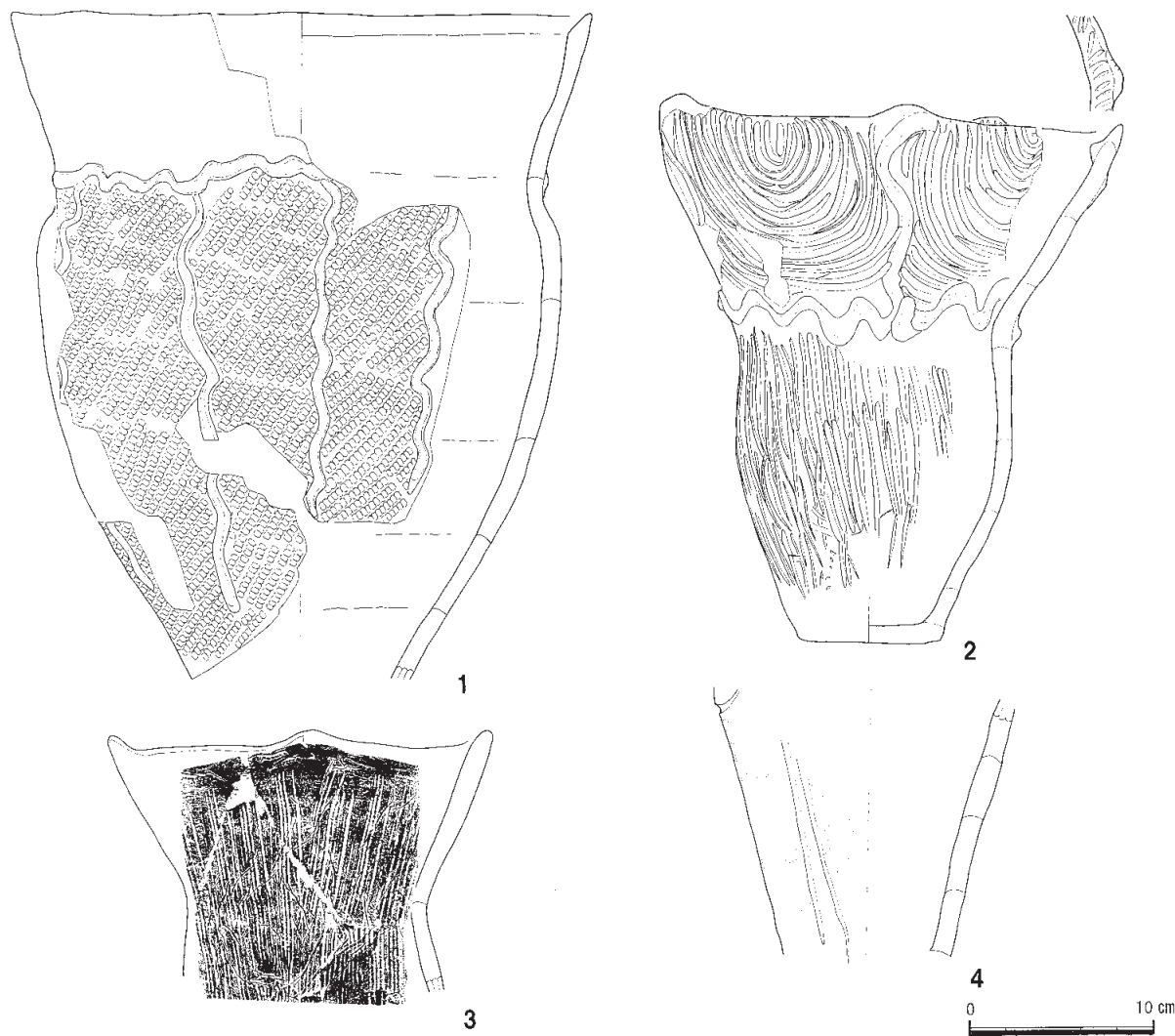
3は頸部が「く」字状にくびれ、口縁部は内湾ぎみに開く。口唇部上に小突起が4単位設けられる。5条1単位と思われる櫛歯状施文具による条線が縦位に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

4は炉に埋設されていた土器。条線を地文とし、横位の弧状の沈線がみられ、そこから2本一對の沈線が4単位垂下される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には片岩を多く含む。

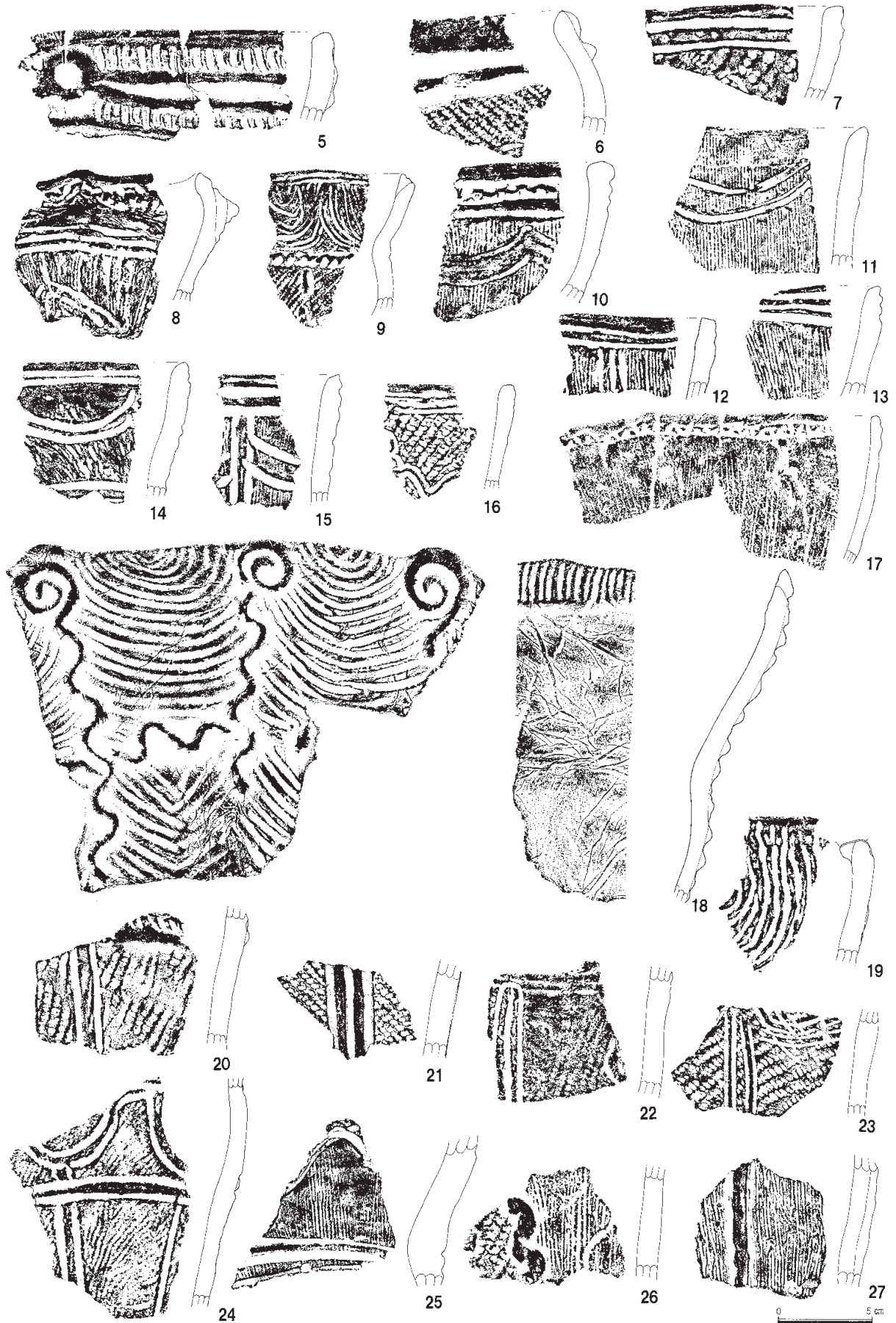
第99図5は環状の貼付文を基点として2本一對の隆帯により横位の区画が作られる。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

6は口唇部下に隆帯が巡り、LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

7は口唇部下に2条の沈線が巡り、LRの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。



第98図 27号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第99图 27号住居跡出土遺物 2 (1/3)

8・10・11・14～16・25は連弧文系の土器。8は口唇部上に山形の小突起が付く。口縁部に隆帯が巡り、口唇部との間に2条一對の沈線による弧線文と交互刺突による鋸歯文が施される。胴部は条線を地文とする。3条の沈線が巡り、沈線が垂下し、2条一對の沈線による弧線文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。10は口縁部に3条の沈線を巡らせる。上位の沈線間には交互刺突が加えられる。条線を地文とし、3条一組の沈線により連弧文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。11・25は条線を地文とする。11は2条の沈線により弧線文が描かれる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を含む。25は弧線と平行沈線が横走する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。14はLの捺糸文を地文とする。口唇部下に2条、胴部中に1条の沈線を巡らせ、その間に2条一對の沈線による弧線文を施す。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂・輝石を含む。15は条線を地文とする。口唇部下に2条の沈線を巡らす。2条の沈線が垂下し、弧線文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。16はRLの単節斜縄文を地文とする。文様は半截竹管によりなされ、口唇部下に3条の横線、胴部上位には弧状に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

12・13は条線を地文とする。12は口唇部下に2条の沈線が巡り、3条の沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。13は口唇部下に3条の沈線が巡る。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

17は口唇部下に2条の沈線を巡らせ、沈線間には鋸歯状に刻みが加えられる。以下、条線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

9・18・19は曾利系の土器。9は口唇端部に2条の沈線が巡る。口縁部には沈線による重弧文が施される。頸部には円形の刺突文が連続して加えられる。胴部はLRの単節斜縄文を地文とし、短隆帯が縦位に貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。18は口唇部上に小突起が付く。太沈線により口縁部は重弧文、胴部は綾杉状の文様が施される。小突起から頭部が渦巻状を呈する蛇行する隆帯が垂下し、頸部には蛇行する隆帯が横走する。内面、口縁部には集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。19は口唇端部から口縁部にかけて重弧文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20～24は斜縄文を地文とし、沈線により文様が描かれる。20は横位の隆帯の上位に刻みが認められる。2条の沈線が垂下する。縄文はLRの単節縄文。色調は灰褐色(7.5YR5/)を呈し、胎土には細礫を多く含む。21は3条の沈線が垂下する。縄文はLRLの複節縄文。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。22は3条の沈線が巡り、幅狭な三叉状の懸垂文と弧線が施される。縄文はRLの単節縄文。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。23は半截竹管による平行沈線が2単位垂下し、弧線が乱雑に施される。縄文はLRの単節縄文。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。24は2条の沈線を横走させ上下に画する。上位の文様は2条一對の沈線による波状文が施され、波底部には短沈線が加えられる。下位は平行沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

26はRLの単節斜縄文と条線を地文とする。地文の境目に蛇行する隆帯を垂下させる。条線上には蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

27は条線を地文とし、隆帯が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第315図5～8は打製石斧。すべて短冊形を呈する。5は頭部を欠く。横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。刃部は平刃状を呈する。81.8g。硬砂岩。6は表面に節理面を残す。刃部は円刃状を呈する。70.2g。硬砂岩。7は頭部を欠く。刃部は平刃状を呈する。珪質砂岩製。8は表面に僅かに礫面を残す。105.2g。硬砂岩製。

第336図5は磨製石斧。頭部を欠く。刃部は円刃状を呈する。360g。硬砂岩。

第389図5は扁平な石皿。凹石を兼ねる。表裏面にくぼみを有する。256g。閃緑岩製。

第339図6・7は凹基の打製石鏃。6は側縁がくびれる。1.3g。7は0.9g。共に黒曜石製。

8は二次加工を有する剥片。左側縁に細かな加工が加えられる。8.3g。黒曜石製。

9～11は使用痕のある縦長の剥片。9は尖頭状を呈し、両側縁に刃こぼれが認められる。1.6g。10は両側縁に刃こぼれが認められる。4.4g。11は両側縁に刃こぼれが認められる。3g。すべて黒曜石製。

12は縦長の剥片。先端を欠く。5g。黒曜石製。

第386図5は土器片錘。短軸に刻みが加えられる。28.2g。

第98図4を除き、覆土中の出土。

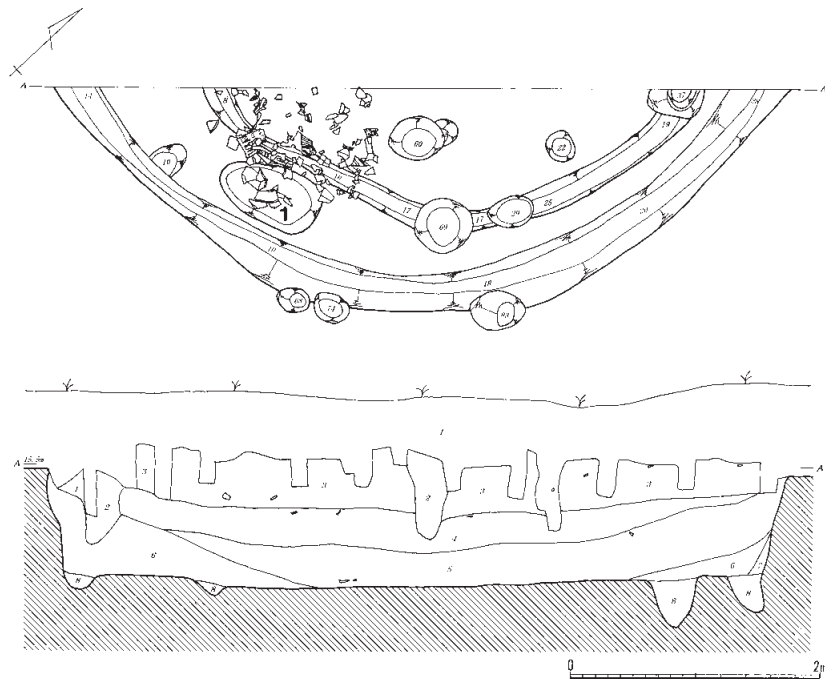
30号住居住居跡（第100図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 北側調査区外。177Dに切られる。壁溝が二重に巡り、拡張された可能性が大きい。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）41～87cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅20～45cm・下幅6～18cm・深さ10～20cm、拡張前は上幅10～23cm・下幅5～13cm・深さ8～25cmを測る。（床面）全体に硬く良好である。（炉）調査区外にあるものと思われる。（柱穴）壁溝の内側の2本が拡張前の、壁溝を切る3本が拡張後の支柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土。ローム粒子を僅かに含む。後世のピット。
- 3層 褐色土。ローム粒子を含む。下部に遺物を多く含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。上部に遺物を多く含む。
- 5層 明褐色土。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。
- 6層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 7層 黄褐色土。ロームブロック。
- 8層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。



第100図 30号住居跡（1/60）

〔遺物〕 住居北側の覆土中に多くみられた。廃棄されたものであろう。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

30号住居跡出土遺物（第101・102図、第315図9～13、第346図6～11）

第101図1は浅鉢形土器。1/4程の破片からの推定復元のため、径の大きさは正確さを欠く。底部から直線的に開き、肩部は「く」字状に内屈し、頸部は外屈して口縁部は短く開く。頸部及び肩部の屈曲部に連続した押捺を施して画する。肩部には沈線と連続した押捺により長楕円形の区画が作られる。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には片岩を僅かに含む。

第102図2～5はキャリパー形土器の口縁部破片。いずれも捺糸文を横位に施し地文とし、2本一対の隆帯を貼付して文様を構成する。頸部は無文帯となる。捺糸文は3を除いてL。2は渦巻文が作られる。頸部を画する隆帯上位の捺糸文中には4条の短沈線がみられる。3・4は「∞」字状の貼付文になろうか。3の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。4の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。5は頸部の区画の隆帯上に刻みが増えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

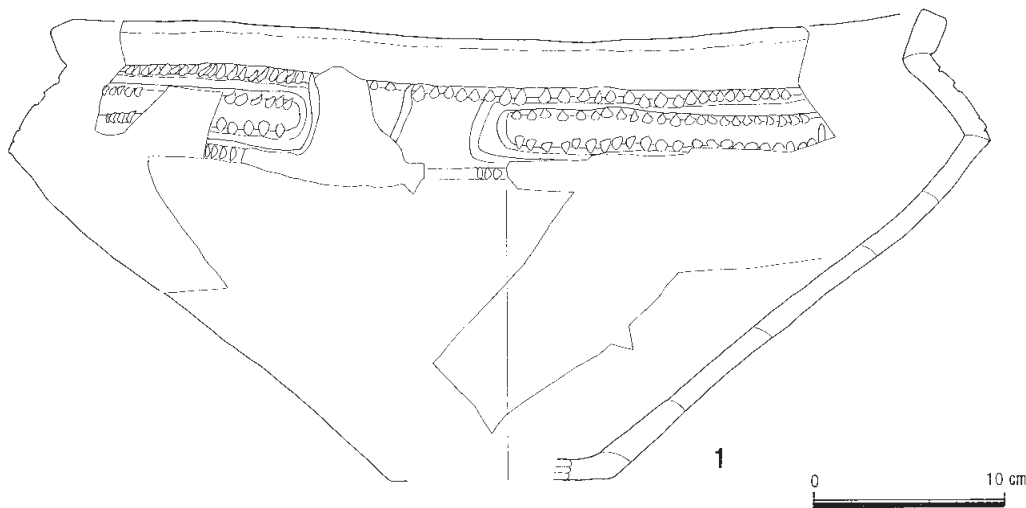
6は口縁部が強く内湾する。隆帯を縦位に連続して貼付し、2本の隆帯を横走させる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には粗砂を含む。

7～10は縦位の捺糸文を地文とする。捺糸文は10を除きL。7は2本一対の隆帯を直行・蛇行して垂下させる。色調は赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。8は2本一対の隆帯と頭部が渦巻状になる隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。9は隆帯により長方形の区画が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。10は蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第315図9～13は打製石斧。9・11は撥形に近い。9は表面に礫面を残す。刃部は尖刃状を呈する。72.9g。硬砂岩製。11は横長の剥片を使用。表面には大きく礫面を残す。刃部は平刃状を呈する。87.8g。硬砂岩製。12・13は短冊形。12は表面に大きく礫面を残す。刃部は平刃状を呈する。表裏面刃部左右に磨耗痕を認める。69.8g。粘板岩製。13も表面に大きく礫面を残す。刃部は円刃状。66.5g。硬砂岩製。

第346図6～11は土器片錘。8は短軸、他は長軸に刻みが増えられる。重量は6が54.2g、7が69.6g、8が35.5g、9が8.2g、10が43.4g、11が47gを測る。

いずれも覆土中の出土。



第101図 30号住居跡出土遺物1（1/4）

31号住居跡（第103図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 壁溝が二重に巡り、拡張された可能性が大きい。（平面形）楕円形。（規模）700×610cm。拡張前565×465cm。（主軸方位）N-26°-E。拡張前N-20°-E。（壁高）65～120cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅45～65cm・下幅10～20cm・深さ18～26cm、拡張前は上幅20～40cm・下幅6～15cm・深さ8～29cmを測る。（床面）硬質ローム層まで掘り下げているため遺存状態は良好であるが、特に硬化面は認められなかった。（炉）住居中央から僅かに北に偏って位置する。深鉢形土器の上半部を埋設している埋甕炉で、85×55cm・深さ40cmの楕円形の掘り込みをもつ。（柱穴）拡張前は壁溝の内側の深度のある6本が主柱穴と思われる。拡張後は壁溝と切り合う6本が主柱穴と思われる。

〔覆土〕

- 1層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 7層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 8層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 9層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 10層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。
- 11層 褐色土。ローム粒子を多く含む。



第102図 30号住居跡出土遺物2（1/3）

- 12層 黄褐色土。ロームブロック。
13層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
14層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
15層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
16層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
17層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
18層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
19層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
20層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
全体に堆積状態が不整合で、埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

〔所見〕 炉の埋設土器から勝坂式期の住居跡と判断した。

31号住居跡出土遺物（第104～106図、第316図1～4、第331図6、第335図6、第340図1～3、第346図12～23）

第104図1は炉に埋設されていた土器。胴部は徐々に開き、口縁部は内湾する。口縁部は無文であるが、刻みがある隆帯が鍵手状に貼付される。頸部には刻みが加えられた隆帯を巡らせて口縁部と胴部を画する。胴部の基幹文様は刻みが付加された隆帯によってなされる。隆帯を垂下させ縦長の区画を作るが、口縁部に貼付された隆帯の下位は幅狭な区画になり、他は幅広に4分割される。区画内の主文様は、環状の貼付文とそこから対角に伸びる隆帯で、環状の貼付文内には刺突文が付加された円文などが充填される。幅狭の区画内及び幅広の区画内の空白部には沈線による渦巻文・三叉文などが充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

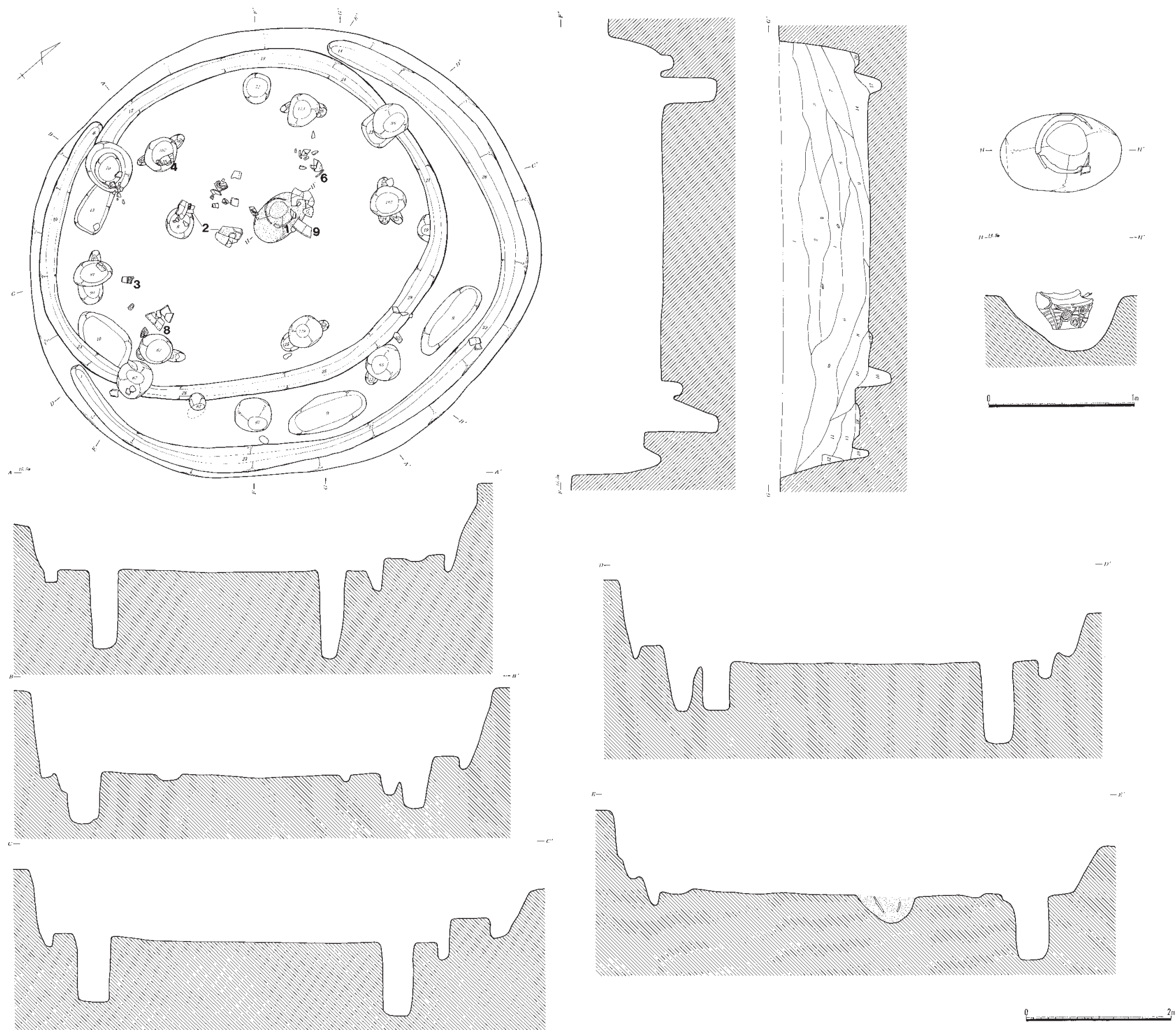
2・3は円筒形の土器。2は口唇部が「く」字状に内屈する。無文の口縁部には、綾杉状の刻みが加えられた隆帯が対向した器面に貼付される。胴部上半は、口縁部に垂下している2本の隆帯から延長された交互押捺による鋸歯状の隆帯が「U」字状に貼付され2分割される。「U」字状の貼付文内は沈線による三叉文が充填される。2分割された区画内は、鎖状隆帯により上下に画され、区画内には沈線による渦巻文などが充填される。胴部下半はRLの単節縄文が施される。色調は灰褐色（10YR5/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。3は小型の土器。胴部上半には刻みが加えられた隆帯が横位に2本、縦位に4本貼付して4単位の区画を作る。区画内には沈線による渦巻文・三叉文などが充填される。胴部下半は無文になる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・輝石を僅かに含む。

4は胴部下位が屈曲し算盤玉状を呈する。屈曲部には刻みが加えられた隆帯が巡る。綾杉状の刻みがある隆帯を貼付し縦長の区画が作られる。区画は5単位になろうか。区画内は更に隆帯などで分割されるらしい。区画内は上部が沈線による渦巻文や三叉文など、下部が押し引きによる連続刺突文が充填される。胴部下位は無文になる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

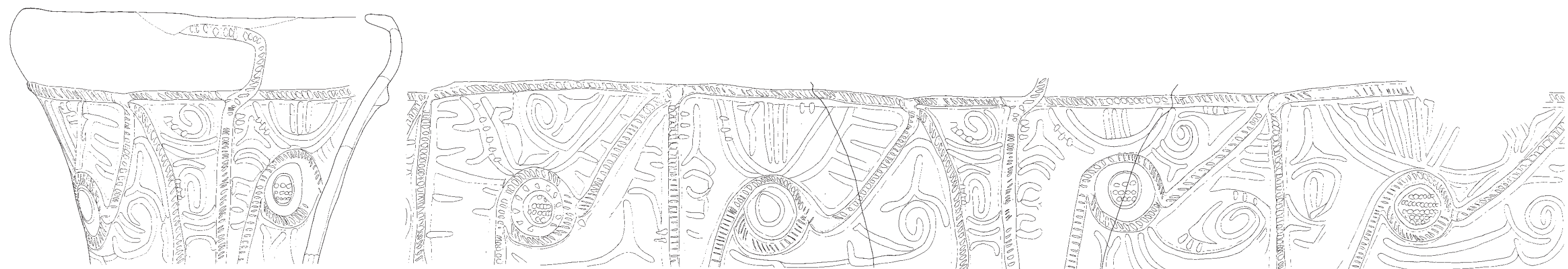
5は円筒形の器形になろうか。Lの細い撚糸文を斜位に施し地文とする。口唇部直下に2条の沈線を巡らせ、4条一組の沈線による弧状の文様を施す。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・片岩を含む。

第105図6はキャリパー形の土器。頸部に斜位の刻みを加えた隆帯を巡らせて口縁部と胴部を画する。口縁部はLの撚糸文を横位に施して地文にする。斜位の刻みがある隆帯・交互刺突が加えられた隆帯・無加飾の隆帯を横走させて上下2段に分割し、隆帯による渦巻文・十字文などを縦位に貼付して楕円形の区画を作る。胴部はLの撚糸文が縦位に施される。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

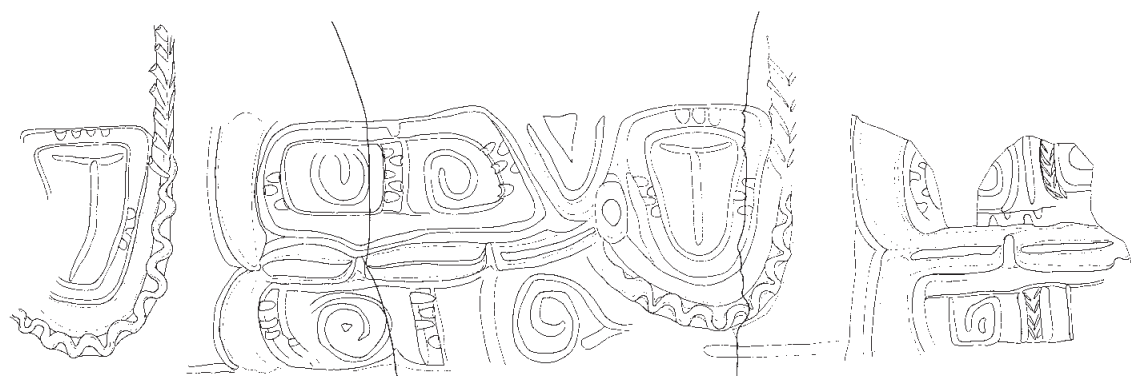
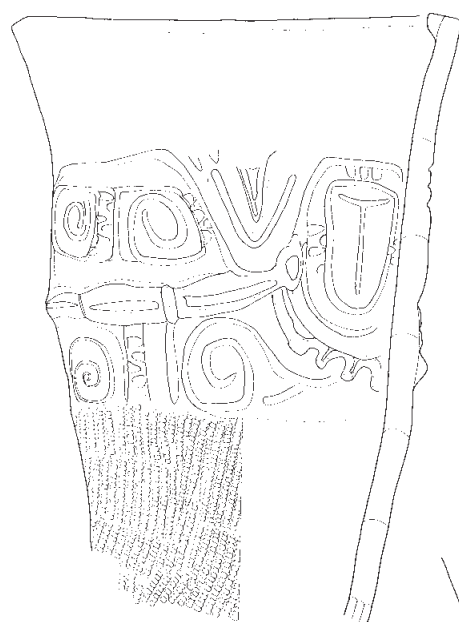
7はキャリパー形の形状になろうか。口唇部下に隆帯を巡らせ、交互刺突を加えて鋸歯状に仕上げる。以下、Lの縦位の撚糸文を地文とし、2本一對の細い隆帯を波状に貼付し渦巻文を付加する。色調は暗赤褐色（5YR3/2）



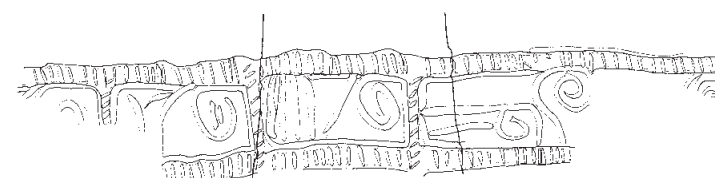
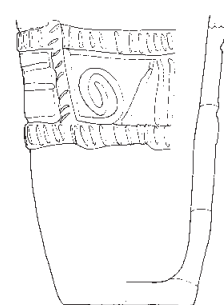
第103图 31号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)



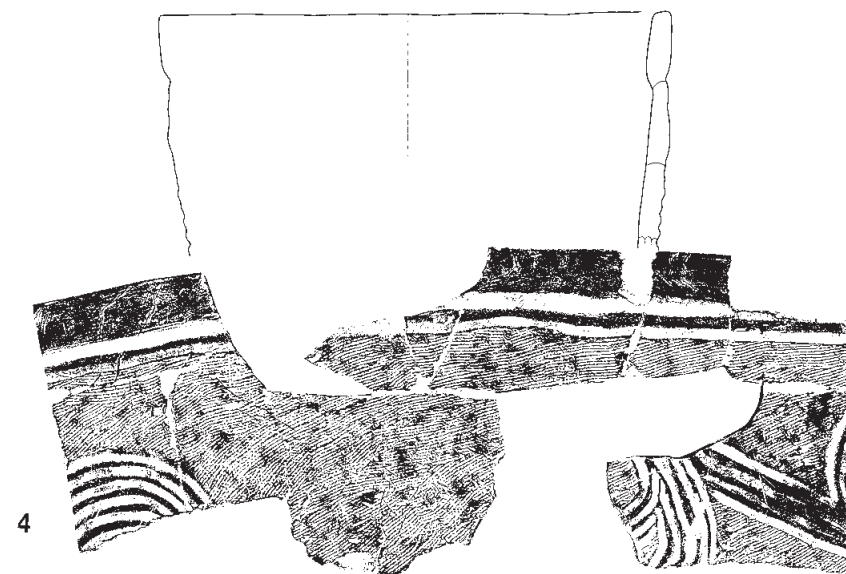
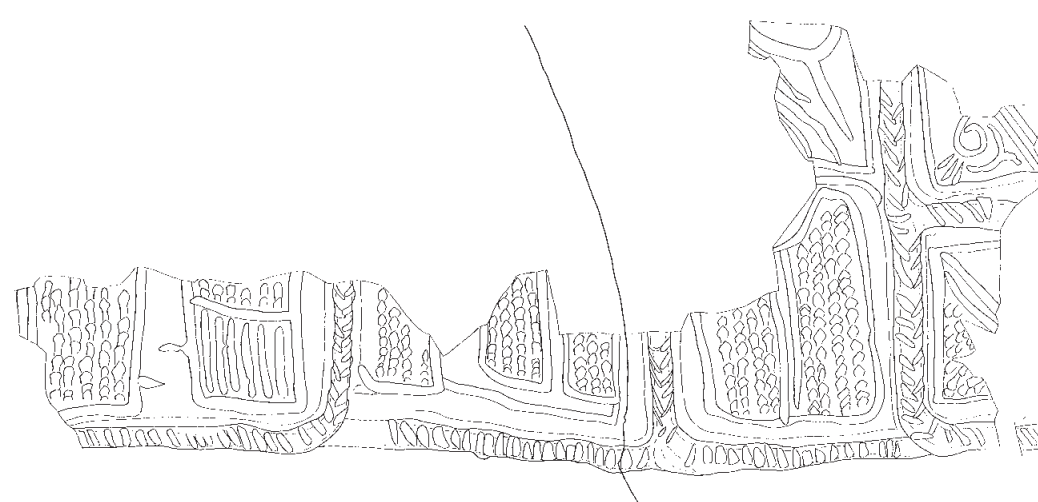
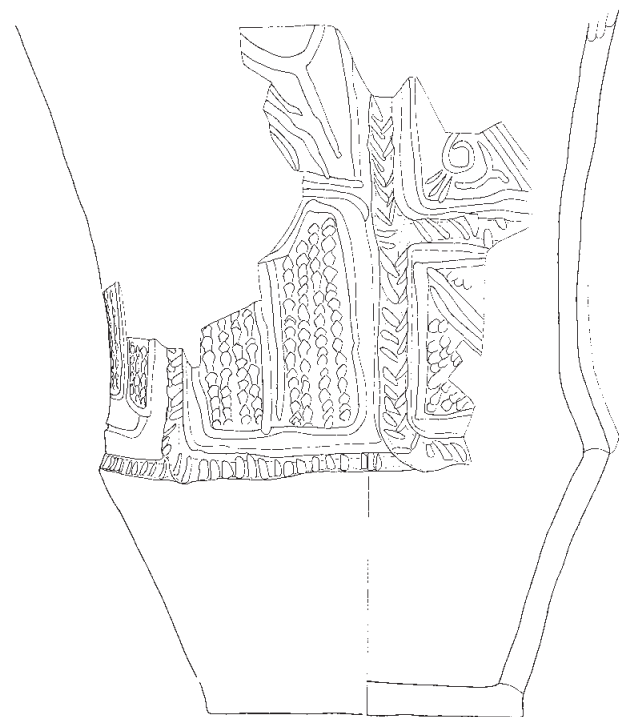
1



2



3



5

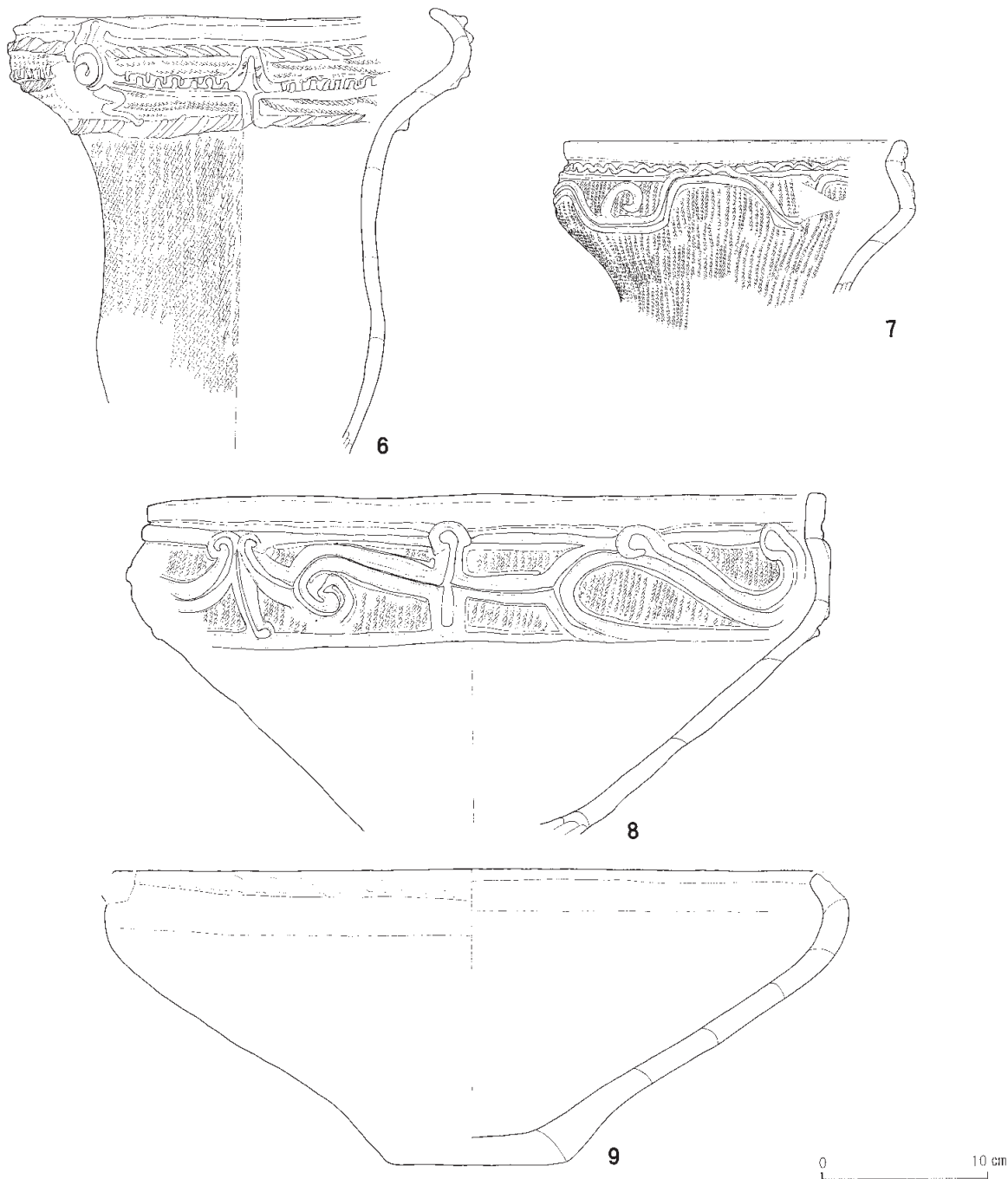


第104图 31号住居跡出土遺物1 (1/4)

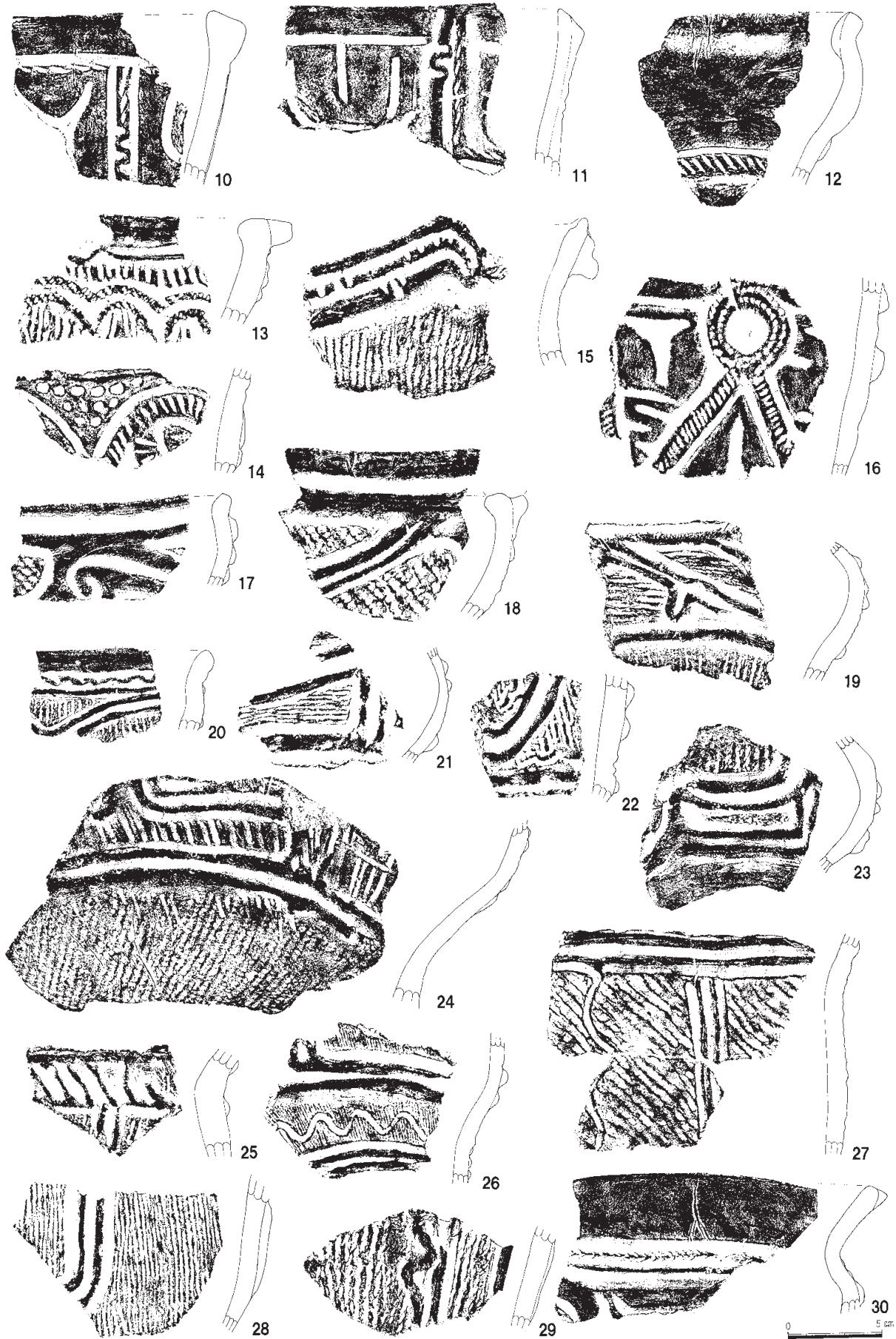
を呈し、胎土には白色粒子を多く含む。

8・9は浅鉢形土器。8は口縁部が内湾しながら立ち上がり、口唇部は直立する。口縁部の文様はLの撚糸文を縦位に施して地文とし、2本一對の隆帯による渦巻文・十字文・「∞」字状文などが形成される。体部は無文になる。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・片岩を僅かに含む。9は無文の土器。1/4程の破片からの推定復元のため正確さを欠く。口縁部は内湾するが、口唇部の形状は剥離しているため不明。残されている粘土紐には指頭痕が認められ、輪積みの際の技術の一端が見て取れる。色調は褐色（7.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第106図10は2条の沈線を垂下させる。沈線間には刺突と交互刺突が加えられる。空白部には三叉文などが施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。



第105図 31号住居跡出土遺物2 (1/4)



第106図 31号住居跡出土遺物 3 (1/3)

11は口唇部から刻みがある隆帯と交互刺突が加えられた隆帯が垂下する。空白部には「U」状の沈線文と短沈線が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

12は口縁部に広い無文帯をもち、頸部との区画に刻み加えられた隆帯が横走する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には白色チャートが目立つ。

13は沈線を密集して施し、2本の刻み加えられた隆帯が波状に貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

14は刻み加えられた隆帯が弧状に貼付される。空白部には円形の刺突が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

15は波状口縁の土器。口縁部が肥厚し、部分的に交互刺突が加えられた2条の沈線が巡る。胴部はRLの単節斜縄文が施される。色調は灰黄褐色（2.5Y6/2）を呈し、胎土には白色チャートが目立つ。

16は刻みがある隆帯が環状に貼付され、そこから分岐した隆帯が斜位に施される。空白部には三叉文などが充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

17はRLの単節斜縄文を地文とし、太沈線により渦巻文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

18はLRの単節斜縄文を地文とする。2本一對の隆帯が弧状に貼付される。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

19は隆帯を横走させて口縁部と胴部を画する。Lの撚糸文を口縁部では横位、胴部では縦位に施して地文とする。口縁部には2本一對の隆帯が貼付される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には白色チャートを多く含む。

20は口唇部下に交互刺突による鋸歯文が巡る。Lの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯が弧状に貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

21はRの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯を貼付して区画を作る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

22はLの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯が弧状に貼付される。隆帯に沿って半截竹管による波状文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

23はLの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯により区画が作られる。頸部は無文帯になる。色調はにぶい黄褐色（10YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

24は口縁部に縦位の沈線を集合して施して地文とする。2本の隆帯を巡らせて口縁部と胴部を画する。胴部にはRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には白色チャートが目立つ。

25はLの撚糸文を地文とする。2本の隆帯を横走させ、隆帯間には斜位に隆帯が集合して貼付される。以下、2本一對の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

26はLの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯と3条一組の沈線が巡らされ、その間には波状沈線文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

27は3条一組の沈線が巡る。LRの単節斜縄文を地文とし、3条一組の沈線、蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

28・29はLの撚糸文を地文とする。28は2本一對の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。29は蛇行・直行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

30は浅鉢形土器か。頸部が強く外屈する。口縁部は無文帯になる。頸部に2条一對の沈線が巡り、沈線間には綾杉状の刻み加えられる。体部には隆帯が弧状に貼付されようか。部分的に赤彩の痕跡がある。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には白色チャートが目立つ。

第316図1～4は打製石斧。1は撥形を呈する。刃部は円刃状。表面刃部に線条痕、刃部左右に磨耗痕が認められる。70.9g。硬砂岩製。2・3は短冊形。横長の剥片を使用。刃部は平刃状。2は表面刃部、裏面刃部右側に線条痕、表裏は刃部側両側縁に磨耗痕を認める。157.5g。硬砂岩製。3は257g。礫岩製。4の刃部は尖刃状を呈する。85.4g。硬砂岩製。

第331図6は磨石。周縁には敲打痕を残す。140g。硬閃緑岩製。

第335図6は軽石製品。中央が僅かにくびれる。110g。

第340図1は平基の打製石鏃。1g。黒曜石製。

2・3は使用痕がある剥片。2は縦長剥片。切断された側縁に刃こぼれが認められる。3.8g。黒曜石製。3は幅広の剥片。先端を欠く。両側縁に刃こぼれが認められる。4.5g。頁岩製。

第346図12～23は土器片錘。13は短軸、他は長軸に刻みが加えられる。重量は12が17.4g、13が17.9g、14が19.9g、15が20.3g、16が25.1g、17が39.6g、18が27.7g、19が21.6g、20が34.5g、21が35.8g、22が70.5g、23が70.5gを測る。

第104図1を除き、覆土中の出土。

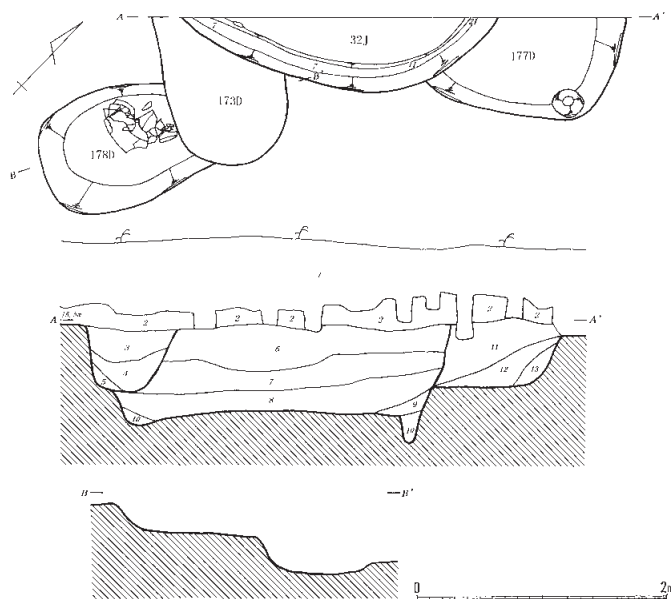
32号住号住居跡（第107図）

〔位置〕22地点。

〔構造〕北側調査区外。177Dを切り、173Dに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）17～33cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅18～22cm・下幅5～10cm・深さ11cm前後を測る。（床面）確認できる範囲ではよく硬化している。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 7層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 8層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 9層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。



第107図 32号住居跡、173・177・178号土坑（1/60）

10層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

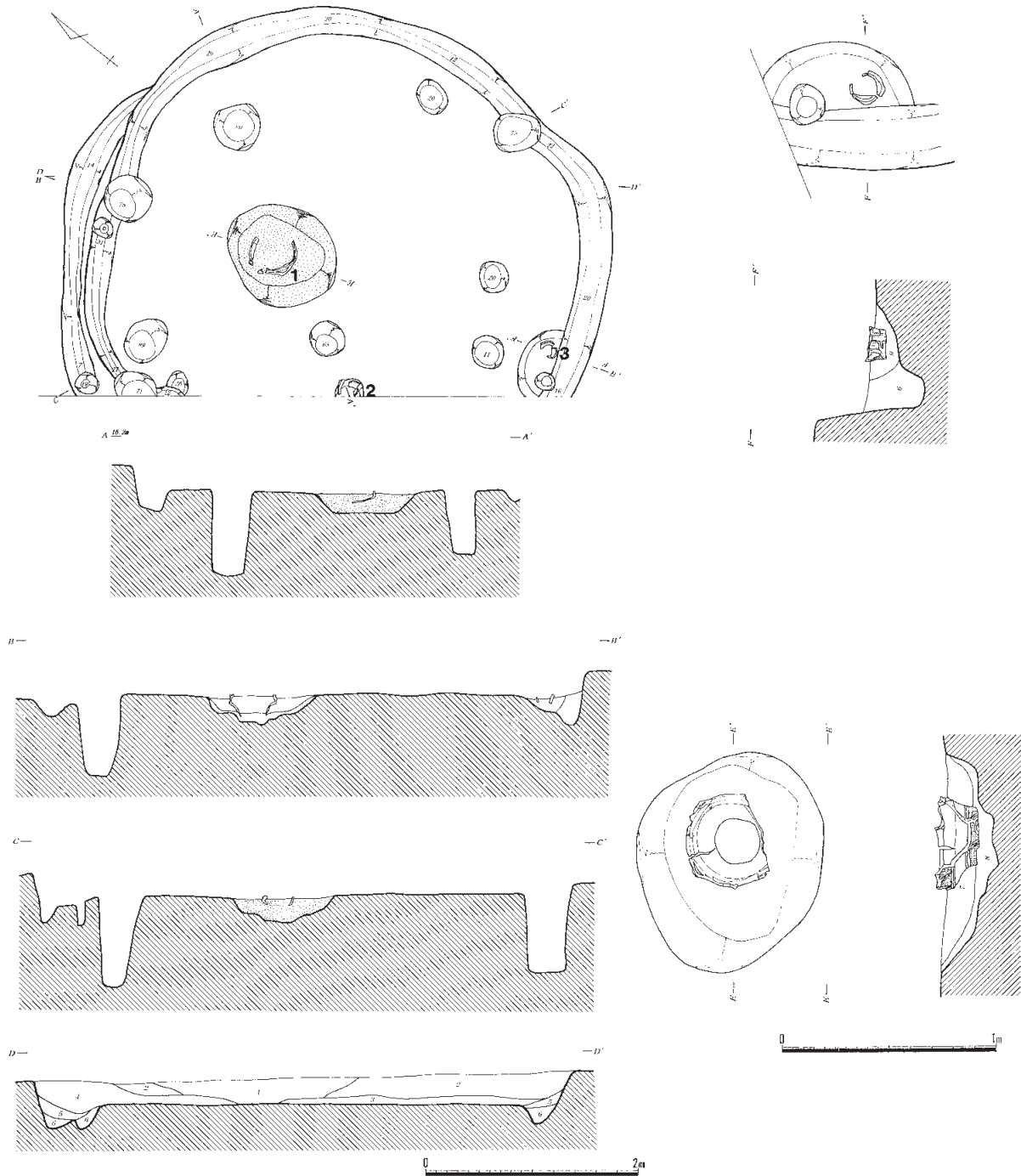
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 加曽利E式期。

34号住居跡（第108図）

〔位置〕 23 I 地点。

〔構造〕 西側調査区外。38 J を切る。壁溝が一部二重に巡り、拡張された可能性がある。（平面形）不整円形。（規模）不明×520cm。拡張前は不明×480cm。（主軸方位）N-19°-W。（壁高）20~25cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）。上幅20~25cm・下幅3~10cm・深さ7~18cm、拡張前の壁溝は上幅20~30cm・下幅8~13cm・

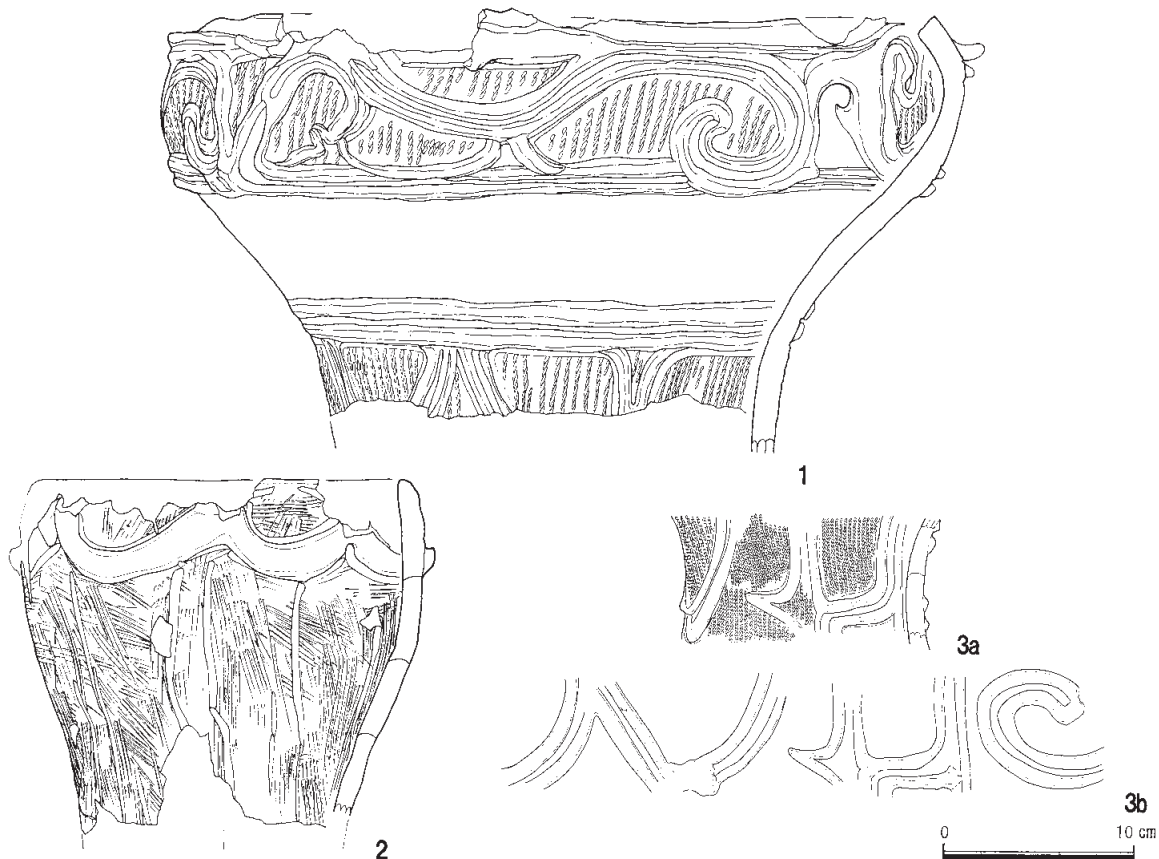


第108図 34号住居跡（1/60）、炉跡、埋甕（1/30）

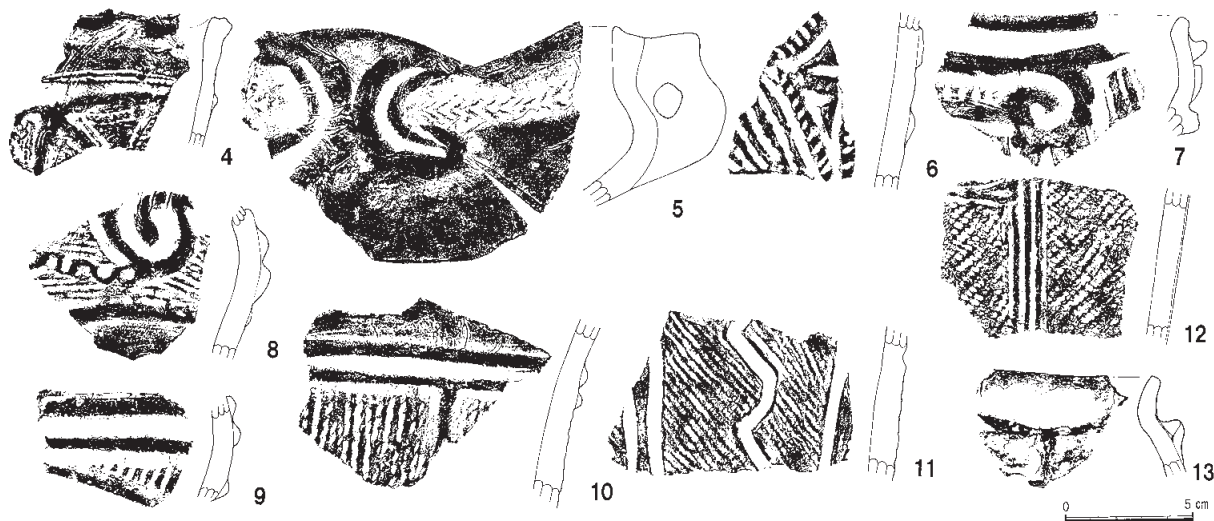
深さ7~22cmを測る。(床面) 西壁際に硬化面が認められる。平坦で遺存状態は良好である。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。深鉢形土器の上半部を埋設している埋甕炉で、105×90cm・深さ25cmの楕円形の掘り込みをもつ。(柱穴) 深度のある6本が支柱穴の一部であろうか。住居北側の拡張前の壁溝と切りあう2本は、拡張後の支柱穴になろう。(埋甕) 南壁下に位置する。33×26cm・深さ13cmの楕円形の掘り込みをもち、深鉢形土器の胴部を埋設している。

〔覆土〕

1層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。



第109図 34号住居跡出土遺物1 (1/4)



第110図 34号住居跡出土遺物2 (1/3)

- 2層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 大部分は覆土中からの出土であるが、量は多くない。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

34号住居跡出土遺物（第109・110図、第316図5～8、第340図4、第346図24～30）

第109図1は炉に埋設されていたキャリパー形の土器。文様は全て2本一對の隆帯の貼付による。隆帯を2段巡らせ口縁部・頸部・胴部を画する。口縁部にはLの撚糸文を縦位に施して地文とし、「∞」字状文や渦巻文などが貼付される。頸部は無文帯になる。胴部はLの撚糸文を地文とし、隆帯による懸垂文がみられる。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・片岩を多く含む。

2は口縁部が僅かに内湾しながら立ち上がる。6条1単位と思われる条線を施して地文とする。口縁部には太い隆帯を波状に貼付する。胴部には縦・横・斜位に複数の沈線を乱雑に垂下させる。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

3は埋甕として埋設されていた土器。Lの撚糸文を縦位に施して地文とし、2本一對の隆帯による渦巻文などが貼付される。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第110図4は口縁部に隆帯を貼付して波状に作り上げ、その下に2条の沈線を施す。横位に隆帯を貼付して口縁部と胴部を画し、口縁部には半截竹管による平行沈線を巡らす。胴部には隆帯を二又状に垂下させ、隆帯に沿って半截竹管による押引文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

5は浅鉢形土器の可能性がある。波状口縁を呈し、波頂部には橋状の把手が付く。頸部のくびれ部には三角押文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

6は刻みが増えられた隆帯が貼付され、空白部には集合する三角押文と沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

7はLの撚糸文を地文とし、隆帯による渦巻文が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8はRの撚糸文を地文とし、隆帯が渦巻状に貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

9はLの撚糸文を地文とし、隆帯を貼付して区画を作る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

10は2本一對の隆帯を巡らせて頸部と胴部を画する。Lの撚糸文を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

11はRL、12はLRの単節斜縄文を地文とする。11は2条一對の沈線と蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5TE6/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。12は半截竹管による4条の沈線が垂下する。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

13は有孔鏝付土器。鏝の部分に円孔が穿たれる。鏝の部分から隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

第316図5～8は打製石斧。すべて短冊形を呈する。5は横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃部は円刃状。表面刃部に線条痕、表裏面刃部側側縁に磨耗痕が認められる。171.6g。硬砂岩製。6は表面に礫面を残す。刃部は円刃状。74.5g。礫岩製。7は頭部を欠く。刃部は円刃状。側縁には部分的に敲打痕が認められる。

184.4g。硬砂岩製。8は扁平な礫を使用。両面に礫面を残す。刃部は斜刃状。111.1g。緑泥片岩製。

第340図4は凹基の打製石鏃。1g。黒曜石製。

第346図24～30は土器片鏃。25・25・28は短軸、他は長軸に刻みを加える。重量は24が19.1g、25が24.1g、26が21.5g、27が47.2g、28が14.4g、29が18.7g、30が99.6gを測る。

第109図1・3を除き、覆土中の出土。

35号住居跡（第111図）

〔位置〕23I地点。

〔構造〕北側調査区外。（平面形）不整長方形。（規模）475×380cm。（主軸方位）N—56°—E。（壁高）20～35cmを測り、65°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際を除き硬化面が認められる。（炉）2ヶ所検出された。炉Aは石囲炉で、住居中央から北に偏って位置する。礫は70×45cmの長方形に配置され、掘り込みは80×60cm・深さ10cmの長方形を呈する。炉床はよく焼けて赤化していて、礫の外側にまでおよぶ。炉Bは地床炉で、住居中央から南東に偏って位置する。平面形はほぼ円形で、径約70cm・深さ5cmを測る。（柱穴）4本が主柱穴と思われる。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土上層からの出土が多い。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

35号住居跡出土遺物（第112図、第316図9）

第112図1は口唇部下にRLの単節斜縄文が施される。口縁部には太い2条の沈線が波状に巡らされ、空白部に三角形文が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

2は口縁部に2条の沈線が巡らされ、沈線間に円形の刺突文が連続して加えられる。胴部にはRLの単節斜縄文が施され、沈線が垂下する。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

3は曾利系の土器。頸部に鎖状の隆帯を巡らせて口縁部と胴部を画する。隆帯上には帯状の貼付文が付く。口縁部には細い隆帯が籠目状に貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

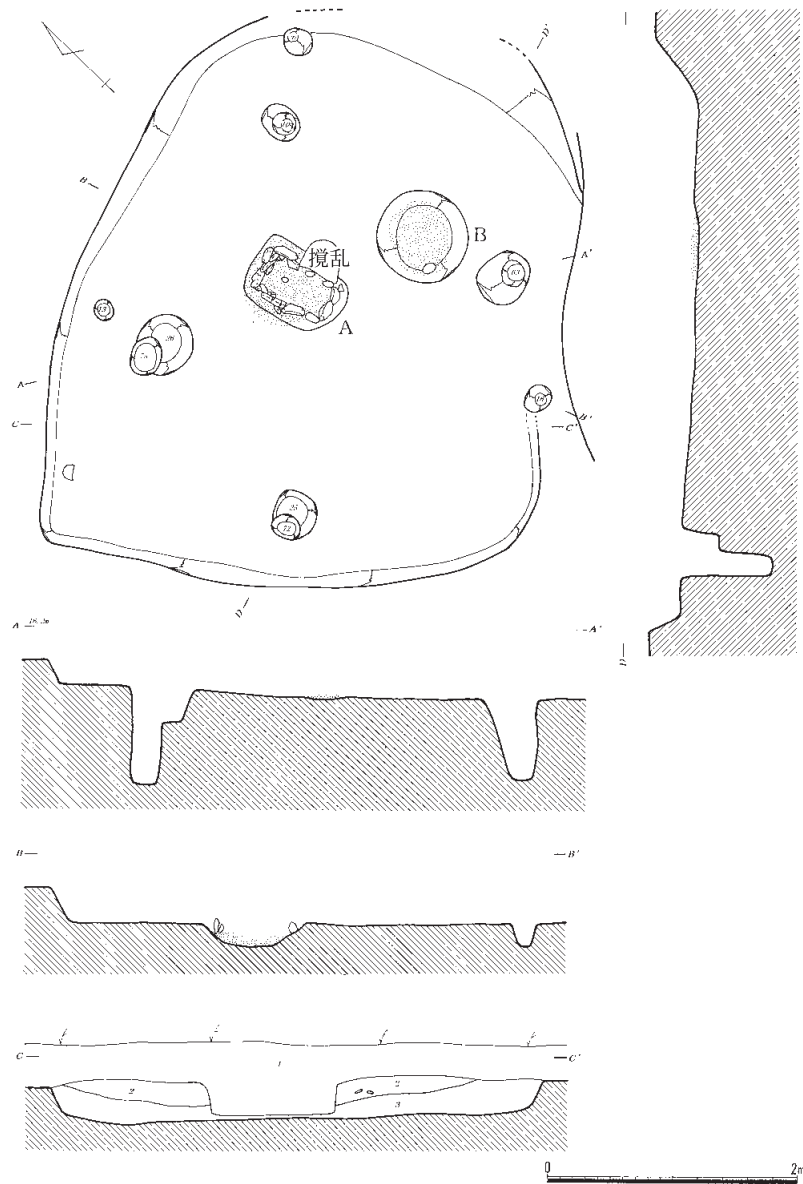
4・5は連弧文系の土器。4はRLの単節斜縄文を地文とし、3条一組の沈線により連弧文と横線文が施される。色調は赤褐色（5UT4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。5は連弧文下にLの撚糸文が施される。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

6はRL、7・8はLRの単節斜縄文を地文とする。6は4条の沈線を垂下する。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。7は2条一対の沈線、蛇行する沈線が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。8は平行する沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

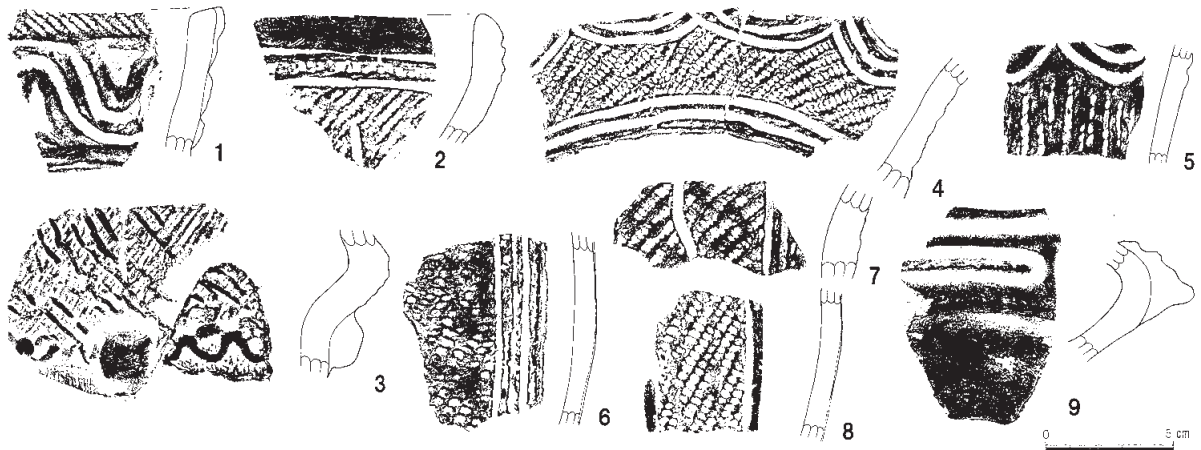
9は浅鉢形土器。頸部には隆帯が貼付され強く内屈する。口縁部には凹線が「コ」状に施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第316図9は側縁が湾曲する打製石斧。横長剥片を使用。刃部は尖刃状を呈する。48.9g。硬砂岩製。

いずれも覆土中からの出土。



第111图 35号住居跡 (1/60)



第112图 35号住居跡出土遺物 (1/3)

36号住居跡（第113図）

〔位置〕 23 I 地点。

〔構造〕 37 J を切る。壁溝が二重に巡るなど拡張された可能性が大きく、北東側の弧状に張り出した部分を含めると2回の拡張が考えられる。（平面形）不整楕円形。拡張前不整形。規模）590×530cm。1回目の拡張530×520cm。拡張前505×495cm。（主軸方位）N-33°-W。（壁高）26～35cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）拡張住居と考えられ、住居北西側で二重に巡る。1回目の拡張は上幅約20cm・下幅8～10cm・深さ10～12cm、拡張前の壁溝は上幅15～70cm・下幅7～45cm・深さ2～20cmを測る。（床面）東側に硬化面が認められる。（炉）住居中央北西に偏って位置する。深鉢形土器の上半部を埋設している埋甕炉で、80×70cm・深さ20cmの楕円形の掘り込みをもつ。（柱穴）拡張前の支柱穴は6本と思われる。壁溝と切りあう深度のあるピットは拡張後の支柱穴と思われる。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。

3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多く出土した。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

36号住居跡出土遺物（第114～117図、第316図10～12、第333図4、第340図5～7、第346図31～34、第347図1～9）

第114・115図、第116図9～11、第117図18～23はキャリパー形を呈する土器。

第114図1は口唇部上に有孔の尖頭状の突起が付く。口縁部・胴部はLの撚糸文を縦位に施して地文とし、2本一対の隆帯の貼付により文様が形成される。口縁部の文様は口唇部上の突起から隆帯が渦巻状に貼付され、そこから長楕円形の区画などが作られる。頸部は無文帯になる。胴部は2本の横走る隆帯により頸部と画される。隆帯による渦巻文や、そこからの蛇行する懸垂文、「H」状文が貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

2はLの撚糸文を縦位に施して地文とする。口縁部では楕円形の区画が、胴部では渦巻文などが2本一対の隆帯によって作られる。頸部は無文帯になる。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

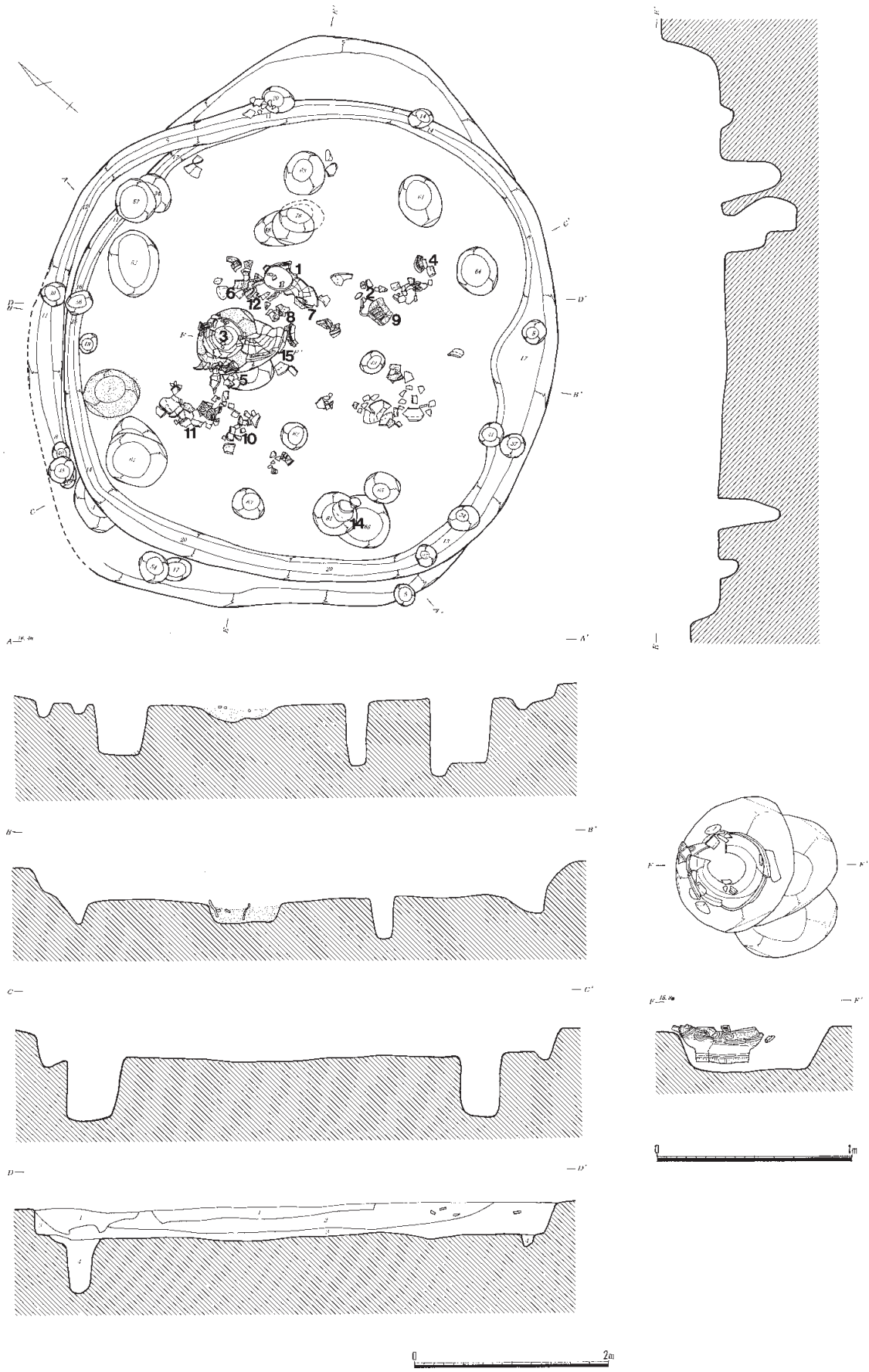
3は炉に埋設されていた土器。口縁部にはLの撚糸文を横位に施して地文とし、2本一対の隆帯による「∞」字状文を連結して貼付する。頸部は無文帯になる。胴部は3条の沈線を巡らせて頸部と画する。縦位のLの撚糸文を地文とし、沈線による蛇行する懸垂文が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

4は口唇部上に渦巻文が加えられた山形の突起が付く。口縁部・胴部にはLの撚糸文を縦位に施し地文とする。2本一対の隆帯により、口縁部では楕円形の区画が、胴部では渦巻文が作られる。頸部は無文帯になる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

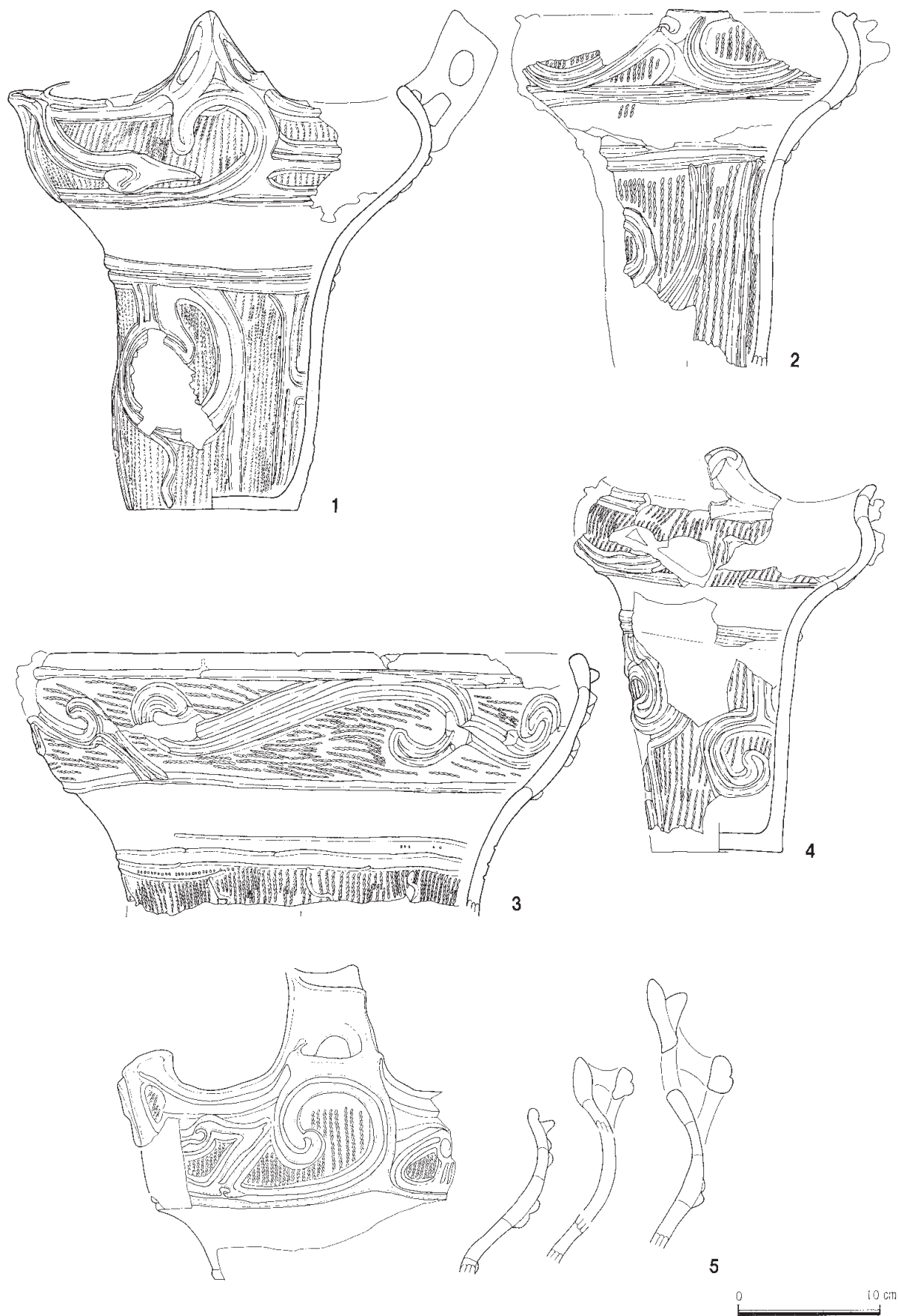
5は口唇部上に大振りの板状の突起と、小振りの半円状の突起が付く。Lの撚糸文を縦位に施して地文にする。突起下は共に中空になるように渦巻文が作られ、2本一対の隆帯により楕円形などの区画が形成される。頸部は無文帯になる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第115図6は4単位の波状口縁になるが、1ヵ所は他に比べて大振りになる。波頂部には渦巻文が付加される。口縁部・胴部共にLの撚糸文を縦位に施して地文とする。口縁部の文様は2本一対の隆帯による楕円形の区画と連結する渦巻文が組み合わさる。頸部は無文帯になる。胴部は蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

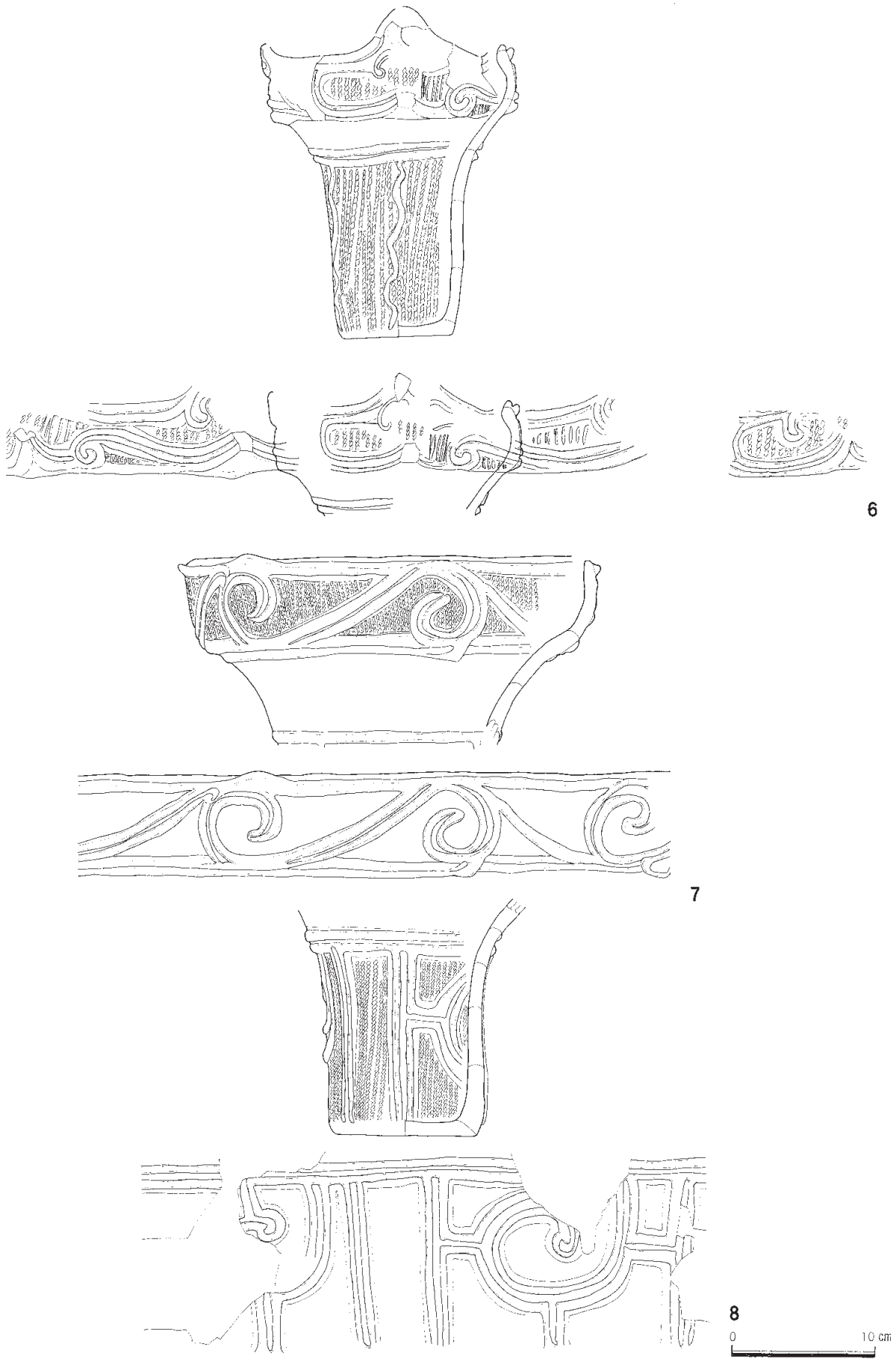
7は縦位のLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯を「∞」字状に貼付する。頸部は無文帯になる。色調は灰褐



第113図 36号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)



第114図 36号住居跡出土遺物1 (1/4)



第115図 36号住居跡出土遺物 2 (1/4)

色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

8はLの撚糸文を縦位に施して地文にする。2本一対の隆帯による渦巻文と懸垂文が組み合わさり、配されるようである。色調は褐色(7.5YR4/4)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第116図9はLの撚糸文を縦位に施して地文にする。2本一対の隆帯を縦横に貼付して矩形の区画を作る。隆帯の連結部には渦巻文が付加される。色調は褐色(7.5YR4/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

10は口縁部が強く内湾し、口唇部が直立する。口縁部及び胴部は沈線による文様で埋められる。口縁部は1本の横走る隆帯で頸部と画される。半円形の区画内に渦巻文を施し、区画外の空白部には弧線を同心円状に充填する。頸部は無文帯になる。頸部と胴部を画するために2条の沈線が巡る。胴部の文様は、渦巻文を頭部とする懸垂文と1条の沈線を交互に施して8区画するようである。区画内は渦巻文付きの懸垂文に沿うような形で沈線が充填される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

11は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口唇部は内面に隆帯を巡らせて蓋受け状に作出する。口縁部には斜位、胴部には縦位にLの撚糸文が施される。頸部には刻みが加えられた隆帯が巡る。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第117図18はLRの単節斜縄文を地文とし、2本一対の隆帯が「∞」字状に貼付されようか。頸部は無文帯になる。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

19は波状口縁になろうか。Lの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が相対して渦巻状に貼付される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20はR、21・22はLの撚糸文を地文とする。2本一対の隆帯が「∞」字状に貼付されようか。20の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。21の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。22の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

23はLの撚糸文を横位に施し地文とする。2本一対の隆帯が貼付される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第116図12はコップ状を呈する土器。口縁部に狭い無文部をもち、Lの撚糸文が縦位に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

13は長頸壺形土器の口頸部を思わせる。外湾しながら開き、口唇部は内屈する。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

14は有孔土器。胴部中位に最大径をもち、頸部でくびれ、口縁部は外反するようである。頸部に焼成前穿孔の円孔が巡る。色調は暗赤褐色(2.5YR3/2)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

15は浅鉢形土器。体部上位で内湾し、口縁部は短く外反する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

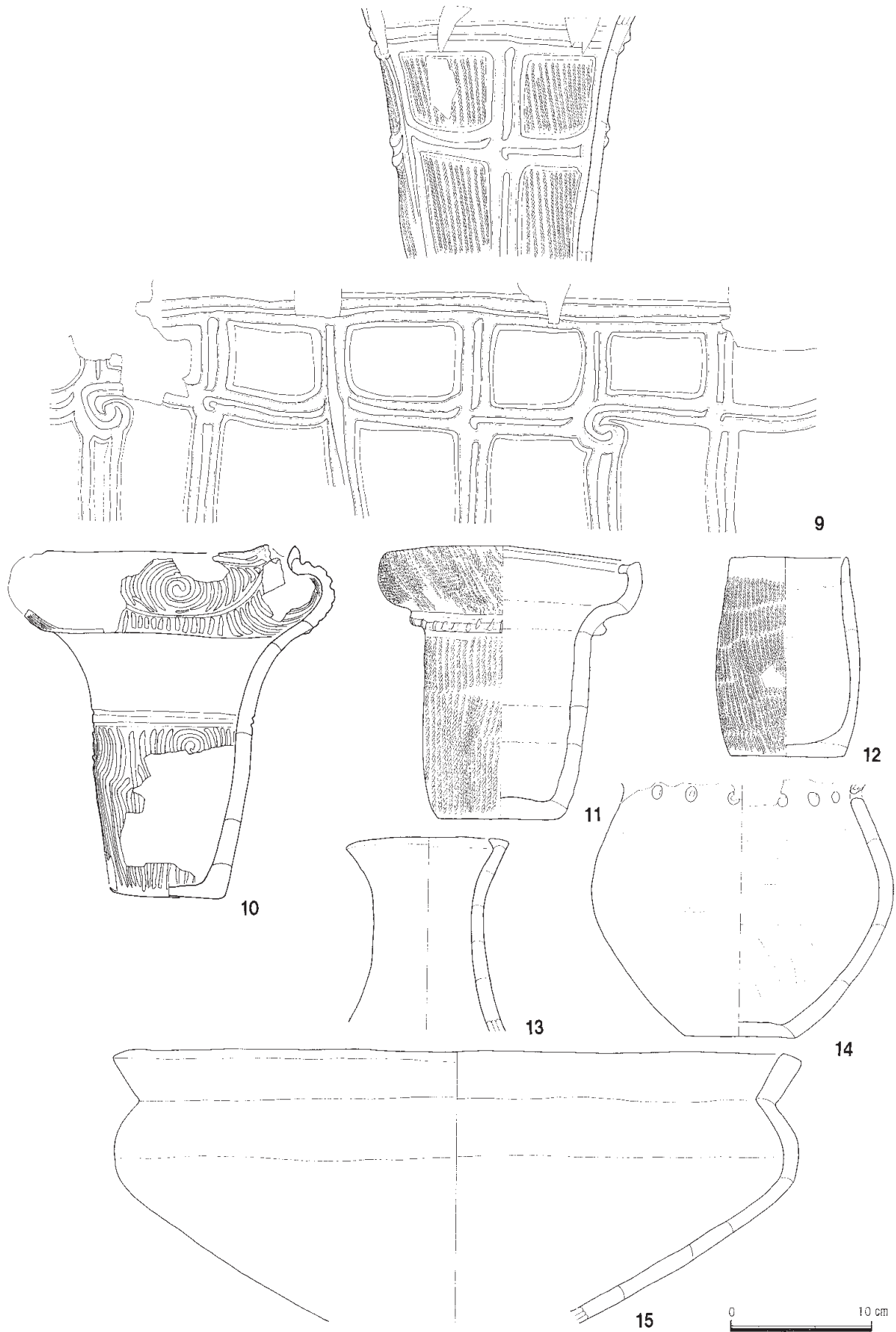
第117図16は口唇部上に突起が付く。突起から隆帯が渦巻状に貼付される。口縁部や空白部には三角押文が2本一対で施される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

17は刻みが加えられた隆帯により区画が作られ、区画内には沈線文や交互刺突による鋸歯文が充填される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

24はRLの単節斜縄文を地文とし、波状沈線文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

25は小波状口縁になろうか。口縁部が瘤状に膨らみ、その頂点から沈線による渦巻文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

26は3条の沈線を巡らせて頸部と胴部を画する。頸部は無文帯になる。胴部はLRの単節斜縄文を地文とし、3条一組の沈線、蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。



第116図 36号住居跡出土遺物3 (1/4)



第117図 36号住居跡出土遺物4 (1/3)

27はRの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が渦巻状に貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

28は条線を地文とする。半截竹管により長「∩」字状の沈線、蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

29はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一対の隆帯と蛇行する隆帯が垂下する。色調は明黄褐色（10YR6/6）を呈し、胎土には粗砂を含む。

30は沈線が渦巻状、縦位集合状に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第316図10・12は打製石斧。10は撥形。横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃部は円刃状。46.1g。安山岩製。11は表面に大きく礫面を残す。刃部は円刃状。111.4g。硬砂岩製。12は刃部側を欠く。横長剥片を使用。表面には礫面を残す。129.2g。安山岩製。

第333図4は石皿。片面が扁平になる。980g。硬砂岩製。

第340図5は二次加工のある剥片。先端に加工が加えられる。11.8g。黒曜石製。6は二次加工のある幅広の剥片。先端部に加工が加えられる。2.8g。黒曜石製。7は縦長の剥片。1.5g。黒曜石製。

第346図31～34、第347図1～9は土器片錘。第346図31・32、第347図1～4・7～9は長軸、他は短軸に刻みが加えられる。重量は31が25.1g、32が21.2g、33は20g。33が20g、34が14.5g、1が29.2g、2が27.9g、3が30.8g、4が40.6g、5が63.5g、6が48g、7が64.9g、8が49.9g、9が76.1gを測る。

第114図3を除き、覆土中からの出土。

37号住居跡（第118図）

〔位置〕 23 I 地点。

〔構造〕 南西側調査区外。39 J を切り、36 J に切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×510cm。（主軸方位）N—60°—W。（壁高）13～22cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱で特に硬化している部分は認められなかった。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。石囲埋甕炉で、100×90cm・深40cmの略楕円形の掘り込むをもつ。（柱穴）深度のある4本が主柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から土器片が多く出土した。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

37号住居跡出土遺物（第119・120図、第317図1～3、第347図10）

第119図1は炉に埋設されていた土器。口縁部は直線的に開き、上端で僅かに内屈する。口唇部には2条の沈線が巡り、「X」字状の貼付文が4単位施される。貼付文は口唇部まで伸びて小突起になる。口縁部にはLの撚糸文を縦位に施し、頸部のくびれには刻みが付加された隆帯が巡るようである。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2はキャリバー形を呈し、口縁部は強く内湾する。2本一対の隆帯を4単位の波状に貼付し、波底部の上には「卍」字状の貼付文が、波頂部の下には縦位の短い貼付文がみられる。色調は褐色（7.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

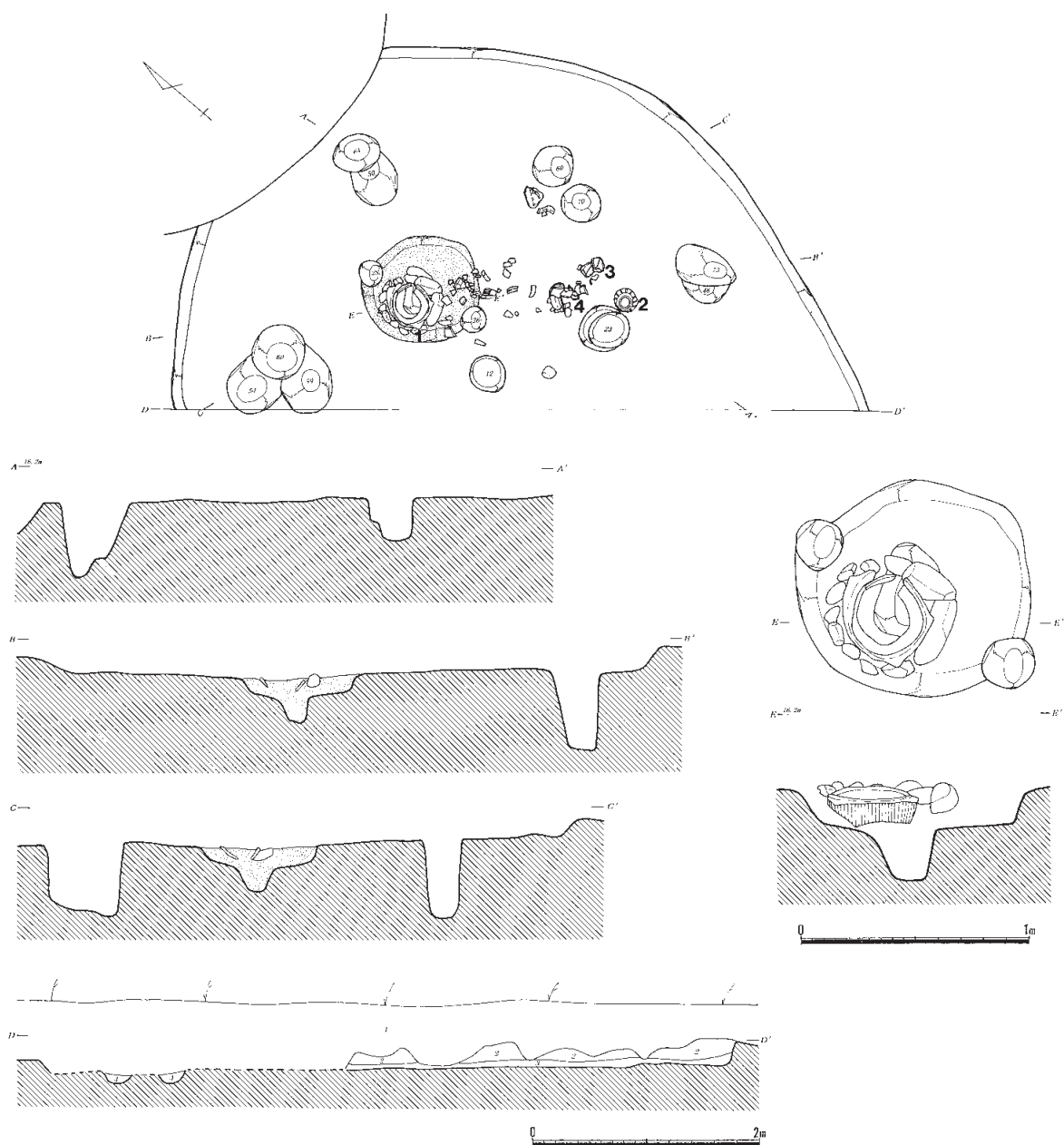
3は頸部がくびれ、胴部下位に最大径をもつ下膨れの器形。縦位のRの撚糸文を地文とする。頸部には対向する

2ヵ所に橋状の把手がつき、そこから3本の隆帯の組み合わせによる直行・蛇行する懸垂文が貼付される。把手と把手の間の対向する2ヵ所にも隆帯による懸垂文がみられ、1ヵ所は2本の組み合わせ、他は3本の組み合わせにより直行・蛇行に貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

4は口縁部と胴部が膨らむダルマ状の器形を呈する。口唇部上には突起が付いていたようで、そこから隆帯が垂下して頸部で眼鏡状の把手になる。胴部の文様は隆帯によるもので、渦巻文や「十」字文などが組み合わせる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第120図5は刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画内には沈線による渦巻文や沈線間に刻みを施した集合する沈線などが充填される。区画外の空白部には刺突文や交互刺突による鋸歯文が施される。色調は明黄褐色（10YR6/6）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

6は口唇部上に山形の小突起が付く。口唇部下には2条一対の沈線が巡らされる。突起を頂点として2本一対の隆帯が弧状に貼付され区画を作る。区画内にはLの撚糸文が充填される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土



第118図 37号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)

には白色チャートを多く含む。

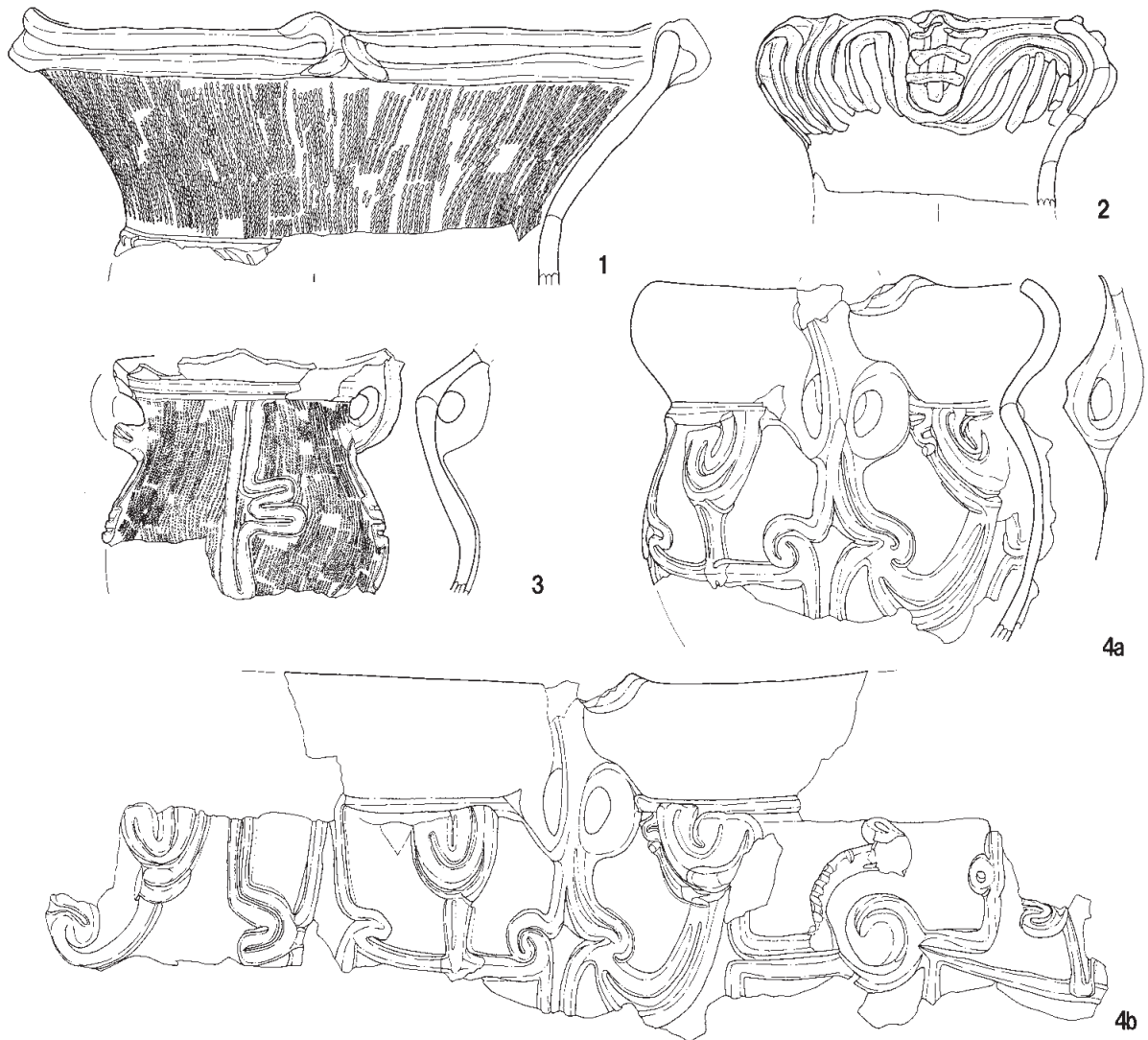
7～9・11はキャリパー形の土器。Lの撚糸文を横位に施して地文とする。7・8は2本一対の隆帯が渦巻状・弧状に貼付される。7の色調はにぶい黄褐色（10YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。8の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。9は隆帯を波状に貼付する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。11は横位の隆帯によって口縁部と胴部を画する。口縁部には波状の隆帯が貼付され、胴部には縦位に撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

10は口唇部下に2条の沈線を巡らす。Lの縦位の撚糸文を地文とし、2条一対の沈線が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

12は2本一対の隆帯を貼付し、空白部には重鋸歯状に沈線が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土に粗砂を多く含む。

13は口唇部上に半円状の突起が一対付けられる。Lの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が貼付される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

14は隆帯上に細長い刻みを加えることによって鎖状に仕上げる。以下、Lの撚糸文が施される。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。



第119図 37号住居跡出土遺物1 (1/4)

15は肥厚する口唇端部に沈線が巡り、押捺が加えられる。以下、Lの捺糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を含む。

16は小波状口縁になろうか。波頂部下には沈線による渦巻文が施される。突起下の口縁部は瘤状に肥厚し、頂部を中心にして沈線による渦巻文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

17は隆帯を縦位に集合して貼付する。隆帯は1本おきに交互刺突が加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

18はRの捺糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

第317図1～3は打製石斧。1は短冊形。横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃部を欠く。表面右側縁に線条痕、表裏面刃部側に磨耗痕が認められる。2は分厚な礫を使用。両面に礫面を残す。礫斧状の石器。419g。結晶片岩製。3は短冊形。横長の剥片を使用。刃部側を欠く。68g。礫岩製。

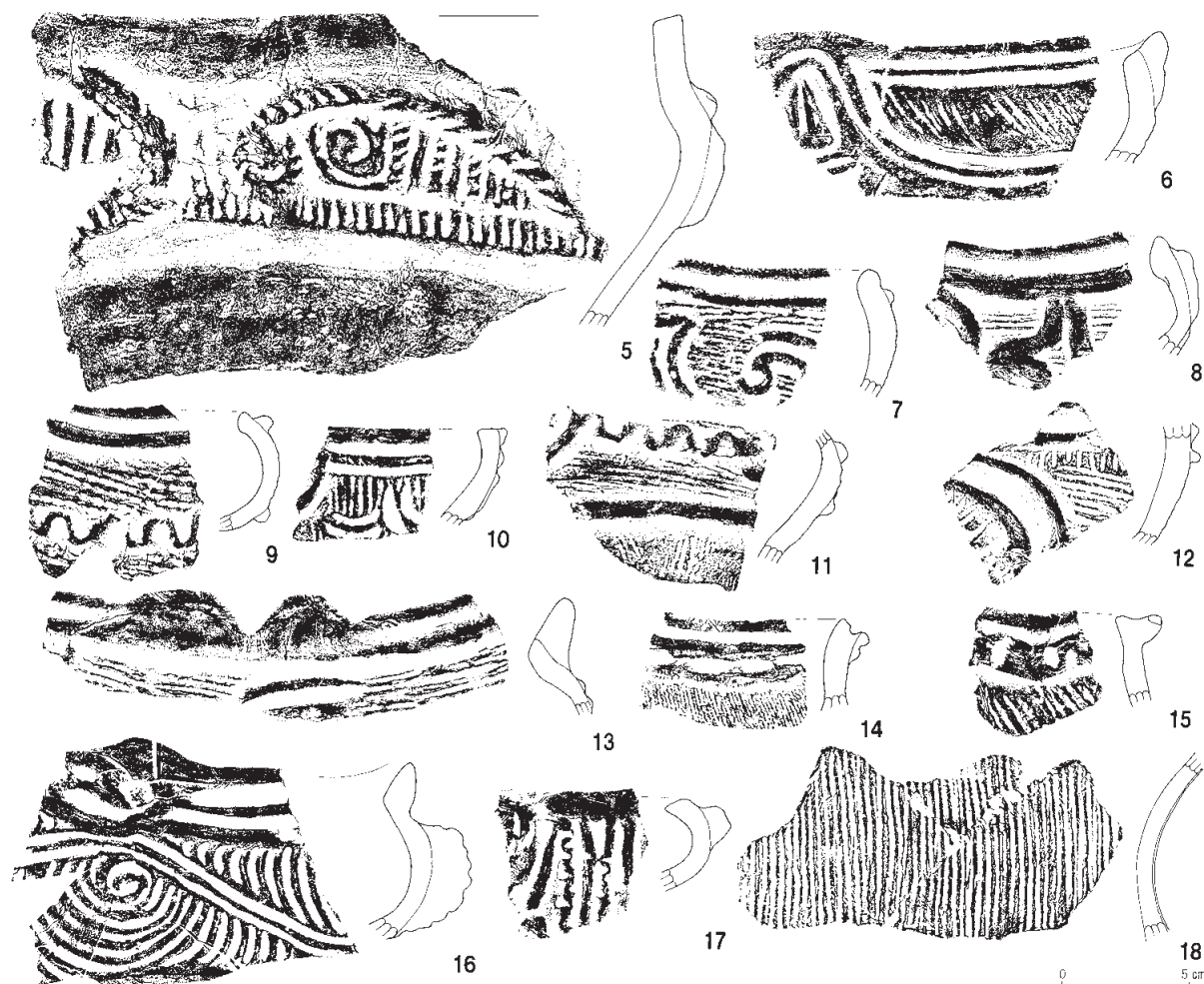
第347図10は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。21.1g。

第119図1を除き、覆土中の出土。

38号住居跡(第121図)

〔位置〕23I地点。

〔構造〕西側調査区外。34Jに切られる。40Jとの前後関係は不明である。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)23cm前後を測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)全体に



第120図 37号住居跡出土遺物2 (1/3)

軟弱で遺存状態は不良である。(炉)埋甕炉と思われ、南側に土器が一部残っていた。110×60cm・深さ10cmの不整楕円形を呈する掘り込みをもつ。(柱穴)深さ94cmを測るピットが支柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕耕作による攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕勝坂式期。

38号住居跡出土遺物(第122図、第331図7)

1は口縁部が無文帯になる。口唇部から綾杉状の刻みがある隆帯が垂下し、そこから交互刺突が加えられた隆帯が斜位に貼付される。綾杉状の刻みがある隆帯、交互刺突がある隆帯を並列させて弧状に施される。空白部には三叉文などが充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は刻みが加えられた隆帯で区画を作り、区画内には三叉文や集合沈線などが充填される。色調は灰黄褐色(10YR6/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3は三角押文が3条横走する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

4は波状沈線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には白色チャートが目立つ。

5は隆帯を垂下させ、それに沿って押引文が施される。空白部には波状沈線文がみられる。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

6は刻みが加えられた隆帯が貼付され、空白部には波状沈線文が施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7は鋸歯文と三角押文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

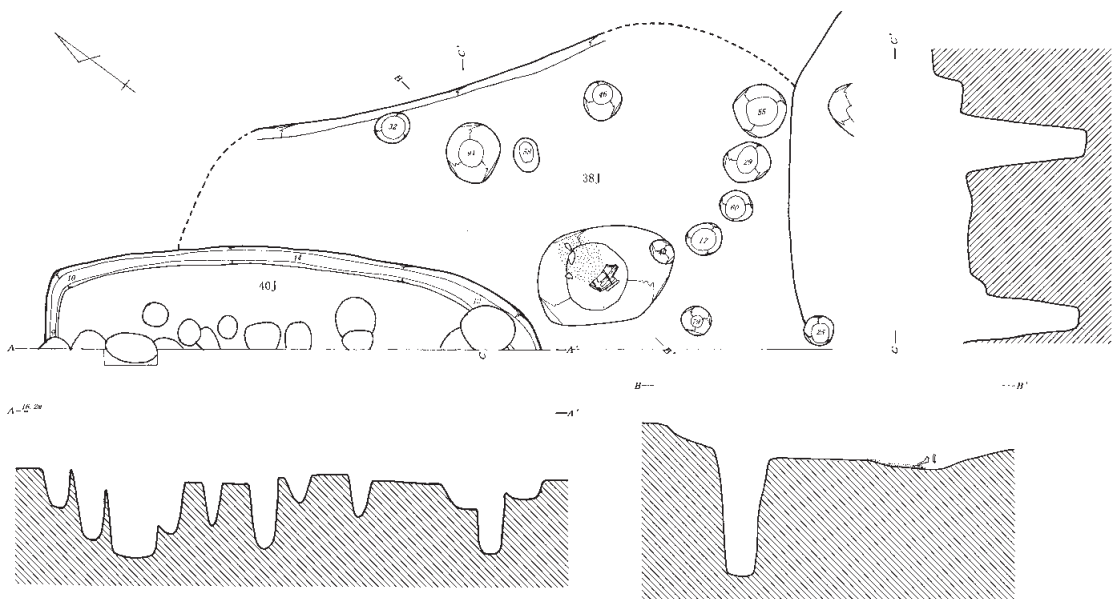
8は刻みをつけられた隆帯と沈線が同心円状に施される。沈線間には部分的に交互刺突が加えられる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

9はLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10はLの撚糸文を斜位・縦位に施し、3条の沈線を巡らす。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第331図7は磨石。730g。硬閃緑岩製。

すべて覆土中からの出土である。



第121図 38・40号住居跡(1/60)



39号住号住居跡（第123図）

〔位置〕 23 I 地点。

〔構造〕 南西側調査区外。37 J に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）17～25cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱だが、一部硬化面を認める。（炉）住居中央と思われる位置にある。確認できる部分では不明×65cmの地床炉で、深さ12cm前後の掘り込みをもつ。（柱穴）2本が支柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 住居中央の覆土上層に遺物が多い。

〔時期〕 勝坂式期。

39号住居跡出土遺物（第124・125図、第317図4・5、第347図11）

第124図1は鉢形土器。ボウル状の体部から強く内湾して肩部になり、口縁部は水平気味になる。口唇部上には眼鏡状の突起が付き、体面する部分には橋状の把手、沈線による渦巻文で加飾された山形の突起が付く。水平な口



第122図 38号住居跡出土遺物（1/3）

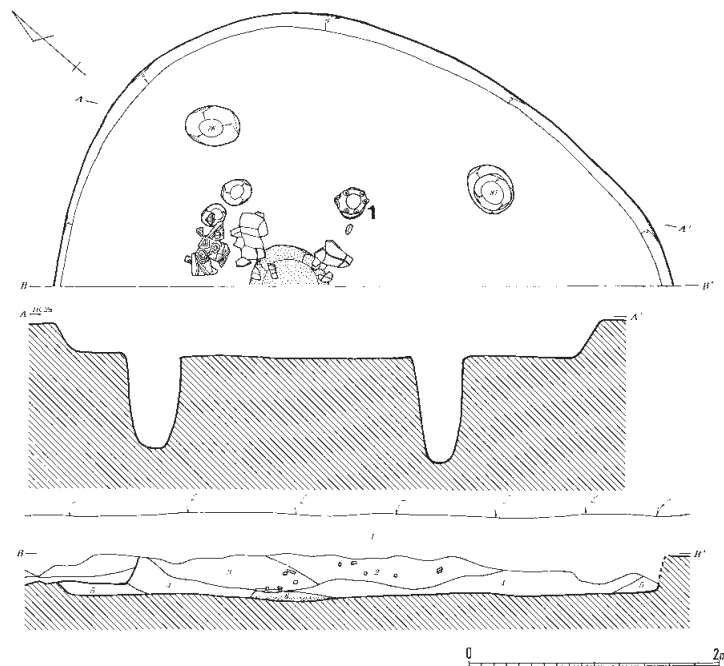
縁部には沈線による渦巻文が4単位施される。肩部には沈線や刻みが加えられた円状・棒状などの貼付文が配される。全体のイメージとして、何らかの動物を表現したものとも考えられる。色調は褐色（7.5YR4/4）を呈するが、部分的に赤彩の痕跡が観測できる。胎土には細礫・雲母を僅かに含む。

第125図2は口唇端部に刻みが加えられる。口縁部には刺突文が縦位に連続して施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

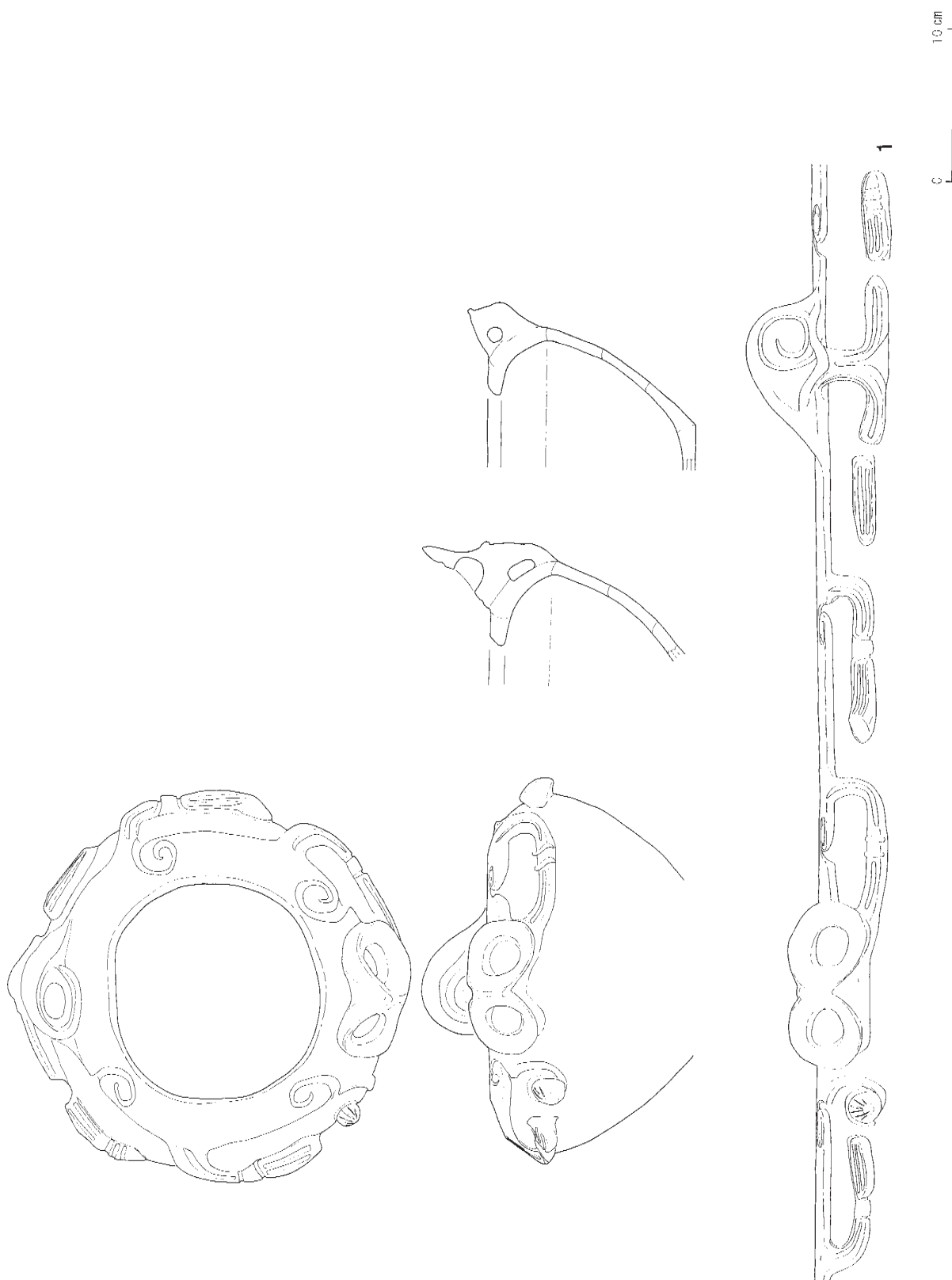
3は蛇行する隆帯が垂下し、刺切文が縦位に連続して施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

4は口縁部に狭い無文帯をもつ。刻みが加えられた隆帯が円状・弧状に貼付されて区画を作る。円形の区画内には沈線による渦巻文が、三角形の区画内には連続した刻みや波状沈線文が充填される。空白部にはRLの単節斜縄文を施し、沈線による文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

5～12は円筒形の土器になろうか。5は口縁部に刻みが加えられた隆帯や2条一対の沈線が施される。胴部上位には刻みが付加された隆帯が巡り、そこから隆帯が弧状に貼付されて区画を作る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。6は刻みが加えられた隆帯により主文様が形成される。口縁部には隆帯が巡り、そこから弧状に隆帯が垂下して区画を作る。区画内には沈線による文様が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。7は口縁部が肥厚して無文帯になる。胴部上位には沈線による文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。8は沈線により区画を作り、区画内には沈線による三叉文などの文様が充填され、沈線間には刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。9は刻みが加えられた隆帯が垂下し、縦位の沈線が施される。沈線間には刻みや交互刺突が加えられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。10は刻みが加えられた隆帯が横位に貼付される。2条一対の沈線を弧状に施して区画を作る。区画内には三叉文を充填し、空白部に刻みを集合して施す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。11は2条一対の沈線を波状に施して区画を作る。区画内には連続爪形文が充填される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。12は刻みが加えられた隆帯を横位・縦位に貼付して長方形の区画を作る。縦位の集合する沈線に、斜位・横位の沈線を重ねた文様が充填された区画、沈線・蓮華文・刻みが充填された区画がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR



第123図 39号住居跡 (1/60)

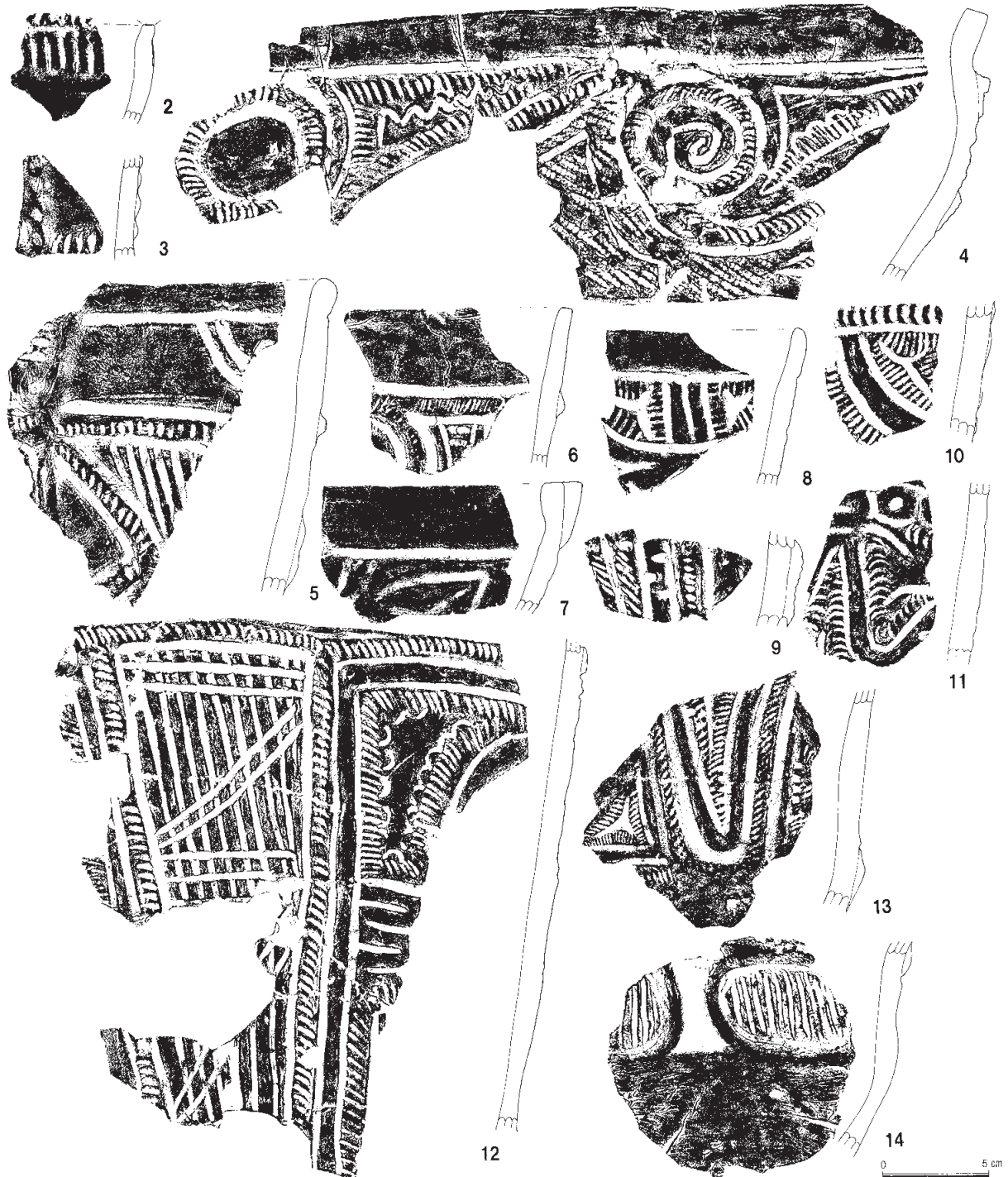


第124図 39号住居跡出土遺物1 (1/4)

4/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

13・14は胴部下位が屈曲する土器。屈曲部下は無文になる。13は刻みが加えられた隆帯が「U」字状に貼付される。空白部には刻みが付加された三叉文などが施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。14は隆帯で楕円形の区画が作られる。区画内には集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

第317図4・5は打製石斧。4は頭部を欠く。刃部は尖刃状を呈する。194.8g。安山岩製。5は横長の剥片を使用。刃部は平刃状。表裏面刃部に磨耗痕を認める。100.1g。粘板岩製。



第125図 39号住居跡出土遺物2 (1/3)

第347図11は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。77.3g。

いずれも覆土中の出土。

40号住居跡(第121図)

〔位置〕 23 I 地点。

〔構造〕 南西側調査区外。38 J との前後関係は不明である。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 4～6 cm を測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅12～25cm・下幅6～14cm・深さ9～14cmを測る。(床面) 全体に軟弱で、攪乱が著しい。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。

〔覆土〕 攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

40号住居跡出土遺物(第126図)

1 は隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には雲母を多く含む。

2 はLRの単節斜縄文を地文とする。口唇部下には沈線による鋸歯文が巡る。胴部には波状沈線による文様が見える。色調は橙色(5YR6/6)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

3 は口唇部下にヘラ状施文具により押引文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4 は半截竹管による3条の沈線で区画を作る。沈線間は浮彫状を呈する。区画内には蓮華文が沈線に沿って施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5 は隆帯が横位に貼付され、Lの捺糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

いずれも覆土中の出土。

41号住居跡(第127図)

〔位置〕 23 I 地点。

〔構造〕 南西側調査区外。42 J を切る。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 12cm前後を測り、70° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅25cm前後・下幅7～15cm・深さ15～34cmを測る。(床面) 全体に軟弱である。(炉) 調査区外にあるものと思われる。(柱穴) 2本検出された。

〔覆土〕

1層 耕作土。

6層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

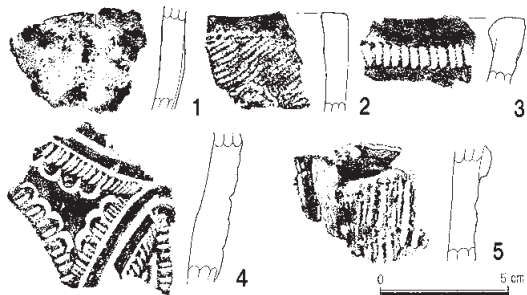
7層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

8層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

9層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。



第126図 40号住居跡出土遺物(1/3)

42号住居跡（第127図）

〔位置〕 23 I 地点。

〔構造〕 南西側調査区外。41 J に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）北壁の一部が検出できた。高さ15cm前後を測る。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で全面軟弱である。（炉）調査区外にあると思われる。（柱穴）不規則な配列である。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
- 4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

42号住居跡出土遺物（第128図、第329図6、第347図12）

第128図1は口唇部下に連続刺突文が巡る。隆帯が貼付され、三角押文・角押文で区画が作られ、三叉文が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

2は口縁部が強く内屈する。稜となった口縁部には押捺が加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

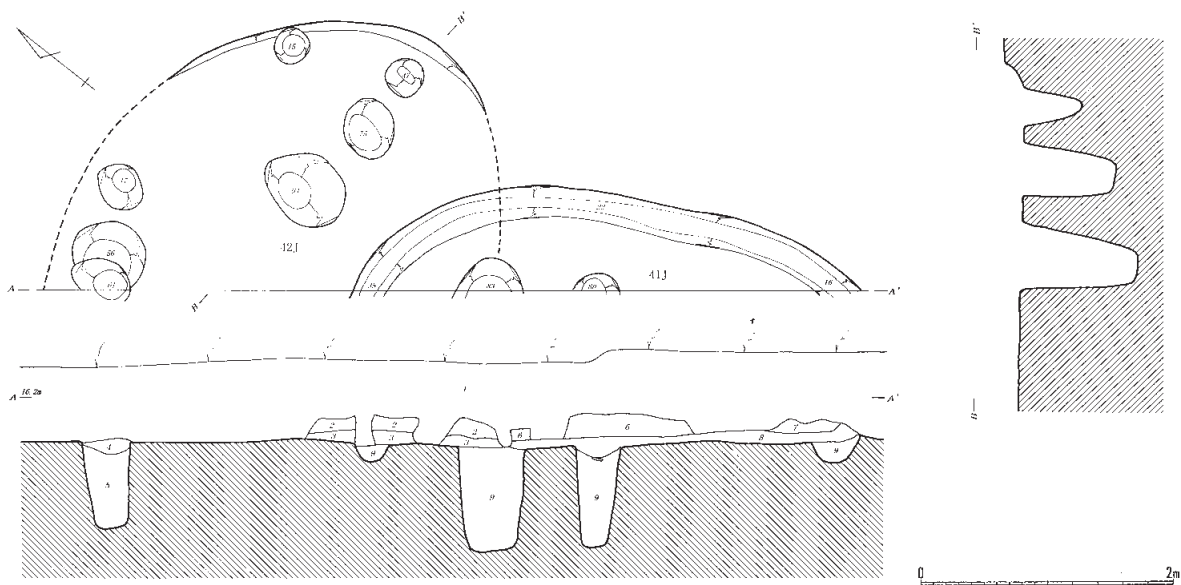
3は刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画内には集合する沈線が充填される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

4は刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付され、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は刻みが付加された隆帯が環状に貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

6は刻みが加えられた隆帯が環状に貼付される。RLの単節斜縄文を地文とし、沈線文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7は横位の隆帯・沈線、縦位の沈線を施し、間に刺突文が加えられる。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、



第127図 41・42号住居跡（1/60）

胎土には粗砂を含む。

8の主文様は沈線によるが、浮彫り状を呈する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

9は角押文が多条に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

10は隆帯よる矩形の区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

第329図6は小型の磨製石斧。いわゆる定角式石斧。頭部を欠く。刃部は平刃状を呈する。43.8g。ホルンフェルス製。

第347図12は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。9.7g。

いずれも覆土中からの出土。

43号住居跡(第129図)

〔位置〕10Ⅱ地点。

〔構造〕北側調査区外。159・160Yに切られる。(平面形)不明。(規模)不明×370cm。(主軸方位)N—S。(壁高)25~30cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅10~20cm・下幅5cm前後・深さ6~11cmを測る。(床面)全体に軟弱である。(炉)調査区外にあるものと思われる。(柱穴)6本検出されたが、主柱穴は不明。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

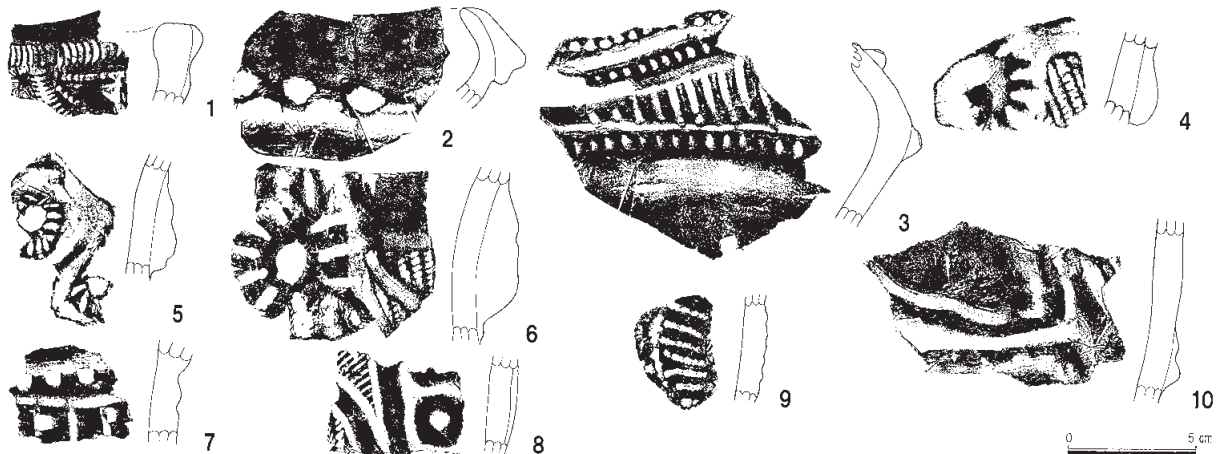
〔時期〕黒浜式期。

43号住居跡出土遺物(第130図)

1・2は同一個体の可能性がある。Lの無節斜縄文が施され、胎土には繊維が多く含む。色調は1が橙色(5YR6/6)、2がにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。覆土中からの出土。

44号住居跡(第131図)

〔位置〕25Ⅰ地点。



第128図 42号住居跡出土遺物(1/3)

〔構造〕北側調査区外。46 Jを切り8方に切られる。(平面形)略長方形を呈しようか。(規模)不明×360cm。(主軸方位)N-34°-W。(壁高)16~32cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)部分的に硬化面が認められる。(炉)住居中央から北に偏って位置する。キャリパー形の深鉢形土器の上半部を埋設している埋甕炉で、95×75cm・深さ20cmの楕円形の掘り込みをもつ。(柱穴)深度がある2本が支柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕上層は黒褐色土、下層は暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多く出土した。

〔時期〕加曾利E I 式期。

44号住居跡出土遺物(第132・133図、第317図6)

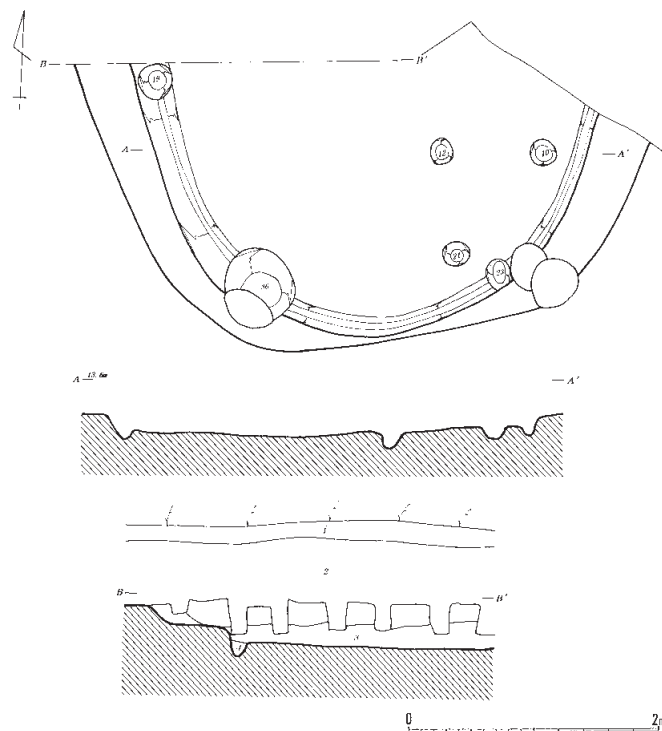
第132図1は炉に埋設されていた土器。口縁部にはRLの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯の貼付により文様が描かれる。頸部は無文帯になる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

2はRLの単節斜縄文を地文とし、3本一組の沈線と蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

3は浅鉢形土器。大きく開いた体部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外屈する。色調はにぶい褐色(7.6YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は台付土器の脚台部であろうか。くびれ部には2本の隆帯が巡り、図示できなかったが、そこから隆帯や沈線が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第133図5・7~9はキャリパー形の土器。頸部に無文帯をもち、2本一對の隆帯で区画が作られる。5はLの撚糸文を地文とし、長楕円形と三角形の区画が作られる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。7はLの撚糸文を地文とし、区画内には隆帯による渦巻文がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。8はRLの単節斜縄文を地文とする。渦巻文と楕円形の区画が作られる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を含む。9はRLの単節斜縄文を地文とする。渦巻文や区画が作られる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。



第129図 43号住居跡(1/60)

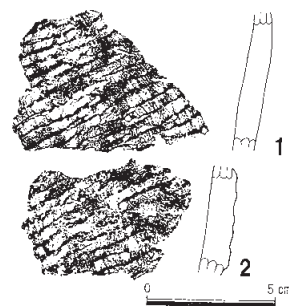
6はLの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯により区画を作る。区画下には太沈線が縦位に集合して施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10は無文の口縁部が大きく外反する。RLの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯により渦巻文や三角形の区画が作られる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

11は口唇部に突起がついていたと思われる。口縁部には隆帯が貼付され、隆帯上には沈線や渦巻文が施される。以下、沈線が集合して施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

12はLRの単節斜縄文を地文とする。横位に隆帯が巡り、2本一對の蛇行する隆帯が垂下する。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第317図6は短冊形の打製石斧。刃部側を欠く。横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。78.3g。雲母片岩製。第132図1を除き、覆土中の出土。



第130図 43号住居跡出土遺物 (1/3)

46号住居跡（第134図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 44 J・104 Y・8方に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）ローム層上面を床面とするため、壁の検出はできなかった。（壁溝）検出されなかった。（床面）遺構の重複のため、詳細は不明である。（炉）不明×50cmの地床炉で深さ40cmの掘り込みをもつ。（柱穴）比較的多く検出されているが、不規則な配列で深さも一定しない。

〔覆土〕 耕作による攪乱及び他の遺構との重複のため、詳細は不明。

〔遺物〕 出土遺物は少ない。

〔時期〕 加曾利E式期。

46号住居跡出土遺物（第135図、第347図13）

第135図1は口唇部が僅かに肥厚し、以下、Rの撚糸文が横位に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は沈線により区画が作られ、集合する沈線が充填される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

3は口唇部下に円形竹管文が3段施され、縦位の集合沈線と組み合わせる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は炉跡中から出土。口縁部に隆帯が渦巻状に貼付され、以下、条線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は隆帯による渦巻文と縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

6は凹線が巡り、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

7はLR、8はRLの単節斜縄文を地文とし、2条一對の沈線が垂下する。7の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。8の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

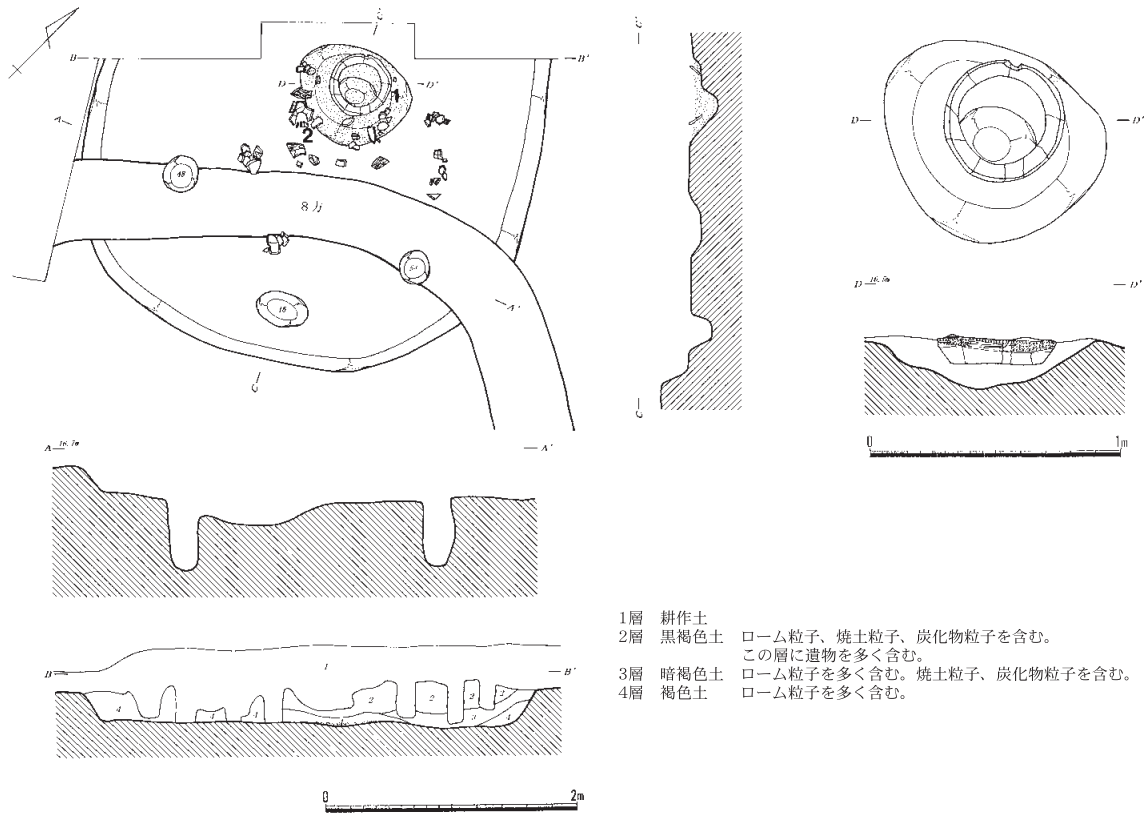
第347図13は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。39.5g。

第135図4を除き、覆土中の出土。

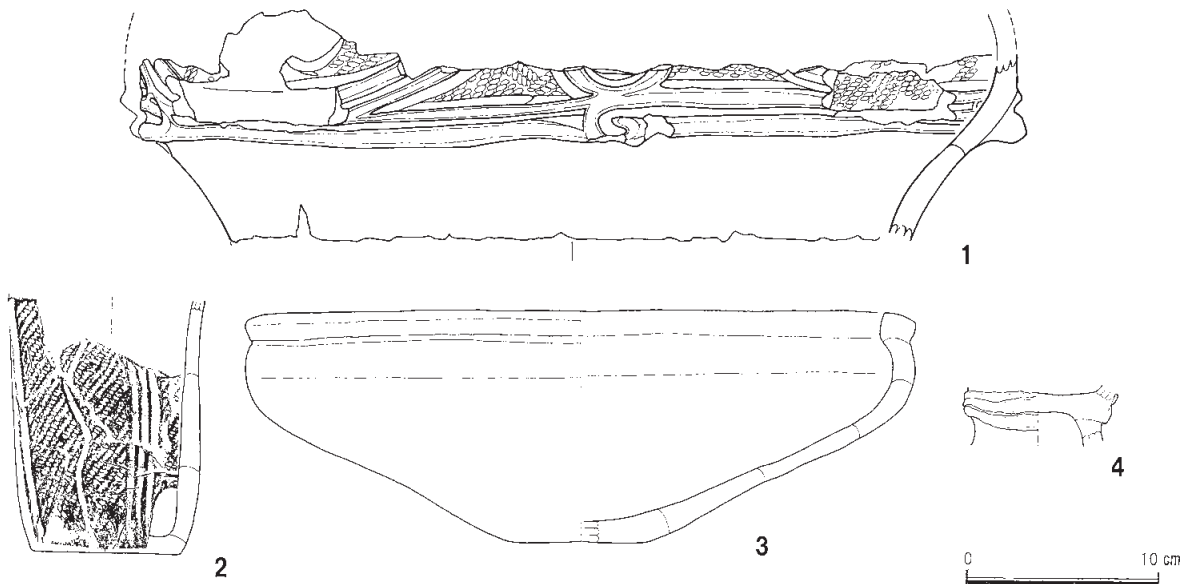
48号住居跡（第136図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

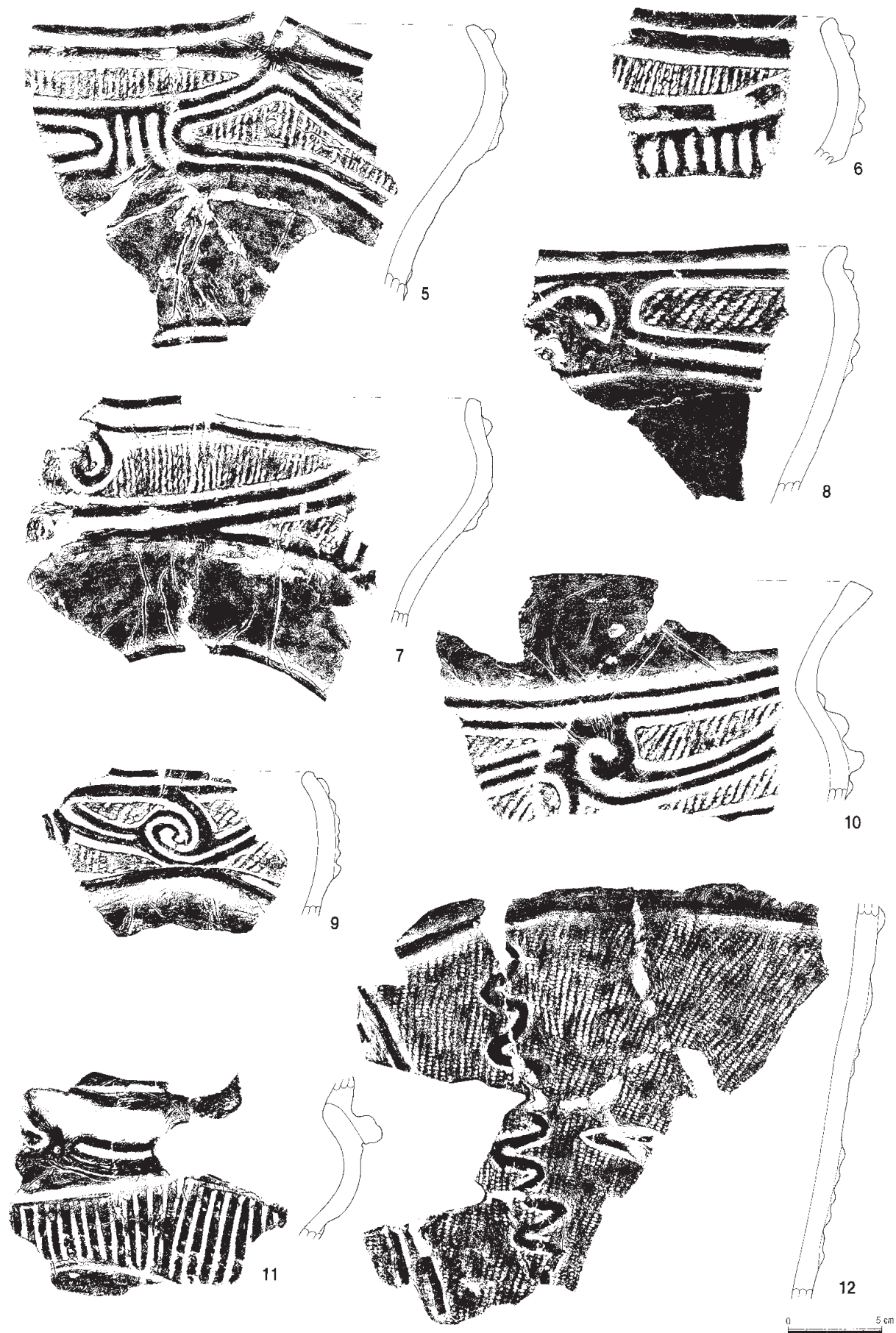
〔構造〕 南東側調査区外。173Y・8方に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）19cm前後を測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15cm前後・下幅7cm前後・深さ3～7cmを測る。（床面）大部分が弥生時代の住居跡に破壊されているため遺存状態は不良である。（炉）東側に位置する。1/4程の遺存状態で深さ8cmを測る地床炉である。（柱穴）不規則な配置で検出され、主柱穴などは判然としない。



第131図 44号住居跡（1/60）、炉跡（1/30）



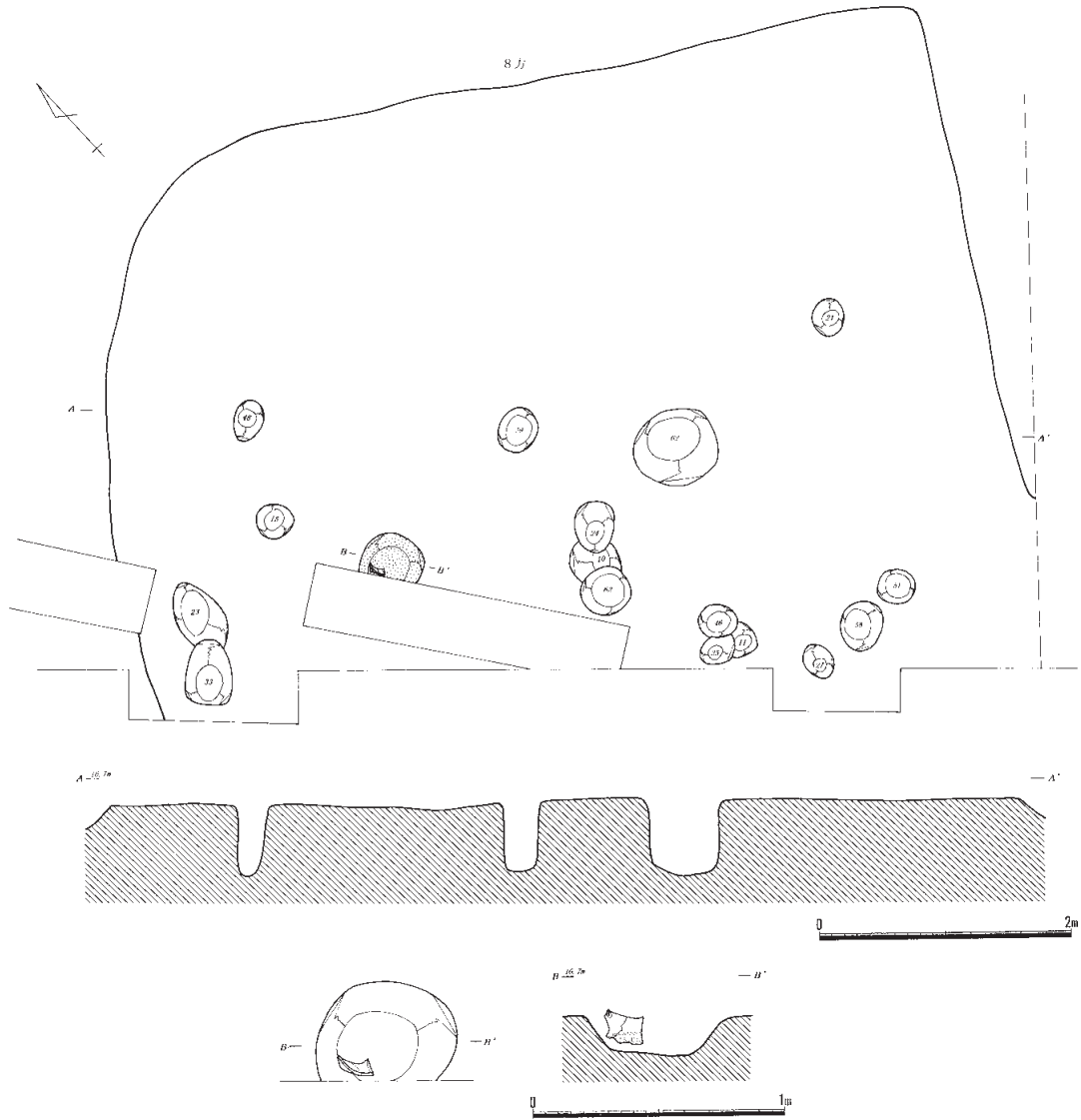
第132図 44号住居跡出土遺物1（1/4）



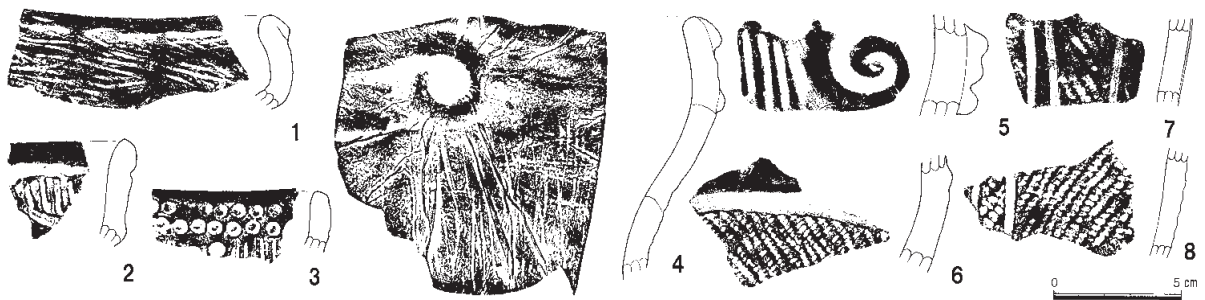
第133図 44号住居跡出土遺物2 (1/3)

〔覆土〕

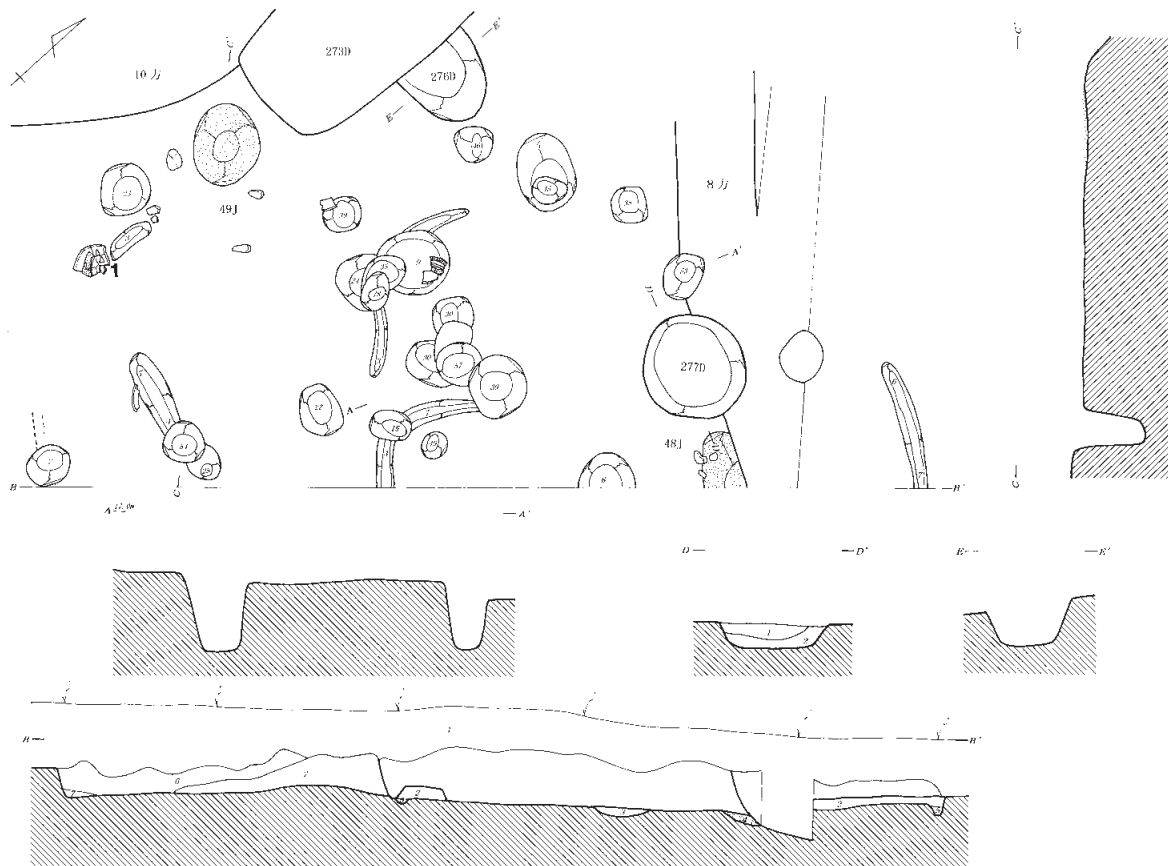
- 1層 耕作土。
- 2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。
- 3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を多く含む。
- 5層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。



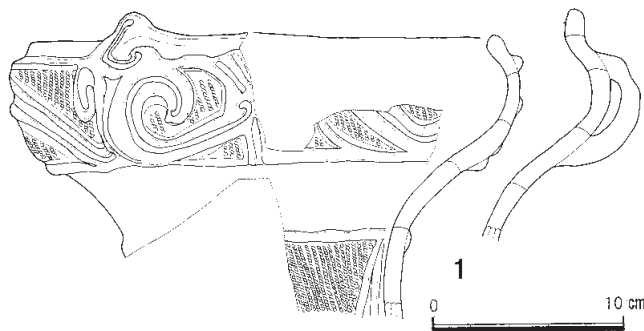
第134図 46号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)



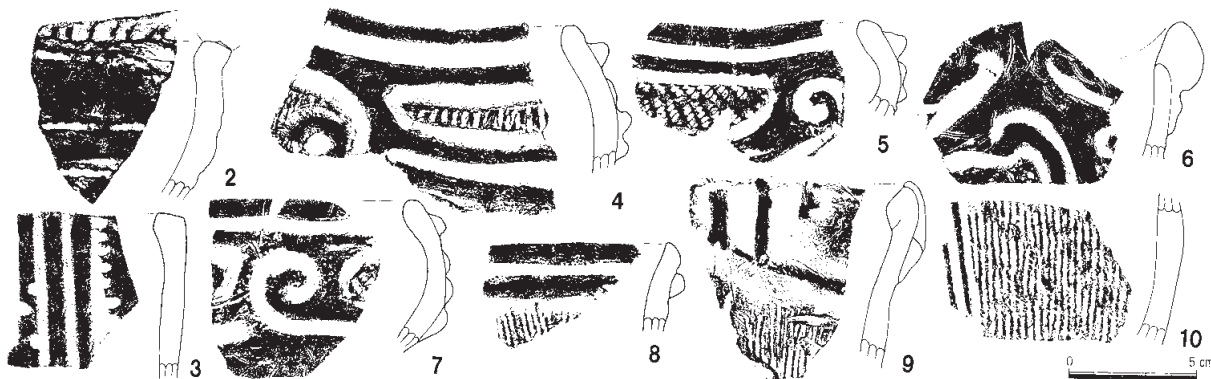
第135図 46号住居跡出土遺物 (1/3)



第136図 48・49号住居跡、276・277号土坑 (1/60)



第137図 48号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第138図 48号住居跡出土遺物 2 (1/3)

〔遺物〕 炉周辺から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

48号住居跡出土遺物（第137・138図、第317図7～9）

第137図1はキャリパー形土器。1/3程の破片からの推定復元である。2本の隆帯を巡らせて口縁部・頸部・胴部を画する。口縁部及び胴部はRの撚糸文を縦位に施して地文にする。口縁部には橋状の把手が付き、渦巻文や区画文が配される。胴部には2本一對の隆帯の懸垂文がみられる。頸部は無文帯になる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第138図2は結節沈線文により区画が作られようか。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には雲母を多く含む。

3は口唇部から3本の隆帯が垂下する。隆帯には交互刺突が部分的に加えられ鋸歯状を呈する。隆帯に沿って刻みをつけられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4～7はキャリパー形を呈する土器。4はLの撚糸文を地文とし、隆帯による区画が作られる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。5はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯による楕円形の区画と渦巻文が作られる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。6は波状口縁の土器。口唇部は肥厚し、端部には凹線が施される。口縁部には沈線による区画が作られるようで、LRの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。7はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯による渦巻文や区画が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

8は口縁部に隆帯が巡り、Lの撚糸文が施される。色調はにぶい黄橙色（10YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

9は口縁部に隆帯による半円状の区画を作り、区画内には口唇部から3本の短隆帯が縦位に貼付される。以下、集合する沈線を地文とし、沈線による文様が見られる。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

10はLの撚糸文を地文とし、半截竹管による沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

第317図7～9は短冊形の打製石斧。7は横長の剥片を使用。表面には礫面を大きく残す。刃部は斜刃状。表裏面全周にわたって磨耗痕を認める。153g。硬砂岩製。8は頭部を欠く。表面には大きく礫面を残す。刃部は鋸歯状を呈する。88.9g。硬砂岩製。9は横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃部は斜刃状。107.2g。硬砂岩製。

いずれも覆土中からの出土。

49号住居跡（第136図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕 173・174Y、8・10方に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）不明。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱である。（炉）65×53cmの楕円形を呈する範囲が、被熱のため赤く硬化している。（柱穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

6層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

7層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

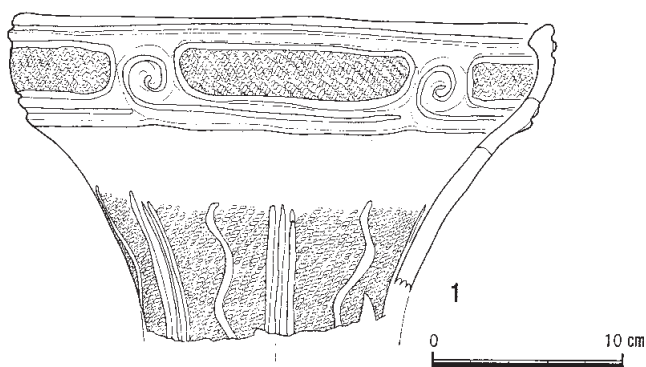
〔時期〕 加曾利E II 式期。

49号住居跡出土遺物（第139・140図、第317図10～13、第340図8～10、第347図14～18）

139図1、第140図2～8はキャリパー形の土器。

第139図1はゆるやかなキャリパー形を呈する。RLの単節斜縄文を地文とする。口縁部は隆帯により長楕円形の区画がなされる。5単位になろうか。区画の接合部分には渦巻文が配される。頸部は無文になるが、胴部を画する工夫はなされていない。胴部は蛇行する沈線と半截竹管による3条一組の直行する沈線が交互に垂下する。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

140図2・4はL、3はRの撚糸文を地文とする。2本一對の隆帯により渦巻文や区画が作られる。2の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）、3の色調はにぶい黄橙色（10YR6/4）、4の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土にはいずれも粗砂を多く含む。



第139図 49号住居跡出土遺物1 (1/4)



第140図 49号住居跡出土遺物2 (1/3)

5・6・8はRL、7はLRの単節斜縄文を地文とし、隆帯による区画が作られる。5の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。6の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。7の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。8は区画に渦巻文が付加され、頸部は無文帯になる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

9は口縁部が僅かに内湾しながら開き、口唇部が内屈する。口縁部は広く無文になり、下位には隆帯が波状に貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

10は曽利系の土器。口縁部には斜位の沈線を集合して施し、蛇行する隆帯が垂下する。内面、口唇部には斜位の沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

11は口縁部が強く内屈する土器。半截竹管による集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

12はRの撚糸文を地文とする。2本の隆帯を垂下させ、隆帯間に斜位の短隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

13はLの撚糸文を地文とし、2本の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には片岩が目立つ。

14・15はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線による直行・蛇行する懸垂文が施される。14の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。15の色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土には粗砂を含む。

16・17は半截竹管による集合沈線を地文とし、隆帯を波状に貼付する。16の色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。17の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第317図10～13は打製石斧。10・11・13は短冊形。10は表面、刃部と頭部に礫面を残す。刃部は円刃状。130.2g。11は表面に礫面を残す。刃部は円刃状。表裏面刃部側半周にわたって磨耗痕を認める。71.4g。13は横長の剥片を使用か。表面には礫面を残す。刃部は平刃状。188.5g。以上は硬砂岩製。12は撥形。横長剥片を使用。刃部は円刃状。69.9g。粘板岩製。

第340図8・9は凹基、10は平基の打製石鏃。8は0.8g。黒曜石製。9は1.7g。凝灰岩製。10は1.9g。硅岩製。

第347図14～18は土器片錘。長軸に刻みが増えられる。重量は14が26.9g、15が19.6g、16が30.2g、17が17g、18が37.7gを測る。

いずれも覆土中の出土。

50号住居跡（第141図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕 東側と西側が攪乱されている。（平面形）楕円形。（規模）530×450cm。（主軸方位）N-25°-W。（壁高）22～42cmを測り、65°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅25～40cm・下幅5～11cm・深さ1～14cmを測り北西側で止まるが、ほぼ全周すると思われる。（床面）住居壁際と炉の周辺を除き、硬化面が認められる。（炉）住居中央から西に偏って位置する。径50cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。埋設土器を抜かれた可能性がある。（柱穴）深度のある5本が支柱穴と思われる。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。
- 2層 明褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 4層 赤褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。
- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

6層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 住居南側の覆土中から多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

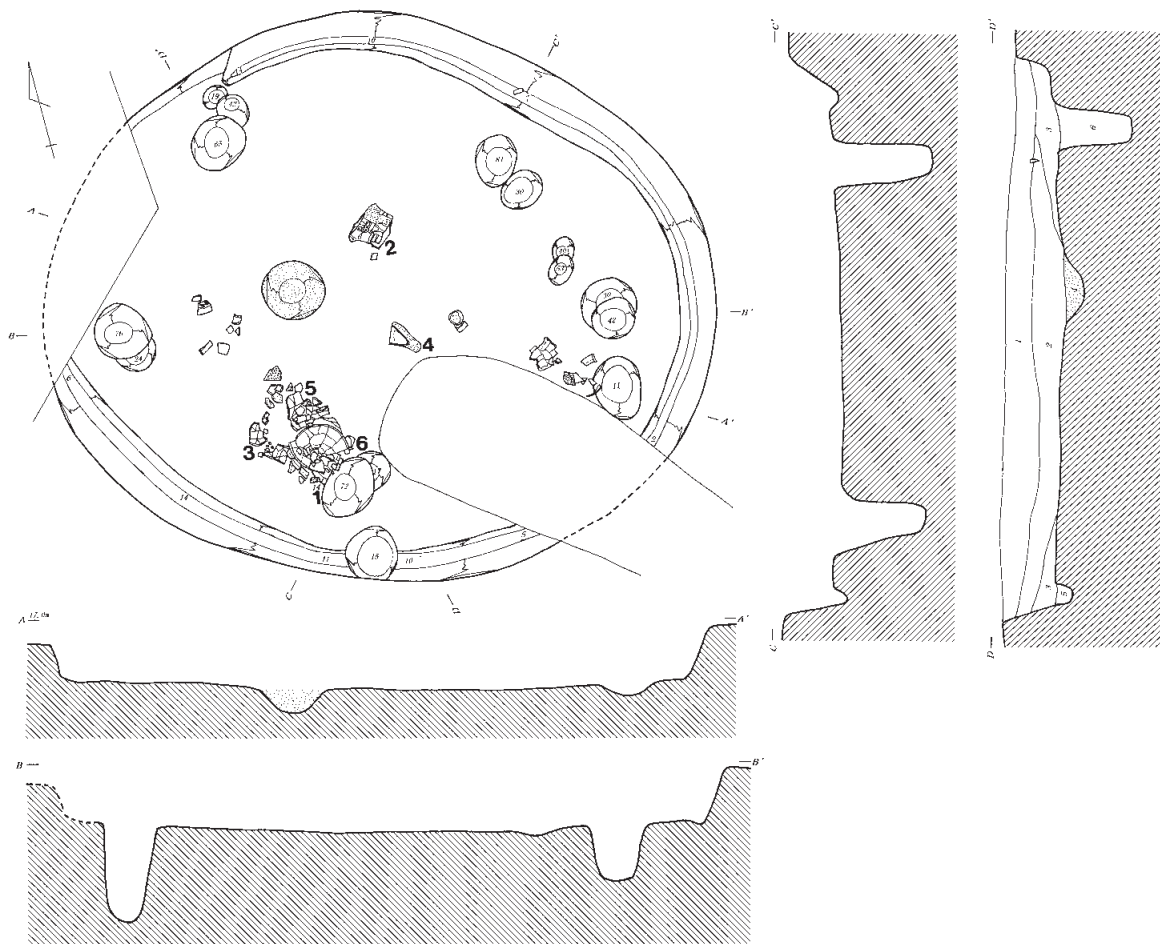
50号住居跡出土遺物（第142～145図、第318図1～7、第340図11～13、第347図19～25、第350図7）

第142図1、第143図2・5、第144図6は円筒形の土器。

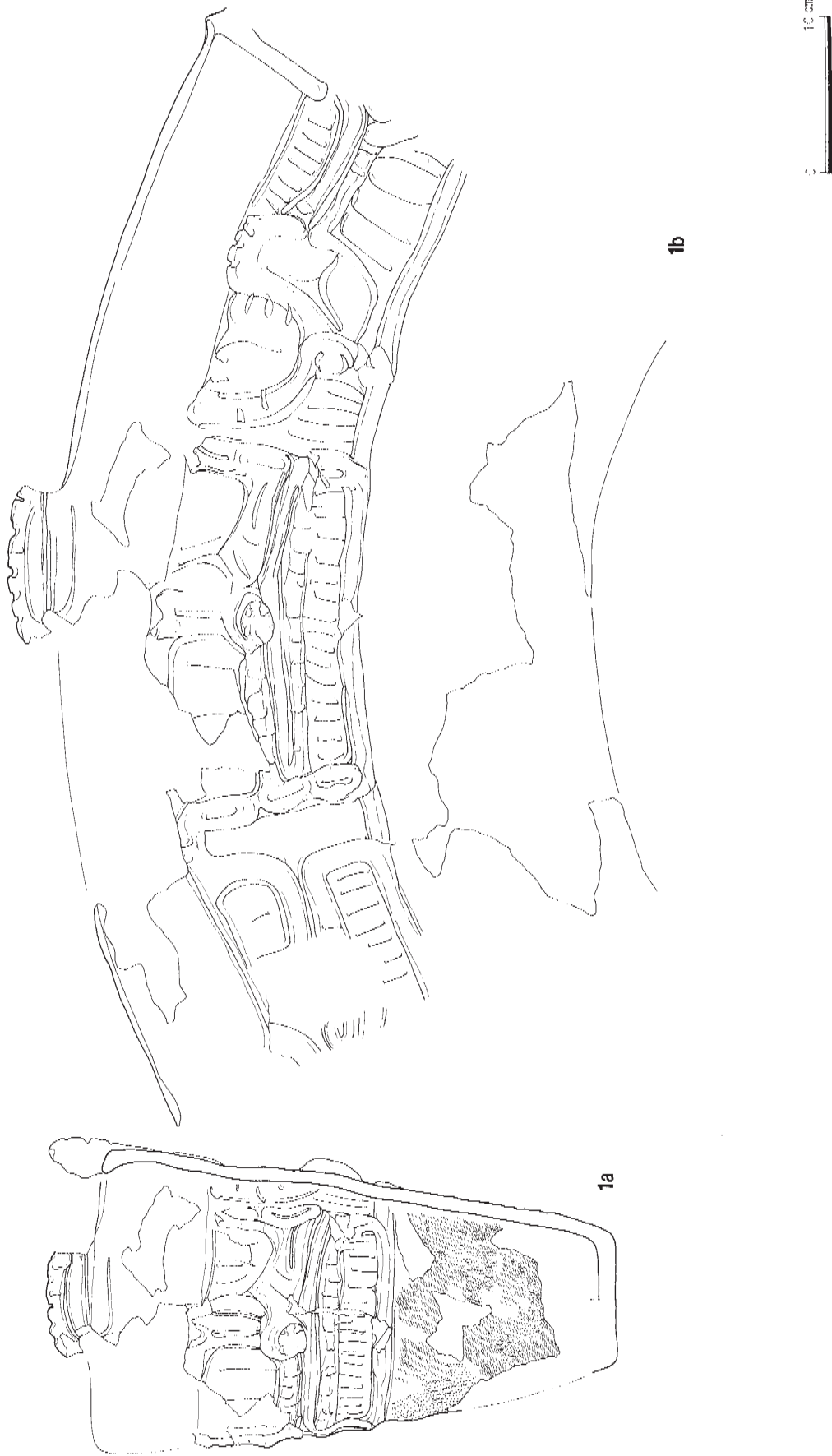
第142図1は土器のほぼ中位に隆帯を巡らせて上下に区画する。肥厚する口唇部上には上部に交互刺突による刻みが付加された「C」字状の突起が付く。対向する口唇部上にも小突起がみられ、そこから隆帯が垂下する。口縁部は無文帯になる。胴部上位の文様は隆帯や鎖状隆帯により長方形や半円形などの区画が作られる。区画内には集合する沈線や三叉文が充填される。胴部下位にはLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第143図2は内屈する口唇部上に、上部に蛇行する隆帯を貼付した「C」字状の突起が付けられ、そこから綾杉状の刻みが加えられた隆帯が無文の口縁部に垂下する。対向する口唇部上にも上部に円孔がある小突起が付き、やはり綾杉状の刻みがある隆帯が垂下する。胴部上位の文様帯は、口唇部上の2ヵ所の突起から口縁部に垂下する隆帯から続く蛇行する隆帯により縦位に2分割される。区画内は刻みのある隆帯や蛇行する隆帯が貼付され、空白部には短沈線の交互配列や三叉文が充填される。胴部下位はRLの単節縄文が施される。色調は黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、胎土には細礫・輝石を多く含む。

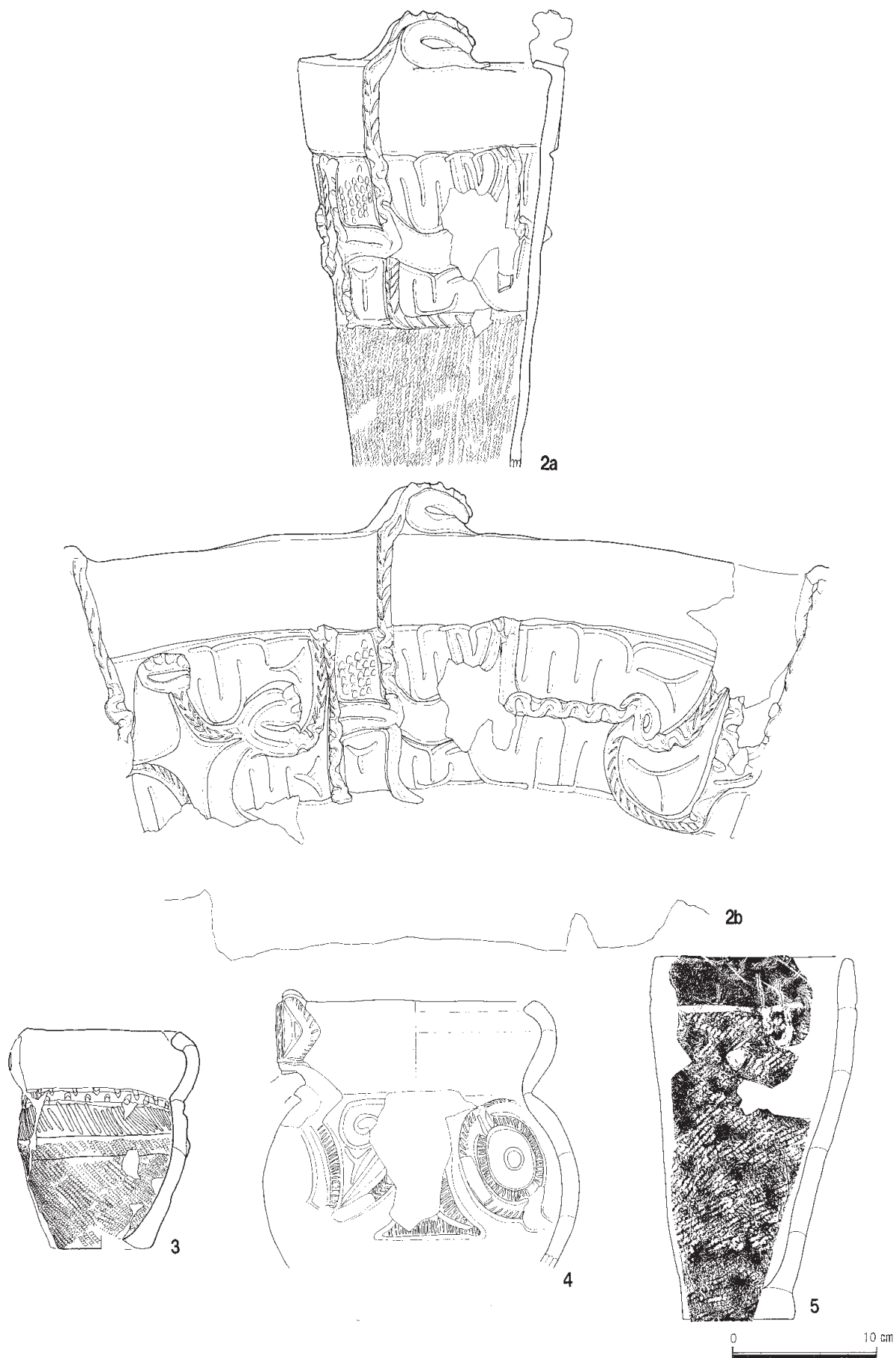
5は底部から単純に開く分厚い土器。LRの単節斜縄文を地文とし、口縁部には「U」字状の文様が付加された沈線が巡る。「U」字状文の内部には刺突が加えられている。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には粗砂



第141図 50号住居跡 (1/60)



第142図 50号住居跡出土遺物1 (1/4)



第143図 50号住居跡出土遺物2 (1/4)

を多く含む。

第144図6は斜位の刻みが加えられた横走する隆帯により土器が上下に2分される。肥厚する口唇部上には、綾杉状の刻みが加えられた隆帯により縁取りされた「C」字状の突起が付く。この隆帯は口縁部の狭い無文帯にまで垂下する。胴部上位の文様帯には「U」字状文や刻みのある隆帯、蛇行する隆帯による区画が作られる。空白部には三叉文などの沈線文が充填される。色調は黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、胎土には輝石を多く含む。

第143図3は頸部がくびれ、無文の口縁部は内湾する。頸部には2条の沈線が巡り、沈線間には交互刺突が加えられる。胴部上位は斜位の沈線が集合して施され、以下、隆帯が横走する。胴部下位は隆帯上もふくめてLRの単節斜縄文が施される。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は1/4程の破片からの推定復元。頸部が強くくびれ、口縁部と胴部が膨らむ「ダルマ」状の器形を呈する。無文の口縁部には、複数の細沈線が縦位に施された隆帯と刻みが加えられた隆帯を組み合わせて貼付した三角文がみられる。この三角文は上部に伸びて口唇部上の突起に、下部に伸びて頸部の把手に変化するようである。胴部の文様は刻みが付加された隆帯などにより、区画的な同心円文や三角文が作られる。区画内には沈線による渦巻文や三叉文などが充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細礫・片岩を多く含む。

第144図7は浅鉢形土器。底部から大きく開き、体部上位で内湾しながら立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部・肩部内外面には赤彩、体部内面には鋸歯状に黒彩された痕跡を残すが不鮮明である。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第145図8は口縁部に押捺が加えられた隆帯が2本巡る。隆帯間には波状沈線が多条に施される。口唇端部には斜位の刻みがつけられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

9は隆帯を横走させて口縁部と胴部を画する。口縁部の文様は2条一対の沈線によってなされ、口縁部下と隆帯の上位には平行に、口縁部中程には波状に横走させる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

10は口唇部に押捺が加えられ、角押文が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には雲母・細礫を多く含む。

11は口唇部下に連続爪形文が施される。RLの単節斜縄文を地文とし、沈線と連続爪形文を鋸歯状に施す。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を多く含む。

12は渦巻文が付加された隆帯により区画が作られる。隆帯に沿って連続爪形文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

13は隆帯で「V」字状の区画を作り、隆帯に沿って押引文が施される。空白部には縦位の刺切文が連続して施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には白色チャートを多く含む。

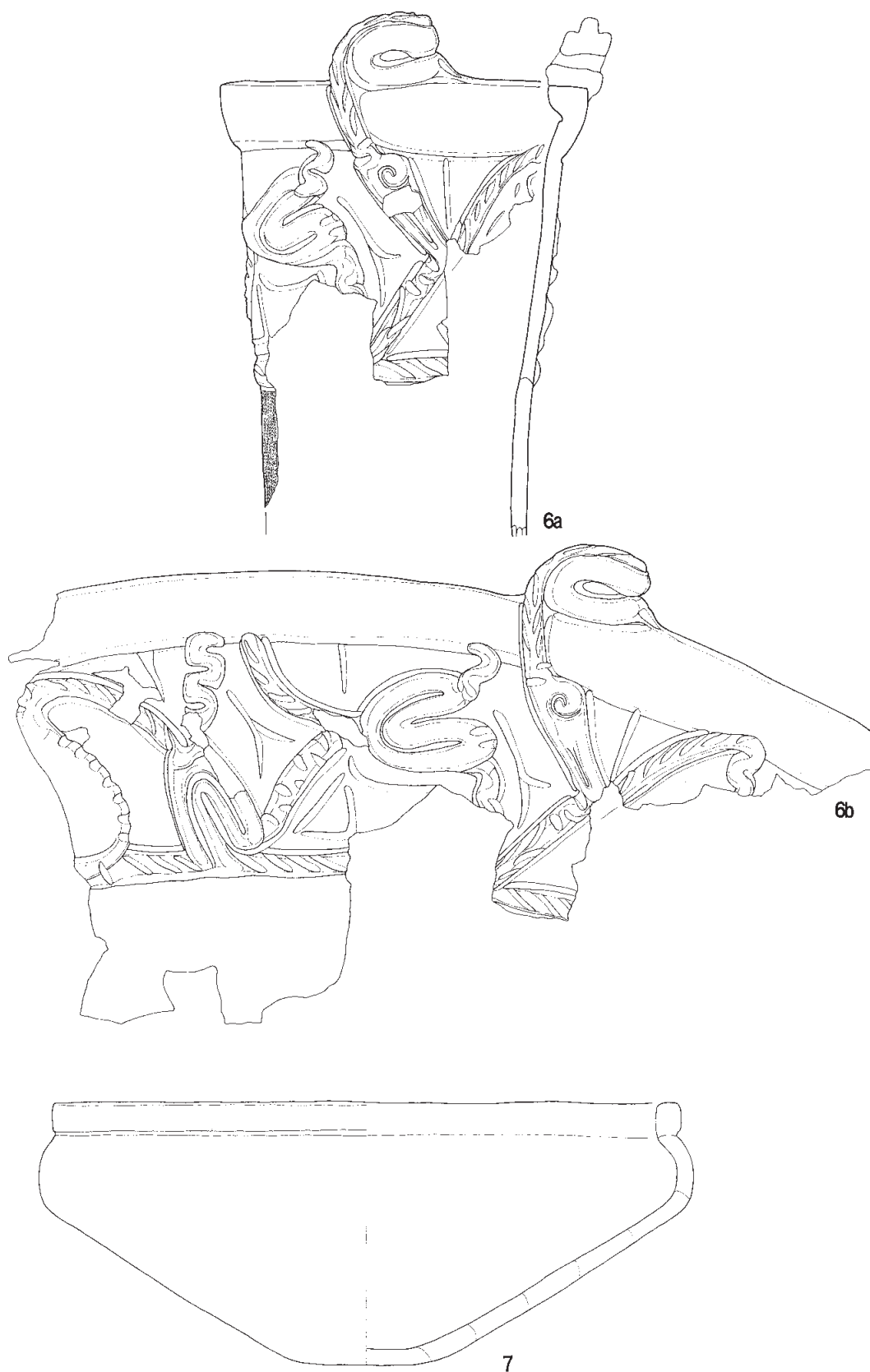
14は沈線でなぞられた隆帯が横走する。2条一対の結節沈線文を弧状に施して区画を作る。区画内には横位の波状沈線文が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には雲母・白色チャートを多く含む。

15は沈線になぞられた隆帯により区画が作られ、区画内には半截竹管による縦位の集合沈線を施し、横位・斜位の太沈線を加えた文様や連続爪形文が充填される。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

16は口縁部が僅かに外反して無文帯になる。沈線により胴部と画する。胴部には刻みが加えられた隆帯による渦巻文が付加された半楕円形の区画が作られる。区画内には更に半楕円形の文様が描かれ、縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

17は口唇端部に刻みが加えられる。口縁部には2条の沈線が横走し、平行沈線が鋸歯状に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

18はLRの単節斜縄文を斜位・横位に施して地文とし、沈線を弧状に施文する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。



0 10 cm

第144図 50号住居跡出土遺物3 (1/4)

19は横走する隆帯上に眼鏡状の貼付文が貼付され、そこから細目の隆帯が弧状に貼付され区画が作られる。区画内には弧状・縦位の平行沈線文・連続爪形文が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

20は押捺が加えられた隆帯による区画が作られ、区画内には縦位の押引文が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

21は刻みが加えられた隆帯により区画が作られ、斜位の沈線や波状沈線文、連続した刻みが充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

22はLRの単節斜縄文が施され、横位の沈線下には連続した縦位の刻みがつけられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

23は浅鉢形土器になろうか。口縁部には「U」字状に隆帯を貼付し、口唇部から沈線を垂下させる。色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第318図1～7は打製石斧。1～3は撥形を呈する。1は横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃部は円刃状。表裏刃部側の両側縁に磨耗痕を認める。82.2g。ホルンフェルス製。2は縦長の剥片を使用。刃部は尖刃状。81g。硬砂岩製。3は表面に礫面を残す。刃部は円刃状。側縁に敲打痕を認める。硬砂岩製。4～7は短冊形。4は横長の剥片を使用。右側縁が曲線的である。刃部は平刃状。側縁に敲打痕を認める。130.4g。硬砂岩製。5は刃部側を欠く。側縁に敲打痕を認める。119.2g。硬砂岩製。6は頭部を欠く。刃部は円刃状。121.2g。緑色岩製。7は頭部を欠く。刃部は平刃状。106.1g。硬砂岩製。

第340図11は大型の横長の石匙。幅広の剥片を使用か。表面は大部分が礫面。表裏面に加工を加え、つまみ部を作成する。37.2g。凝灰岩製。

12は二次加工のある剥片。分厚な剥片の両側縁に加工が加えられる。19.2g。黒曜石製。

13は幅広の剥片。51.6g。凝灰岩製。

第19～25は土器片錘。すべて長軸に刻みが加えられる。重量は19が10g、20が19.1g、21が25.6g、22が28.3g、23が25.4g、24が26.2g、25が76.4gを測る。

第350図7は翡翠製の丸珠。洋梨形の転礫を使用。長軸方向に穿孔されている。孔は図右側で径0.8cm、左側で径0.5cmで、右から一方向に穿たれたようである。右側の孔に接して環状の痕跡が残されている。竹管状の工具による穿孔を途中で放棄したことがうかがえる。研磨は礫の形状を整えるような形でおこなわれているようである。研磨部分の色調は灰白色（10Y7/2）を呈する。255g。

すべて覆土中からの出土。

51号住居跡（第146図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。172Y・10方に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）18～34cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅30cm前後・下幅15cm前後・深さ7～31cmを測る。（床面）全体に軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）8本検出されるが、主柱穴は判然としない。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

5層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中からの出土が大部分であるが、出土量は少ない。

〔時期〕 加曾利E II 式期。

51号住居跡出土遺物（第147図、第347図26・27、第351図3）

第147図1は連弧文系の土器。LRの単節斜縄文を乱雑に施して地文とする。4条一単位の沈線で連弧文を描き、そこから蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

2は口縁部に沈線と隆帯を横走させて区画を作り、区画内には縦位の沈線が充填される。以下、2条一對の沈線を垂下させ、斜位の集合する沈線が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を含む。

3はLRの単節斜縄文を地文とする。2条の沈線を横走させ、そこから3条一組の沈線が垂下する。色調は灰黄褐色（2.5YR7/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は横位・弧状の沈線が施され、その間にLの撚糸文がみられる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

5は波状口縁の土器。RLの単節斜縄文を地文とする。口縁部に沿って沈線が施され、波頂部から3条一組の沈線が垂下する。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

6はLRの単節斜縄文を地文とし、蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

7はRLの単節斜縄文を地文とする。沈線による区画が作られようか。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土に



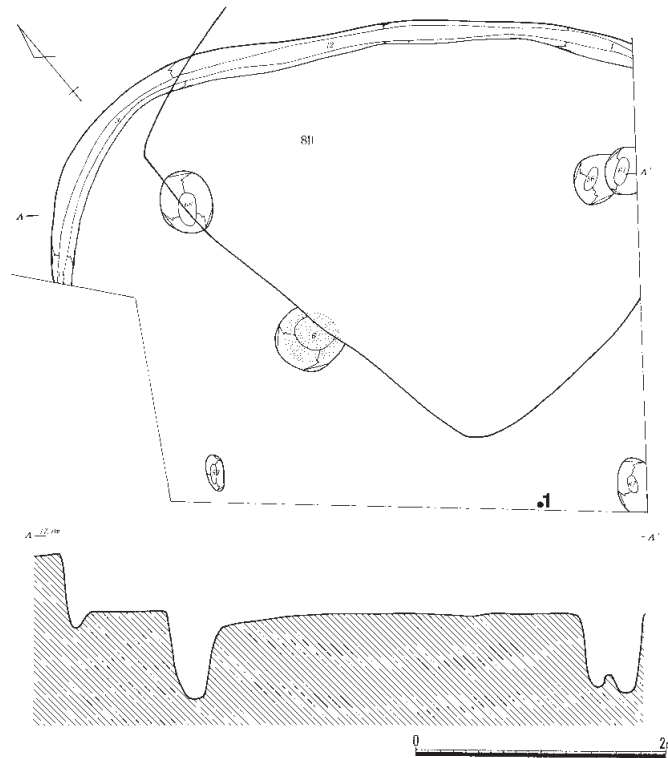
第145図 50号住居跡出土遺物 4 (1/3)

は細砂を僅かに含む。

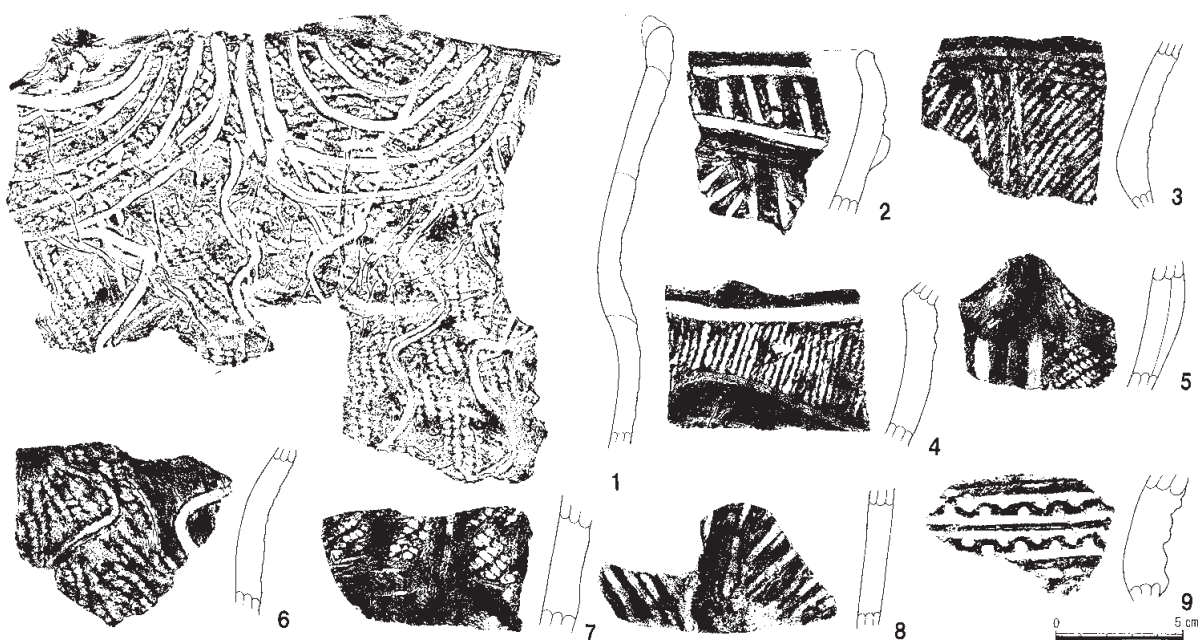
8 は2条の沈線が垂下し、両側に斜位の集合する沈線が施される。色調は黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9 は半截竹管による横位の平行沈線が多段に施され、沈線間には交互刺突が加えられる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第347図26・27は土器片錘。26は長軸に刻みが加えられる。16.4 g。27は短軸に刻みが加えられようか。116.1 g。



第146図 51号住居跡 (1/60)



第147図 51号住居跡出土遺物 (1/3)

第351図3は人面突起。顔面はハート状に作られる。眼は刺し切り状の刺突による上がり眼で、口は円形の刺突である。上面は渦巻状に隆帯が貼付される。頭髪を意図したものか。右側縁には2穴が穿たれている。赤彩された痕跡を残す。色調はにぶい赤褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

すべて覆土中からの出土。

52号住居跡（第148図）

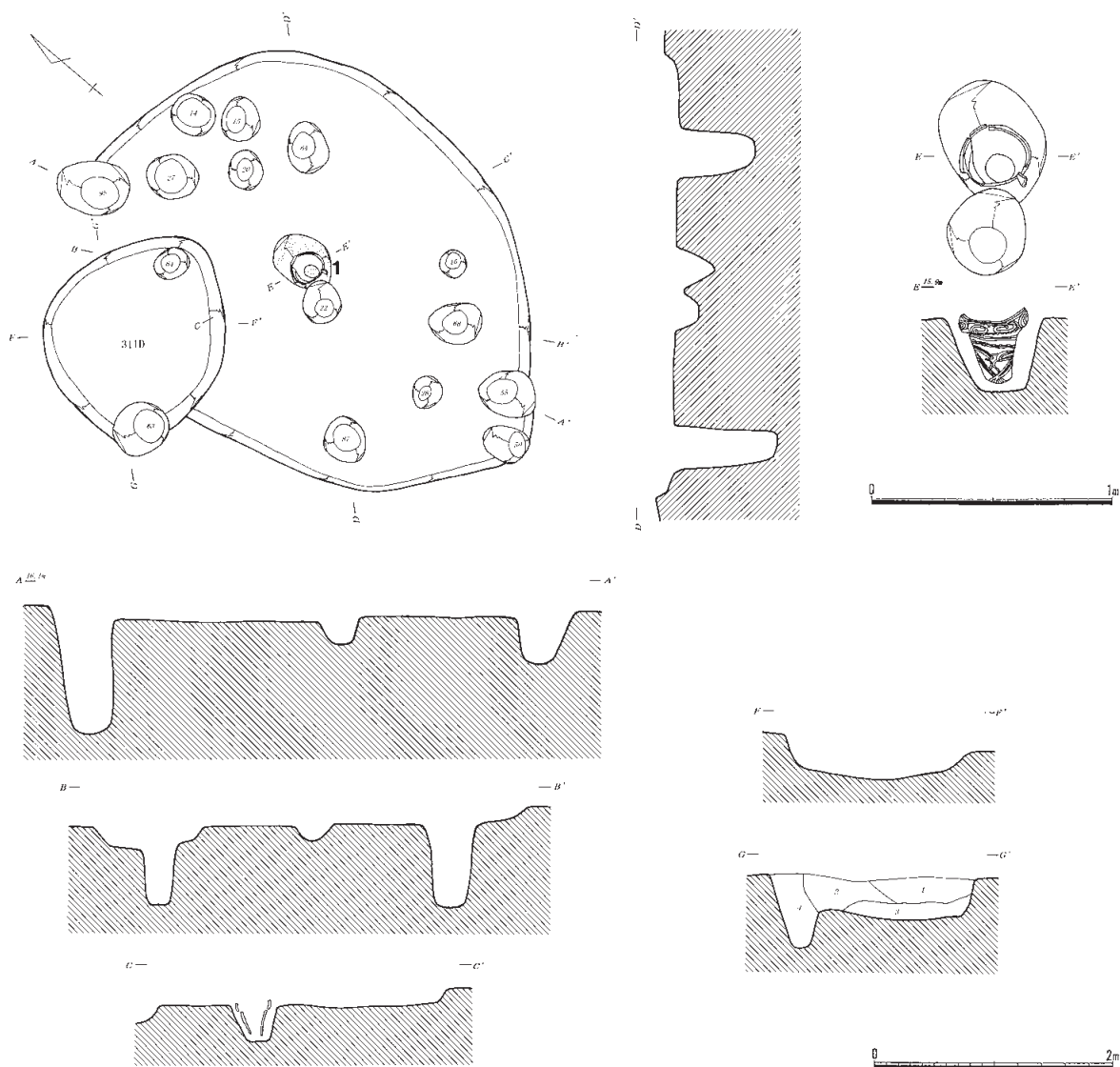
〔位置〕 25V地点。

〔構造〕 311Dに切られる。（平面形）不整楕円形。（規模）430×320cm。（主軸方位）N—S。（壁高）5～16cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱で、遺存状態は不良である。（炉）住居中央に位置する。ほぼ完形の深鉢形土器を埋設している埋甕炉で、55×45cm・深さ60cmの楕円形の掘り込みをもつ。（柱穴）不規則な配置であるが、深度のある4本が主柱穴と思われる。

〔覆土〕 ローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 覆土中からの出土が大部分であるが、量は少ない。

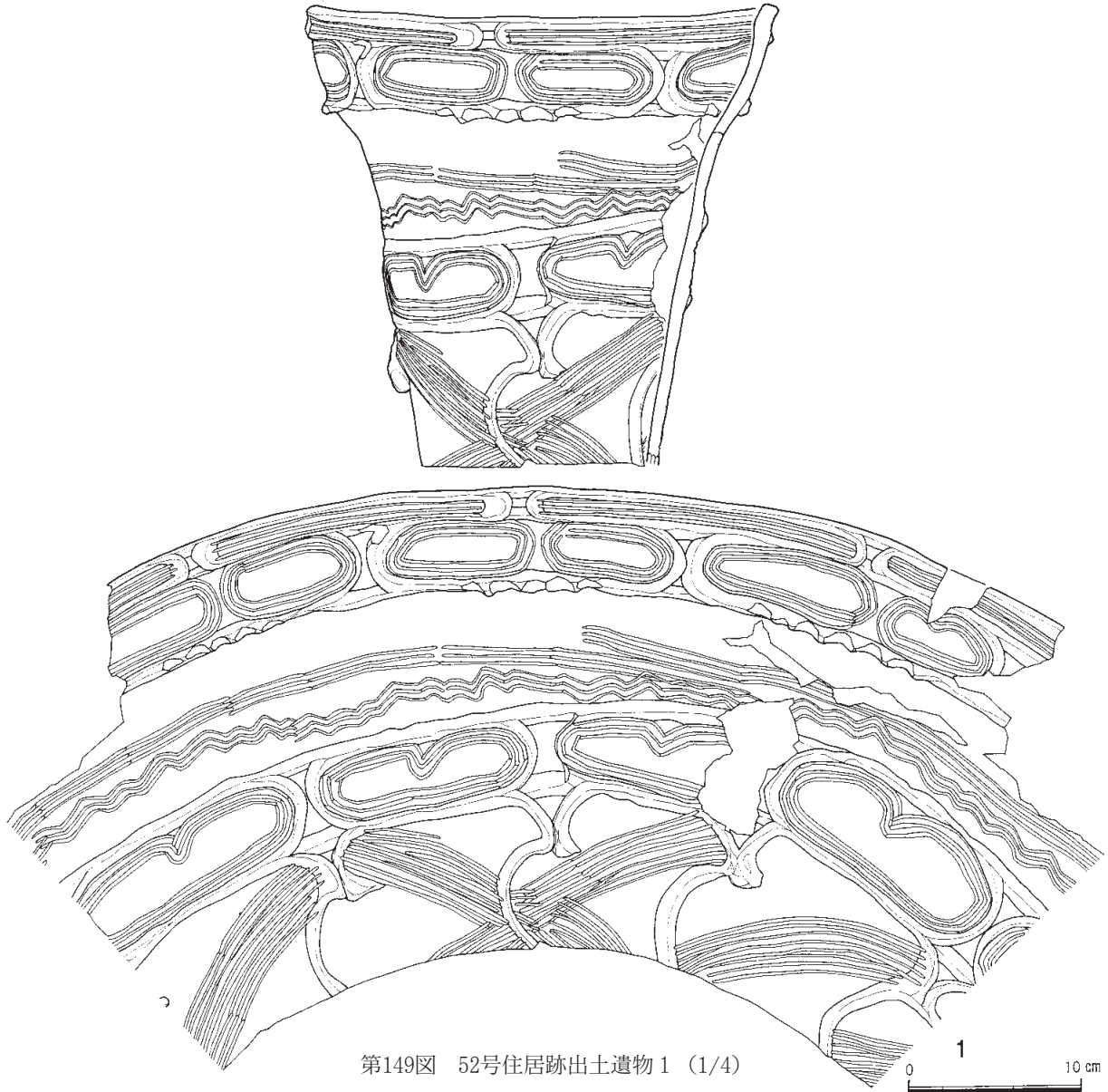
〔時期〕 勝坂式期。



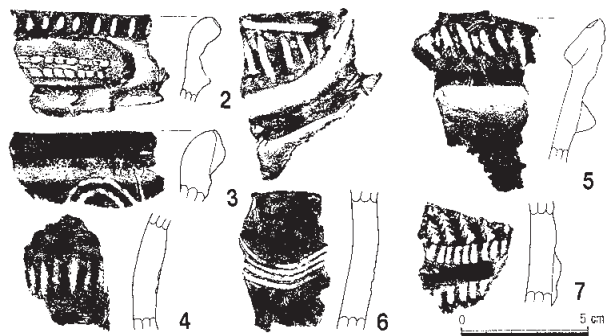
第148図 52号住居跡（1/60）、炉跡（1/30）、311号土坑（1/60）

52号住居跡出土遺物（第149・150図）

第149図1は炉に埋設されていた土器。胴部は直線的に開き、頸部で僅かに外湾し、口縁部は内湾気味に開く。口唇部は内面に稜をもつ。文様の基幹は隆帯によって構成される。口縁部の文様帯は2段設けられる。上段は幅狭な長楕円形の区画が4単位設けられ、区画内には3条一組の沈線が横位に充填される。下段は長楕円形の区画が上



第149図 52号住居跡出土遺物1 (1/4)



第150図 52号住居跡出土遺物2 (1/3)

段の区画と1/2ずれるような形で配置される。区画のための隆帯は下位の中央部分が連続した押捺で加飾される。区画内は3条一組の沈線による楕円形文が2単位充填される。頸部は無文帯になる。胴部は3段の文様帯で構成される。上段は3条一組の沈線による横線文・波状文が施される。中段は長楕円形の区画が4単位作られる。区画内には隆帯に沿って3条一組の沈線が施されるが、上部は窪む。下段は鉤状の懸垂文により4単位に画される。区画内には3条一組の沈線を多条にして斜位に施す。色調は明褐色(7.5YR5/6)を呈し、胎土には雲母を多く含む。

第150図2は口唇部に刻みが加えられる。口縁部には隆帯による長楕円形の区画が作られ、区画内には押引文が2条充填される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

3は口縁部に隆帯が横走する。半截竹管による押引文が弧状に施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には雲母を多く含む。

4はへう状施文具による刺突が横位に連続して施される。色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には雲母を多く含む。

5は隆帯による半楕円形の区画が作られようか。区画内には縦位の沈線が充填される。口縁部内面には斜位の刺突文が集合して施される。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

6は半截竹管による4条の沈線が弧状に施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7は隆帯を境に、上位にはペン先状の押引文・幅広の角押文、下位に幅広の角押文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第149図1を除き、覆土中からの出土。

53号住居跡(第151図)

〔位置〕25V地点。

〔構造〕(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)確認面を床面とするため、検出できなかった。(壁溝)検出されなかった。(床面)確認面を床面とするため、詳細は不明である。(炉)165×90cm・深さ10cmを測る掘り込みが炉であろうか。(柱穴)比較的多く検出されているが、分布に偏りがみられるうえに浅いものが多い。主柱穴などは判然としない。(埋甕)住居西側に位置する。不明×35cm・深さ15cmの楕円形の掘り込みに、深鉢形土器の胴部を埋設している。

〔覆土〕ローム面を床面としているため、詳細は不明。耕作による攪乱が著しい。

〔遺物〕僅かな出土である。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

53号住居跡出土遺物(第152・153図)

第152図1は埋甕として埋設されていた土器。1/2弱程度の破片からの推定復元。RLの単節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第153図2は口縁部に半截竹管による沈線を3条横走させ、以下、条線が弧状に施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3は条線を弧状に施す。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は横走する隆帯を境に連続爪形文が多段に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には細礫を含む。

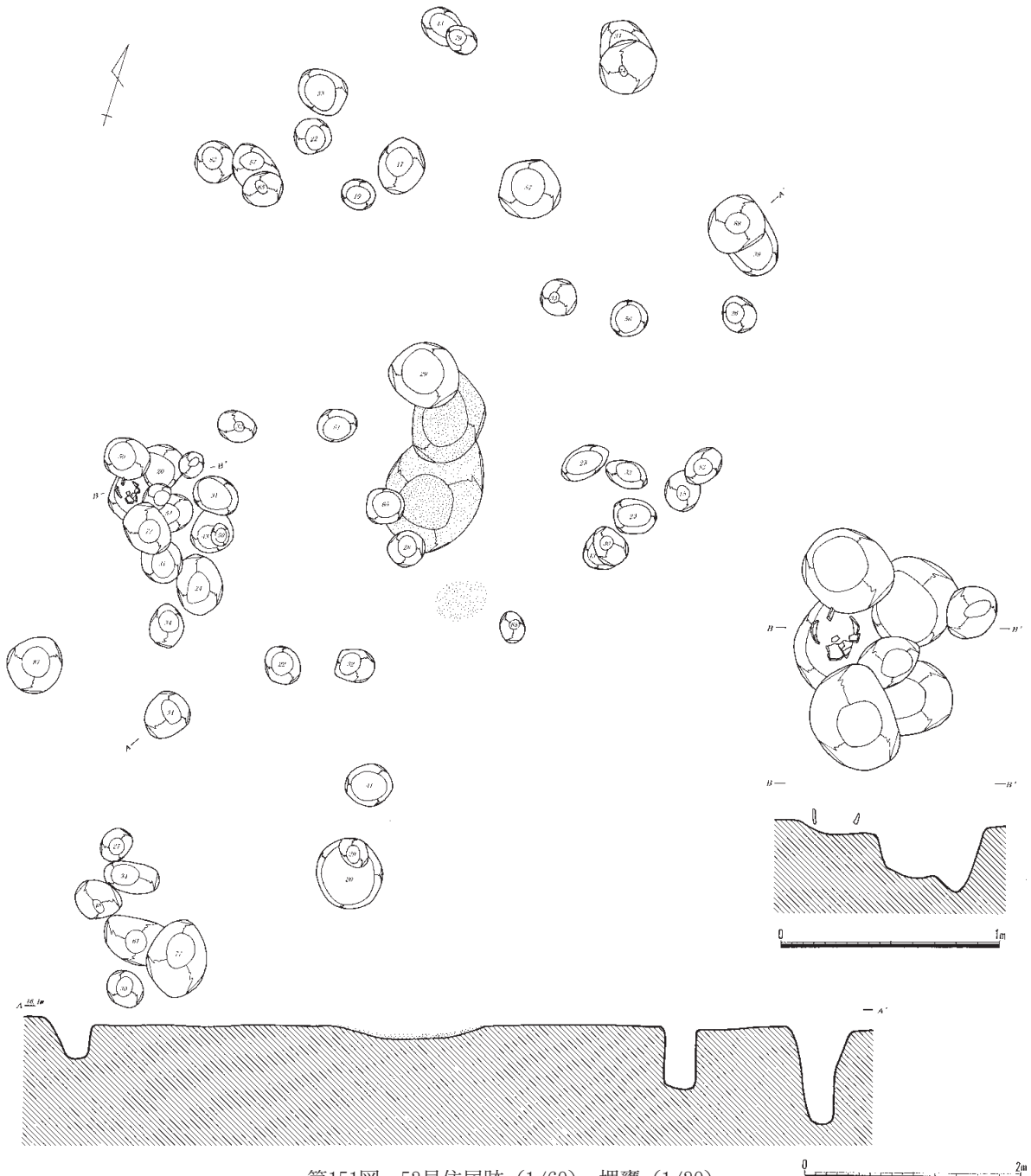
6はRLの単節斜縄文を地文とする。半截竹管による連続爪形文が付加された隆帯が垂下し、脇にはペン先状の連続刺突文が施される。色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈し、胎土には細砂を含む。

第152図1を除き、覆土中からの出土。

54号住居跡（第154・155図）

〔位置〕 26地点。

〔構造〕 西・南壁は調査区外。55 J を切る。兩住居跡がほぼ重なった状態のため、確実に捉えられたのは東及び北壁の一部と埋甕のみであった。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）東壁で20cm前後、北壁で10cm前後を測る。また、東壁の一部に小規模な張り出しがある。（壁溝）北側は二重になる。住居の拡張があったのか、55 J と関連するものなのか、判然としない。東壁下は上幅20cm前後・下幅10～15cm・深さ8～17cm、北壁下は内側で上幅15～35cm・下幅7～20cm・深さ3～11cm、外側は上幅20cm前後・下幅5～10cm・深さ7～10cmを測る。（床面）全体に軟弱である。（炉）東壁寄りに55×50cm・深さ26cmの掘り込みがあり、被熱のため赤化していた。位置からみて炉とするには疑問がある。（柱穴）深度のあるピットが多く検出されたが、55 J との関連もあり支柱穴の特定はできなかった。（埋甕）東壁下に位置する。大型の石皿や礫に囲まれ、深さ25cmの掘り込みに完形の双耳



第151図 53号住居跡（1/60）、埋甕（1/30）

壺が埋設されていた。埋設土器及び設置された礫の下部から検出された深度のあるピットは55 Jに帰属する可能性がある。なお、土器内から打製石斧が1点出土した。

〔覆土〕 55 Jとの分層ができなかったが、ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 覆土上層からの出土が多い。

〔時期〕 加曾利E IV式期。

54号住居跡出土遺物（第156・157図、第318図8～15、第329図7、第333図5・6、第337図1、第341図1～6、第347図28～30）

第156図1は埋甕として埋設されていた双耳壺。胴部は底部からやや内湾しながら開き、頸部ですぼまり、口縁部は僅かに外反する。頸部には低い隆帯が巡り、肩部には橋状の把手が2ヵ所に貼付される。LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

2はRLの単節斜縄文を地文とし、微隆帯により区画がなされる。区画外は縄文が磨り消される。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

第157図3は斜位の刻みが加えられた隆帯が横位に貼付され、そこから無加飾の隆帯が垂下する。隆帯の左右は無文とLRの単節斜縄文になる。色調はにぶい黄褐色（10YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

4は橋状の把手が貼付される。把手上には沈線による楕円形文が施される。地文はRLの単節斜縄文である。色調はにぶい赤褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第318図8～15は打製石斧。8～10は分銅形。8は縦長の剥片を使用。刃部は円刃状。86.7g。硬砂岩製。9は刃部が平刃状。表面刃部付近に線条痕、表裏面刃部側縁に磨耗痕が認められる。75.5g。硬砂岩製。10の刃部は円刃状。161.9g。硬砂岩製。11～15は短冊形。11は縦長の剥片を使用。刃部は斜刃状。表裏刃部側の両側縁には磨耗痕が認められる。85.1g。硬砂岩製。12は扁平な礫を使用。刃部は円刃状。側縁には敲打痕を残す。110.7g。硬砂岩製。13は棒状の礫を使用。表裏面に礫面を残す。刃部は円刃状。側縁に敲打痕が認められる。172.4g。硬砂岩製。14は表面に礫面を残す。刃部は斜刃状。側縁に敲打痕を残す。104.2g。硬砂岩製。埋甕内から出土した。15は縦長の剥片を使用。頭部側を欠く。刃部は円刃状。113.6g。硬砂岩製。

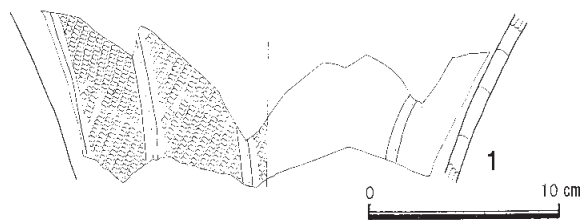
第329図7は磨製石斧。刃部と頭部を欠く。300g。硬砂岩製。

第333図5・6、第337図1は石皿。5は凹石兼用。両面とも平坦である。870g。石英閃緑岩製。6は使いこまれて片面はくぼむ。510g。礫岩製。

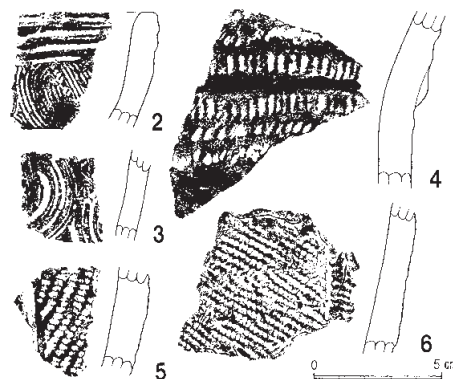
第337図1は長方形の大型の石皿。凹石兼用。片面は使用のため大きくくぼむ。19,500g。緑泥片岩製。埋甕の横に敷かれた状態で出土した。

第341図1～3は凹基、4は平基の打製石鏃。1は1.7g。4は4.7gで珪岩製。2は0.5g、3は0.9gで黒曜石製。

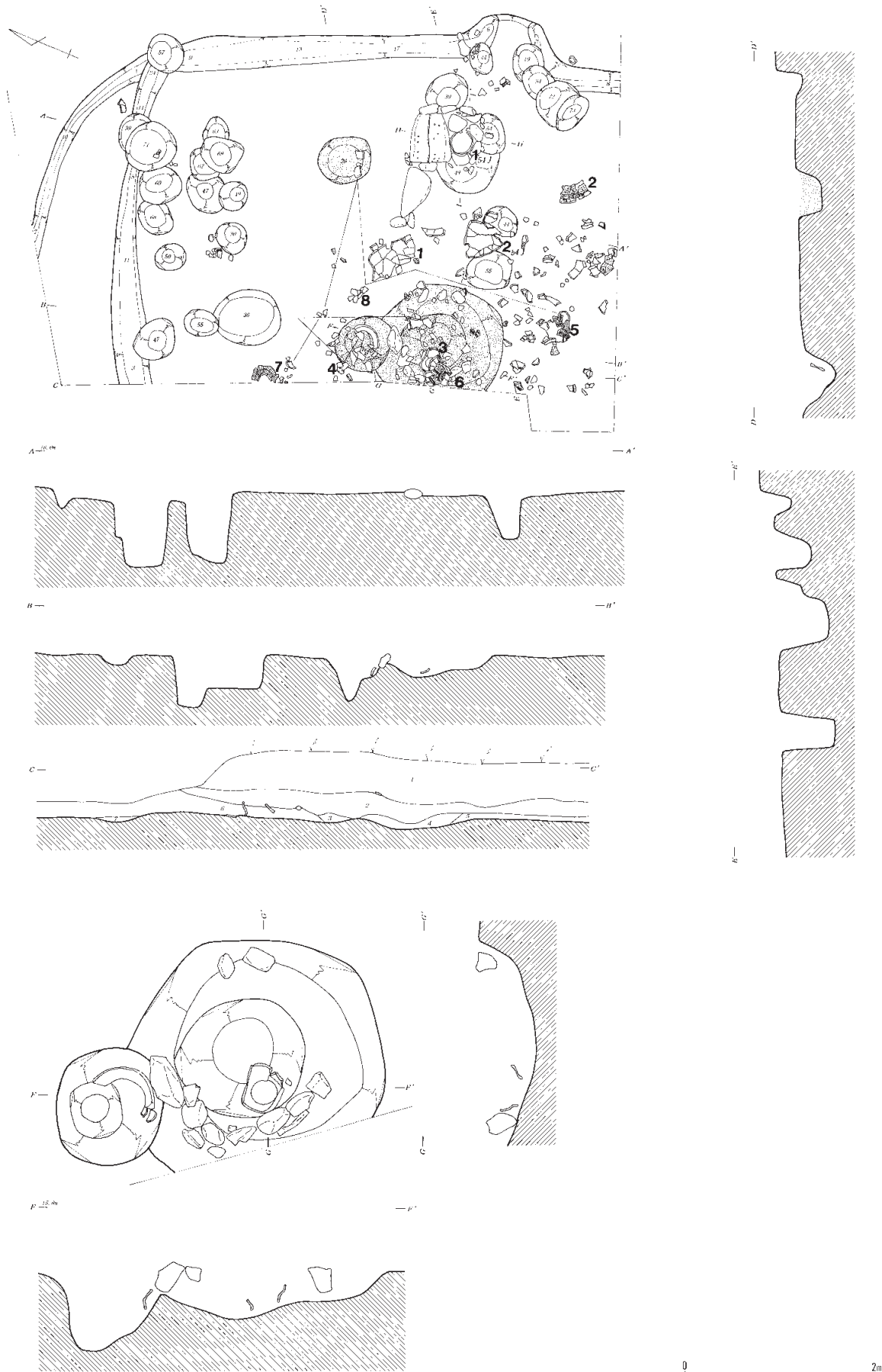
第347図28～30は土器片鏃。28・30は長軸に、29は短軸に刻みが加えられる。重量は28が21.4g、29が11.7g、



第152図 53号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第153図 53号住居跡出土遺物 2 (1/3)



第154图 54・55号住居跡 (1/60)、55号住居跡炉跡 (1/30)

30が61gを測る。

第156図1、第318図14、第337図1を除き、覆土中からの出土。

55号住居跡（第154図）

〔位置〕 26地点。

〔構造〕 54 J に切られる。両住居跡の重なり合いにより詳細は不明。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）不明（壁溝）不明。（床面）全体に軟弱である。（炉） 2基検出された。南側の炉は石囲埋甕炉で、深鉢形土器の口頸部を埋設している。不明×130cm・深さ20cmの掘り込みをもつ。北側の炉は深鉢形土器の上半部を埋設した埋甕炉で、60×55cm・深さ20cm前後の掘り込みをもつ。掘り込み内にある深さ40cmのピットは埋設土器を破壊していて、54 J の柱穴の可能性がある。2基の炉の前後関係については、南側の炉の礎が北側の埋設土器の上に置かれているようであり、北から南への炉の移動が考えられる。（柱穴） 54 J との関連があり、主柱穴の特定はできなかった。

〔覆土〕 54 J との分層ができなかった。

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。遺物を多く含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を含む。下位には焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 6層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 7層 黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 上層からの出土量が多い。

〔時期〕 加曾利 E II 式期。

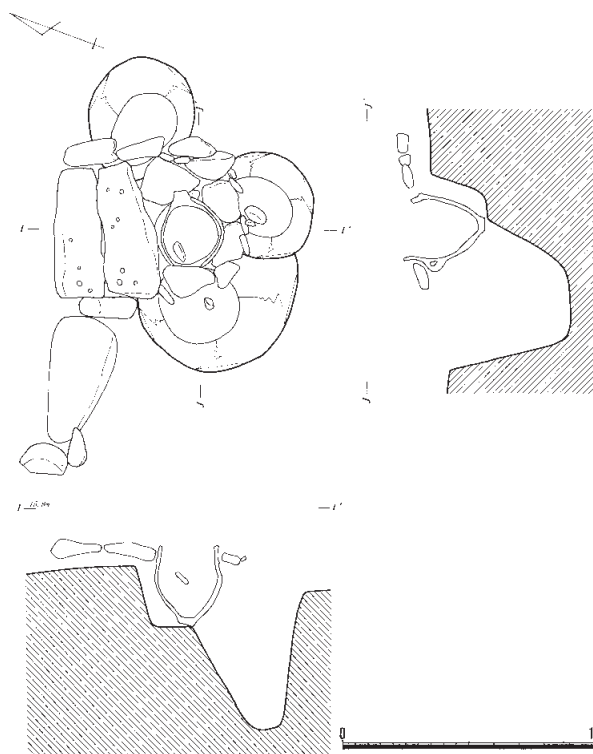
55号住居跡出土遺物（第158・159図、第341図7）

第158図1は胴部上位以上、1/2程の破片からの推定復元。ゆるいキャリパー形を呈する。2本一對の隆帯を2段巡らせて口縁部・頸部・胴部を画する。口縁部はLの撚糸文を縦位に施して地文とし、連結部に渦巻文を配する長方形の区画が隆帯によって作られる。頸部は無文帯になる。胴部は条線を地文とし、2本一對の隆帯と蛇行する隆帯を交互に垂下させる。色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

2・3はキャリパー形を呈し、相似た文様構成になる。

2はRLの単節斜縄文を地文とする。3条の沈線を巡らせて口縁部と胴部を画する。口縁部は2本一對の隆帯により、連結部に渦巻文を配した半円形の区画が作られる。胴部は3条一組の沈線による十字状の懸垂文、蛇行する沈線の懸垂文が施される。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3は南側の炉に埋設されていた土器。縦位の条線を地文とする。隆帯を巡らせて口縁部と胴部を画する。口縁部には2本一對の隆帯により楕円形の区画が6単位作られ、区画の連結部には渦巻文が配される。胴部は2本一對の



第155図 54号住居跡埋甕（1/30）

沈線が口縁部の渦巻文の位置に垂下する。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には細礫を多く含む。

4は頸部が僅かにくびれる土器。LRの単節斜縄文を地文とする。頸部に2条の沈線を巡らせて口縁部と胴部を画する。口縁部には2条一対の沈線により、楕円形の区画が8単位作られる。胴部には3条一組の沈線を波状に巡らせ、一部2条一対の沈線が頸部から垂下して連結する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は北側の炉に埋設されていた土器。無文の口縁部は僅かに内湾しながら開く。頸部には2本の隆帯が巡り、胴部は縦位の条線を地文として2本一対の隆帯と蛇行する隆帯が交互に垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

6は曽利系の土器。胴部上位に膨らみをもち、頸部がくびれ、口縁部は僅かに外湾しながら開く。口唇部は平坦



第156図 54号住居跡出土遺物1 (1/4)

に作出される。口縁部には半截竹管による重弧文が5単位施され、重弧文の連結部には蛇行する紐状の隆帯が垂下する。口唇端部には竹管の外側を押捺したと思われる刻みが連続してつけられ、その上に沈線を巡らす。頸部には交互刺突による鋸歯文が2条巡る。胴部には半截竹管による縦位の集合する沈線が施され、蛇行する紐状の隆帯が9本垂下する。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

7は胴部上位が強く膨らみ、頸部が「く」字状にくびれ、口縁部は内湾しながら開く。口唇部下に1条、頸部に2条、交互刺突による鋸歯文が巡る。口縁部は斜位、胴部は縦位に半截竹管による集合する沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8は有孔罅付土器。1/5程の破片からの推定復元のため、径の大きさは正確さを欠く。口縁部は内傾するが罅釜状の器形をなす。罅は断面三角形の隆帯の貼り付けで、円孔が穿たれる。色調は褐色（7.5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

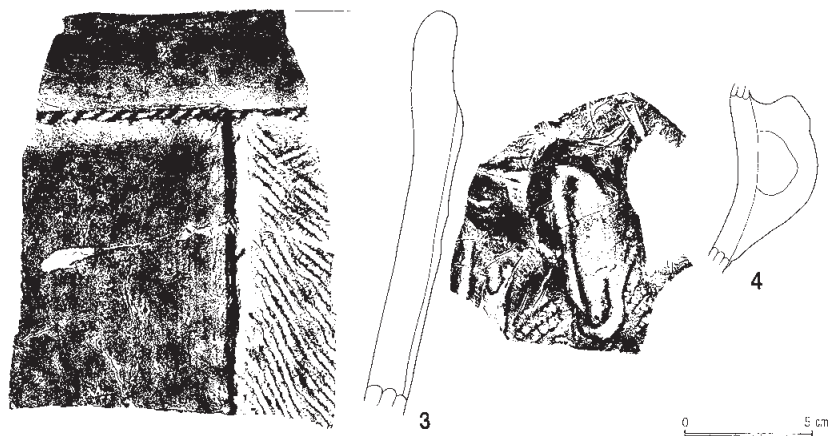
第159図9・10はキャリパー形の器形が大幅に崩れた土器。口縁部に隆帯による渦巻文を貼付し、楕円形の区画を作る。9はLの撚糸文を地文とし、3条の沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。10はLRの単節斜縄文を地文とする。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

11～15は波状口縁の土器。11はRLの単節斜縄文を地文とし、なぞるようにして作られた2本一對の隆帯が貼付される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。12はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線による区画が作られる。色調は橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。13は口唇部に沿って2本一對の隆帯を貼付する。頸部には2条の沈線を巡らせて口縁部と胴部を画する。RLの単節斜縄文を地文とし、波頂部下には沈線による渦巻文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。14は条線を地文とする。口唇部に沿って2条の沈線を巡らせ、波頂部下には沈線による渦巻文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を多く含む。15はLの撚糸文を地文とする。波頂部から蕨手状の沈線が垂下する。沈線による区画が作られるようである。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

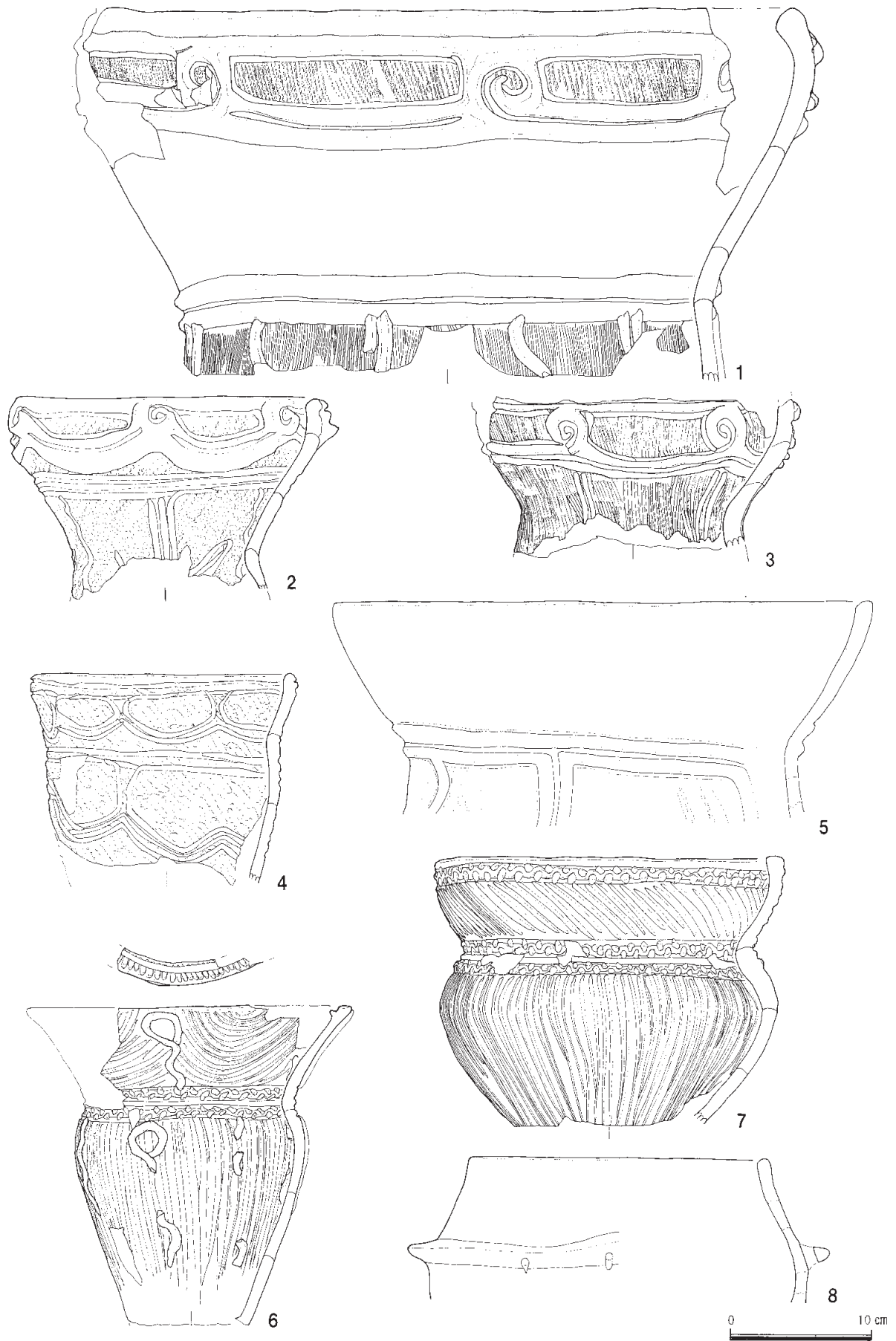
16は口縁部に沈線を巡らせ、口唇部との間に円形刺突文が加えられる。以下、条線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

17は曾利系の土器。口縁部には斜位の集合する沈線を施し、頸部には波状の隆帯が巡らされる。口縁部内面には隆帯が横位に貼付され、口唇部との間には斜位の集合する短沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

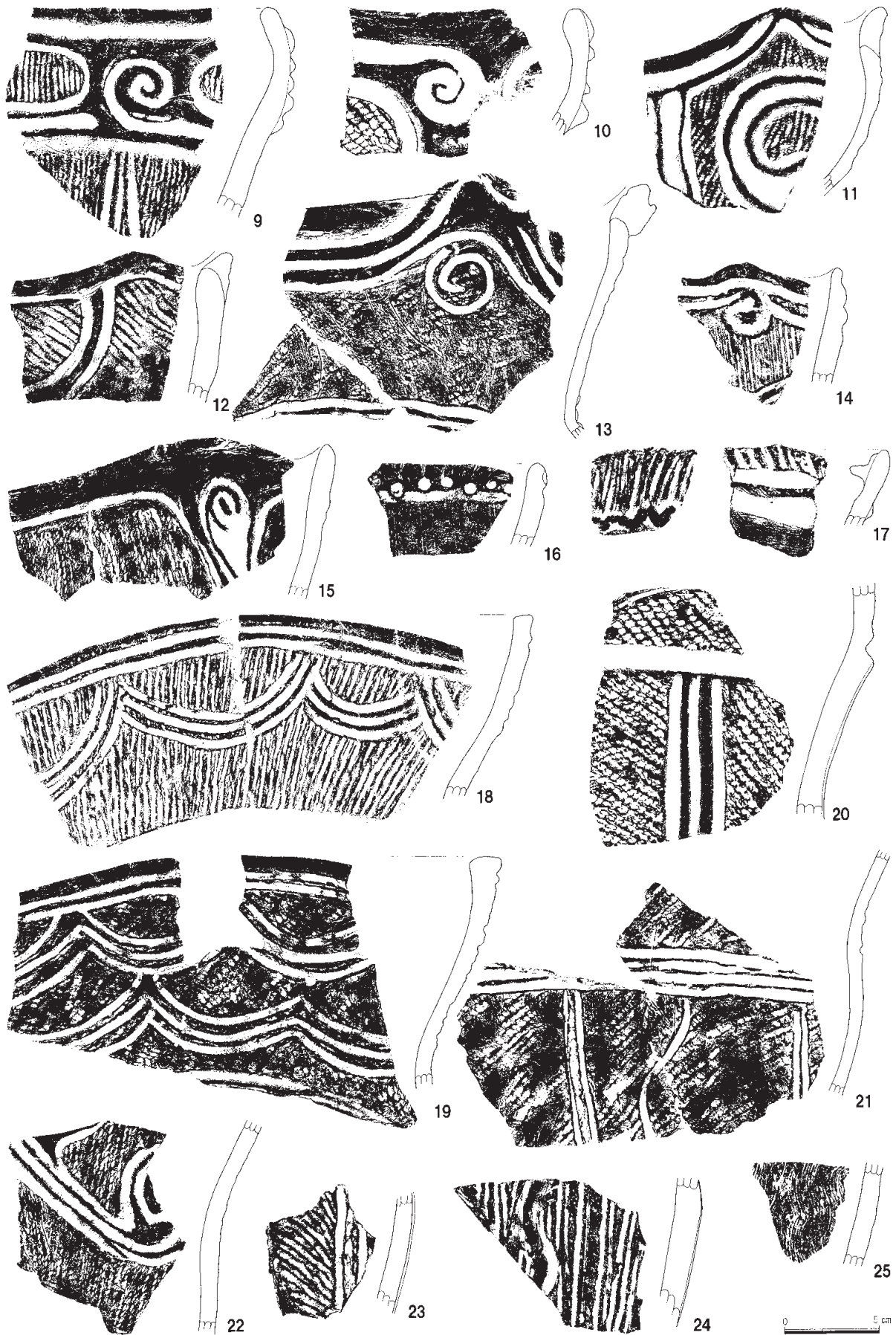
18・19は連弧文系の土器。18は条線、19はLRの単節斜縄文を地文とし、口縁部には2条の沈線が巡る。3条一



第157図 54号住居跡出土遺物2 (1/3)



第158図 55号住居跡出土遺物1 (1/4)



第159図 55号住居跡出土遺物 (1/3)

組の沈線による連弧文が施される。18の色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。19の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

20はRLRの複節斜縄文を地文とする。横走る沈線から3条の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

21はRLの単節斜縄文を地文とする。3条の沈線が巡らされ、2条一對の沈線、蛇行する沈線が垂下する。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

22はLの撚糸文を地文とし、3条一組の沈線により区画が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

23はLRの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

24は半截竹管による集合する沈線を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

25は蛇行する条線が施される。色調は褐色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第341図7は縦長の剥片。表面は全面に礫面を残す。8g。硬砂岩製。

第158図3・5を除き、覆土中からの出土。

56号住居跡（第160図）

〔位置〕26地点。

〔構造〕319・322Dに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）遺構確認面を床面とするため、検出することができなかった。（壁溝）上幅14～20cm・下幅10cm前後・深さ7cm前後。北側のみ一部確認する。（床面）全体に軟弱である。（炉）75×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cm前後の掘り込みをもつ。（柱穴）比較的多く検出されているが分布に偏りがみられ、深度のあるピットもあるが、主柱穴を特定することはできなかった。（埋甕）住居西側に位置し、深鉢形土器の胴部を埋設している。径34cm・深さ18cmのほぼ円形の掘り込みをもつ。

〔覆土〕確認面を床面とするため詳細は不明。

〔遺物〕非常に少ない。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

56号住居跡出土遺物（第161図、第333図7）

第161図1は埋甕として埋設されていた土器。縦位の条線を地文とし、3条一組の沈線による連弧文が2段施される。色調は褐色（7.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第333図7は石皿片。片面が使いこまれてくぼむ。865g。緑泥片岩製。

第161図1を除き、覆土中の出土。

57号住居跡（第162図）

〔位置〕29I地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）425×400cm。（主軸方位）N—75°—W。（壁高）19～42cmを測り、40°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）部分的に硬化面が認められるが、全体に軟弱である。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。耕作により破壊されていて、その際に土器が出土したという伝聞がある。埋甕炉であった可能性が大きい。径40cm・深さ10cmの円形の掘り込みが残されていた。（柱穴）深度のある4本が主柱穴と思われる。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む暗褐色土を基調とするが、耕作による攪乱が著しい。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

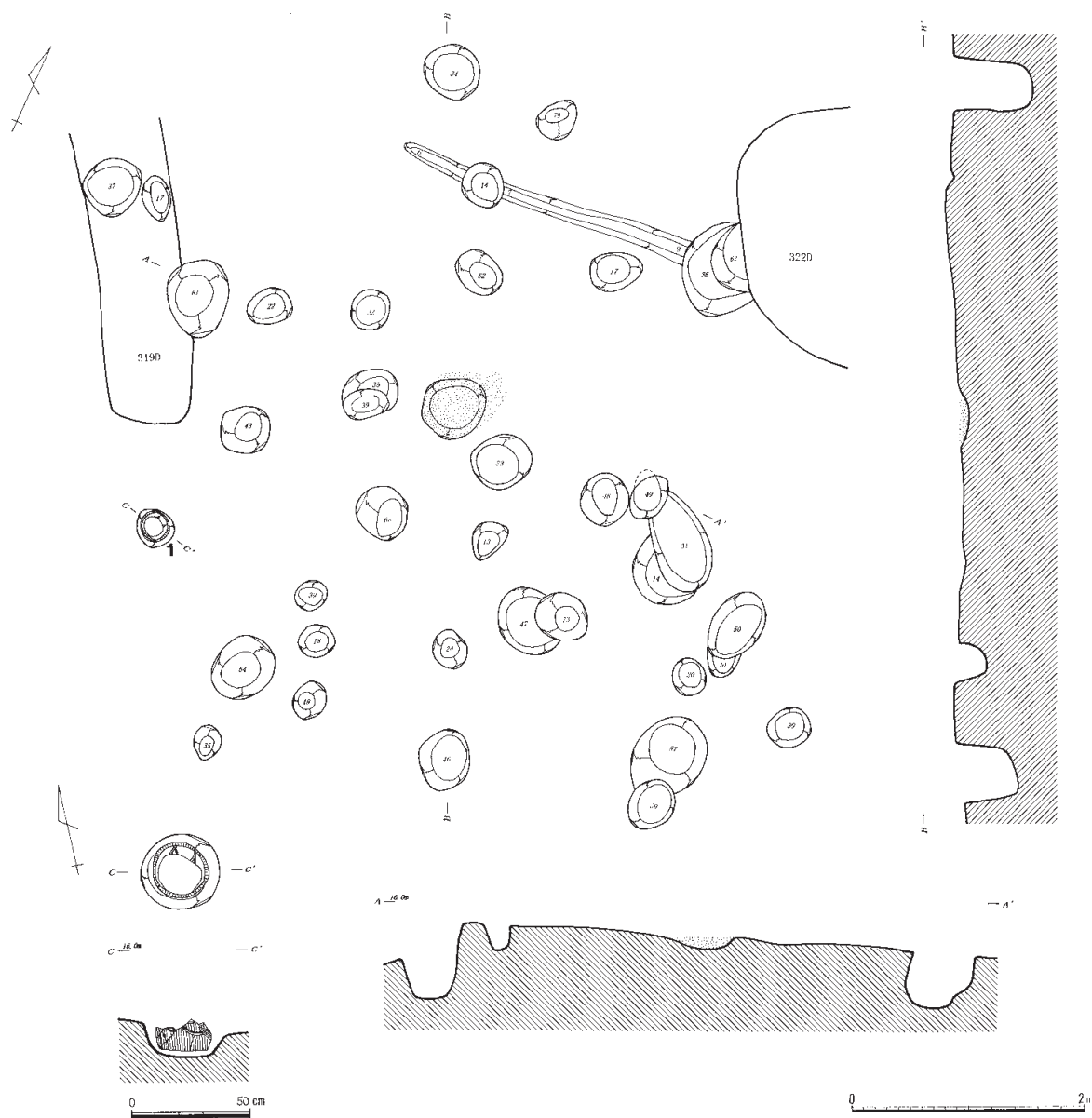
57号住居跡出土遺物（第163・164図）

第163図1は塊状の土器。底部から内湾しながら立ち上がり、僅かな稜をもって口縁部に達する。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には細礫を多く含む。床面上の出土。

第164図2は刻みが加えられた隆帯が貼付され、以下、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR 5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3は刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付され、以下、沈線が縦位・斜位に施される。色調はにぶい赤褐色（5 YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

第163図1を除き、覆土中の出土。



第160図 56号住居跡（1/60）、埋甕（1/30）

58号住居跡（第165図）

〔位置〕 30地点。

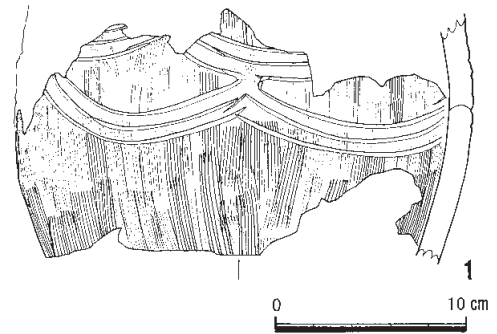
〔構造〕 大部分が調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）11cm前後を測り、40°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 5層 黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。



第161図 56号住居跡出土遺物 1（1/4）

58号住居跡出土遺物（第166図）

1は内湾する口縁部が無文になる。胴部は条線を地文とし、頸部には波状に隆帯が巡り、2条一對の沈線による懸垂文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

2はキャリパー形土器。隆帯による区画内にLRの単節斜縄文がみられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3はRLの単節斜縄文を地文とし、波状沈線文が巡る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

4は条線を地文とし、3条の沈線が横走する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は2条の沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

6はLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

いずれも覆土中の出土。

59号住居跡（第167図）

〔位置〕 30地点。

〔構造〕 北側・南側調査区外。64Jを切る。342Dに切られる。（平面形）不明。（規模）不明×740cm。（主軸方位）不明。（壁高）21~33cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅18~30cm・下幅5~20cm・深さ4~12cmを測る。（床面）全体に軟弱である。南側床面が部分的に焼けている。（炉）住居中央から僅かに東に偏って位置する。80×65cm・深さ15cmを測る楕円形の地床炉。北東側はピットで破壊されている。（柱穴）比較的多く検出されているが、深度のある2本が支柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒色土。後世のピット。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 6層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 7層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

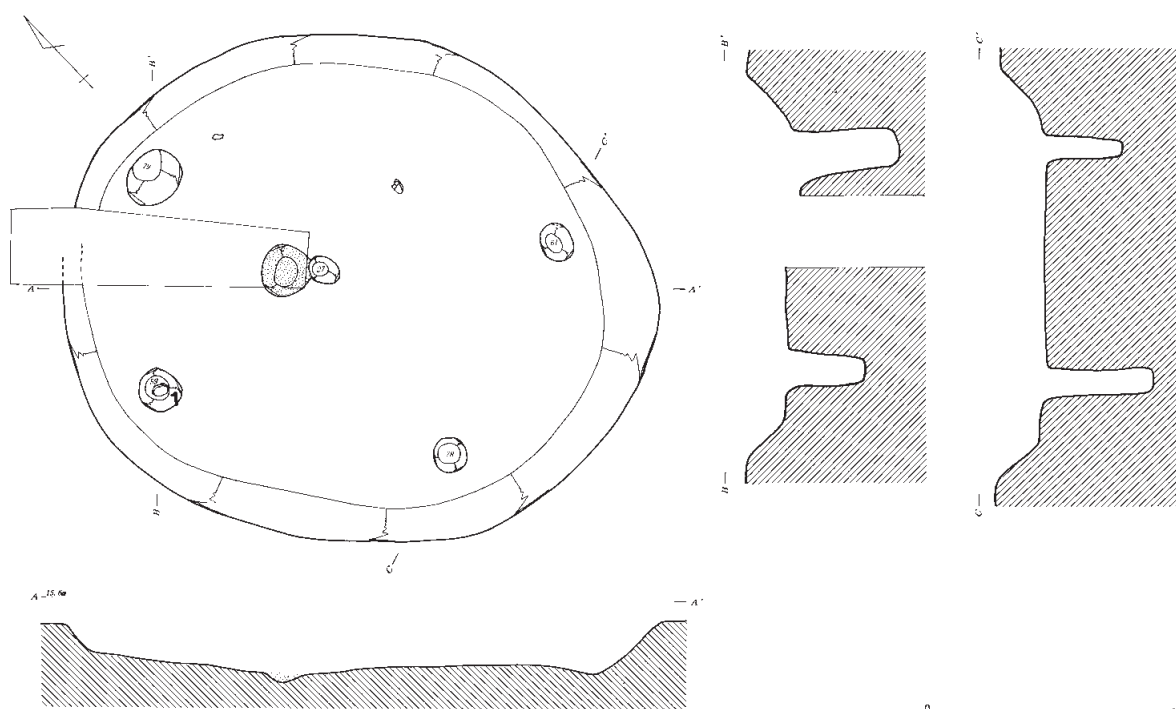
- 8層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 9層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 10層 暗黄褐色土。ロームブロック。

〔遺物〕 覆土中からの出土が大部分であるが、炉上及び南側の床面上から遺存状態のよい土器が検出された。

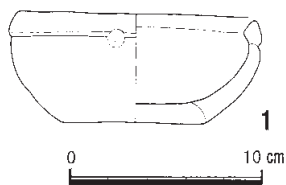
〔時期〕 加曾利E II 式期。

59号住居跡出土遺物（第168・169図、第319図1・2、第329図8、第341図8、第347図31～33）

第168図1は炉上から出土。土器下半は被熱のための痕跡が顕著である。キャリパー形の崩れた器形である。頸部に隆帯を巡らせて口縁部と胴部を画する。口縁部の主文様は隆帯によりなされる。渦巻文を6単位設け、これを基点として三角形や半円形の区画を作る。6単位の渦巻文のうちの2ヵ所には、上部に刺突文が加えられる。区画内には集合する沈線が充填される。胴部には1単位7条以上と思われる条線を蛇行して施して地文とする。口縁部



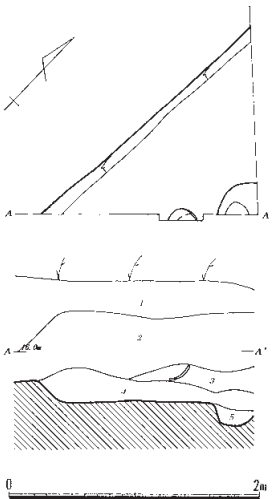
第162図 57号住居跡 (1/60)



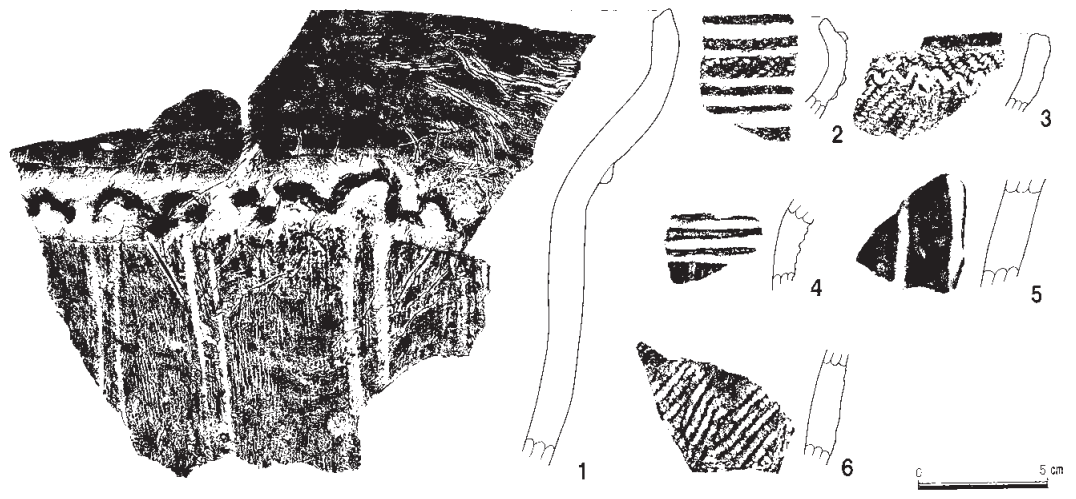
第163図 57号住居跡出土遺物1 (1/4)



第164図 57号住居跡出土遺物2 (1/3)



第165図 58号住居跡 (1/60)



第166図 58号住居跡出土遺物 (1/3)

の渦巻文下に3条一組の沈線による懸垂文が施され、その間には蛇行する沈線が垂下する。色調は口縁部が灰褐色(7.5YR4/2)、胴部が橙色(7.5YR6/6)を呈する。胎土には細礫を多く含む。

2はキャリパー形の土器。LRの単節斜縄文を地文とする。口縁部は隆帯による渦巻文を付加した楕円形・半円形の区画が6単位作られる。胴部は3条一組の沈線が6単位垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第169図3は半截竹管による集合する沈線を地文とする。口縁部には2本一對の隆帯による渦巻文を基点とする区画が作られる。渦巻文下には蛇行する沈線の懸垂文がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4～6はキャリパー形土器。4はLの撚糸文を地文とし、隆帯により区画が作られる。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。5はRLRの複節斜縄文を地文とし、隆帯による渦巻文を基点とし区画が作られる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。6はLRの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯による長楕円形の区画が作られる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

7・17・18は連弧文系の土器。7は半截竹管により文様が描かれる。集合する沈線を地文とし、弧線が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。17・18はLの撚糸文を地文とし、2条一對の沈線により連弧文が施される。17・18共に色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

8は条線を地文とする。沈線を4条巡らせ、中央の沈線間には半截竹管による「ハ」字状に刺突文が横位に連続して加えられる。沈線下には僅かに縦位の刺突文がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

9・20～23は曽利系の土器。9は口縁部内面が折り返し状になり肥厚する。口縁部外面には半截竹管による斜位の平行する沈線が施される。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。20は上部に縦位の細沈線、下部に横位の沈線が集合して施され、蛇行する隆帯・半截竹管による並列する刺突が加えられた隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。21は縦位に集合する沈線が施され、波状の隆帯が貼付される。色調は褐灰色(10YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。22・23は同一個体か。多条の沈線が弧状に施され、刺突が加えられた2本の隆帯が垂下する。色調は褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

10はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯により区画が作られる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を

呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

11はLRの単節斜縄文を地文とする。文様は半截竹管による多条の沈線により描かれる。横走る沈線下には懸垂文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

12はRLの単節斜縄文を地文とする。隆帯による区画が作られ、沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

13はLRの単節斜縄文を地文とし、直行・蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

14はRLの単節斜縄文を地文とする。2条の沈線が垂下し、沈線間は磨り消される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

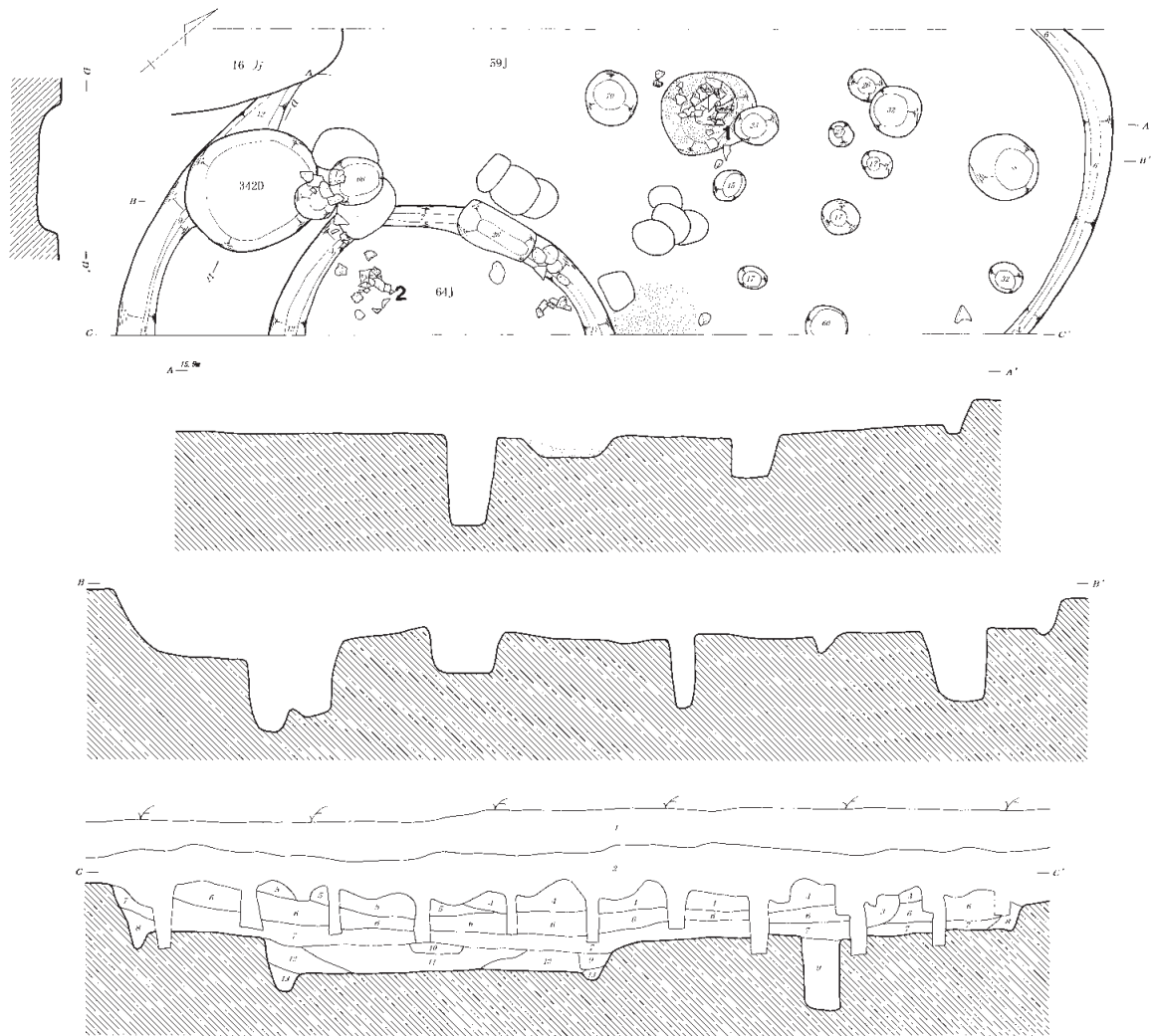
15はLRの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による2条の沈線が弧状に施される。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

19は蛇行する条線が施される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第319図1・2は短冊形の打製石斧。1は頭部側を欠く。横長の剥片を使用。刃部は斜刃状。192.1g。硬砂岩製。2も頭部側を欠く。横長の剥片を使用。刃部は平刃状。106.9g。硬砂岩製。

第329図8は磨製石斧。刃部側を欠く。200g。硬砂岩製。

第341図8は凹基の打製石鏃。0.7g。黒曜石製。



第167図 59・64号住居跡、342号土坑（1/60）



第347図31～33は土器片錘。31・32は短軸、33は長軸に刻みが加えられる。重量は31が22.5g、32が16.1g、33が28.3gを測る。

第168図1を除き、覆土中の出土。

60号住居跡（第170図）

〔位置〕30地点。

〔構造〕大部分が調査区外にある。南側で壁溝が二本検出され、拡張されている可能性がある。（平面形）不明。（規模）不明×660cm。拡張前不明×560cm。（主軸方位）不明。（壁高）3～13cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅20～35cm・下幅10～23cm・深さ6～13cm、拡張前は上幅20～25cm・下幅10cm前後・深さ3～21cmを測る。（床面）硬質ローム層まで掘り下げて床面としているため良好である。（炉）住居拡張に伴う炉の移動が考えられる。拡張後の炉は100×90cmの長方形を呈する石囲埋甕炉で、礫を二重に巡らせ長方形の囲いを作り、石囲い内の西側に深鉢形土器の上半部を埋設している。不明×100cm・深さ20cmの掘り込みを持つ。拡張前の炉は石囲い外の南側に位置する。深鉢形土器の上半部を埋設している。（柱穴）比較的多く検出するが、ほとんどが後世のものである。深度のある3本が支柱穴の一部となろうか。

〔覆土〕ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。

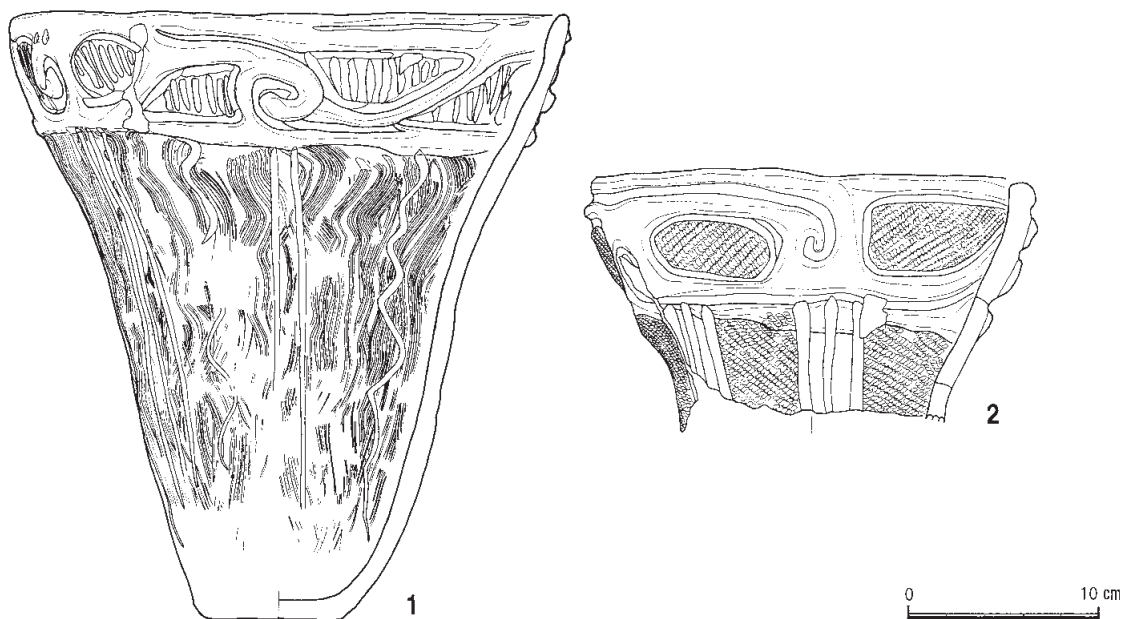
〔遺物〕覆土中からの出土が大部分である。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

60号住居跡出土遺物（第171・172図、第319図3～10、第334図1、第336図1・6、第337図3、第347図34～36）

第171図1は口縁部1/2と胴部下位を欠く。胴部中位に膨らみをもち、僅かに外湾しながら口縁部に至る。口縁部上には山形の突起が1ヵ所確認できた。胴部中位に2条一対の沈線を巡らせて上下に画する。RLの単節斜縄文を地文とする。土器上部上半は口唇部下に2条の沈線を巡らせ、2条一対の沈線による連弧文が施される。下半は連弧文の連結部を頂点とする三角文が1条の沈線によって描かれる。土器下部は1条の沈線により「∩」字状の区画がなされ、区画内には頭部に渦巻文が付加された蛇行する沈線が垂下する。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は石囲炉に隣接して埋設されていた土器。キャリパー形を呈する。口縁部には隆帯による渦巻文が付加された



第168図 59号住居跡出土遺物1（1/4）

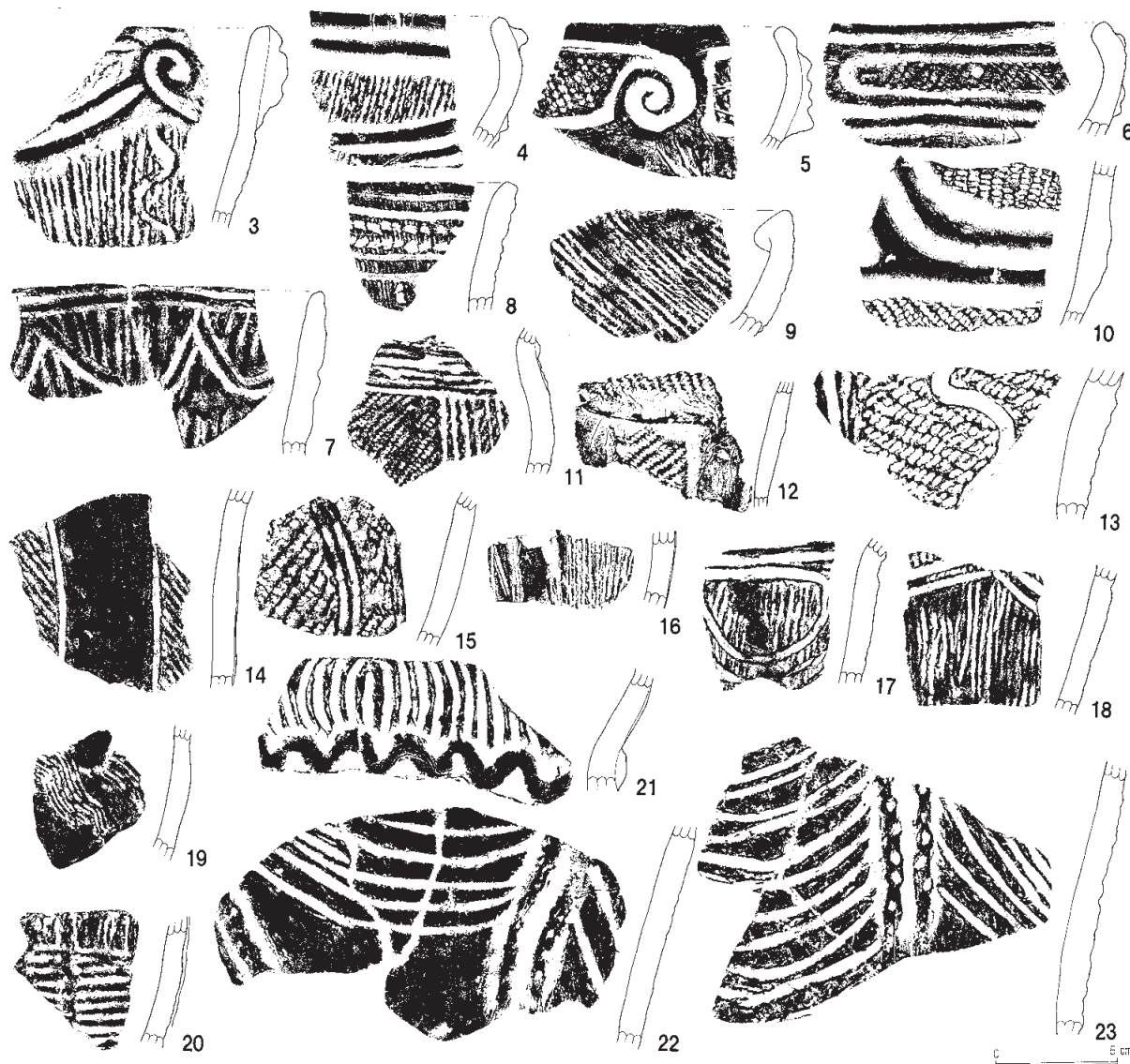
区画が作られる。区画内は交互の刺突文が充填される。胴部は条線を地文とし、図示できなかった部分があるが、3条一組の直行する沈線と、1条ないし2条一對の蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・片岩を含む。

3は石囲炉内に埋設されていた。連弧文系の土器で、胴部中位がくびれ、上半は外反し、下半は膨らむ。条線を地文とする。くびれ部に2条の沈線が巡り、上半には連弧文が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

4は碗状の鉢形土器。1/2弱程の破片からの推定復元。口唇部下に凹線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

5は碗状の小型の土器。1/3程の破片からの推定復元。口唇部上に沈線により渦巻文が描かれた半円状の突起が付く。口唇部下には沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第172図6・7はキャリパー形の土器。6は口縁部に隆帯による渦巻状・楕円形の区画が作られる。頸部は無文帯になり、太沈線により胴部と画する。口縁部の区画内、胴部の縄文はLRLの複節斜縄文である。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。7はLRの単節斜縄文を地文とし、隆帯により長楕円形の区画が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。



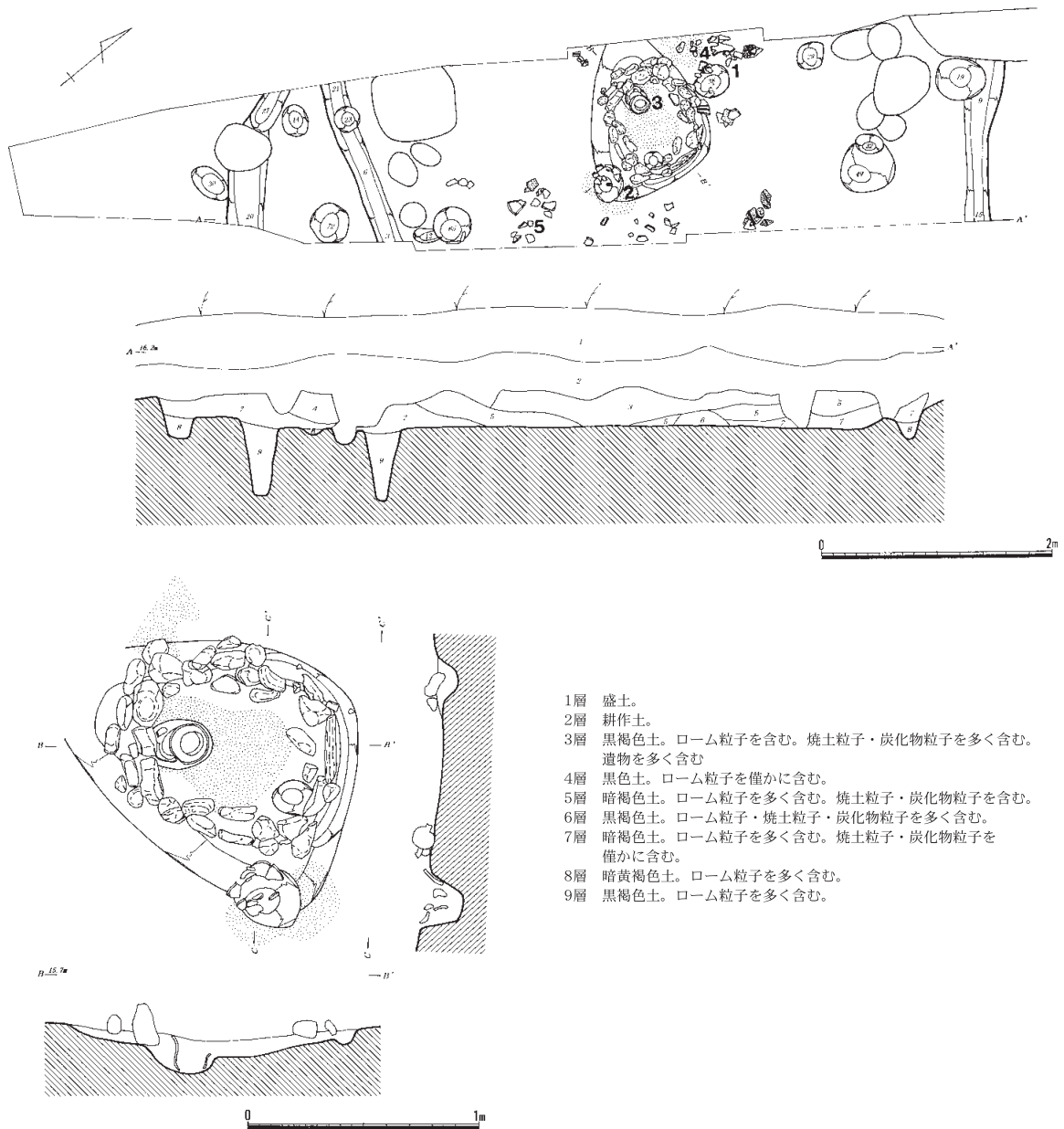
第169図 59号住居跡出土遺物2 (1/3)

8は口縁部に太沈線を巡らせて口唇部と画し、その間に連続した円形刺突文を2段施す。以下、RLの単節斜縄文。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

9は口唇部上に山形の突起が付けられ、その外周から隆帯が弧状に貼付される。全面に刻み状の沈線が施され、突起下には蕨手状の沈線文が配される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10・12・16は蛇行する条線を地文とする。10は2条一対の沈線により連弧文が描かれ、沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。12の色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。16は直行・蛇行する懸垂文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。内面には炭化物が付着する。

11・17は縦位の条線を地文とする。11は口縁部に沈線が巡る。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。17は内皮まで深く押しつけた半截竹管による沈線が巡らされ、同様の手法による蛇行する沈線が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。



第170図 60号住居跡（1/60）、炉跡（1/30）

13は曽利系の土器。小波状口縁を呈する。太沈線を弧状に集合して施し地文とする。波頂部には隆帯による渦巻文が貼付され、そこから蛇行する隆帯が垂下する。口縁部内面は、波頂部に沈線による渦巻文が配され、それを囲むように縦位・斜位の集合する沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

14はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線を垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

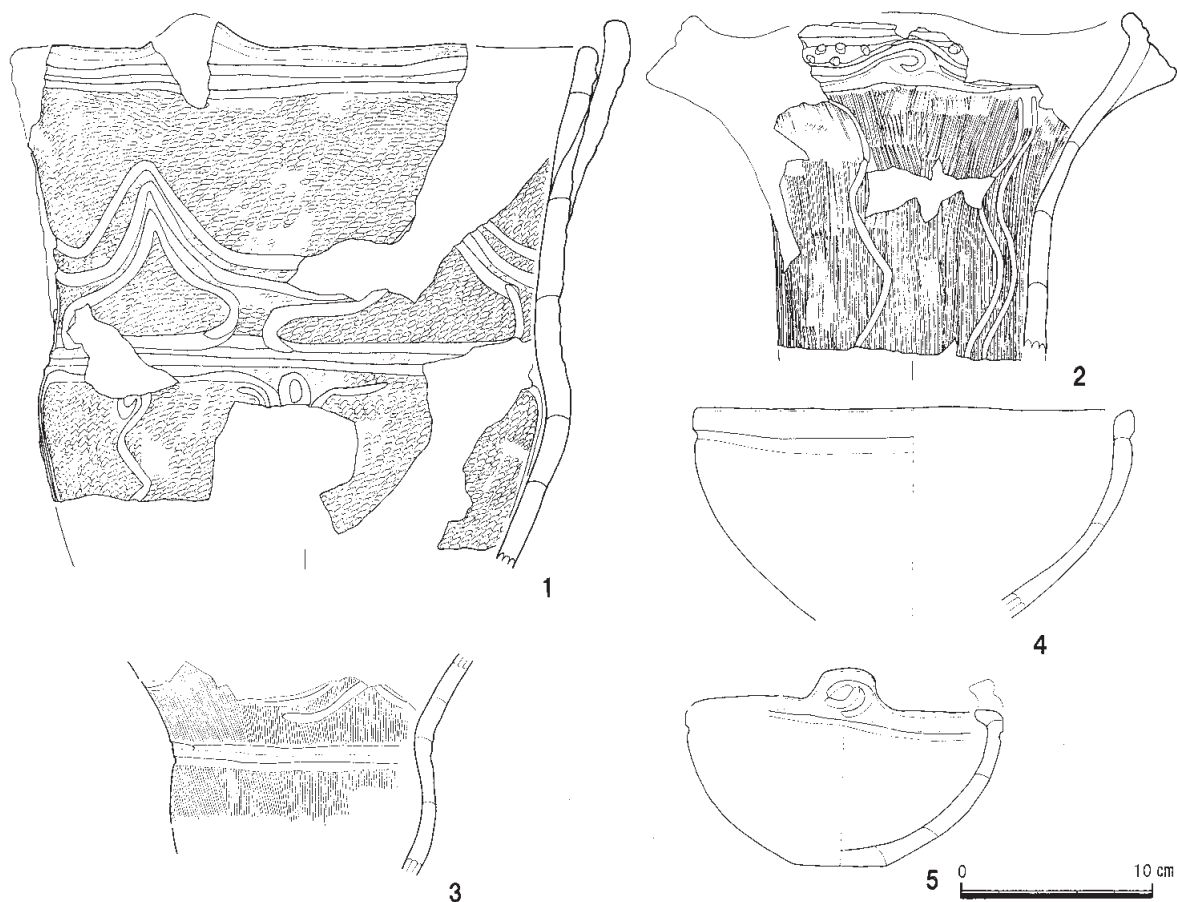
15はLの撚糸文を地文とする。波状の隆帯を巡らせ、蛇行する隆帯が垂下する。色調は褐灰色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

18は鉢形土器か。口縁部に太沈線が巡る。色調はにぶい黄褐色（10YR6/4）を呈し、胎土には片岩と思われる礫片を多く含む。

第319図3～10は打製石斧。3・4は分銅形。共に横長剥片を使用。3の刃部は平刃状。48.7g。凝灰岩製。4は刃部を欠く。表面に礫面を残す。100.7g。硬砂岩製。5～10は短冊形。5の刃部は円刃状。表裏面刃部には線条痕と磨耗痕を認める。94.1g。石灰岩製。6は刃部側を欠く。側縁には敲打痕を残す。120.5g。硬砂岩製。7は頭部側を欠く。横長剥片を使用。刃部は円刃状。183.5g。雲母片岩製。8は刃部・頭部を欠く。横長剥片を使用。表面には礫面を残す。側縁には敲打痕を残す。緑岩製。10は頭部側を欠く。刃部は平刃状。表裏面刃部に磨耗痕を認める。157.9g。硬砂岩製。

第334図1、第336図6は石皿片。1は凹石と兼用。使いこまれ片面がくぼむ。1,460g。花崗岩製。6は両面とも平坦になる。5,500g。石英閃緑岩製。

第336図1は凹石。両面に1ヵ所ずつのくぼみを有する。1,420g。礫岩製。

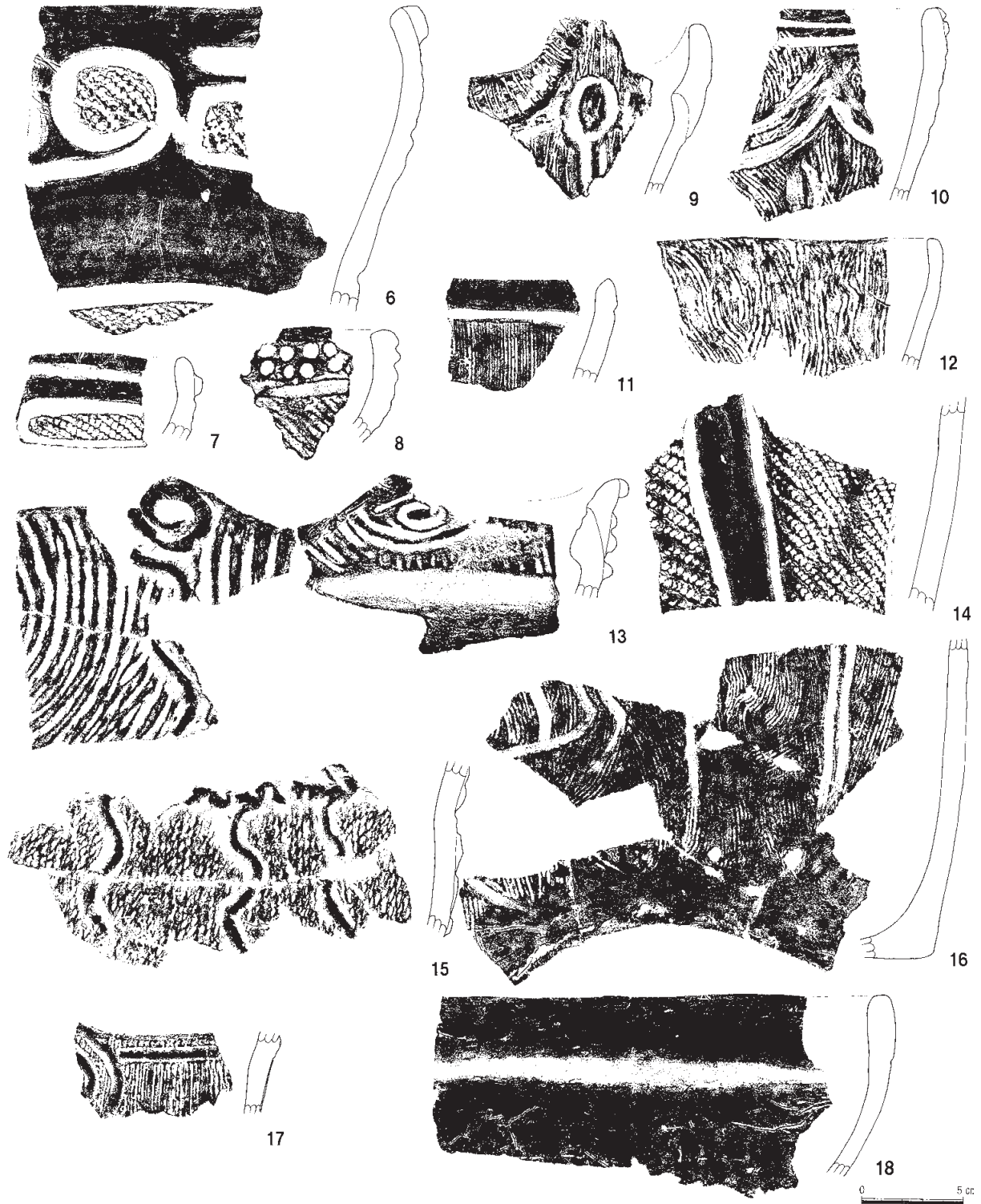


第171図 60号住居跡出土遺物1 (1/4)

第337図3は有溝砥石。4条の溝が残されている。148g。緑泥片岩製。

第347図34~36は土器片錘。いずれも長軸に刻みを加えられる。重量は34が27.5g、35が21.2g、36が27.8gを測る。

第171図2・3を除き、覆土中からの出土である。



第172図 60号住居跡出土遺物2 (1/3)

64号住居跡（第167図）

〔位置〕 30地点。

〔構造〕 59 J に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）約60cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅18～30cm・下幅5～10cm・深さ7cm前後を測る。（床面）全体に平坦で一部硬化面が認められた。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。

〔覆土〕

11層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。

12層 明褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

13層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

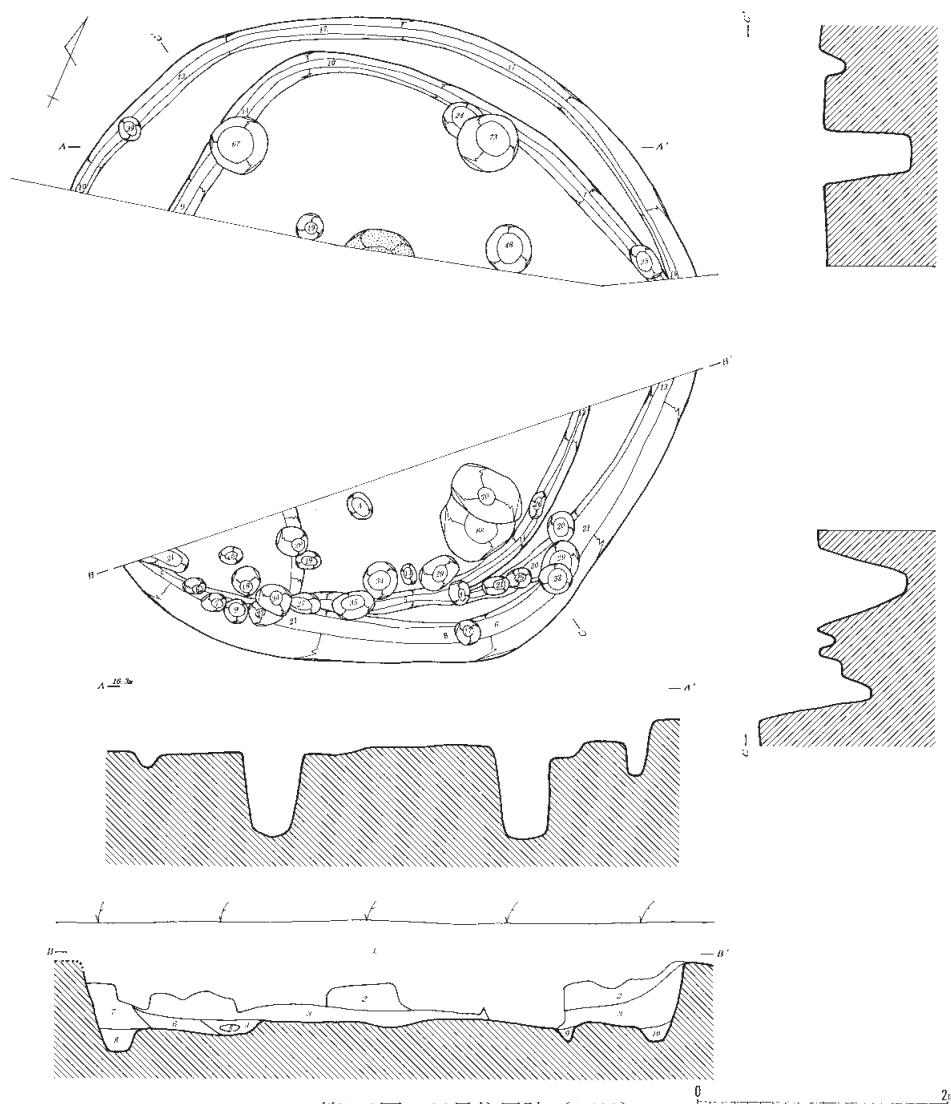
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

66号住居跡（第173図）

〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 二次に分けて調査したもので、中央に未掘部分を残す。壁溝が二重に巡る拡張住居である。（平面形）不



第173図 66号住居跡（1/60）

整楕円形。(規模) 515×500cm。拡張前は440×370cm (主軸方位) N—70°—E。(壁高) 27～46cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅15～40cm・下幅5～15cm・深さ6～21cm、拡張前は上幅15～20cm・下幅15～20cm・深さ5～12cmを測る。(床面) 北側に硬化面が一部認められるが、南側は軟弱である。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。不明×55cmの地床炉で8cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 深度のある4本が主柱穴の一部と思われる。南壁下には壁柱穴状に比較的浅いピットが並ぶ。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐灰色土 (10YR4/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 褐灰色土 (10YR4/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。硬質。
- 5層 灰赤色土 (2.5YR4/2)。焼土ブロック。
- 6層 褐灰色土 (10YR4/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多く出土した。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

66号住居跡出土遺物 (第347図37)

37は土器片錘。長軸に刻み加えられる。24.5g。

他は『志木市遺跡群11』に掲載。

67号住居跡 (第174図)

〔位置〕 33 I 地点。

〔構造〕 南側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明×660cm。(主軸方位) 不明。(壁高) 7～61cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅20cm前後・下幅8cm前後・深さ6～12cmを測る。北側は斜面部分にあたり、検出することができなかった。(床面) 全体に軟弱である。壁際に被熱のため赤化している部分が認められる。(炉) 80×70cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ6cm前後の掘り込みをもつ。東側の掘り込み外に赤化している部分を認める。(柱穴) 壁溝内に深度のあるピットが認められ、壁柱穴状の形態をとる。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。軟質。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・炭化材小片を含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

〔遺物〕 南壁際の覆土中から多量の土器片が出土した。

〔時期〕 堀之内 I 式期。

〔所見〕 覆土中に焼土・炭化物が多く含まれ、床面に広く被熱の痕跡が認められ、焼失家屋の可能性がある。

67号住居跡出土遺物

(第175～177図、第319図11～15、第329図9、第334図2、第336図7、第341図9～13、第351図2、第352図2)

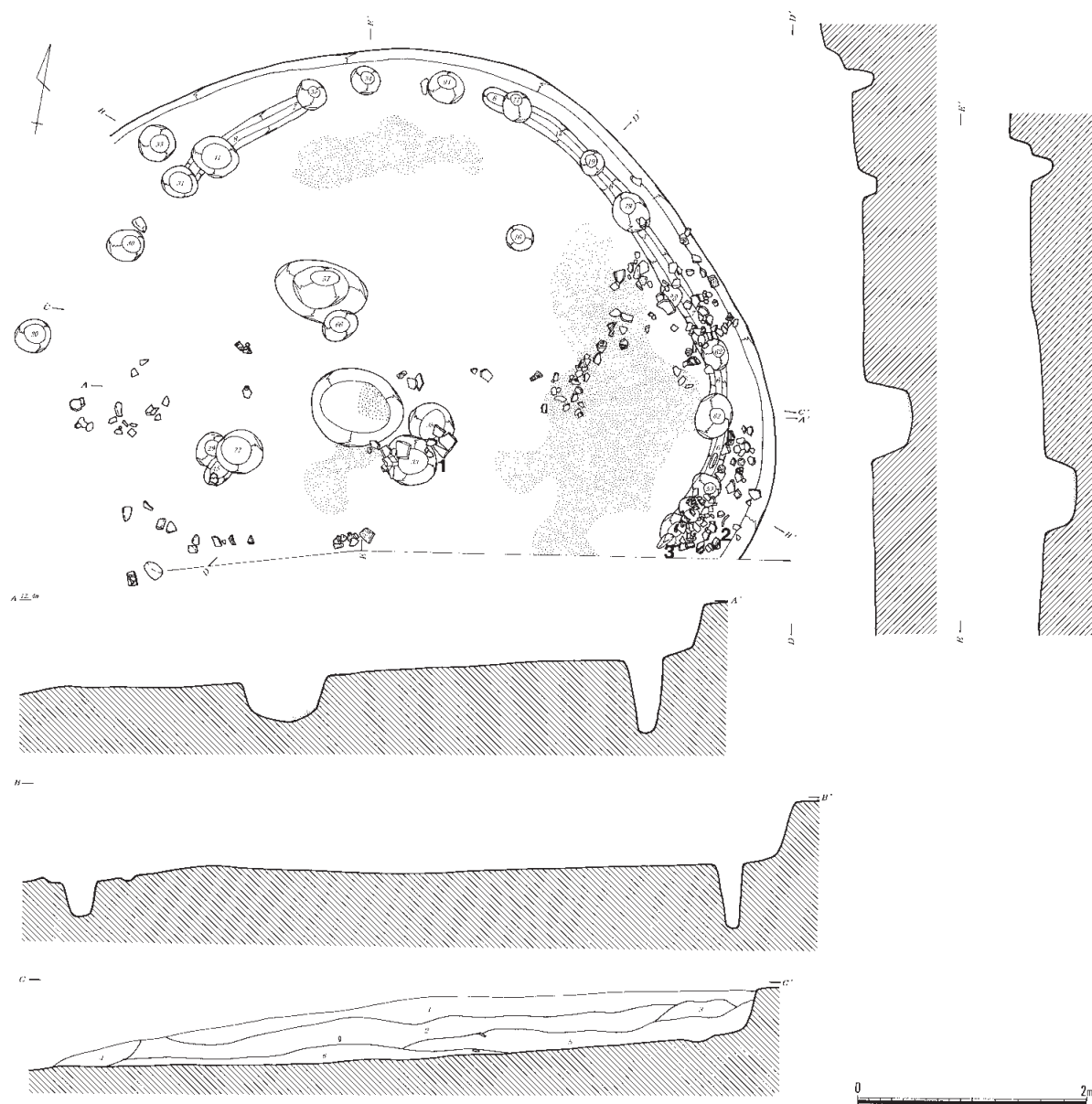
第175図1は底部から直線的に開く。口唇部上に台形状の突起が2ヵ所確認できた。突起には円形竹管文・沈線文が加えられる。口唇部下には2条の沈線を巡らせ、隆帯状になった沈線間には刻みが加えられる。土器上半部にはLRの単節斜縄文を施して地文とする。複数の沈線・蕨手状の沈線を垂下させ、対角線上に沈線を施す。色調は暗赤褐色(5YR3/6)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

2は1/3程の破片からの推定復元。胴部中位が膨らみ、口縁部は外反する。「7」字状の沈線文などが施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

3は沈線による懸垂文がみられる。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第176図4は沈線間に刺突が加えられる。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5・6は同一個体か。口縁部の隆起部には刻みが加えられる。以下、沈線が施される。5では隆起部上に大小3個の環状の貼付文がみられる。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。



第174図 67号住居跡 (1/60)

7は口唇部上に小突起がつく。突起端には円形刺突文が施される。口唇端部には円形刺突文や刻みが加えられる。突起下には円孔が穿たれ、2条一對の沈線が「V」字状に施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

8の口唇部上の突起は半円状になろうか。突起からは刻みが加えられた隆帯が蕨手状に垂下する。突起内面には両端に円形刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9は口唇部上に楕円形の孔が穿たれた長方形の突起がつけられる。突起内外面には2孔を挟んで円形刺突文が加えられる。突起上端には両端に円形刺突文が付加された沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

10～13は平行する沈線が直・弧状・「鉤」状に施される。10・11は同一個体の可能性がある。10の弧線上には環状の貼付文が付けられる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、細砂を僅かに含む。12は「鉤」状の端部に円形刺突文が加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。13は文様の接点に「8」字状・環状の貼付文が付けられる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には片岩と思われる礫片を多く含む。

14は口縁部に刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付される。隆帯下には沈線による渦巻状の文様が施され、これを中心に平行する沈線が横走する。沈線間にはRLの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

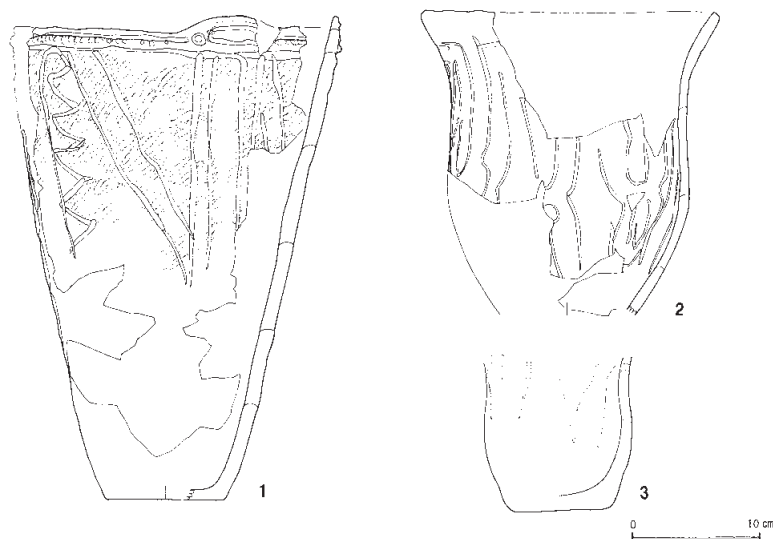
15は口縁部の隆起部に斜位の刻みが加えられる。以下、LRの単節斜縄文を地文とし、平行する沈線が横走する。口縁部内面には凹線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

16は口縁部に斜位の刻みが施され、以下、沈線が横走する。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

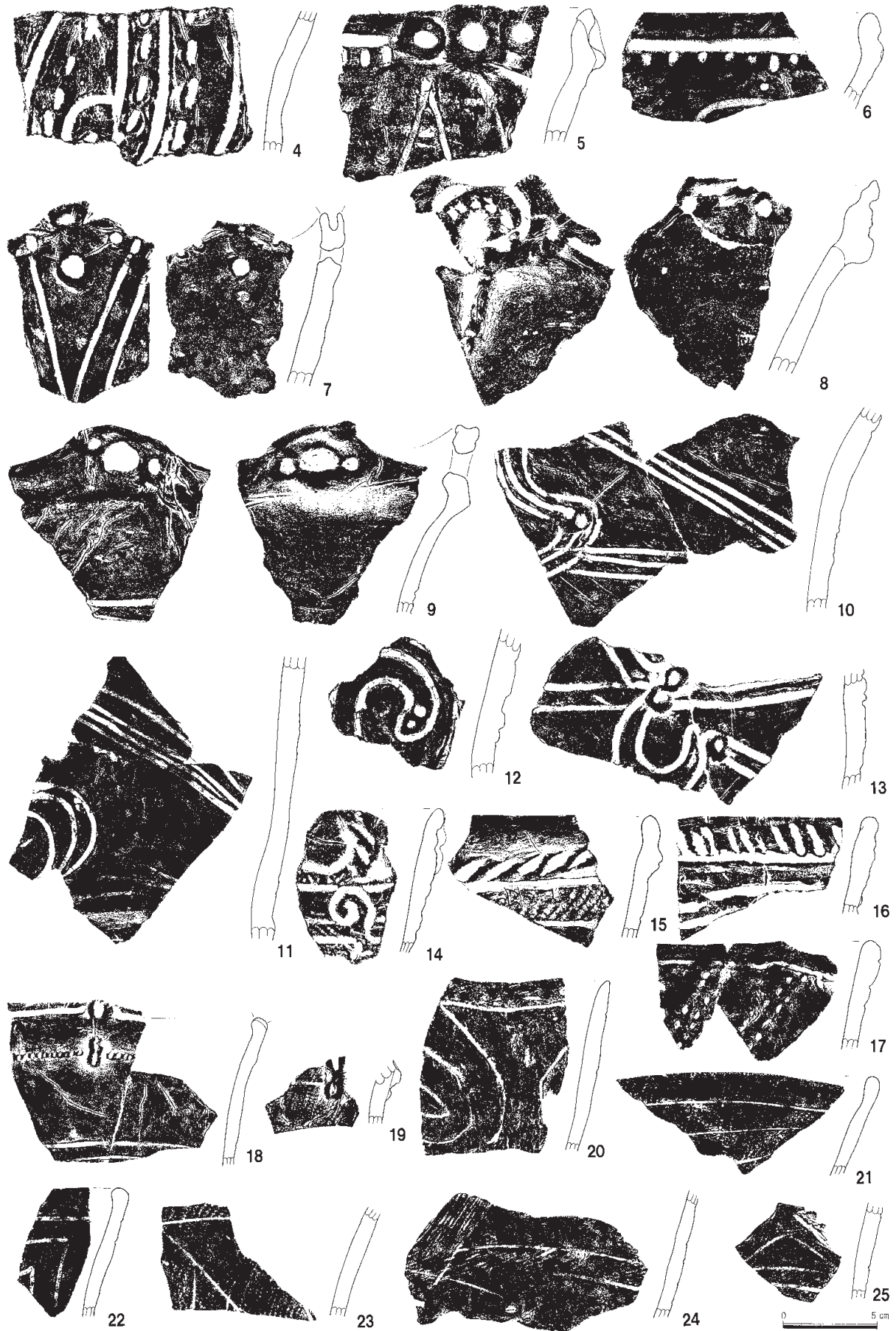
17は口縁部に沈線が巡り、並列する列点が斜位に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

18は口縁部に刻みが加えられた細隆帯が巡る。隆帯上には「8」字状の貼付文がみられる。胴部には2条の沈線が横走する。口唇端部には沈線が巡り、刻みがある貼付文が付けられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

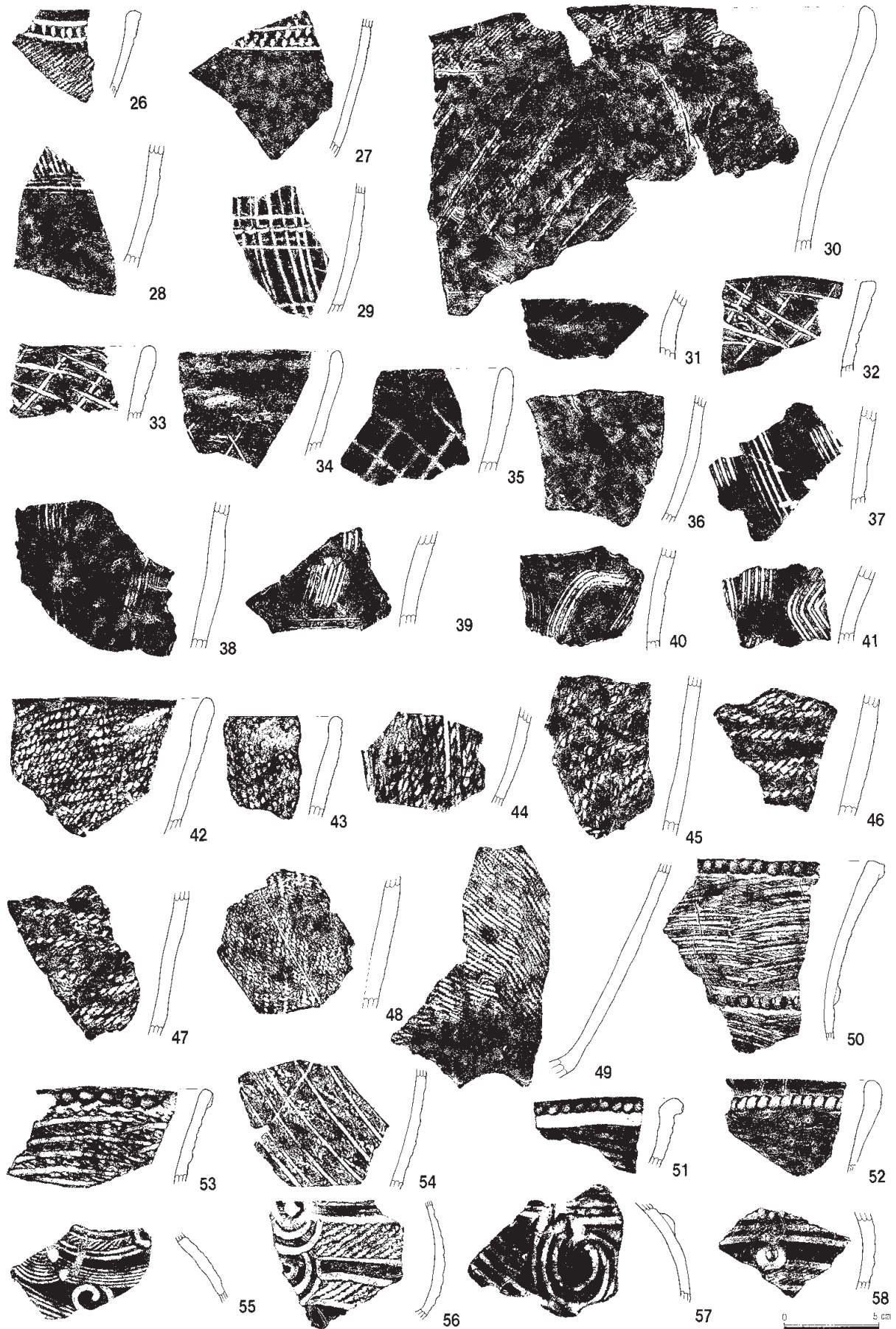
19はRLの単節斜縄文を地文とする。横位・斜位の沈線を施し、「8」字状の貼付文が付けられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。



第175図 67号住居跡出土遺物1 (1/4)



第176図 67号住居跡出土遺物 2 (1/3)



第177图 67号住居跡出土遺物3 (1/3)

20は口唇部に沈線を巡らす。以下、沈線による曲線的な文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む

21はLRの単節斜縄文を地文とし、横位に沈線が施される。口縁部内面には凹線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む

22～25は沈線が幾何学的に施される。22の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。23はLRの単節斜縄文を地文とする。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土に細砂を僅かに含む。24・25の沈線間の縄文はLRの単節斜縄文。24の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。25の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

第177図26は口縁部に2条の沈線が巡り、沈線間には刻みが加えられる。以下、LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

27は平行する沈線間に鋭い刺突が交互に並列して施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

28は半截竹管による縦位・横位の集合する沈線を交差させる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・雲母・輝石を含む。

29は縦位の集合する沈線上に横位の沈線を交差させる。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

30は内屈する口縁部にLRの単節斜縄文が施され、以下、矢羽根状の沈線文になる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

31は矢羽根状の沈線文が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を含む。

32～36は格子目文が施された土器。32は口縁部に沈線が横走する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。33の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。34は口縁部に凹線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。35の色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。36の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

37～41は櫛歯状施文具により多条の沈線が直行・蛇行して施される。櫛歯の単位は37・38・41が5本、39が6本、40が4本になろうか。色調は37・38・40・41が褐灰色（7.5YR4/1）、38がにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。いずれも胎土には粗砂を僅かに含む。

42～48は粗いLRの単節縄文が施される。44は2条、48は1条の細沈線がみられる。色調は42・43がにぶい赤褐色（5YR5/3）、44がにぶい褐色（7.5YR5/3）、45～47がにぶい赤褐色（5YR4/3）、48がにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土にはいずれも粗砂を僅かに含む。

49は小さな底部をもつ土器。RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

50～52は口縁部や胴部に押捺が加えられた隆帯が巡る紐線文土器。条線が弧状に施される。50の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂多く含む。51の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。52の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

53も紐線文土器。LRの単節斜縄文を地文とし、沈線が多条に施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

54はRLの単節縄文が地文になろうか。沈線が多条に施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

55～58は注口土器ないし壺形土器。55は6本一単位の櫛歯状施文具や半截竹管により曲線状の文様が描かれ、沈線による渦巻文・刻み・刺突文が加えられる。色調はにぶい灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には片岩と思われる

る礫片を多く含むが堅緻である。56はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線により渦巻文や平行線文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。57は3条一組の沈線により渦巻文・平行線文が施され、瘤状の貼付文がみられる。色調は灰褐色（7.5YR6/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。58はLRの単節斜縄文を地文とする。沈線により「C」字状、半円状の文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

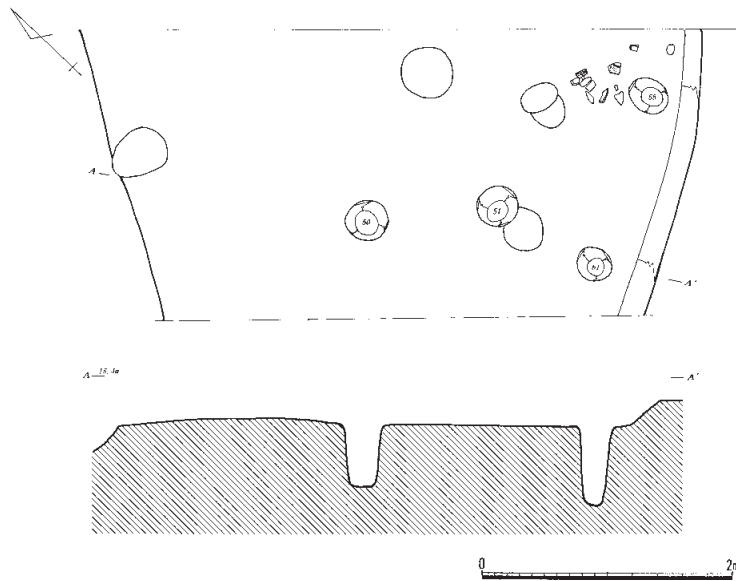
第319図11～15は打製石斧。11・13・14は分銅形。11の刃部は円刃状。側縁のくびれ部に敲打痕が認められる。68.1g。硬砂岩製。13は扁平な礫を使用。表裏面に大きく礫面を残す。刃部は平刃状。側縁のくびれ部には敲打痕が認められる。299.9g。凝灰岩製。14は頭部側を欠く。刃部は尖刃状。側縁のくびれ部には敲打痕が認められる。104.1g。硬砂岩製。12・15は短冊形。12は表面に礫面を残す。刃部は円刃状。79.8g。硬砂岩製。15は頭部側を欠く。表面に大きく礫面を残す。刃部は円刃状。側縁には敲打痕が認められる。370.1g。硬砂岩製。

第329図9は磨製石斧。いわゆる定角式石斧。刃部を欠く。表裏面とも丁寧に研磨されている。40g。泥岩製か。

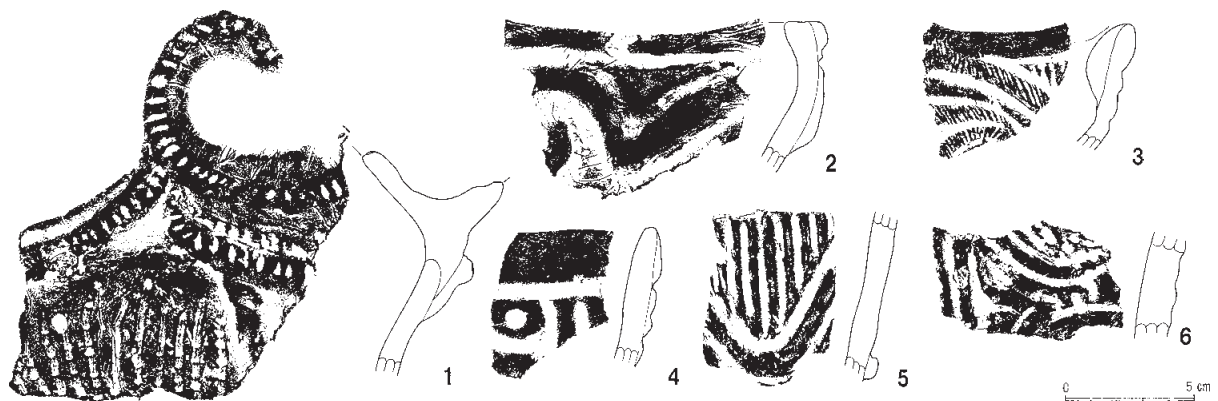
第334図2、第36図7は石皿片。2は表裏面ともに平坦である。320g。石英閃緑岩製。7は凹石と兼用。表面が使いこまれたため凹面化する。裏面にはくぼみが4ヵ所認められる。2560g。石英閃緑岩製。

第341図9は凹基の打製石鏃。脚部を欠く。0.4g。黒曜石製。

10・11は二次加工のある剥片。10は縦長の分厚い剥片の側縁に加工が加えられる。5.8g。黒曜石製。11は幅広いの剥片の左側縁に加工が加えられる。15.9g。硅岩製。12は横長の剥片。14.7g。硅岩製。13は縦長の剥片。13.5



第178図 75号住居跡 (1/60)



第179図 76号住居跡出土遺物 (1/3)

g。黒曜石製。

第351図2は筒形土偶の顔面部になろうか。ほぼ円形を呈し、眉は隆帯を弧状に貼付し、鼻に続ける。鼻孔は1孔。眼は短沈線で表現する。口は円孔。裏面には貼付けた痕跡が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第352図2は蓋形土器。笠状の器形を呈し、粘土紐を橋状に貼付して摘みとする。摘み上には沈線が加えられる。表面は外縁に沿って沈線が巡らされ、内側に杵状に沈線が施される。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

すべて覆土中からの出土。

75号住居跡(第178図)

〔位置〕36地点。

〔構造〕東側・西側調査区外。263Y・27Mに切られる。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)16~22cmを測り、50°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)壁際を除いて硬化面が認められた。(炉)検出されなかった。(柱穴)4本が主柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕住居中央はローム粒子を含む硬質の黒褐色土(10YR3/1)。壁際はローム粒子を多く含む、硬質の黒褐色土(7.5YR3/1)。

〔遺物〕覆土中からの出土が大部分であるが、量は少ない。

〔時期〕勝坂式期。

75号住居跡出土遺物(第179図、第350図1)

1は口縁部に刻みが加えられた渦巻状の突起が付く。突起から刻みが付けられた隆帯が1本は口唇部に沿って、他の1本は突起と平行するように貼付される。隆帯脇には幅広の角押文がみられる。胴部には縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は隆帯を弧状に貼付する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

3は波状口縁の土器。刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

4は沈線により文様が描かれる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5は隆帯による区画内に縦位の集合する沈線が充填される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

6は器面が荒れて不鮮明であるが、半截竹管により文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第350図1は耳栓。外径2.5cm・孔径1.1cmを測り、滑車状を呈する。5.9g。色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

すべて覆土中の出土である。

76号住居跡(第180図)

〔位置〕36地点。

〔構造〕1/2が調査区外。18方に切られる。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)7~23cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)平坦で遺存状態は良好である。特に硬化している部分は認められなかった。(炉)深鉢形土器の口頸部を埋設している埋甕炉で、径50cm・深さ30cmを測る円形の掘り込みをもつ。(柱穴)深度のあるピット3本が主柱穴の一部になろうか。

〔覆土〕

1層 耕作土。

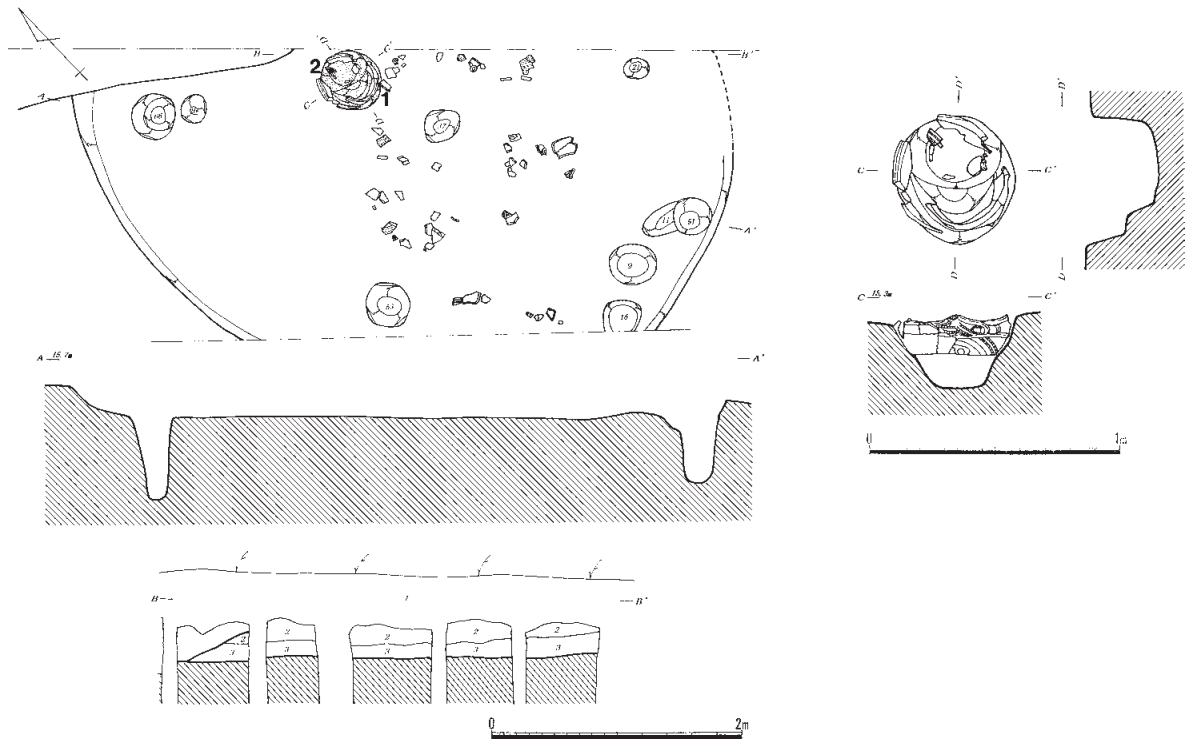
2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

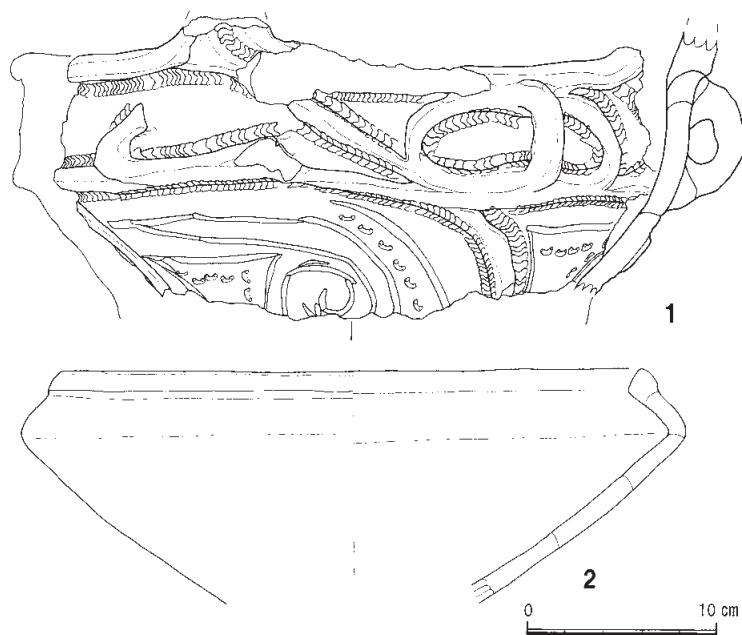
〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から土器片が多量に出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

76号住居跡出土遺物 (第181・182図、第320図1、第341図14、第348図1・2)



第180図 76号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)



第181図 76号住居跡出土遺物1 (1/4)

第181図1は炉に埋設されていた土器。1/5程の破片からの推定復元。キャリパー状の器形になろうか。口唇部上には突起が複数付けられる。口縁部には隆帯による楕円形の区画が作られ、隆帯に沿って外側竹管の押引文が加えられる。また、区画の中央には橋状の把手が付けられる。胴部には両側に外側竹管による押引文が付加された隆帯が弧状に貼付され区画を作るようである。区画内には沈線により弧線文・渦巻文・三角形文などが描かれ、沈線に沿って半截竹管の刺突が加えられている。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

2は炉上にあった浅鉢形土器。体部は底部から僅かに内湾しながら開き、口縁部は「く」字状に内屈する。口唇部下には凹線が巡る。内面には赤彩の痕跡が認められる。不鮮明であるが鋸歯状に施されている可能性がある。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第182図3は波状口縁の土器。頸部がくびれ、口縁部が外反する。口縁部は無文帯になる。胴部には刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画内の充填文は、隆帯に沿って刻みが加えられその中に波状沈線が施されるもの、斜位の集合沈線などがある。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を多く含む。

4は波状口縁の土器か。隆帯により長楕円形の区画が作られ、隆帯に沿って半截竹管の押し引きによる連続爪形文・ペン先状の連続刺突文が施される。胴部の文様は沈線による同心円文になろうか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5・9は同一個体。沈線により区画が作られ、区画内にはペン先状の連続刺突文・刻みと三叉文が充填される。下位はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6は口唇部上の外縁に刻みが加えられた筒状の突起が付き、そこから隆帯が垂下する。隆帯上には円形刺突文が一对施される。隆帯の横には区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

7は小波状口縁の土器になろうか。外側に肥厚する口唇部には刻みが加えられる。口唇部に沿って2条の沈線が施され、以下、斜位の集合する沈線になる。色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を多く含む。

8は口縁部が狭い無文帯になり、以下、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

10・11・14は刻みがつけられた隆帯が貼付され、区画などが作られる。10は沈線により渦巻文や三叉文・平行線文が施され、沈線間には刻みが加えられる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。11は隆帯に沿って刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。14は区画内に縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

12は刻みが付加された隆帯、無加飾の隆帯が貼付される。隆帯に沿って幅広の角押文と三角押文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

13は半截竹管による連続爪形文が加えられた隆帯が貼付される。隆帯に沿って三角押文・半截竹管の刺突を連結させた波状文が施される。RLの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第320図1は短冊形の打製石斧。頭部を欠く。横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃部は平刃状。75.7g。硬砂岩製。

第341図14は凹基の打製石鏃。脚部を欠く。1.1g。黒曜石製。

第348図1・2は土器片鏃。共に短軸に刻みが加えられる。重量は1が40.5g、2が52.4g。

第181図1・2を除き、覆土中の出土である。

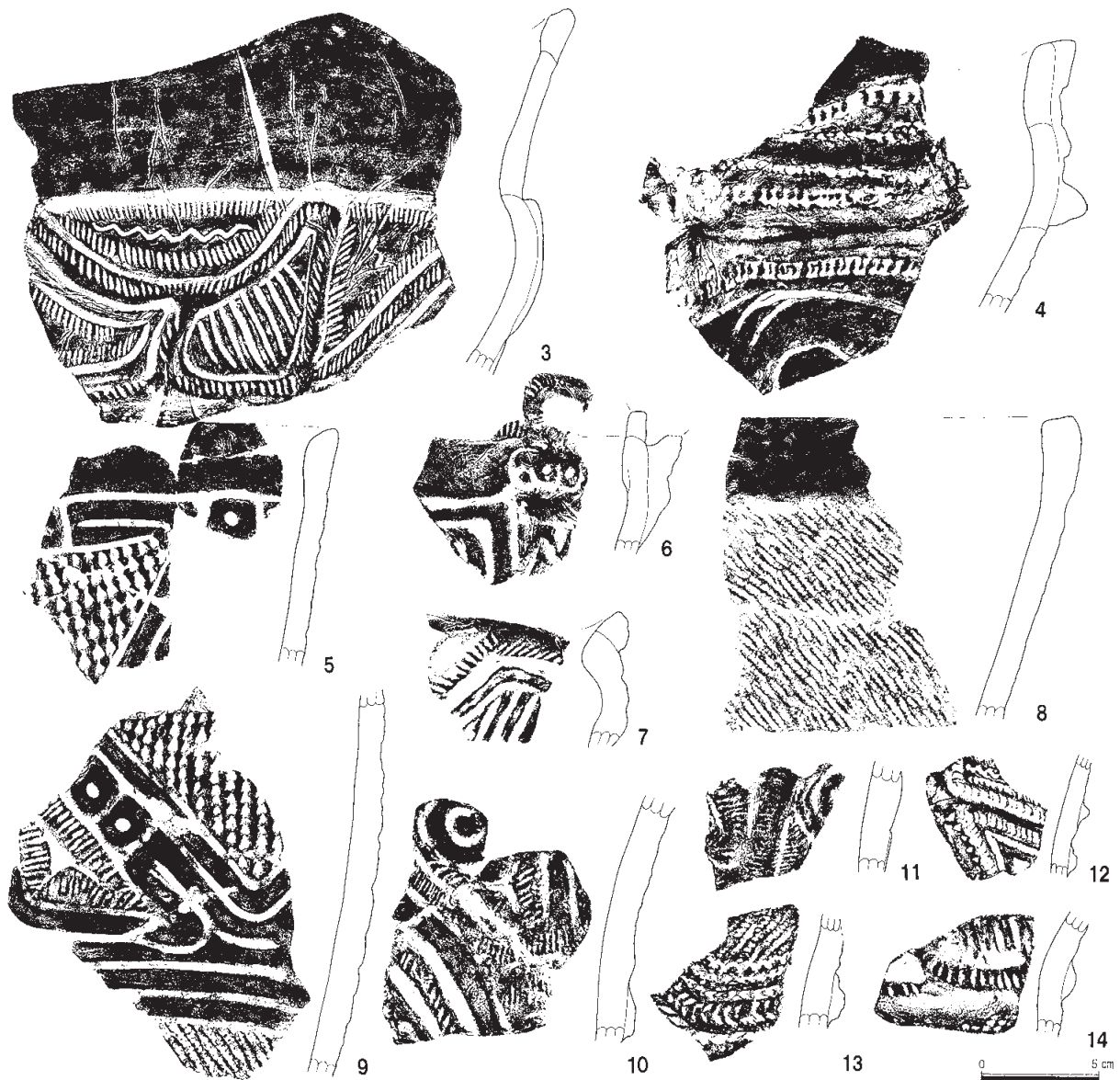
77号住居跡（第183図）

〔位置〕36地点。

〔構造〕 北側の一部を除き、調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 52~55cmを測り、70° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅45~80cm・下幅10~15cm・深さ15~24cmを測る。(床面) 全面軟弱である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 舗装。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土 (5 YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。
- 6層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 7層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。
- 9層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。



第182図 76号住居跡出土遺物2 (1/3)

10層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

11層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

12層 灰褐色土 (5 YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

77号住居跡出土遺物 (第184図)

1は斜位に、2は縦位にRLの単節縄文が施される。色調は共ににぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には1が粗砂を、2が細礫を多く含む。

3はLの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

いずれも覆土中の出土である。

78号住居跡 (第72図)

〔位置〕 13Ⅱ地点。

〔構造〕 大部分が18Jに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 20~65cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅18~25cm・下幅5cm前後・深さ5cm前後を測る。(床面) 軟弱である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。

〔覆土〕 ロームブロックを多く含み、焼土粒子・炭化物粒子を含む硬質の暗褐色土 (10YR3/3)。

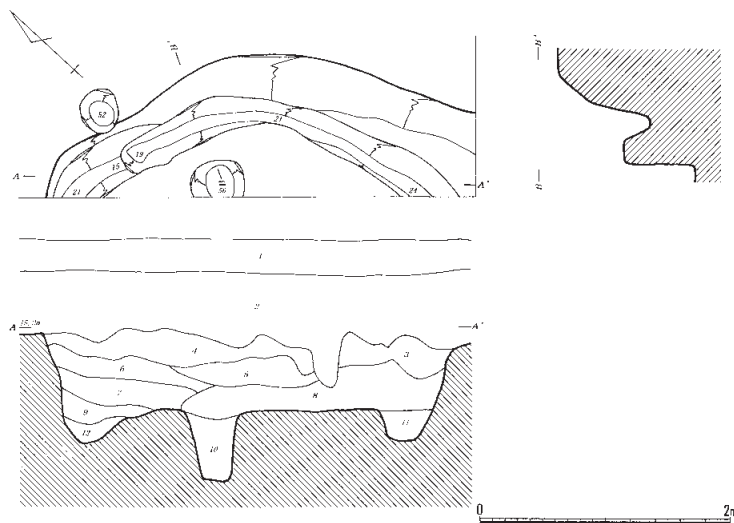
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

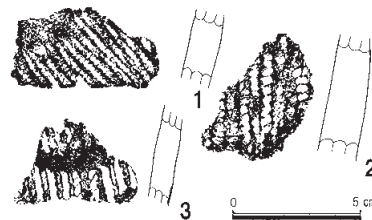
79号住居跡 (第185図)

〔位置〕 24Ⅱ地点。

〔構造〕 277Yに切られる。住居北側の壁溝が複数巡る拡張住居である。(平面形) 不整楕円形。拡張前は楕円形。(規模) 535×460cm。拡張前は460×420cm。(主軸方位) N-23°-W。(壁高) 42~50cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅20~35cm・下幅7~20cm・深さ10~25cm、拡張前は上幅20~25cm・下幅7~20cm・深さ15~20cmを測る。(床面) 硬質ローム層まで掘り下げ床面としているため、良好である。(炉) 住居中央に位置する。南側の炉跡は不明×45cmを測り、深さ15cmの掘り込みをもつ。土器が抜かれた可能性があり、おそらく拡張前の炉



第183図 77号住居跡 (1/60)

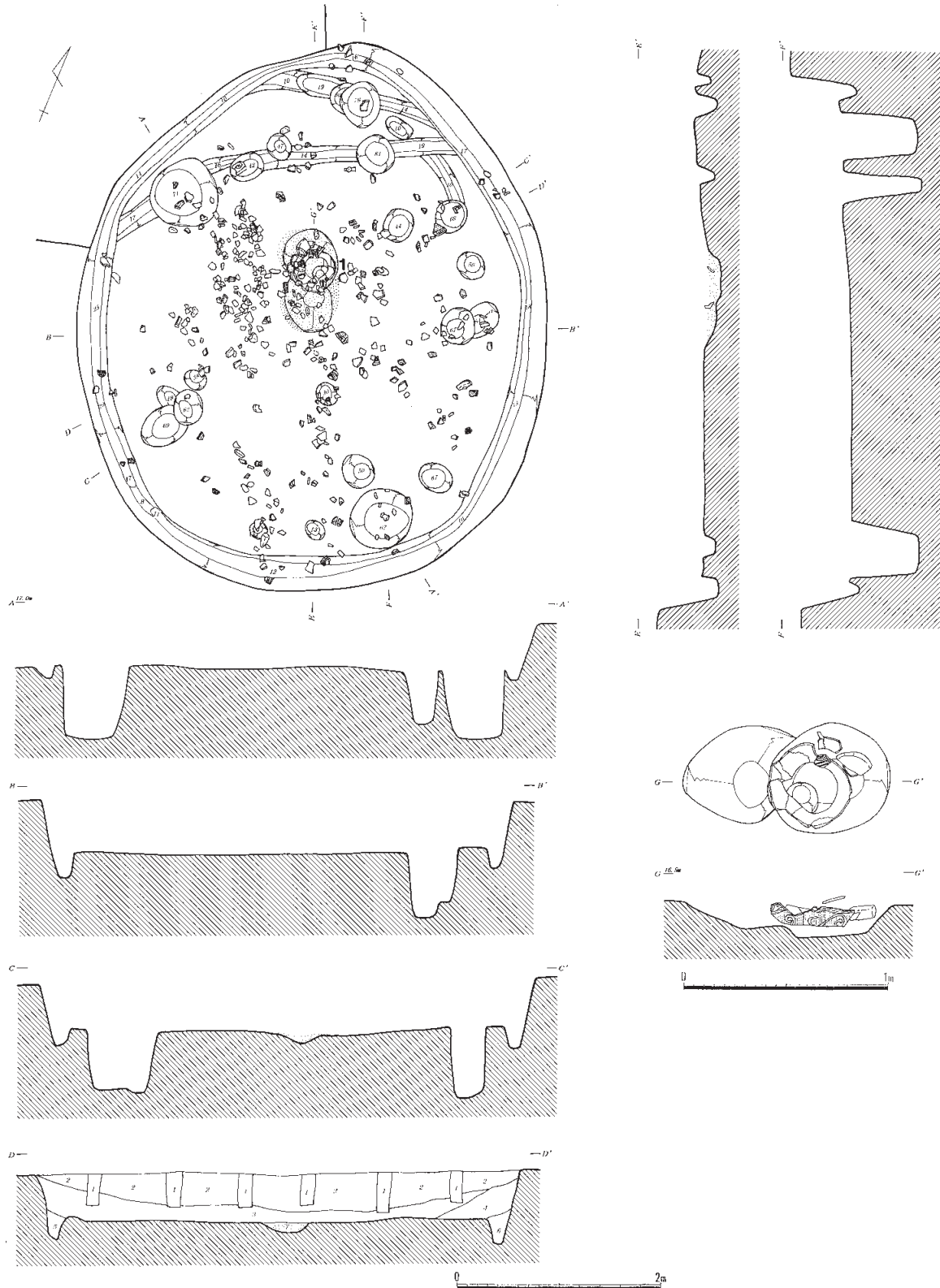


第184図 77号住居跡出土遺物 (1/3)

と思われる。北側は深鉢形土器の上半部を埋設している埋甕炉で、60×55cm・深さ30cmの楕円形の掘り込みをもつ。
 (柱穴) 深度のあるピットが多く検出されたが、最終的には主柱6本で構成されようか。

〔覆土〕

1層 耕作土。



第185図 79号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)

2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。遺物を多く含む。硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。

5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

6層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。粘質。

7層 にぶい赤褐色土 (5 YR4/4)。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から土器片が多く出土したが、全て破片の状態である。

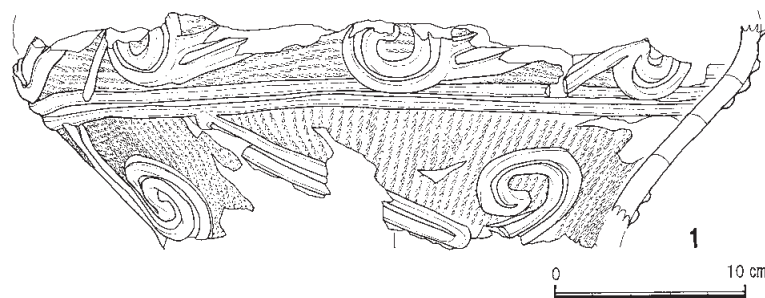
〔時期〕 加曽利E I 式期。

79号住居跡出土遺物 (第186・187図、第320図2～4、第331図8、第334図3、第341図15～19、第348図3～13)

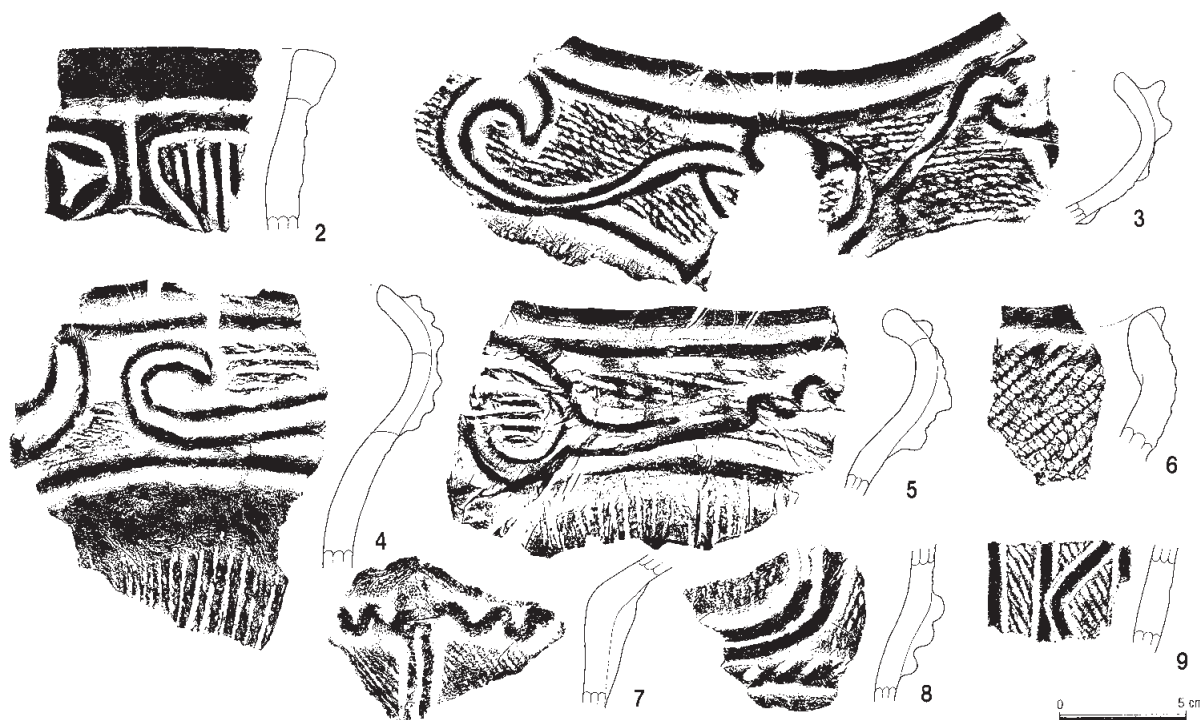
第186図1は炉に埋設されていたキャリパー形の土器。2本の隆帯を巡らせて口縁部と胴部を画する。口縁部にはLの撚糸文を横位に施して地文にし、2本一対の隆帯による連結した渦卷文が作られる。胴部の文様はLの撚糸文を縦位に施して地文とし、2本一対の隆帯による渦卷文・渦卷文を付加した「∞」字状文・「十」字状文などで構成される。色調は灰褐色 (5YR5/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第187図2は口縁部に狭い無文帯をもつ。以下、沈線による区画がなされ、区画内には三叉文・縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3～5はキャリパー形の土器。3・5はL、4はRの撚糸文を口縁部は横位に施し、2本一対の隆帯により「∞」字状文などを作出する。胴部はいずれも縦位の撚糸文になる。3の色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土



第186図 79号住居跡出土遺物1 (1/4)



第187図 79号住居跡出土遺物2 (1/3)

には粗砂を多く含む。4・5の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7はLRの単節斜縄文を地文とする。隆帯を波状に横走させ、そこから2本一對の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

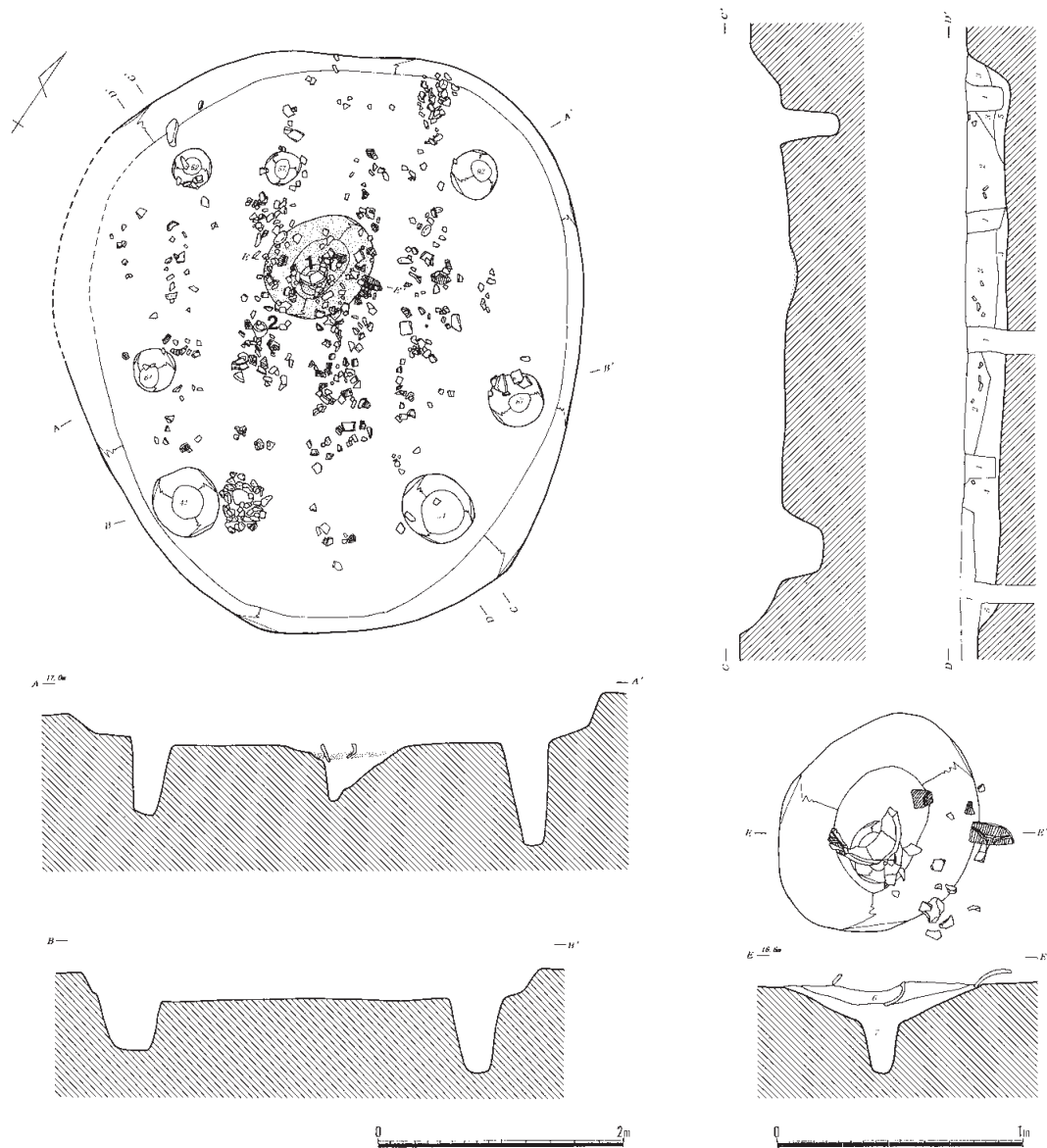
8はRの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯が弧状に貼付される。横位の隆帯には刻みが加えられている。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・骨針を多く含む。

9はRLの単節斜縄文を地文とし、半截竹管により文様が描かれる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

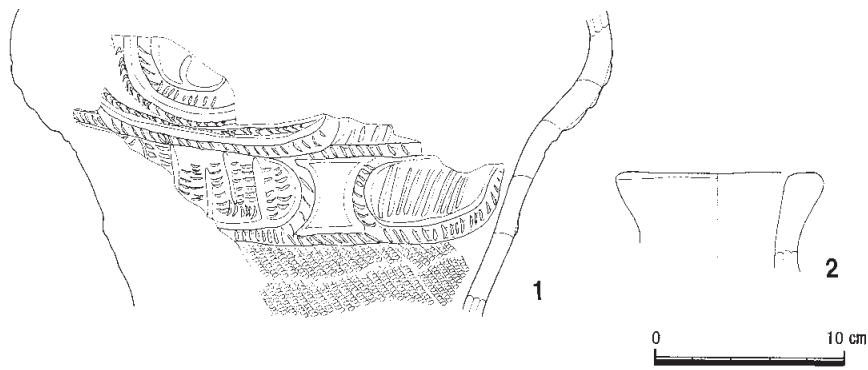
第320図2～4は打製石斧。2は撥形。表面に礫面を残す。刃部は平刃状。109.4g。粘板岩製。3・4は短冊形。3は横長の剥片を使用か。表面に大きく礫面を残す。刃部は尖刃状。61.3g。硬砂岩製。4は横長の剥片を使用。刃部は尖刃状。74.7g。安山岩製。

第331図8は磨石。表裏面・側縁とも平滑化している。285g。石英閃緑岩製。

第334図3は石皿片。凹石と兼用。1,300g。石英閃緑岩製。



第188図 80号住居跡（1/60）、炉跡（1/30）



第189図 80号住居跡出土遺物1 (1/4)



第190図 80号住居跡出土遺物2 (1/3)

第341図15～17は打製石鏃。15は凹基。2.1g。硅岩製。16は凹基。1.1g。黒曜石製。17は先端部のみ遺存。0.3g。黒曜石製。

18は寸づまり、19は幅広の剥片。重量は18が2.5g、19が8gを測る。共に黒曜石製。

第348図3～13は土器片錘。7は短軸、他は長軸に刻みが加えられる。重量は3が38.4g、4が43g、5が11.6g、6が25.8g、7が15.7g、8が24.7g、9が26.8g、10が48.7g、11が52g、12が36.1g、13が22.7gを測る。

第186図1を除き覆土中からの出土である。

80号住居跡（第188図）

〔位置〕 24Ⅱ地点。

〔構造〕 393D・18Sに切られる。（平面形）不整楕円形。（規模）不明×470cm。（主軸方位）N-26°-W。（壁高）25～38cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。深鉢形土器の上半部を埋設した埋甕炉で、90×80cm・深さ40cmの楕円形の掘り込みをもつ。（柱穴）深度のある6本が主柱穴と思われる。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 5層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 暗赤褐色土（5YR4/4）。焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子を含む。やや硬質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多くの土器片が出土したが、破片の状態のもが大部分である。

〔時期〕 勝坂式期。

80号住居跡出土遺物（第189・190図、第320図5～9、第342図1～3、第348図14～18）

第189図1は炉に埋設されていた土器。胴部は直線的に開き、口縁部は内湾する。頸部には刻み加えられた隆帯が巡り口縁部と胴部を画する。口縁部には刻みがある隆帯により区画が作られ、区画内には沈線による文様がみられる。胴部上位には刻みが加えられた隆帯による楕円形の区画が設けられ、区画内には縦位・横位の沈線が組み合わされて充填される。胴部下位にはRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

2は口縁部が僅かに外反しなが開く。口唇端部は平坦である。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第190図3は刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画内には隆帯に沿って6条一組の条線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

4は波頂部が尖頭状になる波状口縁になろうか。波頂部の口唇部には刻みが加えられる。波底部から隆帯が垂下するが、楕円形の区画を作るようである。区画内は隆帯に沿って押し引きによる連続刺突文が2条施され、中央に僅かに波打つ2条の沈線が充填される。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

5は隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内には隆帯に沿って矢羽根状の連続刺突文が加えられる。区画文下には斜位に条線が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

6は2条一對の押引文が2段施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

7は波状口縁になろうか。口唇部から押捺が加えられた隆帯が弧状に垂下し、横位に貼付された低い隆帯と結合して区画を作る。区画内には隆帯に沿って押引文を2条施し、中央には押引文が鋸歯状に充填される。色調は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

8は波状口縁の土器か。肥厚する口唇部には斜位の刻みが加えられる。刻みがつけられた隆帯が貼付され、矢羽根状に沈線を施す。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

9は刻み加えられた隆帯により区画が作られようか。口唇部と隆帯の間には縦位の集合する沈線が施される。区画内には隆帯に沿って沈線と三角押文が充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には片岩と思われる礫片を多く含む。

10は低い隆帯により区画が作られようか。区画内には口縁部と隆帯に沿って幅広の角押文が充填される。区画外には隆帯に沿って波状沈線文・幅広の角押文・三角押文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11は波状口縁の土器。隆帯の貼付により区画が作られる。隆帯は区画内が幅広の角押文、区画外が三角押文によってなぞられ、半截竹管による集合沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

12は2条の三角押文により区画を作る。区画内には三叉文が施され、空白部は集合する短沈線を充填する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を含む。

13は隆帯の貼付により楕円形の区画が作られようか。隆帯に沿って区画内外に三角押文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

14は両側を三角押文と角押文で加飾された細い隆帯で矩形の区画を作る。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

15は断面三角形の隆帯で区画を作る。区画内には横位の押引文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には雲母を僅かに含む。

16は隆帯の貼付により楕円形の区画を作る。区画内は幅広の押引文によって隆帯がなぞられ、中にはRLの単節斜縄文がみられる。区画外には幅広の押引文が横位に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

17は横位の隆帯によって区画される。上位には半截竹管による平行線文が施され、非常に小さい円形竹管文で加飾された隆帯や環状の貼付文が貼付される。色調はにぶい褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

18は隆帯により縦長の方形区画が作られようか。区画内には幅広の角押文・三角押文・波状沈線文を組み合わせで充填する。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

19～21は刻みが加えられた隆帯が貼付される。空白部には19が幅広の押引文、20が波状文、21が短沈線が集合して施される。19の色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。20の色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。21の色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

22は刻みが加えられた隆帯が横位に貼付される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

23は横位の沈線で上下を画し、上位には密集した刺突文、下位には波状沈線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

24は沈線により文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

25・26は浅鉢形土器。共に浮彫り状の文様が施される。25の色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を多く含む。26の色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

第320図5～9は打製石斧。5は撥形になろうか。刃部側を欠く。横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。

32.8g。硬砂岩製。6・7・9は短冊形。6は横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃部は平刃状。56.8g。硬砂岩製。7は長大な石斧。横長の剥片を使用か。刃部は平刃状。側縁には敲打痕が認められる。237.5g。硬砂岩製。9の刃部は円刃状。25.7g。硅岩製。8は横長の剥片を使用。頭部は尖り刃部は斜刃状。66.3g。硬砂岩製。

第342図1は凹基の打製石鏃。1.1g。硅岩製。

2は二次加工を有する剥片。縦長剥片の両端を欠く。右側縁に加工が加えられる。11.7g。瑪瑙製。

3は縦長剥片。6.9g。黒曜石製。

第484図14～18は土器片鏃。15は短軸、他は長軸に刻みが加えられる。重量は14が29.6g、15が28.4g、16が12.6g、17が20.2g、18が46.8gを測る。

第189図1を除き、覆土中の出土である。

81号住居跡（第191図）

〔位置〕 24Ⅱ地点。

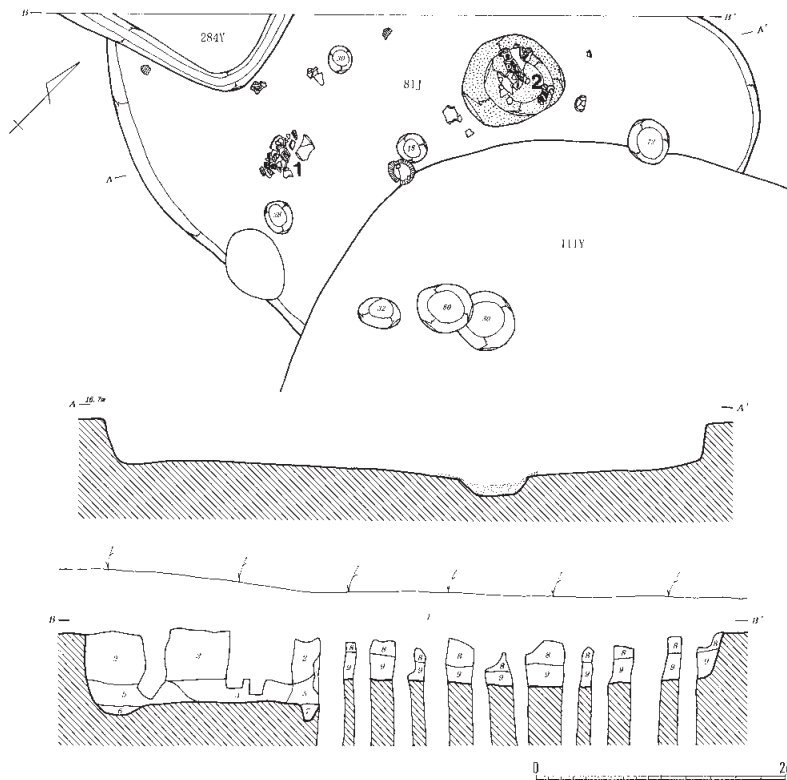
〔構造〕 北側調査区外。111・284Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明×430cm。（主軸方位）不明。（壁高）34～44cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）特に硬化している部分は認められなかったが、遺存状態は良好である。（炉）80×70cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ15cmの掘り込みをもつ。埋設土器が抜かれた可能性がある。（柱穴）7本検出されたが、主柱穴は特定できなかった。

〔覆土〕

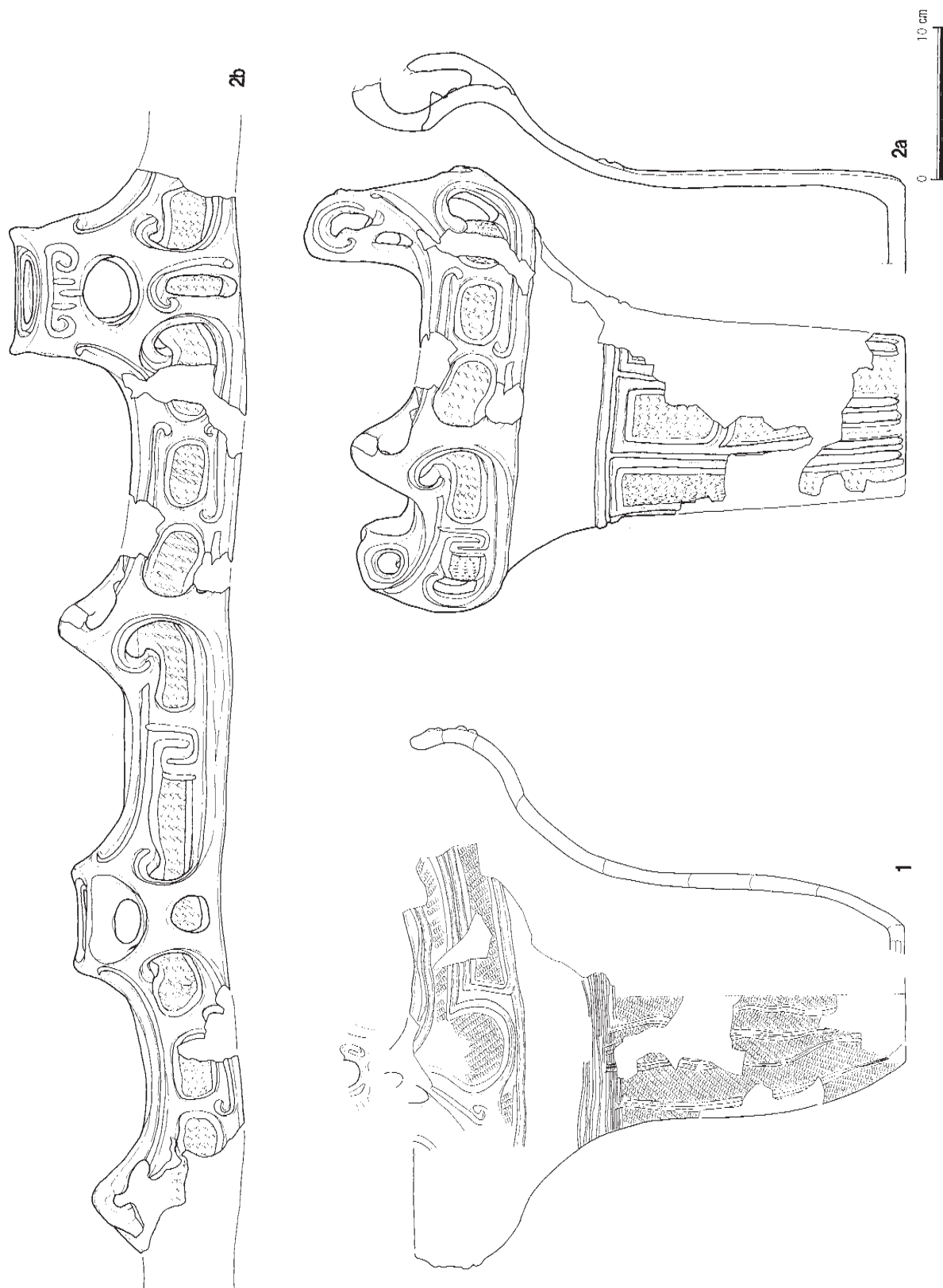
1層 耕作土。

8層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。硬質。

9層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。



第191図 縄文時代81号・弥生時代284号住居跡（1/60）



第192図 81号住居跡出土遺物1 (1/4)

〔遺物〕 覆土中からの出土が大部分である。

〔時期〕 加曽利E I 式期。

81号住居跡出土遺物（第192・193図、第348図19～21）

第192図1・2は共にキャリパー形の土器。

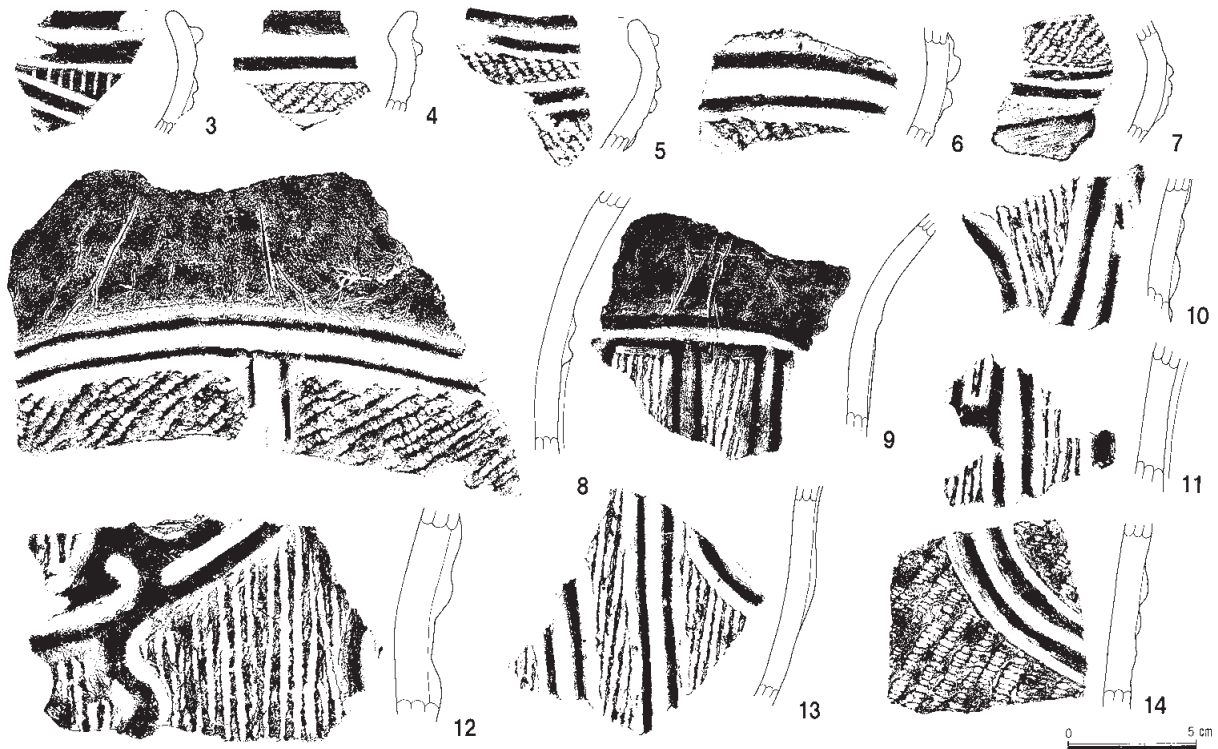
1は口縁部と頸部を隆帯により、頸部と胴部を半截竹管による4～6条の沈線により区画する。口縁部・胴部はRLの単節斜縄文を地文とする。口縁部には2本一對の隆帯により楕円形・長方形の区画が設けられる。この隆帯は口唇部上にまで伸びて突起を作るようである。頸部は無文帯になる。胴部は半截竹管による3条一組の直行する沈線、2条一對の蛇行する沈線が交互に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

2は口唇部上に4単位の突起が付く。突起は対面するものが対になるように作られる。一對は中空で円孔が穿たれた箱状のもので、大小の相似形を呈する。他の一對は円孔のある山形のものである。これらの突起はいずれも口縁部にまで伸びて橋状の把手を構築する。口縁部・頸部・胴部は2本一對の隆帯を巡らせてそれぞれを画する。口縁部・胴部はLの撚糸文を縦位に施して地文とする。口縁部には隆帯による長短の楕円形区画が設けられる。頸部は無文帯になる。胴部は2本一對の隆帯を垂下させ、これを結ぶように横位の隆帯が貼付される。色調は暗褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。炉の上から出土。

第193図3は2本一對の隆帯により区画が作られる。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

4・6・7はLR、5はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯による区画が作られる。色調は4が褐灰色（7.5YR4/1）、5が暗赤褐色（5YR3/2）、6がにぶい褐色（7.5YR5/3）、7がにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する。胎土には4が細砂を、5・7が細砂を僅かに、6が粗砂を多く含む。

8・9は頸部が無文帯になる。2本の隆帯を巡らせ胴部と画する。8はRLの単節斜縄文、9はLの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯が垂下する。色調は共ににぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には8が細砂を多く、9



第193図 81号住居跡出土遺物2（1/3）

が粗砂を僅かに含む。

10～13はLの撚糸文を地文とする。2本一對の隆帯による懸垂文が施される。色調は10・11がにぶい赤褐色（5YR4/3）、12がにぶい褐色（7.5YR6/3）、13がにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には10が細礫を多く、11が粗砂を、12が細砂を僅かに、13が細砂を多く含む。

14はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

第348図19～21は土器片錘。すべて長軸に刻みを加えられる。重量は19が39.5g、20が31.8g、21が25.4gを測る。第192図2を除き、覆土中の出土である。

82号住居跡（第194図）

〔位置〕 24Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。壁溝が二重に巡り、拡張された可能性が大きい。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）25～37cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～25cm・下幅5～13cm・深さ15～22cm、拡張前は上幅15～18cm・下幅5～9cm・深さ6～12cmを測る。（床面）平坦で遺存状態は良好である。（炉）検出されなかった。（柱穴）4本検出された。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。やや硬質。

3層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

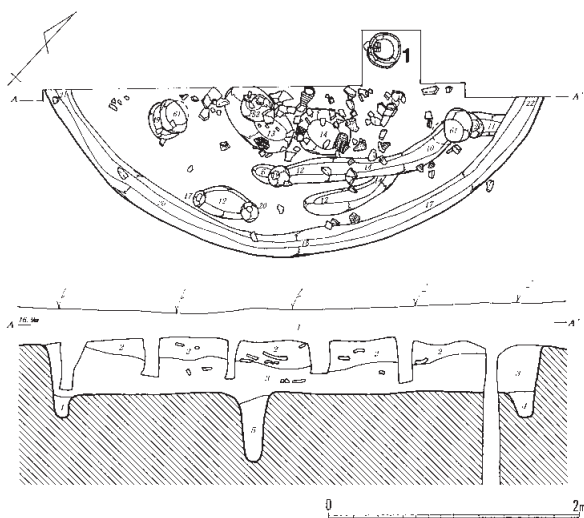
5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土上層から土器片が多く出土した。

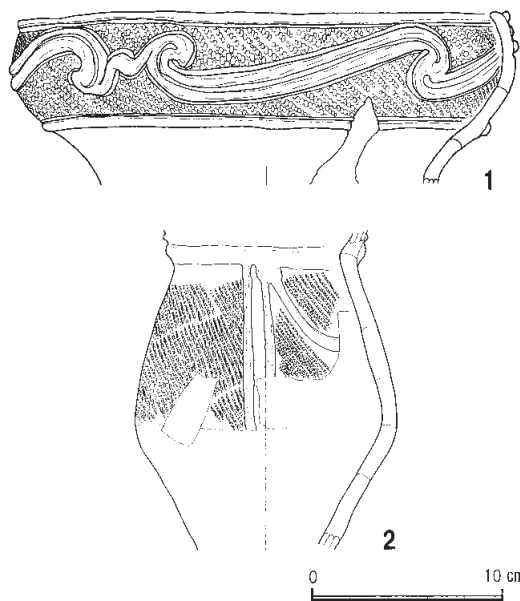
〔時期〕 加曽利EⅠ式期。

82号住居跡出土遺物（第195・196図、第320図10・11、第329図10、第348図22～24）

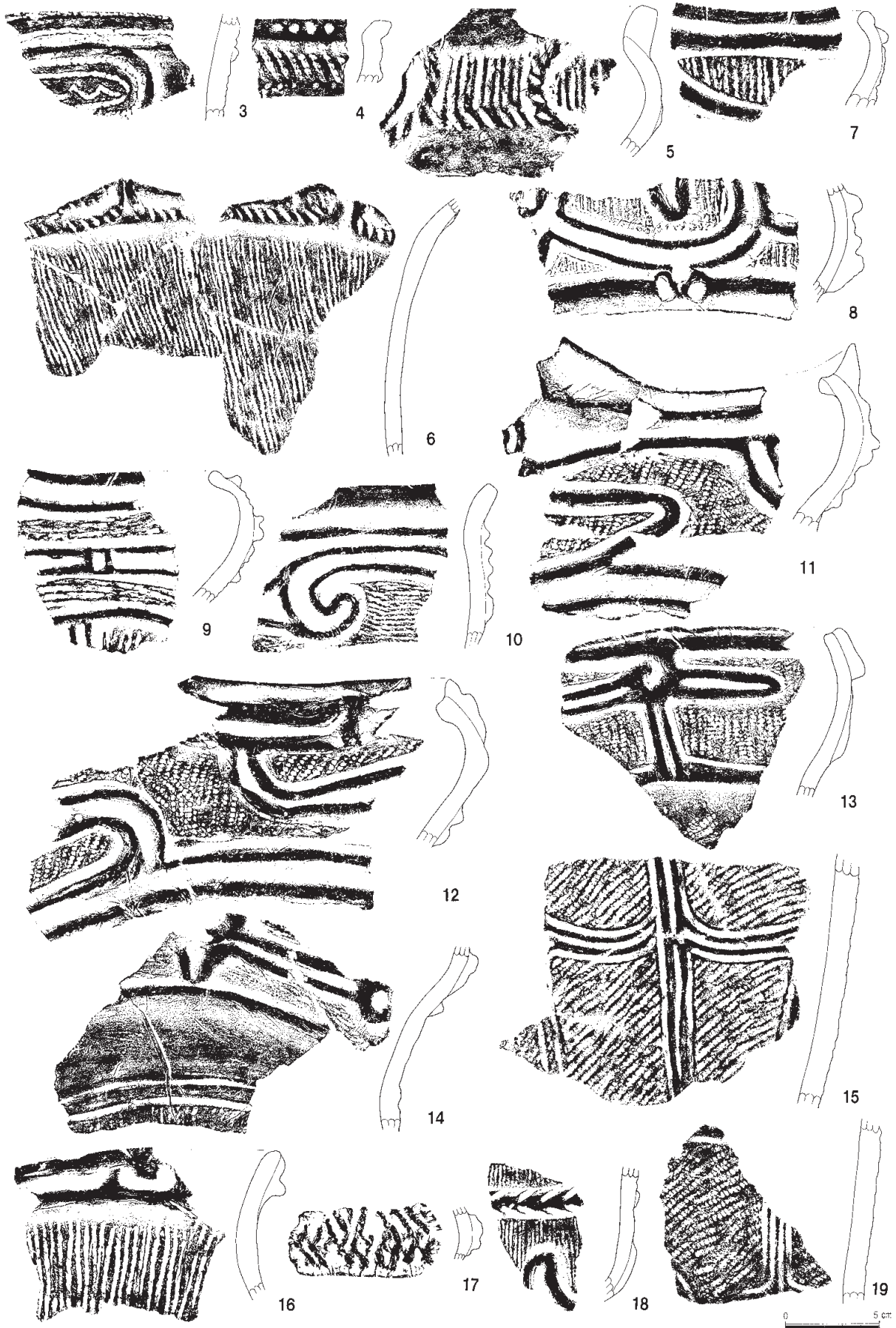
第195図1はキャリパー形の土器。口縁部は下位に隆帯を巡らせて頸部と画する。RLの単節斜縄文を地文とし、



第194図 82号住居跡（1/60）



第195図 82号住居跡出土遺物1（1/4）



第196图 82号住居跡出土遺物2 (1/3)

2本一対の隆帯により連結する「∞」字状文を5単位設ける。頸部は無文になる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

2は胴部下位に膨らみをもち、頸部がくびれる土器。頸部には隆帯が巡る。胴部上位にはLの撚糸文が斜位に施され、下位は無文になる。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第196図3は2条の三角押文が巡る。上部にも間隔を開けて三角押文が施されているようだ。隆帯による楕円形の区画が作られ、区画内には隆帯に沿って2条の三角押文が加えられ、空白部に三角押文が鋸歯状に充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

4は肥厚する口唇部に連続した押捺が加えられる。細い半截竹管の内側を用いた連続刺突文が斜位に集中して施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を多く、雲母を僅かに含む。

5は刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画内外には半截竹管による縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、細礫を多く含む。

6は刻みが加えられた隆帯により区画が作られようか。区画内には縦位の集合する沈線が僅かにみられる。以下、Lの撚糸文が施される。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7～14はキャリパー形の土器。いずれも2本一対の隆帯により区画や渦巻文などが作られる。地文は7・8・10・14がL、9がRの撚糸文。11～13がLRの単節縄文である。7は波状口縁になろう。14は頸部が無文帯になる。7の色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。8の色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。9の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。10の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。11の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。12の色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。13の色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。14の色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

15・19はRLの単節斜縄文を地文とする。15は3条一組、19は4条一組の沈線による懸垂文とそれを連結する弧線文が施される。15の色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。19の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

16は狭い口縁部に横位の隆帯と渦巻文が貼付される。以下、Lの撚糸文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

17は紐状の隆帯が貼付される籠目文の土器。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

18はLの撚糸文を地文とし、矢羽根状の刻みが加えられた隆帯が横走する。下位には弧状に隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第320図10・11は短冊形を呈する打製石斧。10の刃部は円刃状を呈する。150g。硬砂岩製。11の刃部は円刃状。側縁には敲打痕が認められる。148.3g。硬砂岩製。

第329図10は磨製石斧。剥離痕を多く残す。204.3g。硬砂岩製。

第348図22～24は土器片錘。いずれも長軸に刻みが加えられる。重量は22が25.8g、23が12.8g、24が23.6gを測る。

すべて覆土中の出土である。

83号住居跡(第197図)

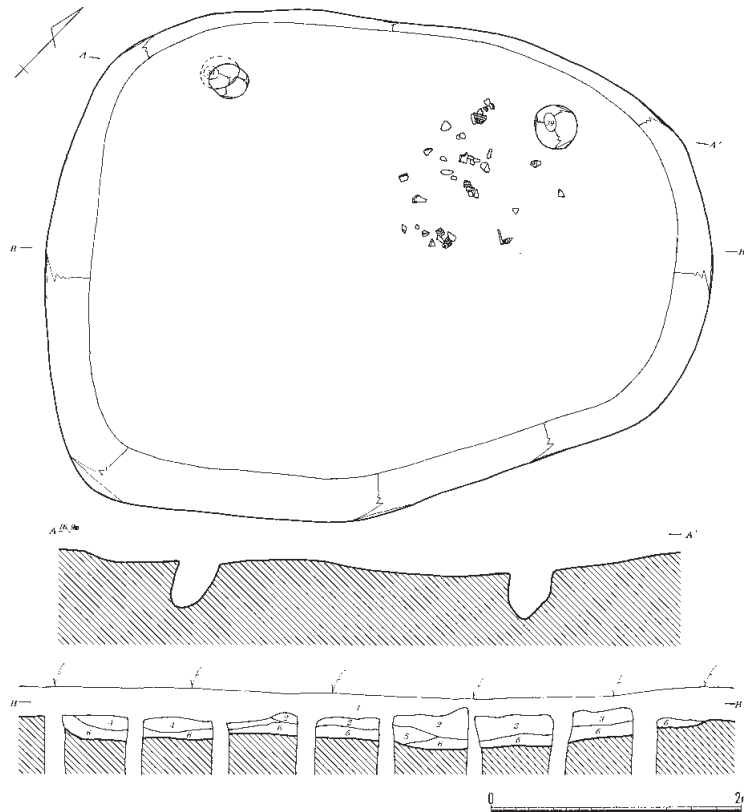
〔位置〕24Ⅱ・67Ⅱ地点。

〔構造〕(平面形)台形。(規模)530×400cm。(主軸方位)N-45°E。(壁高)5～17cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)平坦で遺存状態は良好である。(炉)検出されなかった。(柱穴)2本

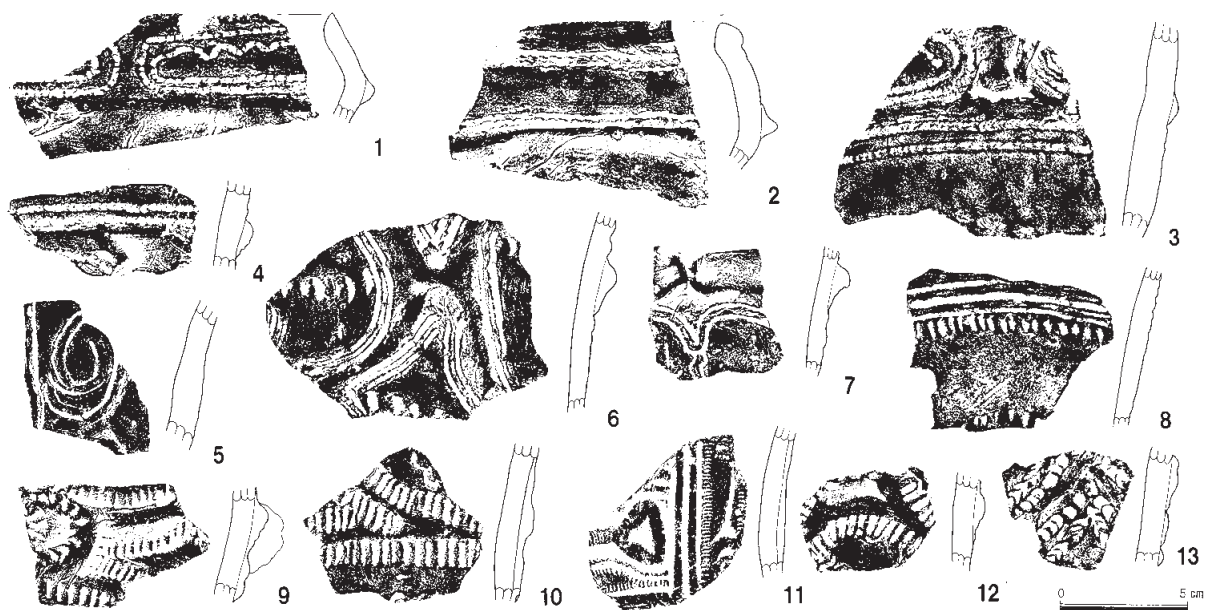
検出された。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。遺物を多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。



第197図 83号住居跡 (1/60)



第198図 83号住居跡出土遺物 (1/3)

5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

6層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中からの出土が大部分であるが、量は少ない。

〔時期〕 勝坂式期。

〔所見〕 炉が検出されず問題があるが、掘り込みがしっかりしていることと、多くはないがまとまった土器が出土したことから、住居跡として取り扱った。

83号住居跡出土遺物 (第198図、第320図12)

1は2条の角押文により楕円形の区画が作られるが、内側の上部は波状に施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

2は断面三角形の隆帯を巡らせて口縁部と頸部を画する。隆帯に沿って外側竹管による連続刺突が加えられる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

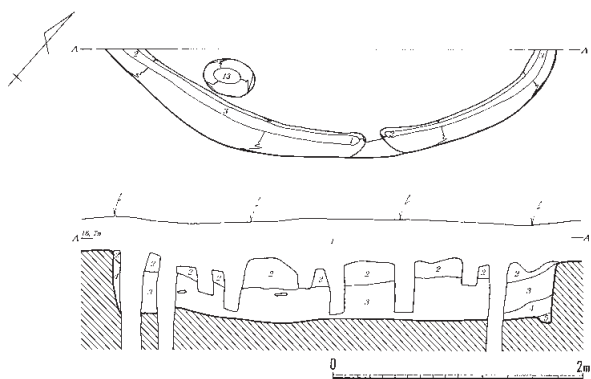
3・4は断面三角形の隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内外には2条一對の三角押文が施される。共に色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。

5は半截竹管による2条一對の沈線により渦巻状の文様が描かれる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

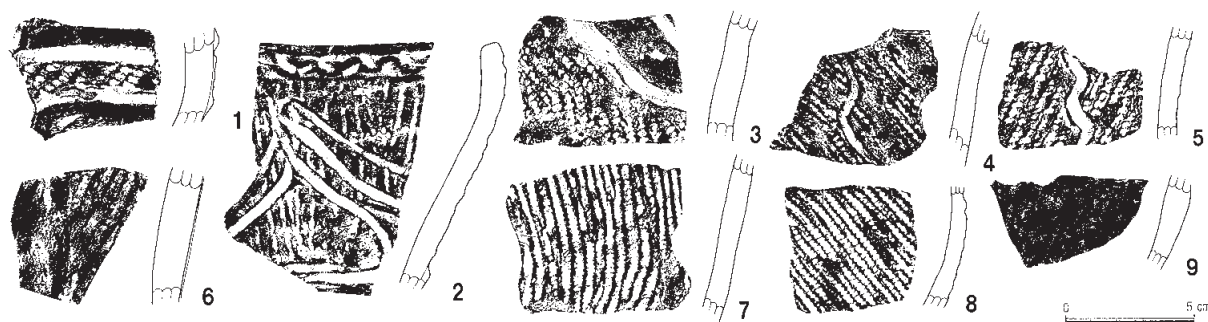
6は隆帯により区画が作られる。区画内は隆帯に沿って2条の沈線が施され、刺突文が充填される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/2) を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

7は隆帯により長楕円形の区画が作られようか。以下、2条一對の沈線を波状に施し、波底部から蛇行する2条の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

8は半截竹管による3条の沈線が巡り、それに沿って刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。



第199図 84号住居跡 (1/60)



第200図 84号住居跡出土遺物 (1/3)

9・10は隆帯に沿って幅広の押引文が施される。9の色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。10の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

11は半截竹管による3条の沈線により区画が作られる。沈線間は浮彫り状になる。沈線に沿って刻みが増えられ、区画内には三叉文や三角形の貼付文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

12は隆帯に沿って蓮華文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

13は隆帯に沿って三角押文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂・輝石を僅かに含む。

第320図12は打製石斧。横長の剥片を使用。刃部は平刃状を呈する。107.1g。硬砂岩製。

すべて覆土中の出土である。

84号住居跡（第199図）

〔位置〕 24Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）40～45cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅18～30cm・下幅5～10cm・深さ1～5cmを測る。（床面）平坦で硬化している。遺存状態は良好である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。硬質。

3層 灰褐色土（7.5YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 褐灰色土（7.5YR4/1）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや粘質。

5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土上層からの出土が多い。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

84号住居跡出土遺物（第200図、第342図4）

1は隆帯により区画が作られる。区画内はRLの単節斜縄文。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

2は連弧文系の土器。条線を地文とする。口縁部には交互刺突による波状文が巡る。沈線を巡らせ口頸部と胴部を画し、3条一組の沈線によって連弧文を描く。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

3はRLの単節斜縄文を地文とする。2条の沈線が弧状に施され、沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

4はRL、5はLRの単節斜縄文を地文とし、蛇行する沈線が垂下する。4の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。5の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

6はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

7・8はRLの単節縄文が施される。7の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。8の色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

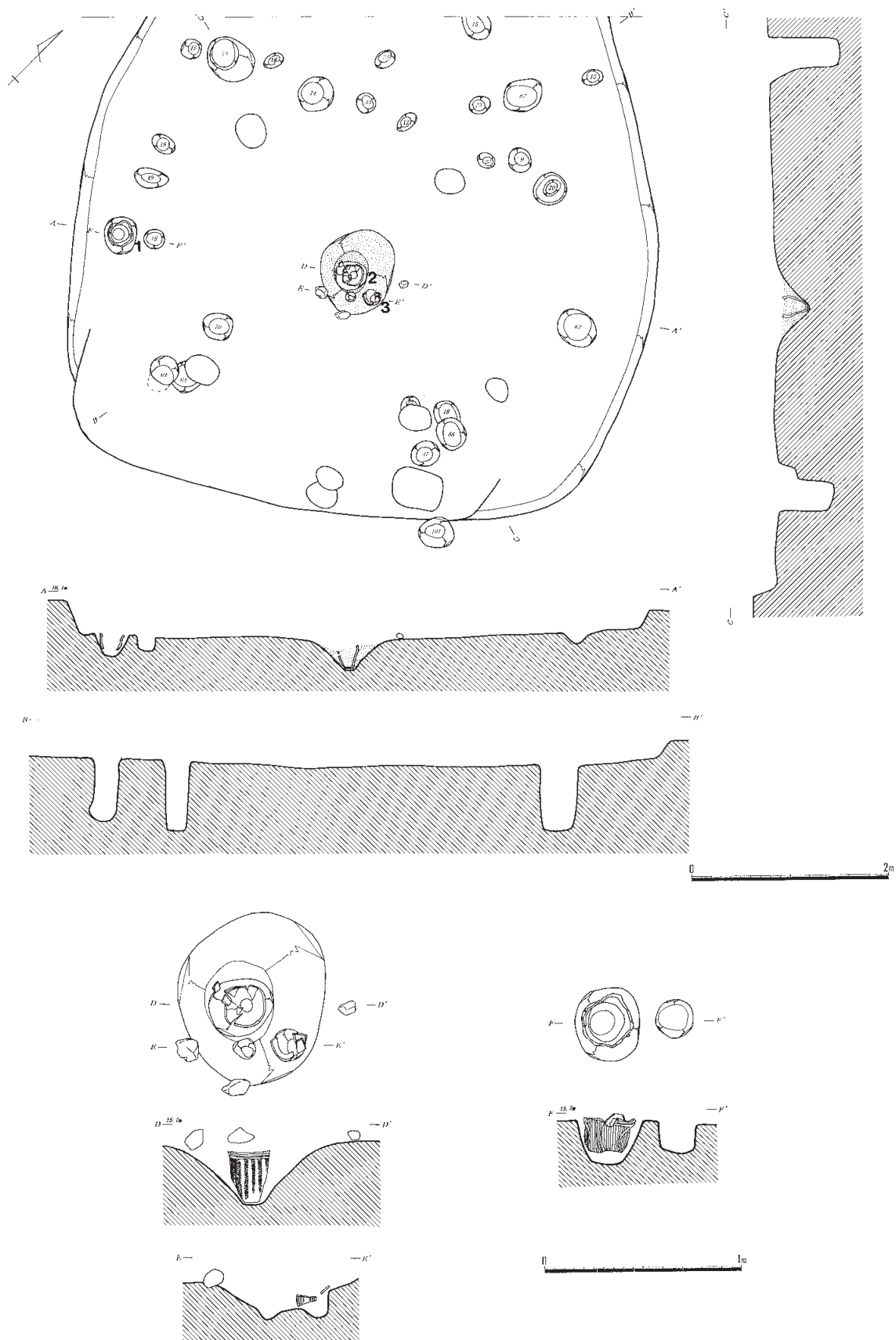
9はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第342図4は平基の打製石鏃。縦長剥片を使用か。1.8g。珪岩製。

すべて覆土中の出土である。

85号住居跡（第201図）

〔位置〕 13Ⅲ地点。



第201図 85号住居跡（1/60）、炉跡、埋甕（1/30）

〔構造〕 北側調査区外。287Yに切られる。(平面形) 不整楕円形。(規模) 不明×590cm。(主軸方位) N-56°-E。(壁高) 28~36cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅13~20cm・下幅10cm前後・深さ18cm前後を測る。南壁側に確認し、北西側で切れる。(床面) 全体に軟弱である。(炉) 住居中央に位置する。深鉢形土器の頸部以下を埋設している埋甕炉で、95×80cm・深さ30cmの楕円形の掘り込みをもつ。(柱穴) 比較的多く検出されているが、深度のある5本が支柱穴と思われる。(埋甕) 西壁下中央に位置する。37×35cm・深さ20cmの楕円形の掘り込みをもち、深鉢形土器を埋設している。

〔覆土〕 287Yに切られ、詳細は不明。床直上の覆土はローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む硬質の黒褐色土(10YR3/2)である。

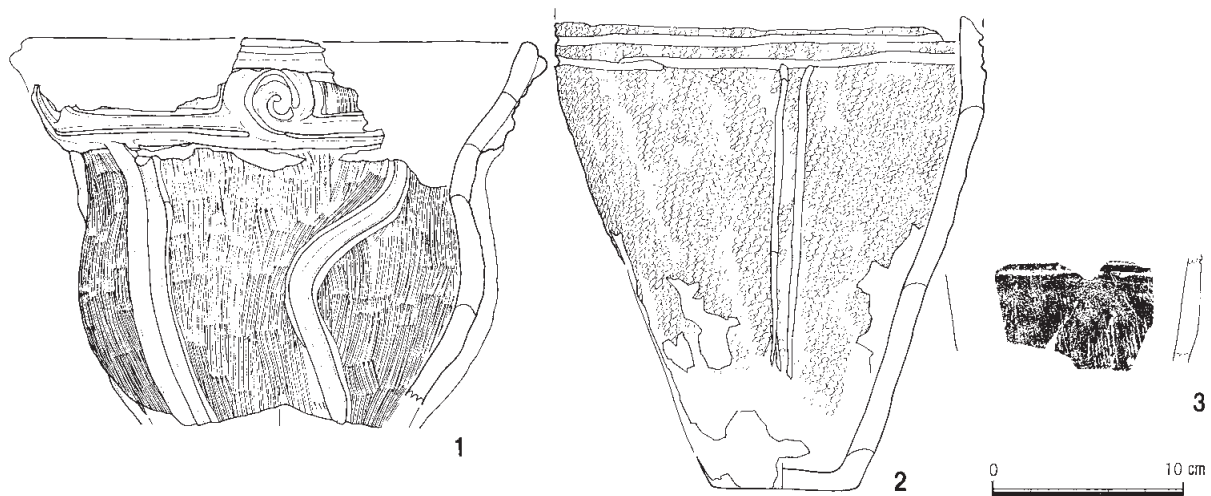
〔遺物〕 覆土中からの出土が大部分であるが、量は少ない。

〔時期〕 加曽利EⅡ式期。

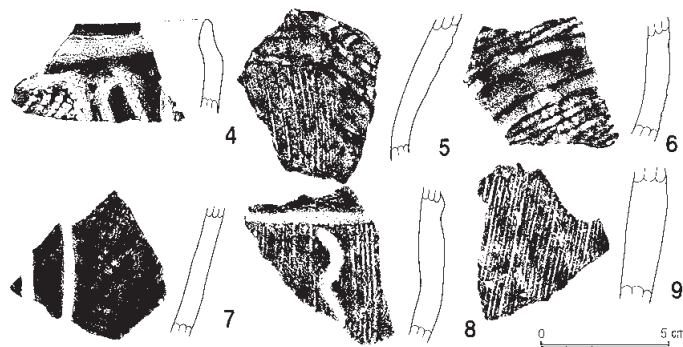
85号住居跡出土遺物(第202・203図、第320図13~15第342図5・6、第348図25~33)

第202図1は埋甕として埋設されていた土器。胴部中位に膨らみをもち、頸部でくびれ、口縁部は僅かに内湾しながら開く。頸部に2本の隆帯を巡らせて口縁部と胴部を画する。口縁部・胴部共に条線を地文とする。口縁部には隆帯による渦巻文と区画がみられる。胴部には蛇行する隆帯と2本一対の直行する隆帯が交互に垂下させて6単位に分割する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

2は炉中央に埋設されていた土器。胴部は底部から直線的に開き、上位で僅かに内湾する。RLの単節斜縄文を地文とし、図示できなかった部分もあるが、2~3条の沈線が巡り、2条一対の沈線が3単位垂下する。色調は赤褐色(5YR4/6)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。



第202図 85号住居跡出土遺物1 (1/4)



第203図 85号住居跡出土遺物2 (1/3)

3は炉東側に埋設されていた土器。条線を地文とし、横位に沈線が施される。色調は明赤褐色(5YR5/8)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第203図4は口唇部下がくぼむ。LRの単節斜縄文を地文とし、沈線による縦長の区画と、「 \cap 」字状文が施されようか。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5は連弧文系土器。条線を地文とし、2条一対の沈線により連弧文が描かれる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

6はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が弧状に施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

7はRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

8は条線を地文にする。沈線を横走させ、そこから蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

9は条線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

第320図13~15は打製石斧。13は撥形に近い。刃部は平刃状を呈する。側縁には敲打痕が認められる。89.8g。硬砂岩製。14は短冊形。表裏面に節理面を大きく残す。刃部は円刃状。82.7g。硬砂岩製。15は横長の剥片を使用。刃部は平刃状。側縁には敲打痕を認める。66.2g。硬砂岩製。15は横長の剥片を使用。刃部は平刃状。側縁には敲打痕が認められる。66.2g。硬砂岩製。

第342図5は二次加工を有する横長剥片。右側縁に加工が加えられる。16.1g。凝灰岩製。

6は縦長の剥片になろう。上下の大部分を欠く。6.3g。黒曜石製。

第348図25~33は土器片錘。29・33は短軸、他は長軸に刻みが加えられる。重量は25が18.7g、26が17.3g、27が22.7g、28が23.3g、29が26.2g、30が35.5g、31が24.2g、32が23.1g、33が28.3gを測る。

第202図1~3を除き、覆土中の出土。

86号住居跡(第204図)

〔位置〕13IV地点。

〔構造〕大部分が調査区外である。290Yに切られる。壁溝が二重に巡り、拡張された可能性が大きい。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)34~45cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅18~25cm・下幅5~15cm・深さ5~21cm、拡張前は上幅20cm前後・下幅10cm前後・深さ16~22cmを測る。(床面)掘り込みは浅いが遺存状態は良好である。(炉)径55cmの円形を呈する地床炉で深さ10cmの掘り込みを持つ。(柱穴)非常に多数検出された。比較的深いものが多い。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。やや硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 褐灰色土(7.5YR4/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。

5層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

6層 灰褐色土(7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

7層 褐灰色土(7.5YR4/1)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや粘質。

〔遺物〕いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層に多くの土器片を含む。

〔時期〕加曾利E I式期。

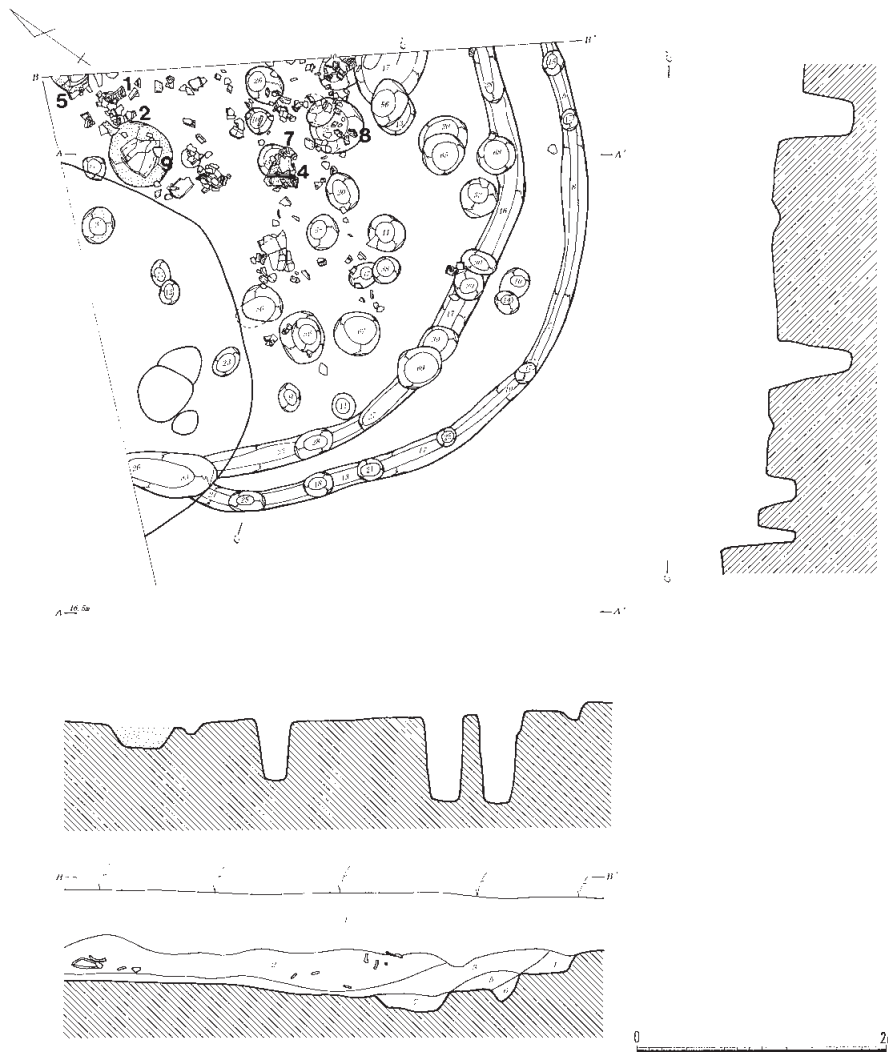
86号住居跡出土遺物（第205・206図、第321図1～4、第342図7～10、第348図34～37）

第205図1は円筒形の土器であるが口縁部が僅かに外湾する。口唇部上には尖頭状の突起と幅広の板状の突起が付く。尖頭状の突起からは、縦位の沈線を加えて二筋に分割した隆帯を垂下させ、胴部上位の文様帯まで伸びて耳状の突起になる。胴部上位の文様は、刻みが加えられた隆帯による渦巻文などが連結して貼付され、空白部には沈線による三叉文や三角形文などが充填される。胴部下位はRLの単節縄文が施される。色調は上半が灰褐色（7.5YR4/2）、下半がにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

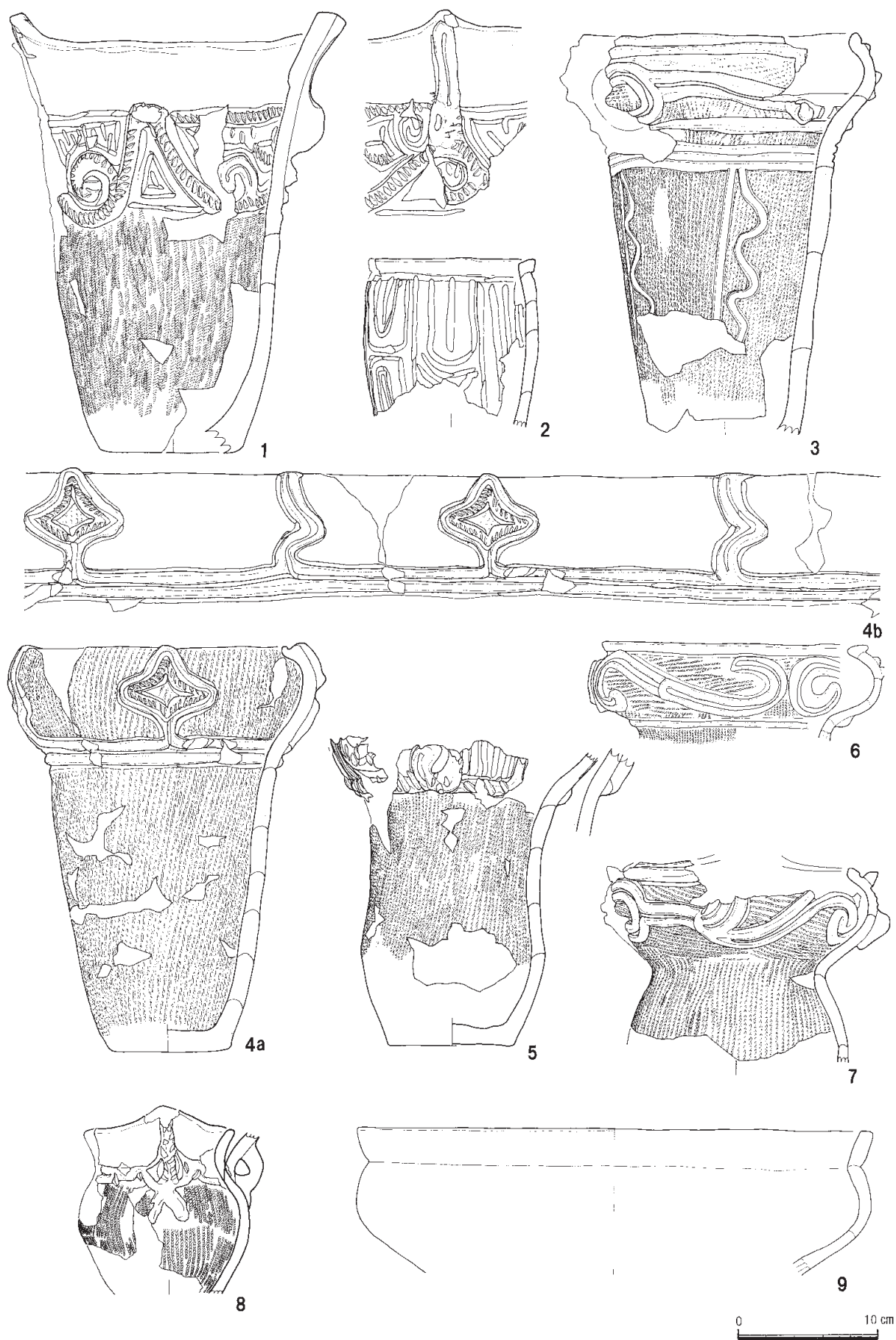
2は胴部下位がやや膨らむ。口唇部下に1条の沈線を巡らせ、3条一組の沈線を5単位垂下させて画し、区画内上半には「U」字状の重弧文、下半には「∩」字状の重弧文や三叉文などが配される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

3は胴部が直線的に開き、口縁部は内湾する。Lの捺糸文を縦位に施し地文とする。頸部に半截竹管による3条一組の沈線を巡らせ、口縁部と胴部を画する。口縁部は2本一對の隆帯による渦巻文や区画が作られる。胴部には半截竹管による直行・蛇行する平行沈線を一組にした懸垂文が4単位施される。色調は上半が灰褐色（7.5YR4/2）、下半が明赤褐色（2.5YR5/8）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は胴部が直線的に開き、口縁部は内湾する。Rの捺糸文をほぼ縦位に施して地文とする。頸部に2本の隆帯を巡らせて口縁部と胴部を画する。口縁部の文様は、2本一對の隆帯を相対する器面にそれぞれ菱形状・蛇行状に貼



第204図 86号住居跡 (1/60)



第205図 86号住居跡出土遺物1 (1/4)

付したものである。菱形の貼付文の内側の隆帯には刻みが加えられている。色調は上半が灰褐色（7.5YR4/2）、下半が赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は胴部下位が膨らみや算盤玉状を呈する。口縁部は外反する。Lの撚糸文を縦位に施して地文とするが、胴部下位は無文になる。頸部には刻みが加えられた隆帯が巡り、口縁部と胴部を画する。口縁部には隆帯による渦巻文や区画がなされ、区画内には集合する沈線が充填される。色調は明褐色（7.5YR5/8）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6は1/4程の破片からの推定復元。口縁部は強く内湾する。頸部に隆帯を巡らせて口縁部と胴部を画する。Lの撚糸文を口縁部では横位に、胴部では縦位に施して地文とする。口縁部には2本一対の隆帯による「∞」字状文が作られる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

7は1/3程の破片からの推定復元。頸部が強くくびれ、口縁部と胴部は内湾する。口唇部上には突起が付いていたようである。Lの撚糸文を口縁部では横位、胴部では縦位に施して地文とする。口縁部は2本一対の隆帯を「∞」字状に貼付する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

8は小型の壺状を呈する土器。胴部上位が膨らみ、口縁部は僅かに外湾する。口唇部上には山形の突起が2単位、対向して付く。突起からは刻みが加えられた隆帯が垂下するが、1ヵ所は橋状の把手になる。胴部にはLの撚糸文が縦位に施して地文とする。頸部には隆帯が巡るが、把手の脇には刺突文が加えられる。また、隆帯が2本になっている部分は鎖状隆帯になっている可能性がある。把手下の胴部上位には「ハ」字状の貼付文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

9は浅鉢形土器。1/2程の破片からの推定復元。体部上位が強く内湾し、口縁部は短く外反する。色調は明黄褐色（10YR6/6）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第206図10は口唇部上に突起が付き、そこから刻みが加えられた隆帯が垂下する。口唇部には刻みがつけられる。口縁部の文様は、半截竹管による3条一組の沈線で三角形・平行四辺形の区画が作られ、区画内には三叉文などが充填される。空白部には刻みが密集して施される。胴部には刻みがある隆帯で区画が作られようか。区画内には隆帯に沿って沈線と刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11は波状口縁の土器。波頂部は刻みが加えられ双頭状を呈する。口唇部には刻みが巡らされる。2条一対の沈線により「U」字状の文様を描く。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

12は口唇部上に上端がくぼむ突起が付き、そこから刻みが加えられた隆帯が垂下し、そのまま曲線的なモチーフを描くようである。沈線と刺突の組み合わせによる波状文、縦位の三角押文を充填した半円形区画が配される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

13は綾杉状の刻みや沈線が付加された隆帯により区画が作られ、区画内には三叉文が充填される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

14は綾杉状及び斜位の刻みが加えられた隆帯により上下を画する。空白部には沈線による文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

15は沈線による同心円文や三叉文などが施され、沈線間には刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

16・17は同一個体か。半截竹管による3条一組の沈線で区画が作られる。区画内には沈線に沿って爪形文と径の小さい半截竹管の押捺が連続して加えられる。空白部には半截竹管の刺突が並列して施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

18は隆帯と半截竹管による平行沈線を上下に施して区画する。区画内には隆帯を鉤状に貼付し、空白部には三叉文や連続爪形文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

19は口縁部に細隆帯による波状文が巡る。以下、Lの撚糸文を地文とし、隆帯が渦巻状・弧状に貼付される。色



第206図 86号住居跡出土遺物 2 (1/3)

調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

20は広い口縁部に隆帯による環状の貼付文がみられる。胴部にはRLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

21はLの撚糸文を地文とする。口唇部の小突起から刻みが加えられた隆帯が垂下し、刻み付きの隆帯が弧状に貼付される。色調は灰褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

22はLの撚糸文を縦位・斜位に施して地文とする。隆帯を横走させて口縁部と胴部を画する。口縁部には隆帯を鋸歯状に貼付する。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

23～29はキャリパー形土器の口縁部。23・24はLの撚糸文を地文とし、隆帯が貼付される。23の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。24の色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。25・26は同一個体か。LRの単節斜縄文を地文とし、隆帯による区画が作られる。色調は灰褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。27～29は隆帯を渦巻状などに貼付する。27の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。28・29の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

30は3条の沈線を横走させ、頸部と胴部を画する。頸部は無文帯になる。胴部にはRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

31はLの撚糸文を地文とし、2条一対の波状沈線文が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第321図1～4は打製石斧。1は撥形。刃部は円刃状。221.3g。硅岩製。2～4は短冊形。2の刃部は平刃状。側縁には僅かに敲打痕が認められる。114.7g。凝灰岩製。3は横長の剥片を使用。表面には礫面を残す。刃部は平刃状。側縁には敲打痕が認められる。4は横長の剥片を使用。刃部は平刃状。133.6g。硬砂岩製。

第342図7・8は凹基の打製石鏃。7は縦長剥片を使用。1.2g。硅岩製。8は0.6g。黒曜石製。

9は削器。縦長剥片を使用。右側縁に分厚いスクレイパーエッジを形成する。3.2g。黒曜石製。

10は二次加工を有する剥片。縦長剥片を使用。右側縁に加工が加えられる。9.1g。凝灰岩製。

第348図34～37は土器片錘。36が短軸に、他は長軸に刻みが加えられる。重量は34が15.7g、35が14.8g、36が24g、37が27.5gを測る。

すべて覆土中からの出土である。

87号住居跡（第207図）

〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 南東側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）30～32cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～30cm・下幅5～12cm・深さ12cm前後を測る。（床面）全体に軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）1本のみ検出した。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を含む。硬質。

3層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 黒褐色土（7.5YR3/4）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや粘質。

5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。粘質。

〔遺物〕 覆土上層から出土するが、量は少ない。

〔時期〕 中期。

87号住居跡出土遺物（第208図）

1 は刻みが加えられた隆帯で区画を作る。区画内には三叉文などが充填される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

2 は隆帯に沿って、幅広の角押文と三角押文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

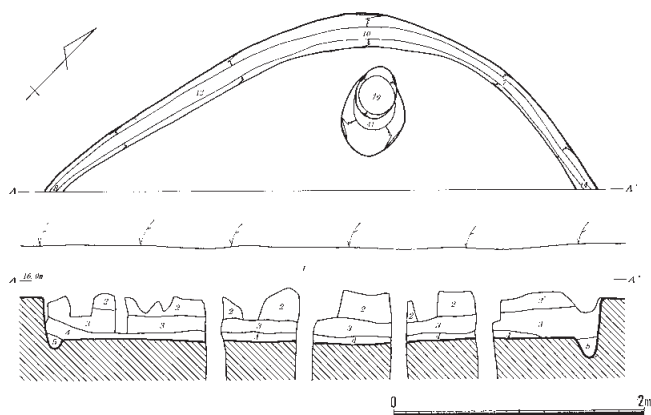
3 は刻みが加えられた隆帯に沿って、上位に3条、下位に2条の角押文が施される。以下、外側竹管の刺突が多段に加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

4・6 は刻みが加えられた隆帯が貼付される。6 はRLの単節斜縄文が施される。4の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。6の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

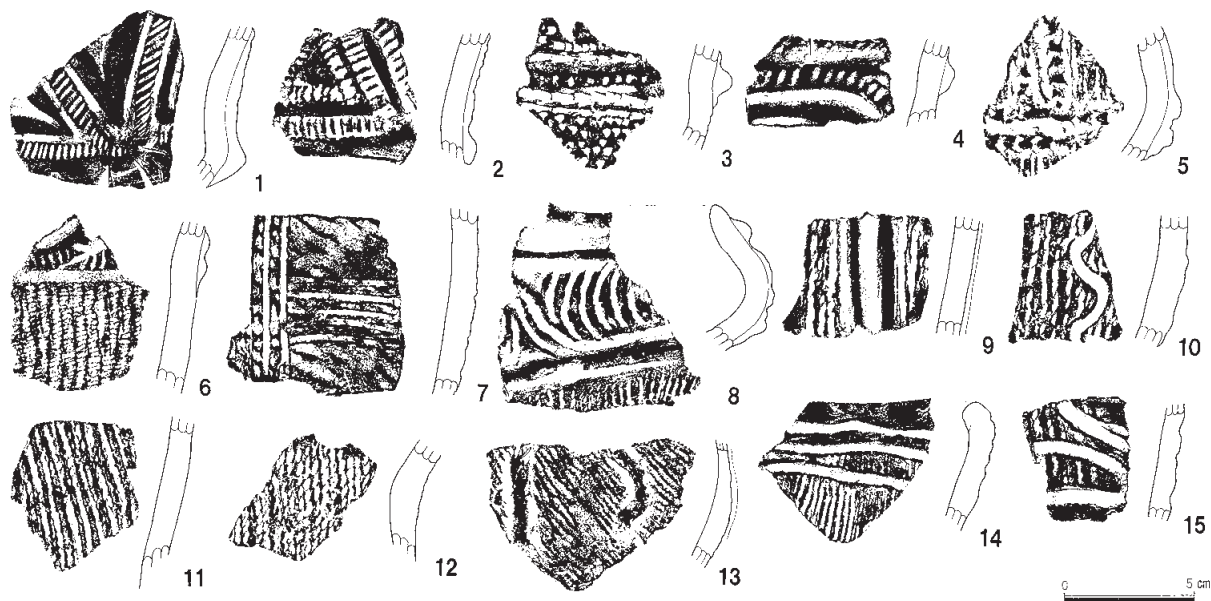
5 は条線を地文とし、半截竹管の刺突が連続して加えられた隆帯が、2本一対で貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7 はRの無節斜縄文を地文とし、横位・縦位に多条の沈線を施す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

8 は口縁部に沈線による連続する弧線が施される。胴部はLの撚糸文になる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を含む。



第207図 87号住居跡（1/60）



第208図 87号住居跡出土遺物（1/3）

9～12・15はLの撚糸文が施される。9は2本一組の隆帯が垂下する。10は蛇行する沈線が垂下する。15は沈線が弧状に施される。9の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。10の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。11の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。12の色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を含む。15の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

13はLRの単節斜縄文を地文とし、直行・蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

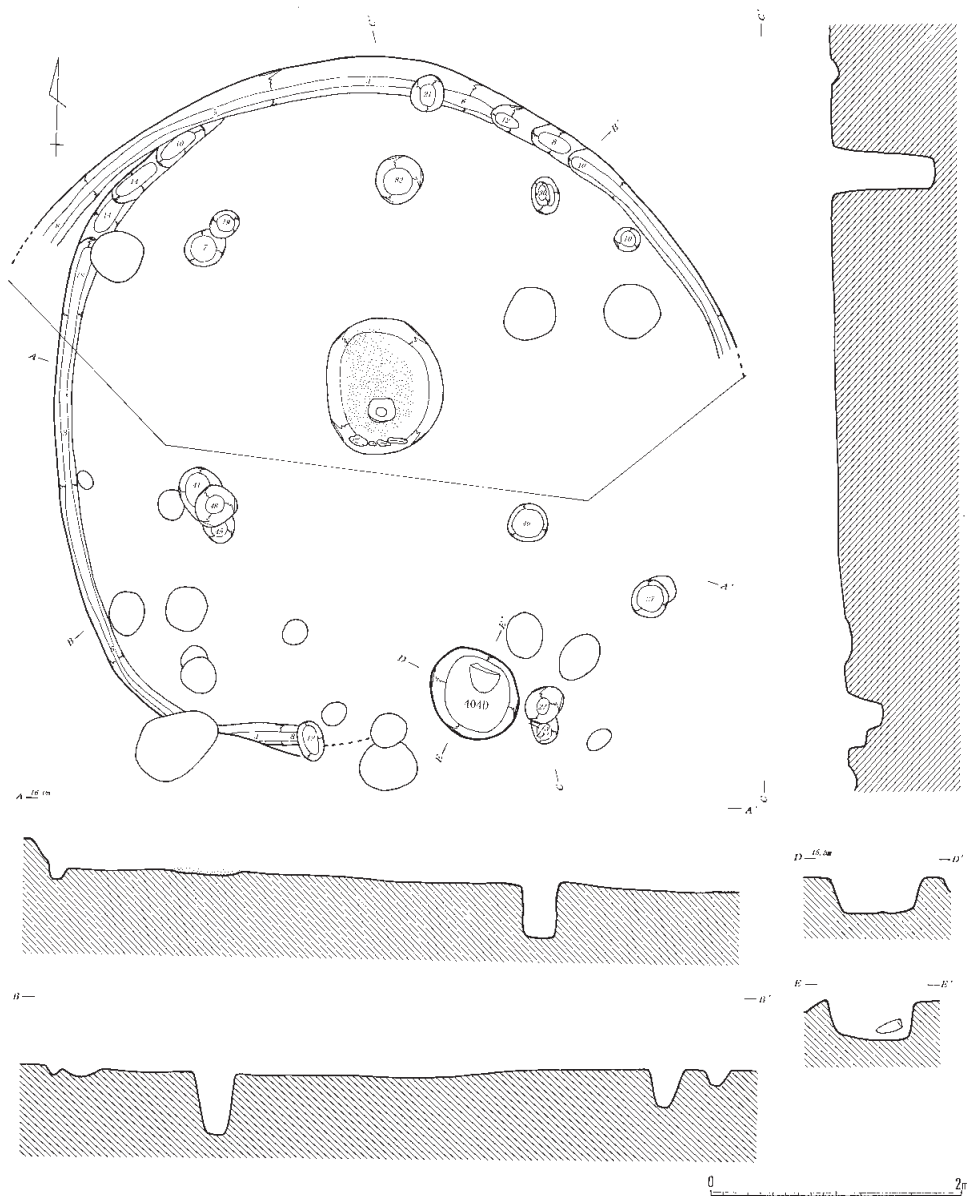
14は条線を地文とし、沈線を横走させる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

すべて覆土中の出土である。

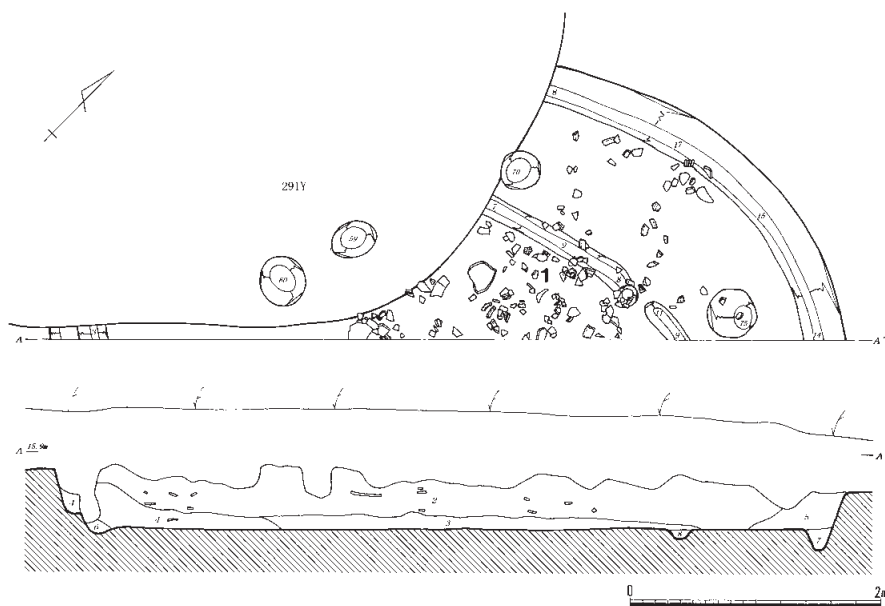
88号住居跡（第209図）

〔位置〕 13Ⅲ地点。

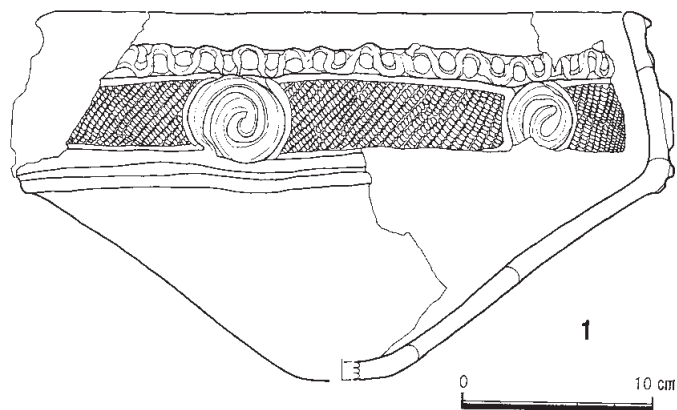
〔構造〕 289・292Yに切られる。（平面形） 楕円形か。（規模） 550×540cm。（主軸方位） N—S。（壁高） 43cm前後



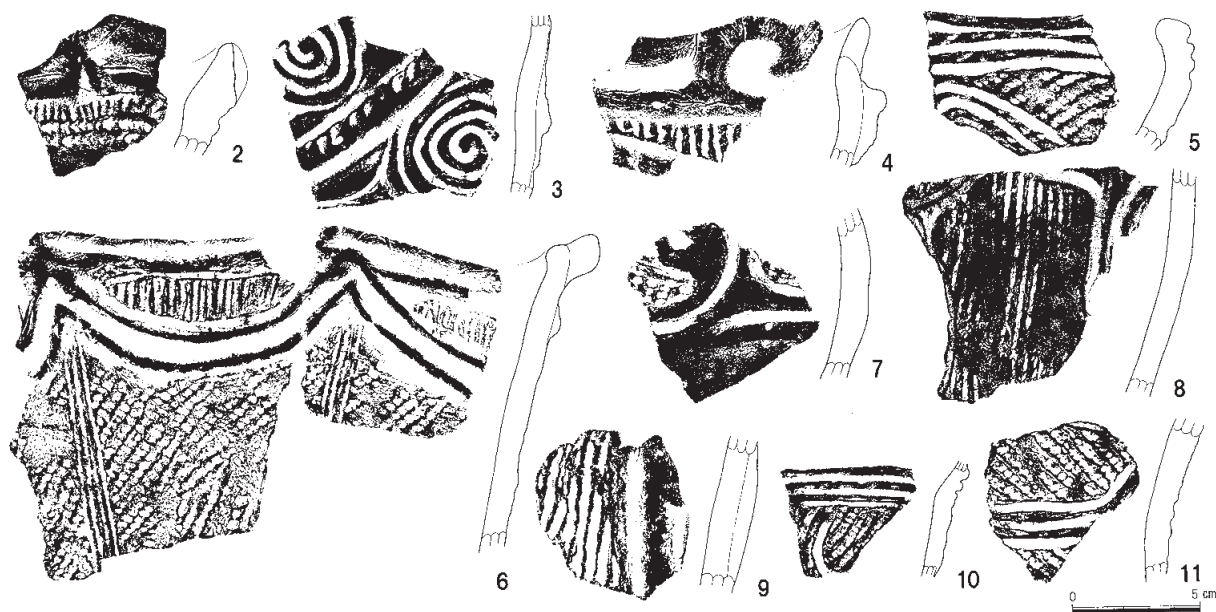
第209図 88号住居跡、404号土坑（1/60）



第210図 89号住居跡 (1/60)



第211図 89号住居跡出土遺物1 (1/4)



第212図 89号住居跡出土遺物2 (1/3)

を測り、確認できる部分では60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅15~30cm・下幅5~10cm・深さ3~12cmを測る。(床面) 289・292Yにより破壊されている部分を除き、壁際を除いて良好である。(炉) 住居中央から北側に偏って位置する。石囲埋甕炉で深鉢形土器の上半部を埋設している。107×92cm・深さ17cmの楕円形の掘り込みをもつ。(柱穴) 9本のピットが検出されたが、支柱穴は判然としない。

〔覆土〕床面直上の覆土はローム粒子を僅かに含む黒褐色土(10YR3/2)であるが、289・292Yに破壊されているため、詳細は不明。

〔遺物〕289・292Yにより破壊されているため、出土量は多くない。なお、炉内から骨片が検出されている。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

88号住居跡出土遺物

『志木市遺跡群 15』を参照。

89号住居跡(第210図)

〔位置〕13Ⅲ地点。

〔構造〕南側調査区外。291Yに切られる。壁溝が二重に巡り、拡張された可能性が大きい。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)37~39cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅16~38cm・下幅6~13cm・深さ8~17cm、拡張前は上幅20cm前後・下幅8cm前後・深さ3~9cmを測る。(床面)住居壁際を除き、硬化している。(炉)検出されなかった。(柱穴)4本検出された。いずれも深度がある。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 4層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 7層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや粘質。
- 8層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕覆土上層から土器片が多く出土した。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

89号住居跡出土遺物(第211・212図、第321図5、第348図38・39)

第211図1は浅鉢形土器。1/4弱程の破片からの推定復元。体部は僅かに外湾しながら開き、口縁部は内傾する。頸部には2本の隆帯が巡り、口縁部と体部を画する。口縁部にはRLの単節斜縄文を施して地文とする。口唇部下に隆帯を巡らせ、交互に押捺を加えることによって鋸歯状に仕上げる。隆帯による渦巻文を配することによって区画を作る。体部は無文になる。色調はにぶい褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第212図2は波状口縁になろうか。口縁部に縦長の貼付文がみられる。口縁部に沿って角押文と2条の三角押文が施される。色調は黄褐色(10YR5/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

3は半截竹管による刺突が加えられた隆帯が貼付され、沈線による渦巻文がみられる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

4は小波状口縁になろうか。波頂部には渦巻文がみられる。以下、Lの撚糸文を地文とし、隆帯が貼付される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

5はRLの単節斜縄文を地文とする。口縁部に3条の沈線を巡らせ、3条一組の沈線を弧状に施す。色調は灰褐

色（10YR6/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

6は口唇部上の小突起を基点にして、2本一対の隆帯により弧状の区画を作る。区画内には集合する沈線が充填される。胴部はRLの単節斜縄文を地文とし、突起部から半截竹管による4条一組の沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

7は低い浮彫り状の隆帯により区画が作られるようだ。区画内はRLの単節縄文になる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

8はLの撚糸文を地文とし、沈線が弧状に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

9はRの撚糸文を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10は3条の沈線を横走させる。RLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線を弧状に施す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

11はLRの単節斜縄文を地文とし、3条一組の沈線が弧状に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第321図5は短冊形の打製石斧。横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。刃部は平刃状を呈する。272.2g。硬砂岩製。

第348図38・39は土器片錘。共に長軸に刻みが加えられる。重量は38が15.7g、39が27.5gを測る。

すべて覆土中の出土である。

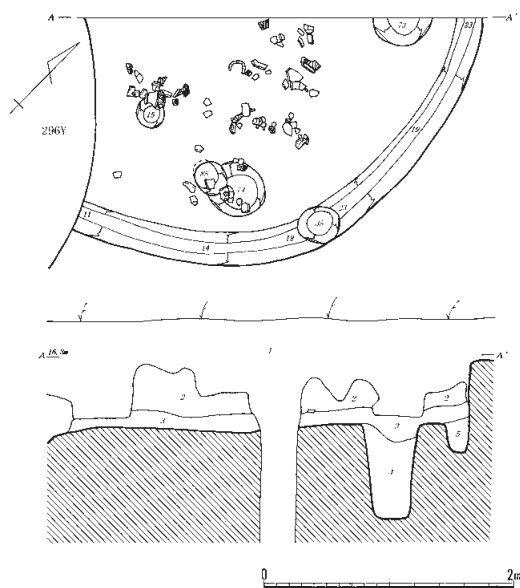
90号住居跡（第213図）

〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 北側調査区外。296Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）43～48cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅20～30cm・下幅8～13cm・深さ11～23cmを測る。（床面）柱穴間に硬化面が認められるが、全体に軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）2本が主柱穴の一部になるうか。

〔覆土〕

1層 耕作土。



第213図 90号住居跡（1/60）

- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや粘質。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土上層に土器片が多く含まれる。

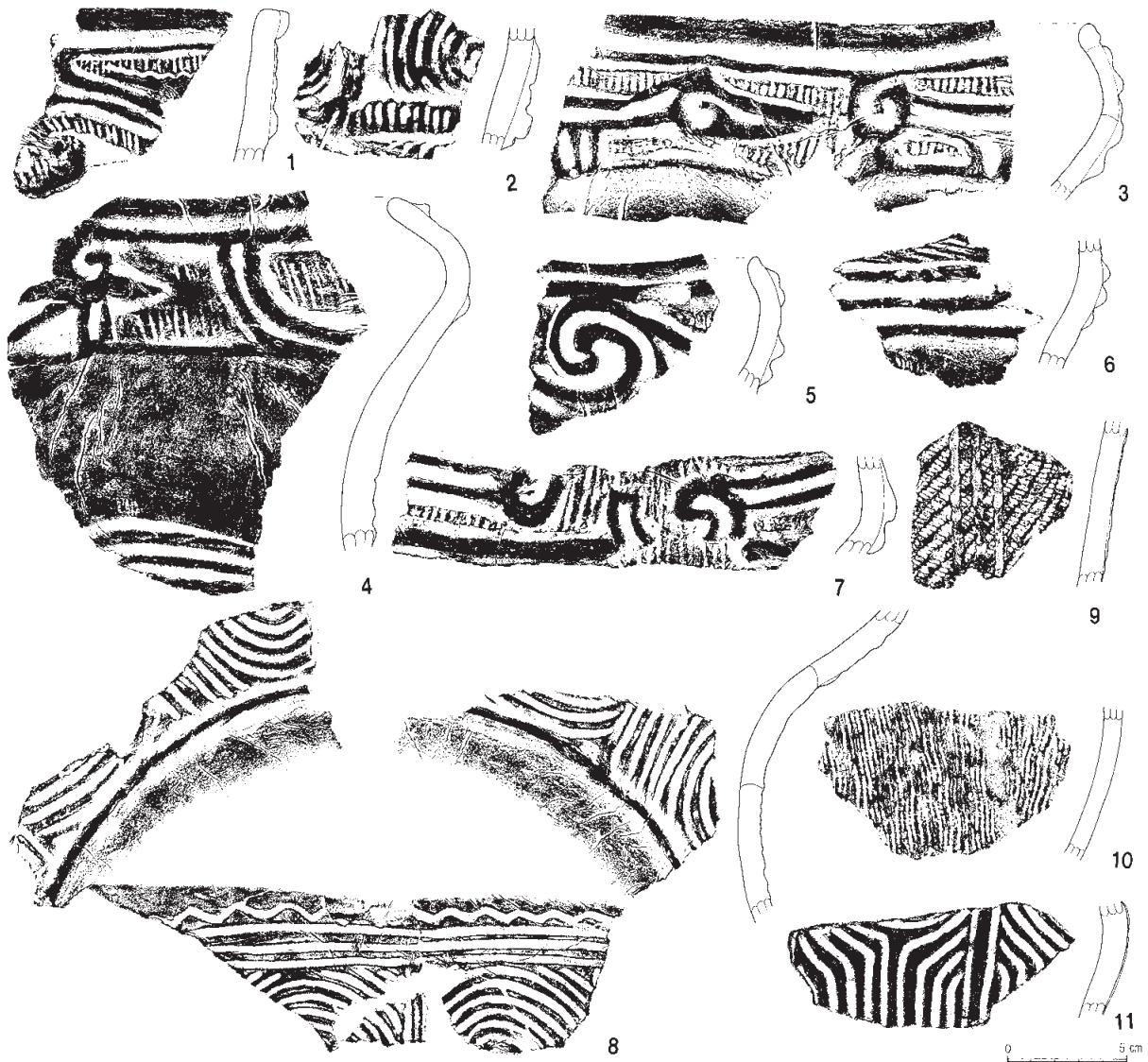
〔時期〕 加曾利E I 式期。

90号住居跡出土遺物 (第214図、第321図6～8)

第214図1は沈線による区画内に蓮華文が充填される。以下、刻みが加えられた隆帯による渦巻文が貼付される。色調はにぶい黄橙色 (10YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。

2は刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画内は沈線による渦巻文になろうか。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を含む。

3～8はキャリパー形の土器。3は隆帯により口縁部と頸部を画する。口縁部はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯を渦巻状などに貼付する。頸部は無文帯になる。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/4) を呈し、粗砂を僅かに含む。4は隆帯により口縁部と頸部、3条の沈線により頸部と胴部を画する。口縁部はLの撚糸文を地文とし、2



第214図 90号住居跡出土遺物 (1/3)

本一対の隆帯により渦巻文や区画が作られる。頸部は無文帯になる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。5は撚糸文を地文とすると思われる。2本一対の隆帯による渦巻文が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。6は3本の隆帯により口縁部と頸部を画する。口縁部にはLの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。7はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯により渦巻文などが貼付される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。8は隆帯により口縁部と頸部を、波状沈線と3条の沈線により頸部と胴部を画する。口縁部と胴部は沈線により渦巻文などが施される。頸部は無文帯になる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9はRLの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10はRの撚糸文が施されようか。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

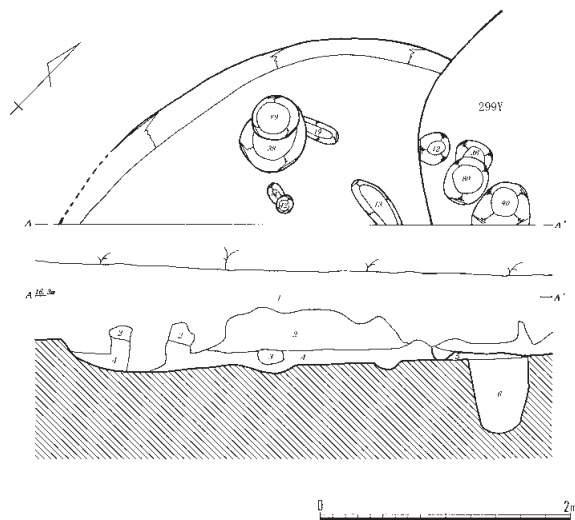
11は2条一対の沈線を垂下させ、両側に沈線を弧状に施す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第321図6～8は打製石斧。いずれも短冊形。6は横長の剥片を使用。表面には礫面を残す。刃部は平刃状。104.3g。硬砂岩製。7は横長の剥片を使用。表面には大きく礫面を残す。刃部は平刃状。45.6g。硬砂岩製。8は縦長の剥片を使用か。62.4g。粘板岩製。

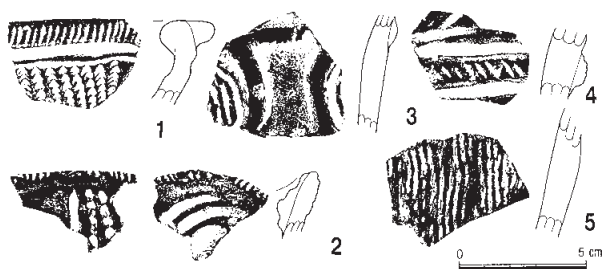
すべて覆土中からの出土。

91号住居跡（第215図）

〔位置〕 13IV地点。



第215図 91号住居跡（1/60）



第216図 91号住居跡出土遺物（1/3）

〔構造〕 南側調査区外。299Yに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 21~40cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に軟弱である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土 (2.5Y2/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。硬質。
- 3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロック。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや粘質。
- 5層 黒色土 (2.5Y2/1)。ローム粒子を含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 大部分の遺物は覆土上層に含まれるが、量は少ない。

〔時期〕 中期。

91号住居跡出土遺物 (第216図)

1は肥厚する口縁部に刻みが加えられる。口唇部下に沈線を巡らせ、以下、三角形の押引文を縦位に集合して施す。色調は褐灰色 (5YR4/1) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

2は波状口縁の波頂部か。口唇端部には刻みが加えられる。2条の沈線が垂下し、沈線間には2条の押引文が施される。内面には2条の沈線が弧状に施される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

3は隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は刻みがある隆帯が横位に貼付される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5はLの捺糸文が施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

すべて覆土中からの出土である。

92号住居跡 (第217図)

〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 北西側調査区外。壁と壁溝は間隔が空いていて、拡張されている可能性が大きい。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×470cm。拡張前は不明×370cm。(主軸方位) N-50°-W。(壁高) 30~49cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 壁より50cm前後内側に巡る。途切れる部分もあるが、上幅12~34cm・下幅5~25cm・深さ3cm前後を測る。(床面) 住居壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。浅鉢形土器を埋設した埋甕炉で、50×40cm・深さ20cmの楕円形の掘り込みをもつ。(柱穴) 拡張後の主柱穴は深度がある6本が該当しよう。炉の南側に、ほぼ等間隔に環状に巡るピットが検出されたが、性格は不明。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多くの土器片が出土した。

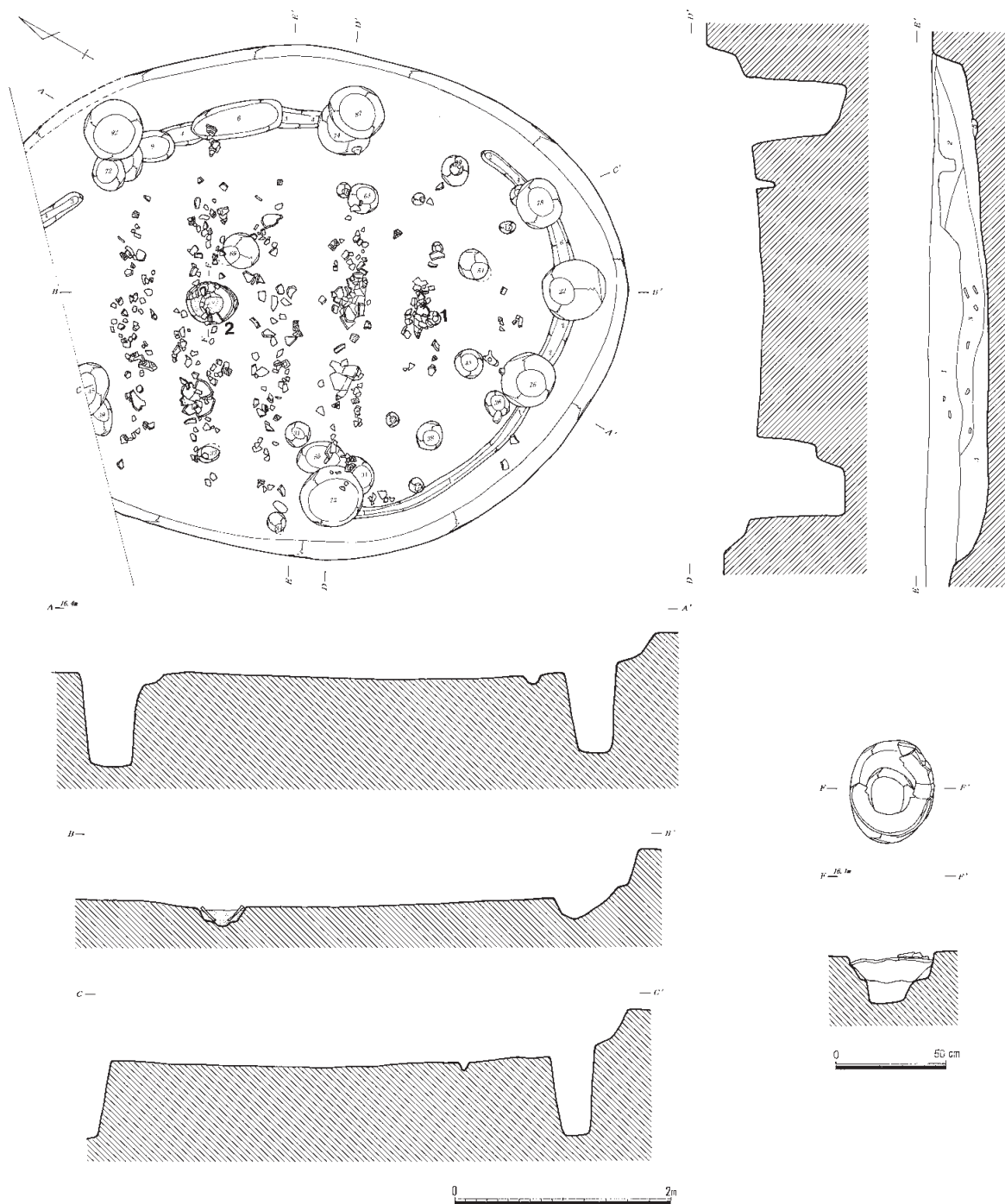
〔時期〕 勝坂式期。

92号住居跡出土遺物（第218・219図、第321図9～15、第329図11、第342図11～16、第348図40～43）

第218図1は1/2程の破片からの推定復元。胴部上位が膨らみ、頸部がくびれ、口縁部は内湾する。口唇部は内屈し、口唇端部は平坦になる。頸部には部分的に交互刺突が加えられた隆帯が巡り、口縁部と胴部を画する。口唇部は菱形に押捺される。胴部には刻みを加えられた隆帯を弧状に貼付して区画を作る。空白部には刺突文や沈線による文様が充填される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

2は炉に埋設されていた浅鉢形土器。体部は直線的に開き、「く」字状に屈曲し、口縁部は内屈する。口縁部には3条の沈線を横走させる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には白色チャート・輝石を多く含む。

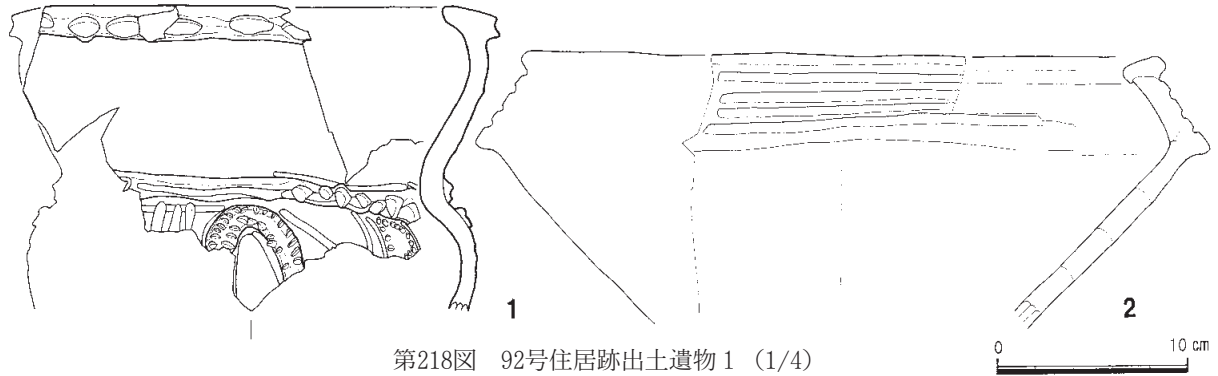
第219図3は隆帯を弧状に貼付して区画を作ろうか。口唇部下と隆帯に沿って2条の三角形の押引文が施される。



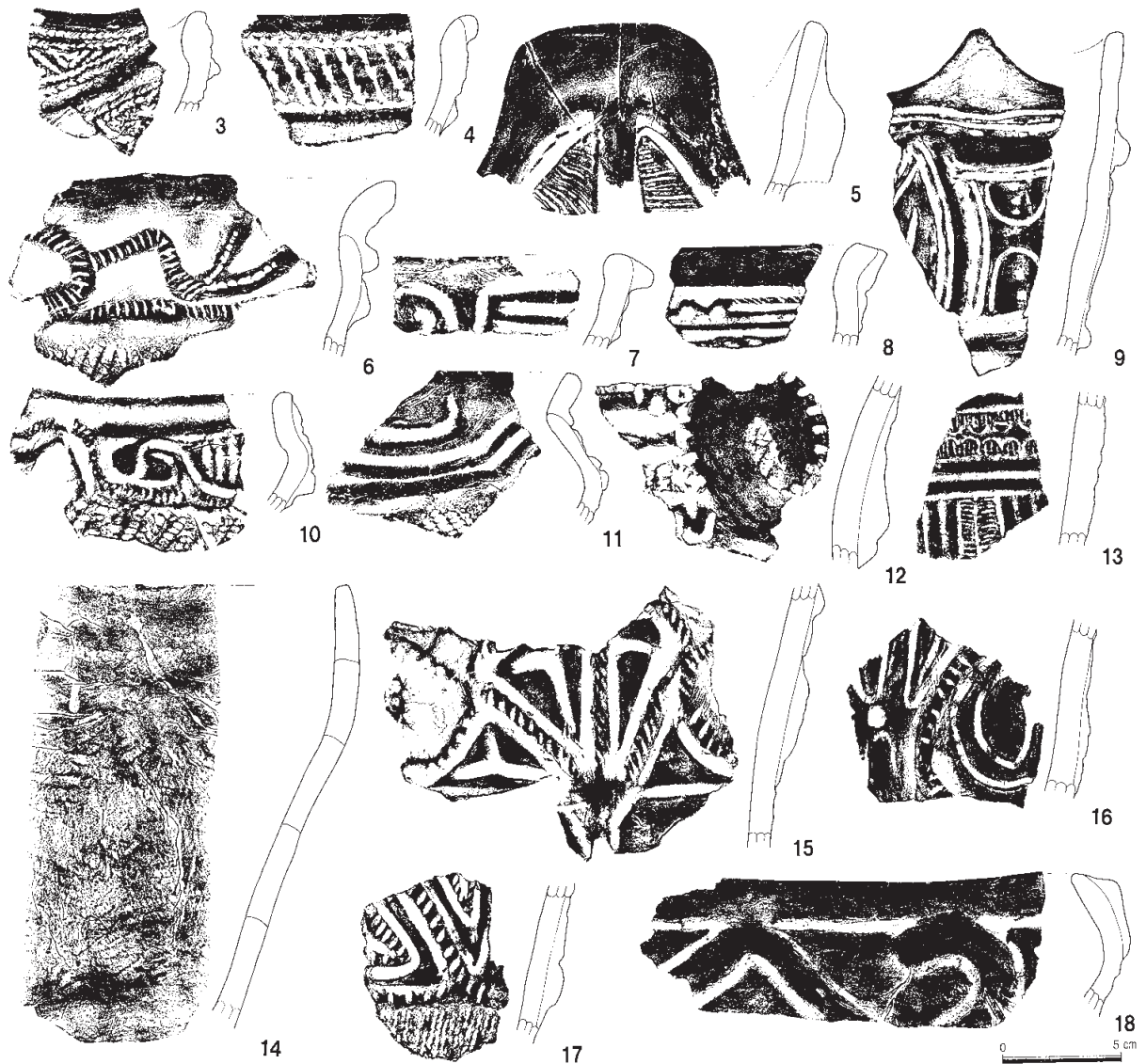
第217図 92号住居跡（1/60）、炉跡（1/30）

区画内に充填される三角形の押引文は重鋸歯状になろうか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

4は隆帯を横走させ口縁部と胴部を画する。口唇部に三角形の押引文を巡らせ、斜位の集合する三角形の押引文が充填される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。



第218図 92号住居跡出土遺物1 (1/4)



第219図 92号住居跡出土遺物2 (1/3)

5は板状の大型突起。隆帯の両側に横位・斜位の集合する沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

6は刻みや三角形の押引文が付加された隆帯が弧状に貼付される。胴部はLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

7は肥厚する口唇部下に沈線による文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

8は太沈線と円形刺突文、沈線間の刻みで文様が構成される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

9は波頂部が尖頭状を呈する波状口縁の土器。隆帯による区画が作られ、区画内には沈線による。「U」・「∩」字状文などが充填される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

10は刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画内には弧状の沈線文や縦位に集合する三角形の押引文が充填される。胴部にはLRの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

11は2本の隆帯により口縁部と胴部を画する。口縁部には沈線が弧状に施される。胴部にはRLの単節斜縄文がみられる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

12はLRの単節斜縄文を地文とし、交互刺突が加えられた隆帯や外縁に刻みがつけられた幅広の隆帯が貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

13は半截竹管により横位・縦位に平行沈線が施され、沈線間には蓮華文や刻みが充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

14はRの無節縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

15～17は刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画内には三叉文や円文などが充填される。17の胴部にはLの撚糸文が施されている。15の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。16の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。17の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

18は浅鉢形土器。隆帯が渦巻状に貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第321図9～15は打製石斧。9～13は短冊形。9の刃部は円刃状を呈する。41.4g。粘板岩製。10は横長の剥片を使用。刃部は平刃状。36.7g。石灰岩製。11は縦長の剥片を使用。表面には大きく礫面を残す。刃部は平刃状。126g。硬砂岩製。12は横長の剥片を使用。刃部は円刃状。67.5g。硬砂岩製。13は横長の剥片を使用。刃部は斜刃状。側縁には敲打痕が認められる。77.7g。硬砂岩製。14は刃部が尖る。側縁には敲打痕が認められる。132.2g。硬砂岩製。15は右側縁が弧を描く。刃部は平刃状。97.6g。凝灰岩製。

第329図11は磨製石斧。刃部は円刃状を呈する。120g。硬砂岩製。

第342図11・12は凹基の打製石鏃。共に縦長剥片を使用か。11は0.8g。黒曜石製。12は0.7g。硅岩製。

13は使用痕がある縦長の剥片。右側縁に刃こぼれが認められる。1.8g。黒曜石製。

14は縦長、15・16は幅広の剥片。14は2.2g、15は3.3gで黒曜石製。16は24.1gで凝灰岩製。

第348図40～43は土器片錘。いずれも長軸に刻みが加えられる。重量は40が11g、41が14.7g、42が20.8g、43が29.4gを測る。

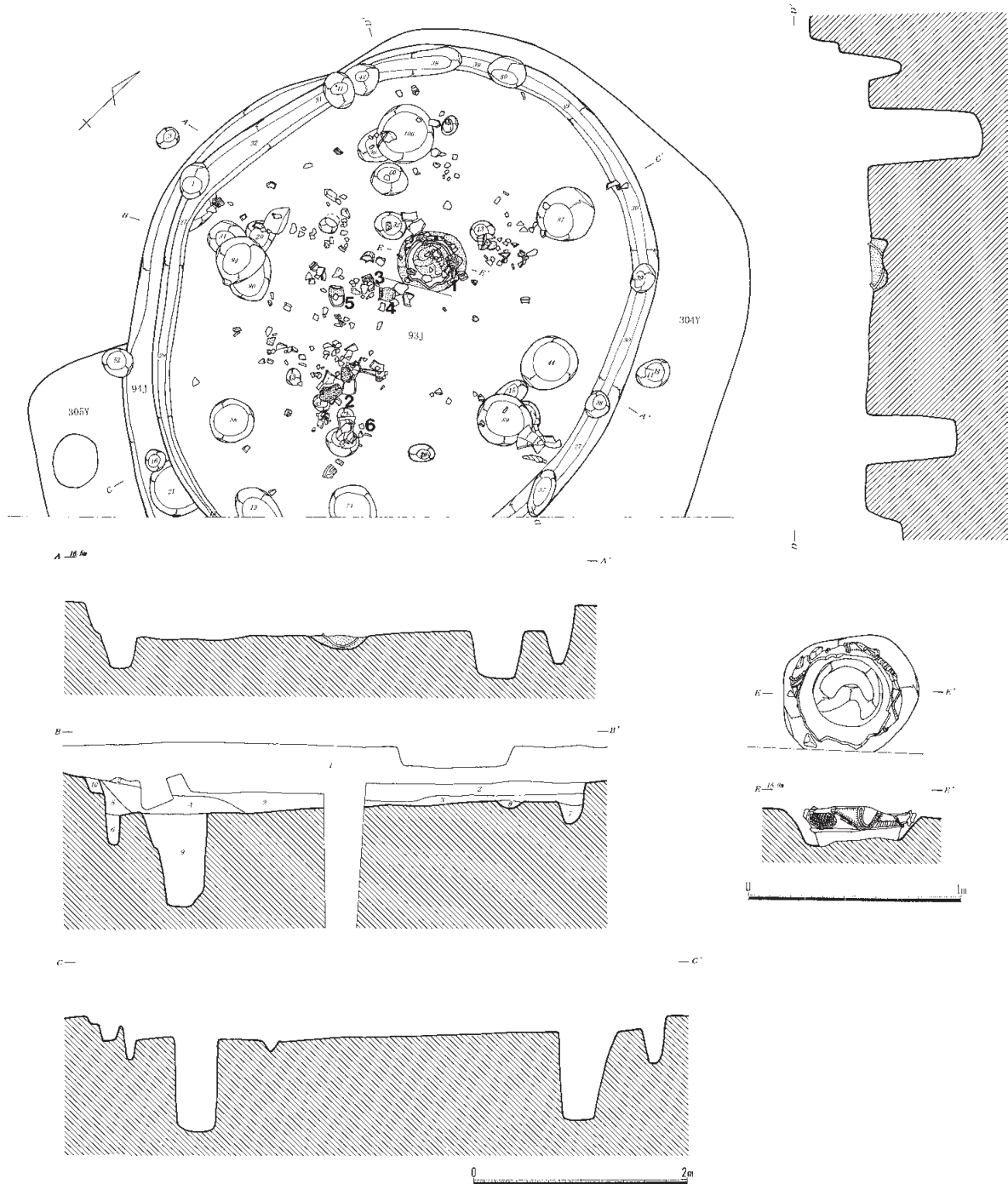
第218図2を除き、覆土中からの出土である。

93号住居跡（第220図）

〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 南側調査区外。94 Jを切る。304・305 Yに切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×440cm。（主軸方位）N—12°—W。（壁高）50～60cmを測り、75° 前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅20～30cm・下幅10～15cm・深さ27～33cmを測る。（床面）住居壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。（炉）住居中央から北に偏って位置する。深鉢形土器の上半部を埋設した埋甕炉で、不明×60cm・深さ15cmの楕円形の掘り込みをもつ。（柱穴）深度のある6本が支柱穴と思われる。

〔覆土〕

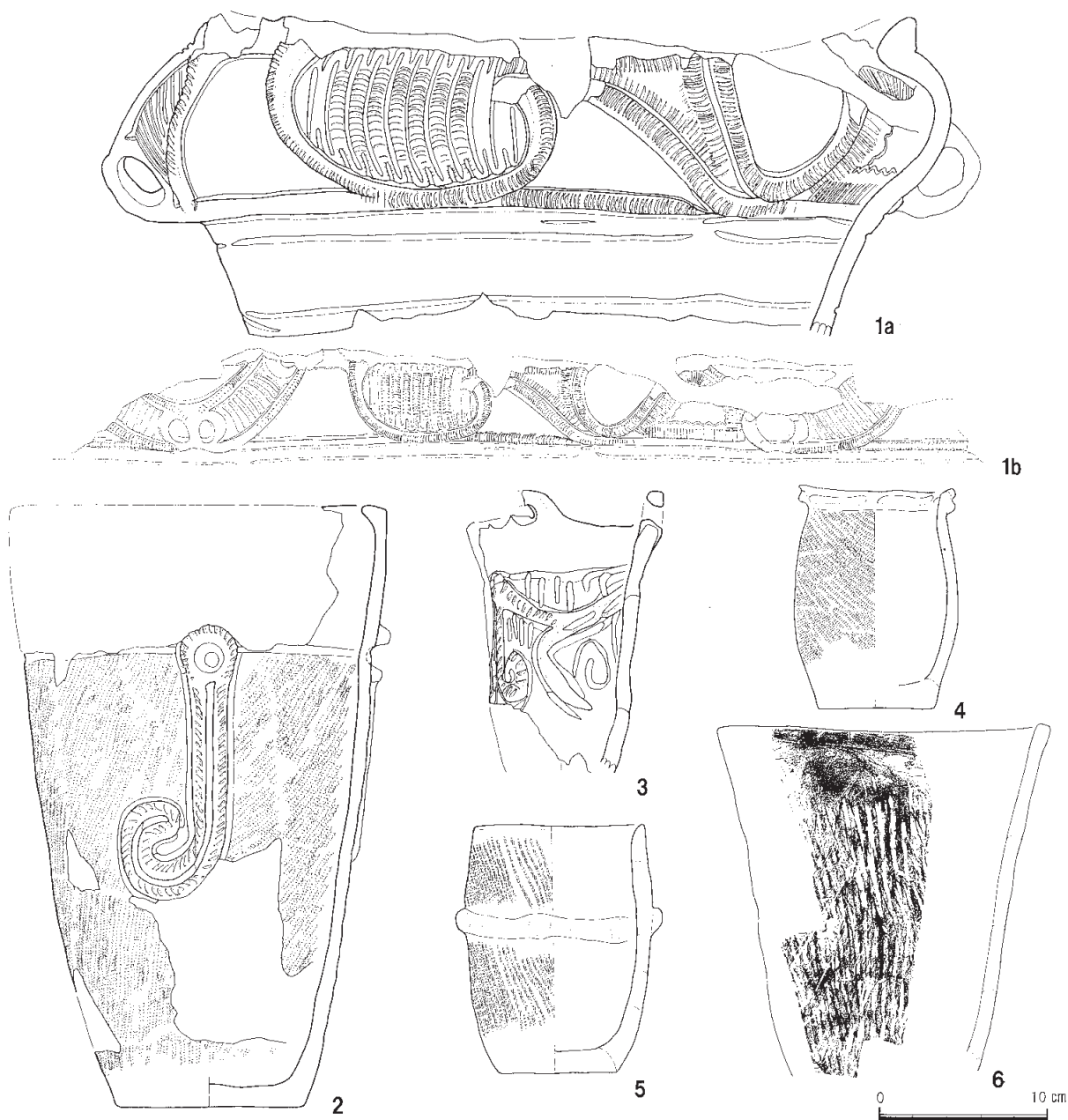


第220図 93・94号住居跡（1/60）、93号住居跡炉跡（1/30）

- 1層 耕作土及び304Y覆土。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。遺物を多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや粘質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。粘質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多くの土器片が出土した。

〔時期〕 勝坂式期。



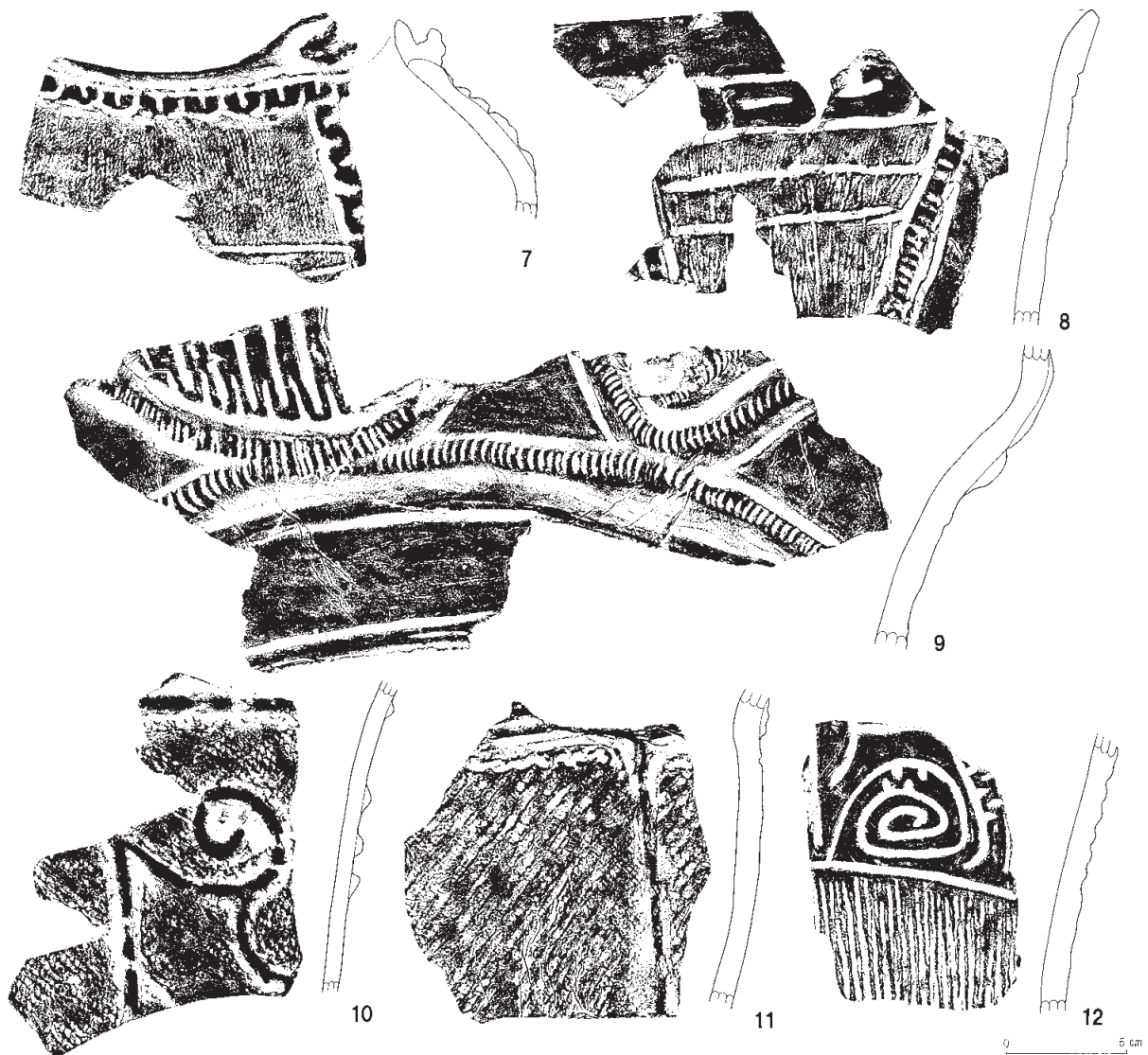
第221図 93号住居跡出土遺物1 (1/4)

93号住居跡出土遺物（第221・222図、第322図1～3、第343図1、第348図44・45）

第221図1は炉に埋設されていた土器。キャリパー形を呈し、口縁部は強く内湾する。口唇部は大部分破損しているが、口縁部の文様の流れからみて、口唇部上に突起が付いていた可能性が大きい。口縁部の文様は連続爪形文で加飾された隆帯の貼付によってなされ、眼鏡状の突起や楕円形・三角形の区画が形成される。区画内に充填される文様は様々である。三角形区画では、隆帯に沿って外側竹管による幅広の押引文が施される区画、隆帯に沿って板状の施文具による幅広の押引文が施され、更に波状沈線文が加えられる区画、集合する沈線が充填される区画がある。楕円形区画内の充填文は、上下端に流水文状の文様を描き、そこに縦位の沈線を多条に施し、沈線間に連続爪形文が加えられたものである。頸部には間隔をあけて沈線が2条巡る。色調は褐色（5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は円筒形の土器。胴部上位に沈線を巡らせて口縁部と胴部を画する。口縁部は無文になる。胴部にはRLの単節斜縄文を施し地文とする。刻みが加えられた環状の貼付文を付け、そこから2本一對の隆帯が「J」字状に垂下する。隆帯には刻みがつけられている。同様の文様は、反対側の器面にもみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

3は口縁部が僅かに外反する土器。口唇部上には円孔がある半円状の突起が付くようである。口縁部は狭い無文



第222図 93号住居跡出土遺物2（1/3）

帯になる。胴部には刻みが加えられた隆帯が「し」字状・弧状に垂下し、空白部には沈線による渦巻文や交互刺突による鋸歯文などが施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は胴部中位が僅かに膨らみ、口縁部は複合口縁状を呈する。口縁部には短沈線を横位に7単位施す。胴部にはLRの単節斜縄文を施す。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は胴部中位が僅かに膨らむ。Lの撚糸文を地文とし、胴部上位に隆帯が巡る。色調は黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

6は底部から直線的に開く土器。口縁部に狭い無文帯をもち、以下、Rの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第222図7は口唇部上に渦巻状の突起が付く。口唇部下には単沈線と波状沈線を巡らせ、沈線間に刻みを加える。Lの撚糸文を地文とし、横位に2条の沈線を施す。突起下から交互刺突を加えた隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

8は刻みが加えられた隆帯を斜位に貼付する。沈線を多段に施し、沈線間には集合する沈線を充填する。色調はにぶい赤褐色（2.5TE5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9は刻みが加えられた隆帯により上下に画される。上部には刻みがある隆帯により区画が作られ、区画内には長沈線・短沈線を組み合わせた文様が充填される。下部には沈線が巡る。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

10はRLの単節斜縄文を地文とし、細い隆帯が渦巻状・弧状・直線状に貼付される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

11は2条の沈線と波状沈線を横走させる。RLの単節斜縄文を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

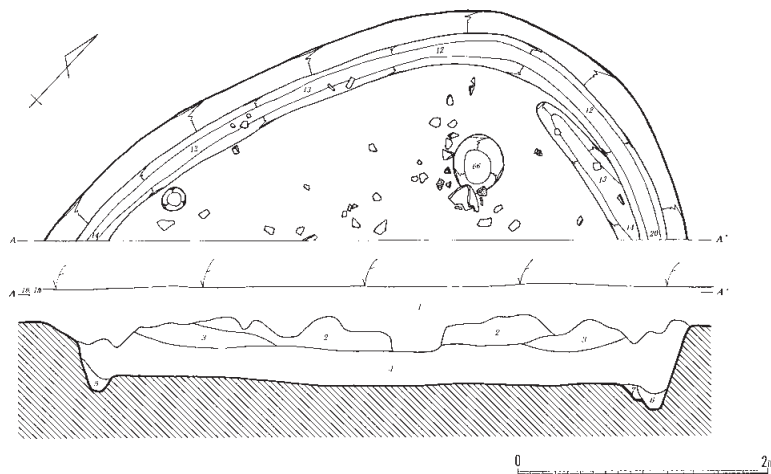
12は沈線を横走させ上下を画する。上位には沈線による渦巻文が施され、刻みが加えられる。下位はRの撚糸文になる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第322図1～3は打製石斧。1・2は短冊形。1は横長の剥片を使用。側縁には敲打痕が認められる。43.9g。硬砂岩製。2は表面頭部に礫面を残す。86.3g。礫岩製。3は撥形。縦長の剥片を使用。刃部は平刃状。側縁には敲打痕が認められる。89.1g。ホルンフェルス製。

第343図1は石核。寸づまりの剥片を剥取か。125.7g。玄武岩製。

第348図44・45は土器片錘。共に長軸に刻みが加えられる。重量は44が38.7g、45が16.1gを測る。

第221図1を除き、覆土中からの出土である。



第223図 95号住居跡 (1/60)

94号住居跡（第220図）

〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 93 J に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）44～59cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）93 J に大きく切られ、詳細は不明である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。

〔覆土〕

10層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを含む。硬質。

〔遺物〕 非常に少なく、図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

95号住居跡（第223図）

〔位置〕 40Ⅲ地点。

〔構造〕 南東側調査区外。壁溝が一部二重に巡っていて、拡張された可能性がある。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）49～51cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅20～45cm・下幅8～16cm・深さ12～20cm、拡張前は上幅25cm前後・下幅10～15cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際を除き硬化面が認められた。（炉）検出されなかった。（柱穴）深度のある1本が主柱穴の一部となるうか。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・焼土粒子を僅かに含む。硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

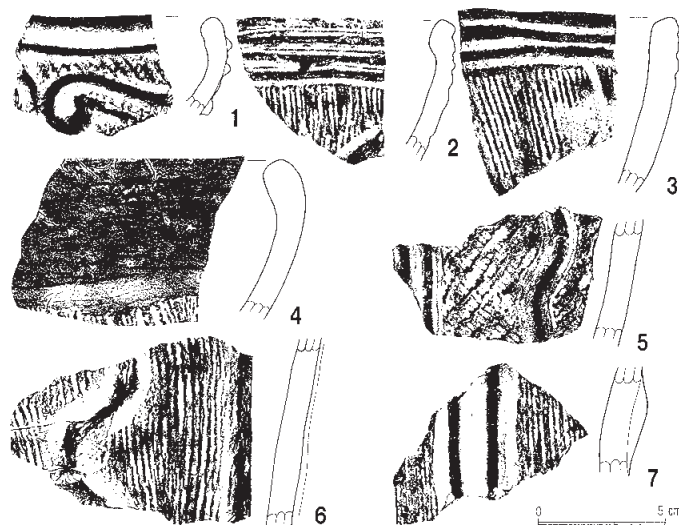
5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土上層から出土するが、量は少ない。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。



第224図 95号住居跡出土遺物（1/3）

95号住居跡出土遺物（第224図、第343図2・3）

第224図1はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯による渦巻文が貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

2は口縁部に4条の沈線が巡る。条線を地文とし、斜位の沈線がみえる。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

3は口縁部に3条の沈線が巡る。Lの撚糸文を地文とし、沈線が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は口縁部に広い無文帯をもち、以下、条線が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を含む。

5はLRの単節斜縄文を地文とし、直行・蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6はRの撚糸文を地文とし、直行・蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

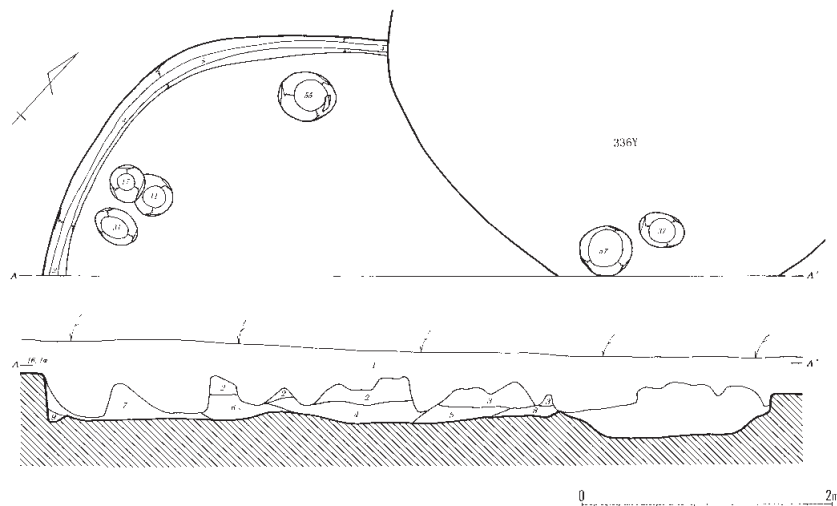
7は条線を地文とし、2本一對の隆帯が垂下する。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第343図2・3は二次加工を有する縦長剥片。2は先端に加工が加えられる。3.2g。3は右側縁に加工が加えられる。5.9g。共に黒曜石製。

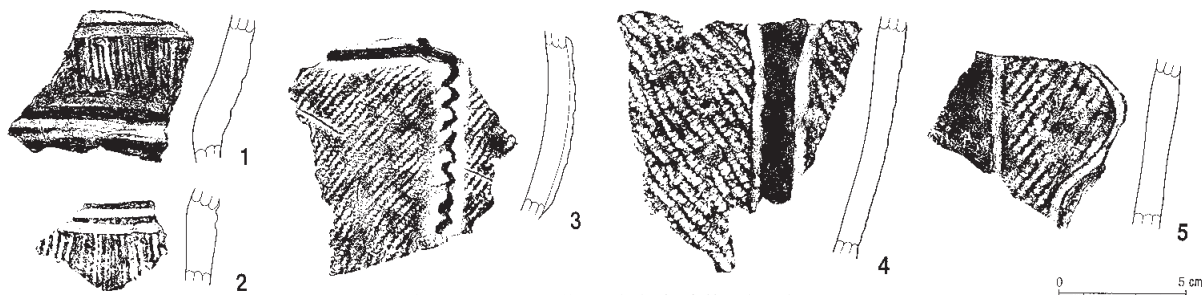
すべて覆土中からの出土である。

96号住居跡（第225図）

〔位置〕40Ⅲ地点。



第225図 96号住居跡（1/60）

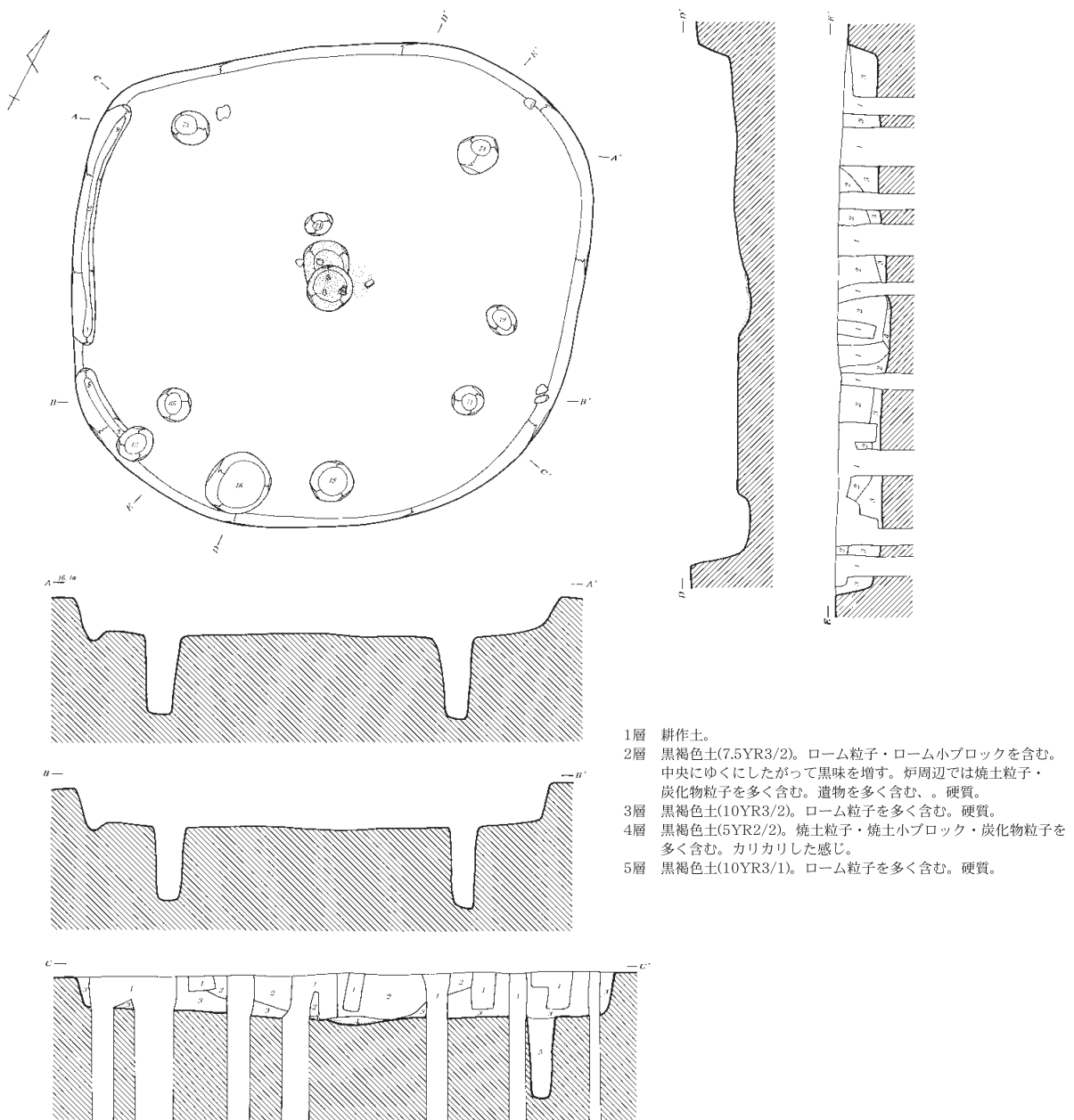


第226図 96号住居跡出土遺物（1/3）

〔構造〕 南東側調査区外。336Yに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 31~38cmを測り、70° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅12~20cm・下幅5~8cm・深さ2~5cmを測る。(床面) 全体に硬質である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 4本検出された。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (5 YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。



- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。中央にゆくにしたがって黒味を増す。炉周辺では焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。遺物を多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 4層 黒褐色土(5YR2/2)。焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を多く含む。カリカリした感じ。
- 5層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。

第227図 97号住居跡 (1/60)

0 2m

8層 褐灰色土 (7.5YR4/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曽利E II式期。

96号住居跡出土遺物 (第226図)

1は条線を地文とし、太沈線を横走させる。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2はLの撚糸文を地文とし、2条の沈線が横走する。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、覆土には粗砂を多く含む。

3はRLの単節斜縄文を地文とする。横位に隆帯を貼付し、そこから蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

4はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

5はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線が直行・蛇行して垂下する。直行する沈線の左側は磨り消されている。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

すべて覆土中からの出土である。

97号住居跡 (第227図)

〔位置〕 41 II 地点。

〔構造〕 (平面形) 不整形。 (規模) 458×428cm。 (主軸方位) N-32°-W。 (壁高) 29~39cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。 (壁溝) 西壁のみに確認できた。上幅16~25cm・下幅5~10cm・深さ1~9cmを測る。 (床面) 硬質ローム層まで掘り下げ床面とするため硬質である。 (炉) 住居中央に位置する。65×40cm・深さ15cmの楕円形を呈する地床炉である。東側の掘り込み外の床面の赤化は灰の掻き出しのためか。 (柱穴) 4本が主柱穴と思われる。

〔覆土〕 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土 (7.5YR3/2) を基調とする。

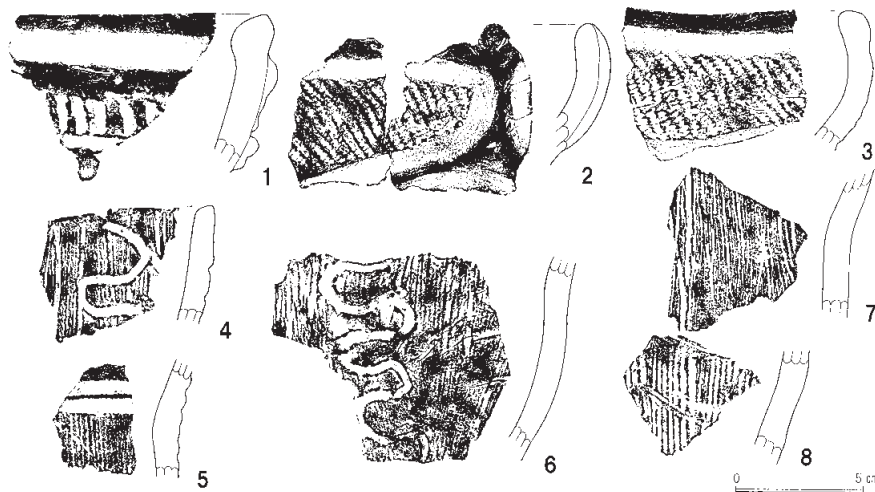
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曽利E II式期。

97号住居跡出土遺物 (第228図)

1は隆帯による横位の区画内には集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

2は隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内はRLの単節斜縄文になる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4)

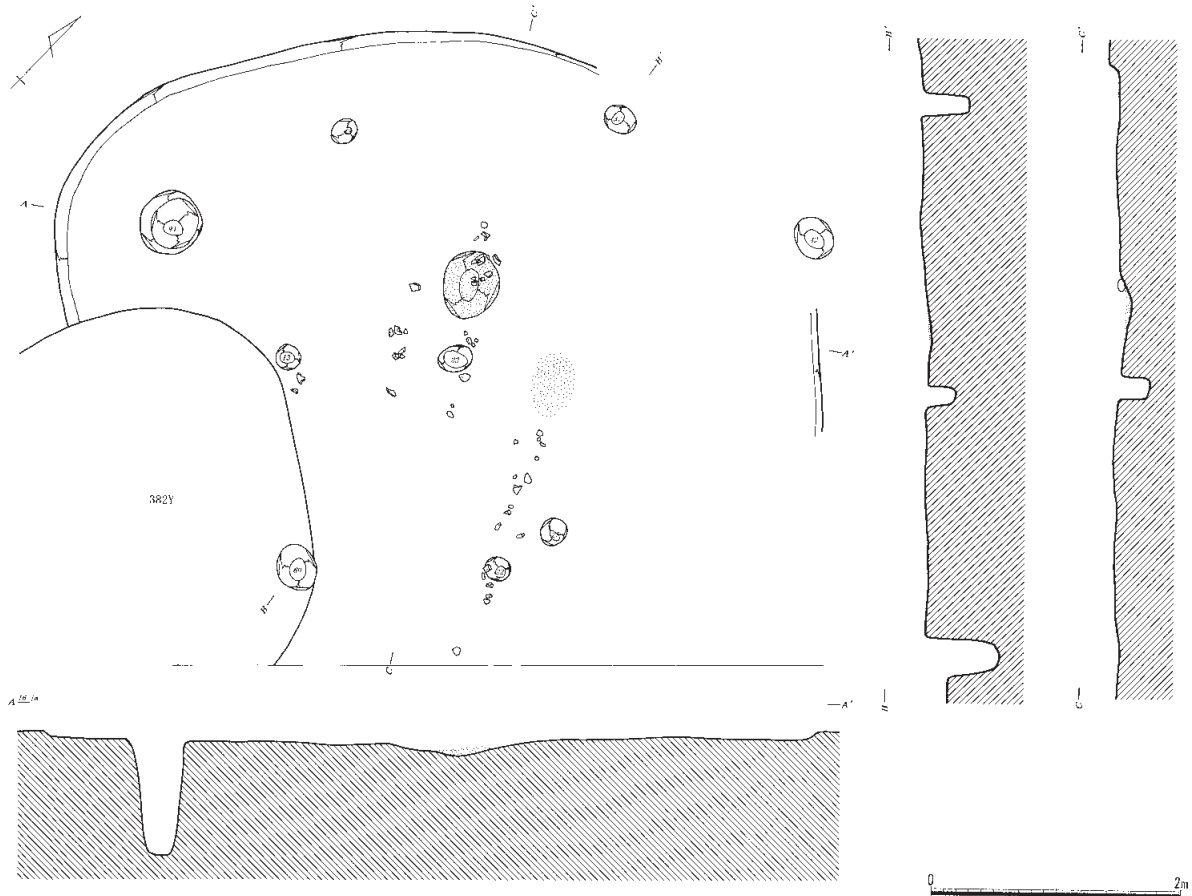


第228図 97号住居跡出土遺物 (1/3)

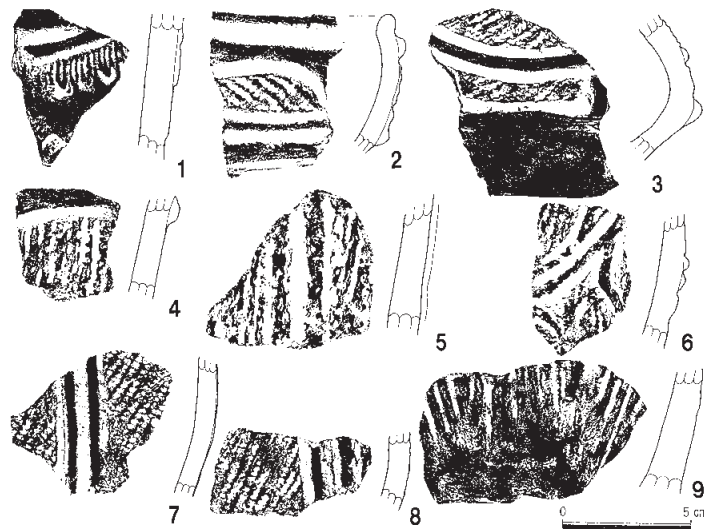
を呈し、胎土には粗砂を含む。

3は口唇部に凹線が巡り、沈線による区画が作られようか。区画内はRLの単節斜縄文。色調は灰褐色（5YR 4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

4～8は条線を地文とする。4・6は同一個体か。縦位に複数の沈線を施し、蛇行する沈線を垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を含む。5は2条の沈線が横走する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。7は沈線が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。



第229図 98号住居跡 (1/60)



第230図 98号住居跡出土遺物 (1/3)

8は半截竹管による平行する沈線が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。すべて覆土中からの出土である。

98号住居跡（第229図）

〔位置〕 40V地点。

〔構造〕 南東側調査区外。（平面形）長方形か。（規模）不明×610cm。（主軸方位）N-28°-W。（壁高）4~12cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱である。東側の床面に被熱のため赤化している部分が確認された。（炉）住居中央に位置する。径40cmの円形を呈する地床炉で、深さ15cmの掘り込みをもつ。炉の上に土器片が検出された。（柱穴）深度のあるピットがあるが、不規則な配列で支柱穴は特定できない。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む黒褐色土（10YR3/2）が基調である。炉付近では焼土粒子を含む。

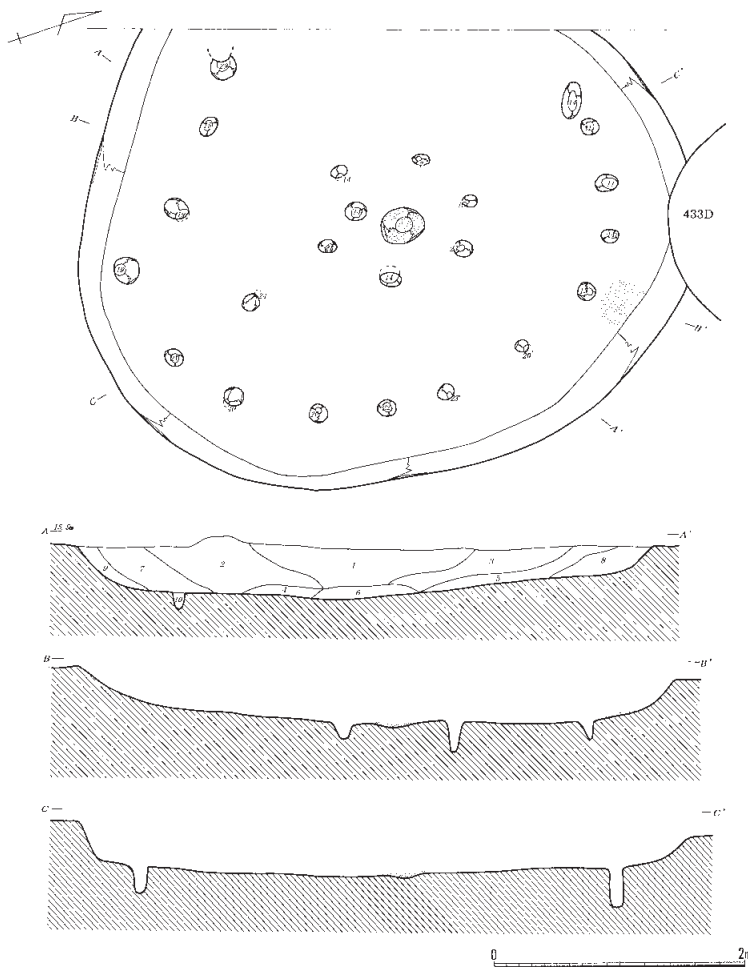
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

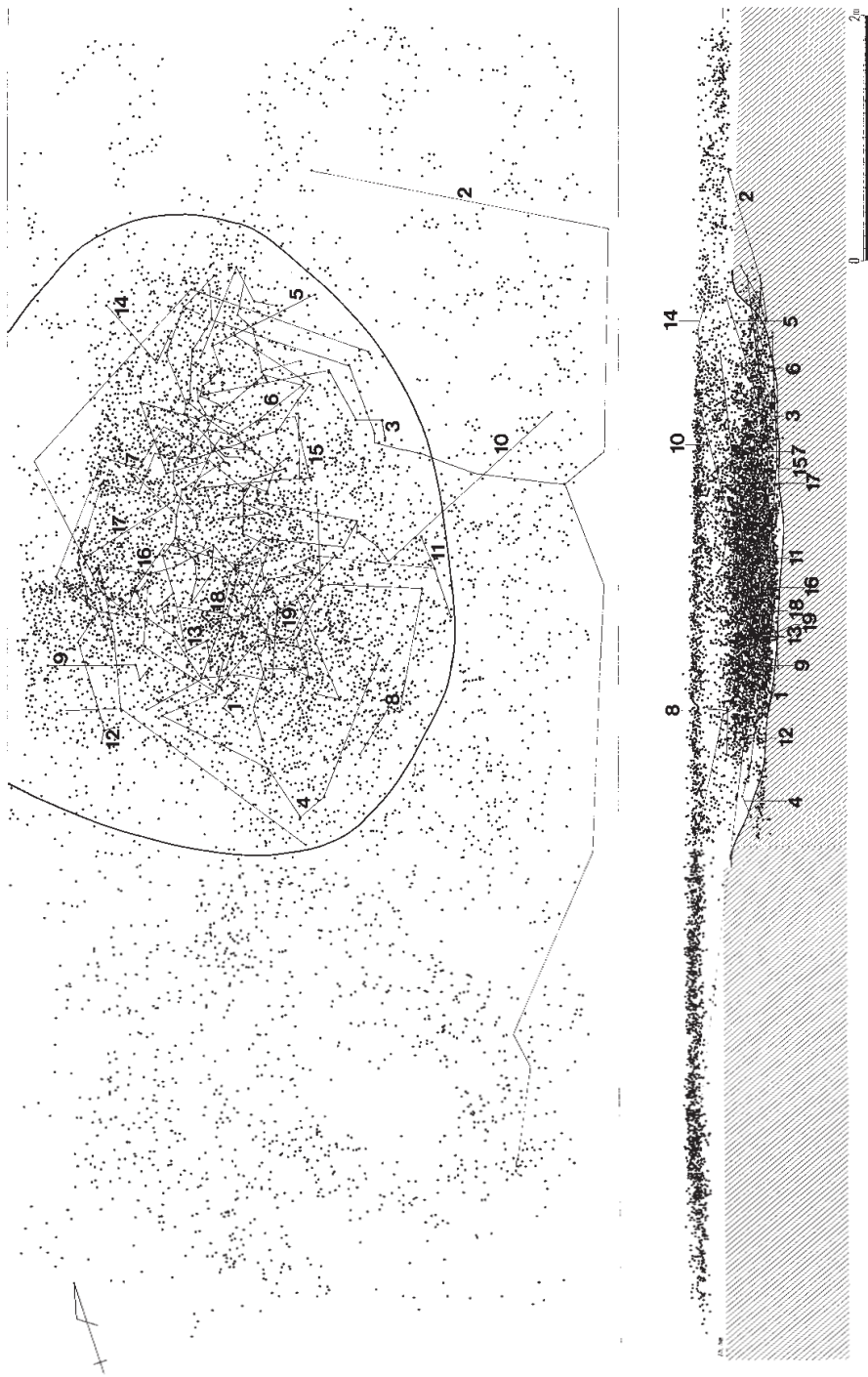
98号住居跡出土遺物（第230図、第322図4、第334図4、第348図46）

第230図1は隆帯に沿って蓮華文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

2・3はキャリバー形土器。2は隆帯による楕円形の区画が作られようか。区画内はRLの単節斜縄文。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。3は隆帯により2段に画される。LRの単節斜縄文が施される。下位は無文帯になる。色調はにぶい褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。



第231図 99号住居跡（1/60）



第232図 99号住居跡遺物出土状態 (1/60)

4・5はLの撚糸文を地文とする。4は横位に隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。5は2本の隆帯が垂下する。色調は橙色(5YR6/6)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一対の細い隆帯を弧状に貼付する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

7・8はRLの単節斜縄文を地文とし、2本の隆帯が垂下する。7の色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。8の色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

9は条線を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第322図4は打製石斧。扁平な礫を使用。表裏面に礫面を残す。刃部は円刃状を呈する。107.9g。硬砂岩製。

第334図4は有溝砥石。断面「かまぼこ」状の礫の平坦面に5条の溝が確認できる。19.4g。硬砂岩製。

第348図46は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。19.4g。

すべて覆土中からの出土である。

99号住居跡(第231・232図)

〔位置〕34Ⅱ地点。

〔構造〕西側調査区外。412Y・433Dに切られる。(平面形)楕円形か。(規模)不明×500cm。(主軸方位)N-S。(壁高)21~31cmを測り、30~50°の角度ですり鉢状に立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)住居中央に向かって傾斜をもつ。全体に軟弱だが、遺存状態は良好である。北東壁際に部分的に焼土を認める。(炉)住居中央と思われる位置にある。径30cmを測る円形の地床炉で、深さ5cm前後の掘り込みをもつ。周囲には径15cm前後・深さ7~21cmを測る小ピットが7本検出された。(柱穴)住居壁際に小ピットが壁柱穴状に巡っている。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を多く含む。骨片・骨粉と思われる白色物質を含む。遺物を多く含む。硬質。

2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。白色物質を含む。遺物を多く含む。硬質。

4層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。

5層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

6層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

7層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

8層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

9層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

10層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から多くの土器片が出土した。土器は住居跡外のものとも接合する事例がある。また、骨片と思われる白色粒子が検出された。

〔時期〕加曽利BⅠ式期。

〔所見〕遺物出土状態の垂直分布を観察すると、覆土と遺物包含層との間に空隙がある。遺物の包含過程に連続性がないわけであるが、概観して見て出土土器に大きな時期差は見取れなかった。十分な観察ができていない部分もあるため、遺物の詳細については後日を期したい。

99号住居跡出土遺物(第233~238図、第322図5~9、第329図12、第331図9・10、第334図5・6、第343図4~13、第350図2~4)

第233図、第234図5~11、第235・236図は深鉢形土器。

第233図1、第236図31・37～39は平行沈線が巡り、沈線による縦区切りがなされる土器。

1は1/2弱程の破片からの推定復元。底部から僅かに内湾しながら開く。口縁部には押捺が加えられた隆帯が巡る。LRの単節斜縄文が施される。内面、口唇部下には凹線が巡る。底面には網代痕を残すが不鮮明である。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・片岩を含む。

31は口唇部上に半円形の突起が付く。口縁部内面には4条の沈線が巡る。突起及び口唇部内面には刻みが加えられている。

37～39はLRの単節斜縄文を地文とする。内面、口唇部下に凹線が巡る。37は波状口縁を呈する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。38の色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には黒・灰色チャートが目立つ。39の色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第233図2、第236図35、第237図46は2条の沈線を巡らせて画し、区画内に沈線による斜線・弧線が施される土器。

2は1/3程の破片からの推定復元。胴部は僅かに内湾しながら開き口縁部に至る。口縁部に押捺が加えられた隆帯が2本巡り、「8」字状の貼付文が2個一対で貼付される。沈線間の区画内はLRの単節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線により三角形・逆三角形に区切り、その中に弧線を充填する。内面、口唇部下には沈線が巡る。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

35は口縁部に押捺が加えられた隆帯が巡る。区画内はLRの単節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線による連弧文が2段、上下を逆に錯向して施される。色調は灰褐色（7.5YR6/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。46は口縁部の沈線下に弧線が重ねられる。内面、口唇部下はくぼむ。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第233図3・4は内面、口唇部下に稜をもち、外面は平行沈線が巡り、沈線による縦区切りが加えられた土器。

3は1/2弱程の破片からの推定復元。胴部は僅かに内湾しながら開き口縁部に至る。口唇端部には刻みが加えられる。外面は口唇部下に上下に沈線のなぞりがある刻みが加えられた細い隆帯が巡る。以下、LRの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線を横走させ縦位の区切りの沈線を加える。内面は、口唇部直下に連続した刺突文を横位に施し、以下、2条の稜線が巡る。6条の沈線を横走させ、1条おきの沈線間に刻みを加える。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

4は1/2程の破片からの推定復元。胴部から口縁部にかけて直線的に開く。口唇部上には両端が渦巻状になる幅広の低い突起が付けられる。突起の上端には刻みが加えられ、その下位には刺突文が施される。外面は不鮮明であるがLRの単節斜縄文を地文とし、4条の沈線が巡る。内面は口唇部下に稜線が巡り、以下、3条の沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

第234図5・6、第237図40～45は格子目文が施された土器。

5は1/3程の破片からの推定復元。胴部が僅かに内湾しながら開き口縁部に至る。内面、口唇部下には沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

6は1/4程の破片からの推定復元。胴部がほぼ直線的に開く。2条の沈線間に格子目文が施される。内面、口唇部下には沈線が巡る。色調は明褐色（7.5YR5/6）を呈し、胎土には粗砂を含む。

40は2条一対・1条・3条一組の沈線を巡らせ、縦位・斜位の沈線を交差させて格子目状に仕上げる。内面、口唇部下には沈線が巡る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。41は横位の沈線下に格子目文が施される。内面、口唇部下には沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。42・43は内面、口唇部下に沈線が巡る。42の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。43の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。44の色調は赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。45はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線間が格子目文になる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

第234図7・8、第237図47・48は沈線が斜位に施される土器。

7は1/2程の破片からの推定復元。胴部上位で僅かにくびれ、口縁部は外反する。色調はにぶい黄橙色（10YR 6/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

8は1/2程の破片からの推定復元。胴部が直線的に開き口縁部に至る。胴部上位に沈線が横走り、口縁部との間に斜位の沈線を施す。内面、口唇部下には2条の沈線が巡る。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

47・48は横走する沈線下に斜位の沈線が施される。内面、口唇部下には沈線が巡る。47の色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。48の色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を含む。

第234図9は1/3程の破片からの推定復元。底部からほぼ直線的に開く。胴部上位に3条の沈線が巡る。内面、口唇部下には沈線が巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第234図10は胴部上位が膨れ、頸部がくびれ、口縁部は僅かに外湾する。口唇部下と胴部上位に紐線文が巡り、口縁部はほぼ横位、胴部は斜位に条線が施される。内面、口唇部下は僅かにくぼむ。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第234図11、第237図57・58は全面に縄文が施された土器。

11は1/4程の破片からの推定復元。胴部が直線的に開き口縁部に至る。LRの単節斜縄文が施される。内面、口唇部下に沈線が巡る。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、粗砂を多く含む。

57は口縁部の沈線下に、不鮮明であるがLRの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。58はLRの単節斜縄文が施される。補修孔が2孔穿たれている。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

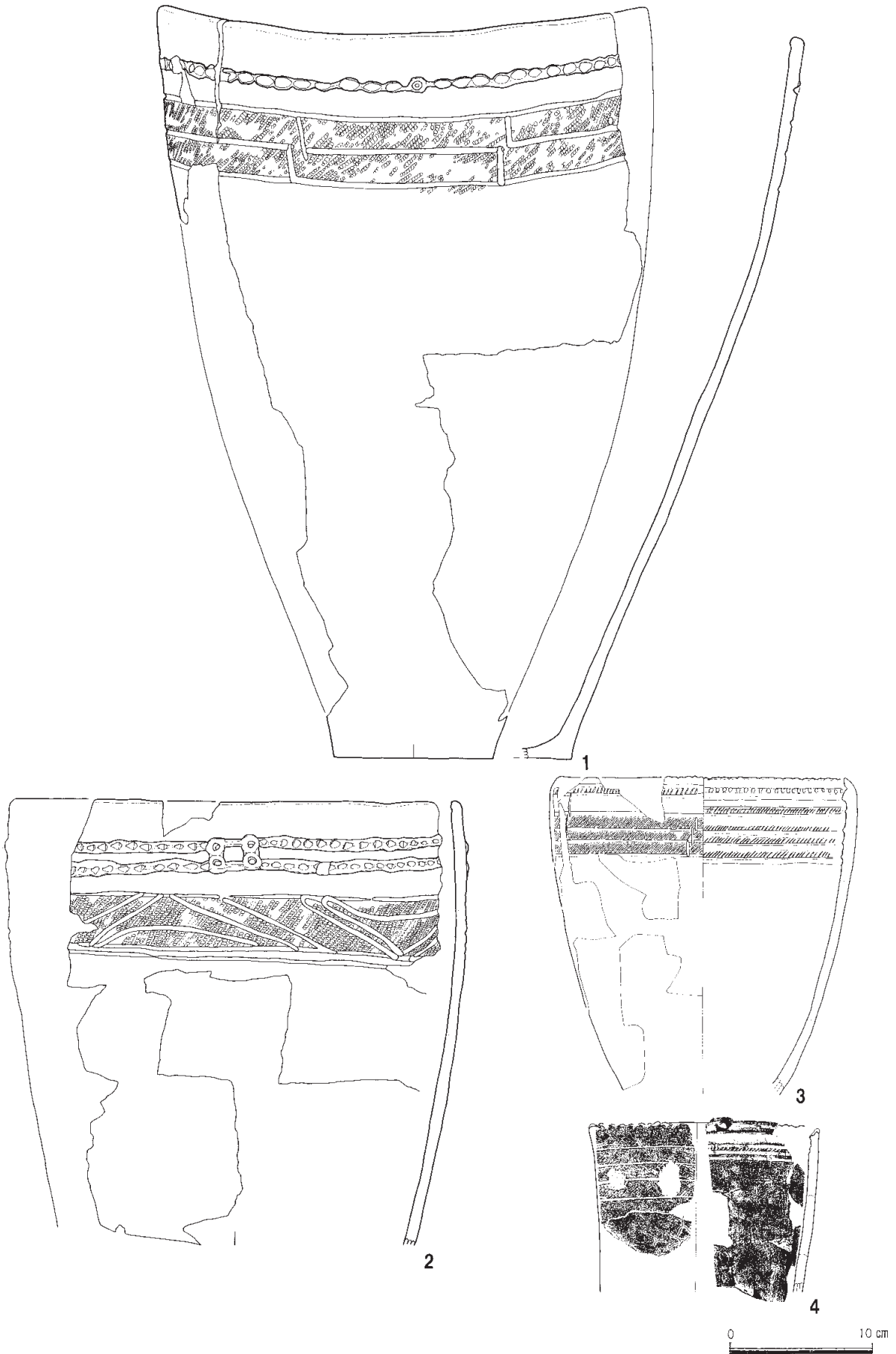
第237図47・48は横走する沈線下に斜位の沈線が施される。内面、口唇部下には沈線が巡る。47の色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。48の色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を含む。

第236図20は横位・斜位に縄文帯が設けられる土器。LRの単節縄文が充填される。口縁部に刻みが加えられた細い隆帯が巡り、「8」字状の貼付文が貼付される。内面、口唇部下には凹線が巡る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

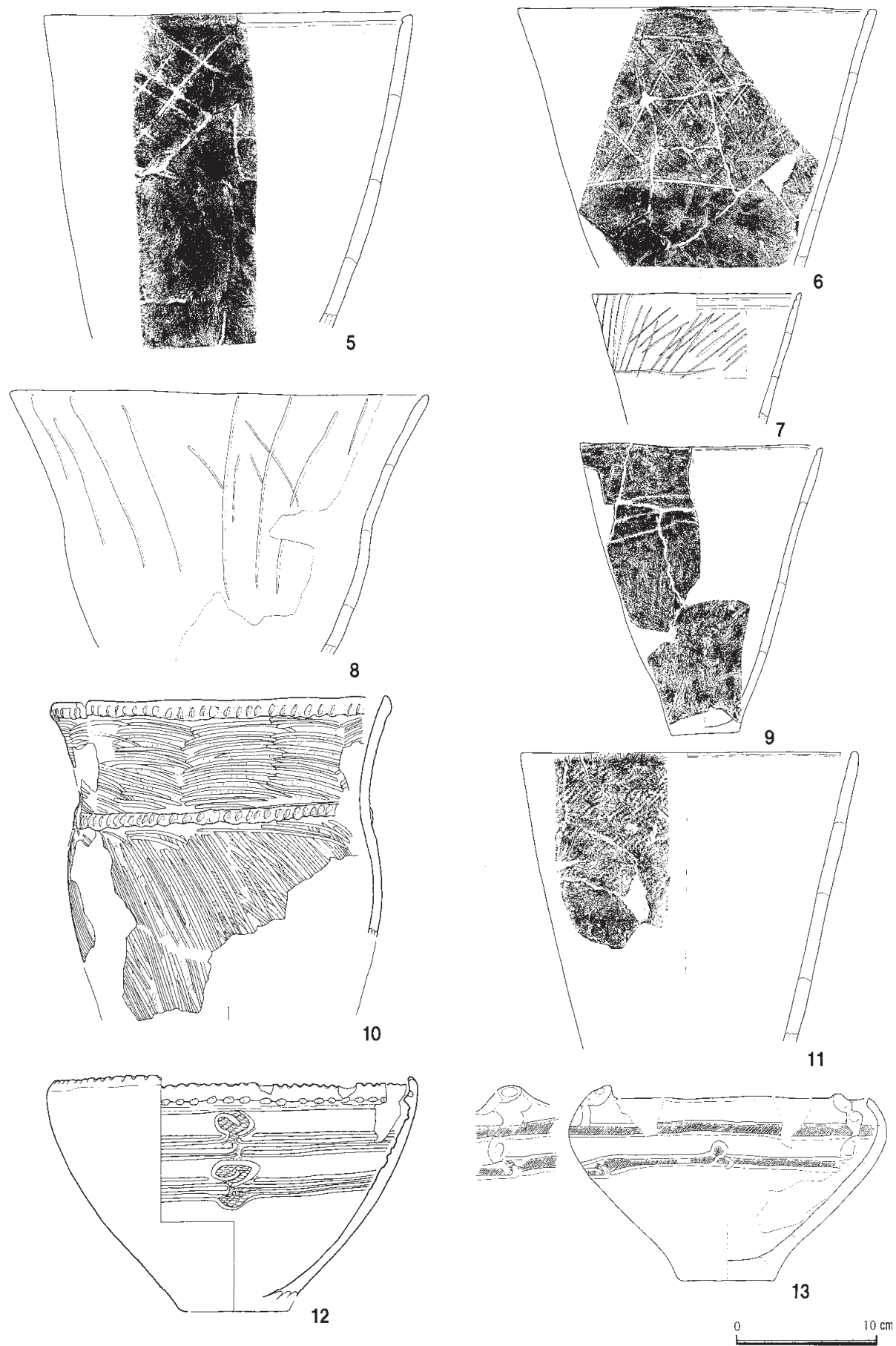
第236図21～24は口縁部に刻みが加えられた細い隆帯と縄文帯が巡る。21～23は隆帯上に「8」字状の貼付文が付く。縄文は21・23・24がLR、22はRLの単節縄文。21は口唇部上に突起が付く、内面、口唇部下には2条の沈線が巡る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。22の口唇部上の突起は半円状になるうか。内面には沈線による楕円形文が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を含む。23は内面、口唇部下に沈線が巡る。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を含む。24は口唇端部に沈線を巡らせ内外に分け、外周に刻みが加えられる。内面、口唇部下には3条の沈線を横走させ、上位の沈線間には刻みが施される。補修孔が穿たれている。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を含む。

第236図25～30は口唇部に刻みが加えられた細い隆帯が巡り、内面、口唇部下には沈線が横走する土器。

25は口唇部上に半球状の突起が付く。突起上には綾杉状の刻みが施される。突起の右側には瘤状の貼付文が付けられ、口唇端部には刻みが加えられる。突起下の器面には「8」字状の貼付文が施される。内面、口唇部下には3条の沈線が施され、上位の沈線間には刻みが加えられる。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を含む。26は口唇部に上面が楕円形をなし平坦な突起が付く。突起上面には沈線による渦巻文が施される。突起下の器面には「8」字状の貼付文が加えられる。内面、口唇部下には突起下で途切れる沈線が1条、「V」字状になる沈線が2条施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。27は口唇部上に半球状の突起が付く。突起上には沈線による渦巻文が施される。突起下には円孔が穿たれ、「8」字状の貼付文が付けられる。内面、



第233図 99号住居跡出土遺物1 (1/4)



第234図 99号住居跡出土遺物2 (1/4)

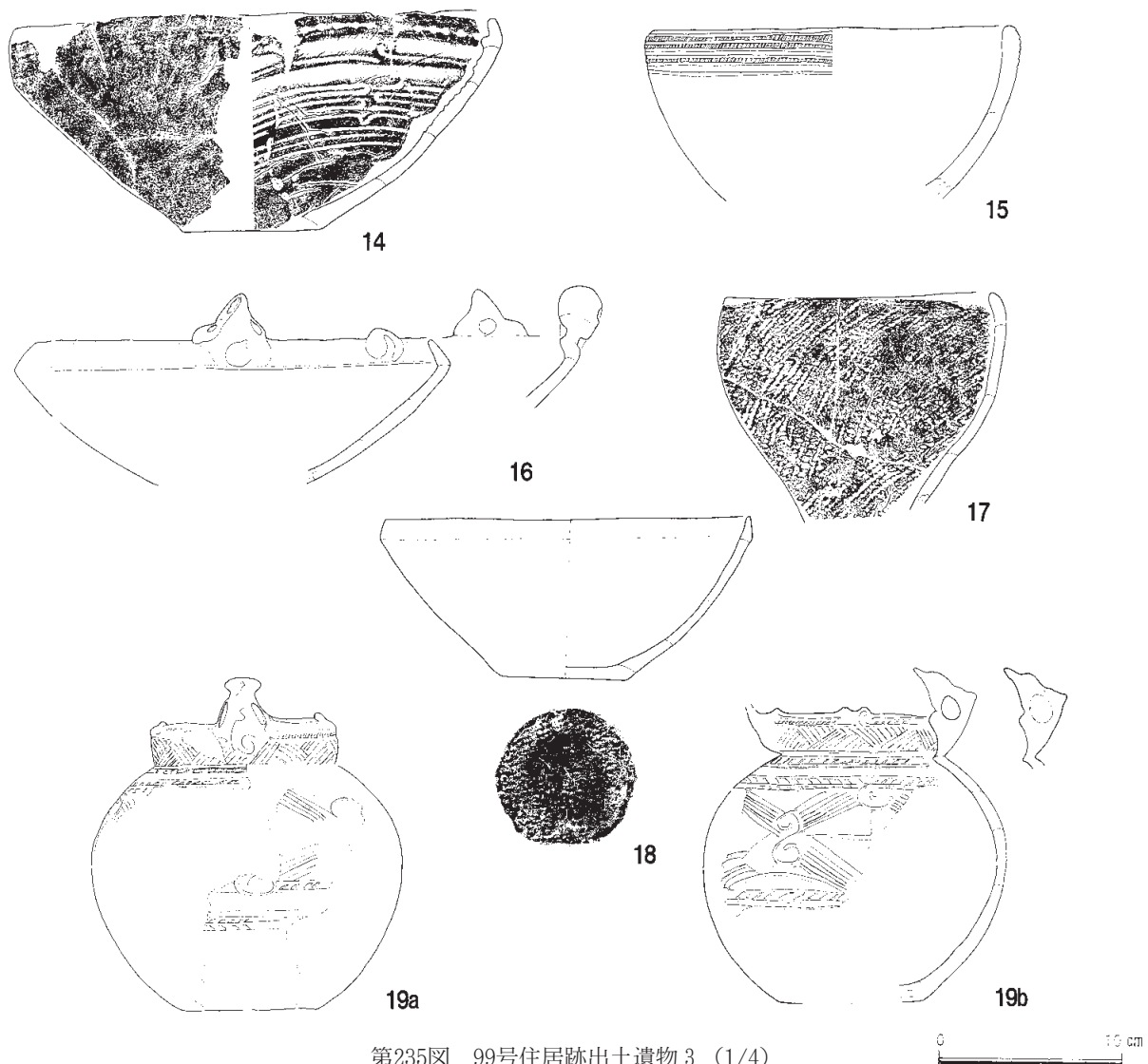
口唇部下には3条の沈線が巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。28は「8」字状の貼付文が付く。内面、口唇部下には沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。29は隆帯下に沈線が施される。内面、口唇部下には沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。30の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第236図32は口縁部に2条の沈線が巡り、口唇部とそれぞれの沈線間に押捺が加えられ、2個一對の楕円形貼付文が付けられる。以下、連弧文と沈線を巡らせ、その間にLRの単節斜縄文を充填する。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を多く、輝石を僅かに含む。

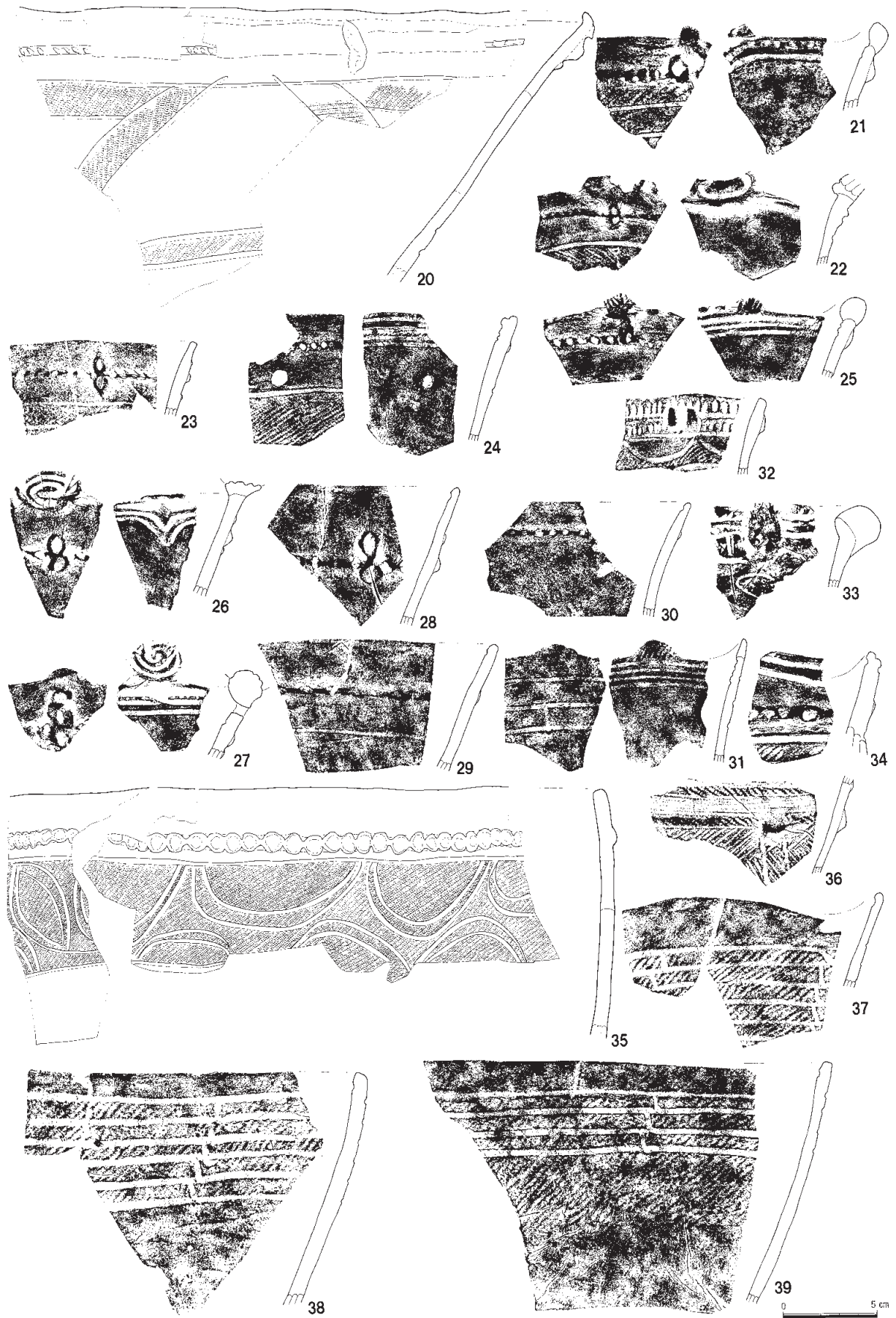
第236図33は波状口縁の可能性がある。口縁部には部分的に刻みが加えられた隆帯が巡り、口唇部との間に2条の沈線を横走させ、棒状の貼付文が付く。胴部には弧状に沈線が施され、弧線間には刺突が加えられる。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を多く吹くむ。

第236図34は波状口縁の土器。口唇部下に2条の沈線を巡らせることにより、沈線間は細い隆帯状を呈する。以下、押捺が加えられた低い隆帯・沈線・LRの単節斜縄文の順で施文される。内面、口唇部下には沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

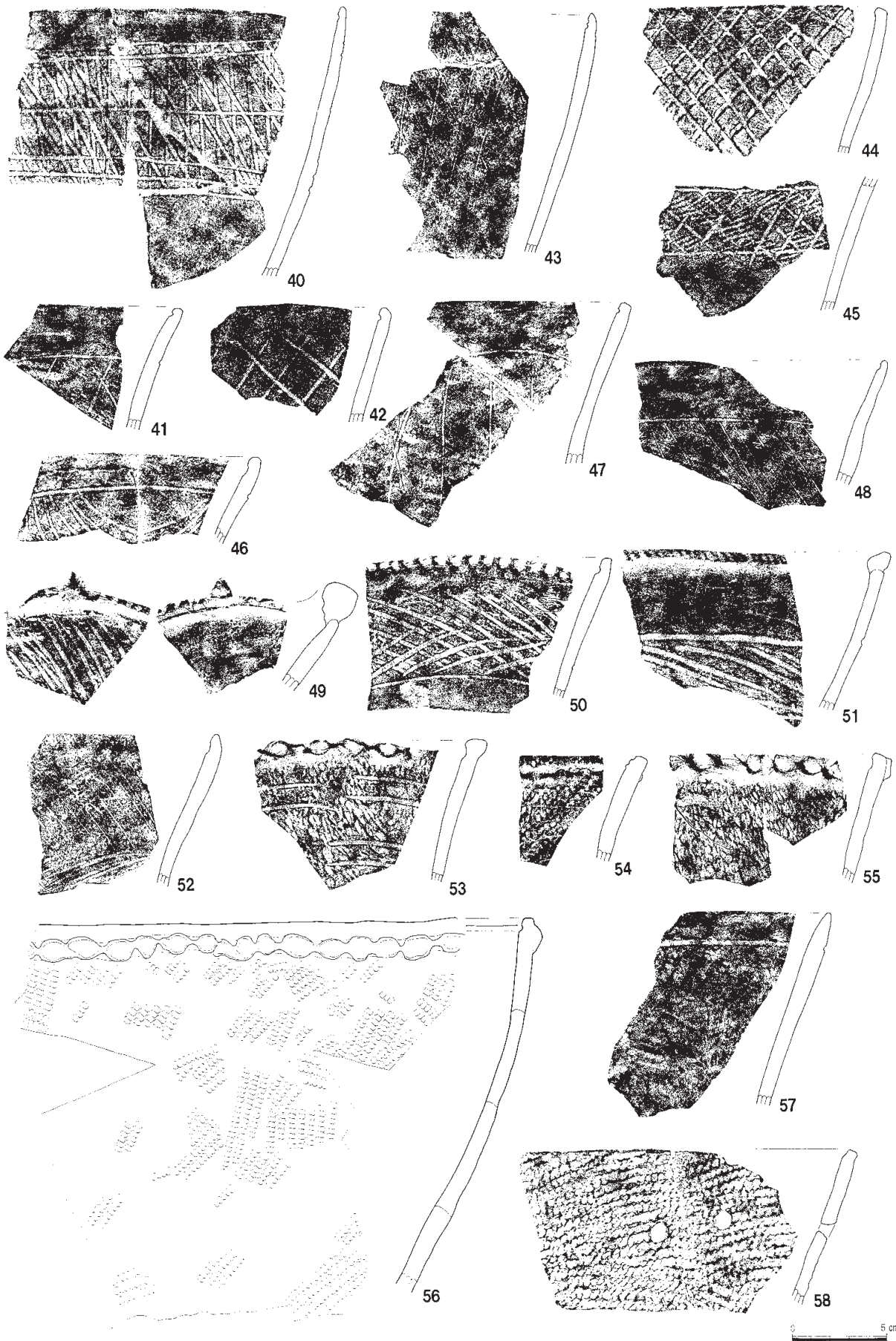
第236図36はRLの単節縄文を用いた帯縄文が2段巡る。下位の帯縄文には貼付文がみられる。以下、矢羽根状に沈線を施し、貼付文から2条の蛇行する沈線が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く



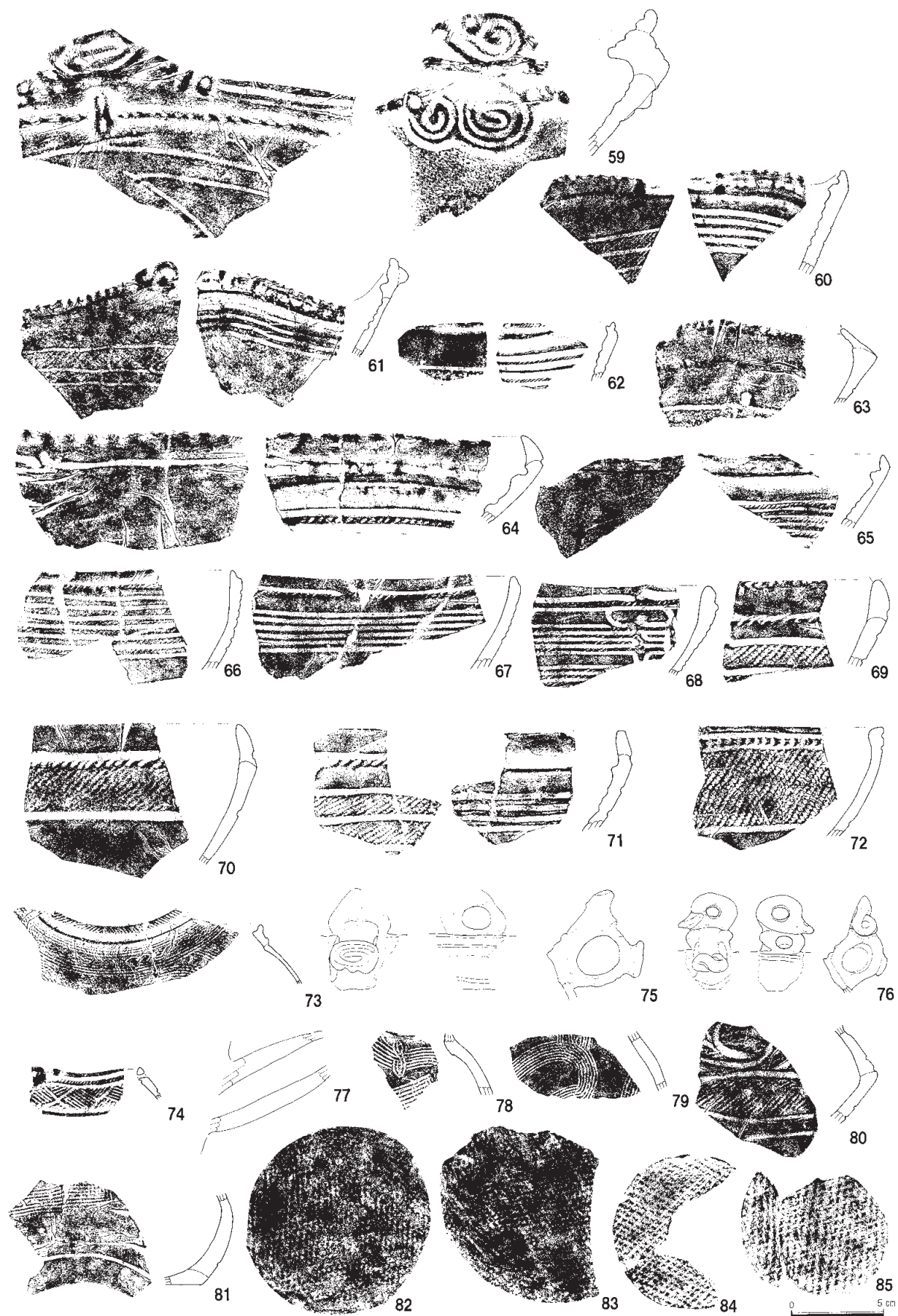
第235図 99号住居跡出土遺物3 (1/4)



第236図 99号住居跡出土遺物4 (1/3)



第237图 99号住居跡出土遺物5 (1/3)



第238図 99号住居跡出土遺物 (1/3)

含む。

第237図49～52は斜位ないし矢羽根状に沈線が施された土器。

49は内側に肥厚する口唇部上に三角形の突起が付く。口唇端部及び内面口唇肥厚部には刻みが加えられる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。50は口唇端部に刻みが加えられる。内面、口唇部下には沈線が巡る。矢羽根状の沈線下には沈線が横走する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には白色チャートが目立つ。51は口唇部が肥厚し、刻みが加えられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。52は内面口唇部下に沈線が巡る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第237図53・54は紐線文下に縄文が施され平行沈線が巡る。

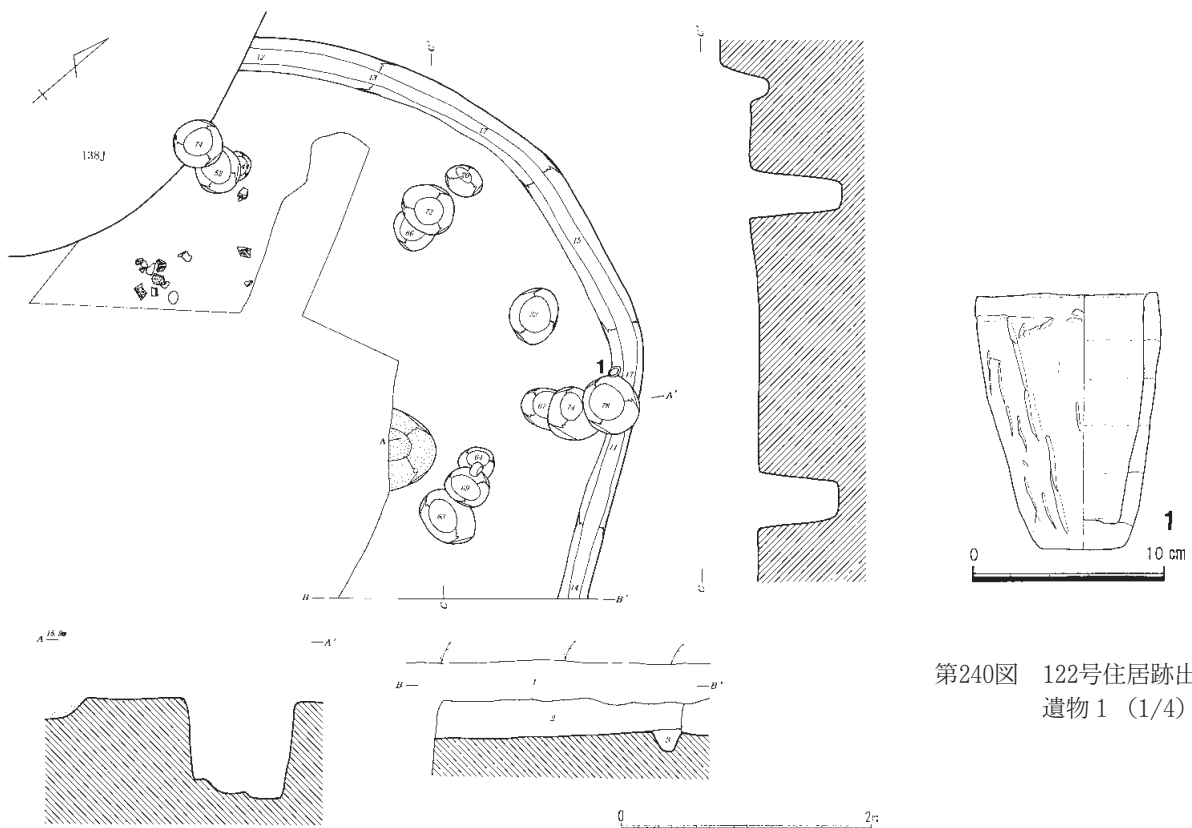
53はRLの単節斜縄文が施され、内面、口唇部下には凹線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を多く含む。54はLRの単節斜縄文が施される。内面、口唇部下には2条の沈線が巡る。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

第237図55・56は紐線文下に縄文が施される。内面、口唇部下には凹線が巡る。縄文は共にLRの単節斜縄文。55の色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を含む。56の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

第234図12・13、第235図14～18、第238図59～72は鉢ないし浅鉢形土器。

第234図12・14、第238図65は外面が無文で、内面に沈線による文様が施される。

12は4/5程が遺存する。口唇端部には刻みが加えられる。内面、口縁部に稜をもち、口唇部との間に丸棒状施文具を用いて右から左への刺突文が連続して施される。内面の文様は2段4単位の文様構成をとる。4条の沈線を流水文状に施し、4ヵ所に「の」字状・弧状の文様を描き、その部分にRLの単節斜縄文を施す。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。



第239図 122号住居跡 (1/60)

第240図 122号住居跡出土
遺物1 (1/4)

14は1/4程の遺存度。口唇部は削られるように尖る。内面は2条の稜をもつ。口唇部と上位の稜の間には丸棒状施文具による右から左への連続刺突が施される。体部の文様は2段で構成される。上段は5条、下段は3条の沈線を流水文状に施す。底面にはいわゆる網代痕を残すが不鮮明である。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

65は内面、口縁部に稜をもち、口唇部との間に丸棒状施文具による右から左への連続刺突文が施される。6条の沈線が巡らされ、沈線間には一条おきに刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第234図13は2/3程の遺存度。口縁部は内湾する。口唇部上には頂部にくぼみをもつ山形の突起が付く。突起下は浮彫り状に隆起する。突起から90°の位置には「8」字状の貼付文が付く、突起と相俟って区画を形成するようである。口縁部の屈曲部には2条の沈線を巡らせる。沈線間は盛り上がっていてLRの単節斜縄文が施される。体部上位には入り組み状になった2条の沈線を横走させ、沈線間にはLRの単節斜縄文を充填する。上下の縄文帯間には沈線による円文が、突起・「8」字状貼付文の位置に配される。色調は褐色(5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第235図15は3/4程の遺存度。6条の沈線を巡らせて、沈線間の3ヵ所には刻みが加えられる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

第235図16は1/4程の遺存度。口縁部が強く内屈する。口縁部の4面に円形の刺突を加えた尖頭状の突起と「の」字状の貼付文が付く。色調は黒褐色(2.5YR3/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第235図17は1/2程の遺存度。底部から直線的に開き、体部中位で内湾して立ち上がり、口縁部が強く内屈する。LRの単節斜縄文が施される。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第235図18は体部が僅かに内湾しながら開き、口縁部に稜をもち外削ぎ状になる。底面には経1本潜り1本超え、緯1本超え1本潜り、1本送りのザル編みの痕跡を残す。

第238図59は深鉢形土器の可能性がある。口唇部上に内外面に渦巻文が施された山形の突起が付く。口唇端部には円形の刺突と沈線が巡る。口縁部には刻みが加えられた細い隆帯が巡り、「8」字状の貼付文が付く。体部の文様は平行沈線による菱形のモチーフになろうか。内面は突起下に渦巻文を並列して描き、両側に円形の刺突が加えられる。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には細礫を含む。

第238図60は口唇部上に上端に押捺が加えられた低い突起が付く。口唇端部には刻みが施される。体部には平行沈線が巡り、沈線間にはLRの単節斜縄文がみられる。内面は突起下に円形の刺突が連続して施される。以下、半截竹管による5条の沈線が横走する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第238図61は波状口縁の土器。波頂部上端には「∞」字状の貼付文が付く。口唇端部には連続した押捺が加えられる。口縁部の文様は、沈線が3条巡り縦位の沈線により区切られる。沈線間の縄文はLRの単節斜縄文。内面、口唇部下には稜を有し、波頂部から短隆帯が垂下する。口唇部と稜の間には円形の刺突文が連続して施される。稜の下位には4条の沈線が巡る。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第238図62は口唇部下に1条、口縁部に2条の沈線が巡る。内面は口唇部下に稜をもち、口唇部に刻みがみられる。口縁部には4条の沈線が巡り、沈線間には1本おきに刻みが加えられる。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

第238図63は口縁部が強く内湾する。口唇端部には刻みが加えられる。口縁部には沈線が巡る。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第238図64は口唇端部に押捺が連続して加えられる。口縁部には縦区切りのある沈線が巡る。内面、口縁部には稜を有し、口唇部との間には右から左への刺突文が連続して施される。口縁部には太い沈線でなぞられた細い隆帯が横走し、隆帯上には刻みがみられる。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

第238図66・67は口唇部下が僅かに隆起し刻みが加えられる。口縁部には多条の沈線が巡る。66は不鮮明であるがLRの単節斜縄文が地文として施されているようだ。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。67の色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第238図68は口唇部下に2条の沈線を巡らせ、沈線間に刻みを加える。口縁部にはLRの単節斜縄文を地文とし、流水文状の沈線が施される。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

第238図69は口唇端部に刻みが加えられる。口唇部下に沈線を巡らせ、その下に刻みが施される。口縁部にはLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

第238図70は口縁部に2条の沈線を巡らせ、沈線間には刻みとLRの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第238図71は口唇端部に刻みが加えられる。口唇部下に沈線が巡り、下位に刻みが施される。口縁部はLRの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線が横走する。内面は口唇部下に稜をもち、以下、4条の沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第238図72は口唇部下に2条の沈線が巡り、沈線間にはへら状施文具による刺突が連続して加えられる。口縁部にはLRの単節斜縄文が施され沈線が巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第235図19、第238図73～81は注口土器。

19は口縁部から底部にかけて1/5程遺存する。体部は球状で口縁部は内湾しながら立ち上がる。口唇部上正面には「の」字状・「S」字状の文様が付加された把手が、左右には双頭状の小突起が付く。口縁部には鋸歯状集合沈線が施される。肩部には3条一組、4条一組の沈線が巡る。沈線間には刻みが加えられている。体部の文様は7条一組の沈線による鋸歯文が2段作られ、交点には「S」字状文が配される。鋸歯文によって作られた菱形の空白部には沈線が「+」字状に充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

73・74は口縁部破片。73は口縁部が直立し、体部は内湾する。内面は口唇部下に稜をもち蓋受け状を呈する。口唇部には端部を境にして綾杉状に刻みが加えられる。肩部は稜を有し、以下、4条の沈線・2条一对の沈線による綾線文・3条の沈線が施される。体部には2条一对の沈線による綾線文を2単位垂下させ、8条一組の沈線による弧状の文様が描かれる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂・輝石を僅かに含む。74は口唇部上に小突起が付く。内面、口唇部下に稜をもち蓋受け状を呈する。口唇部下と口縁部下位には刻みが加えられた平行沈線が巡り、その間には鋸歯状集合沈線が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

第238図75・76は把手。75は正面に渦巻文がみられる。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を含む。76は正面に「∞」字状文、横に小突起が付加された装飾が付く。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

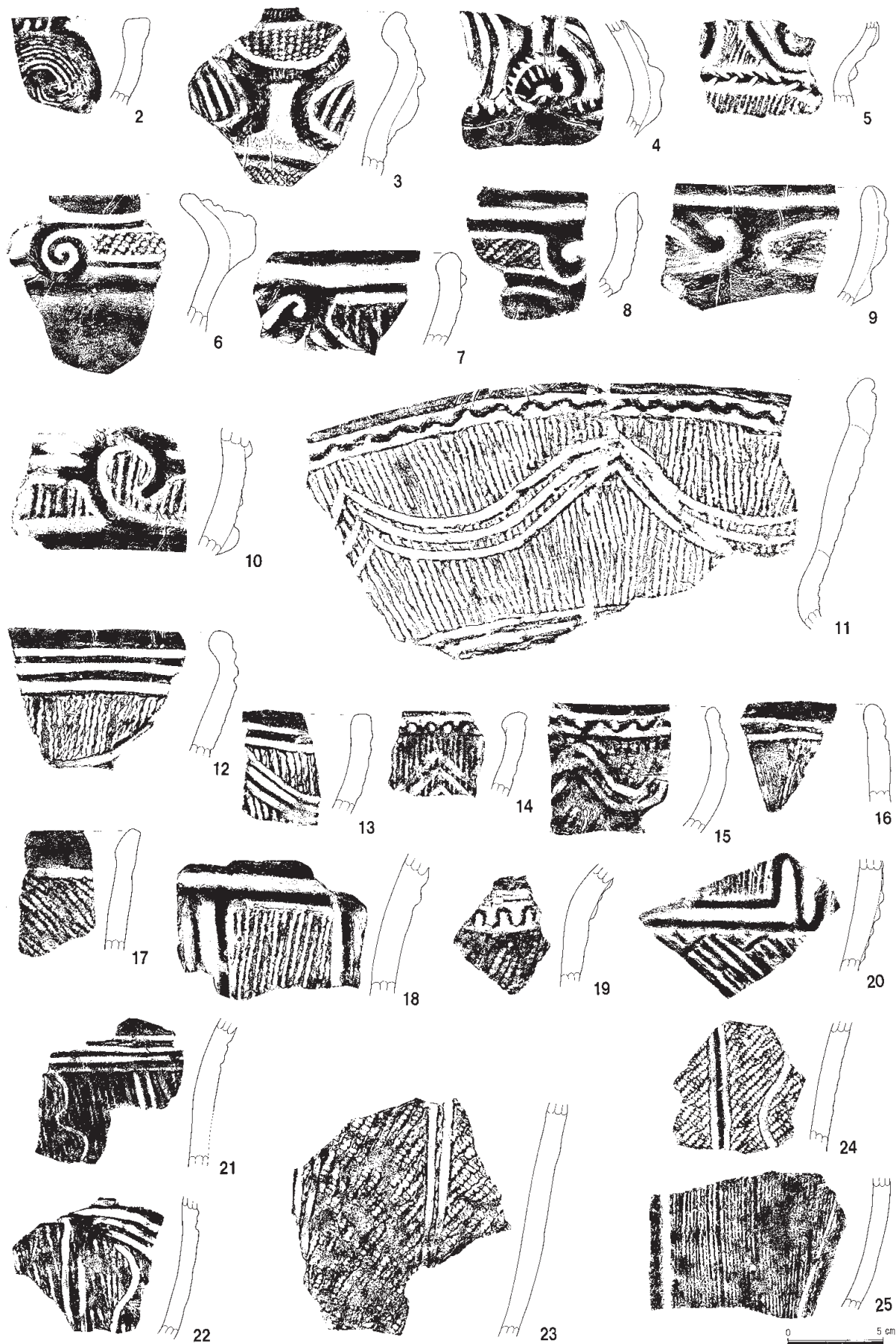
第238図77は注口部。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

第238図78は肩部破片。7条一組の沈線により文様が描かれ、2条一对の沈線による「S」字状文が付加される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を含む。

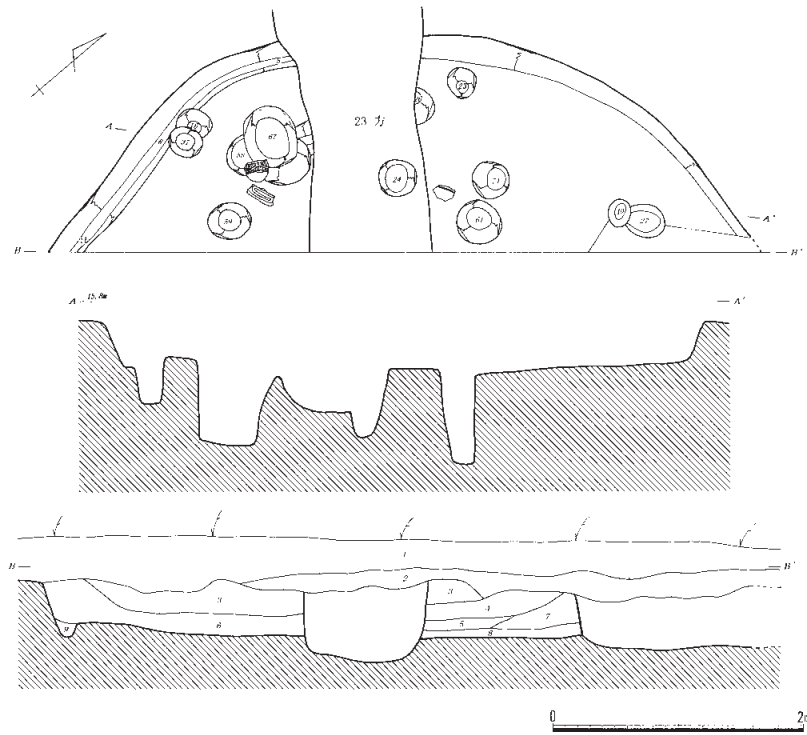
第238図79・80は体部破片。79は8条一組の沈線により弧状の文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。80は内屈する器形。沈線による直線状・弧状の文様が描かれる。沈線間にはLRの単節斜縄文が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。

第238図81は体部下位の破片。8条一組の沈線により文様が描かれる。体部下位には沈線が巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

第238図82～85底部破片。底面にいわゆる網代痕が認められる。82・83は径1本潜り1本超え、緯1本超え1本潜り、1本送りのザル編みと思われる。82の色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を含む。83の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。84・85は径1本潜り2本超え、緯1本超え2本潜



第241図 122号住居跡出土遺物 2 (1/3)



第242図 123号住居跡 (1/60)



第243図 123号住居跡出土遺物 (1/3)

り、左へ1本送りのザル編みと思われる。84の色調はにぶい赤褐色(5YR3/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。85の色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

第322図5～9は打製石斧。5・6は分銅形。横長剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。5は刃部が円刃状を呈する。182.6g。硬砂岩製。6は刃部が平刃状を呈する。133.6g。硬砂岩製。7は撥形に近い。横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃部は円刃状。20.9g。硬砂岩製。8・9は短冊形。8は横長の剥片を使用。刃部は円刃状。122.5g。硬砂岩製。9は頭部側を欠く。横長の剥片を使用。刃部は斜刃状。98.3g。安山岩製。

第329図12は磨製石斧。刃部は円刃状を呈する。950g。硬砂岩製。

第331図9・10は磨石。凹石と兼用。9は片面にくぼみを認める。140g。10は両面にくぼみが認められる。490g。共に石英閃緑岩製。

第334図5・6は石皿片。使用により片面がくぼむ。5は680g、6は280g。共に花崗岩製。

第343図4～7は打製石鏃。すべて凹基。4は0.8gで硅岩製。5・6は縦長剥片を使用。5は0.1g、6は1.1gで共に黒曜石製。7は0.8gで黒曜石製。

8は尖頭器。両端を欠く。表裏面ともに平坦な剥離が加えられる。3.2g。黒曜石製。

9は石核。平坦な打面を設定し、縦長剥片を主に剥取している。398.1g。安山岩製。

10～12は二次加工を有する剥片。10は縦長剥片。折断された下端に加工が加えられる。3.6g。黒曜石製。11は縦長剥片の右側縁に加工が加えられる。2.7g。硅岩製。12は縦長剥片の右側縁に加工が加えられる。10.8g。石英製。

13は幅広の剥片。2.3g。黒曜石製。

第350図2～4は耳飾り。2は上端が僅かにくぼむ栓状を呈する。3.7g。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。3・4は相似た形状の耳栓。滑車状を呈する。3は1/4程からの推定復元。13.4g。色調は黒褐色(10YR3/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。4は3/4程の遺存度。34.8g。色調は黒褐色(10YR3/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。3・4は対にして使用されたとも考えられる。

すべて覆土中からの出土。

122号住居跡(第239図)

〔位置〕25Ⅶ・71地点。

〔構造〕南半は調査区外にある。125Jを切り、138Jに切られる。攪乱が著しい。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)不明。(壁溝)上幅25cm前後・下幅12cm前後・深さ11cm前後を測る。(床面)部分的に硬化面が認められる。(炉)不明×65cmの地床炉で、深さ15cmを測る。(柱穴)深度のあるピットが支柱穴の一部であろう。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

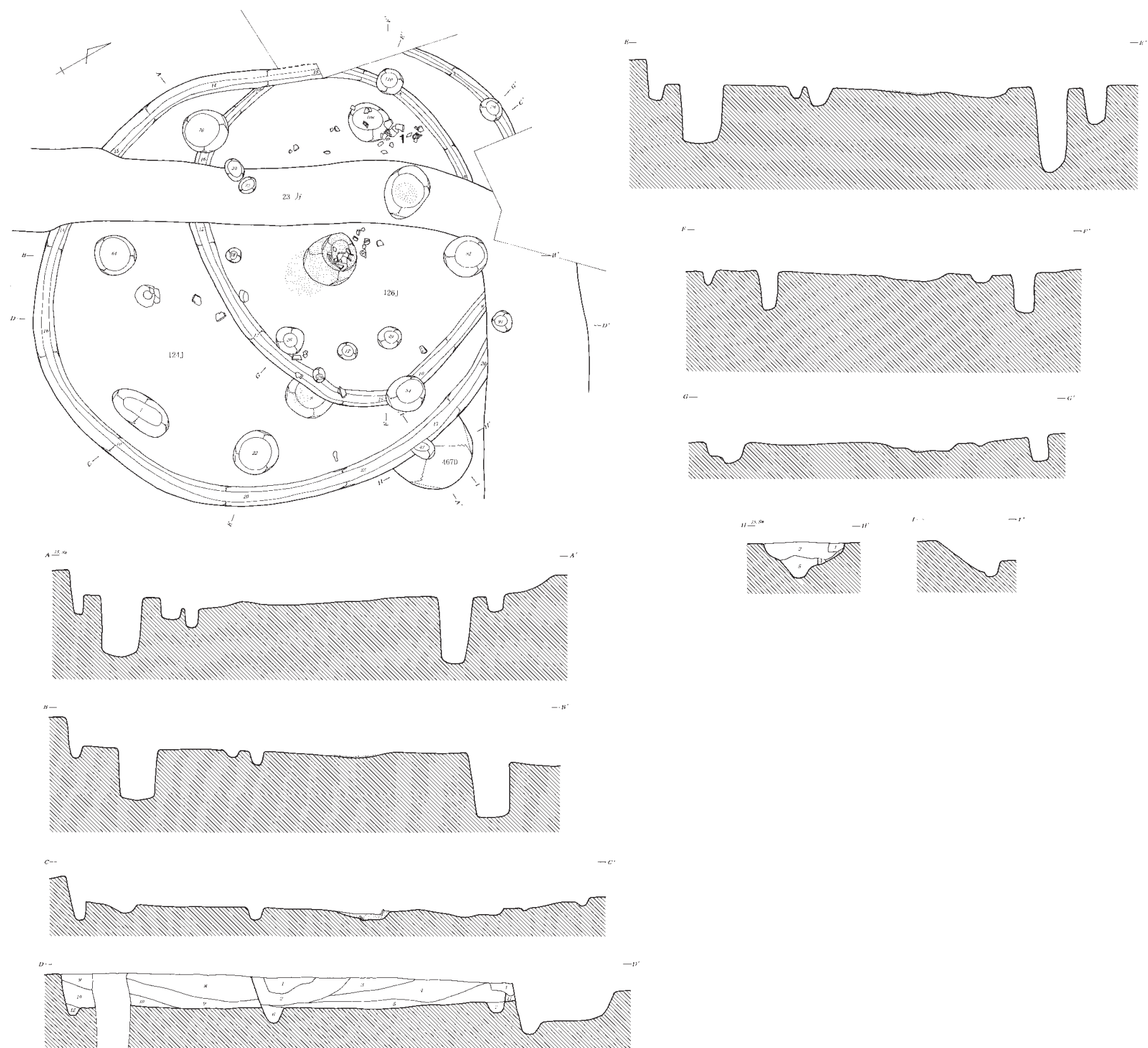
〔遺物〕覆土中からの出土が大部分である。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

122号住居跡出土遺物(第240・241図、第322図10～14、第343図14・15、第348図47)

第240図1は小型のコップ状の土器で完形。作りは非常に粗雑である。口縁部に沈線を巡らせ、部分的に沈線を垂下しているようである。色調は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第241図2は口唇部に刻みが加えられる。隆帯による区画が作られようか。区画内には櫛歯状施文具による条線



第244図 124・126号住居跡、467号土坑 (1/60)

が渦巻状に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

3は口唇部に刻みが加えられる。2条の沈線を巡らせ、口縁部と胴部を画する。口縁部の文様は2段で構成される。上段は刻みが加えられた隆帯による半楕円形の区画が作られ、区画内には三角形の押し文が集合して施される。下段は隆帯による楕円形の区画が作られ、区画内には斜位の集合する沈線が充填される。胴部はRLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

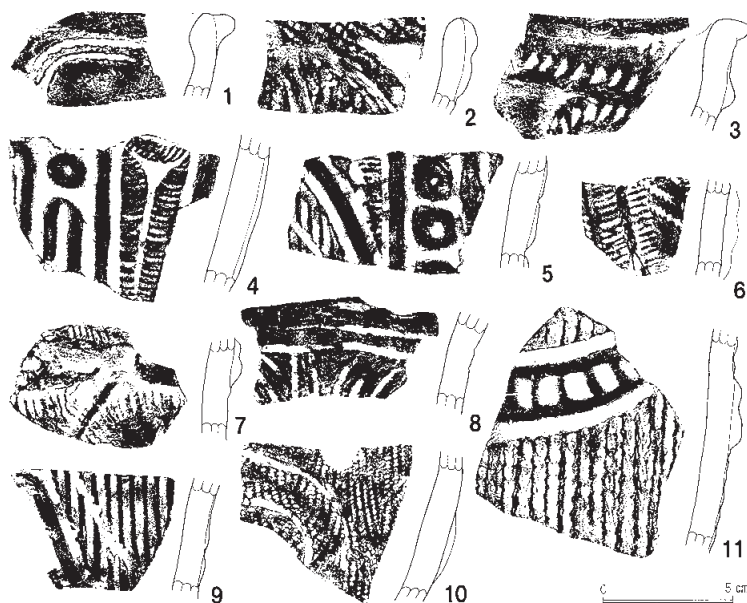
4は刻みが加えられた隆帯による渦巻文が貼付される。渦巻文の両脇には集合する沈線が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5はLの撚糸文を地文とする。綾杉状の刻みが加えられた隆帯により口縁部と胴部を画するようである。口縁部には2本一対の隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6～10はキャリパー形の土器。6は狭い口縁部と無文の頸部を隆帯によって画する。口縁部には隆帯による渦巻文を基点とした区画が作られようか。区画内はRLの単節斜縄文になる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。7～10は隆帯の貼付により渦巻文や区画が作られる。7・10はLの撚糸文、8はRLの単節斜縄文を地文とする。9は無文地に隆帯を貼付したらしい。7～9の色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には7が細礫を、8が粗砂を多く、9が細礫を僅かに含む。10の色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11～15は連弧文系の土器。11～13はLの撚糸文、14は条線、15はRLの単節斜縄文を地文とする。11は口縁部に2条の沈線を巡らせ、沈線間には交互刺突を加えることによって鋸歯状に仕上げる。3条の沈線を横走させ口頸部と胴部を画する。3条一組の沈線によって連弧文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。12は口縁部に4条の沈線を巡らせ、以下、連弧文が施される。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。13は口縁部に2条の沈線を巡らせ、以下、3条一組の沈線で連弧文を施す。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。14は口縁部に2条の沈線を巡らせ、沈線間に交互刺突を加えて鋸歯文とする。3条一組の沈線により連弧文が作られる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。15も交互刺突による鋸歯文が巡る。2条一対の沈線により波状文が描かれる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

16は条線を地文とする。口唇部下に2条の沈線を巡らせ、斜位に沈線が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を



第245図 124号住居跡出土遺物（1/3）

呈し、胎土には粗砂を含む。

17は口縁部に沈線を横走させ、以下、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

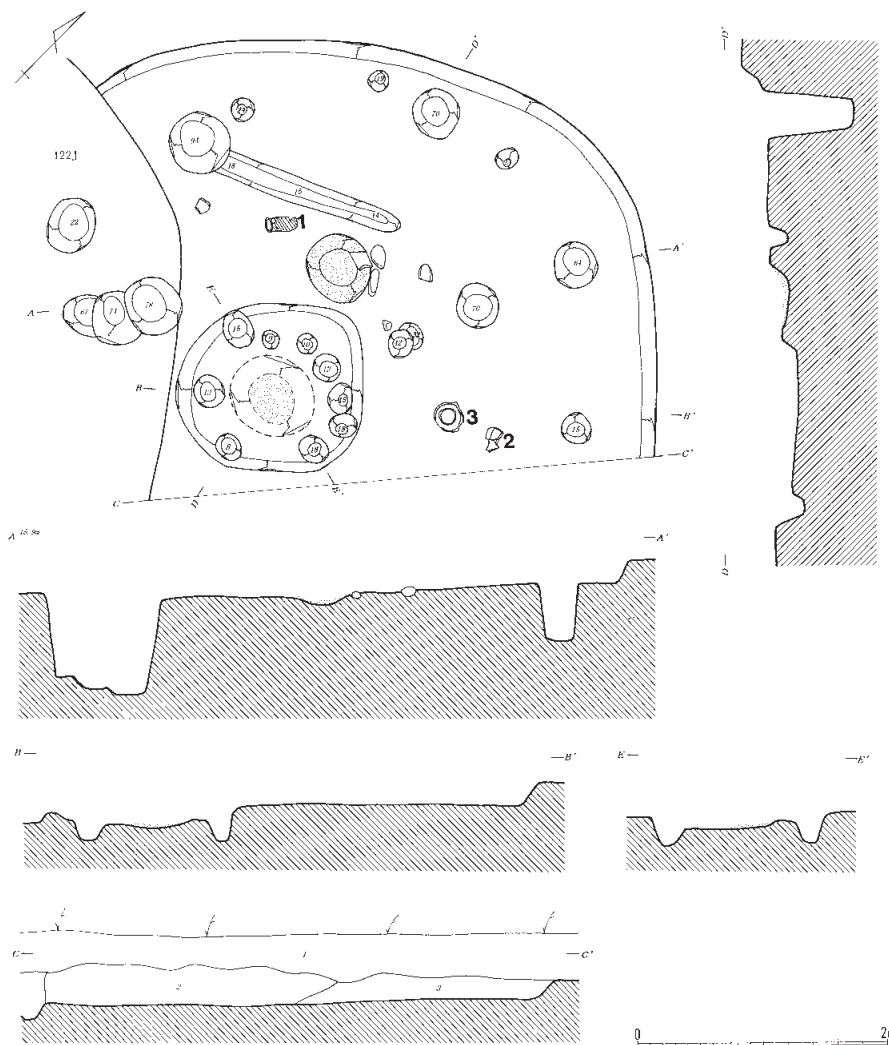
18は2本の隆帯が巡る。Lの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

19は隆帯による波状文が巡り、以下、RLの単節斜縄文になる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

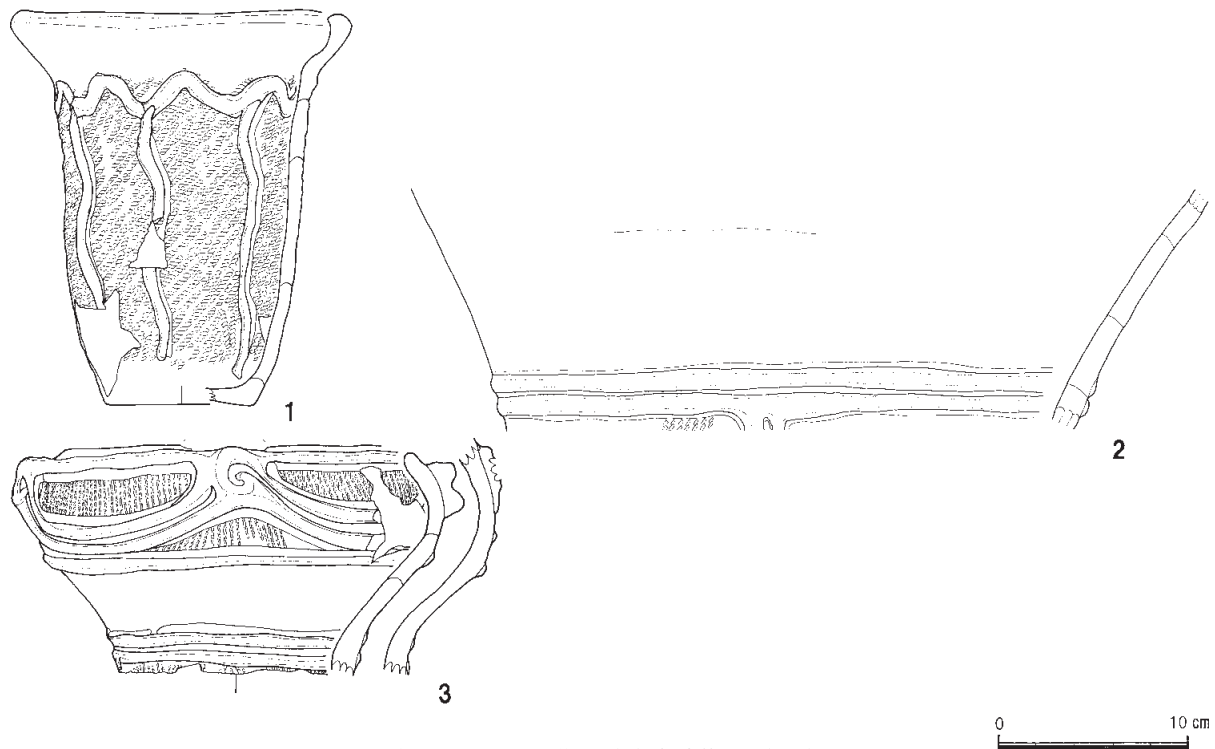
20は隆帯による区画内に、細沈線が密集して充填される。下位は斜位に沈線を施し、それに直交するように細隆帯を貼付する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

21はL、22はRの撚糸文を地文とする。21は4条の沈線を横走させ、そこから3条一組の沈線、2条一對の蛇行する沈線を垂下させる。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。22は横走させた沈線下に、「 \cap 」字状の区画が作られようか。区画内には蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

23・24はRLの単節斜縄文を地文とする。23は2条一對の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。24は2条一對の沈線と蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。



第246図 125号住居跡 (1/60)



第247図 125号住居跡出土遺物1 (1/4)

25は条線を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第322図10～14は打製石斧。すべて短冊形。10の刃部は円刃状。141.2g。硬砂岩製。11の刃部は斜刃状。46g。ホルンフェルス製。12は横長の剥片を使用。刃部は斜刃状。127.4g。硬砂岩製。13は横長の剥片を使用。表面には大きく礫面を残す。192.6g。硬砂岩製。14は横長の剥片を使用。刃部は円刃状。121.8g。硬砂岩製。

第343図14は使用痕を有する剥片。縦長の大型剥片で、表面に礫面を残す。右側縁に刃こぼれが認められる。61g。凝灰岩製。

15は幅広の剥片。36.9g。安山岩製。

第348図47は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。2.7g。

すべて覆土中からの出土である。

123号住居跡（第242図）

〔位置〕 25Ⅶ地点。

〔構造〕 南東側調査区外。23方に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）27～45cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）西壁下で確認できた。上幅23～30cm・下幅7cm前後・深さ5～11cmを測る。（床面）硬質ロームまで掘り下げ床面とするため良好である。（炉）検出されなかった。（柱穴）比較的多く検出され深度もあるが、主柱穴の一部と思われるのは西側の重複した1本である。

〔覆土〕

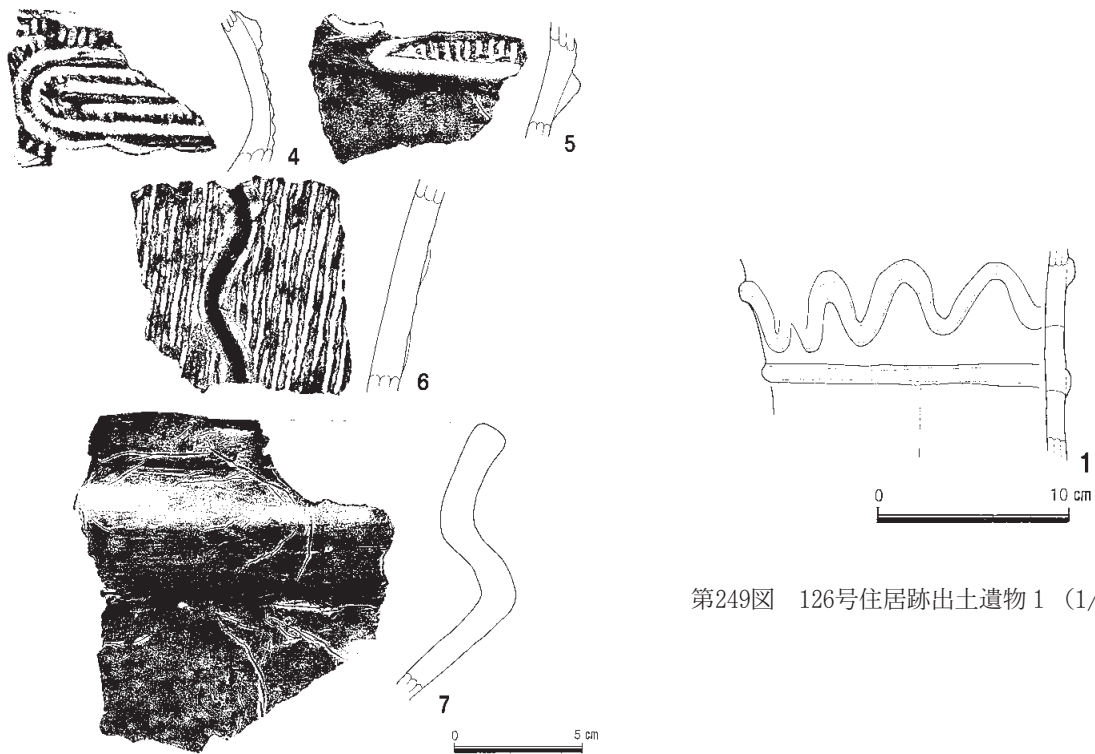
1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YE4/4）。ローム粒子を含む。やや硬質。

3層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

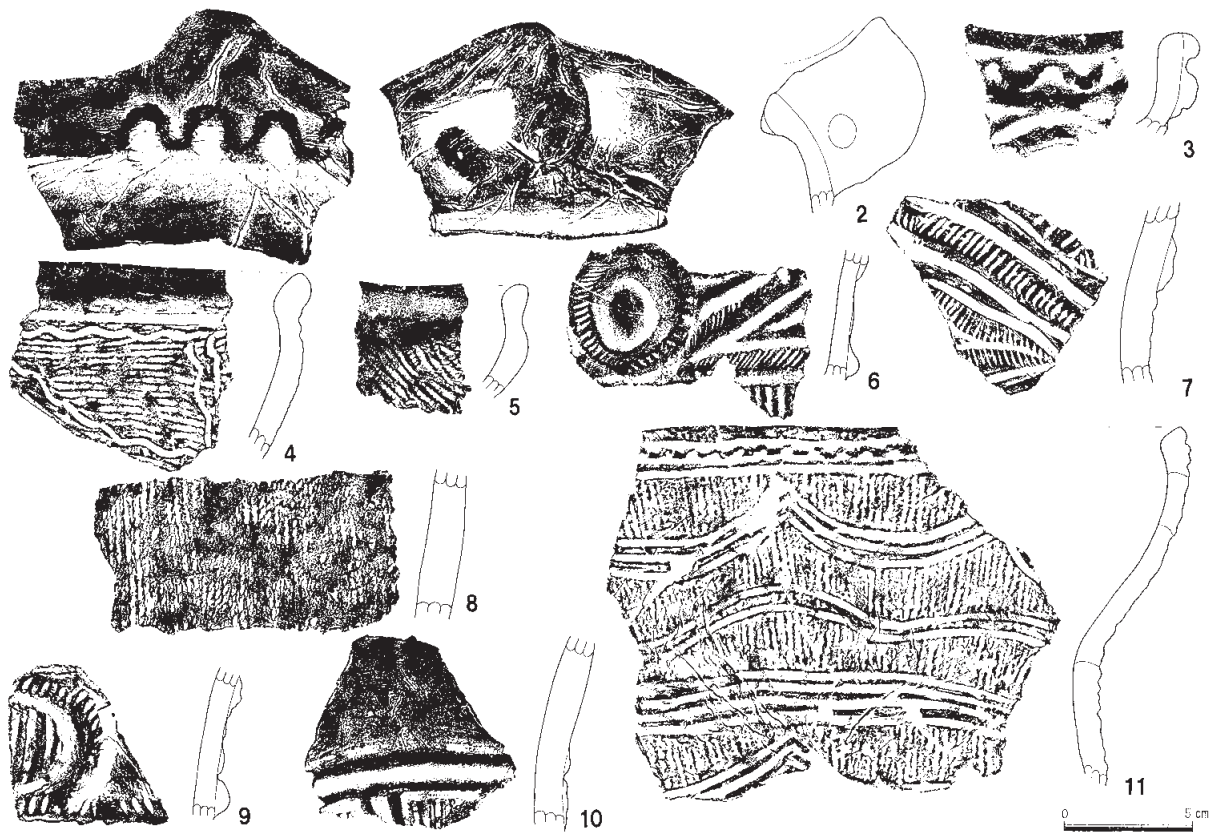
4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。



第249図 126号住居跡出土遺物 1 (1/4)

第248図 125号住居跡出土遺物 2 (1/3)



第250図 126号住居跡出土遺物 2 (1/3)

硬質。

6層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を含む。炭化材小片を僅かに含む。硬質。

7層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

8層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

9層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土中からの出土が大部分であるが、少ない。

〔時期〕 加曽利E I 式期。

123号住居跡出土遺物(第243図、第323図1～3)

第243図1は弧状を呈する口縁部に沿って三角押文と連続刺突文が施される。以下、波状に貼付された隆帯の両脇にも三角押文と連続刺突文がみられる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2～8はキャリパー形の土器。2は長楕円形の区画を作る。区画内にはLの捺糸文がみられる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。3は2本の横走する隆帯により口縁部と頸部を画する。口縁部はLの捺糸文を地文とし、2本一対の隆帯により楕円形の区画が作られる。頸部は無文帯になる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。4は2本一対の隆帯により半楕円形の区画が作られる。区画内にはLの捺糸文がみられる。色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。5は単節縄文を地文にするようである。隆帯により渦巻文や区画が作られる。色調は灰褐色(7.YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。6は隆帯により口縁部と頸部を画する。口縁部には隆帯により楕円形の区画が作られ、区画内には集合する沈線が充填される。頸部は無文帯になる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。7は隆帯により渦巻文や区画が作られる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。8は2本一対の隆帯を横走させ、上位には縦位の複数の隆帯を貼付する。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

9はLの捺糸文を地文とする。横位に隆帯を貼付し、それに沿って半截竹管による3条の沈線が施される。横位の隆帯からは2本一対の隆帯が弧状に垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10はLの捺糸文を地文とする。2本の隆帯を垂下させ、そこから横位に隆帯を貼付する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

11は浅鉢形土器になろうか。「く」字状に内屈した上位には半截竹管による文様が描かれる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第323図1～3は打製石斧。1・2は撥形。1は縦長の剥片を使用。刃部は平刃状を呈する。111.5g。硬砂岩製。2は横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。刃部は斜刃状。103.5g。凝灰岩製。3は短冊形。横長の剥片を使用。刃部は円刃状。219.9g。硬砂岩製。

すべて覆土中からの出土である。

124号住居跡(第244図)

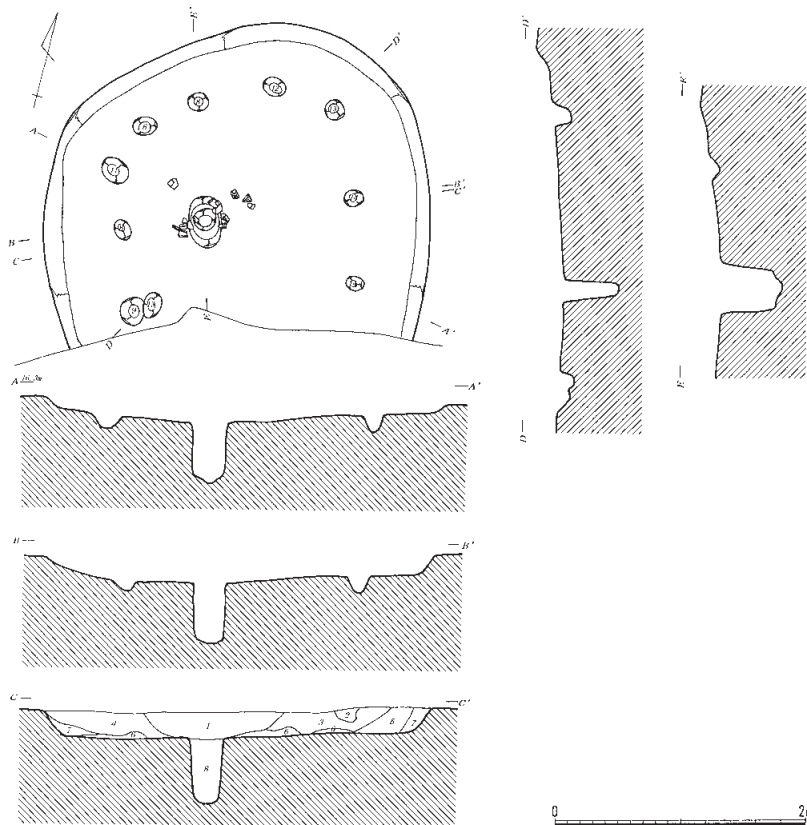
〔位置〕 25Ⅶ地点。

〔構造〕 126J・23方・467Dに切られる。(平面形)楕円形。(規模)590×550cm。(主軸方位)N—S。(壁高)10～36cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅13～25cm・下幅5～13cm・深さ4～21cmを測り、全周する。(床面)硬質ロームを床面とするため遺存状態は良好である。(炉)住居中央より僅かに北に偏って位置する。70×60cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ15cmを測る。南側の被熱は灰の掻き出しのためか。(柱穴)深度に差は

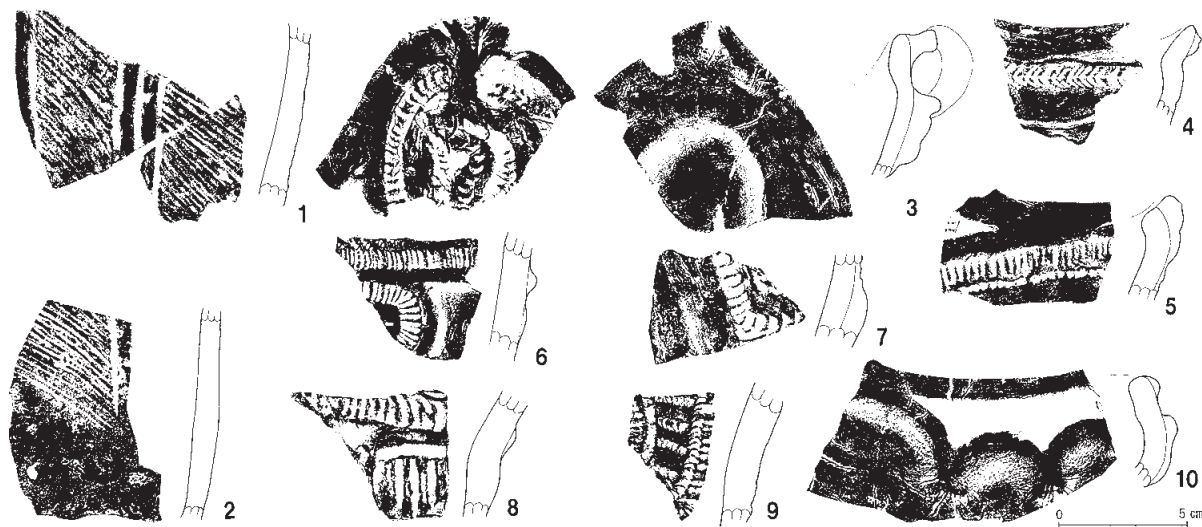
あるが、支柱穴は6本と思われる。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。



第251図 127号住居跡 (1/60)



第252図 127号住居跡出土遺物 (1/3)

- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を含む。ロームブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 炉跡の掘り込みから土器片が出土したが、大部分は覆土中からのものである。

〔時期〕 勝坂式期。

124号住居跡出土遺物 (第245図、第323図4～8、第329図13・14、第344図1)

第245図1は隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内には隆帯に沿って連続刺突文が2条施される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には雲母を多く含む。

2は口唇部を帯状に肥厚させ、そこから隆帯が弧状に貼付される。口唇部及び隆帯を含めて、全面にRLの単節斜縄文が施される。2条の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

3は波状口縁の土器。隆帯により楕円形の区画が作られようか。隆帯に沿って連続刺突文が加えられる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には雲母を僅かに含む。

4・5は隆帯により主文様が構成され、空白部に刻みや三叉文が充填される。色調は共に灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を含む。

6・7は隆帯の両側に幅広の角押文が加えられる。6の空白部には三角押文が斜位に施される。6の色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。7の色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

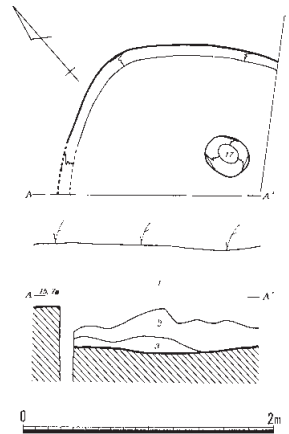
8は3条の沈線が横走する。2条の沈線を垂下させ、両側に多条の弧線を施す。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細礫を含む。

9は隆帯により区画が作られようか。区画内には半截竹管による半浮彫り状の集合する沈線が施され、その上に三角押文が斜位に加えられる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

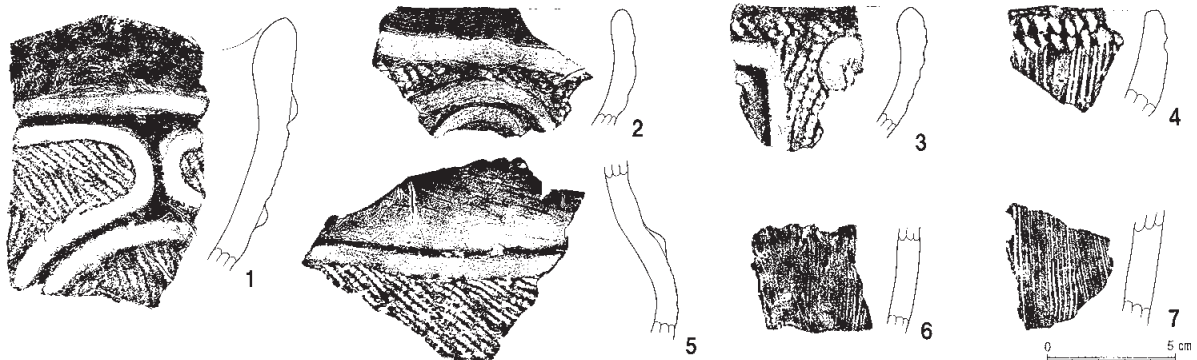
10は隆帯を弧状に貼付する。全面にRLの単節斜縄文が施されるが、隆帯上には刻みを施したかのような縄文施文がみられる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。

11はRLの単節縄文を地文とし、梯子状の隆帯が貼付される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を含む。

第323図4～8は打製石斧。4・5・8は短冊形。4は横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。刃部は斜刃状。65.7g。硬砂岩製。5の刃部は平刃状。50.7g。結晶片岩製。8の刃部は斜刃状。256.7g。結晶片岩製。6は石器



第253図 128号住居跡 (1/60)



第254図 128号住居跡出土遺物 (1/3)

上位が僅かにくびれる。横長の剥片を使用。刃部は斜刃状。63.5 g。硅岩製。7は撥形。横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。刃部は円刃状。側縁に敲打痕が認められる。151.6 g。礫岩製。

第329図13・14は磨製石斧。13は刃部側を欠く。300 g。硬砂岩製。14の刃部は円刃状。110 g。硬砂岩製。

第344図1は凸基の打製石鏃になろうか。2.6 g。硅岩製。

すべて覆土中からの出土である。

125号住居跡 (第246図)

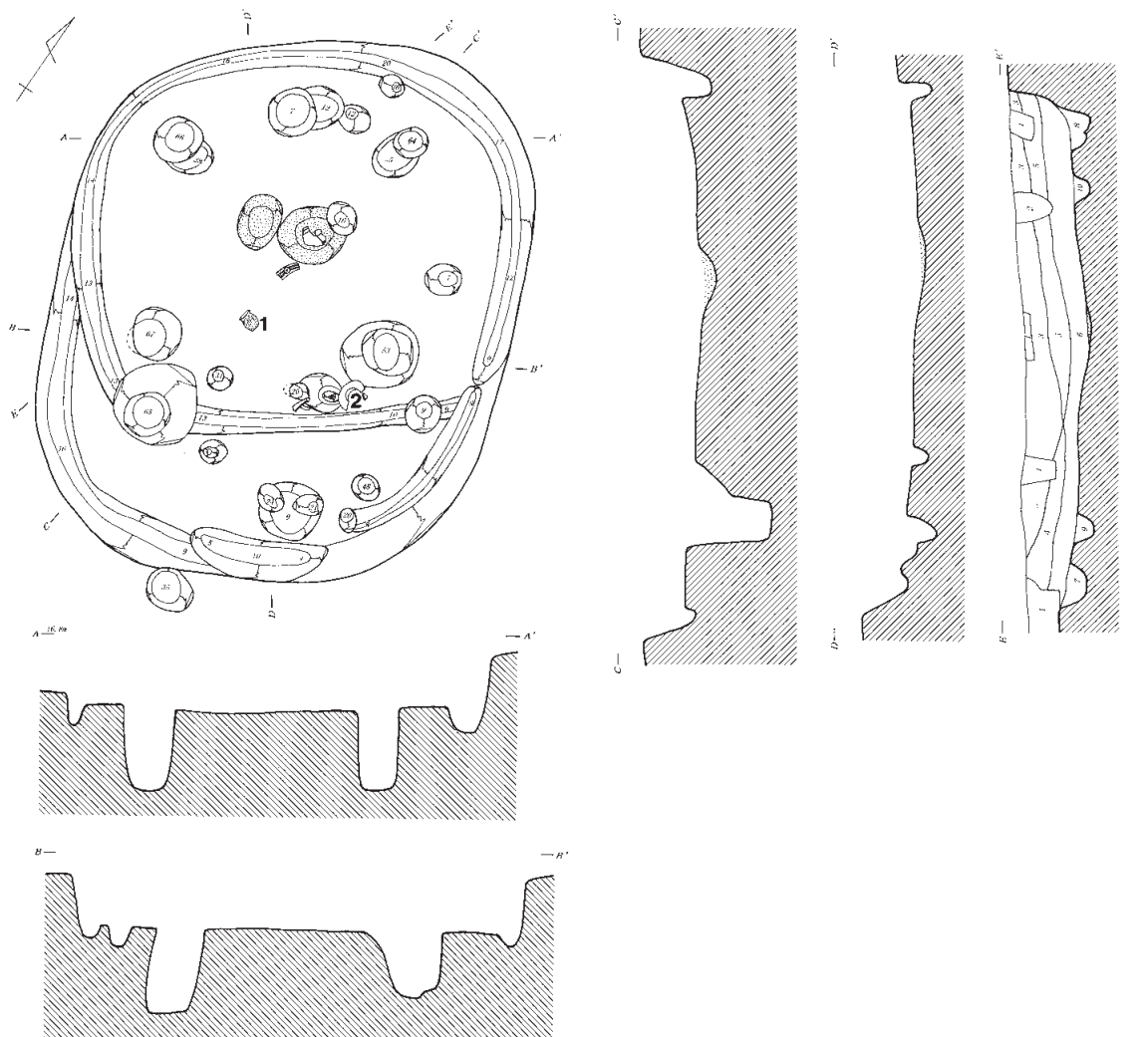
〔位置〕 71地点。

〔構造〕 南東側調査区外。122 J 切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 15cm前後を測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 部分的に硬化面が認められる。床面に溝状の掘り込みが認められたが、性格は不明。(炉) 150×135cm・深さ30cmの楕円形の掘り込みをもつ地床炉である。掘り込み内側に小ピットが巡っている。炉跡の北側に径50cm・深さ6cmの掘り込みがあり焼土の堆積が認められるため、これも炉の可能性もある。(柱穴) 深度はあるが主柱穴は判然としない。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。



第255図 129号住居跡 (1/60)

3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 大部分が覆土中の出土である。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

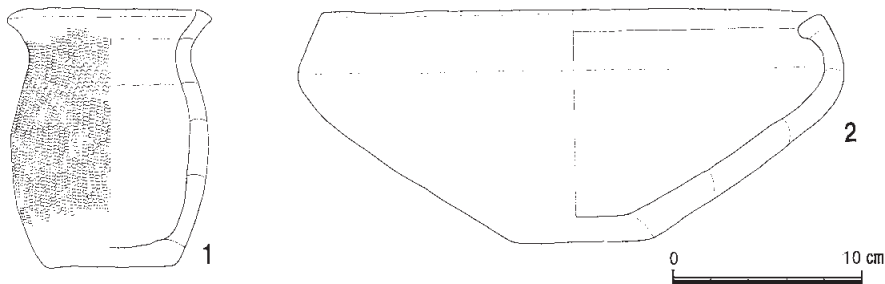
125号住居跡出土遺物 (第247・248図)

第247図1は完形。胴部はほぼ円筒状を呈し、口縁部は内湾ぎみに開く。口唇部は内側に肥厚する。口縁部は無文帯になる。胴部はRLの単節斜縄文を地文とする。口縁部と胴部の境には隆帯を波状に貼付し、波底部から蛇行する隆帯が7単位垂下する。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には片岩がめだつ。

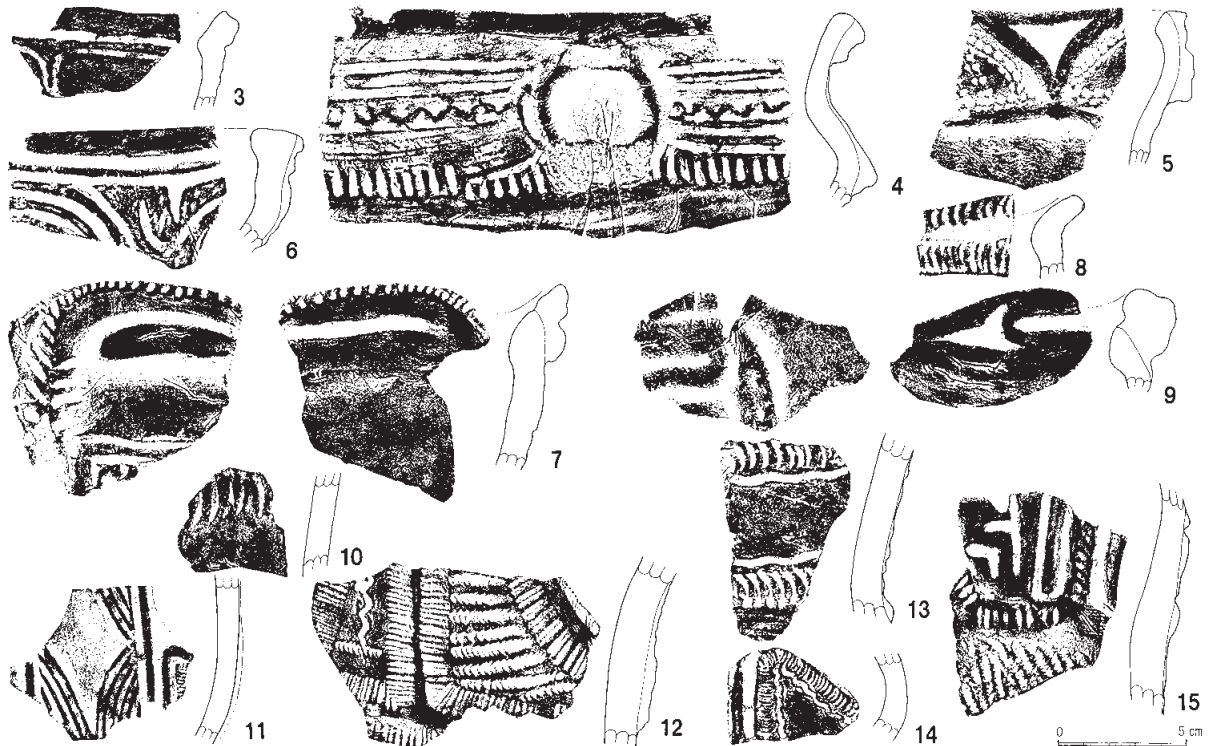
2は炉に埋設されていたキャリパー形土器の頸部である。2本の隆帯を巡らせて頸部と胴部を画する。胴部はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい橙色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

3はキャリパー形の土器。1本の隆帯で口縁部と頸部を、2本の隆帯で頸部と胴部を画する。口縁部・胴部ともLの撚糸文を地文とする。口縁部は隆帯による渦巻文を対向する位置に4ヶ所貼付し、2本一対の隆帯により区画を作る。頸部は無文帯になる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第248図4は刻みがある隆帯により楕円形の区画が作られ、区画内には隆帯に沿うような形で沈線が施され、沈



第256図 129号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第257図 129号住居跡出土遺物 2 (1/3)

線間には刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。

5は狭い楕円形区画内に集合する沈線が充填される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6はLの撚糸文を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7は浅鉢形土器。肩部が強く張り、口縁部は外反する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第247図2を除き、覆土中からの出土。

126号住居跡（第244図）

〔位置〕 25Ⅶ地点。

〔構造〕 124 Jを切る。23方に切られる。（平面形）楕円形。（規模）425×400cm。（主軸方位）N—S。（壁高）29～38cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～25cm・下幅5～10cm・深さ3～17cmを測る。（床面）硬質で平坦である。遺存状態は良好である。（炉）住居中央からやや北に偏って位置する。70×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ12cmの掘り込みをもつ。（柱穴）5本が主柱穴と思われる。

〔覆土〕

8層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

9層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

10層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。

11層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

12層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 北側の覆土中から出土した。

〔時期〕 中期。

126号住居跡出土遺物（第249・250図、第323図9）

第249図1は円筒形の土器。波状・直行する隆帯を横位に貼付する。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第250図2は口縁部内面に向けて渦巻状を呈する突起が付く。突出した口唇部には、細い隆帯と押捺の組み合わせにより波状文を形成する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

3は口唇部下に隆帯を波状に貼付する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

4は口唇部下に沈線を巡らす。LRの単節斜縄文を地文とし、波状沈線で三角形の区画を作る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

5はLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

6・7は刻みが加えられた隆帯が貼付され、空白部には三叉文や集合する沈線が施される。6の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。7の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

8はLの撚糸文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

9は刻みが加えられた隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内には集合する沈線が充填される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

10は2本一対の隆帯を横走させ頸部と胴部を画する。胴部にはLの撚糸文を地文とし、2本の隆帯が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

11は連弧文系の土器。くびれ部に4条の沈線を横走させ、口縁部と胴部を画する。Lの撚糸文を地文とする。口

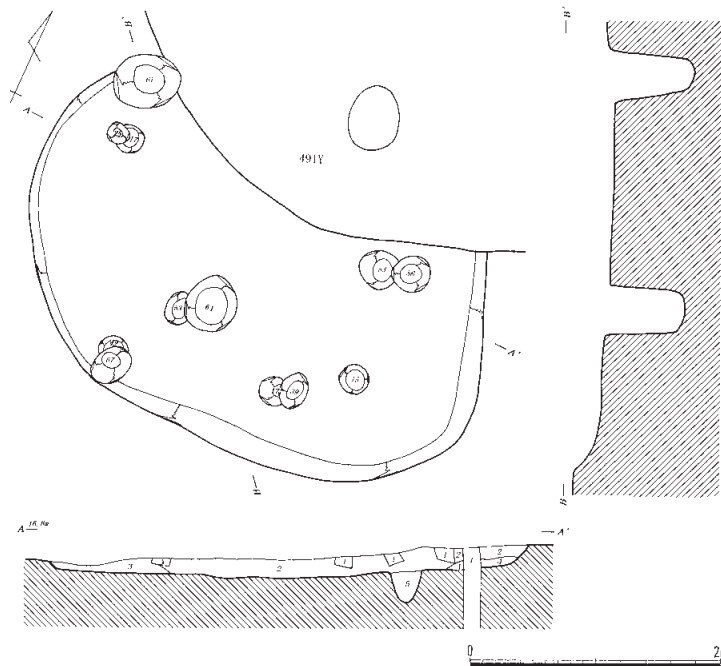
唇部下に2条の沈線を巡らせ、沈線間に交互刺突を加え鋸歯状に仕上げる。3条一組の沈線による連弧文、2条一對の沈線による波状文が施される。胴部にも連弧文がみられる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第323図9は撥形の打製石斧。表面に礫面を残す。刃部は円刃状を呈する。硬砂岩製。すべて覆土中からの出土である。

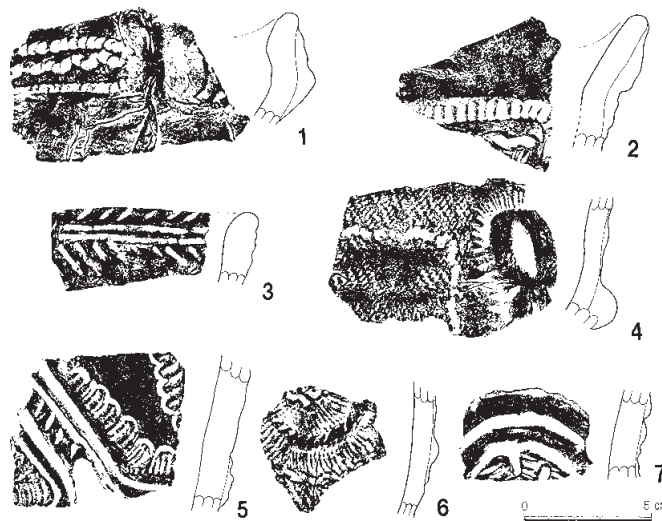
127号住居跡 (第251図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 南側が攪乱により破壊されている。(平面形) 隅丸方形か。(規模) 不明×310cm。(主軸方位) 不明。(壁高) 8~18cmを測り、70°前後の角度ですり鉢状に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 中央に向かって傾斜する。全面軟弱である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 壁際に比較的等間隔で、深度もほぼ同じピットを



第258図 130号住居跡 (1/60)



第259図 130号住居跡出土遺物 (1/3)

10本確認する。住居中央に段をもつピット1本を確認する。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。硬質。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (2.5T3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 6層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。

〔遺物〕 覆土上層に多くの遺物を含む。

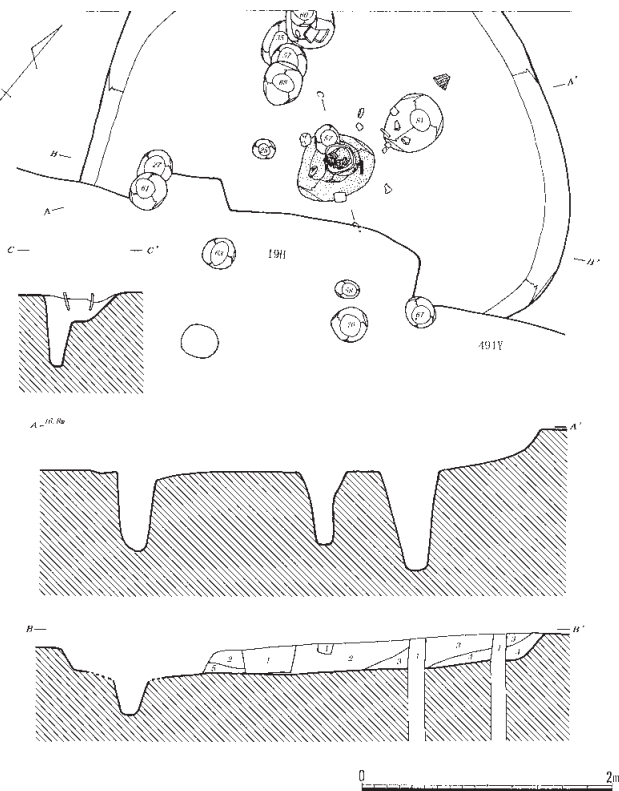
〔時期〕 勝坂式期。

〔所見〕 炉が検出されず問題はあるが、規則的な柱穴の配列があること、多くはないがまとまった土器が出土したことから、住居跡として取り扱った。

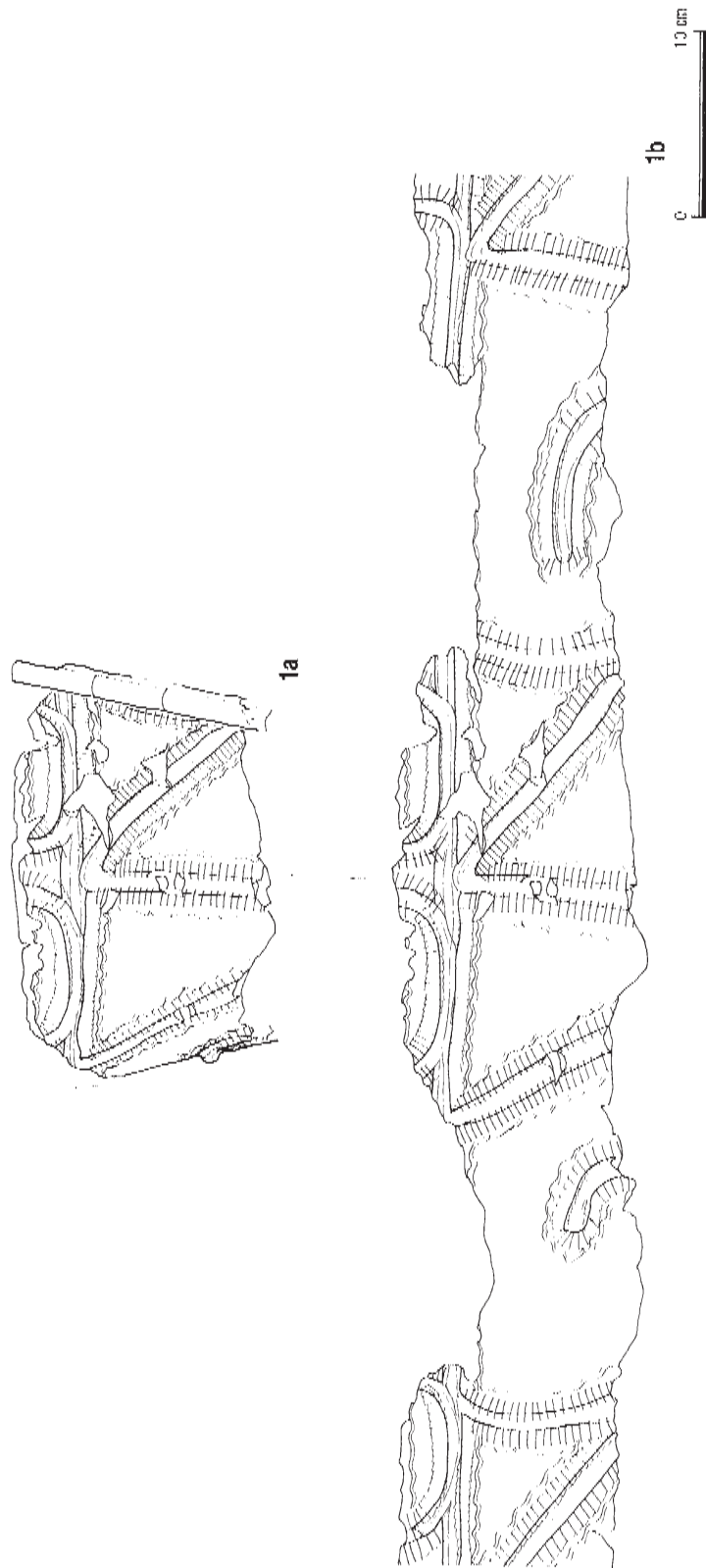
127号住居跡出土遺物 (第252図)

1・2は同一個体の可能性が大きい。平行沈線を垂下させ縦長の区画を作る。区画内には半截竹管により斜位の集合する沈線を充填する。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3は波状口縁の土器。口唇部に沿って外側竹管により連続爪形文が施され、内部には連続爪形文や波状沈線文が充填される。波頂部から環状に隆帯が移行する。内面は口唇部が帯状に隆起する。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。



第260図 137号住居跡 (1/60)



第261図 137号住居跡出土遺物 1 (1/4)

4は波状口縁の土器。口唇部下にペン先状の連続刺突文が巡る。下位には横位の沈線がみられる。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は隆帯に沿って幅広の角押文と三角押文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

6は隆帯により楕円形の区画が作られようか。隆帯に沿って連続爪形文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

7は隆帯に沿って連続爪形文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8は隆帯により区画が作られようか。区画内には集合する沈線が充填される。区画外は隆帯に沿って連続爪形文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を含む。

9は三角押文によって文様が構成される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

10は浅鉢形土器。波状に隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。すべて覆土中からの出土である。

128号住居跡(第253図)

〔位置〕23Ⅱ地点。

〔構造〕北側の一部のみ調査。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)22~26cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)確認できる範囲では硬質で平坦である。(炉)検出されなかった。(柱穴)1本検出された。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。硬質。

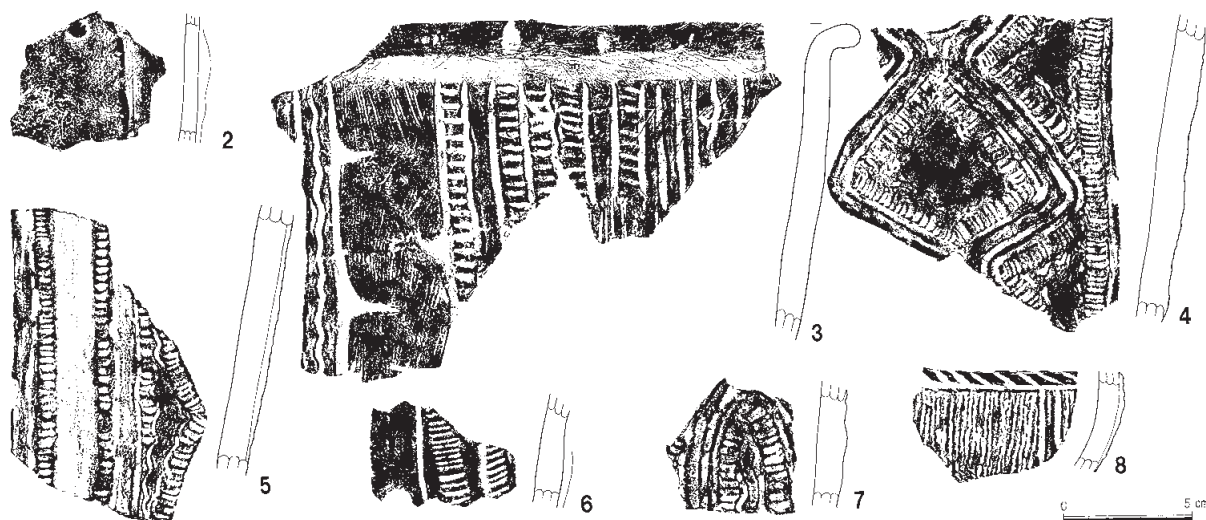
3層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土遺した。

〔時期〕中期。

128号住居跡出土遺物(第254図、第323図10・11)

第254図1は波状口縁の土器。RLの単節斜縄文を地文とし、隆帯による区画が作られる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を含む。



第262図 137号住居跡出土遺物2 (1/3)

2はRLの単節斜縄文を地文とする。口唇部下に凹線を巡らせ、同様の施文具により弧線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

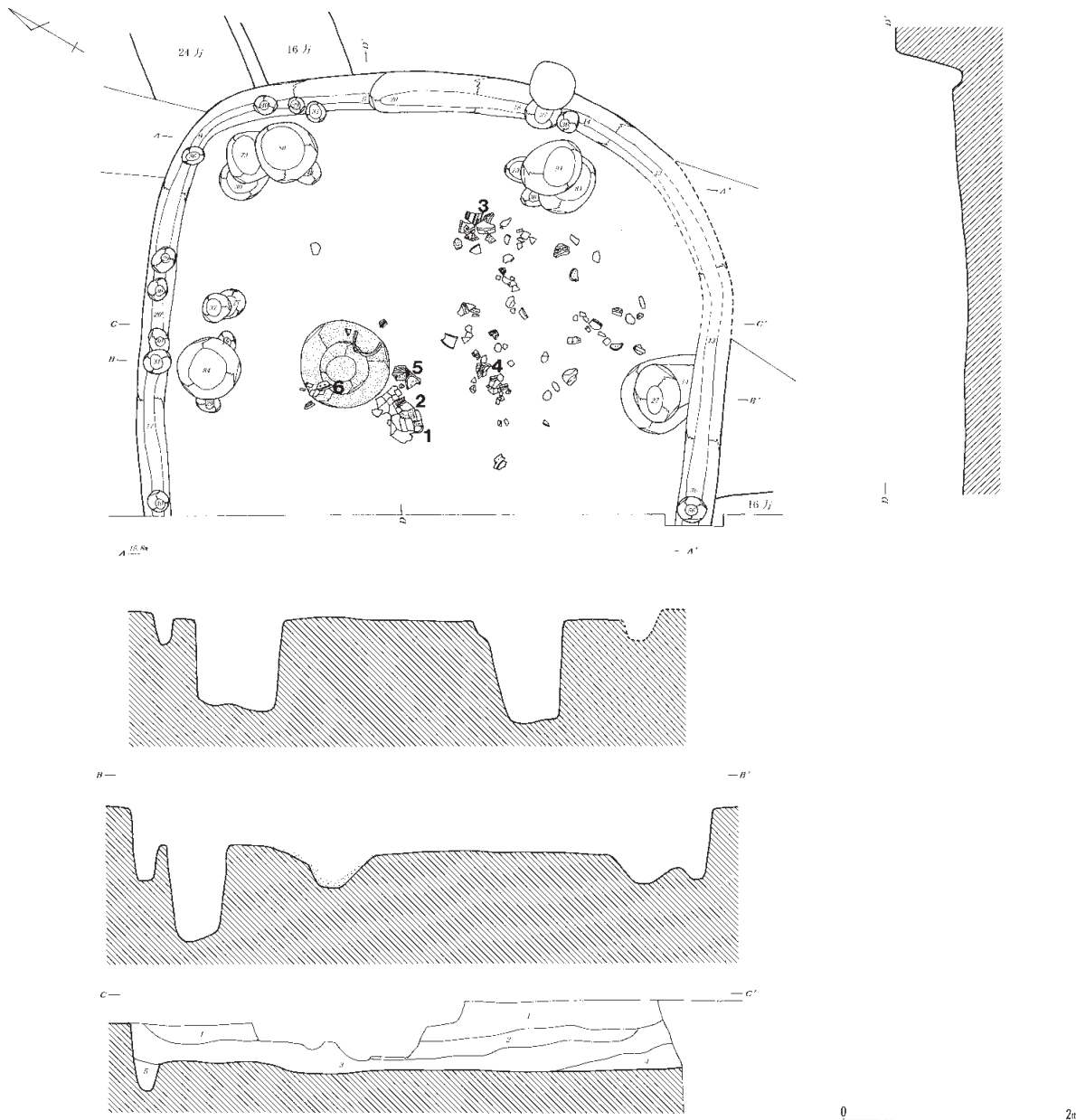
3はRLの単節斜縄文を地文とし、凹線により縦長の区画が作られようか。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

4は口唇部下に連続した刺突を2条巡らせ、以下、条線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5はLRの単節斜縄文を施し、隆帯を横走させる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

6・7は条線が施される。6の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。7の色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

第323図10・11短冊形の打製石斧。10の右側縁が僅かにくびれる。横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。



第263図 138号住居跡 (1/60)

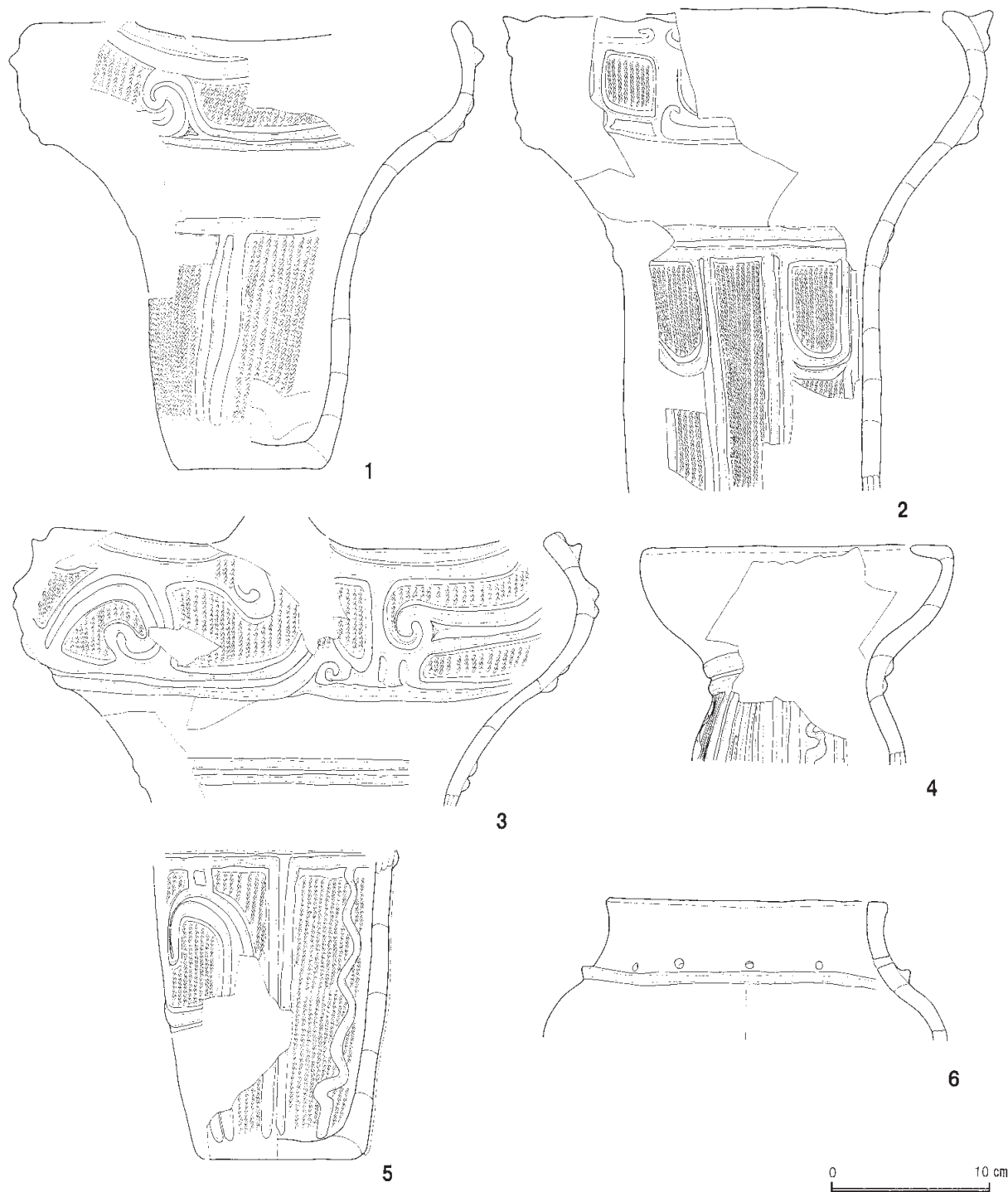
刃部は円刃状を呈する。184.6g。硬砂岩製。11は表面に大きく礫面を残す。刃部は平刃状を呈する。115.9g。硬砂岩製。

すべて覆土中からの出土である。

129号住居跡（第255図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 南側に住居を拡張。（平面形）隅丸長方形。拡張前は隅丸長方形。（規模）440×370cm。拡張前は370×315



第264図 138号住居跡出土遺物 1 (1/4)

cm。(主軸方位) N-28°-W。拡張前はN-56°-E。(壁高) 29~44cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅10~40cm・下幅5~15cm・深さ2~22cmを測り全周する。南側の拡張部分は上幅33~40cm・下幅5~13cm・深さ9~16cmを測る。(床面) 炉に向けて僅かに傾斜する。全体に硬質である。(炉) 住居中央から北西に偏って2基検出された。西側は40×35cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。東側は50×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 支柱穴は4本である。南側の1本が移動している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。後世のピット。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 7層 暗褐色土 (10YR3/4)。ローム粒子を含む。硬質。
- 8層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 9層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 10層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

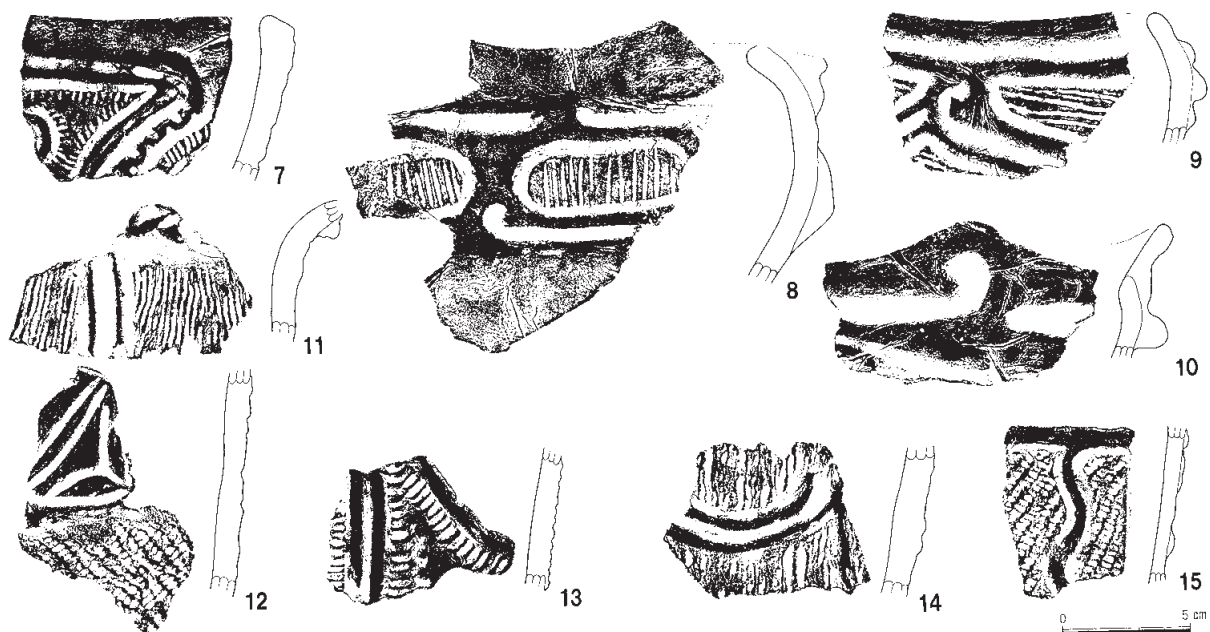
〔遺物〕 覆土中からの出土が大部分である。

〔時期〕 勝坂式期。

129号住居跡出土遺物 (第256・257図、第323図12、第331図11、第344図2、第348図48)

第256図1は完形。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は内側につまみ出されるように作出される。口縁部は無文で、胴部はRLの単節縄文が施される。色調は赤褐色 (2.5YR4/6) を呈し、胎土には細砂を含む。

2は浅鉢形土器。ほぼ完形である。底部から僅かに内湾しながら開き、口縁部は内湾する。色調は灰褐色 (7.5YR5/2) を呈し、胎土には細礫・細砂を僅かに含む。



第265図 138号住居跡出土遺物2 (1/3)

第257図3は連続刺突文により長方形の区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

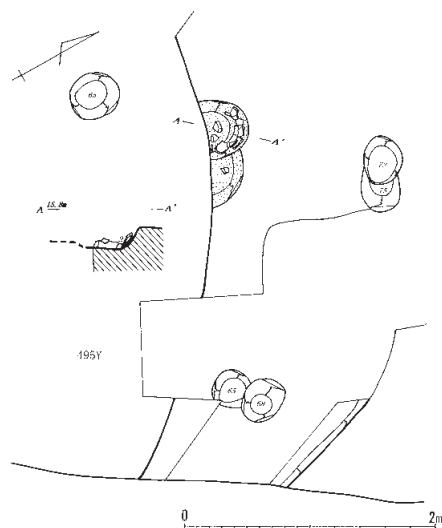
4は環状に隆帯を貼付する。4条の沈線を巡らせ、中央の沈線間には交互刺突を加え鋸歯状に作出する。以下、縦位の集合する沈線を施す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は隆帯を横走させて口縁部と胴部を画する。口縁部には隆帯を波状に貼付して区画を作る。区画内には隆帯に沿って2条の連続刺突文が加えられ、その中に連続刺突文を弧状に施す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂・雲母を僅かに含む。

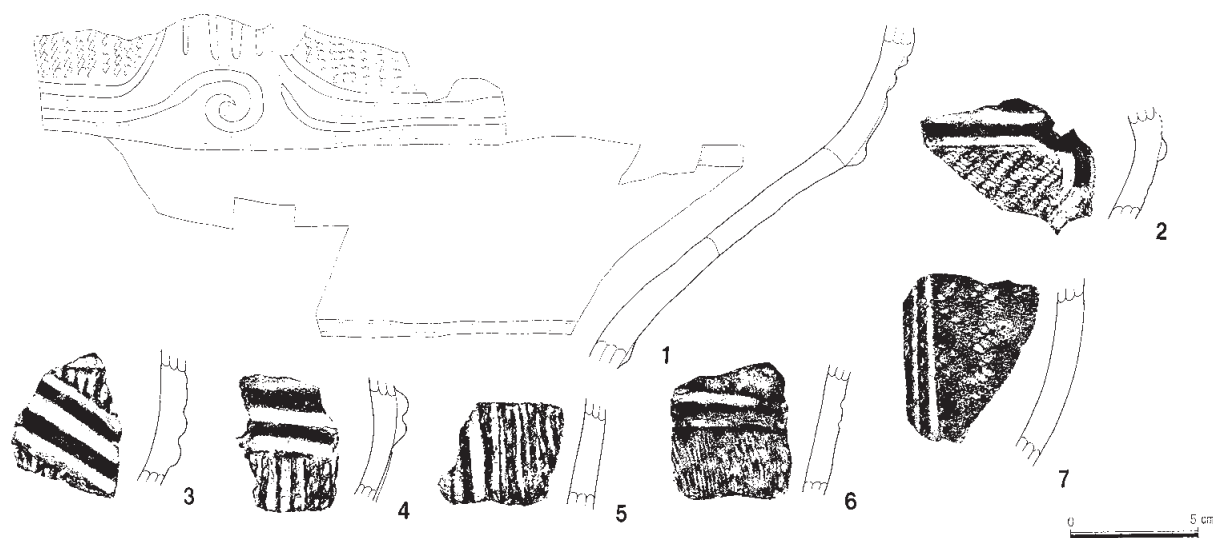
6は口唇部下に2条の沈線が巡る。RLの単節斜縄文を地文とし、沈線による曲線的な文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

7は波状口縁の土器。口唇部には刻みが加えられ、波頂部から垂下する隆帯上にまでおよび、途中から矢羽根状の刺突文に変化する。口唇部下には隆帯が横位に貼付される。下位には横走する2条の沈線がみられる。内面は口唇部に沿って沈線が施される。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8は波状口縁になろうか。口唇部には半截竹管による連続爪形文が施される。以下、幅広の連続刺突文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。



第266図 139号住居跡 (1/60)

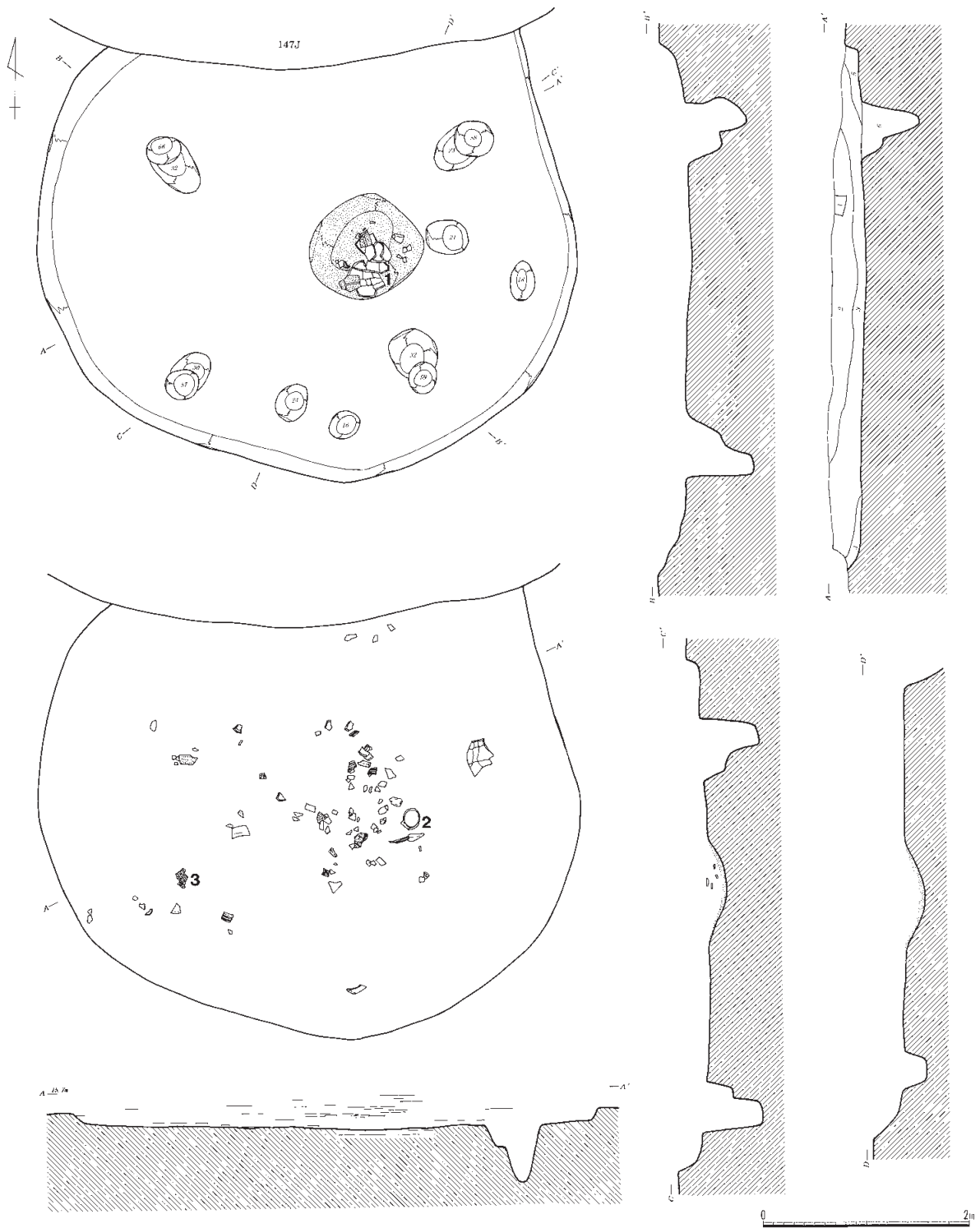


第267図 139号住居跡出土遺物 (1/3)

9は小波状口縁になろうか。口縁部は楕円状の隆帯が貼付され、そこから隆帯が垂下する。口縁部内面には三叉文と横位の沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

10は幅広の竹管状施文具の刺突が巡る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・雲母を含む。

11は半截竹管による平行沈線で縦長の区画が作られようか。区画内には半截竹管による多条の沈線を組み合わせた文様が施される。他の区画内には、沈線に沿って刻みがみられる。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。



第268図 141号住居跡 (1/60)

12は隆帯により区画が作られる。隆帯に沿って幅広の連続刺突文が加えられる。区画内には多段の三角押文や波状沈線文などが充填される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

13は幅広の連続爪形文・波状沈線文・隆帯が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

14は連続爪形文に沿って波状沈線文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

15は刻みが加えられた隆帯により区画が作られようか。区画内には沈線による文様が充填される。以下、RLの単節縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第323図12は撥形の打製石斧。刃部側を欠く。横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。70.7 g。泥岩製。

第331図11は磨石。側縁に敲打痕が認められる。205 g。硬砂岩製。

第344図2は削器。縦長剥片を使用。表面に礫面を残す。左側縁と右側縁上位に加工が加えられる。53.1 g。凝灰岩製。

第348図48は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。17.5 g

すべて覆土中からの出土である。

130号住居跡（第258図）

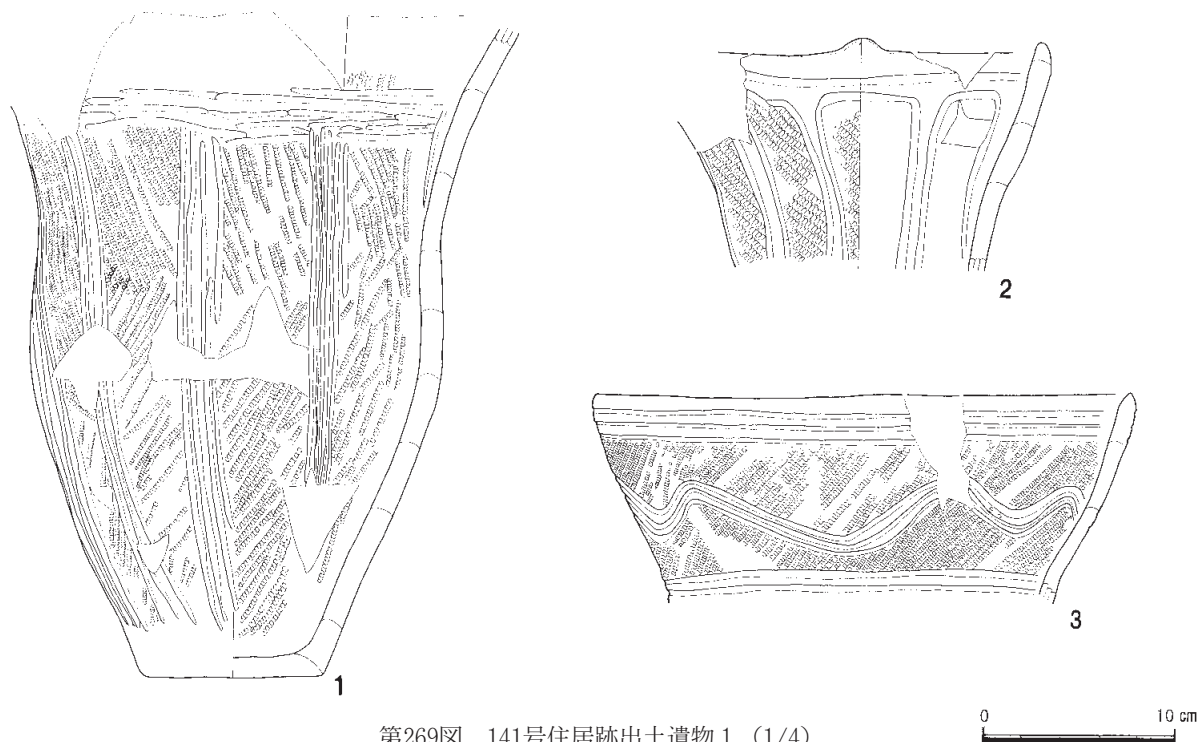
〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 491Yに切られる。（平面形）楕円形になるうか。（規模）不明×360cm。（主軸方位）不明。（壁高）8～12cmを測り、40°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）確認できる範囲内では硬質で平坦である。（炉）検出されなかった。（柱穴）深度のあるピットが支柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。



第269図 141号住居跡出土遺物1（1/4）

3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。

4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

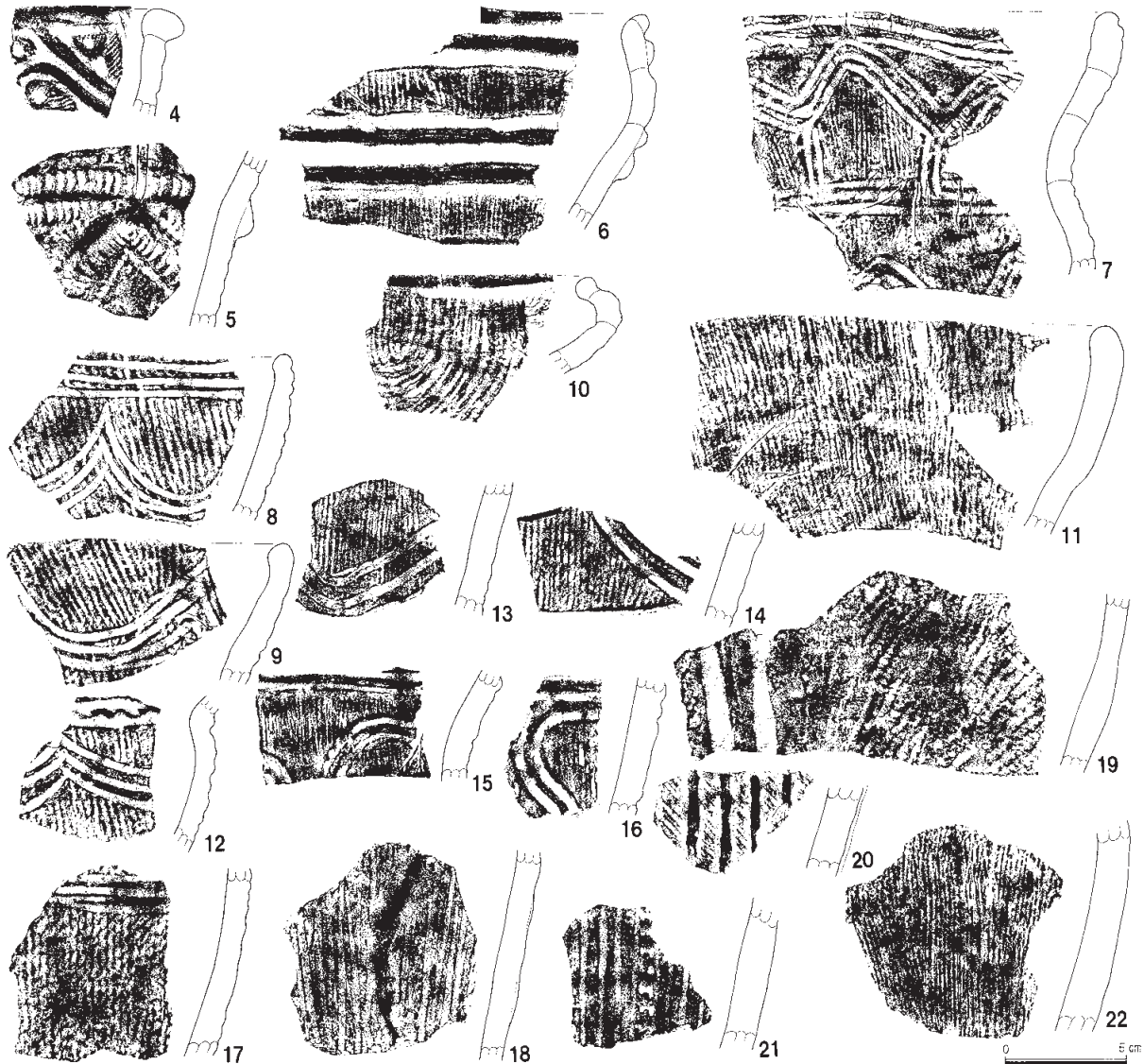
130号住居跡出土遺物 (第259図、第329図15、第31図12)

第259図1は縦位の隆帯を境にして、左側は連続刺突により長楕円形の区画が作られ、区画内には連続刺突文が波状に施される。右側は縦位に連続刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

2は波状口縁の土器。連続刺突文により区画が作られようか。区画内には波状沈線文が充填される。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

3は口唇部に斜位の刻みが加えられる。2条の押引文が巡り、以下、押引文が斜位に施される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を含む。

4はRLの単節斜縄文を地文とする。貼付されている隆帯は鎖状になろうか。隆帯に沿って幅広の押引文が加えられる。幅狭な押引文が波状に施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には細砂・輝石を含む。



第270図 141号住居跡出土遺物 2 (1/3)



第271図 142・146号住居跡 (1/60)

5は刻みが加えられた隆帯に画され、蓮華文や連続爪形文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

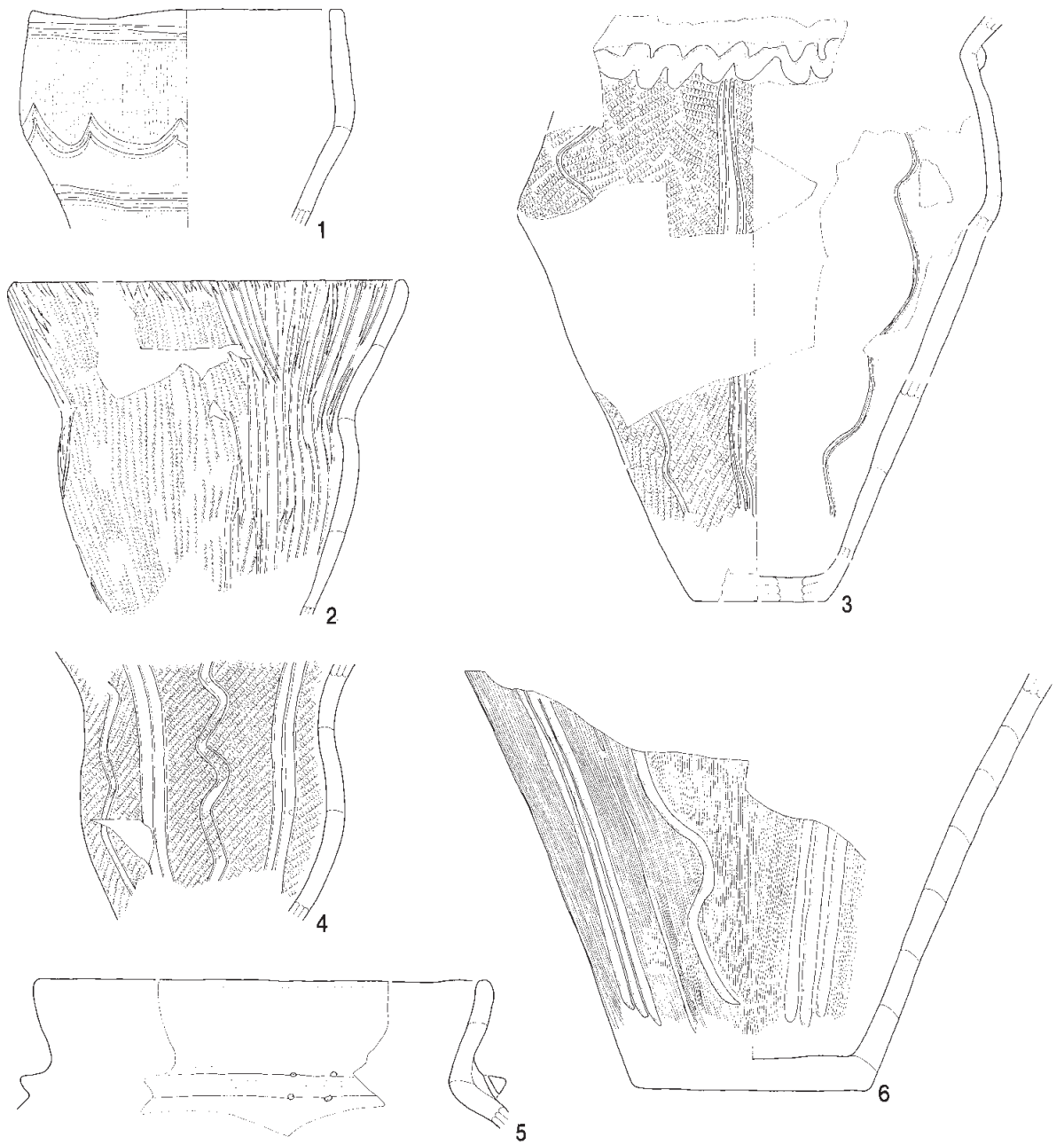
6は刻みが加えられた細い隆帯が弧状に貼付され、隆帯に沿って幅広の押引文が加えられ、波状沈線文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

7は隆帯を弧状に貼付し、空白部には沈線や刻みが施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

第329図15は磨製石斧。刃部は特に丁寧に研磨されている。刃部は円刃状を呈する。460 g。硬砂岩製。

第331図12は磨石。405 g。石英閃緑岩製。

すべて覆土中からの出土である。



第272図 142号住居跡出土遺物 1 (1/4)



137号住居跡（第260図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。491Y・19Hに切られる。（平面形）不明。（規模）不明×380cm。（主軸方位）N-40°-W。（壁高）20～24cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱で、特に硬化している部分は認められなかった。（炉）住居中央に位置する。深鉢形土器の上半部を埋設している埋甕炉で、70×50cm・深さ50cmの楕円形の掘り込みをもつ。（柱穴）不規則な配置である。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。硬質。
- 3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。やや硬質。



第273図 142号住居跡出土遺物2（1/3）

〔遺物〕 覆土中から僅かに土器片が出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

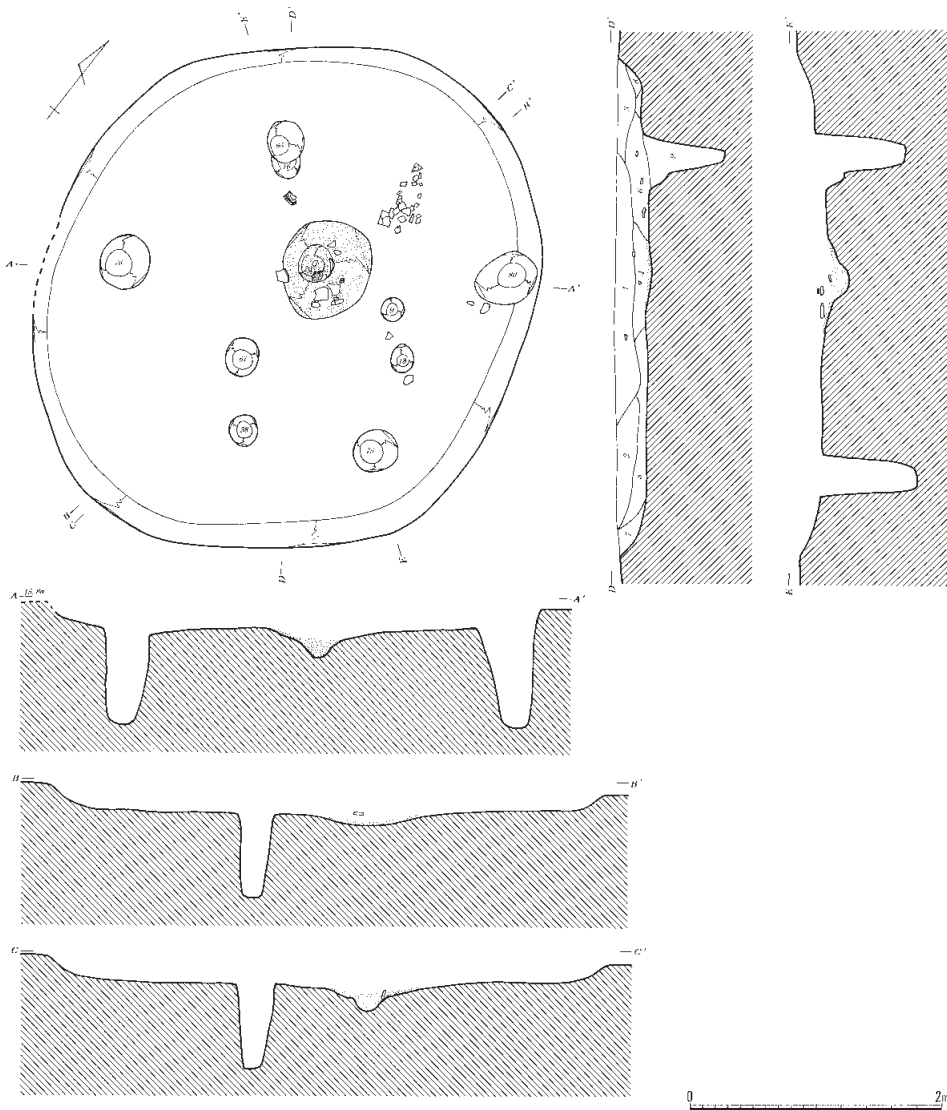
137号住居跡出土遺物（第261・262図、第344図3）

第261図1は炉に埋設されていた土器。上位は隆帯による楕円形の区画が作られ、区画内には隆帯に沿って幅広い角押文が施され、波状沈線文が充填される。下位は隆帯による三角形などの区画が作られる。隆帯に沿って幅広い角押文と波状沈線が施される。大きな区画になるとと思われる2ヵ所は、隆帯が渦巻状に貼付されているようである。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第262図2は断面三角形の隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

3は口唇部が強く外屈する。直行する沈線が多条に垂下されるが、蛇行する沈線が混じる。沈線間には刻みが施され梯子状を呈する部分がある。広く残した空白部には縦位の沈線に三角形の沈刻を加え、三叉文を作出する。細沈線を充填する。色調はにぶい赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は沈線により菱形・三角形の区画を作る。沈線に沿って連続爪形文と波状沈線文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。



第274図 143号住居跡 (1/60)

5は刻みが加えられた隆帯が2本垂下する。連続爪形文を三角形に施し、波状沈線が加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

6は隆帯の両脇に幅広の押引文を施す。色調はにぶい褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

7は半截竹管による2条一対の沈線で縦位の楕円形区画が作られる。区画内には沈線に沿って押引文と波状沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8は横走る沈線間に刻みが加えられる。Lの捺糸文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第344図3は幅広の剥片。表面には礫面を残す。63.2g。凝灰岩製。

第262図1を除き、覆土中からの出土。

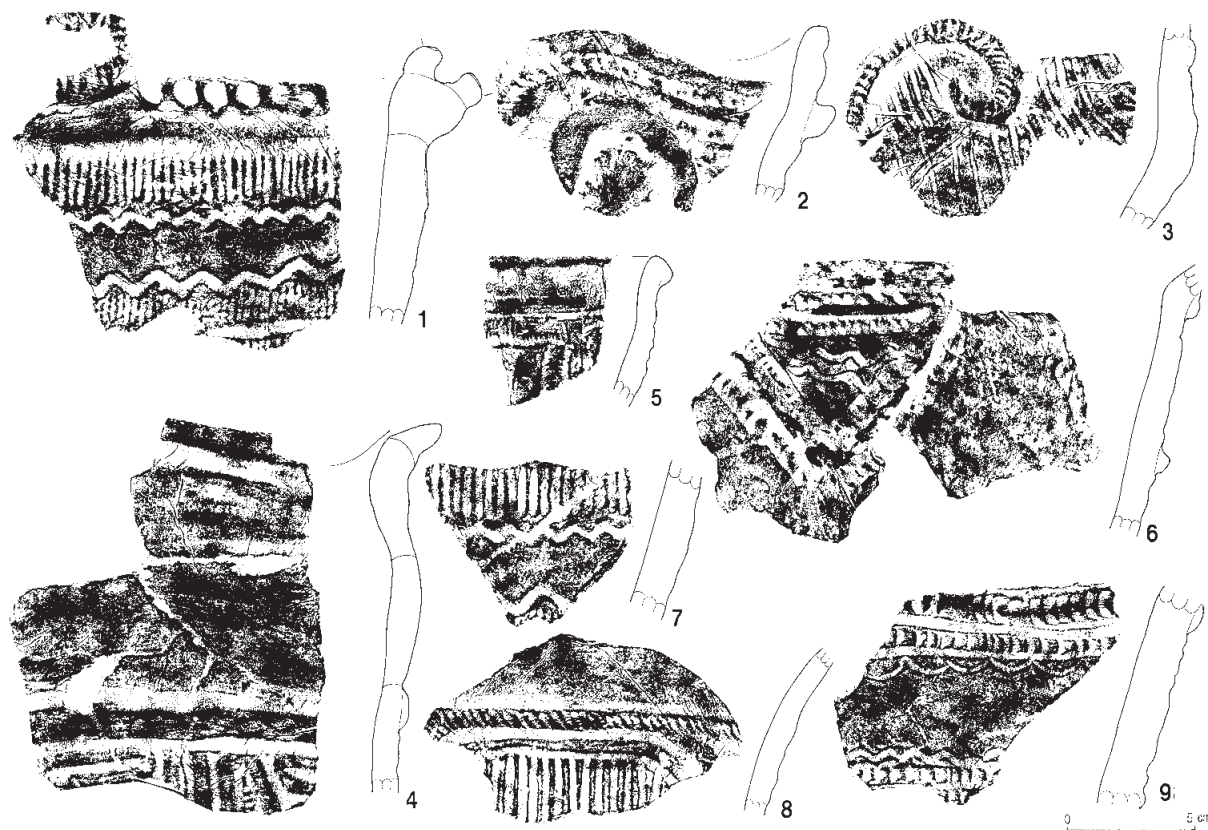
138号住居跡(第263図)

〔位置〕71地点。

〔構造〕西側調査区外。122Jを切り、495Y、18・24方に切られる。(平面形)隅丸方形か。(規模)不明×520cm。(主軸方位)N-28°-W。(壁高)9~34cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅27~38cm・下幅10~15cm・深さ12~30cmを測る。(床面)ほぼ平坦で、良好である。(炉)径80cm・深さ30cmのほぼ円形の地床炉である。掘り込みの形状から、埋設土器があった可能性がある。(柱穴)各コーナーに位置する4本が主柱穴と思われる。いずれも深度があり、重複した形態をなす。壁溝内に部分的にピットが認められる。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。硬質。

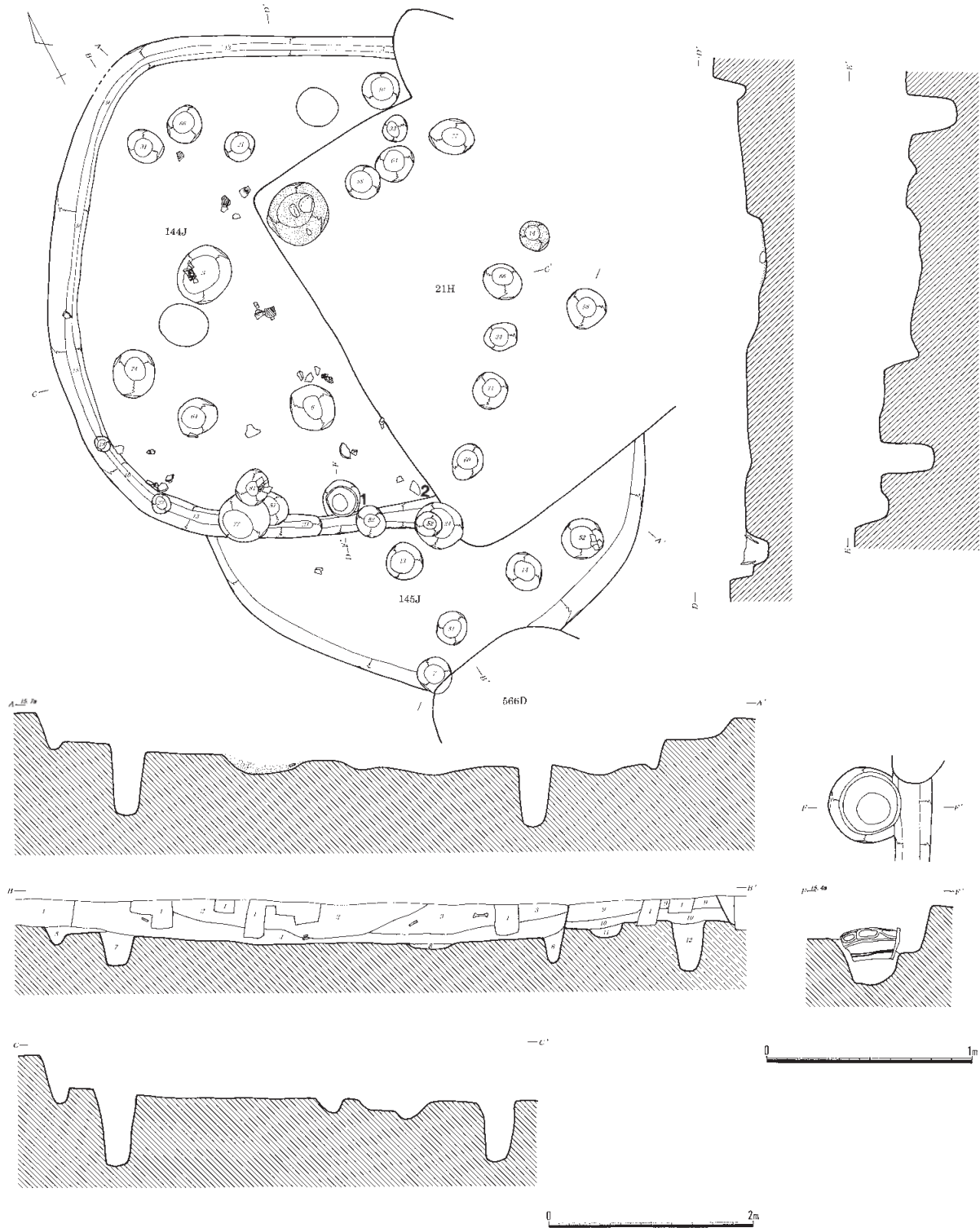


第275図 143号住居跡出土遺物(1/3)

- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。
- 5層 黒褐色土 (2.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの状態を呈し、覆土上層に遺物を多く含む。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

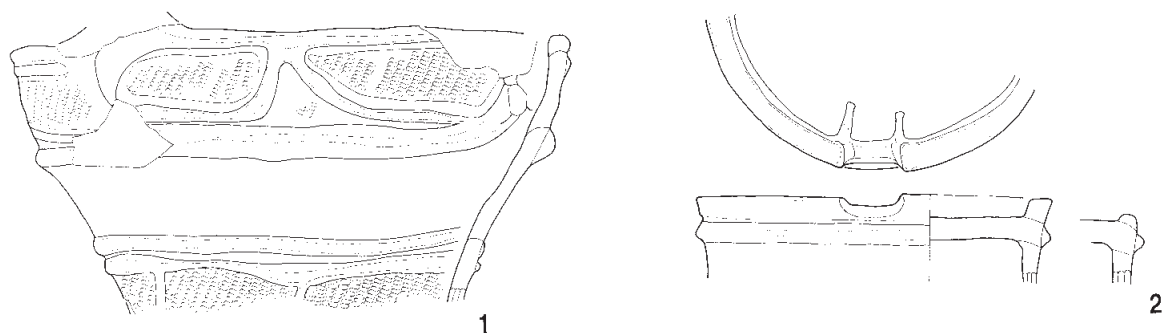


第276図 144・145号住居跡 (1/60)、144号住居跡埋甕 (1/30)

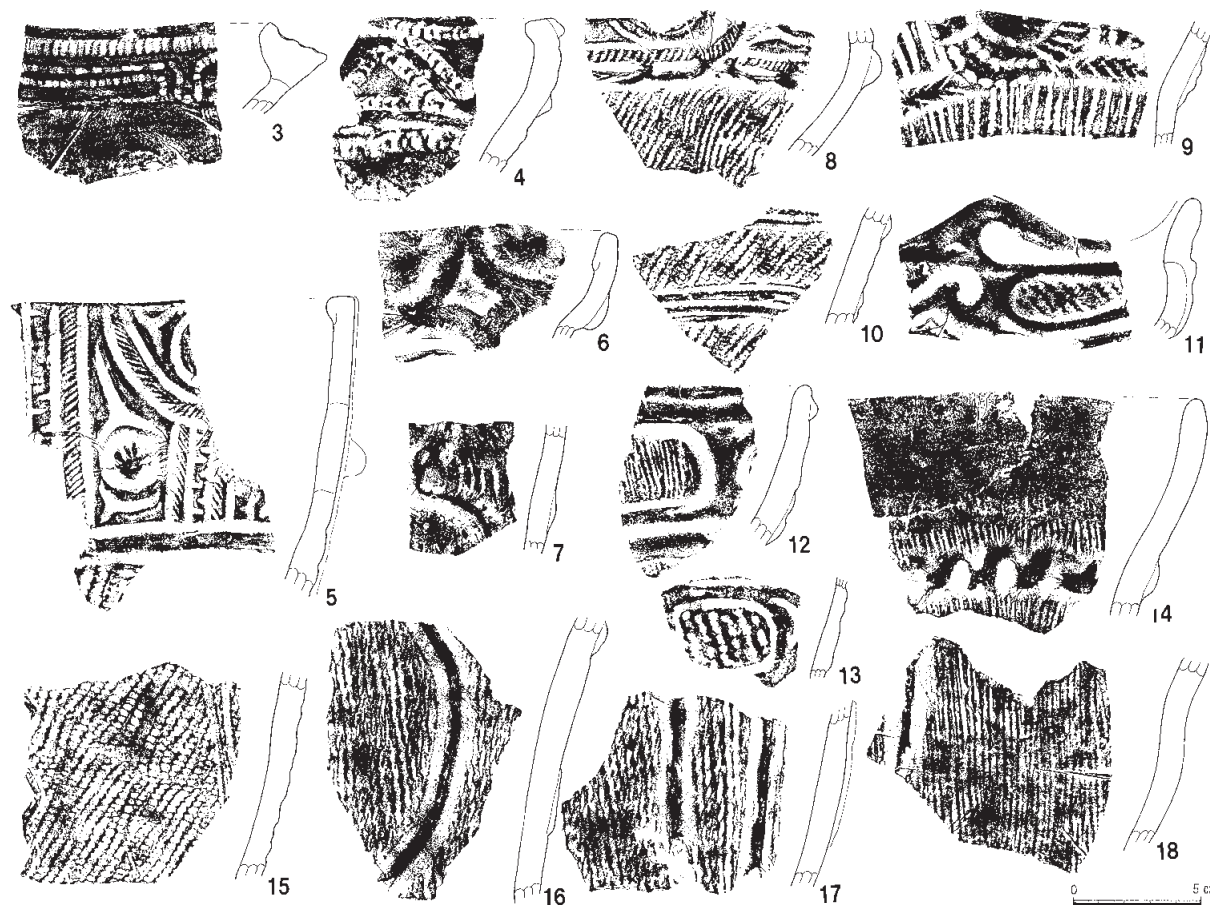
138号住居跡出土遺物（第264・265図、第324図1～5、第330図1）

第264図1はキャリパー形の土器。口縁部・頸部・胴部は隆帯より画される。口縁部はLの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯による渦巻文を基点にして区画が作られる。頸部は無文帯になる。胴部はLの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2はキャリパー形土器の1/4程の破片からの推定復元。口縁部・頸部・胴部を隆帯により画する。口縁部はLの撚糸文を地文とし、隆帯による楕円形の区画が作られる。頸部は無文帯になる。胴部はLの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯を垂下させ、隆帯間を弧状に貼付した隆帯でつなぐ。色調はにぶい赤褐色（5Y7E5/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。



第277図 144号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第278図 144号住居跡出土遺物 2 (1/3)

3はキャリパー形土器。口縁部1/2程の遺存度。口唇部上に突起が付いていた可能性がある。口縁部はLの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯により渦巻文や区画が作られる。頸部は無文帯になる。色調はにぶい褐色（7.5YR 5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

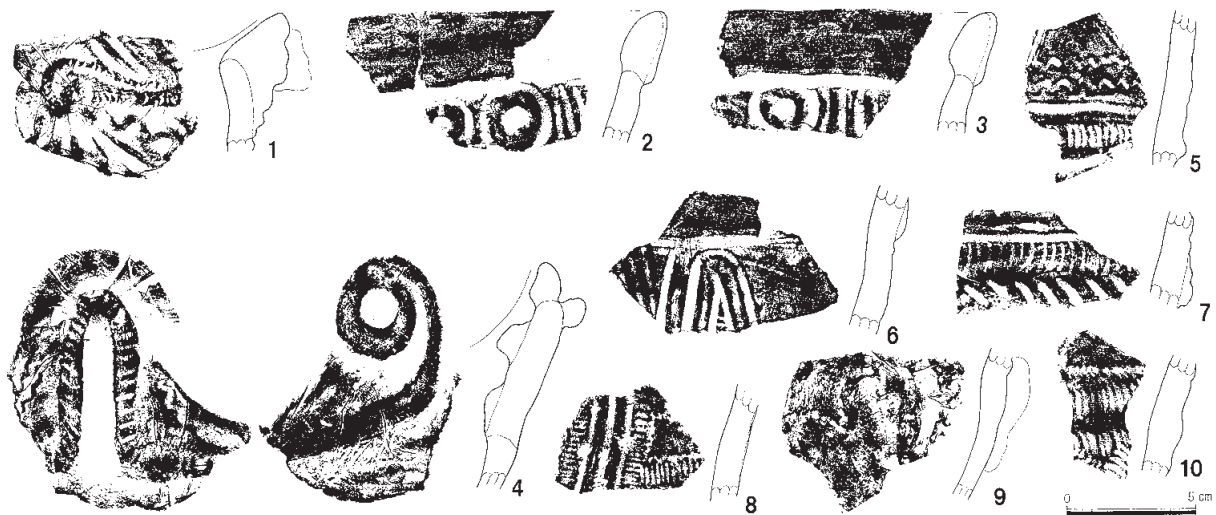
4は胴部上半以上1/2程の遺存度。頸部が強くくびれ、口縁部は内湾しながら開き、口唇部が内屈する器形である。くびれ部に2本の隆帯を巡らせて口縁部と胴部を画する。口縁部は無文帯になる。胴部は多条の沈線を地文とし、直行・蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は胴部2/3程の遺存度。Lの撚糸文を地文とする。横走する隆帯から2本一對の隆帯・蛇行する隆帯が垂下する。隆帯間には渦巻文が貼付される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

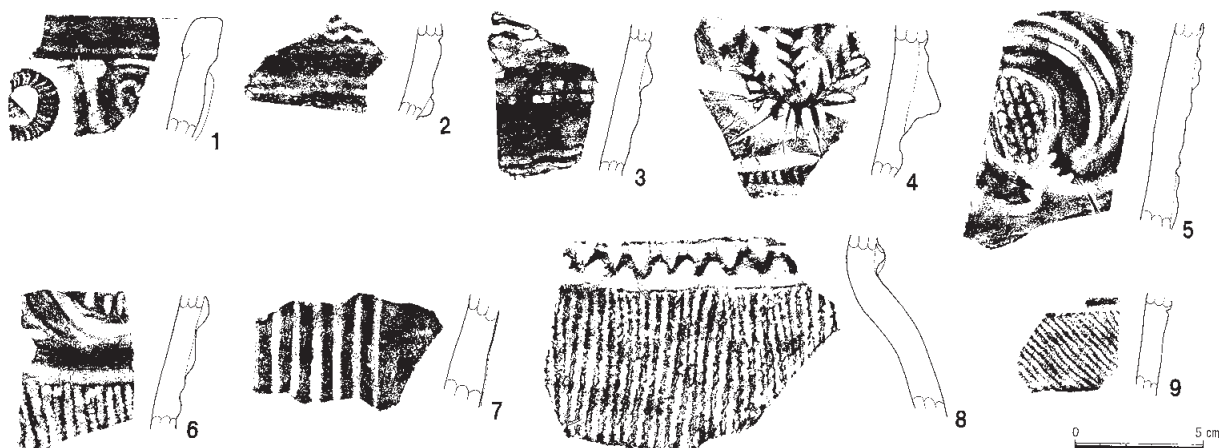
6は有孔罎付土器。胴部上半以上2/3程の遺存度。胴部は大きく張り、口縁部は内傾する。口縁部と胴部の境に断面三角形の隆帯を巡らせ罎とする。上位に5mm前後の孔が等間隔に並ぶ。色調はにぶい橙色（2.5YR7/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第265図7は部分的に交互刺突を施し鋸歯状になる隆帯で区画する。区画内外には連続刺突文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・骨針を含む。

8・9はキャリパー形の土器。8は隆帯により楕円形の区画が作られる。区画内には集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。9はLの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯



第279図 145号住居跡出土遺物 (1/3)



第280図 146号住居跡出土遺物 (1/3)

により渦巻文や区画が作られる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10は波状口縁の土器。波頂部に渦巻文がみられる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

11は綾杉状の刻みが加えられた隆帯が横走する。Lの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

12は低い隆帯が上下を画する。上位は沈線により三叉文などが描かれる。下位はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

13は隆帯に沿って連続刺突文が加えられる。半截竹管の刺突が連続して施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

14はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

15は隆帯を横走させ、RLの単節斜縄文を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

第324図1～5は打製石斧。1は分銅形に近い。刃部は斜刃状。99g。硬砂岩製。2～5は刃部側が僅かに広がる短冊形。いずれも横長剥片を使用。2は表面が線条痕らしき痕跡を残し、左側縁刃部付近は使用のためか、トロトロの状態になっている。刃部は平刃状。79.7g。粘板岩製。3は表面刃部近くに礫面を残す。刃部は平刃状。72.1g。硬砂岩製。4は刃部を欠く。表面に礫面を残す。88.9g。粘板岩製。5は刃部を欠く。74.1g。粘板岩製。

第330図1は磨製石斧。刃部側を欠く。270g。硬砂岩製。

いずれも覆土中からの出土である。

139号住居跡（第266図）

〔位置〕71地点。

〔構造〕495Y・24方に切られる。全体に攪乱が著しい。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）一部のみを検出である。6cm前後を測る。（壁溝）検出されなかった。（床面）炉の東側に部分的に硬化面が認められた。（炉）過半が495Yに破壊されている。埋設されたと思われる土器がある。（柱穴）深度のあるピットも検出されているが判然としない。

〔覆土〕弥生時代495号住居跡に切られ、耕作などによる攪乱が著しく、詳細は不明である。僅かに残された覆土はローム粒子を多く、焼土粒子を僅かに含む硬質の黒褐色土（7.5YR3/1）である。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕加曾利E I 式期。

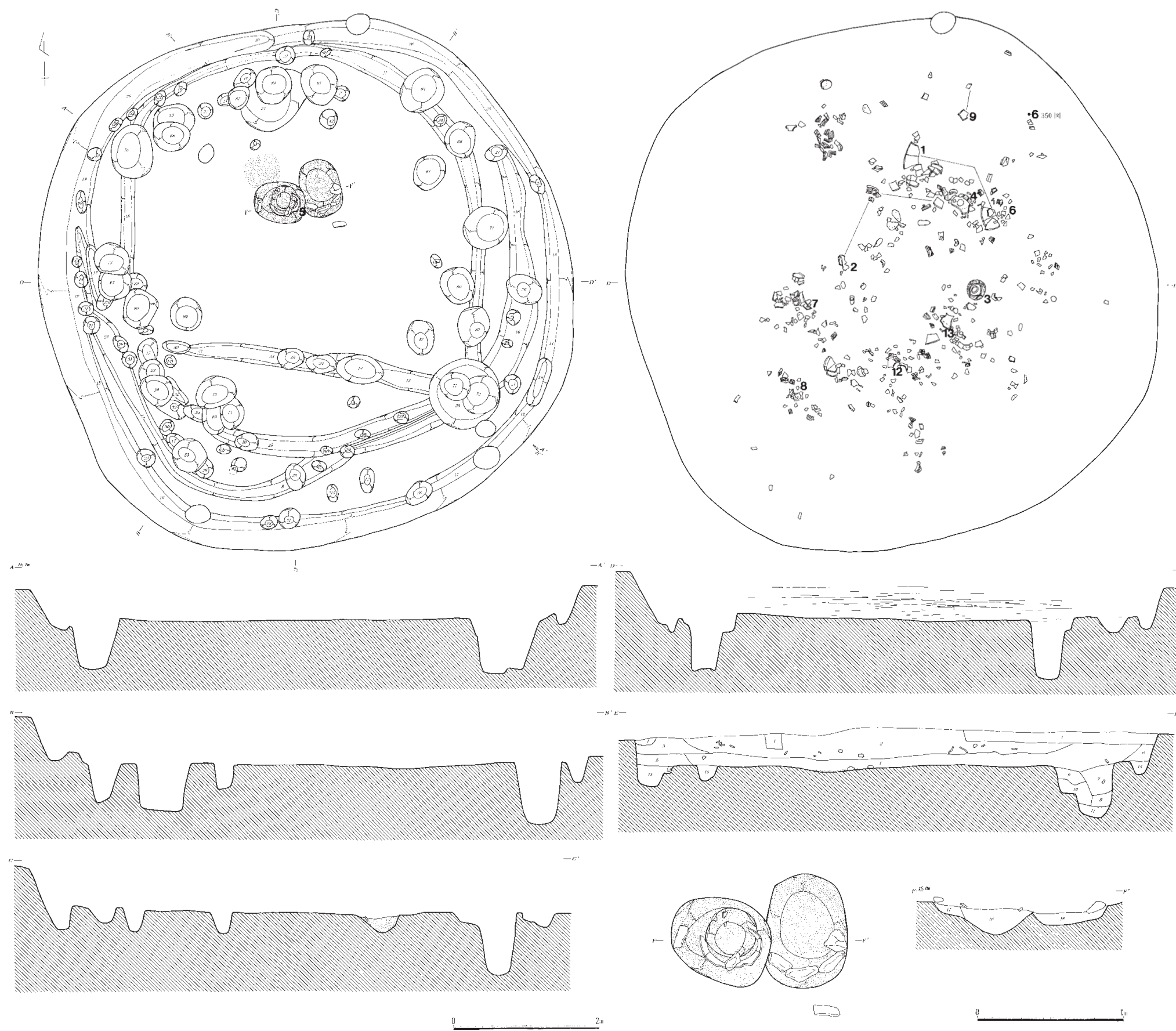
139号住居跡出土遺物（第267図）

1はキャリパー形土器。口縁部はLの撚糸文を地文とし、隆帯による区画が作られる。区画の連結部には縦位の沈線と渦巻文が施される。頸部は無文帯になる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

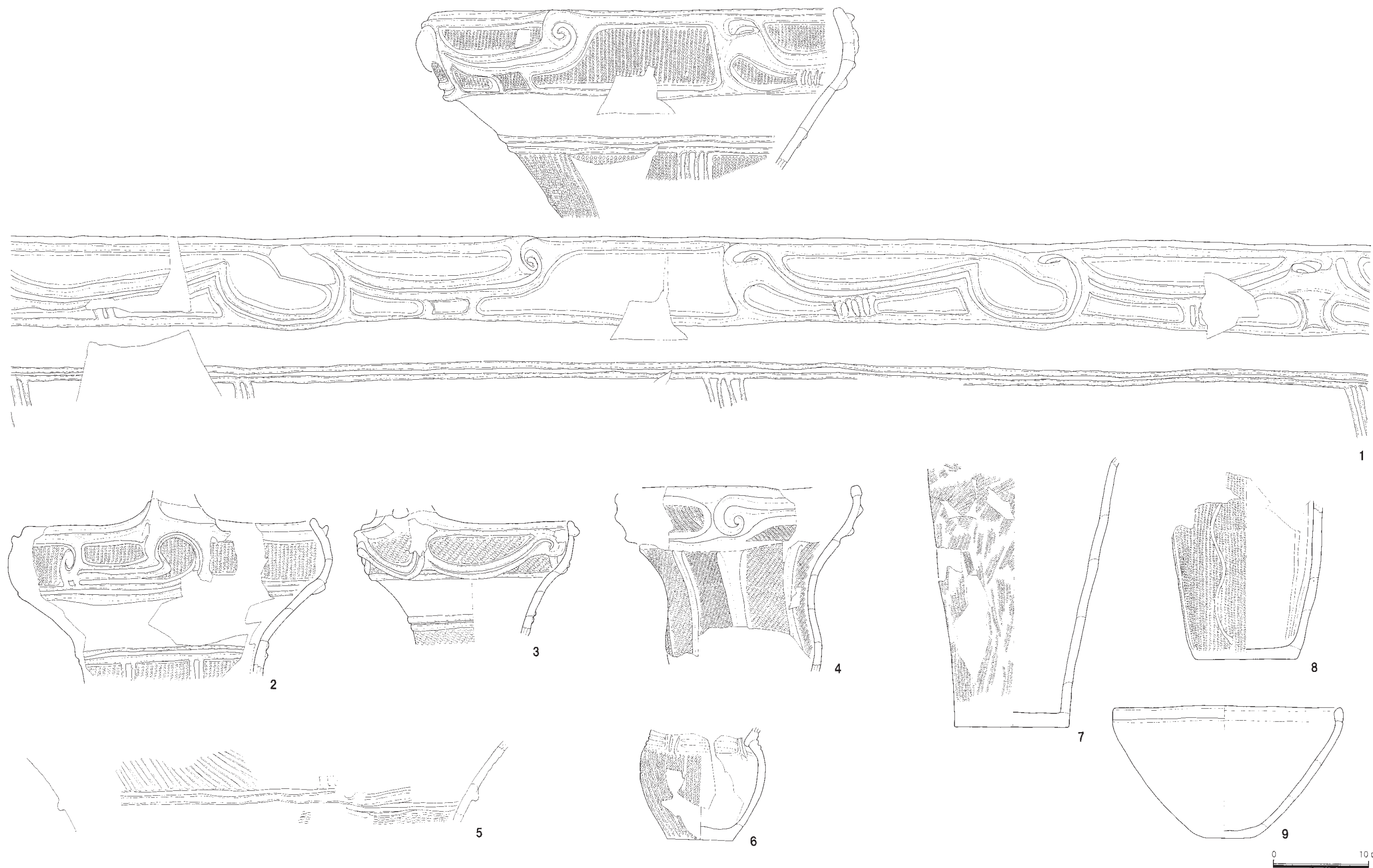
2は隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内にはRLの単節斜縄文がみられる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3～5はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が貼付される。3の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。4は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。5の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

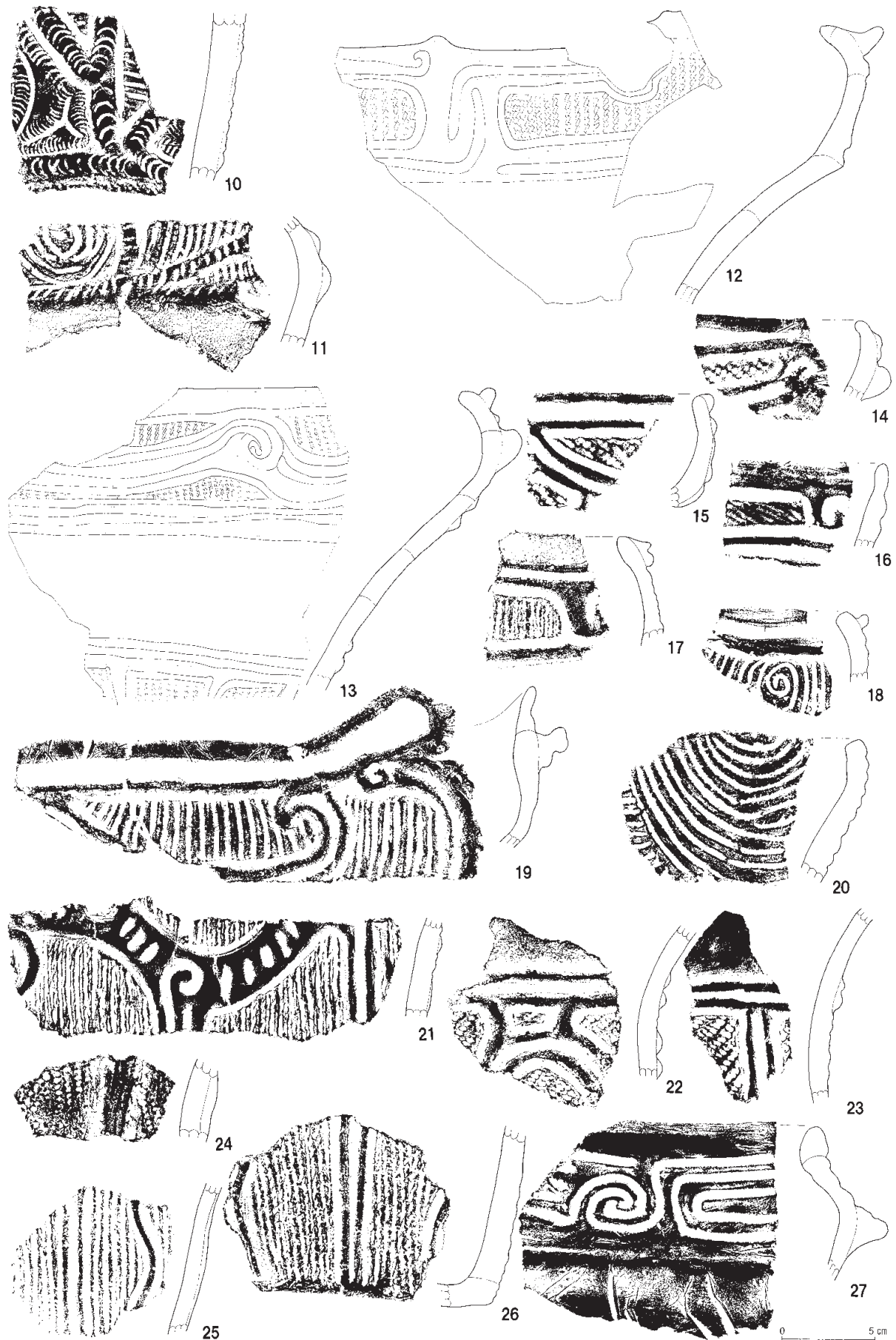
6はRの撚糸文を地文とし、2条の沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。



第281図 147号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)



第282図 147号住居跡出土遺物1 (1/4)



第283图 147号住居跡出土遺物 2 (1/3)

7はRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

すべて覆土中からの出土である。

141号住居跡(第268図)

〔位置〕130地点。

〔構造〕147Jに切られる。(平面形)楕円形。(規模)不明×520cm。(主軸方位)N-88°-W。(壁高)16~21cmを測り、北側が80°前後、南側が60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)柱穴間に硬化面が認められるが、全体に軟弱である。(炉)住居東側に偏って位置する。110×100cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ25cmの掘り込みをもつ。(柱穴)支柱穴は深度がある5本と思われる。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。やや硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

5層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

6層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土中から多く出土した。また、炉に置かれたと思われる土器もある。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

141号住居跡出土遺物(第269・270図、第324図6~8、第349図1~5)

第269図1は炉上から出土した。底部から僅かに内湾しながら立ち上がり、胴部中位からすぼまり、口頸部にかけて開く器形になる。RLの単節斜縄文を地文とする。縄文は方向を変えて施文され部分的に格子目状になる。4条の沈線を巡らせ、3条一組の沈線を11単位垂下させる。頸部は無文帯になる。色調は胴部中位以上が褐灰色(7.5YR4/1)、胴部以下は被熱のためかにはぶい橙色(5YR6/4)を呈する。胎土には細礫を多く含む。

2は胴部からはほぼ直線的に開く器形。口唇部上に小突起が付く。口縁部には沈線を巡らす。LRの単節斜縄文を地文とし、「 \cap 」字状の懸垂文を13単位施し、沈線間は磨り消される。色調は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈し、胎土には粗砂を含む。

3は連弧文系の土器。胴部から僅かに内湾しながら開く。口唇部内面は内削ぎ状になる。口縁部に3条、頸部に2条の沈線を巡らせ画する。3条一組の沈線により波状文を描く。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第270図4は沈線により文様が描かれる。曲線に囲まれた部分には刻みが施され、円形の刺突が加えられる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は隆帯に沿って角押文・三角押文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6は条線を地文とする。2本の隆帯を巡らせ口縁部と胴部を画する。色調は灰褐色(7.5YR4.5/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

7~9・12~15は連弧文系土器。7は頸部が強くくびれる。口唇部下に2条、くびれ部に3条の沈線を巡らす。条線を地文とし、口縁部には3条一組の沈線により鋸歯状の波状文を施し、波底部から2条一対の沈線が垂下する。胴部にも波状文がみられる。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。8はRの撚糸文を地文とする。口唇部下に3条の沈線を巡らせ、3条一組の沈線により連弧文が施される。色調は灰褐色(7.5YE

4/2) を呈し、胎土には細砂を含む。9はLの撚糸文を地文とし、3条一組の沈線により連弧文が施される。色調は灰褐色(7.5YR3/1)を呈し、胎土には粗砂を含む。12はLの撚糸文を地文とする。2条の沈線を横走させ沈線間に交互刺突を加えることによって鋸歯状に仕上げる。3条一組の沈線により連弧文が施される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。13は条線を地文とし、3条一組の沈線により弧線が描かれる。色調は灰褐色(7.5YE4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。14はLの撚糸文を地文とし、2条の沈線が弧状に施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。15は条線を地文とする。半截竹管により連弧文が描かれようか。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

10は口縁部が強く内湾する。沈線により重弧文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

11はLの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

16はLの撚糸文を地文とする。横位の沈線から2条一対の蛇行する沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を含む。

17はLの撚糸文を地文とし、3条の沈線が横走する。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

18は多条の沈線を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

19はRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

20は曾利系の土器。斜位に集合する沈線を地文とし、細い隆帯を貼付する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

21は沈線を多条に垂下させる。半截竹管を連続して刺突した並列した列点文が縦位に施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

22は条線が施される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第324図6～8は打製石斧。6は撥形。横長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃部は円刃状を呈する。107.2g。硬砂岩製。7・8は短冊形。共に横長の剥片を使用。7の刃部は斜刃状。114.4g。硬砂岩製。8は109.2g。泥岩製。

第349図1・3は土製円盤か。重量は1が26.9g、3が17.4g。2・4・5は土器片錘。いずれも長軸に刻み加えられる。重量は2が34.8g、4が66.9g、5が42.4gを測る。

第269図1を除き、覆土中からの出土である。

142号住居跡(第271図)

〔位置〕130地点。

〔構造〕北側調査区外。146Jを切る。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)20～29cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)部分的に硬化面が認められるが、全体に軟弱で遺存状態は不良である。(炉)住居中央に位置すると思われる。115×75cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ15cmの掘り込みをもつ。(柱穴)西側の深度のある1本が主柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。硬質。

2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。遺物を多く含む。硬質。

- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。硬質。
5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多く出土した。

〔時期〕 加曽利EⅡ式期。

142号住居跡出土遺物 (第272・273図、第324図9～13、第331図13、第334図7、第349図6・7、第350図5)

第272図1は連弧文系土器。胴部上半以上1/2程の遺存度。胴部上位が膨らむ器形である。条線を地文とし、口縁部と胴部上位に3条一組の沈線を巡らせ、2条一対の沈線による連弧文が施される。色調は暗赤褐色 (2.5YR5/8) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

2は胴部下位以上1/3程の遺存度。頸部でくびれ、口縁部は僅かに内湾しながら開く。Lの撚糸文と条線を施す。色調は上半部が赤灰色 (2.5R4/1)、下半が被熱のため明赤褐色 (2.5YR5/6) を呈し、胎土には細砂を含む。

3は口縁部を欠く。底部から直線的に開き、胴部上位で内湾し、頸部でくびれて外反する。くびれ部に隆帯を波状に貼付する。LRの単節斜縄文を地文とする。半截竹管による2条一対の沈線を2列一組にして4単位垂下させ、その間に同一施文具による2条一対の蛇行する沈線が施される。色調は赤褐色 (5YR4/5) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

4は口頸部と底部を欠く。RLの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による3条一組の沈線による懸垂文を5単位施し、懸垂文間には2条一対の沈線を蛇行して垂下させる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5は罫付きの土器。口縁部1/6程の破片からの推定復元のため口径については正確さに欠ける。胴部は膨らむものと思われ、頸部でくびれ、口縁部は僅かに内湾しながら開く。くびれ部には隆帯を巡らせ罫を作出する。罫の部分に2孔が認められる。色調はにぶい黄褐色 (10YR7/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

6は胴部中位以下1/5程遺存する。条線を地文とし、3本一組の隆帯と蛇行する隆帯が垂下する。色調は橙色 (7.5YR6/5) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第273図7は波状口縁になろうか。LRの単節縄文で加飾された隆帯を横走させ、口縁部と胴部を画する。口縁部は刻みが加えられた隆帯により渦巻文と区画が作られ、区画内には隆帯に沿って半截竹管による沈線が施され、角押文・三角押文が加えられる。胴部には沈線による区画が作られようか。区画内には刻みがみえる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8は沈線により円文などの文様が描かれる。空白部には連続爪形文や三角形の連続刺突文が施される。色調は暗赤褐色 (5YR3/2) を呈し、胎土には細砂を含む。

9は隆帯により渦巻文や区画が作られる。区画内にはRLの単節斜縄文がみられる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

10は隆帯を横走させ、口縁部と胴部を画する。口縁部にはLの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈し、胎土には細砂を含む。

11はLの撚糸文を地文とし、2条一対の沈線により区画などが作られる。色調は暗赤褐色 (5YR3/2) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

12～17・23・24は連弧文系の土器。12はRLの単節斜縄文を地文とする。口唇部下に沈線を横走させる。2条一対の沈線を弧状に施す。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。13は口縁部に半截竹管による3条一組の沈線が巡る。Lの撚糸文を地文とし、半截竹管による波状文が施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR4/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。14～17は条線を地文とする。14は口唇部下に沈線が巡り、2条一対の

沈線による連弧文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。15は口唇部下に3条の沈線が巡り、3条一組の沈線による波状文が2段施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。16は半截竹管により口唇部下に横走る沈線や連弧文が描かれる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。17は4条一組の沈線により連弧文が描かれる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。23はLの捺糸文を地文とし、3条一組の沈線を弧状・連弧状に施す。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。24は条線を地文とし、4条一組の沈線が弧状に施され、上下に縦位の沈線がみられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

18・19は曾利系の土器。18は半截竹管により重弧文が施され、蛇行する隆帯が垂下する。折り返し状の口縁部内面には縦位の短沈線が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。19は半截竹管による重弧文を組み合わせる。折り返し状の口縁部内面には縦位の短沈線が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20・21はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線により渦巻文などが描かれる。20の色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。21の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

22はRLの単節斜縄文を地文とし、蛇行する沈線が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く、輝石を僅かに含む。

25は条線を地文とする。2本の隆帯を弧状に貼付し、隆帯上には刺突が連続して加えられる。以下、隆帯を「∩」字状に貼付する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

26・27は条線を地文とし、26は2条一対の沈線、27は2本一対の隆帯を垂下する。26の色調は灰褐色（5YR/4.2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。27の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第324図9～13は打製石斧。9・10は側縁が僅かにくびれる。横長の剥片を使用。9は表面に大きく礫面を残す。刃部は円刃状。73.5g。石灰岩製。10は刃部側を欠く。86.5g。粘板岩製。11は有溝砥石を再利用。刃部は平刃状。131g。緑泥片岩製。12・13は短冊形であろうか。12は節理で剥取された剥片を使用。表面には大きく礫面を残す。179.5g。泥岩製。13は側縁に敲打痕が認められる。86.4g。硬砂岩製。

第331図13は磨石。凹石を兼用。周縁に敲打痕が認められる。600g。石英閃緑岩製。

第334図7は石皿片。850g。石英閃緑岩製。

第349図6・7は土器片錘。6は長軸、7は短軸に刻み加えられる。重量は6が13.2g、7が12.5gを測る。

第350図5は耳栓。滑車状を呈する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。13.6g。

すべて覆土中からの出土である。

143号住居跡（第274図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕（平面形）不整楕円形。（規模）440×390cm。（主軸方位）N—35—W。（壁高）13～16cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）掘り込みが浅く、全体に軟弱である。（炉）住居中央より僅かに北に偏って位置する。80×70cm・深さ15cmの楕円形の掘り込みをもつ。掘り方の形状から、埋設土器が抜かれた可能性がある。（柱穴）深度のある4本が支柱穴と思われる。西側の1本は重複した形をなしている。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を多く含む。硬質。
- 5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 8層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

143号住居跡出土遺物 (第275図、第325図1、第349図8)

第275図1・7は同一個体。口縁部が外側に張り出し、口唇部上には刻みが加えられた隆帯を長方形に貼付した突起が付く。突起下には連続刺突文が施される。口唇部には押捺が加えられる。文様は集合する短沈線・波状沈線・無文部・波状沈線・Lの撚糸文・横走する太沈線という構成をとる。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は波状口縁の土器。波頂部下に隆帯が環状に貼付されようか。口唇部・隆帯に沿って、連続刺突文が施される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を含む。

3は縦位に集合する沈線を地文とし、刻みが加えられた隆帯が渦巻状に貼付される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は波状口縁の土器。口縁部は広い無文帯になる。隆帯に画された胴部には沈線による文様が描かれる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

5は連続爪形文で区画を作り、区画内には沈線による文様が描かれるようである。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を含む。

6は隆帯により三角形の区画が作られる。隆帯に沿って連続爪形文が施される。区画内には波状沈線が2条充填される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8は無文帯下に低い隆帯が貼付され刻みがつけられる。2条の沈線で区画が作られるようで、区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には細砂を含む。

9の文様は連続爪形文が付加された隆帯・沈線間に刻みを加えた梯子状沈線・連続した半円形刺突・無文部・波状沈線・梯子状沈線の構成をとる。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第325図1は打製石斧。刃部は円刃状を呈する。79.7g。石灰岩製。

第349図8は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。21.1g。

すべて覆度土中の出土である。

144号住居跡 (第276図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 145Jを切り21Hに切られる。(平面形) 隅丸方形か。(規模) 不明×490cm。(主軸方位) N-27°-E。(壁高) 26~33cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅20~35cm・下幅8~15cm・深さ4~13cmを測る。(床面) 壁際を除き、硬化面が認められる。(炉) 径55cmの円形を呈する地床炉で、深さ20cm前後の掘り込みをもつ。(柱穴) 深度のある4本が支柱穴と思われる。(埋甕) 南壁下に位置する。深鉢形土器の上半部を埋設している。75×70cm・深さ45cmの楕円形の掘り込みをもつ。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。

- 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。硬質。
- 4層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。
- 6層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曽利E I 式期。

144号住居跡出土遺物（第277・278図、第325図2、第330図2、第334図8、第349図9～11）

第277図1は埋甕として埋設されていた土器。くずれたキャリパー形を呈する。隆帯を巡らせ口縁部・頸部・胴部を画する。口縁部・胴部ともRLの単節斜縄文を地文とする。口縁部には弧状に隆帯を貼付して、半楕円形の区画を7単位作る。頸部は無文帯になる。胴部は隆帯が垂下する。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は器台形土器になるうか。台部下端を欠く3/4程の遺存度である。受け部は平坦で、外周が帯状に高くなるが、一部「U」状に低くなり、その両端から2本の隆帯が貼付される。受け部と台部の境には隆帯が箍状に巡らされる。台部は内傾きみになるようである。色調は明赤褐色（7.5YR5/6）を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

第278図3は内屈している口縁部に幅広の角押文が巡り、区画が作られるようである。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂・雲母を含む。

4は隆帯を横走させ口縁部と胴部を画する。口縁部には隆帯により三角形の区画が作られ、隆帯に沿って連続爪形文が加えられる。胴部は隆帯下に連続爪形文が巡り、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は沈線を縦位・弧状に施して区画を作る。沈線間には刻みや交互刺突が加えられる。空白部には三叉文や刻みが加えられたボタン状の貼付文がみられる。下位にはRLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6は低い隆帯が菱形に貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

7は断面三角形の隆帯を弧状に貼付し、幅広の爪形文が連続して施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には雲母を多く含む。

8は鎖状の隆帯を巡らせ口縁部と胴部を画しようか。鎖状の隆帯の上位部分には刻みが加えられている。口縁部には刻みが加えられた隆帯が貼付され、沈線による文様が描かれる。胴部はRLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・輝石を僅かに含む。

9は綾杉状の刻みが加えられた隆帯を横走させ上下を画する。上位は刻みと三角形の押引文を2条加えた隆帯が弧状に貼付され、空白部には沈線による文様が施される。下位はLの撚糸文になる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10はRLの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く、雲母を僅かに含む。

11は波状口縁の土器。隆帯により渦巻文と区画が作られる。区画内にはRLの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

12は隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内には条線が充填される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

13は沈線による楕円形の区画内に連続刺突文が集合して充填される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

14は口縁部が無文帯になる。条線を地文とし、隆帯が波状に貼付される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

15はRLの単節斜縄文を地文とし、2条一对の沈線と蛇行する沈線を垂下させる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

16・17はLの撚糸文を地文とし、弧状・直行する隆帯を垂下させる。16の色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。17の色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

18は条線を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第325図2は短冊形の打製石斧。横長の剥片を使用。68.9g。硬砂岩製。

第330図2は磨製石斧。刃部はゆるい円刃状を呈する。126.3g。泥岩製。

第334図8は石皿片。両面とも使用により平滑になる。720g。硬砂岩製。

第349図9～11は土器片錘。いずれも長軸に刻みが増えられる。重量は9が76.2g、10が12.1g、11が14.3gを測る。

第277図1を除き、覆土中からの出土である。

145号住居跡(第276図)

〔位置〕130地点。

〔構造〕144J、566・567D、21Hに切られる。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)17～21cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)後世の遺構に破壊されているため、詳細は不明。(炉)検出されなかった。(柱穴)深度のある2本が主柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

1層 耕作土。

9層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

10層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

11層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

12層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土上層から出土。

〔時期〕勝坂式期。

145号住居跡出土遺物(第279図)

1は波状口縁になろうか。刻みが増えられた隆帯により渦巻文が作られる。空白部には沈線による渦巻文などが施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

2・3は同一個体か。口縁部は狭い無文帯になる。沈線と刺突による環状文が描かれ、2が集合する連続刺突文、3が集合する沈線が施される。2の色調は灰褐色(5YR4/2)、3の色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

4は尖頭状の突起。口唇部に沿って沈線による波状文と刻みが増えられた隆帯が施される。内面には隆帯が渦巻状に貼付される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

5は上位から、2条の波状沈線文・単沈線・連続爪形文・細い隆帯の順に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR

4/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

6は沈線による文様や結節沈線が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7は刻みが加えられた隆帯が貼付され、隆帯に沿って幅広の連続爪形文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

8は3条の沈線により区画が作られようか。沈線に沿って角押文と連続する半円形刺突文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

9は隆帯が垂下し、結節沈線による波状文などが施される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

10は隆帯に沿って幅広の角押文と三角押文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

すべて覆土中からの出土である。

146号住居跡（第271図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 142J・147Jに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）31～36cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱である。被熱のため一部赤化している。（炉）後世の遺構に破壊されている。（柱穴）4本が支柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

8層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

146号住居跡出土遺物（第280図、第325図3、第34図9、第349図12・13）

第280図1は刻みが加えられた隆帯が渦巻状に貼付され、空白部には沈線による文様が描かれる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

2は波状沈線と隆帯が横走する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

3は波状沈線と隆帯が横走する。隆帯に沿って角押文が2条施される。色調はにぶい黄褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

4は綾杉状の刻みが加えられた隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

5は部分的に刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画内には三角形の押引文が集合して充填される。空白部には隆帯に沿って沈線が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く、雲母を僅かに含む。

6は隆帯を横走させ上下を画する。上位は沈線による文様が描かれる。下位はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

7は半截竹管による平行沈線が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

8は隆帯に交互刺突を加え波状に仕上げる。Lの撚糸文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

9は半截竹管による沈線により上下を画す。区画内はRLの単節斜縄文になる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第325図3は側縁部上位が僅かにくびれる打製石斧。横長の剥片を使用。刃部はゆるい円刃状を呈する。83.5g。粘板岩製。

第334図9は石皿片。凹石を兼ねる。両面とも使用のため平滑化している。2,160g。石英閃緑岩製。

第349図12・13は土器片錘。12は長軸、13は短軸に刻みが加えられる。重量は12が25.8g。13が30.1gを測る。すべて覆土中からの出土である。

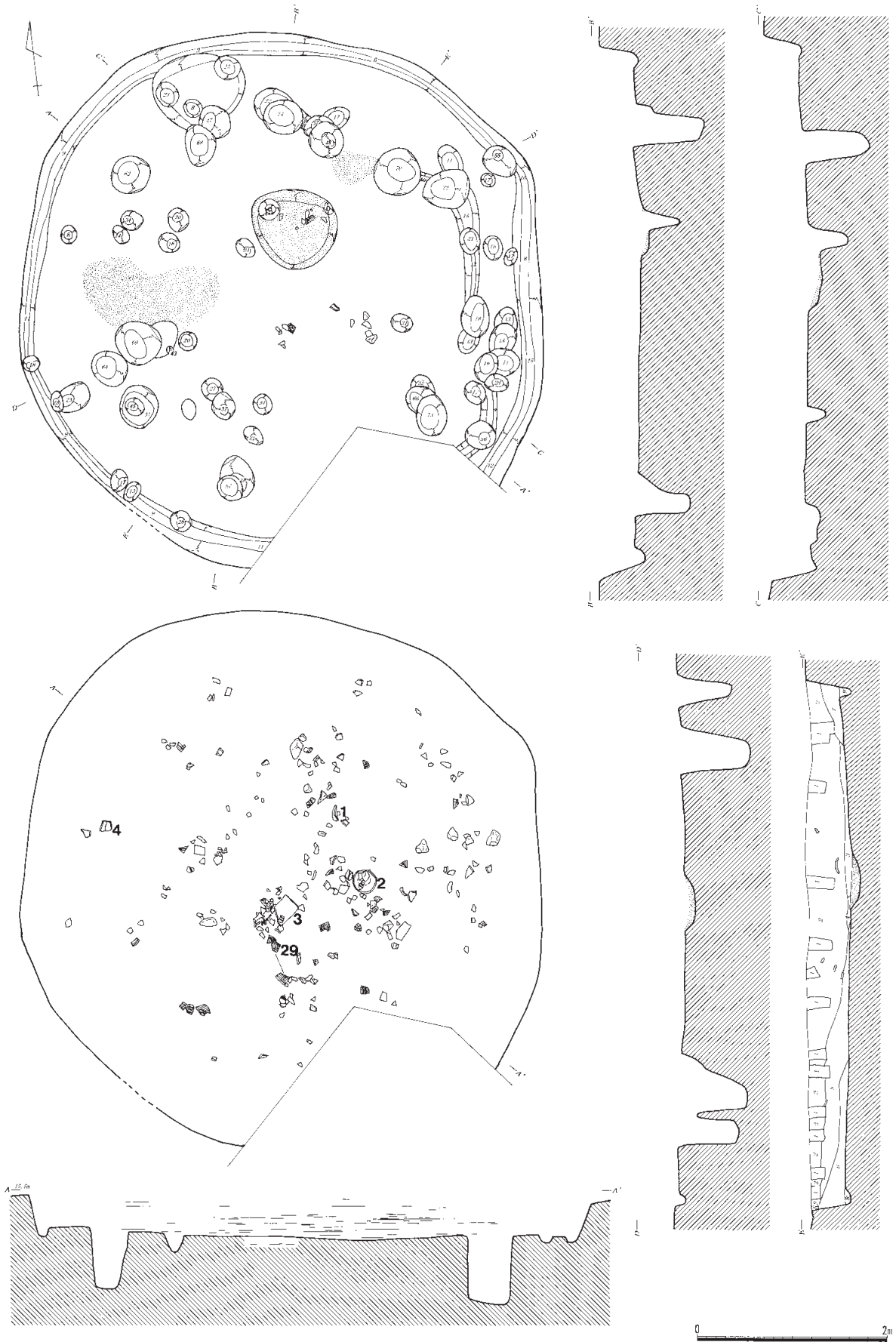
147号住居跡（第281図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 141J・150Jを切る。壁溝の状況から2回の拡張が考えられる。(平面形) 不整形。 (規模) 715×710cm。1回目の拡張は610×600cm。拡張前は560×490cm。(主軸方位) N-13°-W。(壁高) 46~64cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 拡張は、基本的に北壁を据え置き3方向に行っている。最終段階は上幅20~30cm・下幅10~15cm・深さ11~22cm、1回目の拡張は上幅15~35cm・下幅5~20cm・深さ8~24cm、拡張前は上幅8~30cm・下幅5~15cm・深さ13~26cmを測る。なお、住居南側にある東西に走る溝は、根の痕の可能性が高い。(床面) ハードロームを床面とする。全体に遺存状態は良好である。(炉) 住居中央より北に偏って位置し、2ヶ所認められる。東側の炉は85×55cm・深さ10cmの楕円形の掘り込みをもつ石囲炉で、南側に礫が残っている。西側の炉跡は65×60cm・深さ17cmの楕円形の掘り込みをもつ埋甕炉である。また掘り込み外側の北側部分の床面が径50cm前後の幅で焼けている。2ヶ所の炉の新旧関係は不明であるが、位置からみて埋甕炉が古い可能性が大きい。(柱穴) 床面上と壁溝内に90本ほどのピットが散在しているが、85cm前後の深いピットは東側に多く見られる。65cm前後のピットは西側に多く分布している。さらに壁溝内に小ピットが散在している。それぞれの時点での支柱穴を同定することはできなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 9層 褐色土 (10YR4/6)。ロームブロック。硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 13層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 14層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 15層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 16層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・焼土ブロックを含む。硬質。
- 17層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。やや硬質。
- 18層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロックを含む。やや硬質。



第284図 148号住居跡 (1/60)

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から遺物が多く出土した。

〔時期〕 加曽利E I 式期。

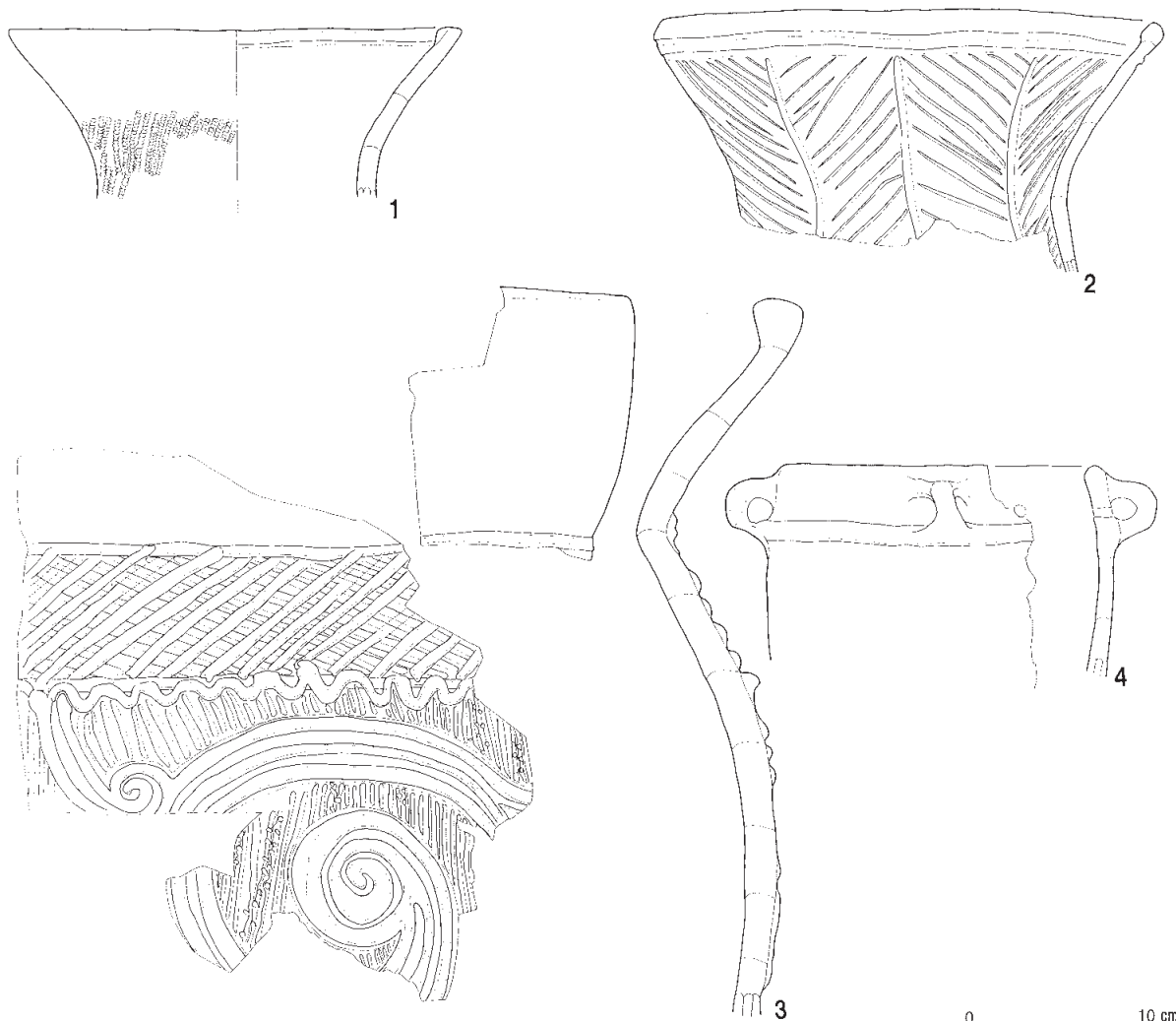
147号住居跡出土遺物（第282・283図、第325図4～16、第330図3～5、第332図1～3、第334図10、第344図5、第349図14～24、第350図6）

第282図1～4、第283図12～17はキャリパー形を呈する土器。

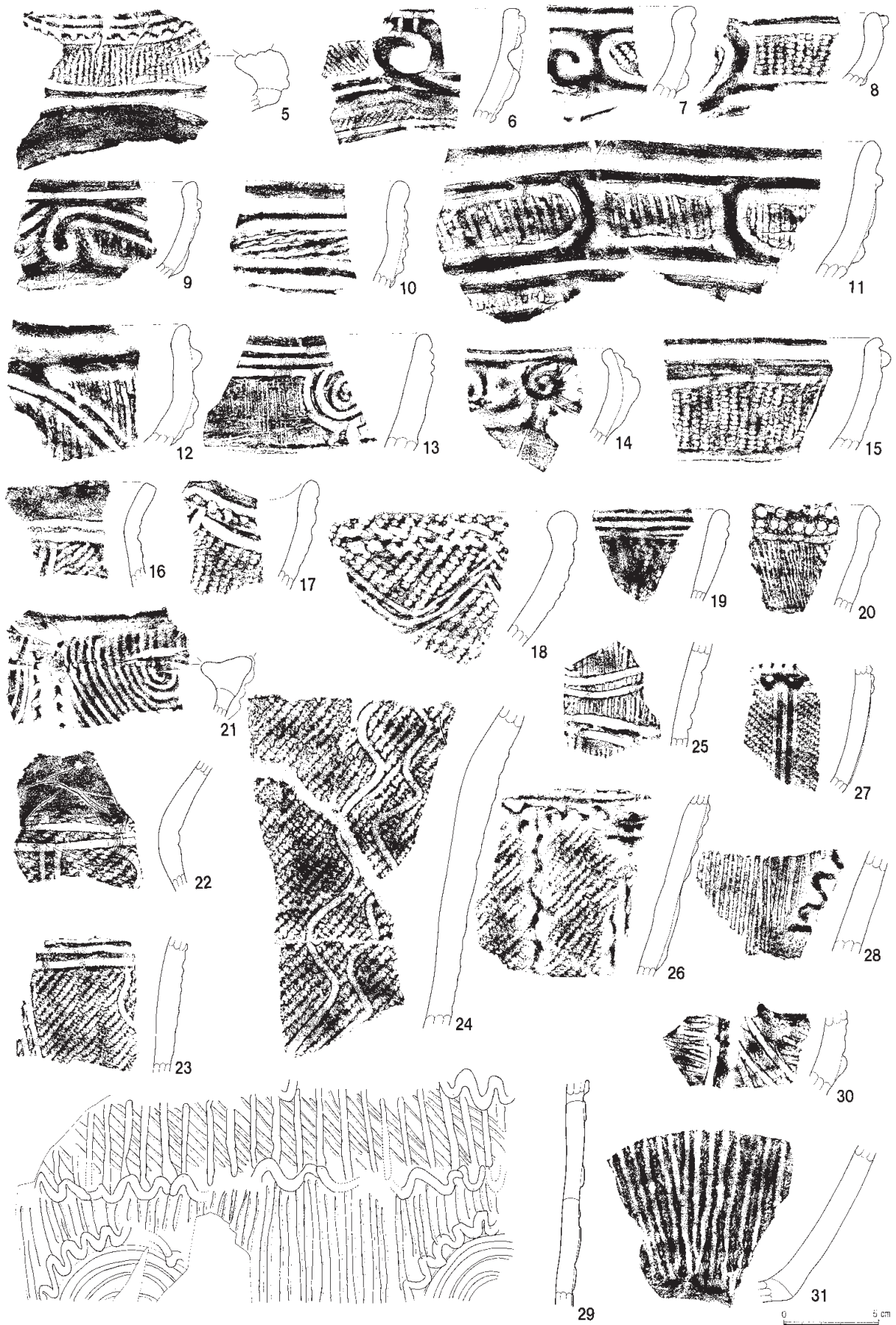
第282図1は1本の隆帯で口縁部と頸部を、2本の隆帯で頸部と胴部を画する。口縁部は2本一対の隆帯で半楕円形の区画を4単位、不定形の区画を3単位作出する。各区画の連結部には隆帯による渦巻状の突起が付けられる。区画内の地文はLの撚糸文。頸部は無文帯になる。胴部はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が4単位垂下する。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は口縁部1/4が欠損する。2本一対の隆帯を2段施し、口縁部・頸部・胴部を画する。口縁部は2本一対の隆帯で大小の楕円形区画が作られる。区画の連結部には渦巻文が配され、双脚の橋状突起が付けられる。区画内の地文はLの撚糸文。頸部は無文帯。胴部はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が垂下する。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3は1本の隆帯で口縁部と頸部を、2本一対の隆帯で頸部と胴部を画する。口縁部・胴部ともLRの単節斜縄文を地文とする。口縁部は2本一対の隆帯を弧状に5単位貼付して区画を作るが、その中の1ヵ所は幅狭になる。弧状の隆帯の連結部には渦巻文が配される。破損しているが口唇部上には突起が付いていたらしい。頸部は無文帯に



第285図 148号住居跡出土遺物1 (1/4)



第286图 148号住居跡出土遺物2 (1/3)

なる。胴部は2本一対の隆帯が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は口縁部の過半を欠損する。RLの単節斜縄文を地文とする。口縁部は隆帯により渦巻文や区画が作られる。胴部には2条一対の沈線が9単位垂下する。沈線間は磨り消される。色調は浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第283図12は口唇部上に小突起が付く。Lの撚糸文を地文とし隆帯による区画が作られる。頸部は無文帯になる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

13は2本一対の隆帯を2段施すことにより口縁部・頸部・胴部を画する。口縁部・胴部にはLの撚糸文を地文として施す。口縁部には2本一対の隆帯を「∞」字状に貼付するのであろうか。連結部分には渦巻文が配される。頸部は無文帯になる。胴部には隆帯が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を含む。

14～16はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯により楕円形・半楕円形の区画が作られる。14の色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。15の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。16の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

17はLの撚糸文を地文とし、隆帯による区画が作られる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第282図5は炉に埋設されていた土器。隆帯を巡らせ、上位には太沈線を斜位に集合して施す。下位はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線による文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6は壺状の土器。頸部は2条の沈線を縦位に施し区画を作り、横位の沈線を充填する。胴部にはLの撚糸文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

7はLRの単節斜縄文が縦・横・斜位に乱雑に施される。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

8・25・26はLの撚糸文を地文とする。8は2本一対の隆帯の懸垂文が3単位施され、その間に蛇行する隆帯が垂下する。色調は橙色（2.5YR6/6）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。25・26は2本一対の隆帯と蛇行する隆帯が垂下する。色調は共ににぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、25の胎土には粗砂・輝石を僅かに含む。26の胎土には粗砂を多く含む。

9は無文の鉢形土器。口縁部から底部まで遺存するが、過半を欠く。底部から僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。色調は黒褐色（10YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第283図10は半截竹管の刺突による爪形文を加えた隆帯により区画が作られる。区画内には連続爪形文・三叉文が充填される。横位の隆帯の下位には単節斜縄文が施されている。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

11は刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画内には沈線による渦巻状の弧線文が充填される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

18は口唇部に沿って隆帯が貼付される。以下、沈線が渦巻状に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

19は口唇部上に山形の突起が付く。2本一対の隆帯により区画が作られ、区画内には集合する沈線が充填される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20は曾利系の土器。沈線により重弧文が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

21はLの撚糸文を地文とする。幅広の隆帯を貼付し、隆帯上には短沈線・渦巻文を施す。2本一対及び蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

22～24はRLの単節斜縄文を地文とする。22・23は2本一対の隆帯を横走させて頸部と胴部を画する。22は隆帯により区画が作られる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。23は2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には片岩を多く含む。24は隆帯が垂下する。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

27は浅鉢形土器。口縁部は強く内屈する。沈線による渦巻文などが施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第325図4～16は打製石斧。4・5は分銅形に近い。4は縦長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。刃部は平刃状を呈する。92.9g。泥岩製。5は横長の剥片を使用。刃部は円刃状。121.7g。硬砂岩製。6・9～16は短冊形。6の刃部は斜刃状。59.6g。粘板岩製。9の刃部は尖刃状。123.8g。緑色岩製。10～12・14～16は横長の剥片を使用。10は表面に礫面を残す。刃部は平刃状。98.3g。礫岩製。11は表面に礫面を残す。刃部は平刃状。123.3g。硬砂岩製。12の刃部は斜刃状。82.8g。石灰岩製。14は表面に大きく礫面を残す。刃部は尖刃状。96g。硬砂岩製。15は表面に礫面を残す。刃部は円刃状。101.2g。硬砂岩製。16は表面頭部に礫面を残す。47.7g。結晶片岩製。7・8は撥形。共に刃部は円刃状を呈する。7は側縁に敲打痕が認められる。136.8g。硬砂岩製。8は169.1g。硬砂岩製。13は小型の石斧。側縁には部分的に敲打痕が認められる。12.8g。粘板岩製。

第330図3～5は磨製石斧。3の刃部は平刃状。265.2g。4・5は頭部のみ遺存。4は155g。5は140g。いずれも硬砂岩製。

第332図1～3は磨石。2・3は凹石と兼用。側縁には敲打痕が認められる。1は390g。玄武岩製。2は455g。硬砂岩製。3は490g。安山岩製。

第334図10は有溝砥石。2条の溝が認められる。200g。緑泥片岩製。

第344図4・5は凹基の打製石鏃。4は0.8g。黒曜石製。5は0.5g。硅岩製。

第349図14～24は土器片鏃。17は短軸、他は長軸に刻みが加えられる。重量は14が27.6g、15が18.5g、16が17.2g、17が28.6g、18が20.5g、19が30.7g、20が36.7g、21が50.6g、22が38.2g、23が23.8g、24が32.2gを測る。

第350図6は垂飾品。形状は刀子状を呈する。頭部に挟りが加えられ、一孔を有する。非常に丁寧に研磨されている。色調は緑黒色(7.5GY2/1)を呈する。軟玉製。

第282図5を除き、覆土中からの出土である。

148号住居跡(第284図)

〔位置〕130地点。

〔構造〕一部調査区外。北壁及び東壁にかけて拡張している可能性が大きい。(平面形)八角形か。(規模)550×550cm。(主軸方位)N-10°-E。(壁高)33～49cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅15～30cm・下幅5～15cm・深さ6～11cm、拡張前は上幅14～30cm・下幅5～16cm・深さ14～16cmを測る。(床面)壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。(炉)住居中央から東に偏って位置する。90×80cm・深さ10cmの楕円形を呈する地床炉である。(柱穴)床面上に57本ほどのピットが分布し、70cm前後の深いピットが8本と30cm前後のピットが全体に分布している。さらに小ピットが多く見られる。主柱穴は6本になろうか。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

3層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

4層 黒褐色土(5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。硬質。

5層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅

かに含む。硬質。

6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

7層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

8層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

9層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から遺物が多く出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

148号住居跡出土遺物 (第285・286図、第326図1～4、第330図6・7、第335図7、第344図6、第349図25・26)

第285図1は外反する口縁部が無文となり、以下、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

2は曾利系の土器。口唇部下に2条の沈線を巡らせ、9条の沈線を垂下させる。沈線間には斜位の沈線を集合して施し矢羽根状に作出する。色調は橙色 (2.5YR6/2) を呈し、胎土には細礫を含む。

3も曾利系の非常に大型の土器。無文の口縁部は外反し口唇部は内屈する。頸部でくびれ胴部は内湾する。くびれ部と胴部上位に隆帯を巡らせ画する。胴部上位の隆帯は横走する隆帯と波状の隆帯を重ねている。隆帯間は斜位の沈線と隆帯の貼付により籠目文になる。胴部上位以下は、沈線を多条に垂下させ地文とする。部分的に沈線間に交互刺突を加え鋸歯状にする。3本一組の隆帯を弧状に貼付し渦巻文が作られる。色調はにぶい黄褐色 (10YR6/4) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

4は1/3程の破片からの推定復元。口縁部に隆帯を巡らせ、環状の突起が貼付される。色調は赤褐色 (5YR4/6) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第286図5は口縁部が強く内屈する。口唇部に沿って沈線と交互刺突による鋸歯文が巡る。2条の沈線を横走させ口縁部と頸部を画する。口縁部にはLの撚糸文が施される。頸部は無文になる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6～14はキャリパー形の土器。

6はRL、7はLRの単節斜縄文を地文とする。隆帯により渦巻文や区画が作られる。共に色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8はLRの単節斜縄文を地文とし、隆帯により区画が作られる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

9はL、10はRの撚糸文を地文とする。9は隆帯により渦巻文や区画が作られる。色調は灰褐色 (5YR5/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。10は隆帯により区画が作られる。色調は灰黄褐色 (10YR5/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

11は縦位の集合する沈線を地文とし、隆帯により楕円形の区画が作られる。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

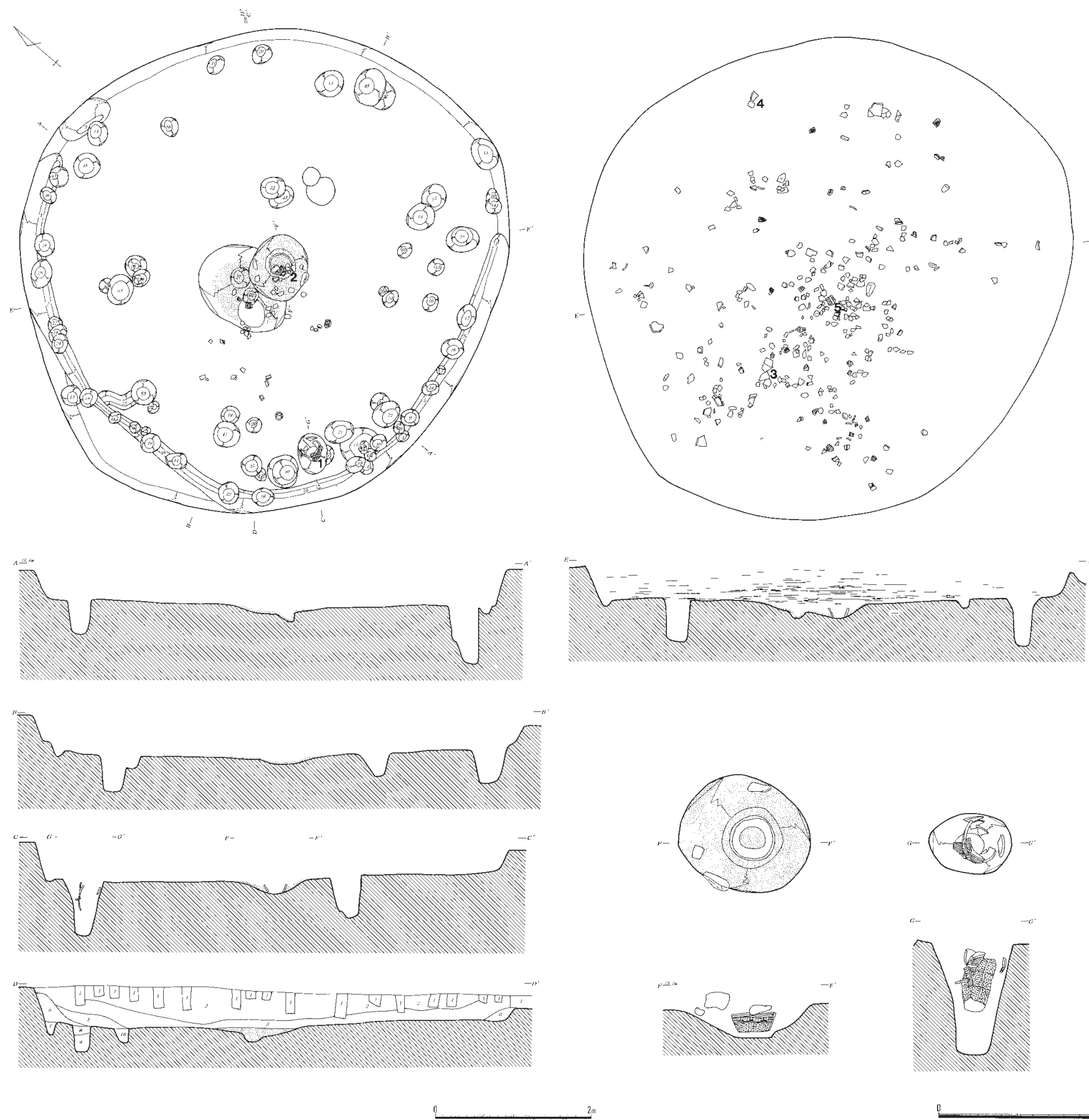
12はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が斜位に貼付される。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には細砂を含む。

13は口唇部下に3条の沈線が巡る。条線を地文とし、沈線による渦巻文が施される。色調はにぶい黄褐色 (10YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

14は隆帯による渦巻文が貼付される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

15は口唇部下に隆帯が巡り、LRの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

16は無文の狭い口縁部下に2条の沈線が巡る。RLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調はに



第287図 149号住居跡 (1/60)、炉跡、埋甕 (1/30)

ぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

17は波状口縁の土器。口唇部に沿って交互刺突による鋸歯文が巡る。以下、RLの単節斜縄文が施される。色調は暗褐色 (10YR3/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

18・25は連弧文系の土器。18はRLの単節斜縄文を地文とする。口唇部下には2列の刺突文が巡る。3条一組の沈線により連弧文が描かれる。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。25は条線を地文とし、2条一対の沈線が弧状に施される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を含む。

19は口唇部に沿って3条の沈線が巡る。以下、RLの単節縄文が施される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

20は条線を地文とし、口唇部下に2列の円形刺突文と沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

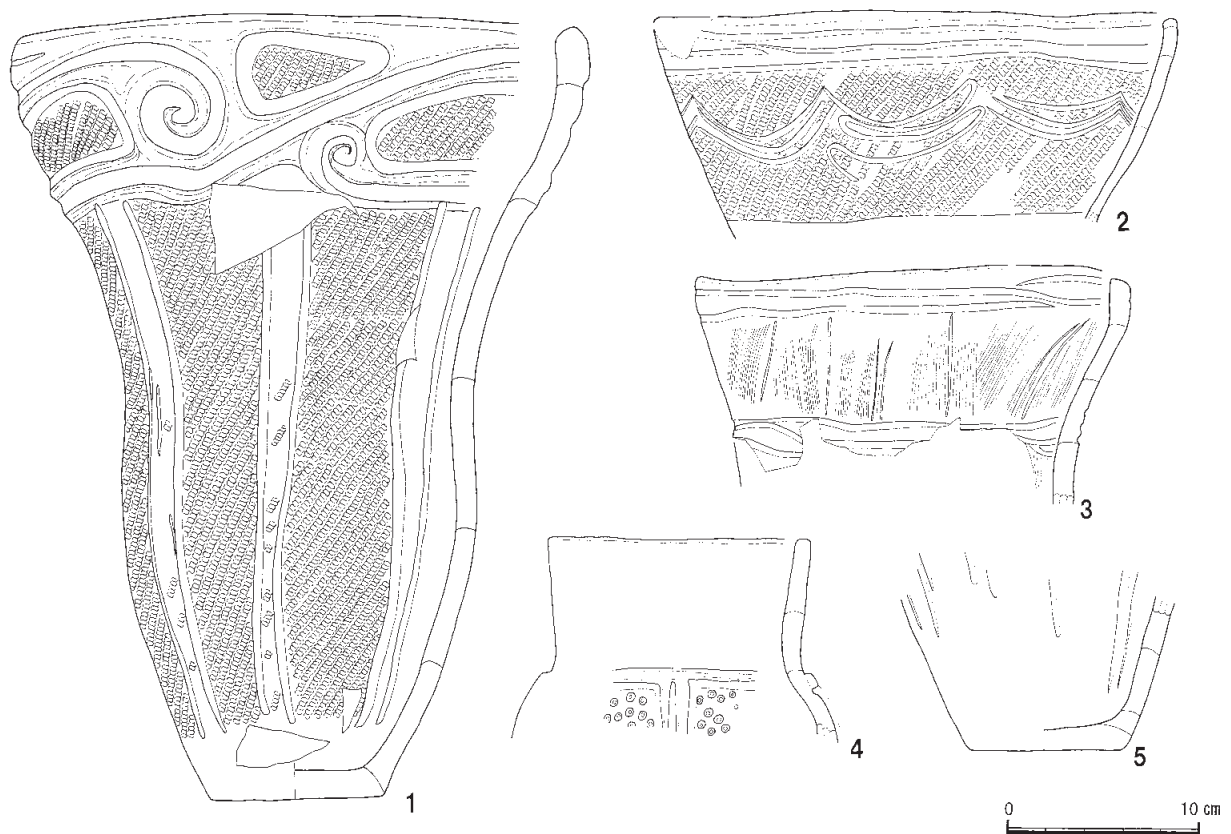
21は曽利系の土器。口縁部は強く内屈する。半截竹管により重弧文が施され、三角形の刺突が加えられた2本の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

22はRLの単節斜縄文を地文とする。2条の沈線を横走させ上下を画する。上位は無文になる。下位には2条一対の沈線が垂下する。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

23は3条の沈線が横走する。RLの単節斜縄文を地文とし、3条一組の直行する沈線と蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

24はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい褐色 (7.5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

26は曽利系の土器。RLの単節斜縄文を地文とし、直行・波行する隆帯を横走させ、蛇行する隆帯が垂下する。横走・縦走する隆帯の結合部には「S」字状の隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色 (7.5YR4/3) を呈し、胎土



第288図 149号住居跡出土遺物1 (1/4)

には粗砂を多く含む。

27は刺突と鋸歯状に貼付された隆帯が横位に施される。LRの単節斜縄文を地文とし、3条一組の沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

28は条線を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

29は曾利系の土器。剥離している部分もあるが波状の隆帯を2段横走させる。隆帯間には斜位に集合する沈線を施し、隆帯を縦位に貼付する。波状の隆帯下は縦位の集合する沈線を地文とし、半截竹管による沈線が弧状に描かれ、それに沿って波状の隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

30は隆帯が垂下し、両脇に横位の集合する沈線、斜位の沈線が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

31は沈線が縦位に多条に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第326図1～4は打製石斧。1は頭部側の側縁がくびれる。横長の剥片を使用。表面には礫面を残す。刃部は平刃状。98.1g。硬砂岩製。2・4は撥形に近い。2は表面に礫面を残す。刃部は平刃状。側縁には僅かに敲打痕を認める。124g。緑泥片岩製。4の刃部は平刃状を呈する。側縁には部分的に敲打痕を認める。52.3g。硬砂岩製。3は短冊形。横長の剥片を使用。刃部は尖刃状。57g。石灰岩製。

第330図6・7は磨製石斧。刃部は6が平刃状、7が円刃状を呈する。共に重量は300gを測る。硬砂岩製。

第335図7は軽石製品。表裏面にくぼみが認められる。162.4g。

第344図は凹基の打製石鏃。横長剥片を使用しているようか。0.9g。黒曜石製。

第349図25・26は土器片錘。共に長軸に刻みが加えられる。重量は25が46.6g、26が18.5gを測る。

すべて覆土中からの出土である。

149号住居跡（第287図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕（平面形）不整円形。（規模）610×600cm。（主軸方位）N—54°—E。（壁高）28～45cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）東壁を除いて検出された。上幅15～40cm・下幅10cm前後・深さ3～10cmを測る。（床面）住居壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。（炉）住居中央に位置する。85×75cm・深さ20cmの楕円形の掘り込みをもつ埋甕炉で、深鉢形土器の口縁部を埋設している。掘り込み外の西側部分に90×50cmの楕円形を呈する焼土は、灰の掻き出しのためと思われる。（柱穴）床面のほぼ全面に60本ほどのピットが散在しているが、50cm前後の深度のある7本が支柱穴となるうか。（埋甕）南壁下中央に位置する。50×45cmの楕円形を呈し、深さ75cmを測る。ほぼ完形に近い深鉢形土器を埋設している。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を多く含む。遺物を多く含む。硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。中央部分では焼土粒子が目立つ。硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

6層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。

7層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

8層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

9層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。

10層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から遺物が多く出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

149号住居跡出土遺物（第288・289図、第326図5～12、第330図8、第332図4・5、第334図11、第344図7～9、第349図27～30、第350図8）

第288図1は埋甕として埋設されていた土器。キャリパー状の器形が大きく崩れている。口縁部・胴部ともRLの単節斜縄文を地文とする。口縁部には隆帯により渦巻文や区画が作られる。胴部には2条一対の沈線が8単位垂下させる。沈線間は磨り消される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

2は炉に埋設されていた連弧文系の土器。RLの単節斜縄文を地文とし、3条一組の沈線を口唇部下に巡らせ、連弧文を9単位施す。弧線は一部で振幅を大きく蛇行させる。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を多く含む。

3は波線を口唇部下に2条、胴部のくびれ部に3条を巡らす。条線がまばらに施され、沈線が乱雑に垂下される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を僅かに含む。

4は口縁部1/4程の破片からの推定復元。口縁部は僅かに外反し、胴部は球状を呈しようか。口縁部は無文帯になる。胴部はくびれ部に隆帯を巡らせ、2本一対の隆帯を垂下させて区画を作る。区画内は円形の刺突文が乱雑に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

5は沈線が垂下している。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第289図6はRLの単節斜縄文を地文とする。口縁部には隆帯により渦巻文と区画が作られる。胴部には2条一対の沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7はLRの単節斜縄文を地文とし、隆帯により渦巻文が作られる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8は条線を地文とし、沈線により区画が作られる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

9は口縁部が無文になる。RLの単節斜縄文を地文とする。2条の沈線を巡らせ、そこから沈線を垂下させる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

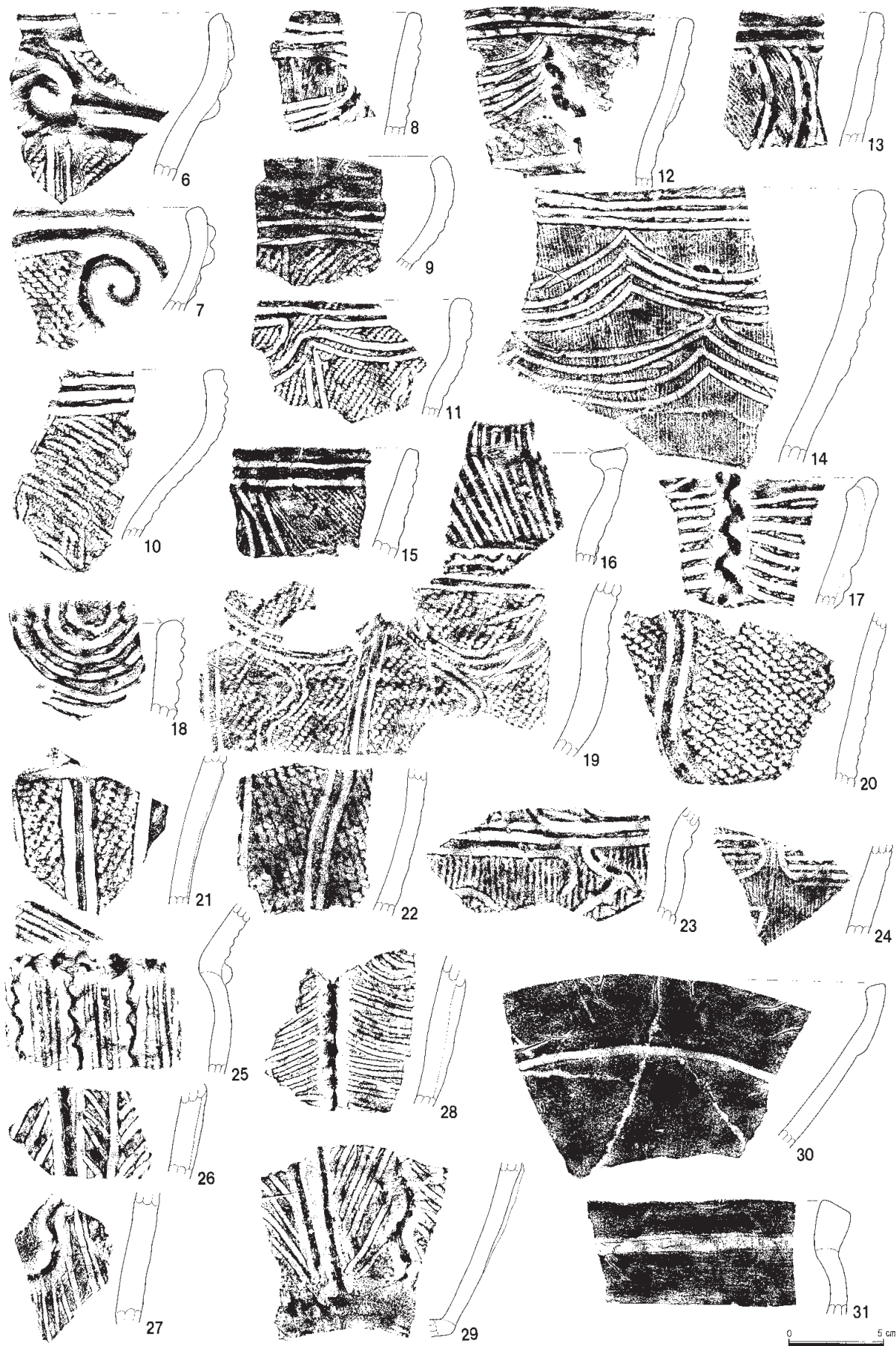
10は口唇部下に3条の沈線を横走させる。RLの単節斜縄文を地文とし、下位に沈線がみられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11はRLの単節斜縄文を地文とする。2条一対の沈線により半楕円形の区画が作られ、2条の沈線が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

12は口唇部下に2条の沈線を巡らす。LRの単節斜縄文を地文とする。蛇行する隆帯を垂下させ、沈線による弧線を多段に施す。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

13・15は同一個体。斜位の条線を地文とする。口唇部下に2条の沈線を横走させ、3条の沈線が弧状に垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

14・19は連弧文系の土器。14は条線を地文とする。3条の沈線を横走させ、4条一組の沈線による連弧文が2段施される。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。19はRLの単節斜縄文を地文とする。文様は半截竹管により描かれる。平行沈線を横走させ、3条一組の沈線により連弧文が施される。連弧文の連結部から3条一組の沈線、弧線の底部から2条の蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。



第289図 149号住居跡出土遺物 2 (1/3)

16～18・25～29は曽利系の土器。16は口唇部が内屈する。口縁部には縦位、胴部には斜位の集合する沈線を施し、交互刺突による鋸歯文が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YE5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。17は蛇行する隆帯を口唇部から垂下させ、横位の沈線を多段に施す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。18は口唇端部から口縁部にかけて重弧文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。25はくびれ部に交互刺突が加えられた隆帯が巡る。上位は半截竹管による斜位の集合する沈線が施される。下位は縦位の集合する沈線を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。26は隆帯と沈線を垂下させ、それを基線として矢羽根状に沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。27は蛇行する沈線を垂下させ、斜位の集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。28は隆帯を垂下させ、その左右に角度を変えた斜位の集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。29は2本一対の隆帯と蛇行する隆帯を垂下させ、斜行する集合沈線を矢羽根状に施す。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

20・22はLR、21はRLの単節斜縄文を地文とする。2条一対の沈線が直行・蛇行して垂下する。20の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。21の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。22の色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

30は鉢形土器。口縁部には太沈線が巡らされる。色調はにぶい褐色（7.5TE5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

31は浅鉢形土器。口縁部は直立ぎみに立ち上がる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第326図5～12は打製石斧。5・10～12は短冊形。いずれも横長の剥片を使用。5の刃部は平刃状。92.3g。安山岩製、10は表面に大きく礫面を残す。刃部は平刃状。67.5g。硬砂岩製。11は表面に大きく礫面を残す。刃部は円刃状。99g。硬砂岩製。12の刃部は平刃状。47.4g。石灰岩製。6・7は撥形に近い。6は横長の剥片を使用。刃部は円刃状。157.1g。硬砂岩製。7の刃部は斜刃状。側縁には部分的に敲打痕が認められる。115g。硬砂岩製。8は分銅形か。刃部は斜刃状。側縁には敲打痕を認める。238.2g。結晶片岩製。9は側縁が湾曲する。横長の剥片を使用。表面には礫面を残す。刃部は平刃状。65.9g。硬砂岩製。

第330図8は磨製石斧。刃部は円刃状を呈する。219.6g。硬砂岩製。

第332図4・5は磨石。4は凹石と兼用。共に側縁には敲打痕を認める。4は540g。石英閃緑岩製。5は300g。硬砂岩製。

第334図11は石皿片。凹石と兼用。両面ともに使用によるくぼみが認められる。350g。緑泥片岩製。

第344図7～9は凹基の打製石鏃。7は1g。硅岩製。8は0.3g。黒曜石製。9は0.9g。硅岩製。

第349図27～30は土器片錘。28は短軸、他は長軸に刻みが加えられる。重量は27が30.3g、28が30.4g、29が11.8g、30は33gを測る。

第350図8は耳栓。鼓状を呈する。上面には沈線による渦巻文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。10.3g。

第288図1・2を除き、覆土中からの出土である。

150号住居跡（第290図）

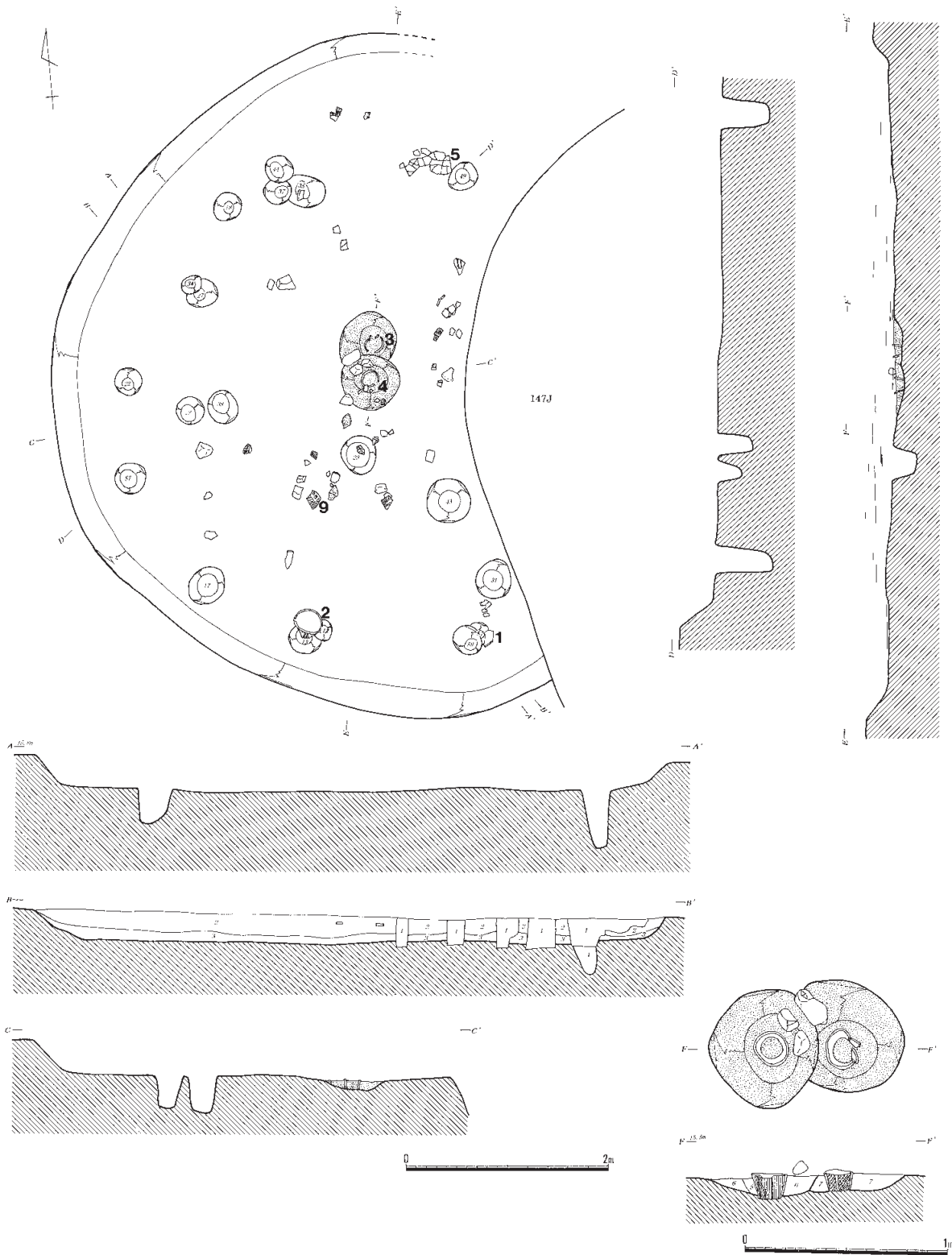
〔位置〕130地点。

〔構造〕147Jに切られる。（平面形）隅丸方形か。（規模）不明×660cm。（主軸方位）N—47°—W。（壁高）19～36cmを測り、50～60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）掘り込みが浅く全体に軟弱で

ある。(炉) 住居ほぼ中央に2基の埋甕炉を検出した。南側は60×50cm・深さ12cmの楕円形の掘り込みを、北側は不明×55cm・深さ10cm前後の掘り込みをもち、共に深鉢形土器の胴部を埋設している。北から南に炉の移動があったと思われる。(柱穴) 壁に沿って巡るように配置される。

〔覆土〕

1層 耕作土。



第290図 150号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)

- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。
- 5層 オリーブ褐色土 (2.5YR4/6)。焼土粒子を多く含む。硬質。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。やや硬質。
- 7層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。やや硬質。

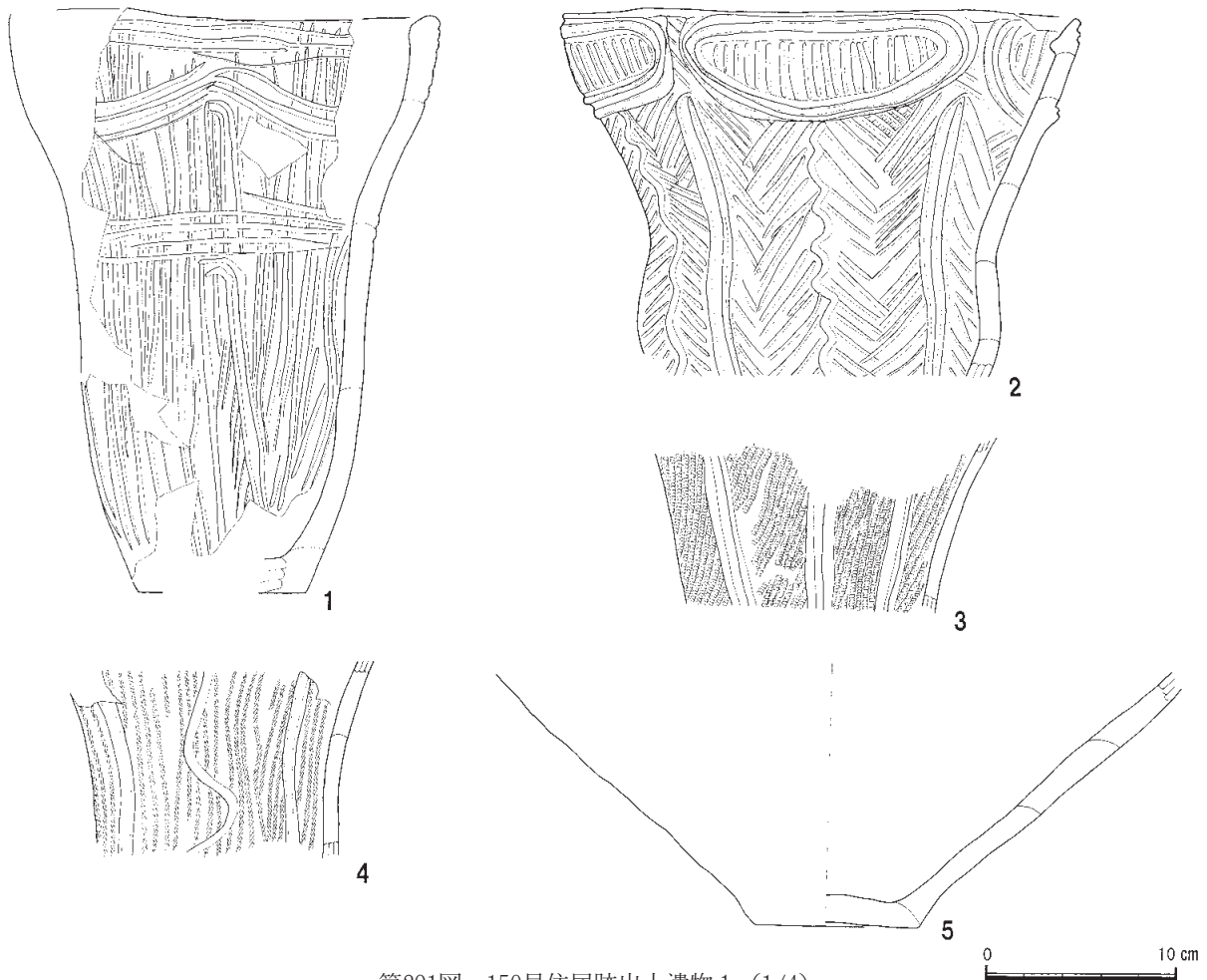
〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から遺物が多く出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

150号住居跡出土遺物 (第291・292図、第326図13・14、第335図1・2、第349図31)

第291図1は連弧文系の土器。口縁部が僅かに内湾する。縦位に沈線を乱雑に施し地文とする。口唇部下と頸部に3条の沈線を巡らす。口縁部には3条一組の沈線により連弧文を施し、連結部から3条一組の沈線が垂下する。胴部には2条一対の沈線が「∩」字状に施される。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は曾利系の土器。ゆるいキャリパー状を呈する。口縁部には2本一対の隆帯により半楕円形の区画が5単位作られる。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。胴部には口縁部の区画の連結部から「∩」字状の沈線が、区画の底部から蛇行する沈線が垂下する。沈線間には沈線が矢羽根状に施される。色調は暗赤褐色 (2.5YR3/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。



第291図 150号住居跡出土遺物 1 (1/4)

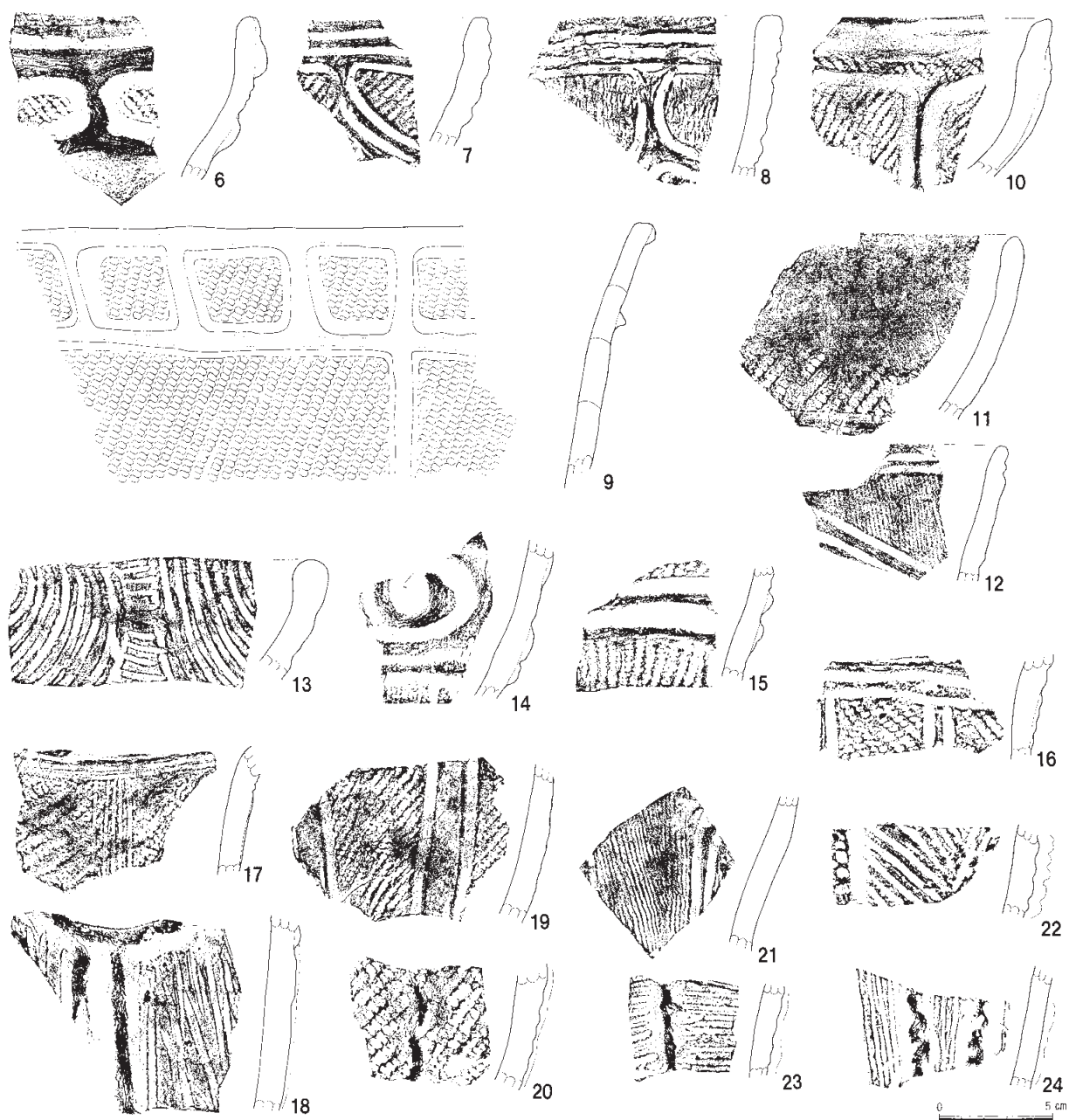
3・4は炉に埋設されていた土器。3はRLの単節斜縄文を地文とし、2条一對の沈線を7単位垂下する。色調は黄橙色(7.5YR8/8)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。4はLの撚糸文を地文とし、隆帯と蛇行する沈線を交互に5単位ずつ垂下する。色調は橙色(5YR7/8)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

5は浅鉢形土器。底部から直線的に開く。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

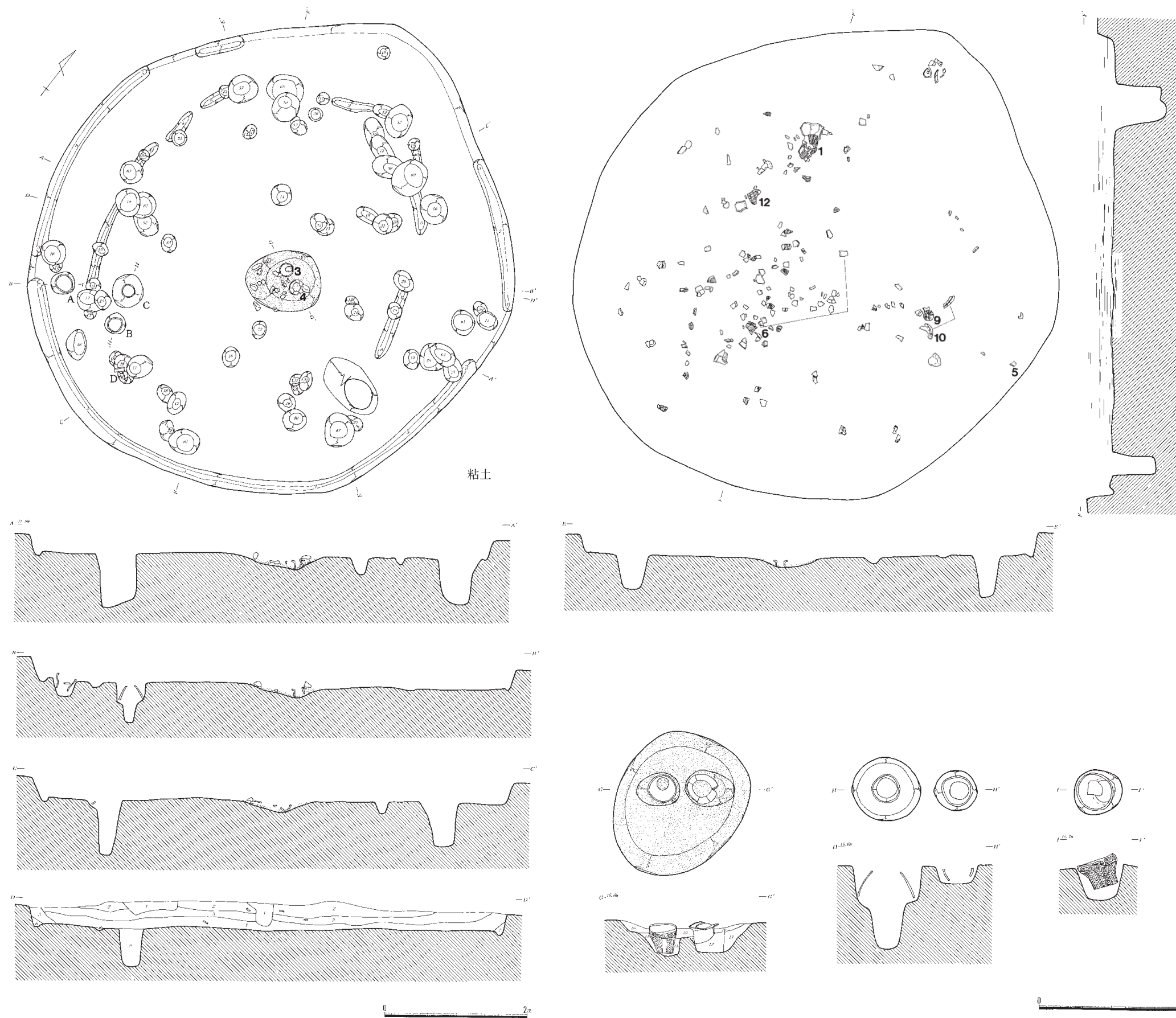
第292図6はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯により楕円形の区画が作られようか。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

7は口唇部下に2条の沈線を横走させる。RLの単節斜縄文を地文とし、2条一對の沈線により半楕円形の区画が作られようか。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・細砂を含む。

8は3条の沈線を巡らせ、沈線間には円形の刺突が加えられる。Lの撚糸文を地文とし、沈線により楕円形の区画が作られようか。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。



第292図 150号住居跡出土遺物2 (1/3)



第293図 151号住居跡 (1/60)、炉跡、埋甕 (1/30)

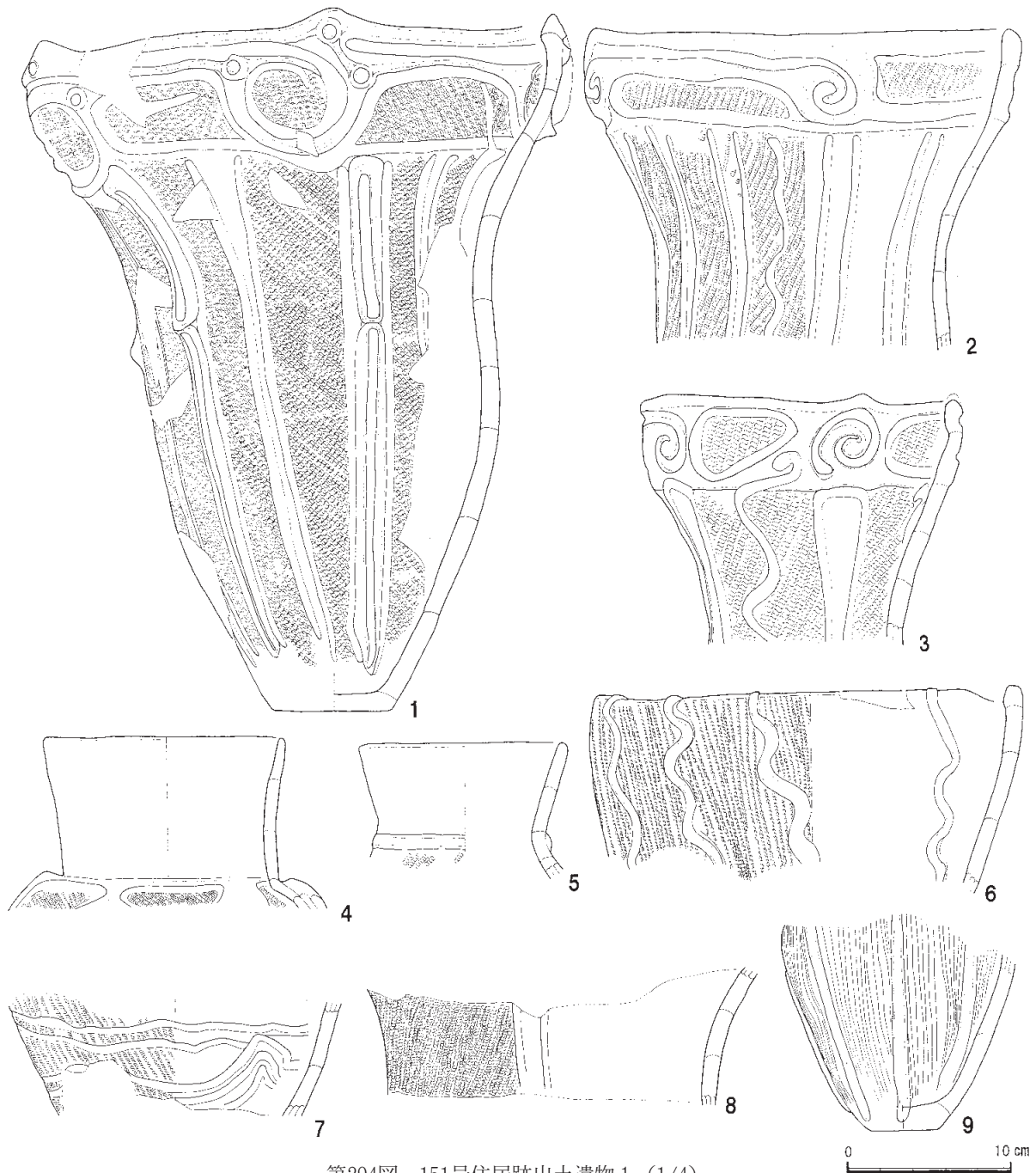
9はRLの単節斜縄文を地文とする。口縁部は隆帯による矩形の区画が作られる。胴部には隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

10はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯による区画が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11は口縁部が無文帯になる。RLの単節斜縄文を地文とし、沈線が横位に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

12は連弧文系の土器になろうか。条線を地文とし、2条一對の沈線により文様が描かれる。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

13は曾利系の土器。沈線による重弧文の間に多段の沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、



第294図 151号住居跡出土遺物1 (1/4)

胎土には細砂を多く含む。

14は2本の隆帯を横走させ、口縁部と胴部を画する。口縁部は隆帯による渦巻文が施される。胴部には沈線が垂下されるようだ。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

15はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯が巡る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

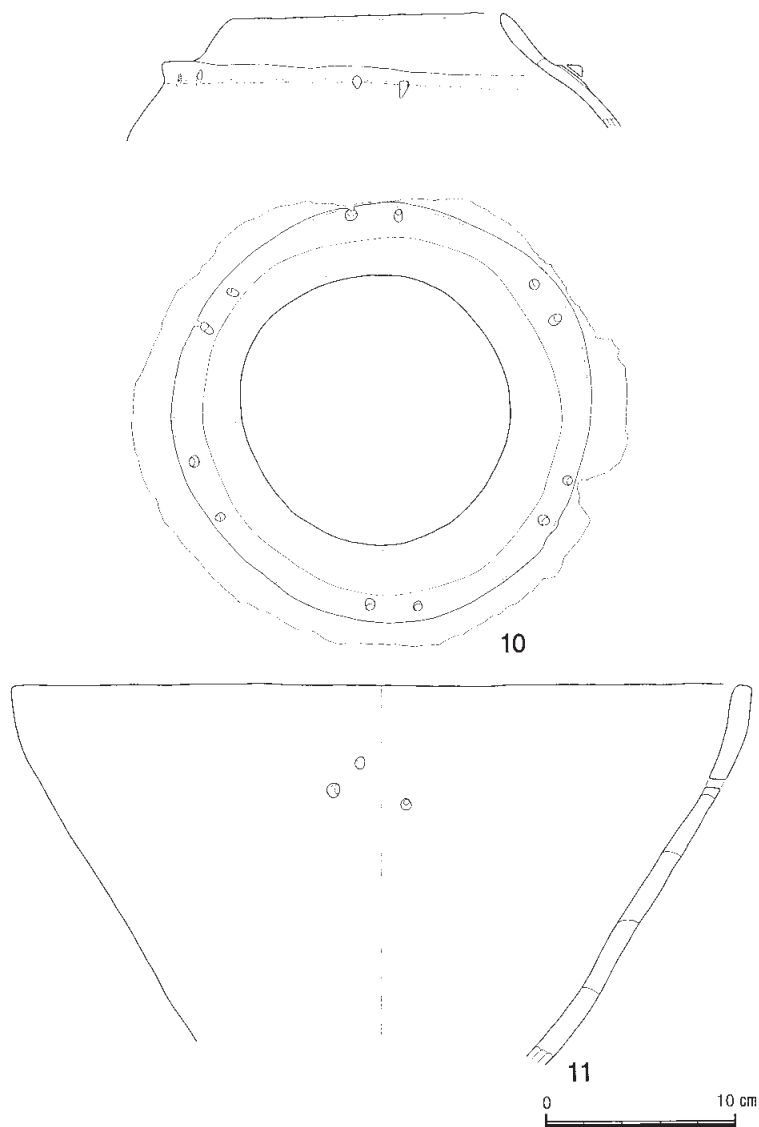
16はLRの単節斜縄文を地文とする。2条の沈線を横走させ、沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

17はRLの単節斜縄文を地文とする。細沈線を3条巡らせる。4条一組の沈線、蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

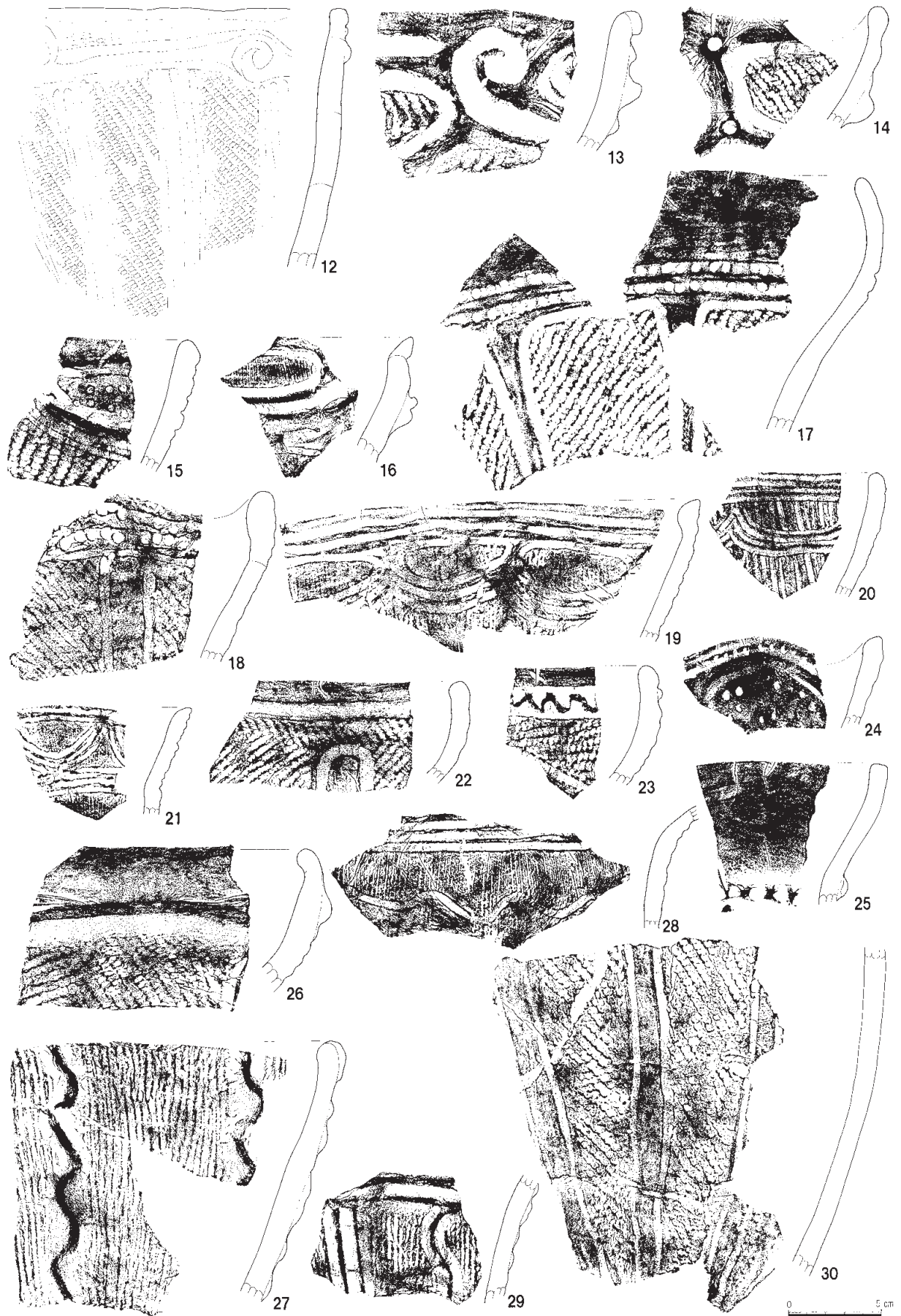
18は沈線を多条に施し地文とする。隆帯を弧状に貼付し、2本の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

19はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一對の沈線を垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

20はRLの単節斜縄文を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/3）を呈し、胎土に



第295図 151号住居跡出土遺物2 (1/4)

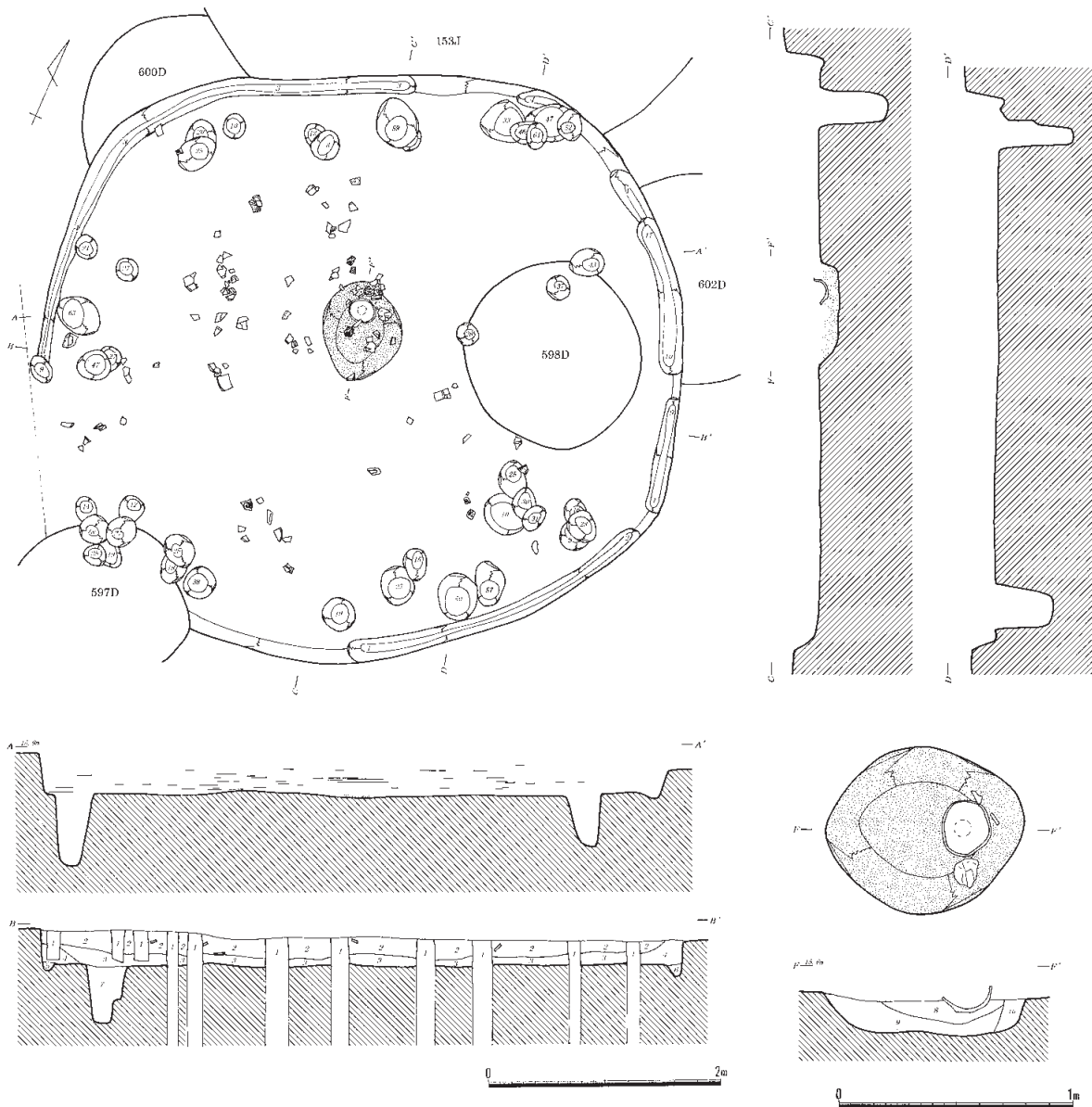


第296图 151号住居跡出土遺物2 (1/3)

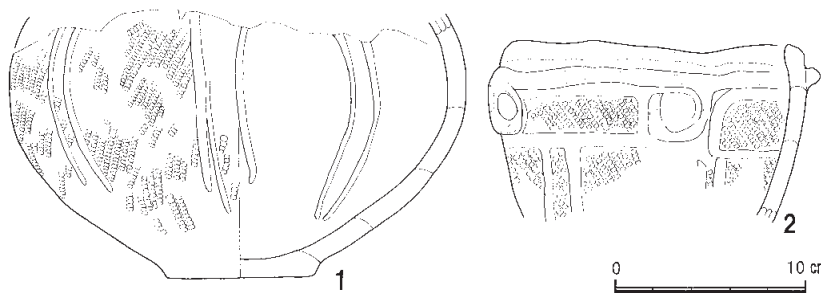
は細砂を多く含む。

21はRの撚糸文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

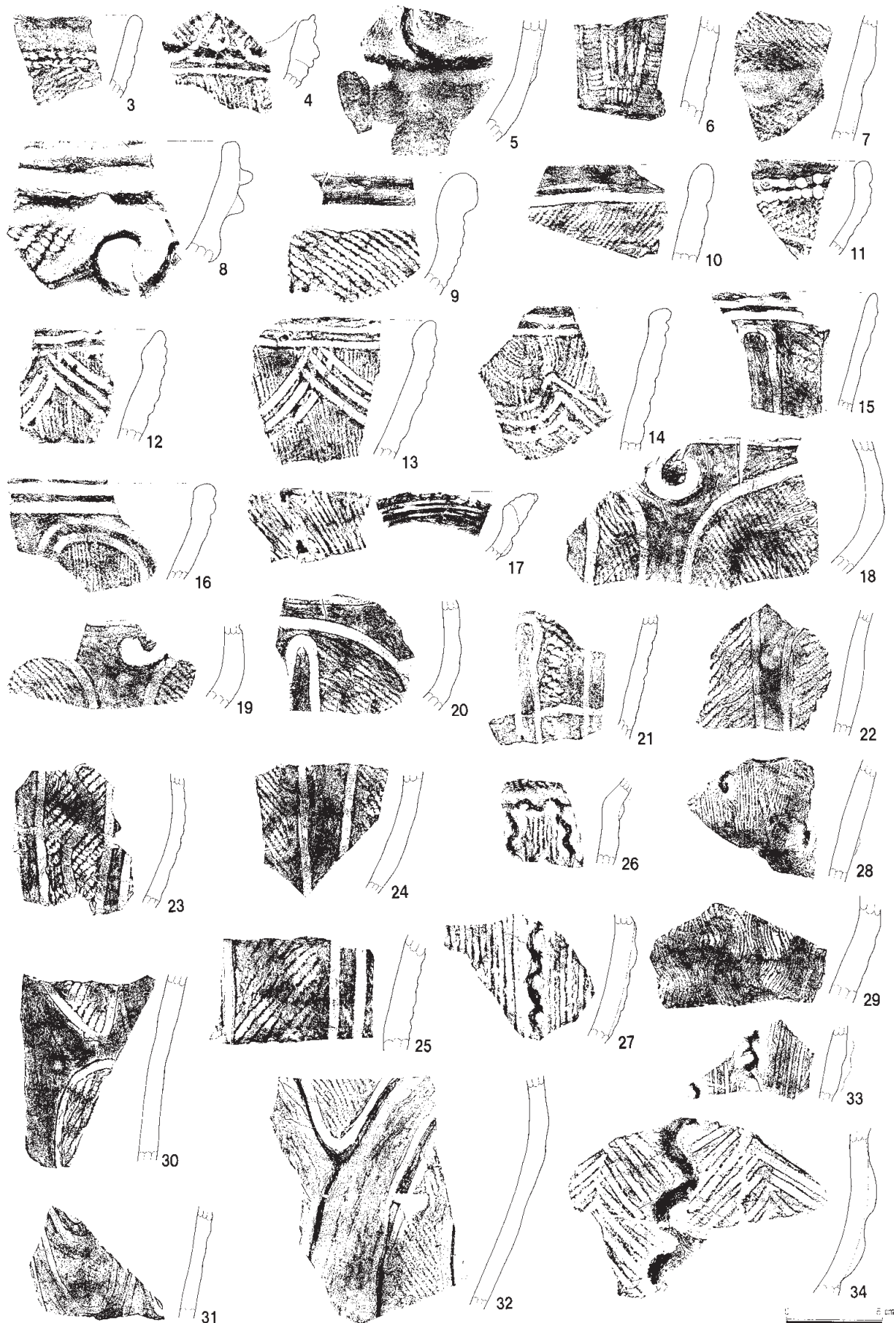
22は押捺が加えられた隆帯が垂下し、斜位の沈線が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細



第297図 152号住居跡 (1/60)



第298図 152号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第299图 152号住居跡出土遺物2 (1/3)

礫を僅かに含む。

23は隆帯が垂下し、沈線が多段に施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

24は条線を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第326図13・14は打製石斧。13は撥形。表面には大きく礫面を残す。刃部は平刃状。61g。ホルンフェルス製。14は表面に礫面を残す。刃部はゆるい円刃状。140.3g。ホルンフェルス製。

第335図1・2は石皿片。1は有溝砥石としても使われている。表面には使用によるくぼみが、裏面には2条の溝が認められる。併用して使用されていたかどうかは不明。440g。2は使用により片面がくぼんでいる。450g。共に緑泥片岩製。

第349図31は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。39.2g。

第291図3・4を除き、覆土中からの出土である。

151号住居跡（第293図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 599Dと重複するが、前後関係は不明。壁溝が二重に巡り、拡張された可能性が大きい。（平面形）五角形か。拡張前は楕円形。（規模）670×650cm。拡張前は520×430cm。（主軸方位）N-45°-E。（壁高）25～34cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～25cm・下幅5～10cm・深さ3～5cm、拡張前は上幅15cm前後・下幅5cm前後・深さ5～8cmを測る。（床面）住居壁際と炉の中央を除き、硬化面が認められる。（炉）住居中央に位置し、105×90cm・深さ45cmの楕円形の掘り込みをもつ埋甕炉で、埋設土器を2個検出した。西側は深鉢形土器の上半部を正位で、東側は壺形土器の口頸部を逆位で埋設していた。両者の前後関係は確認できなかった。（柱穴）深度のあるものも含めて多数のピットが確認されるが、支柱は6ないし7本で構成されるものと思われる。（埋甕）4基検出された。1基（A）は拡張後のもので西壁下南に寄って、他の3基（B～D）は拡張前のもので、南壁に沿って並んで埋設される。A 35×30cm・深さ20cmの楕円形の掘り込みをもち、深鉢形土器の上半部を埋設する。B 50×45cm・深さ60cmの二段構造のピット状の掘り込みをもち、浅鉢形土器を伏せて埋設する。C 径30cm・深さ25cmの円形の掘り込みをもち、深鉢形土器の胴部を埋設する。D 拡張後のピットに過半を破壊されている。深鉢形土器の胴部を埋設している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。中央部分で焼土粒子が目立つ。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を含む。やや硬質。
- 11層 赤褐色土（2.5YR4/8）。焼土ブロック。硬質。
- 12層 にぶい赤褐色土（5YR4/4）。ローム粒子を含む。焼土粒子・焼土ブロックを多く含む。硬質。

13層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。やや硬質。

住居東側の床面上に灰黄色粘土ブロックが認められ、その南側に細礫が堆積していた。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から遺物が多く出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

151号住居跡出土遺物 (第294～296図、第327図1～8、第330図9、第335図8、第349図32～39)

第294図1は4単位の小波状口縁の土器。口縁部1/3程を欠く。第296図14と同一個体か。器形は崩れたキャリパー状を呈する。RLRの複節斜縄文を地文とする。沈線を巡らせ、口縁部と胴部を画する。口縁部は隆帯により円形・楕円形の区画を交互に作る。波頂部と区画の連結部の隆帯上には円形の刺突が加えられる。胴部には2本一對の隆帯と2条一對の沈線が交互に6単位ずつ垂下する。隆帯は途中で瘤状の貼付がみられ、「H」字状になる。沈線間は磨り消される。色調はにぶい黄褐色 (10YR6/4) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

2は埋甕Aとした土器。器形は崩れたキャリパー状を呈する。RLの単節斜縄文を地文とする。口縁部は隆帯による長方形の区画を4単位作り、連結部には渦巻文が配される。胴部には2条一對の沈線が13単位と蛇行する沈線1条が垂下する。沈線間は磨り消される。色調は灰褐色 (10YR5/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

3は炉に埋設されていた土器。崩れたキャリパー状を呈する。口唇部上に1ヵ所、小突起が付く。RLの単節斜縄文を地文とする。小突起下の渦巻文を基点として楕円形の区画が5単位、円形の区画が4単位、交互に作られる。胴部には沈線による「∩」字状の懸垂文が5単位施され、沈線間は磨り消される。蛇行する沈線が4単位施される。色調は橙色 (2.5YR5/6) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

4は炉に逆に埋設されていた土器。口縁部が直立ぎみに開き、肩部が張る壺形の器形が推測される。口縁部は無文になる。肩部はLRの単節斜縄文を地文とし、隆帯により区画が作られるようである。色調は明赤褐色 (5YR5/6) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

5は口縁部が直線的に僅かに開く。低い隆帯を巡らせ、口縁部と胴部を画する。口縁部は無文になる。胴部にはRLの単節縄文がみえる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

6は曾利系の土器。口縁部1/3程からの推定復元。第296図27と同一個体か。Lの撚糸文を地文とし、蛇行する隆帯が口唇部から垂下する。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。

7は埋甕Bとした土器。胴部3/4程の遺存度。Rの撚糸文を地文とし、2条一對の沈線を波状・弧状に施す。色調は黒褐色 (7.5YR3/2) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

8は埋甕Dとした土器。胴部1/3程からの推定復元。RLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

9は条線を地文とし、隆帯が9本垂下する。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を多く含む。第295図10は有孔鏢付土器。樽状の器形を呈しようか。断面三角形の隆帯を貼付して鏢状に仕上げる。鏢に2個一對の孔を6単位穿つ。色調は橙色 (7.5YR6/6) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

11は埋甕Cとした土器。伏せた状態で埋設していた。無文の鉢形土器である。補修孔が2ヵ所みられる。色調は明赤褐色 (2.5YR5/6) を呈し、胎土には細砂を含む。

第296図12はLRの単節斜縄文を地文とする。渦巻文が付加された隆帯を巡らせ、狭い口縁部文様帯を作出する。胴部は3条一組の沈線が垂下する。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

13は隆帯により渦巻文や区画が作られる。区画内にはRLの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

15は隆帯により半楕円形の区画が作られようか。区画内には円形刺突文が充填される。胴部はRLの単節斜縄文になる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

16は条線を地文とする。2本一對の隆帯により楕円形の区画が作られようか。以下、横位に沈線が施される。色

調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

17は口縁部に円形竹管文が2段巡らされる。RLの単節斜縄文を地文とし、沈線による「∩」字状の懸垂文が施される。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

18は波状口縁の土器。口唇部に沿って円形刺突文を2段施す。RLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

19は条線を地文とする。口唇部下に3条の沈線が巡る。沈線により楕円形の区画が作られ、それに沿って2条一對の沈線による連弧文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

20・21は連弧文系の土器。20は半截竹管により文様が描かれる。縦位の沈線を多条に施して地文とする。口唇部下に4条一組の沈線を巡らせ、同じく4条一組の沈線により連弧文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。21は条線を地文とする。口唇部下に1条、くびれ部に3条の沈線を巡らせ、口縁部と胴部を画する。3条一組の沈線で連弧文が施され、弧線の底部から2条の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

22は口唇部下に凹線が巡る。RLの単節斜縄文を羽状に施し地文とし、「∩」字状の懸垂文がみられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

23は口唇部下に交互刺突による鋸歯文が作られる。LRLの複節斜縄文を地文とし斜位の沈線がみられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

24は波状口縁の土器。口唇部に沿って連続爪形文が巡らされる。沈線により区画が作られるようで、区画内には爪形文が多段に施される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

25は広い口縁部が無文帯になる。くびれ部に押捺が加えられた隆帯が巡る。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

26は口縁部に隆帯が巡らされる。LRの単節斜縄文を地文とし、縦位の沈線がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

28は条線を地文とする。3条一組の沈線と波状沈線を横走させる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

29は2本の隆帯を横走させる。Lの撚糸文を地文とし、2本の隆帯、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

30はLRの単節斜縄文を地文とし、2条一對の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

第327図1～8は打製石斧。1は側縁が僅かにくびれる。横長の剥片を使用。刃部はゆるい円刃状を呈し、線条痕がみられる。側縁には敲打痕を認める。159.1g。ホルンフェルス製。2は撥形に近い。横長の剥片を使用。表面には礫面を残す。刃部は平刃状。180.4g。硬砂岩製。3～8は短冊形。3は表面に礫面を残す。刃部は円刃状。側縁には敲打痕を認める。92.8g。硬砂岩製。4は表面に大きく礫面を残す。側縁には敲打痕を認める。164.4g。硬砂岩製。5は横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。刃部は平刃状。側縁には敲打痕を認める。144.8g。礫岩製。6は小型の石斧。横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。刃部は円刃状。26.8g。泥岩製。7は横長の剥片を使用。表面には礫面を残す。刃部は平刃状。126.1g。硬砂岩製。8は66.9g。硬砂岩製。

第330図9は磨製石斧。頭部・刃部を欠く。160g。硬砂岩製。

第335図8は軽石製品。97.1g。

第349図32～39は土器片錘。いずれも長軸に刻み加えられる。重量は32が34.2g、33が26.4g、34が26.2g、35が17.7g、36が9.7g、37が12.5g、38が24.4g、39が19gを測る。

第294図2～4・7・8、第295図11を除き、覆土中からの出土である。

152号住居跡（第297図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 153 J・600 Dを切り、597 D・598 Dに切られる。西側が一部攪乱で破壊されている。（平面形）不整長方形。（規模）550×500 cm。（主軸方位）N—27°—W。（壁高）23～36 cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅12～26 cm・下幅5～10 cm・深さ3～6 cmを測り、南側コーナー付近を除き巡る。（床面）部分的に硬化面が認められるが、全体に軟弱である。（炉）住居中央からやや北に偏って位置する。壺状の土器の下半を埋設した埋甕炉で、85×70 cm・深さ25 cmの楕円形の掘り込みをもつ。（柱穴）全体に壁際に位置し、50～63 cmの深度のあるピットが主柱穴と思われるが、不規則な配置である。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。やや硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。

4層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

6層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

7層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。

8層 にぶい赤褐色土（2.5YR4/3）。焼土粒子を多く含む。硬質。

9層 褐色土（10YR4/4）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。やや硬質。

10層 褐色土（10YR4/4）。ロームブロックを多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から遺物が多く出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

152号住居跡出土遺物（第298・299図、第327図9・10、第349図40～42）

第298図1は胴部が内湾する土器。炉の上から出土した。RLの単節斜縄文を地文とし、2条一對の沈線が9単位垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

2は口縁部1/2程からの推定復元。RLの単節斜縄文を地文とする。沈線を巡らせ口縁部と胴部を画する。口縁部は隆帯により長方形の区画が作られる。胴部は2条一對の沈線が垂下する。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第299図3は口縁部に三角形の連続刺突文が2条巡らされる。Lの無節斜縄文が施される。色調はにぶい橙色（2.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

4は波状口縁の土器。口唇部には刻みが加えられる。2条の沈線を巡らせ、波頂部は三角形に区画される。沈線下は条線になる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

5は隆帯により楕円形の区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

6は沈線により長方形の区画が作られようか。区画内は沈線に沿って幅広の角押文が施され、三角押文が密集して充填される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

7は幅広の帯状の隆帯が貼付され、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

8はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯による渦巻文と区画が作られる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9・10は口縁部に沈線を巡らす。9はLR、10はRLの単節斜縄文が施される。9の色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を多く含む。10の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

11はLRの単節斜縄文を地文とする。口縁部には円形刺突文が2段施される。下位には沈線がみえる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

12~14は連弧文系の土器。条線を地文とするが、14は口縁部で条線が弧状に施されている。12・13は同一個体の可能性がある。2条の沈線を口唇部下に巡らせ、3条一組の沈線により連弧文が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。14は口唇部下に2条の沈線を巡らせ、3条一組の沈線で連弧文を作る。連弧文の下位の沈線の波頂部には弧線が加えられる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

15は沈線を横走させる。LRの単節斜縄文を地文とし、「∩」字状の懸垂文が施される。懸垂文内は磨り消される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

16は条線を地文とする。口唇部に2条の沈線を巡らす。2条一対の沈線を弧状に施す。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

17は曽利系の土器。口唇部から半截竹管による集合する沈線が斜位に施され、剥離しているが蛇行する隆帯が貼付される。口縁部内面には3条の沈線が巡る。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

18・19は同一個体か。LRの単節斜縄文を地文とし、太沈線を弧状に施す。磨り消し部分に渦巻文が配される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

20・21はLRの単節斜縄文を地文とし、「∩」字状の懸垂文が施される。懸垂文内は磨り消される。20の色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。21の色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

22・25はRL、24はLRの単節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。22の色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。24の色調はにぶい褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。25の色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

23はRLの単節斜縄文を地文とする。2条一対の沈線と蛇行する沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

26は細い隆帯を横位に貼付して上下を画する。上位は斜位の刻みが加えられる。下位は条線を地文とし、蛇行する細隆帯が垂下する。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

27は半截竹管による集合する沈線を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

28は条線を地文とし、沈線や蛇行する隆帯が施されるようだ。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

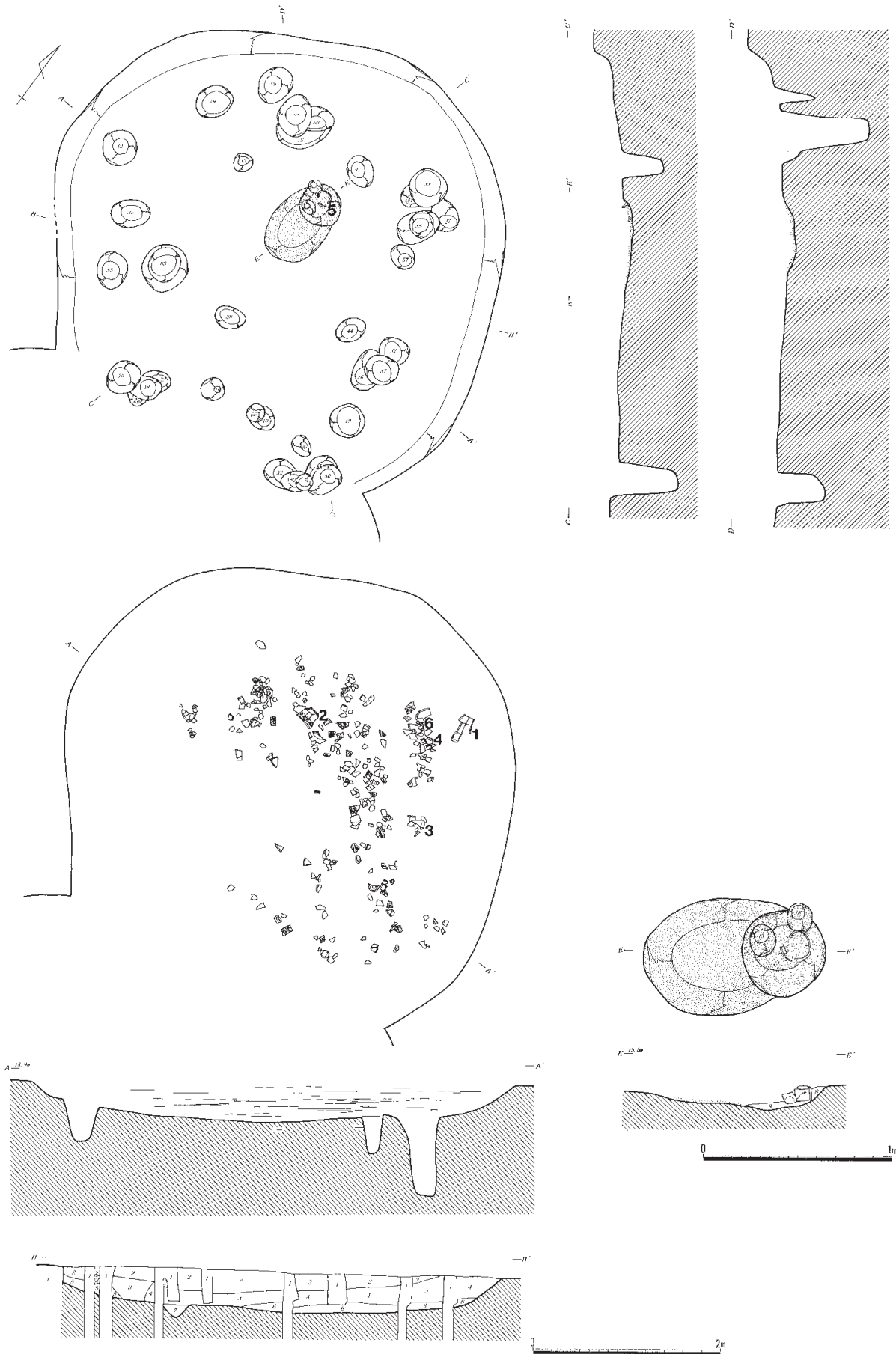
29は蛇行する条線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

30はRL、31はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線により区画が作られる。区画外は磨り消される。30の色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。31の色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を含む。

32はLRの単節斜縄文を地文とし、微隆帯により区画を作る。区画外は磨り消される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

33は条線を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

34は蛇行する隆帯を垂下させ、沈線を矢羽根状に施す。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂・輝石



第300図 153号住居跡 (1/60)、炉跡 (1/30)

を多く含む。

第327図9・10は打製石斧。9は側縁が僅かにくびれる。横長の剥片を使用か。刃部は平刃状を呈する。側縁には敲打痕を認める。149.1g。礫岩製。10は撥形に近い。表面に大きく礫面を残す。刃部は平刃状。152g。石灰岩製。

第349図40～42は土器片錘。長軸に刻みを加えられる。重量は40が27.3g、41が10.1g、42が14.5gを測る。

第298図1を除き、覆土中からの出土である。

153号住居跡（第300図）

〔位置〕 130地点。

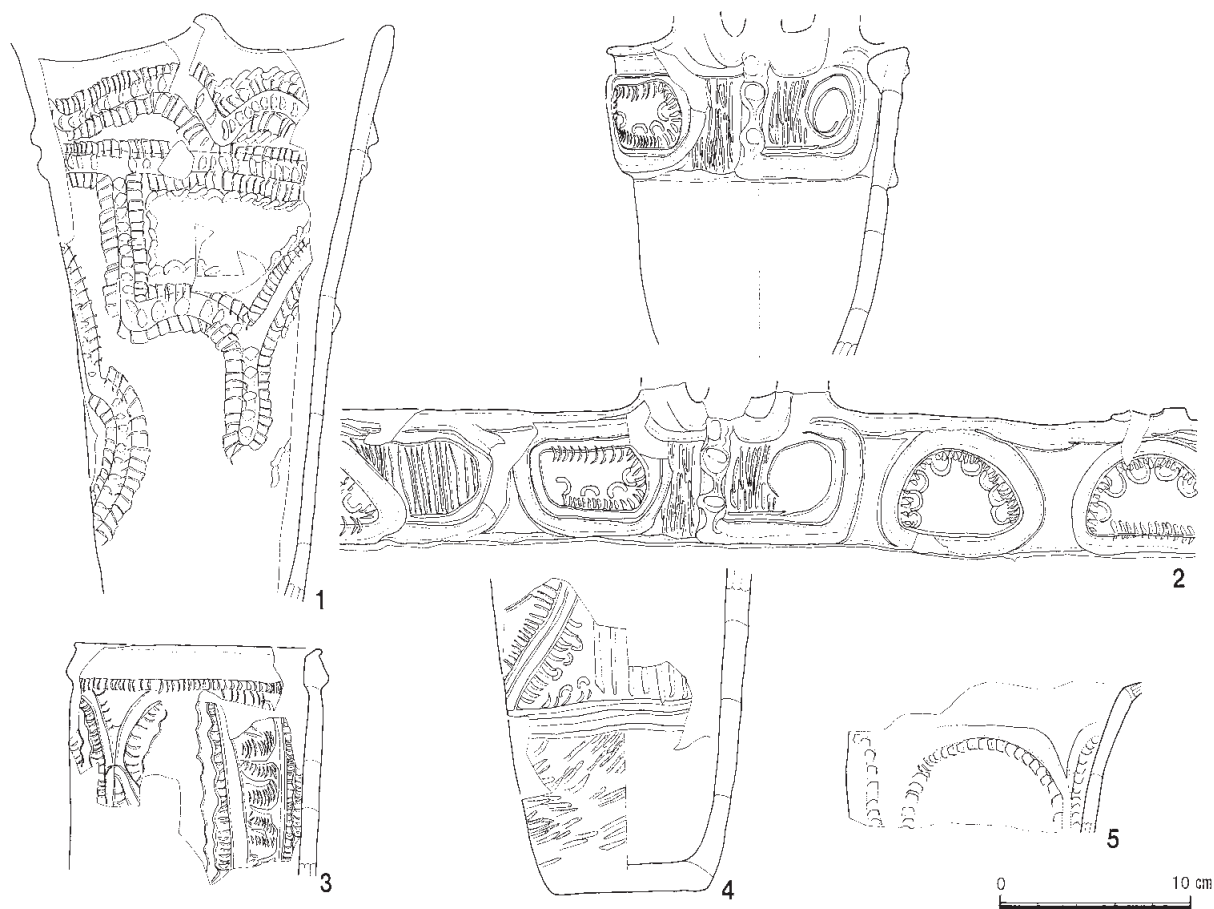
〔構造〕 152Jに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×480cm（主軸方位）N-35°-W。（壁高）9～34cmを測り、50°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）炉の周辺に硬化面が認められるが、全体に軟弱である。（炉）住居中央よりやや北に位置する。深鉢形土器の胴部を埋設した埋甕炉で、径90cm・深さ10cmの円形を呈する掘り込みをもつ。南側の掘り込み外の焼土は灰の掻き出しのためと思われる。（柱穴）全体に35本前後のピットが点在して深度のあるピットも多いが、主柱は6本で構成されようか。

〔覆土〕

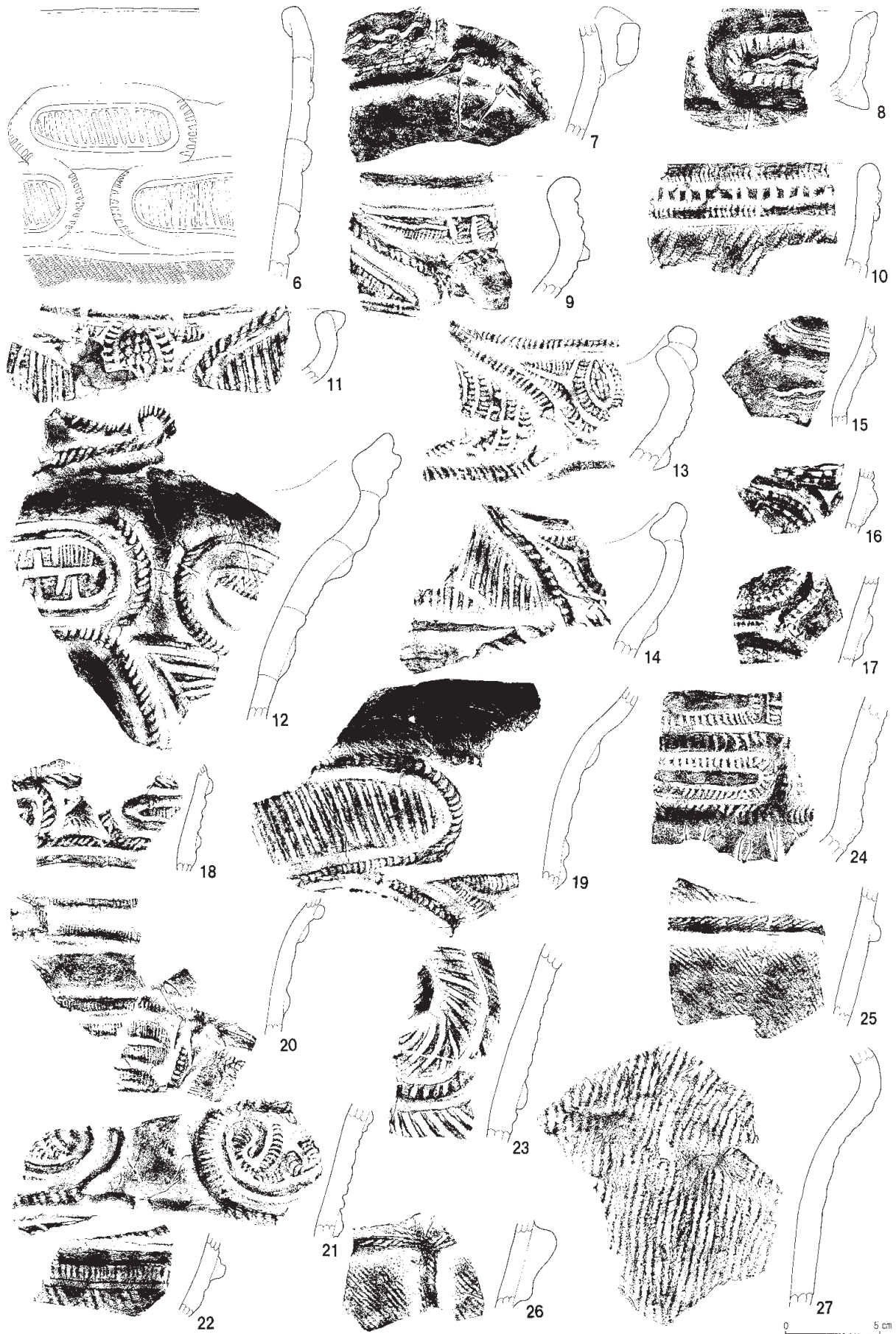
1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。やや硬質。

3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。



第301図 153号住居跡出土遺物1 (1/4)



第302图 153号住居跡出土遺物2 (1/3)

4層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。やや硬質。

5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

6層 暗褐色土（10YR3/4）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。

8層 褐色土（7.5YR4/3）。ローム粒子・焼土粒子を含む。焼土ブロックを僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

153号住居跡出土遺物（第301・302図、第327図11～14、第328図1～4、第344図10、第349図43～47）

第301図1は1/4程の破片からの推定復元。小波状口縁を呈する。円筒形の器形である。主文様は刻みが加えられた隆帯によりなされる。隆帯を横位に貼付して口縁部と胴部を画する。口縁部の文様は隆帯を波状に施す。隆帯の両脇には幅広の角押文が加えられ、部分的に沈線による波状文が施される。胴部の文様は直行・弧状に隆帯が貼付され、区画などが作られる。隆帯の両脇には幅広の角押文が加えられ、区画内では角押文に沿って沈線による波状文が施される。色調は上半が暗赤褐色（5YR3/2）、下半がにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は口唇部に双孔の突起が付いていたと思われる。隆帯を巡らせて、口縁部と胴部を画する。口縁部の文様は突起から押捺が加えられた隆帯を垂下させる。隆帯により楕円形や三角形の区画を作る。3ヵ所の区画内には隆帯に沿って沈線や刺突文が加えられ、半截竹管の刺突が施される。2ヵ所の区画内には集合する沈線や渦巻文が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

3は1/4程の破片からの推定復元。刻みを加えた低い隆帯を巡らせ、狭い無文の口縁部と胴部を画する。胴部には2条一対の沈線により縦長の区画が作られる。半楕円形に作られた区画では、沈線に沿って連続爪形文と波状沈線が加えられる。長方形の区画内には短沈線を交互に施すことにより蛇行状に仕上げ、連続爪形文を加える。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は3条の沈線を巡らせ、胴部を2分する。上位は3条の沈線により三角形の区画を作り、沈線に沿って連続爪形文が施され、半截竹管の刺突が加えられる。下位はLの無節斜縄文が施される。色調は暗褐色（2.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は炉に埋設されていた土器。剥離している部分もあるが、隆帯を「〇」字状に連続して貼付する。隆帯に沿って連続爪形文が施される。色調は明赤褐色（2.5YR4/6）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

第302図6は口縁部が無文帯になり、胴部は隆帯を巡らせ上下を画する。上位は刻みが加えられた隆帯による楕円形区画が2段構築される。区画内には集合する沈線が充填される。下位はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7は隆帯を巡らせ上下を画する。上位は横位に橋状の突起を付ける。角押文により区画が作られるようで、区画内には波状沈線が2条充填される。下位は無文になる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

8は隆帯により楕円形の区画が作られ、区画内は隆帯に沿って幅広の角押文が施され、波状沈線が充填される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂・雲母を含む。

9は口唇部に2条の沈線を巡らす。刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画内には隆帯に沿って刻みが施され、結節沈線による波状文などが充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10は口縁部に上から連続爪形文・交互刺突による鋸歯文・連続爪形文の順で施文される。下位にはRLの単節斜

縄文がみられる。色調は灰褐色（7/5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂・雲母を僅かに含む。

第327図11～14、第328図1～4は打製石斧。第327図11は頭部側側縁がくびれる特異な形状を呈する。横長の剥片を使用。表面には礫面を残す。刃部は尖刃状。123g。硬砂岩製。14は横長の剥片を使用。刃部は尖刃状を呈する。136.2g。粘板岩製。第327図12・13、第328図1～4は短冊形。12・13は横長の剥片を使用。表面に礫面を残



第303図 154号住居跡 (1/60)

す。12は136.2g。硬砂岩製。13の刃部は円刃状を呈する。98.6g。硬砂岩製。第328図1は横長の剥片を使用。表面に僅かに礫面を残す。刃部は尖刃状。275.7g。ホルンフェルス製。2は横長の剥片を使用。刃部は円刃状。82.4g。硅質砂岩製。3は137.6g。硬砂岩製。4は横長の剥片を使用。152.9g。硬砂岩製。

第344図10は凹基の打製石鏃。0.5g。黒曜石製。

第349図43～47は土器片錘。43が短軸、他は長軸に刻みが加えられる。重量は43が16.3g、44が15.1g、45が14.7g、46が19.2g、47が28.9gを測る。

第301図5を除き、覆土中からの出土である。

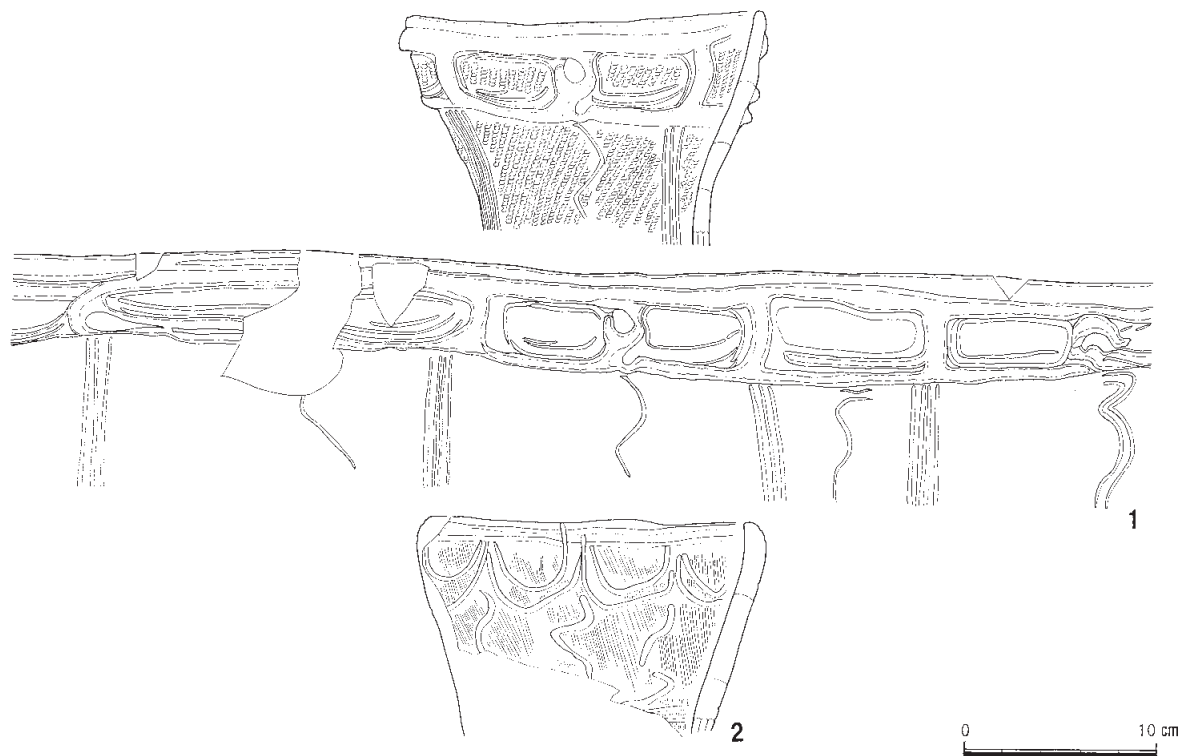
154号住居跡（第303図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 535Yに切られる。(平面形) 隅丸正方形。(規模) 420×420cm。(主軸方位) N-67°-E。(壁高) 28～33cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅12～40cm・下幅5～10cm・深さ6～13cmを測り全周する。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。(炉) 住居中央からやや東に偏って位置する。礫を長方形に配置した石囲炉で、径95cm・深さ30cmのほぼ円形の掘り込みをもつ。中央には土器を抜かれたと思われるピットがある。(柱穴) コーナー付近にある4本が主柱穴と思われる。

〔覆土〕

- 1層 褐灰色土 (10YR4/1)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。遺物を多く含む。やや硬質。
- 2層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土 (10RY4/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。



第304図 154号住居跡出土遺物1 (1/4)



第305图 154号住居跡出土遺物2 (1/3)

6層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

154号住居跡出土遺物 (第304・305図、第328図5・6、第330図10、第335図3・4・9、第349図48)

第304図1はキャリパー形の土器。RLの単節斜縄文を地文とする。口縁部には隆帯による大小6単位の楕円形区画が作られる。区画の連結部には渦巻文が部分的に配される。区画内には隆帯に沿って2条の沈線がみられる。胴部には2条一對の沈線と2条一對の蛇行する沈線が交互に4単位施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は1/3程の破片からの推定復元。連弧文系の土器で、条線を地文とする。口唇部下と胴部中位に2条の沈線を巡らす。口縁部には2条一對の沈線による連弧文が施され、連結部から蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第305図3～6・10～12は連弧文系の土器。3・4・10～12は条線を地文とする。3は口縁部に5条の沈線を巡らせ、4条一組の沈線を弧状に施す。下位にも3条の横走する沈線がみられる。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。4は口縁部に3条の沈線を巡らせ、3条一組の沈線により連弧文が施される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂・片岩を含む。10は口縁部に2条の沈線を巡らせ、2条一對の沈線により連弧文が施される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。11は口縁部に多条の沈線が巡り、2条一對の沈線が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。12は2条一對の沈線により波状文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。5・6はRLの単節斜縄文を地文とする。5は口縁部に4条の沈線を巡らせ、連弧文が描かれる。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を含む。6は口縁部に3条の沈線を巡らせ、4条一組の沈線で連弧文を施す。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

7は沈線により楕円形の区画が作られようか。区画内には集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

8は口縁部に隆帯が巡らされ、口唇部との間に三角形の押引文が2条施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

9は条線を地文とする。口唇部下に2条の沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

13・14は曾利系の土器。13は沈線により重弧文が施され、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色 (7.5RY5/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。14は波状口縁の土器。高い波頂部には双孔が穿たれ、波頂部からは沈線が加えられた隆帯が垂下する。低い波頂部からは弧状に隆帯が貼付され、区画が作られる。区画内には斜位の集合する沈線が充填される。胴部は半截竹管による多段の沈線を地文とし、3条一組の沈線により連弧文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

15・16は隆帯による渦巻文が貼付される。15は下位に沈線による文様が見える。色調はにぶい黄褐色 (10YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。16は条線を地文とし、区画が作られる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

17は3条の沈線が横走し、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

18は条線を地文とする。4条の沈線を横走させ、渦巻文が加えられる。胴部は2条一對の沈線が垂下する。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

19はLの撚糸文を地文とする。3条の沈線を巡らせ、蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を

呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20・22・23はRL、21はLRの単節斜縄文が施される。20・21は2条の沈線が垂下する。20の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。21の色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。22の色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。23は3条一組の沈線、2条一對の蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

24は隆帯が横走し、縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

25・26は条線を地文とする。25は2本一對の隆帯が斜位に垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。26は3条一組の蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

27は浅鉢形土器。口唇部は外屈する。口唇端部には赤彩の痕跡を残す。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

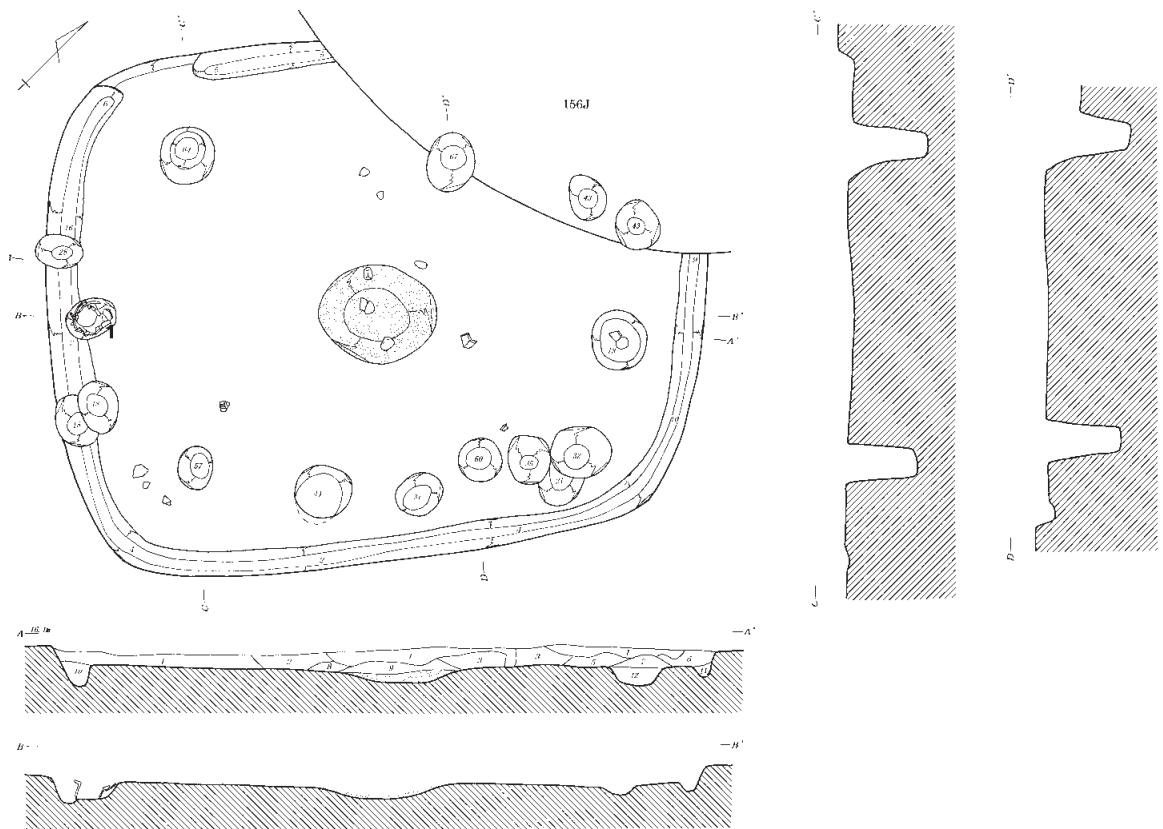
第328図5・6は打製石斧。5は短冊形。横長の剥片を使用。表面には大きく礫面を残す。刃部は斜刃状を呈する。側縁には敲打痕を認める。81.1g。硬砂岩製。6は撥形。127g。硬砂岩製。

第330図10は磨製石斧。刃部は円刃状を呈する。34.9g。硬砂岩製。

第335図3・4は石皿片。凹石と兼用。3は使用によりくぼむ。910g。緑泥片岩製。4は350g。石英閃緑岩製。9は軽石製品。1/2弱を欠くが、扁球状を呈するものと思われる。20g。

第349図48は土器片錘。長軸に刻みを加えられる。17.5g。

すべて覆土中からの出土である。



第306図 155号住居跡 (1/60)

155号住居跡（第306図）

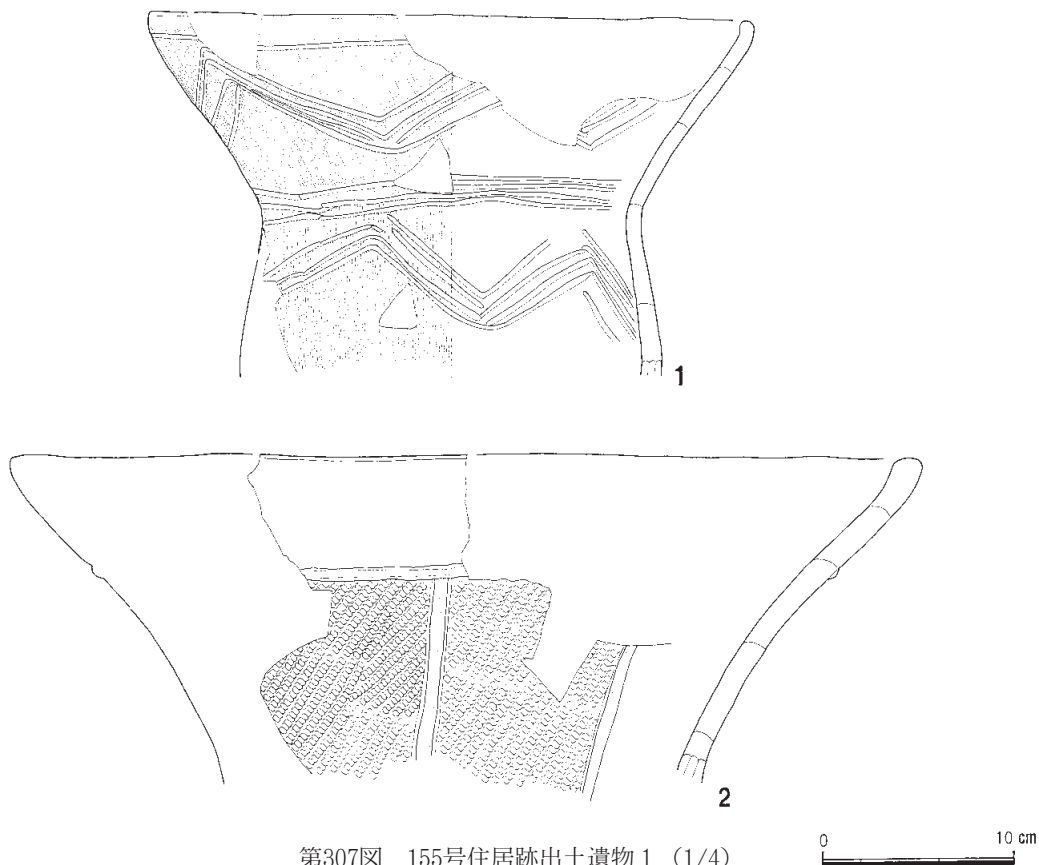
〔位置〕 130地点。

〔構造〕 156 J に切られる。（平面形）長方形。（規模）530×420cm。（主軸方位）N-42°-E。（壁高）3～13cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～35cm・下幅5～10cm・深さ4～16cmを測り全周すると思われる。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。（炉）住居中央からやや東に偏って位置する。95×80cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ20cmの掘り込みをもつ。（柱穴）深度のある5本が主柱穴と思われる。（埋甕）南西壁下に位置する。深鉢形土器の上半部を埋設する。40×30cm・深さ25cmの楕円形の掘り込みをもつ。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 7層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。硬質。
- 9層 暗赤褐色土（2.5YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を多く含む。硬質。
- 10層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 11層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。



〔時期〕 加曾利E II式期。

155号住居跡出土遺物（第307・308図、第328図7、第349図49）

第307図1、第308図6は連弧文系の土器。1は埋甕。頸部がくびれ、口縁部はほぼ直線状に開く。条線を地文とし、くびれ部に3条の沈線を巡らせ口縁部と胴部を画する。口唇部下には1条の沈線を巡らす。口縁部・胴部に4条一組の沈線により連弧文を施す。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。6はRLの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による2条一対の沈線による連弧文を2段施す。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

2は隆帯を横走させ、口縁部と胴部を画する。口縁部は無文になる。胴部はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第308図3は隆帯により三角形・楕円形と思われる区画が作られる。楕円形の区画内には条線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は隆帯により半楕円形の区画が作られようか。区画内にはRLの単節斜縄文がみられる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5・10は曾利系の土器。5は口唇端部がくぼむ。縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。10は沈線による重弧文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

7は波状沈線が横走し、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

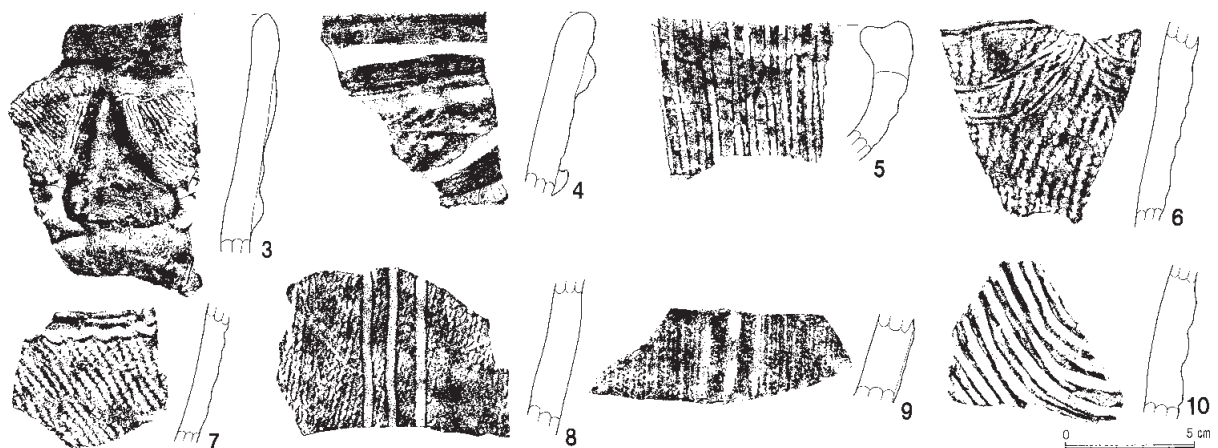
8はLの撚糸文を地文とし、3条一組の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9は条線を地文とし、2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第328図7は打製石斧。側縁が僅かにくびれる。横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。刃部は平刃状で線條痕が認められる。96.5g。硬砂岩製。

第349図49は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。8.6g。

第307図1を除き、覆土中からの出土である。

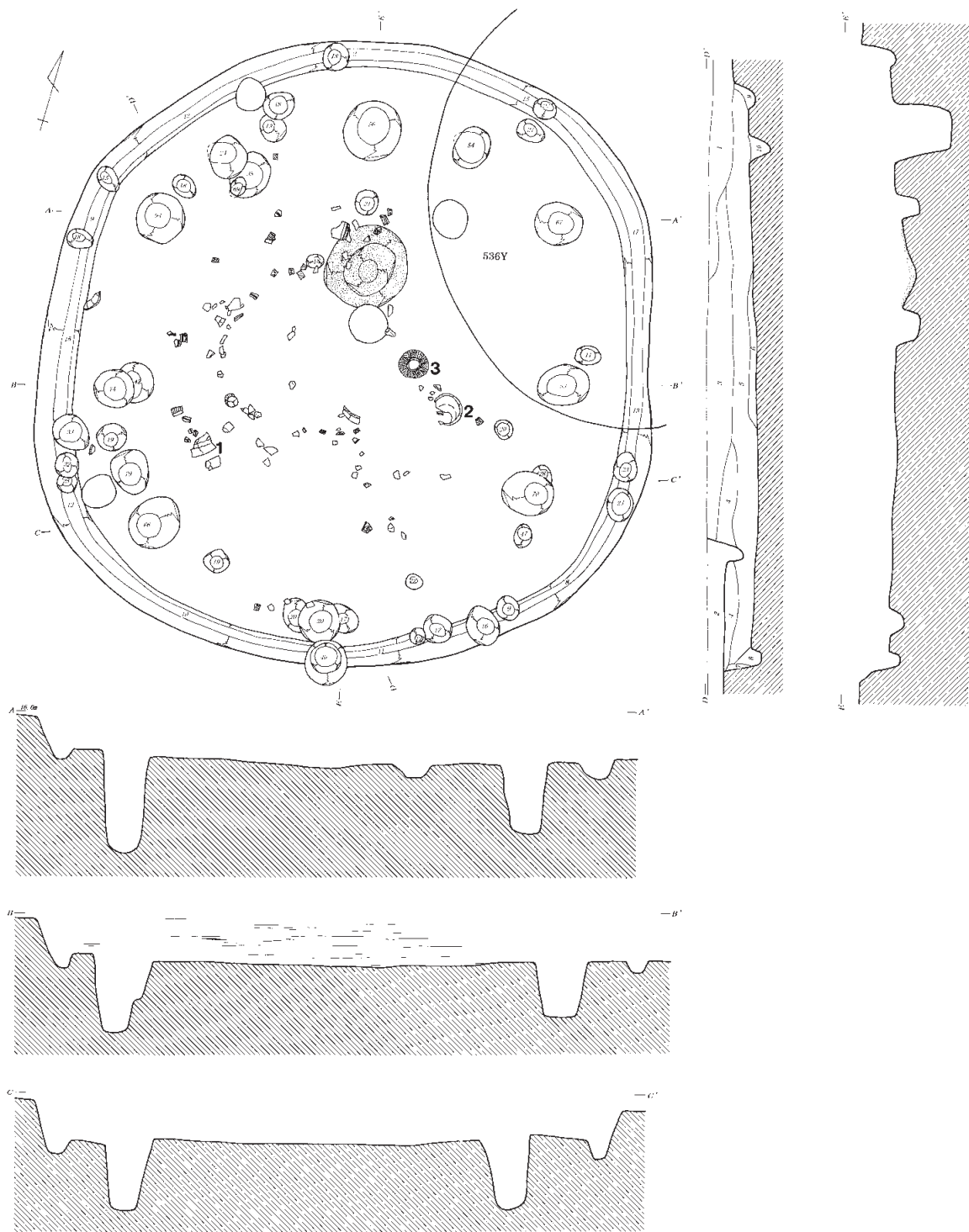


第308図 155号住居跡出土遺物2 (1/3)

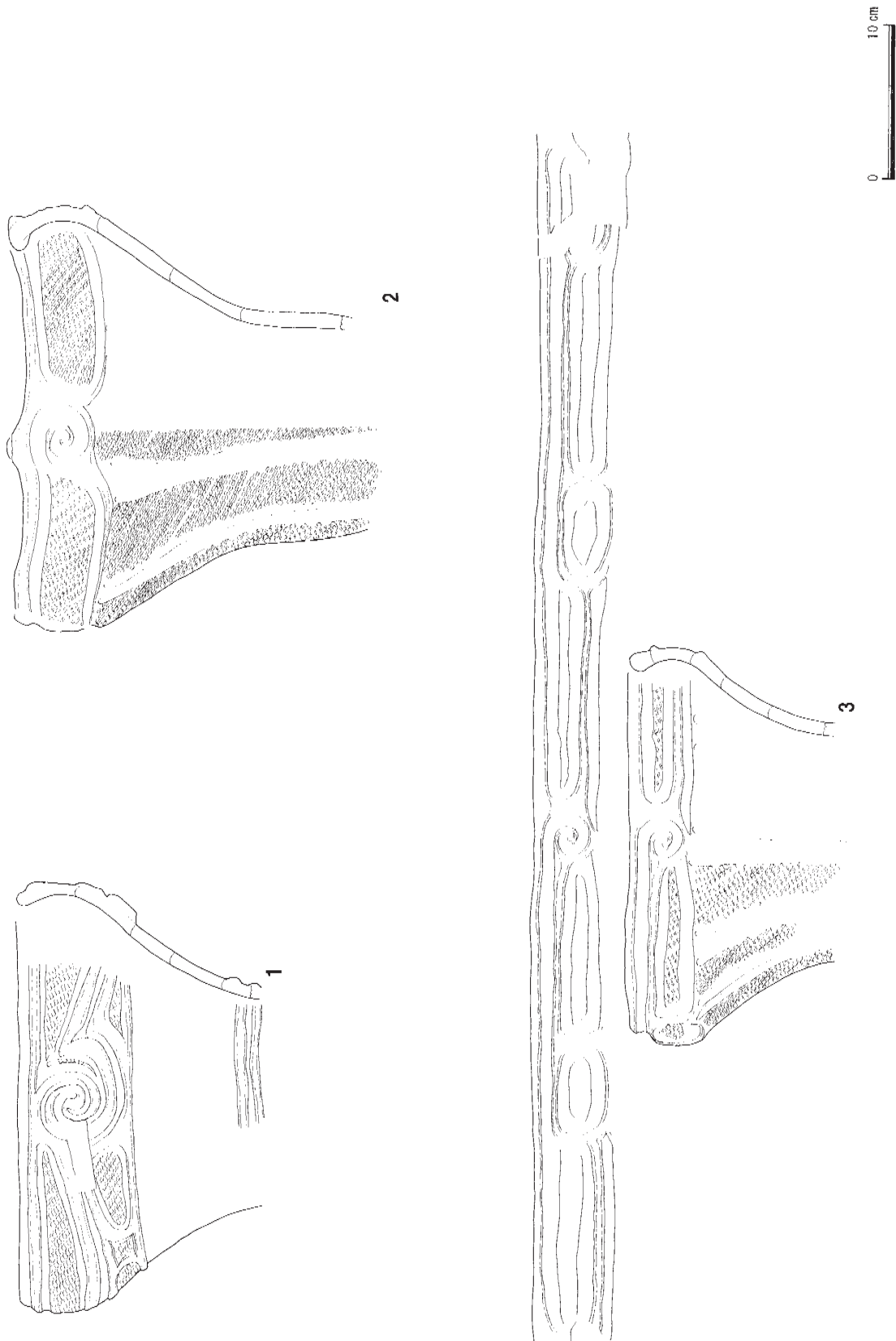
156号住居跡（第309図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 155 J を切り、536 Y に切られる。（平面形）楕円形。（規模）590×570cm。（主軸方位）N-13°-W。（壁高）2～31cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅25～45cm・下幅5～20cm・深さ4～28cmを測り全周する。（床面）南西側のコーナー部分に硬化面が確認された。全体に良好である。（炉）住居中央からやや北に偏って位置する。径80cmの不整円形を呈する地床炉で、深さ8cm前後の掘り込みをもつ。（柱穴）深度のあるピッ



第309図 156号住居跡 (1/60)



第310図 156号住居跡出土遺物 1 (1/4)

トが7本あるが、支柱は5本になろうか。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 536Y覆土。
- 3層 黒褐色土 (10RY3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。遺物を多く含む。やや硬質。
- 4層 暗褐色土 (10RY3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化材片・炭化物粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 8層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 9層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 10層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの様相を呈し、覆土上層から多く出土した。

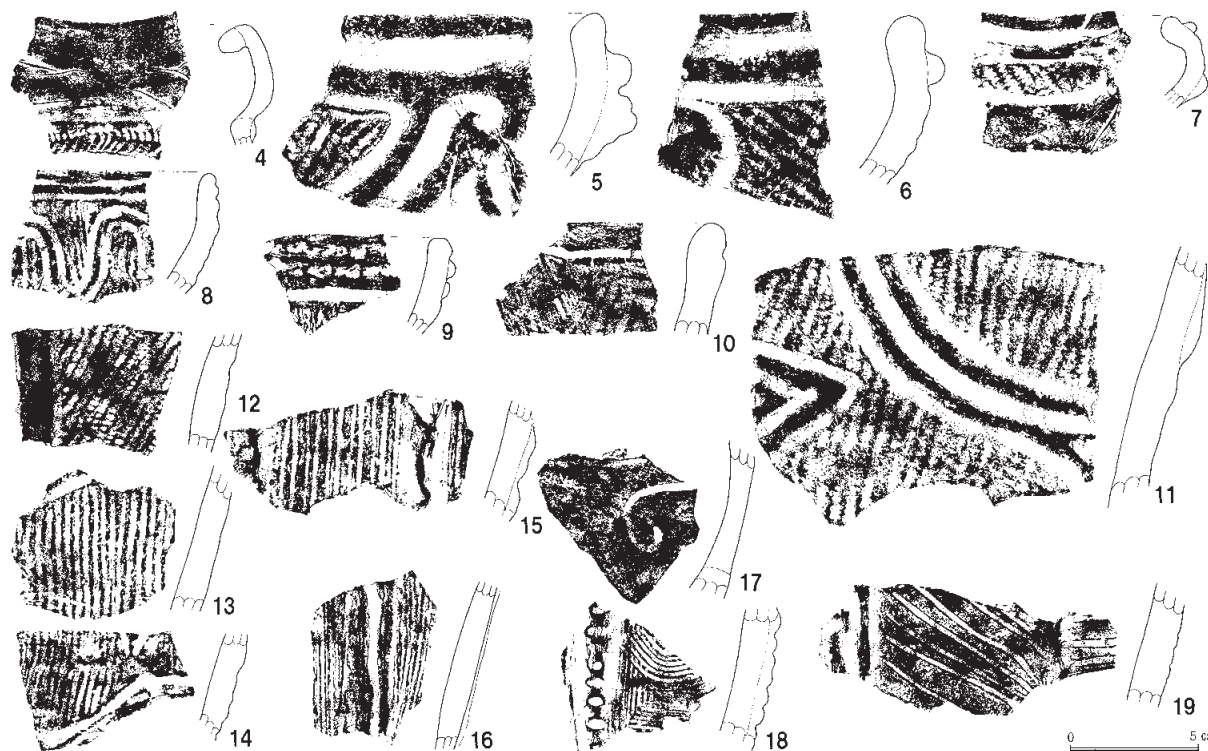
〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

〔所見〕 床面上に炭化材を多く含む層があり、焼失家屋の可能性はある。

156号住居跡出土遺物 (第310・311図、第328図8～12、第350図9)

第310図1は口頸部1/4程の破片からの推定復元。1本の隆帯で口縁部と頸部、2本の隆帯で頸部と胴部を画する。口縁部はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一対の隆帯により渦巻文や区画を作る。頸部は無文帯になる。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/4) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

2・3は相似た器形・文様構成をもつ。RLRの複節斜縄文を地文とする。口縁部には隆帯による渦巻文と楕円形区画が作られる。胴部には2条一対の沈線が垂下され、沈線間は磨り消される。2の色調は黒褐色 (7.5YR3/2) を呈し、胎土には粗砂を含む。3の色調は暗赤褐色 (5YR3/2) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。



第311図 156号住居跡出土遺物2 (1/3)

第311図4は内湾する口縁部が無文帯になる。くびれ部には矢羽根状の刻みが加えられた隆帯が巡る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5・6は同一個体の土器の可能性が大きい。R Lの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯により渦巻文が付加された半楕円形の区画が作られる。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7は隆帯により楕円形の区画が作られ、区画内にはR Lの単節斜縄文がみられる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8は口唇部下に半截竹管による2条一對の沈線による波状文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

9は口唇部下に刺突文列2条と沈線を巡らす。以下、条線になる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10は口唇部下に沈線が巡り、条線が施される。色調はにぶい褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11はR Lの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

12はL Rの単節斜縄文を地文とし、2条一對の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

13はLの撚糸文を地文とし、上位に沈線がみえる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

14～16は条線を地文とする。14は沈線が波状に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。15は直行・蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。16は2本一對の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

17は沈線により渦巻文が施される。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

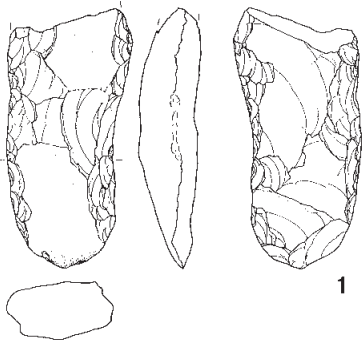
18は縦位・横位・弧状に施された条線を地文とし、刻みが加えられた隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

19は曾利系の土器。隆帯を直行・蛇行に垂下し、斜位・横位に集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第328図8～12は打製石斧。8は側縁がくびれる。横長の剥片を使用。168.2g。硬砂岩製。9・12は短冊形。9は表面に礫面を残す。刃部は尖刃状。124.1g。石灰岩製。12は横長の剥片を使用。刃部は円刃状。130.3g。硅質砂岩製。10・11は撥形に近い。共に横長の剥片を使用。10の刃部は円刃状。94.6g。礫岩製。11の刃部は尖刃状。66.9g。粘板岩製。

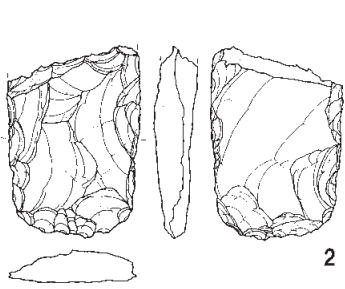
第350図9は耳栓。滑車形を呈する。色調は暗赤褐色(5YR3/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。10.3g。すべて覆土中からの出土である。

12 J

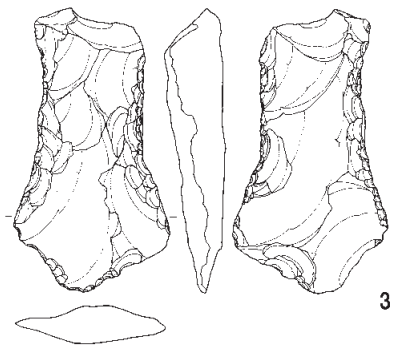


1

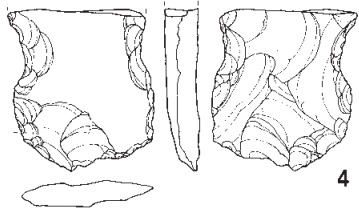
15 J



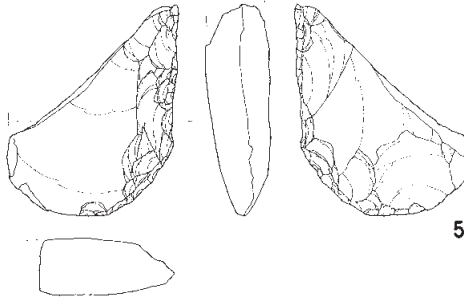
2



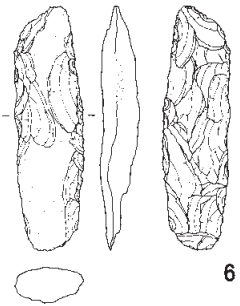
3



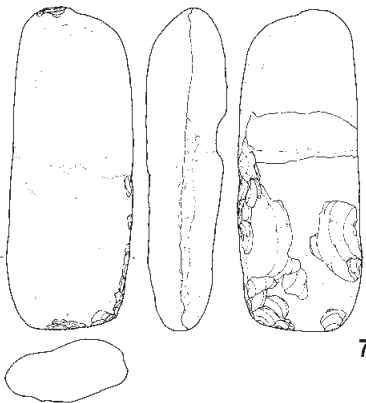
4



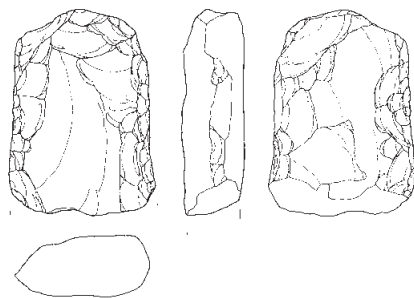
5



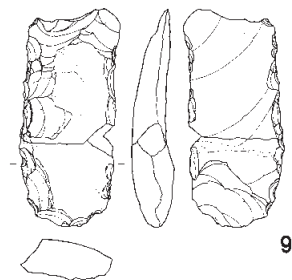
6



7

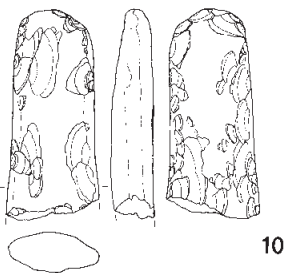


8

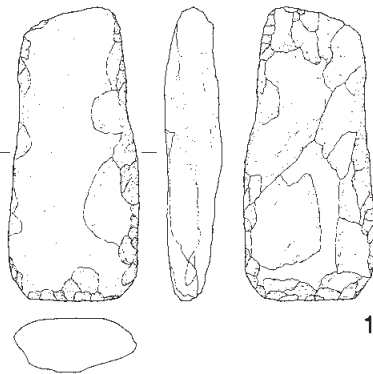


9

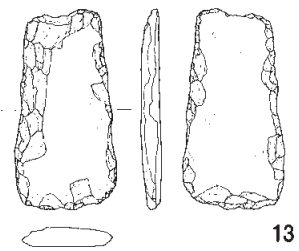
18 J



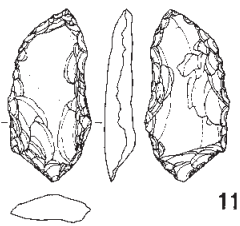
10



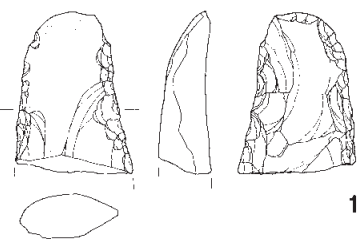
12



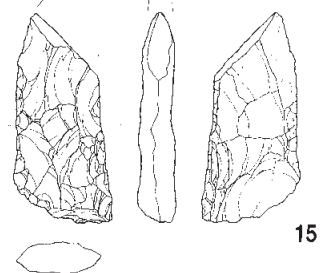
13



11



14



15

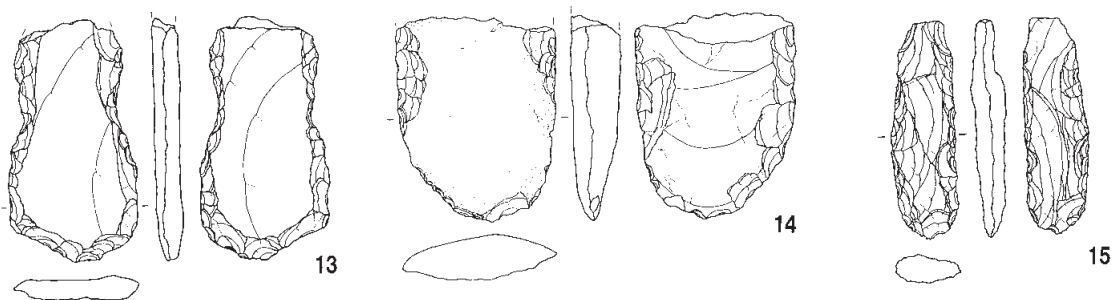
0 5 cm

第312図 住居跡出土石器 1 (1/3)

19 J

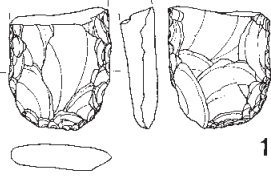


20 J

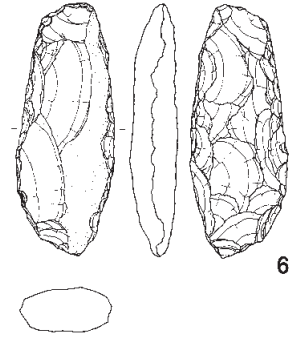
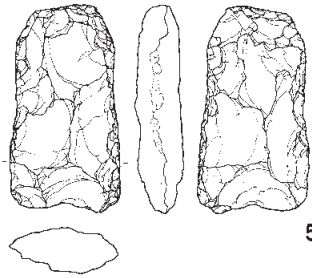
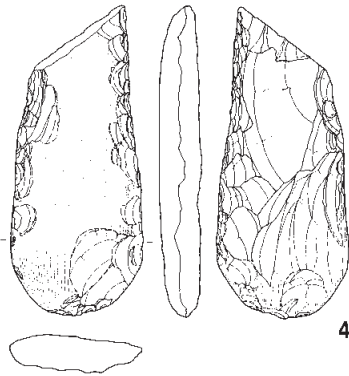
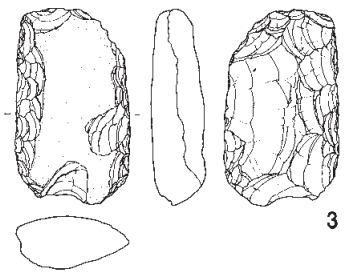
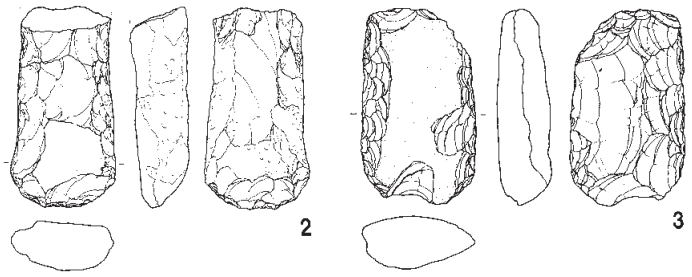


第313図 住居跡出土石器 2 (1/3)

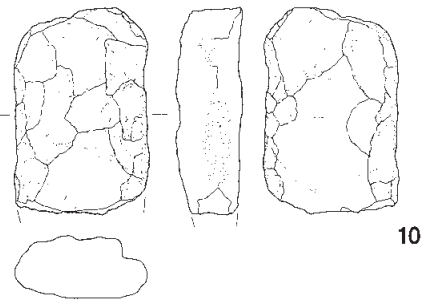
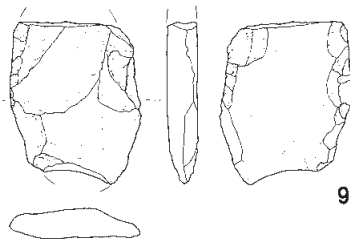
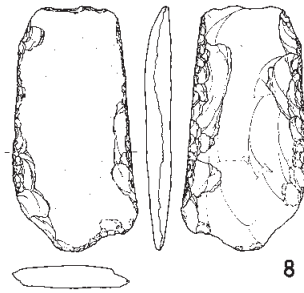
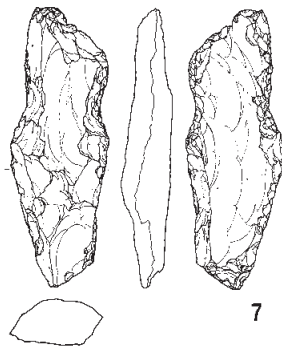
21 J



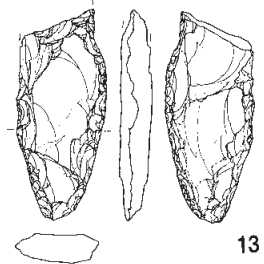
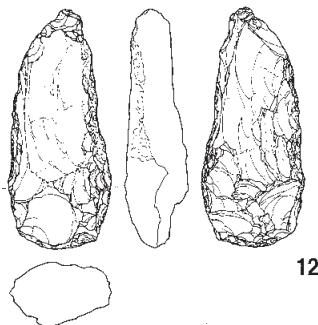
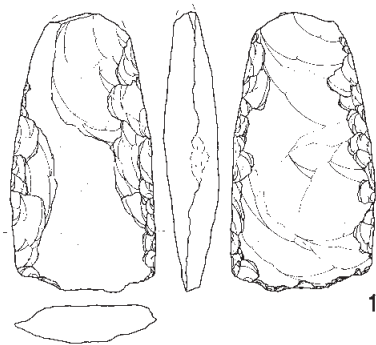
22 J



23 J

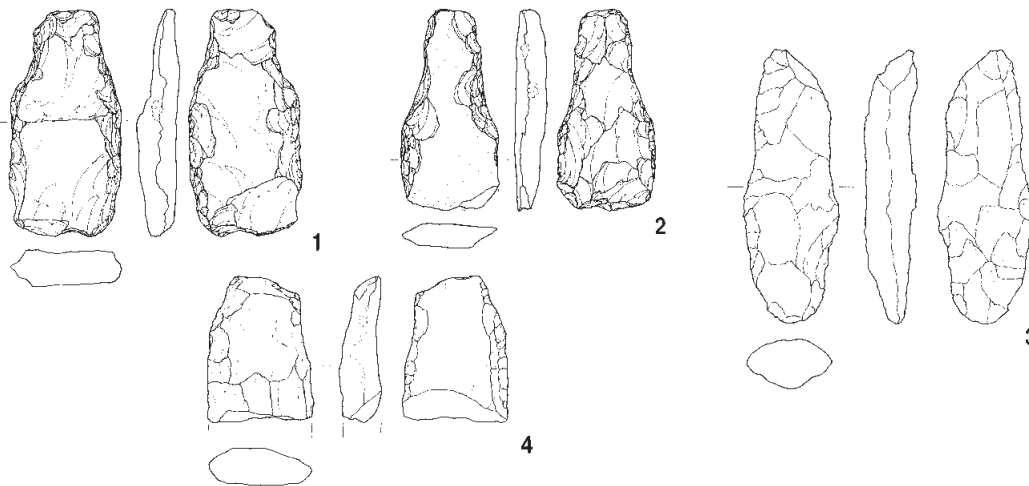


24 J

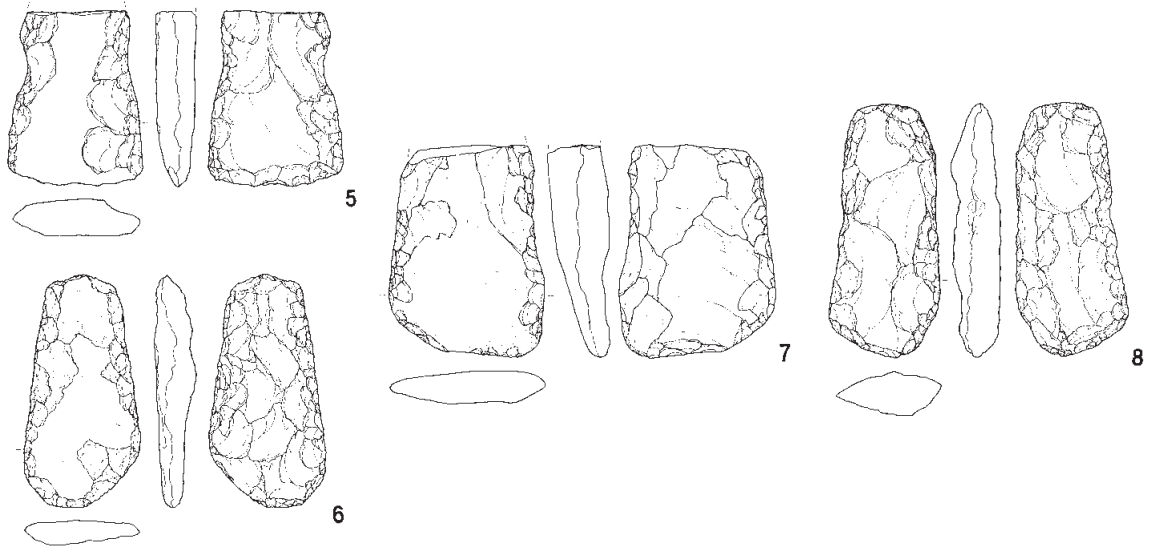


第314図 住居跡出土石器3 (1/3)

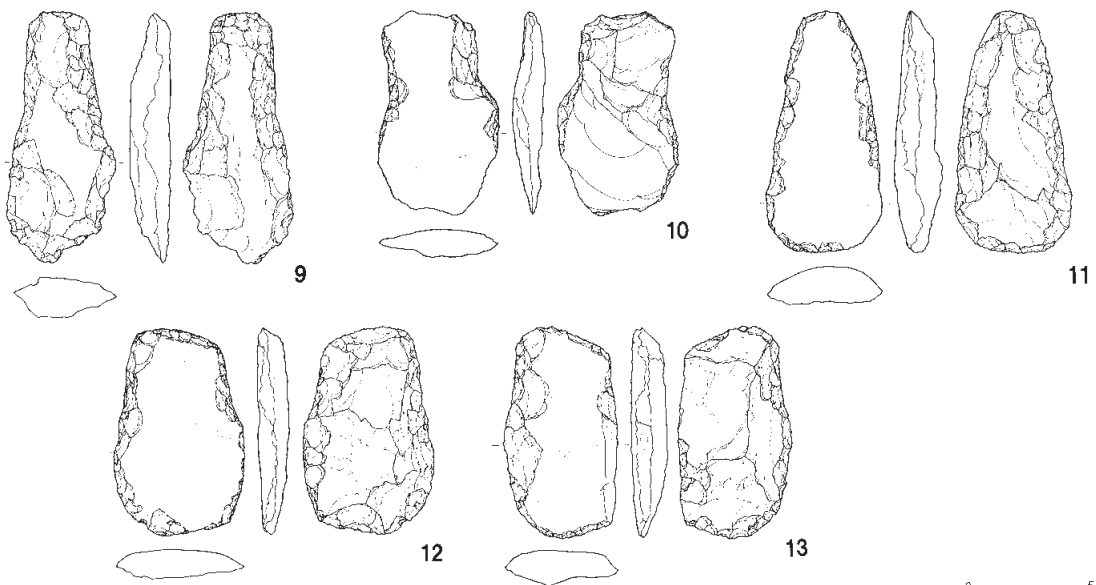
25 J



27 J

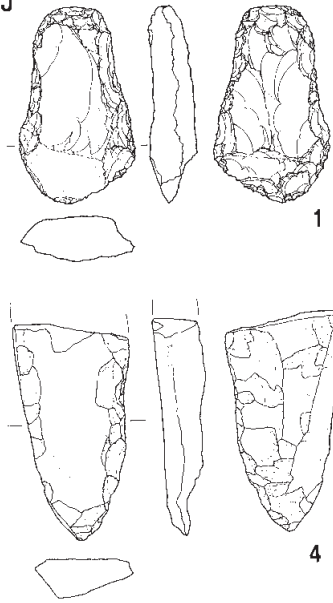


30 J



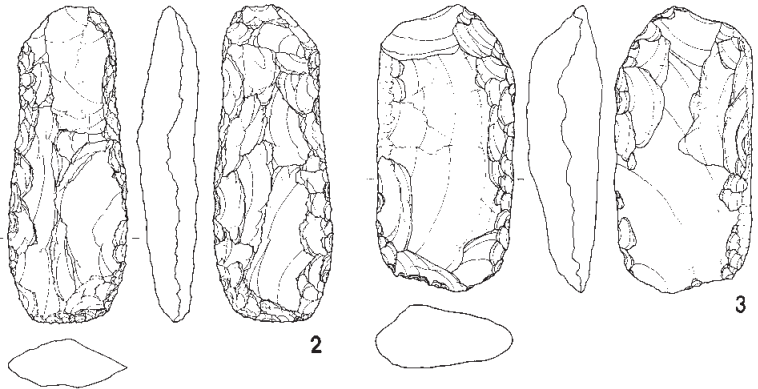
第315図 住居跡出土石器 4 (1/3)

31 J



1

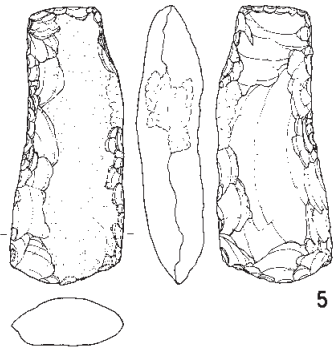
4



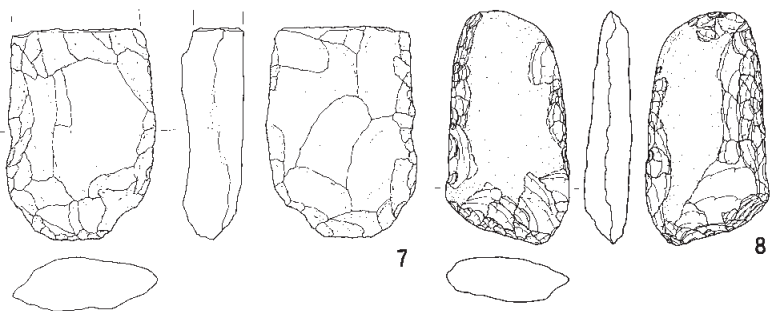
2

3

34 J

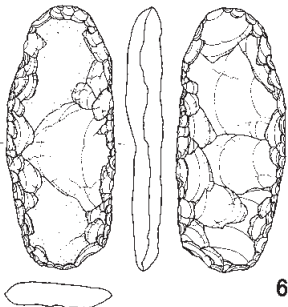


5



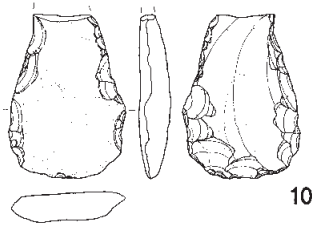
7

8

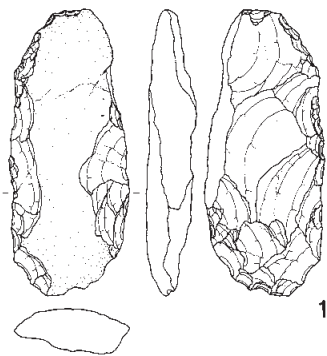


6

36 J

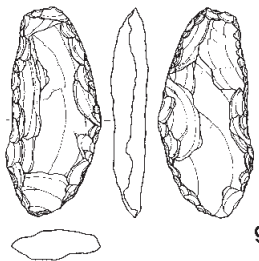


10

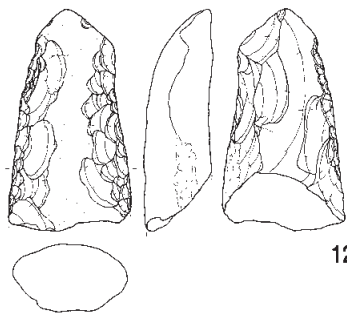


11

35 J



9

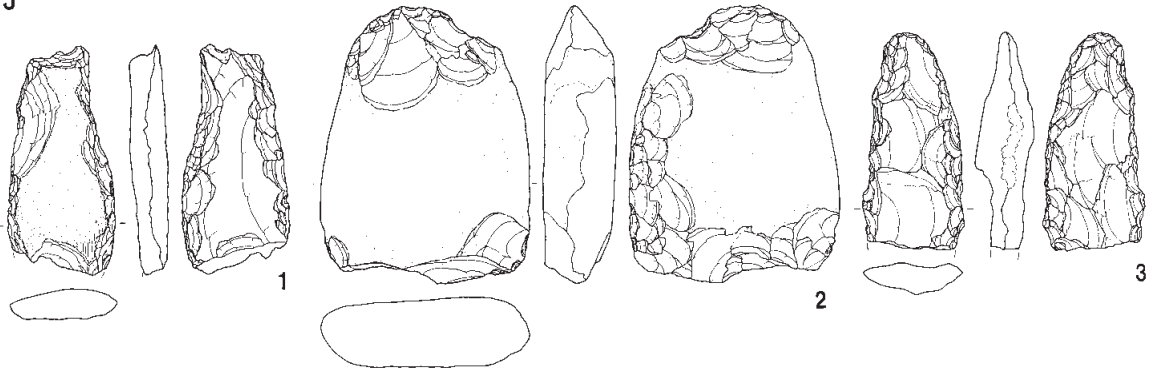


12

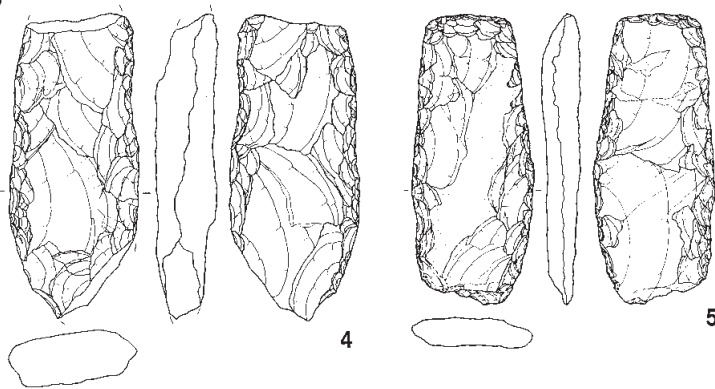


第316図 住居跡出土石器 5 (1/3)

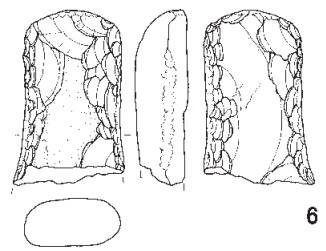
37 J



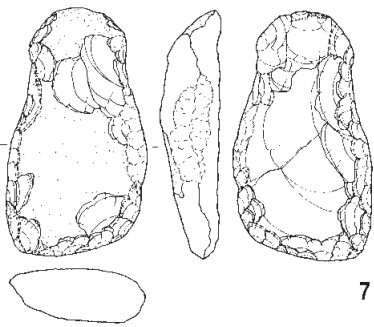
39 J



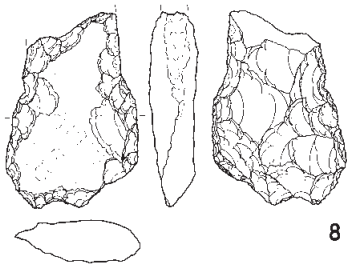
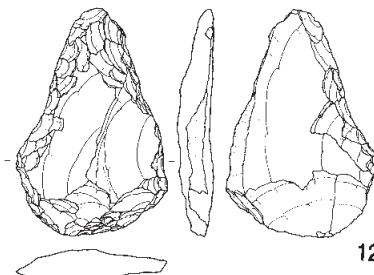
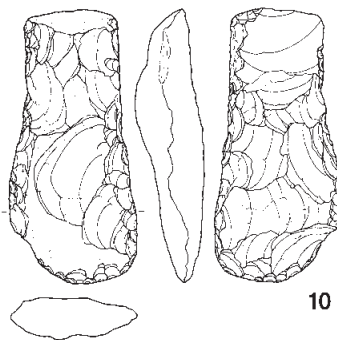
44 J



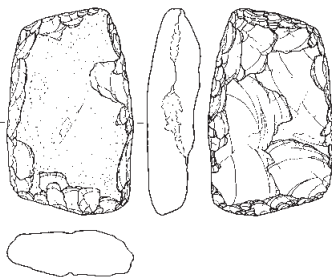
48 J



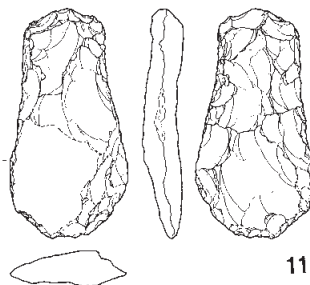
49 J



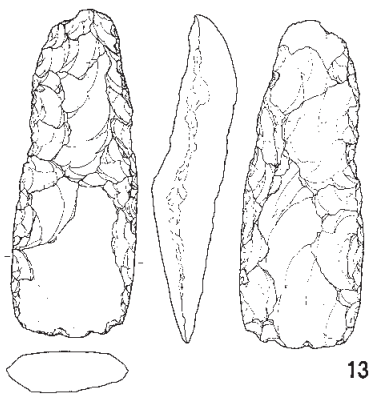
8



9



11

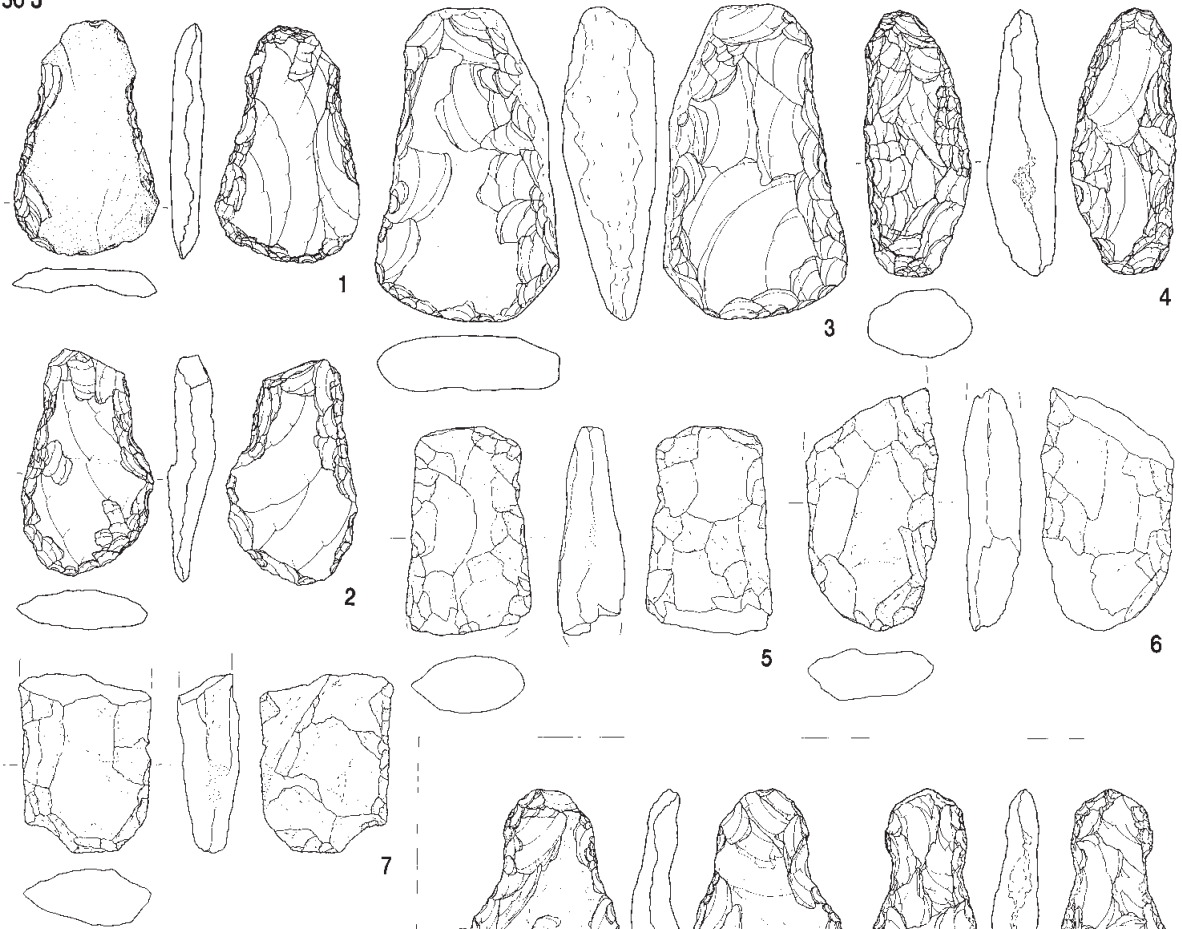


13



第317図 住居跡出土石器 6 (1/3)

50 J



54 J

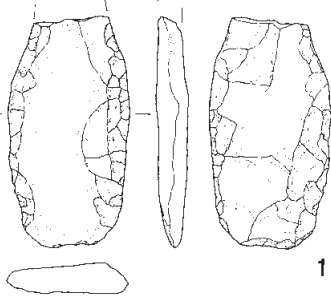


第318図 住居跡出土石器 7 (1/3)



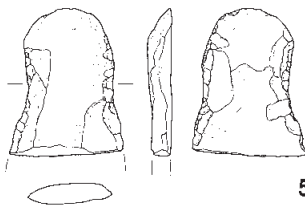
第319図 住居跡出土石器 8 (1/3)

76 J

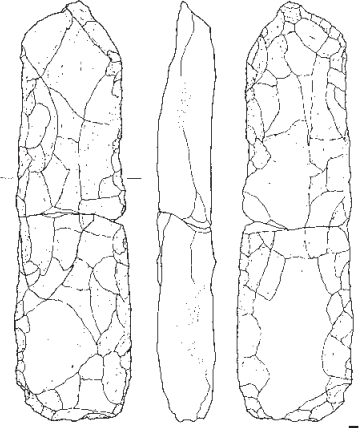


1

80 J

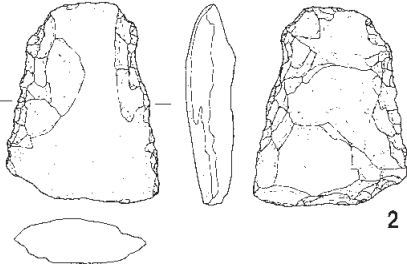


5

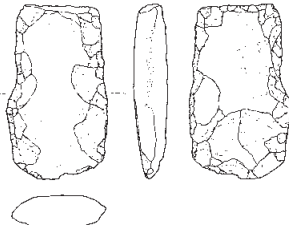


7

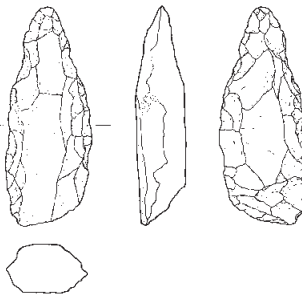
79 J



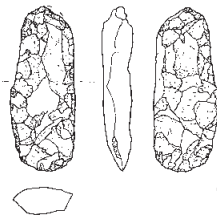
2



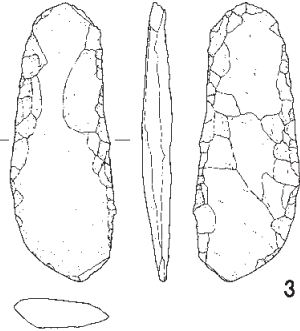
6



8

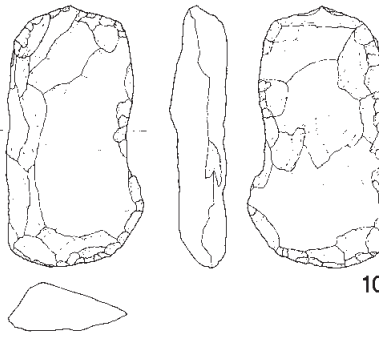


9

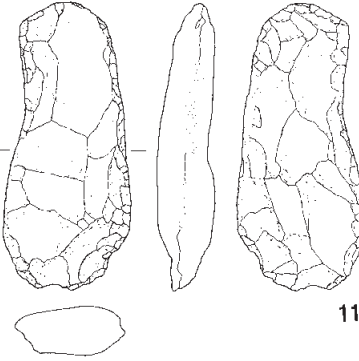


3

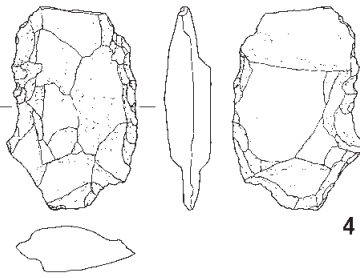
82 J



10

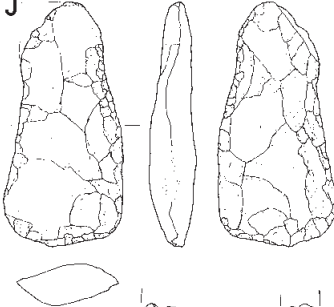


11

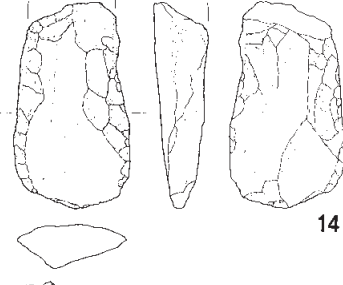


4

85 J

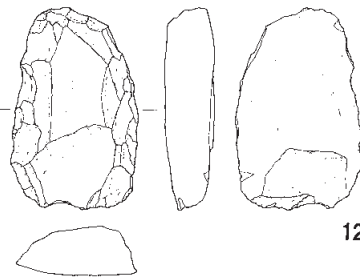


13

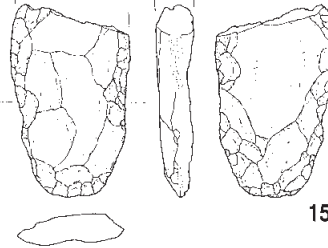


14

83 J



12



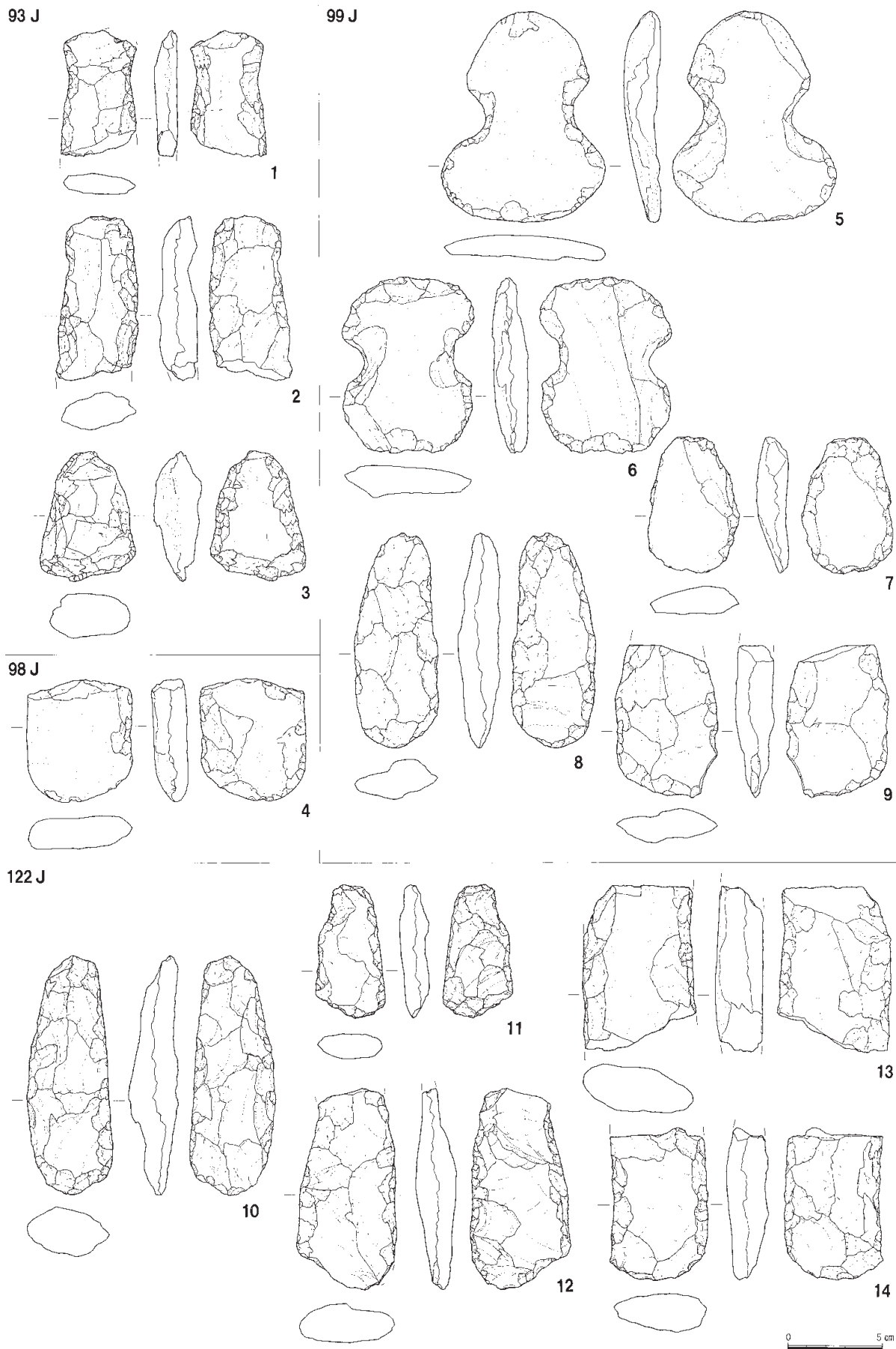
15



第320図 住居跡出土石器9 (1/3)

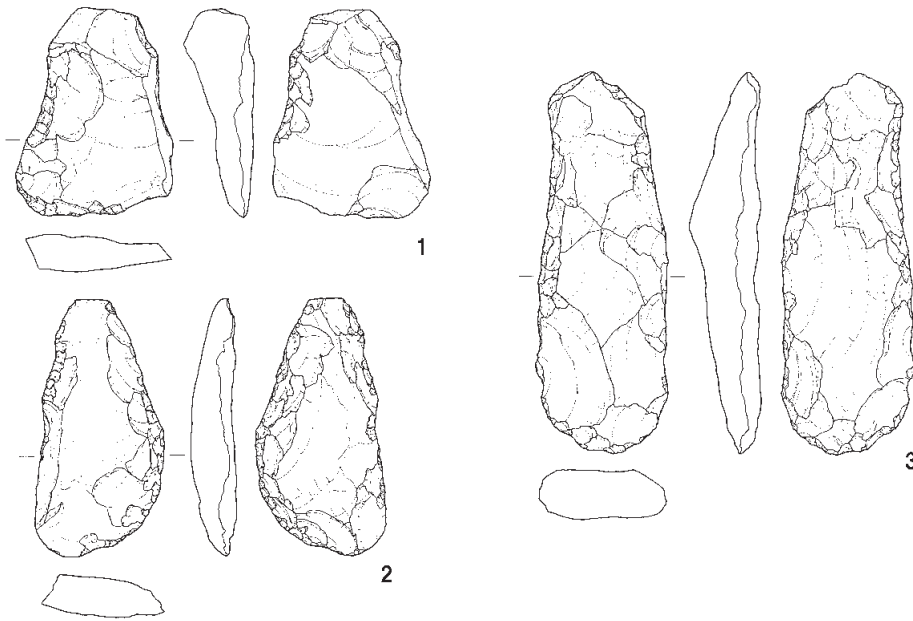


第321図 住居跡出土石器10 (1/3)

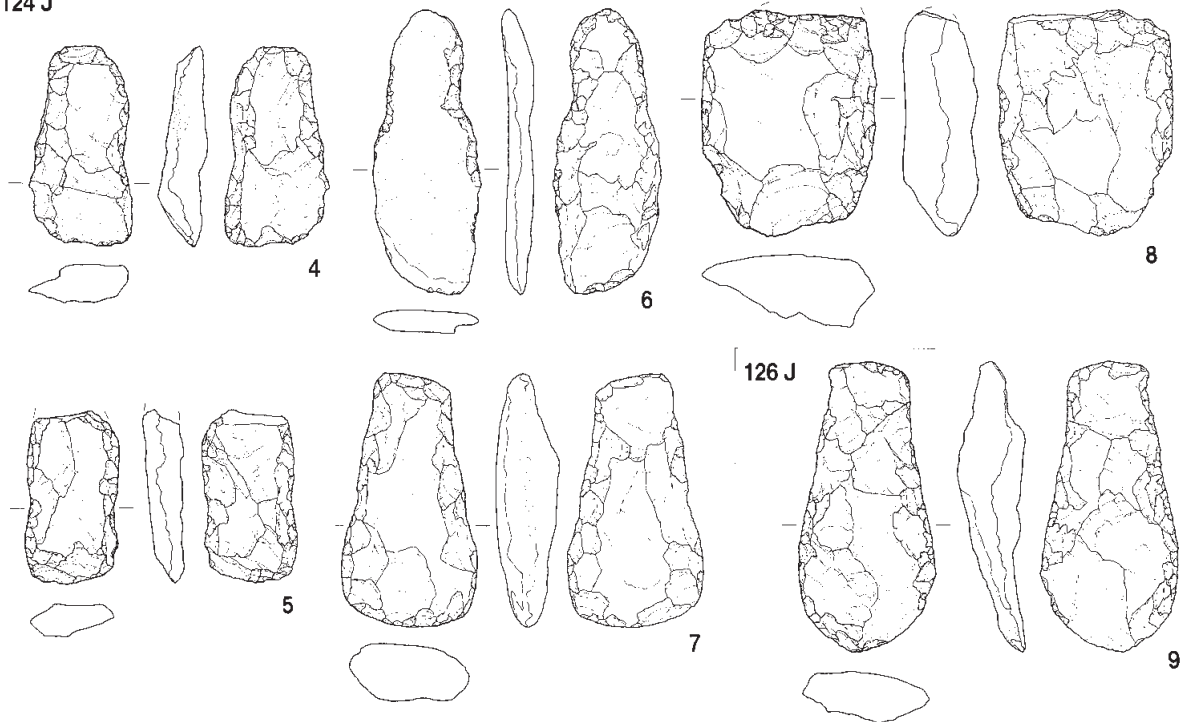


第322図 住居跡出土石器11 (1/3)

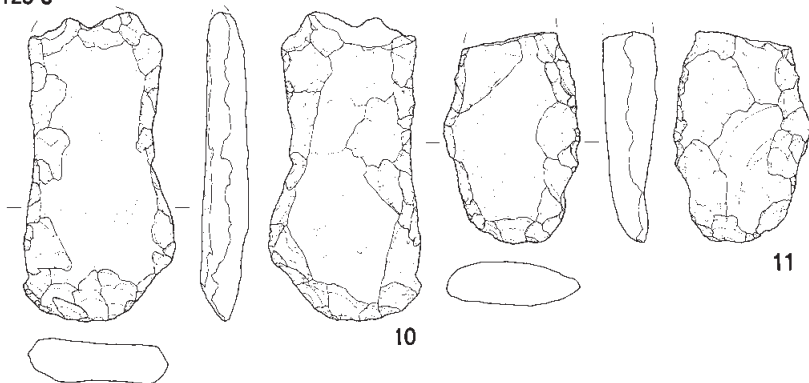
123 J



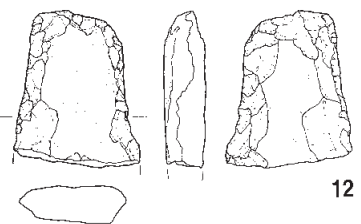
124 J



128 J

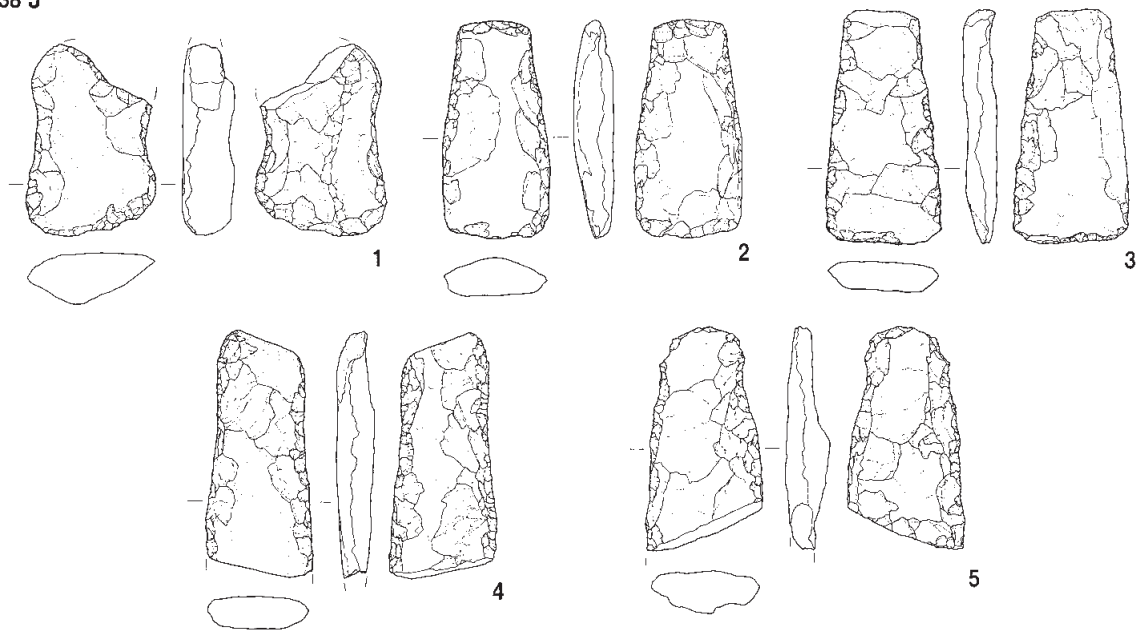


129 J

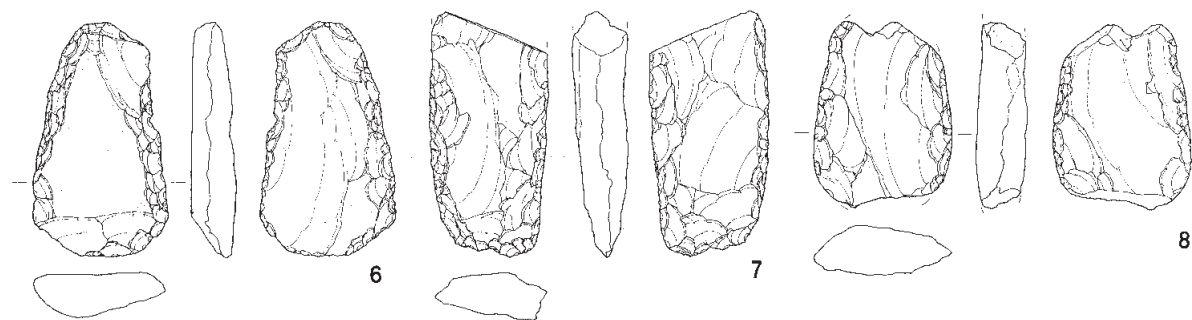


第323図 住居跡出土石器12 (1/3)

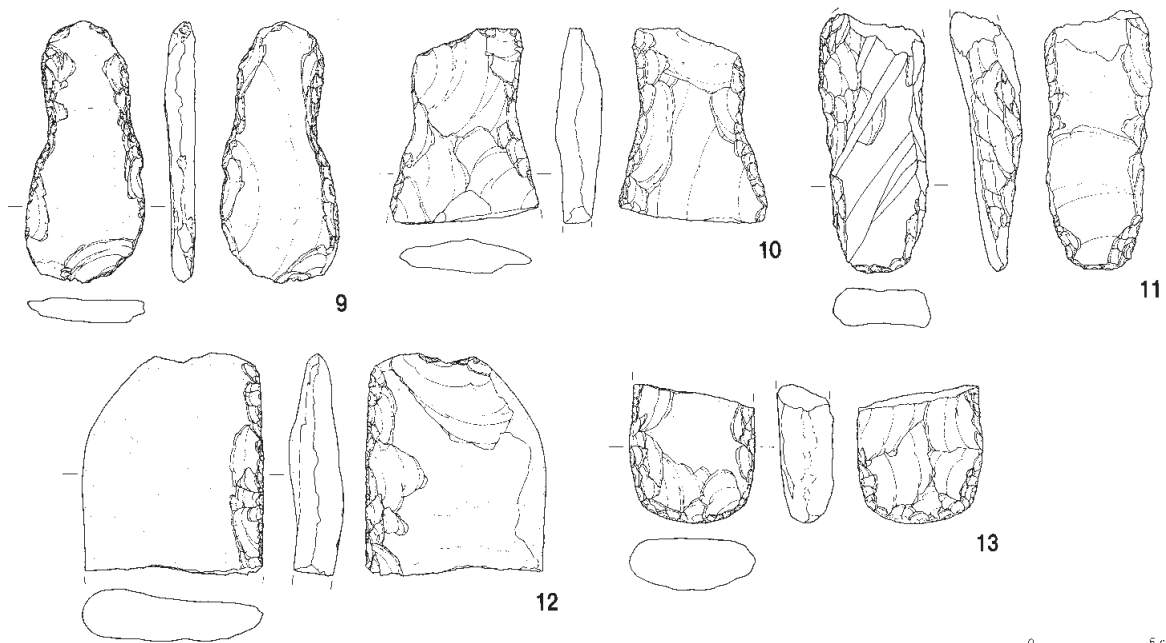
138 J



141 J



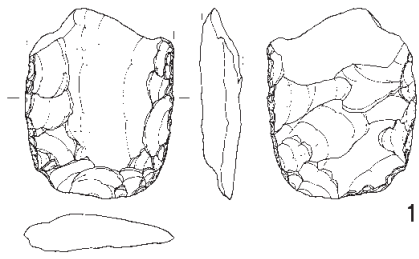
142 J



0 5 cm

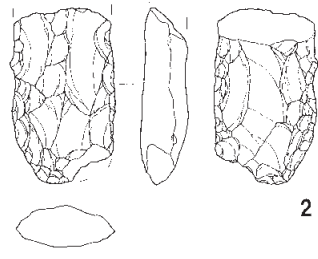
第324図 住居跡出土石器13 (1/3)

143 J



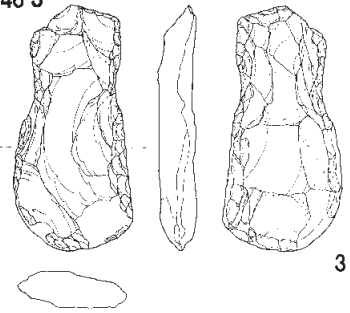
1

144 J



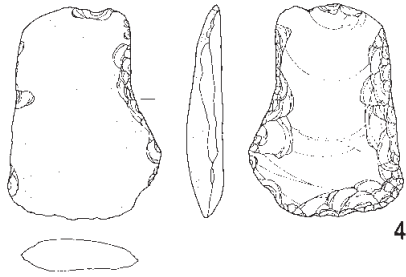
2

146 J

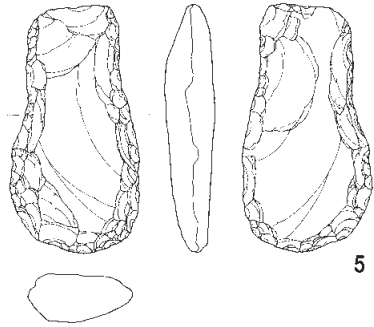


3

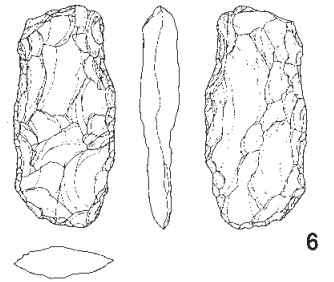
147 J



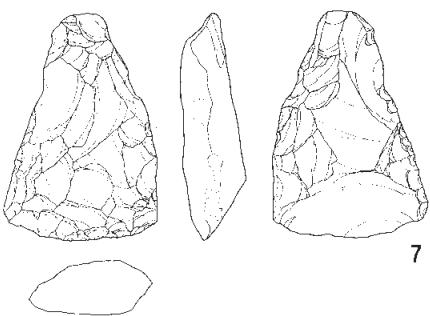
4



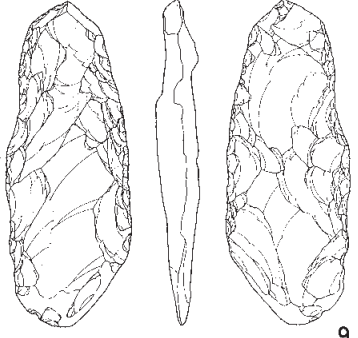
5



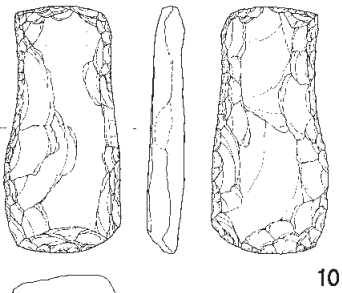
6



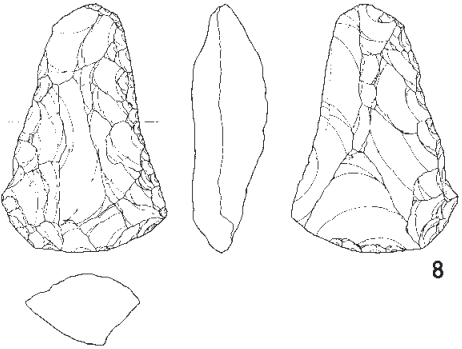
7



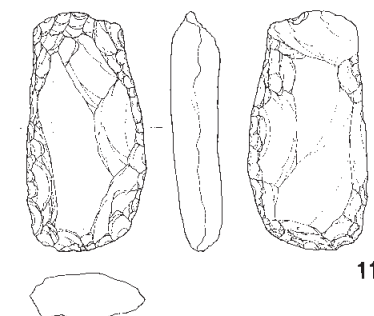
9



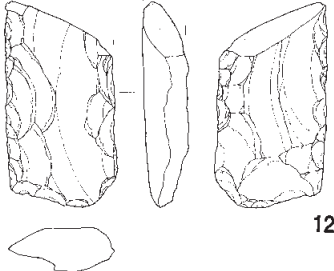
10



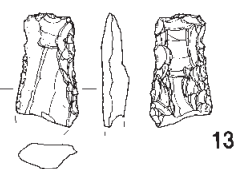
8



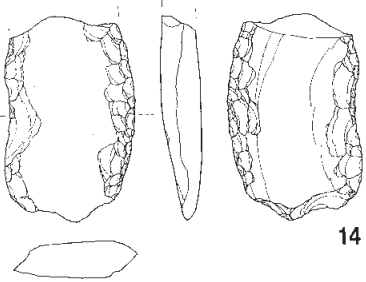
11



12



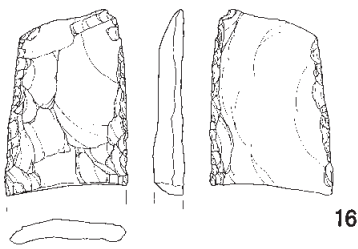
13



14



15

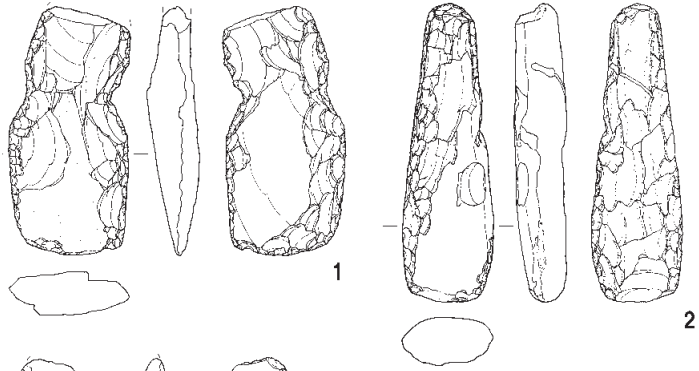


16

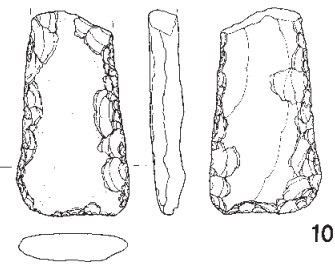
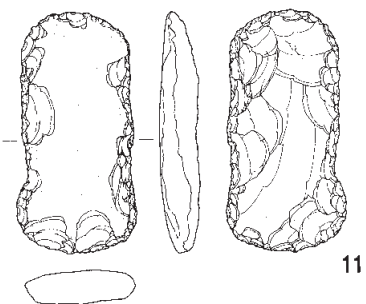
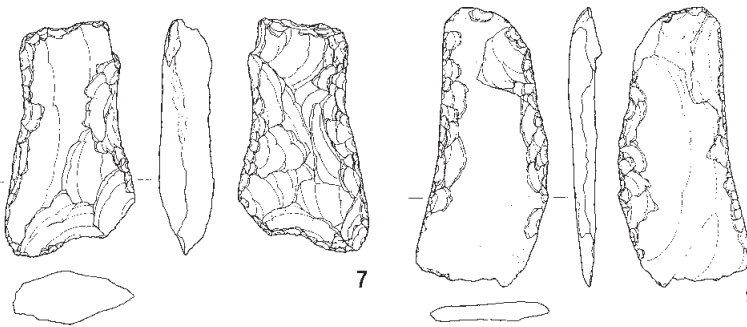
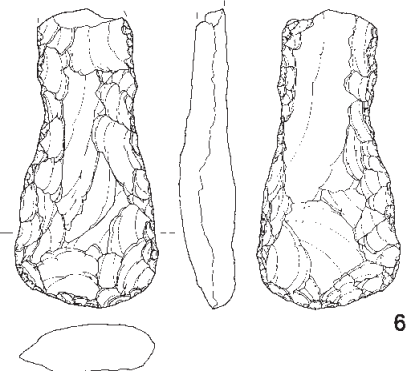
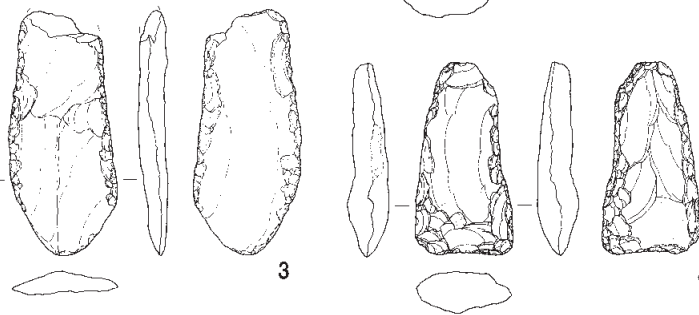
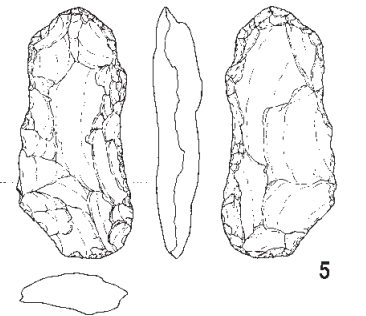


第325図 住居跡出土石器14 (1/3)

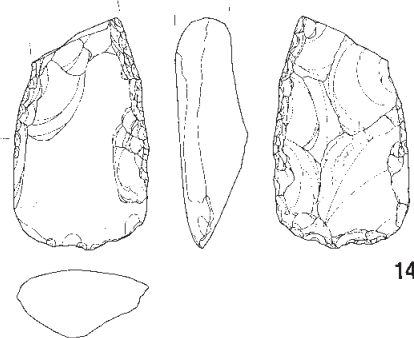
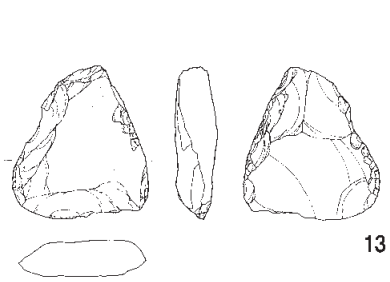
148 J



149 J

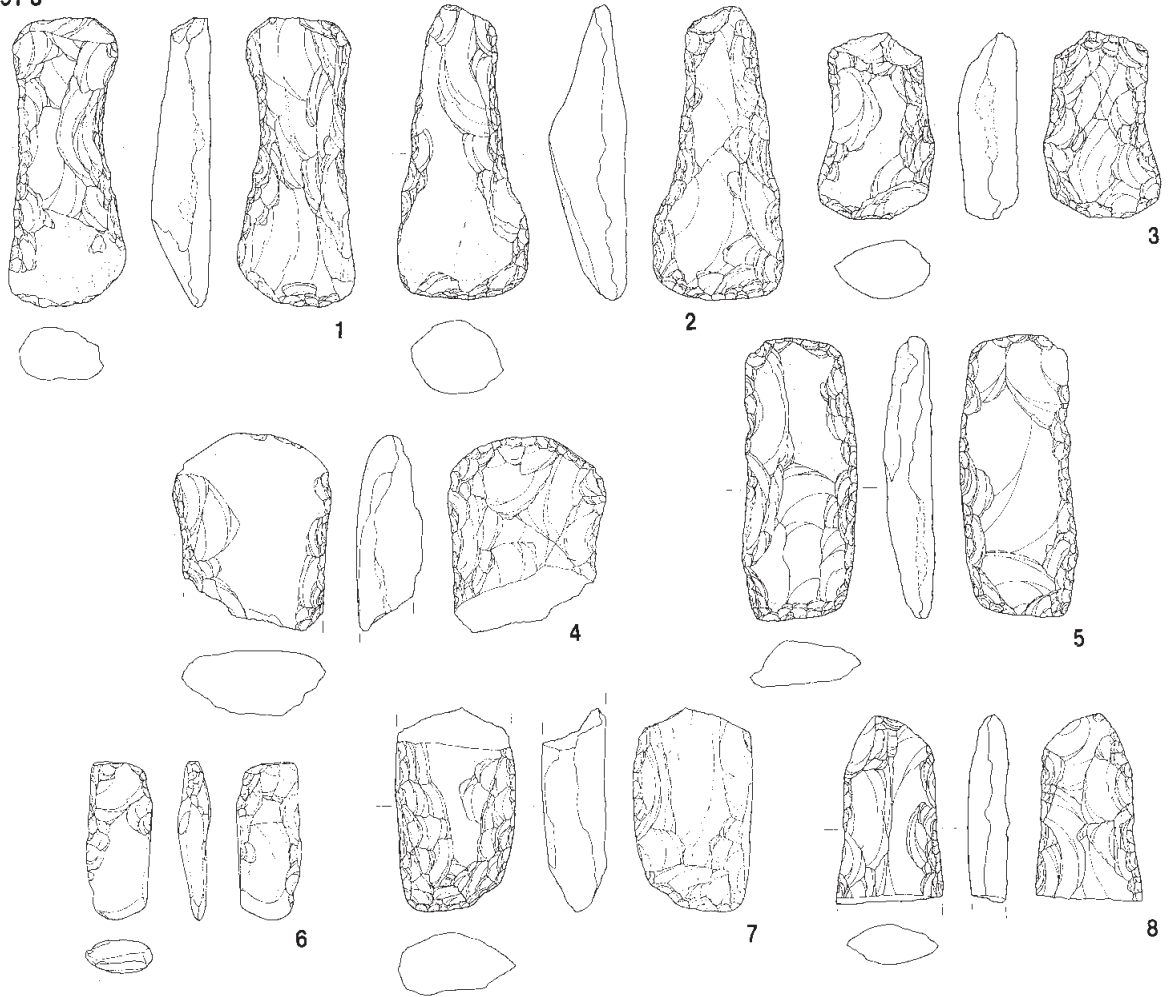


150 J

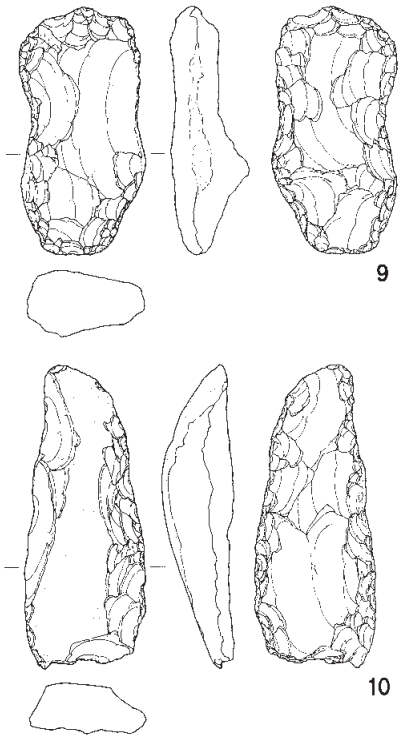


第326図 住居跡出土石器15 (1/3)

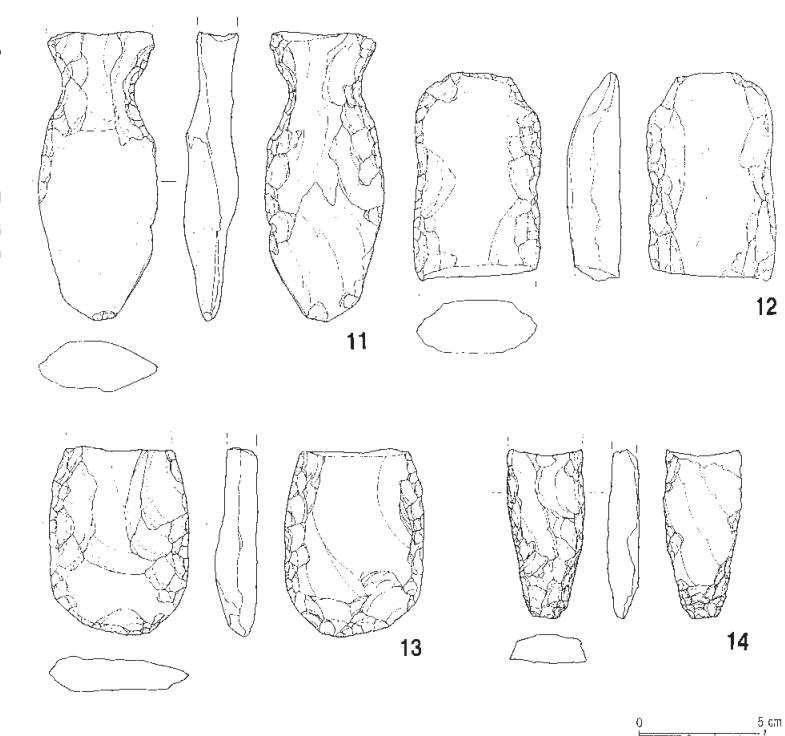
151 J



152 J



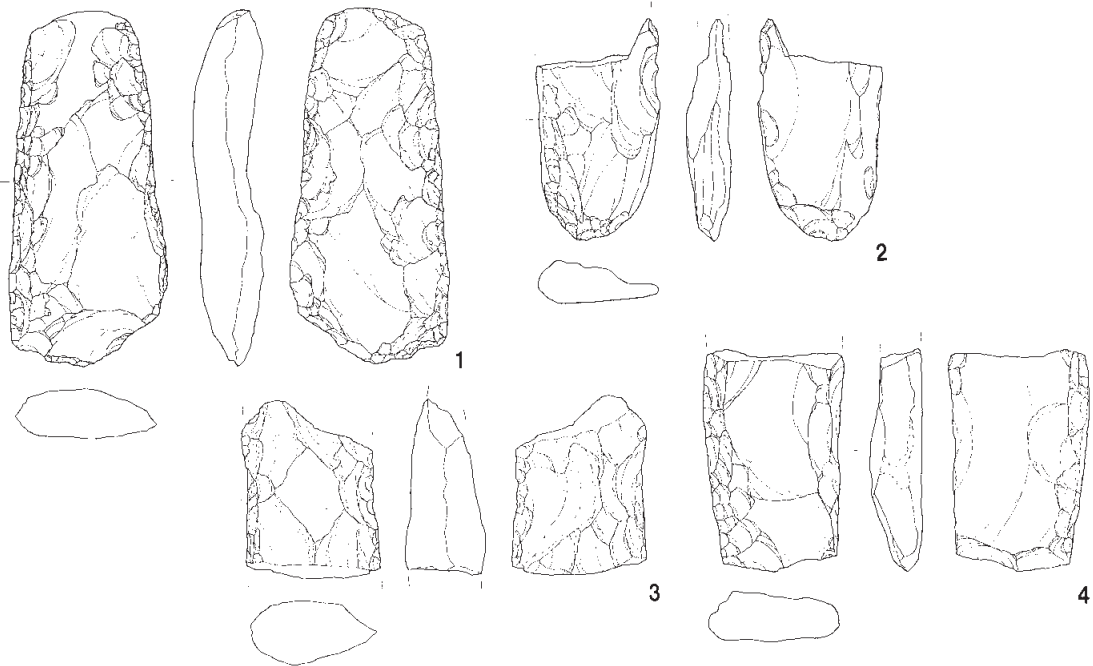
153 J



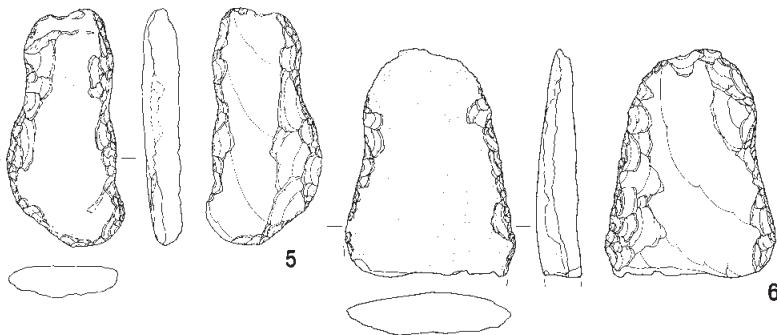
0 5 cm

第327図 住居跡出土石器16 (1/3)

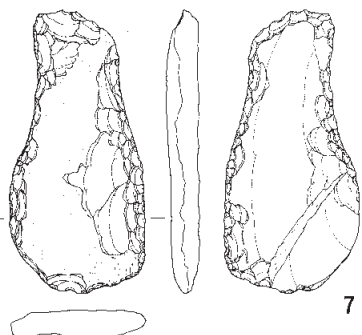
153 J



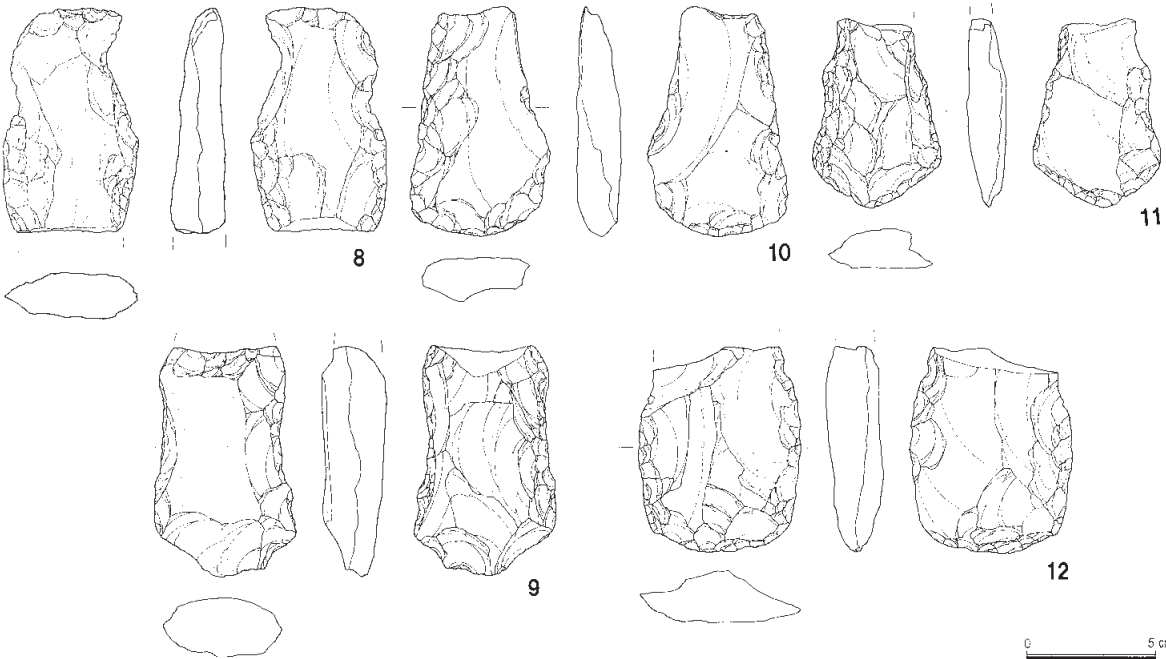
154 J



155 J

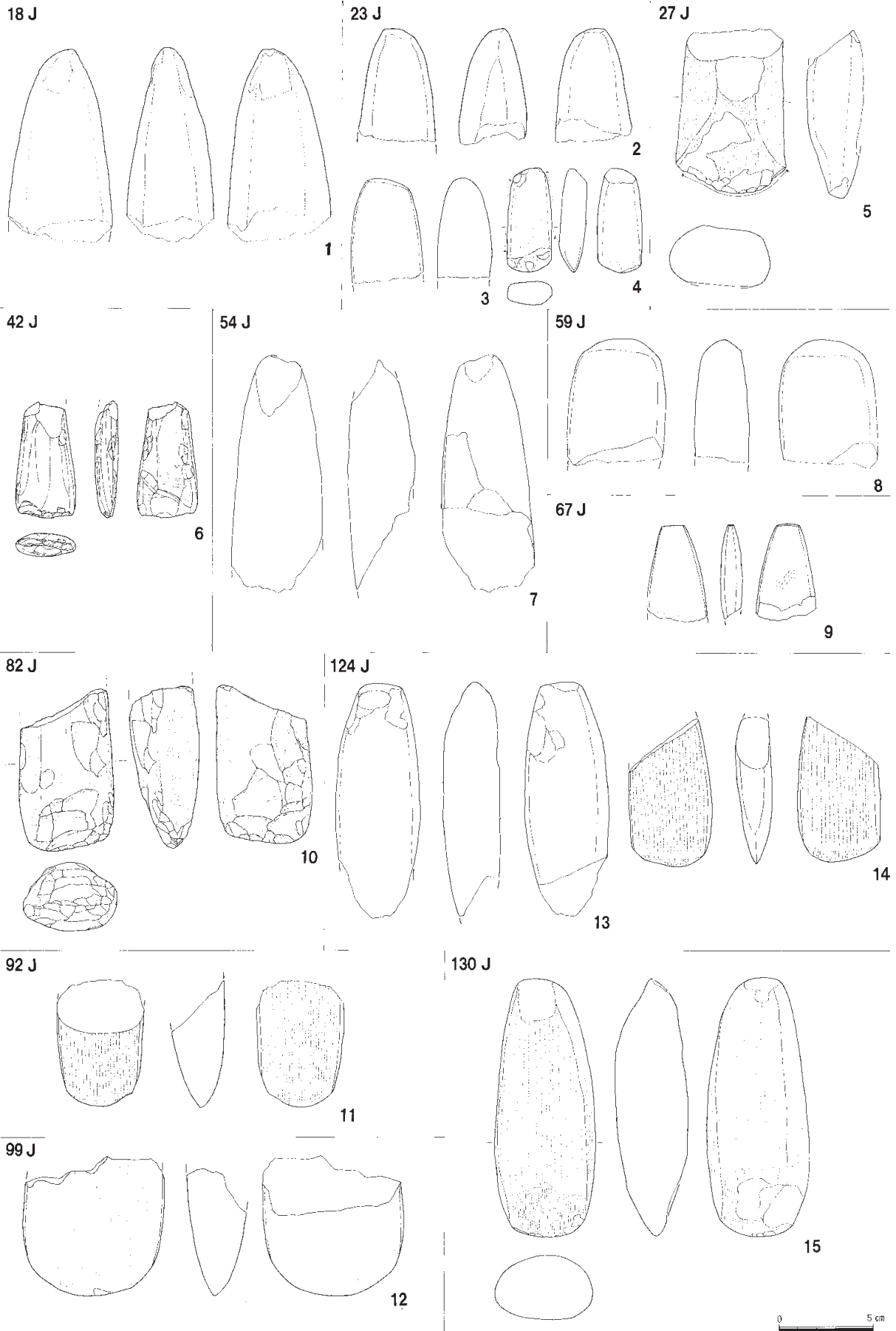


156 J



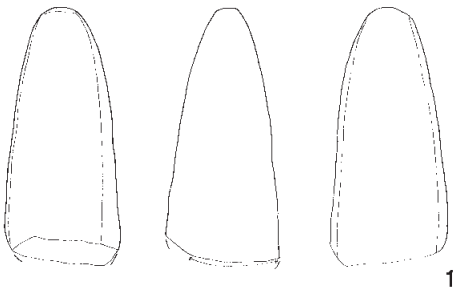
0 5 cm

第328図 住居跡出土石器17 (1/3)

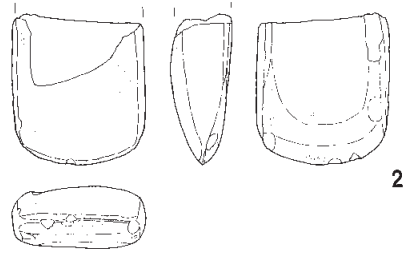


第329図 住居跡出土石器18 (1/3)

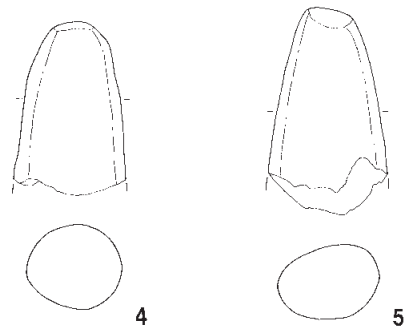
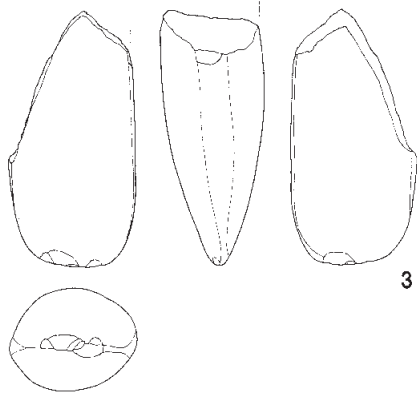
138 J



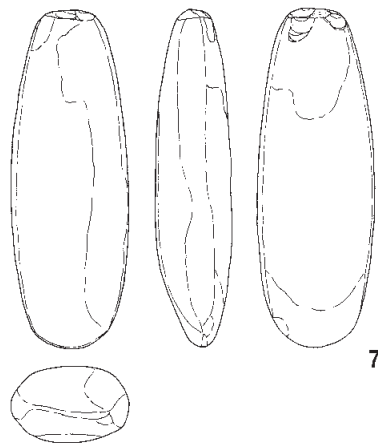
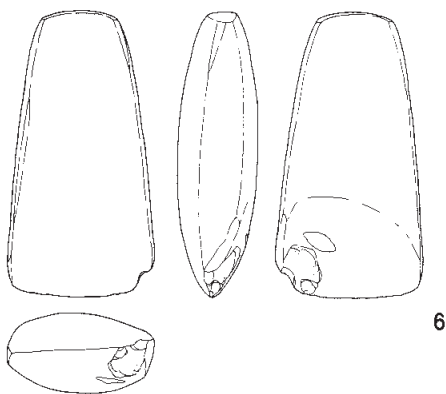
144 J



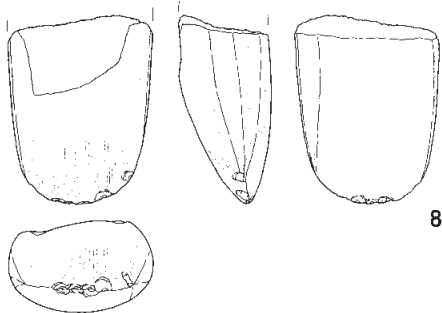
147 J



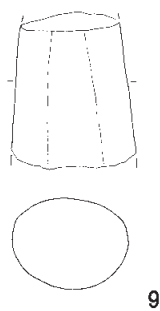
148 J



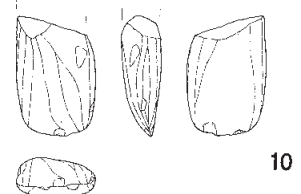
149 J



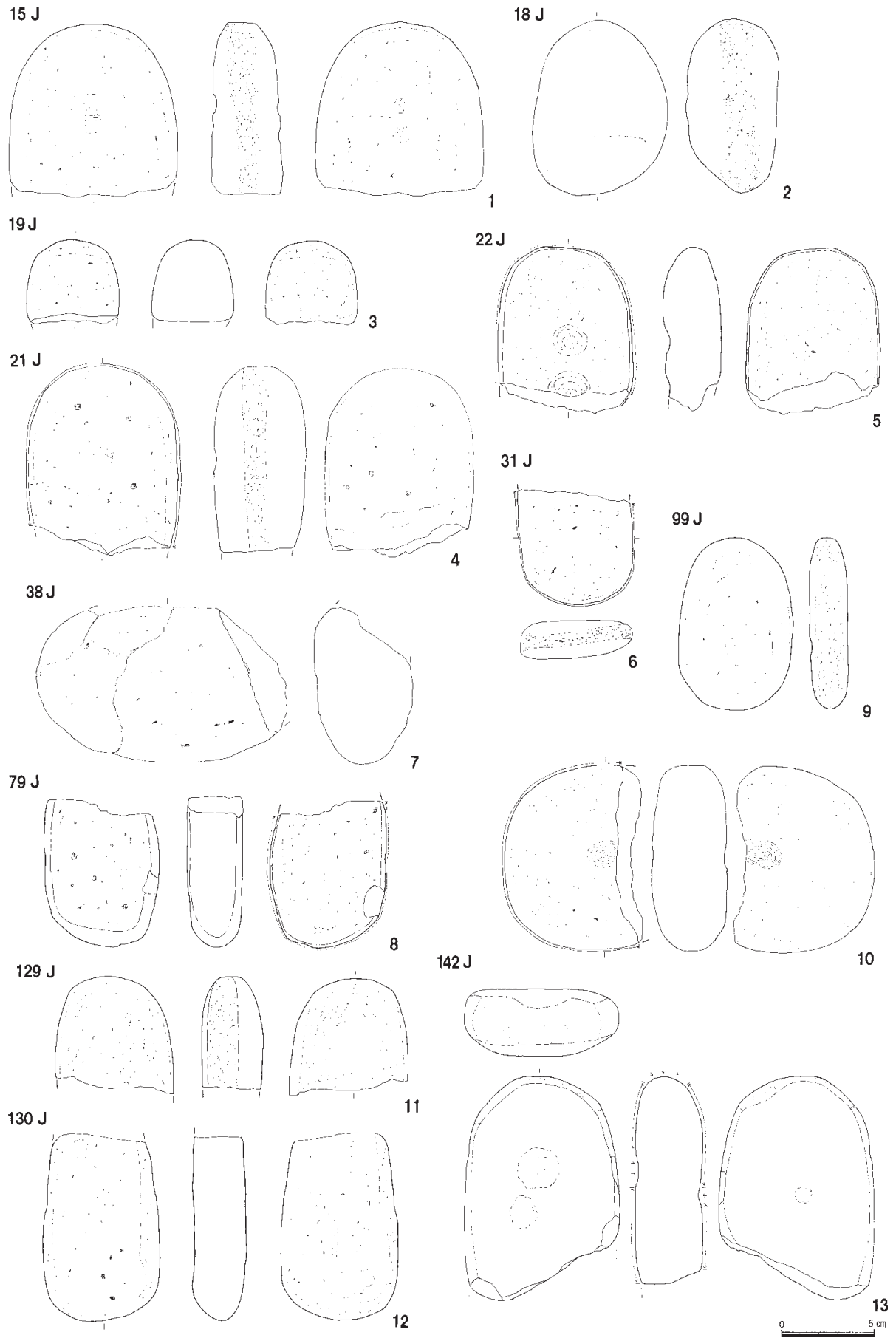
151 J



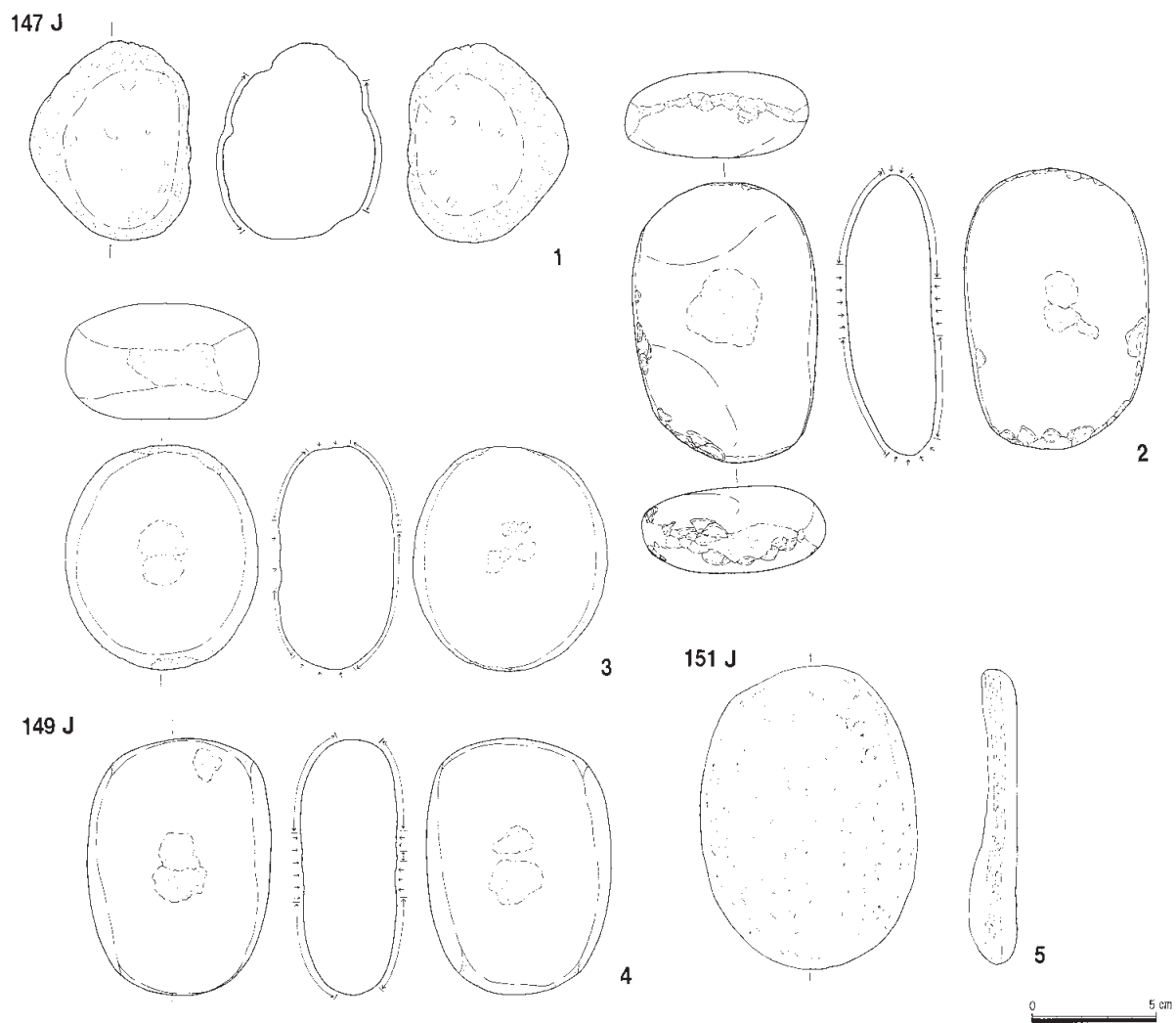
154 J



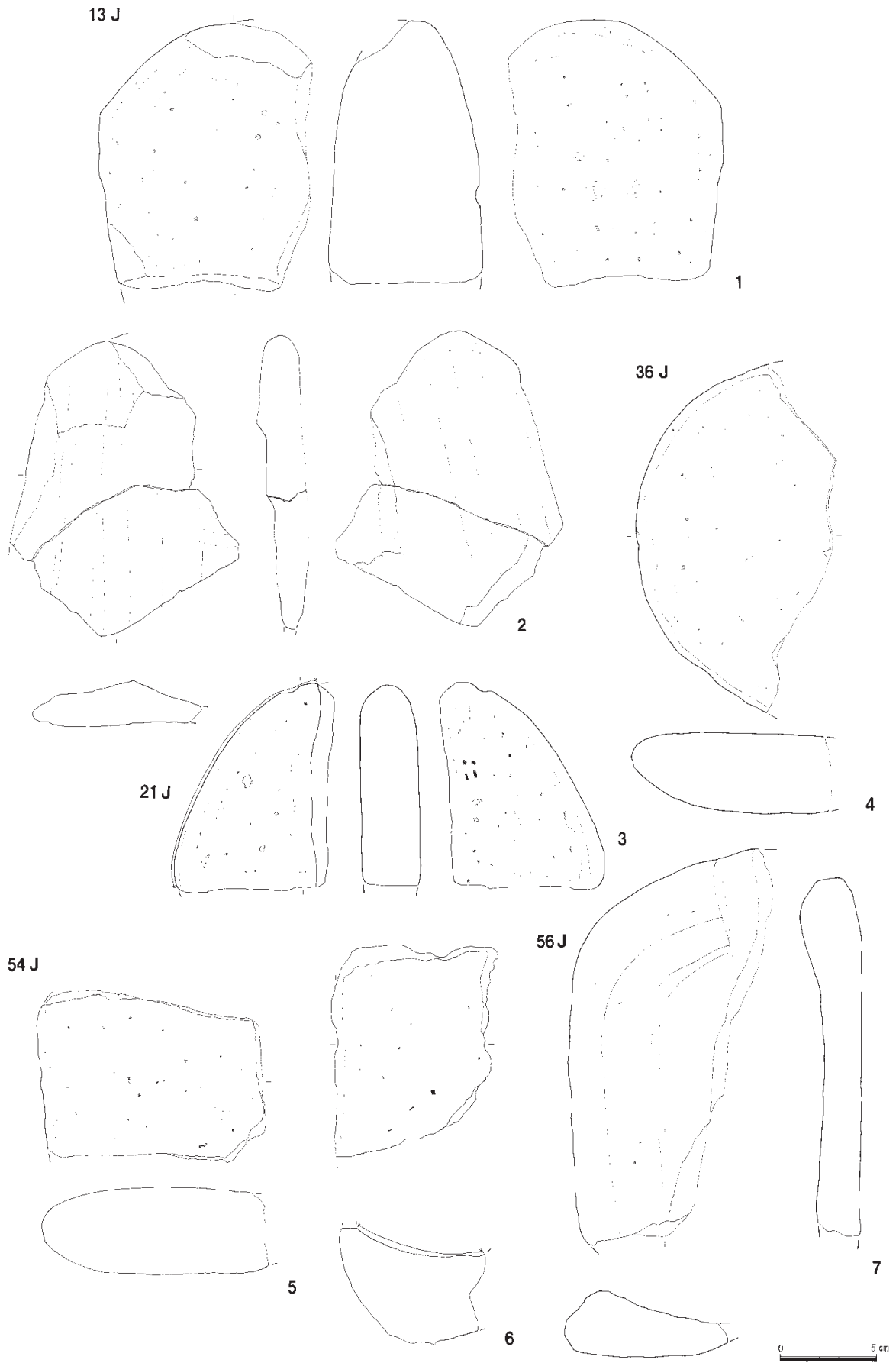
第330図 住居跡出土石器19 (1/3)



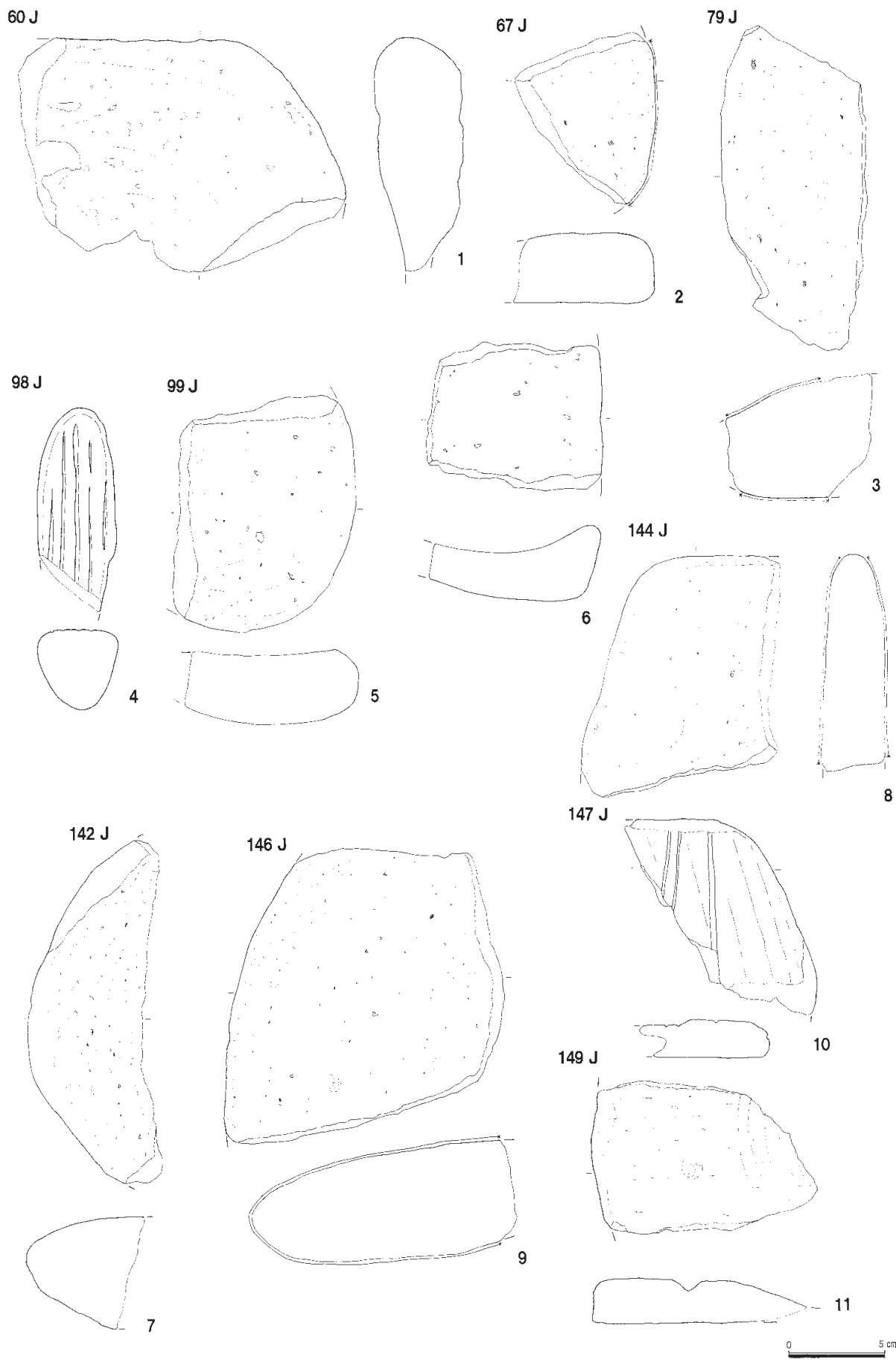
第331図 住居跡出土石器20 (1/3)



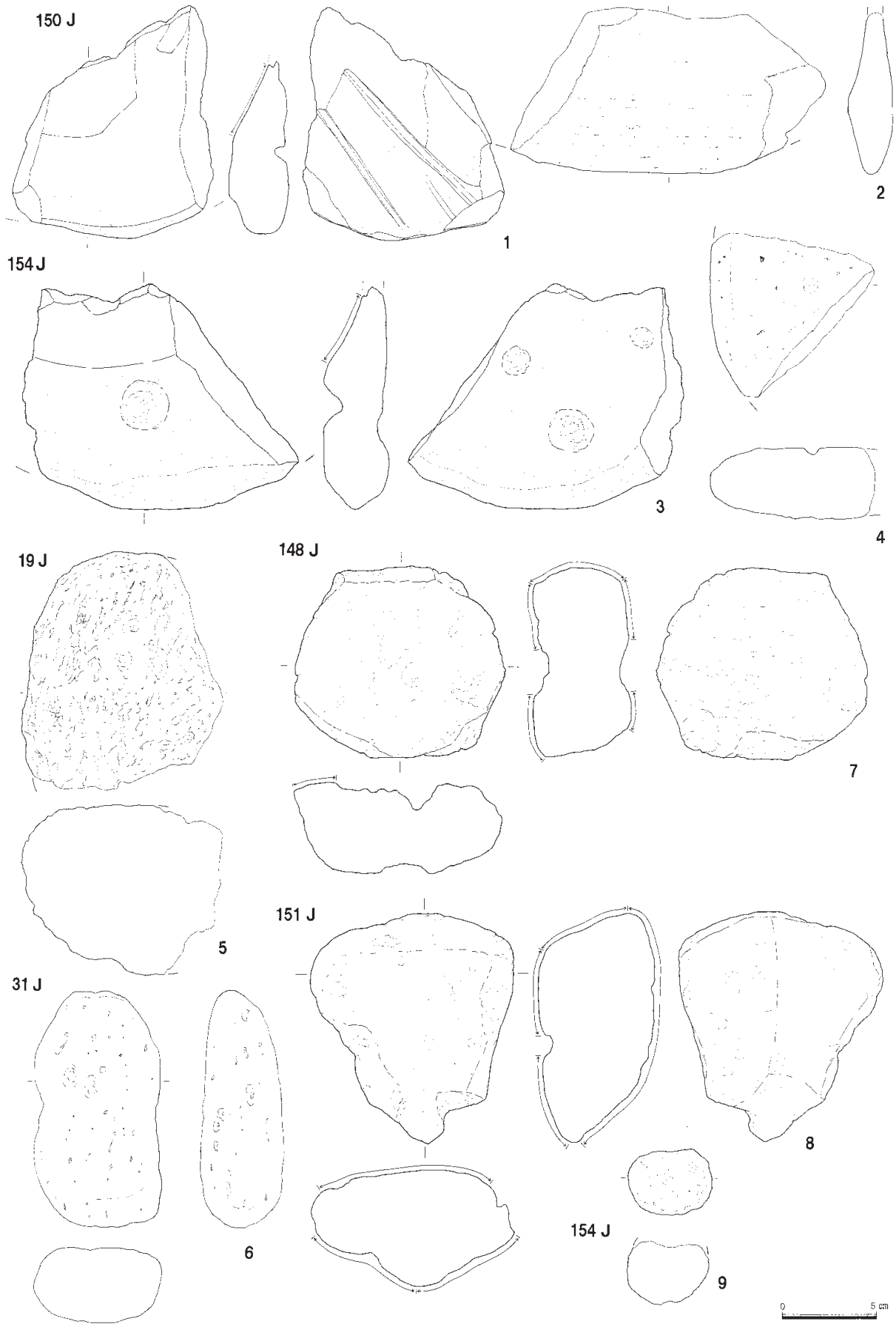
第332図 住居跡出土石器21 (1/3)



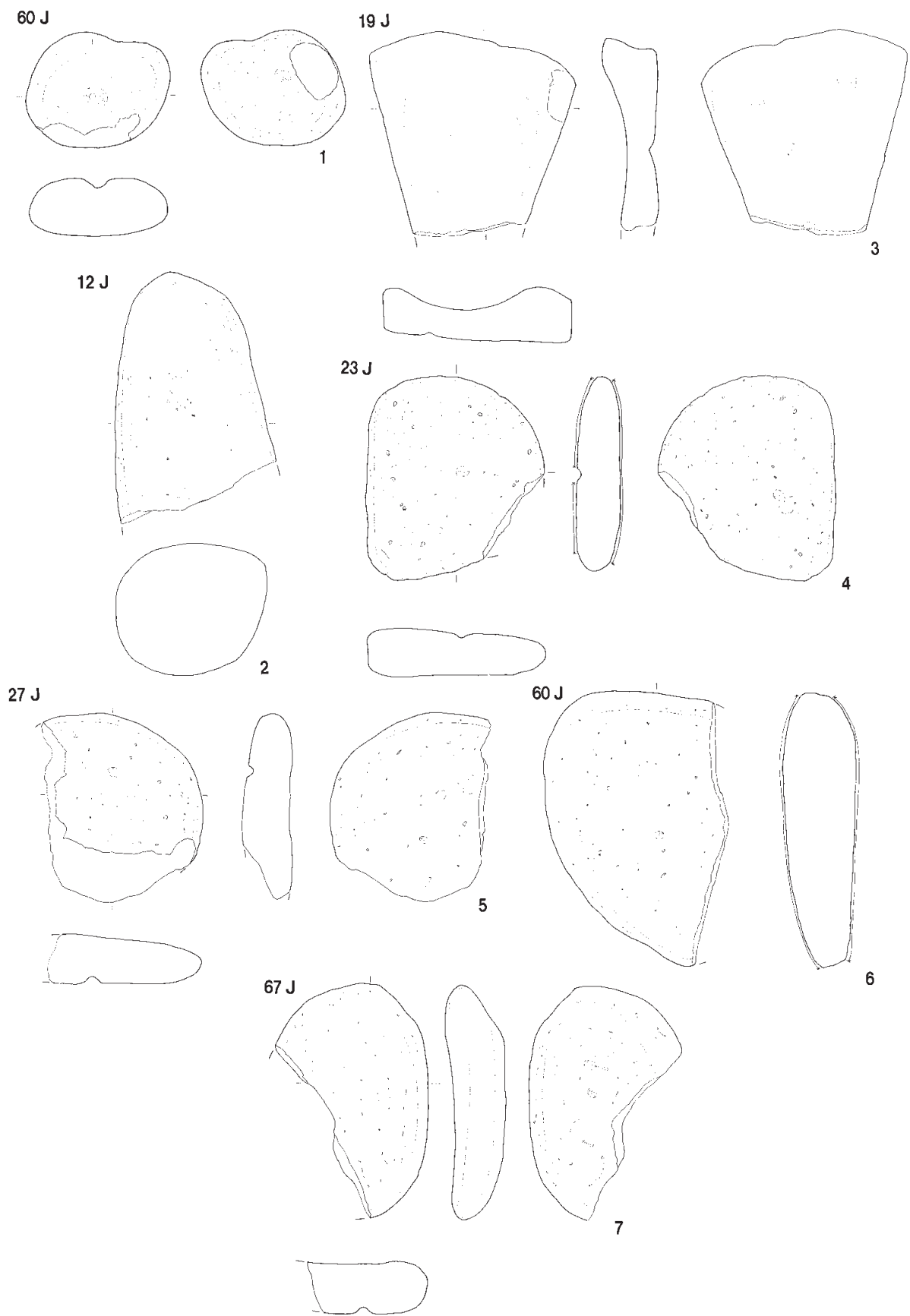
第333図 住居跡出土石器22 (1/3)



第334図 住居跡出土石器23 (1/3)

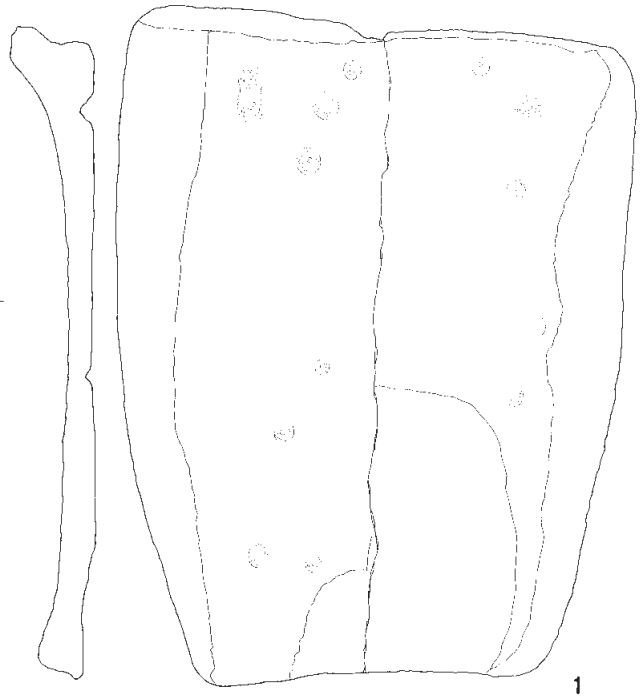
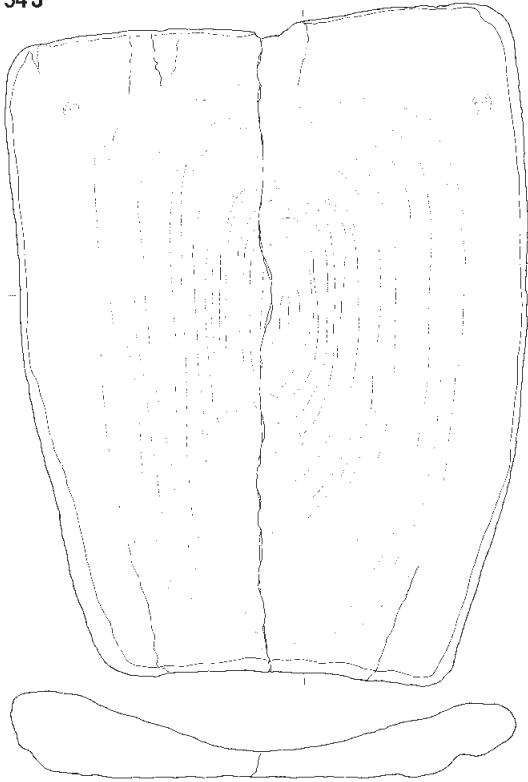


第335図 住居跡出土石器24 (1/3)



第336図 住居跡出土石器25 (1/6)

54 J



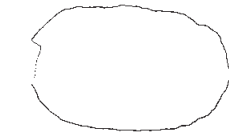
23 J



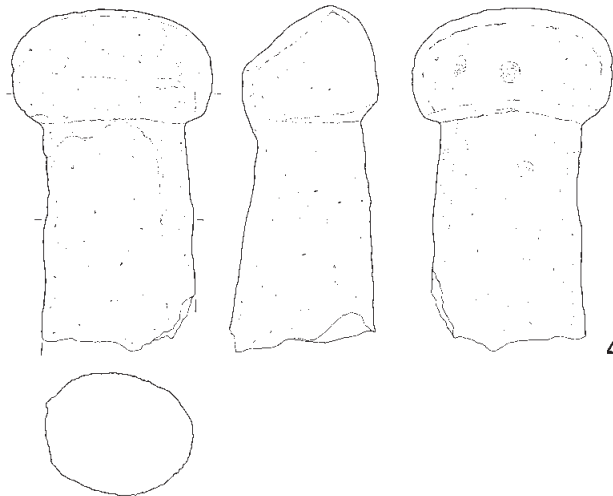
60 J



12 J



3

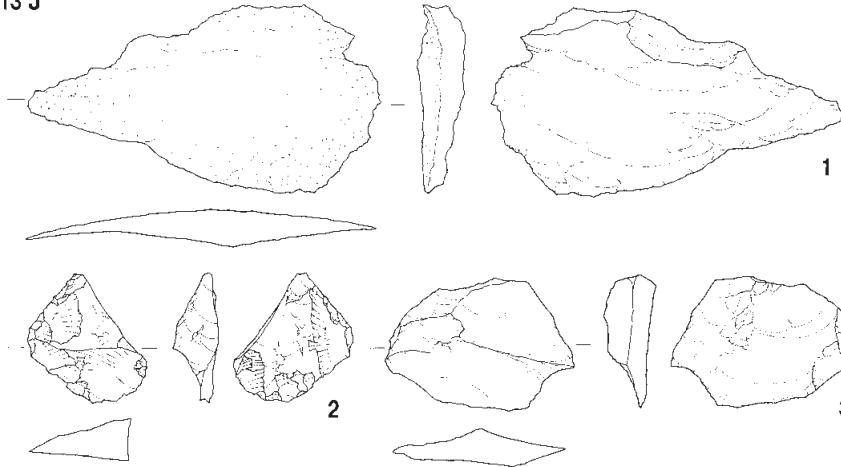


4

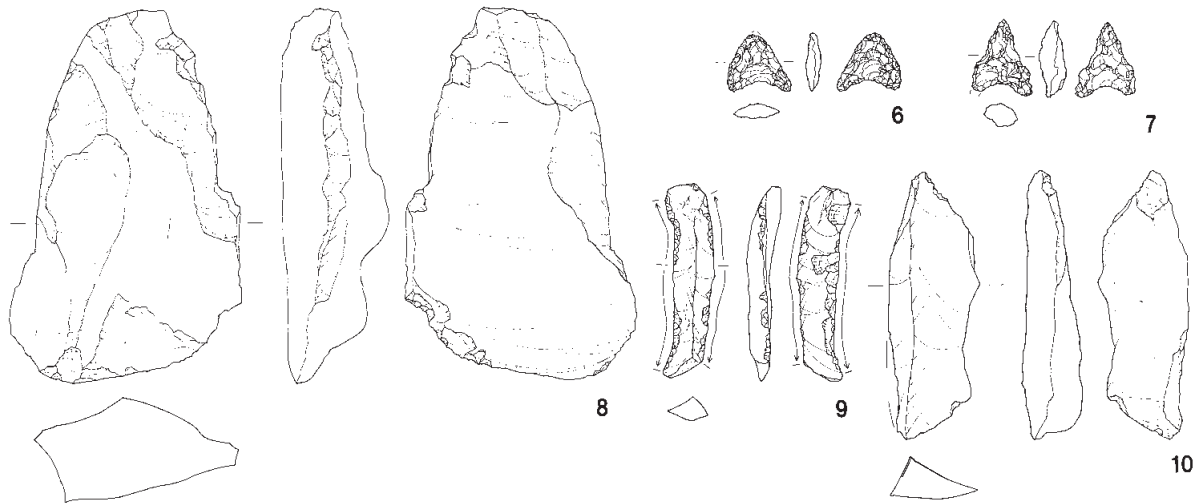
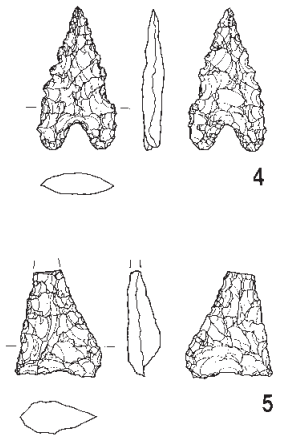


第337図 住居跡出土石器26 (1/6)

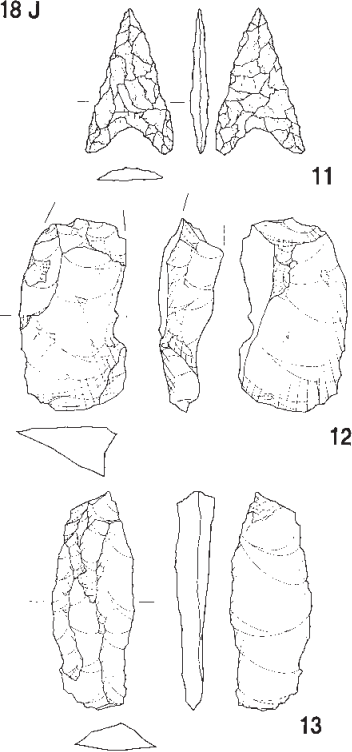
13 J



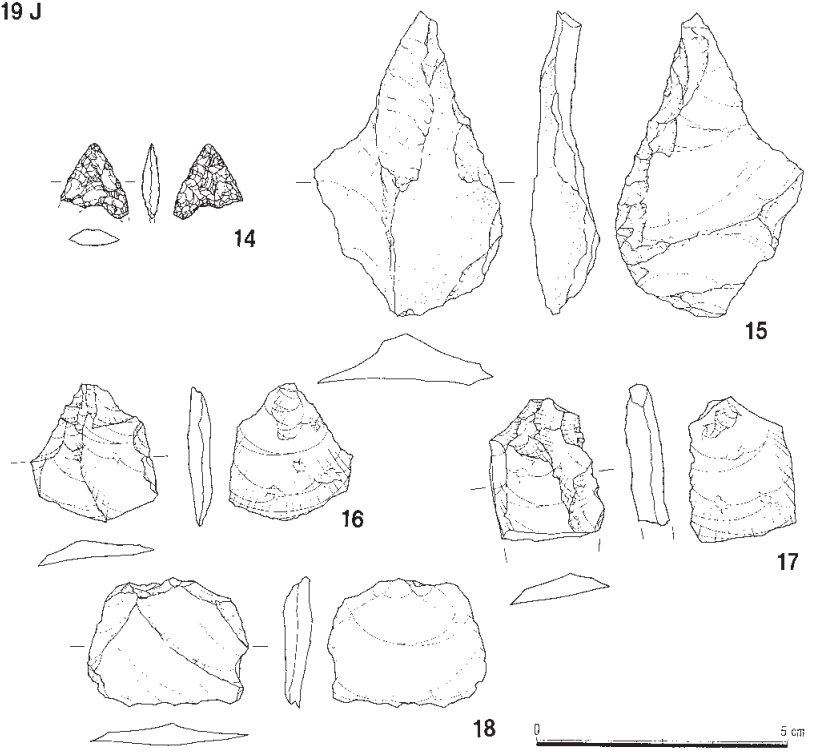
15 J



18 J

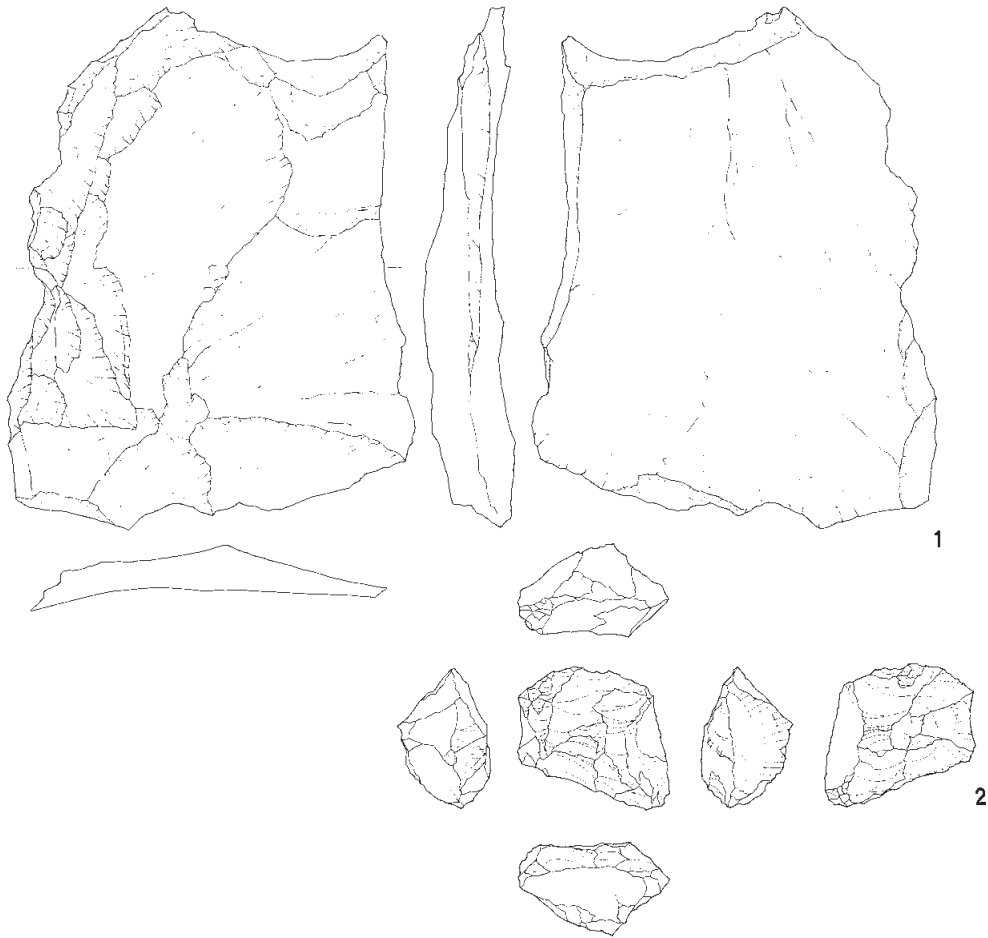


19 J

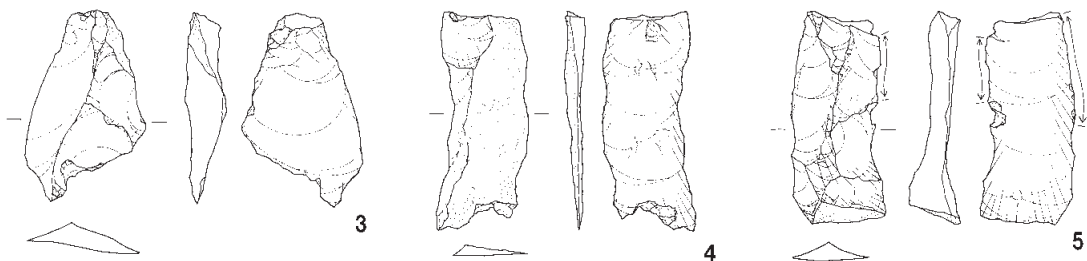


第338図 住居跡出土石器27 (2/3)

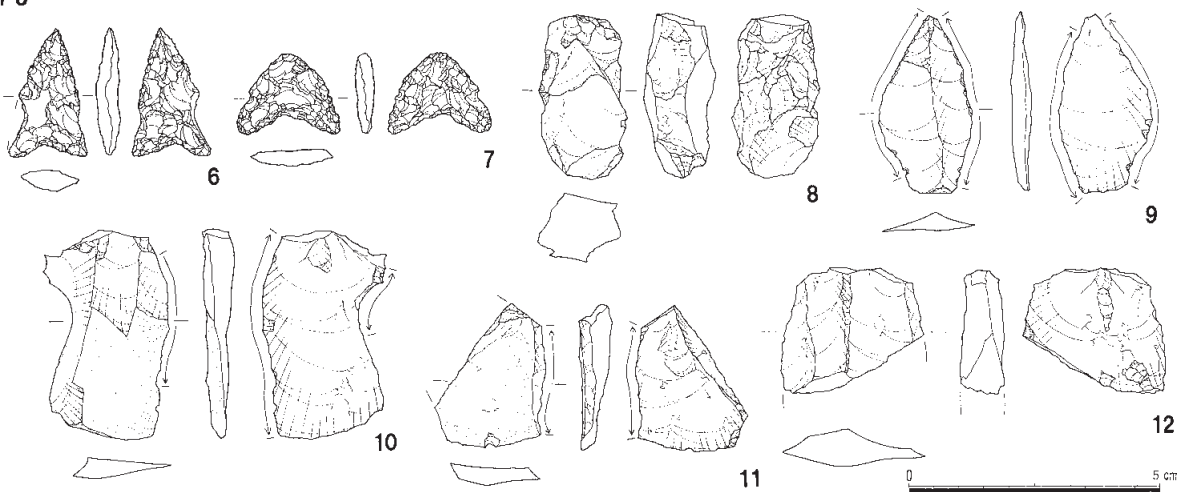
20 J



25 J

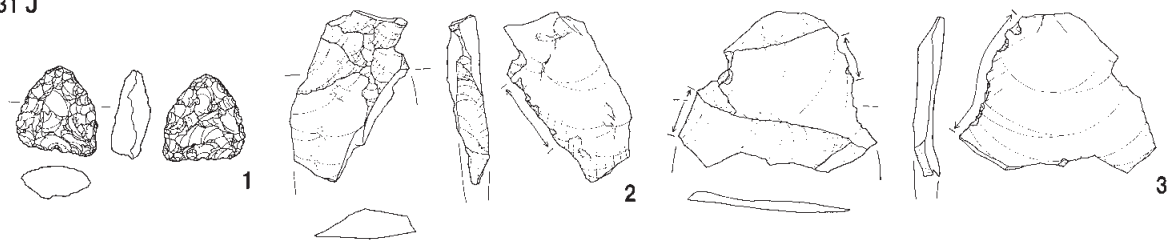


27 J



第339図 住居跡出土石器28 (2/3)

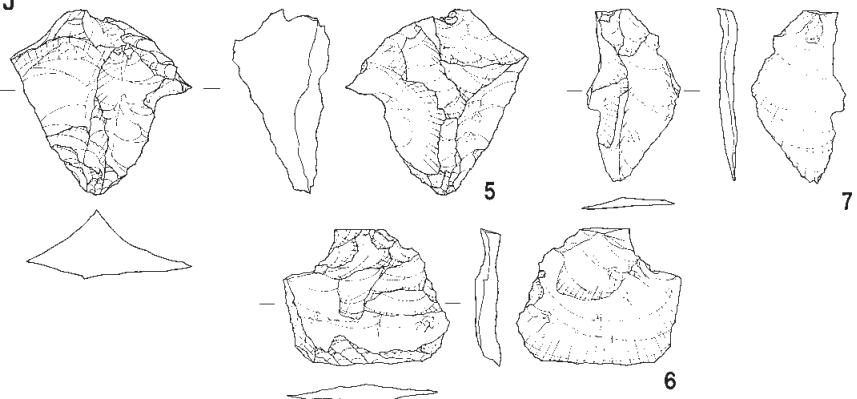
31 J



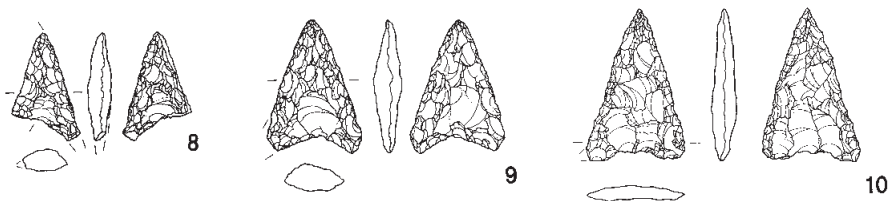
34 J



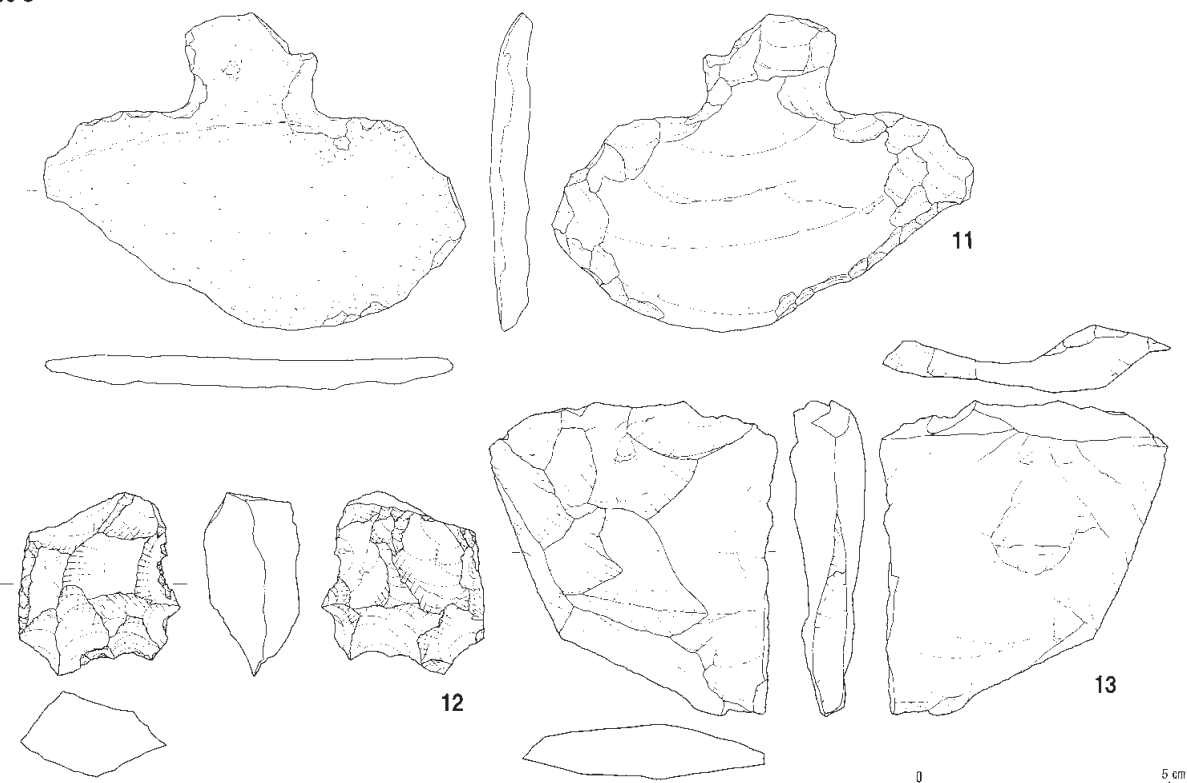
36 J



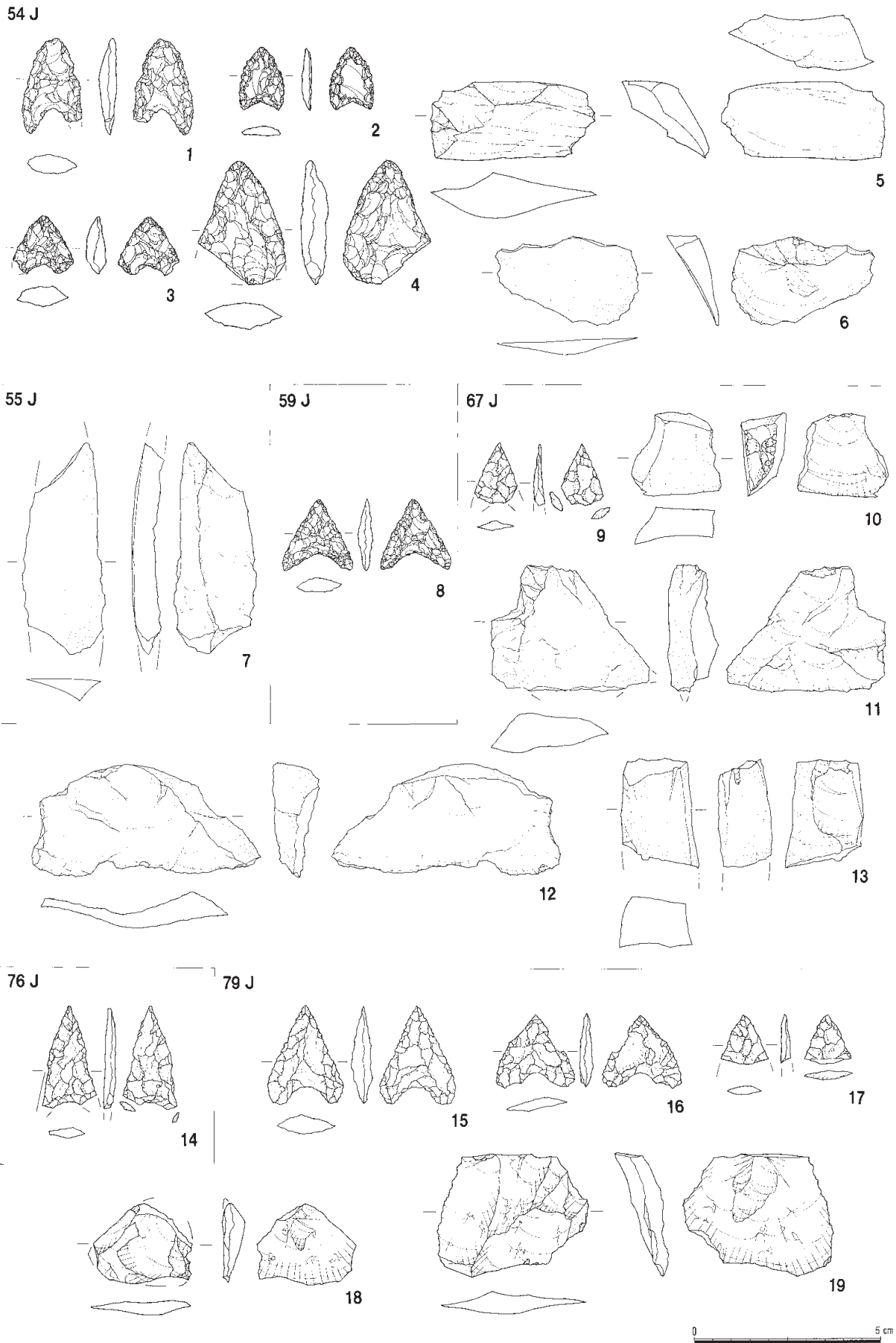
49 J



50 J

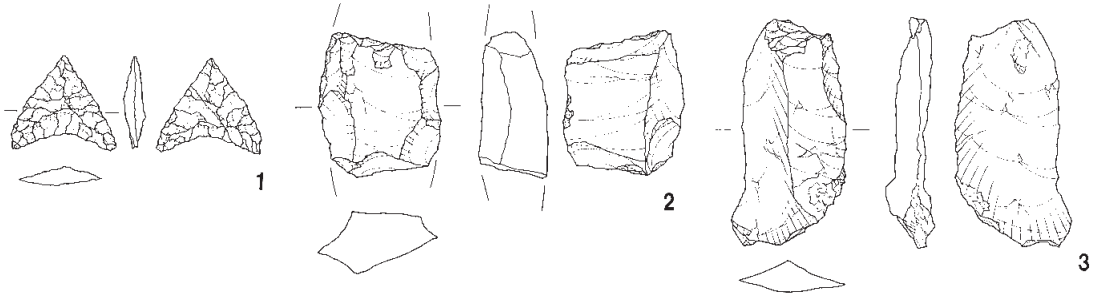


第340図 住居跡出土石器29 (2/3)

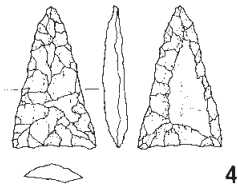


第341図 住居跡出土石器30 (2/3)

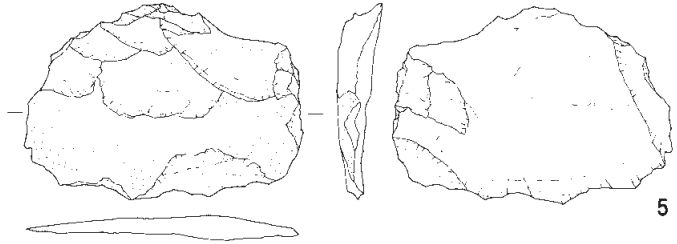
80 J



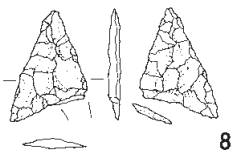
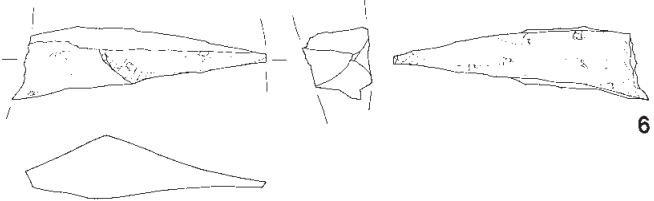
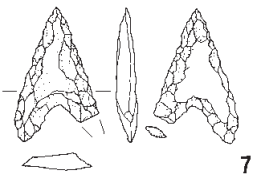
84 J



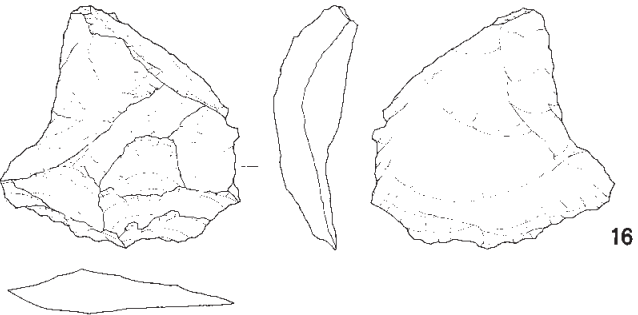
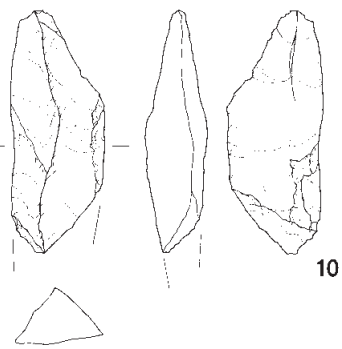
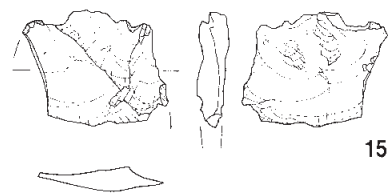
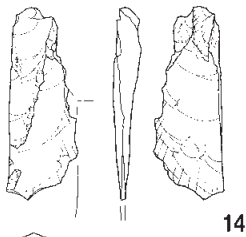
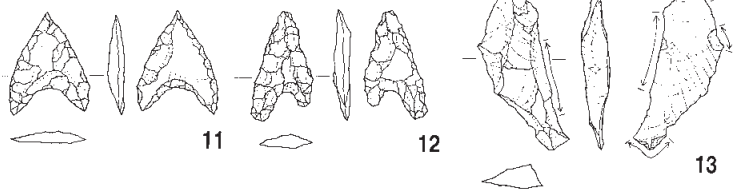
85 J



86 J

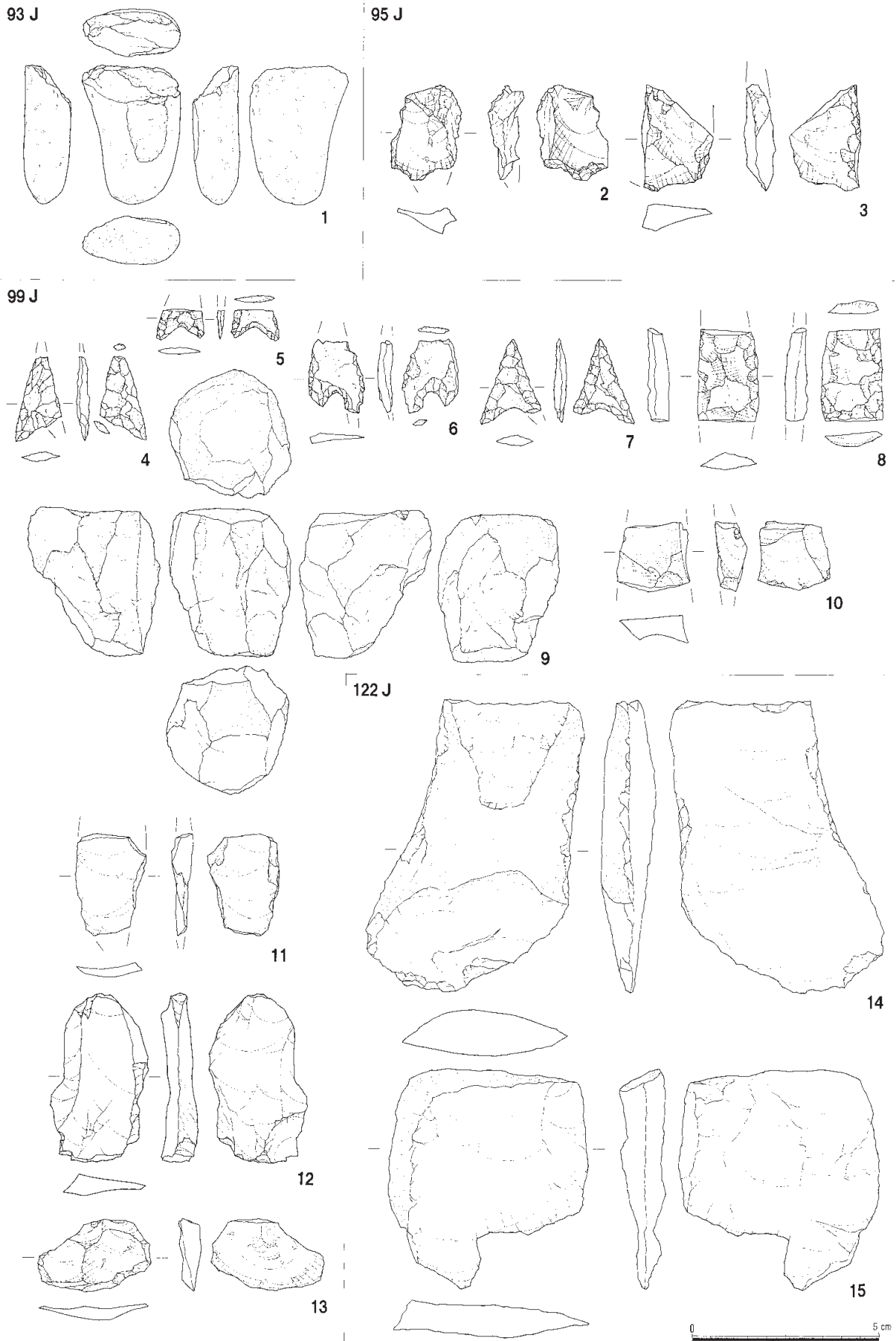


92 J

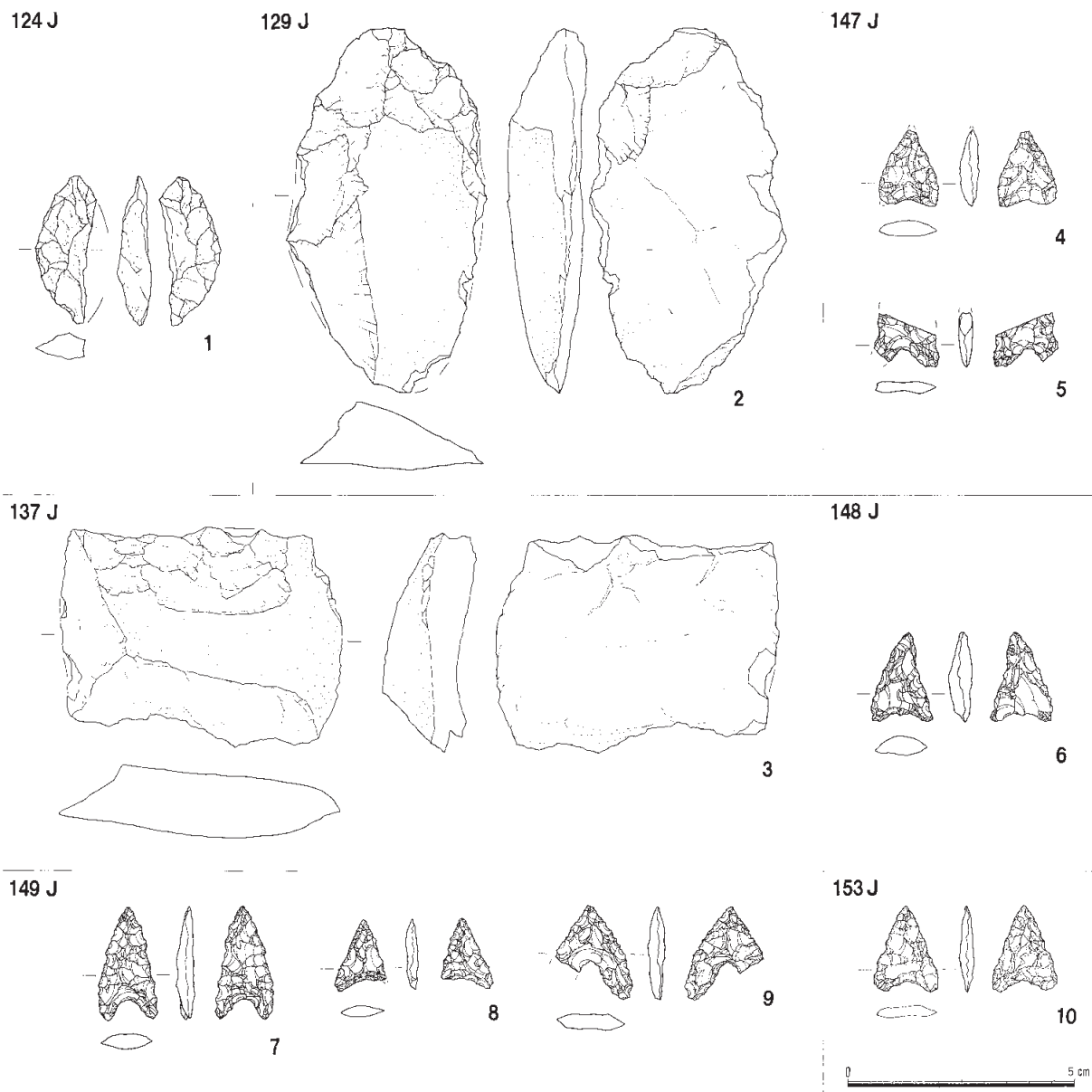


0 5 cm

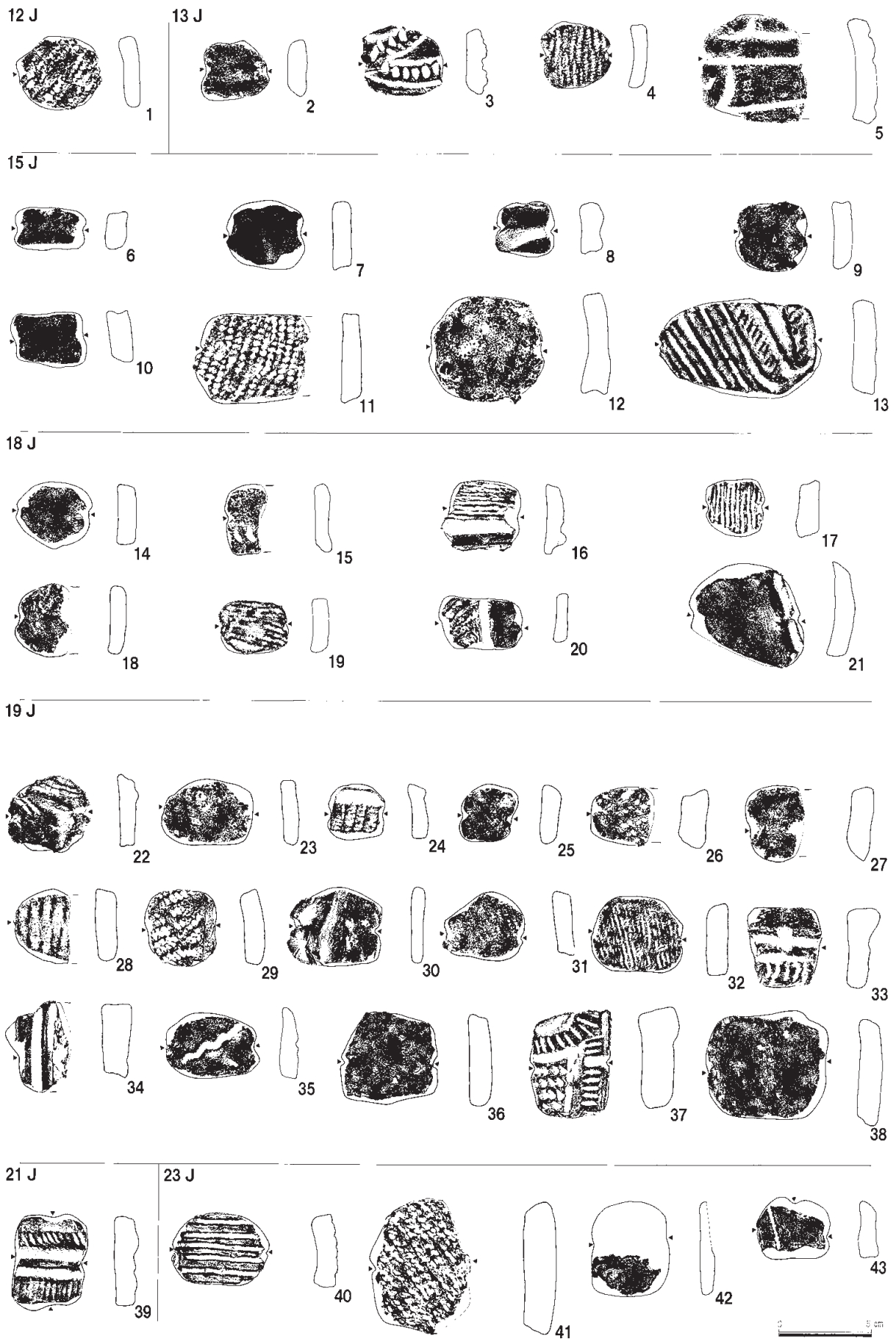
第342図 住居跡出土石器31 (2/3)



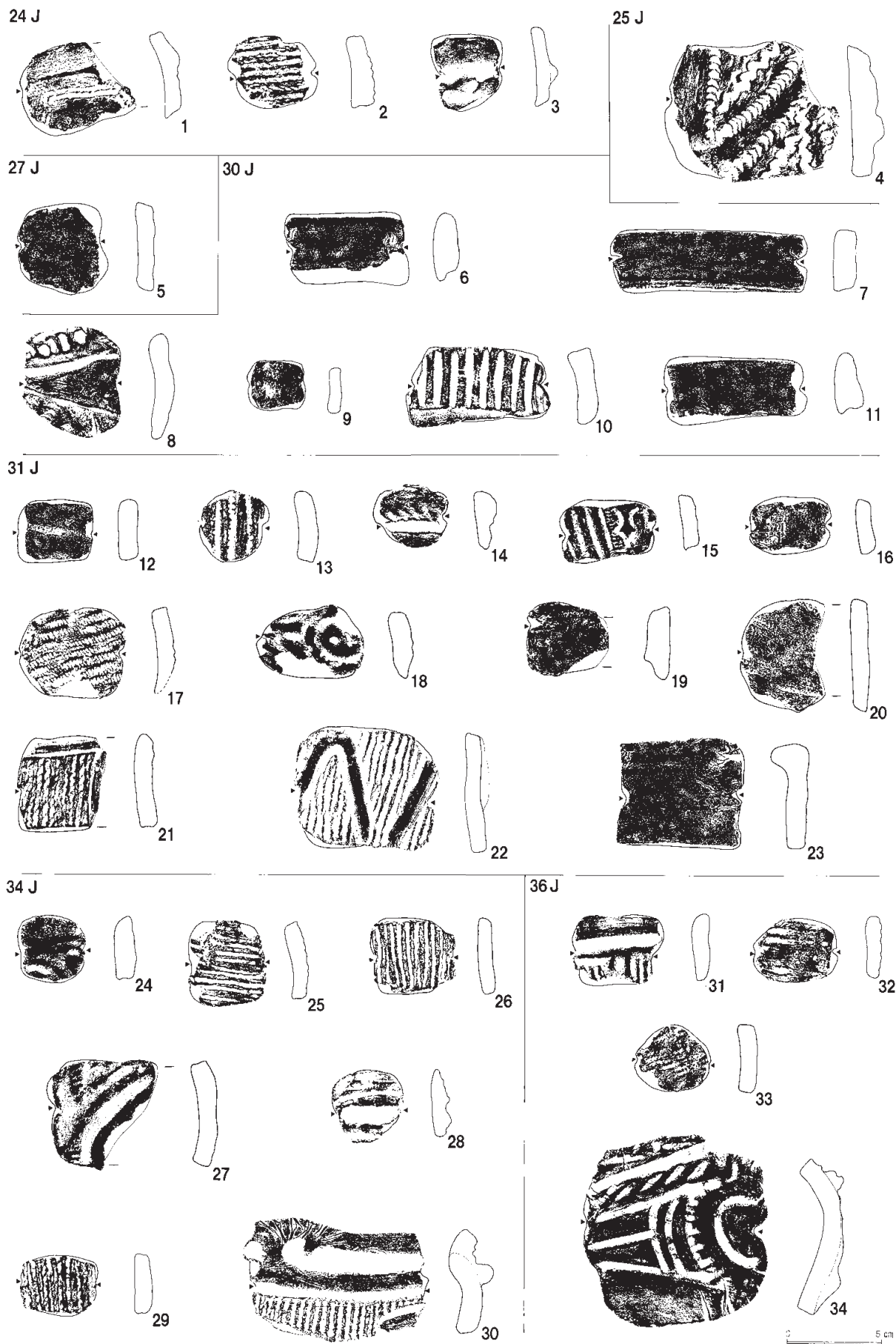
第343図 住居跡出土石器32 (2/3)



第344図 住居跡出土石器33 (2/3)

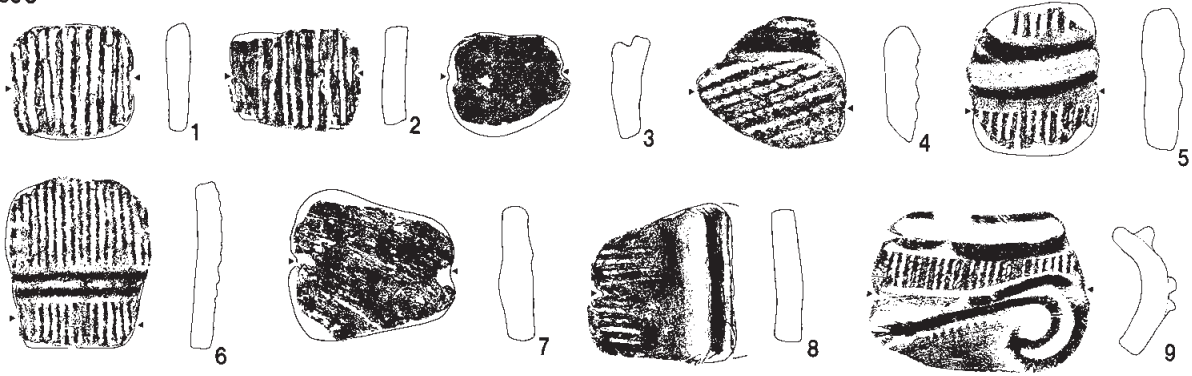


第345図 住居跡出土土製品 1 (12・13・15・18・19・21・23号住居跡) (1/3)

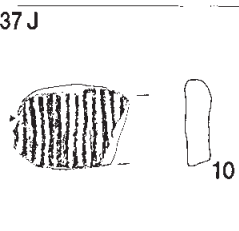


第346図 住居跡出土土製品 2 (24・25・27・30・31・34・36号住居跡) (1/3)

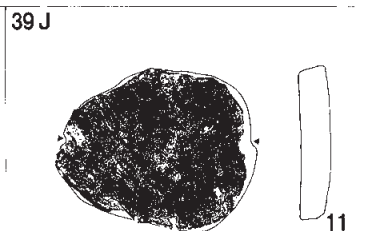
36 J



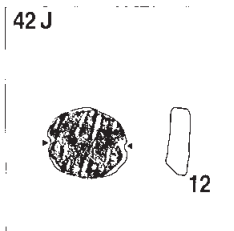
37 J



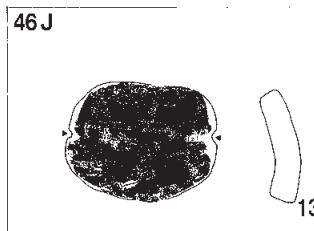
39 J



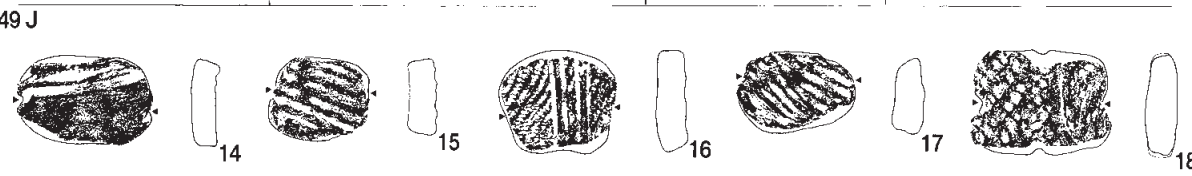
42 J



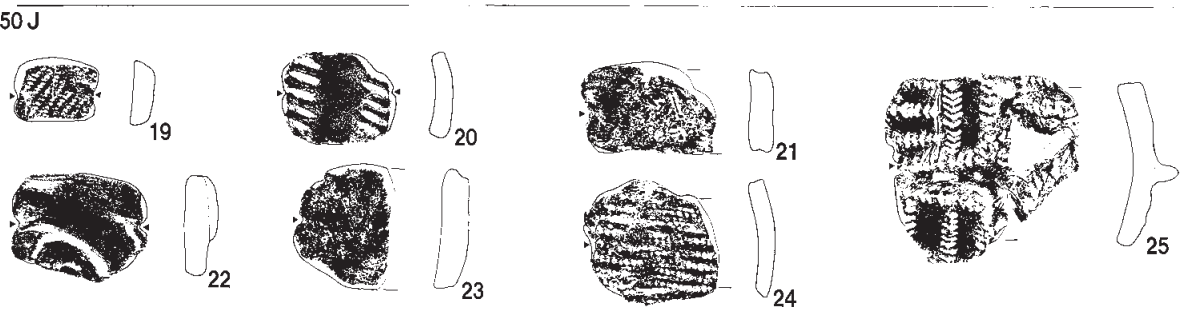
46 J



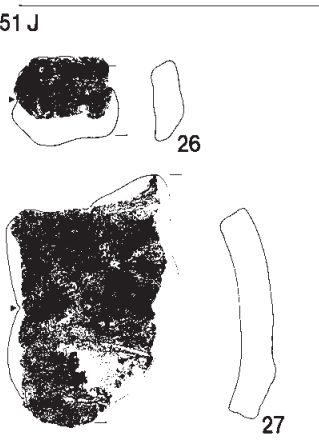
49 J



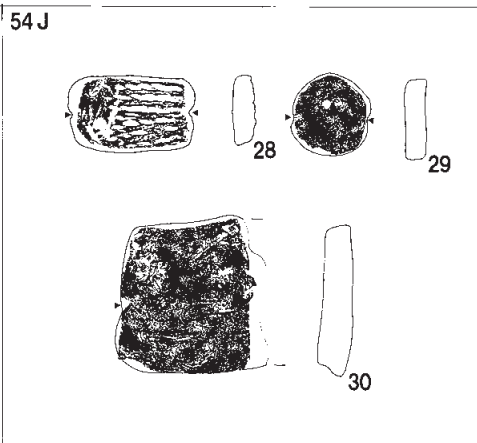
50 J



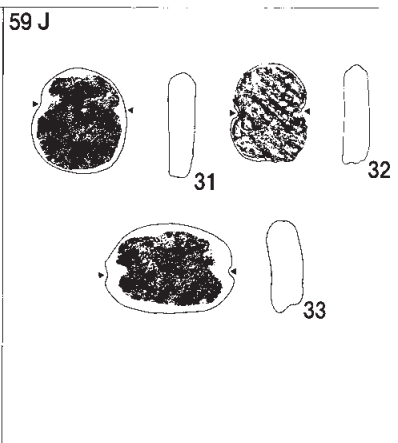
51 J



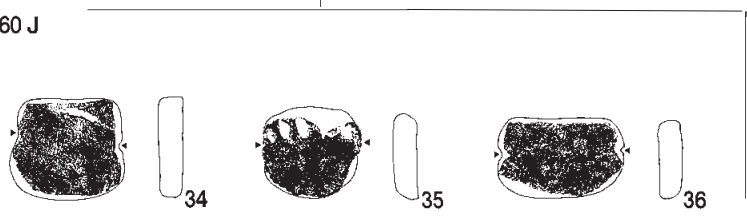
54 J



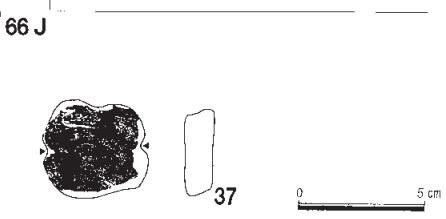
59 J



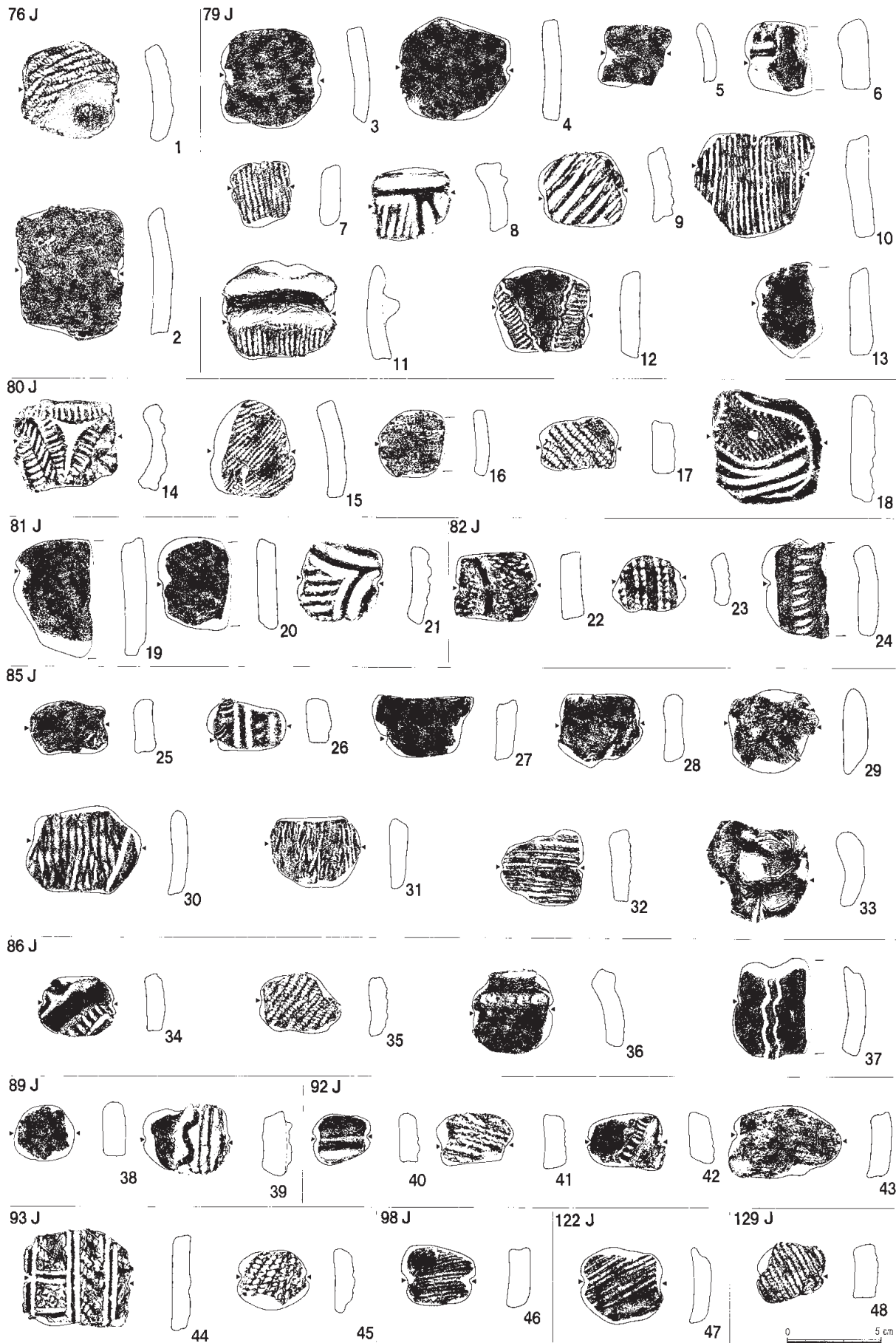
60 J



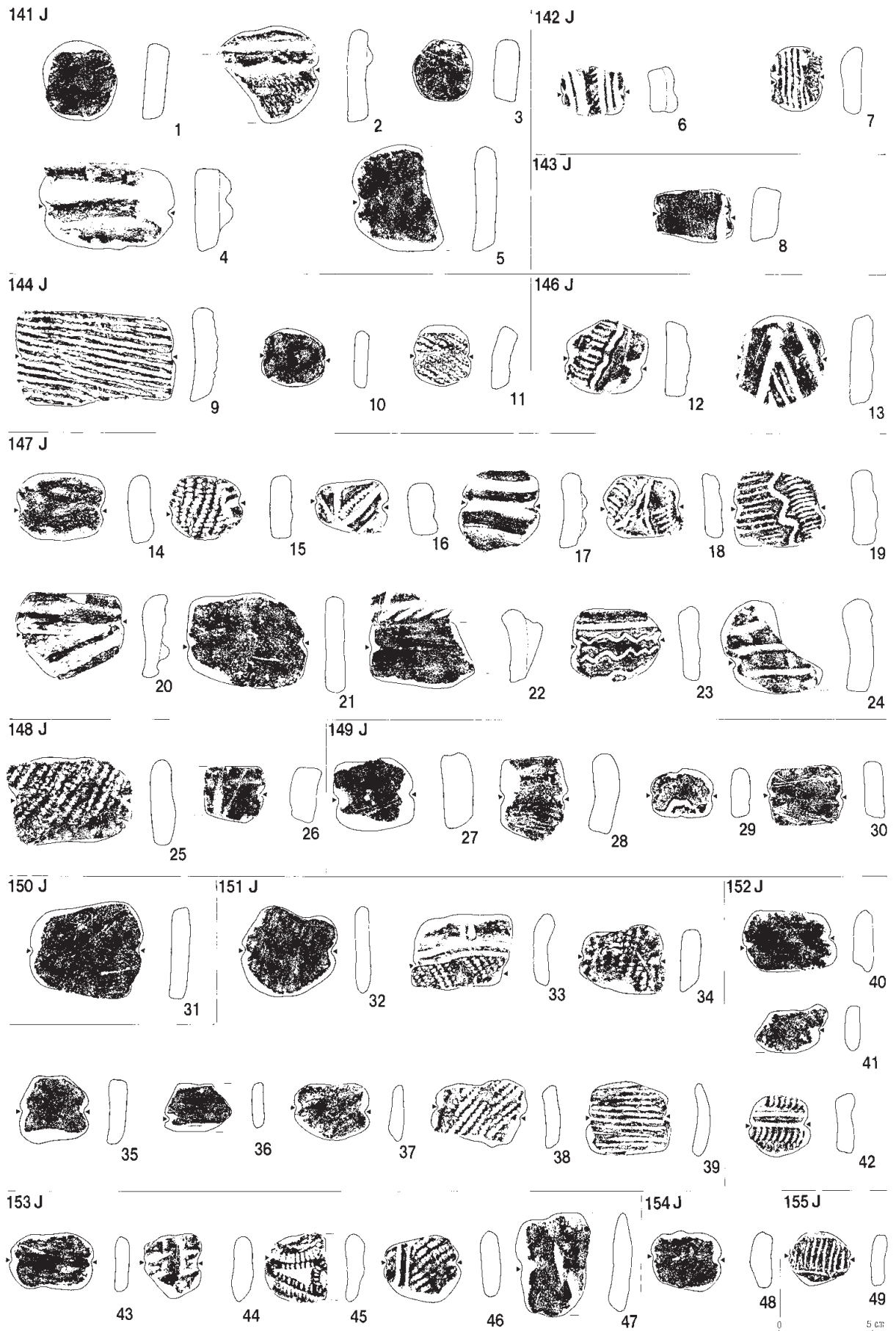
66 J



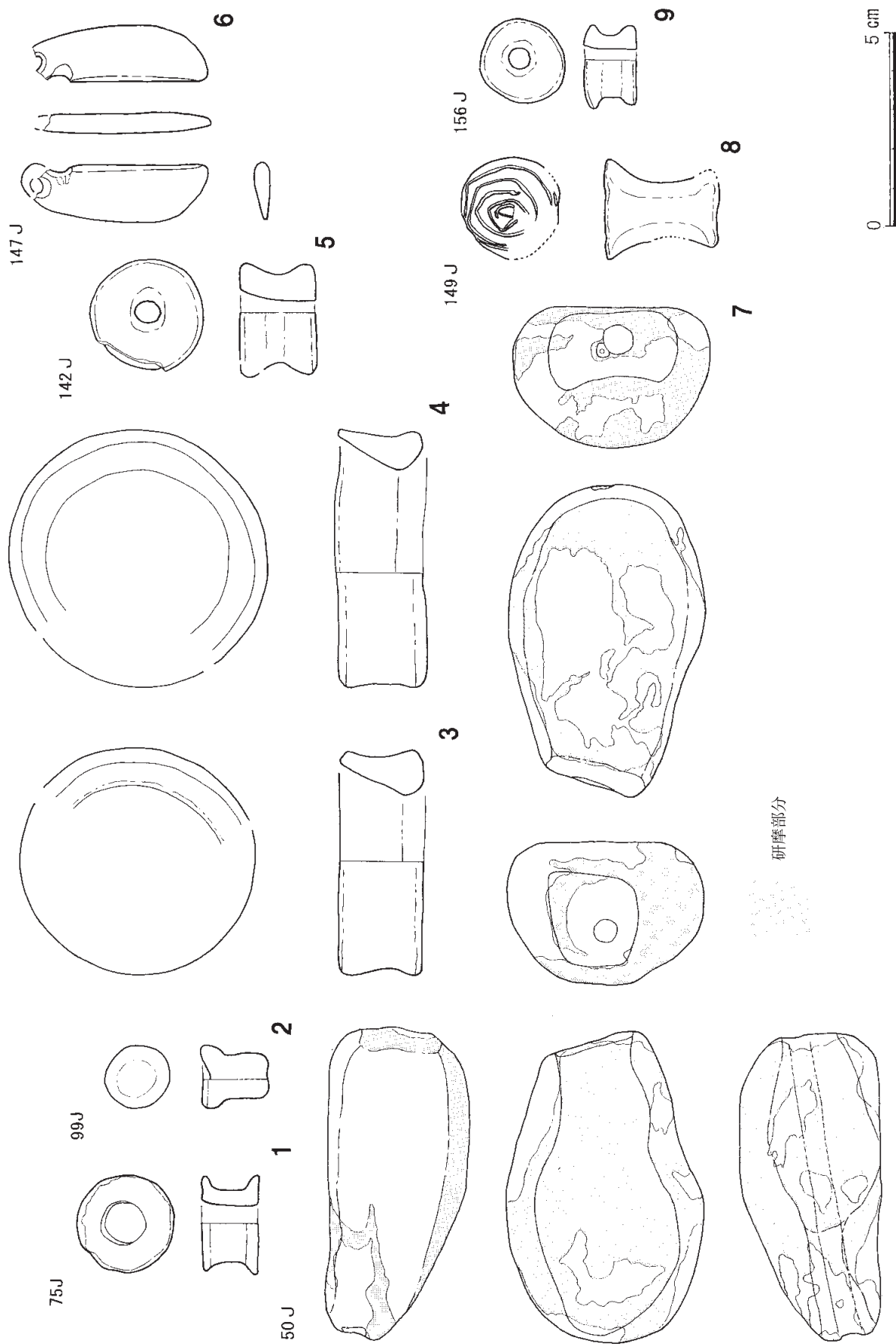
第347図 住居跡出土土製品 3 (36・37・39・42・46・49・50・51・54・59・60・66号住居跡) (1/3)



第348図 住居跡出土土製品4 (76・79~82・85・86・89・92・93・98・122・129号住居跡) (1/3)

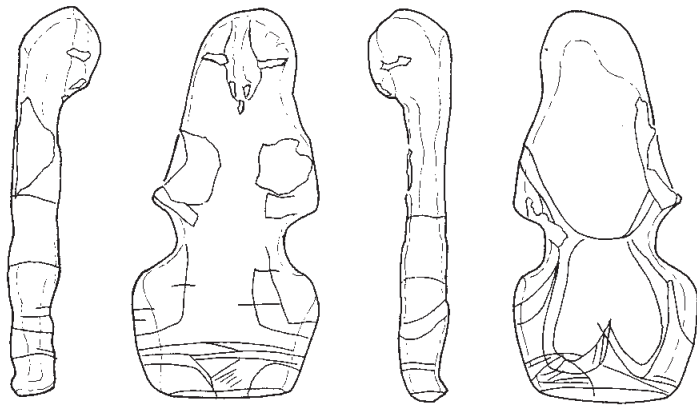


第349図 住居跡出土土製品 5 (141~144・146~155号住居跡) (1/3)



第350図 土・石製品 1 (1=75J、2~4=99J、5=142J、6=147J、7=25-II地点、8=149J、9=156J、10=232D) (2/3)

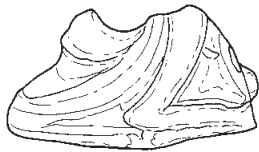
19J



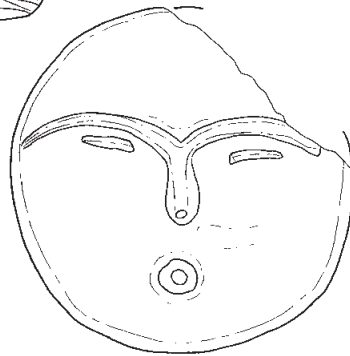
1



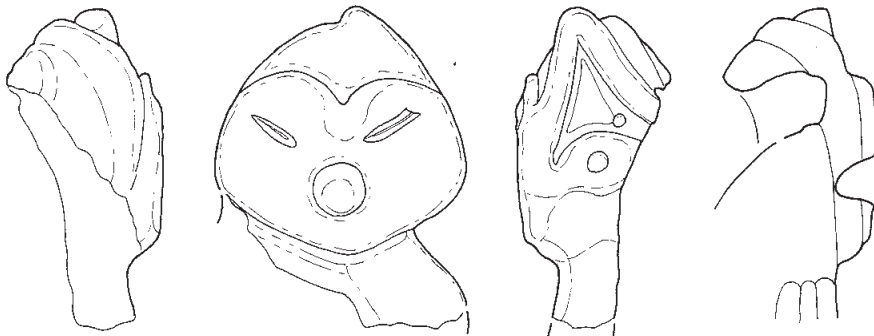
51J



67J

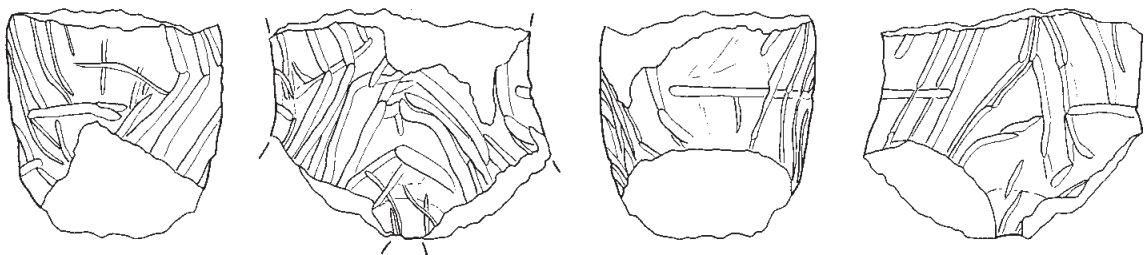


2

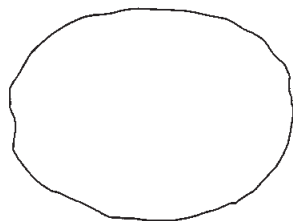


3

遺構外

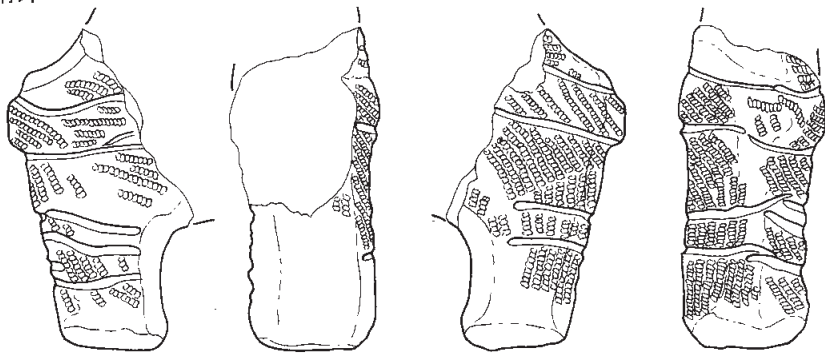


4



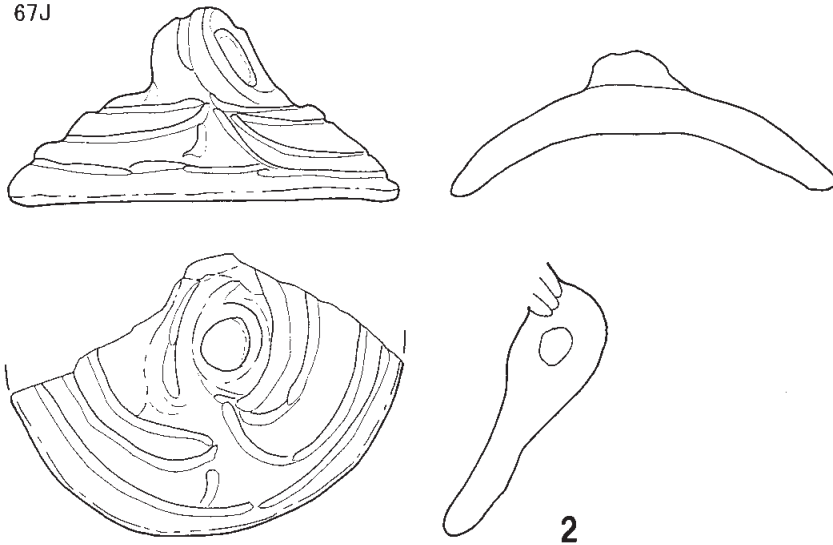
第351図 土・石製品2 (1=19J、2=67J、3=51J、4=24M) (2/3)

遺構外



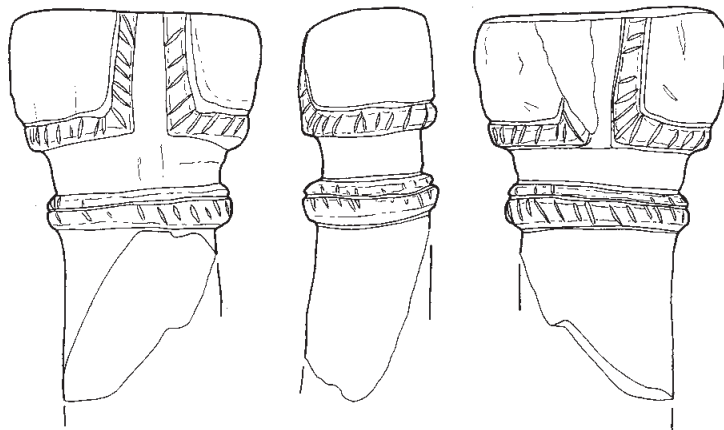
1

67J

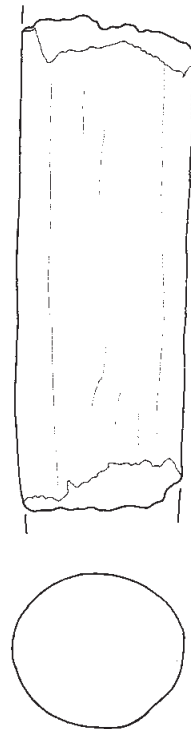


2

遺構外



3



4



第352図 土・石製品3 (1=33地点、2=67J、3・4=24M) (2/3)

第2節 土坑

91号土坑（第353図）

〔位置〕 8 I 地点。

〔構造〕（平面形）不明。（規模）深さ20cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は50°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）不明。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土下位にまとまって出土した。

〔時期〕 加曾利 E II 式期。

91号土坑出土遺物（第377図1～6）

1 は胴部が大きく膨らむ器形になろう。RLの単節斜縄文を地文とし、沈線による「∩」字状の懸垂文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

2・3・5 はRLの単節斜縄文を地文とする。2条一対の沈線を垂下し、沈線間は磨り消される。2の色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。3の色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。5の色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

4・6 はRLRの複節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線が垂下する。4の色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。6の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

97号土坑（第353図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕（平面形）円形。（規模）100×97cm・深さ48cm前後を測る。坑底はやや凹凸があり、壁は70°前後の角度で立ち上がる。被熱の痕跡が認められる。（長軸方位）N-60°-E。

〔覆土〕

1層 後世のピット。

2層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

5層 黒褐色土。炭化物粒子を多く含む。炭化材を含む。焼土ブロックを含む。

〔遺物〕 覆土中から礫が多く出土した。

〔時期〕 中期後半。

97号土坑出土遺物（第406図1、第407図1）

第406図1 は縦長の剥片。表面には礫面を残す。29.3g。凝灰岩製。

第407図1 は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。25.1g。

100号土坑（第353図）

〔位置〕 8 IV 地点。

〔構造〕（平面形）円形。（規模）86×83cm・深さ27cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-60°-E。

〔覆土〕

1層 暗赤褐色土。焼土小ブロックを多く含む。

- 2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 暗褐色土。ロームブロックを含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

100号土坑出土遺物（第377図7～10）

7は口唇部に2条の沈線を巡らせ、沈線間に円形刺突文を充填する。RLの単節斜縄文を地文とし、2条一對の沈線による「 \cap 」字状の懸垂文が施されるようだ。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

8～10は条線を地文とし、8・9は弧線が、10は2条の沈線が横位に施される。8の色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。9の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。10の色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

142号土坑（第353図）

〔位置〕 17地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）103×82cm・深さ46cm前後を測る。坑底はやや凹凸があり、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-16°-E。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 5層 黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

142号土坑出土遺物（第377図11～14、第407図2）

第377図11は隆帯により半楕円形の区画が作られようか。区画内には三角形の連続刺突文が加えられ、円形の刺突文を中心にして弧線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

12は隆帯に沿って連続爪形文が加えられる。空白部には三叉文や円形竹管文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

13は刺切文が連続して2段施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

14は隆帯を縦位に貼付する。上位は隆帯に沿って幅広の連続刺突文が加えられる。横位の隆帯の下には波状に結節沈線文が横走し、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

第407図2は土器片錘。円盤状を呈し、刻みが加えられる。28.6g

143号土坑（第353図）

〔位置〕 17地点。

〔構造〕 144Dを切る。（平面形）楕円形。（規模）92×74cm・深さ32cm前後を測る。坑底は凹凸がある。壁は段をもち70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-52°-W。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

2層 暗褐色土。ローム粒子を含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

143号土坑出土遺物（第377図15～18）

15は隆帯に沿って幅広の角押文と三角押文が加えられる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

16は隆帯に沿って幅広の連続刺突文が加えられ、空白部には連続刺突文や沈線による文様が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

17は連続爪形文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

18はR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

144号土坑（第353図）

〔位置〕 17地点。

〔構造〕 143Dに切られる。東側は深い掘り込みによって切られている。（平面形）楕円形。（規模）不明×107cm・深さ22cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-55°-W。

〔覆土〕

4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

144号土坑出土遺物（第372図1、第377図19～23）

第372図1・第377図19・20は同一個体。壺形の形状をとろうか。口唇部には刻みが加えられ、突起が付くようである。突起部から隆帯が垂下し、隆帯上に刻み、側面に鋸歯文と円形竹管文が組み合わせて加えられる。空白部には半截竹管により縦長方形・台形・不定形の区画が作られる。区画内の文様はバラエティーに富んでいる。沈線に沿って幅広の連続刺突文と連続した半円形刺突文が施される区画、連続刺突文と波状沈線が組み合わさる区画、連続刺突文・連続した半円形刺突文・鋸歯文に円形竹管文が組み合わされた区画、連続刺突文と三叉文が充填される区画、細かい格子目文が施された区画、三叉文・渦巻文が充填される区画などがある。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

21は波状口縁の土器。波頂部から隆帯が垂下する。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

22は無文の土器。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

23は結節沈線を弧状に施す。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

145号土坑（第353図）

〔位置〕 17地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）65×44cm・深さ20cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-78°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から出土した。土器は小片である。

〔時期〕 中期後半。

145号土坑出土遺物（第377図24～27、第403図1）

第377図24は波状口縁の土器か。口唇部は肥厚し、円形の刺突文が加えられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

25はLの撚糸文を地文とし、半截竹管による3条の沈線が横走する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

26はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯が横走する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

27はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

第403図1は打製石斧。表面に大きく礫面を残し、裏面は節理面になる。刃部は斜刃状を呈する。75.8g。雲母片岩製。

146号土坑（第87図）

〔位置〕 17地点。

〔構造〕 23Jに切られる。（平面形）楕円形。（規模）99×90cm・深さ22cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-68°-E。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

146号土坑出土遺物（第377図28・29）

28はRLの単節斜縄文、29はLの無節斜縄文が施される。28の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。29の色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

148号土坑（第353図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 （平面形）楕円形。（規模）145×120cm・深さ23cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-4°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 北側に土器片が集中する。

〔時期〕 加曾利EIV式期。

148号土坑出土遺物（第377図30～39、第403図2）

第377図30は口唇部下が僅かに隆起する。RLの単節斜縄文を、隆起下では斜位、以下、縦位に施す。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

31は口縁部に2条の凹線を巡らせ、LRの単節斜縄文を施す。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

32は口縁部に沈線を横走させる。RLの単節斜縄文を地文とする。沈線により「ハ」字状の懸垂文が施されようか。沈線間は磨り消される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

33はLRの単節斜縄文を地文とする。2条一对の沈線を2組施し、沈線間は磨り消される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

34は上部が僅かに隆起し、LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

35は微隆帯が弧状に貼付され、LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

36は微隆帯が弧状に施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

37は直行、38は蛇行する条線が施される。37の色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。38の色調は黒褐色(5YR3/1)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

39は2条の沈線が垂下する。色調は橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第403図2は打製石斧。縦長剥片を使用。刃部は斜刃状を呈する。50.6g。粘板岩製。

149号土坑(第353図)

〔位置〕22地点。

〔構造〕(平面形)円形。(規模)径75cm・深さ36cm前後を測る。坑底は挿鉢状であり、壁は80°前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

149号土坑出土遺物(第378図1～3)

1は3条の、2は4条の沈線が横走する。1の色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。2の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

3は沈線による区画が作られようか。区画内には集合する沈線が充填される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

150号土坑(第353図)

〔位置〕22地点。

〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)104×87cm・深さ28cm前後を測る。坑底は幾分起伏があり、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-41°-W。

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

150号土坑出土遺物(第378図4～6)

4は口縁部に結節沈線文が2条、沈線による波状文が1条横走する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

5は沈線が横走し、内側竹管の押引文が斜位に多条に施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6は条線を地文とし、沈線が垂下する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

151号土坑（第353図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 東側は耕作により破壊されている。（平面形）不整形。（規模）不明×99cm・深さ40cm前後を測る。坑底はほぼ平坦である。

〔覆土〕 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

151号土坑出土遺物（第378図7～15）

7は口唇部下に1条の沈線が巡る。RLの単節斜縄文を地文とする。「 \cap 」字状の懸垂文が施されようか。懸垂文間は磨り消される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

8は口唇部下に2条の沈線が巡り、LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

9は隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内はLRの単節縄文になる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

10はRL、11～15はLRの単節斜縄文を地文とする。2条一対の沈線を垂下していようか。沈線間は磨り消される。10の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。11の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。12の色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。13の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。15の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

152号土坑（第353図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 張り出し部があるような形状をとる。（平面形）不整楕円形。（規模）170×120cm・深さ23cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-81°-E。

〔覆土〕

1層 暗褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

152号土坑出土遺物（第378図16～19）

16は口唇部に突起が付き、そこから隆帯が垂下する。刻みが加えられた隆帯が斜位に貼付され、隆帯に沿って半截竹管による連続爪形文や幅狭の連続刺突文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

17は隆帯に沿って幅広の角押文と幅狭の角押文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

18は隆帯が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細礫・雲母を含む。

19は条線と沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を僅かに含む。

153号土坑（第353図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）166×133cm・深さ76cm前後を測る。坑底は僅かに凹凸があり、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-60°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 中央部に集中する。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

153号土坑出土遺物（第378図20～34、第405図4）

第378図20～27・29はキャリパー形の土器。20はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯により渦巻文や区画が作られる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。21はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。22は隆帯により渦巻文が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。23は口唇部下に隆帯が横走し、Lの撚糸文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。24・25は隆帯により区画が作られようか。区画内にはLの撚糸文がみられる。24の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。25の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。26・29は2本一対の隆帯により区画が作られようか。区画内にはLの撚糸文がみられる。26の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。29の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。27は2本一対の隆帯により渦巻文や区画が作られる。区画内にはLの撚糸文がみられる。色調は赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

28は浅鉢形土器か。屈曲部に断面三角形の隆帯を貼付し鏢状に仕上げる。沈線により渦巻文や区画が作られる。区画内にはRLの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

30は隆帯を横走させ、縦位の隆帯が連結する。上位には集合する沈線が、下位にはRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

31は隆帯により区画が作られようか。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

32はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯・蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

33・34は同一個体と思われる。非常に強く「く」字状に屈曲する。RLの単節斜縄文を地文とし、連続爪形文が加えられた低い隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第405図4は磨石。220g。石英閃緑岩製。

154号土坑（第353図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 攪乱で破壊されているため全体の形状は不明である。（平面形）不明。（規模）不明。深さ23cmを測る。坑底はやや隆起していて、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）不明。

〔覆土〕

- 1層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

2層 暗褐色土。ローム粒子を含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 南側から深鉢形土器の下半が正位の状態出土。埋甕の可能性はある。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

154号土坑出土遺物（第372図2、第378図35～42）

第372図2は胴部中位以上を欠く。Lの撚糸文を地文とする。2本一対の隆帯を弧状に貼付し、2本一対の隆帯・蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第378図35は刻みが加えられた隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

36は扁平な隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

37は幅広の連続刺突文を横走させ、RLの単節縄文を施す。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

38はRLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

39・41はR、40・42はLの撚糸文が施される。39の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。40・41の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、40の胎土には粗砂を多く、41の胎土には細砂を多く含む。

42の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

155号土坑（第354図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕（平面形）不整形円形。（規模）180×175cm・深さ38cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-67°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土下層、西側に集中して出土。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

155号土坑出土遺物（第372図3、第378図43～51、第405図5）

第372図3はキャリパー形の土器。1本の隆帯によって口縁部と頸部、2本の隆帯によって頸部と胴部を画する。口縁部には2本一対の隆帯により半楕円形の区画を4単位作り、区画内には集合する沈線が充填される。区画の連結部から2本の隆帯が垂下する。頸部は無文帯になる。胴部はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一対の隆帯と蛇行する隆帯が交互に3単位垂下する。色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

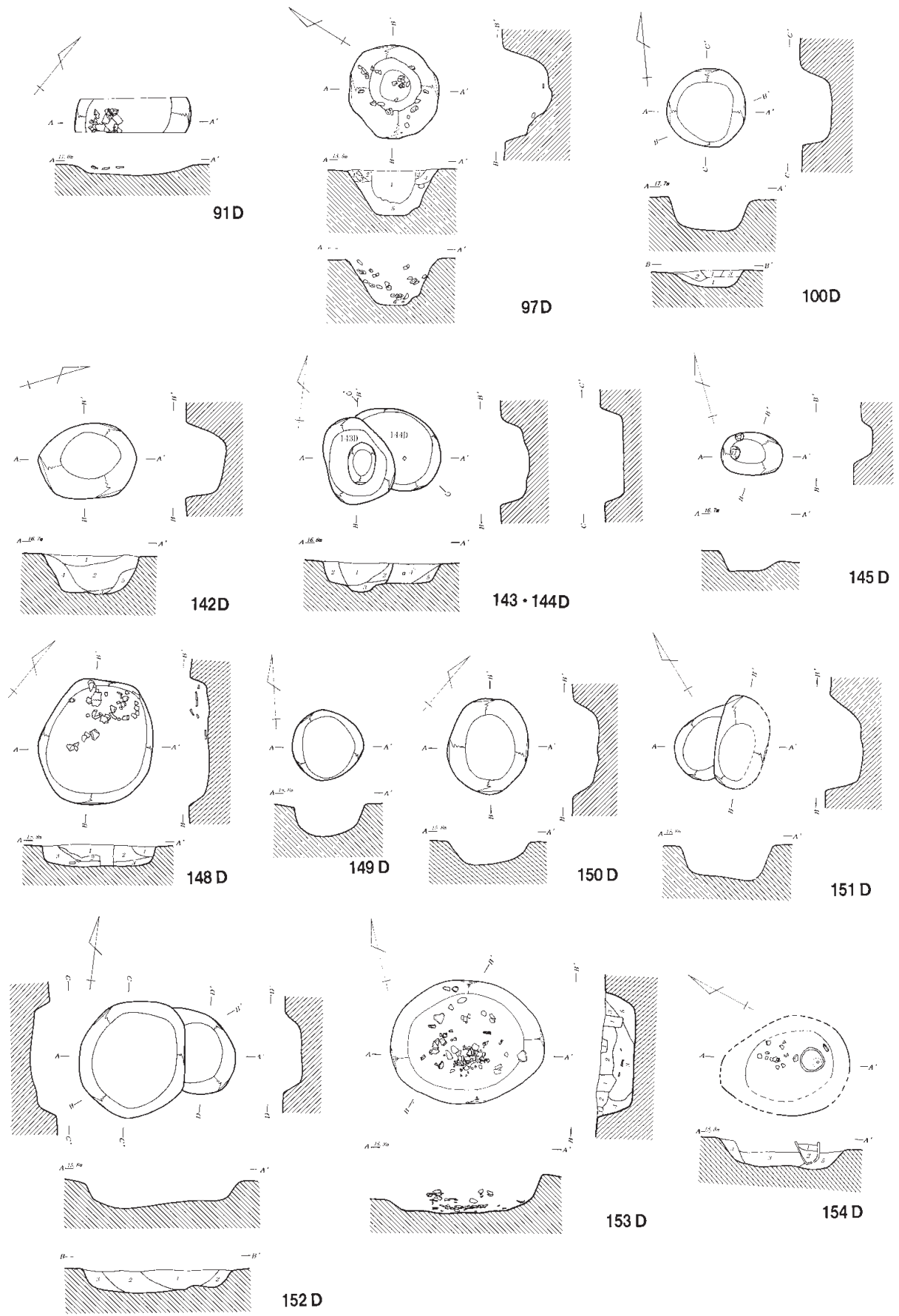
第378図43は口唇端部に刻みが加えられる。隆帯が弧状に貼付され、隆帯に沿って幅広の連続刺突文が加えられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を含む。

44は隆帯に沿って幅広の連続刺突文が加えられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

45は連続爪形文が2条施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

46は波状口縁の波頂部。渦巻文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

47～49はキャリパー形の土器。47は隆帯による区画内に集合する沈線が充填される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）



第353図 91・97・100・142~145・148~154号土坑 (1/60)



を呈し、胎土には粗砂を多く含む。48は2本一対の隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内はLの撚糸文。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。49は2本一対の隆帯を縦位・斜位に貼付し、区画を作る。区画内には集合する沈線が充填される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

50・51はLの撚糸文が施される。51は蛇行する隆帯が垂下する。色調は共に灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、50の胎土には粗砂を、51の胎土には粗砂を多く含む。

第405図5は石皿片。凹石と兼用。表裏面とも使用のため平滑になる。1945g。石英閃緑岩製。

157号土坑(第354図)

〔位置〕22地点。

〔構造〕165Dを切る。(平面形)不整楕円形。(規模)不明×315cm・深さ26cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-45°-E。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。

4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。

6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

157号土坑出土遺物(第379図1~5)

1は刻みが増えられた隆帯や断面三角形の隆帯が貼付される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

2は口唇部に2条の沈線が巡る。Lの撚糸文を地文とし、蛇行する沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

3は2条の沈線が横走する。RLの単節斜縄文が施される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には細砂・輝石を含む。

4は隆帯を横走させ、そこから隆帯が垂下する。環状の貼付文がみられる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は蛇行する条線が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

158号土坑(第354図)

〔位置〕22地点。

〔構造〕(平面形)不整楕円形。(規模)144×108cm・深さ17cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-45°-E。

〔覆土〕上層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

下層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期。

158号土坑出土遺物（第379図6・7）

6はR Lの単節斜縄文がまばらに施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

7はR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

160号土坑（第354図）

〔位置〕22地点。

〔構造〕（平面形）円形。（規模）73×71cm・深さ33cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

（長軸方位）N-85°-E。

〔覆土〕黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土中に土器片と礫を多く含む。

〔時期〕加曾利E II式期。

160号土坑出土遺物（第379図8～22）

8は刻みが加えられた隆帯が貼付される。空白部には集合する沈線が施される。色調は灰褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9はRの無節斜縄文を地文とし、爪形文が加えられた隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

10～12・16はキャリパー形の土器。10は隆帯が横走り、集合する沈線が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫を含む。11は隆帯により渦巻文や区画が作られる。区画内や胴部にはR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。12は隆帯により渦巻文が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。16は隆帯により半楕円形の区画が作られようか。区画内はLの撚糸文。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

13は隆帯により区画が作られようか。隆帯に沿って刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

14は3条の沈線が横走する。R Lの単節斜縄文を地文とし、蛇行する沈線が垂下されようか。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

15はR Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯が波状に貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

17はLの撚糸文を地文とし、2本の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

18はR Lの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

19はLの撚糸文を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

20・21は同一個体。条線を地文とし、右から左に行った刺突文列が2条巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

22は条線を地文とし、2条の沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

163号土坑（第354図）

〔位置〕22地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）87×73cm・深さ40cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で南西側にピットを有する。壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-45°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

163号土坑出土遺物（第379図23～26）

23は口唇部下に幅広の連続刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

24は隆帯に沿って幅広の連続刺突文が加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

25はR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

26は浅鉢形土器。口唇部下に太沈線が巡る。赤彩の痕跡が認められる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

164号土坑（第354図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）78×53cm・深さ25cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-55°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半

164号土坑出土遺物（第379図27～34、第403図3）

第379図27はキャリパー形の土器か。隆帯により渦巻文や区画が作られる。区画内にはR Lの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

28はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯により区画が作られる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

29は隆帯が貼付される。色調はにぶい黄褐色（10YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

30は2本の隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

31・33はL、32はRの撚糸文が施される。31の色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。32の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。33の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

34はR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第403図3は打製石斧。刃部のみ遺存する。縦長の剥片を使用。表面には礫面を残す。34.6g。硬砂岩製。

165号土坑（第354図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 157Dに切られる。（平面形）楕円形か。（規模）不明×190cm・深さ26cm前後を測る。坑底は僅かに挿鉢状で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-45°-W。

〔覆土〕

7層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

8層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

165号土坑出土遺物（第379図35～38）

35は隆帯が貼付され、沈線や刺突文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂・雲母を含む。

36はR Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯による区画が作られる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

37はL Rの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

38はR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

166号土坑（第354図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）128×104cm・深さ66cm前後を測る。ピットの重複が多く、全体の形状は不明である。（長軸方位）N-28°-E。

〔覆土〕

1層 後世のピット。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

166号土坑出土遺物（第379図39～43）

39は2条の沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

40・43は条線が施される。40の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。43の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

41・42はR Lの単節斜縄文が施される。共に色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

167号土坑（第354図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕（平面形）円形。（規模）134×132cm・深さ43cm前後を測る。坑底は僅かにくぼみ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（長軸方位）N-23°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

2層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

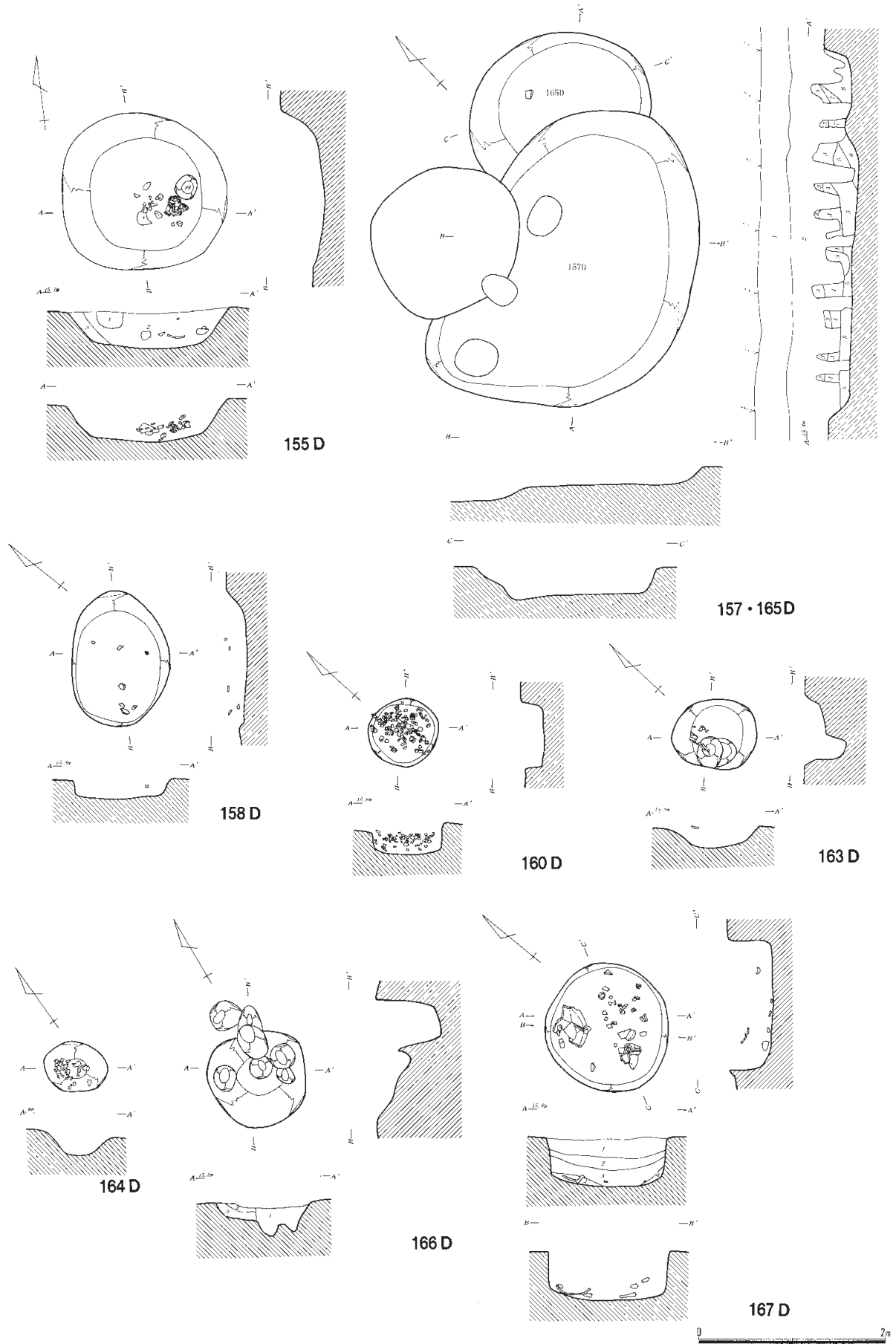
4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 坑底に遺物が集中する。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

167号土坑出土遺物（第372図4・5、第379図44～54、第403図4、第405図1・6・7）

第372図4はキャリパー形の土器。1/5程の破片からの推定復元。Lの撚糸文を地文とする。口唇部上から口縁部下位にかけて中空状の突起が付き、沈線が加えられる。2本一対の隆帯により渦巻文や長方形・楕円形の区画が作られる。頸部は無文帯になる。色調は明赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。



第354図 155・157・158・160・163～167号土坑 (1/60)

5は浅鉢形土器。1/2弱の遺存度。隆帯により渦巻文と胴部に垂れ下る突起が付けられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第379図44は浅鉢形土器か。内面に肥厚する平坦な口唇端部には2条の沈線が施され、沈線間には連続する刺突文が加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

45は半截竹管による連続爪形文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・細砂を僅かに含む。

46はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯が貼付される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

47はキャリパー形の土器か。隆帯により渦巻文や区画が作られ、区画内には集合する沈線が充填される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

48は口唇部下に2条の沈線が巡らされ、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

49は口唇部下に隆帯を横走させる。Lの撚糸文を地文とし、沈線による曲線的な文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

50はLRの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による3条の沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

51は沈線が集合して施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

52はLの撚糸文を地文とし、2本の隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

53はRLの単節斜縄文を地文とし、低い隆帯が貼付され、縄文が磨り消される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

54は胴部下位。沈線により同心円状の文様を描き、沈線を垂下させ縦位の区画を作る。区画内は肋骨文風に弧状・集合する沈線などが充填される。色調は灰褐色(7.5YR6/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

第403図4は打製石斧。撥形に近い。横長の剥片を使用、表面に僅かに礫面を残す。刃部は円刃状を呈する。165g。硬砂岩製。

第405図1は磨製石斧。刃部は円刃状を呈する。220g。硬砂岩製。

6・7は石皿片。6は表面が使用のため僅かにくぼむ。1,520g。石英閃緑岩製。7は凹石と兼用。使用のため大きくくぼむ。855g。緑泥片岩製。

168号土坑(第355図)

〔位置〕22地点。

〔構造〕169Dを切る。(平面形)楕円形。(規模)133×93cm・深さ62cm前後を測る。坑底はやや凹凸があり、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-85°-W。

〔覆土〕

1層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土下半に遺物が集中する。

〔時期〕勝坂式期。

168号土坑出土遺物(第372図6、第380図1～9、第403図5、第407図3)

第372図6は胴部のみ遺存。RLの単節斜縄文が施される。色調は明赤褐色(5YR3/3)を呈し、胎土には細砂を

多く含む。

第380図1・2は刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付される。空白部には集合する短沈線や沈線による文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。2の下位にはRLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3は刻みが加えられた隆帯により上下に画される。上位は集合する沈線が施され、連続する半円形刺突文が横走する。下位はLの撚糸文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は波状沈線が横走する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂・雲母を多く含む。

5はヒダ状文が横走する。隆帯が縦位に貼付され隆帯に沿って刺突文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

6は沈線を横走させ上下を画する。上位は波沈線が横位・斜位に施される。下位はLRの単節斜縄文。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

7・9はRLの単節斜縄文、8はLの無節斜縄文が施される。7の色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。8の色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。9の色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

第403図5は打製石斧。短冊形を呈する。表面には礫面を残す。刃部は円刃状。刃部表面には線条痕が認められる。200g。硬砂岩製。

第407図3は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。70.2g。

169号土坑(第355図)

〔位置〕22地点。

〔構造〕168Dに切られ、全体の形状は不明である。(平面形)楕円形か。(規模)不明×75cm・深さ28cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-70°-W。

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土上層に土器片が出土した。

〔時期〕加曾利E I 式期。

169号土坑出土遺物(第380図10~13、第403図6)

第380図10・11は同一個体か。Rの撚糸文を横位・縦位・斜位に施し地文とする。隆帯により渦巻文や波状文を作る。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

12・13はLの撚糸文が施される。12の色調は灰褐色(7.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。13の色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第403図6は打製石斧。縦長の剥片を使用。表面に大きく礫面を残す。97.8g。硬砂岩製。

170号土坑(第355図)

〔位置〕22地点。

〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)181×167cm・深さ77cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-70°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

2層 暗褐色土。ローム粒子を含む。

3層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。

4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中層に遺物を含む。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

170号土坑出土遺物（第380図14～35、第403図7）

第380図14は波状口縁の土器。上位から幅広の連続刺突文・幅狭の連続刺突文・幅狭な連続刺突による波状文・幅狭の連続刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

15は口唇部下に隆帯による渦巻文が貼付される。渦巻文に沿って幅広の角押文と三角押文が加えられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

16は口唇部に円形のくぼみを有する耳状の突起が付く。突起から隆帯が垂下し、口縁部や隆帯に沿って連続刺突文が加えられる。空白部には沈線による文様が描かれる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

17は刻みが加えられた隆帯が横位・縦位に貼付される。空白部には連続刺突文が集合して施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

18は幅広の連続刺突を隆帯に沿って施す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

19～25はキャリパー形の土器。19・20・24はLの撚糸文、22はRの撚糸文を地文とする。19は2本の隆帯を横走させ口縁部と頸部を画する。隆帯により楕円形の区画を作る。頸部は無文帯になる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。20は2本の隆帯で区画が作られる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。24は2本の隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。22は撚糸文を横位に施し地文とする。2本一対の隆帯により区画が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。21は2本一対の隆帯で区画が作られ、区画内には集合する沈線が充填される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。23はLRの単節斜縄文が地文になろうか。2条一対の沈線により区画が作られる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。25は隆帯を横走させる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

26～30はLの撚糸文を地文とする。26・28は2本の隆帯が垂下する。26の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。28の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。27は2条の沈線が垂下し、沈線間は磨り消される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。29は隆帯により長方形に区画されようか。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。30の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

31・32はRLの単節斜縄文を地文とする。31は2条の沈線を横走させ、2条一対の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。32は半截竹管による2条一対の沈線が蛇行して垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

33は円形竹管文が2段巡る。Lの撚糸文が施される。色調はにぶい褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

34・35は底部破片。Lの撚糸文が施される。34は2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。35の色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第403図7は打製石斧。表面に礫面を残す。左側縁が湾曲した形をとる。刃部は尖刃状を呈する。46.4g。粘板岩製。

171号土坑（第355図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕（平面形）円形。（規模）147×145cm・深さ55cm前後を測る。坑底は段をもち、僅かに挿鉢状で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（長軸方位）N-71°-W。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
- 3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

171号土坑出土遺物（第380図36～38）

36は連続爪形文が円状に施されようか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

37は半截竹管による集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

38は隆帯に沿って連続刺突文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

172号土坑（第355図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 4方に切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×230cm・深さ60cm前後を測る。坑底はやや起伏があり、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-76°-E。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 東壁下から遺物が出土した。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

172号土坑出土遺物（第372図7、第380図39・40、第403図8）

第372図7はキャリパー形土器。口縁部1/2程の遺存度。内唇部上に突起が付くようである。隆帯を横走させて口縁部・頸部・胴部を画する。口縁部はLの捺糸文を地文とし、隆帯により楕円形の区画が作られる。頸部は無文帯になる。色調は黒褐色（5YR2/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第380図39はキャリパー形土器になろうか。口唇部下に隆帯が横走し、2本一對の隆帯が垂下する。Lの捺糸文が僅かにみえる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

40は2条の沈線が横走する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第403図8は打製石斧。横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。刃部は斜刃状を呈する。77.2g。硬砂岩製。

174号土坑（第355図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 179Dを切る。（平面形）楕円形。（規模）187×146cm・深さ48cm前後を測る。坑底は平坦だが、東側に浅

い円形の掘り込みがある。壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-85°-W。

〔覆土〕

- 1層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

174号土坑出土遺物 (第381図1～10、第403図9、第406図2)

第381図1はキャリパー形土器。口唇部下が隆起し、沈線による渦巻文が作られ、それを基点として弧状に沈線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

2・3は条線を地文とする。口唇部下に2条の沈線が巡る。2は下位の沈線がそのまま垂下するようである。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。3の色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

4は口縁部に広い無文帯をもち、隆帯を波状に横走させる。色調はにぶい褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5はLR、6はLRの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。5の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。6の色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

7～9は条線を地文とする。7は2条の沈線が横走する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。8は弧線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。9は沈線が3条垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

10は浅鉢形土器。口唇部下に太沈線が巡る。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈し、胎土には粗砂・片岩を多く含む。

第403図は打製石斧。刃部側を欠く。表面には礫面を残す。85.1g。礫岩製。

第406図2は石核。礫面を多く残す。寸つまりの剥片を剥取したようである。17.1g。黒曜石製。

175号土坑 (第355図)

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 南西側に攪乱とピットが重複する。(平面形) 楕円形。(規模) 153×132cm・深さ44cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-72°-E。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

175号土坑出土遺物 (第380図41～45)

41は隆帯を横走させ口縁部を画する。隆帯に沿って押引文が加えられる。口縁部には押引文を「∩」字状に施す。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

42は口唇部下に沈線が横走する。R Lの単節斜縄文を地文とし、「ハ」字状の沈線が垂下する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

43はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が横走する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

44はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線が弧状に施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

45は条線が施される。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

176号土坑(第356図)

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 111×95cm・深さ32cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-73°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

176号土坑出土遺物(第381図11・12)

11は隆帯が渦巻状に貼付される。R Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

12は沈線を斜位・縦位に施す。色調はにぶい赤褐色(6YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

177号土坑(第107図)

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 北側調査区外。32Jに切られる。(平面形) 不明。(規模) 深さ43cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) 不明。

〔覆土〕 褐色土を基調とする。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

178号土坑(第107図)

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 173Dに切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×96cm・深さ23cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-28°-E。

〔覆土〕 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

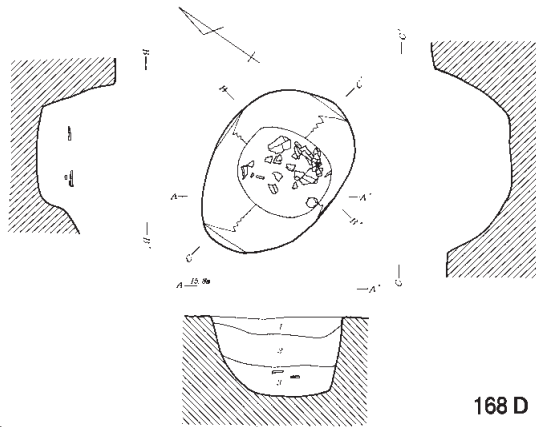
〔遺物〕 覆土中層にまとまって出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

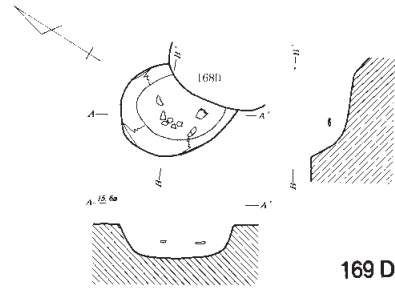
178号土坑出土遺物(第372図8、第381図17)

第372図8は鉢形土器。3/4程の遺存度。底部から直線的に開き、口縁部は直立ぎみに立つ。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

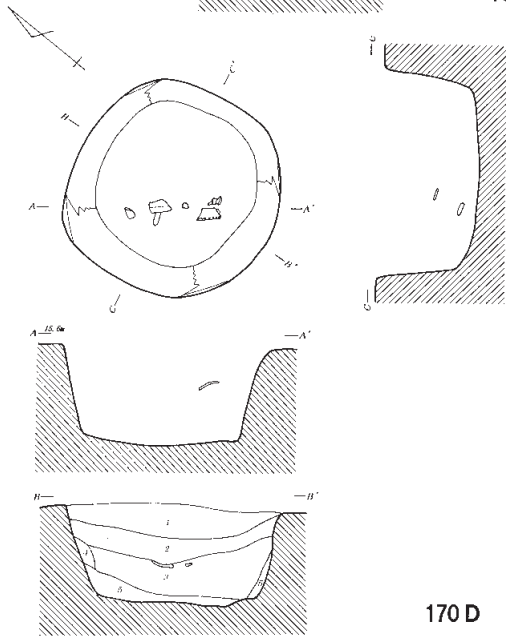
第381図17はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。



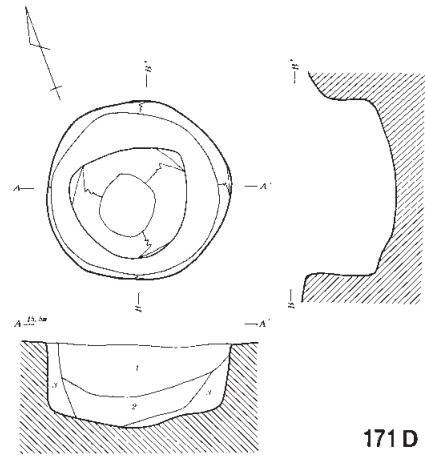
168 D



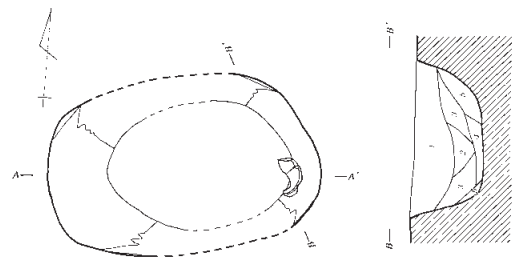
169 D



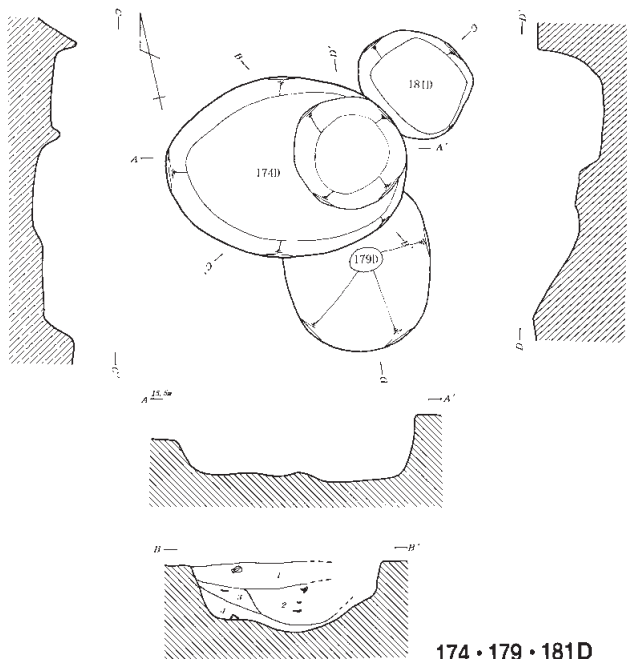
170 D



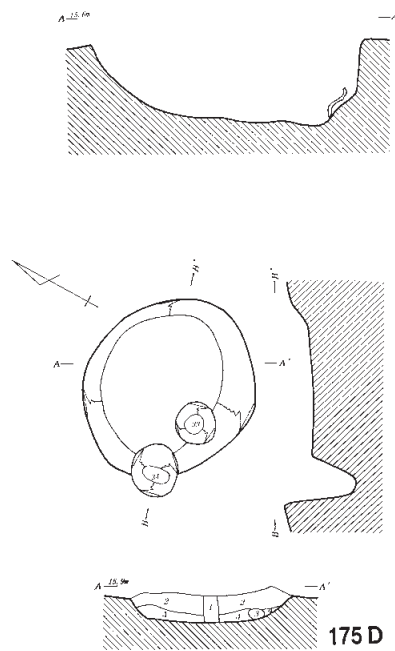
171 D



172 D



174 · 179 · 181 D



175 D

第355图 168~172 · 147 · 175 · 179 · 181号土坑 (1/60)



179号土坑（第355図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 174Dに切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×117cm・深さ36cm前後を測る。坑底のほぼ中央にくぼみがあり、壁は60° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-3°-E。

〔覆土〕 黒褐色土。ローム粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

179号住居跡出土遺物（第381図13～16）

13は隆帯に沿って角押文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

14は浅鉢形土器か。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

15は条線が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

16は条線を地文とし、沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

180号土坑（第356図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 (平面形) 不整楕円形。(規模) 105×89cm・深さ20cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-36°-E。

〔覆土〕 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土上層に土器片を含む。

〔時期〕 中期後半。

180号土坑出土遺物（第372図9、第381図18・19）

第372図9は塊状を呈する。1/4程遺存する。胴部上位から内湾して口縁部に至る。色調は暗褐色(7.5YR3/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第381図18・19は浅鉢形土器。18は口唇部が外反する。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。19は隆帯による渦巻文が貼付される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

181号土坑（第355図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 (平面形) 不整楕円形。(規模) 不明×90cm・深さ38cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-28°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

181号土坑出土遺物（第381図20～22）

第381図20は断面三角形の横走する隆帯に沿って半截竹管の押し引きによる列点文が2条巡る。以下、波状沈線が多条に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

21は刻み加えられた隆帯が貼付される。空白部には沈線による文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

22は隆帯が貼付される。隆帯に沿って交互刺突による鋸歯文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、

胎土には細砂を僅かに含む。

182号土坑（第356図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 大部分は調査区外にある。（平面形）不明。（規模）深さ45cm前後を測る。坑底は凹凸があり、壁は60°前後の角度で立ち上がる。住居跡の可能性ある。（長軸方位）不明。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 後世のピット。

3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土上層から出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

182号土坑出土遺物（第373図10、第381図23～27）

第373図10は口頸部上位と底部を欠く。刻みが加えられた2本の隆帯により胴部上位と下位を画する。口頸部は無文帯になる。胴部上位は刻みが加えられた隆帯により区画が作られる。区画の連結部には隆帯による渦巻文が貼付される。区画内には沈線による渦巻文・三叉文、密な刺突文などが充填される。胴部下位は無文である。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第381図23は口縁部に沈線を巡らす。半截竹管により3条の沈線を垂下させるが、浮彫り状を呈する。空白部には幅広の連続刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土に細砂を僅かに含む。

24は刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付される。空白部には沈線による文様が描かれる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

25は刻みが加えられた隆帯が縦位に貼付される。R Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

26はR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

27は底部破片。Lの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

183号土坑（第356図）

〔位置〕 24 I 地点。

〔構造〕 南側は調査区外。（平面形）方形か。（規模）不明×145cm・深さ30cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）不明。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

183号土坑出土遺物（第382図1～9、第403図10）

第382図1・2は同一個体か。刻みが加えられた隆帯で区画が作られようか。区画内には集合する沈線を充填す

る。沈線間には刻むが加えられた部分がある。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3・4はキャリパー形土器になろうか。3はRLの単節斜縄文を地文とし2本一對の隆帯により区画が作られる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。4は隆帯によって口縁部と頸部を画する。口縁部はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯の貼付がみられる。頸部は無文帯になる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

5はLの撚糸文が斜位に施される。色調はにぶい橙色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

6はRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7はLの撚糸文を地文とし、3条の沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

8はLの撚糸文を地文とし、隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。

9は底部破片。Lの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を僅かに含む。

第403図10は打製石斧。横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。刃部は円刃状を呈する。72g。硬砂岩製。

184号土坑 (第356図)

〔位置〕 24 I 地点。

〔構造〕 (平面形) 円形。(規模) 100×97cm・深さ47cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

(長軸方位) N-10°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土下半に土器片が多く出土した。

〔時期〕 加曾利E II 式期。

184号土坑出土遺物 (第382図10~23、第406図3)

第382図10・11は同一個体。口唇部下に3条の沈線を横走させる。RLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が「八」字状に施される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

12・19・20は連弧文系の土器。12は条線を地文とする。口唇部下に2条の沈線が巡り、連弧文が施されようか。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。19は条線を地文とし、2条一對の沈線により波状文が施されようか。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。20はLの撚糸文を地文とし、3条一組の沈線で連弧文が施される。色調は灰褐色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

13は口唇部下に沈線が1条横走する。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

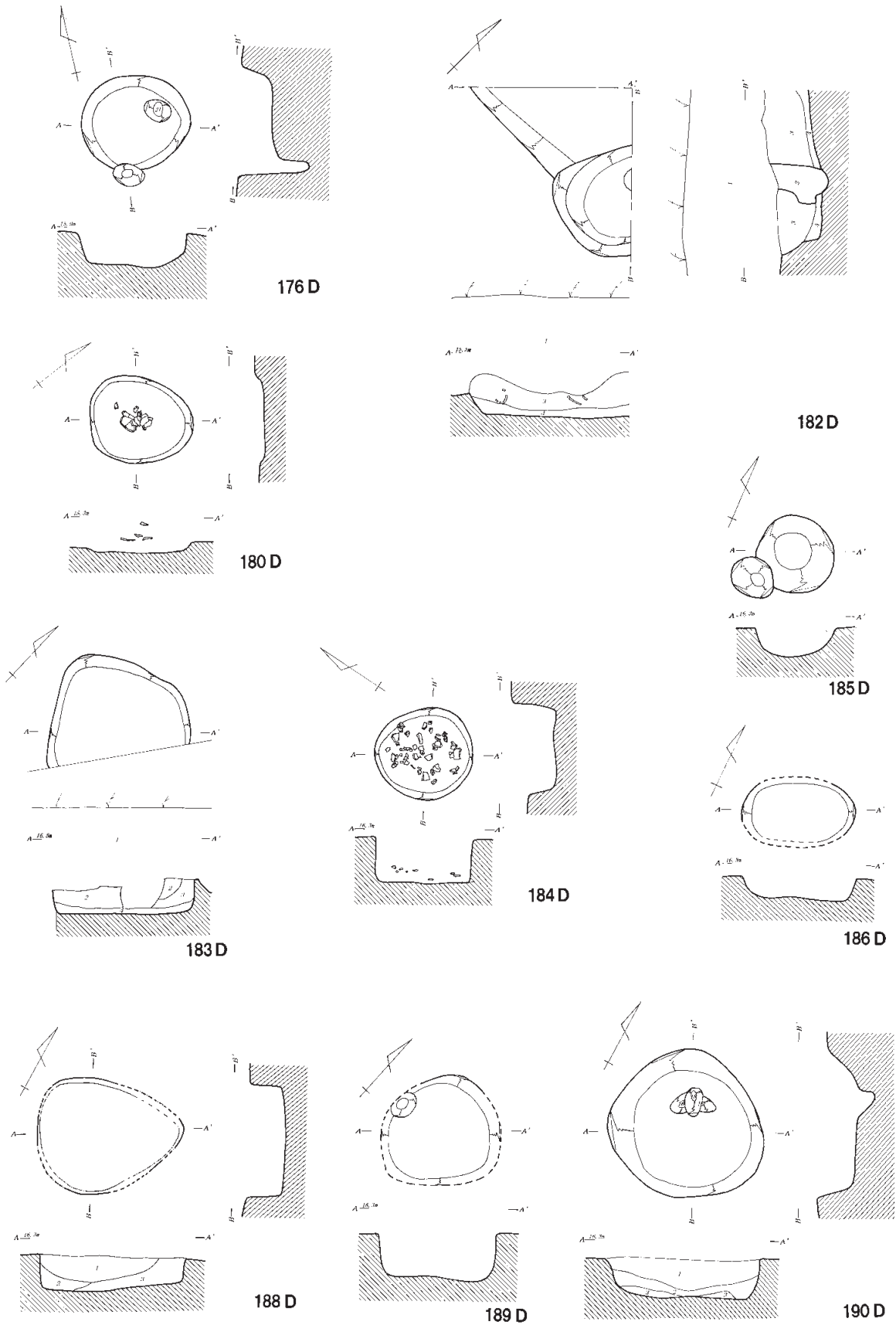
14はLRの単節斜縄文を地文とする。3条の沈線が横走し、斜位の沈線が施される。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

15はRLの単節斜縄文を地文とする。3条一組の沈線が弧状に施され、連続して3条の沈線が垂下する。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/4) を呈し、胎土には粗砂・輝石を含む。

16はRLの単節斜縄文を地文とする。2条一對の沈線が「V」字状に施される。下位には沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

17はRLの単節斜縄文を地文とし、3条一組の沈線が弧状に施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

18はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2)



第356图 176·180·182·183~186·188~190号土坑 (1/60)

0 2m

を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

21・23は条線を地文とする。21の色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。23は隆帯が横位に貼付され、沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

22はLの撚糸文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第406図3は凹基の打製石鏃。0.7g。硅岩製。

185号土坑(第356図)

〔位置〕24 I 地点。

〔構造〕南西側がピットにより破壊されている。(平面形)不整楕円形。(規模)105×83cm・深さ28cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-68°-E。

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

185号土坑出土遺物(第382図24~26)

24は口唇部下に狭い無文帯をもち、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

25は口唇部下に凹線が横走し、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

26は沈線が多条に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

186号土坑(第356図)

〔位置〕24 I 地点。

〔構造〕南側と北側は撓乱により破壊されている。(平面形)楕円形。(規模)不明×116cm・深さ24cm前後を測る。(長軸方位)N-66°-E。

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

186号土坑出土遺物(第382図27~30)

27は口唇部下に凹線が横走し、LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

28はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

29は口唇部下に狭い無文帯をもち、条線が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

30はLの無節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

188号土坑(第356図)

〔位置〕24 I 地点。

〔構造〕(平面形)不整楕円形。(規模)不明×115cm・深さ40cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(長軸方位)N-60°-E。

〔覆土〕

- 1層 暗褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

188号土坑出土遺物（第382図31～33）

31はL Rの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

32は条線を地文とし、2条の沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

33は沈線が波状に施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

189号土坑（第356図）

〔位置〕 24 I 地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）123×115cm・深さ45cm前後を測る。坑底は起伏があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（長軸方位）N-50°-E。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 加曾利E II 式期。

189号土坑出土遺物（第382図34～46）

34はL R Lの複節斜縄文を地文とする。口唇部下に連続する円形刺突文が2段巡る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

35は条線を地文とし、2条の沈線が横走する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

36はLの撚糸文を地文にしていようか。3条の沈線が横位に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

37は口唇部下に沈線を巡らせ、沈線間には交互刺突を加えて鋸歯状に仕上げる。条線が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

38は条線を地文とし、連続する円形刺突文を2段施す。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

39は曾利系の土器。口縁部には斜位の沈線が集合して施される。口唇端部には沈線が間隔を開けて加えられる。肥厚する口縁部内面には斜位の沈線が施される。色調は赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

40はL R Lの複節斜縄文を地文とし、3条の沈線が弧状に施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

41はR Lの単節斜縄文を方向を変えて施す。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

42はLの撚糸文を地文とする。沈線を横走させ、そこから3条の沈線を斜位に施す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

43は条線を地文とする。隆帯が波状に貼付されようか。色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

45・46は同一個体か。条線を地文とし、2条一対の沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土

には細砂を僅かに含む。

190号土坑（第356図）

〔位置〕 24 I 地点。

〔構造〕（平面形）不整楕円形。（規模）160×143cm・深さ40cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。坑底にみられるピットは後世のものである。（長軸方位）N-88°-W。

〔覆土〕

1層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 加曽利E II 式期。

190号土坑出土遺物（第383図1～12）

1は口唇部下に凹線が巡る。隆帯により区画が作られようか。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

2は口唇部下に2条の凹線が巡る。LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

3は口唇部下に円形刺突文列が巡る。横位に隆帯を貼付し、隆帯下にも円形刺突文がみられる。以下、RLの単節斜縄文か。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

4は条線を地文とする。口唇部下に2条の沈線を巡らせ、沈線間には刺突が加えられる。色調は灰褐色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5は連弧文系の土器。Lの撚糸文を地文とする。円形刺突文列と2条一対の沈線による波状文が施される。色調はにぶい褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を僅かに含む。

6・7は同一個体か。LRの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

8はRL、9・10はLR L、11はLRの斜縄文を地文とする。2条の沈線を垂下させ、沈線間は磨り消される。8の色調はにぶい橙色（10YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。9の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。10の色調はにぶい褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。11の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

12はLの撚糸文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

191号土坑（第357図）

〔位置〕 24 I 地点。

〔構造〕（平面形）円形。（規模）140×124cm・深さ26cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-45°-W。

〔覆土〕

1層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。

3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

191号土坑出土遺物（第383図13～18）

13は拓影図では不鮮明であるが、口唇部下に沈線が巡り、下位に沈線が弧状に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

14はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線が弧状に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

15は連弧文系の土器。条線を地文とし、連弧文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

16は条線を地文とし、2条の沈線が横走する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

17・18は条線が施される。17の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。18の色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

192号土坑（第357図）

〔位置〕 24 I 地点。

〔構造〕 東側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明×90cm・深さ41cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（長軸方位）不明。

〔覆土〕 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。

〔遺物〕 覆土上層に土器片の出土が多い。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

192号土坑出土遺物（第383図19～22）

19は幅広の帯状の隆帯が貼付され、両脇に半截竹管による刺突が連続して加えられる。空白部には沈線と刺突が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20・21は同一個体。Lの撚糸文を地文とする。区画や「+」字状文・渦巻状の文様が隆帯の貼付により作られる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

22は擦痕状の沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

193号土坑（第357図）

〔位置〕 24 I 地点。

〔構造〕 （平面形）不整円形。（規模）167×150cm・深さ35cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-7°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。

4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

5層 にぶい赤褐色土。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。

6層 暗赤褐色土。焼土粒子を多く含む。

7層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

8層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

9層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 加曽利EⅡ式期。

193号土坑出土遺物（第383図23～39、第403図11）

第383図23は口唇部下に結節沈線が2条巡り、2条一対の沈線による波状文が施される。色調は灰褐色（7.5YR 4/2）を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

24は肥厚した口唇部に刻みが増えられる。刻みのある隆帯を弧状に貼付し、空白部には沈線や刻みが増えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

25は口唇部が肥厚し、L R Lの複節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

26は口唇部に斜位の刻みが増えられる。Lの無節斜縄文を地文とし、口唇部下に2条、下位には弧状の沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

27はR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

28は2本一対の隆帯により半楕円形区画が作られようか。区画内には集合する沈線が充填される。区画の連結部と思われる部分から3条一組の沈線を垂下させ、両脇に斜位の集合する沈線を施す。色調はにぶい褐色（2.5YR 5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

29は曾利系の土器。斜位の沈線が施される。口縁部内面には隆帯を横位に貼付し、口唇部との間に斜位の集合する沈線を充填する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

30は口縁部に3条の沈線を巡らせ、以下、集合する沈線を施す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

31は口唇部下に2条の沈線が横走する。R Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が斜位に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

32はL R Lの複節斜縄文を地文とし、隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

33はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

34はRの撚糸文を地文とし、2条の太沈線が横走する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

35は条線を地文とし、2条の沈線が弧状に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

36は斜位の集合する沈線を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

37は斜位の集合する沈線を地文とし、2条の沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

38・39は集合する沈線を地文とする。38は隆帯を弧状に貼付する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。39は隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第403図11は打製石斧。刃部側を欠く。撥形になろうか。36.3g。礫岩製。

194号土坑（第357図）

〔位置〕 24 I 地点。

〔構造〕 ピットと重複するが前後関係は不明である。（平面形）隅丸方形。（規模）128×118cm・深さ40cm前後を測

る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-82°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

194号土坑出土遺物 (第384図1～8)

1～4は条線を地文とする。1は口唇部下に1条の沈線を横走させ、沈線による半楕円形の区画や「∩」字状の懸垂文が施されようか。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。2は口唇部下に2条の沈線が巡る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。3は波状口縁の土器。口唇部下に2条の沈線を巡らせ、沈線により楕円形の区画を作る。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。4は口唇部下に1条の沈線が横走する。2条一対の沈線により曲線的な文様が描かれる。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5・6はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。5の色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。6の色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

7はLの撚糸文を地文とし、隆帯が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8は条線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

195号土坑 (第357図)

〔位置〕 24I地点。

〔構造〕 7方に切られる。ピットの重複が著しい。(平面形)楕円形。(規模)247×110cm・深さ35cm前後を測る。坑底は僅かに凹凸があり、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-88°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 7号方形周溝墓覆土。

3層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

195号土坑出土遺物 (第384図9～13)

9はLRの単節斜縄文を斜位・横位に施し地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

10はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

11はRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

12はL、13はRの撚糸文を地文とする。12は隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。13は蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

196号土坑 (第357図)

〔位置〕 24I地点。

〔構造〕 197Dを切り、198Dに切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 130×90cm・深さ43cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-5°-E。

〔覆土〕

1層 褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 中期後半。

196号土坑出土遺物 (第384図14~22)

14は口縁部が無文帯になる。隆帯により区画が作られようか。区画内には沈線による文様、区画の連結部には三叉文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂・輝石を含む。

15は口縁部に近い破片であろう。沈線により小さな矩形の区画が作られ、区画内には刺突などが認められる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

16は隆帯に沿って三角形の連続刺突文が2条施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

17は隆帯を横走させ上下を画する。上位は連続刺突による波状文・2段の三角押文・幅広の角押文が横位に施される。下位は隆帯が垂下し、両脇に角押文・三角押文が加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

18は隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

19は交互刺突が加えられた隆帯が横走する。空白部には沈線や刻みが施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20は連続刺突が加えられた隆帯が横位に貼付され、下位にRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

21はRLの単節斜縄文を地文とし、押捺が加えられた隆帯が横走する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

22はLRの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

197号土坑 (第357図)

〔位置〕 24I地点。

〔構造〕 196D・198Dに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明×140cm・深さ38cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-56°-E。

〔覆土〕

2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。

3層 黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

4層 暗褐色土。ローム粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 中期後半。

197号土坑出土遺物 (第384図23~32)

23は波状口縁になろうか。口唇部下に結節沈線が2条巡る。内面には結節沈線が弧状に施される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

24はRLの単節斜縄文を地文とし、刺突が加えられた鎖状の隆帯が横位に貼付される。色調はにぶい赤褐色(5

YR5/4) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

25はL R、26はR Lの単節斜縄文を地文とし、平行する沈線・蛇行する沈線が垂下する。25の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。26の色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

27は刻みが増えられた低い隆帯が横位に貼付される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

28はR Lの単節斜縄文を地文とする。沈線を直行・弧状に施し、広く磨り消す。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

29はR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

30は断面三角形の隆帯を縦位に貼付する。空白部には刺切文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂・雲母を多く含む。

31・32は条線が施される。31の色調は黄橙色(10YR7/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。32は内面に赤彩の痕跡を残す。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

200号土坑(第357図)

〔位置〕24 I 地点。

〔構造〕(平面形)不整形。(規模)不明×200cm・深さ31cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-70°-E。

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕加曾利E II 式期。

200号土坑出土遺物(第384図33~41)

33はL Rの単節斜縄文を地文とする。隆帯を横走させ、口縁部と胴部を画する。口縁部には隆帯を弧状に貼付する。胴部は沈線が垂下する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

34はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線で画する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

35は条線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

36~38はR L、40・41はL Rの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線を垂下させ、沈線間は磨り消される。36の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。37の色調はにぶい黄橙色(10YR7/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。38の色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。40・41は同一個体か。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

39はR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

244号土坑(第357図)

〔位置〕25 I 地点。

〔構造〕(平面形)円形。(規模)105×100cm・深さ36cm前後を測る。坑底は僅かに凹凸があり、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-85°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

3層 明褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

244号土坑出土遺物（第384図42～45）

42はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯により画される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

43はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂・赤褐色粒子を含む。

44はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

45は隆帯による長方形の区画が作られようか。区画内には縦位の沈線が充填される。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

245号土坑（第357図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）99×70cm・深さ27cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-34°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

247号土坑（第357図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）172×157cm・深さ45cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-10°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黄褐色土。ロームブロック。

3層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

4層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

5層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 中期後半。

247号土坑出土遺物（第385図1～10、第403図12）

第385図1は口唇部下に結節沈線による波状文が横位に施される。以下、細い隆帯の両脇に結節沈線文が加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

2は横走る帯状の隆帯上に押捺が加えられる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

3はRLの単節斜縄文を地文とする。口唇部下に沈線が巡らされ、隆帯による渦巻文が貼付されようか。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

4・5は縦位の集合する沈線が施される。4は隆帯が蛇行して貼付されようか。色調はにぶい赤褐色（2.5YR

5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。5の色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

6はLR、7はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。6の色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。7の色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

8は条線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9はLの撚糸文を地文とし、2本の隆帯が横走する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

10は2本の隆帯が垂下し、縦位の集合する沈線が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第403図12は撥形の打製石斧。表面に僅かに礫面を残す。刃部は円刃状を呈する。165g。硬砂岩製。

248号土坑(第357図)

〔位置〕25I地点。

〔構造〕163Yに切られる。(平面形)楕円形。(規模)不明×127cm・深さ24cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-24°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕覆土中から土器小破片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕中期。

249号土坑(第357図)

〔位置〕25I地点。

〔構造〕163Yに切られる。(平面形)楕円形。(規模)不明×157cm・深さ39cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-10°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

4層 明褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

5層 黄褐色土。ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

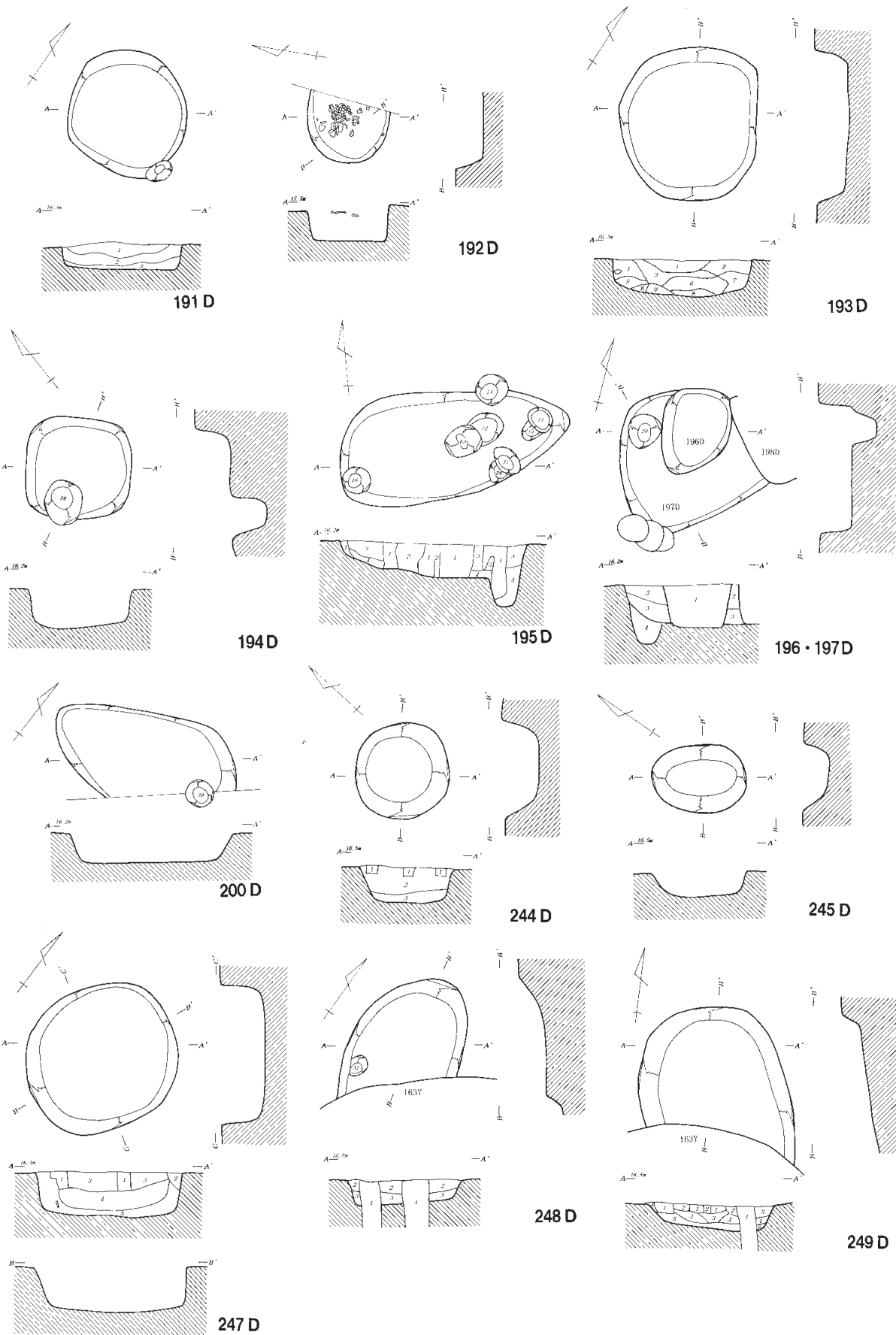
〔時期〕中期後半。

249号土坑出土遺物(第385図11~13)

11はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

12はRLの単節斜縄文が施されようか。2条の沈線が横走する。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

13はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線が弧状に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。



第357図 191~197・200・244・245・247~249号土坑 (1/60)

250号土坑（第358図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 164Yに切られる。（平面形）円形。（規模）135×130cm・深さ15cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-11°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

250号土坑出土遺物（第385図14～16、第406図5）

第385図14はLの撚糸文を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい黄褐色（10YR5/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

15は集合する沈線が斜位に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

16は隆帯が垂下し、半截竹管による集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第406図5は使用痕がある縦長剥片。右側縁に刃こぼれが認められる。1.2g。黒曜石製。

251号土坑（第358図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕（平面形）円形。（規模）径110cm・深さ22cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

251号土坑出土遺物（第385図17～19）

17は隆帯が2本横走する。Lの撚糸文を地文とし、押捺が加えられた幅広の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

18は瘤状の隆帯が垂下し、沈線による楕円形の区画が作られようか。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

19は肥厚する口唇部下に凹線が巡り、集合する沈線が横位に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

252号土坑（第358図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 246Dに切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×100cm・深さ38cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-58°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

252号土坑出土遺物（第385図20～22）

20は外側竹管による連続刺突文が2条、斜位に施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

21はLRの単節斜縄文を口縁部と胴部で方向を変えて施し地文とする。口縁部は太沈線により渦巻文や楕円形の

区画が作られる。胴部は2条の沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

22はRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色(YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

253号土坑(第358図)

〔位置〕25I地点。

〔構造〕(平面形)不整形円形。(規模)167×160cm・深さ48cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はオーバーハングしている。(長軸方位)N-73°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

253号土坑出土遺物(第385図23~38)

23はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯により区画が作られようか。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

24は口唇部下に凹線が巡り、RLRの複節斜縄文が施される。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を含む。

25は口縁部に凹線が巡る。連続する円形刺突文と沈線を並列させて区画を作ろうか。区画内にはLの撚糸文がみられる。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

26は曾利系の土器。斜位の集合する沈線が施される。口唇端部にも斜位の沈線がみられる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

27はLRLの複節斜縄文を地文とする。上位は隆帯による区画が作られようか。下位は2条の沈線が垂下し、沈線間は磨り消される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

28は太沈線が横走し、渦巻文などが施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

29はRLRの複節斜縄文を地文とし、蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

30~34はRLの単節斜縄文を地文とする。30・33・34は2条、31・32は3条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。30の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。31の色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。32の色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を含む。33の色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。34の色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

35~38は条線を地文とする。35は沈線が弧状に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。36は上位が磨り消されている。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。37の色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。38は沈線が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

255号土坑(第358図)

〔位置〕25I地点。

〔構造〕(平面形) 楕円形。(規模) 178×145cm・深さ35cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-34°-W。

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

255号土坑出土遺物 (第385図39~42)

39はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が横走する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

40・41はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯が横走する。40の色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。41の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

42は半截竹管による集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

256号土坑 (第358図)

〔位置〕25I地点。

〔構造〕(平面形) 不整楕円形。(規模) 138×115cm・深さ35cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、開口部より坑底が大きく広がる。壁は南西側から北東側にかけてオーバーハングしている。(長軸方位) N-25°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。

4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

256号土坑出土遺物 (第385図43~45)

43~45はRLの単節斜縄文を地文とする。2条の沈線が垂下し、沈線間は磨り消される。43の色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。44の色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。45の色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

257号土坑 (第358図)

〔位置〕25I地点。

〔構造〕(平面形) 楕円形。(規模) 158×145cm・深さ41cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、開口部より坑底が大きく広がる。壁はオーバーハングしている。(長軸方位) N-89°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。

3層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中下位から多く出土した。

〔時期〕加曾利EⅢ式期。

257号土坑出土遺物（第386図1～11）

1は波状口縁の土器。RLの単節斜縄文を地文とし、沈線による区画が作られる。内面には凹線による渦巻文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

2はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線による区画が作られる。色調は灰褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

3は口唇部下に凹線が横走し、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

4はRLの単節斜縄文を地文とする。沈線による「∩」字状の懸垂文が施されよう。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線により区画が作られる。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

6はRLの単節斜縄文を地文とする。太沈線を横走させ、そこから直行・蕨手状の沈線を垂下させる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

7はLRの単節斜縄文を方向を変えて施し地文とする。太沈線を横走させ、直行・蕨手状の沈線を垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

8はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線による区画などが作られる。色調はにぶい黄褐色（10YR6/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

9はRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

10・11は条線が施される。10は沈線が横走する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。11の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

258号土坑（第358図）

〔位置〕 25 I 地点

〔構造〕（平面形）円形。（規模）120×117cm・深さ40cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。炭化物粒子を含む。

4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

5層 褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土下位からまとまって出土した。

〔時期〕 加曽利E II式期。

258号土坑出土遺物（第373図11、第386図12～18）

第373図11は底部から直線的に開く器形。全面に条線が施される。色調は黒褐色（7.5YR/1）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第386図12はLの無節斜縄文を地文とし、凹線が横走する。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

13はLの撚糸文を地文とする。2条の沈線が横走し、以下、波状の沈線が施されようか。色調はにぶい赤褐色

(5YR5/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

14・15はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。14の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。15の色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

16～18は条線を地文とする。16は上位に半截竹管による2条の沈線が斜位に施され、そこから沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。17の色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。18は沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

259号土坑(第358図)

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 150×130cm・深さ32cm前後を測る。坑底は僅かな凹凸があり、壁は南西側と北東側がオーバーハングしている。(長軸方位) N-35°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 5層 明褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土上位からまとまって出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

259号土坑出土遺物(第373図12、第386図19～25)

第373図12は口縁部が僅かに内湾しながら開く。口縁部は無文帯になる。胴部はR Lの単節斜縄文を地文とし、幅狭な「 \cap 」字状の懸垂文を6単位施す。色調は暗赤褐色(5YR3/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第386図19は半截竹管により横線を施し、2本一対の隆帯が縦位に貼付されるようである。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

20はR Lの単節斜縄文を地文とし、沈線が弧状に施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

21はR Lの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線が垂下する。色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

22はR Lの単節斜縄文を地文とする。1本・2本一対・蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

23～25はLの撚糸文を地文とする。23は2本一対の沈線が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・細砂を僅かに含む。24は2本の隆帯が横走する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。25は胴部下位の破片。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

260号土坑(第358図)

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 135×115cm・深さ39cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は全体にオーバーハングしている。(長軸方位) N-73°-E。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。

2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

5層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

6層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

260号土坑出土遺物（第386図26～33）

26は波状口縁の土器。RLの単節斜縄文を口縁部と胴部で方向を変えて施文し地文とする。波頂部下に楕円形、波底部に半楕円形の区画を隆帯により作る。胴部は2条の沈線が垂下し、沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

27は口唇部下に凹線が横走し、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

28は半截竹管による連続する爪形文を2段施し、凹線を横走させる。以下、RLの単節斜縄文になろうか。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

29はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線が斜位に施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

30はRLRの複節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線が垂下する。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

31～33は条線が施される。31の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。32は2本一対の隆帯が横走する。色調はにぶい褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。33の色調はにぶい褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

261号土坑（第358図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 ピットと重複するが、前後関係は不明である。（平面形）楕円形。（規模）120×108cm・深さ20cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（長軸方位）N-18°-E。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

261号土坑出土遺物（第386図34～36）

34はLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

35はLの無節斜縄文を地文とし、弧状に隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

36は半截竹管による集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を僅かに含む。

263号土坑（第358図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕（平面形）隅丸方形。（規模）121×120cm・深さ36cm前後を測る。坑底は中央に僅かなくぼみがあり、壁は

80° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-30°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。焼土粒子を含む。
- 3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

263号土坑出土遺物 (第386図37~40、第406図6)

第386図37・38は条線を地文とする。37は口唇部下に半截竹管による3条の沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。38は3条の沈線が横走り、縦位の沈線が加えられる。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

39はRLの単節斜縄文を地文とし、細い半截竹管により4条の直行する沈線、2条の蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

40は集合する縦位の沈線を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第406図6は二次加工を有する剥片。下端に加工が加えられる。2.9g。硅岩製。

264号土坑 (第358図)

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 68×56cm・深さ35cm前後を測る。坑底は西側から東側に傾斜をもって下がり、壁は80° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-26°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

264号土坑出土遺物 (第386図41・42)

41はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

42はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

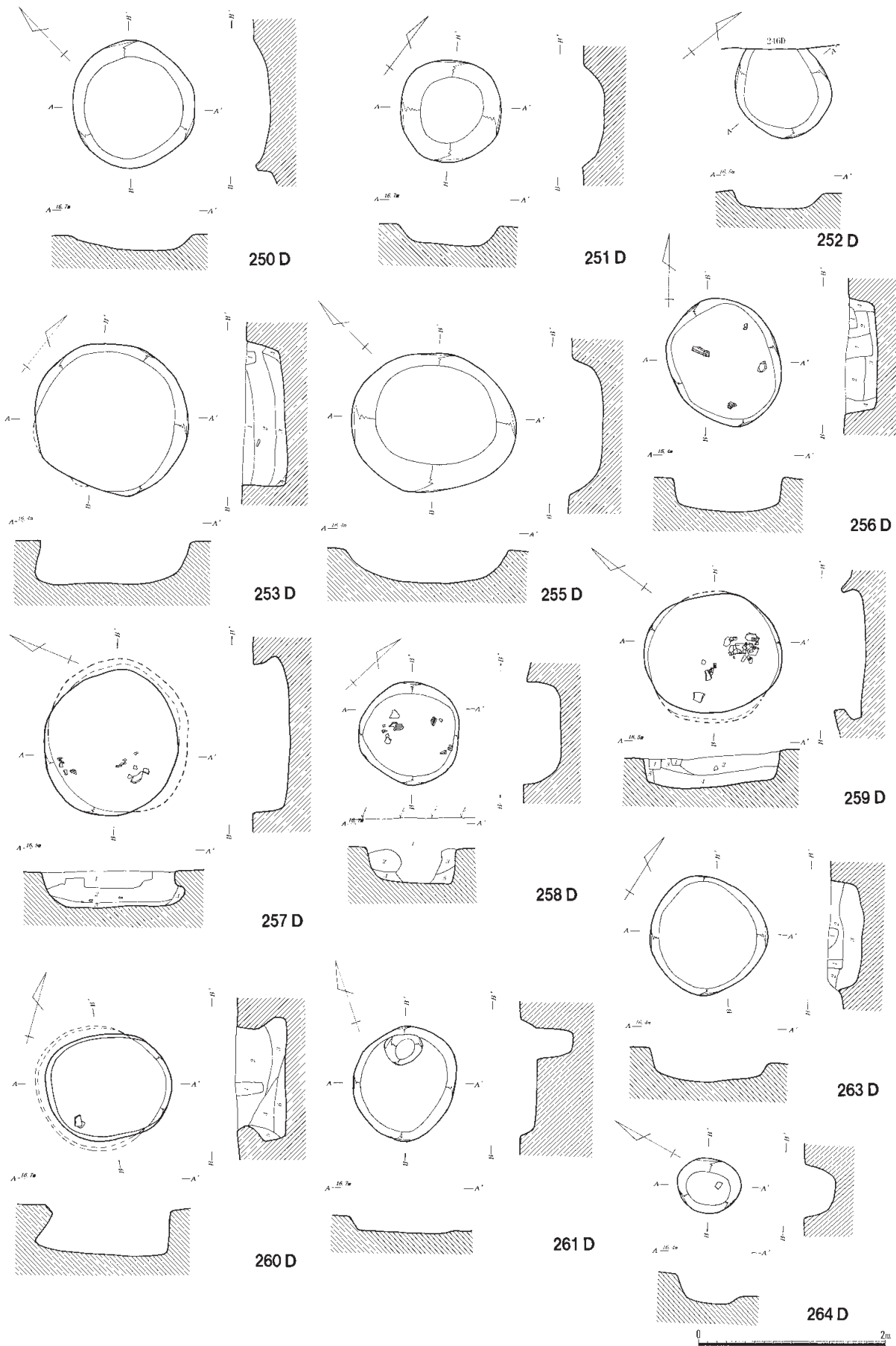
265号土坑 (第359図)

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 (平面形) 不整楕円形。(規模) 233×180cm・深さ35cm前後を測る。坑底は僅かな凹凸があり、壁は南側を除き5~15cmオーバーハングをしている。(長軸方位) N-50°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。この層に遺物を多く含む。
- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 6層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。



第358図 250～253・255～261・263・264号土坑 (1/60)

〔遺物〕 覆土中位から多く出土した。

〔時期〕 加曾利E IV式期。

265号土坑出土遺物（第373図13～15、第387図1～16）

第373図13は4単位の波状口縁の土器。頸部がくびれ、口縁部は内湾する。文様は微隆帯により作られる。口縁部は波頂部下が渦巻文、波底部下が涙滴状の区画が配される。胴部は口縁部の文様と対応するように渦巻文下には渦巻文が、涙滴状の区画下には縦位の楕円形の区画が作られる。渦巻文・区画内にはL Rの単節縄文が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

14は胴部中位がくびれ、口縁部が僅かに内湾しながら開く。口唇部下に狭い無文帯をもち、胴部下位以上はL Rの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を僅かに含む。

15は双耳壺か。胴部は球状を呈し、口縁部は僅かに外湾する。沈線を巡らせ口縁部と胴部を画する。口縁部は無文帯になる。胴部上位には橋状の把手が縦位に付けられる。把手上及び胴部にはR Lの単節縄文が方向を変えて施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第387図1は口縁部に2条の沈線を巡らせ、沈線間には半截竹管による爪形文が連続して施される。以下、R Lの単節斜縄文になるうか。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

2は隆帯により区画が作られる。隆帯上・区画内にはR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

3は口唇部下に凹線を横走させる。R Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯により区画が作られる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

4は口唇部が肥厚し凹線が巡る。L R Lの複節斜縄文が施される。色調は黄橙色（10YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5は沈線により渦巻文や楕円形の区画が作られ、区画内にはR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

6は口縁部に沈線を巡らせ、そこから沈線を垂下させ区画を作るようである。区画内にはR Lの単節斜縄文がみられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

7は口唇部下に太沈線を横走させ、条線が施される。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

8・9は双耳壺か。8は微隆帯を横走させ口縁部と胴部を画する。口縁部は無文帯になる。幅広の橋状把手を付ける。把手上及び胴部にはR Lの単節縄文が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。9は無頸壺状の器形を呈する。口縁部に微隆帯が巡り、橋状の把手が横位に貼付される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

10はR Lの単節斜縄文を地文とする。隆帯が横位に貼付され、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

11・13はL R、12はR Lの単節斜縄文を地文とし、直行・蛇行する沈線が垂下する。11の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。12の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。13の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

14はL Rの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

15は蛇行する条線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂・片岩を含む。

16は隆帯により楕円形の区画が作られようか。以下、条線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

266号土坑（第359図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 9方に切られる。（平面形）楕円形か。（規模）不明×150cm・深さ26cm前後を測る。坑底は平坦で南側にピットがある。壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-67°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

3層 黄褐色土。ロームブロック。

4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

266号土坑出土遺物（第387図17～27）

17は隆帯による渦巻文が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

18はLRの単節斜縄文を地文とし、隆帯により楕円形の区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

19はRLRの複節斜縄文を地文とする。沈線が垂下し磨り消される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

20～22はRL、23はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。20・21は沈線間が磨り消される。20の色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。21の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。22の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。23の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

24は沈線により幾何学的な文様が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

25は蛇行する条線を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

26は条線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

27は弧状の沈線を多条に施す。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

267号土坑（第359図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 163Yに切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×70cm・深さ23cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-42°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

267号土坑出土遺物（第387図28～30、第403図13）

第387図28は2条一対の沈線により「∩」字状の懸垂文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

29はLR、30はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。29の沈線間は磨り消される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。30の色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

第403図13は撥形の打製石斧。横長の剥片を使用。刃部は平刃状を呈する。刃部側表面には部分的に磨耗痕が認

められる。70g。硅岩製。

268号土坑（第359図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕 西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明×120cm・深さ39cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-40°-W。

〔覆土〕

- 1層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

268号土坑出土遺物（第388図1～3）

1は隆帯を楕円形に貼付していようか。隆帯上には沈線と連続刺突文が加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は3条の沈線が横走する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

3は沈線により区画が作られようか。区画内には横線を境にして縦位の集合する沈線が充填される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

269号土坑（第359図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕 272Dを切る。126Yに切られる。（平面形）楕円形か。（規模）不明×200cm・深さ50cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-75°-E。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中位から多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

269号土坑出土遺物（第373図16・17、第388図4～12、第403図14、第406図7～9、第407図4）

第373図16は胴部中位以上1/2程の遺存度。口縁部が内湾し、口唇部が外反する。口唇部から頸部にかけて双頭状の突起が貼付される。突起上には半截竹管による刺突が加えられる。口縁部のくびれ部には半截竹管を引くことによる断面半円形の浮彫状の隆帯が2段巡る。隆帯間と下位には交互刺突による鋸歯文が加えられる。口縁部及び胴部にはRLの単節斜縄文を施し地文とする。口縁部と胴部は隆帯を横走させ画する。口縁部の文様は半截竹管による3条・4条の沈線で渦巻文や弧線文が施される。胴部は隆帯を渦巻状に貼付する。隆帯上には縄文が施される。色調は極暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

17は台付土器の台部か。隆帯に縁取りされた円孔が穿たれている。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第388図4は波状口縁の波頂部。内面には押引文により楕円形の区画が作られる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）

を呈し、胎土には細礫・雲母を僅かに含む。

5は縦位に隆帯が貼付される。空白部には外側竹管による押引文が横位に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂・雲母を含む。

6は口唇部上に小突起が付き、そこから刻みが加えられた隆帯が垂下する。空白部には沈線による三叉文や渦巻文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7は口唇部上に小突起が付く。内湾する口縁部は無文帯になり、胴部との境には交互刺突による鋸歯文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

8は口唇部に内側竹管による押引文が加えられる。R Lの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による2条の沈線により、矩形の区画が作られようか。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

9は沈線により矩形の区画が作られようか。区画内には沈線により渦巻文が描かれ、沈線間には刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

10は刻みがつけられた隆帯が縦位に貼付される。隆帯には交互刺突が加えられる。空白部には沈線を縦位に平行して施し、刻みが充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

11は刻みが加えられた隆帯が横位・縦位に貼付される。空白部には沈線により渦巻文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

12はR Lの単節斜縄文が加えられた帯状の隆帯を横位に貼付する。以下、R Lの単節斜縄文を間隔を開けて施文される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

第403図14は撥形の打製石斧。表面の大部分に礫面を残す。125g。硬砂岩製。

第406図7～9は二次加工を有する縦長の剥片。7は上半を欠く。先端部に加工が加えられる。7.8g。8は両側縁と先端部に加工が加えられる。3.3g。9は折断された上端に加工が加えられる。3.2g。すべて黒曜石製。

第407図4は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。10.9g。

270号土坑(第359図)

〔位置〕25Ⅱ地点。

〔構造〕ピットと重複するが、前後関係は不明である。(平面形)楕円形。(規模)157×80cm・深さ30cm前後を測る。ピットの重複が著しいため、坑底の正確な形状は定かではない。東壁は80°前後・西壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-65°-W。

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

270号土坑出土遺物(第388図13～19、第407図5)

第388図13は口縁部が内湾する土器。口唇部下に凹線が巡る。R Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線により曲線的な文様が描かれる。沈線間は磨り消される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

14はR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

15は隆帯が横走し、R Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂・片岩を多く含む。

16は隆帯が蛇行・曲線的に貼付される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

17は断面三角形の隆帯が横位に貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

18は条線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

19はLの無節斜縄文が施される。色調は灰褐色(7.5YR45/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。
第407図5は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。30.3g。

271号土坑(第359図)

〔位置〕25Ⅱ地点。

〔構造〕南側調査区外。(平面形)円形か。(規模)不明×120cm・深さ50cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)不明。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕勝坂式期。

271号土坑出土遺物(第388図20~27、第407図6・7)

第38図20は口唇端部に押捺が加えられる。剥落しているが、隆帯が横位に貼付され、隆帯に沿って押捺が施される。内面には結節沈線により区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

21は刻みが加えられた隆帯が縦位に貼付される。左側は結節沈線、右側は2条の沈線により区画が作られるようだ。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂・雲母を含む。

22は口唇部下が狭い無文帯になり2条の幅狭な連続爪形文が横走する。色調はにぶい橙色(10YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

23は口唇部下が狭い無文帯になる。外側竹管の押し引きによる連続爪形文・三角形の刺突文が横走し、以下、三角形の連続刺突文が斜位に密集して施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂・雲母を多く含む。

24は口唇部下が僅かにくびれる無文の土器。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

25は爪形文が連続して施される。色調はにぶい褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂・雲母を多く含む。

26は隆帯により長楕円形の区画が作られようか。隆帯に沿って連続刺突文が加えられる。区画内外には半截竹管の押し引きによる鋸歯文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

27は外側竹管による幅狭な押引文、内側竹管による幅広の押引文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第407図6・7は土器片錘。6は短軸、7は長軸に刻みが加えられる。重量は6が11.3g、7が20.9gを測る。

272号土坑(第359図)

〔位置〕25Ⅱ地点。

〔構造〕269Dに切られる。(平面形)楕円形か。(規模)不明×143cm・深さ40cm前後を測る。坑底は攪乱により破壊されている。壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-30°-E。

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕勝坂式期。

272号土坑出土遺物(第388図28~30)

28は口唇部上の突起部分。下位に僅かに連続刺突文がみられる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗

砂・輝石を僅かに含む。

29は隆帯により区画が作られようか。隆帯に沿って幅広の連続刺突文が加えられる。区画内には沈線が鋸歯状に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

30は隆帯が垂下し、空白部には沈線により枠取りがなされ、連続爪形文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

273号土坑(第359図)

〔位置〕 25Ⅱ地点

〔構造〕 172Y・10方に切られる。276Dとの前後関係は不明である。(平面形)長方形。(規模)278×115cm・深さ98cm前後を測る。坑底はほぼ平坦であるが、東側に傾斜している。壁は西側が60°前後の角度で立ち上がり、東側はほぼ垂直に立ち上がる。(長軸方位)N-3°-W。

〔覆土〕

- 1層 黒色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 黄褐色土。ロームブロック。
- 6層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 7層 明褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 8層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 9層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から多く出土した。

〔時期〕 加曽利EⅡ式期。

273号土坑出土遺物(第388図31~48)

31は上下逆の可能性がある。隆帯間に板状の施文具による極幅広に押引文が施文される。色調は褐灰色(10YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

32は直行・弧状に沈線を垂下させ、沈線間には刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

33は連続刺突文により、区画が作られようか。区画内は縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

34・35はキャリパー形の土器になろう。共にRLの単節斜縄文を地文とする。34は隆帯により渦巻文や区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。35は隆帯による区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

36は小波状口縁の土器。口唇部下に2条の沈線が横走する。RL単節斜縄文を地文とし、沈線による区画が作られようか。色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

37は口縁部に2本一対の隆帯を横走させ上下に区画する。上位は縦位の集合する沈線が充填される。下位は隆帯により幅狭の長楕円形の区画が作られようか。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

38は隆帯により半楕円状の区画が作られようか。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

39は口唇部下が狭い無文帯になる。交互刺突による鋸歯文が巡り、沈線が横走する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

40・41はキャリパー状土器の頸部から胴部にかけての破片。40は2本一対の隆帯が横走する。RL単節斜縄文を地文とし、隆帯が垂下するものである。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。41は3条の沈線が巡る。RLの単節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線・蛇行する沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

42はRLの単節斜縄文を地文とする。3条一組の沈線により曲線的なモチーフが描かれそのまま続けて隆帯による渦巻文になる。色調はにぶい褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

43はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯により渦巻文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

44・45はRLの単節斜縄文を地文とする。44は2本一対の隆帯と蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。45は2条の沈線が垂下し、沈線間は磨り消される。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

46～48は条線を地文とする。46は沈線を斜位に集合して施し、その上に角度を変えて斜位に隆帯を貼付する。蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。47は円形刺突文が縦列に施される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。48は2条の沈線が垂下し、沈線間は磨り消される。色調は赤褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

276号土坑(第136図)

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕 273Dと重複しているが、前後関係は不明である。(平面形) 不明。(規模) 不明×60cm・深さ40cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) E-W。

〔覆土〕 黒褐色土。ローム粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

276号土坑出土遺物(第389図1～4)

1は沈線が弧状に施される。色調は赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を含む。

2はRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

3はRLの単節斜縄文が施される。色調は赤褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

4はLの撚糸文が施される。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

277号土坑(第136図)

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕 48Jに切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 87×80cm・深さ21cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-79°-W。

〔覆土〕

1層 褐色土。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。

2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

278号土坑（第359図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）不整楕円形。（規模）124×110cm・深さ39cm前後を測る。坑底は中央が僅かにくぼみ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（長軸方位）N-65°-W。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 坑底に横位の状態で土器が出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

278号土坑出土遺物（第374図18、第389図5～8）

第374図18はほぼ完形。底部から直線的に開く器形である。口縁部は無文帯になる。口唇部上には刻みが施されて弧状の突起がそのまま綾杉状の刻みが加えられた隆帯になり垂下する。対面する側には口唇部上の小突起から同様の隆帯が垂下する。主文様は刻みがある隆帯により構成される。胴部中位に隆帯を横走させ、上下を区画する。胴部上位は隆帯により渦巻文や三角形・半楕円形などの区画が作られる。この区画内には沈線により三叉文・渦巻文などの文様が充填される。胴部下位にはR Lの単節斜縄文が施される。色調は赤褐色（5YR4/8）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第389図5は突出する口唇部には刻みが加えられる。口縁部は無文帯になり、矢羽根状の刻みが付けられた隆帯が垂下する。胴部には刻みを有する隆帯が「∧」状に貼付され、空白部には沈線により渦巻文などの文様が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

6は内屈気味の口縁部に縦位・斜位の集合する沈線、斜位の集合する押引文が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

7は刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付され、集合する沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5Y4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

8はR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

280号土坑（第359図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）98×87cm・深さ37cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-47°-E。

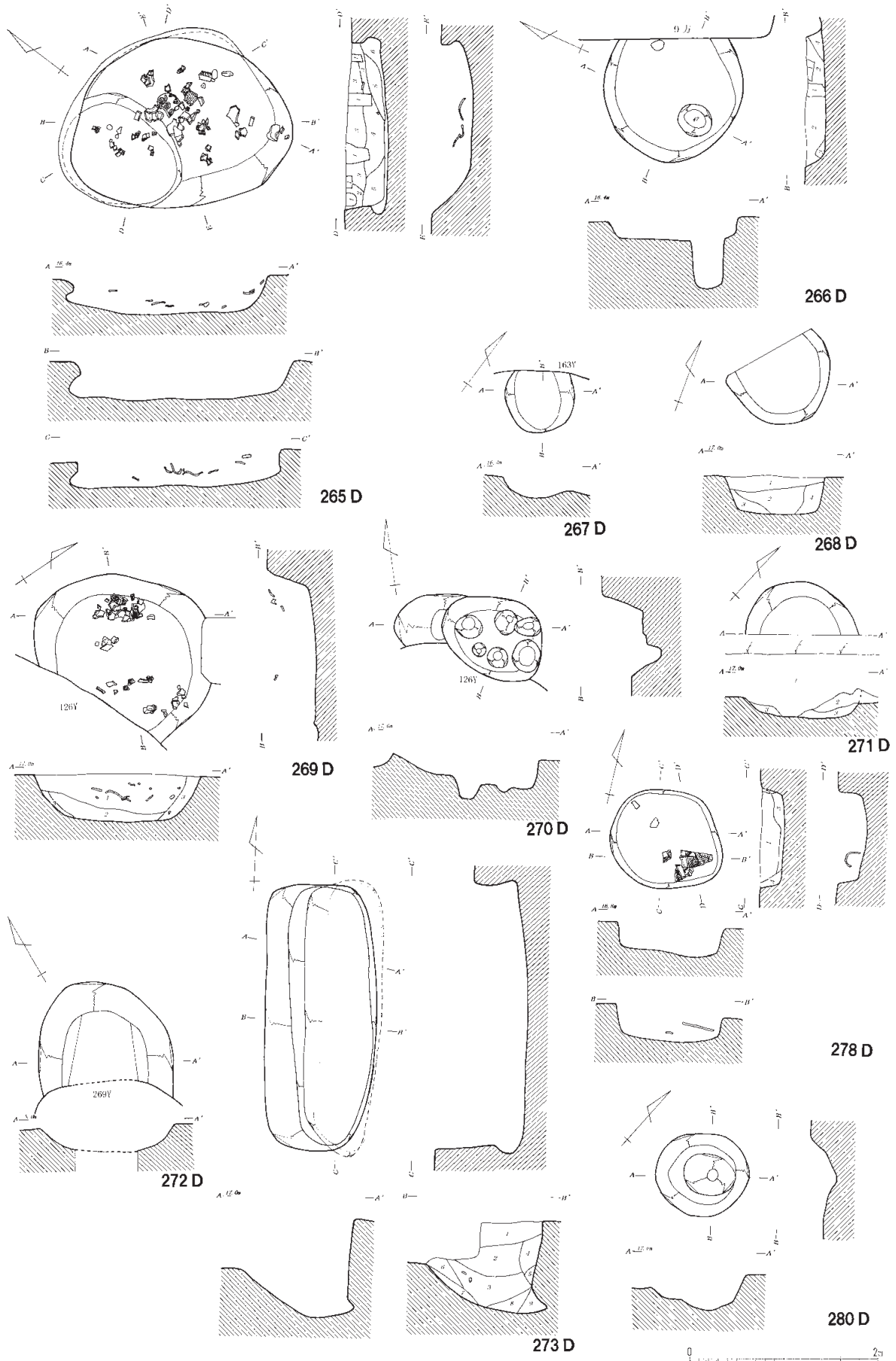
〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

280号土坑出土遺物（第389図9・10）

9・10は同一個体の可能性がある。9は2条の沈線を横走させ3分割する。上段はLの撚糸文を地文とし、波状沈線が巡る。中位は縦位に集合する沈線を施す。下位はLの撚糸文が僅かにみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。



第359图 265~273·278·280号土坑 (1/60)

286号土坑（第360図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕 北側のピットとの前後関係は不明である。（平面形）不整楕円形。（規模）260×132cm・深さ70cm前後を測る。坑底はほぼ平坦である。壁は70°前後の角度で立ち上がるが、南側はオーバーハングしていて、開口部より坑底が広がる。（長軸方位）N-77°-E。

〔覆土〕 堆積が不整合で、埋め戻された感が強い。

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 6層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 7層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 8層 黄褐色土。ロームブロック。
- 9層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 中期後半。

286号土坑出土遺物（第389図11～24、第407図8）

第389図11は刻みを有する隆帯が横位に貼付され、上下が沈線によってなぞられる。空白部には三叉文や集合する沈線が施され、それに沿って刺突文が加えられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

12は半截竹管を使用して三角形の区画が作られようか。区画内には沈線に沿って三角形の連続刺突文が施される。色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

13は隆帯により区画が作られようか。隆帯に沿って外側竹管による連続爪形文が加えられる。区画内には縦位の縦走る沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

14は波状沈線・外側竹管による連続爪形文が横位に施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

15は半截竹管により浮彫り状になる2条の沈線で区画が作られる。区画内には沈線に沿って連続爪形文・連続刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂、輝石を多く含む。

16は弧状に貼付された隆帯に沿って幅広の連続刺突文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

17・20はR L、18はL Rの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。17の色調はにぶい黄褐色（10YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。18の色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。20の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

19はR Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

21はR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

22は蛇行する条線を地文とする。沈線を縦位に施し、沈線間は磨り消される。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

23・24は条線が施される。23の色調は灰褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。24の色調はにぶい褐色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第407図8は土器片錘、長軸に刻みが付け加えられようか。20.4g。

287号土坑（第360図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕 北側は攪乱で破壊されている。（平面形）不整楕円形。（規模）130×103cm・深さ37cm前後を測る。坑底は僅かに凹凸があり、壁は70° 前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-32°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黄褐色土。ロームブロック。
- 4層 明褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 遺物の出土はなかった。

〔時期〕 中期。

289号土坑（第360図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕（平面形）不整楕円形。（規模）128×110cm・深さ20cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は70° 前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-64°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を含む。

〔遺物〕 遺物の出土はなかった。

〔時期〕 中期。

290号土坑（第360図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕 南側調査区外。（平面形）楕円形か。（規模）不明×175cm・深さ58cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70° 前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-50°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 遺物の出土はなかった。

〔時期〕 中期。

291号土坑（第360図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）141×127cm・深さ20cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80° 前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-79°-E。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黄褐色土。ロームブロック。
- 4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 遺物の出土はなかった。

〔時期〕 中期。

292号土坑（第360図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕（平面形）不整形。規模 120×95cm・深さ33cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）E-W。

〔覆土〕 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

293号土坑（第360図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕 東側調査区外。297Dに切られる。（平面形）不整形。規模 不明×100cm・深さ22cm前後を測る。坑底は僅かにくぼみ、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-45°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

293号土坑出土遺物（第389図25～30）

25は口縁部が内湾する土器。口縁部は無文帯になる。半截竹管を引いて区画が作られようか。区画内には細い半截竹管により斜位に集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

26は口縁部が狭い無文帯になり、押引文が波状に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

27は口縁部が外屈し、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

28は口唇部が肥厚し、円形の刺突が加えられる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

29は刻みが増えられた隆帯が貼付される。空白部には沈線による区画がつくられようか。区画内には集合する沈線が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

30は2本の隆帯が横位に貼付される。上位にはRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

294号土坑（第361図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕 西側は攪乱で破壊されている。299Dと重複するが、前後関係は不明。（平面形）不明。規模 不明×152cm・深さ25cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-35°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

295号土坑（第360図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕 297Dを切る。比較的大きい土坑であるが、ピットで破壊されている部分がある。（平面形）不整楕円形。

〔規模〕 210×119cm・深さ77cm前後を測る。坑底は僅かに凹凸があり、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-30°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。

3層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

4層 にぶい黄褐色土。ローム再堆積。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

296号土坑（第360図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）135×112cm・深さ21cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-8°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

297号土坑（第360図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕 東側調査区外。293Dを切り、295Dに切られる。（平面形）不明。（規模）深さ14cm前後を測る。坑底は僅かに隆起しており、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）不明。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 後世のピット。

3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 坑底から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

297号土坑出土遺物（第389図31、第390図1・2）

第389図31は波状口縁の土器。RLの単節斜縄文を地文とする。隆帯により楕円形の区画が作られ、沈線による蕨手状の懸垂文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第390図1・2は同一個体の可能性がある。LRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

298号土坑（第360図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕 (平面形) 隅丸方形。(規模) 85×75cm・深さ36cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-8°-E。

〔覆土〕

1層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

299号土坑（第361図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕 294Dと重複するが、前後関係は不明。(平面形) 隅丸方形。(規模) 70×65cm・深さ64cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-50°-E。

〔覆土〕 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

300号土坑（第361図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕 301Dを切る。(平面形) 隅丸方形。(規模) 113×104cm・深さ29cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は75°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-75°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

301号土坑（第361図）

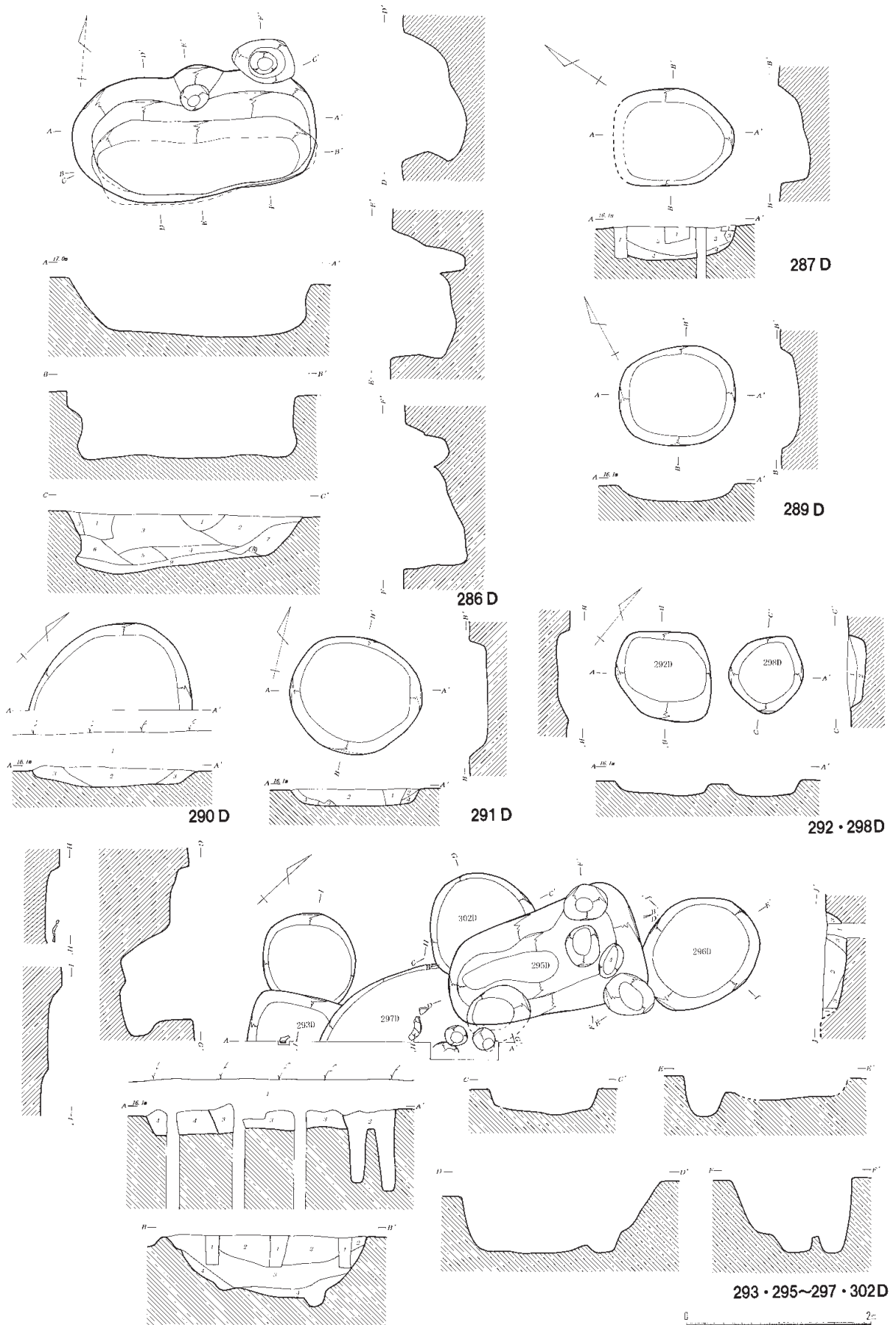
〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕 300Dに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明×95cm・深さ17cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-50°-E。

〔覆土〕 明褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。



第360图 286·287·289~293·295~298·302号土坑 (1/60)

302号土坑（第360図）

〔位置〕 25IV地点。

〔構造〕 295Dに切られる。（平面形）不明。（規模）不明×120cm・深さ20cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-70°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

303号土坑（第361図）

〔位置〕 25V地点。

〔構造〕（平面形）不整長方形。（規模）107×96cm・深さ19cm前後を測る。坑底は平坦で南側にピットがある。壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-76°-E。

〔覆土〕

1層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

304号土坑（第361図）

〔位置〕 25V地点。

〔構造〕 北東側が攪乱により大きく破壊されていて、全体の形状は不明である。（平面形）不明。（規模）不明×120cm・深さ26cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-42°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

304号土坑出土遺物（第390図3～7）

3は曾利系の土器。沈線を口唇端部から口縁部にかけて連続させて施文し、重弧文を形成する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

4はRLの単節斜縄文を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。6は条線を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

6は条線を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7は沈線が垂下し、斜位の沈線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

305号土坑（第361図）

〔位置〕 25V地点。

〔構造〕（平面形）長方形。（規模）89×57cm・深さ86cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は80°前後の角度で立

ち上がる。(長軸方位) $N-65^{\circ}-E$ 。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 2層 明褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

306号土坑 (第361図)

〔位置〕 25V地点。

〔構造〕 南側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明 \times 120cm・深さ25cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は 60° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) $N-13^{\circ}-W$ 。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

306号土坑出土遺物 (第390図8~10)

8は隆帯が弧状に貼付される。隆帯上には沈線が加えられる。空白部には隆帯に沿って沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

9は2条の沈線が垂下する、横位に沈線を3条施して、沈線間には縦位の集合する沈線を充填する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

307号土坑 (第361図)

〔位置〕 25V地点。

〔構造〕 東側はピットで破壊されている。(平面形) 楕円形。(規模) 119 \times 103cm・深さ20cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は 70° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) $N-47^{\circ}-E$ 。

〔覆土〕

- 1層 後世のピット。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。

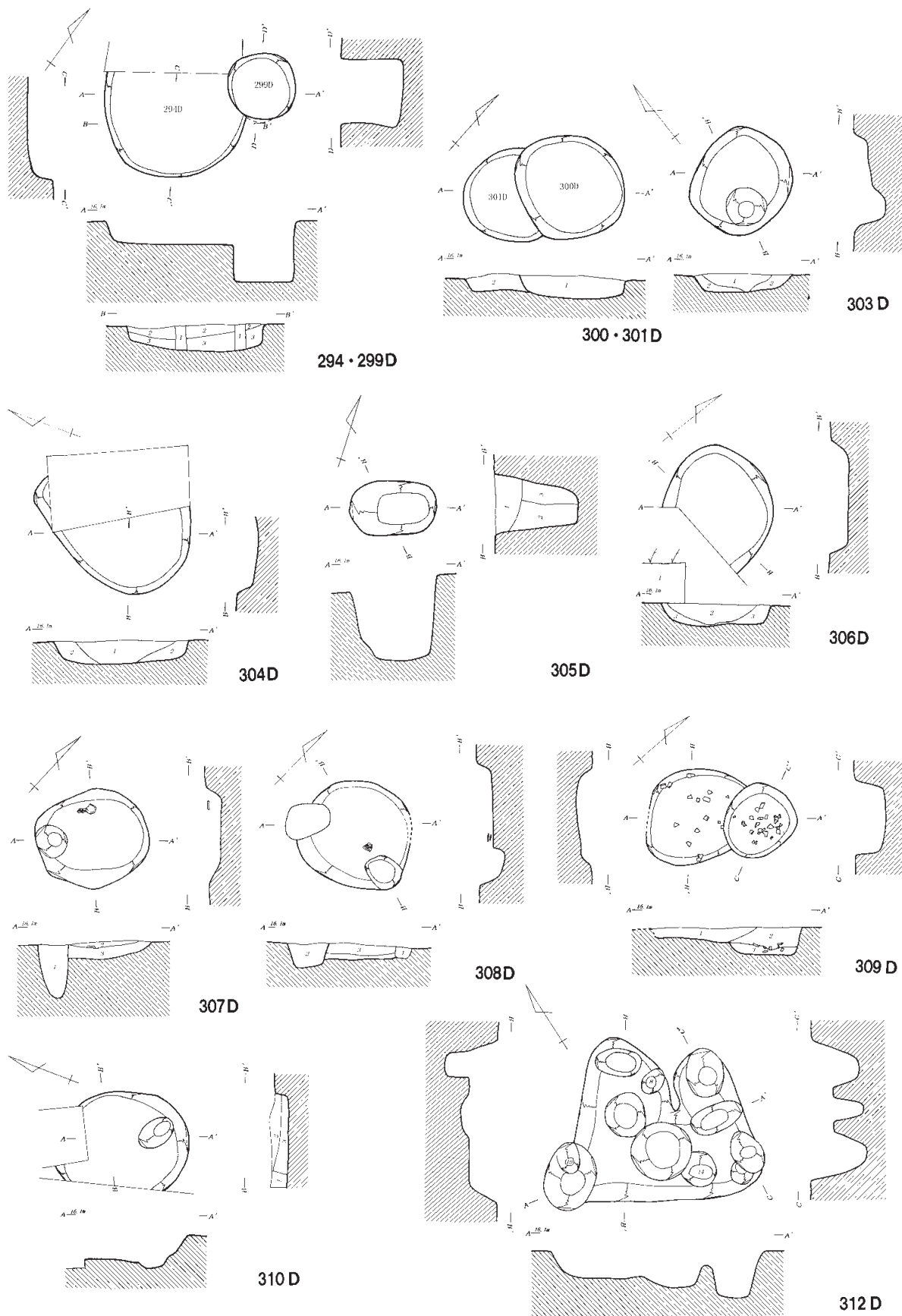
〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

307号土坑出土遺物 (第390図14~23、第407図9)

14は波状口縁の土器。口唇端部には沈線が巡る。口唇部下に高い隆帯を貼付し、隆帯上には鎖状の沈線が施される。隆帯以下にはRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線を横走し沈線による区画が作られるようである。区画内には縦位の沈線が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

15は2条の沈線を垂下させ、左側には縦位の長楕円形の区画が作られようか。区画内には縦位の沈線がみられる。



第361図 294・299～301・303～310・312号土坑 (1/60)

右側は斜位の沈線を施し、刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

16は斜位・横位に刻みが加えられた隆帯が貼付される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

17は横位の沈線により上下を画する。上位は沈線による文様が描かれる。下位は横位の沈線間に刻みが加えられるようである。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

18は2条の沈線が横走する。上位には沈線と結節沈線が垂下し、沈線間に刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

19は刻みが加えられた2本の隆帯が横走する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20は2条の沈線を横走させ上下を画する。上位には押引文が縦位に集合して施される。下位には不明瞭であるが、R Lの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

21は隆帯下に幅広の連続刺突文が加えられ、R Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

22は隆帯を横走させ、頭部が渦巻文による懸垂文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂・雲母を含む。

23は屈曲部以上がR Lの単節斜縄文、以下が無文になる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

第407図9は土器片錘。長軸に刻みが加えられようか。85.7g。

308号土坑(第361図)

〔位置〕25V地点。

〔構造〕東側と西側の壁際がピットで破壊されている。(平面形)不整形。(規模)120×110cm・深さ15cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-45°-E

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から土器小片が僅かに出土した。

〔時期〕中期。

308号土坑出土遺物(第390図11~13)

11は刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付される。半截竹管による2条の沈線で区画が作られようか。区画内には斜位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

12は沈線により区画が作られようか。区画内には半截竹管による集合する沈線が斜位に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

13は2条の沈線が横位に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂・雲母を多く含む。

309号土坑(第361図)

〔位置〕25V地点。

〔構造〕2基の土坑の重複の可能性が大きい、同一のものとして記述する。(平面形)不整形。(規模)長軸155×北側77cm・南側100cm。深さ北側29cm・南側15cm前後を測る。坑底は共にほぼ平坦である。壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-45°-E。

〔覆土〕

1層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

2層 暗褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。

3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕 覆土下位から多く出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

309号土坑出土遺物（第390図24～34、第406図10）

第390図24はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯により半楕円形の区画が作られる。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

25は隆帯により楕円形の区画が作られるようか。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

26は曾利系の土器。沈線による重弧文を施す。上位は半楕円形の区画になろうか。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

27・28はRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。27の色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。28の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

29は条線を地文とする。沈線を横走させて区画を作る。区画内には縦位の沈線が間隔をあけて施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

30は条線を地文とし、2条の沈線が弧状に対面して施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

31・32は条線が施される。31の色調はにぶい褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。32の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

33は沈線が垂下し、両脇には沈線を弧状に多条に施し、肋骨文風に仕上げる。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には細砂を多く含む。

34は隆帯により区画が作られようか。区画内には刺突文が密集して施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を含む。

第406図10は使用痕のある縦長の剥片。右側縁下位に刃こぼれが認められる。1.7g。黒曜石製。

310号土坑（第361図）

〔位置〕 25V地点。

〔構造〕 北側と西側が攪乱で破壊されている。（平面形）不整楕円形。（規模）不明×130cm・深さ18cm前後を測る。坑底は平坦で、南壁下にピットを有する。壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-20°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。

3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

310号土坑出土遺物（第390図35・36）

35は部分的に刻みが増えられた隆帯により区画が作られようか。隆帯に沿って押引文が施される。色調は赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

36は尖頭状の突起。沈線による渦巻文が施され、円孔が穿たれる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

311号土坑（第148図）

〔位置〕 25V地点。

〔構造〕 52Jを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）153×145cm・深さ38cm前後を測る。坑底は中央部分でややくぼみ、南西側にピットを有する。壁は70°前後で立ち上がる。（長軸方位）N-77°-W。

〔覆土〕

1層 褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。

2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。

4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

311号土坑出土遺物（第390図37～45）

37は隆帯による渦巻文が貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

38はLRの単節斜縄文を地文とし、太沈線が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

39は隆帯により区画が作られようか。以下、RLの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

40はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

41～44は条線を地文とする。41は2本の隆帯が横位に貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。42は2条の沈線が弧状に施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。43は多条の沈線が斜位に施される。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。44は連弧文系の土器になろうか。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

45は3条の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細砂・輝石を多く含む。

312号土坑（第361図）

〔位置〕 25V地点。

〔構造〕 ピットの複合であるが、土坑として取り扱った。（平面形）不整形。（規模）220×175cm・深さ29cm前後を測る。（長軸方位）N-12°-W。

〔覆土〕

上層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

下層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

312号土坑出土遺物（第391図1・2）

1は隆帯により区画が作られようか。区画内にはLRの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

313号土坑（第362図）

〔位置〕 25V地点。

〔構造〕（平面形）不整形。規模）127×113cm・深さ20cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、西側に深さ40cmのピットがある。壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-80°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

313号土坑出土遺物（第391図3・4）

3は沈線が横走し、以下、弧状の沈線が集合して施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

4はRLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

315号土坑（第362図）

〔位置〕 26地点。

〔構造〕（平面形）円形。規模）123×119cm・深さ28cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

1層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

2層 明褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

316号土坑（第362図）

〔位置〕 26地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。規模）182×176cm・深さ22cm前後を測る。坑底は僅かに凹凸があり、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-5°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。

2層 明褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

316号土坑出土遺物（第391図5～10）

5は断面三角形の隆帯が垂下する。連続する刺突文と波状沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

6は刻みが増えられた隆帯が横位に貼付される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7は口唇部下に狭い無文帯をもち、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎

土には細砂を僅かに含む。

8はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい橙色(7.5YR 7/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9はRLの単節斜縄文が施され、斜位の沈線がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

10はLの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

318号土坑(第362図)

〔位置〕26地点。

〔構造〕東側・北側調査区外。(平面形)不明。(規模)深さ35cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)不明。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕勝坂式期。

318号土坑出土遺物(第391図11～21、第406図11)

第391図11は部分的に刻みが加えられた微隆帯により楕円形の区画が作られようか。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

12はヒダ状文が多段に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

13は弧状・波状に沈線が施され、沈線間には刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

14は隆帯が弧状に貼付される。空白部には連続刺突文や波状沈線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂・片岩を含む。

15は隆帯が渦巻状に貼付される。隆帯に沿って連続爪形文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

16は隆帯が弧状に貼付され、半截竹管の刺突が加えられる。以下、Lの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

17は斜位の刻みが加えられた隆帯が横位に貼付される。以下、LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

18はヒダ状文が横位に連続して施され、2本の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂・雲母を含む。

19は口唇部下に凹線が巡る。LRの単節斜縄文が凹線を境にして方向を変えて施される。色調は灰褐色(7.5YR 4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20は胴部下位から底部にかけての破片。隆帯により長楕円形の区画が作られる。区画内には隆帯に沿って刺突文が連続して加えられ、RLの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

21は隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内には集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5

YR4/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

第406図11は使用痕がある縦長剥片。頭部を欠く。右側縁に刃こぼれが認められる。2 g。黒曜石製。

320号土坑 (第362図)

〔位置〕 26地点。

〔構造〕 北側に巨木があり、北壁の立ち上がりは確認できなかった。(平面形) 隅丸方形。(規模) 110×100cm・深さ16cm前後を測る。坑底は東側から西側に15° 前後の角度をもつ。壁は70° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-63°-W。

〔覆土〕 暗褐色土。ローム粒子を多くを含む。

〔遺物〕 覆土中から土器片が出土したが多くはない。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

320号土坑出土遺物 (第391図22~25、第407図10)

第391図22は浅鉢形土器になろうか。口縁部は「く」字状に内屈する。口縁部には隆帯により半楕円形の区画が作られ、区画内には縦位の集合する沈線が充填される。胴部は無文になる。赤彩の痕跡が認められる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

23・24は同一個体。3本一組の隆帯を弧状に貼付する。空白部には縦位の沈線、弧状の隆帯間には放射状に沈線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

25は条線が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第407図10は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。85.7 g。

321号土坑 (第362図)

〔位置〕 26地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 163×157cm・深さ40cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(長軸方位) N-25°-W。

〔覆土〕 暗褐色土を基調とする。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から多く出土した。

〔時期〕 加曾利E II 式期。

321号土坑出土遺物 (第392図 1~16)

1は波状口縁の土器。口唇部下に凹線が巡り、隆帯により区画が作られる。区画内にはRLの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

2は口縁部にLRの単節斜縄文が施される。以下、隆帯による区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

3はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯による楕円形の区画が作られようか。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は隆帯を渦巻状に貼付し、RLの単節斜縄文を施す。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

5はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯により長方形の区画が作られようか。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

6はLRの単節斜縄文を方向を変えて施し地文とする。隆帯により楕円形の区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

7は2条の沈線が横走し、沈線間には円形の刺突が加えられる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

8・9は条線が施される。8は口縁部に沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。9の色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

10は曽利系の土器。肥厚する口唇端部及び口縁部には斜位の沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

11・14はRL、12・15はLRの単節斜縄文を地文とする。2条一对の沈線を垂下させ、沈線間は磨り消される。11の色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。12の色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。14の色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、胎土には細砂を含む。15の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

13はLRの単節斜縄文を地文とし、2本一对の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

16は条線が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)を呈し、胎土には砂砂を僅かに含む。

325号土坑(第362図)

〔位置〕26地点。

〔構造〕324Dに切られる。(平面形)不明。(規模)不明×70cm・深さ65cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は北側が15cm前後オーバーハングしている。北側は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-43°-E。

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕中期。

326号土坑(第362図)

〔位置〕26地点。

〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)137×117cm・深さ59cm前後を測る。坑底は東側にやや傾斜をもつ。壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-59°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕覆土中位から多く出土した。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

326号土坑出土遺物(第374図19、第392図17~22、第404図1)

第374図19は無文の口縁部が外反し、口唇部は肥厚する。頸部には直行・波状の隆帯が横走する。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第392図17はLR、18はRLの単節斜縄文を地文とし、口唇部下に凹線が巡る。17の色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。18の色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

19はLRの単節斜縄文を地文とし、直行・蛇行する沈線が垂下する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

20はRL、21はLRの単節斜縄文を地文とする。2条一对の沈線を垂下させ、沈線間を磨り消す。20の色調はに

ぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。21の色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

22は条線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第404図1は打製石斧。刃部側を欠く。横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。105g。粘板岩製。

330号土坑(第362図)

〔位置〕26地点。

〔構造〕部分的に攪乱により破壊されている。(平面形)楕円形。(規模)149×140cm・深さ25cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は南側が80°前後、北側は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-7°-E。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中位に遺物を含む。

〔時期〕中期後半。

330号土坑出土遺物(第392図23~26)

23は口縁部が無文帯になり、円形の刺突文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

24は半截竹管による蛇行する条線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

25は条線が施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

26はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線による文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

332号土坑(第362図)

〔位置〕30地点。

〔構造〕北側調査区外。攪乱により全体の形状は不明である。(平面形)不明。(規模)不明×95cm・深さ22cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、西壁側はほぼ垂直に立ち上がる。(長軸方位)N-45°-W。

〔覆土〕

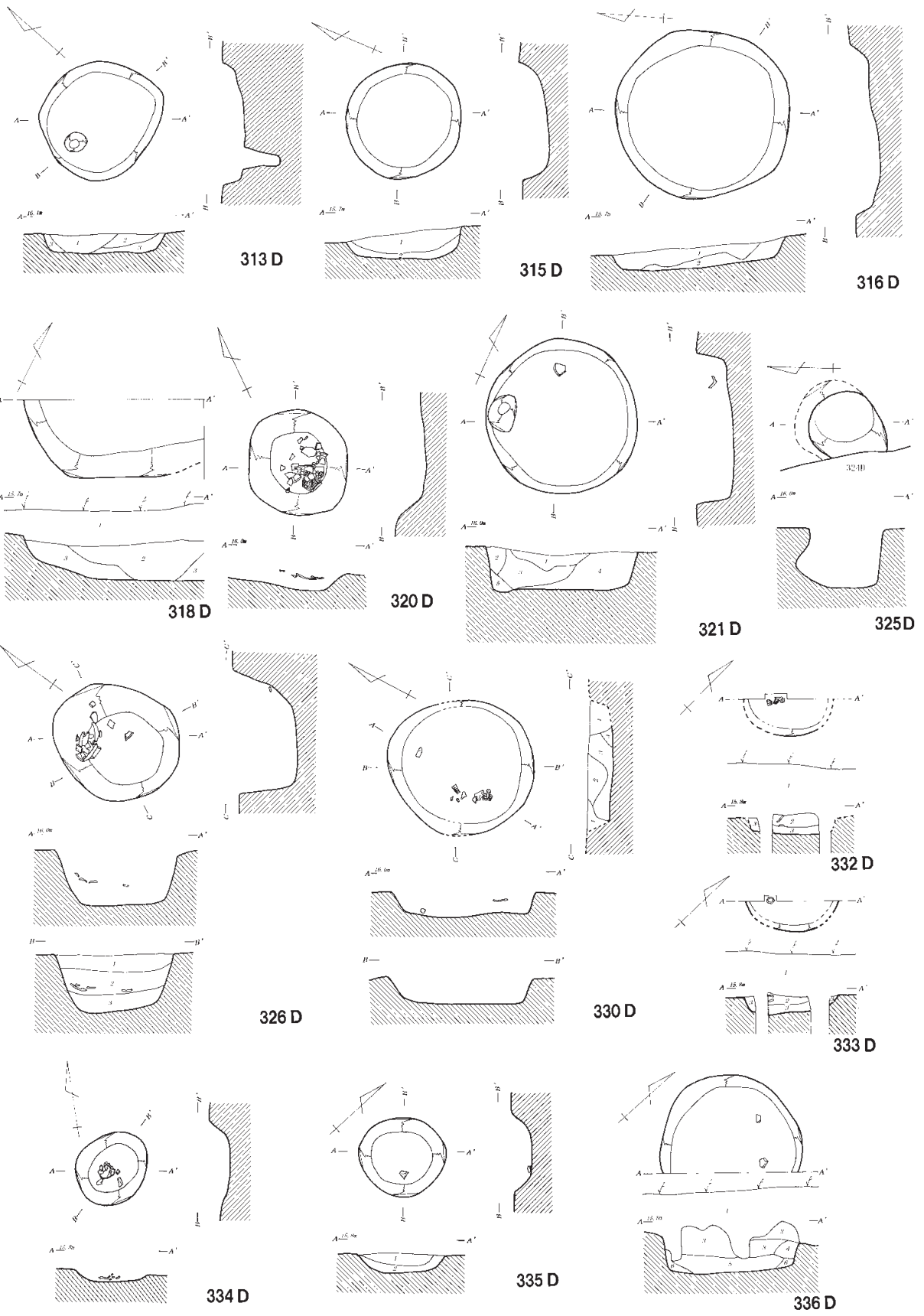
- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土上層から大型土器片が出土。

〔時期〕勝坂式期。

332号土坑出土遺物(第392図27、第404図2)

第392図27は大型の土器になる。刻みを有する隆帯を横走させ上下を画する。上位は縦位の沈線と流水文状の沈線が施される。流水文状の沈線間には刻みが加えられる。下位は斜位に貼付された隆帯により分割される。空白部の右側には集合する沈線が施される。左側にはLRの単節縄文が付加された隆帯が貼付される。隆帯間は沈線による曲線的な文様が描かれ、刻みが加えられる。縄文付加の隆帯の左側は、隆帯から続けて縄文を施し地文とし、幅



第362図 313・315・316・318・320・321・325・326・330・332~336号土坑 (1/60)

広の連続刺突文と沈線が施文される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第404図2は打製石斧。刃部側のみ遺存。縦長の剥片を使用し、表面には礫面を残す。刃部は円刃状を呈する。39.6g。結晶片岩製。

333号土坑(第362図)

〔位置〕30地点。

〔構造〕北側調査区外。攪乱により全体の形状は不明である。(平面形)不明。(規模)不明×97cm・深さ20cm前後を測る。坑底はやや凹凸があり、壁は東側が60°前後、西側は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)不明。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

333号土坑出土遺物(第393図1・2)

1はLの捺糸文を地文とする。沈線を横走させ上下を画する。上位は沈線が弧状に施される。下位は蛇行する沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

2は沈線が集合して施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

334号土坑(第362図)

〔位置〕30地点。

〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)82×70cm・深さ13cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は50°前後の角度でゆるやかに立ち上がる。(長軸方位)N-52°-E。

〔覆土〕暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土下位から出土した。

〔時期〕加曾利E I式期。

334号土坑出土遺物(第374図20、第393図3、第404図3)

第374図20はキャリパー形の土器。頸部以上1/4程の遺存度。口唇部上から口縁部下端にかけて、上面・前面・側面に沈線に縁取りされた孔がある突起が付く。隆帯により楕円形の区画が作られ、区画内には集合する沈線が充填される。頸部は無文帯になる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第393図3は半截竹管により口唇部から同心円状の文様が施されようか。空白部には半截竹管の刺突が加えられる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第404図3は打製石斧。刃部を欠く。横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。145g。硬砂岩製。

335号土坑(第362図)

〔位置〕30地点。

〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)91×84cm・深さ20cm前後を測る。坑底は僅かにくぼみ、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-42°-E。

〔覆土〕

1層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 坑底から礫が出土したのみである。

〔時期〕 中期。

336号土坑（第362図）

〔位置〕 30地点。

〔構造〕 南側調査区外。（平面形）楕円形。（規模）不明×150cm・深さ36cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。（長軸方位）不明。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。

5層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

337号土坑（第363図）

〔位置〕 30地点。

〔構造〕 北側調査区外。339Dに切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×168cm・深さ35cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-45°-W。

〔覆土〕

4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

337号土坑出土遺物（第393図4～9）

4は波状口縁の土器。押捺が加えられた隆帯が貼付され、隆帯の上縁には半截竹管の刺突による連続した半円文が、下縁には外側竹管による連続爪形文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

5はRLの単節斜縄文を地文とし、2本の隆帯が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6はLの撚糸文を地文とし、隆帯が曲線的に貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

7はLの撚糸文を地文とし、蛇行する沈線が垂下する。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8は口縁部が折り返し状になる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

9は胴部下位から底部にかけての破片。Rの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

339号土坑（第363図）

〔位置〕 30地点。

〔構造〕 337Dを切る。（平面形）不整楕円形。（規模）119×112cm・深さ45cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-80°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。

3層 明褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

339号土坑出土遺物（第393図10～13、第407図11）

第393図10は縦位に多条の沈線を施す。沈線間には刻みや交互刺突が加えられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11はLの撚糸文を横位に施し地文とし、3本の隆帯が縦位に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

12はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、粗砂を多く含む。

13はLRの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第407図11は土器片錘。長軸に刻みが加えられようか。17.5gを測る。

340号土坑（第363図）

〔位置〕 30地点。

〔構造〕 北側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明×118cm・深さ27cm前後を測る。坑底は僅かに播鉢状で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-26°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

340号土坑出土遺物（第393図14・15）

14は口唇部に内側竹管による連続爪形文が施される。Lの撚糸文を地文とし、半截竹管による3条の横線と2条一対の弧線が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

15は上位が沈線による文様、下位がRLの単節斜縄文になる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

341号土坑（第363図）

〔位置〕 30地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）118×111cm・深さ35cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（長軸方位）N-85°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

341号土坑出土遺物（第393図16～21）

16は口唇部下に広い無文帯をもつ。隆帯により渦巻文と区画が作られようか。区画内には三叉文と集合する短沈線が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

17は隆帯に刻みが増えられ、以下、三角形の連続刺突文が縦位に集合して施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

18は隆帯に沿って外側竹管による連続爪形文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

19は鎖状の隆帯が貼付される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20は斜位の刻みが増えられた隆帯が横走し、沈線が縦位に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

21はR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

342号土坑（第167図）

〔位置〕 30地点。

〔構造〕 59 Jを切る。（平面形）楕円形。（規模）110×95cm・深さ60cm前後を測る。坑底は凹凸があり、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-15°-E。

〔覆土〕 暗褐色土を基調とする。ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

343号土坑（第363図）

〔位置〕 30地点。

〔構造〕 16方に切られる。南側は後世のピットにより攪乱されている。（平面形）不明。（規模）不明×130cm・深さ43cm前後を測る。坑底は南西側に傾斜する。壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）不明。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 明褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

343号土坑出土遺物（第393図22～24）

22は肥厚する口唇部及び隆帯に沿って、外側竹管による連続爪形文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）

を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

23は刻みが加えられた隆帯が縦位に貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

24は縦位に沈線が施され、沈線間には連続する刺突文が加えられる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

344号土坑(第363図)

〔位置〕30地点。

〔構造〕59Jを切る。(平面形)楕円形。(規模)166×154cm・深さ52cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-75°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。

2層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

3層 明褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。

4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

344号土坑出土遺物(第393図25~29、第407図12)

第393図25は肥厚する口唇部下に2本の隆帯が横走する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

26は無文の口唇部下に沈線が横走し、以下、斜位の沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を含む。

27は拓影図では不鮮明であるが、無文の口唇部下に太沈線が巡り、以下、条線が縦位に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

28は蛇行する沈線が垂下し、連続刺突文が横位に施される。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

29は隆帯が垂下し、空白部には沈線による文様が描かれる。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

第407図12は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。74.2g。

379号土坑(第363図)

〔位置〕35地点。

〔構造〕北側調査区外。259Yに切られる。(平面形)不明。(規模)不明×80cm・深さ32cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)不明。

〔覆土〕

1層 後世のピット。

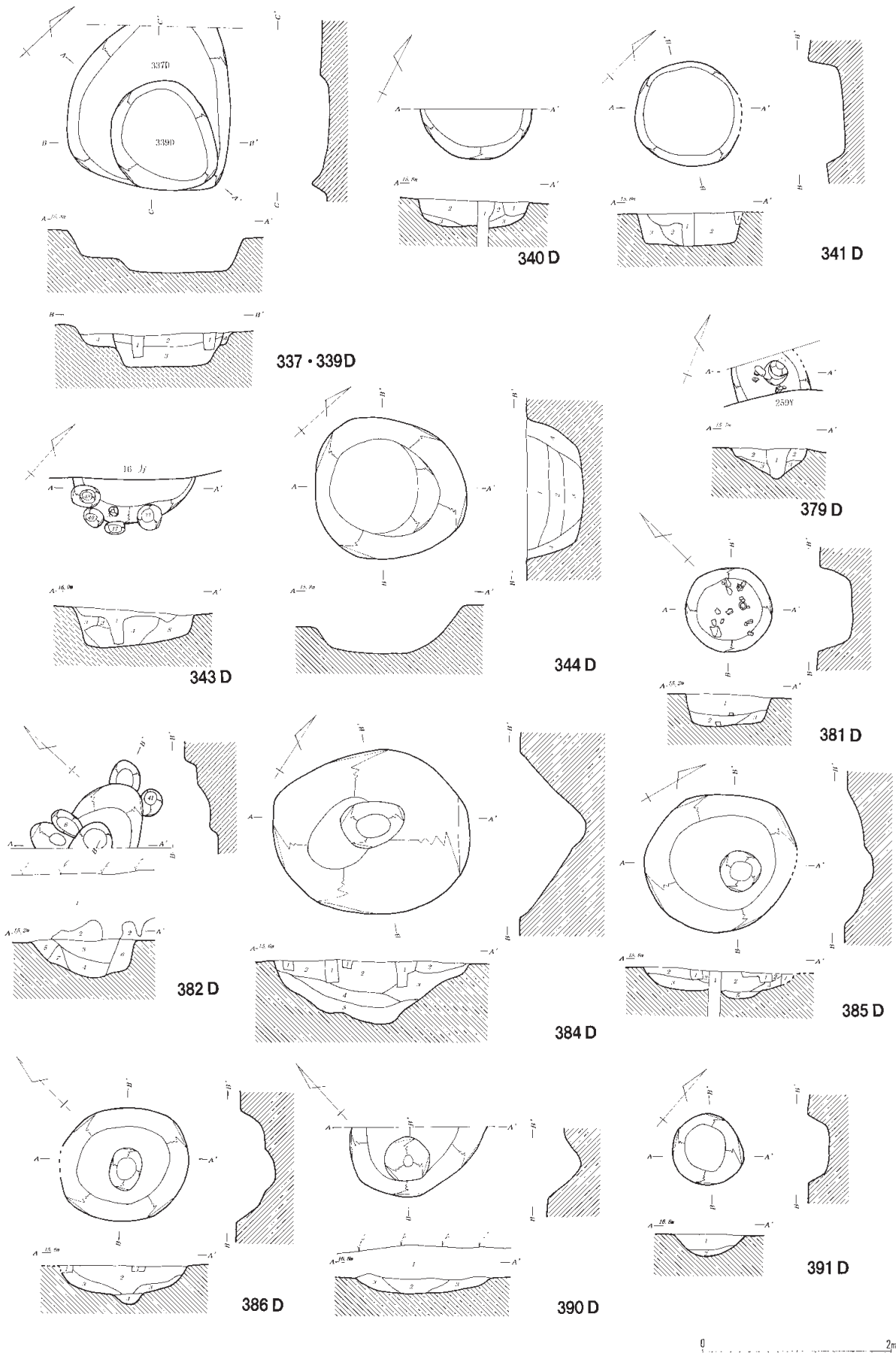
2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から礫と土器片が僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

379号土坑出土遺物(第393図30・31)



第363图 337·339~341·343·344·379·381·382·384~386·390·391号土坑 (1/60)

30は胴部1/2程の破片。くびれ部の径8cm前後を測る。LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

31はRLの単節斜縄文を地文とし、斜位に沈線が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

381号土坑(第363図)

〔位置〕36地点。

〔構造〕(平面形)円形。(規模)93cm×90cm・深さ41cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土(5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 2層 黒褐色土(5YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から礫が多く出土した。

〔時期〕勝坂式期。

381号土坑出土遺物(第393図32~35)

32は沈線が横走り、環状文・集合する連続刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

33は2条の波状沈線が横走る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

34は浮彫り状の隆帯により文様が構成される。空白部には条線が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

35は隆帯が2本横走り、隆帯に沿って蓮華文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

382号土坑(第363図)

〔位置〕36地点。

〔構造〕南側調査区外。(平面形)不整形。(規模)不明×80cm・深さ28cm前後を測る。ピットが重複したような形状を呈するため、不定形である。(長軸方位)N-78°-E。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 5層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。
- 6層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。非常に硬質。
- 7層 にぶい黄褐色土(7.5YR4/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

382号土坑出土遺物(第393図36)

上位は隆帯が横位・斜位に貼付される。下位はLの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈

し、胎土には細礫を多く含む。

384号土坑（第363図）

〔位置〕 13Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）211×177cm・深さ53cm前後を測る。断面は挿鉢状で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-72°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。

4層 褐灰色土（10YR4/1）。ローム粒子を多く含む。硬質。

5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

384号土坑出土遺物（第393図37・38）

37は刻み加えられた隆帯及び沈線が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

38は拓影図が不鮮明であるが、波状沈線が横位に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

385号土坑（第363図）

〔位置〕 13Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）161×146cm・深さ23cm前後を測る。坑底は平坦で、中央にピットがある。壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-9°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 褐灰色土（10YR4/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

385号土坑出土遺物（第393図39・40）

39は隆帯に沿って幅広の連続刺突文と波状沈線が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

40は条線を地文とし、沈線が斜位に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

386号土坑（第363図）

〔位置〕 13Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）141×125cm・深さ44cm前後を測る。坑底は中央にピットがある。全体に挿鉢状

である。壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-81°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 4層 にぶい黄褐色土。(10YR4/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

386号土坑出土遺物(第393図41・42)

41はR Lの単節斜縄文を地文とし、横位・縦位に隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

42は隆帯に沿って外側竹管による連続爪形文が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

390号土坑(第363図)

〔位置〕 39 I 地点。

〔構造〕 北側調査区外。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×130cm・深さ15cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-70°-E。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

390号土坑出土遺物(第393図43~47)

43は波状沈線が斜位に施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

44は刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付される。色調は灰褐色(7/5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

45はL Rの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

46は刻みが加えられた隆帯と交互刺突による鋸歯文が横位に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

47はRの無節斜縄文を地文とし、押引文が縦位に施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

391号土坑(第363図)

〔位置〕 39 I 地点。

〔構造〕 (平面形) 不整形円形。(規模) 78×73cm・深さ23cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-84°-E。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。
- 2層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

391号土坑出土遺物（第393図48）

肥厚する口唇端部に刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

392号土坑（第364図）

〔位置〕 39 I 地点。

〔構造〕（平面形）隅丸方形。（規模）62×60cm・深さ20cm前後を測る。坑底はやや凹凸があり、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-84°-E。

〔覆土〕 灰褐色土（7.5YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

392号土坑出土遺物（第393図49～51）

49は口唇部下に半截竹管による3条の沈線が巡り、三角形の刺突が乱雑に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

50は隆帯に沿って幅広の角押文が施される。上位には波状沈線がみられる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

51は半截竹管による3条の沈線が鉤手状に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

393号土坑（第364図）

〔位置〕 24 II 地点。

〔構造〕 80 J に切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×180cm・深さ22cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-10°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰褐色土（7.5YR4/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土上層から礫が多く出土した。

〔時期〕 加曾利 E II 式期。

393号土坑出土遺物（第393図52～60）

52は2条一対の沈線が曲線状に施され、沈線間には連続爪形文が加えられる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

53は2条一対の沈線により楕円形の区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

54は低い隆帯が横走り、RLの単節斜縄文が方向を変えて施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

55はLRの単節斜縄文を地文とし、複数の沈線が弧状に施される。色調はにぶい黄橙色（10YR7/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

56はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

57はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が弧状に施される。沈線間は磨り消される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

58は沈線が横走し、蛇行する条線が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

59は半截竹管による3条の沈線を横位・縦位に施し、区画を作ろうか。区画内は条線になる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

60は条線が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

394号土坑(第364図)

〔位置〕24Ⅱ地点。

〔構造〕14Hに切られる。複数のピットと重複するが、土坑との前後関係は不明である。(平面形)不明。(規模)深さ34cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)不明。

〔覆土〕灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕勝坂式期。

394号土坑出土遺物(第394図2・3)

2は口縁部に突出した小突起が付き、口唇端部には刻みが施される。押捺が加えられた隆帯により、口縁部と頸部が画される。口縁部は楕円形の区画が作られるようで、区画内には外側竹管による連続爪形文が充填される。頸部下位にはヒダ状の圧痕がみられる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

3は綾杉状の刻みが加えられた隆帯が横走し、空白部には沈線による文様が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

395号土坑(第364図)

〔位置〕24Ⅱ地点。

〔構造〕22Jに切られる。(平面形)不明。(規模)深さ41cm前後を測る。坑底は播鉢状で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)不明。

〔覆土〕黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。図示できるものはなかった。

〔時期〕中期。

396号土坑(第364図)

〔位置〕24Ⅱ地点。

〔構造〕14Hの床面下で確認する。(平面形)円形。(規模)79×76cm・深さ45cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

上層 にぶい赤褐色土(5YR4/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。

下層 黄褐色土(10YR5/6)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕覆土中位から大型土器片が出土。

〔時期〕勝坂式期。

396号土坑出土遺物（第394図1）

内湾する口縁部は無文帯になる。隆帯を2本横走させ、その間に幅広の連続刺突文・2条の波状沈線・幅広の連続刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂・輝石を含む。

397号土坑（第364図）

〔位置〕24Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）不整形。（規模）160×100cm・深さ23cm前後を測る。北東側にピットがある。坑底はやや凹凸がある。壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-48°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰褐色土（7.5YR4/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。

4層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや粘質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

397号土坑出土遺物（第394図4～6）

4は刺切文が横位に連続して施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

5は刻みが加えられた隆帯が渦巻状に貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

6は2本の隆帯が横走し、上位には沈線による文様が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

400号土坑（第364図）

〔位置〕13Ⅳ地点。

〔構造〕攪乱により部分的に破壊されている。（平面形）不整形円形。（規模）136×122cm・深さ33cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-11°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。やや粘質。

〔遺物〕覆土上位から多く出土した。

〔時期〕勝坂式期。

400号土坑出土遺物（第394図7～17、第407図13）

第394図7は幅広の角押文と三角押文が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

8は沈線を弧状に施し、沈線間には連続刺突文が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

9は刻みが加えられた隆帯が2本貼付される。隆帯に沿って蓮華文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

10は刻みが加えられた隆帯により区画が作られようか。区画内には隆帯に沿って連続爪形文が施される。拓影図では不鮮明であるが、下位にはRLの単節斜縄文がみえる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗

砂を多く含む。

11は2条の沈線により区画が作られようか。区画内には縦位の集合する沈線が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

12は沈線間に蓮華文が2列施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

13は半截竹管の押し引きによる列点文が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

14・16は同一個体か。太い半截竹管による浮彫り状の隆帯が直線状・弧状に施され、空白部には蓮華文がみられる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

15は上位から、振幅の小さい波状沈線・幅広の連続刺突文・細い隆帯・幅広の連続刺突文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

17はLRの単節斜縄文が施され、下位は無文になる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

第407図13は土器片錘。長軸に刻みが加えられる。13.9g。

401号土坑(第364図)

〔位置〕13IV地点。

〔構造〕北側調査区外。(平面形)不明。(規模)不明×135cm・深さ28cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)不明。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(2.5Y3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。硬質。

3層 黒褐色土(2.5Y3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物がなかった。

〔時期〕中期。

402号土坑(第364図)

〔位置〕13IV地点。

〔構造〕土坑が重複した形状を呈する。(平面形)不整形。(規模)115×105cm・深さ24cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-63°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

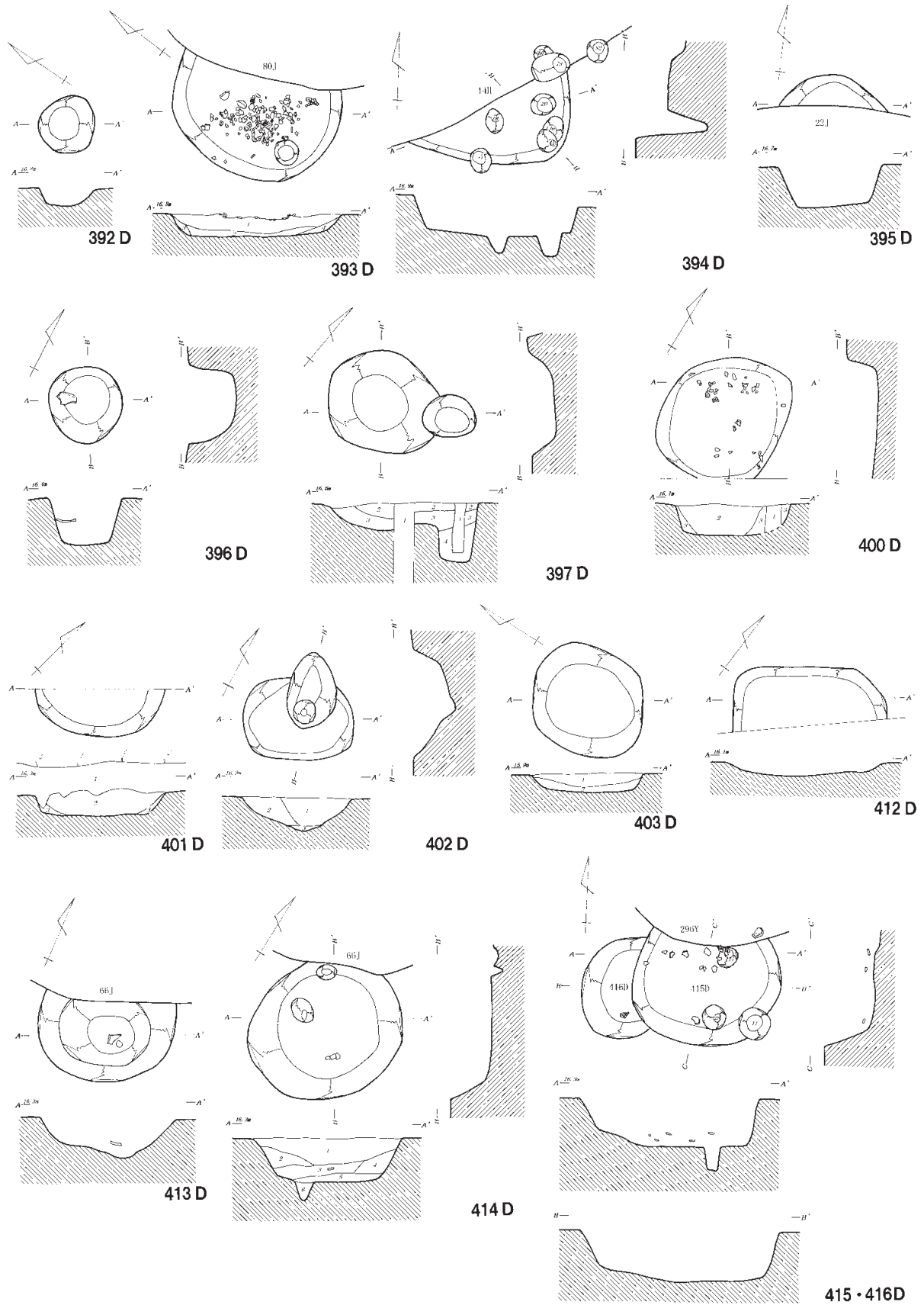
〔時期〕中期。

403号土坑(第364図)

〔位置〕13III地点。

〔構造〕(平面形)隅丸方形。(規模)116×107cm・深さ21cm前後を測る。坑底は僅かに凹凸があり、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-73°-E。

〔覆土〕



第364图 392~397·400~403·412~416号土坑 (1/60)

1層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 灰褐色土(7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

403号土坑出土遺物(第394図18~20)

18は口縁部が狭い無文帯になる。半円形の刺突を横走させRLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

19はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

20は刻みが加えられた隆帯下にRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

404号土坑(第209図)

〔位置〕 13Ⅲ地点。

〔構造〕 88Jと重複するが、前後関係は不明。(平面形)楕円形。(規模)77×66cm・深さ30cm前後を測る。坑底はやや凹凸があり、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-54°-W。

〔覆土〕 褐色土を基調とする。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土下位から石皿が出土。

〔時期〕 中期。

404号土坑出土遺物(第405図8)

石皿で凹石兼用である。表面は使用により平滑になる。7,240g。石英閃緑岩製。

412号土坑(第364図)

〔位置〕 13Ⅳ地点。

〔構造〕 南側調査区外。(平面形)楕円形。(規模)不明×160cm・深さ15cm前後を測る。坑底はやや凹凸があり、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-50°-W。

〔覆土〕 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

412号土坑出土遺物(第394図21~26)

21は口唇部が肥厚する。隆帯を波状に貼付する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

22はRLの単節斜縄文を施す。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

23は2本一対の隆帯を垂下させ、両脇に角度を変えた斜位の集合する沈線を施す。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

24は条線が縦位に施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

25は直行・蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

26は胴部下位から底部にかけての破片。隆帯が横位に貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

413号土坑(第364図)

〔位置〕 13Ⅳ地点。

〔構造〕北側調査区外。(平面形)楕円形。(規模)不明×145cm・深さ34cm前後を測る。坑底は播鉢状で、壁は段差をもち70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-70°-E。

〔覆土〕灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕覆土下位から扁平な礫が出土したのみである。

〔時期〕中期。

414号土坑(第364図)

〔位置〕13IV地点。

〔構造〕66Jに切られる。(平面形)楕円形。(規模)160×140cm・深さ44cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-25°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや粘質。

5層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

6層 にぶい黄褐色土。(10YR4/3)ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕覆土下位から多く出土した。

〔時期〕勝坂式期。

414号土坑出土遺物(第394図27~32、第395図1~10)

第394図27は波状口縁の尖頭状の波頂部。口唇端部は凹線状にくぼむ。口唇部下には沈線が横走する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

28は連続刺突文が弧状に施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂・雲母を僅かに含む。

29は刻みが加えられた隆帯が斜位に貼付され、空白部には沈線が弧状に集合して施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

30は刻みが加えられた隆帯が垂下する。空白部には沈線による文様が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

31は刻みが加えられた隆帯により区画が作られようか。区画内には三角形の連続刺突文が縦位に密集して施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

32は沈線による渦巻文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

第395図1は口唇部に隆帯が横走し、Lの撚糸文が斜位に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

2は隆帯により区画が作られる。区画内はLの撚糸文になる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3は刻みが加えられた隆帯が横走し、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

4は胴部下位の破片。RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

5はRLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

6は沈線を横走させ、Lの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに

含む。

7は隆帯により区画が作られようか。区画内には斜位の集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

8は刺突が加えられた隆帯が横走し、Lの撚糸文が施される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

9は口縁部に近い破片。口縁部は狭い無文帯になる。横走する沈線下にはRの撚糸文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

10はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

415号土坑(第364図)

〔位置〕13IV地点。

〔構造〕296Yに切られる。416Dを切る。(平面形)楕円形。(規模)不明×160cm・深さ56cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-78°-E。

〔覆土〕黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕覆土下位から多く出土した。

〔時期〕加曾利E I式期。

415号土坑出土遺物(第395図11~25)

11は肥厚する口唇部下に押引文が横位に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

12は外屈する口縁部が無文帯になる。屈曲部以下は刻みが加えられた隆帯により楕円形の区画が作られるようで、区画内には縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

13は眼鏡状の突起が貼付される。眼鏡状の縁取りには連続爪形文が使われる。横位の隆帯上には刻み、空白部には縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

14は口唇端部に斜位の刻みが加えられる。口唇部下には2条の沈線を横走させ、沈線間には径2mm程の円形竹管文が充填される。以下、同一の施文具を用いて斜位に刺突が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

15は口唇部下に結節沈線を波状に施す。斜位に隆帯が貼付され、脇には幅広の連続刺突文が加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

16は斜位に隆帯が貼付される。隆帯の左側は隆帯に沿って連続爪形文と細い半截竹管による刺突、右側は斜位の集合する沈線が施される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

17はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

18はLの撚糸文を斜位に施し、2本の隆帯を横位に貼付する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

19~22・24はLの撚糸文を地文とする。19は蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。20の色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を含む。21の色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。22は胴部下位から底部にかけての破片。2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。24は直行・弧状に隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

23はLRの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

25は無文帯の下位に隆帯が横走する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

416号土坑(第364図)

〔位置〕13IV地点。

〔構造〕415Dに切られる。(平面形)楕円形か。(規模)不明×105cm・深さ45cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-18°-E。

〔覆土〕褐灰色土(7.5YR4/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期。

416号土坑出土遺物(第395図26)

半截竹管による沈線を縦位・横位に施し、縦長の区画を作る。区画内には2列の幅広の連続刺突文が充填され、刺突文間には半円形竹管文が配される。色調は黒褐色(5YR3/1)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

418号土坑(第365図)

〔位置〕49II地点。

〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)145×125cm・深さ96cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(長軸方位)N-37°-E。

〔覆土〕

上層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

下層 暗褐色土(7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

418号土坑出土遺物(第395図27~30)

27は拓影図では不鮮明であるが、2~3条の沈線を横位・波状に施す。内面には条痕文がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂・骨針を多く含む。

28はRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

29は3条の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

30は口唇部下に凹線が巡る。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

419号土坑(第365図)

〔位置〕49II地点。

〔構造〕30Mに切られる。(平面形)楕円形。(規模)60×52cm・深さ51cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-80°-E。

〔覆土〕黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕覆土中に比較的多く含む。

〔時期〕勝坂式期。

419号土坑出土遺物(第395図32~38)

32は口唇部上に、上端がくぼむボタン状の突起が付き、そのまま隆帯になって口縁部に貼付される。隆帯上には半円形竹管文が、両脇には円形竹管文が連続して加えられる。口唇端部には沈線が施される。色調はにぶい褐色

(7/5YR6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

33は口唇部下に沈線が巡り、2条の沈線が斜位に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

34は口唇部下の2条の沈線間に円形刺突文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

35は波状口縁の波頂部の破片。口唇端部に円形刺突文が間隔を開けて施され、それを沈線でつなぐ。口縁部には沈線による文様がみえる。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

36はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。横位の沈線がみえる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

37は2条の沈線間に連続する刺突文が2段にわたって施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

38は刻みが加えられた隆帯が横位に貼付される。剥落しているが渦巻状の貼付文が加えられているようである。隆帯の上位には斜位の沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

427号土坑(第365図)

〔位置〕5Ⅱ地点。

〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)161×138cm・深さ40cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-74°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。硬質。

4層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 黒褐色土(5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

6層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。

7層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

8層 灰褐色土(7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕覆土中位からほぼ1個体の土器が出土した。

〔時期〕諸磯c式期。

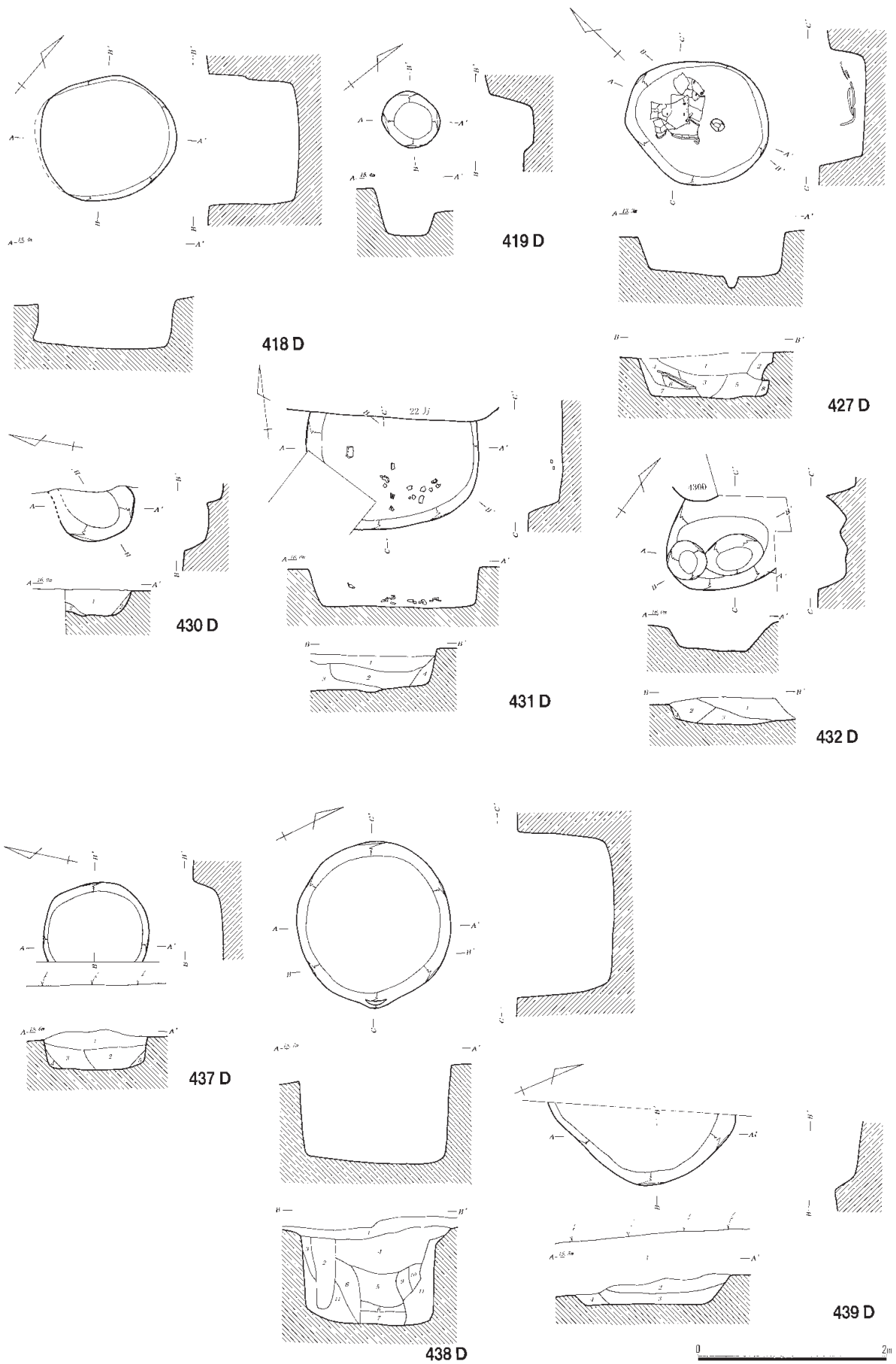
427号土坑出土遺物(第375図21)

口縁部がゆがんでいる。口径34~38cmを測る大型の土器。胴部下位以下を欠く。全体にピア樽状の器形をなし、口縁部は僅かに外反する。口唇端部には斜位の刻みが加えられる。主文様は半截竹管によりなされる。くびれ部には多条の沈線が巡り、環状の貼付文が5単位貼付される。胴部には平行沈線を矢羽根状に22単位施し、2個一対の瘤状貼付文を矢羽根状の沈線文が施文されている部分の上・中・下に間隔を開けて巡らす。胴部下位は多条の沈線が横走する。色調は上半が暗赤褐色(5YE3/2)、下半がにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細砂・白色粒子を多く含む。胴部下位は被熱のため荒れている。

430号土坑(第365図)

〔位置〕25Ⅵ地点。

〔構造〕東側は攪乱で破壊されているため、全体の形状は不明である。(平面形)不明。(規模)不明×80cm・深さ



第365图 418·419·427·430~432·437~439号土坑 (1/60)

26cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-50°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

2層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土したが、図示できるものはなかった。

〔時期〕 中期。

431号土坑(第365図)

〔位置〕 25VI地点。

〔構造〕 22方に切られる。南西側は攪乱で一部破壊されている。(平面形) 方形か。(規模) 不明×183cm・深さ43cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) 不明。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(2.5Y3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。非常に硬質。

4層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。

〔遺物〕 覆土下位に多く出土した。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

431号土坑出土遺物(第395図39~45、第396図1・2)

第395図39は外屈する口唇部下に綾杉状の刺突が横位に施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

40は刻みが加えられた隆帯が垂下し、空白部には刻みや斜位の沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

41は横位の沈線・隆帯による楕円形の区画・斜位の集合する沈線という文様構成をなす。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には白色チャート・雲母を多く含む。

42は口唇部下に1本、口縁部と頸部の境に1本の隆帯を横位に貼付する。隆帯間はRLの単節斜縄文。頸部は無文帯になろう。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

43は2本の隆帯により区画が作られるようである。区画の連結部には渦巻文が配される。区画内にはRLの単節斜縄文がみられる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

44は隆帯を横走させ、口縁部と頸部を画する。口縁部には沈線による区画や渦巻文が作られる。区画内にはRLの単節斜縄文がみられる。頸部は無文帯になろう。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には細礫・片岩を多く含む。

45は2本の隆帯により口縁部と頸部を画するものと思われる。口縁部にはRLの単節斜縄文が施される。頸部は無文帯になる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第396図1は口唇部下に2条の沈線を横走させる。口縁部には鎖状の隆帯を斜位に貼付し、半截竹管による渦巻文・重弧文が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を僅かに含む。

2は曾利系の土器。半截竹管による斜位の集合する沈線上に斜位・横位の隆帯を貼付する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

432号土坑（第365図）

〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 北側は一部攪乱で破壊されている。（平面形）楕円形か。（規模）不明×110cm・深さ31cm前後を測る。坑底は凹凸が激しい。壁は70° 前後の角度で立ち上がる。（長軸方向）不明。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。非常に硬質。
- 2層 褐灰色土（7.5YR4/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 灰褐色土（7.5YR4/2）。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 4層 灰褐色土（7.5YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

432号土坑出土遺物（第396図3～5）

3はRL、4はLRの単節斜縄文を地文とする。沈線が垂下し、縄文が磨り消される。3の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。4の色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

5は条線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

437号土坑（第365図）

〔位置〕 34II地点。

〔構造〕 東側調査区外。（平面形）楕円形。（規模）不明×110cm・深さ80cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-76°-E。

〔覆土〕

- 1層 表土。
- 2層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子・焼土粒子を含む。硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや粘質。
- 5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 堀之内1式期。

437号土坑出土遺物（第396図6～9）

6はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

7は沈線により渦巻文が施され、沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

8・9は沈線が弧状に施される。8の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。9の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

438号土坑（第365図）

〔位置〕 34II地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）170×165cm・深さ102cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上が

る。(長軸方位) N-60°-W。

〔覆土〕

- 1層 表土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。
- 3層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 8層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや粘質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 10層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。
- 11層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。ボソボソした感じ。

〔遺物〕 覆土中から多く出土した。

〔時期〕 後期。

438号土坑出土遺物 (第396図10～21、第404図4)

- 10は2条の押引文により楕円形の区画を作る。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。
 - 11はヒダ状文が2段施される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。
 - 12は波状口縁の土器。波頂部に入組状の隆帯が貼付される。R Lの単節斜縄文を地文とし、弧状の沈線により画される。色調は暗赤褐色 (5YE3/2) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。
 - 13は口唇部に斜位の刻みが加えられ、斜位の集合する沈線が施される。色調は灰褐色 (7.5YR5/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。
 - 14はL Rの単節斜縄文を地文とし、沈線が斜位に施される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。
 - 15は口唇部が内屈する。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。
 - 16は沈線により区画が作られようか。区画内にはR Lの単節斜縄文が施され、刺突文が横位に連続して加えられる。区画外にも円形の刺突がみられる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。
 - 17はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線による懸垂文が施される。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。
 - 18はL Rの単節斜縄文を地文とし、直行・蛇行する沈線が垂下し、縄文が磨り消される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂・輝石を僅かに含む。
 - 19は沈線により区画が作られ、拓影図では不鮮明であるが、区画内には2条一対の沈線による2列の波状文などが充填される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。
 - 20は沈線間に刺突が加えられる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。
 - 21は2条の沈線間にL Rの単節斜縄文がみられる。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) を呈し、胎土には細砂を多く含む。
- 第404図4は打製石斧。横長の剥片を使用か。右側は節理面から破損している。表面には礫面を残す。43.8g。硬砂岩製。

439号土坑 (第365図)

〔位置〕 34Ⅱ地点。

〔構造〕西側調査区外。(平面形)不明。(規模)深さ30cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)不明。

〔覆土〕

- 1層 表土。
- 2層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を含む。硬質。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期前半。

439号土坑出土遺物(第396図22・23)

22・23は綾線文が横位に施される。22はLRの単節縄文を横位・斜位に施し地文とする。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。23はRLの単節斜縄文を地文とする。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

440号土坑(第366図)

〔位置〕60地点。

〔構造〕北側調査区外。(平面形)不明。(規模)深さ25cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60°前後の角度でゆるやかに立ち上がる。(長軸方位)不明。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 表土。
- 3層 暗褐色土(7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。
- 4層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 6層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや粘質。
- 7層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
- 8層 暗褐色土(7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕中期。

442号土坑(第366図)

〔位置〕34Ⅱ地点。

〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)209×192cm・深さ125cm前後を測る。坑底中央に深さ30cmのピットを確認するが、全体に平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ローム粒子・ロームブロックを多く含む12層は壁の崩落土と考えられる。本来の壁はオーバーハングしていて、袋状を呈するものと思われる。(長軸方位)N-72°-W。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土(7.5YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。包含層。
- 2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。包含層。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

- 5層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや軟質。
- 9層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや軟質。
- 10層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 11層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 12層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。壁の崩落土。
- 13層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 14層 黄褐色(2.5Y5/6)。ロームブロックを多く含む。ボロボロした感じ。
- 15層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 16層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ロームブロック。やや軟質。
- 17層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。軟質。
- 18層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ロームブロック。軟質。
- 19層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。軟質。
- 20層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 21層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。軟質。
- 22層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 後期。

442号土坑出土遺物(第396図24~32)

24は隆帯により縦長の楕円形状の区画が作られようか。頂部には円形竹管文が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

25は帯縄文の土器。RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

26は沈線が幾何学状に施され、沈線間にはLRの単節斜縄文がみられる。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

27は沈線を横走させ上下を画する。上位は沈線により幾何学的文様が施されようか。下位は無文になる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

28は沈線により「V」字状に画される。器面が荒れて不鮮明であるが、区画内にはRLの単節斜縄文が施されているようである。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

29はLRの単節斜縄文を地文とし、綾線文が横走する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

30は格子目文の土器。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

31も格子目文の土器になろうか。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

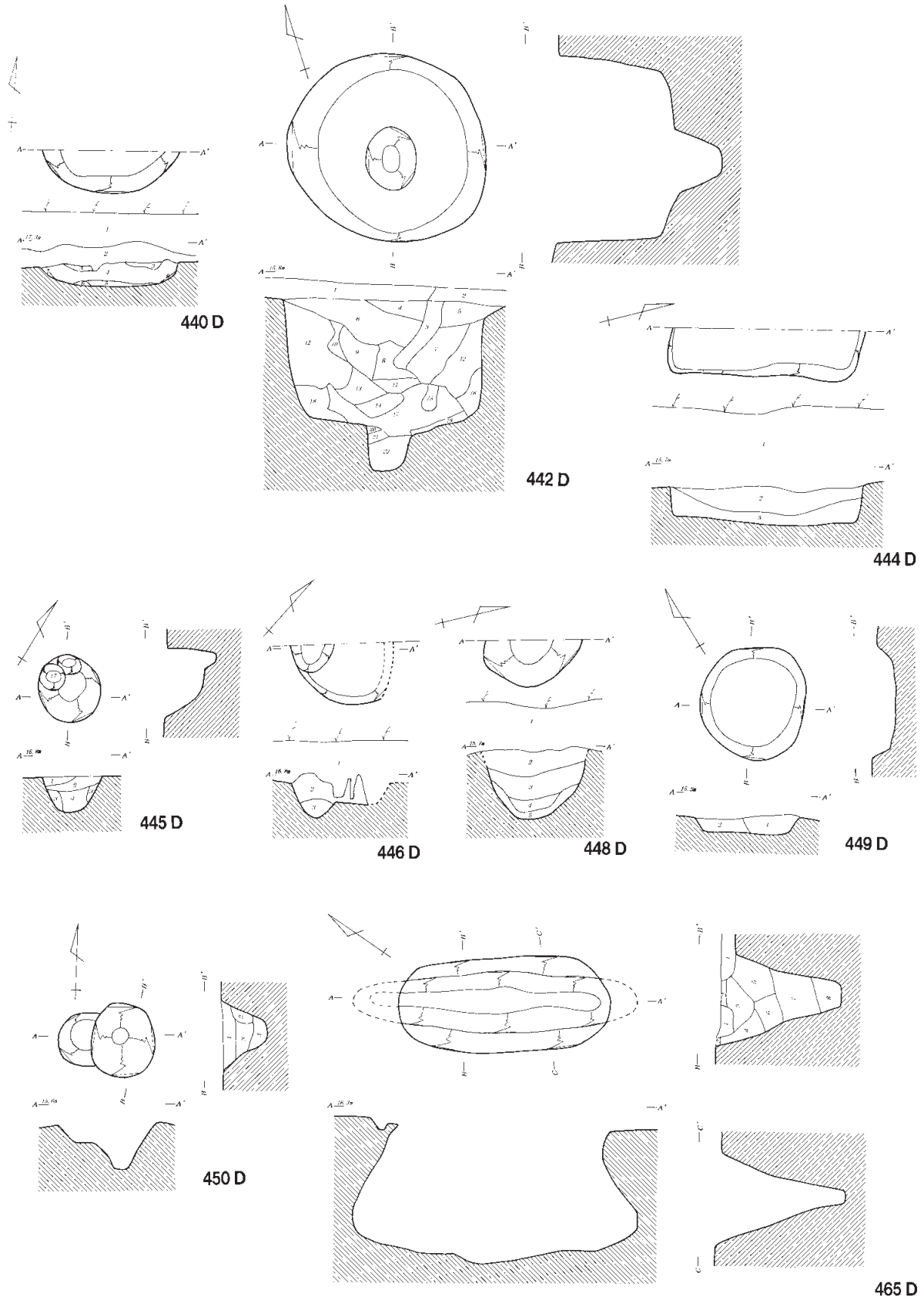
32は半截竹管文により横位に多条の沈線が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

444号土坑(第366図)

〔位置〕 34Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。(平面形) 方形か。(規模) 不明×200cm・深さ38cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(長軸方位) 不明。

〔覆土〕



第366图 440·442·444~446·448~450·465号土坑 (1/60)

1層 表土。

2層 黒色土(10YR2/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒色土(7.5YR2/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 加曾利B 1式期。

444号土坑出土遺物(第396図33~41)

33は口唇部上に小突起が付く。口縁部には押捺が加えられた細隆帯が横走り、「8」字状の貼付文が付される。内面は口唇部及び小突起に刻みが加えられ、3条の沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

34は口縁部に押捺が加えられた細隆帯が2本横走する。内面には3条の沈線が巡る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

35は垂下する沈線がみえる。内面口唇部には沈線が横走する。色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

36は直行・弧状に沈線が施される。色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

37は沈線を「∩」字状などに施す。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

38は上位が不明瞭であるが、3条の沈線が巡る。上位の沈線間には斜位に条線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

39は弧状に沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

40は半截竹管による沈線が斜位に多条に施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

41はR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

445号土坑(第366図)

〔位置〕 43Ⅱ地点。

〔構造〕 ピットと重複するが、前後関係は不明である。(平面形) 楕円形。(規模) 70×63cm・深さ38cm前後を測る。坑底は播鉢状で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-71°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗灰黄色土(2.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

3層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

4層 黒褐色土(2.5Y3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

446号土坑(第366図)

〔位置〕 43Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×110cm・深さ20cm前後を測る。坑底は平坦で、南西側がくぼむ。壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-50°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(2.5Y3/2)。ローム粒子を含む。

3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

448号土坑(第366図)

〔位置〕 34Ⅱ地点。

〔構造〕 西側調査区外。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×75cm・深さ36cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は60°前後の角度でゆるやかに立ち上がる。(長軸方位) 不明。

〔覆土〕

1層 表土。

2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。硬質。

5層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 後期。

448号土坑出土遺物(第397図1～5)

1は3条の沈線が垂下し、斜位に多条の沈線が加えられる。色調はにぶい赤褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

2は縦位・斜位に沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

3は拓影図では不鮮明であるが、RLの単節斜縄文を地文とするようである。弧状の沈線が集合して施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

4はLRの単節斜縄文を地文にしようか。櫛歯状施文具によりコンパス文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

5は内外面に条痕文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には繊維を多く含む。

449号土坑(第366図)

〔位置〕 34Ⅲ地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 115×108cm・深さ21cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-63°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。

2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 不明。

450号土坑(第366図)

〔位置〕 34Ⅱ地点。

〔構造〕 張り出し部のある土坑である。(平面形) 不整形。(規模) 100×70cm・深さ50cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) E-W。

〔覆土〕

- 1層 褐灰色土 (10YR4/1)。ローム粒子を含む。硬質。
- 2層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
- 4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 後期。

465号土坑 (第366図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 「落とし穴」とされるものであろうか。(平面形) 長楕円形。(規模) 217×99cm・深さ134cm前後を測る。長軸方向の壁は確認面から深さ50cm前後の位置にオーバーハングを認める。坑底は凹凸が認められる。短軸方向の壁は断面がV字状になり、坑底は幅10cm前後と狭い。壁は80° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-33°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ロームブロックを多く含む。433Y貼床。硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 7層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

465号土坑出土遺物 (第406図12)

使用痕を有する剥片。剥片の左右を欠く。右側縁に刃こぼれが認められる。1.8g。黒曜石製。

466号土坑 (第367図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 「落とし穴」とされるものであろうか。(平面形) 長楕円形。(規模) 277×95cm・深さ148cm前後を測る。長軸方向の壁は確認面から深さ45cmの位置にオーバーハングを認める。坑底はほぼ平坦である。短軸方向の壁の断面は葉研状を呈し、坑底は幅10cm前後と狭い。(長軸方位) N-9°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや軟質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや軟質。
- 6層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 7層 褐色土 (10YR4/4)。ロームブロック。やや硬質。

8層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

9層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。

10層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。

11層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

466号土坑出土遺物 (第397図6)

隆帯により区画が作られようか。区画内には斜位の集合する沈線が充填される。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

468号土坑 (第367図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 2基の掘り込みが連結したものととしてとらえた。(平面形) 不整形。(規模) 172×149cm・深さ27cm前後を測る。(長軸方位) N-67°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 東側の掘り込み中から多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

468号土坑出土遺物 (第397図7～12)

7は横位に無加飾の隆帯、縦位に刻みが加えられた隆帯が貼付される。空白部には沈線により渦巻文・三叉文が施され、沈線間には刻みが充填される。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

8は刻みが加えられた「X」字の隆帯が貼付される。隆帯に沿って連続刺突文が施される。空白部には沈線による文様が描かれる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9は斜位の隆帯が貼付され、隆帯に沿って上位には1条、下位には2条の連続刺突文が施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

10は上下が逆の可能性がある。隆帯に沿って外側竹管による連続爪形文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11は断面三角形の隆帯が弧状に貼付される。空白部には横位の押引文がみられる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

12はR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

470号土坑 (第367図)

〔位置〕 71地点。

〔構造〕 南側調査区外。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×180cm・深さ30cm前後を測る。坑底はやや擂鉢状で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-45°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E I式期。

470号土坑出土遺物(第397図13・14)

13はRの撚糸文を地文とする。2本一対の隆帯により渦巻文や区画を作ろうか。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

14はLの撚糸文を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

471号土坑(第367図)

〔位置〕 71地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 74×68cm・深さ15cm前後を測る。(長軸方位) N-2°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。

3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

471号土坑出土遺物(第397図15・16)

15は隆帯を弧状に貼付する。隆帯上を含む全面にLRの単節斜縄文を施す。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には白色・灰色チャートを多く含む。

16は直行・蛇行する沈線、幅広の連続刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

477号土坑(第367図)

〔位置〕 69地点。

〔構造〕 475Dに切られ、478Dを切る。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×70cm・深さ31cm前後を測る。坑底はやや傾斜をもち、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-67°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。硬質。

2層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。

3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

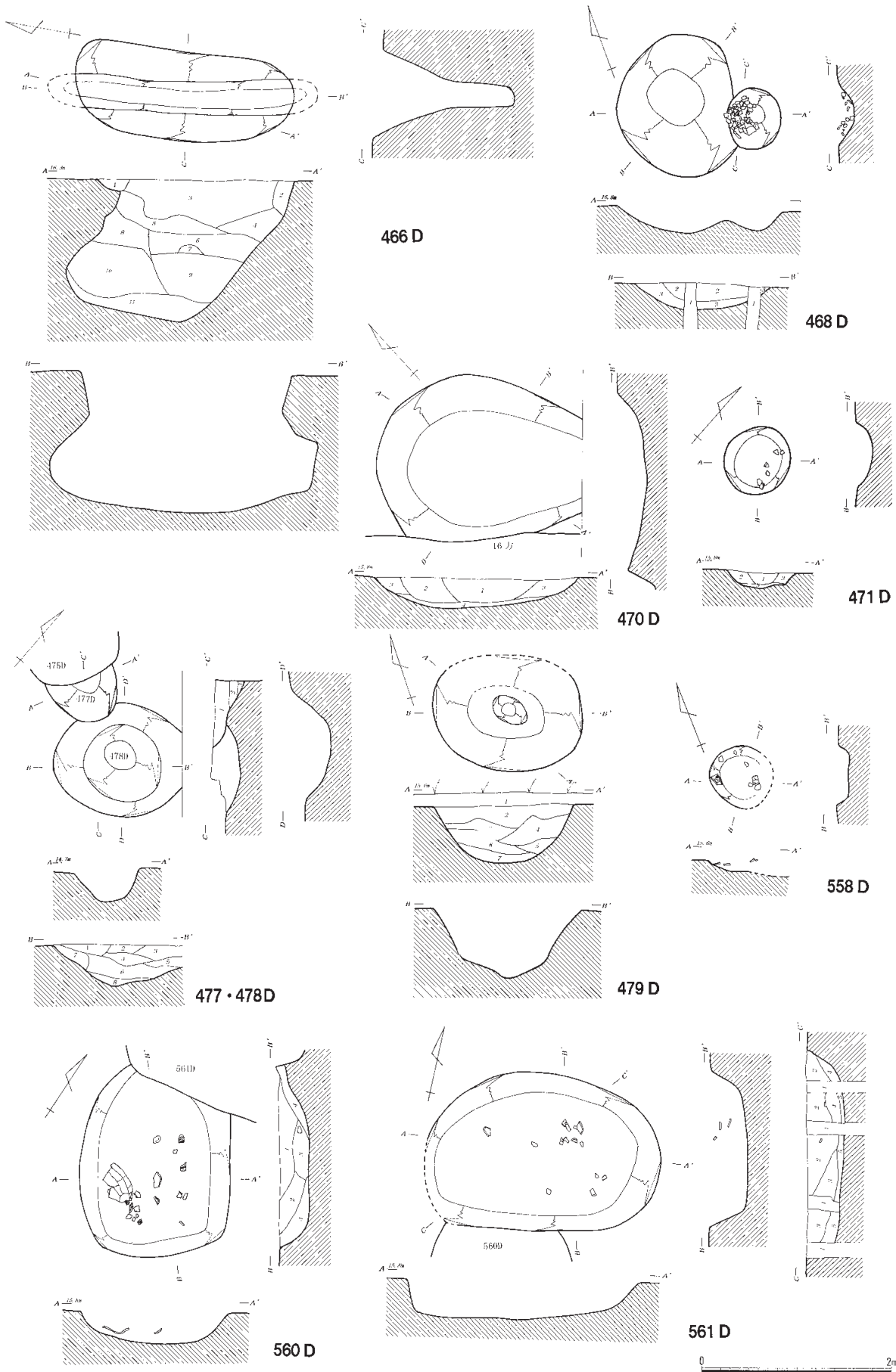
〔遺物〕 遺物の出土はなかった。

〔時期〕 中期。

478号土坑(第367図)

〔位置〕 69地点。

〔構造〕 東側は僅かに調査区外。477Dに切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×120cm・深さ41cm前後を測る。坑底は僅かに段をもち、挿鉢状である。壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-50°-E。



第367图 446·468·470·471·477~479·558·560·561号土坑 (1/60)

〔覆土〕

- 1層 暗赤褐色土 (5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロックを多く含む。硬質。
- 2層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。硬質。
- 5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 8層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 遺物の出土はなかった。

〔時期〕 中期。

479号土坑 (第367図)

〔位置〕 65Ⅲ地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 不明×78cm・深さ37cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-73°-W。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 3層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 6層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 7層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

479号土坑出土遺物 (第397図17)

L Rの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には粗砂・白色チャートを含む。

558号土坑 (第367図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 60×55cm・深さ15cm前後を測る。坑底の中央は僅かに凹凸があり、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-60°-W。

〔覆土〕 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

558号土坑出土遺物 (第397図18~25)

18はL Rの単節斜縄文を地文とし、隆帯が横位・斜位に貼付される。色調は灰褐色 (7.5YR) を呈し、胎土には細砂・輝石を多く含む。

19は刻みがつけられた隆帯が横位、交互押捺が加えられ鋸歯状をなす隆帯が縦位に貼付される。色調は灰褐色

(7.5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

20はR Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯により渦巻文や区画が作られようか。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

21は口唇部下に2本の細隆帯を貼付する。隆帯間には交互刺突による鋸歯文が横走する。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

22はR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

23はR Lの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による沈線が弧状に施される。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には粗砂・片岩を多く含む。

24はLの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂・輝石を僅かに含む。

25は縦位に多条の沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

559号土坑 (第95図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 26 Jを切る。(平面形) 楕円形。(規模) 113×105cm・深さ34cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-40°-W。

〔覆土〕

上層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

下層 暗褐色土(7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

559号土坑出土遺物 (第397図26~30)

26は口唇部に刻みが加えられる。色調は灰褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

27は隆帯間にRの撚糸文がみられる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

28・29は隆帯が横位に貼付される。28の色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。29の色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

30は無文の土器。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

560号土坑 (第367図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 561Dを切る。(平面形) 不整楕円形。(規模) 200×160cm・深さ29cm前後を測る。坑底はやや挿鉢状で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-35°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

4層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 3層中から多く出土した。

〔時期〕 加曾利E I式期。

560号土坑出土遺物 (第375図22、第397図31~44)

第375図22はキャリパー形の土器。口縁部の文様はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯により渦巻文や区画

が作られる。頸部は無文帯になる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第397図31は口唇部下に内側竹管による連続爪形文が施される。口縁部にはドーム状の貼付文が付され、周囲には外側竹管による連続爪形文を加える。貼付文上には斜位の沈線が施される。貼付文から刻みが加えられた隆帯が斜位に付され、空白部には沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

32は口唇部が突出する。以下、LRの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

33は隆帯が貼付され、隆帯に沿って幅広の角押文と三角押文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂・輝石を多く含む。

34は刻みが加えられた隆帯が「U」字状に貼付される。空白部には縦位の沈線がみられる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

35~44はキャリパー形の土器になろう。35は2本一対の隆帯により頸部と胴部を画する。頸部は無文帯になる。胴部はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。36はLの撚糸文を地文とする。2本の隆帯を弧状に貼付し、そこから直行・蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。37はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一対の隆帯により区画が作られる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。38はRの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯により区画が作られようか。色調はにぶい褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。39~44はLの撚糸文を地文とする。39は横位の隆帯から2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。40は弧状の隆帯から2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。41・42は2本一対の隆帯が垂下する。41の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。42の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。43は隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。44は蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

561号土坑(第367図)

〔位置〕130地点。

〔構造〕560Dに切られる。(平面形)楕円形。(規模)250×170cm・深さ40cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)E-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。
- 4層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。
- 5層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。

〔遺物〕覆土上位から多く出土した。

〔時期〕勝坂式期。

561号土坑出土遺物(第398図1~13)

1は波状口縁の土器。口縁部から口縁部にかけて「Y」字状の貼付文が付される。2条一対の沈線により横線と波状文が施される。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

2はLRの単節斜縄文が口唇部と、それ以下が方向を変えて施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

3は連続爪形文が加えられた隆帯を横走させ上下を画する。上位は無文帯になる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は隆帯により上下を画する。下位には縦位の集合する沈線が施され、弧状の沈線がみえる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

5は「八」字状に貼付された隆帯に沿って連続爪形文が加えられる。空白部には刺し切り状の短沈線がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

6は弧状の隆帯に沿って幅広の連続刺突文と波状沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

7は弧状に貼付された隆帯に沿って幅広の刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

8は横走する隆帯に沿って幅広の連続刺突文が2条施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

9は刻みが加えられた隆帯が縦位に貼付され、空白部には沈線や蓮華文が施される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10は縦位に集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11は半截竹管を多段に引き、浮彫り状の効果を作り出す。一段は連続爪形文になる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

12は隆帯を横走させ、上下を画する。下位はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯を幅狭の「〇」字状に貼付する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

13は波状沈線が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

562号土坑(第368図)

〔位置〕130地点。

〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)95×80cm・深さ18cm前後を測る。坑底はやや平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-35°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

2層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕勝坂式期。

562号土坑出土遺物(第398図14~17)

14は刻みが加えられた隆帯により区画が作られようか。区画内には集合する細沈線上に鋸歯文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

15は刻みがつけられた隆帯が貼付される。空白部には三叉文が施され、周囲に刻みを加える。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

16は沈線が渦巻状に施されようか。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

17は斜位の刻みを横走させ、以下、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

563号土坑（第368図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）170×110cm・深さ19cm前後を測る。坑底は平坦で、北側に径20cm・深さ19cmの掘り込みを確認する。壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-50°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

563号土坑出土遺物（第398図18～24）

18は口唇部下に2条の沈線が横走する。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

19は口唇部が角頭状を呈する。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を含む。

20は連続刺突文が渦巻状に施されようか。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

21は沈線が鋸歯状に施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

22はLR、23はRLの単節斜縄文が施される。22は沈線が垂下し、縄文が磨り消される。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。23の色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

24はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が垂下する。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

564号土坑（第368図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 531Yに切られる。（平面形）円形か。（規模）不明×150cm・深さ34cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中位から出土した。

〔時期〕 中期後半。

564号土坑出土遺物（第398図25～37）

25は断面三角形の隆帯が横位に貼付される。隆帯を挟んで条線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・雲母を多く含む。

26は刻みが増えられた隆帯が「Λ」字状に貼付され、それに沿って沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土に細砂を多く含む。

27は2本の隆帯間に幅広の連続刺突文と波状沈線が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

28は交互刺突による鋸歯文が縦位に施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

29は隆帯により区画が作られようか。区画内には横位の沈線がみられる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

30は断面三角形の隆帯により、楕円形の区画が作られようか。区画内には刺切文が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

31・32・34はR Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯による区画が作られようか。31の色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。32の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。34の色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

33は無文の口縁部破片。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

35はR Lの単節斜縄文を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

36・37はLの撚糸文が施される。36の色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。37の色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

565号土坑(第368図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 141 Jと重複するが、前後関係は不明である。(平面形) 円形。(規模) 径140cm・深さ18cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60° 前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。硬質。

2層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

565号土坑出土遺物(第398図38~41)

38は隆帯を横位に貼付する。下位には沈線に沿って幅広の連続刺突文が施される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

39は無文の口縁部破片。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

40は隆帯が横走し、以下、Lの撚糸文を地文とし、2条一対の沈線・蛇行する沈線が垂下する。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

41はLの無節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

566号土坑(第368図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 145 Jを切る。(平面形) 楕円形。(規模) 165×150cm・深さ40cm前後を測る。坑底は平坦で、硬質である。壁は60° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-60°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

4層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土下位から出土した。

〔時期〕 加曽利E I 式期。

566号土坑出土遺物（第398図42～54）

42は隆帯を横走させ、口縁部と頸部を画する。口縁部はRLの単節斜縄文を地文とし、2本一對の隆帯が弧状に貼付される。頸部は無文帯になる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

43は浅鉢形土器か。口縁部が強く内屈する器形である。口縁部には隆帯による長方形の区画が作られようか。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

44～49は隆帯による区画内に縦位の集合する沈線が充填される。44の口縁部は小波状口縁を呈し、楕円形の区画が作られる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。45は隆帯により渦巻文が作られる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。46は長方形の区画が作られる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には片岩を多く含む。47は2本一對の隆帯が横位に貼付される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。48は3条の沈線が縦位に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。49の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

50は半截竹管による2条の沈線で区画が作られようか。下位には連続刺突文がみられる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

51は2条の沈線が横位に施される。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

52はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

53はLの撚糸文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

567号土坑（第368図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 21Hに切られる。（平面形）楕円形か。（規模）不明×150cm・深さ30cm前後を測る。坑底はやや挿鉢状で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-40°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子を含む。硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中位から出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

567号土坑出土遺物（第399図1）

内湾する口縁部は無文帯になる。隆帯を多段に貼付し、隆帯間に連続した押捺が加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

568号土坑（第368図）

〔位置〕 130地点。

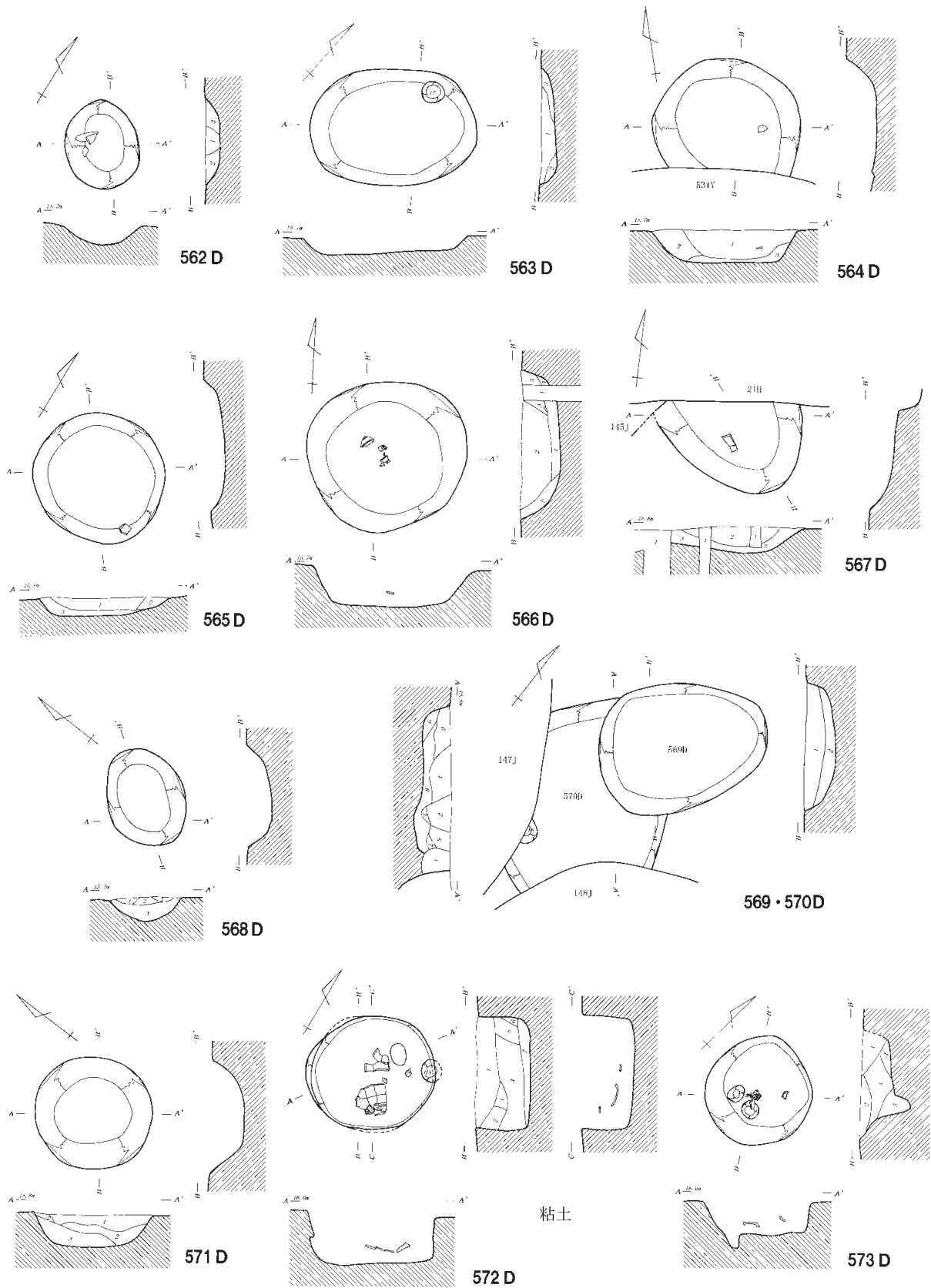
〔構造〕 （平面形）楕円形。（規模）110×80cm・深さ25cm前後を測る。坑底はやや挿鉢状で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-35°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。硬質。

3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。



第368图 562~573号土坑 (1/60)

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

568号土坑出土遺物（第399図2～8）

2は口唇部が内屈する。口縁部は無文帯になる。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

3は波状に隆帯が貼付される。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

4は4条の沈線が横走し、縦位に刻みが加えられた短隆帯が貼付される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5は隆帯により狭い楕円形の区画が作られようか。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

6～8はLの撚糸文を地文とする。6は2本の隆帯が横走する。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂・片岩を多く含む。7は2本一対の隆帯・蛇行する隆帯が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。8は蛇行する隆帯が垂下するようである。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・片岩を多く含む。

569号土坑（第368図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 570Dを切る。（平面形）不整楕円形。（規模）175×135cm・深さ35cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-45°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中位から出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

569号土坑出土遺物（第399図9～16）

9は波状口縁の土器。刻みが加えられた隆帯が口唇部に沿って弧状に貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

10は肥厚する口唇部下に連続した刺突文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

11は刻みが加えられた隆帯が横位に貼付される。空白部には半截竹管による沈線で文様が描かれ、沈線間には刻みが配される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

12は刻みが加えられた隆帯が横走し、そこから隆帯が垂下する。隆帯に沿って2条の押引文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

13は横位の隆帯に沿って連続爪形文が加えられる。以下、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

14は2本の隆帯が横走する。上位の隆帯には交互刺突が加えられる。以下、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

15・16は同一個体。RLの単節斜縄文を地文とする。隆帯が横走し、そこから隆帯が垂下する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

570号土坑（第368図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 147・148 J と重複するが、前後関係は不明。569 D に切られる。(平面形) 楕円形か。(規模) 深さ38cm前後を測り、壁は70° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) 不明。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 8層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 9層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

570号土坑出土遺物 (第407図14)

土器片錘である。長軸に刻みが加えられようか。重量は20.9 gを測る。

571号土坑 (第368図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 (平面形) 円形。(規模) 径120cm・深さ35cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60° 前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利 E I 式期。

571号土坑出土遺物 (第399図17～24、第405図3)

第399図17は縦位の密集する細沈線を地文とし、隆帯による楕円形の区画が作られる。色調は灰褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。

18は口唇部下に交互刺突による鋸歯文が巡る。以下、R L の単節斜縄文が施される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

19は3条の沈線が横走し、L の撚糸文が施される。色調は灰褐色 (7.5YR5/2) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

20はL R の単節斜縄文を地文とする。2条の沈線を横走させ、そこから2条の沈線が垂下する。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

21～24は同一個体か。R L の単節斜縄文を地文とする。直行・蛇行・弧状に隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

第405図3は磨製石斧。定角状を呈する。すべての面が丁寧に磨かれている。36.8 g。ホルンフェルス製。

572号土坑（第368図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕（平面形）円形。（規模）径130cm・深さ20cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。北側、覆土下位に粘土ブロックが堆積している。北東壁下には径20cm・深さ15cmのピットが斜めに掘り込まれている。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。やや硬質。
上位に灰黄色（2.5Y7/2）粘土ブロックが検出された。
- 5層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 6層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土下位からまとまって出土した。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

572号土坑出土遺物（第375図23、第399図25～32）

第375図23は口頸部が欠損する。Lの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯と蛇行する隆帯を交互に4単位ずつ垂下させる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

第399図25は2本の隆帯により円形文、刻みが加えられた隆帯による長方形の区画が作られる。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

26は隆帯により長楕円形などの区画を作られ、縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈し、胎土には粗砂・輝石を含む。

27・28はRの撚糸文を地文とする。27は隆帯による楕円形の区画になろうか。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。28は隆帯が横走り、区画が作られようか。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

29は隆帯が横走り、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

30はLの撚糸文を地文とし、直行・蛇行する隆帯が垂下しようか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

31は条線を地文とし、3条の沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

32はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

573号土坑（第368図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕（平面形）不整形。規模）115×110cm・深さ33cm前後を測る。坑底は平坦で、南側に2本のピットがある。壁は北側がほぼ垂直に立ち上がり、南側が60°前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。

4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。硬質。

〔遺物〕 覆土下位からまとまって出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

573号土坑出土遺物 (第399図33～39、第407図15)

第399図33は隆帯が横位に貼付する。結節沈線により楕円形の区画が作られ、結節沈線による波状文が横位に充填される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂・雲母を含む。

34は幅広の連続刺突文と波状沈線を横走させる。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

35は隆帯を横走させ上下を画する。上段は隆帯よる楕円形の区画が作られ、斜位の集合する沈線が充填される。空白部には交互刺突が加えられた平行沈線を斜位に施し、それに沿って連続刺突文・波状沈線が加えられる。下位は隆帯上からRLの単節縄文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

36は沈線による区画が作られようか。区画内には縦位の集合する沈線が施される。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

37は横位の集合する沈線を縦位の沈線が切る。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。

38は隆帯が垂下し、左側に横位に集合する結節沈線、左側に幅広の連続刺突文が施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。

39は浅鉢形土器か。胴部上位は内湾し、口縁部は短く直立する。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。

第407図15は土器片錘。短軸に刻みが加えられる。15.4g。

574号土坑 (第369図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 575Dに切られる。(平面形) 不整楕円形。(規模) 90×75cm・深さ52cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-63°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

574号土坑出土遺物 (第399図40～43)

40は半截竹管により文様が描かれる。平行線を2段横走させ、縦位の短い平行線を並列して施す。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

41・42は条線が施される。41は平行沈線が垂下する。色調はにぶい橙色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。

43はLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

575号土坑（第369図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 574・576・577Dを切る。（平面形）不整形長方形。（規模）134×120cm・深さ38cm前後を測る。坑底は平坦で、東側にピットが1本ある。壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-54°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

575号土坑出土遺物（第399図44～47）

44は2本の隆帯が縦位に貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

45はRLの単節斜縄文を地文とし、横位に沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

46・47は条線が施される。46の色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。47の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・輝石を僅かに含む。

576号土坑（第369図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 575Dに切られる。（平面形）楕円形か。（規模）不明×100cm・深さ24cm前後を測る。全体に播鉢状の形態で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-86°-E。

〔覆土〕

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・焼土ブロックを僅かに含む。焼土粒子を含む。やや硬質。

3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・焼土粒子を含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

576号土坑出土遺物（第400図1～7）

1はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

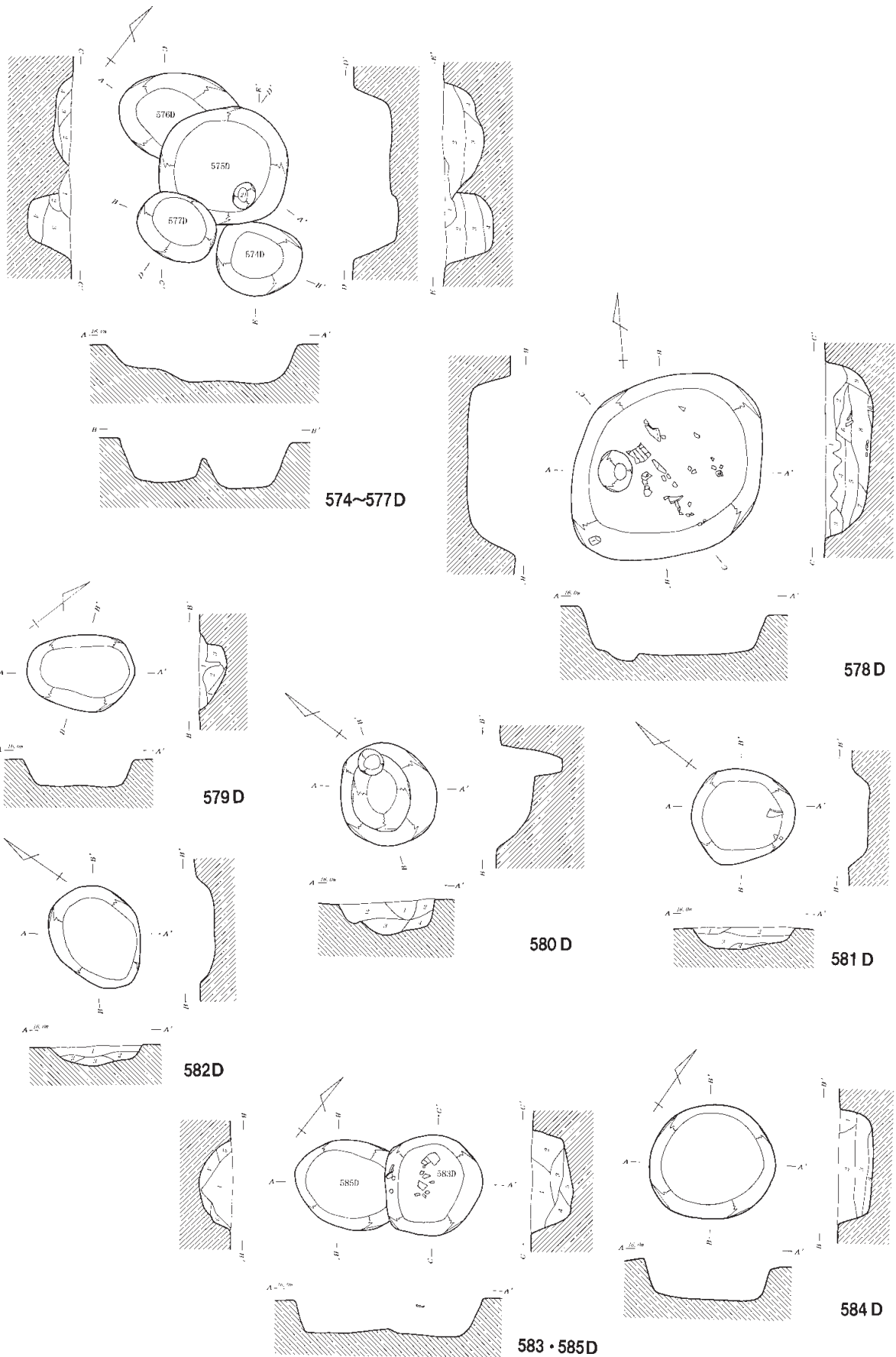
2はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

3～6は同一個体の可能性がある。LRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

7は半截竹管による多条の沈線を地文とし、隆帯が貼付される。色調は赤褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

577号土坑（第369図）

〔位置〕 130地点。



第369図 574~585号土坑 (1/60)

〔構造〕 575Dに切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 85×70cm・深さ46cm前後を測る。坑底は中央に向かっていくぶん傾斜している。壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-70°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

577号土坑出土遺物(第400図8)

条線を地文とし、2条の沈線が横走する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

578号土坑(第369図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 592・593Dを切る。(平面形) 不整楕円形。(規模) 230×185cm・深さ49cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-60°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。

5層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

6層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。

7層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

8層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を多く含む。やや硬質。

9層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。

10層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中位から多く出土した。

〔時期〕 加曾利E I 式期。

578号土坑出土遺物(第376図24・25、第400図9~17)

第376図24・25はキャリパー形の土器で同一個体。Lの撚糸文を地文とする。口縁部には2本一対の隆帯による連結する渦巻文ないし「∞」状文が貼付される。胴部には半截竹管による2条の蛇行する沈線が垂下する。沈線間は浮彫り状になる。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には粗砂・白色チャートを多く含む。

第400図9は幅広の角押文と三角押文を並列して施し区画を作ろうか。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

10は刻みが増えられた隆帯が横位に貼付される。色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11は横位の隆帯に沿って幅広の連続刺突文が増えられる。以下、斜位の集合する沈線が施される。色調は灰褐色(5YR6/2)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

12は拓影図が上下逆。中空の突起である。円孔が穿たれ、それを囲うように2本の隆帯が「U」字状に施される。

色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

13はLの撚糸文を地文とし、隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい褐色(7.5YR/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

14は2本の隆帯が横走する。以下、Lの撚糸文になる。色調はにぶい赤褐色(5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

15・16はLの撚糸文を地文とする。15は隆帯が直行・弧状に貼付される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。16は蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

17はR Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯が垂下する。色調は灰褐色(5YR6/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

579号土坑(第369図)

〔位置〕130地点。

〔構造〕(平面形)不整楕円形。(規模)110×80cm・深さ25cm前後を測る。坑底はほぼ平坦である。壁は南側と北側がほぼ垂直に立ち上がり、東側と西側が70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-60°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

579号土坑出土遺物(第400図18~20)

18は凹線により区画が作られようか。区画内には条線がみられる。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

19は条線が施される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20は底部付近の破片。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

580号土坑(第369図)

〔位置〕130地点。

〔構造〕(平面形)不整楕円形。(規模)120×100cm・深さ37cm前後を測る。北東側にピットを有する。壁は北西側に一段をもつが、全体に挿鉢状になる。(長軸方位)N-40°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

580号土坑出土遺物(第400図21~23)

21は横走する隆帯下に集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅

かに含む。

22はLRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

23は拓影図では不鮮明であるが、ヒダ状文が施されているようである。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

581号土坑(第369図)

〔位置〕130地点。

〔構造〕(平面形)不整楕円形。(規模)110×100cm・深さ15cm前後を測る。底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-40°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。

4層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

581号土坑出土遺物(第400図24~31)

24は部分的に刻みが加えられた隆帯で作られた楕円形の区画が、多段に位置をずらして配されようか。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂・片岩を多く含む。

25は縦位に貼付された隆帯に沿って蓮華文や隆帯による環状文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

26は刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

27は波状口縁の土器になろう。隆帯の貼付により渦巻文が作られようか。色調はにぶい褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

28は隆帯が横走し、RLの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

29は蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

30は縦位に貼付された隆帯に沿って沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

31は胴部下位から底部にかけての破片。Lの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

582号土坑(第369図)

〔位置〕130地点。

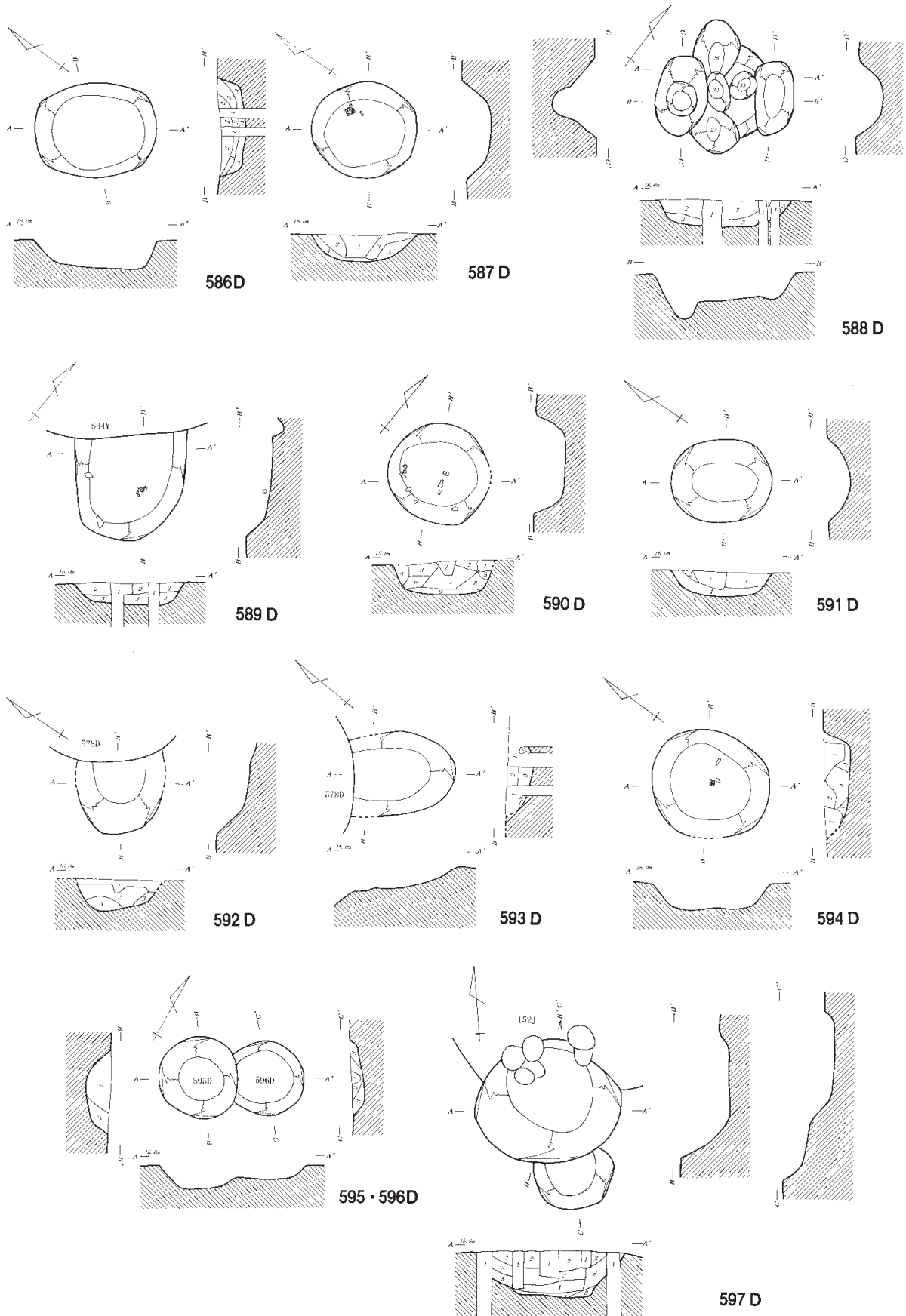
〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)115×90cm・深さ16cm前後を測る。壁は南側が80°前後の角度で立ち上がり、北側が60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-15°-E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。



第370図 586~597号土坑 (1/60)

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

582号土坑出土遺物（第400図32・33）

32は横位に貼付された隆帯に沿って幅広の連続刺突文が施される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

33はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

583号土坑（第369図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 585Dを切る。（平面形）不整形円形。（規模）105×100cm・深さ40cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-38°-W。

〔覆土〕

1層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。

2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 褐灰色土（10YR4/1）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 褐色土（10YR4/4）。ローム粒子を多く含む・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土上位からまとまって出土した。

〔時期〕 勝坂式期

583号土坑出土遺物（第376図26、第400図34～39）

第376図26は鉢形土器。1/5程の破片からの推定復元のため、口径については正確性に欠ける。全体に塊状を呈し、口唇内部は折り返し状になる。口唇端部及び内面には赤彩の痕跡が認められる。色調は外面暗褐色（7.5YR3/2）、内面赤黒色（2.5YR2/1）を呈し、胎土には粗砂・雲母・輝石を多く含む。

第400図34は刻みがつけられた隆帯により半楕円形の区画が作られる。区画内には沈線による三叉文・円文が施され、それに沿って連続刺突文が加えられる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

35は横位に隆帯を貼付する。上位には集合する沈線を斜位に施す。下位は無文になる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

36は刻みが加えられた隆帯を弧状に貼付し、縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

37は刻みが加えられた隆帯が斜位に貼付される。3条の沈線が斜位に施される。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

38は横位の隆帯に沿って幅広の連続刺突文が施される。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

39はRLの単節縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

584号土坑（第369図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）130×120cm・深さ38cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-58°-E。

〔覆土〕

- 1層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 4層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

584号土坑出土遺物 (第400図40~43)

40は部分的に刻みが加えられた隆帯により半楕円形の区画が作られようか。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

41はLの撚糸文を地文とし、2条一対の沈線が弧状に施される。色調は褐灰色 (5YR4/1) を呈し、胎土には細砂・輝石を僅かに含む。

42はLの撚糸文が施される。色調は褐灰色 (5YR4/1) を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

43はRLの単節縄文が施される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

585号土坑 (第369図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 583Dに切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×95cm・深さ35cm前後を測る。坑底は僅かに凹凸があり、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-60°-E。

〔覆土〕

- 1層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 2層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

585号土坑出土遺物 (第400図44~47)

44は横位の隆帯に沿って幅広の連続刺突文と波状沈線が施される。色調は褐灰色 (5YR4/1) を呈し、胎土には粗砂を含む。

45は口唇部下に沈線が横走し、条線が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

46はRLの単節斜縄文を地文とし、縦位・横位に沈線が施される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

47はLRの単節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線が斜位に施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

586号土坑 (第370図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 130×100cm・深さ30cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-35°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

586号土坑出土遺物 (第401図 1～8)

1は口縁部に無文帯をもち、端末結節されたLRの単節斜縄文が施される。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

2は環状文と弧線が施される。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

3は押捺が加えられた隆帯が2本垂下する。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈し、胎土には細砂を含む。

4は沈線により楕円形の区画が作られようか。区画内には細い竹管状施文具による刺突文列が3段充填される。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を多く含む。

5は刻みが加えられた隆帯に沿って幅広の角押文と三角押文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

6は縦位の沈線を錯交して施す。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

7は半截竹管による平行沈線を横位に多段に施し、縦位の沈線を加える。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

8はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

587号土坑 (第370図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 110×90cm・深さ28cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-48°-W。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

587号土坑出土遺物 (第401図 9～12)

9は2本一対の隆帯により区画が作られる。区画内には縦位の集合する沈線がみられる。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

10は横位に隆帯が貼付される。RLの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調は灰褐色 (6YR5/2) を呈し、胎土には粗砂を含む。

11はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) を呈し、胎土には粗砂を含む。

12はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が蛇行して垂下する。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

588号土坑（第370図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 ピットが連結したような形状をとる。（平面形）不整形。（規模）150×140cm・深さ30cm前後を測る。坑底は南西に向かって傾く。（長軸方位）N-55°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 にぶい黄褐色土（10YR5/4）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

588号土坑出土遺物（第401図13～16）

13はLR、14はRLの単節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線を垂下する。沈線間は磨り消される。13の色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には細砂を含む。14の色調はにぶい橙色（5YR7/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

15はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

16は2条の細沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR6/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

589号土坑（第370図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 534Yに切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×120cm・深さ29cm前後を測る。坑底は東に向けて僅かに傾斜している。壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-38°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 暗褐色土（10YR3/4）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに含む。

〔時期〕 中期後半。

589号土坑出土遺物（第401図17・18）

17は刻みが加えられた隆帯が縦位に貼付される。空白部には沈線による環状文や弧線が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。

18はLの撚糸文を地文とし、直行・蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細砂を含む。

590号土坑（第370図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕（平面形）円形。（規模）径110cm・深さ30cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

3層 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。

4層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

5層 褐色土(10YR4/4)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

6層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。

7層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

8層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

9層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

590号土坑出土遺物(第401図19~25)

19は口唇部下の3条の横走る沈線と、口縁部の横位に貼付された隆帯の間に、RLの単節斜縄文がみられる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

20は口縁部に広い無文帯をもち、隆帯が波状に貼付される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

21はRLの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線が横位・縦位に施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

22は2本一対の隆帯により区画が作られようか。区画内には縦位の集合する沈線がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

23は隆帯が横位に貼付される。上位は隆帯に沿って沈線が鋸歯状に施される。下位は縦位の集合する沈線になる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

24・25は同一個体か。条線を地文とする。24は横位に沈線が施される。25は2条一対の沈線が垂下する。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

591号土坑(第370図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 110×95cm・深さ29cm前後を測る。坑底はやや播鉢状で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-35°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。

3層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

591号土坑出土遺物(第401図26・27)

26は連続する爪形文で区画が作られようか。区画内には横位の沈線がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

27は口唇部の隆帯下にLの撚糸文がみられる。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

592号土坑（第370図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 578Dに切られる。（平面形）楕円形か。（規模）不明×110cm・深さ34cm前後を測る。坑底は東に向かって傾斜している。壁は60°前後の角度で挿鉢状になる。（長軸方位）N-55°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期。

592号土坑出土遺物（第401図28～30）

28は口縁部の破片であろうか。内屈する器形である。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

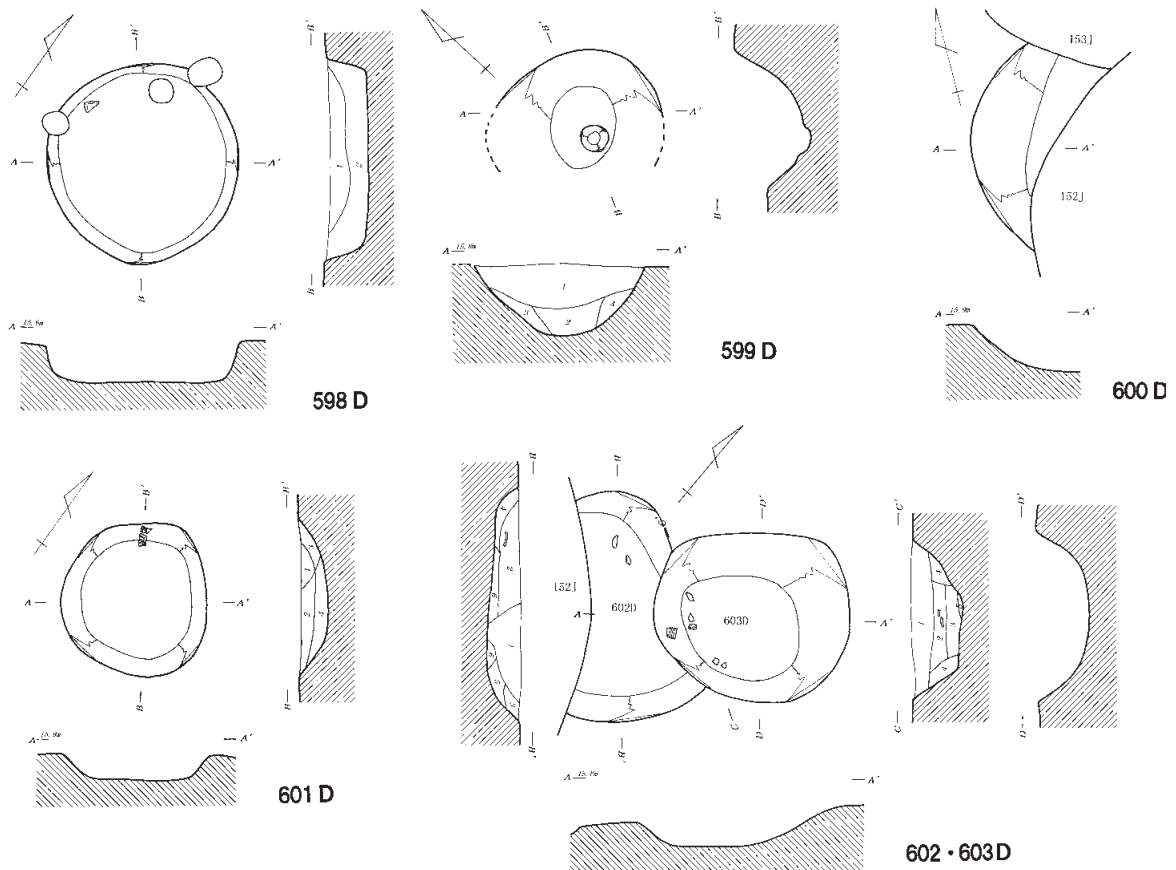
29は凹線が横位に施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

30はLの捺糸文を地文とし、2本の隆帯を垂下させる。隆帯間に蛇行する隆帯を加える。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

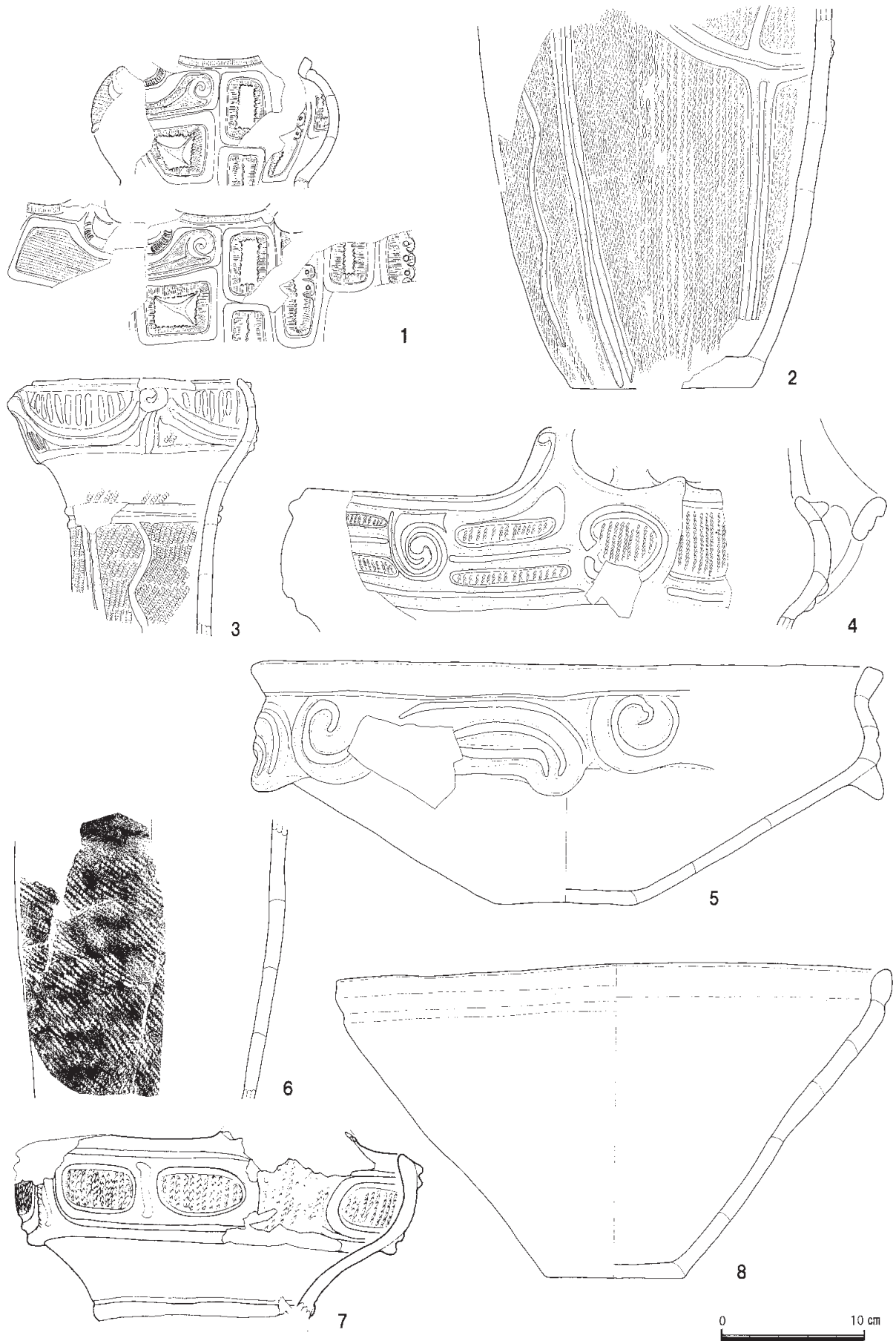
593号土坑（第370図）

〔位置〕 130地点。

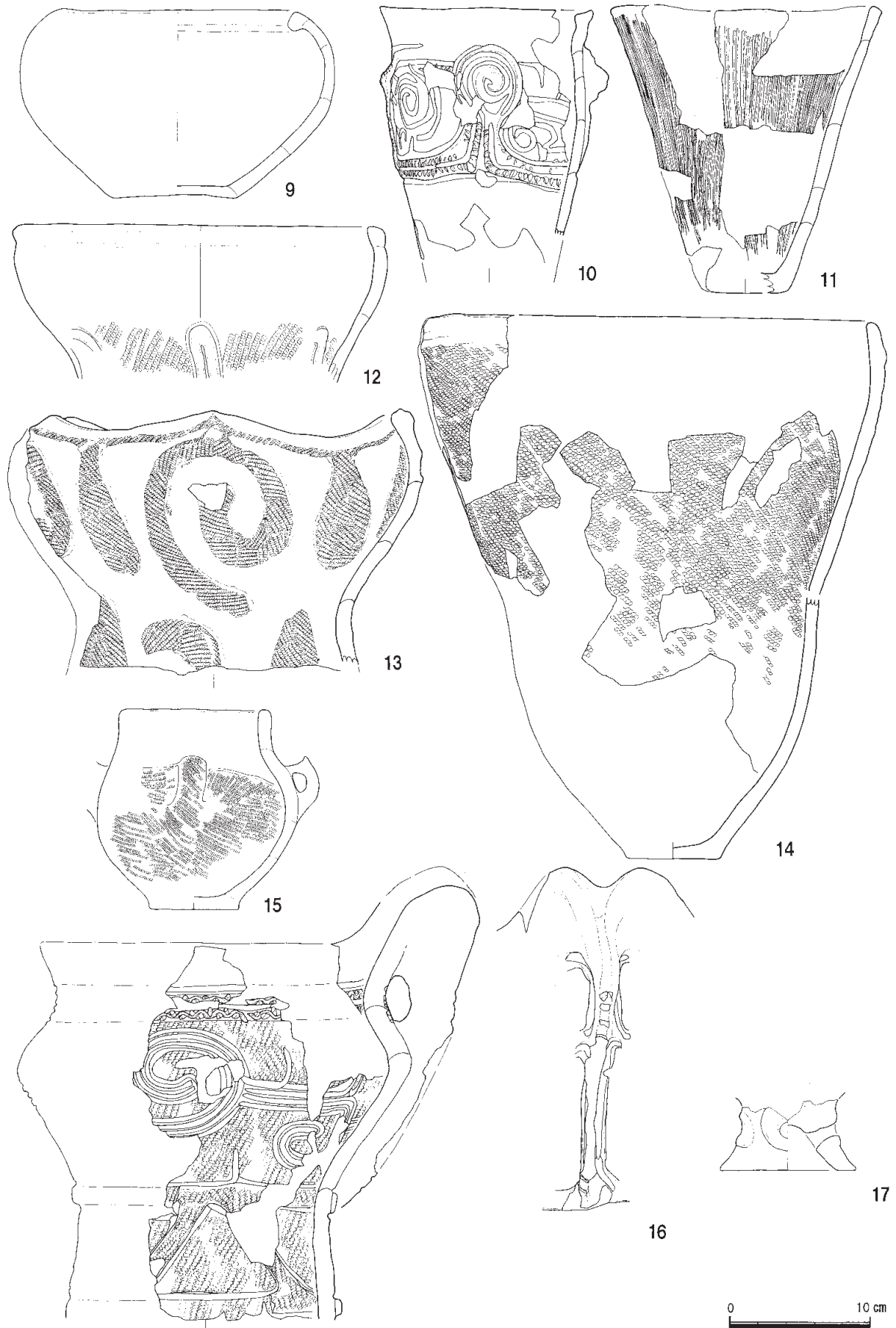
〔構造〕 578Dに切られる。（平面形）楕円形か。（規模）不明×85cm・深さ22cm前後を測る。坑底は北に向かって



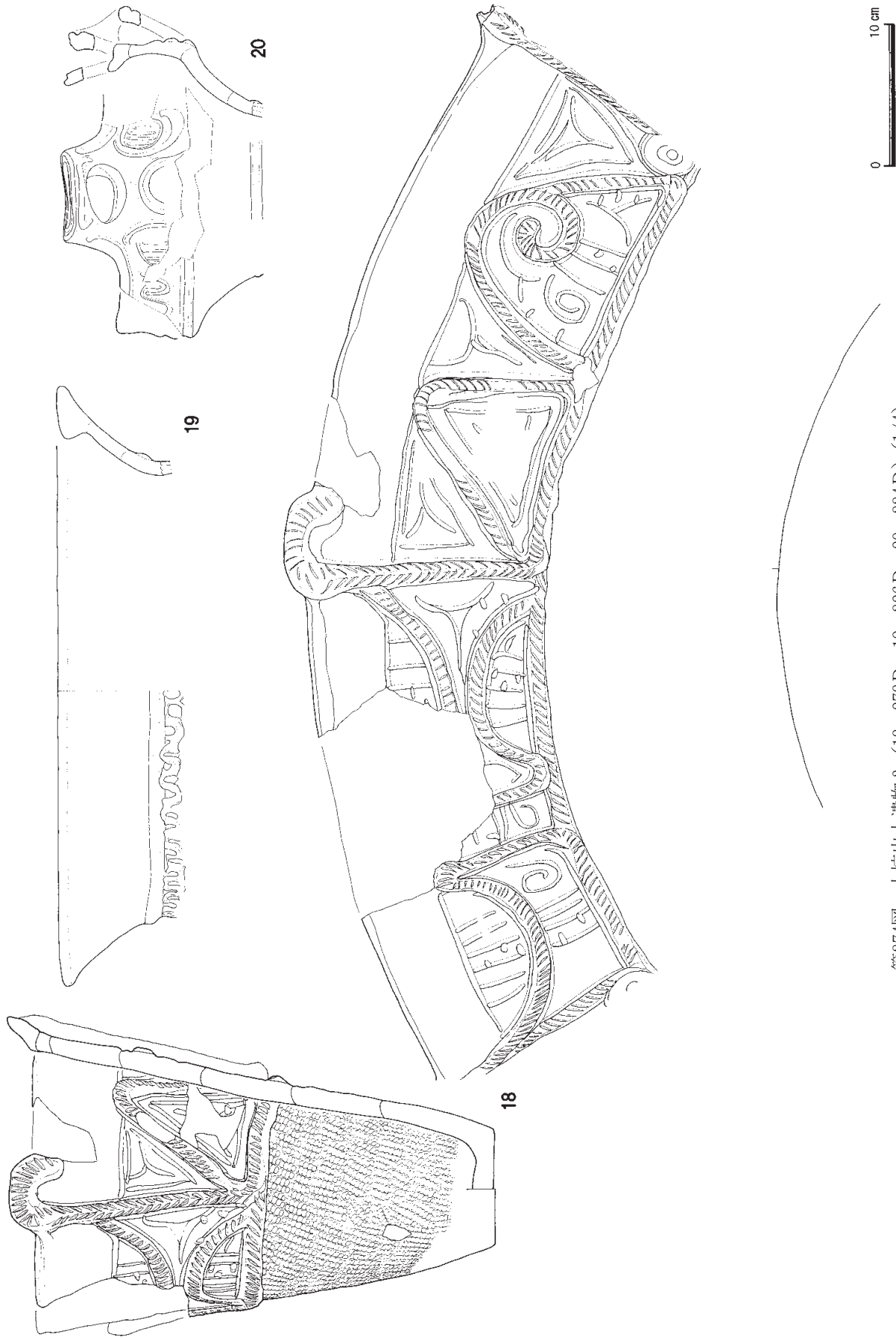
第371図 598～603号土坑（1/60）



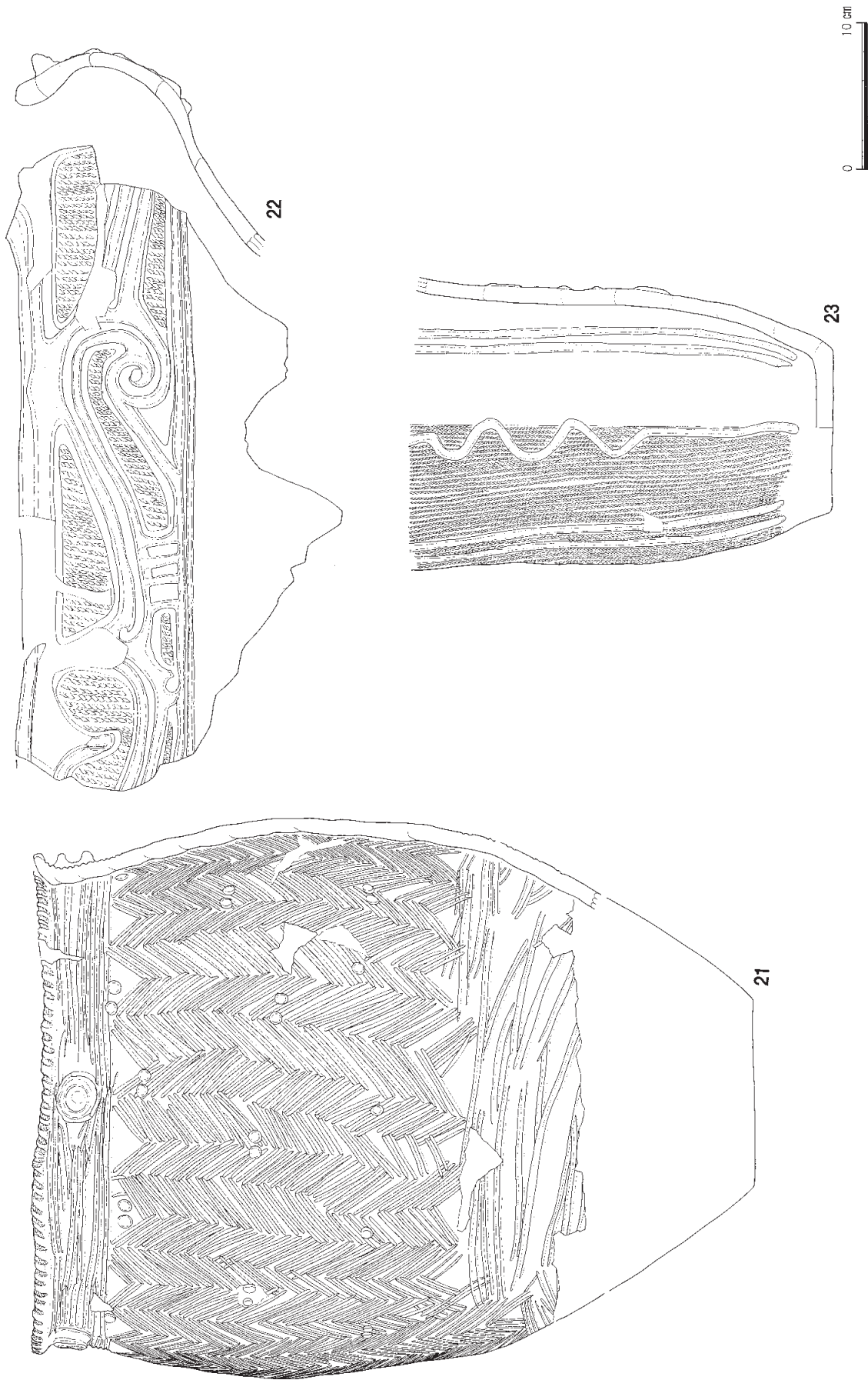
第372図 土坑出土遺物1 (1=143・144D、2=154D、3=155D、4・5=167D、6=168D、7=172D、8=178D) (1/4)



第373图 土坑出土遺物2 (9 = 180D、10 = 182D、11 = 258D、12 = 259D、13~15 = 265D、16・17 = 269D) (1/4)



第374図 土坑出土遺物 3 (18=278D、19=326D、20=334D) (1/4)



第375圖 土坑出土遺物 4 (21=427D、22=560D、23=572D) (1/4)

傾斜している。壁は60° 前後の角度で挿鉢状となる。(長軸方位) N-45°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

594号土坑(第370図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 135×115cm・深さ23cm前後を測る。坑底は僅かな隆起がある。壁は60° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-38°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

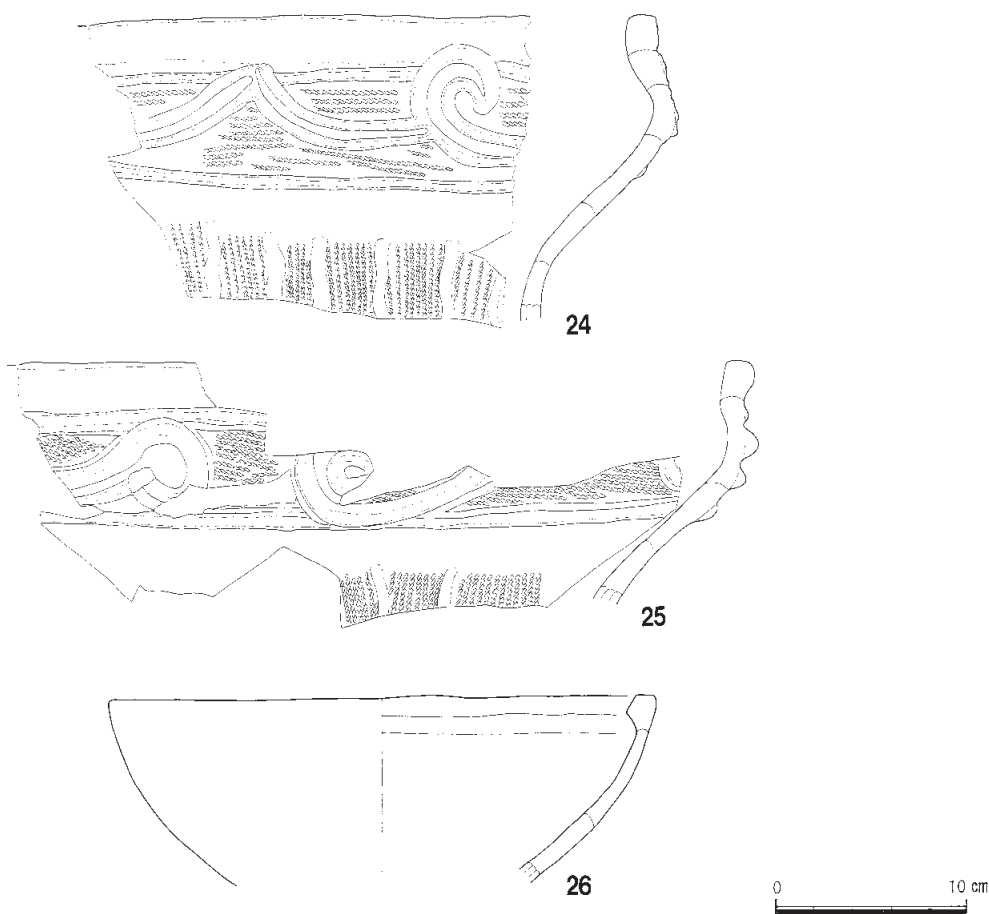
2層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。



第376図 土坑出土遺物 5 (24・25=578D、26=583D) (1/4)

594号土坑出土遺物（第401図31～35）

31は口唇部下にLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

32～34は条線を地文とする。32は2条の沈線が垂下する。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。33の色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。34は沈線が弧状に垂下する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

35は3条の沈線が垂下し、斜位の集合する沈線が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

595号土坑（第370図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 596Dを切る。（平面形）楕円形。（規模）90×80cm・深さ25cm前後を測る。坑底は挿鉢状で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-33°-W。

〔覆土〕

1層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 褐色土（10YR4/4）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

595号土坑出土遺物（第401図36・37）

36は沈線間に連続刺突文が加えられる。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

37は連弧文系の土器。条線を地文とし、3条の沈線が弧状に施される。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

596号土坑（第370図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 596Dに切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×78cm・深さ14cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-60°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

597号土坑（第370図）

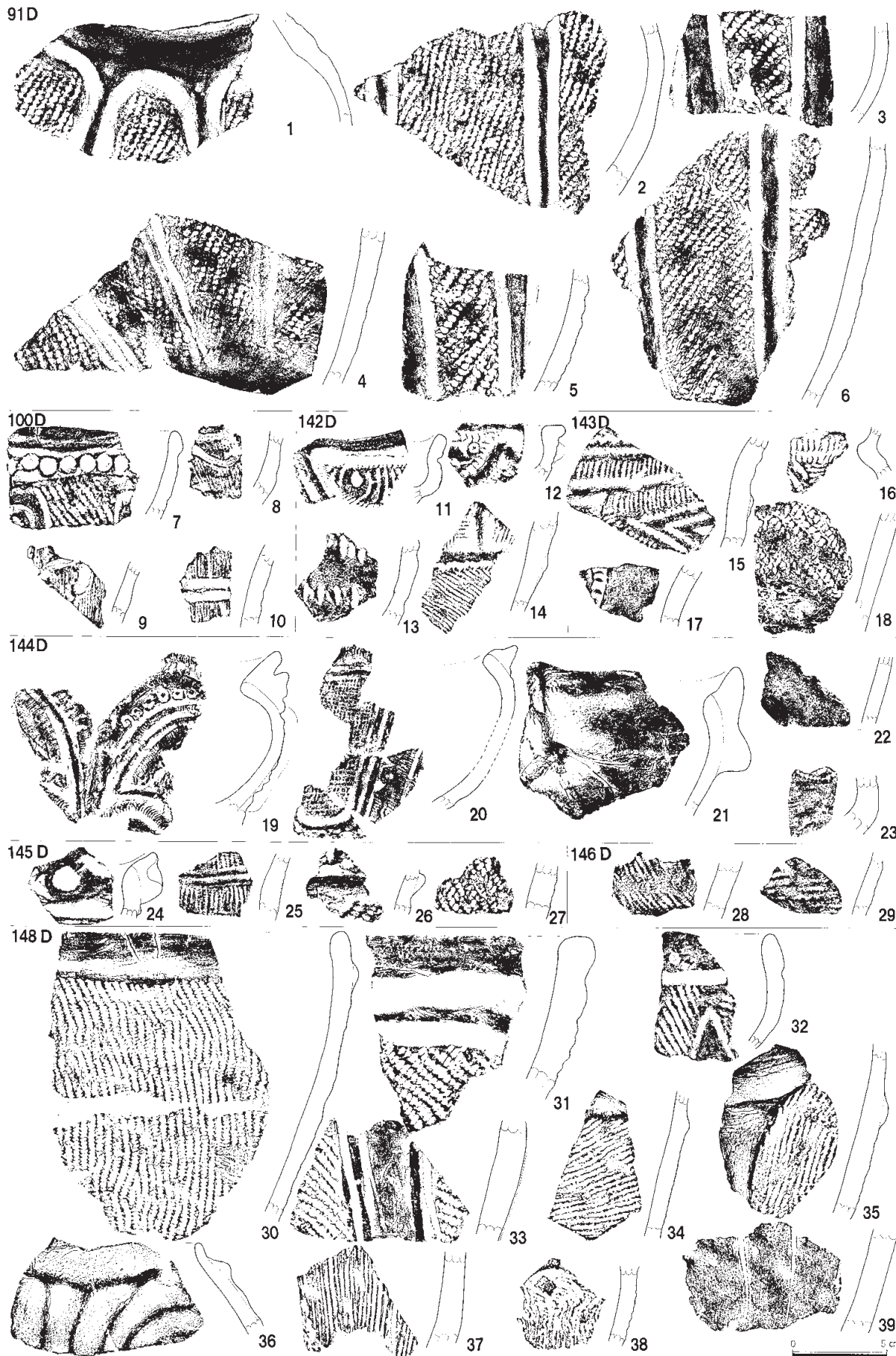
〔位置〕 130地点。

〔構造〕 152Jに切られる。（平面形）不整形。（規模）180×152cm・深さ50cm前後を測る。坑底は僅かに凹凸があり、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-10°-W。

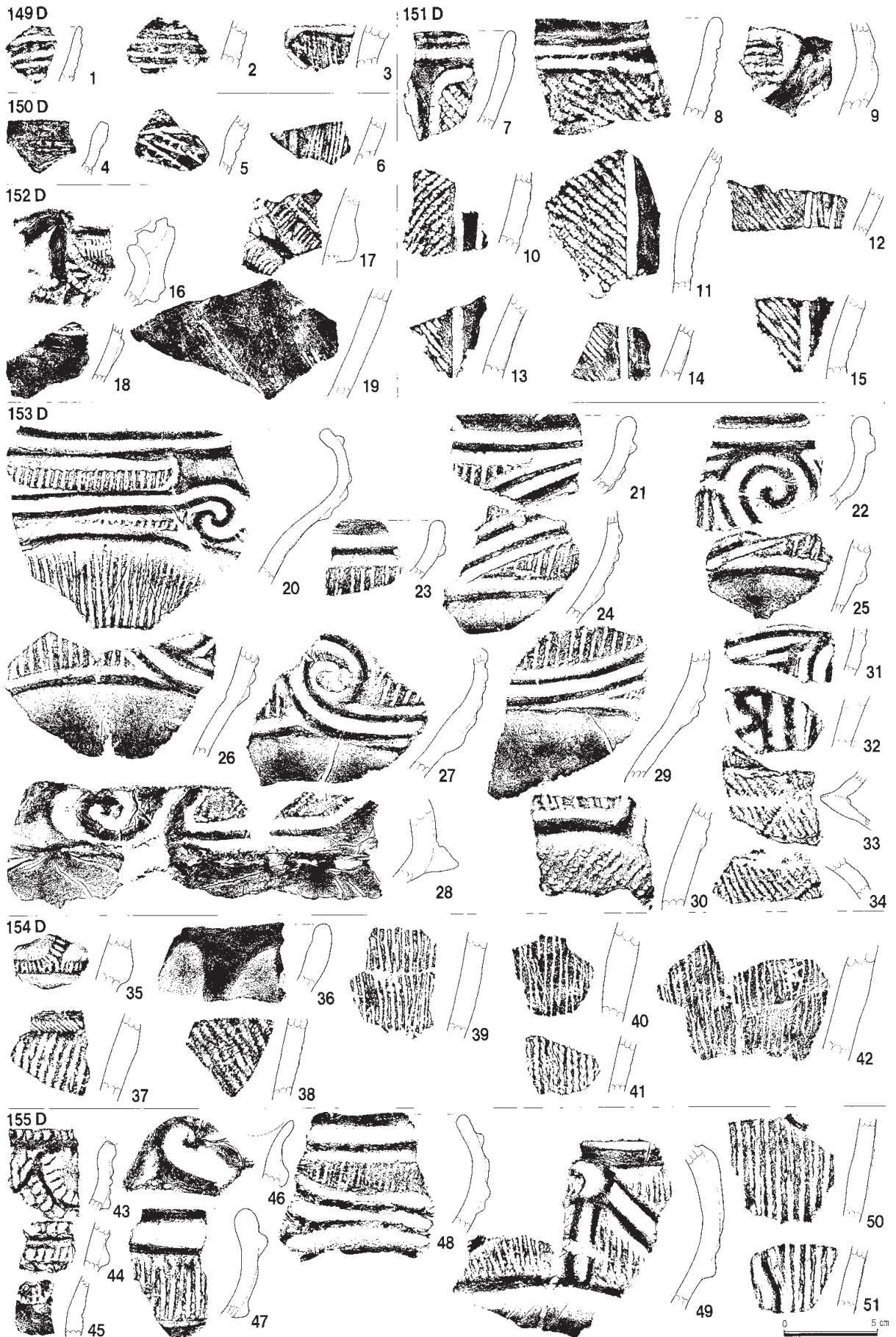
〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。



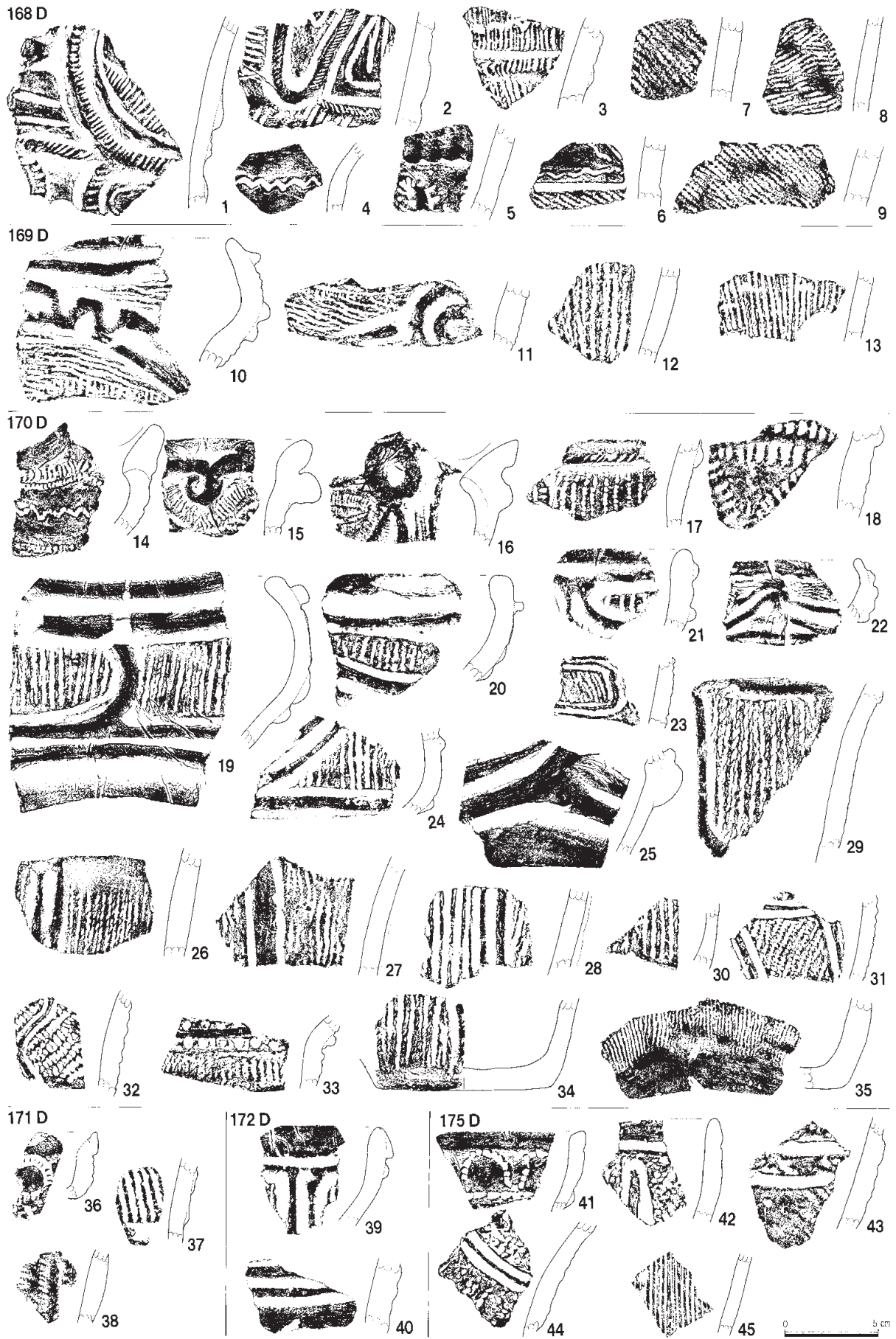
第377図 土坑出土遺物 1 (1/3)



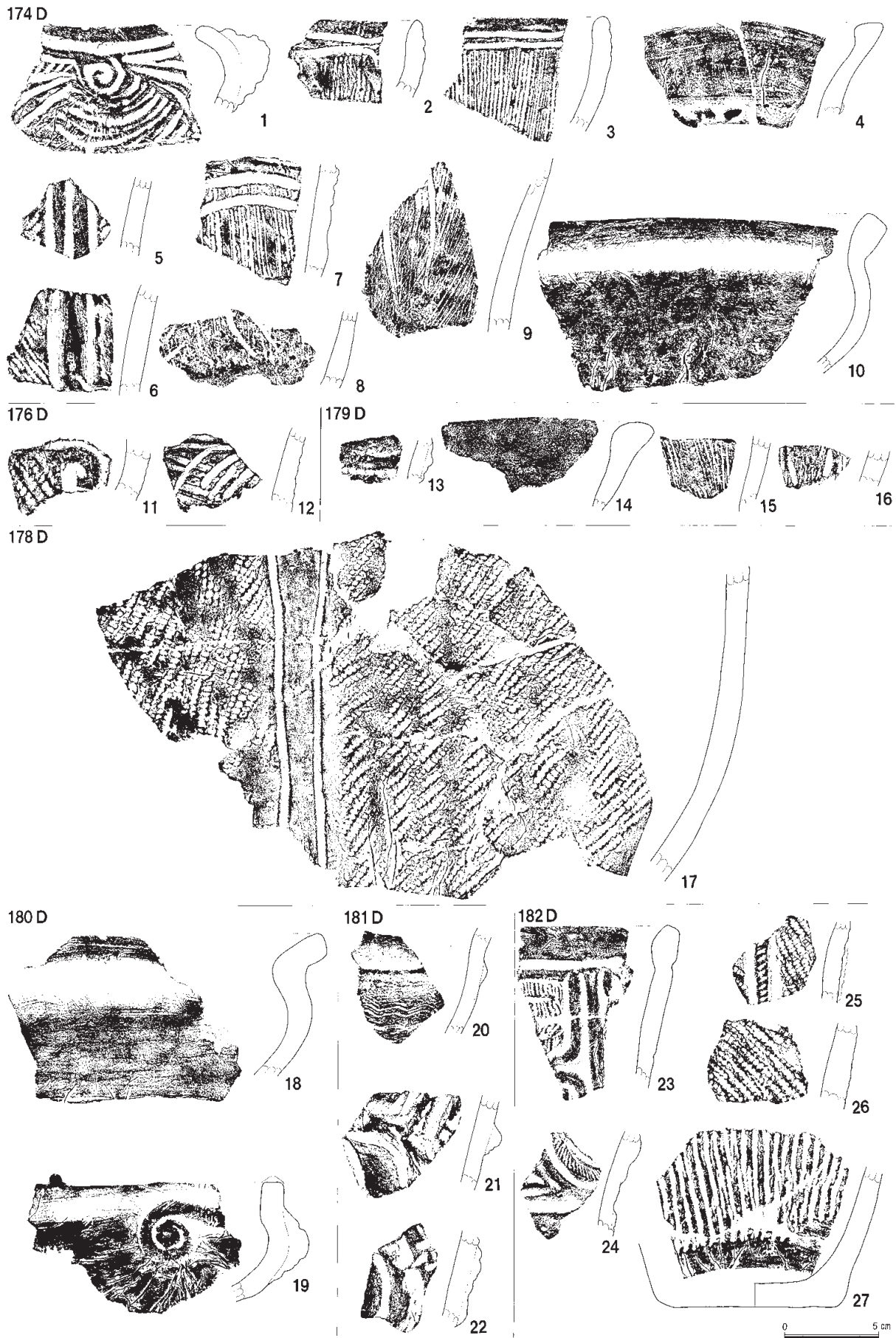
第378圖 土坑出土遺物 2 (1/3)



第379図 土坑出土遺物3 (1/3)



第380图 土坑出土遺物4 (1/3)



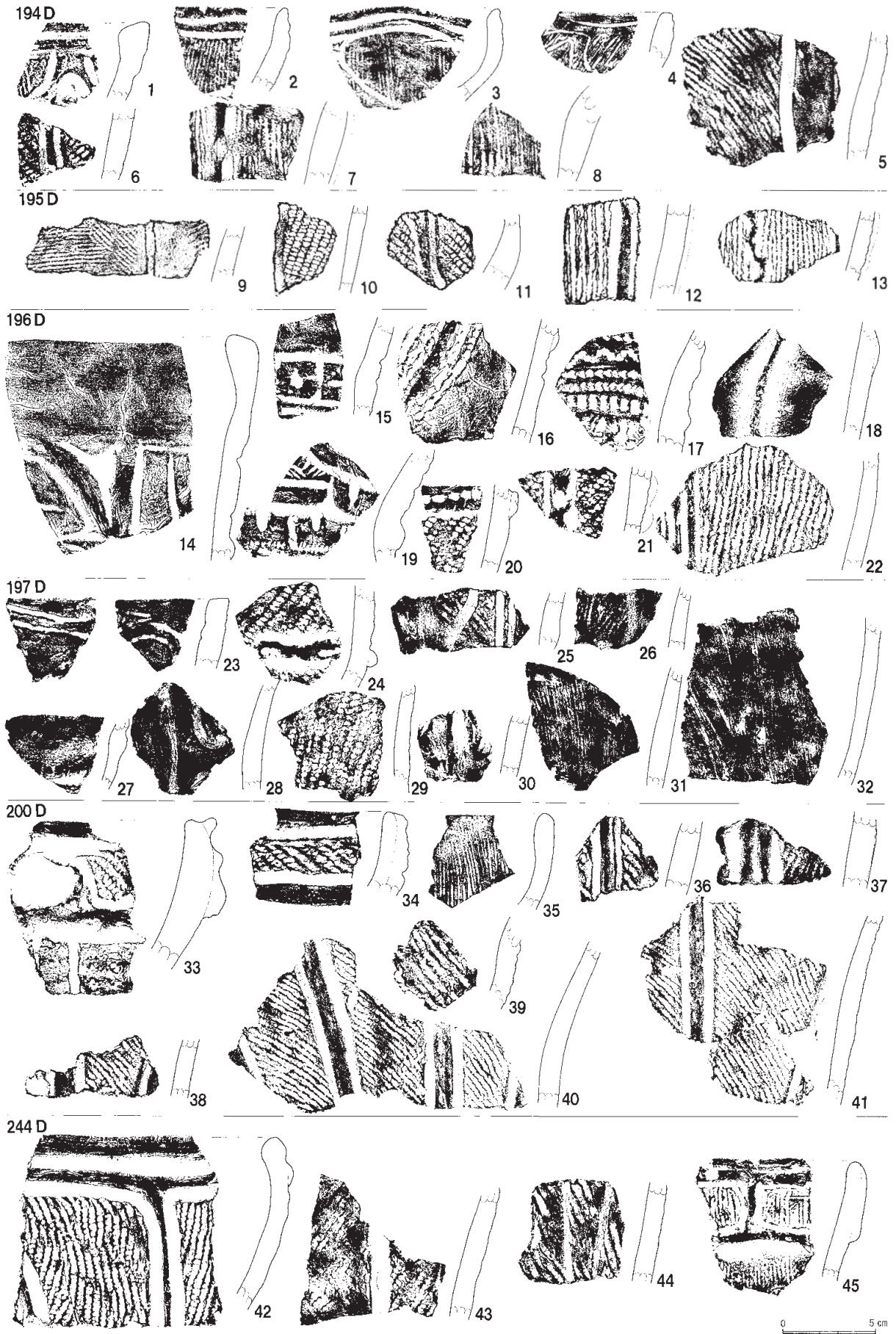
第381図 土坑出土遺物 5 (1/3)



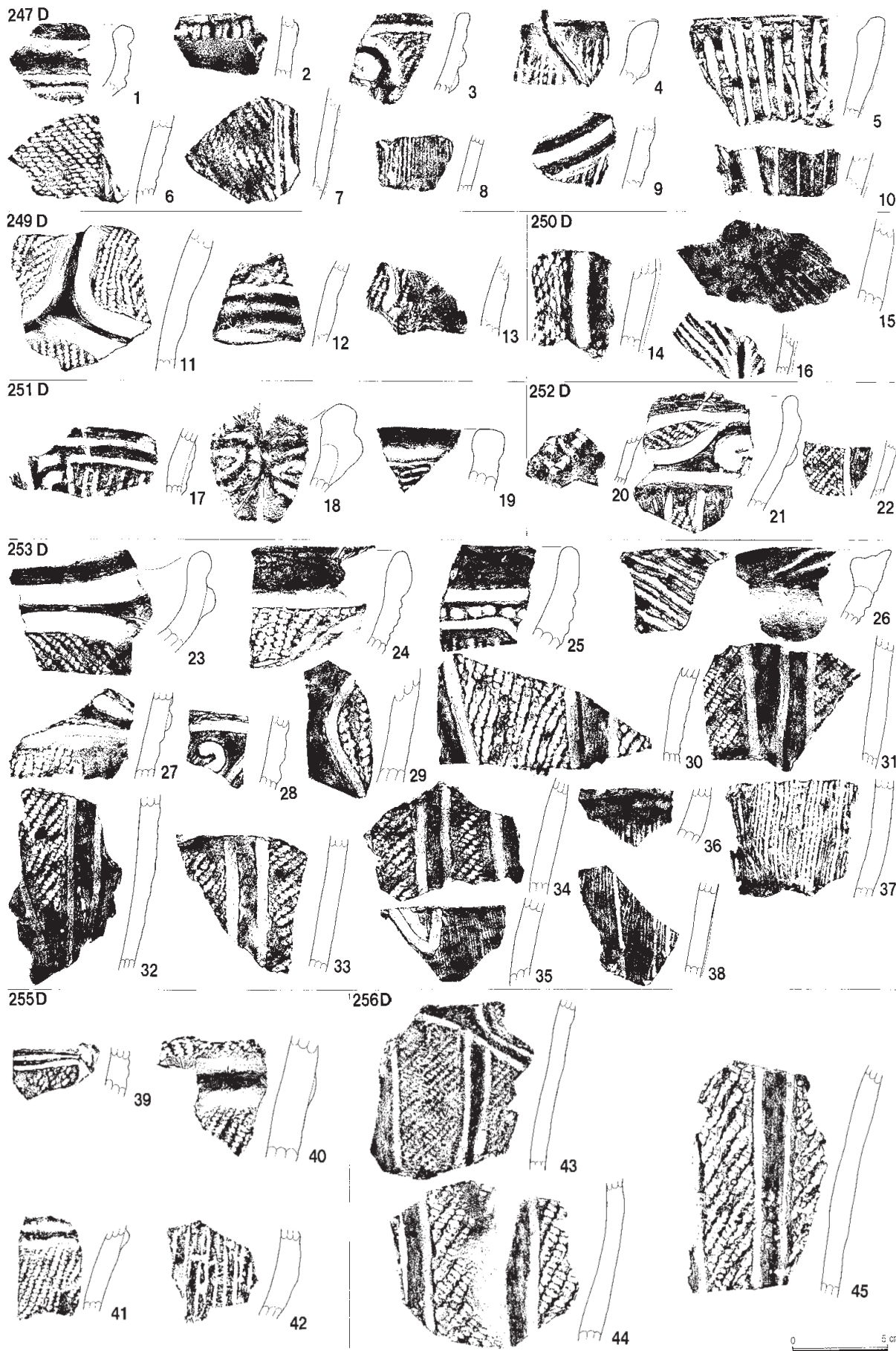
第382图 土坑出土遺物 6 (1/3)



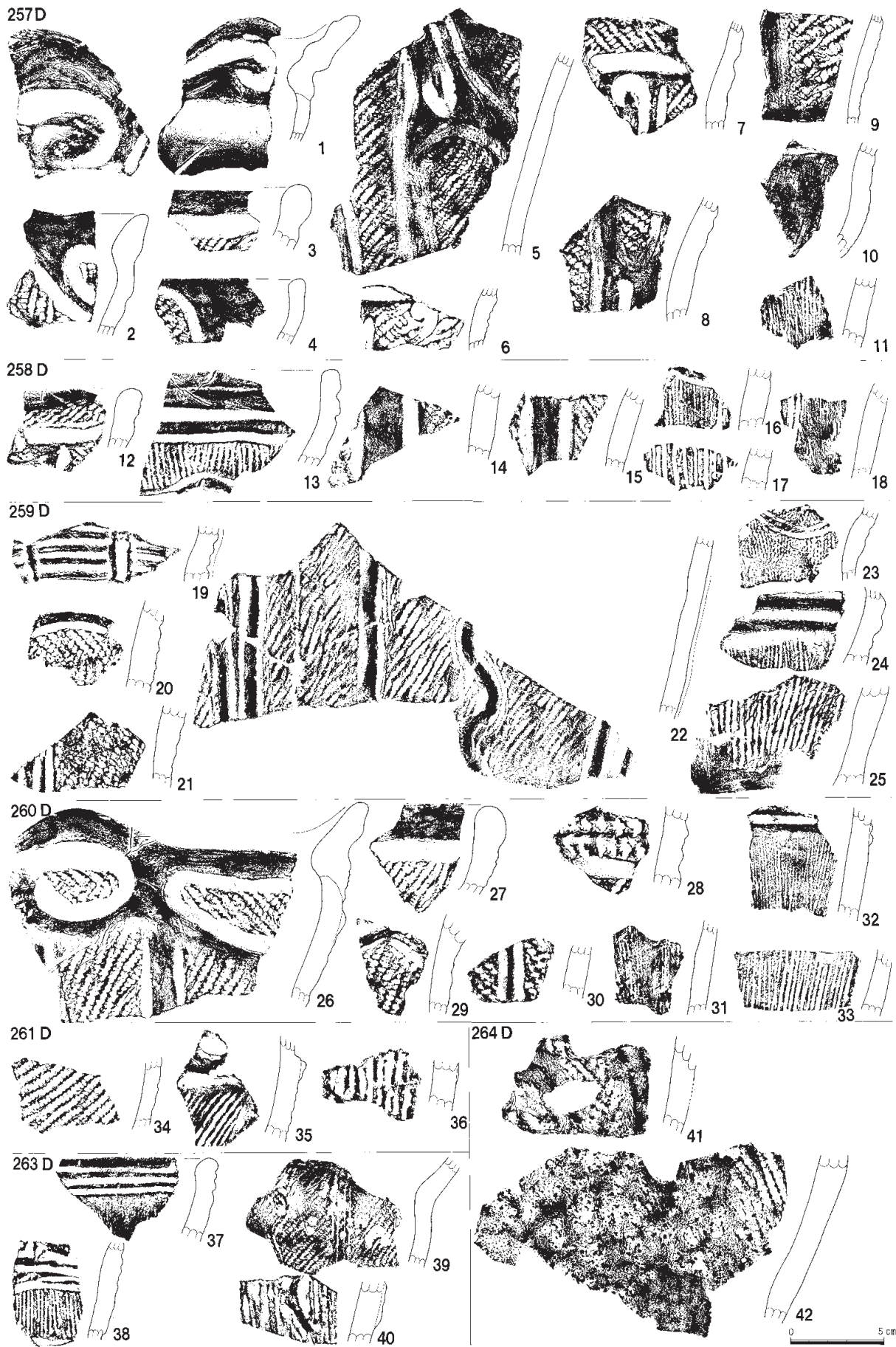
第383図 土坑出土遺物 7 (1/3)



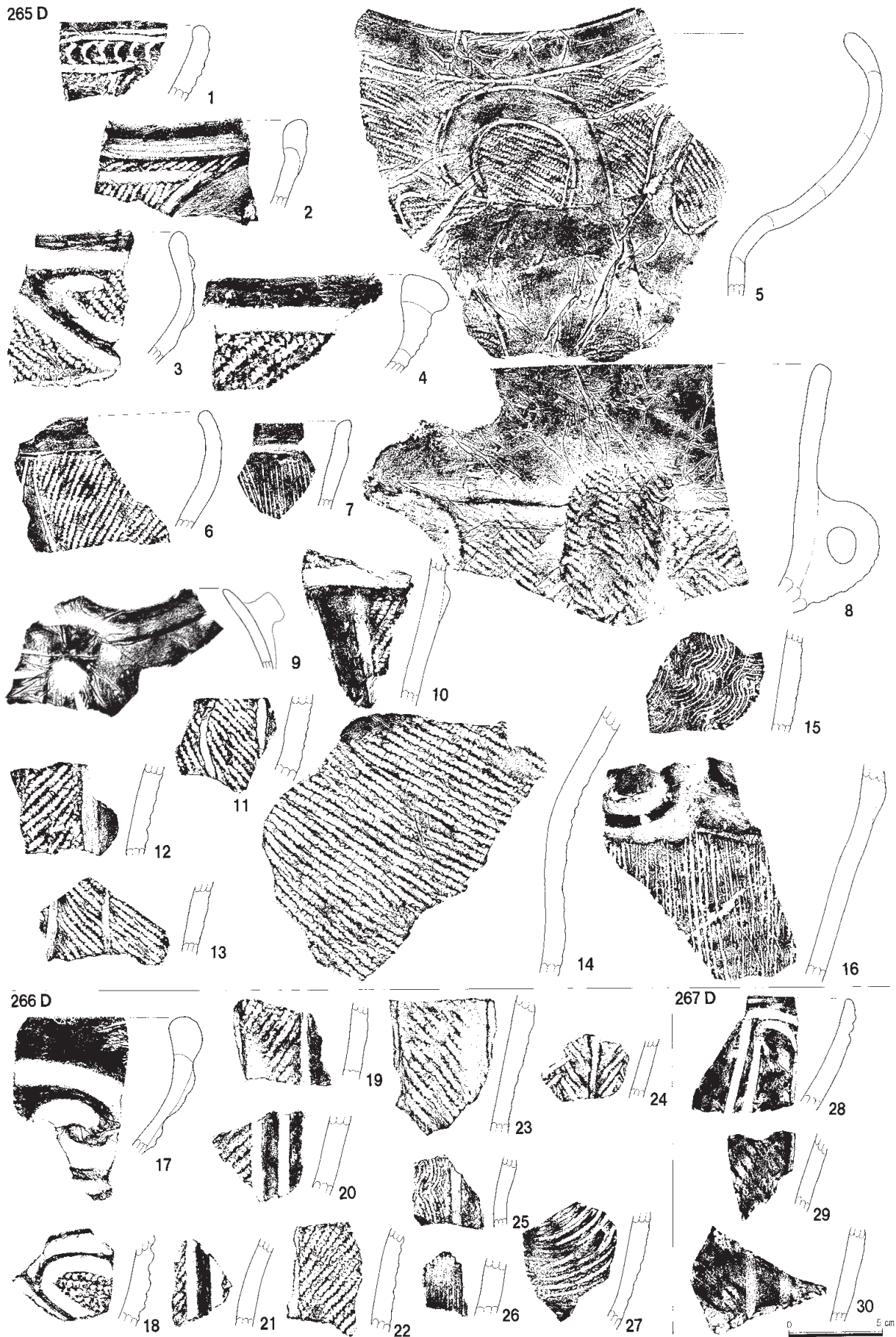
第384圖 土坑出土遺物 8 (1/3)



第385図 土坑出土遺物9 (1/3)



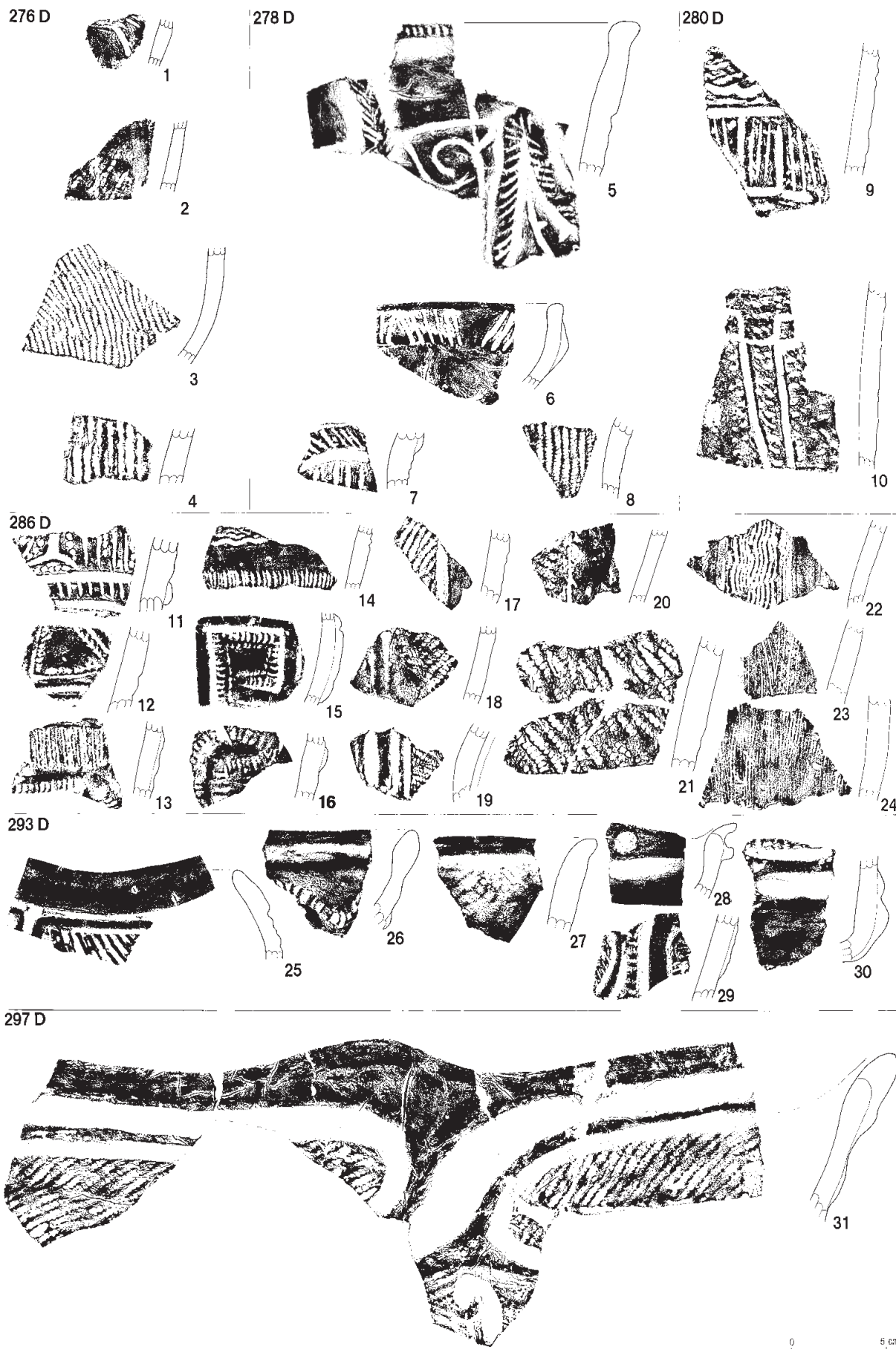
第386圖 土坑出土遺物10 (1/3)



第387図 土坑出土遺物11 (1/3)

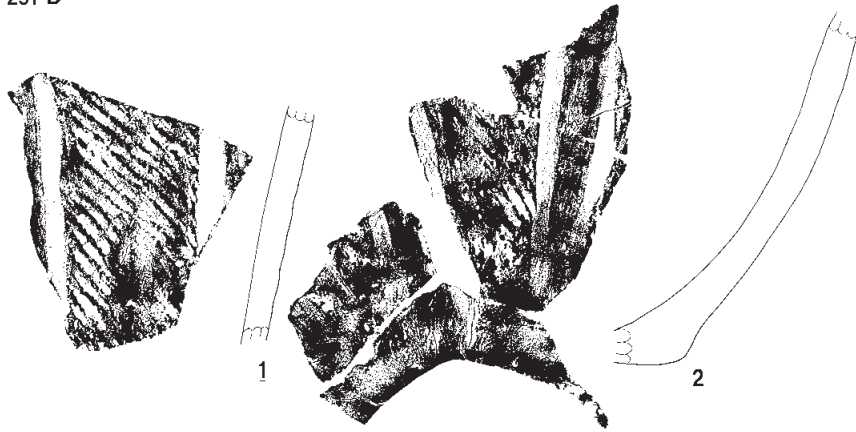


第388图 土坑出土遺物12 (1/3)

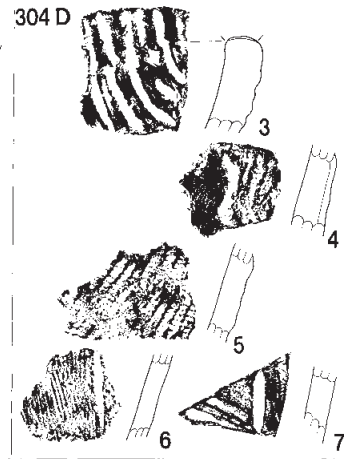


第389図 土坑出土遺物13 (1/3)

297 D



304 D



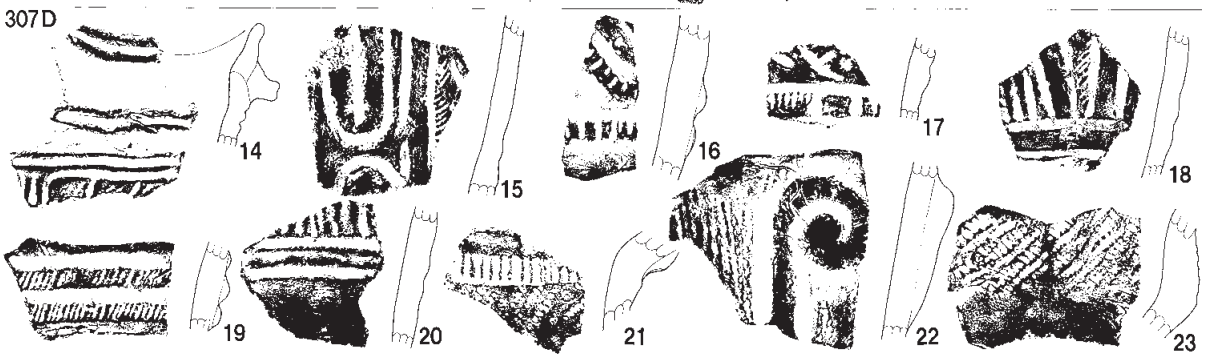
306D



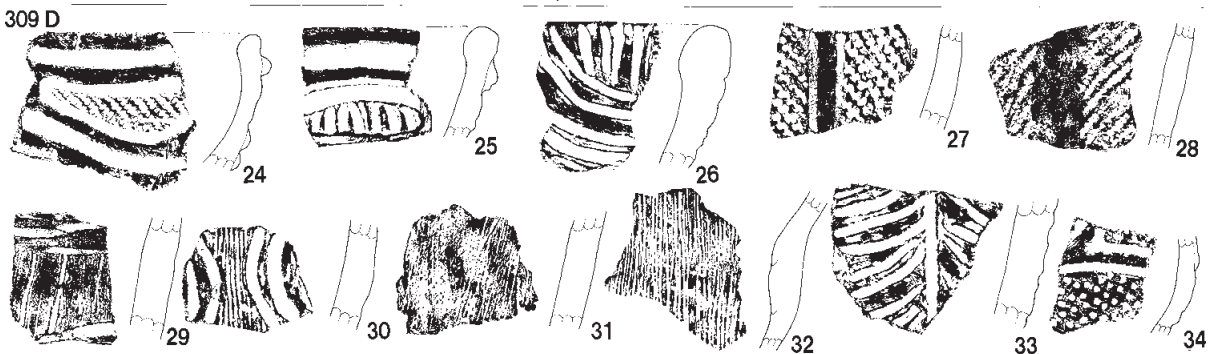
308D



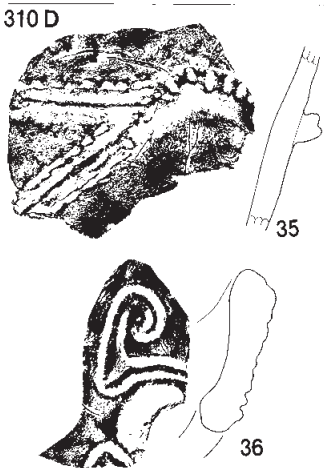
307D



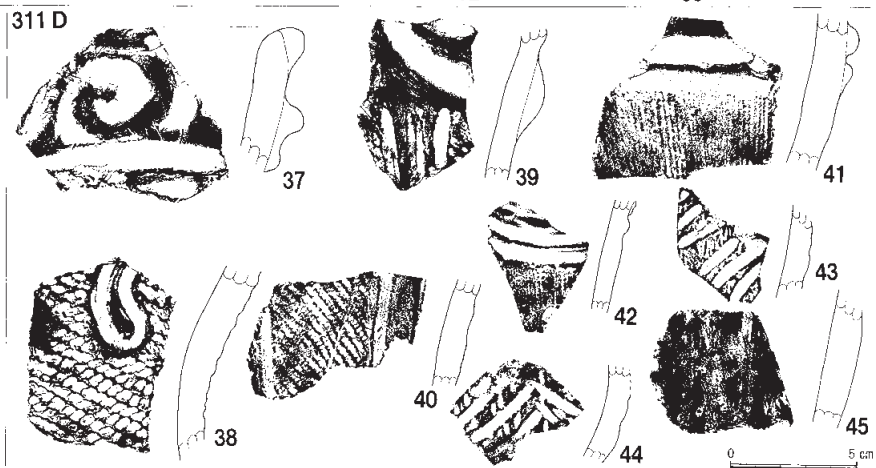
309 D



310 D



311 D

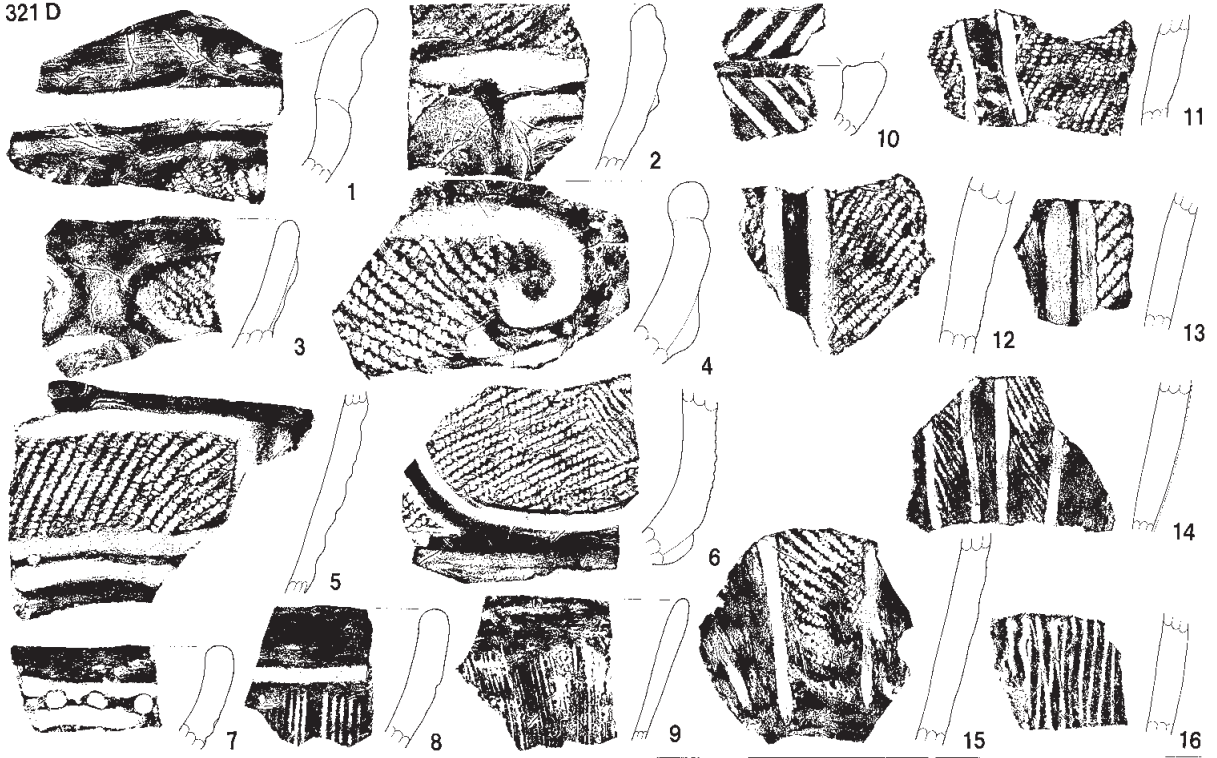


第390图 土坑出土遺物14 (1/3)

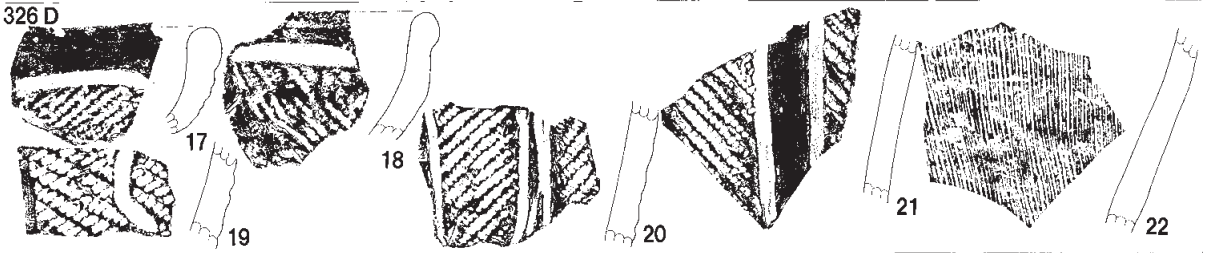


第391図 土坑出土遺物15 (1/3)

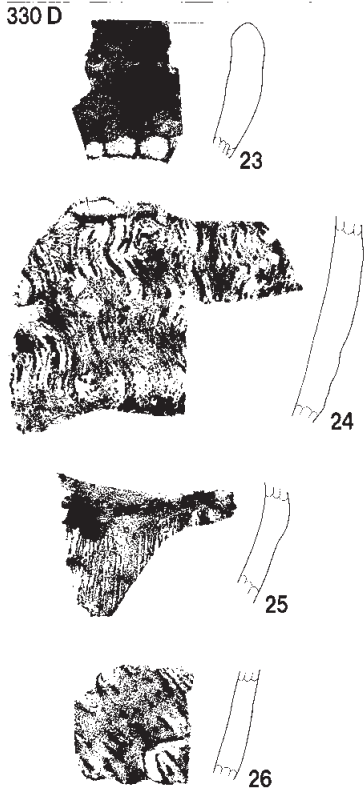
321 D



326 D



330 D



332 D



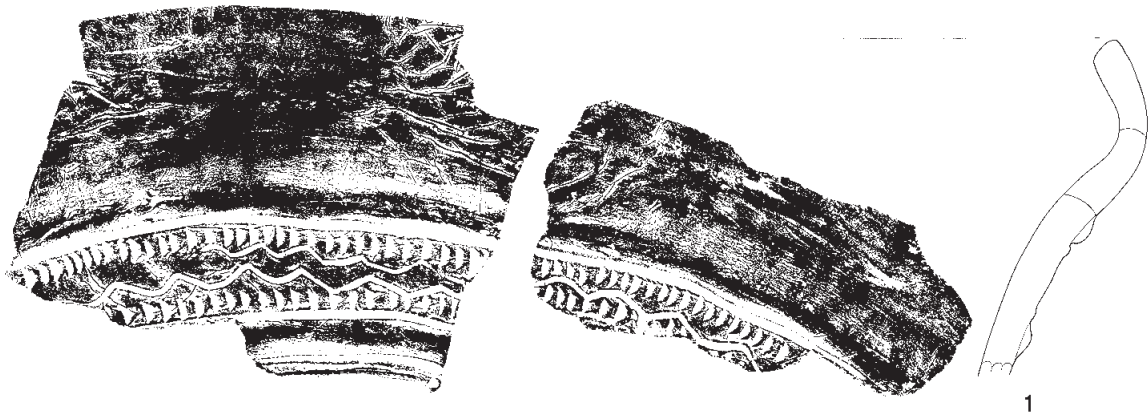
0 5 cm

第392图 土坑出土遺物16 (1/3)

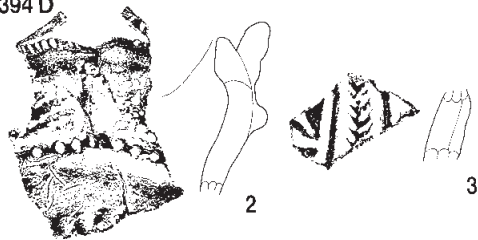


第393図 土坑出土遺物17 (1/3)

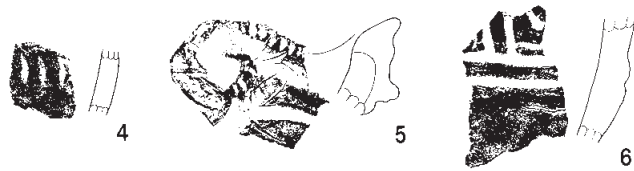
396 D



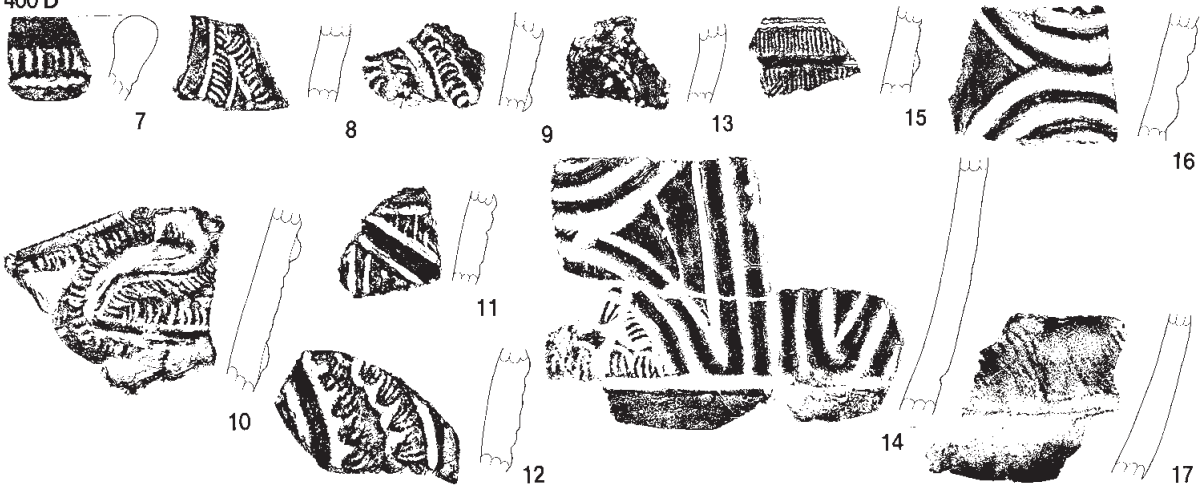
394 D



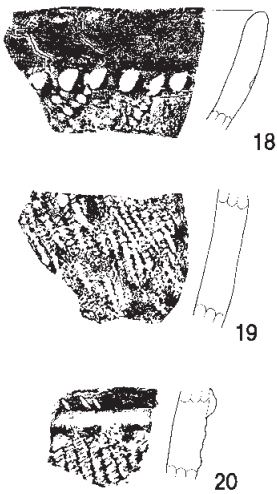
397 D



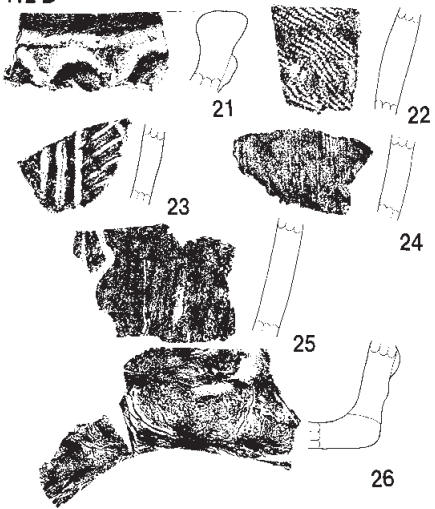
400 D



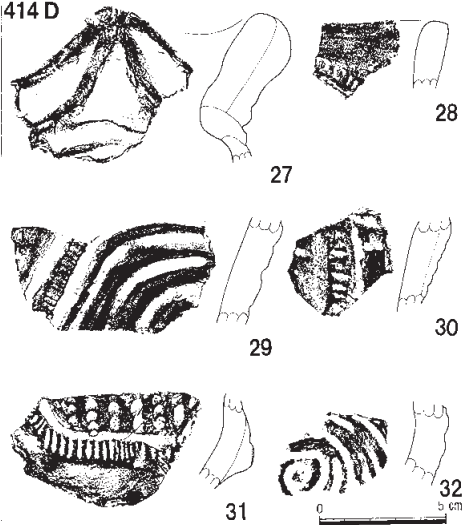
403 D



412 D



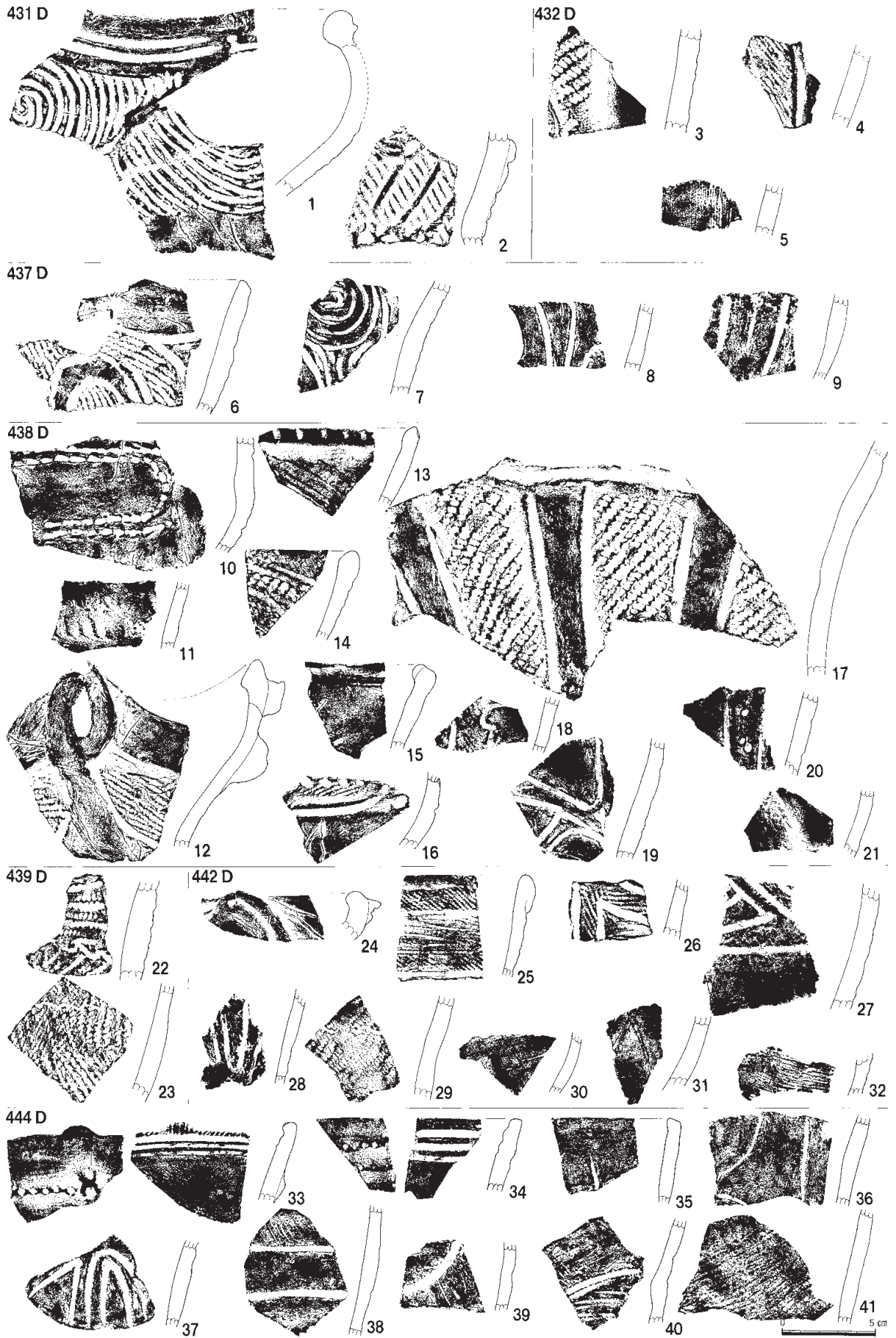
414 D



第394图 土坑出土遺物18 (1/3)



第395図 土坑出土遺物19 (1/3)



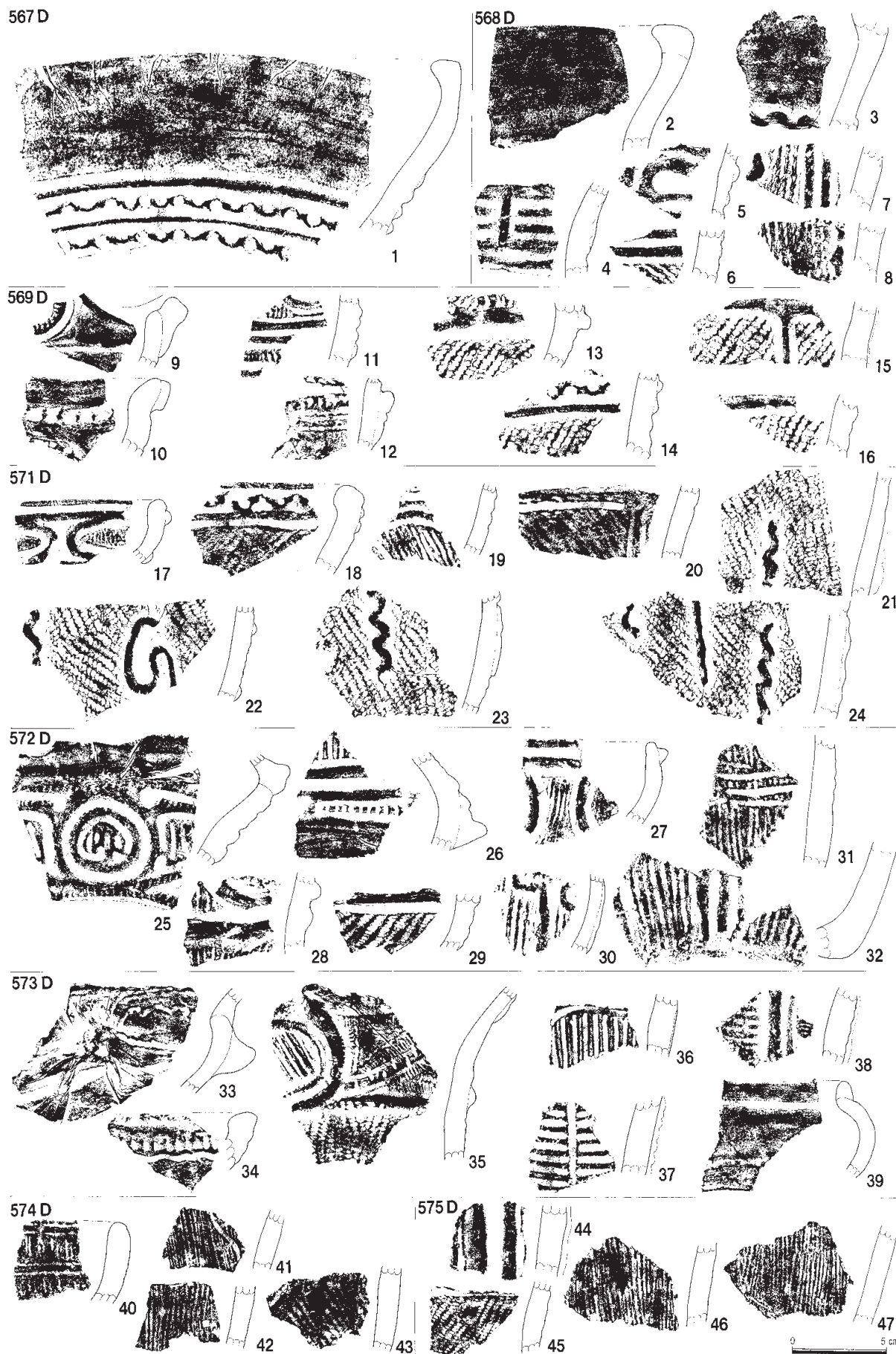
第396图 土坑出土遺物20 (1/3)



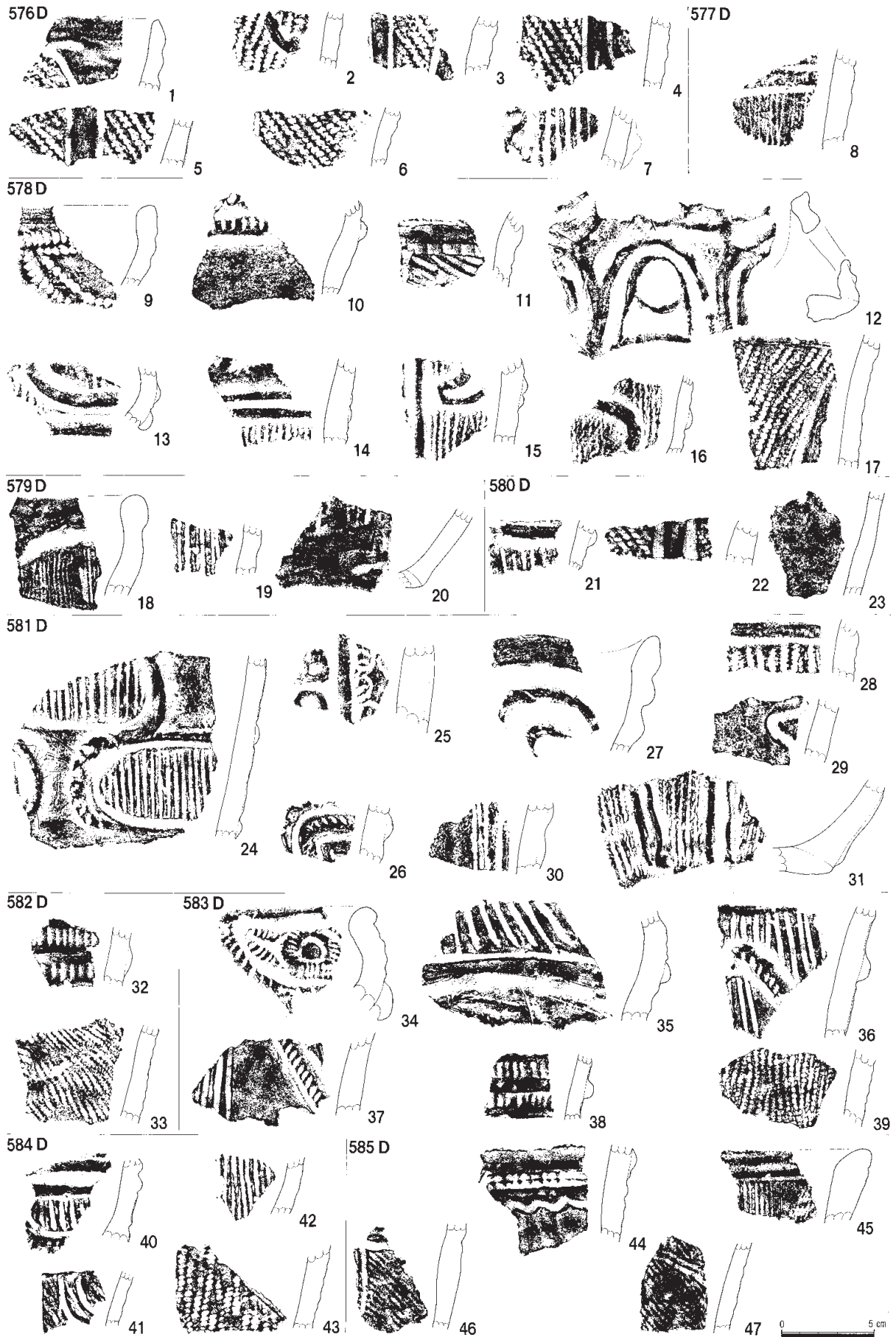
第397図 土坑出土遺物21 (1/3)



第398图 土坑出土遺物22 (1/3)

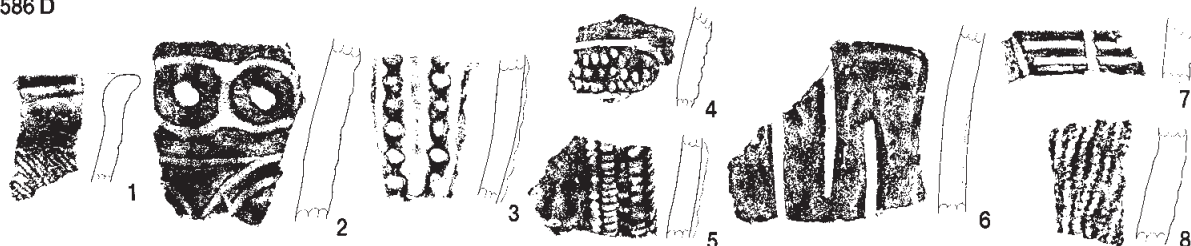


第399図 土坑出土遺物23 (1/3)



第400图 土坑出土遺物24 (1/3)

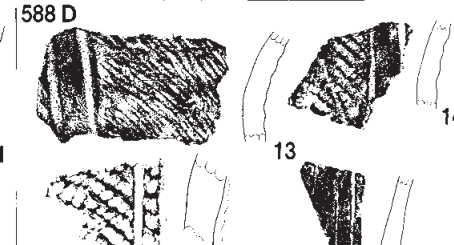
586 D



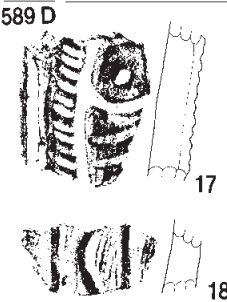
587 D



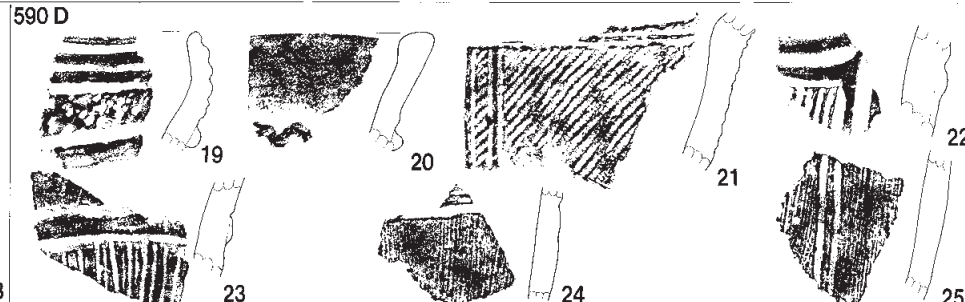
588 D



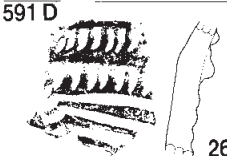
589 D



590 D



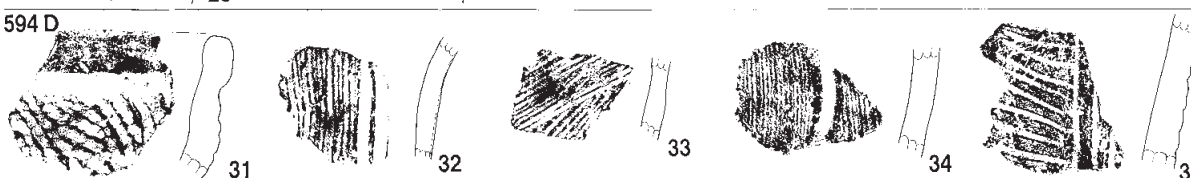
591 D



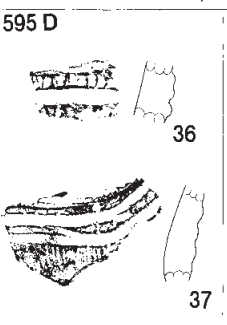
592 D



594 D



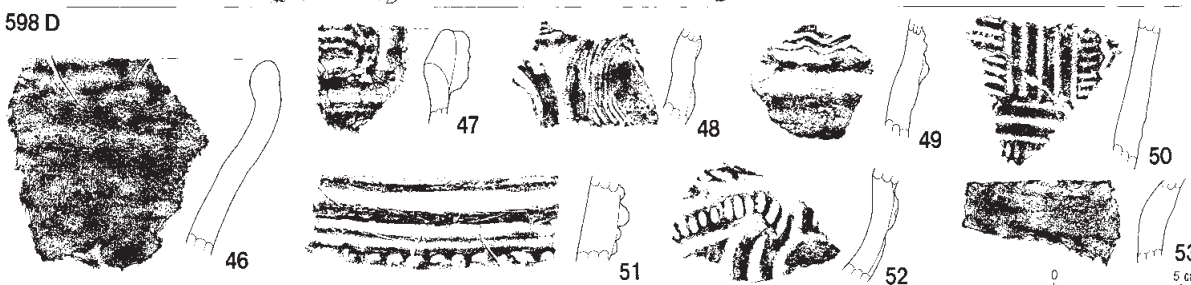
595 D



597 D



598 D



第401図 土坑出土遺物25 (1/3)

- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 5層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 8層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

597号土坑出土遺物 (第401図38~45)

38は波状口縁の無文の土器片。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

39は刻みがつけられた隆帯が弧状に貼付される。空白部には沈線による文様が施され、刻みが加えられる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

40は隆帯に沿って幅広の角押文と三角押文が施される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

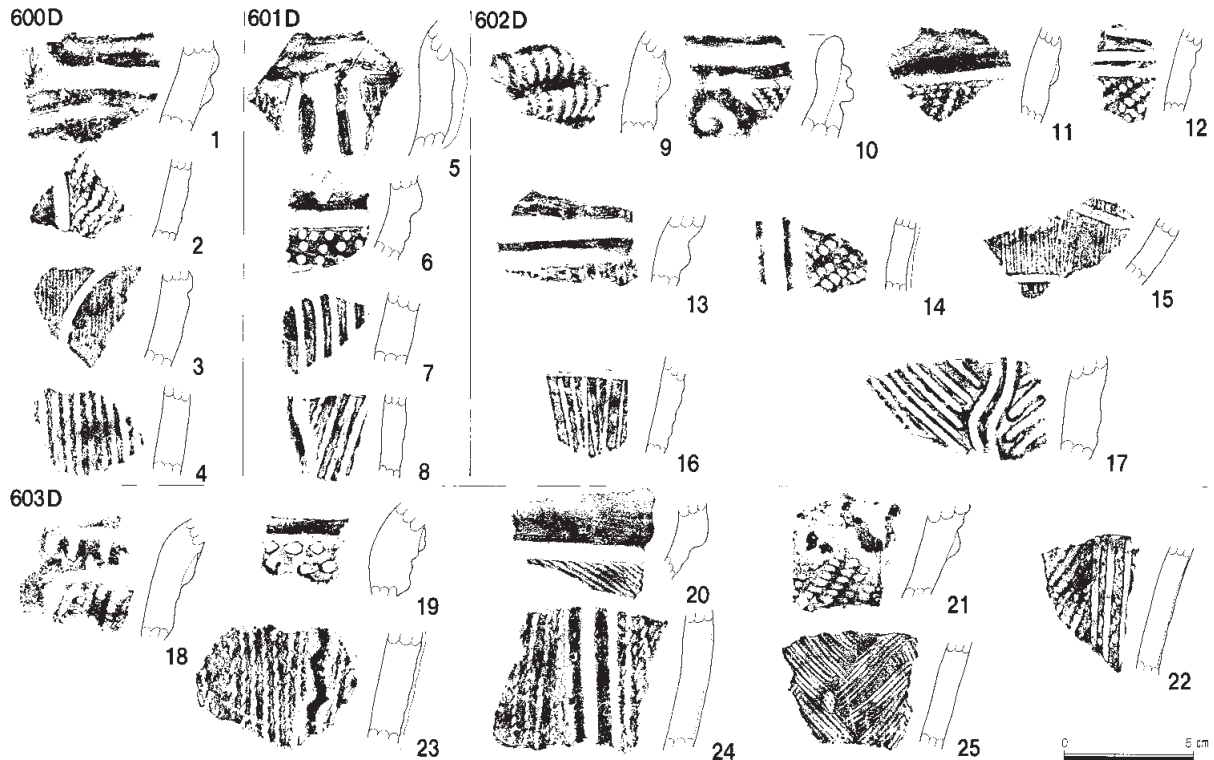
41は隆帯が貼付され、空白部には沈線により三叉文などの文様が施され、それに沿って刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

42は隆帯が弧状に貼付される。色調は灰褐色 (2.5YR5/2) を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

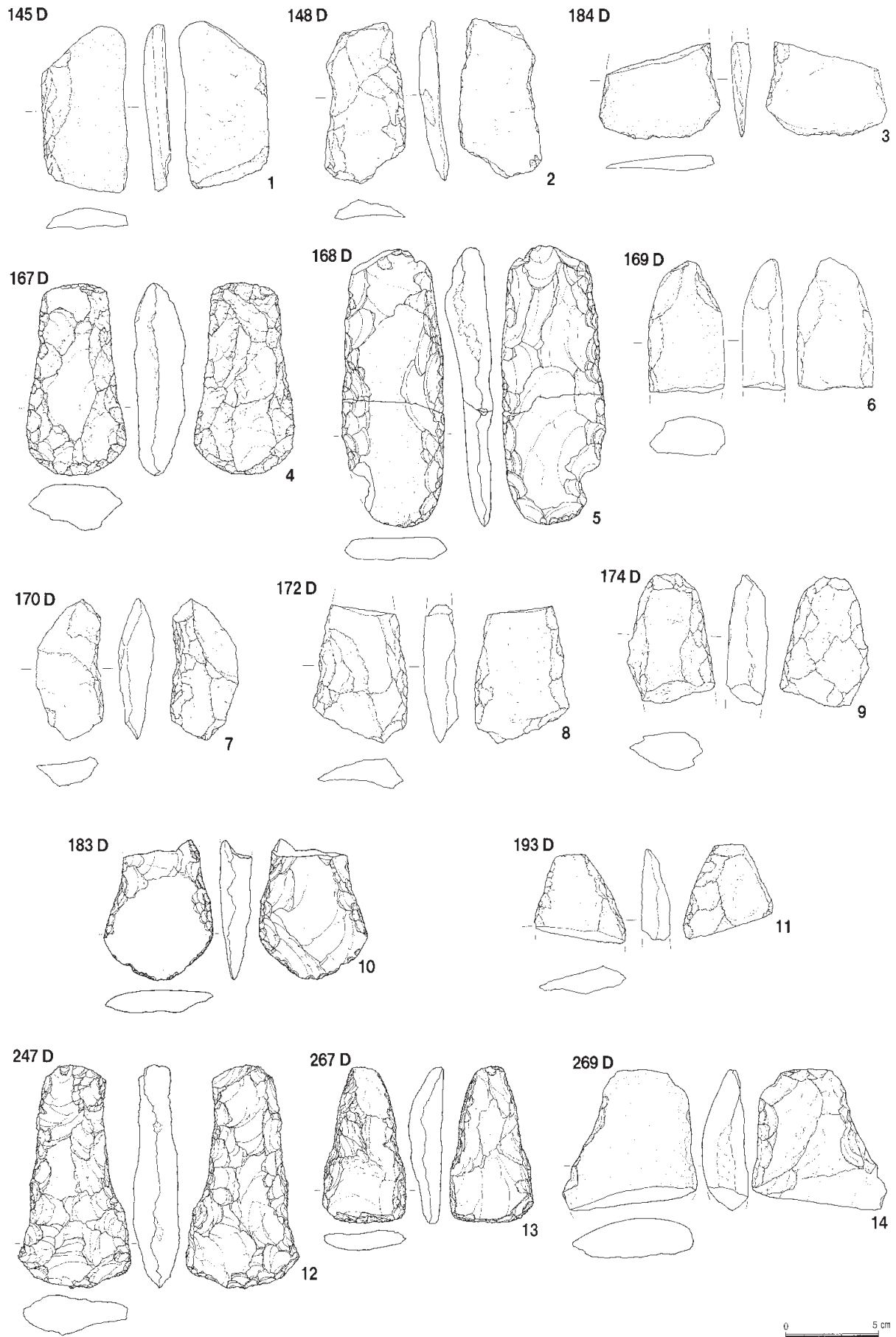
43は刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付され、隆帯に沿って沈線・幅広の連続刺突文・三角形の連続刺突文が施される。色調は灰褐色 (5YR5/2) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

44は楕円形の押捺が加えられた隆帯が斜位に貼付される。空白部には沈線が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

45は隆帯に沿って幅広の角押文が施される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を含む。



第402図 土坑出土遺物26 (1/3)



第403図 土坑出土石器 1 (1/3)

598号土坑（第371図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 152 J に切られる。（平面形）楕円形。（規模）160×150cm・深さ30cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は85°前後の角度で急斜に立ち上がる。（長軸方位）N-36°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

598号土坑出土遺物（第401図46～53、第405図9）

第401図46は口縁部がわずかに内湾する無文の土器。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

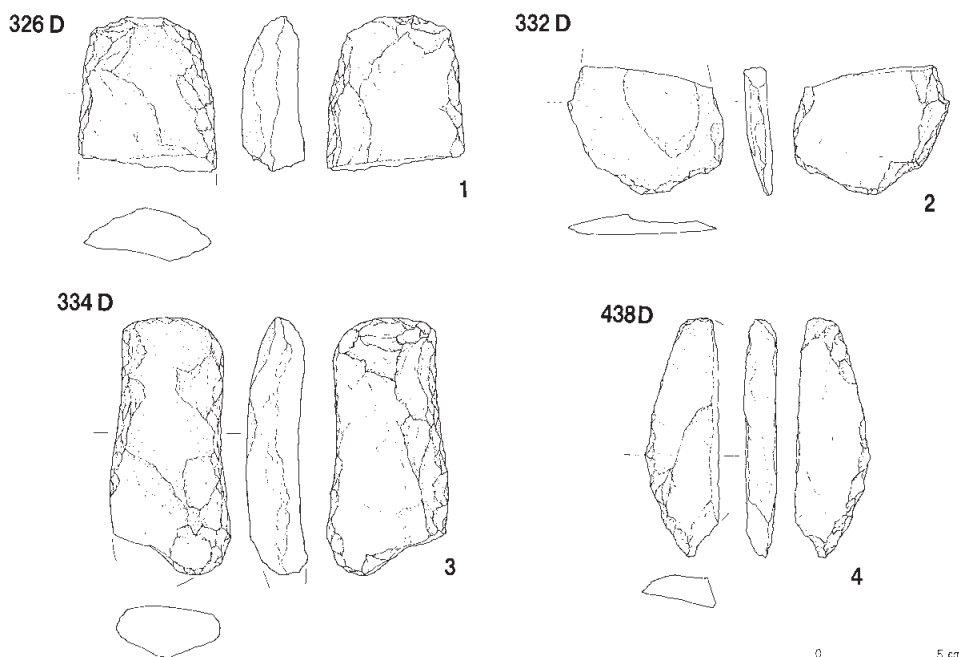
47は折り返し状に肥厚する口縁部に、連続刺突文が付加された隆帯により区画が作られようか。区画内にも隆帯に沿って連続爪形文が加えられる。肥厚する口縁部下には連続刺突文が2条施される。色調は灰褐色（7.5YR6/2）を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

48は隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内には5本1単位の櫛歯状施文具による条線が弧状に施される。色調は灰黄褐色（10YR6/2）を呈し、胎土には細砂を含む。

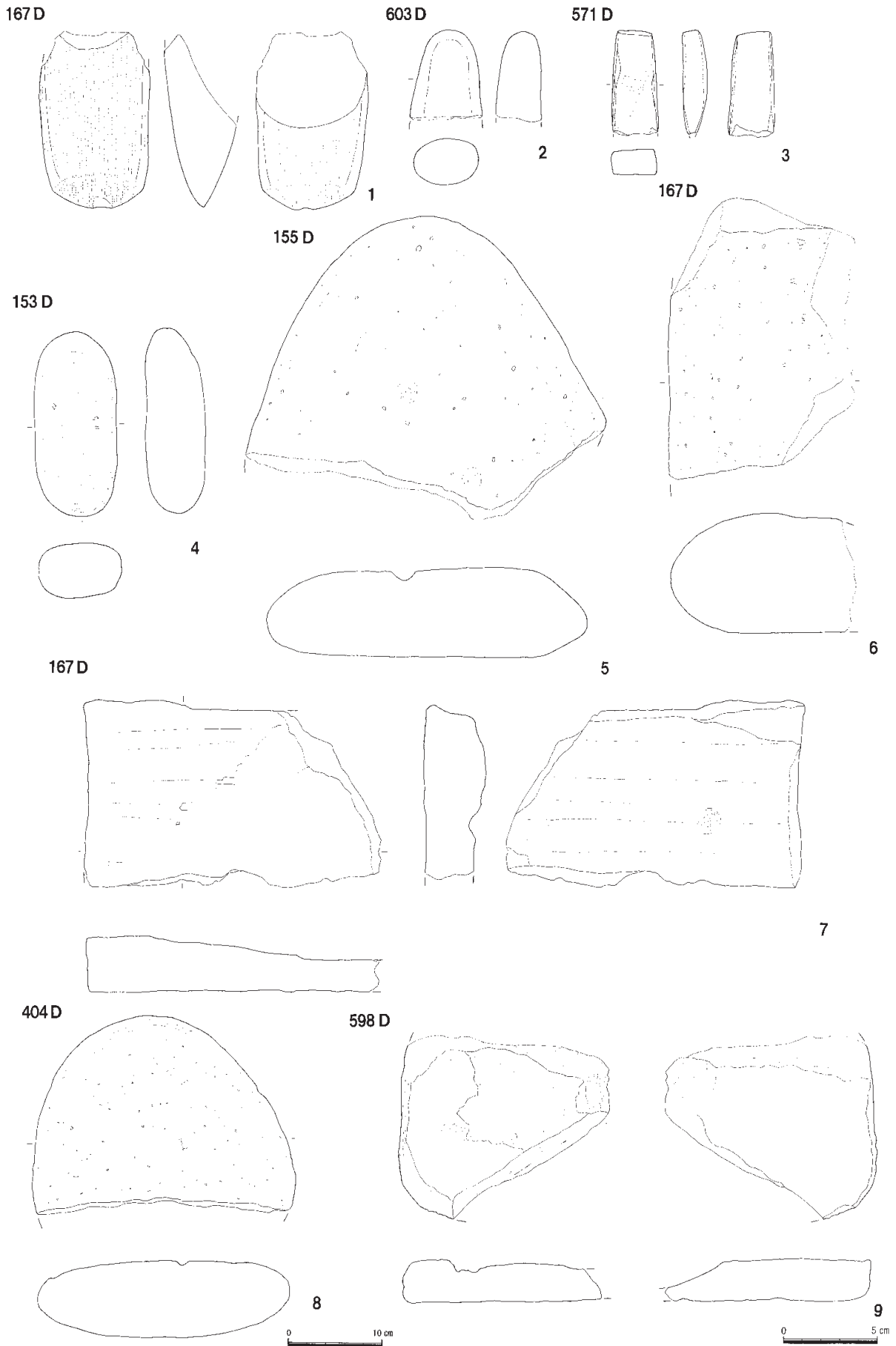
49は隆帯を横走させ上下を画する。上位には2条の波状沈線が巡る。下位は無文になる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

50は半截竹管により縦位に5条・横位に3条の沈線が配される。縦位の沈線の右側は垂下する波状沈線を挟んで刺し切り状の短沈線が、左側には沈線が横位に集合して施される。横位の沈線の下には刺し切り状の短沈線がみられる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

51は隆帯を横位に貼付し上下を画し、隆帯に沿って半截竹管による平行沈線が加えられる。下位には半截竹管の刺突による半円文が連続して施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には細砂を含む。



第404図 土坑出土石器 2（1/3）



第405図 土坑出土石器 3 (1/3)

52は刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付され、狭い「U」字状の隆帯が垂下する。色調は暗赤褐色（2.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

53は無文の土器。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂・雲母を多く含む。

第405図9は石皿片。使用によりくぼんでいる。凹石と兼用。360g。雲母片岩製。

599号土坑（第371図）

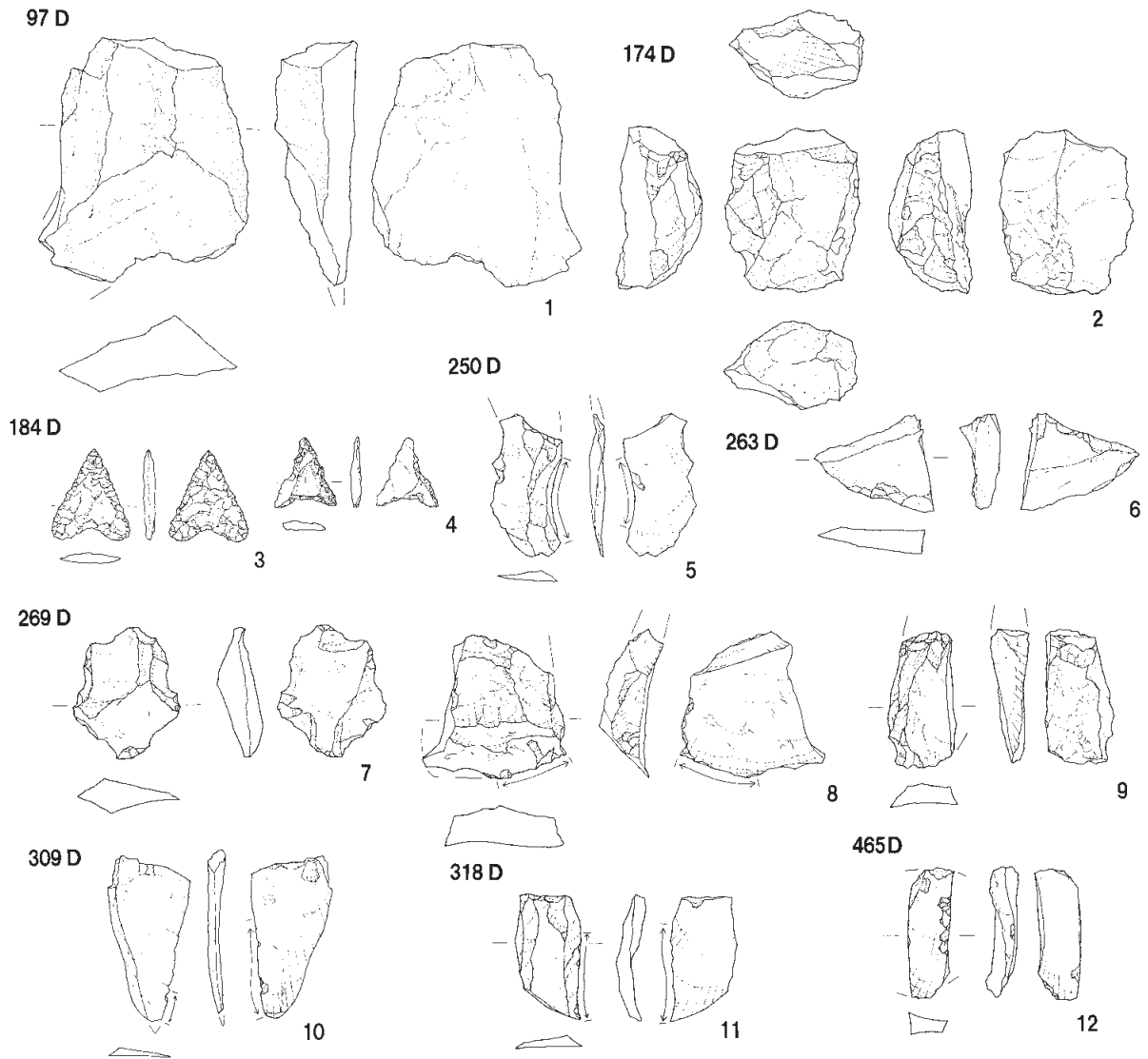
〔位置〕 130地点。

〔構造〕 151Jと重複するが、前後関係は不明。（平面形）楕円形か。（規模）不明×140cm・深さ60cm前後を測る。

（長軸方位）N-62°-W。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。



第406図 土坑出土石器4（1/3）

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 中期。

600号土坑（第371図）

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 152 J と重複するが、前後関係は不明。（平面形）不明。（規模）深さ36cm前後を測る。壁は60° 前後で立ち上がる。（長軸方位）不明。

〔覆土〕 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

600号土坑出土遺物（第402図 1～4）

1 は隆帯が横位に貼付され、条線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

2 はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。縄文が磨り消される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

3 は条線を地文とし、弧状の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YE5/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

4 はLの撚糸文が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

601号土坑（第371図）

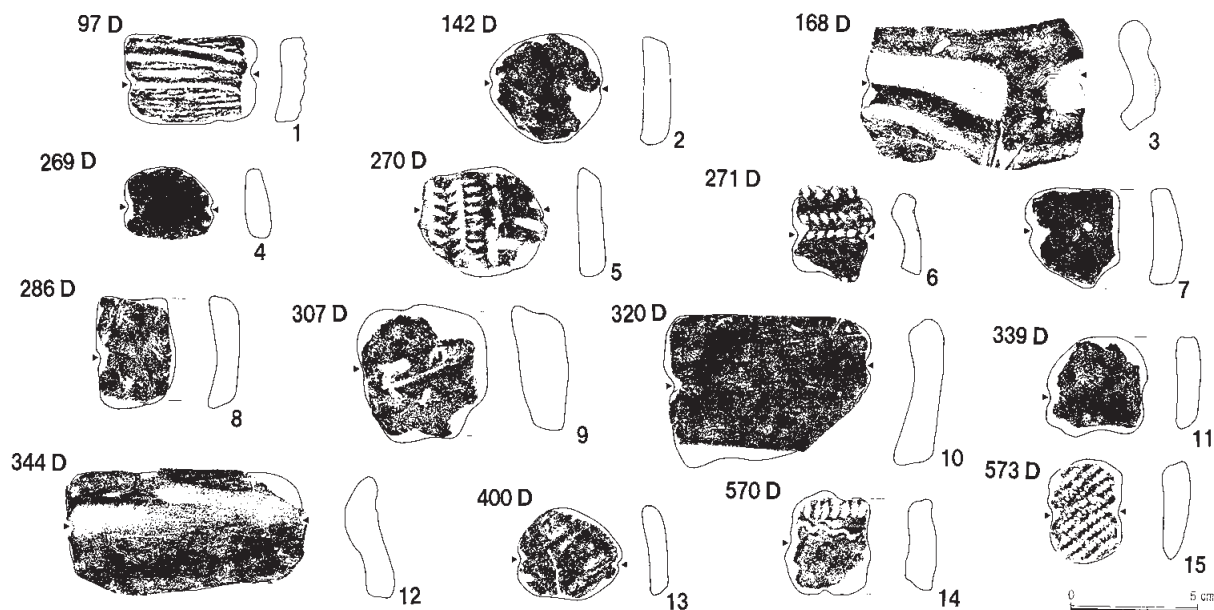
〔位置〕 130地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）120×115cm・深さ20cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60° 前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-72°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。



第407図 土製品（97・142・168・269・270・286・307・320・322・339・344・400・570・573号土坑）（1/3）

3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

601号土坑出土遺物(第402図5～8)

5は2本の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

6は横位の太沈線を挟んで、上下に円形の刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

7は多条に沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

8はLの撚糸文を地文とし、隆帯が垂下する。色調はにぶい橙色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

602号土坑(第371図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 152J・603Dと重複するが、前後関係は不明。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×180cm・深さ25cm前後を測る。坑底は僅かに凹凸があり、壁は60°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-42°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。

2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

4層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

5層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

6層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 中期後半。

602号土坑出土遺物(第402図9～17)

9は細い隆帯に沿って外側竹管による連続爪形文が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

10はRLの単節斜縄文を地文とし、隆帯による渦巻文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

11は横位の沈線下にRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

12は2条の沈線が横走し、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

13は隆帯が横位に貼付され上下を画する。上位には条線がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

14はRLの単節斜縄文を地文とし、2本の隆帯が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

15は連弧文系土器か。条線を地文とし、沈線が弧状・直行して施される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

16は横位の沈線下に縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂

を含む。

17は曽利系の土器。蛇行する2条の沈線を挟んで方向を変えた斜位の沈線が集合して施される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

603号土坑(第371図)

〔位置〕130地点。

〔構造〕602Dと重複するが、前後関係は不明。(平面形)楕円形。(規模)155×140cm・深さ45cm前後を測る。壁は70°前後で立ち上がり、挿鉢状を呈する。(長軸方位)N-50°-E。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 2層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕中期後半。

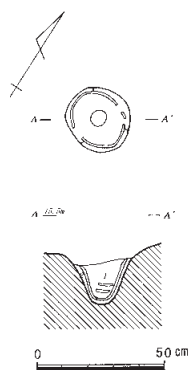
603号土坑出土遺物(第402図18~25、第405図2)

第402図18は刺突が加えられた隆帯が横位に貼付される。RLの単節縄文を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

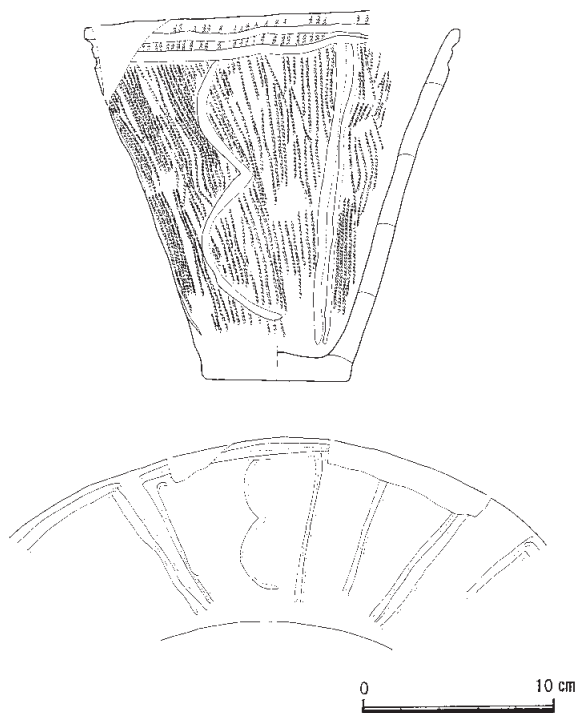
19は横走る隆帯下に円形の刺突文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

20は太沈線下にRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

21はRLの単節斜縄文を地文とする。横位に沈線を施し、その上に蛇行する隆帯を貼付する。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。



第408図 1号埋甕(1/30)



第409図 1号埋甕出土遺物(1/4)

22はR Lの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

23・24はLの撚糸文を地文とする。23は蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂・片岩を多く含む。24は2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

25は条線が矢羽根状に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第405図2は磨製石斧。刃部側を欠く。60.6g。砂岩製。

第3節 埋 甕

1号埋甕(第408・409図)

〔位置〕22地点。

〔構造〕(平面形・規模)27×24cm・深さ20cmの楕円形の掘り込みをもつ。

〔覆土〕埋設土器内の覆土は、ローム粒子を僅かに含む黒褐色土である。

〔埋設土器〕底部から僅かに外反しながら開く単純な器形である。Lの撚糸文を地紋とする。半面には2条一対の沈線による「口」状の区画を2単位作り、1ヵ所には蛇行する沈線を垂下させる。残る半面には2条一対・3条一組の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

第4節 集 石

4号集石(第410図)

〔位置〕23I地点。

〔構造〕浅い土坑を伴う。(礫の分布)北側に多量に堆積している。南側はほとんど検出されない。(礫の状態)小砂利の下位に土器小片が多量に出土した。(平面形)不整楕円形。(規模)150×60cm・深さ15cm前後の掘り込みをもつ。(長軸方位)N-33°-W。

〔覆土〕上層は黒褐色土。下層はローム粒子を多く含む暗褐色土。

〔遺物〕礫に混じって多く出土した。

〔時期〕勝坂式期。

4号集石出土遺物(第412図1~15、第415図1・2、第416図1)

第412図1は方形を呈し、頂部が尖頭状になる突起が口唇部に付く。中央に円孔が穿たれ、刻みが加えられた隆帯・鋸歯状の隆帯が円孔を囲む。尖頭状の部分には渦巻文が施され、刻みが加えられる。突起内面には沈線による三叉文や刻みが加えられる。口縁部の文様は部分的に刻みを付加した隆帯により楕円形などの区画が作られる。区画内には沈線により波状文などが描かれ、沈線間には刻みが付される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

2は隆帯による楕円形の区画が作られようか。区画内には隆帯に沿って2条の押引文が加えられる。口唇端部には2条の押引文が施される。色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂・雲母を含む。

3は口唇部が肥厚する。刻みが加えられた隆帯が斜位に貼付される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

4は上位から、幅狭な隆帯・交互刺突による鋸歯文・幅狭な角押文という文様構成をとる。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5は隆帯により楕円形の区画が作られようか。区画内には連続刺突文や蓮華文が充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

6は隆帯により渦巻文や区画が作られるようである。隆帯に沿って連続刺突文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

7は連続刺突文により半楕円形の区画が作られようか。区画内には連続爪形文や刺突文が充填される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

8は刻みが加えられた隆帯が横位に貼付される。沈線により楕円形の区画が作られ、区画内には縦位の沈線が集合して施される。色調は赤褐色(5YR4/6)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

9は刻みが加えられた隆帯が縦位・横位に貼付される。空白部には沈線による文様などが施される。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈し、胎土には粗砂を含む。

10は隆帯に沿って幅広の連続刺突文や波状沈線が加えられ、R Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

11・12は同一個体。両脇に連続刺突文・波状沈線が加えられた隆帯を縦位・横位に貼付する。空白部には縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

13は胴部下位から底部にかけての破片。隆帯による楕円形の区画が作られ、区画内には半截竹管により縦位の集合する沈線が施される。色調は赤褐色(5YR4/6)を呈し、胎土には粗砂を僅か含む。

14はR Lの単節斜縄文が施される。部分的に羽状になる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

15はR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅か含む。

第415図1・2は打製石斧。ともに短冊形であるが、平面形をみると器体中位が1はふくらみ、2はくぼむ。1は表面に僅かな礫面を残す。刃部は平刃状を呈する。135g。硬砂岩製。2は刃部側を欠く。横長の剥片を使用。表面に礫面を残す。95g。硬砂岩製。

第416図1は寸づまりの分厚い剥片。6.3g。黒曜石製。

13号集石(第410図)

〔位置〕26地点。

〔構造〕浅い土坑を伴う。(礫の分布)土坑北側に80×40cmの楕円形の範囲に偏り分布する。(礫の状態)破碎礫が大半を占める。(平面形)不整楕円形。(規模)155×135cm・深さ10cm前後の掘り込みをもつ。(長軸方位)N-40°-W。

〔覆土〕黒褐色土を基調とする。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。

〔遺物〕礫に混じって多く出土した。

〔時期〕中期後半。

13号集石出土遺物(第412図16~25、第415図3・8)

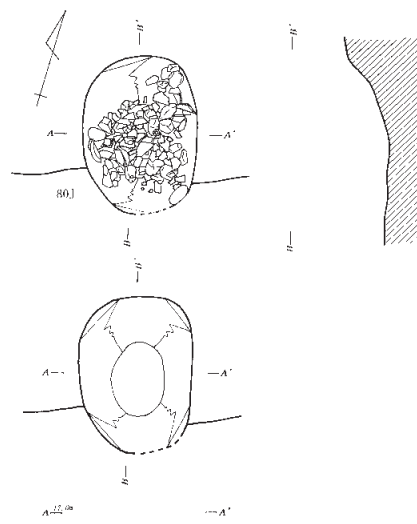
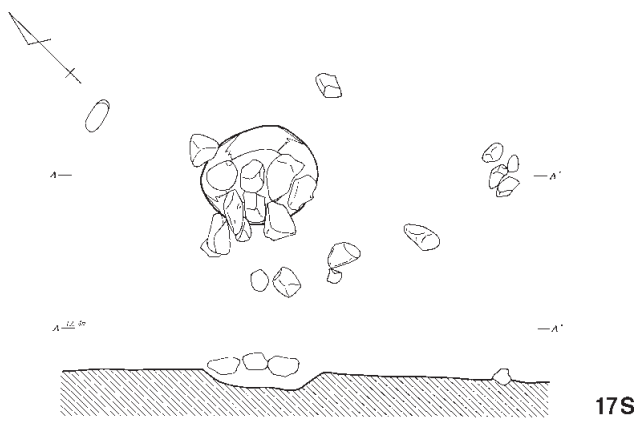
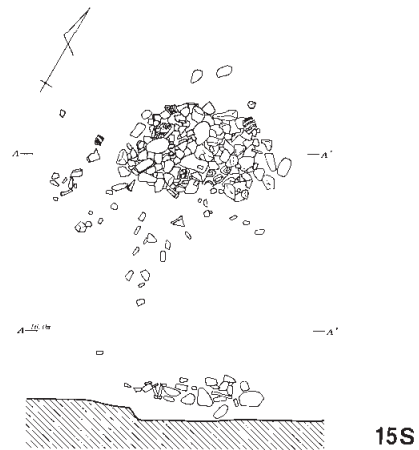
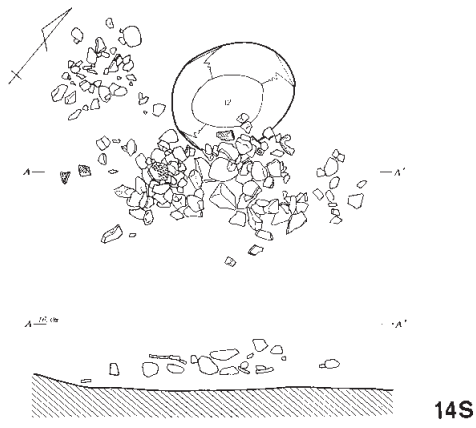
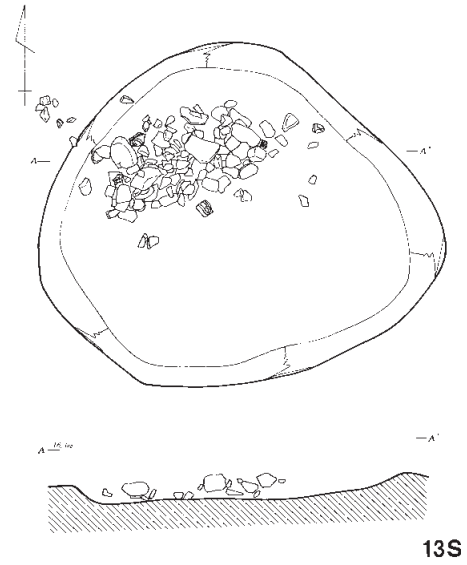
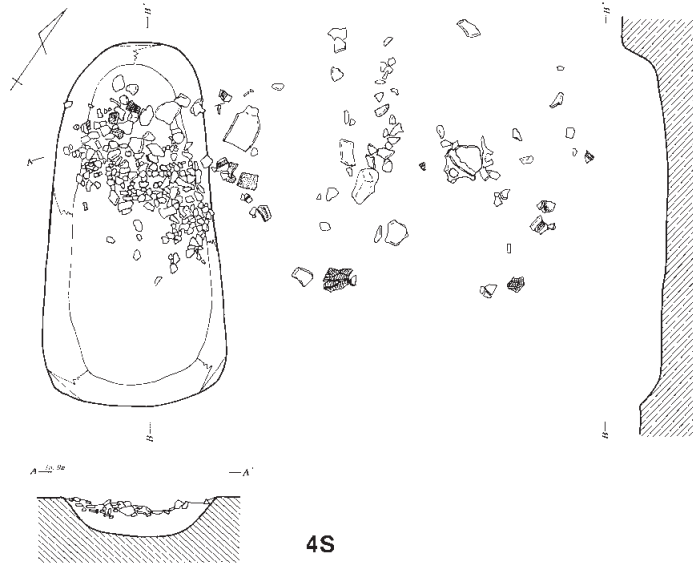
第412図16は断面三角形の隆帯が縦位に貼付される。空白部には櫛歯状施文具による条線が波状に施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂・雲母を多く含む。

17は刻みが加えられた隆帯により区画が作られようか。区画内には沈線による三叉文などが施される。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

18は刻みが加えられた隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

19は隆帯により区画が作られる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

20はR Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯により渦巻文や区画が作られる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈



土器



第410図 4・13~15・17・18号集石 (1/30)

し、胎土には細砂を僅かに含む。

21はLの撚糸文を地文とし、隆帯による区画が作られる。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

22はLの撚糸文を地文とし、刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付される。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

23はLの撚糸文を地文とし、2本一對の隆帯が弧状に貼付される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

24は拓影図では不鮮明であるが、RLの単節斜縄文を地文とし、3条の横位の沈線・2条の斜位の沈線が施される。色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

25はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第415図3は短冊形の打製石斧。右側縁が湾曲する。横長の剥片を使用か。刃部は円刃状を呈する。280g。硬砂岩製。

8は石皿片。表面は使用により平滑になる。895g。石英閃緑岩製。

14号集石(第410図)

〔位置〕26地点。

〔構造〕(礫の分布)50×40cmの楕円形の掘り込み外の南側に分布する。(礫の状態)破碎礫が大半を占める。(平面形)楕円形。(規模)100×80cm・深さ40cm前後の掘り込みをもつ。(長軸方位)N-20°-E。

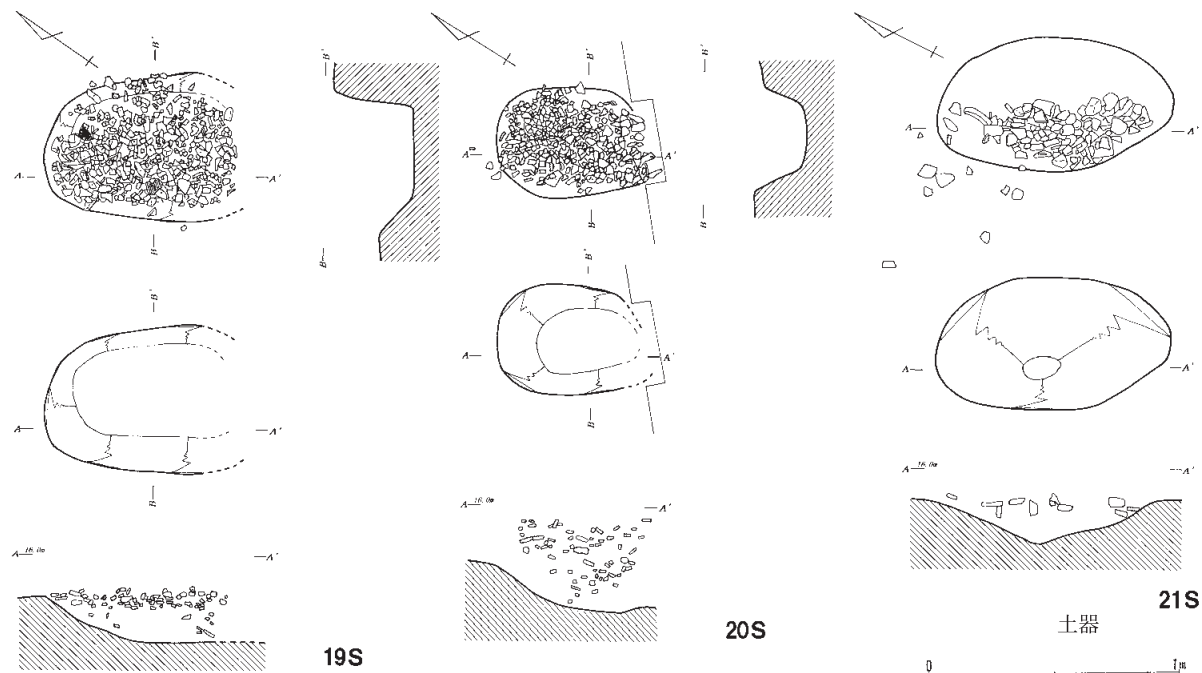
〔覆土〕黒褐色土を基調とする。炭化物を含む。

〔遺物〕礫に混じって多く出土した。

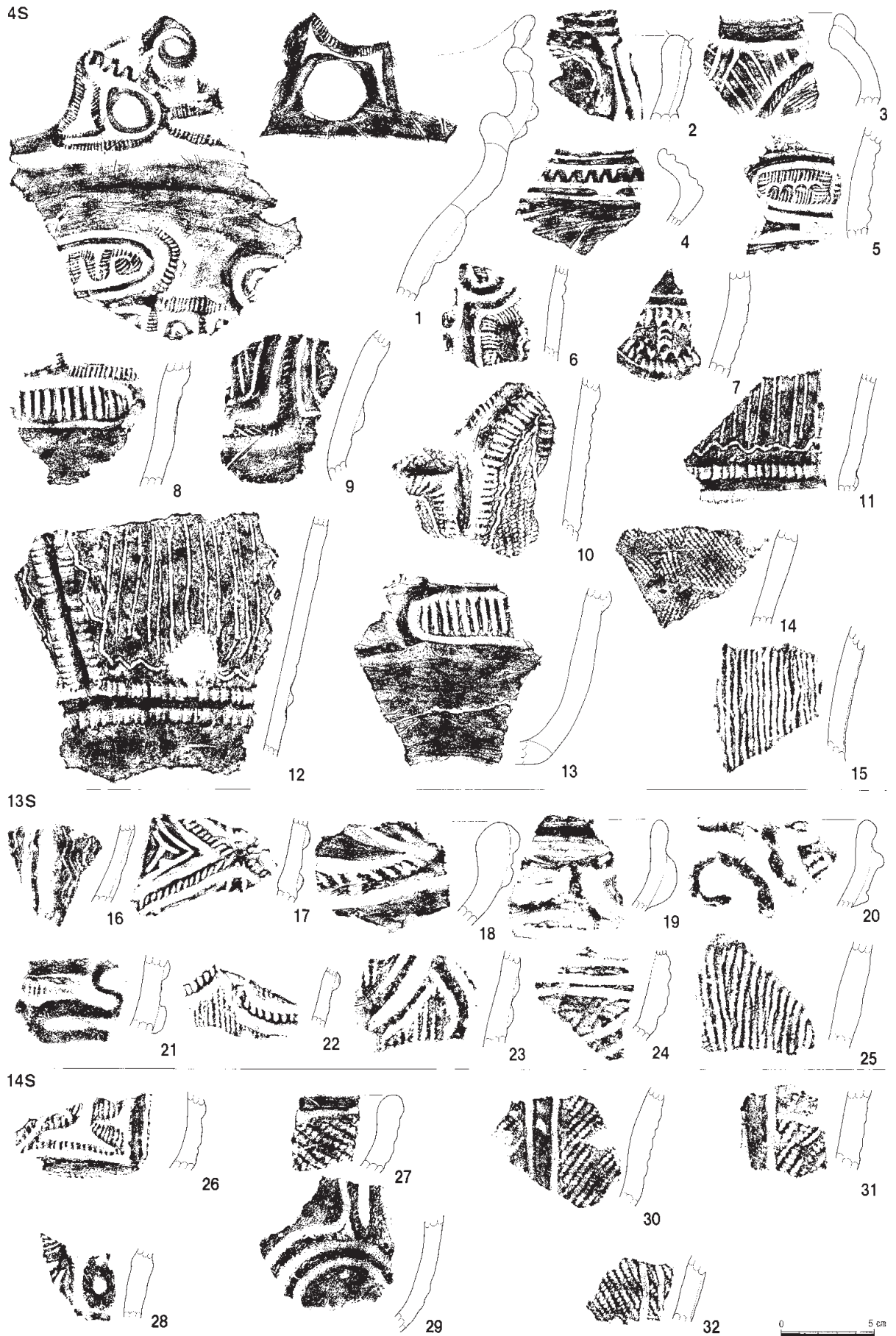
〔時期〕中期後半。

14号集石出土遺物(第412図26~32、第415図4・5・9)

第412図26は縦位・横位に隆帯が貼付される。空白部には三叉文が施され、その周囲には刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂・輝石を含む。



第411図 19~21号集石(1/30)



第412図 集石出土遺物 1 (1/3)

27は口唇部下に沈線を横走させ、R Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

28は環状文や沈線による文様が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

29は3条の沈線の垂下する沈線が、同心円文へと連続して施される。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈し、胎土には粗砂を含む。

30・31はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。30の色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。31の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

32はL Rの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

第415図4・5は打製石斧。4は短冊形。縦長の扁平礫を素材として用いられたようで、表裏面に礫面を残す。刃部は平刃状を呈する。115g。硅質砂岩製。5は短冊形。刃部側を欠く。横長の剥片を使用。67.3g。硬砂岩製。9は石皿片。830g。石英閃緑岩製。

15号集石(第410図)

〔位置〕26地点。

〔構造〕(礫の分布)60×35cmの楕円形状に分布し、周辺に僅かに散漫な分布がある。(礫の状態)破碎礫が多く見受けられるが、原型をとどめている礫もある。(平面形)不明。(規模)不明×不明・深さ10cm前後の掘り込みをもつ。(長軸方位)不明。

〔覆土〕黒褐色土を基調とする。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。

〔遺物〕礫に混じって土器片が多量に出土した。

〔時期〕加曾利EⅡ式期。

15号集石出土遺物(第413図1~11、第415図6・10、第416図2)

第413図1は波状口縁の土器。波頂部には凹線による渦巻文が施され、凹線は連続して口唇部に至る。波頂部内面にも凹線による渦巻文がみられる。R Lの単節斜縄文を地文とし。隆帯により渦巻文や区画が作られる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

2は浅鉢形土器になろうか。屈曲部に隆帯を貼付し、強く張り出す。上位の文様は、R Lの単節斜縄文を施し、沈線で画するようである。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

3は口唇部下に円形刺突文列を2段施す。色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

4はR Lの単節斜縄文を地文とし、沈線により蕨手状の文様が施されようか。色調は褐灰色(5YR5/1)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

5は口唇部下に2条の沈線が横走し、L Rの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

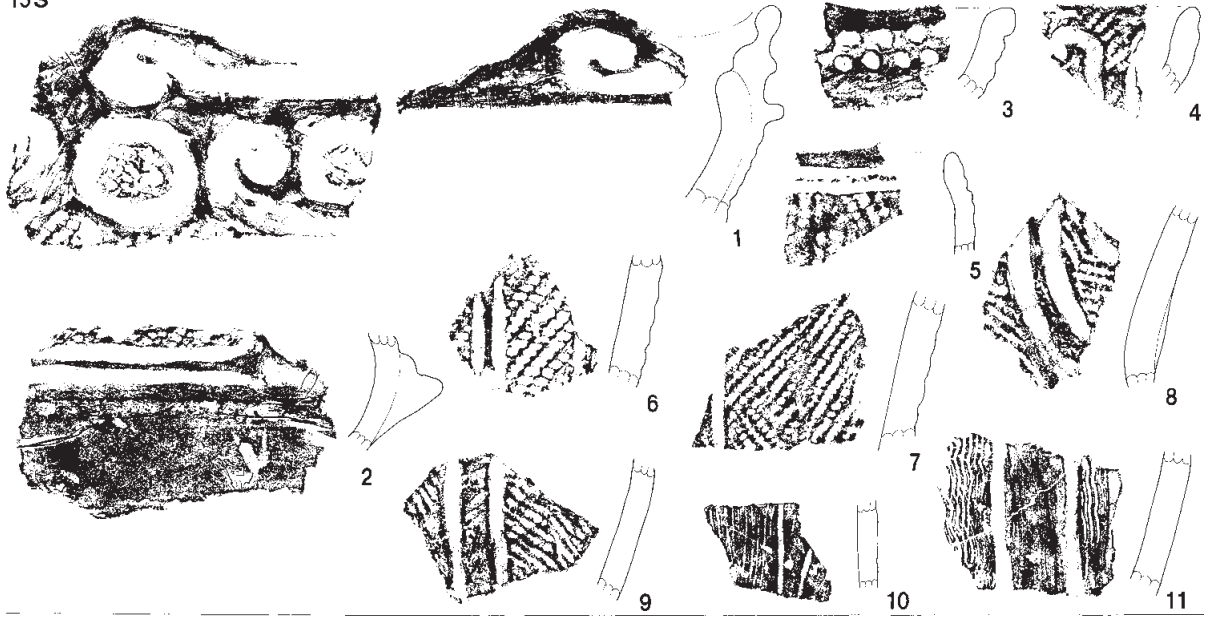
6はR L、9はL Rの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。6の色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。9の色調は褐灰色(2.5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を含む。

7はR Lの単節斜縄文を羽状に施し地文とし、沈線が垂下する。色調は褐灰色(5YR5/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

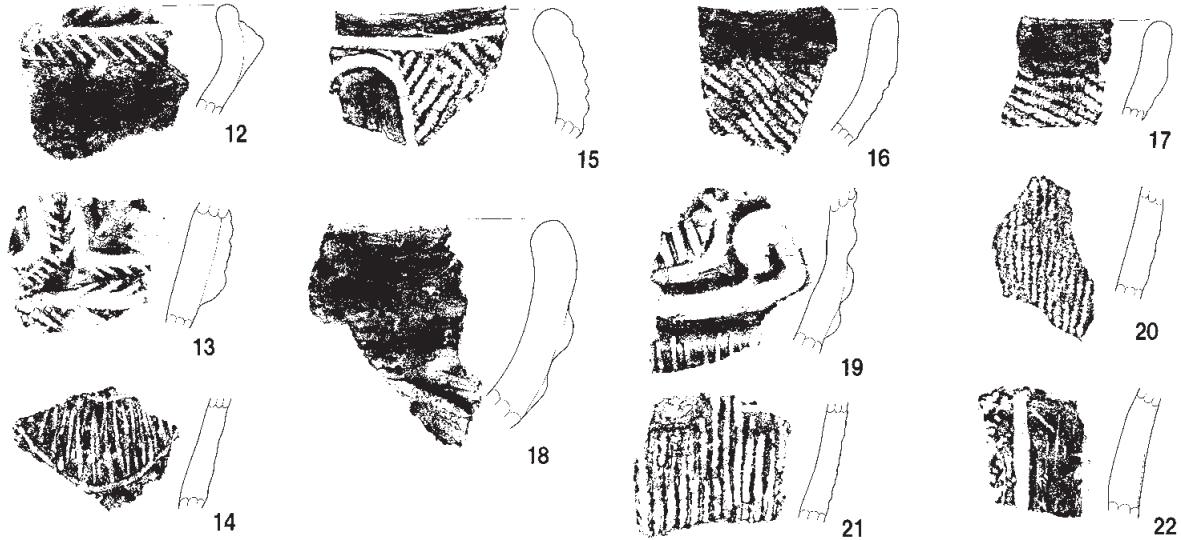
8はL Rの単節斜縄文を地文とし、2条の凹線が弧状に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

10は直行、11は蛇行する条線を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨り消される。10の色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。11の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

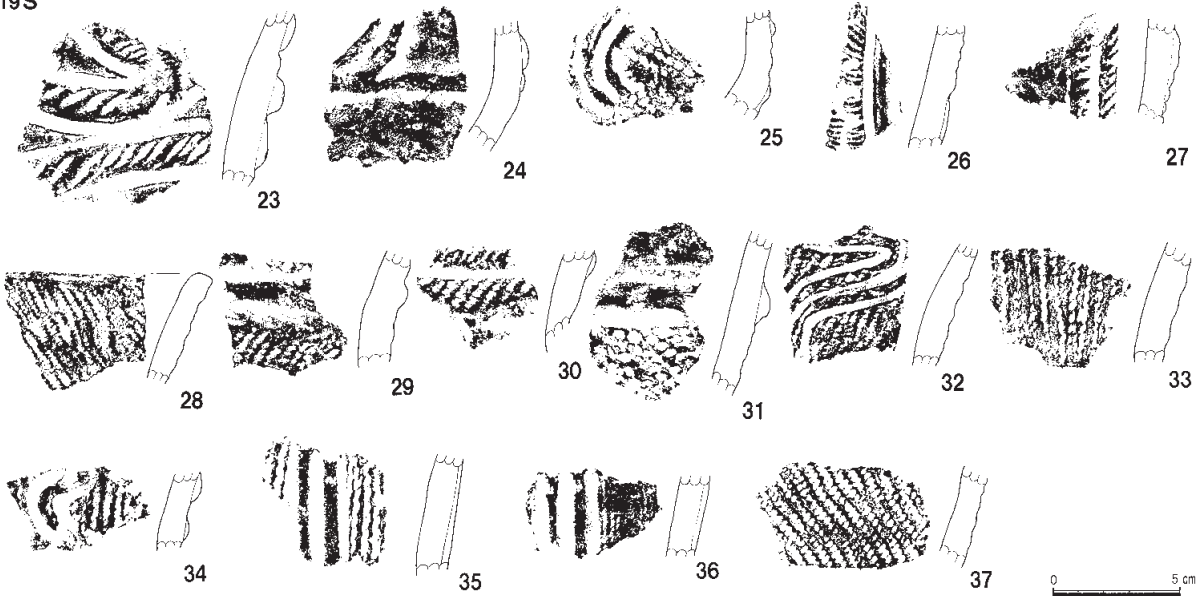
15S



18S



19S



第413図 集石出土遺物2 (1/3)

第415図6は撥形の打製石斧。横長の剥片を使用。刃部は斜刃状を呈する。55.8g。粘板岩製。

10は石皿片。表面は使用により平滑である。765g。石英閃緑岩製。

第416図2は縦長の大型の剥片。表面には礫面を残す。136.9g。硅質石灰岩製。

17号集石（第410図）

〔位置〕33地点。

〔構造〕浅い土坑を伴う。（礫の分布）土坑の南西側に分布し、周辺に散漫に分布している。（礫の状態）比較的大きく、原形をとどめる礫が多く見受けられる。（平面形）楕円形。（規模）450×350cm。（長軸方位）N-40°-W。

〔覆土〕暗褐色土を基調とする。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕土器などの遺物の出土はなかった。

〔時期〕不明。

18号集石（第410図）

〔位置〕24Ⅱ地点。

〔構造〕80Jを切る。（礫の分布）土坑中央に集中している。（礫の状態）破碎礫が大半を占める。（平面形）楕円形。（規模）65×45cm・深さ20cm前後の掘り込みをもつ。（長軸方位）N-20°-W。

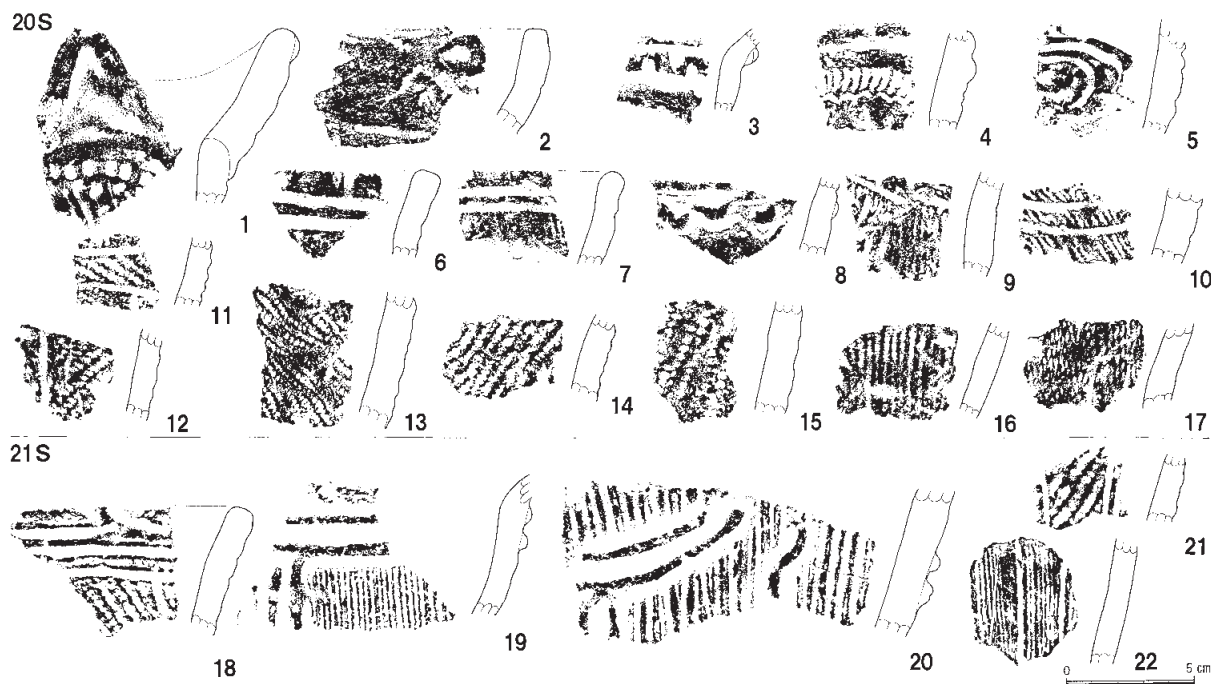
〔覆土〕黒褐色土（5YR3/1）を基調とする。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。軟質。

〔遺物〕礫に混じって土器片が多量に出土した。

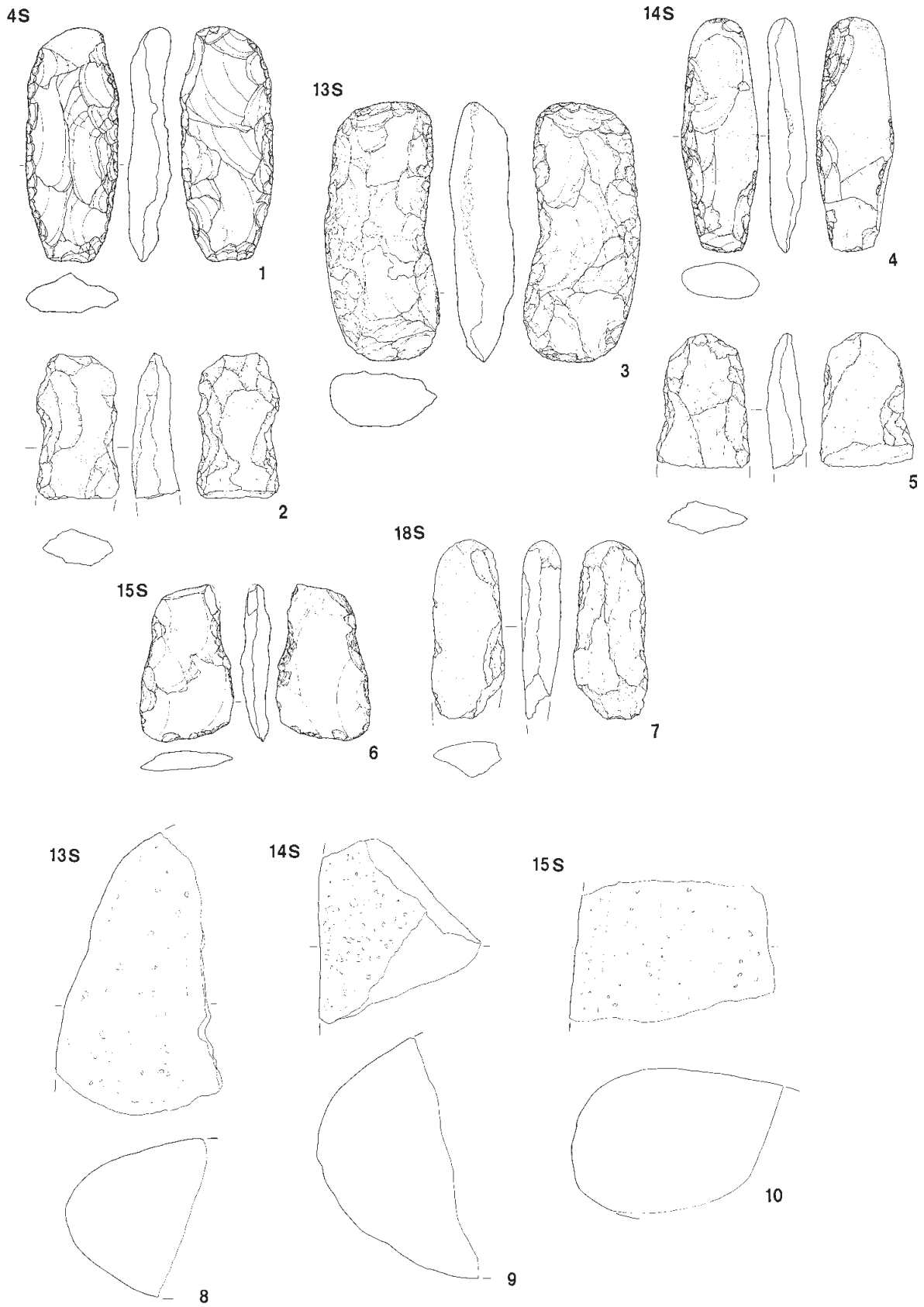
〔時期〕中期後半。

18号集石出土遺物（第413図12~22、第415図7）

第413図12は口縁部が内屈する。口唇部には刻みが加えられる。口縁部の文様は口唇部下に横走る沈線に沿って、細い半截竹管状施文具の刺突による半円文が連続して加えられ、斜位の集合する沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細砂を多く含む。



第414図 集石出土遺物3（1/3）



第415図 集石出土石器 1 (1/3)

13は綾杉状の刻みが加えられた隆帯が縦位・横位に貼付される。下位にはL Rの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を含む。

14は条線を地文とし、弧状に沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

15は口唇部下に沈線が横走する。R Lの単節斜縄文を羽状に施し地文とする。沈線による「∩」字状の懸垂文が施され、懸垂文間は磨り消される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

16・17は口唇部下に狭い無文帯をもち、16はL R、17はR Lの単節斜縄文が施される。16の色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。17の色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

18は口唇部下に広い無文帯をもち、以下、隆帯が貼付される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

19は2本一対の隆帯により渦巻文や区画が作られる。区画内や隆帯下位には縦位の集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

20はR Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

21はLの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

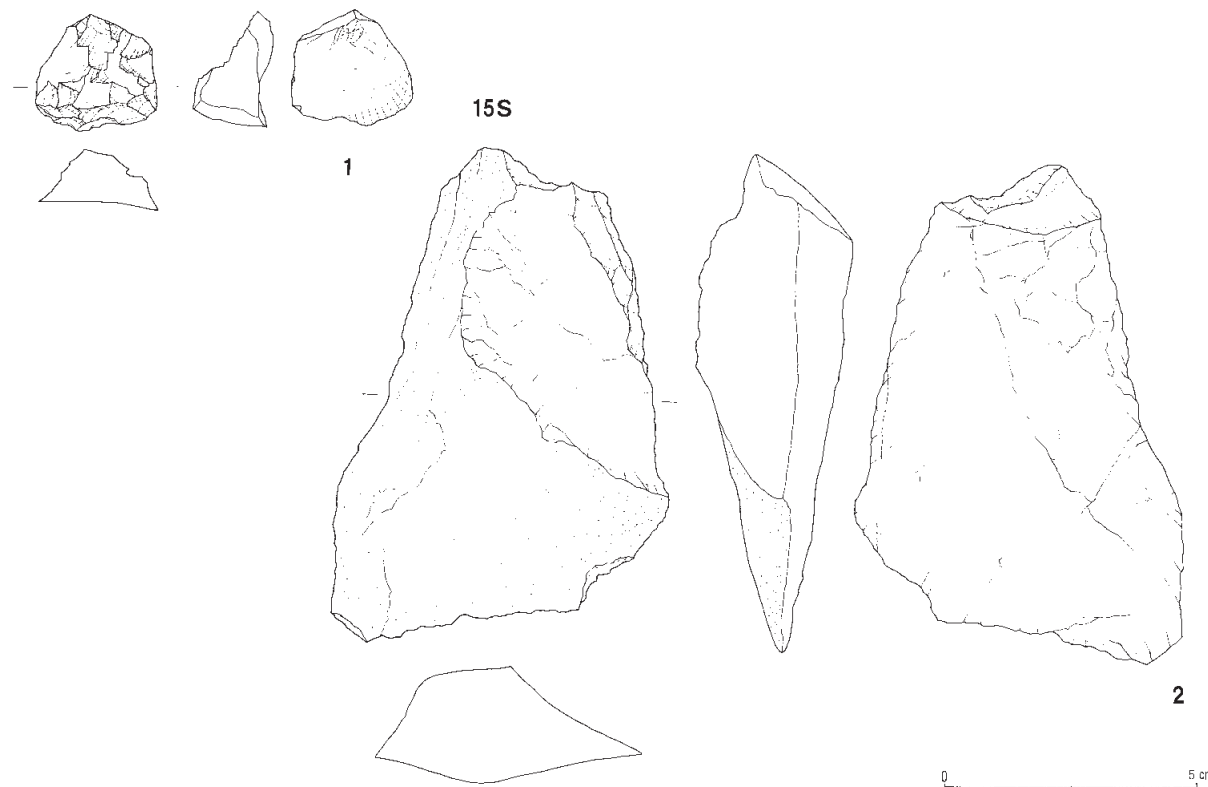
22はR Lの単節斜縄文を地文とする。沈線が垂下し、縄文が磨り消される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

第415図7は短冊形の打製石斧。刃部側を欠く。表裏面に礫面を残し、扁平な礫を素材にしたと思われる。93g。緑泥片岩製。

19号集石(第411図)

〔位置〕13Ⅲ地点。

4S



第416図 集石出土石器2(2/3)

〔構造〕 南側調査区外。(礫の分布) 土坑全体に分布している。(礫の状態) 数cmほどの小型で、割れているものが大部分である。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×60cm・深さ20cm前後の掘り込みをもつ。(長軸方位) N-35°-W。

〔覆土〕 黒褐色土(7.5YR3/1)を基調とする。炭化物粒子を含む。軟質。

〔遺物〕 礫に混じって土器片が多量に出土した。

〔時期〕 中期後半。

19号集石出土遺物(第413図23~37)

23は刻みが加えられた隆帯が弧状に貼付される。色調は灰褐色(7.5YR6/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。

24は隆帯を横走させ上下を画する。上位には弧状に隆帯が貼付される。下位は無文になる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

25はLの撚糸文を地文とし、2本一対の隆帯が弧状に貼付される。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

26は隆帯が垂下し、蓮華文が施される。色調は暗赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

27は刻みが加えられた隆帯に沿って連続刺突文・結節沈線文が施される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

28はLRの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

29は横位の隆帯下に、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

30は連続爪形文が付加された隆帯が横位に貼付される。以下、RLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

31は隆帯が横走し、LRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

32はRLの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線が弧状に施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

33~36はLの撚糸文を地文とする。33の色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を含む。34は蛇行する隆帯が貼付される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。35・36は2本一対の隆帯が垂下する。35の色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。36の色調は灰褐色(2.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂を僅かに含む。

37はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

20号集石(第411図)

〔位置〕 13Ⅲ地点。

〔構造〕 南側調査区外。(礫の分布) 土坑全体に分布している。(礫の状態) 数cmほどの小型で、割れているものが大部分である。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×50cm・深さ20cm前後の掘り込みをもつ。(長軸方位) N-35°-W。

〔覆土〕 黒褐色土(5YR3/1)を基調とする。炭化物粒子を僅かに含む。軟質。

〔遺物〕 礫に混じって土器片が多量に出土した。

〔時期〕 中期後半。

20号集石出土遺物(第414図1~17)

1は尖頭状の突起。口縁部の側縁は隆帯により縁取りされる。連続刺突文を2段巡らせ、斜位の集合する沈線が施される。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

2は口縁部が無文帯になり、沈線が横位に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を

含む。

3は横位に貼付された隆帯に交互刺突が加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

4は隆帯に沿って幅広の連続刺突文、鋸歯状沈線が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5は渦巻状に沈線が施される。色調は灰褐色(2.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

6・7は口唇部下に2条の沈線が横走する。6の色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。7の色調はにぶい黄褐色(10YR7/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

8は細い隆帯が波状に貼付される。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9は横位に沈線が施される。Rの撚糸文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

10はLの撚糸文、11はRLの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が横走する。10の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を多く含む。

12はRLの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

13~15はRLの単節斜縄文が施される。13の色調は暗赤褐色(2.5YR3/2)を呈し、胎土には粗砂を含む。14の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。15の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

16はRLの単節縄文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

17はLの撚糸文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

21号集石(第411図)

〔位置〕40V地点。

〔構造〕(礫の分布)掘り込みの南側に分布している。(礫の状態)破碎された礫が多い。(平面形)楕円形。(規模)85×50cm・深さ20cm前後の掘り込みをもつ。(長軸方位)N-20°-W。

〔覆土〕黒褐色土(5YR3/1)を基調とする。炭化物粒子を多く含む。軟質。

〔遺物〕礫に混じって土器片が僅かに出土した。

〔時期〕中期後半。

21号集石出土遺物(第414図18~22)

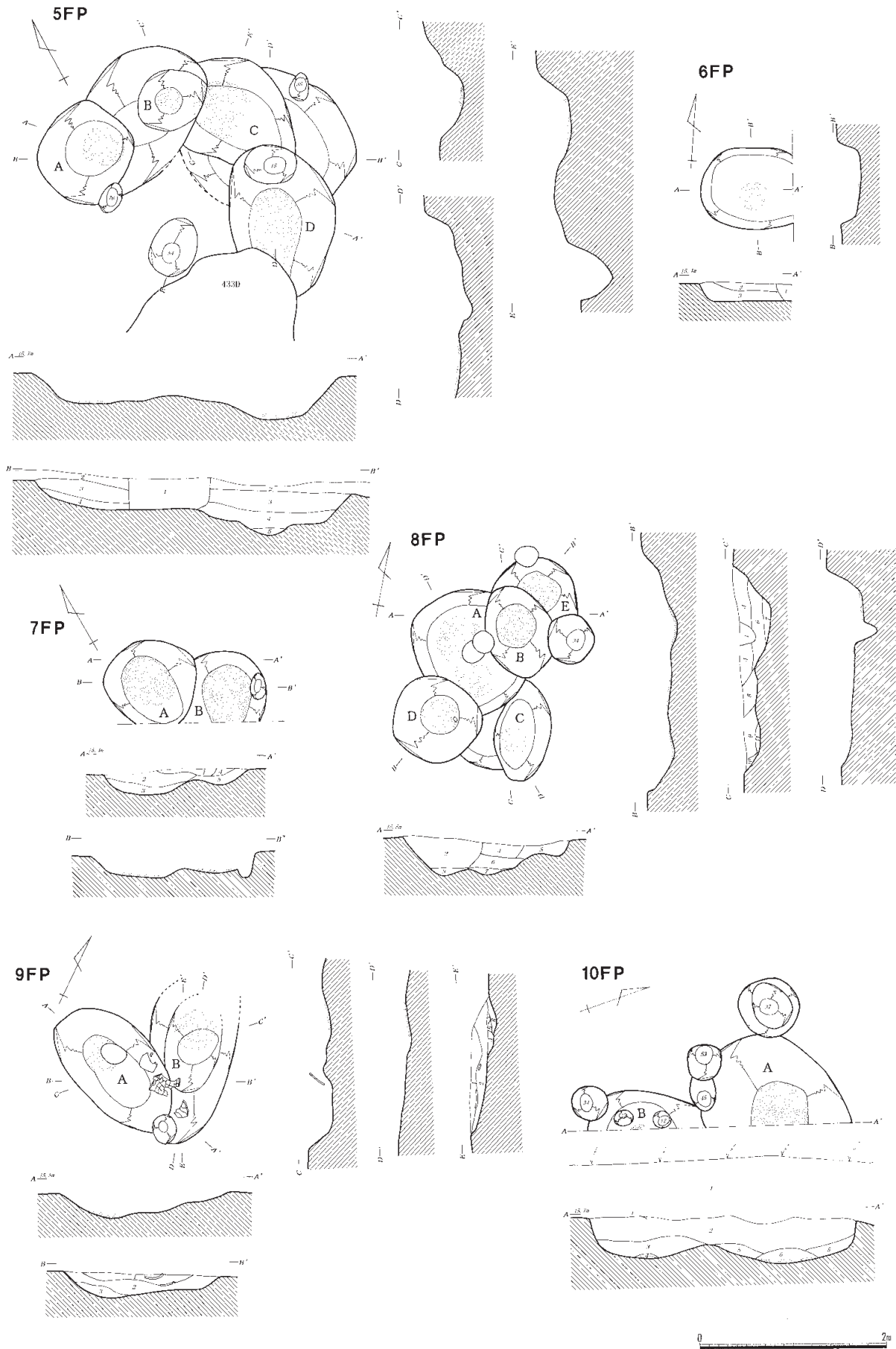
18はLRの単節斜縄文を地文とする。3条の沈線が横走し、沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

19は2本の隆帯が横位に貼付される。条線を地文とし、2本の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

20は半截竹管による多条の沈線を地文とする。2本一対の紐状の隆帯を弧状に貼付し、そこから隆帯が垂下する。弧状の隆帯からはずれた部分には、蛇行する隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を含む。

21はLRの単節斜縄文を地文とし、2条一対の沈線が垂下する。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

22は条線を地文とし、沈線が垂下する。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。



第417图 5~10号炉穴 (1/60)

第5節 炉 穴

5号炉穴（第417図）

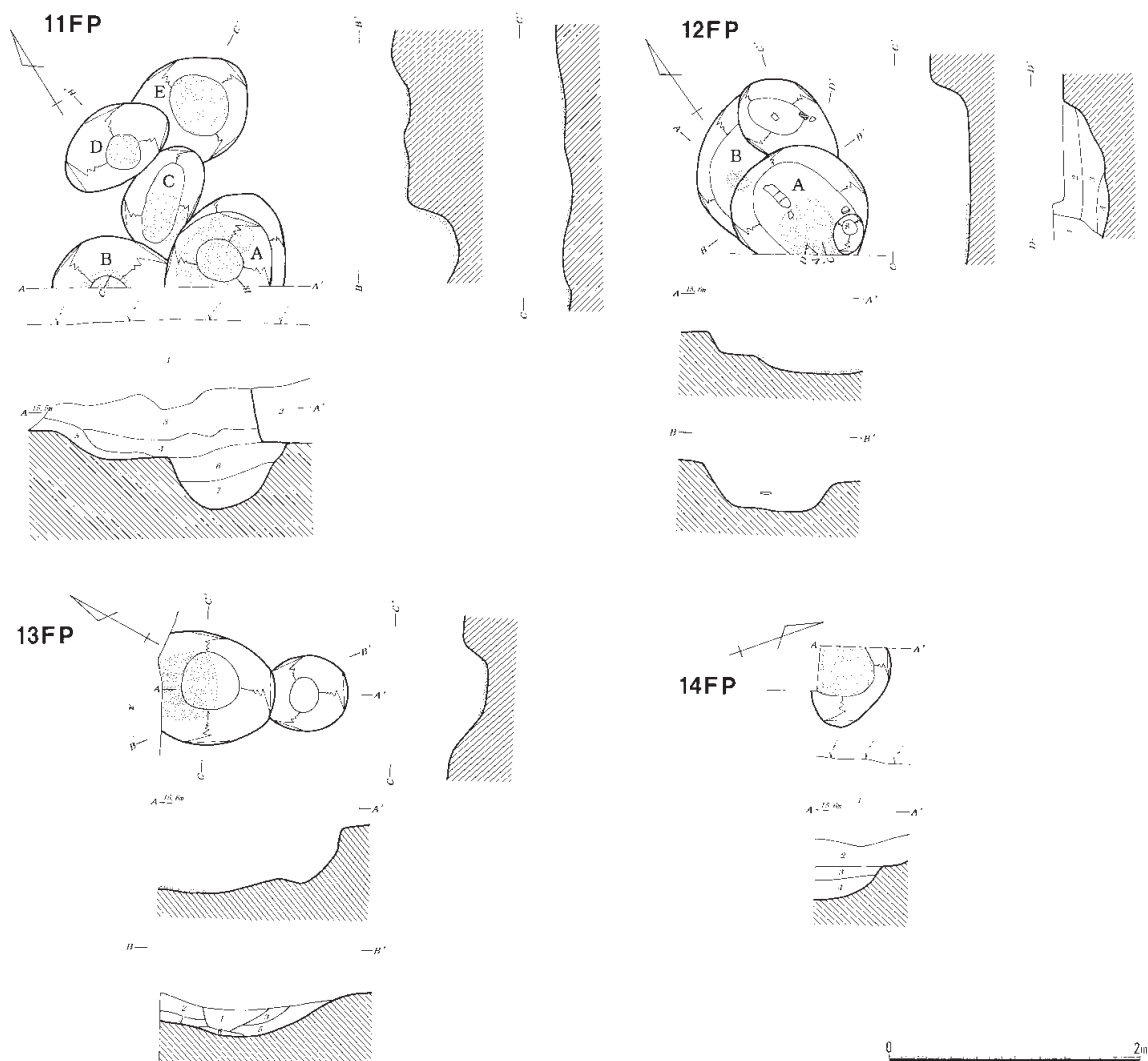
〔位置〕 34Ⅲ地点。

〔構造〕 4基の炉穴の複合形態をとる。焼土別に記載する。(平面形) A 不整形円形、B 円形、C 円形、D 楕円形。(規模) A 径100cm、B 径55cm、C 径55cm、D 90×65cm。(深さ) A 36cm前後、B 43cm前後、C 39cm前後、D 44cm前後。(焼土) A 径40cm、B 径30cm、C 径60cm、D 100×60cmの範囲に分布する。

〔覆土〕

- 1層 攪乱。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。部分的に焼土粒子を僅かに含む。やや軟質。後期の遺物包含層。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 灰黄褐色 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 暗赤褐色土 (5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から多く出土した。



第418図 11～14号炉穴 (1/60)

〔時期〕 早期後半。

5号炉穴出土遺物（第419図1～9）

1～4は内外面に条痕文が施される。1の色調は赤褐色（2.5YR4/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。2の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。3は底部に近い破片。色調は赤褐色（5YR4/1）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。4の色調は赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

5・6・9は外面に条痕文が施される。5の色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。6の色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を僅かに含む。9の色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。7・8は無文の土器。7の色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には礫・粗砂を僅かに含む。

6号炉穴（第417図）

〔位置〕 34Ⅱ地点。

〔構造〕 西側は攪乱により破壊されている。（平面形）楕円形になろう。（規模）不明×90cm。（深さ）25cm前後。（焼土）径30cmの範囲が赤化している。（調査所見）単独炉穴である。

〔覆土〕

1層 攪乱。

2層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

3層 にぶい黄褐色土（10YR3/4）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 早期後半。

6号炉穴出土遺物（第419図10）

10は拓影図が不鮮明であるが、擦痕が認められる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を多く含む。

7号炉穴（第417図）

〔位置〕 34Ⅲ地点。

〔構造〕 2基の炉穴の複合形態をとる。Aの使用後、Bが構築されたようである。（平面形）A 楕円形、B 楕円形になろうか。（規模）A 102×97cm、B 不明。（深さ）A 22cm前後、B 20cm前後。（焼土）A 60×50cm、B 不明×55cmの範囲が赤化している。

〔覆土〕

1層 表土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を含む。硬質。

3層 暗赤褐色土（5YR3/4）。ローム粒子を含む。焼土粒子・焼土ブロックを多く含む。やや硬質。

4層 暗褐色土（7.5YR3/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。やや硬質。

5層 暗赤褐色土（5YR3/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・焼土ブロックを含む。やや硬質。

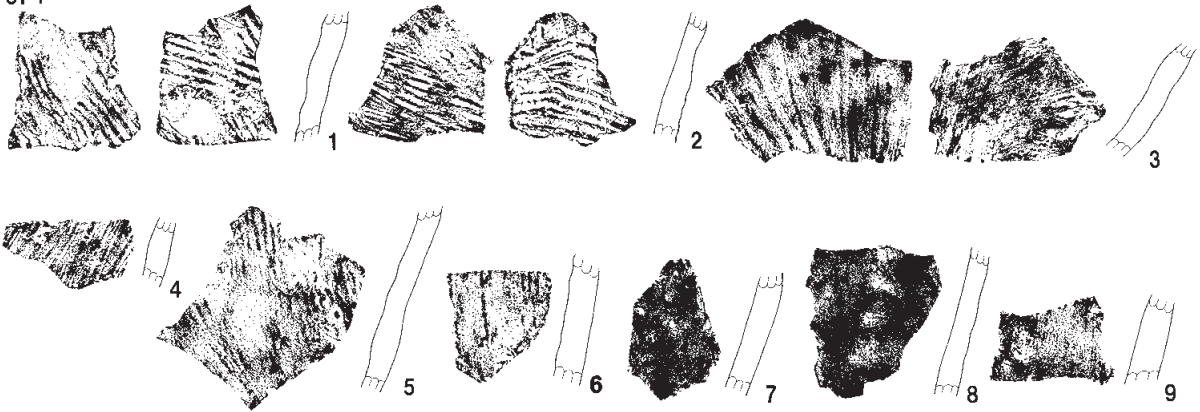
〔遺物〕 覆土中から多く出土した。

〔時期〕 早期後半。

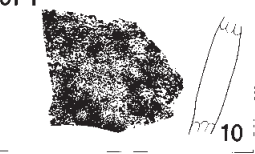
7号炉穴出土遺物（第419図11～17）

11～13は内外面に条痕文が施される。11の色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。12の色調は赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。13の色調はにぶい褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

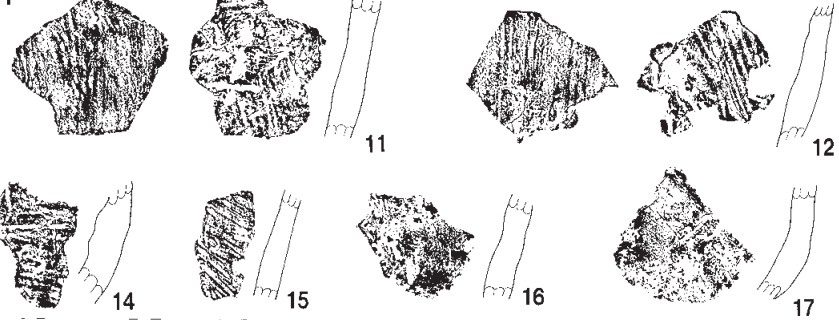
5FP



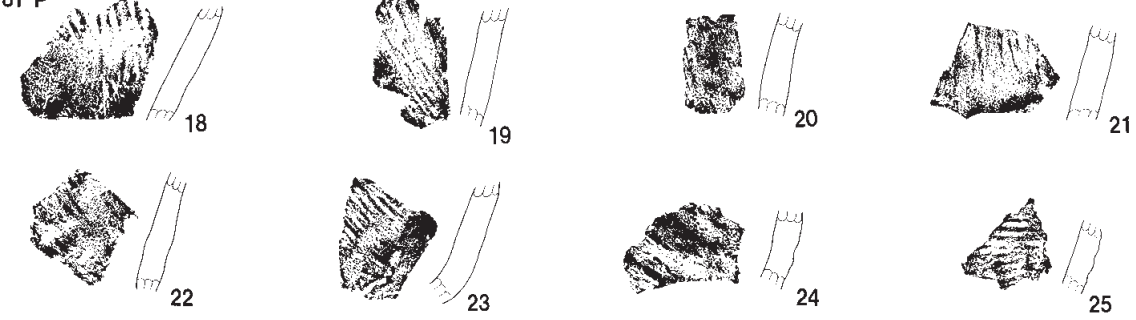
6FP



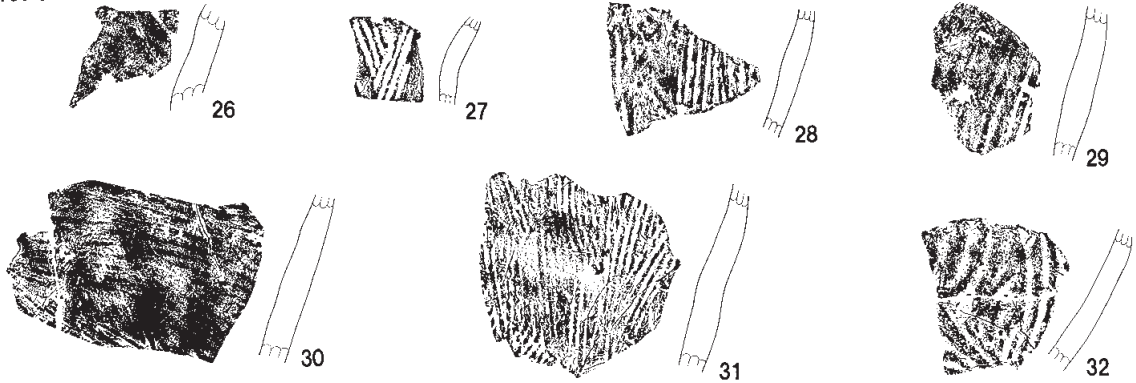
7FP



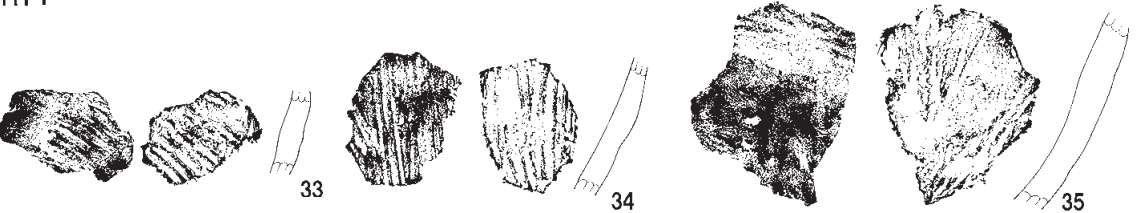
8FP



10FP



11FP



第419図 5～8・10・11号炉穴出土遺物 (1/3)

14・15は外面に条痕文が施される。14の色調は赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

16・17は無文の土器。16の色調は赤褐色（2.5YR4/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。17の色調は赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には粗砂・繊維を僅かに含む。

8号炉穴（第417図）

〔位置〕 34Ⅲ地点。

〔構造〕 5基の炉穴の複合形態である。使用順序はA→B→C・Eになる。（平面形）A 楕円形、B 楕円形、C 楕円形、D 円形、E 円形。（規模）A 不明×90cm、B 100×70cm、C 不明×140cm、D 径90cm、E 110×60cm。（深さ）A 22cm前後、B 33cm前後、C 37cm前後、D 28cm前後、E 14cm前後。（焼土）A 不明×45cm、B 径45cm、C 径50cm、D 50×40cm、E 径20cm。

〔覆土〕

1層 攪乱。

2層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 にぶい赤褐色土（5YR4/3）。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。

5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。

6層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を含む。硬質。

7層 にぶい赤褐色土（5YR4/4）。焼土粒子・焼土ブロックを多く含む。やや硬質。

8層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。

9層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。硬質。

10層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。やや硬質。

11層 赤褐色土（5YR4/6）。焼土粒子・焼土ブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 早期後半。

8号炉穴出土遺物（第419図18～25）

すべて外面に条痕文が施される。18の色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。19の色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂・繊維を含む。20の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂・繊維を僅かに含む。21の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。22の色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細砂を多く含む。23の色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。24の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。25の色調は褐灰色（10YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

9号炉穴（第417図）

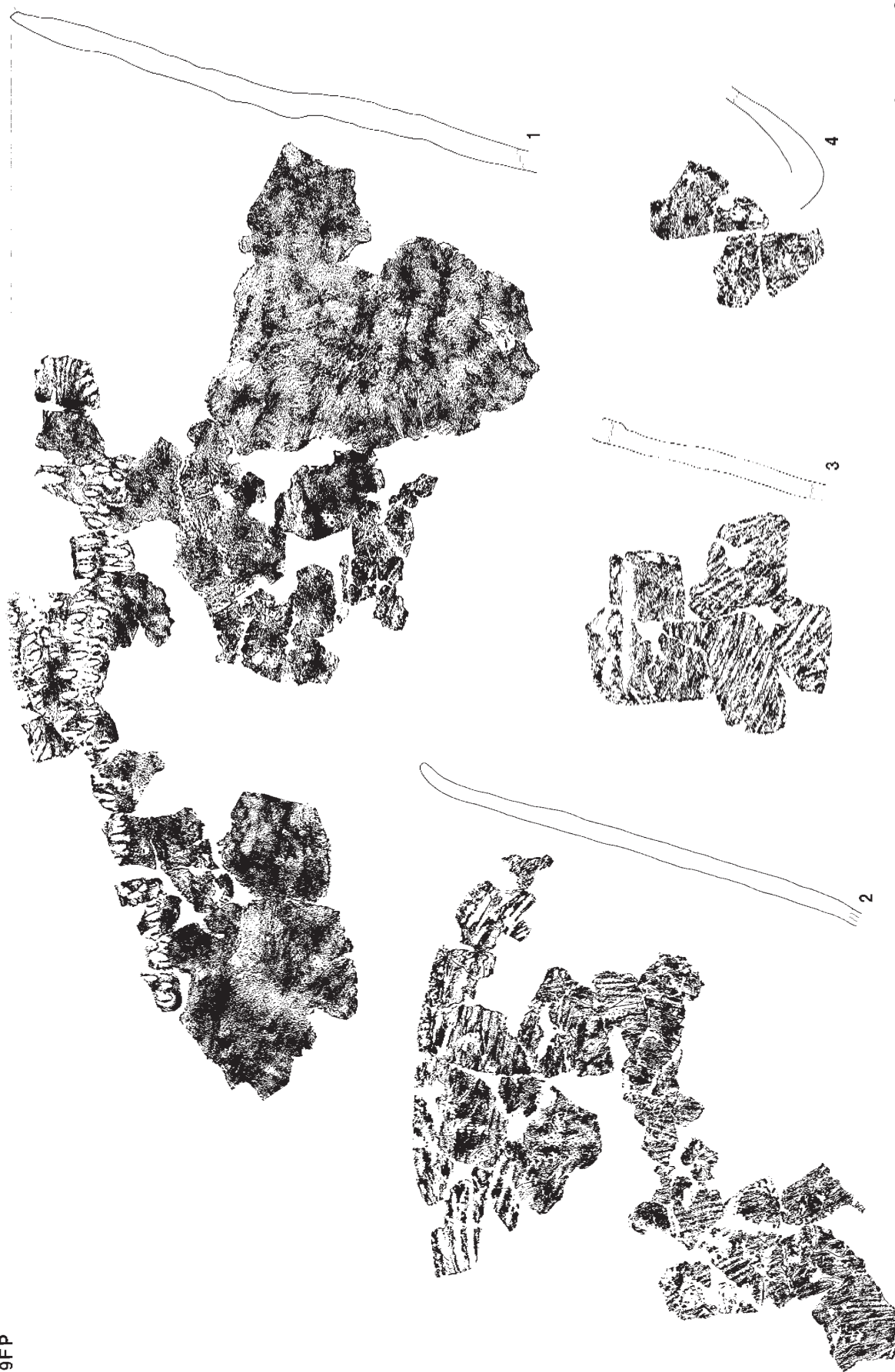
〔位置〕 34Ⅲ地点。

〔構造〕 2基の炉穴の複合形態である。Aの北側は攪乱により破壊されている。Bの北側に掘り込みを確認するが、前後関係は不明である。焼土別に記載する。（平面形）A 楕円形、B 楕円形。（規模）A 170×90cm、B 150×90cm。（深さ）A 19cm前後、B 30cm前後。（焼土）A 50×40cm、B 45×35cmの楕円形。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。

9FP



第420図 9号炉穴出土遺物 (1/3)

- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を含む。硬質。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・焼土ブロックを含む。硬質。
- 4層 暗赤褐色土 (2.5YR4/6)。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。硬質。
- 5層 赤褐色土 (2.5YR4/6)。焼土ブロック。硬質。
- 6層 暗赤褐色土 (2.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土上層からまとまって出土した。

〔時期〕 早期後半。

9号炉穴出土遺物 (第420図)

1は口唇端部に刻みが加えられる。丸棒状施文具の刺突により口唇部下に刻みを巡らせ、以下2列の刻みをゆるい鋸歯状に施す。以下擦痕が認められる。色調は暗赤褐色 (2.5YR3/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

2は口唇端部に刻みが加えられる。表面には条痕文が施される。色調は上半が灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。下半は被熱のため劣化している。

3は横位に隆帯が貼付され、以下条痕文が施される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細砂を多く含む。

4は底部破片。被熱のため赤化している。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には細砂を含む。

10号炉穴 (第417図)

〔位置〕 34Ⅱ地点。

〔構造〕 東側調査区外。2基の炉穴の複合形態である。焼土別に記載する。(平面形) A 不明。B 不明。(規模) A 不明×150cm、B 不明×120cm。(深さ) A 33cm前後、B 25cm前後。(焼土) A 不明×60cm、B 不明×30cmの範囲が赤化する。

〔覆土〕

- 1層 表土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 暗赤褐色 (2.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 暗赤褐色土 (5YR3/4)。ローム粒子を含む。焼土粒子・焼土ブロックを多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 早期後半。

10号炉穴出土遺物 (第419図26~32)

26は無文。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

27~32は外面に条痕文が施される。27の色調はにぶい黄褐色 (10YR4/3) を呈し、胎土には細砂を多く含む。28の色調は暗赤褐色 (5YR3/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。29の色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。30の色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には細砂・繊維を僅かに含む。31は底部に近い破片。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、胎土には粗砂・繊維を僅かに含む。32の色調はにぶい黄褐色 (10YR6/4) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

11号炉穴 (第418図)

〔位置〕 34Ⅲ地点。

〔構造〕 5基の炉穴の複合形態である。焼土別に記載する。Dは他と比較すると、非常に深い掘り込みである。
〔平面形〕 A 楕円形、B 楕円形、C 不整楕円形、D 不明、E 不明。(規模) A 90×85cm、B 95×60cm、
C 90×50cm、D 不明×95cm、E 不明×90cm。(深さ) A 6cm前後、B 12cm前後、C 7cm前後、D 48cm
前後、E 15cm前後。(焼土) A 径50cm、B 径30cm、C 60×35cmの不整形を呈する。D 径35cm、E 不明
×40cm。

〔覆土〕

- 1層 表土。
- 2層 428Y覆土。
- 3層 暗赤褐色土(5YR3/2)。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・焼土小ブロックを含む。硬質。
- 4層 暗赤褐色土(5YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。焼土粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。
- 5層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・焼土小ブロックを含む。硬質。
- 6層 暗赤褐色土(2.5YR3/3)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。硬質。
- 7層 赤褐色土(2.5YR4/6)。焼土層。やや硬質。サクサクした感じ。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 早期後半。

11号炉穴出土遺物(第419図33~35)

すべて内外面に条痕文が施される。33の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。34の色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、胎土には細砂・繊維を僅かに含む。35の色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂・繊維を僅かに含む。

12号炉穴(第418図)

〔位置〕 34IV地点。

〔構造〕 南側調査区外。2基の炉穴の複合形態である。焼土別に記載する。(平面形) A 楕円形、B 円形。(規模) A 不明×100cm、B 東側の土坑と重複するが前後関係は不明である。(深さ) A 34cm前後、B 19cm前後。
(焼土) A 径45cm、B 20cmの円形。

〔覆土〕

- 1層 攪乱。
- 2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を含む。焼土ブロックを僅かに含む。硬質。
- 4層 暗赤褐色土(5YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。焼土ブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から多く出土した。

〔時期〕 早期後半。

12号炉穴出土遺物(第421図1~18)

1は口唇部下に刺突文が巡る。内面には条痕が認められる。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂・繊維を僅かに含む。

2は口唇端部に刻みが加えられる。外面は条痕文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細砂・繊維を僅かに含む。

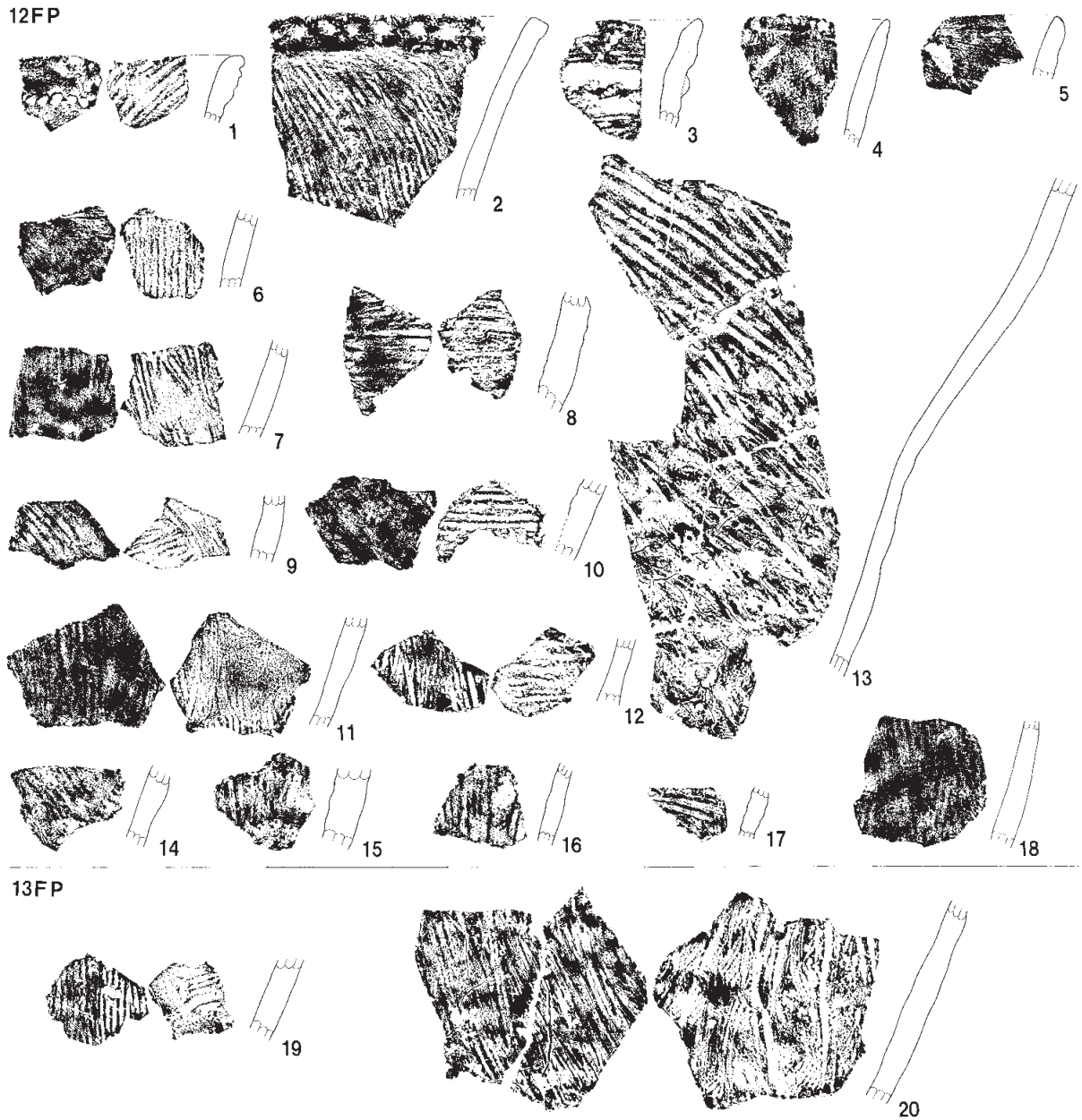
3は条痕文を地文とし、2条の沈線を横走させる。口唇部と沈線の間には連続する刺突文を鋸歯状に施すようである。色調はにぶい赤褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

4は口唇部下に沈線が横走り、撚糸の圧痕が鋸歯状に2段施される。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5は口唇端部に刻みが加えられる。外面には条痕文が施される。色調は灰褐色(2.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂・繊維を僅かに含む。

6~12は内外面に条痕文が施される。6の色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。7の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。8の色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。9の色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細砂・繊維を僅かに含む。10の色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。11の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。12の色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を含む。

13は外面に条痕文が施される。色調は上半が褐灰色(7.5YR4/1)、下位が鈍い赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂・片岩を多く含む。下半は被熱のため赤化する。



第421図 12・13号炉穴出土遺物 (1/3)

14～18は内面に条痕文が施される。14の色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。15の色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。16の色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂・繊維を僅かに含む。17の色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には細砂・繊維を僅かに含む。18の色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、胎土には粗砂・片岩を僅かに含む。

13号炉穴(第418図)

〔位置〕 34IV地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形になろうか。(規模) 不明×90cm。(深さ) 52cm前後。(焼土) 不明×55cmに分布する。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を含む。硬質。

2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。硬質。

3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。

4層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。

5層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

6層 暗赤褐色土(5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。焼土ブロックを含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 早期後半。

13号炉穴出土遺物(第421図19・20)

19・20は内外面に条痕文が施される。19の色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。20の色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、胎土には細砂・繊維を僅かに含む。

14号炉穴(第418図)

〔位置〕 34IV地点。

〔構造〕 西側調査区外。428Yに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(深さ) 3cm前後。(焼土) 掘り込み中に堆積している。

〔覆土〕

1層 表土。

2層 428Y覆土。

3層 黒褐色土(5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を含む。焼土ブロックを僅かに含む。硬質。

4層 暗赤褐色土(5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。焼土ブロックを含む。硬質。

〔遺物〕 土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

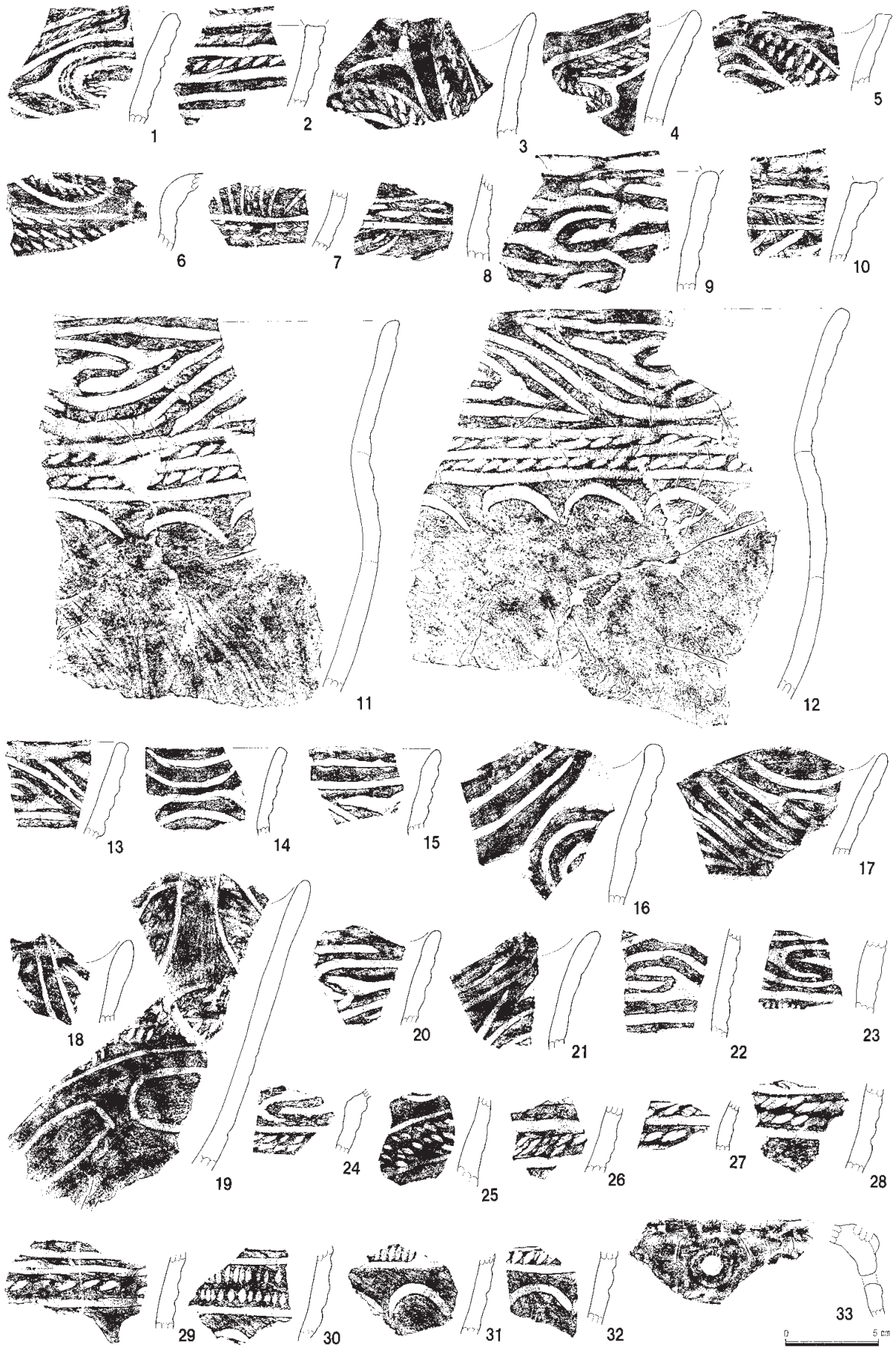
〔時期〕 早期後半。

第6節 遺構外の遺物

ここでは遺構外及び時代の異なる遺構から出土した縄文時代の遺物を取りあげる。

第351図4は土偶の腰部の破片である。断面は楕円形を呈する。沈線を横位・斜位に施す。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を多く含む。24号溝跡からの出土。

第352図1は、いわゆる「みみずく形土偶」の腰部から脚部にかけての破片と思われる。腰部は沈線になぞられた隆帯が貼付され横に張る。内湾ぎみの脚部はRLの単節縄文を地文とし、2条の沈線が巡る。色調は暗褐色(7.5



第422図 遺構外出土遺物 (1/3)

YR3/3)を呈し、胎土には細砂・輝石を多く含む。33地点の遺物包含層から出土。

3は石剣の柄頭部分。帯状に隆起する部分に「□」状の細隆起を2単位作出し、斜位に沈刻が加えられる。くびれ部を挟んで細い隆起が巡り、斜位に沈刻が施される。110g。粘板岩製。24号溝跡から出土。

4は石剣ないし石棒。ていねいに磨かれ、断面は楕円形を呈する。180g。緑色片岩製か。24号溝跡から出土。第442図は晩期の土器である。

1～8・19は弧状に施された沈線間に刺突が加えられる。1は空白部に三叉文が施される。色調は灰黄褐色(10YR6/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。2は口唇端部がくぼみ、内側に刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。3は波状口縁の土器。波頂部は双頭になろうか。空白部に三叉文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。4は波状口縁の土器。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を含む。5は小波状口縁の土器。波頂部は小さく双頭になる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。6～8は横位の沈線間にも刺突が加えられる。6の色調は灰黄褐色(10YR5/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。7の色調は灰褐色(10YR6/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。8の色調はにぶい褐色(10YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。19は双頭の波状口縁の土器。胴部上位には沈線により楕円形の区画が作られる。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

9・10・13～18・20～22は沈線が弧状・三叉状・入り組み状に施される。9は口唇端部が鎖状にくぼむ。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。10は口唇端部がくぼむ。色調は灰褐色(2.5YR4/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。13の色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。14の色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。15の色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。16は波状口縁の土器。色調はにぶい黄橙色(10YR7/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。17は波状口縁の土器。色調は灰黄褐色(10YR6/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。18は双頭の波状口縁の土器。色調は灰黄褐色(10YR6/2)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。20・21は波状口縁の土器。20の色調は褐灰色(5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を含む。21の色調は灰黄褐色(10YR6/2)を呈し、胎土には細砂を含む。22の色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には細砂を含む。

23～28は横位の沈線間に刺突が加えられる。23・24は弧状に沈線が施される。23の色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細砂を含む。24の色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。25の色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。26の色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。27の色調は褐灰色(7.5YR5/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。28の色調はにぶい橙色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

11・12は同一個体。大型の土器で器形は甕状を呈しようか。口縁部が僅かに外反し、頸部がくびれ、胴部は内湾する。頸部に3条の沈線を巡らせ、沈線間に刺突を加える。口縁部の文様は三叉状・入り組み状に沈線が施される。胴部上位には短く弧状に施された沈線が横位に連続して配される。以下、無文になる。色調は口縁部が灰褐色(7.5YR4/2)からにぶい褐色(7.5YR6/3)、胴部はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

29～32は横位の沈線間に刺突が加えられ、以下、短い弧状の沈線が連続して施される。29の色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。30の色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。31の色調はにぶい橙色(2.5YR6/4)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。32の色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

33は器台形土器ないしは台付土器の脚台部。接合部には刻みが加えられた隆帯が横位に貼付される。脚台部には沈線で縁取りされた円孔が穿たれる。色調はにぶい橙色(5YR7/3)を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

以上の土器は24号溝跡からの出土である。

表19 縄文時代住居跡一覧表

() 内の調査区名は教育委員会の調査による

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
12	4 I	加曾利 E I	不整円形	不明×562	6~20	N-38°-W	
13	8 I	加曾利 E I	不明	不明	33~37	不明	
14	11	黒浜	不整長方形	不明×310	18~32	N-39°-E	
15	13 I	加曾利 E I	楕円形	630×580	60~71	N-S	
18	13 II・(34)	加曾利 E I	楕円形	680×590	70~88	N-S	志木市遺跡群Ⅷ遺物掲載
19	17	勝坂	不明	不明×610	66~78	N-26°-W	
20	17・39 I	中期	楕円形	不明×355	21~28	N-10°-W	
21	17	勝坂	不整台形	不明×500	20~26	N-45°-W	
22	17・24 II	加曾利 E II	台形か	不明×480	50	N-S	
23	17	勝坂	楕円形	不明×510	19~40	N-S	
24	17	加曾利 E I	楕円形	不明×490	15~30	N-55°-W	
25	17	加曾利 E I	楕円形か	不明×480	20	N-80°-E	
26	22・130	加曾利 E	不整楕円形	470×450	10~18	N-45°-W	
27	22	加曾利 E II	楕円形	不明×450	27~33	N-40°-E	
28	24 I・(43)	加曾利 E II	楕円形	不明×580	20~36	N-40°-W	志木市遺跡群Ⅺ掲載
29	24 I	中期	不明	不明	不明	不明	
30	22	加曾利 E I	不明	不明	41~87	不明	
31	22	加曾利 E I	楕円形	700×610	65~120	N-26°-E	
32	22	加曾利 E	不明	不明	17~33	不明	
33	24 I	加曾利 E III	不明	不明	16~22	不明	
34	23 I	加曾利 E I	不整円形	不明×520	20~25	N-19°-W	
35	23 I	加曾利 E II	不整長方形	475×380	20~35	N-56°-E	
36	23 I	加曾利 E I	不整楕円形	590×530	26~35	N-33°-W	
37	23 I	加曾利 E I	楕円形	不明×510	13~22	N-60°-W	
38	23 I	勝坂	不明	不明	23	不明	
39	23 I	勝坂	不明	不明	17~25	不明	
40	23 I	中期	不明	不明	4~6	不明	
41	23 I	中期	不明	不明	12	不明	
42	23 I	勝坂	不明	不明	15	不明	
43	10 II	黒浜	不明	不明×370	25~30	N-S	
44	25 I	加曾利 E I	長方形	不明×360	16~32	N-34°-W	
45	25 I	中期	不明	不明	不明	不明	
46	25 I	加曾利 E	不明	不明	不明	不明	
47	25 I	中期	不明	不明	不明	不明	
48	25 II	加曾利 E I	不明	不明	19	不明	
49	25 II	加曾利 E II	不明	不明	不明	不明	
50	25 II	勝坂	楕円形	530×450	22~42	N-25°-W	
51	25 II	加曾利 E II	不明	不明	18~34	不明	
52	25 V	勝坂	不整楕円形	430×320	5~16	N-S	
53	25 V	加曾利 E II	不明	不明	不明	不明	
54	26	加曾利 E IV	不明	不明	19~20	不明	
55	26	加曾利 E II	不明	不明	不明	不明	
56	26	加曾利 E II	不明	不明	不明	不明	
57	29 I	勝坂	楕円形	425×400	19~42	N-75°-W	
58	30	中期	不明	不明	11	不明	
59	30	加曾利 E II	不明	不明×740	21~33	不明	
60	30	加曾利 E II	不明	不明×660	3~13	不明	
64	30	中期	不明	不明	60	不明	
66	13 IV・(43)	加曾利 E I	不整楕円形	515×500	27~46	N-70°-E	
67	33 I	堀之内 I	不明	不明×660	7~61	不明	
74	13 IV・(43)	加曾利 E I	円形	530×520	6~56	N-5°-W	志木市遺跡群Ⅺ掲載
75	36	勝坂	不明	不明	16~22	不明	
76	36	勝坂	不明	不明	7~23	不明	
77	36	中期	不明	不明	52~55	不明	
78	13 II	中期	不明	不明	20~65	不明	

第3章 縄文時代の遺構と遺物

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
79	24 II	加曾利 E I	不整楕円形	535×460	42~50	N-23°-W	
80	24 II	勝坂	不整楕円形	不明×470	25~38	N-26°-W	
81	24 II	加曾利 E I	不明	不明×430	34~44	不明	
82	24 II	加曾利 E I	不明	不明	25~37	不明	
83	24 II・67 II	勝坂	台形	530×400	5~17	N-45°-E	
84	24 II	加曾利 E II	不明	不明	40~45	不明	
85	13 III	加曾利 E II	不整楕円形	不明×590	28~36	N-56°-E	
86	13 IV	加曾利 E I	不明	不明	34~45	不明	
87	13 IV	中期	不明	不明	30~32	不明	
88	13 III	加曾利 E II	楕円形	550×540	43	N-S	
89	13 III	加曾利 E II	不明	不明	37~39	不明	
90	13 IV	加曾利 E I	不明	不明	43~48	不明	
91	13 IV	中期	不明	不明	21~40	不明	
92	13 IV	勝坂	楕円形	不明×470	30~49	N-50°-W	
93	13 IV	勝坂	楕円形	不明×440	50~60	N-12°-W	
94	13 IV	中期	不明	不明	44~59	不明	
95	40 III	加曾利 E II	不明	不明	49~51	不明	
96	40 III	加曾利 E II	不明	不明	31~38	不明	
97	41 II	加曾利 E II	不整方形	458×428	29~39	N-32°-W	
98	40 V	加曾利 E	長方形か	不明×610	4~12	N-28°-W	
99	34 II	加曾利 B I	楕円形か	不明×500	21~31	N-S	
120	130	中期	不明	不明	24~26	不明	
122	25 VII・71	加曾利 E II	不明	不明	不明	不明	
123	25 VII	加曾利 E I	不明	不明	27~45	不明	
124	25 VII	勝坂	楕円形	590×550	10~36	N-S	
125	71	加曾利 E I	不明	不明	15	不明	
126	25 VII	中期	楕円形	425×400	29~38	N-S	
127	67 II	勝坂	隅丸方形	不明×310	8~18	不明	
128	23 II	中期	不明	不明	22~26	不明	
129	67 II	勝坂	隅丸長方形	440×370	29~44	N-28°-W	
130	67 II	勝坂	楕円形	不明×360	8~12	不明	
137	67 II	勝坂	不明	不明×380	20~24	N-40°-W	
138	71	加曾利 E I	隅丸方形	不明×520	9~34	N-28°-W	
139	71	加曾利 E I	不明	不明	6	不明	
141	130	加曾利 E II	楕円形	不明×520	16~21	N-88°-W	
142	130	加曾利 E II	不明	不明	20~29	不明	
143	130	勝坂	不整楕円形	440×390	13~16	N-35°-W	
144	130	加曾利 E I	隅丸方形	不明×490	26~33	N-27°-E	
145	130	勝坂	不明	不明	17~21	不明	
146	130	勝坂	不明	不明	31~36	不明	
147	130	加曾利 E I	不整方形	715×710	46~64	N-13°-W	
148	130	加曾利 E II	八角形	550×550	33~49	N-10°-E	
149	130	加曾利 E II	不整円形	610×600	28~45	N-54°-E	
150	130	加曾利 E II	隅丸方形	不明×660	19~36	N-47°-W	
151	130	加曾利 E II	五角形	670×650	25~34	N-45°-E	
152	130	加曾利 E II	不整長方形	550×500	23~36	N-27°-W	
153	130	勝坂	不整長方形	不明×480	9~34	N-35°-W	
154	130	加曾利 E II	隅丸正方形	420×420	28~33	N-67°-E	
155	130	加曾利 E II	長方形	530×420	3~13	N-42°-E	
156	130	加曾利 E II	楕円形	590×570	2~31	N-13°-W	

表20 縄文時代土坑一覽表

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
91	8 I	加曾利E II	不明	不明	20	不明	
97	12 I	中期後半	円形	100×97	48	N-60°-E	
100	8IV	加曾利E II	円形	86×83	27	N-60°-E	
142	17	勝坂	楕円形	103×82	46	N-16°-E	
143	17	勝坂	楕円形	92×74	32	N-52°-W	
144	17	勝坂	楕円形	不明×107	22	N-55°-W	
145	17	中期後半	楕円形	65×44	20	N-78°-W	
146	17	中期後半	円形	99×90	22	N-68°-E	
148	22	加曾利EIV	楕円形	145×120	23	N-4°-W	
149	22	中期後半	円形	径75	36	不明	
150	22	中期後半	楕円形	104×87	28	N-41°-W	
151	22	加曾利E II	不整形	110×100	40	不明	
152	22	中期	不整楕円形	170×120	23	N-81°-E	
153	22	加曾利E I	楕円形	166×133	76	N-60°-W	
154	22	加曾利E I	不明	不明	23	不明	
155	22	加曾利E I	不整円形	180×175	38	N-67°-E	
157	22	加曾利E II	不整楕円形	不明×315	26	N-45°-E	
158	22	中期	不整楕円形	144×108	17	N-45°-E	
159	22	中期	不明	不明	18	不明	
160	22	加曾利E II	円形	73×71	33	N-85°-E	
161	22	加曾利E	不明	不明	40	不明	
163	22	勝坂	楕円形	87×73	40	N-45°-W	
164	22	中期後半	楕円形	78×53	25	N-55°-W	
165	22	中期後半	楕円形	不明×190	26	N-45°-W	
166	22	中期後半	楕円形	128×104	66	N-28°-E	
167	22	加曾利E I	円形	134×132	43	N-23°-E	
168	22	勝坂	楕円形	133×93	62	N-85°-W	
169	22	加曾利E I	楕円形	不明×75	28	N-70°-W	
170	22	加曾利E I	楕円形	181×167	77	N-70°-W	
171	22	中期後半	円形	147×145	55	N-71°-W	
172	22	加曾利E I	楕円形	不明×230	60	N-76°-E	
174	22	加曾利E II	楕円形	187×146	48	N-85°-W	
175	22	中期後半	楕円形	153×132	44	N-72°-E	
176	22	中期後半	楕円形	111×95	32	N-73°-W	
177	22	中期	不明	不明	43	不明	
178	22	加曾利E II	楕円形	不明×96	23	N-28°-E	
179	22	中期	楕円形	不明×117	36	N-3°-E	
180	22	中期後半	不整楕円形	105×89	20	N-36°-E	
181	22	勝坂	不整円形	不明×90	38	N-28°-W	
182	22	勝坂	不明	不明	45	不明	
183	24 I	加曾利E I	方形	不明×145	30	不明	
184	24 I	加曾利E II	円形	100×97	47	N-10°-W	
185	24 I	中期後半	不整円形	105×83	28	N-68°-E	
186	24 I	中期後半	楕円形	不明×116	24	N-66°-E	
188	24 I	中期後半	不整楕円形	不明×115	40	N-60°-E	
189	24 I	加曾利E II	楕円形	123×115	45	N-50°-E	
190	24 I	加曾利E II	不整円形	160×143	40	N-88°-W	
191	24 I	中期後半	円形	140×124	26	N-45°-W	
192	24 I	加曾利E II	不明	不明×90	41	不明	
193	24 I	加曾利E II	不整円形	167×150	35	N-7°-E	
194	24 I	加曾利E II	隅丸方形	128×118	40	N-82°-W	
195	24 I	加曾利E II	楕円形	247×110	35	N-88°-E	
196	24 I	中期後半	楕円形	130×90	43	N-5°-E	
197	24 I	中期後半	不明	不明×140	38	N-56°-E	
200	24 I	加曾利E II	不整形	不明×180	31	N-70°-E	

第3章 縄文時代の遺構と遺物

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
244	25 I	加曾利E II	円形	105×100	36	N-85°-E	
245	25 I	中期	楕円形	99×70	27	N-34°-W	
247	25 I	中期後半	楕円形	172×157	45	N-10°-E	
248	25 I	中期	楕円形	不明×127	24	N-24°-W	
249	25 I	加曾利E II	楕円形	不明×157	39	N-10°-W	
250	25 I	中期後半	円形	135×130	15	N-11°-W	
251	25 I	中期後半	円形	径110	22		
252	25 I	中期後半	楕円形	不明×100	38	N-58°-W	
253	25 I	加曾利E II	不整円形	167×160	48	N-73°-W	
254	25 I	中期	不明	不明	67	不明	不掲載
255	25 I	中期後半	楕円形	178×145	35	N-34°-W	
256	25 I	加曾利E II	不整楕円形	138×115	35	N-25°-W	
257	25 I	加曾利E III	楕円形	158×145	41	N-89°-E	
258	25 I	加曾利E II	円形	120×117	40		
259	25 I	加曾利E II	楕円形	150×130	32	N-35°-W	
260	25 I	加曾利E II	不整円形	135×110	39	N-73°-E	
261	25 I	中期後半	楕円形	120×108	20	N-18°-E	
263	25 I	中期後半	隅丸方形	121×120	36	N-30°-W	
264	25 I	中期後半	楕円形	68×56	35	N-26°-W	
265	25 I	加曾利E IV	不整楕円形	233×180	35	N-50°-W	
266	25 I	加曾利E II	楕円形	不明×150	26	N-67°-E	
267	25 I	中期後半	楕円形	不明×70	23	N-42°-W	
268	25 II	中期	不明	不明×120	39	N-40°-W	
269	25 II	勝坂	楕円形	不明×200	50	N-75°-E	
270	25 II	中期後半	楕円形	157×80	30	N-65°-W	
271	25 II	勝坂	円形	不明×120	50	不明	
272	25 II	勝坂	楕円形	不明×143	40	N-30°-E	
273	25 II	加曾利E II	長方形	278×115	98	N-3°-W	
274	25 II	中期	不明	不明	100	不明	不掲載
276	25 II	中期後半	不明	不明×60	40	E-W	
277	25 II	中期	楕円形	87×80	21	N-79°-W	
278	25 II	勝坂	不整楕円形	124×110	39	N-65°-W	
280	25 II	勝坂	楕円形	98×87	37	N-47°-E	
286	25 II	中期後半	不整楕円形	260×132	70	N-77°-E	
287	25 IV	中期	不整楕円形	130×103	37	N-32°-W	
288	25 IV	中期	楕円形	不明	30	N-73°-W	
289	25 IV	中期	不整楕円形	128×110	20	N-64°-W	
290	25 IV	中期	楕円形	不明×175	58	N-50°-W	
291	25 IV	中期	楕円形	141×127	20	N-79°-E	
292	25 IV	中期	不整形	120×95	33	E-W	
293	25 IV	勝坂	不整形	不明×100	22	N-45°-E	
294	25 IV	中期	不明	不明×152	25	N-35°-W	
295	25 IV	中期	不整楕円形	210×119	77	N-30°-E	
296	25 IV	中期	楕円形	135×112	21	N-8°-E	
297	25 IV	加曾利E II	不明	不明	14	不明	
298	25 IV	中期	隅丸方形	185×75	36	N-8°-E	
299	25 IV	中期	隅丸方形	70×65	64	N-50°-E	
300	25 IV	中期	隅丸方形	113×104	29	N-75°-W	
301	25 IV	中期	不明	不明×95	17	N-50°-E	
302	25 IV	中期	不明	不明×120	20	N-70°-W	
303	25 V	中期	不整長方形	107×96	19	N-76°-E	
304	25 V	中期後半	不明	不明×120	26	N-42°-E	
305	25 V	中期	長方形	89×57	86	N-13°-W	
306	25 V	勝坂	不明	不明×120	25	N-66°-E	
307	25 V	勝坂	楕円形	119×103	20	N-47°-E	
308	25 V	中期	不整形	120×110	15	N-45°-E	

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
309	25 V	加曾利E II	不整形	155×100	29	N-45°-E	
310	25 V	勝坂	不整楕円形	不明×130	18	N-20°-E	
311	25 V	加曾利E II	隅丸長方形	153×145	38	N-77°-W	
312	25 V	中期後半	不整形	220×175	29	N-12°-W	
313	25 V	中期後半	不整形	127×113	20	N-80°-W	
315	26	中期	円形	123×119	28		
316	26	中期後半	楕円形	182×176	22	N-5°-W	
318	26	勝坂	不明	不明	35	不明	
320	26	加曾利E I	隅丸方形	110×100	16	N-63°-W	
321	26	加曾利E II	楕円形	163×157	40	N-25°-W	
325	26	中期	不明	不明×70	65	N-43°-E	
326	26	加曾利E II	楕円形	137×117	59	N-59°-W	
330	26	中期後半	楕円形	149×140	25	N-7°-E	
332	30	勝坂	不明	不明×95	22	N-45°-W	
333	30	中期後半	不明	不明×97	20	不明	
334	30	加曾利E I	楕円形	82×70	13	N-52°-E	
335	30	中期	楕円形	91×84	20	N-42°-E	
336	30	中期	楕円形	不明×150	36	不明	
337	30	中期後半	楕円形	不明×168	35	N-45°-W	
339	30	中期後半	不整楕円形	119×112	45	N-80°-E	
340	30	中期後半	不明	不明×118	27	N-26°-E	
341	30	勝坂	楕円形	118×111	35	N-85°-W	
342	30	中期	楕円形	110×95	60	N-15°-E	
343	30	中期後半	不明	不明×130	43	不明	
344	30	中期後半	楕円形	166×154	52	N-75°-E	
379	35	加曾利E II	不明	不明×80	32	不明	
381	36	勝坂	円形	93×90	41		
382	36	中期後半	不整形	不明×80	28	N-78°-E	
384	13 II	中期	楕円形	211×177	53	N-72°-E	
385	13 II	中期	楕円形	161×146	23	N-9°-W	
386	13 II	中期	楕円形	141×125	44	N-81°-W	
390	39 I	中期後半	楕円形	不明×130	15	N-70°-E	
391	39 I	中期後半	不整円形	78×73	23	N-84°-E	
392	39 I	勝坂	隅丸方形	62×60	20	N-84°-E	
393	24 II	加曾利E II	楕円形	不明×180	22	N-10°-W	
394	24 II	勝坂	不明	不明	34	不明	
395	24 II	中期	不明	不明	41	不明	
396	24 II	勝坂	円形	79×76	45		
397	24 II	中期後半	不整形	160×100	23	N-48°-E	
398	24 II	勝坂	楕円形	70×50	32	N-15°-W	
400	13IV	勝坂	不整円形	136×122	33	N-11°-W	
401	13IV	中期	不明	不明×135	28	不明	
402	13IV	中期	不整形	115×105	24	N-63°-E	
403	13 III	加曾利E II	隅丸方形	116×107	21	N-73°-E	
404	13 III	中期	楕円形	77×66	30	N-54°-W	
412	13IV	勝坂	楕円形	不明×160	15	N-50°-W	
413	13IV	中期	楕円形	不明×145	34	N-70°-E	
414	13IV	勝坂	楕円形	160×140	44	N-25°-E	
415	13IV	加曾利E I	楕円形	不明×160	56	N-78°-E	
416	13IV	中期	楕円形	不明×105	45	N-37°-E	
418	49 II	堀之内 I	楕円形	145×125	96	N-19°-E	
419	49 II	勝坂	楕円形	60×52	51	N-80°-E	
427	5 II	諸磯 c	楕円形	161×138	40	N-74°-E	
430	25VI	中期	不明	不明×180	26	N-50°-W	
431	25VI	加曾利E I	方形	不明×183	43	不明	
432	25VI	中期後半	楕円形	不明×110	31	不明	

第3章 縄文時代の遺構と遺物

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
437	34Ⅱ	堀之内Ⅰ	楕円形	不明×110	80	N-76°-E	
438	34Ⅱ	後期	楕円形	170×165	102	N-60°-W	
439	34Ⅱ	中期前半	不明	不明	30	不明	
440	60	中期	不明	不明	25	不明	
442	34Ⅱ	後期	楕円形	209×192	125	N-72°-W	
444	34Ⅱ	加曾利BⅠ	方形	不明×200	38	不明	
445	43Ⅱ	中期	楕円形	70×63	38	N-71°-W	
446	43Ⅱ	中期	不明	不明	20	不明	
448	34Ⅱ	後期	楕円形	不明×75	36	不明	
449	34Ⅲ	不明	楕円形	115×108	21	N-63°-E	
450	34Ⅱ	後期	不整形	80×70	50	E-W	
465	67Ⅱ	中期	長楕円形	217×99	134	N-33°-W	
466	67Ⅱ	中期	長楕円形	277×95	148	N-9°-W	
467	67Ⅱ	中期			28		
468	67Ⅱ	勝坂	不整形	172×149	27	N-67°-W	
470	71	加曾利EⅠ	楕円形	不明×180	30	N-45°-W	
471	71	勝坂	楕円形	74×68	15	N-2°-W	
477	69Ⅰ	中期	楕円形	不明×70	31	N-67°-W	
478	69Ⅰ	中期	楕円形	不明×120	41	N-50°-E	
479	65Ⅲ	中期	楕円形	不明×78	37	N-60°-W	
558	130	中期後半	楕円形	60×55	15	N-74°-W	
559	130	中期	楕円形	113×105	34	N-40°-W	
560	130	加曾利EⅠ	不整楕円形	200×160	29	N-35°-W	
561	130	勝坂	楕円形	250×170	40	E-W	
562	130	勝坂	不整楕円形	95×80	18	N-35°-W	
563	130	中期後半	楕円形	170×110	19	N-50°-E	
564	130	中期後半	円形	不明×150	34		
565	130	加曾利EⅡ	円形	径140	18		
566	130	加曾利EⅠ	楕円形	165×150	40	N-60°-W	
567	130	勝坂	楕円形	不明×150	30	N-40°-E	
568	130	中期後半	楕円形	110×80	25	N-35°-E	
569	130	加曾利EⅡ	不整楕円形	175×135	35	N-45°-E	
570	130	中期後半	楕円形	不明	38	不明	
571	130	加曾利EⅠ	円形	径120	35		
572	130	加曾利EⅠ	円形	径130	20		
573	130	勝坂	不整方形	115×110	33		
574	130	中期後半	不整楕円形	90×75	52	N-63°-E	
575	130	中期後半	不整長方形	134×120	38	N-54°-E	
576	130	加曾利EⅡ	楕円形	不明×100	24	N-86°-E	
577	130	中期後半	楕円形	85×70	46	N-70°-E	
578	130	加曾利EⅠ	不整楕円形	230×185	49	N-60°-E	
579	130	中期後半	不整楕円形	110×80	25	N-60°-W	
580	130	中期後半	不整楕円形	120×100	37	N-40°-W	
581	130	中期後半	不整楕円形	110×100	15	N-40°-W	
582	130	中期	楕円形	115×90	16	N-15°-E	
583	130	勝坂	不整円形	105×100	40	N-38°-W	
584	130	中期後半	楕円形	130×120	38	N-58°-E	
585	130	中期後半	楕円形	不明×95	35	N-60°-E	
586	130	勝坂	楕円形	130×100	30	N-35°-W	
587	130	中期後半	楕円形	110×90	28	N-48°-W	
588	130	加曾利EⅡ	不整形	150×140	30	N-55°-E	
589	130	中期後半	楕円形	不明×120	29	N-38°-W	
590	130	中期後半	円形	径110	30		
591	130	中期	楕円形	110×95	29	N-38°-W	
592	130	中期	楕円形	不明×110	34	N-55°-E	
593	130	中期	楕円形	不明×85	22	N-55°-E	

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
594	130	加曾利EⅡ	楕円形	135×115	23	N-38°-W	
595	130	中期後半	楕円形	90×80	25	N-33°-W	
596	130	中期	楕円形	不明×78	14	N-60°-E	
597	130	勝坂	不整形	180×152	50	N-10°-W	
598	130	勝坂	楕円形	160×150	30	N-36°-W	
599	130	中期	楕円形	不明×140	60	N-62°-W	
600	130	中期後半	不明	不明	36	不明	
601	130	中期後半	楕円形	120×115	20	N-72°-W	
602	130	中期後半	楕円形	不明×180	25	N-42°-W	
603	130	中期後半	楕円形	155×140	45	N-50°-E	

志木市遺跡調査会調査報告 第13集

西原大塚遺跡 第1分冊

西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市遺跡調査会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 平成21（2009）年2月27日
印刷 株式会社 白峰社